は

【發音】㈠は行第一の音。氣息の音hが母音aに結び附きて發す。同じ子音の、母音e・oに結び附けるは、即ちへ・ほなり。同じくは行の內にても、ひは、羅馬字にてはhiと書けど、その子音の發音の位置、は・へ・ほの子音のとは小異あり。又、ふは、hとは關係疎遠なる子音fが、母音uに結び附きて發す。hは、清音に屬し、發音の位置よりいへば、喉頭音にして、氣息を、肺臟より急速に送り出し、その鼻腔への通路を閉ぢて、聲帶の三角形を呈せる緣邊に觸れしめ、これを摩擦して發す。即ち摩擦音の一なり。聲帶を用ふる點、母音に近けれど、母音は、それを寄せ合はせて振動せしむる點に於て、hと異なり。ば・び・ぶ・べ・ぼは、字形上、は・ひ・ふ・へ・ほに對當する濁音なるが如く見ゆれど、實は、子音bが、母音a・i・u・e・oと結び附ける濁音にして、bは、氣息を、鼻腔への通路を塞ぎたる上、上下兩脣の閉鎖せる間より突破せしめて發す。即ち脣音（兩脣音）に屬し（ま行の子音mに近似す）、破裂音の一にして、は・ひ・ふ・へ・ほの子音との間に、清濁の關係は無し。又、ぱ・ぴ・ぷ・ぺ・ぽは、子音pが、母音a・i・u・e・oと結び附きて發するものにて、pは、清音に屬し、發音の位置・方法は、bと同一なるが故に、ぱ・ぴ・ぷ・ぺ・ぽとば・び・ぶ・べ・ぼとは、清・濁相對立す。㈡されど、は・ば・ぱ三行の關係を、歷史的に考察する時は、は・ひ・ふ・へ・ほは、古、却つてぱ・ぴ・ぷ・ぺ・ぽの音を有せしこと、は・ひ・ふ・へ・ほの萬葉假名たる漢字の、支那に於ける原音が、p音にて始まれる等によりても明かにして、後、pは、破裂音と摩擦音との差異こそあれ、同じく脣音なるf（ph）に變り、近古以後、更にhに變り、ふの一音のみがfuのままに殘留せるもの、即ち現時のは行音なりとの說、蓋し誤無かるべし。fは、兩脣間の空隙より氣息を軋らせて發する音（西洋語のfの、上齒と下脣との間より生ずるとは異なり）にして、fuの外、fa・fi・fe・foも、東北及び西南地方の方言に現存せるは、古音の遺れるなるべし。從來、發音の硏究委しからざりしため、ぱ・ぴ・ぷ・ぺ・ぽを、外國輸入の不純卑俚なる聲音と誤想し、半濁音の名を命じたれど、は・ひ・へ・ほの子音hこそ、却つて我國傳來の音に非ざることは、上海（シヤンハイ）・呵呵（ハハ）・喜馬拉耶（ヒマラヤ）の海・呵・喜の類を、かい・か・きの音に讀み來れるにても知るを得。kとhとは、破裂音と摩擦音との相違はあれど、發音の部位極めて相近きがため、そのkを借りて、字音を定めしものなればなり。從つて、又、hに對當する濁音も有らば、kの濁音gに近似せるものなるべく、又、ふの子音fに對當する濁音はvなれど、共に我國には存在せず。西洋語のva・vi・vu・ve・vo（獨逸語など、vをfと同一に發音するものは例外）を現すに、ヴァ・ヴィ・ヴ・ヴェ・ヴォ又はヷ・ヸ・ヹ・ヺを用ふる習慣あれど、有聲音たる母音の假名に、濁點を施すは、謂れなき方法にして、本書にては、これをba・bi・bu・be・boと同一に取扱ひたり。例へば、violinをばいおりんとせる類。㈢以上、發音の原理と歷史的變化とに徵し、辭書に於ける語辭の配列は、ぱ・ば・は又はは・ぱ・ばの順序に依るべきなれど、本書にては、姑く舊慣に基づき、假名の形を標準として、は・ば・ぱの順位を用ひ、ひ・ふ・へ・ほの各部に於ても、ひ・び・ぴ、ふ・ぶ・ぷ、へ・べ・ぺ、ほ・ぼ・ぽの順序に依れり。㈣長音は、はあ・ばあ・ぱあと記すとはー・ばー・ぱーと記すとの兩法あり。本書は前者に依れり。㈤一語中の第二音以下に在るはと助辭のはとは、普通ワと發音す。前者の場合は、例へば、かは（川）・たまはる（賜はる）をカワ・タマワルと發音する類。これ、はをfaと發音せし時代に、そのfが、前後の母音の影響により、fと發音の位置・方法極めて相近きw音に變じたるなり。w音の性質につきては、わの條下を見よ。㈥一語の中にて、は・ば・ぱの直後にう又はふの續く場合には、多くは、相合して、ほ・ぼ・ぽの長音に發音す。例へば、はうむる（葬る）・はうはふ（方法）・くはふ（加ふ）・ばうし（帽子）・かばふ（庇ふ）・てっぱう（鐵砲）・あんぱふ（罨法）をホオムル・ホオホオ・クヮオ・ボオシ・カボオ・テッポオ・アンポオと發音する類。一語の中の變化にはあらざれども、しばふ（芝生）をシボオと發音する類も、これに準ずべし。但し、そのふが四段活用の語尾なる場合には、口語にては、ウと發音して、別に一音節を成す。例へば、いはふ（祝ふ）・かばふ（庇ふ）をイワウ・カバウと發音する類。

【字源】平假名はは「波」（漢・吳音共にハ）の草體、變體平假名𛂢・𛂢は「盤」（漢音ハン、吳音バン）の草體、𛂞は「八」（漢音ハツ、吳音ハチ）の草體、𛂟は「半」（漢・吳音共にハン）、𛂣は「者」（訓ハ）の草體より出で、片假名ハは「八」の字の筆勢を少しく變へたるもの、又、萬葉假名としては、清音に、前記「波」・「盤」・「八」・「半」・「者」の外、「破」・「簸」・「婆」・「播」・「巴」・「伴」・「泊」・「薄」・「方」・「芳」・「房」・「貌」等、濁音には「婆」・「麻」・「縻」・「摩」・「磨」・「魔」・「馬」・「伐」等を、何れも字音に據りて用ひ、又、清音の「波」等を濁音に用ひたる場合もあり。而して字音に據れる清音の萬葉假名の諸字が、支那の原音に於て、何れも、頭首にpを帶べるは、はの古音がpaなりし傍證とするに足るものなり。

は　齒【名】㈠高等動物の消化器系統に屬し、口腔內に在りて、極めて硬く石灰化せる臟器。上下二列に分れ、もと防護・攻擊の用に供せしなれども、進んで、食物の咀嚼を主なる機能とするに至り、人類にありては、兼ねて、言語の發音を助く。門齒・犬齒・大臼齒・小臼齒の別あり。人類にありては、大人三十二箇、小人二十箇なり。㈡器具・器械などの緣邊に並列せる細かなるきざみ。「櫛の齒」「鋸の齒」㈢車輪の緣（ヘリ）。㈣下駄・足駄などの下面に、橫に取附くる板。普通二枚なり。屐齒。

齒が浮く【句】㈠齒の根ゆるぐ。㈡酸き物などを食ひ、又は金屬その他滑かなる固き物を摩りあはする時の音を聞きて、齒の根のゆるぐやうに感ず。㈢輕佻なる言行を見聞して、一種の不快を感ず。「齒の浮くやうなお世辭を言ふ」

齒が利（キ）く【句】「齒が立つ」に同じ。艶狩劒本地「世間忍びの契約なれば、恨言しても、齒が利かぬ」

齒缺く【句】小兒の齒拔けかはる。「齔く」和名「齔、波加久」

齒が替（カヘ）る【句】人、八九歲に至り、乳齒脫落し、永久齒代りて發生す。齒が拔け替る。

齒が立つ【句】㈠固からずして、嚙むことを得。齒に立つ。（多くは、打消又は反語の形にて用ふ）㈡相手として張り合ふことを得。長町女腹切「齒も立たぬ刃物好（ハモノズキ）して、高知行（タカチギヤウ）の高木殿と張り合うて」浮世風呂「いくらもがいても、齒が立つもんか」

齒が拔替（ヌケカハ）る【句】「齒が替る」に同じ。

齒に合ふ【句】㈠嚙むことを得。一茶「福豆や福梅干や齒に合はず」㈡氣質に適合す。

齒に衣（キヌ）著せず【句】隱さず諂はずに物言ふ。

齒に立つ【句】「齒が立つ」に同じ。「齒に立つ者は二三人のみ」浮世風呂「口ばかりむぐむぐしたって、齒に立つもんか」

齒に血を附く【句】「齒を食締(クヒシバ)る」に同じ。賀越闘諍記「一揆等、齒に血を附けて言ひける」

齒にて齒を償ふ【句】「目にて目を償ひ、齒にて齒を償ふ」を見よ。

齒の脫けたやう【句】まばらに立ち並べる形容。〔諺語〕

齒の根(ネ)【句】齒の根もと。齒根(シコン)。

齒の根が合はず【句】寒さ又恐怖に戰(オノ)きて、上下の齒をしかと合はすること能はず。川中島合戰「脣も紫立ち、齒の根も合はぬ寒さなり」八笑人「大粒なる淚をほろほろ落し、齒の根も合はず」和合人「なるほど、これは寒い、寒い。齒の根が合はねえ」

齒の根がたがた【句】前條に同じ。日本武會吾妻鑑「心早ければ、身もわなわな、齒の根がたがたがたつく拍子」

齒の根も食合(クヒア)ふ【句】甚だ親密なる關係にある形容。生玉心中「兩方心底見屆け、齒の根も喰ひ合ふ念頃(ネンゴロ)」

齒の根を鳴らす【句】齒を喰ひしばりて怒る。齒がみをして慍る。

齒亡び、舌存す【句】『說苑に「舌之存也、豈非レ以二其柔一耶。齒之亡也、豈非レ以二其剛一耶」とあり』次條に同じ。〔諺語〕

齒敝(ヤブ)れ、舌存す【句】『說苑に「韓平子問二叔向一曰、剛與レ柔孰堅。對曰、臣年八十、齒再墮而、舌尙存」とあり』剛なる者は、却って先づ破れ、柔なる者は、永く存す。〔諺語〕

齒を合はす【句】相談して定む。約束す。八笑人「八人男が齒を合はせた事を、反古(ホグ)にはされめえではねえか」

齒を咬む【句】次條に同じ。**はがみ**(齒咬)參照。浮世風呂「息子どのの寐言(ネゴト)と掛合(カケアヒ)に、ぎりぎり齒を咬むといふもんだから、やかましくて、寐つかれねえ」

齒を切る【句】殘念に思ひて、又は睡眠中、自覺せずに、上下の齒を固く合はせて摩る。はぎしりす。切齒(セッシ)す。

齒を食締(クヒシバ)る【句】悔しさ又は心苦しさに、上下の齒を固く合はせて怺ふ。

齒を食締(クヒシ)む【句】前條に同じ。和合人「ええ、氣味の惡(ワル)い面(ツラ)をしてゐるぞ、齒をくひしめて」

齒を食詰(クヒツ)む【句】前條に同じ。十訓「齒をくひつめて怒りおはしける」

齒を染む【句】齒黑(ハグロメ)を爲す。**しらは**(白齒)參照。守貞漫稿「江戶は、茶見世甚だ多く、天保府命前は、專ら十六七より二十歲ばかりの美女、各、紅粉を粧ひ、美服を著し、これを行ふ。府命にこれを禁ぜせられて、俄かに眉を剃り、齒を染むる者多し」

齒を鳴(ナラ)す【句】「齒を切る」を强めていふ語。曾我會稽山「神明にも見放され、よっく武運に盡きしかと、拳を握り、齒を鳴し」

白い齒を見せられぬ【句】『白い齒を見すとは、打解けて物言ふ義。口を開けば齒が見ゆるよりいふ』うかと物言へば、乘ぜらるる恐あり。心をゆるして打ち解くる能はず。〔諺語〕

は 葉【名】〔植〕顯花植物及び羊齒植物の莖に生じ、同化作用と發散作用とを營む營養機關。多くは綠色にして、形は一定せず。葉身・葉柄の二部より成り、なほ托葉と稱する部分を具へたるもあり。その維管束は、特に葉脈と稱す。

葉差(サ)す【句】葉が生ず。夫木「君がため枝さし葉さししげ岡に千代まつの木のいや榮えゆく」

葉上(ノボ)る露【句】葉の上におく露。夫木「はや出でて門田にやどれ秋の月葉のぼる露の數や見ゆらん」

葉を缺いて、根を斷つな【句】枝葉を除かんとして、根本までも滅すこと勿れ。「根を斷ちて、葉を枯す」參照。〔諺語〕

は 羽【名】㊀はね(羽)㊁㊂㊃に同じ。和名「羽、波。鳥翅也」㊁張弓(ハリユミ)の弦と弓との距離。その廣きを、太し又は高しといひ、狹きを、細し又は低しといふ。〔射藝の語〕㊂はぶり(羽振)の略。

羽が利(キ)く【句】羽振(ハブリ)よし。幅が利く。**はきき**(羽利)參照。

羽の林(ハヤシ)【句】「羽(ハネ)の林」に同じ。師光集「大將になりて、正月に雪の降りたるつとめて、左大將の許より。雪つもる年のしるしに花の咲くはの林をばなどか尋ねん。かへし。はの林花咲く春の嬉しさをつつむほどなり谷のうもれ木」

羽を搔く【句】羽搔(ハネガキ)をなす。貫之集「照る月も晝かと見れば曉に羽を搔く鴫もあらじとぞ思ふ」

羽を垂る【句】勢力を失ふ。勢衰ふ。尾羽(ヲバ)打枯らす。平治「父子十騎ばかり、羽を垂れて、鎌倉殿へぞ參りける」

は 翳【名】さしば(翳)に同じ。和名「翳、波」

は 端【名】㊀はし。はた。ふち。古今「あかなくにまだきも月のかくるるか山のはにげて入れずもあらなん」義經記「折節、風烈しく吹きたりけり、笠のはを吹き上げたりければ」八笑人「右へ、左へ、逃げまはり、果は、山の端に追ひ詰められ」㊁はした。はんぱ。「はが附く」

は 刃【名】㊀切物(キレモノ)の緣の、薄く銳くして、物を切る部分。㊁板の緣(ヘリ)を、斜に削りて、切物(キレモノ)の刃のごとくになしたる形。

刃を引く【句】刃物の刃を磨りつぶして、切味(キレアヂ)を鈍くす。はびく。**はびき**(刃引)參照。

は 破【名】『破碎の義』雅樂の樂曲の一體。曲中、拍子の次第に細かになりゆくこと。入破(ジユハ)。「序・破・急」榮花「樂(ガク)の破の歌、……、樂の急の歌」增鏡「今宵は御遊あり。……、安名尊(アナタフト)・鳥の破」

破の舞(マヒ)【句】能(ノウ)の舞の、歌謠伴なはず、極めて短くして、中間に只一つの段あり、序の舞、中の舞などの後、少しの歌謠ありて、更に補足ともいふべき意味にて演じて、その曲の情趣を完うせしむるもの。笛と大・小鼓とを用ひて囃し、なほ太鼓をも加ふると、然らざるとあり。例へば、「松風」の曲に於ける「磯馴松(ソナレマツ)の懷かしや」の後にあるものの類。(「序の舞」・「中(チユウ)の舞」に對して)

は 派【名】㊀流義・宗旨などのわかれ。流派。分派。㊁くみ。なかま。黨派。

は 霸・覇【名】㊀武力又は術數を用ひて、國を治むること。霸道。「王・霸の別」㊁諸侯の長。はたがしら。霸者。㊂團體中の首領。仲間のかしら。

は 巴【名】次條を見よ

巴の字【句】㊀漢字の「巴」といふ字の如くにくねりまがれる形。太平記「大勢の中へ懸け入って、十文字に懸け破り、巴の字に追ひ廻らす」㊁次條に同じ。著聞「慈鎭和尙、往事を思し出でたまひて、寄水懷舊に詠みたまひける。思ひ出でて音(ネ)をのみぞ泣くゆく水に書きし巴の字の春の夜の夢」

巴の字の水【句】『水の、巴の字のごとき狀にめぐり流るるよりいふ』**ごくすゐ**(曲水)に同じ。夫木「書き流す巴の字の水は絕えはてて空にのみ見る春のさかづき」

は【感】㊀笑ふ時の聲。はあ。宇治「人人、皆、はと笑ひけり」㊁呼ばれたるに答ふる聲。はい。はあ。「はと答ふ」

は【助】㊀一の事物を他と區別する意。目的格の助詞「を」の下、又、音便にて添はりたる「ん」の下に添ふ時は、濁りて「ば」となる。「者」「雪は白し」「彼には與へず」「悲しくはあれど」「犬をば追はず」「行かずんばあるべからず」㊁感嘆の意。よ。大鏡「近き皇胤を尋ねば、融(トホル)らも侍るはといひ出でたまへるを」狂言(月見座頭)「まづこの杖を流いて見ようは。ああ、こちへ流るる」

は 破【接尾】支那の熟語に、上の動詞の意を强むるに用ふる語。「踏破」「喝破」「讀破」「道破」

は 羽【助數】㊀鳥を數ふるにいふ語。㊁

は 織物の絲を二本づつ數ふるに用ふる語。一本は片羽(カタハ)といふ。

は 把【助數】㊀束ねたる物を數ふるに用ふる語。「薪七把」㊁稻などを、農夫が鎌にて刈り取りて、拳にて握りたる分量の三倍づつを一まとめにして數ふるに用ふる語。延喜式「小稅二百束、以㆓一把㆒爲㆑束」㊂射藝にて、矢五十一筋づつを一まとめにして數ふるに用ふる語。

ば 場・塲【名】『には(場)の略』㊀ゐどころ。ところ。場所。席。狂言(鞨鼓炮碌)「程なら市場さらにござる。……、さても、さても、よい場でござる」㊁陣地。戰場。甲陽軍鑑「昔、義經公、八島の磯の合戰に、二千餘の旗本を、八十三騎に討ちなされたまへど、場を立ちのかざれば」曾我會稽山「工藤左衞門祐經、……便(タヨリ)よき岡邊に場を構へ、手の者、組子に鹿猿狩らせ」㊂劇場の土間(ドマ)。〔大阪の語〕㊃花合(ハナアハセ)にて、札六枚を、表面をあらはして、座上にまきたるもの。絕對場・大場・小場の三種あり。

場を取る【句】廣き場所を占領す。幅を取る。ばどる。

ば 【貌】ばっに同じ。盛衰記「折節、關東に、ばと披露しけるは」同「ばっと消えばと燃え上りなどしけり」

ば 【助】㊀上の語句の動詞・形容詞又は助動詞の將然形又は已然形を承けて、下方なる結果を表す語句に言ひ續くる語。「雨降らば行かじ」「戀しくば尋ね來よ」「風吹けば波立つ」「幼ければ、籠(コ)に入れて養ふ」㊁二つの動作又は狀態を並べて、その間の接續に用ふる語。「品も善ければ、價も安し」㊂は㊀を見よ。

ば 【接尾】樣子・程度などの意。「見ばがよい」源氏「頭つき・髮のかかりばも、美しげにて」

ぱ 端【接尾】每一箇の價幾許づつなるかを示すに用ふ語。「五錢ぱ」

はあ 【感】㊀返答する時の聲。はい。は。㊁自己の話の中間に插み、相手の間に答ふるやうにする聲。狂言(佛師)「畏ってござる、はあ、これは、はあ」㊂意外に思ひて驚く時の聲。まあ。源氏烏帽子折「長田(ヲサダ)、味方と心得、驅け出て見れば、金王(コンワウ)なり。はあ、南無阿彌陀佛と、地にひれ伏し」㊃笑ふ時の聲。は。著聞「あまた聲して、はあと笑ひて」

ばあ 婆【名】ばば(婆)に同じ。

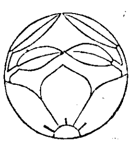
ばあ 酒場・酒塲(英Bar)【名】西洋風の居酒屋。さかば。

ばあ 【感】戲に、物陰より急にあらはれ出で、顏を相手の方に差出すやうにして發する語。〔幼兒の語〕

はあ-あ 【感】困却して嘆息する時の聲。平假名盛衰記「はあゝ、是非もなや」

は-あか 【名】小き刃物。〔肥前國長崎の方言〕

はあがり-ききやう 葉上桔梗【名】紋所の一。下の圖を見よ。



（はあがりききやう）

は-あく 把握【名】手に握ること、又その分量。「把握に過ぎず」

はあぐ 海牙(英 Haag 又 Hague)【名】〔地〕和蘭國の首府。

はあくしよ 【感】はくしよいに同じ。和合人「はあくしよ。これこれ、火鉢へ、何かくばって居る。おお、いぶるは、いぶるは。はあくしよ、はあくしよ」

はあぐ-みっし-じけん 海牙密使事件【名】明治四十年、和蘭國海牙にて、第二回萬國平和會議の開會中、韓國人李相卨・李儁李・瑋鍾の三人、韓皇帝の密旨を奉じ、韓國が該會議より參列の通告を受けざりしに對して、抗議を呈出せし事件。韓國は、已に我國の保護國たれば、かくして各國の同情を得て、外交權回收の機會を作らんとせしなり。而かも、その結果、韓皇帝の退位と日韓新協約の締結とを餘儀なくせらるるに至れり。韓國密使事件。

ばあげん-せえる (英 Bargain sale)【名】みきりうり(見切賣)に同じ。

ばあげん-でえ (英 Bargain day)【名】見切賣(ミキリウリ)をなす日。大安賣の日。

ばあ-さま 婆樣【名】㊀ばあ(婆)を、親しみて呼びかくる語。㊁とりあげばば(取上婆)に同じ。和合人「さゝらろたへる事は無(ネ)え。六(ムツ)一杯の汐だから、靜かにさっし。婆さまは己(オレ)が呼んで來よう」

ばあ-さん 婆さん【名】前條の音便。

ばあじん (英 Virgin)【名】性交の經驗なき女。處女。

ぱあせんてえじ (英 Percentage)【名】〔數〕ひやくぶんひ(百分比)に同じ。

ぱあせんと (英 Per cent)【助數】全數量の百分の幾つに當るかを示すに用ふる語。例へば、「七十五パアセント」は「百分の七十五」といふに同じき類。ぷろせんと。

ぱあそにふいけえしよん (英 Personification)【名】〔文〕ぎじんはふ(擬人法)に同じ。

は-あたり 齒當【名】はごたへ(齒應)に同じ。

ば-あたり 場當・塲當【名】演劇又は集合の席上などにて、材料を當座の事柄に取り、氣轉を利かして、喝采を博すること。

ぱあち (朝鮮語 Parchi)【名】『ぱっちを見よ』朝鮮の衣服の一部。男子の腰部以下に穿つもの。洋服のズボンに相當す。

ぱあちい (英Party)【名】あつまり。團集。集會。

は-あつ 波厭【名】〔理〕はりよく(波力)に同じ。

は-あつ-けい 波壓計【名】〔理〕はりよくけい(波力計)に同じ。

ぱあて (佛 Pâté)【名】ぱいに同じ。

ばあでん-がくは バァデン學派【名】〔哲〕『バァデン(Baden)公國內なるハイデルベルヒ(Heidelberg)・フライブルヒ(Freiburg)等の大學を中心として起りし學派なるよりいふ』

はあと (英 Heart)【名】㊀しんざう(心臟)に同じ。㊁トランプの札の四種類の一。心臟に象(カタド)りたる♥の形をなし、赤色にあらはす。

はあと-がた ハァト形【名】心臟に象(カタド)りたる形、即ち♡。

はあ-はあ 【貌】『次條の語の轉義』はらはら㊂に同じ。春花五大力「小萬さんのせりふがならぬので、はあはあ思うて、大汗をかきました」

はあ-はあ 【感】息切(イキギレ)のしたる時の呼吸の聲。呼吸のせはしき時の聲。

ば-あひ 場合・塲合【名】その場に出合ひたる時。をり。ばやひ。時機。

はあぷ (英 Harp)【名】西洋音樂に用ふる、一種の絃樂器。彎曲せる框(クワ)に、多數の絃を、縱に平行せしめて張りたるもの。最古のは、埃及・アッシリヤ・波斯のものにて、支那より朝鮮を經て、我國に傳はりたる箜篌(クダラゴト)は、波斯のものの變形せるなるべしといふ。たてごと。

（はあぷ）

はあふ-とおん 半調子(英 Half-tone)【名】〔美〕繪畫又は寫眞の、二つの著しき濃・淡の中間にある調子。

ばあべな 美女櫻【名】〔植〕馬鞭草(クマツヅラ)科に屬する一年草。高さ一尺內外に達す。葉は廣披針形にして缺刻あり、對生す。初夏、長き花梗を抽き、白・紅・紫・緋・淡紅・紋等の花簇り開く、形、櫻の花に似たり。歐洲の原產。

ばあま 緬甸(英 Burma)【名】〔地〕亞細亞洲印度支那半島にある舊獨立國。今は、英領印度に編入せられて、その一州となる。首府をラングウン(Rangoon)といふ。ばるま。びるま。

は-あまし 【名】『端餘(ハアマシ)の義か』りやうはうづな(兩方綱)に同じ。

ぱあみゆてえしよん (英Permutation)【名】〔數〕じゆんれつ(順列)に同じ。「油)を見よ。

ぱあむ-ゆ パァム油【名】ぱるむゆ(パルム油)を見よ。

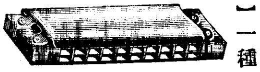
ば-あん 馬鞍【名】くら(鞍)に同じ。

はあもにい (英 Harmony)【名】㊀〔音〕一オクタアブの差ある等、特殊の關係にある多くの樂音を、同時に發せしむること、又、その組合せより起る特殊の快感。メロヂイ及びリズムと共に、音樂の形式の

三要素を成す。［和聲］ ㊁〔美〕形又は色の、各部分に共通せる或物ありて、互に調和し、快感を與ふること。［調和］

はあもにうむ（英 Harmonium）【名】西洋音樂に用ふる、一種の鍵盤樂器。構造も、外觀も、アメリカオルガンに異ならざれども、空氣の正壓によりて發聲す。

はあもにか（英 Harmonica）【名】一種の音樂的玩具又は低級樂器。通常、長さ四寸、幅一寸、厚さ三分ほどの、扁く細長き木製の函に、一列、又は上下二列より成る數多の孔を有し、中に金屬にて作れる振動板を備へ、外面は、又、金屬板にて包みたるもの。低音の方を左にして、孔に口をあて、吹き又は吸ひて、種種の音を發せしむ。はもにか。



（はあもにか）

ばあや 婆や【名】『婆よと親しみて呼びかくる義』年老いたる下女。老婢。

ぱあらあ（英 Parlour）【名】㊀談話室又は旅館などの控室。㊁喫茶店又は簡單なる料理店。

は-あり 羽蟻・飛蟻・飛螘【名】〔動〕蟻類又は白蟻類の、交尾期に際して、翅を生じたるもの。蟻にありては、夏秋の候、雌雄共に空中に飛翔し、交尾の後、翅を失ふ。ありひひる。和名「飛蟻、波阿利」 蕪村「羽蟻飛ぶや富士の裾野の小家より」

ぱありいご 巴利語（英 Pali language）【名】サンスクリットと同一系統に屬し、古代の南印度に行はれし一地方語。後、錫崙（セイロン）に入りて行はれ、現在の小乘經の原本は、殆どこの語にて記さる。サンスクリットに比ぶれば、音調の變化少く、文法も簡易に、極めて通俗の語に富む。又、サンスクリットと共通なる言語、五分の二以上に達し、南方佛敎徒は、古代の摩迦陀（マカダ）語なりと稱す。「の語」

はい 鮠【名】〔動〕はえ（鮠）を云ふ。〔京都〕

はい 蠅【名】〔動〕はへ（蠅）の訛。

はい 肺【名】㊀はいざう（肺臟）の略。㊁はいびやう（肺病）の略。

肺の小葉（セウエフ）【句】〔醫〕『羅 Lobuli』 はいはう（肺胞）を見よ。

はい 胚【名】『英 Embryo』㊀〔動〕動物の發生初期、卽ち胎生のものならば、母體の胎盤を離るるまで、卵生のものならば、營養を卵黃に仰がざるに至るまでの時期のもの。例へば鷄卵に於ける卵黃の上面にありて、俗に目（メ）と稱し、孵化して、雛となる部分。㊁〔植〕高等なる植物の種子の内部の發育して、幼植物となるべき部分。胚珠内の卵珠の受精發育せるもの。普通、子葉・幼根・幼芽・胚軸の四部より成る。はいにゆう（胚乳）參照。

はい 拜・拝【名】㊀頭を下げて、敬禮すること。をがむこと。增鏡「上達部（カンダチメ）の拜あり」 謠曲（三笑）「二人は、共に拜をなし」 ㊁はいぶ（拜舞）に同じ。源氏「引繕ひて、答（タフ）の拜したまふ御有樣ども」 ㊂書翰文などの終の自己の名の下に書きて敬意を示す語。

はい 背【名】㊀せ。せなか。㊁うしろ。後面。背面。背後。禁秘抄「一劍背有銘」

はい 俳【名】はいかい（俳諧）の略。

はい 輩【名】やから。ともがら。ら。「小人の輩」「汝が輩」

はい 配【名】つれあひ。配偶。

はい 牌【名】㊀ふだ。たてふだ。看板。㊁支那にて、社會の秩序安寧を維持するために、十家づつを一團としたる自治體。なほ、十牌を一甲、十甲を一保とし、各その長ありて、保正・甲長・牌頭といふ。

はい 珮【名】はいぎよく（佩玉）に同じ。

はい 敗【名】やぶること。負くること。「敗を轉じて、功を爲す」

はい 廢【名】すたれてあること。廢亡。廢滅。「廢を興し、絕を嗣ぐ」

はい 盃・杯【名】さかづき（盃）㊀に同じ。「杯を擧ぐ」
杯を銜（フク）む【句】杯にて、酒を飲む。

はい【感】㊀丁寧なる返答の聲。［唯］ ㊁馬を進ましむる時の掛聲。丹波與作「これこそ、五十三次を居ながら歩むひざ、膝栗毛うま、はい、しい、道中雙六」

はい 杯【助數】㊀器に液體を盛る回數を示す語。㊁芝居にて、見物人を、五十人づつ一まとめにして數ふる語。㊂さう（艘）に同じ。八笑人「家根が一艘に、小舟が三挺を、一ばい借りるばかり」

はい 佩【助數】刀劍を數ふる語。ふり。口（コウ）。長門本平家「秋霜一佩」

ばい 枚【名】昔、夜討の時などに、軍勢の、聲を立てざらんために、口に含みし具。形、箸のごとくにて、兩端に紐を著け、頂にて結ぶやうにしたり。「枚を銜（フク）む」

ばい 貝【名】㊀〔動〕腹足類に屬する軟體動物。殼は、形も、大さも雞卵に類し、螺塔は圓錐形にして堅牢、螺層、通常八あり。淡紫褐色なる縱斑と、同色にて、不規則なる多數の細點とあり。我國、各地の沿海に產し、肉は食用に適し、殼は貝獨樂（バイゴマ）に作る。［海蠃・黃螺・海螺］ ㊁ばいごま（貝獨樂）の略。一代男「よい年をして、ばいまはし」

（ばい ㊀）

ばい 唄【名】〔佛〕㊀ぼんばい（梵唄）に同じ。㊁ばいし（唄師）の略。盛衰記「上皇、法住寺殿にして御出家あり。御歲四十三。御戒師は、園城寺前大僧正覺忠、唄は法印公舜」 庭訓往來「唄・散花（サンゲ）・梵音・錫杖」

ばい 倍【名】二倍。倍數。倍量。「倍にして返す」

ばい 媒【名】なかだち。仲介。媒介。

ば-い 馬醫【名】㊀馬の病を療治する醫者。うまいしや。㊁古、馬寮（ウマレウ）の職員として、馬の病の治療に從事せしもの。定員二人。㊂德川幕府の廐方に屬して、馬の病の治療に從事せし職。定員四人。㊃陸軍省馬醫部の職員の一。陸軍各科の隊に附屬し、或は軍馬局病馬廐に出仕し、又は鎭臺の調馬廐に分派せられ、馬匹の疾病を治療せしもの。初は一等と二等とに分れ、大尉相當官なりしが、明治十六年三等までを設け、一等を大尉相當、二等を中尉相當、三等を少尉相當とし、一二等を、更に一等と二等とに分ちしが、同十八年廢官となれり。㊄宮内省の主馬寮（シユメレウ）に屬し、馬匹の醫療に從事せし判任官。明治四十一年廢官となれり。

ばい 倍【數助】同數の重なる度數を示すに用ふる語。層。倍がけ。「三倍」「五倍」

ぱい（英 Pie）【名】上下二箇の麪麭（パン）の皮のごときものの間に、肉類又は果實などにて造れる食物を包みて、蒸燒にせる食品。中に包む食物の種類によりて、チキンパイ（Chiken-pie）・アップルパイ（Apple-pie）など、種種の名あり。ばあて。

はい-あん 廢案【名】廢棄せられたる議案又は考案。

はい-い 敗衣【名】へいい（弊衣）に同じ。

はい-いう 俳優・徘優【名】能（ノウ）・狂言・歌舞伎などにて、伎を演ずる者。わざをぎ。やくしや。いう。

はい-いう 俳友【名】俳諧に携はる仲間。はいかいともだち。

はい-いつ 拜揖・拝揖【名】はいいふ（拜揖）に同じ。

はいいな（英 Hyaena）【名】〔動〕食肉類に屬する哺乳動物。形、日本犬に類して、前肢後肢よりやや長く、肢ごとに四爪を具へ、臼齒は小なれども、犬齒と前臼齒とはよく發達し、骨を嚙むに適す。縞ハイイナ・褐色ハイイナ・斑ハイイナの三種ありて、初のは、南部亞細亞と北部亞弗利加とに、後の二種は、南部亞弗利加に產す。

はい-いふ 拜揖・拝揖【名】手に笏を把りて、揖し拜すること。名目抄「拜揖、ハイイフ」

ばい-いん 賣淫・賣婬【名】㊀淫を鬻ぐこと。娼妓その他の女子が、報酬を得て、男子に身を任すること。淫賣。賣春。賣色。㊁みつばいいん（密賣淫）に同じ。

ばいいん-ふ 賣淫婦・賣婬婦【名】密賣淫をなす婦女。淫賣婦。賣春婦。醜業婦。賣婦。賣女。

はい-う 沛雨【名】沛然として降る雨。おほあめ。

ばい-う 梅雨・黴雨【名】『梅の實の黃熟せる季節の雨なるより、梅雨と書くとも、又、黴は、霉と通ずる字にて、物、久雨に中りて、靑黑色を呈する意なれば、黴雨と書く方正しともいふ』我國にて、初夏凡そ

一箇月に亙りて降る霖雨。季候風の交替期に際し、局部的に發生して、進行遲遲たる低氣壓の、高氣壓と接觸するによりて生ずるものといふ。九州・中國地方に最も著しく、北方に至るに從ひて、輕微となり、北海道にては、纔かに曇天の連續する程度にとどまる。さつきあめ。さみだれ。つゆ。黃梅の雨。

ばいうき 梅雨期・黴雨期 【名】 梅雨の降る期間。つゆ。**にふばい**(入梅)・**しゅつばい**(出梅)參照。

ばいうち 貝打・海羸打・黃螺打・海螺打 【名】 兩端を、卷きたる筵(俗に盆といふ)の中にて貝獨樂(バイゴマ)を廻しあふ小兒の遊戲。はじかれて、盆の外に飛び出でたる方を、負とす。ばいまはし。

はいえき 肺疫 【名】 牛に發する、一種の傳染病。肺臟と胸膜との炎症を、その特徵とす。

はいえつ 拜謁・拝謁 【名】 **えっけん**(謁見)の敬語。

はいえふ 胚葉 【名】 〔動〕『英 Germinal layer』胚の中に在りて、生長後、その動物體の各器官を形成すべき原基たるもの。內胚葉・中胚葉・外胚葉の三部に分れ、中胚葉は、最後に發生す。

ばいえふ 貝葉 【名】 **ばいたらえふ**(貝多羅葉)の略。

はいえん 肺炎 【名】 〔醫〕『獨 Lungenentzündung』氣管支カタル・痲疹・百日咳・流行性感冒又は細菌の作用によりて發する、肺組織の炎症。惡寒(ヲカン)・發熱・胸痛・咳嗽・喀痰・呼吸促迫等の症候を呈す。細菌の作用によりて發するものは、格魯布(クルウプ)性肺炎ともいふ、一種の傳染病と見做すべきものとす。肺焮衝。

はいえんきん 肺炎菌 【名】 〔醫〕『獨 Pneumoniebakterien』肺炎の病原菌。獨逸の細菌學者コッホ(Koch)の發見に係り、次いでフリイドレンデル(Friedländer)・フレンケル(Fränkel)及びバイヒゼルバウム(Weichselbaum)の三人の精密なる研究を經たり。

ばいえん 煤烟・煤煙 【名】 ㊀すすと、けむりと。㊁『**ばいたん**(煤炭)を見よ』石炭のけむり。

ばいおん 倍音・陪音 【名】 〔理〕『英 Overtone 又 Harmonics』或音の振動數の倍數に相當する振動數を有する音。普通には、二倍の振動數なるをいふ。その或數を、原音又は基音といひ、倍音は、原音と合して、音色を生ず。**おくたあぶ**・**ばいしんどう**(倍振動)參照。

ばいおんはんきやう 倍音反響 【名】 〔理〕『英 Harmonic echo』反響の場合に、森林等のごとく、反射する面が粗にして、發したる音波の波長に比して、大なる凹凸を有する時、その原音は消失して、倍音(通常、第一次の倍音)のみ反射し來ること。

(ばいおりん)

ばいおりん (英 Violin) 【名】 『伊 Violino より出づ』西洋の絃樂器の一。木造にて、上面の板には松材、その他の部分には楓材を用ひ、四絃を張り、左の手にて柄を支へ、胴部の終端を左の肩と腭との間に挾み、右の手にて、胡弓を用ひて鳴らすもの。調子は、指にて絃をおさへ、その長さを變じつつ、これを整ふ。表情力の多樣、音色の秀美等の諸點に於て、樂器中の女王と稱せらる。**びおら**・**びおろんせろ**參照。

はいか 俳家 【名】 **はいかいし**(俳諧師)に同じ。

はいか 俳歌 【名】 **はいかい**(俳諧)㊂に同じ。俳家奇人談「俳歌を、沽徳に學ぶ」

はいか 敗荷 【名】 風霜に吹き破られたる蓮の葉。「敗荷・殘柳」

はいか 配下 【名】 支配の下。てした。くみした。

はいか 敗家 【名】 ㊀身代(シンダイ)をつぶすこと。家産を敗ること。㊁**はいをく**(敗屋)に同じ。

はいか 廢家 【名】 ㊀**はいをく**(廢屋)に同じ。㊁〔法〕戶主が、一定の條件の下に、家を消滅せしむる行爲、又その消滅したる家。一定の條件とは、自己の新に立てたる家なる時、自己の再興したる家なる時、又、相續したる家は、原則として廢するを得ざれども、本家相續・本家再興、その他正當なる理由ありて、裁判所の許可を得たる時には、何れも、戶籍法に從へる屆出によりて、始めて效力を生ず。廢戶。**ぜつか**(絶家)參照。

はいが 拜賀・拝賀 【名】 ㊀目上の人に、申し上ぐること。㊁任官・敍位の時、御禮を申し上ぐること。奏慶。慶賀。㊂一月一日・二日、文武百官の、宮城に參りて、天皇・皇后兩陛下に、新年の賀禮をなすこと。古の朝賀・朝拜に相當す。

はいが 胚芽 【名】 〔植〕『英 Embryo bud』不定芽の一種。樹皮の內面に存し、その外部に現るることなきもの。次第に生長して、內方の材質に達すれば、その木理及び斑紋に、著しき變狀を呈す。山毛欅(ブナ)に、その例あり。

ばいか 賣價 【名】 賣る時のあたひ。うりね。うりねだん。

ばいか 買價 【名】 買ふ時のあたひ。かひね。かひねだん。

ばいか 倍加 【名】 ㊀二倍に增すこと。ばいまし。㊁數倍の多きに達すること。非常に多くなること。

はいかい 俳諧・俳諧・誹諧 【名】 『俳諧と書く方正しけれど、我國にては、古今和歌集に誹の字を用ひてより、後世も、これに做ひたるもの、尠からず』㊀『史記の滑稽傳の註に「姚察曰、滑稽猶㆓俳諧㆒……、言諧語滑利、其知計疾出、故云㆓滑稽㆒也」とあり』たはむれ。おどけ。諧謔。堯孝法印集「はいかいに、紙に書きつけはべりし」㊁〔文〕**はいかいうた**(俳諧歌)の略。㊂〔文〕連歌の一變せるもの。形式は同一なれど、思想・言語共に民俗的となり、機智の趣味加はるに至れり。又その最初の十七字の句を發句(ホツク)といひ、その獨立して、文學上一種の形式を成すに至りたるものをも、俳諧の副產物として、その名稱の中に含め、連歌の形なる俳諧は、附合(ツケアヒ)又は連句と呼び、十七字獨立のは、發句又は俳句と呼びて區別せしが、通俗的には、却って、その發句の獨立したるものを、主として俳諧と呼ぶに至れり。**れんぱい**(連俳)參照。上島鬼貫、獨言「俳諧は、連歌を元として、連歌を忘るべしと、古人の詞にも見えはべりしか」

はいかいのさんじん 俳諧の三神(サンジン) 【句】 〔人〕『「和歌の三神」に擬へていふ』山崎宗鑑・荒木田守武・松永貞德の三人。

はいかいのれんが 俳諧の連歌(レンガ) 【句】 〔文〕**れんく**(連句)に同じ。**はいかい**(俳諧)㊂參照。幣ぶくろ「門阿彌亭にて、俳諧の連歌すとて」

はいがい 沛艾 【名】 『沛艾の字は、漢書の司馬相如の傳に見え、張揖の解に「沛艾、駊騀也」とあり、即ち駊騀(ハガ)の音の一轉したるにて、駊騀は、說文には「馬搖ㇾ頭也」、廣韻には「馬惡行也」と註せり』馬の、荒く躍りまはること。又その馬。盛衰記「沛艾の馬に、あしざまに乘りつつ、落ちて、即ち死しければ」

ばいかい 媒介 【名】 なかだち。なかうど。媒助。媒妁。

ばいかいいうせいちやう 媒介郵政廳 【名】 萬國聯合に加盟せる國と、加盟しをらぬ國との間に發著する郵便物を媒介する聯合郵政廳。

はいかいいっくわんせう 俳諧一串抄 【名】 〔書〕俳諧の、季・切字(キレジ)、連句と俳句との差別等に關する二十餘項を論述せるもの。一卷。六平齋亦夢の著。

はいかいうた 俳諧歌・誹諧歌 【名】 〔文〕『**はいかい**(俳諧)を見よ』和歌の一體。言葉又は意味に滑稽味を帶びたるもの。例へば、古今和歌集の「枕よりあとより戀のせめくればせん方なみぞ床中に居る」、同じく古今和歌集の素性法師の歌「山吹の花色ごろも主や誰問へど答へずくちなしにして」の類。ざれごとうた。

はいかいか 俳諧歌・誹諧歌 【名】 〔文〕前條に同じ。

ばいかいがはせ 媒介爲替 【名】 その國と郵便爲替の直接交換を保持する外國の媒介によりて、他の外國と間接に交換する通常爲替。

はいかいきんしうだん 俳諧錦繡緞 【名】 〔書〕『**きんしうだん**(錦繡段)を見よ』諸の集中の俳諧及び小品文等を集めたるもの。二卷。寶井其角の編。其角七部集の一。

はいかいぐわ 俳諧畫 【名】 **はいぐわ**(俳

畫)に同じ。

ばいかい-こく 媒介國【名】國際上の事件に關して、媒介の地位に立つ國。例へば媒介爲替などの場合に於ける類。

はいかい-ごさん 俳諧御傘【名】〔書〕ごさん(御傘)に同じ。

はいかい-こせん 俳諧古選【名】〔書〕荒木田守武・山崎宗鑑・松永貞德・西山宗因・松尾芭蕉を始め、古人の俳諧の名作を集めて、漢文にて、批評を加へたるもの。五卷、外に附錄・追加あり。三宅嘯山の著。寶曆十三年成る。

はいかい-さいじき 俳諧歲時記【名】〔書〕俳諧に用ふる四季の景物・故事・風俗などを、春・夏・秋・冬・雜等に類聚して、解釋を附し、發端に、俳諧の字義、連歌權輿の論等を添へたるもの。四卷。曲亭馬琴の著。

はいかい-さいじき-しをりぐさ 俳諧歲時記栞草【名】〔書〕馬琴の俳諧歲時記を、藍亭青藍の增補し、いろは順に類聚したるもの。五卷。嘉永四年の刊行。

はいかい-さびしをり 俳諧寂栞【名】〔書〕加舍(カヤ)白雄の、門人のために、芭蕉・去來の語を本とし、己が師なる熊澤鳥醉の說をも加へて、俳諧の作法を說きたるもの。三卷。

はいかい-し 俳諧師【名】俳諧に巧みなる人。俳人。俳家。俳士。浮世風呂「俳諧師とおぼしき坊主入り來り」

はいかい-じ 俳諧寺【名】〔人〕こばやしいっさ(小林一茶)を見よ。

はいかい-しうちんせう 俳諧袖珍鈔【名】〔書〕松尾芭蕉の全集。前編七卷中、その第一・二卷に發句、第三・四・五卷に歌仙、第六卷に百韻、第七卷に附句未滿のものを載せ、後篇六卷中、その第一卷に句評、第二卷に紀行、第三卷に文章、第四卷に消息、第五・六卷に遺語を載す。古終舍默池の編。嘉永四年の刊行。

はいかい-しき 俳諧式【名】〔文〕俳諧の懷紙に關する用紙・綴ぢ方・書き方等の方式。俳式。

はいかい-しきもく 俳諧式目【名】〔文〕

俳諧の方式。寬永の初、松永貞德、澁谷安常のために、式目歌十首を詠ぜしもの(「油糟」の卷尾に載す)に始り、野野口立圃の「はなひ草」、山本西武の「久留流」、松永貞德の「御傘(ゴサン)」、北村季吟の「增山井(マスヤマノヰ)」等出でて、漸次精細となれり。

はいかい-しちぶしふ 俳諧七部集【名】〔書〕松尾芭蕉の撰集中、「冬の日」・「春の日」・「曠野(アラノ)」・「ひさご」・「猿蓑」・「炭俵」・「續猿蓑」の七部を一括したるもの。十二卷。芭蕉の歿後、その門人各務(カガミ)支考が、獨斷にて名づけたるものなれど、蕉風俳諧の變遷を知るに便なるより、廣く流布し、遂には、蝶夢の「續七部集」、几董の「其角七部集」、又は、「七部拾遺」・「七部餘錄」・「蕪村七部集」など、その名を蹈襲せる俳書、多く現るるに至れり。

はいかい-じふろん 俳諧十論【名】〔書〕俳諧の傳、俳諧の道、俳諧の德、虛實の論、姿情の論、俳諧地・修行地・言行論、變化の論、法式の論の十章に分ち、儒敎・禪門の旨を引きて論じたるもの。二卷。各務(カガミ)支考の著。師芭蕉と論議せしものの筆記なりと稱す。

はいかい-しんせん 俳諧新選【名】〔書〕明和・安永の頃現存せし俳人中、關西の移竹・蕪村・曉臺・太祇・青蘿・樗良(チヨラ)と、江戶の作家の或方面の人人との作を、四季に分ちて集めたるもの。二冊。三宅嘯山及び炭太祇の編。安永二年の刊行。

ばいかい-しや 媒介者【名】媒介する人。なかだちにん。媒妁人。

はいかい-しゆみ 俳諧趣味【名】はいしゆみ(俳趣味)に同じ。

はいかい-しよ 俳諧書【名】はいしよ(俳書)に同じ。俳諧芭蕉談「俳諧書の名は、……俳書の名あるべし」

はいかい-すゐこでん 俳諧水滸傳【名】〔書〕俳道の名家に關する逸話・雜事を記せるもの。十卷。僧空阿の著。

はいかい-つけあひ-こかがみ 俳諧附合小鑑【名】〔書〕俳諧の附合に關し、「三物(ミツモノ)の事、並びに煙草盆の事」より「假名遣の事」に至る十七條を記せるもの。一卷。大島蓼太の著。

ばいかい-てすうれう 媒介手數料【名】媒介爲替に關して、その媒介國に支拂ふべき手數料。

はいかいのれんが-どくぎんせんく 俳諧之連歌獨吟千句【名】〔書〕もりたけせんく(守武千句)を見よ。

はいかい-はじやけんしやう 俳諧破邪顯正【名】〔書〕古風の見地に立ちて、西山宗因の流儀を汲める京都の惣本寺高政の「中庸姿」と題する獨吟集に批評を加へたるもの。一卷。山本西武(松永貞德の門人)の門人中島隨流の著。

はいかい-ほっく-こかがみ 俳諧發句小鑑【名】〔書〕發句に關して、「發句案じ方の事」・「趣向を取る事」・「句に理窟を拔く事」等の諸項を論述せるもの。一卷。大島蓼太の著。

ばいかい-めいじ 媒介名辭【名】〔哲〕ちゆうがいねん(中概念)に同じ。

はい-かう 佩香【名】腰帶に佩ぶるにほひもの。にほひぶくろ。

はい-かう 排行・輩行【名】『排は排列、行は行列の義』支那にて、兄弟・從兄弟など、宗族の人員多き時、姓の下に、年齡順に次第したる數字を添へて呼びしこと。例へば、元二・陸九・李十六など。多きは百以上の數に及ぶ。又、杜審言を杜五審言、沈佺期(シンセンキ)を沈三佺期などいふ言ひ方もあり。

はい-かう 廢校【名】學校を廢止すること。閉校。

はい-かう 廢講【名】講義を止むること。

はい-かう 背向【名】❶背の方を向くること。うしろむき。❷かうはい(向背)に同じ。

はい-がう 俳號【名】その人の、俳諧に關して用ふる雅號。

ばい-かう 陪行【名】附添ひて行くこと。おつき。隨行。

ばい-かう 陪幸【名】行幸に陪從すること。

ばい-かう 賣講【名】一日又は一箇月の賃錢若干と定めて、書を講ずること。

ばいかう 梅幸【名】〔人〕をのへばいかう(尾上梅幸)を見よ。八笑人「へん。梅幸で行(イ)かうか。いや、坂三津(バンミツ)で行かうか」

ばいかう-はぐま ばいかう白頭翁【名】〔植〕かうやばうき(高野箒)に同じ。

はいか-おほけいづ 俳家大系圖【名】〔書〕諸俳家七百〇三人を、師弟の系統によりて表示し、各人の下に、小傳を附したるもの。二卷。伊勢國津の藥種商、生川(ナルカハ)春明の著。天保九年の刊行。なほ中編・下編・別錄を續刊して、全部八卷の豫定なりしかど、中編以下は刊行に至らざりき。

はいか-きじんだん 俳家奇人談【名】〔書〕『伴嵩蹊の「近世畸人傳」に倣ひて命じたる名といふ』荒木田守武・山崎宗鑑以下の俳道、諸俳家の逸事・行狀等八十餘談を記したるもの。三卷。竹內玄玄の遺稿を、その子蓬廬の出版せるにて、文化十三年の刊行。又、天保三年に成れる續俳家奇人談あり。

はい-がく 廢學【名】學問を止むること。

ばい-かく 陪客【名】❶客の相手となること。❷相伴(シヤウバン)する客人。

はい-かご はい駕籠【名】『はいは、駕籠舁の舁きゆく時の掛聲』まちかご(町駕籠)に同じ。

はいか-し 敗家子【名】放蕩なるむすこ。道樂息子。

はい-かた【名】こいかがみに同じ。

ばい-かひ 賣買【名】ばいばい(賣買)の訛。

はい-がふ 配合【名】❶添へ合はすること。とりあはせ。配偶。❷めあはすこと。夫婦とならしむること。配偶。

ばい-がふ 媒合【名】男女の中を取持つこと。情人同士を媒介すること。「媒合・容止」

はいが-ぶぎやう 拜賀奉行【名】鎌倉時代及び室町時代の職制の一。將軍の任官・拜賀の儀を掌りしもの。

ばいがふ-しや 媒合者【名】媒合をなす人。なかうど。

はい-かん 背汗【名】恥ぢ入りて、背中に出づる冷汗。

はい-かん 肺肝【名】❶肺臟と肝臟と。❷

『大學に「如レ見二其肺肝一然」とあり』心のおくそこ。まごころ。心肝。肺腑。太平記「策を、帷幄の中に運（メグ）らし、勝つ事を千里の外に決せんと、陳平・張良が肺肝の間より流出せるが如きの者なりければ」同「君の御憤を休め奉らんと、明暮、肺肝を苦しめてぞ思ひける」

肺肝を碎く【句】「心を碎く」に同じ。太平記「君臣共に肺肝を碎きて、呉を謀ること、二十二年」鎌倉三代記「わが君のためと軍慮をめぐらし、肺肝を碎くといへども、賴家公の武運の拙さ」

肺肝を拔（ヌ）く【句】「心肝を拔く」に同じ。

はい-かん 蟹羹【名】『蟹は支那音』支那料理の一。蟹を煮て、殼を去り、鷄の煮汁に酒醬・油を加へ、葛粉を入れ、葱・生姜（シヤウガ）を細かく刻み入れて、よく煮たるもの。

はい-かん 廢刊【名】雜誌・新聞など、定期刊行物の刊行を廢止すること。

はい-かん 廢艦【名】艦齡の盡きたる軍艦。

はい-かん 排陷【名】人を排斥し陷るること。排擠。

はい-がん 拜顔・拜顏【名】めんくわい（面會）の敬語。

ばい-かん 馬醫監【名】陸軍省馬醫部の長官。馬醫正（バイノカミ）の改稱。

はいから 高襟（英 High collar）【名】『高きカラの義。**ちやんから・ばんから**（蠻殼）參照』㊀普通よりたけ高きカラ、又それを著用せる人。㊁『明治三十三四年頃、毎日新聞記者石川半山が、洋行歸りの輕薄者の、研學を疎かにし、ネキタイ・ハイカラ等の裝飾のみを學び來りて得意がるを嘲りて、ネキタイ・ハイカラの化物なりと評せしに本づく』西洋の事物を好み學びて、通人を氣どること、又その人。㊂新しき流行を趁ふこと、又その流行物、又はその服裝。㊃にやけてあること、又その人。輕佻。

はいから-あたま 高襟頭【名】ハイカラ㊂の頭髮。西洋の流行を眞似て、梳り飾りたてたる頭髮。

はいから-じたて 高襟仕立【名】ハイカラ㊂の服裝。

はいから-しんし 高襟紳士【名】ハイカラ㊂の服裝をなせる紳士。

はいから-たう 高襟黨【名】ハイカラ㊁㊂の人の仲間。

はいかる【動四自】『**はいから**（高襟）の語尾を變化せしめて、動詞とせるもの』ハイカラ㊂の言語・擧動をなす。〔俚語〕

はい-き 排棄【名】おしのけすつること。

はい-き 排毀【名】おしのけそしること。

はい-き 排氣【名】空氣を排泄、又は排除すること。

はい-き 拜跪・拜跪【名】**きはい**（跪拜）に同じ。

はい-き 敗毀【名】**きはい**（毀敗）に同じ。

はい-き 廢棄【名】㊀やめて、用ひぬこと。廢止。㊁〔法〕民事訴訟にて、控訴裁判所が、控訴を理由ありとして、又、抗告裁判所が、抗告を理由ありとして、原裁判所のなしたる判決又は訴訟手續を取消し、又、抗告裁判所が、故障の申出によりて、闕席判決を取消すこと。刑事訴訟にては、これに相當する場合を、取消と呼ぶ。**はき**（破毀）㊁參照。

ばい-き 煤氣【名】㊀すすの氣。㊁**せきたんがす**（石炭瓦斯）に同じ。

ばい-き 黴氣【名】黴毒の氣味。かさけ。

ばい-ぎ【名】**たきぎ**（薪）を云ふ。〔能登國・加賀國の方言〕

はい-きう 胚球【名】〔動〕卵の發生の際に生ずる、多數の細胞より成れる球狀物。

はい-きう 排球【名】**ばれえぼおる**に同じ

はいき-き 排氣機【名】〔理〕**くうきぽんぷ**（空氣喞筒）に同じ。

はいき-くわん 排氣管【名】『英 Exhaust-pipe』蒸氣機關・石油機關・瓦斯機關の排出する、一度使用したる蒸氣又は瓦斯を、外部に導く鐵管。

はいき-こう 排氣孔【名】**はいきたてかう**（排氣竪坑）に同じ。

はいき-しゆ 排氣腫【名】〔醫〕『獨 Lungenemphysem』空氣を過度に含蓄するによりて、肺の異常に擴張する病。一時的なると、永久的なるとあり。

はいき-しよう 排氣鐘【名】〔理〕㊀排氣機の一部を成す、硝子製の鐘狀の器。㊁**はいきき**（排氣機）に同じ。

ばいき-せい 煤氣井【名】石油を汲み出す井戶。

はいき-せい 背氣性【名】〔植〕『英 Negative aerotropism』植物の器官の、空氣の化學的刺戟によりて、その刺戟の來る方面と反對の方向に生長點を向くる現象。花粉管などに、この現象あり。（向氣性に對して）

はいき-たてかう 排氣竪坑【名】『英 Upcast shaft』鑛山にて、坑內の空氣を流通排出せしむるために設くる竪坑。かざぬき。排氣孔。

はいき-のせと 早岐瀨戶【名】〔地〕**はりをのせと**（針尾瀨戶）に同じ。

はい-きふ 配給【名】配布し、給與すること。くばりあてがふこと。

はいきふ-ひん 配給品【名】配給する品物。

はいき-べん 排氣瓣【名】『英 Exhaust-valve』蒸氣機關・內燃機關などに於て、シリンドル內にて膨脹しをはりたる蒸氣、又は瓦斯の排出を司る瓣。

はい-きん 背筋【名】〔醫〕『獨 Rückenmuskeln』體軀の背側に於ける多數の筋。

はい-きん 拜金・拜金【名】『金錢を崇拜する義』金錢を無上の尊き物と思ふこと。

はい-ぎん 敗銀【名】破れ損じたる銀貨。

はい-ぎん 拜吟・拜吟【名】他人の詩歌を吟誦することを、謙遜していふ語。

はい-きん 拜覲・拜覲【名】皇太子が、參朝して、天皇又は皇后に拜禮すること。**てうきん**（朝覲）參照。西宮記「童親王拜覲事」

ばい-きん 倍金【名】㊀倍增（マシ）のかね。㊁江戶時代に、田畑を質入（シチイレ）する時、證文には、實際の手取金よりも、二倍もしくは數倍の額に記入すること。又その證文を倍金手形と呼びたり。

ばい-きん 黴菌【名】〔植〕**さいきん**（細菌）に同じ。

ぱい-きん 牌金【名】**べいきん**（親雲上）を見よ。

はいきん-い 排菌衣【名】醫師・看護婦などの、患者に接する時、衣服の上に被ひ著る、白色の著物。

ばいきん-がく 黴菌學【名】〔植〕**さいきんがく**（細菌學）に同じ。

はいきん-けいざいがく 拜金經濟學【名】〔經〕**ぢゆうきんしゆぎ**（重金主義）に同じ。

ばいきん-しち 倍金質【名】地面を、倍金手形にて質入（シチイレ）すること。

はいきん-しゆう 拜金宗【名】拜金を人生の第一義とする主義。拜金主義。

はいきん-しゆぎ 拜金主義【名】前條に同じ。

はいきんしよう 肺焮衝【名】〔醫〕**はいえん**（肺炎）に同じ。

ばいきん-てがた 倍金手形【名】**ばいきん**（倍金）㊁を見よ。

はい-きやう 配享【名】同じ廟に合はせて祭ること。

はい-ぎやく 悖逆【名】道理にもとりたがふこと。正統記「入鹿（イルカ）、悖逆の心甚し」

ばい-きやく 賣却【名】賣りはらふこと。沽却。

ばいきやく-きん 賣却金【名】賣却して受け取りたる金。うりしろ。賣却代金。

ばいきやく-だいきん 賣却代金【名】前條に同じ。

ばいきやく-ひよう 賣却費用【名】賣却するにつきて要する費用。

はい-きよ 廢墟【名】**はいし**（廢址）に同じ。

はい-きよ 廢去【名】廢止して除き去ること。撤去。

ばい-きよ 枚擧【名】**まいきよ**（枚擧）に同じ。

はい-きよく 廢曲【名】世に行はれずなりたる音曲。すたれる樂曲。

はい-ぎよく 佩玉【名】儀式の時に、禮服に添へて佩びたる玉。玉佩。佩環。

ばい-ぎよく 梅玉【名】〔人〕**なかむらうたゑもん**（中村歌右衞門）を見よ。和合人「堪座（カンザ）でやった日高川を、隅田川に書き替へたのは、梅玉歌右衞門の形（カタ）だけれども」

はいぎよ-るゐ 肺魚類【名】〔動〕魚類の一目。呼吸器官として、鰓（エラ）の外に、鰾（ウキブクロ）の、肺の作用をなすもの。體は紡錘狀にして、體面に細鱗あり。體內に脊索あり。構造上、兩棲類と爬蟲類中の蠑螈（イモリ）

類とに似たる點あり。化石時代に繁殖し、現時生存するもの、僅かに三種に過ぎす。

はいきりやう 肺氣量【名】はいくわつりやう(肺活量)に同じ。

はいく 俳句【名】〔文〕ほっく(發句)㊁に同じ。梅翁宗因發句集、序「貞享・元祿の間に一變せし後の諸書にも、わが祖翁の名を、擧句(アゲク)に載せざるは、稀なり。されども、俳句は、たゞ活潑に言ひ流して、みづからの稿なければ、星は、河邊の影さだかに、數をとどめず、……、やうやく、今、二百三十餘章を得たり」

はいく 敗句【名】用をなさぬ句。

はいぐ 褙具【名】『へうほい(表褙)を見よ』へうぐ(表具)に同じ。見聞集「高野聖(カウヤヒジリ)、金襴の錦の切端(キレハシ)を、佛像褙具の裁殘(タチノコシ)なれば、守(マモリ)にすべしとて」

はいぐ 拜具・拝具【名】けいぐ(敬具)に同じ。

はいぐう 排偶【名】〔文〕たいぐう(對偶)に同じ。

はいぐう 配偶【名】㊀添へ合はすること。添はすること。配合。㊁つれあひ。配偶者。夫婦。

はいぐうしや 配偶者【名】夫婦の一方。つれあひ。配偶。

はいぐん 敗軍【名】戰爭に敗れたること、又その軍勢。まけいくさ。敗北。

敗軍の將【句】㊀敗軍を率ゐてある大將。敗將。㊁事業に失敗せる主人公。

敗軍の將は、再び謀らず【句】次條に同じ。〔諺語〕太平記「敗軍數萬の死を救ひたまへと諫め申しければ、越王、理に折れて、敗軍の將は再び謀らずといへり、……と宣ひて」

敗軍の將は、兵を談ぜず【句】次條に同じ。〔諺語〕

敗軍の將は、勇を語るべからず【句】『史記の淮陰侯傳に「敗軍之將、不レ可二以言一レ勇、亡國之大夫、不レ可二以圖一レ存」とあるに本づく』㊀敗軍の將は、軍事・武勇に關して、かれこれといふ資格無き者なり。〔諺語〕㊁事業に失敗したる者は、その事業に關して、かれこれといふ資格なき者なり。〔諺語〕

はいくわ 廢貨【名】通用の廢(スタ)れたる貨幣。

はいくわ 排貨【名】はいくわどうめい(排貨同盟)に同じ。

はいぐわ 俳畫【名】俳味ある、略筆の繪畫。南畫に近く、傍に俳句などを賛して、畫と相映發せしむ。本阿彌光悅より始りしといふ。松尾芭蕉も、ままこれを作り、森川許六・英(ハナブサ)一蝶なども、善く描き、與謝蕪村の如き、最も秀でたり。俳諧畫。

ばいくわ 梅花【名】㊀うめのはな。㊁ばいくわはう(梅花方)の略。源氏「梅花、はなやかに、今めかしう、少しはやき心しらひを添へて、珍しきかをり加はれり」㊂顔などの、白く美しきさまの譬。浦島年代記「逃ぐるもか弱き絲櫻、追ふも色ある梅花の顔(カン)ばせ」㊃風竈(カザマド)の作り方の一種。心(シン)の釘を轉ずれば、一瓣づつ開くやうにしたるもの。㊄五錢の隱語。おすか。〔楊弓・大弓にて、錢を賭物にする時の語〕

梅花の宴【句】梅の花を觀ながら催す酒宴。

ばいくわ 賣貨【名】賣る品物。うりもの。賣品。

ばいくわ 買貨【名】買ふ品物。かひもの。

ばいくわあぶら 梅花油【名】ばいくわのあぶら(梅花油)に同じ。

ばいくわあまちや 梅花甘茶【名】〔植〕虎耳草(ユキノシタ)科に屬する落葉灌木。莖は匍匐し、又は斜に上に向ひて、高さ一二尺に達し、葉は楕圓形又は披針形、鋭尖頭をなし、深鋸齒あり。花は帶綠白色を呈し、三箇乃至十箇づつ聚繖花序をなして開く。果實は蒴。我國の特產にして、四國・九州等の山地に自生し、又、觀賞用として栽培す。いはあまちや。もくからばな。たにあまちや。もっこばな。

はいくわい 俳詼【名】おどけ。諧謔。俳諧。

はいくわい 徘徊【名】目的を定めず歩きまはること。うろつくこと。ぶらつくこと。彷徨。

はいくわい 敗潰【名】負けてくづるること。潰敗。

はいくわい 敗壞【名】こはれやぶるること。壞敗。

ばいくわい 玫瑰【名】㊀まいくわい(玫瑰)㊁に同じ。㊁〔植〕まいくわい(玫瑰)㊁に同じ。

ばいくわいかりさう 梅花錨草・梅花淫羊藿【名】〔植〕小蘗(ギ)科に屬する多年生の草。高さ四五寸乃至一尺に達し、根葉は長き葉柄を有し、葉柄は先端二分し、小柄は更に各二分し、その一つに、一箇づつの小葉を著く。梢葉は二箇の小葉より成り、小葉は殆ど全緣なる不等心臟形にして、鈍頭を有し、早春、白き、やや梅花に似たる小花、四箇乃至六箇づつ、總狀花序をなし、下垂して開く。四國・九州等の山地に自生す。うめざき。うめざきかいりさう。

はいくわう 背光【名】ごくわう(後光)に同じ。

ばいくわうつぎ 梅花空木・梅花溲疏・山梅花【名】〔植〕虎耳草(ユキノシタ)科に屬する落葉灌木。高さ三四尺。葉は對生し、長卵形にして、三大脈を有し、鋭尖頭をなし、微鋸齒を有す。五六月の候、白色・四瓣にして、やや梅花に似たる花、總狀花序をなして開く。山地に自生し、花に芳香あるによりて、觀賞用として栽培す。うめうつぎ。さつまうつぎ。ふすまうつぎ。まうつぎ。やまがはうつぎ。

ばいくわえき 梅花易【名】易の一種。生年月日又は物體・聲音等、眼前の物を數に取り、八又は六にて除し、その殘數によりて、爻を設け、卦を立つるもの。支那宋の邵雍の遺法といふ。

ばいくわかう 梅花香【名】梅花の香に似せたる、一種の煉香(ネリカウ)。一代女「丈長(タケナガ)の平髻(ヒラモトユヒ)を、廣疊に掛けて、梅花香の雫を含ませ」

はいくわけう 拜火敎・拝火敎【名】㊀火を崇拜する宗敎。㊁けんけう(祆敎)に同じ。

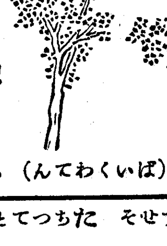
ばいくわさう 梅花草【名】〔植〕うめばちさう(梅鉢草)に同じ。

ばいくわじやく 梅花雀【名】〔動〕べにすずめ(紅雀)の漢名。

はいくわつりやう 肺活量【名】『獨 Vitalkapazität』空氣をなるたけ深く吸入して、なるたけ深く呼出する時、その呼出したる空氣の量。肺臟の最大容積と最小容積との差に該當す。男子にありては、平均三千立方センチメエトル、女子にありては、平均二千五百立方センチメエトルを普通とすれども、年齡・體格・職業等によりて差あり。肺氣量。肺量。

はいくわつりやうけい 肺活量計【名】『獨 Spirometer』肺活量を測る器械。普通、ハッチンソン(Hutchinson)氏のを用ふ。肺量計。

ばいくわてん 梅花點【名】〔美〕南畫の畫法中、點苔の一。點を五六箇づつ密接せしめて、宛も梅花の如き形に描くもの。鼠足(ソク)點。



(ばいくわてん)

はいくわどうめい 排貨同盟【名】ぼいこっとに同じ。

ばいくわなう 梅花腦【名】りゆうなう(龍腦)に同じ。

ばいくわのあぶら 梅花油【名】梅花の香に似たる匂を有する水油。女殺油地獄「解櫛(トキグシ)に色香揉み込む梅花の油」

ばいくわはう 梅花方【名】薫物(タキモノ)の一。沈香・占唐香・甲香・甘松香・白檀香(ビヤクダンカウ)・丁子(チヤウジ)香・麝香・薫陸(クンリク)香を煉り合はせて作り、梅花の香に擬し、春用ふ。又、占唐香及び白檀香は加へずともいふ。ばいくわ。小大君集「香爐に入れんとて、梅花方候ふなる、しばし賜はらん」

ばいくわはぐま 梅花白頭翁【名】〔植〕ながばのかうやぼうき(長葉高野帚)に同じ。

ばいくわまつり 梅花祭【名】「菜種(ナタネ)の御供(ゴクウ)」に同じ。

ばいくわむじんざう 梅花無盡藏【名】〔書〕㊀『著者の別號を書名とせるもの』應仁中の學僧集九(漆桶居士、又、萬里居士と號す)の詩文集。七卷。自註多く、又、本光國師の註もあり。㊁〔醫〕藥の處方を記したるもの。二卷。長田德本の著。なほ、別錄二卷あり。

はいくわん 肺患【名】肺のやまひ。肺病。

はい-くわん 稗官【名】㊀『稗は細米の義』賤しき官。小官。㊁『漢書の藝文志に「小說者流、蓋出㆓于稗官㆒。街談巷語、道聽塗說者之所㆑造也」とあり。支那にて、古、民間の事を知らんとて、これを探りて記さしむるために、小官を置きしに本づく』作物語(ツクリモノガタリ)。小說。稗史。稗說。「稗官・野乘」 浮世風呂「三史・五經は丸藥の苦味(ニガミ)にて、稗官・野史は水飴なり」

はい-くわん 佩環【名】はいぎよく(佩玉)に同じ。

はい-くわん 拜觀・拝觀【名】くわんらん(觀覽)の謙稱。

はい-くわん 拜官・拝官【名】『はいす(拜す)㊁を見よ』官に任ぜらるること。任官。拜任。拜除。

はい-くわん 廢官【名】或官職を廢止すること、又、廢止せられたる官職。

ばい-くわん 賣官【名】資財を納めしめて、官職を授くること。

ばい-くわん 買官【名】資財を納めて、職を授けらるること。

ばい-くわん 陪觀【名】陪從して、共に觀ること。

ばい-くわん 陪官【名】陪從せる官人。

ばい-くわん-はふ 賠還法【名】〔農〕しふやくのうげふ(集約農業)に同じ。

はい-くわん-れう 拜觀料・拝觀料【名】社・寺などの殿堂・寶物などを觀る時に拂ふ料金。

ばい-くわん-ゐ 賣官位【名】資財を納めしめて、官位を授くること。

ばいくわ-も 梅花藻【名】〔植〕毛茛(キンポウゲ)科に屬する多年生の草。山地又は寒地の清涼なる流水中に生じ、莖も、葉も、全く水中に在り。葉は細裂して、絲狀をなし、各節より小根を生ず。七月頃、葉腋より、長き花軸生じて、水面上に、白色・五瓣の花一箇を著く。うめばちも。かはまつ。

ばいくわ-わうれん 梅花黄連【名】〔植〕ごかえふわうれん(五加葉黄蓮)に同じ。

はい-け 廢家【名】はいか(廢家)に同じ。

はい-けい 背景【名】『英 Back ground』㊀〔美〕繪畫にて、一箇の肖像又は一群の人物の周圍の餘地。ばっく。㊁劇場にて、狂言の補助として、舞臺の正面の奥などに飾る、景色その他を示す畫。かきわり。ばっく。㊂周圍の形勢・情況。環境。ばっく。㊃うしろだて。後援者。ばっく。「背景が善いから、出世が早い」㊄境遇。家庭。ばっく。「背景が悪いため墮落した」

はい-けい 拜啓・拝啓【名】恭しく申し上ぐ。(書翰文の冒頭に用ふ) 拜呈。謹啓。拜稟。

はい-げい 拜迎・拝迎【名】㊀恭しく出迎ふること。㊁でむかへ(出迎)の謙稱。おでむかへ。

はいけい-ぐわはふ 配景畫法【名】とうしぐわはふ(透視畫法)に同じ。

ばいけい-さう 蒜藜蘆【名】〔植〕百合(ユリ)科に屬する多年生の草。藜蘆(シュロサウ)の類。高さ三四尺に達し、葉は廣楕圓形・全緣にして、平行脈を有し、初夏、莖頂に、帶黃綠色にして黃綠色の條を有する六瓣花、穗狀花序をなして開く。多くは單性・雌雄異株なり。やや陰濕の深山に自生し、根には激毒あり。はへのどく。ゆきわり。

はい-けう 背敎【名】信仰し來りたる敎法に背くこと。

はい-げき 排擊【名】おしのけんとして攻擊すること。非難。

ばい-げた 貝げた【名】ばいごま(貝獨樂)に同じ。

はい-けつ 肺血【名】肺より出血すること、又その血。

はい-けつ 廢缺【名】すたれかくること。「威儀、廢缺す」

ばい-けつ 貝闕【名】美しき貝殼にて飾れる宮。水伯の居る所。りうぐう。

ばい-げつ 梅月【名】陰曆四月の異稱。

ばい-げつ 媒櫱【名】『媒は酒酵、櫱は麹にて、共に酒を釀すに用ふる物』過失・罪惡を助成すること。

はい-けっかく 肺結核【名】〔醫〕結核菌によりて發する肺の病。恐るべき傳染病にして、患者の喀痰の乾燥したる後、塵に混じて、飛散するによりて傳染し、初期には肺尖加答兒を起し、頑固なる咳嗽あり。多くは右肺より始まり、喀痰・寢汗・運動時の呼吸困難、食欲の減退、貧血・喀血・發熱等を來す。單に肺病といへば、主としてこれを指し、昔、肺癆・癆症など呼びたり。

はいけつ-のうどくしやう 敗血膿毒症【名】〔醫〕次條に同じ。

はいけつ-びやう 敗血病【名】〔醫〕『獨 Septikopyaemie』釀膿菌が、血行の中に侵入して、全身の傳染性疾患を起すもの。主因は、流產と分娩とにして、產褥時の子宮內膜より侵入せる細菌に基づき、その他、外皮・粘膜の損傷、臟器の化膿等によりても起る。數日の潛伏期を經て發熱し、衰脫の感、意識の不鮮明、心悸亢進・呼吸困難・嘔吐・下痢、舌の乾燥、脈搏頻數等を起し、血栓の發生を見、諸所の關節炎を發す。一時恢復の徵を表すものもあれど、多くは數週の中に死す。敗血膿毒症。

はい-げふ 廢業【名】㊀職業をやむること。㊁藝・娼妓の、稼業をやむること。

はい-けん 佩劍【名】劍を腰に帶ぶること、又その劍。こしがたな。帶劍。

はい-けん 拜見・拝見【名】㊀恭しく見ること。㊁見ることを謙遜していふ語。㊂〔商〕外國商館が、生絲を、その賣込商より買ひ入るる時、該貨物を商館に持ち込ませ、雙方立會の上、その一部を見本として、總貨物の中より引き出し、品質の檢査を經たる上にて、約束を定むること。器械絲・掛田(カケダ)絲は、この手續を經ず。

はい-けん 桮棬・杯棬【名】杞柳(ドロヤナギ)などを折りまげて作りたる杯。まげもの。

はい-けん 配見【名】首實檢の一。葉武者・雜兵(ザフヒヤウ)などのを檢すること。(檢知に對して)

ばい-けん 賣劵【名】ばいけんじやう(賣劵狀)の略。

はいけん-ごと 拜見事・拝見事【名】みごと(見事)の敬稱。

ばいけん-じやう 賣劵狀【名】うりけんじやう(賣劵狀)に同じ。

はいげんす-の-げんり ハイゲンスの原理【句】〔理〕ほいへんすのげんり(ホイヘンスの原理)に同じ。

はい-こ 敗鼓・敗皷【名】やぶれたる太鼓。やぶれだいこ。やれつづみ。「牛溲(ギウシウ)・馬勃、敗鼓の皮」を見よ。

はい-こ 廢戶【名】はいか(廢家)に同じ。

はい-こ 廢錮【名】世に出ださずして、おし込め置くこと。生涯に亙りて、仕進の途を塞ぐこと。

はい-こ 癈痼・廢痼【名】はいしつ(癈疾)に同じ。

はい-ご 背後【名】うしろ。しりへ。後方。後背。

はい-ご 廢語【名】『英 Obsolete words』現時は全く使用せぬことば。死語。

ばい-ご 媒語【名】〔哲〕ばいじ(媒辭)に同じ。

はい-こう 廢后【名】その時の皇后を廢すること、又、廢せられたる皇后。

はい-こう 胚孔【名】〔動〕卵の發生する際に生ずる孔。後に、肛門又は口となる。

はい-こう 廢興【名】こうはい(興廢)に同じ。盛衰記「觀㆓存亡之符㆒、見㆓廢興㆒事」

はい-こう 沛公【名】〔人〕りうはう(劉邦)を見よ。太平記「その意常に沛公にあり」

はい-こきふ 肺呼吸【名】〔醫〕呼吸器にて行はるる呼吸。(皮膚も、多少呼吸作用を營むによりて、特にいふ)

ばい-こく 賣國【名】私利を圖る目的にて、自國の內情祕事を敵國に通じ、又は自國に不利にして、敵國に有利なる事を企つること。

ばいこく-ど 賣國奴【名】賣國の行を爲したる者を罵りていふ語。

はい-こつ 髀骨【名】〔醫〕ひこつ(髀骨)の誤讀。

ばい-ごま 貝獨樂・螺獨樂・海蠃獨樂・海螺獨樂・黄螺獨樂・陀螺獨樂【名】ばいの介殼を、中部より橫斷したるまま、又はその中に、鎔したる鉛、又は蠟をつぎこみたるを、獨樂のごとくに廻して遊ぶもの。ばいげた。ばいつく。ばいまはし。

はい-こん 敗根【名】㊀草木の根の腐敗したるもの。㊁〔佛〕『腐敗せる根に譬へていふ』はいしゆ(敗種)㊁に同じ。

はい-ざい 配劑【名】㊀藥劑を配合すること。くすりの調合。㊁適度に配合す

ること。「天の配劑も、亦、妙なるかな」**三**程よく取繕ふこと。（源氏冷泉節）「折惡しく參り係って、法眼(ホフゲン)も、配劑仕かねて見えにける」

はい-ざい　配財【名】〔經〕『英 Distribution』財産が、社會の各人に分配せらるること。例へば勞働者が賃金を受け、企業家が利益を受くる類。財の分配。

はい-さう　拜掃・拝掃【名】『恭しく墓を掃除する義』はかまゐり。墓參。

はい-ざう　肺臟【名】〔動〕高等動物の呼吸器の主腦たる内臟。實質は海綿様をなし、彈力ありて、呼吸作用を營む。單に肺ともいひ、又、魚類中の有肺類、節足動物中の蜘蛛類、軟體動物中の有肺類の呼吸器をも肺と呼ぶことあれど、その發生・構造等は、高等動物のとは同一ならず。はいのざう。

ばい-さう【名】〔植〕**はぼたん**(葉牡丹)に同じ。

ばい-さう　黴瘡【名】**ばいどく**(黴毒)に同じ。

ばい-さう　陪葬【名】『陪は重なる義』臣下を、主君の墓の側に、別に墓を設けて葬ること。

ばい-ざう　倍贓【名】强竊盜(ガウセツタウ)に、贓物を倍額にして、もとの所有者に償還せしむること、又その償還せしむる贓物。

はいざう-ぢすとま　肺臟ヂストマ【名】〔醫〕『獨 Lungendistomum』吸蟲類に屬する扁形動物。人類の肺臟に寄生して、肺ヂストマ病又は肺臟二口蟲病と稱する病氣の原因となる。

はいざう-にこうちゆう-びやう　肺臟二口蟲病【名】〔醫〕前條を見よ。

はい-ざこ　鮠雜魚【名】〔動〕**はえ**(鮠)に同じ。

はい-さつ　廢札【名】通用の廢(ス)れたる紙幣。

はい-さつ　配札【名】札(フダ)をくばること、又その札。

はい-さん　杯盞・盃盞【名】さかづき。酒杯。

はい-さん　敗散【名】敗軍し逃げ散ること。敗北。敗亡。

はい-ざん　廢殘【名】すたれそこなはること。

ばい-さん　梅酸【名】梅の實の酸味。うめず。

梅酸、渇(カツ)を休(トド)む【句】『世說に「魏武嘗行役、與二軍士一失二汲道一、軍皆渴。乃令曰、前有二大梅林一、饒レ子、甘酸可二以解レ渴。士卒聞レ之、口皆出レ水」とあるに本づく』梅の實は、味極めて酸きため、これを思ひ浮べたるだけにても、唾液生じて、渇を醫するに足る。「諺語」（太平記）「將軍も、暫く松尾・葉室(ハムロ)の間に控へて、梅酸の渇をぞ休められける」

ぱい-ざら　バイ皿【名】バイを製すに用ふる燒皿。鐵製にして淺し。

ばい-さ-をう　賣茶翁【名】**一**一服一錢の茶を賣る翁。**二**〔人〕黃檗(ワウバク)宗の僧。肥前國蓮池(ハスノイケ)の人。俗姓は柴山、名は元昭、字は月海。幼にして薙髮し、宇治の黃檗山に學ぶ。後、京師に來りて、東山の地をトし、人の信施を煩すを屑しとせず、茶を售りて、飢を防ぐ。晩年、洛東岡崎に居り、携ふる所の茶具を、悉く火に投じて、門を閉ぢ、客を謝し、寶曆十三年歿す。年八十七。**三**〔人〕臨濟宗の僧。筑前國福岡の人。俗姓は笠原、名は方巖、字は祖永、一に曇淵と稱す。京都に上りて、洛外花園の妙心寺に學び、又、鎌倉の圓覺寺にも居る。賣花翁元昭の風を慕ひ、常に茶具を負ひて行脚し、到る所、茶を煎じて、人に供す。文政十一年紀伊侯の江戸邸に寂す。

はい-し　稗史【名】『**はいくわん**(稗官)を見よ』小說的の歷史。「稗史・野乘」

はい-し　俳士【名】**はいじん**(俳人)に同じ。（續俳家奇人談）「俳士の無稽なる、連歌の抄物のみを據とし」

はい-し　敗紙【名】やぶれて役に立たぬ紙。

はい-し　廢紙【名】役に立たぬ紙。ほご。

はい-し　廢址【名】建築物などの荒廢したる址(アト)。廢墟。

はい-し　背子【名】**からぎぬ**(唐衣)に同じ。

はい-し　胚子【名】〔動〕**はい**(胚)**一**に同じ。

はい-し　拜仕・拝仕【名】君主などに對する年賀。（庭訓往來）「即可レ促二拜仕一之處、自他故障、不慮之至也」

はい-し　拜芝・拝芝【名】『芝眉を拜する義』**はいがん**(拜顏)に同じ。

はい-し　配祀【名】他の神に副へて祀ること。配食。從祀。

はい-し　廢止【名】やむること。行はぬこと。

はい-し　廢弛【名】すたれゆるぶこと。弛廢。

はい-し　齒醫師【名】**はいしや**(齒醫者)に同じ。

はい-じ　廢字【名】通用の廢(ス)れたる文字。

はい-じ　廢寺【名】荒廢せる寺。住僧の無き寺。

はい-じ　拜辭・拝辭【名】**一**謹みて暇乞をすること。**二**謹みて辭退すること。

ばい-し　唄師・唄士【名】〔佛〕大法會の時、梵唄を唱ふる僧。唄(バイ)。

ばい-し　貝子【名】**一**〔動〕**こやすがひ**(子安貝)の漢名。**二**支那清代の十二爵號中、第四級に位するもの。貝勒の子に授く。

ばい-し　倍蓰【名】『蓰は五倍の義』數倍に增加すること。倍加。

ば-いし　馬醫師【名】**一ばい**(馬醫)**一**に同じ。**二**宮内省主馬(シュメ)寮の職員の一。馬匹の醫療の事を掌る奏任官。定員一人。

ばい-じ　媒辭【名】〔哲〕『英 Middle term』形式論理學上、推論式の大・小兩前提に共通して、大辭と小辭との連結を媒介する名辭。例へば「すべての日本人は亞細亞人なり(大前提)。楠木正成は日本人なり(小前提)。故に楠木正成は亞細亞人なり(斷案)」の中なる「日本人」の類。推論上、極めて重要なる任務を有するものとす。媒語。中名辭。

ばい-しう　買收【名】**一**買ひ取ること。買ひ占むること。**二**利を以て誘ひて、味方に引入るること。

はい-しき　拜式・拝式【名】禮拜のしかた。をがみかた。

はい-しき　俳式【名】〔文〕**はいかいしき**(俳諧式)に同じ。

はい-しつ　肺疾【名】**はいびやう**(肺病)に同じ。

はい-しつ　癈疾【名】創痍又は不治の病。癈痼。

はい-しつ　廢失【名】廢(ス)れ失(ウ)すること、又、すたらせ失ふこと。失墜。（盛衰記）「淨侶の弘通(グヅウ)を廢失す」

ばい-しつ　媒質【名】〔理〕『英 Medium』波動を傳播・媒介する物質。例へば音波に於ける空氣、光波に於けるエエテルなどの類。媒體。

ばい-しつ　梅室【名】〔人〕俳人。加賀國金澤の人。姓は櫻井、名は雪雄、通稱は能充。陸陸道人・寒松庵・方圓齋等の別號あり。家業を襲ぎ刀磨を以て、藩侯に仕へ、致仕の後、俳諧を高桑闌更に學び、成田蒼虬・田川鳳朗・鶴田卓池と共に、天保の四老人と稱せらる。嘉永五年歿す。年八十四。

はいじつ-せい　背日性【名】〔植〕『英 Negative heliotropism』植物が、太陽の光線に感應して、その光線の來る方向と反對なる方向に、生長又は屈曲する性質。背陽性。(向日性に對して)

はいしつ-ちやう　癈疾帳【名】大帳枝文の一。癈疾の者を記入せしもの。

はいしつ-ほけん　癈疾保險【名】〔商〕『英 Invalid insurance』癈疾の人を被保險人とする保險。我國には、未だ行はれず。

はいし-はふ　廢止法【名】〔法〕**一**現行法の廢止を目的とする法令。**二**廢止せられたる法令。

はい-しん　背進【名】背後に行進すること。あとじさり。退却。

はい-しん　拜進・拝進【名】**一**恭しく進むこと。**二**恭しく進上すること。（運歩色葉集）「拜進、ハイシン」

はい-じん　俳人【名】俳諧**三**を好む人、又はそれに巧みなる人。俳家。俳士。俳諧師。

はい-じん　廢人【名】心身に完からざるところありて、世の用をなさぬ人。世用に堪へぬ人。

はい-じん　癈人【名】癈疾の人。

ばい-しん　梅信【名】梅の咲きたるたより。

ばい-しん　陪臣【名】『陪は重なる義』**一**臣下の臣。またげらい。またもの。**二**古、支那にて、諸侯の太夫が、天子に對し

ていひし稱。㊁鎌倉・室町の兩時代に、將軍の臣を、天皇に對して、又、江戸時代に、諸侯の臣を、將軍に對して呼びし語。正統記「武家代代の陪臣を擧げて、高官を授けられん事は」

ばい-しん 陪審【名】㊀裁判の審理に陪席すること。裁判のたちあひ。㊁〔法〕裁判官が、刑事事件に付き法律を適用するに先だち、適用の對象たる事實・行爲を認定せしむるため、人民中より選定したる、獨立の機關。

ばいしん-くわん 陪審官【名】㊀陪審をする官吏。㊁ばいせきはんじ(陪席判事)に同じ。

ばいしん-さいばん 陪審裁判【名】陪審制度に依る裁判。

ばいしん-せいど 陪審制度【名】〔法〕陪審㊁を設くる制度。

ばいしん-せき 陪審席【名】裁判に對して、陪審員の居る座席。

ばいしん-どう 倍振動【名】〔理〕『英 Harmonics』或物體の固有の振動中にて、原振動に倍數なる振動數にて行はるる振動。ばいおん(倍音)參照。

ばいしん-はふ 陪審法【名】〔法〕刑事訴訟の審理に、民間の有識者中より選ばれたる陪審員なる陪席者を置く制度の法律。大正十二年の公布。

ばいしん-ゐん 陪審員【名】陪審㊁を組織する人。

はい-しや 齒醫者【名】齒の病を治療する專門の醫者。はいし。齒科醫。

はい-しや 廢舍【名】はいたく(廢宅)に同じ。

はい-しや 背斜【名】〔地〕『英 Anticlinal』地殼が褶曲して、被狀を呈したる時の凸狀部。(向斜に對して)

はい-しや 拜謝・拝謝【名】謹みて禮をいふこと。恭しく謝禮を述ぶること。

はい-しやう 俳倡【名】わざをぎ。役者。俳優。優倡。

はい-しやう 俳匠【名】はいかいし(俳諧師)に同じ。俳諧水滸傳「泊船堂に集るの俳士には、先づ仙化・楊水・北鯤……等の俳匠、すでに二十人に餘りて」

はい-しやう 背墻【名】〔兵〕背面よりの敵の射擊に對する防禦の目的にて、胸墻と同一なる積土を、反對の方向に築造したるもの。

はい-しやう 敗將【名】㊀いくさに敗れたる大將。敗軍の將。㊁物事に失敗したる人。敗軍の將。

はい-しやう 敗漿【名】〔植〕『その根に臭氣ありて、腐敗したる漿のごとしとていふ』をみなへし(女郎花)の漢名。

はい-しやう 廢娼【名】娼妓を廢すること。

はい-しやう 拜請・拝請【名】しやうだい(請待)の謙稱。庭訓往來「拜㆓請貴寺長老㆒、定㆓中當日唱導師㆒度候」

はい-じやう 杯狀・盃狀【名】さかづきに似たる形狀。

ばい-しやう 梅漿【名】うめず(梅酢)に同じ。

ばい-しやう 梅醬【名】うめびしほ(梅醬)に同じ。

ばい-しやう 賠償【名】他人に加へたる損害を補ひつぐなふこと。

ばいしやう-がく 賠償額【名】賠償するたか。

ばいしやう-ぎむ 賠償義務【名】賠償すべき義務。

ばいしやう-きん 賠償金【名】賠償する金。

はいしやう-くわ 敗漿科【名】〔植〕をみなへしくわ(敗漿科)に同じ。

ばいしやう-しゆぎ 賠償主義【名】〔法〕刑罰の目的は、犯罪によりて蒙りたる社會の有形・無形の損害を賠償するにありとなす主義。

はいじやう-なんこつ 盃狀軟骨【名】〔醫〕『英 Arytenoid cartilage』喉頭を形成する五種の軟骨の一。左・右の二箇に分れ、他の軟骨との間は、靱帶によりて連繫せられ、甲狀軟骨との距離を變じて、聲帶を弛張せしむる時は、音調の變化を生ず。披裂軟骨。

はい-じやうみやく 肺靜脈【名】〔醫〕『獨 Lungenvenen』肺にて、瓦斯交換を終へたる血液を心臟に導く血管。左右、各二條あり。共に肺門を出で、左心房の兩側緣に開口す。

ばいじやう-ろく 梅城錄【名】〔書〕天神聖德讃と題し、菅原道眞の事蹟を、四句づつ二十五首の詩に作り、古史を引きて、一一の事歷を註せるもの。一卷。釋呆庵の撰。

はいしやう-ろん 廢娼論【名】廢娼を主張する議論。

はい-しやく 盃酌・杯酌・杯杓【名】盃をやりとりして、酒を酌みかはすこと。さかもり。酒宴。十訓「杯酌、度度に及ぶ間、弘光、酒狂の詞を出す」

はい-しやく 拜借・拝借【名】借ることの謙稱。恩借。

ばい-しやく 媒妁【名】男女の緣を取持つこと。なかだち。なかうど。媒介。

はいしやく-きん 拜借金・拝借金【名】㊀拜借したる金錢。㊁江戸時代に、大名・代官などの、幕府より金を借りしこと、又その金。

ばいしやく-にん 媒妁人【名】媒妁をなす人。なかだち。なかうど。媒介者。

はいしやく-やしき 拜借屋敷・拝借屋敷【名】江戸時代に、武家の、幕府より拜借せし屋敷。

ばいしやく-をんな 媒妁女【名】㊀媒妁をなす女。女のなかうど。㊁すあひをんな(牙儈女)に同じ。

はいしや-こく 背斜谷【名】〔地〕地層の背斜部の變じて、谷になりたるもの。

はいしや-てふきよく 背斜褶曲【名】〔地〕はいしや(背斜)に同じ。

はい-しゆ 杯酒・盃酒【名】㊀杯に酌みたる酒。「杯酒を銜(フク)む」㊁さかもり。酒宴。杯酌。「杯酒の座」

はい-しゆ 敗酒【名】腐敗したる酒。

はい-しゆ 敗種【名】㊀草木の種子の、腐敗したるもの。㊁〔佛〕『維摩經の不思議品に見ゆ。涅槃經の如來性品、摩訶止觀の卷八に焦種の語あり、意義相同じ』聲聞(シヤウモン)・緣覺(エンガク)の、永久に二乘の境にありて、菩薩行(ボサツギヤウ)を修して、向上せんとする精神を有せざることを、敗滅して、芽を生ぜざる種子に譬へていふ語。敗根。謠曲(現在七面)「敗種の二乘・闡提(センダイ)も、皆同じ悟を得」

はい-しゆ 胚珠【名】〔植〕『英 Ovule』顯花植物の花部に在りて、受精の後、種子となるべき小體。被子植物にありては、子房內に被包せられ、裸子植物にては露出せり。最外側なる珠皮、その次なる珠心、最內部なる胚囊の三部より成り、胚囊は中に卵珠を含める一大細胞にして、受精後、成長して胚となる。はうし(胞子)參照。

はい-しゆ 拜手・拝手【名】『公羊傳の宣公六年の條の註に「頭至㆑地、曰㆓稽首㆒、頭至㆑手、曰㆓拜手㆒」とあり』頭を手の所まで下げて、恭しく敬禮すること。

はい-じゆ 拜受・拝受【名】㊀恭しく受くること。㊁受くることの謙稱。頂戴。拜戴。

ばい-しゆ 梅酒【名】うめざけ(梅酒)を見よ。

ばい-しゆ 醅酒【名】酒の未だ漉さざるもの。もろみざけ。

ばい-じゆ 唄頌【名】〔佛〕ばい(唄)に同じ。著聞「庭前に、一株の橘の樹あり、久しくして枯木となりにけり。大佛唄頌一返を誦して加持の間、すなはち花葉を出しけり」

ばい-じゆう 陪從【名】『陪は重なる義』貴人に附きしたがひて行くこと、又その人。とも。扈從。隨行。陪從。隨從。べいじゆう(陪從)參照。

はい-しゆつ 輩出【名】同じやからの、打續きて世に出づること。

はい-しゆつ 排出【名】㊀外へおしいだすこと。㊁はいせつ(排泄)に同じ。

はい-しゆみ 俳趣味【名】俳諧に通有せる趣味。脫俗・瓢逸・輕妙・滑稽などを、その特色とす。俳味。

ばい-しゆん 賣春【名】『春情を賣る義』ばいいん(賣淫)に同じ。

はい-じゆんくわん 肺循環【名】〔醫〕せうじゆんくわん(小循環)に同じ。(體循環に對して)

ばいしゆん-ふ 賣春婦【名】ばいいんふ(賣淫婦)に同じ。

はい-しよ 配所【名】配流する場所、又、配流せらるる場所。謫所。

配所の月【句】「罪無くして、配所の月

を見る」を見よ。

はいしよ 俳書 【名】俳諧に關する書物。「俳諧書。

はいじよ 敗絮 【名】やぶれくづれたるわた。ぼろわた。

はいじよ 拜敍・拜叙 【名】一『はいす(拜す)二を見よ』爵位に敍すること。敍位。二爵位を拜受すること。

ばいじよ 媒助 【名】ばいかい(媒介)に同じ。

はいしよう 拜承・拜承 【名】恭しく承(ウケタマハ)ること。敬承。

はいしよう 拜誦・拜誦 【名】誦(ヨ)むことの謙稱。拜讀。

はいしよう 背誦 【名】あんしよう(諳誦)に同じ。

ばいじよう 陪乘 【名】貴人の車に陪從して乘ること。

ばいしようろん 梅松論 【名】〔書〕『卷尾に「或人、これを書き留めて、所は北野なれば、將軍の榮華、梅と共に開け、御子孫長久、松と德を等しうすべし。飛梅・老松、年ふりて、松風吹けば、梅花薫ずるを、問ふと答ふとに準へて、松梅論とぞ申しける」とあり』北野天神に參籠せる一法師の物語に託して、元弘の頃より筆を起し、主として、足利篡奪の頃の戰鬪を記したるもの。二卷。作者詳かならざれども、足利氏の臣隷の手に成れるものなるべし。一說に、玄慧法師が足利直義(タダヨシ)の命を承けて撰せしものともいふ。

はいしよく 廢職 【名】一官職を廢止すること、又その官職。二弛廢したる職務。

はいしよく 配色 【名】種種の色を按配すること、又その按配の巧拙の程度。互に相逆はず、且つ明・暗の度を程よく按配するを、巧なるものとす。

はいしよく 配食 【名】『べうしよく(廟食)を見よ』はいし(配祀)に同じ。

ばいしよく 陪食 【名】『陪は重なる義』貴人の食事に相伴(シヨウバン)すること。

ばいしよく 培植 【名】草木をつちかひ植うること。

ばいしよく 培殖 【名】草木をつちかひふやすこと。

ばいしよく 賣色 【名】ばいいん(賣淫)に同じ。

はいしよざんさう 配所殘草 【名】〔書〕次條に同じ。

はいしよざんぴつ 配所殘筆 【名】〔書〕山鹿(ヤマガ)素行の、幕府の咎を蒙りて、播州赤穗に配せられし間に、幼時以來の略歷、赤穗下向前後の事を、書簡體に自記せるもの。一卷。一名配所殘草。

ばいじり 螺尻 【名】江戸時代、元文の頃、釣魚の際に用ひし、竹の皮の笠。窄めて作り、釣竿がその緣に障らぬやうにしたり。からけいじ。ばいじりがさ。

ばいじりがさ 螺尻笠 【名】前條に同じ。

はいす 配す 【動佐變自】相當す。匹敵す。「その德の廣大、天地に配す」

はいす 配す 【動佐變他】一くばる。分配す。配付す。二添へ合はす。配合す。三連れ添はす。夫婦とす。めあはす。配偶せしむ。四流刑にす。ながす。配流す。五配下とす。隷屬せしむ。

はいす 廢す 【動佐變自】一不用になる。行はれず。すたる。二機能すたる。不具になる。〔癈す〕

はいす 廢す 【動佐變他】一用ひず。行はず。棄つ。止(ヤ)む。中止す。廢止す。廢棄す。「學を廢す」「虛禮を廢す」二その地位より退かしむ。「天皇を廢す」「太子を廢す」

はいす 拜す・拝す 【動佐變他】一頭を下げて敬禮す。をがむ。和合人「日月に禮を申す人はござりませぬが、これは、折折拜して、お禮を申してもよからうと存じて」二『任官の時、君前に拜する義にていふ』官に任ず。官を授く。「太政大臣に拜す」三拜受す。頂戴す。四拜見す。保元「君の御弓勢(オンユンゼイ)を慥かに拜し奉らばや」

はいす 排す 【動佐變他】一おしわく。おしひらく。「闥(タツ)を排して入る」二ならべておく。くばりておく。排置す。三おししりぞく。おしのく。排除す。排斥す。「衆議を排して、開戰に決せしむ」

はいす 褙す 【動佐變他】一『へうはい(表褙)を見よ』裏うちをす。〔古語〕源氏「かんやがみに、唐の綺(キ)をはいして」

ばいす 倍す 【動佐變自】一或數に同數を加へたるだけの數になる。二倍になる。二多くなる。加はる。まさる。「舊に倍し御愛顧の程希望仕り候」

ばいす 倍す 【動佐變他】一或數に同數を加へたるだけ數のにす。二倍にす。二多くす。加ふ。增す。倍加す。

ばいす 陪す 【動佐變自】附き從ふ。供(トモ)す。隨伴す。陪從す。

はいすう 拜趨・拜趨 【名】『趨(ハシ)り赴く、即ち急ぎ參上する義。趨の字の音、正しくはシユ』貴人の許に赴くことの敬語。まゐること。參上。參趨。著聞「拜趨の間、僅かに召し具し候ふ僮僕、一兩人には過ぎず候」太平記「征夷大將軍と仰いで、武臣、皆、拜趨の禮を事とす」

ばいすう 倍數 【名】一倍加せる數。二〔數〕『英 Multiple』或數の整數倍なる數。又、或整式の整數倍なる整式。三花合(ハナアハセ)二にて、一人にして、八十八以上の勝を得たること。

ばいすうひれい 倍數比例 【名】〔化〕次條を見よ。

倍數比例の定律 【句】〔化〕『英 Law of multiple proportion』化合重の定律の一。甲・乙二種の元素相化合して、數種の化合物を生ずる時、これら化合物に於て、甲元素の一定量に對して、乙元素の化合せる割合の、互に簡單なる整數比をなすといふ定律。例へば酸素と窒素との化合より生ずる五種の化合物に於て、酸素の含まるる量は、窒素の百量に對して、五七・一、一一四・三、一七一・四、二二八・六、二八五・七にして、互に一・二・三・四・五の比をなせる類。倍比例の定律。倍比の定律。倍比律。「定比例の定律」參照。

ばいすけ (英 Basket の訛) 【名】笊の一種。篠を割りて編み、淺きバケツの如き形に作りて、四隅に吊繩を附けたるもの。石炭・砂利・土砂などを盛るに用ふ。

はいすべりい 【名】『蠅(ハヘ)も辷り落つるほどに滑かなり」との意を西洋語めかしていへる語』全部禿げたる頭。〔俚語〕

はいずみ 掃墨 【名】『掃墨(ハキズミ)の音便。油烟を掃き落して取りたるものの意』胡麻油又は菜種油の油烟。膠を加へて、墨を製し、又、酒・漆・澁などを加へて、器物の下塗に用ひ、又、藥料にも供す。かるめ。油烟墨(ユエンズミ)。はひずみ。和名「掃墨、波伊須美」

はいすゐ 杯水・盃水 【名】杯中の水。一杯の水。

はいすゐ 背水 【名】川を背後に控へたること。太平記「これを名づけて、韓信が囊沙・背水の謀とは申すなり」

背水の陣 【句】一背後に、河流などを控へたる陣立。味方をして、退かば、水に溺るべきにより、戰死の覺悟をなさしむること。支那前漢の韓信の故事によりて、名高し。太平記「この陣の樣、前に川ありて、後に大山峙ちたれば、引場の思はなけれども、韓信が、兵書を編(ヘン)して、背水の陣を張りしに違へり」二たとひ失敗すとも後退せざるべき覺悟にて著手すること。

はいすゐ 排水 【名】一不用又は有害なる水を排除すること。驅水。二船體が、その重さによりて、水を押分けひらくこと。

はいすゐ 配水 【名】水を配給すること。

ばいずゐ 陪隨 【名】ばいじゆう(陪從)に同じ。

はいすゐき 排水器 【名】排水に用ふる器械。

はいすゐこう 排水溝 【名】はいすゐろ(排水路)に同じ。

はいすゐしゆ 肺水腫 【名】〔醫〕『獨 Lungenschlag』肺の、多量に液體を含畜して、腫脹すること。多くは不治の病症に因りて發す。

はいすゐせい 背水性 【名】〔植〕『英 Negative hydrotropium』植物の、水の刺戟に感應して、それと反對の方向に延長する性質。(向水性に對して)

はいすゐせん 排水腺 【名】〔植〕『英 Drainage gland』植物體の水を排出する細胞又は組織。

はいすゐち 排地水 【名】排水の設備をなしたる土地。

はいすゐち 配水池 【名】『英 Distributing reservoir』配水の目的にて設くる池。水道工事に於ける淨水池のごときも、その一なり。

はいすゐ-とん 排水頓【名】次條に同じ。

はいすゐ-とんすう 排水噸數【名】船艦の排水量を、噸數にて計算したるもの。その船艦の總重量が若干噸にして、それと同一なる重量の水を排除して浮ぶ意を示す。一般に、軍艦の大さは、これによりて示し、商船の大さは、容積噸數によりて表はす。排水頓。

はいすゐ-ぽんぷ 排水喞筒【名】『英 Drainage pump』排水の目的を達するに用ふるポンプ。

はいすゐ-りやう 排水量【名】『英 Displacement』船體の排水の分量。この分量は、アルキメデスの原則によりて、船舶の重量に等し。

はいすゐ-ろ 排水路【名】排水のために設くる水路。排水溝。

はい-せい 孛星【名】『傍氣の孛孛然たる星の義』はうきぼし(彗星)に同じ。

はい-せい 廢井【名】廢(ス)れたる井。久しく用ひざる井。

はい-せい 悖政【名】道理にもとりたる政治。虐政。太平記「逆勑・悖政の逆行」

はい-せい 俳星【名】すぐれたる俳人。俳諧水滸傳「爰に、この里に、一箇の俳星あり、その名を橿木堂(キヤウボクダウ)荷兮(カケイ)と號す」

はい-せい 排擠【名】おしおとすこと。おしのくること。排陷。擠排(セイハイ)。

ばい-せい 陪星【名】〔天〕『陪は重なる義』ゑいせい(衞星)に同じ。

ばい-せい 馬醫生【名】陸軍省馬醫部の職員の一。馬匹の醫療に從事せし下士。一等より三等までの等級あり。明治十二年各等を、更に一等と二等とに分ち、同十八年廢官となれり。

ばい-せう 焙燒【名】あぶり燒くこと。

ばいせう-ふ 賣笑婦【名】『南宋の市肆記に「靚裝迎レ門、爭レ研賣レ笑」とあり』藝妓・娼妓などの類。うかれめ。賣春婦。醜業婦。

ばいせう-ろ 焙燒爐【名】『英 Roasting-furnace』製錬に供せらるべき諸種の硫化鑛物、及び鈹(ヒ)の焙燒を行ふに用ふる爐の總稱。直立爐・反射爐など、種種あり。

はい-せき 敗績【名】『從來の功績を敗り失ふ義』いくさに負くること。敗北。

はい-せき 排斥【名】おしのくること。しりぞくること。

はい-せき 俳席【名】多人數集りて、俳諧を行ふ座席。

ばい-せき 陪席【名】『陪は重なる義』㊀目上の者と共に、同席すること。㊁次條の略。

ばいせき-はんじ 陪席判事【名】裁判長と共に合議裁判所を構成して、その審理に列席する判事。地方裁判所にては二人、控訴院にては四人、大審院にては六人を定員とし、裁判長にその旨を告ぐる時は、當事者・證人・鑑定人又は本人に問を發することを得。官等最も高き者は、裁判長が判決原本の署名・捺印に差支ある時は、その理由を附記すべく、又、裁判長が口頭辯論調書の署名・捺印に差支ある時は、代って、署名・捺印すべきものとす。

はい-せつ 稗說【名】はいくわん(稗官)㊁に同じ。

はい-せつ 排泄【名】㊀內部より外部に漏れ出でしむること。㊁〔動〕『英 Excretion』動物が、營養作用の終りたる老廢物を、體外に漏れ出でしむる生理作用。

はい-せつ 排雪【名】積雪を排除すること。ゆきかき。

はい-せつ 敗折【名】やぶれくじくること。まけて挫折すること。

はい-ぜつ 廢絕【名】すたれたゆること。廢滅。

はいぜつ-か 廢絕家【名】廢家と絕家と。

はいせつ-かう 排泄腔【名】〔動〕『英 Cloaca』動物の腸の一部。肛門に接する所にある、膨大せる腔所。

はいせつ-き 排泄器【名】〔動〕『英 Excretory organ』動物體にて、排泄を營む器官。腔腸動物以上に進めば、必ずこれを有す。例へば腎臟の類。排泄器官。

はいせつ-き 排雪器【名】ゆきかき(雪搔)に同じ。

はいせつ-きくわん 排泄器官【名】〔動〕はいせつき(排泄器)に同じ。

はいぜつ-こ 廢絕戶【名】廢戶と絕戶と。

はいせつ-さよう 排泄作用【名】動物體が排泄を營む作用。

はいせつ-しや 排雪車【名】機關車に、排雪の裝置ある汽車。らっせる。

はいせつ-ぶつ 排泄物【名】排泄したる物質。

はい-せん 廢船【名】老廢せる船。役に立たぬ船。

はい-せん 廢川【名】公用を廢したる河川。河川の用をなさざる河川。

はい-せん 俳仙【名】極めて俳諧にすぐれたる人。俳諧水滸傳「誠に當世の俳仙、恐るべし、恐るべし」

はい-せん 杯洗・盃洗【名】盃を洗ひきよむるための水を盛る器。さかづきあらひ。

はい-せん 杯饌・盃饌【名】酒と肴と。酒肴。著聞「盃饌を設けられて、さいさいに勸められけり」

はい-せん 肺尖【名】〔醫〕『獨 Lungenspitze』肺臟の、左右二箇に分れたる、その各の尖頂。形、鈍圓にして、第一肋骨緣を超え、下頸部の前側に突出す。

はい-せん 擺線【名】〔數〕『英 Cycloid』平面上の一直線に沿ひて、圓の轉動する時、その圓周上の一定點がゑがく曲線。又、同一平面上にありて內接する二圓の一が、他の圓周に沿ひて轉動する時、その圓周上の一定點がゑがく曲線を、內擺線といひ、又、同一平面上における二圓周の一が、他の圓周の外周に沿ひて轉動する時、その圓周上の一定點がゑがく曲線を、外擺線といひ、又その轉動する圓を轉動圓、他の圓を導圓といふ。さいくろいど。

はい-せん 配線【名】電線を配置して、各方面に接續せしむること。

はい-せん 配船【名】船舶を、各所に配置すること。「某某航路に配船す」

はい-ぜん 配膳【名】膳部を、一座の人人にくばること、又その人。

ばい-せん 賣扇【名】扇を賣ること、又その人。まいせん(賣扇)參照。

はい-ぜん 陪膳【名】禁中にて、儀式の時などに、供御(クゴ)を奉る時、又、武家にて、膳部の給仕を勸むる人。禁中にては、主として典侍又は膳司(カシハデノツカサ)・水司(モヒトリノツカサ)の采女(ウネメ)などの、毛髮の供御に觸れぬやう髮上(カミアゲ)して奉仕し、四位・五位の殿上人又は公卿も奉仕したり。源氏「はいぜんにさぶらふかぎりは、心ぐるしき御氣色を見たてつまり嘆く」建武年中行事「陪膳の典侍(スケ)、藥のかみ、當色(タウジキ)を著す」

はい-ぜん 沛然【貌】㊀盛大なるさま。「沛然たる德敎、四海に溢る」㊁雨の、一時に盛んに降るさま。「急雨、沛然として至る」

ばい-せん 賣船【名】しやうせん(商船)に同じ。

ばい-せん 媒染【名】媒染劑を、染物に施すこと、又、染物に施したる媒染劑。

はいせん-かたる 肺尖加答兒【名】〔醫〕『獨 Lungenspitzenkatarrh』肺結核の初期にて、病竈のなほ肺尖に局限せるるもの。はいけっかく(肺結核)參照。

はいせん-かん 配線函【名】『英 Distributing box』テエプを纏捲せるケエブルを配線するに當り、水氣の侵入と外部より入り來る强電流及び高電壓とに對して、これを防護する必要上、配電柱に取附けて、そのケエブルを通ぜしむる函。

ばいせん-ざい 媒染劑【名】〔化〕染料のみにては、纖維を直接に染むること能はざる場合に、兩者の引力の媒介をなして、染料を纖維に固著せしむる物質。單寧(タンニン)酸・明礬・綠礬(ロウハ)・鹽化錫・硫酸銅・蛋白質・油など、種類多く、纖維の種類(麻・絹・木綿・毛など)と染料の種類とに應じて、適當に用ふるを要す。助劑。

ばいせん-しきそ 媒染色素【名】〔化〕直接に纖維に染著しがたく、媒染劑の使用を要する色素。例へば、アリザリンは、直接に纖維を染むれども、色を呈せず、媒染劑として、明礬を使用する時、始めて、これらと化合して、不溶性の赤色沈澱を生ずるにより、染色するを得る類。媒染染料。

はいせん-しきち 廢川敷地【名】公用を

廢したる河川の敷地。

はいせん-しせう 珮川詩鈔【名】〔書〕草場珮川の十八歳より五十三歳までの詩、約六百首を集めたるもの。四卷。菅茶山等諸家の評言あり。

ばいせん-せんれう 媒染染料【名】〔化〕ばいせんしきそ(媒染色素)に同じ。

はいせん-ちゆう 配線柱【名】『英 Distributing pole』ケエブルにて局より出でたる電線を、或場所にて開きて、その各心線を架空裸線に接續せしめ、各方面に分配するために使用する電柱。線條の數多きがため、普通の電柱よりも强大なる木柱又は鐵柱を用ふ。分線柱。

はいせん-ばん 配線盤【名】『英 Distributing board』電話線の電話加入者より來るものを、電話交換局に引込むに當り、交換機に導く前に、まづこれを取附くる裝置。交換機の種類によりて、設計は一樣ならざれども、何れも外部より來る有害電流に對する保安の裝置と、電話線路に生じたる故障を容易・確實に試驗し得る裝置と、加入者に移動に布線の變更を容易ならしむる交叉裝置とを備ふ。

はいぜん-ばん 陪膳番【名】陪膳の番に當ること。陪膳の番上。日中行事「頭(トウ)もしは配膳番人、殿上にさぶらへば」

ばいせん-ほ 賣錢鋪【名】りやうがへや(兩換屋)に同じ。

はい-そ 俳祖【名】俳道の流祖。普通は、松尾芭蕉をいふ。續膝栗毛「俳祖芭蕉翁の碑あり」

はい-そ 敗訴【名】訴訟に負くること。民事訴訟の當事者が、自己に不利益なる判決を與へらるること。(勝訴に對して)

はい-そう 拜送・拝送【名】㊀恭しく見送ること。㊁見送ることの謙稱。おみおくり。おみたて。

はい-そう 拜贈・拝贈【名】㊀恭しく贈呈すること。㊁贈呈することの謙稱。

はい-そう 敗走【名】戰に負けて逃げ走ること。敗北。

はいそ-しや 敗訴者【名】敗訴となりたる人。(勝訴者に對して)

はい-そつ 敗卒【名】戰に負けたる兵卒。敗兵。

ばいそん (英 Bison)【名】〔動〕やぎう(野牛)㊁に同じ。

は-いた 齒痛【名】はいたみ(齒痛)に同じ。

は-いた【名】〔植〕『はないたや(花板谷)の略か』もみぢ(紅葉)㊂に同じ。

はいた【名】『ほいたう(焙堂)の訛なるべし』こじき(乞食)を云ふ。〔伊勢國の方言〕

は-いた 羽板【名】㊀〔建〕空氣を流通せしむるために、板を斜に幾枚も取附けたるもの。取附けたるまま動かぬものと、開閉自在なるものとあり。がらりいた。よろひいた。㊁和船の舵の一部。かぢわきいた。

はい-だ 杯蛇・盃蛇【名】「杯中の蛇影」に同じ。

杯蛇・角影(カクエイ)【句】前條に同じ。

ばいた【名】たきぎ(薪)を云ふ。〔羽前國米澤の方言〕

ばいた 賣女【名】『ばいたごを見よ』ばいぢよ(賣女)に同じ。〔俚語〕俳諧破邪顯正「久かたの天神囲い初賣に。……、何とて、天滿神を、淺ましき賣女(バイタ)には言ひ下しけるぞや」

はい-たい 敗退【名】やぶれしりぞくこと。退敗(タイハイ)。

はい-たい 廢退【名】㊀『廢も退くる義。はいち(廢置)㊁參照』廢し退かしむること。「罪あれば、これを廢退せしむ」㊁すたれおとろふること。衰退。退廢。盛衰記「勸農の廢退を憂へて」

はい-たい 廢頽【名】すたれくづること。頽廢。

はい-たい 佩帶【名】身におぶることと、腰に著くることと。帶佩。盛衰記「齡二十餘と見えたる女の、……佩帶の袖に經持ちて」

はい-たい 拜戴・拝戴【名】㊀恭しく賜物を受くること。㊁賜物を戴くことの謙稱。頂戴。拜受。

はい-たい 胚胎【名】㊀みごもること。はらむこと。懷胎。㊁ねざすこと。きざすこと。「禍、既に、この時に胚胎す」

はい-だい 牌題【名】看板の文字。

はい-だい 廢替【名】すたれかはること。

やめかふること。衰廢。

はい-だい 廢帝【名】はいてい(廢帝)に同じ。〔古語〕

ばい-たい 莓苔【名】こけ。まいたい。

ばい-たい 媒體【名】〔理〕媒質の物體。

はい-たいし 廢太子【名】皇太子を廢すること、又、廢せられたる皇太子。

はいだい-てんわう 廢帝天皇【名】〔人〕あはぢのはいてい(淡路廢帝)に同じ。謠曲(當麻)「人皇四十七代のみかど、廢帝天皇の御宇かとよ」

はい-たう 佩刀【名】刀を佩ぶること、又その刀。帶刀。

はい-たう 廢刀【名】帶刀を止(ヤ)むること。

はい-たう 配當【名】㊀くばり當つること、又その額。わりあて。配分。㊁〔法〕りえきはいたう(利益配當)の略。㊂はいたうきん(配當金)の略。

はい-だう 廢道【名】荒廢したる道路。

はい-だう 俳道【名】俳諧㊂のみち。織留「俳道の辨(ワキマヘ)ありて」

はい-だう 牌堂【名】ゐはいだう(位牌堂)の略。

はい-だう 拜堂・拝堂【名】〔佛〕僧侶が、大寺の住持となりて、その寺院に入る時に行ふ禮佛の式。江次第「東大寺拜堂」盛衰記「一生不犯(イツシヤウフボン)の座主(ザス)拜堂の日」

はいたう-あん 配當案【名】〔法〕破產管財人が、破產財團の配當を行ふために、その配當に足るべき財團の生ずるごとに調製して、破產主任官の認可と署名とを受くる書面。裁判所に備へおきて、公衆の展閲に供す。

はいたう-おち 配當落【名】〔商〕賣買する株式に、最近の配當金を受取るべき權利の附帶せざること。(配當附に對して)

はいたう-がく 配當額【名】各人に配當するたか。わりあてだか。

はいたう-かにふ 配當加入【名】〔法〕債務者の、財產配當に加入すること。

はいたう-き 配當期【名】〔商〕利益配當をなすべき時期。會社は、年一回もしくは二回の配當期を定むれども、これを定めたればとて、利益生ぜざる時は、配當金あるを得ざるなり。

はいたう-きん 配當金【名】各人に配當する金。

はいたう-さいばんしよ 配當裁判所【名】〔法〕配當手續を管轄する裁判所。法律に別段の規定なき以上は、執行手續を爲すべき地、又はこれを爲したる地を管轄する區裁判所、これに當り、或は債務者の普通裁判籍を有する地の區裁判所、又は債務者に對する訴を管轄する區裁判所たることあり、又、不動產所在地の區裁判所たることあり。

はいたう-つき 配當附【名】〔商〕賣買する株式に、最近の配當金を受取るべき權利の附帶すること。(配當落に對して)

はいたう-てつづき 配當手續【名】〔法〕㊀强制執行によりて收得したる金錢の總額が、多數債權者に對する債務を完濟するに足らず、債權者間の分配協議もまた調はざるが爲に、その金額を供託したる時、これを、各債權者に平等に配當する手續。㊁破產財團より、財團のために生じたる訴訟費用・管理費用などの諸種の費用、又、破產管財人が、財團のために負ひたる義務より生ずる債權、その他、優先權ある債權者に債務を支拂ひたる殘額を、各債權者に平等に配當する手續。

はいたう-へいきん-じゆんびきん 配當平均準備金【名】〔商〕銀行・會社などが、將來に於て利益少なき時を慮り、毎配當期に於ける利益配當の率を平等ならしむるために、利益金の一部を控除して積み立つる準備金。配當平均準備積立金。

はいたう-へいきん-じゆんびつみたてきん 配當平均準備積立金【名】〔商〕前條に同じ。

はいたう-へう 配當表【名】〔法〕執行裁判所が、各債權者が計算書を呈出すべき七日の期間滿了の後に調製し、各債權者及び債務者の認諾を經たる上、これに從ひて配當を實施する表。賣得金及び差押金錢の數額、債權の種類及び數額、債權者の氏名、配當の目的たる金額、配當割合等を記載す。

はいたう-まい 配當米【名】德川幕府にて、その小吏に給せし雜俸の一。

はいたう-れい 廢刀令【名】明治九年三月、太政官より發布して、從來の士分以上の者の帶刀を禁止したる法令。

ばいた-えふ 貝多葉【名】『舊唐書の墮婆登國傳に「亦有二文字一、書二之於貝多葉一」とあり』**ばいたらえふ**（貝多羅葉）の略。

はい-たか 鷂・鸇【名】❶〔動〕『**はしたか**（鷂）の音便』猛禽類に屬する鳥。普通の鷹より著しく小くして、翼の長さ六寸乃至八寸、羽は全體灰色にして、腹部は白色、背部黑く、尾に淡黑色の横條あり。雄は兄鷂（コノリ）といひ、脚甚だ長し。雌・雄共に鷹狩に用ひて、よく小鳥を捕へ、殊に雌は鴨・鷺などをも捕ふといふ。我國、木曾及び北國の山中に棲む。はしたか。めたか。❷能無者（ノウナシモノ）が、他の能ある者を、惡しざまにいふこと、又その人。ばふんつかみ。新永代藏「たまかに勤めて立身すべし。これを兎や角と沙汰する時は、はい鷹といふものなり」

はいたか-がしら 鷂頭【名】德川幕府の職制の一。鷹狩に使用する鷂の事を掌りしもの。

はい-たく 廢宅【名】荒廢して、住む人もなき家宅。あばらや。廢舍。

はい-たく 沛澤【名】草木の茂りて生ず「る土地。

はい-たく 配謫【名】遠方の地へ追放すること。流謫。配流（ハイル）。

はいた-ご【名】『**ばいた**を見よ』**ばいぢよ**（賣女）を云ふ。〔薩摩國鹿兒島の方言〕

はい-たつ 配達【名】物をくばりとどくること、又その人。

はい-だつ 擺脫【名】『擺は押開く義』除き去ること。「舊習を擺脫す」

はいたつ-いうびん 配達郵便【名】配達する郵便物。

はいたつ-いうびんきよくしよ 配達郵便局所【名】その郵便物を配達したる郵便局所。

はいたつ-いうびんくわんしよ 配達郵便官署【名】その郵便物を配達したる郵便官署。

はいたつ-さき 配達先【名】配達する先「方。とどけさき。

はいたつさき-とうき 配達先登記【名】電報の配達場所を特定せんとする受信人の請により、著信局所が、その電報の配達先を登記すること。

はいたつさきとうき-れう 配達先登記料【名】電報の發信人が、配達先登記を請求する時に、發信局所に納むる料金。

はいたつ-しようめい 配達證明【名】❶配達郵便官署が、郵便物を確かに配達したる旨の證明書を、差出人に交付すること。❷次條の略。

はいたつしようめい-いうびん 配達證明郵便【名】特殊取扱郵便の一。配達郵便官署が、差出人に對して、配達證明の手續をなすもの。次條參照。

はいたつしようめいいうびん-ぶつ 配達證明郵便物【名】配達證明郵便として取扱ふ郵便物。書留郵便物・價格表記の通常郵便物に限り、その表面の見やすき場所へ「配達證明」の四字の標記と、料金三錢の納付とを要す。又、該郵便物差出の際にあらずとも、差出後一箇年以內なれば、該郵便物の受領證を提出し、料金六錢を納付して、配達證明を引受郵便局に請求するを得。

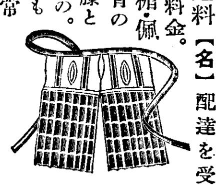
はいたつ-どころ 配達所【名】配達の請「負をなす所。

はいたつ-にん 配達人【名】配達する人。

はいたつ-ふ 配達夫【名】配達する人夫。

はいたつ-れう 配達料【名】配達を受くる報酬として拂ふ料金。

はい-だて 佩楯・脛楯・佩立・膝甲【名】甲冑の下に著けて、股と膝とを被ふに用ひしもの。その制、種種あり。もと馬上に用ふるを常としたれど、後世は、歩行にも用ひたり。ひざよろひ。太平記「大立擧（ホオタテアゲ）の臑當（スネアテ）を、脛楯の下まで引籠めて」



（はいだて）

はい-たふ 拜答・拝答【名】❶恭しく答ふること。❷答ふることの謙稱。

は-いたみ 齒痛【名】齒の痛むこと。

ばいたみん（英 Vitamin）【名】〔醫〕びたみんに同じ。

はい-たん 廢炭【名】**こおくす**（骸炭）に同「じ。

はい-だん 廢彈【名】役に立たぬやうになりたる彈丸。

はい-だん 俳壇【名】俳人のなかま。

はい-だん 俳談【名】❶おどけばなし。冗談。❷俳諧㊂に關する談話。俳諧水滸傳「淸茶を煎じ、乾菓を調へて、俳談數刻に及びぬ」

ばい-たん 煤炭【名】**せきたん**（石炭）に同「じ。

ばい-たん 賣炭【名】炭を賣ること。

賣炭の翁（オキナ）【句】次條に同じ。増鏡「賣炭の翁はあはれなり、おのが衣は薄けれど、といふ今樣をうたはせたまふ」義經記「賣炭の翁も通はねば、炭燒とも覺えず」

ばいたん-をう 賣炭翁【名】❶炭を賣る老翁。ばいたんのおきな。❷〔文〕白氏文集の卷四に見えたる詩。炭を賣る翁の、自身は薄き衣を纏ひて働きながら、賣りたる炭は、他人の保溫の料となりて、その身の寒さを防ぐには足らずとの意を、諷刺的に述べたるもの。

ばいたら 貝多羅（梵 Pattra）【名】『葉の義』❶次條に同じ。❷〔植〕**たらじゆ**（多羅樹）に同じ。

ばいたら-えふ 貝多羅葉【名】『貝多羅は葉の義なれば、梵漢雙擧の語なり』多羅樹（タラジユ）の葉。印度にて、古、紙の無かりし時代に、文字を書くに用ひしもの。古梵書は、概ねこれに書きたり。貝多羅。貝多葉。貝葉。多羅葉。

ばいた-をんな 賣女女【名】**ばいた**（賣女）に同じ。〔俚語〕

はい-ち 廢地【名】❶使用せずにある土地。荒廢せる土地。「屋邊の廢地」❷無用の地位。「身、廢地に居る」

はい-ち 廢置【名】❶廢することと、置くことと。廢止と設置と。「府縣の廢置・分合」❷『周禮の太宰篇に「以二八則一治二都鄙一、……三曰廢置、以馭二其吏一」とありて、註に「廢猶レ退也、退二不能者一、擧レ賢而置レ之」と見ゆ』廢退することと、登用することと。黜陟。❸『漢書の食貨志に「富商轉レ轂百數、廢置居レ邑」とありて、顏師古の註に「或有レ所二廢置一、或有レ所二居蓄一、居二邑中一、以乘レ時射レ利」と見ゆ』廢物として、出さずに置くこと。

はい-ち 配置【名】くばりおくこと。てく「ばり。

はい-ち 排置【名】ならべおくこと。排列。

はい-ち 背馳【名】結果が、想定の反對となること。「事、常に目的と背馳す」

はい-ぢく 胚軸【名】〔植〕『英 Hypocotyle』胚の一部。幼根の上部。子葉の下部を包み、種子の發芽したる後に、莖となる。

はい-ぢく 敗衄・敗衂【名】『衄はくじくる義』戰にやぶるること。敗績。

はいぢすとま-びやう 肺ヂストマ病【名】〔醫〕**はいざうぢすとま**（肺臟ヂストマ）を見よ。

はいち-せい 背地性【名】〔植〕『英 Negative geotropism』植物の生長する時、莖の先端などの如く、常に地球の重心と反對なる方向、即ち上方に向ひて生長する性質。反地性。（向地性に對して）

はい-ぢん 拜塵・拝塵【名】『晉書の石崇傳に「石崇與二潘岳一諂二事賈謐一、康成君每レ出崇降レ車、路左望レ塵而拜」とあるに本づく』權門・勢家に媚ぶること。後塵（コウヂン）を拜すること。

はい-ぢん 配陣【名】陣の配置。ぢんだて。

はい-ちやう 拜聽・拝聽【名】❶恭しく聽くこと。謹聽。❷聽くことの謙稱。謹聽。

はい-ちやう 廢廳【名】或官廳を廢止すること、又、廢止したる官廳。

はい-ちやう 蠅帳【名】**はへちやう**（蠅帳）の「訛。

はいちやう-きん 腓腸筋【名】〔醫〕『獨 Wadenmuskel』下腿の後側の最表層にある筋。その膨隆部は、俗に「ふくらはぎ」といひ、又その痙攣は、俗に「こむらがへり」といふ。

はい-ちやく 廢嫡【名】嫡子たる身分を廢止すること。法定の推定相續人を廢除すること。そうりやうのぞき。はいぢよ(廢除)㊁參照。

ばい-ちやん【名】ちち(乳)を云ふ。〔幼兒の語〕

はい-ちゆう 杯中・盃中【名】さかづきの「なか。

杯中の蛇影(ダエイ)【句】『晉書の樂廣傳に「樂廣字彥輔、遷二河南尹一、常有二親客一、久闊不二復來一、廣問二其故一。答曰、前在レ坐蒙レ賜レ酒、方レ欲レ飮見二盃中有一レ蛇、意甚惡レ之、既飮而疾。于レ時河南廳事、壁上有二角弓一、漆畫作レ蛇。廣意、盃中蛇卽角弓也。後置二酒於前處一、謂レ客曰、盃中後有レ所レ見不。答曰所レ見如レ初。廣卽告二其所以一。客豁然意解、沈痾頓癒」、又、風俗通の辨神篇に「予之祖父郴爲二汲令一、以二夏至日一見二主簿杜宣一、賜レ酒。時北壁上有レ懸二赤弩一、照二於杯一、形如レ蛇。宣畏二惡之一。其日便胸腹痛切、攻治萬端不レ癒。後郴至二宣家一、問二其變故一、云入二腹中一。郴還二廳事一、顧見二懸弩一、載宣於二故處一設レ酒、杯中復有レ蛇、巴謂レ宣、此壁上弩影耳、非レ有二他怪一。宣遂解、由レ是瘳平」とあり』「疑心(ギシン)暗鬼を生ず」に同じ。

杯中の物【句】『陶潛の責子と題する詩に「天運苟如レ此、且進二杯中物一」とあり』さけ(酒)に同じ。

はいちゆう-りつ 排中律【名】〔哲〕『英Principle of excluded middle』論理上、思惟の三大原則の一。同一の關係の下にありては、同一事物に就きて、肯定するか否定するかの中間に在ることを許さず、必ずその何れかならざるべからざること。不容間法。不容間位律。不容中律。不容中の原則。

はい-ちゆつ 廢黜【名】官職をやめて退「くること。

はい-ぢよ 拜除・拝除【名】『ぢよす(除す)㊁を見よ』はいくわん(拜官)に同じ。

はい-ぢよ 廢除【名】㊀やめのぞくこと。㊁〔法〕被相續人が、裁判所に訴へて、法定の推定家督相續人又は遺留分を有する推定遺産相續人を、その地位より排斥すること。法定相續人の場合に對しては、廢嫡といふ語、慣用せらる。

はい-ぢよ 排除【名】おしのけのぞくこ「と。

ばい-ぢよ 賣女【名】賣色の女。淫賣婦。娼妓。賣婦。賣人(バイニン)。

はい-ちよう 敗徵【名】敗軍のしるし。敗「兆。

はい-つう 背痛【名】背の痛むこと。盛衰記「宿罪こそ恐しけれ。されば、一代の釋迦は、頭痛・背痛を遁れたまはず、五百の釋子は、瑠璃王の害を免れざりけり」

ばい-つく 貝つく・螺つく・海蠃つく・黃螺つく・海螺つく【名】ばいごま(貝獨樂)に同じ。西鶴大鑑「秋の末より、螺つくはやらし」

はいつけ-だるき 配附棰【名】〔建〕普通の棰の、棟より軒まで達するとは異なりて、隅木(スミギ)の側面に斜に取附くる棰。

はい-てい 廢帝【名】他より追られて、帝位を退かせたまひたる天皇。廢位の天皇。はいだい。

はい-てい 拜呈・拝呈【名】㊀恭しく物を贈ること。進上。進呈。㊁物を贈ることの謙稱。進上。進呈。㊂はいけい(拜啓)に同じ。

はい-てい 排詆【名】ていはい(詆排)に同じ。

はいてい-しや 廢帝社【名】淡路國三原郡十一ヶ所村にありて、淳仁天皇を祀りし小祠。山陵の古址なりと傳ふ。明治六年、神靈を京都に奉遷し、白峯(シラミネ)宮に合祀す。

はい-てう 廢朝【名】『晉書に「咸寧二年正月以二疾疫一廢レ朝」とあり』天子の、親ら朝に臨みて、政を視ることを、一時廢したまふこと。大寶令の制にては、天皇の二等以上の近親及び右大臣以上の喪には三日、三等以上の親、百官・三位以上の喪には一日と定められ、天變・火事・薨奏の場合にも、三日乃至五日間ほど、これを行はれ、その間、禁中にては、物音を禁じ、清涼殿の御簾を垂れ、諸司は政事を止めざれども、刑獄の事は行はず。輟朝。はいむ(廢務)㊁參照。續世繼「廢朝とて、清涼殿の御簾(ミス)おろしこめられ」

はい-てう 敗兆【名】はいちよう(敗徵)に同「じ。

ばい-てう 媒鳥【名】をとり(囮)に同じ。

はい-てつ 廢撤【名】てっぱい(撤廢)に同じ。

ばい-てふ 貝牒【名】貝多羅の牒册。

はい-てん 廢典【名】すたれたる儀式。

はい-でん 廢田【名】荒廢せる田地。

はい-でん 拜殿・拝殿【名】神社に附屬し、參拜者の拜禮を行ふためにせる建物。普通、本殿の前に在れども、伊勢皇太神宮・熱田神宮に於けるが如く、本殿のみありて、これを缺けるもあり、又、これを設けたる神社にても、出雲大社に於けるが如く、本殿とは全く孤立せるもの、八棟(ヤツムネ)造・權現造に於けるが如く、屋根は本殿と共通せるもの、或は一の社殿を本殿と拜殿とに區劃せるものなどあり。

はい-でん 配電【名】發電所より來る電力を、諸方面に配給すること。

ばい-てん 梅天【名】梅雨期の空。梅雨の「天候。

ばい-てん 賣店【名】㊀物を賣るみせ。㊁博覽會・園遊會・慈善會などにて、その會場の附近に設けて、場內の出品と同種類なる物品を賣り捌く店。

ばい-てん 煤田【名】『ばいたん(煤炭)を見よ』たんでん(炭田)に同じ。

ばい-でん 買田【名】㊀田地を買ふこと。㊁王朝時代に、年分の價値を定めて、毎年一箇年を限り、公田又は私田を買得して佃(タツクリ)しこと、又その田地。

買田・問舍(モンシヤ)【句】『三國志の魏志の呂布張邈臧洪傳に「劉備謂二許汜一曰、君有二國士之名一、今天下大亂、帝王失レ所、望、君憂レ國忘レ家、有二救世之意一、而君求レ田問レ舍、言無レ可レ采」、又、南史の顏延之傳に「延之啓買二人田一、不レ肯レ還レ直。尙赤松奏曰、求レ田問レ舍、前賢所レ鄙、延之惟利是親、無レ所二顧忌一」とあり』國家の大事を餘所にし、田地・屋舍を買ひ求めて、一身を安全ならしめんことにのみ、心を用ふること。白石手簡「令郞未だ御學問最中の御事に候へば、せめて書籍をば御貽し候御はからひの事、あながちに俗輩が買田問舍等の事に比すべからず候」

ばい-てん 賣田【名】㊀田地を賣ること。㊁王朝時代に、年分の價値を定めて、毎年一箇年を期限として、公田又は私田を人に貸して佃(タツク)らしめしこと、又その田地。

はい-てんこう 敗天公【名】『天の地を覆へる樣は、笠の如くなるより、天公といふ』やぶれたる笠。

ばいでん-しや 買田者【名】王朝時代に、買田㊁をせし人。今の小作人に相當す。

ばいでん-しや 賣田者【名】王朝時代に、賣田㊁をせし人。今の地主に相當す。

はいでん-しよ 配電所【名】〔理〕『英Distributing station』配電盤又は發電機等を設置し、發電所より電流を受けて、更にこれを一定の區域內に配給する裝置ある場所。へんでんしよ(變電所)參照。

はいでん-ばん 配電盤【名】〔理〕『英Switchboard』電流を或は通じ或は斷ち、又は電壓を調節する等、電流の取扱に必要なる裝置、卽ち通常、電流の通過を示す電燈・電流計・開閉器電壓を加減する裝置等を集めて取附け、發電所・配電所又は電氣使用者の屋內等に置く盤。大理石にて造りたるもの多けれど、時としては、鐵にて造り、低壓には、木材を用ひたるもあり。

はい-と 隼人【名】はやと(隼人)の轉。〔古語〕

ばい-ど 倍度【名】〔數〕ばいりやう(倍量)「に同じ。

はい-とく 敗德・悖德【名】德義にかなはぬこと、又その行爲。

はい-どく 拜讀・拝讀【名】㊀恭しく讀むこと。㊁讀むことの謙稱。

はい-どく 背讀【名】はいしよう(背誦)に同「じ。

ばい-とく 賣得【名】物を賣りて、その代金を得ること。うりあげ。

ばい-とく 買得【名】物を買ひ取ること。

ばい-どく 黴毒・梅毒【名】〔醫〕多くは性交によりて起り、從ひて、多く陰部より病毒の侵入する、一種の傳染病。又、接吻に

より、或は病毒の附著せる器具などを介して、口・乳房・指頭より感染することあり。初は局所に硬結又は疳瘡を生ずるのみなれども、漸次全身諸所に發疹し、且つ毛髪脱け、終には皮膚・筋骨・内臟・神經等をも冒すに至り、子孫にも遺傳す。コロンブス(Columbus)の亞米利加發見の際、その船員、これに感染して、歐洲に歸りて、以來、全歐に蔓延し、バスコダガマ(Vasco da Gama)の印度來航と共に東洋に傳播し、終に支那及び我國にも波及せるものといふ。かさ。たうがさ。瘡毒。楊梅瘡。

ばいどく-きん 賣得金【名】物を賣りて得たる代金。うりあげきん。

はいどく-さん 排毒散【名】げざくやく(解毒藥)に同じ。源氏冷泉節「排毒散の風藥、これぞ汗かき・乘物舁」

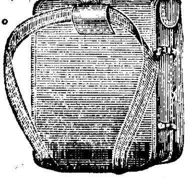
ばいどく-しゆ 黴毒腫・梅毒腫【名】〔醫〕梅毒の第三期に屬する腫瘍。通常、感染後二三年にして發す。彈力ある硬度を呈する結節性腫瘍にして、内容のアラビヤゴム液に似たるより護謨腫とも稱す。全身侵さざる所なく、其部位によりて種種の障害を惹き起す。

はいと-の-つかさ 隼人司【名】はやとのつかさ(隼人司)の轉。

はいと-ん 隼人【名】はいと(隼人)の音便。〔古語〕紀「隼人、ハイトン」

ばいとん-しせう 梅墩詩鈔【名】〔書〕廣瀬旭莊の詩集。十二卷。初・二・三・四の四編は、各、上・中・下の三卷より成る。

はい-なう 背嚢【名】『獨 Rücksack』毛皮又はヅックにて造り、軍人・學生・登山者等が背上に負ふ、方形の嚢。兵士のは、下著類・日用品・彈藥などを入る。らんどせる。りゆっくざっく。



(はいなう)

はい-なう 肺嚢【名】〔動〕『英 Lung sac 又 Pulmonary sac』蜘蛛類に屬する動物の大部分に特有なる、一種の呼吸器。皮膜の襞積を充せる嚢狀物にして、襞積は空氣に觸るる面積を大ならしむる自然の必要上、扁平にして、數多並行に列り、恰も書籍の紙を重ねたるがごとき狀態をなし、その間隙に空氣侵入して、呼吸作用をなす。數は一定せざれども、位置は、何れも腹面に在り、一對又は二對の孔によりて、體外に開口す。

はい-なう 胚嚢【名】『英 Embryosac』㊀〔動〕卵の發生する際、二重の嚢狀をなせるもの。㊁〔植〕はいしゆ(胚珠)を見よ。

ぱいなっぷる 鳳梨【名】〔植〕ぱいんあっぷるに同じ。

はい-なふ 拜納・拝納【名】㊀恭しく受けをさむること。㊁受けをさむることの謙稱。㊂恭しく差し出し納むること。㊃差出し納むることの謙稱。

はい-にく 敗肉【名】腐敗したる肉。腐肉。

はい-にち 排日【名】日本の勢力又は物貨などを排斥すること。

はいにち-せい 背日性【名】〔植〕はいじつせい(背日性)に同じ。

はい-にん 拜任・拝任【名】はいくわん(拜官)に同じ。

はい-にん 背任【名】任務にそむくこと。

ばい-にん 賣人【名】㊀商賣人。商人。うりにん。五人女「八百屋(ヤホヤ)八兵衞とて、賣人、昔は、俗姓(ゾクシヤウ)賤しからず」諸道聽耳世間猿「小西攝津守は、賣人の家より起りて、武威を朝鮮國まで輝かせし英雄」㊁ばいぢよ(賣女)に同じ。

はいにん-ざい 背任罪【名】〔法〕『獨 Untreue』他人のために、その事務を處理する者が、自己若しくは第三者の利益のために、又は本人に損害を加ふる目的にて、背任の行爲をなし、本人に財産上の損害を被らしむるによりて成立する犯罪。

はい-にゆう 胚乳【名】〔植〕『英 Endosperm 又 Albumen』胚の周圍に存し、胚の發育して、幼植物となる際の營養物質を貯藏する組織。裸子植物にありては、受精前より形成すれども、被子植物にありては受精後生成す。營養物質は、澱粉・蛋白質・脂肪等、最も普通にして、稻・麥等にありては、粉狀、小蘖(メギ)・菫(スミレ)等にありては肉臠狀、芥子(ケシ)・カカオ等にありては脂肪狀、葵(アフヒ)の類にては糊狀、珈琲(コオヒイ)・椰子(ヤシ)等にありては、堅くして角狀をなす等、外觀は樣樣なり。

はい-ねん 拜年・拝年【名】ねんが(年賀)に同じ。

はい-のう 排膿【名】病の治癒を促進するために、濃汁を、體外へ排除すること。

ばい-の-かみ 馬醫正【名】陸軍省馬醫部の長官。少佐相當官。設置の翌年、即ち明治七年、馬醫監と改稱す。

はい-の-ざ 拜座・拝座【名】㊀こもち(子持)㊃に同じ。㊁『はいまはし(拜廻)を見よ』和船の檣の一部。

はい-の-ざう 肺臟【名】はいざう(肺臟)に同じ。傾城反魂香「鳩尾(ミヅオチ)さきを抉って、……、肺の臟に押し込んだり」

ばい-の-すけ 馬醫副【名】陸軍省馬醫部の職員の一。中尉相當官。馬醫の次に位し、一等と二等とあり、馬匹の醫療の事を掌りしもの。明治十六年、二等馬醫と改稱す。

はい-の-や 拜屋・拝屋【名】はいでん(拜殿)に同じ。

はい-ば 廢馬【名】不用になりたる軍馬。

ばい-ば 媒婆【名】なかうどをなす老婆。とりもちばば。

はい-はい【名】〔動〕『次條㊂の轉』うま(馬)㊀を云ふ。〔幼兒の語〕

はい-はい 廢罷【名】すててやむること。又、すたれやむこと。

はい-はい【感】㊀『はいを重ねていへる語』丁寧なる應答の聲。唯唯。㊁前進の妨害となる時に發する警告の掛聲。二代男「先手は、はいはいと聲懸けれども、天下の町人の氣ままは、足早にも除けず」㊂馬の進行を促す時の掛聲。

ばい-ばい 賣買【名】㊀賣ることと、買ふこと。うりかひ。あきなひ。商賣。㊁〔法〕雙務契約の一、又、實定契約の一。當事者の一方が、或財産權を相手方に移轉することを約し、相手方が、これに對してその代金を支拂ふことを約するによりて成立すること。代金支拂の時期によりて、現金賣買・信用賣買・前金賣買に分ち、權利の移轉、又は物の引渡の時期によりて、即時賣買・定期賣買・延(ノベ)賣買に、方法によりて、自由賣買と競爭賣買に、意思によりて、任意賣買と強制賣買とに分ち、又その他の標準によりて、見本賣買・現物賣買・試驗賣買・試味賣買等に分つ。

ばい-ばい 買賣【名】『戰國策の趙國の條に「良賈不レ與レ人爭二買賣之賈一、而謹司レ時」とあり』前條に同じ。

ばいばい-かかく 賣買價格【名】實際に賣買する價格。實價。(額面價格に對して)

ばいばい-けいやく 賣買契約【名】〔法〕ばいばい(賣買)㊁に同じ。

ばいばい-しよう 賣買證【名】賣買契約の成立を證する文書。賣買契約は不要式契約なるが故に、日常の即時賣買に於ては、これを作成することなけれど、契約の成立と同時に、その履行をなさざる場合には、賣主・買主雙方の間に、これを取りかはすこと多し。但し、その場合と雖も、證書は證明證書たるに止まり、これ無きがために、契約の成立を妨ぐることなし。

ばいばい-ち 賣買地【名】賣買の目的物となりたる地所。建武以來追加「質券・賣買地事」

ばいばい-でん 賣買田【名】ちんそでん(賃租田)に同じ。

ばいばい-ひん 賣買品【名】しやうひん(商品)に同じ。

はいはい-やくしや はいはい役者【名】ぺいぺいやくしや(ぺいぺい役者)に同じ。風來六六部集(放屁論後篇)「戲場(シバヰ)でしても、名もなきはいはい役者のする浦人の嫡流なり」

はい-はう 敗報【名】敗軍の報知。敗聞。

はい-はう 肺胞【名】〔醫〕『獨 Alveolen』下方に至るに從ひ、漸次分岐を重ねて、極微なる細管となりたる氣管の末端、盲嚢をなせる部分に著きてある、極めて薄き膜を有せる多數の小氣胞。毛細管網によりて密に圍繞せらる。その盲嚢とこれに附屬せる肺胞の一群とを、肺の小葉といひ、各小葉は、結締織によりて相隔てられ、

小葉若干相集合してやや大なる小葉に達すれば、肉眼にて認むるを得。

はい-はう 灰鮑【名】『漢字の支那音の訛』鮑（アハビ）の小形なるもの、又は傷き、死になどして、開鮑（ヒラキアハビ）となすに適せざるものにて製したる、一種の乾鮑。外部に腸附著し、青白色の黴ありて、一見灰色をなす。支那に輸出す。

はい-ばう 牌牓・牌榜【名】かけふだ。看板。牌標。

はい-ばう 敗亡【名】『はいまう（敗亡）を見よ』敗軍して、逃げ又は亡ぶること。太平記「天王寺邊より天下の動亂出で來て、國家敗亡しぬ」

はい-ばう 廢忘【名】久しくその事を廢棄して忘るること。盛衰記「天台の不思議ども御尋ありけるに、折節廢亡して、演べ得ざりければ」

はい-はく 拜白・拝白【名】㊀恭しく白（マウ）すこと。㊁白（マウ）すことの謙稱。㊂はいけい（拜啓）に同じ。

はい-はん 廢藩【名】㊀藩を廢すること。㊁次條の略。

はい-はん 廢藩・置縣（チケン）【句】明治四年七月十四日に、徳川幕府以來の藩制を廢して、全國を三府・四十三縣に分ち、郡縣制度とせしこと。廢藩。

はい-はん 背叛・背畔【名】そむきて、従はぬこと。「群臣、背叛す」

はい-はん 悖反【名】はいれい（悖戾）に同じ。

はい-ばん 杯盤・盃盤【名】宴席の道具なるさかづきと皿鉢と。

はい-ばん 胚盤【名】〔動〕『英 Blastoderm』雞卵の如く甚しく卵黃に富める卵の常として、原質の、一端に、小圓盤狀となりて偏在するに過ぎざるもの。

はい-はん-ざい 背叛罪【名】〔法〕敵國に與し、本國に對して、敵對行爲をなすによりて成立する犯罪。舊刑法の用語にして、新法にては、抗敵罪中に包含せしめたりと解釋して可なり。

はい-ばら 榛原【名】〔地〕㊀遠江國六郡の一。郡役所を川崎町に置く。㊁大和國宇陀郡にある町。奈良市より八里二十四町。舊伊勢本街道と名張（ナバリ）街道との分岐點。製藥を以て著る。〔萩原〕

はいばら-ます 榛原枡【名】小田原北條氏の關東を領せし時、安藤豐前守製作し、伊豆・相模などの國國にて用ひし枡。京升よりやや大なり。安藤枡。

はい-ひ 廢罷【名】はいはい（廢罷）の誤讀。

はい-ひ 拜披・拝披【名】㊀手紙などを、恭しく披（ヒラ）き讀むこと。㊁他人の手紙などを披（ヒラ）き讀むことの謙稱。

はい-び 拜眉・拝眉【名】はいがん（拜顏）に同じ。

はい-び 配備【名】㊀手くばりして準備すること。㊁軍隊を配布して、戰備を整ふること。

ばい-ひ 倍比【名】〔化〕次條を見よ。

倍比の定律【句】〔化〕「倍數比例の定律」に同じ。

はいひ-そけん 廢罷訴權【名】〔法〕さがいかうゐはいひそけん（詐害行爲廢罷訴權）の略。

はい-ひつ 敗筆【名】役に立たぬ筆。禿筆。

はい-ひつ 排筆【名】畫家が、筆を數本束ねて、刷毛（ハケ）に代用すること。

はい-ひん 拜稟・拝稟【名】はいけい（拜啓）に同じ。

ばい-ひん 賣品【名】賣却すべき品物。うりもの。

はい-びやう 肺病【名】㊀肺に關する病、即ち肺結核・肺氣腫・肺炎・肺ヂストマ病などの總稱。肺疾。肺患。㊁はいけっかく（肺結核）に同じ。

ばい-ひ-りつ 倍比律【名】〔化〕「倍數比例の定律」に同じ。

ばい-ひれい 倍比例【名】〔化〕次條を見よ。

倍比例の定律【句】〔化〕「倍數比例の定律」に同じ。

はい-ふ 肺腑【名】㊀はいざう（肺臟）に同じ。㊁心のおくそこ。心底。肺肝。心腹。「言言、肺腑より出づ」「書を讀んで、古人の肺腑に入る」㊂『史記の魏其田蚡傳に「蚡以二肺腑一爲二京師相一」とあり。肺腑の相附くが如くなる間柄の義。漢書の劉向傳に「臣幸得レ託二肺附一」とある肺附も同義』みうち。近親。骨肉。〔肺附〕

はい-ふ 配符【名】符をくばること、又その符。東鑑「家人知行地內、未レ請二取配符一」

はい-ふ 配布【名】ひろくくばること。

はい-ふ 配付【名】くばりわたすこと。

はい-ふ 配賦【名】くばりつくること。わりあて。わりつけ。配分。

はい-ぶ 背部【名】㊀背の部分。せなか。（腹部に對して）㊁うしろの部分。背後の方。後面。背面。

はい-ぶ 拜舞・拝舞【名】古、敍位・任官、又は祿を賜りなどしたる時、一種の方式によりて、拜謝の意を示ししこと、又その謝禮。方式は、時代によりて、多少の變化ありたれど、立ちて再拜し、立ちながら、左・右・左とて、まづ顏及び腰以上を左に向くると同時に、兩手をも左に向けて、更に右に向けて、これを行ひ、又左に向けて、これを行ひ、次ぎに、坐りて、又、左・右・左をなし、次ぎに、立ちて再拜する等の定あり。畢竟、手の舞ひ足の蹈む所を知らぬ意を表せしなり。はいむ。はい。舞蹈。建武年中行事「二省の敍人、互に見合せて、馳道に進みて、一同に拜舞す。次第に退く。大臣以下、下殿して、各、拜舞す」

はい-ぶ 廢蕪【名】ぶはい（蕪廢）に同じ。

ばい-ふ 賣婦【名】ばいぢよ（賣女）に同じ。

ばい-ふ 媒婦【名】媒介をなす女。

ばい-ぶ 馬醫部【名】明治六年、陸軍省に置きたる部の一。陸軍の馬政に關與し、馬匹の健康を保護するを掌りたり。職員は、初、長官を馬醫正（バイカミ）（少佐相當官）といひ、その下に馬醫（大尉相當官）・馬醫副（バイスケ）（中尉相當官）・馬醫補（少尉相當官）なりしが、同七年、馬醫試補を置き、同年十一月、馬醫正を馬醫監と改稱し、馬醫生（下士）を置き、同十六年、馬醫・馬醫副・馬醫補を一等馬醫・二等馬醫・三等馬醫と改稱す。同十八年廢止す。

ぱい-ぷ（英 pipe）【名】㊀だうくわん（導管）に同じ。㊁卷烟草を插して間接に吸飲するに用ふるもの。すひくち。

はい-ふう 背風【名】おひて風。おひて。

はい-ふう 俳風【名】俳諧㊂の風體。俳調。

ばい-ふう 梅風【名】梅花の香を送る風。國姓爺後日合戰「鱗は、紅白梅花と散りて、梅風、四方に散亂たり」

はいふう-きやうく 俳風狂句【名】〔文〕やなぎだる（柳樽）㊀を見よ。

はいふう-やなぎだる 誹風柳樽・誹風柳多留【名】〔書〕やなぎだる（柳樽）㊁を見よ。

ぱいぷ-おるがん パイプ風琴（英 Pipe-organ）【名】今、普通、單にオルガンと呼ぶもの（アメリカオルガン）の基本となりたる、一種の西洋樂器。無數の管樂器を集合して作りたる、構造複雜、規模宏大なる鍵樂器にして、音量壯大なるが故に、古來、寺院に備へて、宗敎樂を奏するに用ひ、又、演奏會に於ける重要樂器の一とせり。

はい-ふく 拜伏・拝伏【名】ふしをがむこと。ひれふすこと。

はい-ふく 拜復・拝復【名】書翰文の冒頭又は末尾に用ひて、恭しく返事する意を示す語。

はい-ふく 佩服【名】㊀身に佩（オ）ぶること、又その物。佩用。㊁心に銘ずること。感佩。

はい-ふ-ぜい 配賦稅【名】〔經〕徵收すべき總額を各人に配賦して、分擔せしめ、豫めその稅率を一定することなき租稅。分配稅。（定率稅に對して）

はい-ぶつ 廢物【名】廢れたる物。役に立たぬ物。

廢物利用【句】廢物を役に立たすること。

はい-ぶつ 廢佛【名】次條を見よ。

廢佛棄釋【句】『佛法・釋迦を廢棄する義』佛敎を排斥し、寺院・經文等を破毀すること。支那には、謂はゆる三武（サンブ）・一宗の厄（その條を見よ）あり、我國にては、江戶時代の末に、神國思想の勃興に伴なひて、神・儒二敎の徒の間に、この運動起りたり。

ばい-ぶつ 賣物【名】『詩經の鄭箋に「敎令之出如二賣物一、物善則其售價貴、物惡則其售價賤」とあり』うりもの。賣品。

はいぶつ-けう 拜物教【名】しよぶつしゆうはい（庶物崇拜）に同じ。

はい-ぶん 敗聞【名】はいはう（敗報）に同じ。

はい-ぶん 俳文【名】〔文〕俳人の手に成れる、俳趣味を帶びたる文章。多くは紀行・日記・小品文などに多し。

はい-ぶん 配分【名】ぶんぱい（分配）に同じ。狂言（六地藏）「仕おふせたら、わごりよたちにも、配分してやらうぞ」

ばい-ぶん 賣文【名】文章を以て、生活の資とすること。

はいぶん-き 配分器【名】蒸氣機關の汽筩の橫に備へつけ、その內にある瓣の運動によりて、蒸氣をかはるがはる活塞の上下に送るやうに仕掛けたる箱。

はいぶんさい-えいぶつしせん 佩文齋詠物詩選【名】〔書〕天文・地理以下四百八十六類に分ちて、古代より明代までの、詠物の詩を採錄せるもの。四百八十六卷。支那淸の康熙帝の御選。

はいぶんさい-しよぐわふ 佩文齋書畫譜【名】〔書〕支那淸の康熙帝の欽定に係り、論書十卷、論畫八卷、歷代帝王書二卷、同上畫一卷、書家傳二十三卷、畫家傳十四卷等、一百卷より成るもの。

はいぶんさい-ゐんぷ 佩文齋韻府【名】〔書〕はいぶんゐんぷ（佩文韻府）に同じ。

はいぶん-じやう 配分狀【名】配分の旨を記したる書狀。

はいぶん-ゐんぷ 佩文韻府【名】〔書〕古書より成語を集めて、韻によりて排列し、詩家の用に供したるもの。四百四十四卷。支那淸の康熙帝の欽定にして、編纂官は張玉書・陳廷敬等七十六人。韻府群玉・五車韻瑞の二書を基として、右二書に既載のものは、「韻藻」と稱して、前に列し、追加の部は、「增」と稱して、これに次ぎ、又、後年、同じく康熙帝の欽定に成りたる「韻府拾遺」一百十三卷も、近來合刻せり。

ばい-ぶる 聖書・聖典・聖經（英 Bible）【名】せいしよ（聖書）に同じ。

ばいぶれえたあ（英 Vibrator）【名】電氣を身體に通ぜしめ、その振動によりて、疾患を治療する器具。

はい-へい 敗兵【名】軍に負けたる兵。敗卒。

はい-へい 癈兵【名】戰鬪又は公務のために負傷し、又は公務のために、疾病に罹りて、不具者となり、戰役に堪へざるに至りたる兵士。

はい-へい 配兵【名】兵卒を、各方面に配置すること。

はいへい-ゐん 癈兵院【名】軍人恩給法によりて增加恩給を受くる者にて、救護の必要ある時、これを收容し、終身間、國費を以て扶養する所。職員に院長・主事・主計・軍醫・下士及び判任文官ありて、陸軍大臣の監督の下に、その所在地所管の師團長、これを管理す。

はい-へう 牌標【名】しるしのふだ。かけふだ。看板。牌牓。

はい-へう 拜表・拝表【名】君主又は官府に、表（ヘウ）を奉ること。

はい-ぺすと 肺ペスト【名】〔醫〕『獨 Lungenpest』ペストの一種。ペスト菌が肺臟を犯すによりて發するもの。肺炎を起し、戰慄・高熱等を生じ、咳嗽の頻發、呼吸の困難を伴なひ、喀血を來し、精神は朦朧として、譫語を發し、死を免るる者少なし。ぺすと肺炎。

はい-べつ 拜別・拝別【名】別るることの謙稱。

ばい-べん 買辦【名】㊀買ひととのふること。㊁支那上海その他の開港場にて、外國商人と支那商人との間に立ちて、媒介をなす支那人。もと外國商人の支那に來りて、商業を經營するに當り、支那の言語・風俗・習慣に通ぜず、又、支那の度量衡の制度、不完全にして、種類多く、或は支那の商取引は、長期拂の支那內地銀行の手形によりて支拂ふ習慣なる等、種種の不便あるため、支那商人を、有給の使用人として雇ひ入れしに始り、後には、雇傭關係を離れ、仲介業者・問屋業者・請負業者等、種種の性質を帶ぶるに至れり。

はい-ぼ 拜墓・拝墓【名】はかまゐり。墓參。展墓。

ばい-ほ 馬醫補【名】陸軍省馬醫部の職員の一。馬醫副（バイノスケ）の次に位し、馬匹の醫療を掌りし少尉相當官。明治十六年馬醫と改稱す。

はい-ぼ 灰棒（英 Hypo）【名】『英 Hyposulphite の略』〔化〕じありうさんそおだ（次亞硫酸曹達）に同じ。〔寫眞家の語〕

はいぼお 灰棒【名】〔化〕前條に同じ。

はい-ぼく 敗北【名】戰に負けて北（ニ）ぐること。まけいくさ。敗走。

ばい-ぼく 賣卜【名】手數料を受けて、身の上の吉凶などを占ふこと。

ばいぼく-しや 賣卜者【名】賣卜を業とする人。うらなひしや。うらなひ。易者。

ばいぼく-せんせい 賣卜先生【名】前條の敬稱。蕪村「賣卜先生木下闇（コノシタヤミ）の問はれ顏」

はい-ぼつ 敗沒【名】㊀戰爭に負けて死ぬること。㊁失敗して、再擧しがたきこと。

はい-ぼつ 配沒【名】沒官して、諸司に分配すること。大寶令「凡官奴婢、年六十六以上及癈疾、若被㆓配沒㆒令㆑爲㆑戶者、並爲㆓官戶㆒」

ばい-ぼふいん 唄法印【名】〔佛〕梵唄を唱ふる僧。

はい-ほん 配本【名】豫約出版の書籍を、出版者より、豫約者の家家にくばり屆くること。

はい-ま 驛馬【名】はゆま（驛）の轉。〔古語〕紀「驛、ハイマ」

はいまあと-くんすと（獨 Heimat Kunst）【名】〔文・美〕きやうどげいじゆつ（鄕土藝術）に同じ。

はい-まう 敗亡・廢忘【名】『はいばう（敗亡）を見よ』うろたふること。狼狽。當惑。今宮心中「なほも續けて打つ石に、提灯もうち破れ、由兵衞も敗亡し」

ばい-まし 倍增【名】增して、もとの二倍にすること。倍加。〔古語〕

はい-まぢ 驛路【名】はゆまぢ（驛路）の轉。

はい-まはし 拜廻・拝廻【名】『はいのざ（拜座）㊁を見よ』和船の帆の一部。

ばい-まはし 貝廻・螺廻・黃螺廻・海螺廻・海蠃廻【名】貝獨樂（バイゴマ）をまはすこと、又その人。ばいうち。

はい-まゆみ はい衞矛【名】〔植〕まさき（柾）に同じ。

はい-み 俳味【名】はいしゆみ（俳趣味）に同じ。

はい-みやう 俳名【名】俳人としての名。はいめい。俳號。

はい-む 拜舞・拝舞【名】はいぶ（拜舞）に同じ。

はい-む 廢務【名】㊀事務を行はぬこと。㊁『文獻通考に「廢㆑務禁㆑樂三日」とあり』古、天皇の廢朝したまふのみならず、諸司までも、政務を廢して、百官の出仕せざりしこと。期間は、政務の澁滯を慮りて、概ね一日なりしかど、三日に亙りしこともあり。**はいてう**（廢朝）參照。西宮記「依㆓鴨祭㆒廢務」

ぱいんあっぷる 鳳梨（英 Pineapple）【名】〔植〕『その實、外形は松毬（マツカサ）に似、味は林檎に似たりとていふ』鳳梨（アナナス）科に屬する常綠草本。葉は扁闊にして長く、銳き大鋸齒を有す。夏時、叢葉の間に花開き、果實を結ぶ。果實は楕球にして、鱗甲あり、やや松毬狀をなし、長さ四五寸に及ぶ、成熟すれば食料に適し、又、葉より絲を取る。原產地は熱帶亞米利加。我國にては、琉球・臺灣等に產す。あななす。ばいんなっぷる。

（ぱいんあっぷる）

ぱいんと（英 Pint）【助數】英國にて用ふる、液體の體積の單位。我國の約三合二勺に當る。

はい-めい 俳名【名】㊀はいみやう（俳名）に同じ。㊁俳人としての名聲。俳諧水滸傳「桃青の俳名、日日に高かりしかば」

はい-めい 拜命・拝命【名】㊀命を承ること。㊁官職に補任せらるること。拜任。拜官。

はい-めい 背盟【名】盟（チカヒ）に背（ソム）くこと。

ばい-めい 賣名【名】名聲を世に知られんとつとむること。虛名を欲すること。

はい-めつ 敗滅【名】やぶれ滅ぶること。破滅。

はい-めつ 廢滅【名】すたれ滅ぶること。廢絕。

はい-めん 背面【名】一顏を背(ソム)くること。うしろを向くこと。二うしろの方。うしろ。背部。

はい-めん 拜面・拜面【名】はいがん(拜顏)に同じ。

はい-めん 拜免・拜免【名】拜官と免官と。

ばい-も 貝母【名】一多くの貝の母たる貝。二〔佛〕一の邪見に諸惑の伴なふを、魚王・貝母に、衆魚・衆貝の隨從するに譬へていふ語。三〔植〕百合(ユリ)科に屬する多年生の草。根は鬚根、莖には地上莖と地下莖とあり。地下莖は、蒜(ニンク)に似たる鱗莖をなし、地上莖は、春、抽でて、一二尺に達し、葉は狹長にして、平行脈を有し、最上部の三葉は最も小なり。花は葉腋より生ぜる短き花梗の上に、外面淡黃綠色にして線條を有し、內面紫色の斑點を交へ、網狀をなせる六瓣花、倒垂して開く。原產地は支那。鱗莖は藥用となる。あみがさゆり。はるゆり。おひ。ははくり。ははぐさ。〔空菜・商阜花〕

はい-もん 俳門【名】はいだん(俳壇)に同じ。

はい-もん 俳門の六哲【句】有名なる六人の俳諧の宗匠、卽ち荒木田守武・山崎宗鑑・松永貞德・西山宗因・安原貞室・松尾芭蕉。

はい-もん 背文【名】錢の背面の文字。

はい-もん 排悶【名】心の苦悶をおしのけ除くこと。うさはらし。忘憂。遣悶。

ばい-やう 培養【名】つちかひやしなふこと。

ばい-やう-き 培養基【名】『獨 Nahrboden』細菌を培養するに用ふる材料。肉汁・ペプトンを用ふるを常とす。

ばい-やう-しよくぶつ 培養植物【名】〔植〕『英 Cultivated plants』一國又は一地に於て、自生することなく、培養によりて存在する植物。我國にては、桃・海棠・牡丹・朝顏・稻・玉蜀黍(タウモロコシ)など、これなり。(自生植物に對して)

はい-やう-せい 背陽性【名】〔植〕はいじつせい(背日性)に同じ。

はい-やく 背約【名】約束に背(ソム)くこと。違約。

はい-やく 配役【名】やくわり(役割)に同じ。

ばい-やく 賣藥【名】藥を賣ること、又、商人の調劑して賣る藥。効能・用法・用量等を明記し、行政官廳の認定を經て賣る。うりぐすり。

ばい-やく 賣約【名】賣る約束。

ばい-やく-いんし 賣藥印紙【名】明治十六年一月より同三十一年七月まで、賣藥稅徵收の方法として、賣藥に貼用せしめし、一厘(淡黑色)・二厘(靑色)・三厘(黃色)・五厘(茶褐色)・一錢(赭色)・二錢(綠色)・三錢(濃靑色)・四錢(橙黃色)・五錢(紫色)及び十錢(深紅色)の十種の印紙。三十一年七月以後は、收入印紙を以て、これに代ふることとなれり。

ばい-やく-いんし-ぜい 賣藥印紙稅【名】印紙稅の一。賣藥の定價に從ひ、その一割を賣藥營業者より徵收するもの。大正十五年廢止せられたり。

ばい-やく-えいげふ 賣藥營業【名】賣藥を調製又は輸入又は移入して販賣すること。くすりや。

ばい-やく-えいげふしや 賣藥營業者【名】賣藥營業をなす人。くすりや。

ばい-やく-えいげふぜい 賣藥營業稅【名】營業稅の一。賣藥營業者より、藥劑一方ごとに、一年間の製造高の定價總額に應じて徵收せしもの。

ばい-やく-きそく 賣藥規則【名】賣藥營業を取締るために、明治十二年太政官より布告したる規則。後、賣藥法の公布に伴なひて廢止せられたり。

ばい-やく-しやう 賣藥商【名】一ばいやくえいげふ(賣藥營業)に同じ。二賣藥を取り次ぎて賣捌く人。賣藥受藥人。

ばい-やく-ずみ 賣約濟【名】賣約の成立したること。

ばい-やく-ぜい 賣藥稅【名】賣藥營業稅と賣藥印紙稅との總稱。

ばい-やく-ぜい-はふ 賣藥稅法【名】賣藥稅の率・徵收方法等を規定したる法律。現行のは大正十五年三月公布す。

ばい-やく-てき 賣藥的【貌】一効能を宣傳するのみにて、實効の無きさま。二間に合はせの方法にて、急所に觸れぬさま。

ばい-やく-てん 賣藥店【名】賣藥を營業とする商店。くすりや。賣藥舖。賣藥屋(バイヤクヤ)。

ばい-やく-はふ 賣藥法【名】賣藥營業を取締るために、該營業者の資格・原料・製法・廣告等に關して規定したる法律。大正三年公布し、賣藥規則に代らしめたり。二十六條より成る。

ばい-やく-ぶぐわい-ひん 賣藥部外品【名】販賣の目的にて、賣藥規則に準じて、藥品を配合し、製造せるものなれども、醫治に供するがためならぬもの。例へば蚤取粉・白髮染などの類。

ばい-やく-ほ 賣藥舖【名】ばいやくてん(賣藥店)に同じ。

ばい-やく-や 賣藥屋【名】前條に同じ。八笑人「どうも賣藥屋の店を見るやうに、前置(メヘオキ)ばかり立派で、肝心の趣向がすこたんだから、安心ならねえ」

はい-よ 敗餘【名】負けたるあと。失敗したる後。

ばい-よ 賣與【名】一賣りわたすこと。賣りてやること。二賣買と贈與と。

はい-よう 佩用【名】身におぶること。體に著くること。

はい-よう 肺癰【名】肺に膿物の發する病。

はい-よう 胚孕【名】子をやどすこと。はらむこと。姙孕。

はい-らい 拜禮・拜禮【名】一はいれい(拜禮)に同じ。二正月元日の朝拜。著聞「仁平元年正月一日、院のはいらいありけり」

ばい-らい 蓓蕾【名】花のつぼみ。

はい-らいと 高照(英 High-light)【名】〔美〕繪畫にて、觀る者の眼に最も光りて見ゆる部分。人物畫の眼球、又は磨きたる金屬面など、すべて光を反射する面に現れ、粗布などやうの、光を吸收する面には現れず。

はい-らう 肺勞・肺癆【名】はいけっかく(肺結核)に同じ。ちらう(血癆)參照。

はい-らう 癈老【名】癈疾と老衰と、又その人。

はいらう-ゐん 癈老院【名】『英 Asylum for old and destitute』救貧院の一。不具・癈疾及び老衰の貧者を收容するもの。

はいら-だいしやう 波夷羅大將(梵 Pajra)【名】〔佛〕藥師の十二神將の一。本地(ホンヂ)は文殊(モンジユ)。未(ヒツジ)の神。弓矢を持つ。

はい-らん 拜覽・拜覽【名】一恭しく見ること。二見ることの謙稱。拜見。

はい-らん 敗亂【名】やぶれみだるること。

はい-らん 悖亂【名】道理に悖(モト)り、正道を亂ること。

ばい-らん 霾爛【名】〔地〕『英 Disintegration』岩石が、空氣又は水などの作用によりて、表部より分解・崩壞すること。

はい-り 背離【名】そむきはなるること。

はい-り 背理【名】道理にあはぬこと。不合理。

はい-り 悖理【名】道理に悖(モト)りたがふこと。

ばい-り 賣利【名】賣上の利分。まうけ。

はい-りう 配流【名】はいる(配流)に同じ。

はい-りつ 排律【名】〔文〕漢詩の律體の一。五言又は七言の對句を、六句以上、偶數に聯ねたるもの。五言なると七言なるとによりて、五言排律・七言排律の二體に分ち、五言排律を正體とす。古、長律と呼びしを、明(ミン)の齋延禮、この名に改む。

はい-りつ 廢立【名】『立の字の音、正しくはリフ』今の君主を廢して、その次の君主を立つること。はいりふ。

ばい-りつ 倍率【名】〔理〕『英 Magnifying power 又 Magnification』くわくだいりつ(廓大率)に同じ。

はい-りふ 廢立【名】一はいりつ(廢立)に同じ。運歩色葉集「廢立、ハイリフ」二〔佛〕存廢。有無(ウム)。選擇集「もし善導に依らば、廢立を以て正しとす」

はい-りふ 配立【名】くばりたつること。配置。配當。太平記「事の體(テイ)、怪しくは存じながら、これも又、如何なる配立かあ

るらんと、兎角案じける間に」

ばい-りん 梅林【名】梅の林。うめばやし。

梅林、渇を止む【句】「梅酸(バイサン)渇を醫す」に同じ。〔諺語〕

ばい-りん 梅霖【名】『霖は長雨の義』ばいう(梅雨)に同じ。

はい-りやう 肺量【名】はいくわつりやう(肺活量)に同じ。

はい-りやう 拜領・拝領【名】貴人より物を頂戴すること。恩賜。

ばい-りやう 倍量【名】〔數〕或量の若干倍に等しき量。倍度。

はいりやう-けい 肺量計【名】はいくわつりやうけい(肺活量計)に同じ。

はいりやう-もの 拜領物・拝領物【名】拜領した品物。たまはりもの。

はいりやう-やしき 拜領屋敷・拝領屋敷【名】江戸時代に、幕府より江戸の城內に拜領したる武家の屋敷。坪數は石高に應じて、等差ありたり。

はい-りよ 配慮【名】心を配ること。こころづかひ。心配。

はい-る 配流【名】流罪に處すること。しまながし。はいりう。遠島。平治「讚州へ御配流ありし時」

はい-る 這入る【動四自】はひる(這入る)を見よ。

はい-れ 齒入【名】古下駄の齒を入れ替ふること、又それを業とする人。

はい-れい 拜禮・拝禮【名】頭を低れて、禮をすること。をがみ。はいらい。禮拜。

はい-れい 悖禮【名】禮義に悖(モト)ること。

はい-れい 悖戾【名】そむきもとること。たがふこと。悖反。

はい-れい 背戾【名】背(ソム)き戾(モト)ること。たがひそむくこと。反對。

ばい-れい 陪隷【名】『陪は重なる義』しもべ。隷從。

ばい-れき 梅曆【名】梅の花の開くを見て、春を知ること。五人女「山中の梅曆、うからかと精進の正月を止めて」

はい-れつ 配列【名】くばりならぶること。配置し、羅列すること。

はい-れつ 排列【名】おしひろげならぶること。

ばい-れふ 陪獵【名】貴人の遊獵に陪從すること。

ぱいれん(英 Piling engine の訛)【名】くひうちきかい(杭打機械)の俗稱。

は-いろ 葉色【名】葉の色。謠曲(三笑)「四季にも同じ葉色の常磐木(トキハギ)の」

は-いろ 羽色【名】鳥の羽の色。萬葉「水鳥の鴨の羽色の春山のおぼつかなくも思ほゆるかも」

ばい-ろ 倍臚・陪臚【名】雅樂の曲の一。唐樂にて、平調(ヒヤウデウ)に屬し、楯と劍とを持ちて舞ふ。胡人班朗の作る所にて、林邑國の樂なるを、聖武天皇の時、婆羅門僧正・佛哲師などの傳へしものといふ。べろ。倍臚破陣樂。

ばい-ろう 培塿【名】小高き土地。小き岡。

はい-ろうと 肺漏斗【名】〔醫〕まうなうぶ(盲嚢部)に同じ。

はいろ-はぢんらく 倍臚破陣樂【名】ばいろ(倍臚)に同じ。

ばい-ろく 貝勒【名】支那にて、貝にて造り、馬勒の飾として用ふるもの。

ばい-ろく 貝勒(滿洲語 Beiléh の訛)【名】『ツングス語 Bekin(君主・主領又は部長の義)の轉訛』支那清代の滿洲帝室・蒙古王族の爵號十二級の第三、即ち郡王の下、貝子の上に位せしもの。

ぱいろっと(英 Pilot)【名】水先案內者。

はい-ろん【名】㊀昔、肥前國長崎及び天草島の富岡港にて、陰曆五月一日に行ひたる小船の競漕、又その船。㊁肥前國長崎にて、市中の男兒、端午の競漕の眞似をして、町町を廻る遊戲。二間ほどの竹を以て、船に代へ、茜木綿の幟、又は五色の紙幟・劍・旗に「何町子供中」と書きたるを押立て、太鼓・銅鑼を鳴らし廻り、他の町子供に行逢へば、互に幟を出し合はせ、年齡等しき者、雙方より一人づつ出でて走りくらぶ。

はい-ろん 俳論【名】㊀俳諧に關する議論。㊁〔書〕俳諧の沿革・變化等を論じ、附錄として、新古の發句を、四季に分ちて記したるもの。一卷。八文字屋瑞笑の著。

はいろん-ぶね はいろん船【名】昔、肥前國長崎及び天草島の富岡港にて、陰曆五月一日の競漕に用ひし船。長さ十五尋又二十尋、一般に壯者五六十人づつ乘る。

ばい-わげ 貝髷・螺髷・海螺髷・黃螺髷・海贏髷【名】貝(バイ)の形に似せて結ぶ髪。

はい-ゐ 廢位【名】他人に迫られて、君主の、その位を去ること。

はい-ゑそ 肺壞疽【名】〔醫〕『獨 Lungengangräne』腐敗黴菌の作用により、肺組織の腐敗して、壞疽に陷る病。呼氣惡臭を帶び、同じく惡臭を帶びたる痰を多量に排出し、又、發熱・戰慄等を來すことあり。急性のは、數日に死すれども、慢性に經過するもあり。

はい-ゑん 廢園【名】荒廢したる庭園。

ばい-ゑん 梅園・梅苑【名】うめぞの(梅園)に同じ。蕪村「梅園に褌(フドシ)引ずる主(アルジ)かな」

ばいゑん-しゆんあうでん 梅苑春鶯囀【名】しゆんあうでん(春鶯囀)に同じ。

ばい-をう 梅翁【名】〔人〕にしやまそういん(西山宗因)を見よ。

はい-をく 敗屋【名】荒れ果てたる家屋。あばらや。

はう 方【名】㊀かた。むき。方角。方向。方面。狂言(宗論)「こなた方にも、又、身どもが方にも」㊁はうゐ(方位)㊁に同じ。㊂はうけい(方形)に同じ。㊃はうせい(方正)に同じ。㊄しかた。てだて。方法。㊅わざ。術。技術。方式。源氏「八條の式部卿の御はうを傳へて、かたみに挑みあはせたまふ」㊆藥の調合。調劑。曾我會稽山「子ゆゑの闇(ヤミ)の病には、唐(カラ)・高麗(カウライ)の名醫を寄せ、萬卷の醫書を探しても、藥の方は、よもあるまじ」

方に隨ひ、圓に就く【句】『馬致遠の靑衫泪曲に出づ』多才にして、施すとして可ならざるなき譬。方圓施すべし。〔諺語〕

方の外(ソト)【句】はうぐわい(方外)㊀に同じ。鶉衣「翁の、文におけるや、錦をうはおそひし、けたなる袖をまどかにして、よく大の心をうつし、よく方の外に遊べり」

はう 芳【名】㊀かうばしきこと。㊁かうばしき名。美名。芳名。「芳を後世に垂る」

はう 保【名】㊀はい(牌)㊁を見よ。㊁平安朝時代以後の行政區劃の一。地方にては、その一小區劃にいひて、莊・園・郷(ガウ)・保と並び稱せられ、都市にては、町四つを合はせたるをいひて、左右兩京に、各三百なりき。ばう(坊)㊀參照。

はう 袍【名】㊀束帶の表衣(ウハギ)。襴の附きたる袷衣にて、幅二幅(フタノ)、袖巾二幅、袖丈二尺、襴八寸、總丈四尺七寸を普通とし、五位以上は、春・冬は、表は綾、裏は平絹、秋・夏は穀織(コメオリ)、六位以下は、夏・冬共に絹、或は夏は無文の薄物を用ひ、模樣は、家家によりて異なりたれど、四位・五位を通じて、轡唐草・輪無唐草など多かりき。色は、大寶令の制にては、一位のは深(コ)き紫、二・三位は淺(ウス)き紫、四位のは深緋(コアケ)、五位のは淺緋、六位のは深き綠、七位のは淺綠、八位のは深き縹(ハナ)、初位のは淺縹、無位のは黃色、一條天皇の寬弘以來は、四位以上は橡(ツルバミ)、五位の緋は蘇枋(スハウ)となり、六位は縹、七位以下は一定せざることとなれり。又、縫腋(ホウテキ)・闕腋(ケツテキ)の二種ありたり。うへのきぬ。位袍。㊁はうも(袍裳)を見よ。

はう 胞【名】㊀えな(胞衣)に同じ。㊁〔生〕生物體を組成する原形質の微粒。㊂〔植〕葯・子房・果實等の室。

はう 苞【名】〔植〕『英 Bract』花芽の其部に在る鱗葉。通常、綠色なれども、黃・褐の色を呈し、一見花瓣の如くなるもあり。蕺草(ドクダミ)の花序の下部に在る白色・花瓣狀のもの、天南星(テンナンシヤウ)などの花序の外圍に存する大形・舌狀のもの、菊科植物の頭狀花序の下部に在る小形・鱗片狀のものなど、これなり。はなばかま。

はう 砲・礮【名】おほづつ。大砲。火砲。砲熕。

はう 報【名】㊀しらせ。通知。報知。㊁むくい。返禮。報酬。ほう(報)參照。

はう 褓【名】ふんどし(犢鼻褌)に同じ。盛衰記「赤き鬼の、靑き褓をかきて」

はう 方【接頭】平方形なる面の一邊の長さの意。「方百里の地」

はう 芳【接頭】他人の事物の名に添へて敬意を表する語。「芳名」「芳志」「芳詠」

はう 寶・寳【接頭】尊き物事の名に添へて用ふる語。「寶祚」「寶前」「寶穴」

はう 方【助數】藥の處方の種類を數ふるにいふ語。例へば藥劑一方ごとに、一年間の製造高の定價總額に應じて、賣藥營業税を徵收する類。

はう【貌】はっに同じ。（凱陣八島）「その理を詰めて宣へば、義經も、はうと詰らせ給ひ」

ばう 坊【名】㊀古の奈良・平安兩京に於ける行政上の區劃の一。方四十丈を町とし、町四を保とし、保四を坊とし、坊四を條とし、坊の間に、大路を通じたり。ばうれい(坊令)・ばうちやう(坊長)・ばうもん(坊門)參照。㊁とうぐうばう(東宮坊)の略。㊂とうぐう(東宮)に同じ。（源氏）「明くる年の春、坊定りたまふにも」㊃僧侶の居所。坊舍。（源氏）「なにがし僧都の、この二とせ籠りはべる坊にはべるなる」（平治）「讃岐の院の、仁和寺の寛遍法務が坊に渡らせたまひしを」㊄僧侶。法師。ばうず。（枕）「佛のおろし賜(タ)べと申すを、この御坊たちの惜しみたまふ」㊅ばうず(坊主)㊅に同じ。（蘆屋道満大内鑑）「産んでもらひしこの坊は、取りも直さぬわが子なり」（八笑人）「坊は、寢たらそっと巨燵(コタツ)へころばして置くがいい」㊆ばう(房)㊀㊂に同じ。

坊に居(ヰ)る【句】皇太子となる。（増鏡）「やがて親王(ミコ)になし奉りて、同じき二十六日、坊に居たまふ」

ばう 房【名】㊀へや。つぼね。住房。（和名）「房、名附出。釋名云、房、俗云望。在二室之兩房一也」（榮花）「御房の前の櫻の、いとおもしろう盛りなるに」㊁戸(コ)。戸口。（續記）「造二難波宮一、雇民免二課役幷房雜徭一」㊂昔、大名以下の人に隨從して、その長刀を持ちし剃髮者。後世、その剃髮せざるを、力者(リキシヤ)と呼びたり。[坊] ㊃二十八宿の一。東方にあるもの。房星。そひ。

ばう 牓・榜【名】たてふだ。門鑑。看板。

ばう 望【名】㊀『月滿ちて、日と相望む義』もちづき。もち。㊁〔天〕『英 Opposition』月が、地球と太陽とを連ぬる直線の上に來り、地球が、太陽と月との間にある時、即ち滿月の位置を取りたる時。しよう(衝)參照。㊂陰曆の、毎月の十五日。望日。「朔(サク)・望」㊃陰曆の八月十五日。

ばう 帽【名】ばうし(帽子)の略。

ばう 旄【名】支那にて、旄牛の尾を竿に附けて飾としたる旗。纛(サシマネキ)。

（ばう）

ばう 昴【名】二十八宿の一。西方に在りて、七星より成る。古くは、六星より成れりとし、火神と稱したりといふ。すばる。昴星。

ばう 暴【名】㊀あらきこと。はげしきこと。㊁てあら。あばれ。亂暴。不法。暴惡。

暴を以て、暴に易(カ)ふ【句】㊀『史記の伯夷傳に「以レ暴易レ暴兮、不レ知二其非一矣」とあるに本づく』或暴惡なる者を除き、他の暴惡なる者を以て、これに易へたるに止まりて、何等改善の跡無し。㊁相手の亂暴に對して、此方よりも亂暴を爲す。〔諺語〕

ばう 亡【名】ほろぶること。「存・亡」

ばう 妄【名】㊀眞實又は誠實ならぬこと。みだりなること。いつはり。うそ。不誠實。虛誕。妄(マウ)。㊁愼重ならぬこと。思慮なきこと。無分別。

ばう 芒・秅【名】〔植〕のぎ(芒)に同じ。

ばう 坊【代】㊀男の幼兒の第一人稱。（八笑人）「坊も、ぺんぺんを彈きに來ました」㊁男の幼兒に對する親愛の意の第二人稱。（蜀山人）「はげあたま撫でてしみじみ戀しきは坊と呼ばれし昔なりけり」

ばう 亡【接頭】死にし人の姓名に添へて、生存者と區別するに用ふる語。故(コ)。「亡父」「亡何某」

ばう 房【接尾】㊀書籍・筆・硯などを賣る家にて、家號に添へて用ふる語。「富山(ザフ)房」㊁次條に同じ。

ばう 坊【接尾】㊀ばうがう(坊號)を見よ。〔房〕（著聞）「慈心坊尊惠といふ老僧ありけり」（盛衰記）「世の人の諺に、智慧第一の法然坊、持律第一の葉上坊、支度(シク)第一の春乘坊、慈悲第一の阿證坊といはれけり」㊁人を嘲り賤しめ、又は親しみていふ語に用ふる語。「朝寢坊」「見榮(ミエ)坊」「けちんばう」「とられんばう」

ばう-あい 芒鞋・芒鞵【名】わらぢ。わらぐつ。ばうかい。「竹杖・芒鞋」

はう-あえんくわう 方亞鉛鑛【名】〔鑛〕せんあえんくわう(閃亞鉛鑛)に同じ。

ばう-あく 暴惡【名】はげしく手あらきこと。無理非道なること。（平治）「暴惡の臣に語らはれて、累家の家名を失はんこと、口惜しかるべし」

ばう-あつ 膨壓【名】〔植〕『英 Turgor』植物體の細胞内に鬱積したる水分の、細胞膜を壓して緊張せしむるによりて、植物體の强固なるを得ること。草本性の植物が直立の位置を保つも、主としてこの力に因り、萎れたる植物の柔軟なるは、水分缺乏して、この力の減じたるに因る。

ばう-あつ 防遏【名】ふせぎとどむること。防止。

はう-あん 方案【名】方法に就きての考案。しくみ。もくろみ。

はう-あん 保安【名】㊀ほあん(保安)に同じ。㊁鳥羽天皇の御代の年號(紀元一七八〇年—一七八三年)。

ばう-あん 茅庵【名】茅葺(カヤブキ)の庵(イホリ)。かやや。茅屋。

はうあん-けいさつ 保安警察【名】〔法〕ほあんけいさつ(保安警察)に同じ。

はうあん-りん 保安林【名】ほあんりん(保安林)に同じ。

はう-い 胞衣【名】えな(胞衣)に同じ。

はう-い 芳意【名】はうし(芳志)に同じ。

はう-いう 保有【名】ほいう(保有)に同じ。

はう-いう 包有【名】㊀つつみたもつこと。㊁ないざい(内在)㊀に同じ。

はう-いう 放遊【名】ぶらつくこと。放浪。（東鑑）「邦道者、洛陽放遊客也」

ばう-いう 亡友【名】死にし友。

ばう-いう 忘憂【名】うれひを忘るること。排悶。遣悶。

忘憂の物【句】㊀憂を忘るる材料。㊁『晉書の顧榮傳に「恒縱レ酒酣暢、謂二友人張翰一曰、惟酒可二以忘一レ憂、但無レ如二作レ病何一耳」とあるに本づく』さけ(酒)の異稱。

ばういう-けん 卯酉圈【名】〔天〕『英 Prime vertical. 十二支中、卯(ウ)は東方に、酉は西に配するよりいふ』天頂と天底とを通過して、子午線に直交する、大なる假設の圈。即ち正東・正西の方角に於て地平圈と交叉する、垂直なる方位圈、即ち卯酉面と天球との交(マジハリ)。卯酉線。はうゐてん(方位點)參照。

ばういう-せん 卯酉線【名】〔天〕前條に同じ。

ばういう-めん 卯酉面【名】〔天〕『英 Prime plane』卯酉圈の存する平面、即ち天頂點と天底點とを過ぎて、子午面に直交する平面。

はう-いく 保育【名】ほいく(保育)に同じ。

はういく-じよ 保育所【名】ほいくじよ(保育所)に同じ。

はう-いつ 放逸・放佚【名】遊び樂みて、身をつつしまぬこと。ほしいまま。放恣。放縱。縱逸。（曾我）「放逸無慚の太刀」

はう-いつ 抱一【名】『老子に「聖人抱レ一、爲二天下式一」とあるに本づく』道をたもち、心を亂さぬこと。一說に、一は少の極なれば、身を堅く取締ることにて、守約といふに同じと。

はういつ 抱一【名】〔人〕さかゐはういつ(酒井抱一)を見よ。

ばう-いつ 暴溢【名】河水の、俄かに溢るること。

はういつ-は 抱一派【名】〔美〕日本繪畫の一派。酒井抱一の畫風を法とするもの。

はうい-ふなばら【名】〔植〕『安齋隨筆に見ゆ。ふなばら(白薇)參照』馬の藥に用ふといふ、一種の草。

はう-いみ 方忌【名】古、天一神などの所

在の方角に向ひて、門出又は葬送などするを、凶なりとして避けしこと。

はう-いん 寶印 【名】 ほういん(寶印)を見よ。

ばう-いん 暴飲 【名】 過度に酒を飲むこと。

ばう-いん 暴淫・暴婬 【名】 過度に房事を行ふこと。荒淫。

ばう-いん 旁引・傍引 【名】 あまねく引證すること。「博捜・旁引」

ばう-う 房宇 【名】 へや。建物。

ばう-う 茅宇 【名】 ばうをく(茅屋)に同じ。

ばう-う 暴雨 【名】 烈しく降る雨。

はう-うん 寶運 【名】 せいうん(聖運)に同じ。

はう-うん 芳雲 【名】 『芳(カウ)しき雲の義』「花の雲」に同じ。

ばう-うん 望雲 【名】 『支那唐の狄仁傑が、太行山に登り、白雲の孤飛するを顧望し、吾が親の住家その下に在りとて、思慕の情を寄せし故事に本づく』故郷の父母を戀しく思ふこと。

ばううん-すゐ 望雲騅 【名】 支那の楚王項羽が乘用せし馬の名。謠曲（項羽）「望雲騅といふ馬は、一日に千里を翔る名馬なれども」

はう-え 胞衣 【名】 はうい(胞衣)に同じ。

はう-えい 泡影 【名】 ㊀水の泡と、物の影と。㊁物事のはかなきことの譬。はうやう。

はう-えい 芳咏・芳詠 【名】 他人の詩歌の敬稱。芳吟。

はう-えい 寶永 【名】 東山天皇の御代の年號(紀元二三六四年―二三七〇年)。

はうえい-いちぶきん 寶永一分金 【名】 乾字(ケン)金の一種なる一分金。享保四年十二月まで通用せり。乾字一分判金。

はうえい-きん 寶永金 【名】 けんじきん(乾字金)に同じ。

はうえい-ぎん 寶永銀 【名】 はうじぎん(寶字銀)に同じ。

はうえい-きんぎん 寶永金銀 【名】 寶永金と寶永銀との總稱。

はうえい-こだまぎん 寶永小玉銀 【名】 はうじまめいたぎん(寶字豆板銀)に同じ。

はうえい-こばんきん 寶永小判金 【名】 乾字(ケン)金の一種なる小判金。享保四年十二月まで通用せり。乾字小判金。

はうえい-ざん 寶永山 【名】 〔地〕富士山東南面の中腹、須山(スヤマ)・村山兩登山道の間にある、瘤狀の突起。寶永四年、富士山の火口破裂して現出せるものといふ。高さ七八一七尺。富士山頂より低きこと三五五七尺。

はうえい-せん 寶永錢 【名】 ㊀はうえいつうはうせん(寶永通寶錢)の略。㊁寶永四年、商人が、幕府に請ひて、未だ免許を得ざるに、私に鑄造せし銅錢。表面の左右に「寶永」の二字、外郭に「萬代通用」の四字の極印あり。徑一寸二分五厘。

はうえい-ちやうぎん 寶永丁銀 【名】 はうじちやうぎん(寶字丁銀)に同じ。

はうえい-つうはう 寶永通寶 【名】 次條の略。

はうえい-つうはうせん 寶永通寶錢 【名】 寶永五年、徳川幕府發行し、その一を以て、寛永小錢の一に充てし銅錢。表面に「寶永通寶」の四字、背の外廓に「永世久用」の四字の極印あり。徑一寸二分。發行の翌年、通用を廢止せり。寶永錢。寶永通寶。十文錢。當十錢。十當錢。

はうえい-にはうちやうぎん 寶永二寶丁銀 【名】 はうじちやうぎん(寶字丁銀)に同じ。

はうえい-まつり 寶永祭 【名】 寶永三年十二月、江戸の根津神社を、池の端なる徳川中納言綱豐の邸内(即ち今の社地)に遷して、社殿を造營せし時の祭禮。

ばう-えき 防疫 【名】 傳染病を豫防すること。

ばうえき-かんり 防疫監吏 【名】 防疫職員の一。内務大臣が、傳染病の豫防に關して、特に必要と認むる時、臨時に廳・府・縣に置き、上官の命を承けて、防疫の事務に從事せしむる判任官待遇。

ばうえき-くわん 防疫官 【名】 防疫職員の一。内務省に置き、内務大臣の指定したる廳・府・縣に配屬し、地方長官(東京府にありては警視總監)の指揮・監督を承けて、その廳・府・縣の防疫の事務を掌る奏任官。

ばうえきくわん-ほ 防疫官補 【名】 防疫職員の一。内務省に置き、内務大臣の指定したる廳・府・縣に配屬し、地方長官(東京府にありては警視總監)の指揮・監督を承けて、その廳・府・縣の防疫の事務を掌る判任官。

ばうえき-しよくゐん 防疫職員 【名】 内務省及び廳・府・縣に置きて、防疫の事務に從事する職員、即ち防疫官・防疫官補・防疫員・防疫監吏・防疫評議員の總稱。

ばうえき-ひやうぎゐん 防疫評議員 【名】 防疫職員の一。内務大臣が特に必要と認むる時、防疫の事務に關して、意見を開陳せしむるために奏請し、内閣の任命を經て、廳・府・縣を指定して、臨時に置く評議員。

ばうえき-ゐん 防疫員 【名】 ㊀防疫職員の一。内務大臣が防疫に關して、特に必要と認むる時、臨時に廳・府・縣に置き、上官の命を承けて、防疫の事務に從事する判任官待遇。㊁宮内省の主殿(トノモ)寮警察部の職員の一。防疫の事務に從事する判任官待遇。

ばう-えつ 貌閲 【名】 大寶令の制にて、戸籍を作るに當り、その年、丁年・老年又は疾病にて、課役を徴し又は免ずべき人ある時、國司親らその容貌を閲して、姦欺を防ぎたること。

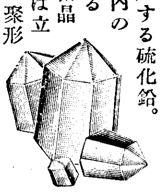
はう-えん 砲烟・砲煙 【名】 發砲の際に發する烟。つつのけむり。

はう-えん 放演 【名】 放逸によりて、演藝・演説などをなすこと。

はう-えん 芳縁 【名】 めでたき縁。平家「先世の芳縁も淺からずや思はれけん」

はう-えん 保延 【名】 崇徳天皇の御代の年號(紀元一七九五―一八〇一年)。

はうえん-くわう 方鉛鑛 【名】 〔鑛〕『英 Galena』天然に產する硫化鉛。百分の八十七以内の鉛を含み、鉛を得る主要原料とす。結晶は、多く立方體又は立方體と八面體との聚形なれども、粒狀又は緻密の聚合體なるもあり。劈開は極めて完全にして、比重は七・四、硬度は甚だ低し。熱する時は、硫黃は燃えて、鉛のみ殘留す。我國にては、羽後國の阿仁(アニ)、加賀國の倉谷(クラタニ)等を主產地とす。



（はうえんくわう）

ばうえん-りん 防烟林・防煙林 【名】 人生又は植物に有毒なる煤烟並びに瓦斯の被害を阻止・減少するため、これらを發散する鑛山及び製造工場等の附近に、烟害に對する抵抗力強き樹木、例へば柃(ヒサカキ)・大島櫻等にて仕立てたる森林。

はう-おん 芳恩 【名】 他人より受けたる恩の敬稱。ごおん。芳惠。

はう-おん 報恩 【名】 恩に報ゆること。おんがへし。報德。

ばう-おん 冒蔭 【名】 他の蔭を冒して出身すること。後紀「冒蔭之徒、若能自首、宜ㇾ從二改正一」

ばう-おん 忘恩 【名】 恩を忘るること。おんしらず。曾我「二度の忘恩を恥ぢて」

はうおん-ぐら 報恩藏 【名】 ほうおんぐら(報恩藏)を見よ。

はうおん-こう 報恩講 【名】 〔佛〕ほうおんこう(報恩講)を見よ。

はうおん-しやりこう 報恩舍利講 【名】 〔佛〕ほうおんしやりこう(報恩舍利講)を見よ。

はうおん-ゑ 報恩會 【名】 〔佛〕ほうおんゑ(報恩會)を見よ。

はう-か 邦家 【名】 くに。國家。邦國。

はう-か 砲架 【名】 『英 Gun carriage』砲身を据うる臺。

はう-か 砲家・礮家 【名】 はうじゆつか(砲術家)に同じ。

はう-か 放歌 【名】 大聲を發して、詩歌をうたふこと。

はう-か 放下 【名】 ㊀なげおろすこと。すてておくこと。てばなすこと。放棄。放擲。拋棄。ほかす(放下す)參照。「拋下」㊁おろすこと。くだすこと。投下。㊂放下僧の行ふわざ。㊃はうかそう(放下僧)㊀の略。㊄〔佛〕はうげ(放下)に同じ。

種(ネタ)の無い放下は使はれぬ 【句】 「種の無い手品(テジナ)は使はれぬ」に同じ。

〔諺語〕　「ら(上不見櫻)に同じ。

はうか【名】〔植〕『ははかの音便』**うはみずざく**

はう-が 寶駕【名】**せいが**(聖駕)に同じ。

はう-が 萌芽【名】**一**芽の萌え出づること。又その芽。めざし。めだし。**二**物事の始めて行はるること、又その始。

ばう-か 榜歌【名】船人の歌。うなうた。

ばう-が 忘我【名】**一**恍惚として、わが身の存在を忘るること。**二**〔哲〕**だっこん**(奪魂)に同じ。

はう-かい 烹醢【名】支那古代の重刑の一。罪人を、生きながら釜の中にて煮、又は、ひしほにせしこと。　「よ。

はう-がい 寶蓋【名】**ほうがい**(寶蓋)を見

はう-がい 包蓋【名】〔植〕**はうひ**(包被)に同じ。　「に同じ。

ばう-がい 芒鞋・芒鞵【名】**ばうあい**(芒鞋)

ばう-がい 妨害【名】さまたげて、害を與ふること。さまたぐること。じやま。

ばう-がい 妨礙・妨碍【名】さまたげささふること。じやま。

はうかい-せき 方解石【名】〔鑛〕六方晶系に結晶して、天然に產出する炭酸カルシウム。結晶形甚だ多種にして、雙晶多し。色は黒・褐もあれど、無色にして透明なるものは、複屈折の現象を呈するを以て、光學上の器械に作り、緻密なる一種は、石版印刷用に供す。又、石灰石・大理石・鐘乳石と同一成分なるより、酸(シ)を加へて、炭酸を採り、燒きて、石灰を作る。

はう-かう 方向【名】**一むき**。かた。方角。**二**めあて。あて。目途。方針。進路。**三**志の向ふ所。人生の進路。身のふりかた。　「よきにほひ。

はう-かう 芳香【名】かうばしきかをり。

はう-かう 保衡【名】『書經の說命篇に「昔先正保衡、作二我先王一」とあり。天下、この人に倚りて、平衡を得る義』**あかう**(阿衡)に同じ。正統記「殷の代に、伊尹といふ聖臣あり、湯及び太尹を輔佐す。これを保衡といふ(阿衡ともいふ)。その心は攝政といふ」

はう-かう 砲腔【名】大砲の內面、空洞をなせる部分。

はう-かう 報效【名】『南史に「荷二國重恩一、無二以報効一」とあり』報恩のために、力を効(イタ)すこと。

はう-かう 放校【名】不都合の行爲ありたる學生を、學校より放逐すること。

はう-かう 放效・倣傚【名】人の行爲に見ならふこと。　「ること。咆號。

はう-かう 咆哮【名】獸類のさけび。たけ

はう-がう 咆號【名】前條に同じ。

ばう-かう 暴行【名】**一**亂暴なる行爲。**二**〔法〕不法なる腕力を、他人の身體又は物に加ふること。　「ち。

ばう-かう 傍巷【名】よこちやう。こみ

ばう-がう 房號・坊號【名】所帶の寺院なき僧の、その名の外に、國名などに、房の字を添へて呼ぶ稱號。我國特有のものにて、印度にも、支那にも、その例なし。接尾語の**ばう**(房)參照。義經記「坊號をせよとて、……上野坊、上總坊、下野坊などといふ名を附けてぞ呼びたる」

はうかう-ぎくわい 報效義會【名】後備海軍大尉郡司成忠が、我國の北門守備のために組織したる會。會員は、自ら千島に渡りて、拓殖の勞を執りつつ、守備に任ず。

ばうかう-ざい 暴行罪【名】〔法〕他人に暴行を加へたるによりて成立する罪。傷害罪と呼ぶもの、廣義に解すれば、これを包含す。　「さう(石持草)の漢名。

ばうかう-さい 茅膏菜【名】〔植〕**いしもち**

ばうかうさい-くわ 茅膏菜科【名】〔植〕**いしもちさうくわ**(茅膏菜科)に同じ。

はうかう-ざくら はうかう櫻【名】〔植〕『はうかうははうかの訛なるべし』**うはみずざくら**(上不見櫻)に同じ。

はうかうせい-くわがふぶつ 芳香性化合物【名】〔化〕次條に同じ。

はうかうぞく-くわがふぶつ 芳香屬化合物【名】〔化〕『英 Aromatic compounds』有機化合物の二大別の一。炭素原子の環狀に結合せるもの、即ちベンゼン・ナフタレン・アンスラセン及びそれらの物より誘導して得る有機化合物の總稱。これに屬するものは、多く芳香を有す。芳香性化合物。

はうかう-ちんき 芳香丁幾【名】『羅 Tinctura aromatica』桂皮(ケイヒ)・生薑(シヤウガ)・小豆蔻(ヅク)などを、種種の分量にまぜ、稀酒精に七日間冷浸し、壓搾・濾過したる液に、枸櫞精(クエンセイ)を混和して製したる、赤褐色の藥液。健胃・驅風劑として用ふ。

はうかう-ばん 方向鈑【名】〔兵〕火砲の間接射擊の時、これに一定の方向を付與する照準器。結構は種種あれども、要領は同一なり。

はうかう-りうさん 芳香硫酸【名】『羅 Tinctura aromatica acoid』硫酸十分、稀酒精九十分の割合にて、後者を攪拌しつつ、前者を徐徐に注ぎ加へ、これに桂皮(ケイヒ)粗末と生薑(シヤウガ)粗末とを、五分づつ加へ、濾過して製したる、褐赤色なる藥液。健胃・驅風劑として用ひ、又、清涼性の飲料に附加して用ふ。

はうが-かうしんはふ 萌芽更新法【名】〔農〕『獨 Ausschlagverjüngung』天然造林法の一。萌芽によりて更新するもの。萌芽性を有する樹種のみに限りて行ひ、主として薪炭材・粗朶材、並びに小用材を產出する闊葉樹林に施す。

はう-がき 方書【名】**一**方法を記してある書物(カキモノ)。**二**醫師の處方を記してある書物(カキモノ)。處方書(シヨハウガキ)。

はう-かく 方客【名】**はうし**(方士)に同じ。

はう-かく 方格【名】方正にして、嚴格なること。

はう-かく 寶閣【名】立派なる殿閣。

はう-かく 胞核【名】〔植〕『獨 Blasenkern』內部に著大なる水胞を藏する細胞。例へば芭蕉の乳汁液內の細胞の類。

はう-がく 方角【名】**一はうゐ**(方位)に同じ。**二はうかう**(方向)**一二**に同じ。**三**施すべき手段。てだて。方法。

方角が無い【句】方角分らず。見當

附かず。〔江戸時代の語〕女殺油地獄「大阪は、どちらやら、方角が無い。こっちは京の方、あの山は暗峠(クラガリタウゲ)か、但し比叡山か」

方角を失ふ【句】何れの方へ進みて然るべきか、目あて附かず。東西を方ふ。盛衰記「北は岩石高うして上(ノボ)るべき樣なし、南は深き谷なり、下すべき便(タヨリ)なし、暗さは暗し、案內は知らず、いかがすべきと、方角を失へり」

方角を附ける【句】目あてをこしらふ。將來の方針を定む。

はう-がく 訪學【名】訪問して學ぶこと。就きて學ぶこと。著聞「更に下問を恥ぢず、貴賤を論ぜず、訪學しけり」　「じ。

はう-がく 放學【名】**はうくわ**(放課)に同

はう-がく 邦樂【名】自國在來の音樂。

ばう-かく 暴客【名】暴行をなす人。あばれもの。暴漢。

ばう-かく 防閣【名】元正天皇の養老三年より聖武天皇の神龜五年まで、五位以上の家に補して、防衛・驅使に供せしめしもの。即ち帳內(チヤウナイ)・資人の類。

ばう-かく 妄覺【名】〔哲〕錯覺と幻覺との總稱。まうかく。

はうがく-きんき 方角禁忌【名】**はういみ**(方忌)に同じ。拾芥抄「方角禁忌事」

はうがく-ちがひ 方角違【名】**一**方角の違ひてあること。和合人「こいつは、大層畑が通町(トホリチヤウ)だ。ちっと、そっちの銚子の酒をうめの平內とやってくんねえ。……通町へ条(メノ)の平內を持込むやうな方角違では、地口どころか、地無知(チム)といふのだ」**二けんたうちがひ**(見當違)**一**に同じ。

はうがく-ひけしやく 方角火消役【名】德川幕府の職制の一。大名十二家に命じて、江戶城の內郭・外郭の一部なる大手(オホテ)・櫻田など要所の消防を分擔せしめしもの。

はうがく-み 方角見【名】**じしやく**(磁石)に同じ。〔江戸時代の語〕二代男「方角見を取出し、この劒先の振る方へ御趣向と申す。定まって、北へ向ふ針の先」

はうか-し 放下師【名】㊀はうかそう(放下僧)に同じ。㊁『「種の無い放下は使はれぬ」を見よ』**てじなし**(手品師)に同じ。織留「今時、仕懸山伏(シカケヤマブシ)とて、さまざま護摩の壇に繰(カラクリ)致し、白紙人形に土佐踊さすなど、この前、松田といふ放下師がしたる事なれども」本朝文鑑(涼賦)「辻談義あり、放下師あり」

ばうか-し 防鴨河使【名】『鴨の字を訓まずにおくこと、古來の習慣なり』古、山城國鴨河の堤防修築の事を掌りし職。衛門佐にして檢非違使を兼ぬる者、長官(定員一人)に任ぜられ、判官・主典(定員各二人)は、衛門府の官人が兼ぬる制なりき。**ばうかどのがはし**(防葛野河使)參照。

はうか-そう 放下僧【名】㊀『はうか(放下)㊂の義より出でたる名稱なりといふ』頭巾の上に烏帽子を被り、小切子(コキリコ)を打ち、歌ひ、舞ひ、さまざまの技藝を演ぜし者。鎌倉時代より田樂と並び行はれたり。放下師。放下。謠曲(放下僧)「御身は放下僧に御なり候へ」㊁謠曲の一。兄弟二人、身を放下僧に扮して、父の仇を報ぜしことを作れるもの。

（はうかそう㊀）

はうか-ぞう【名】〔植〕㊀樓斗菜(ヲダマキ)の一品種。距(ヨキ)は大にして、花瓣の上に出でざる點、普通の樓斗菜と異なり。うけざきをだまき。㊁**やまをだまき**(山樓斗菜)に同じ。

はうか-つかひ 放下遣【名】**はうかし**(放下師)㊁に同じ。

ばうかどのがは-し 防葛野河使【名】古、山城國葛野河の堤防修築の事を掌りし職。初、防鴨河使(バウカシ)と並置せしが、天長元年、毎三年に交互に遷り稽ることとなり、後、毎三年を毎四年に延長し、貞觀三年、兩使を共に廢して、山城國司に隸し、後、臨時の職となれり。

ばう-がね 坊がね【名】『がねは接尾語』將來、東宮の地位に立ちたまふべき御方。〔古語〕源氏「次の坊がねにて、いと覺ことに、重重しう、人柄もすくよかに」

はう-かふ 保甲【名】支那の自治體なる保と甲と。**はい**(牌)㊁參照。

はう-がふ 抱合【名】㊀だきあふこと。抱圍。㊁〔化〕**くわがふ**(化合)に同じ。

ばうか-ふくめん 防蚊覆面【名】〔兵〕臺灣守備隊に、特に支給して、面部を覆ひ、蚊を防ぐに用ひしむるもの。荒目織の布にて製し、形、頭巾に似たり。

はうか-ぼこ 放下鉾【名】京都の祇園祭の鉾の一。犬子集「ひかへ繩に蜘舞(クモマヒ)させよ放下鉾」

はう-かん 芳翰【名】㊀かんばしき筆。㊁他人の書翰の敬稱。芳墨。芳札。芳書。芳紙。芳牘。貴翰。尊翰。

はう-かん 寶鑑【名】㊀寶物の鏡。貴き鏡。寶鏡。㊁龜鑑となるべき事を記してある書物。

はう-かん 砲艦【名】『英 Gunboat』比較的大なる砲門を備へ、沿海の攻防に使用する小型の軍艦。吃水淺く、輕快なり。一千噸未滿と一千噸以上との二等に分つ。

はう-かん 邦艦【名】我國の軍艦。

はう-かん 芳甘【名】かうばしく甘きこと。芳香と甘味とを有すること。太平記「芳甘を酌みて立つる時、建溪の風味濃かなり」

はう-がん 芳顔【名】㊀うつくしき顔。㊁他人の顔の敬稱。

はう-がん 砲眼【名】〔兵〕砲を發射するために、砲塔・穹窖・砲臺等の鐵壁又は磚壁に穿ち設けたる孔。使用の目的は、砲門に同じ。

はう-がん 榜眼【名】支那の科擧の制度にて、進士に及第せる三人の內の、第二等なる者。(狀元・探花に對して)

はう-がん 包含【名】㊀その內に併せ含むこと。㊁**ないざい**(內在)㊀に同じ。

ばう-かん 暴漢【名】暴行を爲す者。あばれもの。亂暴人。暴客。

ばう-かん 坊間【名】**ばうちゆう**(坊中)に同じ。

坊間の書【句】普通一般に行はるる書。俗書。

ばう-かん 冒寒【名】寒さをかすこと。

ばう-かん 暴悍【名】亂暴にしてたけきこと。あらあらしきこと。

ばう-かん 防寒【名】寒さを防ぐこと。

ばうかん-い 防寒衣【名】防寒のために、特に仕立てたる衣服。

ばうかん-ぐ 防寒具【名】防寒に必要なる道具。即ち防寒衣・手袋などの類。

ばうかん-ざい 防乾劑【名】或物に混和して、その乾燥を防ぐに用ふる藥劑。

はうがん-し 方眼紙【名】『英 Section paper』縱橫線によりて、多數の方形なる空間を畫きたる紙。もと橫斷面圖を畫くためのものなれども、時として、簡單なる見取圖構造又は各種の平面圖を畫くにも使用す。

ばうかん-し 防寒紙【名】肌著用又は下著用の織物に代用するために、楮の皮を材料とし、蒟蒻(コンニヤク)粉の溶液と明礬水とを混じて製造せる厚紙。

ばうかん-よう 防寒用【名】防寒の目的にて用ふること、又その物。

はうかん-れっかい 胞間裂開【名】〔植〕『英 Septicidal dehiscence』果實の成熟後縱裂するものの一。內縫線又は外縫線に沿ひ、或は內外兩縫線に沿ひて裂開すること。石南(シヤクナゲ)・躑躅(ツツジ)などの果實これなり。(胞軸裂開・胞背裂開に對して)

はうが-りん 萠芽林【名】〔農〕根株又は幹株の切口より發生せる萠芽にて成立する森林。林木は、喬林のごとく、一回の利用にて終ることなく、常に樹體の一部分のみを利用す。

はう-き 帚・箒【名】『**ははき**(帚)の音便』屋內又は庭園・道路などの塵芥を掃除するに用ふる具。草帚・竹(タケ)帚・稈心(ミゴ)帚・棕梠帚・羽(ハ)帚などの種類あり。ははき。

はう-き 方旗【名】方形なる旗。

はう-き 方櫃【名】後三條天皇の時造りたる、四角なる枡。一斛を容れたりといふ。古事談「斛器は、方櫃を差して、石を括りて下げておもしにして、跨木(マタギ)に懸けて、於二穀倉院一國國の米をば被レ納けり」

はう-き 邦畿【名】天子直轄の地域。畿內。

邦畿千里【句】『詩經の商頌玄鳥篇に「邦畿千里、惟民所レ止」とあるに本づく』支那周代の封建制度にて、王者の直轄の地の、方千里なりしこと。

はう-き 邦規【名】國家の規則。

はう-き 邦紀【名】國家を治むるのり。

はう-き 芳卉【名】かんばしき草。

はう-き 芳規【名】前人の立てたる善き規則。

はう-き 芳紀【名】若き美人の年齡。妙齡。

はう-き 芳氣【名】**かうき**(香氣)に同じ。

はう-き 寶器【名】貴き器物。たから。

はう-き 放氣【名】きまま。きまかせ。

はう-き 放棄【名】『史記の樂書に「放二棄詩書一、極二意聲色一、祖伊所二以懼一也」とあり』なげすつること。すておくこと。拋棄。拋擲。

はう-き 拋棄【名】㊀前條に同じ。㊁〔法〕相手方の受諾を必要とせず、單に權利者の意思表示によりて、權利又は利益を喪失せしむること。

はう-き 烹葵【名】陰曆七月の異稱。

はう-き 寶龜【名】光仁天皇の御代の年號(紀元一四三〇年—一四四〇年)。

はう-き 伯耆【名】〔地〕山陰道六國の一。東伯(トウハク)・西伯・日野の三郡に分れ、全國、鳥取縣の管轄に屬す。古稱、ははき。伯州。

はう-ぎ 方技【名】㊀わざ。術(ジユツ)。方術。㊁『漢書の藝文志に「侍醫李柱國校二方技一」とあり』**いじゆつ**(醫術)に同じ。

はう-ぎ 庖犧【名】〔人〕**ふくき**(伏羲)に同じ。

ばう-き 耄期【名】八九十歲になりたる時。おいぼれどき。

ばう-き 耄者【名】老いぼるること、又、老いぼれたる人。

ばう-き 傍朞【名】傍親にて、期の喪に服すべきもの。

ばう-き 望氣【名】雲氣を望み見て、その吉凶を判ずること、又その人。

ばう-き 謗毀【名】**きばう**(毀謗)に同じ。

ばう-き 忘機【名】機心を忘るること。世事のわづらひを忘るること。

ばう-ぎ 妄議【名】筋道の立たぬ議論をなすこと、又その議論。

ばう-ぎ 謗議【名】あしざまに批評すること。そしり。誹謗。

はう-きう 報仇【名】**ふくきう**(復仇)に同じ。

ばう-きう 旁求【名】あまねく尋ね求むること。

ばう-ぎう 旄牛·犛牛·犂牛【名】〔動〕『山海經に「潘侯之山有レ獸焉、其狀如レ牛、而四節生レ毛、名曰二旄牛一」とあり。犛と犂とには、又、「リ」の音あり。**りぎう**(犂牛)參照』**やく**(犂牛)に同じ。

ばうぎう-じ 牻牛兒【名】〔植〕**ふうろさう**(風露草)の漢名。

ばうぎうじ-くわ 牻牛兒科【名】〔植〕**ふうろさうくわ**(牻牛兒科)に同じ。

ばうぎうじ-べう 牻牛兒苗【名】〔植〕**ふうろさう**(風露草)の漢名。

はうき-がは 箒川【名】〔地〕下野國にある川。水源は高原火山の北。上流は赤川といふ。鹽原温泉の在る所を通過し、關谷(セキヤ)の南方にて、那須野の西邊を流れ、末は那珂川に入る。流程十四里。

はうき-ぎ 帚木·箒木【名】〔植〕**ははきぎ**(帚木)㊀に同じ。

はうき-ぐさ 帚草·箒草【名】〔植〕前條に同じ。

はうき-くわん 放汽管【名】『英 Blast pipe』石炭の燃燒を助長するため、火爐又は煙突の中に蒸氣を放ち、通風を增加する蒸氣管。

はうき-ざや 帚鞘·箒鞘【名】『形、草帚に似たるよりいふ』毛皮にて作れる尻鞘。

はうき-じり 箒尻【名】『もと竹箒(タカバウキ)の尻にて敲きしに代へたるよりの名なるべしといふ』江戸時代に、敲(タタキ)·拷問の時に用ひし棒。割竹二本を麻苧にて包み、上を觀世撚にて卷き、持つ所に白革を卷き、太さ三寸廻りほど、長さ一尺九寸ほどにしたるもの。たたきばうき。

はうき-たけ 箒茸【名】〔植〕**ははきたけ**(箒茸)に同じ。

はうき-ばん 寶龜版【名】**ひやくまんたふ**(百萬塔)を見よ。

ばう-きふ 忙急【名】いそがしきこと。繁忙。

はうき-ふじ 伯耆富士【名】〔地〕**だいせん**(大山)に同じ。

はうき-ぼし 彗星【名】**すゐせい**(彗星)に同じ。

はうき-ほんぎ 寶基本記【名】〔書〕神道五部書の一。伊勢内外兩宮御鎭座の事、又、景行天皇の御代十五年より天平勝寶元年までの遷宮及び制度·祭祀·殿舍などに關することを記せるもの。一卷。一名、造伊勢二所太神宮寶基本記。

はう-きん 邦禁【名】**こくきん**(國禁)に同じ。

はう-きん 方金【名】昔の方形の金貨。即ち一分金·二分金·一朱金·二朱金などの類。

はう-きん 砲金【名】〔化〕**はうどう**(砲銅)に同じ。

はう-ぎん 芳吟【名】**はうえい**(芳咏)に同じ。

はう-ぎん 寶銀【名】**はうじぎん**(寶字銀)に同じ。

はう-ぎん 放銀【名】**はうし**(放資)に同じ。

はう-ぎん 放吟【名】聲を張上げて、詩を吟ずること。

ばう-きん 傍近·旁近【名】**きんばう**(近傍)に同じ。

はうき-め 帚目·箒目【名】箒にて掃きたる地面に殘る痕(アト)。炭俵(游刀)「箒目に霜の蘇鐵の寒さかな」

はうき-もろこし 帚蜀黍·箒蜀黍【名】〔植〕**ははきもろこし**(箒蜀黍)に同じ。

はう-きやう 寶鏡【名】㊀寶物のかがみ。たふとき鏡。㊁**やたのかがみ**(八咫鏡)に同じ。**はうけん**(寶劍)㊂參照。盛衰記「寶鏡……詔二天兒屋根命一同侍二殿内一善爲二防護一者歟」正統記「神代よりの寶鏡及び靈劍をば、皇女豐鋤入姫(トヨスキイリヒメ)の命に附けて、大倭(ヤマト)笠縫の邑といふ所に、神籬(ヒモロギ)を建て、崇め奉らる」

はう-きやう 方磬·方響【名】樂器の一。普通には鐵·銅、又、古くは石又は玉にて造り、種類及び形狀は一樣ならざれども、金屬にて、長さ九寸、廣さ二寸、上部圓形、下部方形に造りたるを普通とす。上下二段の架に八枚づつ懸け、下段は右方を首とし、その名を合·四·一·上·江·赤·工·凡といひ、上段は左方を首とし、その名を上凡·六·五·卬(キサウ)·上卬·亡·斗·下といひ、二本の桴(バチ)にて擊ちて鳴らす。はうけい。

はう-きやう 包脛【名】脚の脛(ハギ)の上部、羽毛に蔽はれたる所。

はう-きやう 包莖【名】**はうけい**(包莖)に同じ。

はう-きやう 邦境·邦疆【名】**こくきやう**(國境)に同じ。

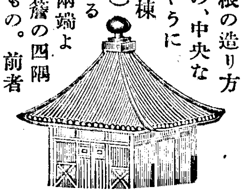
はう-ぎやう 方形·方桁·寶形【名】〔建〕㊀**はうぎやうづくり**(方形造)の略。㊁**はうぎやうやね**(方形屋根)の略。

ばう-きやう 望鄕【名】故鄕を戀しく思ひて、そなたの空を望むこと。

ばう-ぎやう 貌形【名】**けいばう**(形貌)に同じ。太平記「召し仕はれける夫人の中に、貌形殊類なく勝れたるを選んで」

はうきやう-たいはく 寶鏡大白【名】馬の毛色の一。額の白きもの。吉相なりとせられたり。

はうぎやう-づくり 方形造·方桁造·寶形造【名】〔建〕屋根の造り方の一。隅棟(スミムネ)の、中央なる一箇所に集るやうに造るもの。又、大棟の兩端に隅棟(スミムネ)の、集るやうに造るもの、即ち棟の兩端より、降棟(クダリムネ)を、簷の四隅まで下げて造るもの。前者は、屋根の伏圖は、方形をなし、頂に露盤·寶頂などを冠せしむ。


（はうぎやうづくり）

ばうきやう-びやう 望鄕病【名】㊀**ほおむしっく**(望鄕病)に同じ。㊁**のすたるぢや**に同じ。

ばうきやう-ふう 暴強風【名】〔地〕『英 Violent gale』風力階十級中の第八級の風。

はうぎやう-やね 方形屋根·方桁屋根·寶形屋根【名】方形造の屋根。

はう-きやく 放却·拋却【名】うちすてておくこと。拋棄。

ばう-きやく 忘却【名】わするること。失念。

ばう-ぎやく 暴虐【名】人を非道に扱ふこと。人を虐ぐること。

ばう-きゆう 茅宮【名】茅葺(カヤブキ)の宮殿。太平記「城南(セイナン)の茅宮に、閑寂を耕してぞ隱居したまひける」

はう-きよ 包擧【名】**なうくわつ**(囊括)に同じ。

はう-ぎよ 方魚【名】〔建〕**はうぎやう**(方形)の訛。

はう-ぎよ 鮑魚【名】ひもの。乾魚。曾我「惡人に交れば、鮑魚の市藏に入るが如し」鮑魚の肆(シ)に入るが如し【句】「不善人と居るは、鮑魚の肆に入るが如し」を見よ。

はう-ぎよ 抱魚【名】河豚(フグ)を脊開にし、脊鰭を切取り、なほ一二寸切込みて、立鹽漬とし、反轉して、肉を表に向け、乾燥したる水產製品。支那人、嗜食す。

ばう-きよ 暴擧【名】㊀亂暴なる振舞。暴行。㊁**ばうどう**(暴動)に同じ。

ばう-きよ 妄擧【名】すぢみちに違ひたる振舞。

ばう-ぎよ 防禦【名】防ぎ守ること、又その設備。

ばうぎよ-えいざうぶつ 防禦營造物【名】〔兵〕國防のための營造物。即ち砲臺·堡壘·軍港·要港·防禦港などの類。

ばうぎよ-かいめん 防禦海面【名】〔兵〕戰時又は事變に際して、防禦上の必要より、船舶の通航·移動その他漁獵·採藻など、軍事上の障害となるべき行爲を禁止し、又は制限する、一定の區域の海面。

ばうぎよ-かふはん 防禦甲板【名】〔兵〕『英 Protective deck』軍艦の致命部を防禦するため、水線に近き位置に、厚き鋼板にて構造せる、一層の甲板。水雷艇·驅逐艦及び小き砲艦を除く外、皆、これを備ふ。防護甲板。

はう-ぎよく 寶玉【名】貴きたま。たからとする玉。

ばうぎよ-こうじ 防禦工事【名】〔兵〕防禦物を造る工事。本防禦・副防禦の別あり。

ばうぎよ-すゐらい 防禦水雷【名】〔兵〕『英 Submarine mine』主として、敵艦の來襲を防禦するため、河口・港灣等の水中に布設する水雷。視發水雷と觸發水雷とに分つ。布設水雷。（攻擊水雷に對して）

ばうぎよ-せん 防禦線【名】〔兵〕敵の攻擊を防禦すべき線路。

ばうぎよ-どうめい 防禦同盟【名】〔法〕ばうしゆ-どうめい（防守同盟）に同じ。

ばうぎよ-ぶつ 防禦物【名】防禦の用に供する物。

ばうぎよ-まう 防禦網【名】〔兵〕**すゐらい**ばうぎよまう（水雷防禦網）の略。

はうき-らん 帚蘭・箒蘭【名】〔植〕**ははきらん**（帚蘭）に同じ。

はうき-りう 伯耆流【名】拔刀術の一派。慶長の頃、片山伯耆守久安（拔刀術中興の祖にして、林崎甚助重信の門人）の創めしもの。

はう-ぐう 方隅【名】㊀天下の四方と四隅と。國のすべての方角。「方隅、事無し」㊁一方の地。「任を方偶に受く」

ばう-ぐふう 暴颶風【名】〔地〕『英 Most-violent hurricane』風力階十級中、最後の階級なる風。

はうくん 放勳【名】〔人〕『書經の堯典に見ゆ。功勳の四達する義。もと史臣の贊美の稱なりしに、後、その號又は名の如く思はるるに至れり』**げう**（堯）の異稱。

ばう-くん 亡君【名】亡(ナ)くなられたる主君。先君。

ばう-くん 暴君【名】暴虐なる君主。暴主。

ばう-くん 傍訓【名】漢文の傍に施せる訓點。ふりがな。

はう-くわ 砲火【名】發砲の火。

砲火を交ふ【句】敵・味方互に發砲す。戰端を開く。

はう-くわ 寶貨【名】くわへい（貨幣）に同じ。

はう-くわ 放課【名】一定の時間の課業を終ふること。放學。

はう-くわ 放火【名】火を放ちて、家などを燒くこと。つけび。ひつけ。

はう-くわ 半靴【名】『半(ハン)靴の音便』古の靴の、深靴よりも淺きもの。黑き韋(ナメシガハ)にて造り、靴氈(クツセン)には、赤地の錦を用ひ、衣冠・直衣(ナホシ)・狩衣にて、騎馬の時に用ひたり。又、束帶にても、騎馬の時は用ひたりといふ。枕「深ぐつ・はうくわなどはきて、廊のほどなど、くつすり入るは」

ばう-くわ 防火【名】火災を防ぐこと。

ばう-ぐわ 旁臥【名】橫たはりふすこと。ねころぶこと。

はう-ぐわい 方外【名】㊀『莊子の大宗師篇に「孔子曰、彼遊㆓方之外㆒、而丘遊㆓方之內㆒者也」とあるに本づく』人たる者の守るべきおきての範圍外。方制の外。世外。物外。（方內に對して）㊁僧侶又は醫師・畫師など。長袖の者。㊂普通の筋道をはづれてあること。論外。無方。法外。㊃『楚辭に「覽㆓方外之荒忽㆒兮」、司馬相如の難㆓蜀父老㆒といふ文に「群生澍濡、溢㆓乎方外㆒」とあり』國の四方の外。外國。夷狄の地。（方內に對して）

方外の學【句】『眞德秀の文に「雖㆔早從㆓方外之學㆒、而跬步不㆑忘㆓君父㆒」とあり』儒敎以外の敎。佛敎。

方外の地【句】『漢書の嚴助傳に「越方外之地、劗髮文身之民也」とあり』**はうぐわい**（方外）㊃に同じ。

方外の徒【句】次條に同じ。

方外の侶【句】世俗の外のともがら、即ち僧侶など。方外の徒。

ばう-ぐわい 望外【名】願ひ望めるより以上に、好都合なること。

はう-くわう 放光【名】㊀光を放つこと。㊁〔佛〕佛が、白毫(ビヤクガウ)の光を放つこと。**はうくわうずゐ**（放光瑞）參照。正統記「太子聖德、……、御自も、法服を著して、經を講じたまひしかば、天より花を降らし、放光・動地の瑞ありき」

はう-くわう 放曠【名】しまりのなきこと。やりばなし。

はう-くわう 彷徨・彷偟・方皇【名】往き戻りつすること。さまよふこと。徘徊。

はう-くわう 方廣【名】〔佛〕**はうどう**（方等）に同じ。

ばう-くわう 望光【名】次條を見よ。

望光の板【句】「押附の板」に同じ。

ばう-くわう 膀胱【名】〔動〕高等動物の尿を瀦留する、嚢狀の器官。恥骨縫際の後方・上位にあり、形は空虛なる時は、鈍圓・四角形となりて、上下に壓平せられ、尿滿つれば、球狀を呈し、腎臟より排泄せる尿水を受け、底部・前端より、尿道を通じて、尿を體外に排泄す。いばりぶくろ。ゆばりぶくろ。

ばうくわう-かたる 膀胱加答兒【名】〔醫〕膀胱の粘膜に加答兒の發する病。大腸菌・葡萄狀球菌・連鎖狀球菌・プロテウス菌、その他、チブス菌・肺炎菌・結核菌等、種種の黴菌の傳染によりて發生し、尿排泄の障碍を來たす。急性と慢性との二種あれど、症候には大差なく、何れも尿意の頻數(ヒンサク)と、尿の溷濁とを來せども、前者には、なほ惡寒・戰慄に伴ふ發熱と、放尿の際に於ける疼痛とを來す。

はうくわう-じ 方廣寺【名】㊀京都市下京區建仁寺通にある天台宗の寺。天正十四年、豐臣秀吉の建立に係る。本尊盧遮那(ルシヤナ)佛は、高さ十間餘、大佛殿の棟の高さ二十八間餘なりしが、慶長元年閏七月の地震によりて破壞す。秀吉の薨後、秀頼、德川家康の勸によりて、慶長七年、再興に著手し、十七年落成せしが、梵鐘の銘文の辭句より、德川氏との間に紛議を生ず。豐臣氏滅亡後は、妙法院の管理に歸し、寬文年間、その佛像を寬永通寶に改鑄し、別に木像を安置せしが、寬政十年七月、雷火のために烏有に歸し、後、再興に著手したれども成らず、天保十四年、尾張國の人、半身の像を寄付せしもの、今も存す。寺域は、古の六波羅殿の址なりと。㊁遠江國引佐(イナサ)郡奧山村にある、臨濟宗方廣寺派の大本山。本尊は釋迦牟尼佛。具さには方廣萬壽寺といふ。山號は深奧山、開祖は無文元選、開基は奧山六郎朝藤。元中元年の建立。明治六年、南禪寺に屬し、三十六年、再び獨立して、本山に復し、住職は方廣寺派の管長を兼ぬ。**はんぞうばう**（半僧坊）參照。

はうくわうじ-は 方廣寺派【名】〔佛〕臨濟宗の一派。無文元選を派祖とし、遠江國奧山の方廣寺を大本山とす。

はうくわう-ずゐ 放光瑞【名】〔佛〕「法華(ホッケ)の六瑞」を見よ。

ばうくわう-せき 膀胱石【名】〔醫〕**ねうせき**（尿石）を見よ。

はうくわう-ぶつ 放光佛【名】〔佛〕『**はうくわうずゐ**（放光瑞）を見よ』白毫(ビヤクガウ)の光を放ちて、世界を照せる姿に造れる佛。東鑑「被㆓圖繪㆒、供㆓養放光佛㆒」

はうくわう-へんい 彷徨變異【名】〔生〕『英 Fluctuating variation』極めて親しき血緣を有すること。確實なる或生物に就きて、その相互の性質を比較する時、各性質の同一なること能はざる現象。

ばうくわう-まめ 膀胱豆【名】〔植〕荳(マメ)科に屬する落葉灌木。葉は奇數羽狀複葉、各小葉は、卵形にして、鈍頭をなす。夏季、黃色の花、總狀花序をなして開き、後、大形・扁平にして、甚だ薄き果皮を有し、裂開することなき莢を結ぶ。歐洲の原產。

はうくわ-きやう 放火狂【名】放火の癖ある一種の偏狂。

はうくわ-ざい 放火罪【名】火を放ちて、公共危險を生じ得べき物を燒燬するによりて成立する罪。

ばうくわ-ざい 防火劑【名】不燃燒性又は吸濕性を有せる藥劑。例へば硼酸曹達・硼酸・炭酸マグネシヤなどの類。

はうくわ-じかん 放課時間【名】放課後の休憩する時間。

はうくわ-しきたふ 砲火指揮塔【名】〔兵〕『英 Gun control tower』軍艦に裝備せる各砲を統一・指揮する任にある人の登りて指揮するため、艦內展望廣闊の場所に設けたる塔。構造は司令塔に準じ、甲鐵を以て防禦す。

ばうくわ-しやうへき 防火牆壁【名】火災の延燒を防ぐために、家と家との堺又は地堺に築造したる牆壁。防火壁。

ばうくわ-せん 防火線【名】『英 Fire-line』

火災の延燒を防ぐために設くる空地帶。防火線路。

ばうくわ-せんろ 防火線路【名】前條に同じ。

ばうくわせんろ-てうさゐゐん-きよく 防火線路調査委員局【名】明治十四年九月より同十九年四月まで東京府に置かれ、東京府廳と警視廳との所管の下に、防火線路の調査に從事せし委員局。

はう-くわつ 包括【名】ひきくるめふくむこと。全體を締めくくること。總括。

はうくわつ-ざいさん 包括財産【名】〔法〕『獨 Sachenbegriff』權利と義務とを一括して承繼する場合の財産。(特定財産に對して)

はうくわつ-じゆゐしや 包括受遺者【名】〔法〕包括遺贈を受けたる人。

はうくわつ-ゐぞう 包括遺贈【名】〔法〕包括財産の遺贈。總括遺贈。

ばうくわ-ふ 防火布【名】不燃燒質の纖維にて製し、又は防火劑にて纖維を被ひ、或はこれを固著せる布帛。

はうくわ-ぶつ 包裹物【名】〔鑛〕はうたい(包體)に同じ。

ばうくわ-へき 防火壁【名】ばうくわしやうへき(防火牆壁)に同じ。

はう-くわん 寶冠【名】㊀寶玉にて飾りたる冠。ほうくわん(寶冠)參照。㊁古、女帝の、即位・朝賀などの大儀に著けたまひし禮冠。製作の詳細は知りがたし。

はう-くわん 抱關【名】門を守る人。門番。

抱關・擊柝(ゲタク)【句】『孟子の萬章下篇に「抱關擊柝者皆有二常職一」とあり』身分低き役の者。こやくにん。賤役。

はう-くわん 保管【名】ほくわん(保管)に同じ。

はう-くわん 放還【名】はなちかへすこと。ゆるしてかへすこと。釋放。

はう-ぐわん 砲丸・礮丸【名】大砲の彈丸。

はう-ぐわん 判官【名】㊀はんぐわん(判官)の音便。㊁檢非違使(ケビヰシ)の尉(ジヨウ)。後世、武士のこれに任ぜらるるを名譽とせり。「六條判官源爲朝」「九郎判官源義經」㊂〔人〕みなもとよしつね(源義經)の異稱。

ばう-くわん 坊官【名】㊀春宮坊(トウグウバウ)の職員の全部。(東宮官に對して) 大鏡「坊官の勞に、三位ばかりしたまひて」㊁ちやうむ(廳務)㊂に同じ。「房官」醍醐雜抄「寛平法皇御室御所の時、雲客等出家を遂ぐと雖も、なほ法體にて、官位を帶す。これを坊官と號し、又、殿上法師ともいへり」

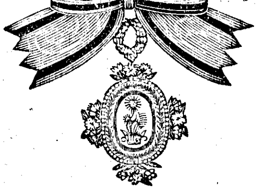
坊官の除目(ヂモク)【句】臨時除目の一。春宮坊(トウグウバウ)の坊官を任ぜしもの。

ばう-くわん 傍官【名】同役の人。傍輩。同僚。千載「傍官ども、加階しはべりけるを聞きて」盛衰記「同僚・傍官が慾に耽ると笑はん事も、いと恥し」

ばう-くわん 傍觀・旁觀【名】傍より見て居ること。をかみ。

ばう-くわん 望觀【名】くわんばう(觀望)に同じ。

はうくわん-しやう 寶冠章【名】勳章の一。勳一等より勳八等までありて、功勞ある婦人に賜ふもの。明治二十一年創設の際は五等までなりしが、二十九年に六等以下を增設せられたり。四等以上は金製・楕圓、五等以下は銀製・楕圓、綬は、黃色の地に錦紅色の小緣あり。勳一等は、大綬を以て、右肩より左脇へ垂れ、勳二等以下は、結蝶狀の綬を用ふ。圖は勳二等を示す。


（はうくわんしやう）

はうぐわん-だい 判官代【名】㊀古、院司(ヰンノツカサ)又は女院司(ニヨウヰンノツカサ)の一員たりし判官。五位又は六位とす。㊁中古、國衙・庄園に置かれ、專ら田政に關する事を掌りし職。

はうぐわん-なげ 砲丸投【名】運動競技中、投擲(トウテキ)の一。金屬にて、砲丸狀に重く造りたる物を、前方に投げて、遠距離に達せしめたるを勝とするもの。

はうぐわん-びいき 判官贔屓【名】『判官は九郎判官源義經にて、兄頼朝に忌まれ、遂に窮死するに至りしに對し、世人の同情深き意にていふ』弱者に對して、同情の念を發すること。毛吹草(政公)「世や花に判官びいきの春の風」

ばうくわ-りん 防火林【名】『獨 Feuermantel』火災の延燒を防ぐために、火力に對する抵抗力强き樹種、例へば珊瑚樹・交讓木(ユヅリハ)・八手(ヤツデ)・樫・椎(シヒ)等にて仕立てたる森林。

はう-げ 放下【名】〔佛〕『手を放して、下に置く義』悟道に入り、一切の諸緣を放ち棄て、無我の我となること。はうか(放下)參照。徒然「所願、心に來らば、……、直に萬事を放下して道に向ふ時は、さはりなく、所作なくて、心身、長く靜かなり」

ばう-げ 妨礙・妨碍【名】ばうがい(妨礙)に同じ。

はう-けい 方形【名】㊀四角なる形。四角。㊁〔數〕『英 Square』相對する兩邊・兩角の相等しき四角形。矩(ク)形と斜方形とあり。更に矩形に、正方形と斜方形とあり。各條を見よ。

はう-けい 方計【名】方法・計略。方略。

はう-けい 方珪【名】ちや(茶)の異稱。

はう-けい 方磬【名】はうきやう(方磬)に同じ。

はう-けい 芳惠【名】はうおん(芳恩)に同じ。

はう-けい 芳契【名】たふとき事のちぎり。盛衰記「十餘年の芳契、名殘、實に惜しく侍れども」

はう-けい 包莖【名】陰莖の、龜頭が皮に包まれて顯れぬもの。かはかぶり。はうきやう。

はう-けい 寶髻【名】古、貴女の禮裝の時、髮飾の具として用ひし、金玉を彫鏤したるもの。又略して、陪膳に候する女房などの、單に垂髮を頂上に丸く束ねあげしもの。さいし(釵子)㊀・ひたひ(額)㊁參照。令義解「以二金玉一飾二髮緖一故云二寶髻一」

ばう-けい 亡兄【名】死にし兄。

ばう-けい 妄計【名】みだりなるはかりごと。無謀なるはかりごと。

ばう-けい 傍系【名】直系より分派せる系統。(直系に對して)

ばう-けい 傍逕【名】㊀よこみち。わきみち。㊁事の本筋(ホンスヂ)を逸(ソ)れたる筋道。わきみち。よこみち。邪路。

ばう-けい 貌形【名】けいばう(形貌)に同じ。

ばう-けい 忘形【名】『莊子に「養レ志者忘レ形」とあり』己の形體あることを忘るる義。物我の境を超脫し、無爲・自然の道を悟ること。

忘形の友【句】忘形の交をなす友人。親友。醒睡笑「晉賈謐於二金谷園一聚二三十四友一、各作二忘形友一、結二莫逆盟遊一」

忘形の交【句】『唐書の孟郊傳に「郊性介、少二諧合一、韓愈一見爲二忘形交一」、又、李白の詩に「忘レ形到二爾汝一」とあり』隔なきまじはり。親密の交際。

ばう-げい 旄倪【名】『倪は弱小の義』老人と小兒と。

ばうけい-いんぞく 傍系姻族【名】〔法〕或人とその配偶者の傍系血族、即ち配偶者の兄弟・姉妹などとの關係。(直系姻族に對して)

はうけい-えふ 抱莖葉【名】莖を卷きいだきて生ずる葉。

ばうけい-けつぞく 傍系血族【名】〔法〕傍系關係ある血族。即ち自己の兄弟・姉妹、又その人人の父・母・子孫など。尊屬に屬するもの、即ち叔伯・父母などを傍系尊屬といひ、卑屬に屬するもの、即ち姪(メヒ)・甥(ヲヒ)などを傍系卑屬といふ。

ばうけい-しん 傍系親【名】〔法〕『獨 Seitenverwandte』傍系血族と傍系姻族との總稱。(直系親に對して)

ばうけい-しんぞく 傍系親族【名】〔法〕六親等内の傍系血族と三親等内の傍系姻族との總稱。(直系親族に對して)

ばうけい-そんぞく 傍系尊屬【名】〔法〕ばうけいけつぞく(傍系血族)を見よ。(直系尊屬に對して)

ばうけい-ひぞく 傍系卑屬【名】〔法〕ばうけいけつぞく(傍系血族)を見よ。(直系卑屬に對して)

はう-げき 胞隙【名】〔生〕細胞壁の間に生ずる、小き間隙。

はう-げき 砲擊【名】大砲にて擊つこと。

はうげ-しやく 方解石【名】〔鑛〕はうかいせき（方解石）に同じ。

はうげ-そう 放下僣【名】はうかそう（放下僣）に同じ。

はう-けつ 寶穴【名】『寶は天皇に關する敬語』御陵の墓穴。げんきゆう（玄宮）參照。

はう-けつ 芳潔【名】かうばしく、いさぎよきこと。芳香ありて、潔白なること。

はう-けつ 放血【名】惡血を出だし去ること。刺胳。

はう-げつ 萌蘖【名】草木の、芽を發すること。めざし。

はう-げつ 抱月【名】〔人〕しまむらはうげつ（島村抱月）を見よ。

ばう-けつ 茅闕【名】だじやうてんわう（太上天皇）に同じ。

ばう-げつ 望月【名】もちづき（望月）に同じ。

はうけつ-づせつ 包結圖說【名】〔書〕物の包み方、紐の結び方を圖解したるもの。二卷。伊勢貞丈の著。

はう-けん 寶劍【名】㊀寶物たる劍。たふとき太刀。寶刀。㊁むらくものつるぎ（叢雲劍）に同じ。はうきやう（寶鏡）㊁參照。大鏡「神璽・寶劍、手づから取りて、東宮の御方に渡し奉りたまひてければ」

寶劍を冢樹（チヨウジユ）に懸く【句】『史記の吳王世家に見ゆ。季札は、季子名は札の義』支那吳王壽夢の第四子、闔閭（カフリヨ）の叔父なる季札、上國への使の途次、徐の國（今の安徽省鳳陽府泗州の地）を過ぎしに、徐の君、札の劍を欲するものの如きより、札も與ふる意ありて、歸路、復び徐を過ぎしに、徐の君、既に沒せしより、劍をその墓に懸けて去れりとの故事。亡き影に劍を懸く。

はう-けん 邦憲【名】こくけん（國憲）に同じ。

はう-けん 放券【名】はうけんじやう（放券狀）の略。庭訓往來「永代沽券・安堵年記放券・奴婢雜人券契」

はう-けん 保建【名】年號の保元より建久までの間。はうけんたいき（保建大記）參照。

はう-げん 方言【名】㊀『王維の詩に「因レ人見二風俗一、入レ境聞二方言一」とあり』その地方に限りて行はるる言語。㊁〔語〕『英 Dialect』一國の國語の中にて、發音上・語彙上、その他の上より互に異なる言語。例へば某地方に限りて行はるる語、某職業者の間に行はるる語など。故に、方言の集合、即ち國語と見、從ひて、標準語も一の方言に外ならずとす。又、語族發達の上より見れば、その語族中の一國語も、語族全體に對しては、方言と見做し、理論的には、各個人の言語の差異も、方言と稱するを得。㊂〔書〕やうしはうげん（楊子方言）を見よ。

はう-げん 放言【名】放（ホシイママ）に言ふこと。思のままなる事をいひ散らすこと。出放題なる物いひ。放語。放談。「放言・高論」

はうげん 保元【名】後白河天皇の御代の年號（紀元一八一六年―一八一八年）。

保元の亂【句】鳥羽法皇及びその寵姫美福門院と崇德上皇との不和により て、後白河天皇の保元元年に起りし國亂。

はうげん 芳原【名】〔地〕東京新吉原遊廓の隱語。

ばう-けん 望見【名】のぞみ見ること。遠くより見ること。

ばう-けん 冒險【名】危險を冒すこと。成功の見込確かならぬに、事を企つること。

ばう-げん 暴言【名】亂暴なる言語。惡口。

ばう-げん 妄言【名】みだりなる言葉。妄誕なる言語。まうげん。妄語。

ばう-げん 妨言【名】さまたげとなる言葉。じやまとなる言葉。

ばう-げん 傍言【名】㊀かたはらにて語ること。傍語。㊁局外より、言葉を挾むこと。助言。

ばう-げん 謗言【名】そしる言葉。謗語。

ばう-げん 貌言【名】他人の前にて、體（テイ）よき應答すること。

はうけん-じやう 放券狀【名】こきやくじやう（沽却狀）に同じ。

ばうけん-せうせつ 冒險小說【名】冒險の事件を記述せる小說。

はうけん-たいき 保建大記【名】〔書〕保元の亂より、建久三年、後白河天皇崩御したまひて、賴朝の天下の權を握るまで、三十八年間の事蹟を、漢文にて記せるもの。二卷。栗山愿の著。

はうけんたいき-うちぎき 保建大記打聞【名】〔書〕保建大記の本文並びに序・跋等を、假名文にて註釋したるもの。三卷。谷重遠（シゲトホ）の著。

ばうけん-たいしやく 冒險貸借【名】〔商〕船舶が、遠隔の地にて遭難し、その修繕費又はその他の必要費に充つべき金を得る途なき時、積荷又は船體を抵當として、金を借ること。その船舶が到達港に到著するに先だちて、破損又は全滅する時は、債權者はその債權を失ふべきが故に、利息は非常に高率なるを普通とす。

ばうけん-だん 冒險談・冒險譚【名】冒險して遂に成功するに至る事蹟の談話。

はう-けんだんぶぎやう 保檢斷奉行【名】鎌倉幕府の職制の一。保內の雜務を掌りしもの。

ばうけん-てき 冒險的【貌】成功の見込確かならぬに、事を企つるさま。

はうげん-ぶんてん 方言文典【名】國文法の一種。標準語にあらざる方言に存する規則を、記述・說明したるもの。

はうげん-ものがたり 保元物語【名】〔書〕保元の亂の顚末を記せるもの。三卷。平治物語と共に、葉室時長の著ならんとの說あれども、詳かならず。

ばう-げんれい 房玄齡【名】〔人〕支那唐初の功臣。字は喬孫。彥謙の子。臨淄（リンシ）の人。太宗の朝、十八學士の首となり、相位に居ること十五年間、杜如晦と併せて、房杜の稱あり。勅によりて、晉書百三十卷を撰す。貞觀二十二年歿す。年七十一。

はう-こ 母子【名】〔植〕はうこぐさ（母子草）の略。

はう-こ 方壺【名】はうぢやう（方丈）㊃に同じ。

はう-こ 寶庫【名】㊀財寶を入れおく倉。㊁寶物を入れおく倉。㊂多くの財貨を産出して、諸方に供給する地の譬。㊃多くの有益なる物事を藏めたる處の譬。

はう-ご 邦語【名】こくご（國語）に同じ。

はう-ご 保護【名】ほご（保護）に同じ。

はう-ご 放語【名】はうげん（放言）に同じ。大鏡「腐りたる讃岐の前司・ふる受領の、鼓打ちそこなひて立ちたまひたるぞかしと放語したいまつりたるを」

ばう-こ 房戶【名】大寶令の制にて、鄕戶（ガウコ）內の兄弟・伯叔の屬にて、一戶を成すもの。

ばう-こ 暴虎【名】『詩經の國風叔于田に「襢裼暴レ虎、獻二于公所一」とあり』㊀虎を手打にすること。㊁無謀なる勇氣の譬。

暴虎・馮河（ヒヨウガ）【句】『詩經の小雅小旻篇に「不二敢暴虎一、不二敢馮河一」、論語の述而篇に「暴虎馮河、死而無レ悔者、吾不レ與也」とあり』㊀虎を手打にし、黃河を徒涉すること。㊁血氣の勇にはやりて、危險を冒すことの譬。

ばう-こ 茫乎【貌】ばうぜん（茫然）に同じ。

ばう-ご 妄語【名】ばうげん（妄言）に同じ。

ばう-ご 傍語【名】ばうげん（傍言）に同じ。

ばう-ご 防護【名】ふせぎまもること。外を防ぎ、內を護ること。

ばう-ご 旁午【名】『漢書の霍光傳に「使者旁午」とありて、顏師古の註に「如淳曰、旁午、分布也。師古曰、一縱一橫爲二旁午一、猶レ言二交橫一也」と見ゆ』縱橫に入り亂ること。往來のしげきこと。

はうご-あづかり 保護預【名】〔商〕ほごあづかり（保護預）に同じ。

はうご-あづけ 保護預【名】〔商〕ほごあづけ（保護預）に同じ。

はう-こう 砲熕【名】おほづつ。大砲。火砲。

はう-こう 砲口【名】砲身の前端、即ち砲尾と反對なる一端。彈丸の射出せらるるところ。

はう-こう 砲工【名】㊀砲兵と工兵と。㊁銃砲の製造に從事する工人。

はうこう-がい 砲口蓋【名】〔兵〕『英 Muzzle cover』砲口を防護するために、帆木綿にて造りたる蓋。

はうこう-がくかう 砲工學校【名】りくぐ

んはうこうがくかう(陸軍砲工學校)の略。

はうこう-せん 砲口栓【名】〔兵〕『英 Tampeon 又 Tampion』砲腔面の汚瀆・酸化等を防止するために、砲口に施す栓。

はうこう-たい 砲口帶【名】〔兵〕『英 Muzzle swell』砲口のきはの、砲身の他の部分よりやや膨れたる部分。

はうこう-ぶ 砲熕部【名】海軍工廠中、砲熕に關する事業を掌る一部。

ばうご-かふはん 防護甲板【名】**ばうぎよかふはん**(防禦甲板)に同じ。

はうご-きう 報午球【名】**へうじきう**(標時球)に同じ。

はうご-きん 保護金【名】**ほごきん**(保護金)に同じ。

はう-こく 邦國【名】**一**『周禮の春官篇に「以二凶禮一哀二邦國之憂一」とあり』くに。國家。**二**『書經の周官篇に「司馬掌二邦政一、統二六師一、平二邦國一」とあり』くにぐに。諸邦。

はう-こく 報國【名】國恩に報ゆること。國のために力を盡すこと。

はう-こく 報告【名】**一**告げ知らすること。しらせ。報知。報道。通告。**二**任務を帶びて出張したる者が、その任務に關する情況を陳述すること。

はうこく 方谷【名】〔人〕**やまだはうこく**(山田方谷)を見よ。

ばう-こく 亡國【名】**一**國を亡すこと、又、亡びたる國。**二**國司の治め方宜しきを得ざるため、政亂れ、財用缺乏するに至りたる國。江次第「亡國數代不レ濟二公文一之國、有二勘濟一人者、不レ待レ巡、被レ任」

亡國の音(イン)【句】『禮記の樂記篇に「桑間濮上之音、亡國之音也」とあり』亡國の兆ある音樂・詩歌などの調子。

亡國の聲【句】『韓非子の十過篇に「師曠撫止レ之曰、此亡國之聲也」とあり』前條に同じ。

亡國の五盡【句】國の亡ぶる五つの基、即ち信盡き、名盡き、親盡き、財盡き、功盡くること。

はうこ-ぐさ 母子草【名】〔植〕**一ばいも**(貝母)に同じ。運歩色葉集「具母、バイモ・ハウコグサ」**二ははこぐさ**(母子草)に同じ。

はうこく-しよ 報告書【名】或事件を報告する文書。

ばうこく-れい 防穀令【名】穀物の輸出又は輸入を防止する命令。

はうこく-ゐん 報告員【名】報告の任務に當る委員。

はうご-こく 保護國【名】**ほごこく**(保護國)に同じ。

はうご-しや 保護者【名】**ほごしや**(保護者)に同じ。

はうご-しよく 保護色【名】**ほごしよく**(保護色)に同じ。

はうご-ぜい 保護稅【名】**ほごぜい**(保護稅)に同じ。

はうこ-たう 澎湖島・澎湖嶋【名】〔地〕澎湖列島中の最大なる島。周回二十九里四十五間。海岸は屈曲多し。その馬公港に海軍要港部あり。

はう-こつ 芳骨【名】德高き人の遺骨。榮花「問二此巖頭一、亦瘞二同胞兄弟之芳骨一」

はう-こつ 方骨【名】〔動〕『英 Quadrate bone』蛇類によく發達し、下顎骨と頭蓋骨とを連接する小骨。蛇類の口を大く開き得るは、この骨あるがためなり。

ばう-こつ 亡骨【名】死にし人の骨。骸骨。盛衰記「これを亡骨に具して、墓に埋めば、その亡骨、必ず成佛すべし」

はうご-てう 保護鳥【名】**ほごてう**(保護鳥)を見よ。

はう-ごは 報强【名】**はうごは**(報强)を見よ。

はうご-ぼうえき 保護貿易【名】〔經〕**ほごぼうえき**(保護貿易)に同じ。

はう-こん 芳魂【名】**一**美人のたましひ。「芳魂・香魄」**二**魂の美稱。**三**花の精靈。花精。

はう-こん 方今【名】『今に方(アタ)る義』今の時。現今。目下。當節。當今。

はう-こん 方根【名】〔數〕方乘數の一因子。平方根・立方根等の別あり。

はう-こん 報恨【名】恨にむくゆること。仇がへし。

ばう-こん 亡魂【名】**一**死にし人の靈魂。なきたま。亡靈。**二いうれい**(幽靈)二に同じ。太平記「亡魂・幽靈、尙もこの地に留まって」

はうこ-れつたう 澎湖列島【名】〔地〕臺灣海峽の中央よりやや東に偏し、南北に亙りて散布せる列島。大小六十四箇の島嶼より成り、總面積八二二五方里。主島を澎湖島といひ、その西北に漁翁・白沙の二島あり。三島相擁して、その間に澎湖灣を作る。

はう-さ 硼砂【名】〔化〕**はうしや**(硼砂)に同じ。

はう-さ 保佐【名】**ほさ**(保佐)に同じ。

はう-ざ 砲座【名】大砲をすゑおく臺。

はう-ざ 寶座【名】**ほうざ**(寶座)を見よ。

ばう-ざ 病者【名】**びやうしや**(病者)の約。〔古語〕源氏「重きばうざのため、惡しきこともやと」

はう-さい 包柴【名】河川工事にて、護岸・沈床の代用とするもの。粗朶にて、砂利を長圓形體に包み、棕櫚繩・藤蔓又は鐵線にて、數箇所を結束し、蛇籠(ジヤカゴ)のごとき形をなす。

はう-さい 泡齋【名】**一はうさいねんぶつ**(泡齋念佛)の略。**二**きちがひ。狂人。似せ物語「出でてゆかん心輕しと笑はれんよのはうさいを人の知らねば」

はう-さい 庖宰【名】『**はうちう**(庖廚)を見よ』料理を掌る人。

はう-さい 堡砦【名】とりで。城堡。城寨。

はう-さい 報賽【名】『周禮の小祝篇の疏に「求レ福謂二之禱一、報賽謂二之祠一」。又云、以二其始爲一曰レ禱、得レ求曰レ祠、故以二報賽一解レ祠」とあり』祈願成就の御禮のために、神佛に參拜すること。おれいまゐり。ぐわんほどき。玉葉「被レ發二遣廿二社奉幣、被レ報二賽追討成功之由一」

はう-さい 報祭【名】『禮記の疏に「時和年豐、至レ秋報二祭四方之神一」とあり』祈願成就の御禮のために、祭事を行ふこと。

はう-さい 放債【名】『放は放下の義』資金を貸して、利殖を圖ること。

はう-ざい 寶財【名】**ざいはう**(財寶)に同じ。

はう-ざい 方劑【名】**一**藥劑を調合すること、又その方法。處方。藥方。**二**調合したる藥劑。

はう-ざい 泡劑【名】**ふりだしぐすり**(振出藥)に同じ。

ばう-さい 傍妻・旁妻【名】**ばうふ**(傍婦)に同じ。

ばう-さい 亡妻【名】死にし妻。亡(ナ)きつま。亡室。蕪村「身にしむや亡妻の櫛を閨に踏む」

ばう-さい 望祭【名】古、毎月十五日に行ひし祭祀。(朔幣に對して)

ばう-さい 丰采【名】**ふうさい**(風采)に同じ。

ばう-さい 卯齋【名】**いちじきばうさい**(一食卯齋)を見よ。

ばう-さい 茅柴・茆柴【名】**一**茅(チガヤ)と柴(シバ)と。**二**『事物紀元に「薄酒世謂二之茅柴一。飮易レ醒、言レ如二茅柴焰易一レ過也」、又、陔餘叢考には「酒之劣者、俗謂二之茅柴酒一。此語蓋亦起二於宋時一。東坡詩幾思壓二茅柴一禁網日夜急。曰レ壓二茅柴一、蓋酒之新釀、用二茅柴一壓而醉レ之耳」とあり』惡しき酒。薄酒。茅柴酒。

ばう-ざい 防材【名】〔兵〕『英 Boom』敵艦の侵入を防ぐための障碍物として、鐵鎖・鋼索などにて、大なる木材を聯結し、河口・灣口等の水路を閉鎖するもの。

ばうさい-しゆ 茅柴酒・茆柴酒【名】**ばうさい**(茅柴)二に同じ。

はうさい-ねんぶつ 泡齋念佛【名】念佛踊の一種。花・唐草の如きものを飾り、緣に布の垂れたる笠を被り、太鼓を紐にて肩より懸け、又は鉦を手にし、數人一團となりて、米錢を乞ひあるきしもの。常陸國の泡齋といふ僧の、寺院建立のために始めしものといふ。寛永頃より流行し、初は僧形なりしが、後には、俗體の乞食藝人と化せり、一說に、葛西念佛の異稱ともいふ。卜養狂歌集「ある人、泡齋念佛を畫に書きて、歌詠めといふ。人はみな西方とこそ願ひしにさかしまごとぞはうさい念佛」

はうさい-をどり 泡齋踊【名】前條に同じ。

はう-さう 疱瘡【名】〔醫〕九種傳染病の一。病原菌は未だ不明なれども、觸接によ

りて感染し、感染後十日又は十二日にして、惡寒(ヲカン)・發熱・頭痛・腰痛・全身倦怠・嘔吐等を催し、二三日後、皮膚に紅色の小丘疹生じ、顏面より軀幹・四肢に蔓延す。丘疹は水疱となり、膿疱に變じ、約三日にして、痂皮(カサブタ)となり、後、脱落して治し、重きは、終生瘢痕を留む。いも。もがさ。天然痘。痘瘡。しゆとう(種痘)參照。

疱瘡の神【句】はうさうがみ(疱瘡神)に同じ。一代男「袴著の春も過ぎて、疱瘡の神祈れば、痕なく」

疱瘡は見目定(ミメサダメ)、痲疹(ハシカ)は命定(イノチサダメ)【句】疱瘡は、重きも容貌を醜からしむるに止まれども、痲疹は、生命に關す。〔諺語〕

はう-さう 方相【名】㊀『支那のは、周禮に見ゆ』支那にて、送葬の時、戈を取りて、四隅を監護せし者。我國にても、古、これに倣ひ、天皇・親王・太政大臣などの送葬に、熊皮を被り、黃金製の四目の假面を著け、玄衣・朱裳を纏ひ、戈と楯とを手にして、轜車の先導をなしたり。方相氏。㊁だいな(大儺)に同じ。㊂〔佛〕四角の形相に結界すること。

はう-さう 芳草【名】かをりのある草。春の草。

はう-さう 包裝【名】發送する荷物などのうはづつみ。にづくり。

はう-さう 放爪【名】爪をはがすこと。

はう-ざう 寶藏【名】㊀『史記の龜策に「至二周室之卜官一、嘗寶二藏蓍龜一」とあり』大切に藏め置くこと。㊁『中庸に「今夫山一卷石之多、及二其廣大一、草木生レ之、禽獸居レ之、寶藏興焉」とあり』はうこ(寶庫)に同じ。增鏡「その簑笠は、寶藏に籠めて、三十三年に一度出さるるとぞ承る」

はう-ざう 包藏【名】つつみかくすこと。中にたくはふること。「禍心を包藏す」

ばう-さう 莽蒼【名】草の靑靑と茂れる郊野。まうさう。

ばう-さう 妄想【名】㊀まことならぬ想念。㊁『英 Delusion』精神病の一症狀。架空の事實を妄信する病的判斷。まうざう。

はうさう-がみ 疱瘡神【名】昔、迷信にて、疱瘡を掌ると思ひし神。顏面には痘痕ありといひ、これに祈れば、疱瘡を免疫し、又は輕減するを得と信じたり。

はうさう-し 方相氏【名】はうさう(方相)㊀に同じ。江次第「周禮方相氏、黃金四目、玄衣朱裳、執レ戈揚レ楯、帥二百隷一而時儺」

はうざう-じ 寶藏寺【名】ほうざうじ(寶藏寺)を見よ。

はうさう-まへ 疱瘡前【名】『種痘の方法を知らざりし時代には、一生に一度は疱瘡に罹るものと考へゐたりしよりいふ』幼くして、未だ疱瘡に罹らぬこと。和合人「仁王門の中には、疱瘡前の子供、市をなし、隨身門の外には、矢大臣の集合絶えず」

はうさう-やみ 疱瘡病【名】疱瘡を病める人。

はうさう-よけ 疱瘡除【名】迷信上の方法などにて、疱瘡に罹らぬやうにすること。柳樽「花嫁の疱瘡よけは持參金」

はうざうゐん-りう 寶藏院流【名】ほうざうゐんりう(寶藏院流)を見よ。

はうさう-ゑ 疱瘡繪【名】疱瘡除のために、鍾馗を紅(ベニ)にて描きたる繪。足利時代より行はれしもののごとく、後世は達磨・木兎(ミミヅク)等をも描くに至れり。

はう-さく 方策【名】㊀『方は木の板、策は竹簡、共に、支那にて古、紙又は帛に代へて、物を書くに用ひたり』記錄又は文書。かきもの。書册。[方册] ㊁はかりごと。方法・策略。方略。

ばう-さく 妄作【名】みだりに作ること、又その作品。

ばう-さだめ 坊定【名】東宮を定むること。立太子。〔古語〕空穗「かかるほど、よき日といふなる日しも、からからのたまへれば、坊さだめの事にやあらん」

はう-さつ 芳札【名】はうかん(芳翰)に同じ。庭訓往來「御芳札披見之處、靑陽遊宴、殊珍重候」

ばう-さつ 榜札【名】たてふだ。かけふだ。

ばう-さつ 忙殺【名】『さつ(殺)は接尾語』甚だ忙しきこと。

ばう-ざつ 厖雜【名】入りまじりてあること。亂雜。

はうさ-にん 保佐人【名】ほさにん(保佐人)に同じ。

はう-ざふ 烹雜・保臟【名】ざふにもち(雜煮餅)の異稱。

はう-さん 寶算【名】『寶は、天皇に關する敬語』天皇の御年齡。聖算。聖壽。

はう-さん 硼酸【名】〔化〕『英 Boric acid』無色にして眞珠樣の光澤を有する鱗片狀の結晶物。溫水に溶解し、微弱なる酸性を呈す。防腐・消毒の効を有し、しかも人體に對して著しき害なく、刺戟性もなく、醫藥として、洗眼・含嗽・塗布・注射・繃帶用等に用ふ。

はう-さん 放散【名】散らすこと、又、散ること。

はう-ざん 放參【名】〔佛〕『放は放免の義』禪宗にて、住持の、事故あるにより、晩の參禪又は念誦を休止すること。鳴鐘三下して、これを報ず。

はう-さん 紡蠶【名】麻を紡(ツム)ぐことと、蠶を飼ふことと。紡織。

はう-ざん 寶山【名】㊀寶(タカラ)の多く出づる山。產物の多き山。たからのやま。ほうせん(寶山)參照。㊁神佛の靈のこもれる、尊き山。靈山。正統記「磤馭廬(オノコロ)島……、その所も、明かに知る人なし。大日本國の寶山なりといふ」謠曲(逆矛)「龍田の山に著きにけり。……寶山への道しるべして賜はり候へ」

寶山に入りて、手を空しくして歸る【句】「寶(タカラ)の山に入りながら手を空しくして歸る」に同じ。〔諺語〕

はう-ざん 芳山【名】〔地〕『吉野山は、芳野山とも書くことあるを、略して、音讀せるもの』よしのやま(吉野山)の雅稱。

ばう-さん 望參【名】望日の朝の出仕。さくさん(朔參)參照。

ばう-さん 坊樣【名】『さん(樣)はさま(樣)の音便』ばう(坊)の敬稱。

ばう-ざん 邙山【名】〔地〕ほくばう(北邙)に同じ。

はうさん-があぜ 硼酸ガアゼ【名】『羅 Tela acidi borici』硼酸を含ましめたるガアゼ。

はうざん-くわん 方山冠【名】古、支那にて、樂人の著けたる頂の方形なる冠。

はうさん-じ 寶山寺【名】ほうさんじ(寶山寺)を見よ。

はうさん-ちゆう 放散蟲【名】〔動〕放散蟲類に屬する原生動物。

はうさんちゆう-でい 放散蟲泥【名】〔地〕『英 Radiolarian ooze』放散蟲の遺骸の堆積して成れる、赤色の泥土。熱帶地方の深岸に產す。

はうさんちゆう-ばんがん 放散蟲板岩【名】〔地〕『地 Radiolarian slate』放散蟲の遺骸を含有せる、赤色又は綠色の板岩。秩父(チチブ)地方の古生層に多く、或は硅酸に富みて硬く、或は凝灰質にして軟し。

はうさんちゆう-るゐ 放散蟲類【名】〔動〕根足蟲類の一目。體は有孔・球狀の囊をなし、ために囊外・囊內の二部分をなし、表面より、絲狀をなせる無數の僞足を、放散狀に突出し、概ね硅石質の骨骼を有し、海面を浮游す。形狀は種類によりて、異なれり。

はうさん-なとりうむ 硼酸那篤僧謨【名】〔化〕はうしや(硼砂)に同じ。

はうさん-なんかう 硼酸軟膏【名】パラヒン軟膏九分と硼酸末一分との割合に交ぜ合はせて製したる膏藥。防腐劑として、皮膚の炎症部に塗布す。

はうさん-まつ 硼酸末【名】硼酸の粉末。

はうさん-み 傍三位【名】はうさんゐ(傍三位)を見よ。

はうさん-めん 硼酸綿【名】『羅 Gossypium acidi borici』硼酸を含ましめたる脱脂綿。

はうさん-ゐ 傍三位【名】『位は、三の字の韻に引かれて、ミと發音す』參議を歷ずして、三位に敍せらるること。

はう-し 拍子【名】㊀ひやうし(拍子)の約。〔古語〕空穗「ゆきまさ、笛吹き、あるかぎりの人、はうし合はせて遊びたまふ」㊁さくはうし(笏拍子)の略。〔古語〕著聞「主上、笛を吹かせおはしましける。殿下箏、宗忠卿拍子、宗通卿附歌」

拍子賜はす【句】拍手の役を命じたまふ。〔古語〕源氏「親王(ミコ)箏(サウ)の御琴、

大臣琴(キン)、琵琶は少將の命婦(ミヤウブ)、仕うまつる。上人(ウヘビト)の中にすぐれたるを召して、拍子賜はす」

はう-し 方士【名】㈠支那周の代に、秋官司寇に屬して、王子弟・公卿・大夫の采地の獄を司りし官吏。㈡方術をおこなふ人。道士。方客。

はう-し 芳志【名】他人の親切なる心の敬稱。芳意。芳情。御厚意。

はう-し 芳姿【名】美しきすがた。

はう-し 芳紙【名】**はうかん**(芳翰)に同じ。盛衰記「青鳥飛來投二芳紙一、數日之鬱念、一時解散」

はう-し 胞子【名】〔生〕『英 Spore』植物と動物中の胞子蟲類とに、生殖のために生ずる、特別なる細胞。一箇の細胞より成り、母體を離れて、別に新箇體となる能力を有す。構造・形狀は、生物の種類によりて一樣ならず、又、顯花植物は、大抵その大・小二種を生じ、大なるは、胚珠の內に、胚囊となり、小なるは、葯のうちに、花粉となりて存在す。芽胞。

はう-し 庖仕【名】庖(クリヤ)にて、料理に從事すること、又その人。

はう-し 放資【名】資本をおろすこと。資本を公債・社債・株式又は土地等の購買に用ひ、これによりて、安全に、利子・配當、その他利益を得んとすること。投資。放銀。

はう-し 放恣・放肆【名】ほしいままなること。放逸。恣放。

はう-し 褒詞【名】ほめことば。讚辭。褒辭。

はう-し 褒賜【名】**しやうし**(賞賜)に同じ。

はうじ 焙【名】はうずること。いること。

はう-じ 牓示・牓爾【名】㈠杙また札などを、境界のしるしとして立つること、又その杙・札など。はうじぐひ。さかひぐひ。朝野群載「定二四至一、打二牓示一」㈡馬場の仕切。外牓示・內牓示の別あり。㈢庭の築垣(ツイガキ)。［方爾］鎌倉年中行事「公方(クバウ)樣御坐ある御透(トホリ)まで、手をついて透りて、先づ畏まりて、御馬を、方爾に能く引立てたるを見て」

はう-じ 寶璽【名】天皇の御印璽。御璽。玉璽。

はう-じ 保司【名】一鄕・一邑の長。東鑑「阿波國麻殖保保司」

はう-じ 烹事【名】小者部屋(コモノベヤ)の飯焚。〔江戸時代の語〕

はう-じ 砲耳【名】〔兵〕『英 Trunnion』砲を砲架上に支へ、且つ砲の仰角を變更する時、その心軸となるもの。舊式の砲にては、砲身の兩側に直接に設けたれども、近世のは、砲架の一部に取附け、砲の俯仰に際しては、その砲架の一部も共に動くやうに構造せらる。

はう-じ 褒辭【名】**はうし**(褒詞)に同じ。

はう-じ 褒姒【名】〔人〕『褒は國名にて、夏(カ)と同姓・姒は姒氏なるによりていふ』支那周の幽王の寵姬。幽王、この姬の懽心を得んと欲し、屢ば烽火を揚げて、兵を欺き、終に身を亡すに至れりといふ。

ばう-し 帽子【名】『し(子)接尾語』㈠布帛にて製せる昔の、かぶりものの總稱。頭巾。帽。**まうす**(帽子)參照。著聞「放鷹樂を奏しけり。帽子に摺衣(スリゴロモ)をぞ著たりける」㈡**えぼし**(烏帽子)の略。禁秘抄「於二殿上口一、切レ紐引二入帽子一、如二面縛一」㈢西洋風のかぶりもの。山高(ヤマタカ)帽子・中折(ナカヲレ)帽子・鳥打(トリウチ)帽子・パナマ帽子・麥稈(ムギワラ)帽子など、種種あり。しやっぽ。帽。㈣『英 Cap』物の上端にかぶらする物の總稱。例へば汽船の烟突に於けるものの類。㈤刀劍のきっさき、又、きっさきの方の鎬(シノギ)の留(トマリ)なる、斜に高き處。鉾子。［鉾子］㈥船の帆柱の控柱(ヒカヘバシラ)の蓋。

ばう-し 髦士【名】『詩經の小雅に「烝二我髦士一」とあり。髦は、毛中の長毫の義なるより、すぐれてある義に轉用す』**しゅんし**(俊士)に同じ。

ばう-し 亡子【名】死にし子。亡(ナ)き子。

ばう-し 亡姉【名】死にし姉。亡(ナ)き姉。

ばう-し 亡師【名】死にし師。亡(ナ)き師。

ばう-し 芒刺【名】草木のとげ。のげ。のぎ。

芒刺、背に在り【句】『漢書の霍光傳に「上内嚴二憚之一、若レ有二芒刺在一レ背」とあり。又、唐書の崔日用傳にも見ゆ。芒刺が背を刺して安からぬに譬へていふ』恐懼して安心せざる譬。〔諺語〕

ばう-し 茅茨・茆茨【名】㈠ちがやと、いばらと。㈡ちがやと、いばらとにて葺きたる屋根。

茅茨翦(キ)らず、采椽(サイテン)劉(ケヅ)らず【句】『墨子と韓非子の五蠹篇とに出づ。何れも堯帝の生活の質素なるをいへり。**さいてん**(采椽)參照』屋根は、茅茨の末端を翦りととのふることをせず、木材は、山より伐り來れるままなるを用ふ。〔諺語〕盛衰記「茅茨翦らず、采椽劉らず」

ばう-し 貌詞【名】〔語〕『本書の監修者たる余の命名にして、品詞の區分上の一名稱として用ひしめたり』事物の狀貌を示し、下に附く助詞の如何によりて、形容詞ともなり、副詞ともなる語。例へば、「わづか(僅か)」・「ほがらか(朗か)」・「ばらばら」・「さらり」・「さんらん(燦爛)」・「もうもう(濛濛)」などの類。

ばう-し 防止【名】ふせぎとどむること。

ばう-し 紡絲【名】絲をつむぐこと。

ばう-し 傍視【名】かたはらより、よく見ること。傍觀。

ばう-し 暴死【名】にはかに死ぬること。急死。頓死。

ばう-じ 亡兒【名】死にし兒。

ばう-じ 房事【名】『閨房中の事の義』閨房內にての男女の交接。ねやごと。交合。

ばうし-あみ 帽子編【名】毛絲を編むに、編針の通れる目と次の目とを拾ひて、一緒に編むもの。

はうじ-いちぶばんきん 保字一歩判金【名】『背面に保の字の極印あるよりいふ』**てんぱういちぶばんきん**(天保一分判金)に同じ。

はう-しう 方舟・舫舟【名】舟をもやふこと、又その舟。もやひぶね。

はう-しう 放囚【名】囚人をゆるすこと。放免。

はう-しう 芳洲【名】〔人〕**あめのもりはうしう**(雨森芳洲)を見よ。

はう-しう 報酬【名】㈠むくゆること。むくい。酬報(シウハウ)。返禮。㈡他人の勤勞に對する返禮、又それに對する料金。㈢〔經〕『英 Return』農業上、資本と勞力とに對する生產。收穫。

報酬漸減【句】〔經〕「報酬遞減」に同じ。

報酬漸增【句】〔經〕「報酬遞增」に同じ。

報酬遞減【句】〔經〕**はうしうていげんはふ**(報酬遞減法)を見よ。

報酬遞增【句】〔經〕**はうしうていぞうはふ**(報酬遞增法)を見よ。

はう-しう 報讎【名】**ふくしう**(復讎)に同じ。

ばう-しう 防臭【名】臭氣をふせぎとどむること。臭氣どめ。

ばう-しう 防秋【名】古、支那にて、匈奴の、秋季に入りて、盛んに來冠せしを防ぎしこと。

ばう-しう 防州【名】〔地〕**すはう**(周防)の略稱。

ばう-しう 房州【名】〔地〕**あは**(安房)の略稱。

ばうしう-いし 房州石【名】安房國鋸山より採掘して、山麓の諸地より東京に送り出す凝灰岩。

ばうしう-うはに 房州上荷【名】上荷船の一種。

ばうしう-かいだう 房州街道【名】〔地〕上總國と安房國北條町との間の街道。東京灣の岸に通ずるを房州西街道といひ、外洋に沿ひ、大原・勝浦等の地を通過するを、東街道といふ。

はうしう-こうきう-はふ 報酬恆久法【名】〔經〕『英 Law of constant returns』生產額の增加を欲する時、或場合には、報酬遞減及び報酬漸增の法則に依らず、欲する增加の割合に、生產費の增加を要する場合の法則。

ばうしう-ざい 防臭劑【名】便所・下水溝などに撒布して、惡臭を防止するための藥劑。即ちアルボオス・片腦油・石灰・石灰乳・綠礬(ロクバン)・樟腦・石炭酸・昇汞水・ホルマリンなどの類。臭氣どめ。

ばうしう-ずな 房州砂【名】安房國北條町邊に產する、凝灰質の磨砂(ミガキズナ)。成分は、主として、炭酸石灰にして、研磨・玄米の精白などに用ひ、又、下等なる齒磨の材料にも供す。

はうしう-ぜんげん-はふ 報酬漸減法【名】〔經〕はうしうていげんはふ(報酬遞減法)に同じ。

はうしう-ぜんぞう-はふ 報酬漸增法【名】〔經〕はうしうていぞうはふ(報酬遞增法)に同じ。

ばうしう-たてぶね 房州立船【名】昔、攝津・和泉・紀伊等の諸國より安房國へ干鰯(ホシカ)を買ひに行きし和船。その制、表の垣立(カキタツ)を取置(トリオキ)にしたり。

はうしう-ていげん-はふ 報酬遞減法【名】〔經〕『英 Law of diminishing returns』報酬遞增の結果、報酬の相對的限度に達する時は、實際の報酬は、却って反比例に遞減すべく、又その絶對的限度に達したる時は、それより以上、資本と勞力とを投ずとも、土地の總報酬は遞減するに至るべしといふ法則。農業以外の生産業にありて、この現象を見やすきは、鑛業なり。報酬漸減法。

はうしう-ていぞう-はふ 報酬遞增法【名】〔經〕『英 Law of increasing returns』農業に於て、土地に投ずる資本と勞力との增加に從ひ、生産費は遞次に減少し、報酬は漸次に增加すといふ法則。農業以外の生産業にありて、この現象を見やすきは、工業なり。報酬漸增法。

ばうしう-べん 防臭瓣【名】『英 Trap』下水工事にて、汚水の臭氣の特定の方向に逸出するを防ぐに用ふる、陶製又は鐵製の、種種に屈曲せる管。

ばうしう-ぼく 防臭木【名】〔植〕馬鞭草(クマツヅラ)科に屬する灌木。葉は披針形にして、輪生し、多數の腺を有し、レモンに似たる香氣を發するより、乾かして、食物その他に香氣を附するに用ひ、花は小形にして帶青白色。原産地は南米智利國。

ばうし-かけ 帽子掛【名】㊀帽子を掛くる用に供する具。〔帽子架〕 ㊁昔、女方の俳優が、始めて野郎帽子をかぶる時に行ひし儀式。帽子披露。

ばうし-かぶと 帽子兜【名】古、常の冑の下に重ねて著用せし一種の兜。鉢に飾無く、錣(シコロ)を鑲(クサリ)にて造りたり。盛衰記「入道は、帽子兜に、萌黃の腹巻の袖附きたるを著て」太平記「帽子兜に鑲(クサリ)を著て、足輕に扮つ時もあり」

はう-しき 方式【名】一定の形式又は手續。かた。てつづき。

はうし-ぎ 拍子木・放死木【名】ひやうしぎ(拍子木)の約。運歩色葉集「放死木、ハウシギ。又、柝」

はうじ-き 報時器【名】時刻を通報する器具、若しくは設備。即ち報午球・午砲など。報時信號。

はうじ-きう 報時球【名】へうじきう(標時球)に同じ。

ばうし-きかい 紡絲機械【名】ばうせききかい(紡績機械)に同じ。

はうじ-きん 保字金【名】『保の字の極印あるによりていふ』天保五兩判金・天保小判金及び天保一分判金の總稱。天保金。

はうじ-ぎん 寶字銀【名】寶字丁銀と寶字豆板銀との總稱。寶永銀。二寶銀。寶銀。

はうじ-ぎん 保字銀【名】保字丁銀と保字豆板銀との總稱。天保銀。

はうじ-きんぎん 保字金銀【名】天保金と天保銀との總稱。天保金銀。

ばうし-ぐさ 帽子草【名】〔植〕つゆくさ(露草)に同じ。

はうじ-ぐひ 牓示杙・牓示杭【名】境界のしるしの杙。はうじ。

ばう-しこう 亡是公【名】『是(コ)の公(キミ)亡(ナ)しといふ意にて、司馬相如の「子虛賦」に見ゆ』**ういうせんせい**(烏有先生)に同じ。

はうじ-こばん 寶字小判【名】**はうじこばんきん**(寶字小判金)の略。

はうじ-こばん 保字小判【名】**はうじこばんきん**(保字小判金)の略。

はうじ-こばんきん 寶字小判金【名】**はうえいきん**(寶永金)に同じ。

はうじ-こばんきん 保字小判金【名】『背面に保の字の極印あるによりていふ』**てんぱうこばんきん**(天保小判金)に同じ。

ばうし-さき 鋩子先【名】鋩子の先端。刀のきっさき。

はうじ-しんがう 報時信號【名】**はうじき**(報時器)に同じ。

はうじ-しようとく-かうけん-くわうてい 寶字稱德孝謙皇帝【名】〔人〕**かうけんてんわう**(孝謙天皇)に同じ。

はうし-せいしよく 胞子生殖【名】〔生〕『英 Spore reproduction』胞子によりて行はるる生殖法。

はうじ-ちやうぎん 寶字丁銀【名】徳川幕府通貨の一。表面に寶の字の極印二つあり。寶永三年より同七年にかけて發行し、享保六年通用を廢せり。

はうじ-ちやうぎん 保字丁銀【名】『保の字の極印あるによりていふ』**てんぱうちやうぎん**(天保丁銀)に同じ。

はうしちゆう-るゐ 胞子蟲類【名】〔動〕原生動物の一綱。一般に顯微鏡的の微小なるもの。寄生生活を營み、體面にて液體のみを吸收し、母體の增殖せんとするに先だち、體を丸めて、その周圍に胞嚢を分泌し、その中にて分裂を重ね、數箇もしくは數百千の胞子を作り、胞子は包嚢を破りて出で、各、一箇體に發生し、母體は胞子形成後、死滅す。マラリヤ病原蟲の如き、これなり。

はう-じつ 保日【名】陰陽家にて、諸事に吉なりといふ、丁丑・丙戌・甲午・庚子・壬寅・癸卯・乙巳・丁未・戊申・己酉・辛亥・丙辰の十二日。

ばう-しつ 房室【名】㊀へや。室。 ㊁**ばうくわん**(坊官)㊁に同じ。

ばう-しつ 亡室【名】死にし妻。亡(ナ)き妻。亡妻。

ばう-しつ 亡失【名】なくなること、又、なくなすこと。うしなふこと。失亡。

亡失の罪【句】大寶令の制にて、闌遺物を得て、五日内に官司に送らざるによりて成立せし罪。

ばう-じつ 望日【名】陰曆の十五日。望(パセ)。

はうし-なう 胞子嚢【名】〔植〕胞子を、多くはその内部に生ずる、特殊の器官。構造は一定せざれども、山椒藻(サンセウモ)の如く大・小二種の胞子嚢を生ずるものにありては、大胞子嚢・小胞子嚢の別あり。芽胞嚢。子嚢。

ばうし-ばけ 帽子刷毛【名】帽子の塵を掃ふ刷毛。ばうしはらひ。

ばうし-ばな 帽子花【名】〔植〕**つゆくさ**(露草)に同じ。

ばうし-はらひ 帽子拂【名】**ばうしばけ**(帽子刷毛)に同じ。

ばうし-ひろう 帽子披露【名】**ばうしかけ**(帽子掛)㊁に同じ。

はうじ-まめいたぎん 寶字豆板銀【名】徳川幕府通貨の一。表面に寶の字の極印ある豆板銀。發行期間及び通用廢止の時期は、寶字丁銀に同じ。

はうじ-まめいたぎん 保字豆板銀【名】『保の字の極印あるによりていふ』**てんぱうまめいたぎん**(天保豆板銀)に同じ。

はう-しん 方針【名】㊀磁石の方位を指し示す針。磁針。 ㊁事を行ふにつきて心に定むる方向。主義。

はう-しん 芳心【名】㊀なさけ。親切。十訓「事に觸れて、芳心致されたり」平治「重盛出仕の度ごとに、芳心せられける故なり」 ㊁美人の心。

はう-しん 芳辰【名】㊀よき日。よき時。吉日。吉辰。佳辰。 ㊁芳春の季節。はる。春日。

はう-しん 芳信【名】㊀書信の敬稱。芳翰。芳札。 ㊁**くわしん**(花辰)に同じ。

はう-しん 報信【名】しらせ。通知。

はう-しん 砲身【名】大砲の主幹たる部分、即ち彈丸を込めて發射する、圓筒狀の部分。**はうこう**(砲口)・**はうび**(砲尾)參照。

はう-しん 放心【名】㊀外界の事物に迷はされて、精神のぼんやりとせること。本心を放逸ならしむること。うっかり。失神。 ㊁安心。安堵。放念。放慮。〔放神〕

放心を求む【句】『孟子の告子上篇に「學問之道、無レ他、求二其放心一而已矣」とあり』修養を積みて、外界の事物のために、本心を失ふことなきやうにす。良心を失はぬやうにす。

はう-しん 保眞【名】天賦の本性を保ちて、失はざること。

はう-しん 報身【名】〔佛〕ほうしんぶつ(報身佛)の略。

はう-じん 邦人【名】自國の人。くにびと。國人(コクジン)。

はう-じん 庖人【名】はうてい(庖丁)に同じ。

ばう-しん 亡心【名】ばうれい(亡靈)に同じ。謠曲(鵜)「賴政が矢先にかかり命を失ひし、鵺(ヌエ)と申ししものの亡心にて」

ばう-しん 亡臣【名】㊀國を逃げ出しし家來。亡命の臣。㊁死せし家來。

ばう-しん 亡親【名】死にし親。亡(ナ)きおや。

ばう-しん 旁心【名】かたよりたる心。甲陽軍鑑「旁心に任せ、狼藉をしたくば仕れ」

ばう-しん 傍臣【名】かたはらに仕へてある臣。近侍の臣。側近の臣。謠曲(海士)「みづから大臣の御子と生れ、……、ある時、傍臣語りて曰はく」

ばう-しん 傍親【名】傍系の親族。(本親に對して)榮花「先考建二法興寺一、修二三昧一、此外傍親列祖之善根德本、不レ遑二稱計一」正統記「大納言通方は、父の院にも御傍親、贈皇后にも御ゆかりなりしかば」

ばう-しん 傍心【名】〔數〕『英 Excentre』三角形の一つの內角とその內角に隣らざる他の二つの外角との二等分線の交點。三角形には三つあり。ばうせつゑん(傍接圓)參照。

ばう-しん 房寢【名】おくざしき。奧の間。

ばう-しん 暴臣【名】暴惡なる臣下。

ばう-しん 妄信【名】みだりに信ずること。わけもなく信用すること。まうしん。

ばう-しん 妄進【名】みだりに進むこと。

ばう-じん 妄人【名】心にとりとめなき人。無智にして、むやみなる人。

ばう-じん 傍人【名】かたはらに居る人。

ばう-じん 榜人【名】『榜は舟を進むる義』ふなびと。舟人。

ばう-じん 暴人【名】暴行をなす人。あばれもの。

ばう-じん 防人【名】支那唐代に鎭戍を守りし兵。さきもり(防人)參照。

はうしん-か 放心家【名】放心せる人。うつけたる人。

はうしん-さい 寶晉齋【名】〔人〕えのもときかく(榎本其角)を見よ。

ばうしん-しふ 卯辰集【名】〔書〕『北枝は加賀國金澤の人にて、舊城門に面せる卯辰(ウタツ)山の名を取りて、題號とせり』蕉門諸家の俳句を四季に分ちて集めたるもの。四卷。蕉門の俳人楚常の編輯に係り、その歿後、元祿四年立花北枝刊行す。

ばうしん-たう 防身刀【名】ごしんたう(護身刀)に同じ。

はうしん-ぶつ 報身佛【名】〔佛〕ほうしんぶつ(報身佛)に同じ。

はう-しや 砲車【名】砲の運轉を便にするために、砲架に車輪を裝置したるもの。

はう-しや 砲射【名】砲にて、彈丸を發射すること。

はう-しや 紡車【名】絲をつむぐに用ふる車。いとぐるま。いとくりぐるま。いととりぐるま。繅車。

はう-しや 報謝【名】恩に報いて、謝意を表はすこと。返禮。ほうしや(報謝)參照。著聞「件(クダン)の恩を知りて、よろしく報謝すべし」

はう-しや 硼砂【名】〔化〕硼酸鹽類中、重要なる、無色の結晶體。成分は硼酸ナトリウムの含水物にして、天然に產出し、又は硼酸に曹達を加へて製す。空氣中に放置すれば、表面風化し、常溫にて、十四分の水、〇・五分の沸湯に溶解す。硼砂球を造り、反應によりて、金屬を鑑別するに用ひ、又、金屬の接合、洗濯業、食品の防腐劑等に用ひ、又その水溶液は、醫藥に用ふ。重(ヂユウ)硼酸なとりうむ。

はう-しや 放射【名】㊀はなちいること。發射。㊁或一點より、諸方へ放出すること。輻射。

はう-しや 放赦【名】囚人を放ちて赦しやること。放免。

はう-しや 抛射【名】なげとばすこと。なげうつこと。發射。

ばう-しや 房舍【名】へやと、いへと。家屋。太平記「房舍の甍(イラカ)を破って」

ばう-しや 坊舍【名】㊀町なかの家。まちや。㊁僧の住む家。僧坊。坊。坊寮。平家「坊舍、一宇も殘さず、皆燒き拂ふ」盛衰記「山階寺(ヤマシナデラ)にて五百餘人、在在所所・坊舍・堂塔にて二百餘人」

ばう-しや 茅舍【名】ばうをく(茅屋)に同じ。

ばう-しや 亡者【名】『風俗通の十反篇に「亡者有レ靈、實寵二賴之一」とあり』まうじや(亡者)に同じ。

ばう-しや 暴射【名】極めてはげしく發射すること。

ばう-しや 暴瀉【名】極めてはげしく下痢すること。たてくだし。

はう-しやう 砲床【名】砲を据ゑ付くる時、砲全體の重量と發射の際に起る力とに對して、十分に砲架を承け支へ得るやうにせる架構。地上永久的の物としては、コンクリイトにて築造し、急忙の場合には、軌條・木材などにて、框を組み、その上に砲を設置して、砲架の移動を防ぐ。

はう-しやう 砲匠【名】砲を造る職工。

はう-しやう 褒章【名】奇特の所行ある者を表彰するために授くる徽章。紅綬褒章・綠綬褒章・藍綬褒章・黃綬褒章・紺綬褒章の五種あり。各條を見よ。はうじやう(褒狀)㊁參照。

はう-しやう 褒賞【名】㊀ほむること。ほめたたふること。褒美。賞美。㊁ほむる意を示すために、物を與ふること、又その與ふる物。褒美。賞與。

はう-しやう 堡障【名】とりで。城寨。堡壘。

はう-しやう 保障【名】㊀ほしやう(保障)に同じ。㊁『左傳の定公十三年の條に「成孟氏之保障也。無レ成、是無二孟氏一也」とあり』前條に同じ。

はう-しやう 褓商【名】はうふしやう(褓負商)を見よ。

はう-しやう 報償【名】㊀つぐのふこと。損害の辨償。㊁はうふく(報復)㊀に同じ。

はう-しやう 彭殤【名】『彭は彭祖、殤は、生れてより三箇月乃至十九年の間に死ぬること』長壽と短命と。駿臺雜話「彭殤を等しうす」

はう-じやう 芳情【名】はうし(芳志)に同じ。

はう-じやう 褒狀【名】㊀褒賞の旨を記して與ふる文書。賞狀。㊁奇特の所行あれども、褒章を賜ふまでの場合に至らざる者に賜ふ書狀。

はう-じやう 報狀【名】はうしよ(報書)に同じ。

はう-じやう 方狀【名】方形なる狀態。

はう-じやう 放生【名】『はうせい(放生)を見よ』捕へおきたる生物を放ち遣ること。はうじやうゑ(放生會)參照。著聞「市に賣りける蛤を、月ごとに四十八買ひて、海に放ちにける程に、……放生の功德も、事によるべきにこそ」

ばう-じやう 旁生【名】〔佛〕『ばうせい(旁生)を見よ』生物の、身體の、横になりてあるもの、即ち畜類。

ばう-じやう 傍莊・傍庄【名】近傍の莊。附近の莊。しやう(莊)㊂參照。太平記「近隣・傍莊にぞ觸れたりける」

ばう-じやう 坊掌【名】㊀春宮坊(トウグウバウ)の雜仕(ザフシ)。訴人を通傳し、使部を檢校し、坊府を守當し、及び廳事の鋪設を掌りしもの。㊁明治二年東宮坊に置かれ、春宮坊と共に廢せられし掌(シヤウ)。

ばう-じやう 帽章【名】帽子の徽章。

ばう-じやう 帽上【名】帽子の上。帽子の上方。謠曲(朝顏)「帽上の紅槿とて、紅の槿(アサガホ)を、簪の上に飾りつつ」

ばう-じやう 暴狀【名】亂暴なるありさま。

ばう-じやう 亡狀【名】ぶじやう(亡狀)の誤讀。

ばう-じやう 坊城【名】㊀〔地〕京都の南北の通路の內、中央なる朱雀大路の西、壬生(ミブ)の東なるもの。㊁姓氏の一。本姓は藤原。勸修寺(クワンジユジ)俊經の孫定資の二男俊賢を祖とす。京都の小川(コガハ)坊城に居りしに因る。俗には、小川坊城ともいへり。名家にて、文章(モンジヤウ)博士の家。明治維新後、伯爵を授けらる。

ばうじやう-うだいじん 坊城右大臣【名】〔人〕ふぢはらもろすけ(藤原師輔)に同じ。

はうじやう-がは 放生川【名】㊀〔地〕山城國男山八幡宮の境內にある川。謠曲(放生川)「放生會とは、生けるを放つ祭ぞかし。御覽候へ、この魚は、生きたる魚をそ

のままにて、放生川に放さんためなり」 二 謠曲の一。山城國男山八幡の放生會に參詣して、奇特に逢へる事を作れるもの。古名、放生會・八幡。

はうしやう‐きん 報償金【名】報償として出す金。つぐのひの金。償金。

はうじやう‐く 放生供【名】放生を行ふ供養。蟬丸「行者（ギヤウジヤ）の修法（シユホフ）と云っぱ、初七日は曼陀羅供、二七日は放生供」

はうしやう‐ぐし 保上串 寶生串【名】烏帽子のうしろにある釵。

はうじやう‐し 放生司【名】古、放生の事を掌りし司。放鷹司の廢止と同時に設置せられたり。

ばうじやう‐し 坊城使【名】**しゆりばうじやうし**（修理坊城使）に同じ。

ばうじやう‐じじゆう 坊城侍從【名】〔人〕**ふぢはらいへたか**（藤原家隆）に同じ。著聞「家隆卿の、未だ若くて、坊城侍從とて、寂蓮が聟にて、同宿したりけるに」

はうしやう‐ぜい 報償稅【名】〔經〕『英 Consideration tax』報償の主義に基づきて課する關稅。

はうじやう‐せつり 方狀節理【名】〔地〕方狀をなせる節理。**せつり**（節理）三參照。

はうじやう‐ち 放生池【名】『陔餘叢考に「唐乾元中、命二天下一置二放生池八十一所一」とあり』魚類を放生するための池。

はうじやう‐つ 放生津【名】〔地〕『中古、八幡宮領となり、その放生會を行ひしより、この名起れりといふ』越中國射水（イミヅ）郡新湊（シンミナト）町の舊稱。明治四年、附近の十一村を合はせて、今の名に改む。

はうじやうつ‐がた 放生津潟【名】〔地〕越中國射水（イミヅ）郡にある淡水湖。新湊（シンミナト）町の東南約一里、古は面積頗る大なりしが、今は周回一里二十町餘、東西一里、南北十町となり、餘水は奈呉の港より海に注ぐ。毎年七月三十日の夜、水上に祭禮の執行あり、俗に潟祭（カタマツリ）と呼ぶ。古の奈呉江なりといふ。一名、海龍湖。

はうじやう‐でん 放生田【名】王朝時代に、放生の魚鳥を買求むる料に充てられし不輸租田。元慶六年、初めて諸國に設置せらる。

はうじやう‐のつ 放生津【名】〔地〕**はうじやうつ**（放生津）に同じ。太平記「只今まで馳せ集る能登・越中の兵ども、放生津に引退きて」

はうしやう‐ふたん 報償負擔【名】自治團體の設備又は營造物によりて、特殊の利益を受くる者が、受けたる利益の多少に應じて、その設備又は營造物に要する費用を負擔すること。

はうしやう‐りう 寶生流【名】**ほうしやうりう**（寶生流）を見よ。

はうじやう‐ゑ 放生會【名】一『乾淳佛時記に「四月八日爲二佛誕生日一、諸寺各有二浴佛會一、此日西湖爲二放生會一、小舟競二賣龍魚螺蚌一、令二放生一」とあり』殺生戒に基づく金光明經の説によりて、生類を放ち遣ることを行ふ法會。我國にては、養老四年、戰死者追福のために、始めて諸國に行はれし中に、宇佐八幡のもの最も顯れ、貞觀五年には、男山八幡宮にも始めて行はれ、文治三年、鶴岡（ツルガヲカ）八幡宮にも亦始めて行はれ、何れも八月十五日に行ひ、放生會といへば、八幡宮獨特の儀式なるが如くなりしが、明治維新以來廢止せられたり。水鏡「宇佐の宮、託宣したまひて、戰の間に多くの人を殺せり、これによりて、放生をすべしと宣はせしかば、これより諸國の放生會は始まりしなり」 二 **はうじやうがは**（放生川）二の古稱。

はうしや‐がく 放射學【名】〔理〕『英 Radiology』物理學の一部。放射性を研究するもの。

はうしや‐がへし 報謝返【名】**ほうしやがへし**（報謝返）を見よ。

はうしや‐き 放射器【名】『英 Ejector』流動體の噴出誘導によりて、他の流動體を放射するやうに仕掛けたる器。霧噴（フキリキ）のごとき、その一なり。

はう‐しやく 寶尺【名】貴き物の長さ。謠曲（三笑）「遠く見れば、織るが如くにして、天臺に掛く。寶尺を疑ふ事をやめよ。度りがたし」

はう‐しやく 保釋【名】**ほしやく**（保釋）に同じ。

ばうじやく‐ぶじん 旁若無人・傍若無人【句】『傍に人無きが若（ゴト）しとの義』人の見てあるをも憚らず、勝手に振舞ふこと。ばうにやくむにん。

はうしや‐くわやく 拋射火藥【名】**はっしやくわやく**（發射火藥）に同じ。

はうしや‐さうしよう 放射相稱【名】〔動〕**ふくしやさうしよう**（輻射相稱）に同じ。

はうしやさうしよう‐くわ 放相射稱花【名】〔植〕**ふくしやじやうくわ**（輻射狀花）に同じ。

はうしや‐じやう 放射狀【名】**ふくしやじやう**（輻射狀）に同じ。

はうしやじやう‐くわ 放射狀花【名】〔植〕はうしやさうしようくわ（放射相稱花）に同じ。

はうしや‐すゐくわん 放射水管【名】〔動〕『英 Radial vessels』水管系の一部。五條ありて、兩側に對（ツヰ）をなせる數多の小管分岐し、その先端ごとに、歩足を著く。輻狀水管。

はうしや‐せい 放射性【名】〔理〕『英 Radioactive』原子量の大なる元素の、ベツクレル線を放射する性質。

はうしやせい‐たい 放射性體【名】〔理〕『英 Radioactive substance』ラヂウム・ウラニウム・トリウムなどの如く、ベクレル線を放射する物質。現今、これに屬する元素、三十以上を算するに至れり。放射性物質。放射體。放射物體。放射能作物質。

放射性體の變脫（ヘンダツ）【句】〔理〕放射性體が、系統的なる順序を經て、一定の速さによりて、放射性新物質に變成すること。

はうしやせい‐のうさ 放射性能作・放射性能做【名】〔理〕**はうしやのうさ**（放射能作）に同じ。

はうしやせい‐ぶっしつ 放射性物質【名】〔理〕はうしやせいたい（放射性體）に同じ。

はうしや‐せつ 放射說【名】〔理〕『英 Emission theory』**びりふしせつ**（微粒子說）に同じ。

はうしや‐せん 放射線【名】放射狀に射出する線又は光線。

はうしや‐せん 拋射線【名】〔理〕**はうぶつせん**（拋物線）に同じ。

はうしや‐そしき 放射組織【名】〔植〕**しやしゆつずゐ**（射出髓）の改稱。

はうしや‐たい 拋射體【名】〔理〕『英 Projectile』**はうぶつせんうんどう**（拋物線運動）を見よ。

はうしや‐たい 放射體【名】〔理〕**はうしやせいたい**（放射性體）に同じ。

はうしやちゆう‐るゐ 放射蟲類【名】〔動〕はうさんちゆうるゐ（放散蟲類）に同じ。

はうしや‐どうけい 放射同形【名】〔動〕ふくしやさうしよう（輻射相稱）に同じ。

はうしや‐のう 放射能【名】〔理〕次條に同じ。

はうしや‐のうさ 放射能作・放射能做【名】〔理〕『英 Radioactivity』放射性體が、ベクレル線を射出し、その結果、或種の物質に螢光を發せしめ、寫眞の乾板上に置けば、氣體を電離せしめて、これに傳導性を付與する等の作用。ラヂウムは、諸物質中に於て、この作用最も大なるものなり。放射性能作。放射能。能作。

はうしやのうさ‐ぶっしつ 放射能作物質【名】〔理〕**はうしやせいたい**（放射性體）に同じ。

はうしや‐ぶつ 拋射物【名】〔理〕**はうしやたい**（拋射體）に同じ。

はうしや‐ぶったい 拋射物體【名】〔理〕**はうしやせいたい**（放射性體）に同じ。

はうしや‐やく 拋射藥【名】**はっしやくわやく**（發射火藥）に同じ。

はう‐しゆ 寶珠【名】寶物とすべき珠。たからの珠。**ほうしゆ**（寶珠）參照。著聞「七日滿つる夜の夢に、寶珠を賜はると見はべりける程に」

はう‐しゆ 砲手【名】火砲を操縱する砲兵卒。

はう‐しゆ 保守【名】**ほしゆ**（保守）に同じ。

はう‐じゆ 保壽【名】**ほじゆ**（保壽）に同じ。

はう‐じゆ 寶樹【名】〔佛〕**ほうじゆ**（寶樹）を見よ。

ばう‐しゆ 暴主【名】暴虐なる君主。殘虐なる主君。暴君。

ばう‐しゆ 芒種【名】〔天〕二十四氣節の一。太陽曆の六月六七日頃に當る。ばうしよう。

ばう‐しゆ 卯酒【名】『白居易の詩に「心頭卯酒未レ消時」とあり』卯の時に飲む酒。ばうす。「防護。防禦。

ばう‐しゆう 防守【名】ふせぎまもること。

ばう‐しゆう 保聚【名】**ほしゆう**(保聚)を見よ。「砲。

はう‐じゆう 砲銃【名】大砲と小銃と。銃

はう‐じゆう 放縱【名】『縱の音、正しくはショウ』氣まま。なげやり。放埒。

はうじゆ‐がしら 寶珠頭【名】**ほうじゆがしら**(寶珠頭)を見よ。

はう‐じゆつ 方術【名】㊀わざ。技藝。方技。㊁しかた。てだて。方法・手段。㊂神仙の術。魔術。

はう‐じゆつ 砲術【名】砲を運用する術。

ばう‐しゆつ 旁出・傍出【名】橫に出づること。「家。砲家。

はうじゆつ‐か 砲術家【名】砲術の專門

はうじゆつ‐けうじゆ 砲術敎授【名】軍艦職員の一。兵曹をこれに充つ、砲術長若しくは掌砲長の指揮を受け、操砲・操銃の敎授を掌りしもの。明治十七年設置、同二十二年廢止せり。

はうじゆつ‐ちやう 砲術長【名】軍艦職員の一。艦長の命を承け、砲熕・砲架・携帶武器・大小彈藥・距離測定器・砲具及び屬具その他、砲熕に關する一切の兵備を整頓し、且つ砲術の敎授を監掌せしもの。

ばうしゆ‐どうめい 防守同盟【名】第三國の攻擊に對する防守の點に於てのみ相援くることを約せる國際上の同盟。防禦同盟。(攻守同盟に對して)

はうしゆ‐の‐たま 寶珠玉【名】**ほうしゆのたま**(寶珠玉)を見よ。

はう‐しゆん 芳春【名】㊀花ざかりの春。芳辰。㊁**せいしゆん**(青春)㊀に同じ。

はう‐じゆん 芳潤【名】芳しくして、うるほひあること。芳香ありて潤澤なること。

ばう‐しゆん 髦俊【名】**えいしゆん**(英俊)に同じ。

はう‐しよ 苞苴【名】㊀『苞は藁にて包む義、苴は下に藉(シ)く義』人に贈る物。おくりもの。みやげもの。進物。音物(インモツ)。㊁まひなひに用ふる物。賄賂。

はう‐しよ 方所・方處【名】方位と場所と。ところ。場所。空間。「じ。

はう‐しよ 芳書【名】**はうかん**(芳翰)に同

はう‐しよ 報書【名】㊀報知の書翰。報狀。㊁返事の書狀。返書。

ばう‐しよ 望舒【名】誹謗する書面。

ばう‐じよ 謗書【名】『楚辭に「前二望舒一、使二先驅一兮」とあり』支那にて、古、月の馭者なりと想像せしもの。

ばう‐じよ 茅茹【名】『易經の否卦に「初六、拔二茅茹一、以二其彙一、貞吉亨」、同書の泰卦に「初九、拔二茅茹一、以二其彙一、征吉」とあるに本づく。茹は茅根にて、茅根の連なるに譬へていふ』君子・賢人が、朋友の援引によりて、朝廷に仕ふること。

はう‐しよう 報鐘【名】知らせの鐘。相圖の鐘。號鐘。「同じ。

はう‐しよう 保證【名】**ほしよう**(保證)に

はう‐しよう 褒稱【名】ほめたたふること。讃稱。褒美。

はう‐しよう 放縱【名】**はうじゆう**(放縱)に同じ。「に同じ。

はう‐じよう 方乘【名】〔數〕**じじよう**(自乘)

ばう‐しよう 芒種【名】**ばうしゆ**(芒種)に同じ。「と。

ばう‐しよう 冒稱【名】他姓を名乘るこ

ばう‐しよう 旁證・傍證【名】その事に關係ある他の書を、あまねくしらべて、證とすること。「博引・傍證」「あるさま。

ばう‐じよう 尨茸【貌】毛などの亂れて

はうじよう‐すう 方乘數【名】〔數〕方乘の結果なる數。方乘積。方數。冪(ベキ)。

はうじよう‐せき 方乘積【名】〔數〕前條に同じ。「誤讀。

はう‐しよく 芳躅【名】**はうたく**(芳躅)の

はう‐しよく 飽食【名】飽くまで食ふこと。腹一杯に食ふこと。

ばう‐しよく 望蜀【名】『「隴(ロウ)を得て、蜀を望む」を見よ』一つの望を遂げたる上に、更に、他の望を起すこと。

ばう‐しよく 暴食【名】過度に食ふこと。おほぐひ。大食。「饕。

ばう‐しよく 紡織【名】紡績と機織と。紡

ばうしよく‐こうげふ 紡織工業【名】**せんゐこうげふ**(纖維工業)に同じ。

ばうしよく‐ざい 防蝕劑【名】『英 Anti-corrosive』金屬の腐蝕を防止するに用ふる藥劑。例へば、ベンキ・油類・鉛などの類。

ばう‐しるゐ 芒刺類【名】〔動〕**きよくひざうぶつ**(棘皮動物)に同じ。

ばう‐しろう 望士樓【名】『望士は富士山を望む義』太田道灌が江戸城に築きし樓。**ふじみはうざう**(富士見寶藏)參照。

はう‐ず【名】小麥粉にて作りたる、丸き餠。

はう‐ず 焙ず【動佐變他】火氣を加へて、濕氣を除く。あぶり炒(イ)る。

はう‐ず 報ず【動佐變他】㊀むくゆ。かへす。㊁告げ知らす。通知す。

ばう‐す 卯酒【名】**ばうしゆ**(卯酒)の約。〔古語〕大鏡「後夜に召すばうすの御肴には、只今殺したる雉をぞ參らせけるに」

ばう‐す 謗す【動佐變他】**そしる**(謗る)に同じ。〔古語〕宇治「延引せしめたまふこと然るべからずとばうすること、限なし」太平記「僧衆、無慈悲・不正直にして、法を持し、人を謗して」

ばう‐ず 坊主【名】㊀『**ばう**(坊)㊃を見よ』一坊の主たる僧。〔房主〕沙石集「强盜五六人、かの房に打入って、房主を捕へて、布施物を運び取る」㊁僧。僧侶。㊂剃髮してある人。ばうずっくり。㊃武家時代に、幕府及び諸侯に仕へ、剃髮・法服の姿にて、茶の湯並びに給仕等の雜役を勤仕せし者。德川幕府にては、若年寄の管下に屬し、奥坊主と表坊主とに分れ、何れも組頭あり、更にその上に同朋頭ありて總轄し、なほ數寄屋坊主・紅葉山(モミヂヤマ)附坊主・廣間坊主など稱せるもあり、京都二條城番にも若干附屬したり。(主に敬意の接頭語**お**(御)を添へていへり)㊄江戸城大奥の女中の、剃髮して、目見(メミエ)以上の資格ありしもの。(主に敬意の接頭語**お**(御)を添へていへり)㊅『**けしばうず**(芥子坊主)・**かみおき**(髮置)㊀を見よ。なほ、**ばうや**(坊や)參照』幼兒を指していふ語。ばうずっくり。ばう。重井筒「それ、坊主めが。怪我さすな。貧うて歸れ」蘆屋道滿大內鑑「これは、これは、坊主めがあがきくたびれ、このふんぞって寢た形(ナリ)はいの」㊆**ばうずあたま**(坊主頭)の略。㊇頂に毛無く、又その禿げてあること、又その物。一茶「桑の樹は坊主にされて芥子の花」

坊主が憎けりや、袈裟(ケサ)まで憎い【句】次條の略。〔諺語〕

坊主が憎ければ、袈裟(ケサ)まで憎い【句】『說苑の卷五に「愛二其人一者、及二其屋上烏一、憎二其人一者、憎二其餘胥一」とあり』その人を憎むあまりに、その人に關係あるものまでも憎く感ず。〔諺語〕

坊主憎けりや、袈裟(ケサ)まで【句】前條の略。〔諺語〕櫻鍔恨鮫鞘「坊主憎けりや袈裟までと、己(オレ)あ、もう、何ぢや知らぬが、滅多やたらに憎てらしいは」

坊主の髮(カミ)【句】「嘘(ウソ)と坊主の髮とはいった事なし」を見よ。

坊主の櫛貯(クシタクハヘ)【句】「法師の櫛貯」に同じ。〔諺語〕「〔諺語〕

坊主の鉢卷(ハチマキ)【句】締の無き譬。

坊主の不信心(フシンジン)【句】㊀坊主は、人に信心を勸むる身なるに、却って信心に乏しき者多し。〔諺語〕志道軒傳「箕實(ミツリ)、笠で皺ると、醫者の不養生、坊主の不信心、昔よりして然り」㊁人に事を說き勸むる身にてありながら、自身は、その事を實行せぬ譬。〔諺語〕

坊主の髮前(マヘガミ)、若衆(ワカシユ)の衣(コロモ)【句】絲のもつれたるを解かんとする時の呪(マジナヒ)の語。

坊主、丸儲(マルマウケ)【句】『剃髮するを「頭を丸む」といひ、けは毛にて、頭に緣ある等によりて、丸儲の丸に言ひつづけ

たる語』坊主は、施物（セモツ）のみにて生活するが故に、資本を要せずして、純益を得。〔諺語〕

ばうず 亡ず【動佐變他】死亡せしむ。殺す。「我（ワ）と亡ず」參照。

ばうず 忘ず【動佐變他】わする。忘却す。謠曲（鉢木）「餘の大雪にて、前後を忘じて候ふ程に、一夜の宿を御貸し候へ」

ばうず-あたま 坊主頭【名】剃髮せる人のあたま。ばうず。圓頂。圓顱。手習鑑「お師匠樣の留守の間（マ）に手習するは、大きな損、おりや坊主あたまの請書（キヨガキ）したと見せるは、十五の涎くり」浮世風呂「俳諧師、……坊主あたまを、くるくると廻しながら」

ばうず-いか 坊主烏賊【名】〔動〕ひいか（ひ烏賊）に同じ。

はう-すう 砲數【名】大砲のかず。

はう-すう 方數【名】〔數〕はうじようすう（方乘數）に同じ。

ばうず-えり 坊主襟【名】襟足の無き襟。浮世床「坊主襟でいいから、木地の儘でおけばいい事よ」

ばうず-おち 坊主落【名】僧の墮落して、還俗（ゲンゾク）すること、又その人。

ばうず-がっぱ 坊主合羽【名】桐油紙（トウユガ）にて製したる、袖なき雨合羽。合羽の最も早く行はれしものにて、木綿にて製したるは、引廻（ヒキマハシ）といへり。八笑人「己（オラ）あ、半合羽の上へ、坊主合羽・深編笠といふ拵（コシラヘ）だ」

ばうず-がへり 坊主還【名】還俗（ゲンゾク）すること、又その人。

ばうず-かむろ 坊主禿【名】江戸時代に、遊廓にて、遊女に使はれたる、幼き禿。多くは頭を剃りゐたり。

ばうず-ぎしき 坊主儀式【名】㊀僧侶のなす儀式。㊁質素なる儀式。新永代藏「坊主儀式のくらし、……少しも物の入る事なし」

ばうず-くさし 坊主臭し【形二】何となく僧侶にゆかりありげなり。坊主の取扱ふ物めきてあり。

ばうず-くび 坊主首【名】坊主頭（バウズアタマ）なる者の首。娥歌加留多「雜人（ザフニン）の手にかかり、坊主首討たれなば、なんぼう口惜しかるべきに」

ばうず-こ 坊主子【名】頭を剃りてある小兒。芥子坊主（ケシバウズ）の子供。ばうずっこ。

ばうず-こへゑ 坊主小兵衞【名】〔人〕貞享の頃の、半道の役者。髮の小く頭のうしろに附きたるさま、前より見れば、坊主の如くなりしより、この名を得といふ。其角「坊主小兵衞、道心して、人人、小兵衞坊主と申しければ、　坊主小兵衞小兵衞坊主とかへりばな」

ばうず-ごま 坊主獨樂【名】上は圓くして凹に、下は細く尖りたる獨樂。

ばうず-だたみ 坊主疊【名】やらうだたみ（野郎疊）に同じ。

ばうず-っ-くり 坊主っくり【名】『くりくりばうず（くりくり坊主）を見よ』ばうず（坊主）㊂㊅に同じ。〔東京の俚語〕

ばうず-っ-こ 坊主子【名】ばうずこ（坊主子）の音便。

ばうず-て 坊主手【名】ばうずわん（坊主椀）に同じ。

ばうず-ばな 坊主花【名】〔植〕われもかう（地楡）に同じ。

ばうず-びけ 坊主引【名】〔商〕相場が、十圓・九圓九十九錢・九圓九十八錢・九圓九十七錢とやうに、一節毎に下落を重ねて、一度も戻らずに、大引となること。〔取引所の語〕

ばうず-ふで 坊主筆【名】毛の先の切れたる筆。ちびふで。禿筆。

ばうず-まくら 坊主枕【名】くくりまくら（括枕）に同じ。

ばうず-むぎ 坊主麥【名】〔植〕大麥の一品種。芒のなきもの。

はう-すん 方寸【名】㊀一寸四方。はうぢやう（方丈）㊀參照。㊁『心臟は、胸中方寸の大さの間に在りとていふ。古人は、人の精神作用は、心臟より出づと考へしなり』こころ。胸中。「方寸亂る」

方寸に在り【句】十分に考へてあり。胸に疊みてあり。和合人「呑み込んだ、呑み込んだ。もう、仕打は、方寸にあり」

方寸の心【句】はうすん（方寸）㊁に同じ。持統天皇歌軍法「方寸の心、億兆の人といへども、その向（ムキ）同じからず」

方寸の地【句】『列子の仲尼篇に「吾見二子之心一矣、方寸之地虛矣。幾聖人也」とあり』前條に同じ。

方寸の胸【句】前條に同じ。

方寸の胸に在り【句】「方寸に在り」に同じ。八陣守護城「狸親仁（タヌキオヤヂ）が白髮首提げんは瞬く間（マ）、わが方寸の胸に在り」

方寸を責む【句】是非見たく、又は得たしと心を痛む。奧の細道「江山水陸の風光、數を盡して、今、象潟（キサガタ）に方寸を責め」

ばうず-めくり 坊主捲【名】以呂波骨牌の方法の一。繪札のみを、裏返しに積み重ねおき、各人、順次に、一枚づつめくり、表を上に向けて並べゆく內、小野小町・紫式部など、女の作者のをめくりたる者は、場（バ）に並べるすべての札を、自己の所得とし、僧正遍昭・西行法師など僧侶の作者のをめくりたる者は、所得の札全部を手放して、場（バ）に返し、斯くて、最後に、所得の札の多少によりて、勝負を決す。

ばうず-もち 坊主持【名】同行者の共同の手荷物を、代り代りに持つため、坊主頭の人に行き遭ふ毎に、持手を替ふること。女殺油地獄「提重（サゲヂユウ）・五升樽、坊主持して」

ばうず-もどき 坊主擬【名】僧侶に似てあること。用明天皇職人鑑「坊主もどきの悴（セガレ）、いや、こいつ、只者ならず」

ばうず-やま 坊主山【名】はげやま。童山。禿山。

ばうず-よみ 坊主讀【名】僧侶の讀經のごとく、意義を味はずに讀書すること。

ばうず-わん 坊主椀【名】絲底の、凹みて、無きが如くに見ゆる椀。ばうずて。續五元集「絲尻の無きもをかしき坊主椀」

はう-すゐ 方錐【名】㊀よつめぎり（四目錐）に同じ。㊁〔數〕はうすゐけい（方錐形）の略。

はう-すゐ 抱水【名】成分中に、水分を含めること。含水。「抱水クロラル」

はう-すゐ 放水【名】水を流しやること。

ばう-すゐ 紡錘【名】絲をつむぐに用ふる錘（ツム）。

ばう-すゐ 防水【名】浸水せぬやうにすること。水のしみこまぬやうにすること。

ばうすゐ-かくしつ 防水隔室【名】『英 Watertight compartment』船艦にて、浸水を成るべくその一部分のみに止めて、危險を防ぐために、甲板・外板・二重底・隔壁等の水密障壁にて圍みたる室。軍艦は、敵彈・水雷等による浸水の危險、商船よりも一層多きため、その數甚だ多し。

はうすゐ-くろらる 抱水クロラル（英 Chloral hydrate）【名】〔化〕無水酒精に、乾燥せる鹽素を通じて、クロラルとなし、これに水を加へて製する、無色・透明の結晶。透竄性の臭氣あり。味は腐蝕性にして、やや苦く、水・酒精・エェテルには、溶け易し。催眠藥・鎭痛劑として用ふ。

はうすゐ-けい 方錐形【名】〔數〕『英 Square pyrmid』底面の四邊形なる角錐。方錐。

ばうすゐ-けい 紡錘形【名】〔植〕『英 Fusiform』紡錘に似たる形、卽ち圓柱形の、中央最も太く、兩端に至るに從ひ、狹窄して、尖端に終るもの。

はうすゐ-けいさんあるみにうむ 抱水珪酸アルミニウム【名】〔化〕はくたうど（白陶土）に同じ。

ばうすゐ-こん 紡錘根【名】〔植〕『英 Fusiform root』單根の一種。紡錘形をなせるもの。大根（ダイコン）・不斷草（フダンソウ）などの根、これなり。

ばうすゐ-ざい 防水劑【名】水に對する不溶解性を有し、よく纖維に吸收せられて固著し、吸濕性を有せざる物質。防水布などを作るに用ふ。例へば脂肪質・樹脂・パラヒン蠟・單寧（タンニン）酸・ゴム類などの類。

ばうすゐ-さうち 防水裝置【名】防水の作用をなさしむるための裝置。例へば船艦の防水隔室・防水扉などの類。

ばうすゐ-し 防水紙【名】表面に塗料などを施して、防水性を付與したる紙。塗料

として、需用多き、蒟蒻粉（コンニヤクコ）の溶液にして、又、膠と明礬とを、これに混用し、又は代用するもあり。

ばうすゐ-せい 防水性【名】防水の作用をなす性質。

はうすゐ-たんそ 抱水炭素【名】〔化〕たんすゐくわぶつ(炭水化物)に同じ。

ばうすゐ-ちゆう 紡錘蟲【名】〔動〕原生動物中、有孔蟲類に屬する一部類。紡錘形をなし、螺環多く、房も多きもの。多くは化石となりて存すれども、今なほ生存するもあり。

ばうすゐ-ばうがい-ざい 防水妨害罪【名】〔法〕水害に際して、防水上の必要物を隱匿又は損壞し、或は、その他の方法を以て、防水を妨害するによりて成立する罪。

はうすゐ-はふ 放水法【名】河水改修の方法の一。新水路を作り、洪水量の一部もしくは全部を海に導き、又は河川の屈曲部に、洪水に際してのみ通水すべき放水路を作りて、洪水の害を減少もしくは防止すること。分水法。

ばうすゐ-ひ 防水扉【名】船艦の中にて、浸水を防ぐために、特別の裝置をなして、一室每に設けたる鐵の扉。

ばうすゐ-ふ 防水布【名】防水劑にて處理して、防水性を付與したる布。

はうすゐ-べん 放水瓣【名】にがしべん(逃瓣)に同じ。

はうすゐ-ろ 放水路【名】『英 Cut 又 Cut-off』河川の餘水を流入せしめて、水害を減少もしくは防水すために設くる水路。

はう-せい 邦制【名】國の建て方。國の制度。

はう-せい 芳聲【名】はうめい(芳名)㊀㊁に同じ。

はう-せい 砲聲【名】大砲を打ち出す音。

はう-せい 寶星【名】支那淸朝にて、その末葉に制定したる勳章。五等に分れ、一等より三等までは、更に各三級づつに分れ、外國人に贈與する目的にて作りしものなれども、後には、外國に使する自國の官吏にも與ふることとなれり。

はう-せい 放生【名】『列子の說符篇に「正旦放生、示レ有レ恩也」とあり』はうじやう(放生)に同じ。

はう-せい 方正【名】心又は行狀の正しきこと。正直。端正。

はう-せい 坊正【名】町の役人。まちやくにん。

ばう-せい 昴星【名】ばう(昴)に同じ。盛衰記「太白、昴星を犯す」

ばう-せい 房星【名】ばう(房)㊃に同じ。太平記「今、政道正しからざるによりて、房星の精化して、この馬と成りて」

ばう-せい 暴政【名】苛酷なる政治。虐政。苛政。

ばう-せい 旁生・傍生【名】『癸辛雜識に「凡草種レ之則正生、甘蔗種レ之則旁生」とあり。**ばうしやう**(旁生)參照』正しく伸びず、横に發生すること。(正生に對して)

ばう-せい 傍正【名】傍系と正系と。正統記「武烈、惡王にて、日嗣絕えましましし時、應神五世の御孫にて、繼體天皇選ばれ立ちたまふ。こんな珍しきためしに侍る。されど、二つ並べて爭ふ時にこそ、傍正の疑もあれ、群臣、皇親なき事を愁へて求め出で奉りし上に」

はうぜい-さうこ 保稅倉庫【名】**ほぜいさうこ**(保稅倉庫)に同じ。

はう-せう 寶鈔【名】支那明代に行はれたる、一種の紙幣。

はう-せう 堡礁【名】〔地〕『英 Barrier reef』珊瑚礁の一。陸地を離れて、海岸と並行し、陸地との間に、一帶の內海を控へたるもの。堺礁。(裾礁・環礁に對して)

はう-せう 放笑【名】聲を放ちて、大笑すること。

ばう-せう 芒硝・芒消【名】〔化〕**りうさんなとりうむ**(硫酸那篤僧謨)に同じ。根南志具佐「古方家或は儒醫などとは名乘れども、病は見えず、藥は覺えず、漫に石膏・芒硝の類を用ひて殺す故」

はう-せき 寶石【名】質硬くして、容易に傷かず、色澤美に、多くは透明、且つ產出額少なく、貴重なる裝飾品に適する石。例へば金剛石・綠玉・紅玉などの類。

はう-せき 芳跡・芳蹟【名】たふとき遺跡。芳躅。盛衰記「三藏修練（シユレン）の芳跡を慕ひ、大唐青龍の風範を寫して」

ばう-せき 紡績【名】㊀綿花（メンクワ）・羊毛・麻又は絹の纖維を紡ぎて、絲となすこと。㊁次條の略。㊂**ばうせきぐわいしや**(紡績會社)の略。〔俚語〕

ばうせき-いと 紡績絲【名】綿花（メンクワ）・羊毛・麻又は絹の纖維を原料とし、紡績機械にて紡ぎたる絲。

ばうせき-おほしま 紡績大島【名】紡績絲にて、大島紬に似せて織りたるもの。上野國足利・武藏國蕨地方より多く產す。

ばうせき-おり 紡績織【名】紡績絲にて織りたる織物。

ばうせき-がすり 紡績絣【名】大島紬のごとき紡績の絣織。

ばうせき-かぶ 紡績株【名】紡績會社の發行したる株券。

ばうせき-きかい 紡績機械【名】『英 Spinning machine』紡績絲を紡ぐに用ふる機械。解俵機・混綿機・開綿機・打綿機・梳綿機・練篠機・粗紡機・精紡機・合絲機・撚絲機・捲返機・綛枠（カセワク）機・艶掛機・荷造機等より成る。紡絲機械。

ばうせき-ぐわいしや 紡績會社【名】紡績の業を營む會社。

ばうせき-げふ 紡績業【名】紡績の產業。

ばうせき-けんし 紡績絹絲【名】紡績機械にて製したる絹絲。

ばうせき-じやう 紡績孃【名】〔動〕**くつわむし**(轡蟲)の漢名。

ばうせき-ちりめん 紡績縮緬【名】紡績絹絲を用ひて織りたる縮緬。

ばう-せつ 妄說【名】みだりなる說。とりとめなき說。まうせつ。虛說。

ばう-せつ 暴說【名】**ばうろん**(暴論)に同じ。

ばう-ぜつ 傍絕【名】〔文〕絕句の詩を斷ちて、對句一聯を取放したるもの。庭訓往來「忘二序・表・賦・題・傍絕韻聲之質一」

ばうせつ-ゑん 傍接圓【名】〔數〕『英 Escribed circle』多角形(多くは三角形)の一邊、及び、これに隣る二邊の延長線に切し、且つ全くその多角形の外にある圓。故に、その多角形の邊數と同じき數だけの傍接圓を得べく、その各圓心を、傍心といふ。

はう-せん 炮船・砲船・礮船【名】**いしびやぶね**(石火矢船)に同じ。

はう-せん 方錢・方泉【名】㊀方形の錢。例へば仙臺通寶錢などの類。㊁古、朝服の革帶の飾として、その右の脇に附け、その中間に魚袋を下ぐるやうにせし方形の石。

はう-せん 烹鮮【名】『「大國を治むるは、小鮮を烹(に)るが如し」を見よ』國政を執行ふことの譬。まつりごと。太平記「越後國は、義貞朝臣、勳恩の國として、拜任、既に多年たりしかば、一國の地頭・御家人、その烹鮮に隨ふこと、日久し」

烹鮮の職【句】國守の職掌。庭訓往來諸抄大成「老子經、治二國家一如レ烹二小鮮一といへり。鮮は魚なり。小魚を烹るには、しげく打返しぬれば、皆碎けのくなり。又、打やりざまにしても、わろし。國を治むることも、あまり細かにいろひだてをすれば、碎けて、後は大なる災となるものなり。この心を以て、國司を、烹鮮の職といふなり」

はう-せん 砲戰【名】砲擊しあふこと。砲火をまじへて戰ふこと。

はう-せん 放線【名】〔理〕**はうしやせん**(放射線)に同じ。

はう-ぜん 寶前【名】**ほうぜん**(寶前)を見よ。

はう-ぜん 保全【名】**ほぜん**(保全)に同じ。

はう-ぜん 放禪【名】坐禪を止むること。

ばう-せん 防戰【名】ふせぎたたかふこと。

ばう-せん 防染【名】布帛に染色を施すに、その一部に、染液の滲入するを防ぐ方法を施したる後、他の部分を染めて、模樣のあらはるるやうにすること。

ばう-ぜん 茫然【貌】㊀廣く遠きさま。茫茫。㊁ばっとしたるさま。とりとめのなきさま。漠然。茫茫。茫乎。㊂心のぼんやりとしたるさま。茫乎。惘然。謠曲(盛久)「唯茫然とあきれ居たり」

ばう-ぜん 惘然【貌】あきれたるさま。太平記「惘然として、更に知る所なし」

ばう-ぜん 厖然【貌】徒にひろがりふく

れたるさま。むっくりと大いなるさま。

はうせんじ-かご 寶泉寺駕籠 【名】**はうせんじかご**(寶泉寺駕籠)を見よ。

はうそ 柞 【名】〔植〕**ははそ**(柞)の音便。

はう-そ 疱瘡 【名】**はうさう**(疱瘡)の訛。

はう-そ 寶祚 【名】『祚は運祚の義』**はうゐ**(寶位)に同じ。

はう-そ 硼素 【名】〔化〕結晶狀をなし、又、無定形なるもある、一種の元素。非金屬元素なれども、金屬性をも帶ぶ。天然に產することなく、多くは硼酸もしくは硼砂等の硼酸鹽類となりて、土壤・海水・鑛泉に普遍に含有せられ、隨って、生物體内にも、僅微ながら發見せらる。常溫にては、空氣中に變化することなけれども、强熱を加ふる時は、燃えて酸化物となる。

はう-そ 萌蘇 【名】木の芽の萌え出で、蟄蟲の蘇生すること。（太平記）「春雷一たび動く時、蟄蟲萌蘇する心地して、聖運忽ちに開けて」

はう-そ 彭祖 【名】〔人〕『莊子の大宗師篇、列仙傳、史記の楚の世家などに見ゆ』支那の傳說的人物。七百餘歲又は八百餘歲まで生きたりといふ。

ばう-そ 妨訴 【名】次條を見よ。

ばう-そ 妨訴の抗辯 【句】〔法〕**ばうそかうべん**(妨訴抗辯)に同じ。

はう-そう 放送 【名】『英 Broadcast』廣く諸方面に傳達せしむるための、無線電話の送話。

ばう-そう 房總 【名】〔地〕安房國と上總・下總の兩國と。

はうそう-きよく 放送局 【名】無線電話を放送する局所。

はうそう-げき 放送劇 【名】ラヂオにて放送する劇。舊劇など、舞臺をしつらひて、本式に演じて放送するものは、放送舞臺劇ともいふ。らぢお劇。らぢおどらま。

はうそう-じかん 放送時間 【名】或講演又は演藝などの放送につきての、所要の時間。

はうそう-ちやうしゆ-れう 放送聽取料 【名】無線受話裝置を有して、放送を聽取する者の、放送局に納付する料金。

はうそう-ばんぐみ 放送番組 【名】放送局より每日放送する音樂・講演などの番組。放送ぷろぐらむ。

ばうそう-はんたう 房總半島・房總半嶋 【名】〔地〕關東地方の東南にある半島。安房・上總兩國の地。

はうそう-ぶたいげき 放送舞臺劇 【名】**はうそうげき**(放送劇)を見よ。

はうそう-ぷろぐらむ 放送プログラム 【名】『ぷろぐらむを見よ』**はうそうばんぐみ**(放送番組)に同じ。

はうそう-むせんでんわ 放送無線電話 【名】『英 Broadcast radio-telephone』放送局より、一定の時間内に、音樂・講演等の音聲を放送して、一定の制限の下に設けたる無線受話裝置を有する多數の加入者に聞かしむるもの。らぢお。

ばうそ-かうべん 妨訴抗辯 【名】〔法〕『獨 Prozesshindernde Einrede』原告の訴訟に要件の不備なるものありといふを理由として、被告が、その辯論を拒むこと。

はうそ-がしは 柞槲 【名】〔植〕**はうそ**(柞)に同じ。

はう-そく 方則 【名】のり。きまり。規則。

はう-そく 飽足 【名】あきたること。十分と思ふこと。饜足。

はう-ぞく 方俗 【名】地方の風俗。土俗。

はう-ぞく 邦俗 【名】國の風俗。國の習慣。國俗。

ばう-そく 亡息 【名】死にし子息。亡(ナ)きむすこ。

ばう-そく 茅塞 【名】『茅(チガヤ)の道路を塞ぐに譬へていふ。孟子の盡心下篇に見ゆ』慾のために、心の鬱しふさがること。

茅塞を開かんことを請ふ 【句】人に教を請ふ時に、謙遜していふ語。

ばう-そく 忘足 【名】『莊子の達生篇に見ゆ。ただ履の行くを覺ゆるのみにて、足の進むを忘るる義』履の、よく足に適ひて、步みよきこと。

ばう-ぞく 放俗 【名】本來の品位をそこなふこと。一說に、凡俗の轉音にて、世の常、ただ人などの意なりともいふ。〔古語〕源氏「くれなゐの腰ゆへる際まで、胸あらはに、ばうぞくなるもてなしなり」

ばう-ぞく 望族 【名】名望高き家がら。門閥家。

ばう-そつ 亡卒 【名】『史記の項羽紀に「收㆓齊亡卒㆒、得㆓數萬人㆒」とあり』㊀逃亡せる兵士。㊁死にし兵卒。太平記「軍に討たれつる者どもの名字を、一一に書き註して、因幡の岩常谷の道場へ送り、亡卒の後世(ゴ)菩提(ボダイ)をぞ弔はせられける」

亡卒の遺骸を、帛を散して收む 【句】『貞觀政要の第六に出づ』支那唐の太宗の、高麗征討の時、戰死の將卒に、親しく哀悼の意を表せし故事。太平記「昔、唐の太宗、戰に臨みて、戰士を重くせしに、血を含み、疵を吸ふのみならず、亡卒の遺骸を、帛を散して收め」

ばう-そつ 暴卒 【名】にはかなること。いきなり。

はう-そん 保存 【名】**ほぞん**(保存)に同じ。

ばう-そん 亡孫 【名】死にしまご。亡(ナ)きまご。

ばう-そん 亡損 【名】**そんばう**(損亡)に同じ。

はう-た 端唄・端歌 【名】㊀俗曲の一種。上方唄の中の、長唄にあらぬもの。もと短篇なる意の名稱なれど、後には、三味線の宗家たる檢校・勾當以外の手に成りたる新曲。例へば、芝居唄など、又は宗家の手に成りたるにても、一時の戲作と見るべきもの等をもいふこととなりたるより、長さに於て、長唄にまさるものもあるに至れり。二上(ニアガリ)・三下(サンサガリ)・本調子の三種に分れ、本調子に屬するものは、大抵短篇なり。南谿、西遊記「薩摩に入りしに、琴・三味線・胡弓共に、端歌は、この國、格別にすぐれて、難波にも、をささ劣らず」㊁**うたざはぶし**(歌澤節)に同じ。

はう-だ 方垜 【名】〔數〕和算にて、一・二・三等の平方數なる一・四・九等、又はその立方數なる一・八・二十七等の列。

ばう-だ 滂沱 【貌】雨又は淚のさかんなるさま。

はう-たい 芳態 【名】美人のすがた。謠曲（藍染川）「芳態、あらたに眠りて、眼蓋を開くことなし」

はう-たい 芳體 【名】美人の身體。若風俗「十九の名殘、平生の面色は、病中に衰へ、芳體眠るが如し」

はう-たい 包體 【名】〔鑛〕『英 Inclosures』鑛物粒の中に包まれたる他物。排列の形は一定せず、又その物のために、鑛物に種種の色澤を生ずることあり。包裹物。

はう-たい 砲隊 【名】㊀砲兵の隊。㊁陸戰のために、水兵を以て編制する野砲隊。大部隊は、各艦連合して編制す。

はう-たい 繃帶 【名】創所又は患部を被ひて、外部より侵す諸種の害、又は冷却、又は轉位等を防ぐために卷きつくる布。主として、脫脂木綿を用ふ。

はう-だい 砲臺 【名】砲を据ゑつけ、人員を掩護し、射擊を便ならしむる設備ある場所。だいば。

はう-だい 方内 【名】**はうない**(方内)に同じ。

はう-だい 放題 【接尾】思ふがままにする意。さんばう。「出(デ)放題」「勝手放題」「取(トリ)放題」

ばう-だい 傍題 【名】㊀〔文〕和歌・連歌・俳句にて、題の主たる事物を客とし、これに配合したる事物を主としたるか、又は兩者を同一の位置におきて詠むこと。例へば、「月前薄」といふ題にて、月を主として詠む類。缺點として忌む。㊁題目の主旨に外るること。八笑人「少し傍題にはなるが、……、六段目だと、奇妙だが」

ばう-だい 厖大 【名】厖然と大なること。

ばう-だい 膨大 【名】膨脹して大きくなること。

はうたい-えき 繃帶液 【名】『獨 Verbandflüssigkeit』繃帶を施す代りに塗附する液。例へば、コロヂウム・ジェラチンなどの類。

はうだい-かんしゆ 砲臺監守 【名】砲臺を監守する職。

はうだい-きやう 砲臺鏡 【名】重砲兵の用ふる望遠鏡。中に、ミクロメェトルの分畫を刻す。

はうたい-じゆつ 繃帶術 【名】疾患・創傷等の部位・性質・狀況等に適應するやうに

繃帶を施す術。

はうだい-ちやう 砲臺長【名】砲臺の指揮官。

はうたい-ふ 繃帶布【名】があぜに同じ。

はうたい-まき 繃帶卷【名】脫脂木綿を、繃帶用に供するやうに卷き整ふること。

はうたい-めん 繃帶綿【名】『獨 Verbandwatte』だっしめん(脫脂綿)に同じ。

はうたい-もめん 繃帶木綿【名】があぜに同じ。

はう-たう 寶刀【名】寶物たる太刀。たふとき刀。寶劍。

はう-たう 放蕩【名】酒色に耽りて、身の修らぬこと。だらく。はうらつ。

はう-たう 放島・放嶋【名】次條を見よ。

はうたう 放島の試(ココロミ)【句】王朝時代に、學生を試驗するに、他人との談合の出來ぬやうに、池の中島などに居らせて、詩・文を作らしめしこと。

放島の作文(サクモン)【句】放島の試にて、詩文を作らすこと、又その詩。

はう-だう 寶堂【名】立派なる堂。太平記「寶堂莊嚴(シヤウゴン)に事を寄せ、奇麗嚴淨(ゴンジヤウ)を好むと雖も」

はう-だう 報道【名】はうち(報知)に同じ。

ばう-だう 餺飥・餠餡【名】はくたく(餺飥)の音便。尺素往來「砂糖・饅頭・餠餡・饂飩等」

ばう-たう 眊悼【名】『眊は、老いて目昏き義より、八十歲をいひ、悼は、未だ成人せず、その死亡するは殊に悼むべしとの義にて、七歲をいふ』老人と幼者と。

ばう-だう 茅堂【名】かやぶきの堂。茅屋。草屋。草堂。

ばうたう-ざい 防撓材【名】『英 Stiffener』船舶にて、水壓・氣壓又は石炭その他の荷物の壓力に因る屈撓を豫防するために、その壓力を受くる鐵鋼板の一面又は兩面に固著せしめたる補强の材料。

はうたう-むすこ 放蕩息子【名】放蕩なる息子。だらくむすこ。蕩子。

はうたう-もの 放蕩者【名】放蕩なる人。だらくもの。たはれを。遊冶郞。

はう-たく 芳躅【名】はうせき(芳跡)に同じ。盛衰記「八十日が間、遊士修練したまひし芳躅なり」太平記「早く建保の芳躅を尋ねて、題並に序の事、關白へ獻ぜらるべき由、强ひて勅諚ありしかば」

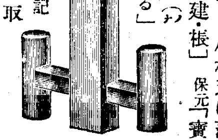
はう-たく 寶鐸【名】はうちやく(寶鐸)に同じ。

はうたく 飽託【名】〔地〕肥後國十二郡の一。郡役所を春日(カスガ)町に置く。

はう-だたり 方祟【名】方位のたたり。或方角に向ひて、行ひては惡しき事を爲したるために、禍を招くこと。はうゐ(方位)㊁參照。織八卦柱曆「ことしは、ここが金神(コンジン)に當った。それで、この方だたり」

ばう-だつ 暴奪【名】暴力を以て奪ひ取ること。力づくにて橫取すること。

はう-だて 方立【名】㊀〔建〕門・出入口などに添へて、內側に立て、戶又は扉の周圍のよく納まるやうにする小柱又は薄き木。ほこだち。「傍立・傍建・桭」保元「寶莊嚴院の門の方立に、箆中(ノナカ)責めてぞ立ったりける」㊁牛車(ギツシヤ)の一部、輜(クルマノハコ)の前後、簾の左右にありて、手形の附きてある木。盛衰記「それに候ふ方立の穴に取附かせたまへ」㊂箙(ヱビラ)の一部。負ふ人の背に當る部分の左右の緣。㊃方法を立つること。しかた。しくみ。


(はうだて㊀)

はうだて-いた 方立板【名】簞笥などの、左右兩側面の板。

ばうたて-ちりめん 紡經縮緬【名】經絲(タテイト)に紡績絹絲、緯絲(ヌキイト)に絹絲又は紡絲(ツムギバウシ)を用ひたる縮緬。

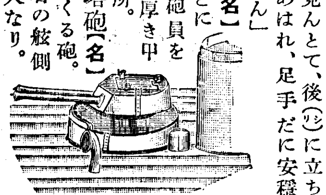
はう-たふ 寶塔【名】ほうたふ(寶塔)を見よ。

はう-たふ 方塔【名】方形なる塔。

はう-たふ 芳答【名】他人の返答の敬稱。

はう-たふ 報答【名】㊀『周書の盧柔傳に「隨ㇾ機報答、皆合二事宜一」とあり』こたふること。返答。返事。㊁『曹唐の詩に「招攜每感雙魚遠、報答空思一劍思」とあり』むくい。しかへし。返報。宇治「踏み返したる女の後(ウシ)に立ちて、ゆらゆらとこの蛇の行けば、……踏み出されたるを惡しと思ひて、それが報答せんと思ふにや、これがせんやうを見んとて、後(ウシ)に立ちて行くに」盛衰記「あはれ、足手だに安穩ならば、報答申してん」

はう-たふ 砲塔【名】軍艦及び要塞などにて、砲・砲架及び砲員を保護するために、厚き甲鐵にて圍みたる所。


(はうたふ)

はうたふ-はう 砲塔砲【名】砲塔內に備へつくる砲。軍艦にては、左右の舷側にあるものより大なり。

はう-たん 放膽【名】大膽に事を爲すこと。豪放。

はう-たん 放誕【名】放言して、著實ならぬこと。おほげさ。おほたば。放埒。

はう-だん 砲彈【名】大砲の彈丸。

はう-だん 飽暖【名】飽食と暖衣と。

はう-だん 放談【名】口に任せて、思ふ所を、忌彈なく述ぶること。放語。放言。

はう-だん 放彈【名】彈丸を放射すること、又その彈丸。

はう-だん 抛彈【名】爆彈を抛擲すること。

ばう-たん 妄誕【名】言ふ所の、みだりにして大袈裟なること。いつはり。そらごと。まうたん。誕妄。虛妄。

ばう-だん 妄談【名】みだりなる話。ねなしごと。

ばう-だん 妄斷【名】みだりに斷定すること。

はうたん-ぶん 放膽文【名】大膽に思ふ所を述べて、字句の洗煉には缺くる所あれども、筆路の窘束せざるを尙(タット)ぶ文。(小心文に對して)

ばうだ-らん 望陀欄【名】ますや(枡屋)を見よ。

は-うち 羽打・羽擊【名】羽打つこと。はたたくこと。はばたき。

はう-ち 報知【名】告げ知らすること。通知。報道。

はう-ち 放置【名】そのままにしておくこと。すておくこと。やりばなし。

はう-ぢ 保持【名】ほぢ(保持)に同じ。

はう-ぢ 抱持【名】いだきもつこと。拱持。

はうぢ 寶治【名】後深草天皇の御代の年號(紀元一九〇七年―一九〇八年)。

はうち-かん 報知艦【名】『英 Despatch vessel』軍令を傳達し、又は敵の動靜を報知するを目的とする軍艦。隨ひて、速力の大なるを貴び、高速力の巡洋艦たるがごとき觀あり。通報艦。

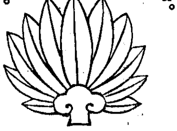
はう-ちく 方竹【名】〔植〕しはうちく(四方竹)に同じ。

はう-ちく 放逐【名】追ひ遣ること。追放。

はうぢく-れっかい 胞軸裂開【名】〔植〕『英 Septifragal dohiscence』果實の成熟後、縱裂するものの一。各室の背部は、中央線に沿ひて縱裂すれども、各室の隔膜は、中央にて合著して、互に離れ去ることなし。朝顏・朝鮮朝顏などの果實に於けるが如きこれなり。(胞間裂開・胞背裂開に對して)

は-うちは 羽團扇【名】㊀鳥の羽にて製したる團扇。羽扇。㊁紋所の一。前項の羽團扇に象りたるもの。鷹羽(タカノハ)團扇・三割(ミツワリ)羽團扇など、種種あり。㊂〔植〕はうちはさう(羽團扇草)の略。

は-うちは 葉團扇【名】紋所の一。木の葉を組合はせて、羽團扇の形に描きたるもの。笹葉(ササノハ)團扇・紅葉(モミヂ)團扇など、種種あり。


(はうちは)

はうちは-かへで 羽團扇槭【名】〔植〕めいげつかへで(明月槭)に同じ。

はうちは-さう 羽團扇草【名】〔植〕やぐるまさう(矢車草)に同じ。

はうちは-まめ 羽團扇豆【名】〔植〕荳(マメ)科に屬する一年生の草。高さ二三尺に達し、葉は約十箇の小葉より成る、掌狀複葉にして、長き葉柄あり、各小葉は線形又は倒披針形をなし、莖にも、葉にも、白毛密生す。花は、夏秋の交、總狀花序をなして開き、淡綠紫色、稀に青白色をなす。原產地は亞米利加。觀賞用に供す。

はうちは-もみぢ 羽團扇楓【名】〔植〕めいげつかへで(明月槭)に同じ。

はうち-ばり 羽打張【名】羽目板を張る

に、その繼手を、斜に張り立つること、又その張り方の板。

はう-ぢん 方陣 【名】 兵士を方形に列ぶる陣形。(圓陣に對して)

はう-ぢん 砲陣 【名】 火砲より成る陣。

ばう-ぢん 望塵 【名】『「塵を望む」を見よ』 ㊀賓客の來るを待つこと。 ㊁貴人にへつらふこと。

はう-ちやう 庖丁 【名】 ㊀はうてい(庖丁)に同じ。 ㊁食物の料理。割烹。 宇治「今日の庖丁は仕らんとて、眞魚箸(マナバシ)削り」 ㊂『はうちやうがたな(庖丁刀)の略』 主に食物の料理に用ふる刃物。菜切(ナキリ)庖丁・刺身(サシミ)庖丁・出刃(デバ)庖丁・肉切(ニクキリ)庖丁など種種あり。又、料理用以外にも、裁物(タチモノ)庖丁・疊(タタミ)庖丁などあり。 今昔「鞘なる庖丁取出して」 [庖刀]

はう-ぢやう 方丈 【名】 ㊀四方一丈づつの面積。一丈四方。 盛衰記「方丈の庵室」 ㊁〔佛〕『狹小なる僧坊の義。天竺の維摩(ユイマ)の石室の廣さ一丈四方なりきをいふより出づとの說あれども、必ずしも、その故事にのみ拘るべきにあらざらん』 禪林にて、住職の室たる處。東方丈・西方丈など分ちたるもあり。丈室。 基佐集「龍泉寺へまかりけるに、歌よむ人人、方丈に集まりて」 奧の細道「この寺の方丈に坐して、簾を捲けば、風景、一眼の中に盡され」 ㊂寺院の住職。住持。方丈和尙。 庭訓往來「方丈・西堂」 ㊃三神山の一。方壺。 太平記「蓬萊・方丈・瀛州の三つの島あり」

ばう-ちやう 坊長 【名】 奈良朝時代の奈良及び平安朝時代の京都の坊の長官。坊令の下にありて、坊令と共に、專ら戶口を檢し、姦非を督し、賦徭を掌りたり。

ばう-ちやう 坊廳 【名】 東宮坊の事務を取扱ひし役所。

ばう-ちやう 防長 【名】 〔地〕周防國と長門國と。

ばう-ちやう 傍聽 【名】 會議又は演說などを、その場に在りて聽聞すること。

ばう-ちやう 膨脹・防脹 【名】 ㊀ふくるること。體積のひろがりふとること。膨大。 ㊁發展し、擴大すること。伸び擴がること。 ㊂〔理〕『英 Expansion』 物體が、質量に變化なくして、體積の增加する現象。

眞(シン)の膨脹 【句】 〔理〕「見掛の膨脹」を見よ。

長さの膨脹 【句】 〔理〕せんばうちやう(線膨脹)に同じ。

見掛(ミカケ)の膨脹 【句】 〔理〕『英 Apparent expansion』 流體(主に液體)を器に容れて熱する時、容器も同時に膨脹することは勿論なれども、これを計算に加へずして、單に流體の外見上の體積の增加のみを計算すること。從ひて、眞の膨脹よりも、容器の膨脹したるだけ小なり。

ばう-ちやう 暴漲 【名】 俄かにみなぎること。

はうぢやう-あんじや 方丈行者 【名】 〔佛〕禪門にて、未だ得度せず、髮を蓄へたるまま、寺院に止宿し、方丈㊂の命によりて、諸事を司るもの。

ばうちやう-いと 膨脹絲 【名】 商人の、外國へ輸出する絹絲を、或方法を用ひて、容積を實質以上に增大せしめて、ごまかして賣るもの。

はうちやう-がたな 庖丁刀 【名】 はうちやう(庖丁)㊂に同じ。 宇治「いと大なるまな板に、長やかなる庖丁刀を具して置きたり」

はうちやう-かぢ 庖丁鍛冶 【名】 庖丁㊂の製造を業とする鍛冶。 今國姓爺「何奴(ドイツ)も、庖丁鍛冶に劣る」

はうぢやう-き 方丈記 【名】 〔書〕鴨長明が、見聞したる事を書き集めて、この世の無常を知らしめ、山城國日野の奧なる外山に方丈の庵を結びて、幽居せし始末を記せるもの。一卷。

はうぢやうき-げんかい 方丈記諺解 【名】 〔書〕方丈記を解釋せるもの。三卷。著者詳かならず。元祿七年刊行。

はうぢやうき-しせつ 方丈記泗說 【名】 〔書〕方丈記に頭註を施し、畫をも插めるもの。二卷。加藤盤齋の著。

はうぢやうき-とうしよ 方丈記頭書 【名】 〔書〕方丈記に頭註を加へ、畫をも插めるもの。一卷。山岡元隣の著。

はうぢやうき-りうすゐせう 方丈記流水抄 【名】 〔書〕方丈記に、明細なる頭註を加へたるもの。二卷。槙島昭武の著。

ばうちやう-けい 膨脹計 【名】『英 Dilatometer』 膨脹係數を測定する裝置。

ばうちやう-けいすう 膨脹係數 【名】 〔理〕『英 Coefficient of expansion』 物體の、溫度の一度昇る每に、長さ又は體積の增加するを、そのもとの長さ又は體積に比べたる割合。膨脹率。

ばうちやう-けん 傍聽劵 【名】 傍聽せんとする人に入場を許すしるしの切符。

はうちやう-ことば 庖丁言葉 【名】 料理法に於ける一種の術語。料理上の用語。

はうぢやう-さう 放杖草 【名】 〔植〕いかりさう(淫羊藿)に同じ。

はうちやう-し 庖丁師 【名】 はうちやう(庖丁)㊀に同じ。 七一職人歌合「はうちやうし。大鯉の頭を三つに切りかねて片われしたる在明の月」

はうちやう-じや 庖丁者 【名】 はうちやう(庖丁)㊀に同じ。 徒然「園(ソノ)の別當入道は、さうなき庖丁者なりけり」

ばうちやう-しや 傍聽者 【名】 ばうちやうにん(傍聽人)に同じ。

はうちやう-じる 庖丁汁 【名】 捏ねたる饂飩粉に時節の食品を加へて煮込みたる味噌汁。

ばうちやう-せき 傍聽席 【名】 傍聽人の坐すべき場席。

はうちやう-にん 庖丁人 【名】 はうちやう(庖丁)㊀に同じ。 狂言(鱸庖丁)「庖丁人は四宮大夫忠政なり」

ばうちやう-にん 傍聽人 【名】 傍聽する人。傍聽者。

はうちやう-ばこ 庖丁箱 【名】 庖丁㊂を入れ置く箱。 五人女「浦島が庖丁箱、辨天の前巾著」

はうちやう-はふ 庖丁法 【名】 料理に於ける切方。食物調理上缺くべからざるものにして、古來それぞれ作法あり、又、酒宴の際、來客に覽しめたるものといふ。

ばうちやう-べん 膨脹瓣 【名】『英 Expansion valve』 蒸氣機關にて、蒸氣の消費量を最小ならしむるための瓣。

ばうちやう-まい 防長米 【名】 周防・長門兩國地方より產する米。

ばうちやう-りつ 膨脹率 【名】 〔理〕ばうちやうけいすう(膨脹係數)に同じ。

はうぢやう-をしやう 方丈和尙 【名】 はうぢやう(方丈)㊂に同じ。

はう-ちやく 寶鐸 【名】 ほうちやく(寶鐸)を見よ。

はうちやく-さう 寶鐸草 【名】 〔植〕ほうちやくさう(寶鐸草)を見よ。

はうちやく-の-はな 寶鐸花 【名】 〔植〕ほうちやくのはな(寶鐸花)を見よ。

はう-ちゆう 庖廚 【名】『庖は料理する所、廚は烹(ニ)る所』 くりや。かって。だいどころ。

庖廚を遠ざく 【句】「君子は庖廚を遠ざく」を見よ。

はう-ちやう 方柱 【名】 四角なる柱。かくばしら。

はう-ぢゆう 抱住 【名】 だきとむること。

ばう-ちゆう 坊中 【名】 坊舍の中。寺の中。寺院の中。坊間。 盛衰記「坊中に經行(キヤウギヤウ)して、曉に臨んで、行方を知らず」 謠曲(忠信)「いかに、この坊中へ案內申し候。……、判官(ハウグワン)殿の御迎に參りたり」

ばう-ちゆう 房中 【名】 ㊀部屋(ヘヤ)のなか。室內。房內。 ㊁閨房のなか。

ばう-ちゆう 旁註・傍註 【名】 本文の傍に、註解を書き添ふること、又その註解。

ばう-ちゆう 忙中 【名】 せはしきなか。いそがしきあひだ。忙裏。

ばうちゆう-らく 房中樂 【名】 雅樂の一。支那より傳はりたるものにて、黃鐘(ワウシキ)調に屬す。

はう-ちよく 芳躅 【名】 はうたく(芳躅)に同じ。

は-うつ 羽打つ・羽擊つ 【動四自】 鳥、兩翼を相打つ。はばたきす。はねうつ。はうち(羽打)參照。

はう-づ 方圖 【名】 きはまり。かぎり。際限。方量。のはうづ(野方圖)參照。「大抵、方圖が有る」「方圖が知れず」

方圖が無い 【句】 はうづなし(方圖無し)に同じ。

はうづ-かは 保津川 【名】 〔地〕ほづかは(保津川)を見よ。

はうづなし 方圖無し【形一】はてしなし。限なし。際限なし。方圖が無い。

はうづゑ 方杖【名】『英 Bracket』橋梁又はこれに類する構造にて、基體より斜に突出して、荷重を支持する材片。桁（ケタ）又は梁（ハリ）の經間を短縮する用をなす。ほほづゑ。

ばうて 場打・塲打【名】『うてる（打てる）を見よ』その場の有樣によりて、氣おくれのすること。

ばうて 奪うて【副】『うばうのうの省けし語』奪ひて。曾我「かの頭またばうて食ふ」

はうてい 庖丁【名】『支那周の名高き料理人の名より轉ず』食膳を調理する人。料理人。庖人。庖丁師（ハウチヤウシ）。庖丁者（ハウチヤウジヤ）。庖丁人（ハウチヤウニン）。

はうてい 寶鼎【名】きはめて貴き鼎。太平記「周の代に、寶鼎を掘り出だし」

はうてい 方底【名】方形なる底。

はうてい 方底・圓蓋（エンガイ）【句】一 四角なる底と、まろき蓋（フタ）と。二 互に合ひがたき事の譬。枘鑿（ゼイサク）。

はうてい 保定【名】ほてい（保定）に同じ。

ばうてい 茅亭【名】かやぶきの亭（チン）。茅舍。

ばうてい 亡弟【名】死にしおとうと。亡（ナ）き弟。

ばうてい 亡帝【名】崩御ありしみかど。

はうていしき 方程式【名】〔數〕『英 Equation』はうしき（方式）・ていしき（程式）參照』未知數を含める假設の等式。既知數はa・b・c・d等にて表はし、未知數はx・y・zを以て表はし、未知數の各を元（ゲン）といひ、未知數の最大指數を次（ジ）といひ、$ax+b=0$のごときは、一元一次方程式、$ax+by=c$のごときは二元一次方程式といふ。又その等號の左右にある式を邊（ヘン）又は節（セツ）といひ、左邊（又は前邊）・右邊（又は後邊）の名あり。未知數の値を根（コン）といふ。**くわがくはうていしき**（化學方程式）參照。

方程式の整頓【句】〔數〕方程式の各項を、その一邊に集めて、未知數の降羃に配列すること。

方程式の判別式【句】〔數〕方程式の根（コン）の性質を判別する式。例へば、方程式 $3x^2+6x-13=0$ に於ける判別式は $3^2-3\times(-13)=0$ なる類。

方程式の理論【句】〔數〕**はうていしきろん**（方程式論）に同じ。

方程式を解く【句】〔數〕その方程式を成立せしむる如き未知數の値を求む。方程式の根（コン）を求む。

方程式を滿足せしむ【句】〔數〕未知數に、適當なる値を與へて、眞の等式たらしむ。

はうていしきかいはふ 方程式解法【名】〔數〕その方程式を成立せしむる如き未知數の値を求むる方法。方程式の根（コン）を求むる方法。

はうていしきろん 方程式論【名】〔數〕數學の一分科。方程式の根（コン）と係數との關係、三次・四次方程式の一般解法又は高次方程式の根の近似値を求むること等の論究。

はうてう 放鳥【名】一 鳥を放ちやること、又その鳥。はなちどり。はなしどり。二 放生會（ハウジヤウヱ）又は葬儀の時などに、功德のために、鳥を放ちやること、又その鳥。はなちどり。はなしどり。

はうてう 烹調【名】食物を烹（ニ）て調理すること。

ばうてう 亡兆【名】滅亡又は衰亡の前兆。

ばうてう 亡朝【名】亡びたる朝廷。太平記「我、何の顏あってか、亡朝の臣として、不義の逆臣に順はんや」

ばうてう 暴潮【名】にはかに滿ちくる潮。つなみ。

ばうてう 賵弔【名】かうでん（香典）に同じ。

ばうてうりん 防潮林【名】海岸地方にて、潮風又は海嘯等の災害を防止するために、これらに對しての抵抗力強き樹種、例へば、黑松・犬槇（イヌマキ）・柏槇（ビヤクシン）・椿（ツバキ）などにて仕立つる森林。

はうてき 邦敵【名】こくてき（國敵）に同じ。

はうてき 拋擲・放擲【名】一 なげうつこと。なげ出すこと。二 打ちすてておくこと。やりばなし。

はうてきせん 拋擲線【名】〔數〕**はうぶつせん**（拋物線）に同じ。

はうてふ 報牒【名】へんてふ（返牒）に同じ。

はうてん 寶典【名】貴重なる典籍。有用なる書册。

はうでん 寶殿【名】しんでん（神殿）に同じ。**ほうでん**（寶殿）參照。増鏡「石清水（イハシミヅ）の社に詣でさせたまひて、……。御歌あまた遊ばして、寶殿に籠めさせたまひ」

はうでん 寶鈿【名】貴きかんざし。

はうでん 報電【名】知らせの電信。

はうでん 放電【名】〔理〕『英 Electric discharge 又 Dischage』電位差を有する陰陽兩電氣の、或距離を隔てて、中和して消失すること。無聲放電・火花放電等の種類あり。

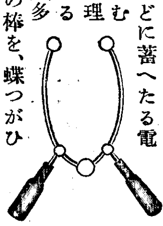
ばうてん 茅店【名】かやぶきやねの家。茅屋。

ばうてん 旁點・傍點【名】漢字の傍に記する訓點。

ばうてん 暴殄【名】『殄は絕つ義』亂暴に取扱ひて絕すこと。そこなひ亡すこと。

はうてんぎ 方天儀【名】**せんきぎよくかう**（璿璣玉衡）に同じ。

はうでんさ 放電叉【名】『英 Discharger』ライデン瓶などに蓄へたる電氣を放電せしむるに用ふる物理器械。彎曲せる二本の金屬（多くは眞鍮）製の棒を、蝶つがひにて連續し、玻璃の柄を附し、棒の連續せざる方の端に、各金屬の球を附けしもの。



（さんでうは）

はうど 匏土【名】樂器の笙と壎（ケン）と。**はちいん**（八音）參照。

はうど 邦土【名】こくど（國土）に同じ。

邦土の僭竊（センセツ）【句】〔法〕**はうどせんせつ**（邦土僭竊）に同じ。

はうど 邦帑【名】こくど（國帑）に同じ。

はうど 邦度【名】國家の法度。

はうど 方土【名】くに。一地方。

はうど 方度【名】おきて。のり。法度。

ばうと 暴徒【名】暴擧をなすともがら。暴民の一揆。兇徒。

ばうと 房杜【名】〔人〕支那唐の房玄齡と杜如晦と。共に當時の宰相として、賢名ありし人。

ばうど 茅土【名】『天子の、諸侯を建つる時、その方角の色（中央は黃、東は靑、南は赤、西は白、北は黑）の土を割き、白茅に包みて與ふるが、支那古代の方式なりしよりいふ。**ごしき**（五色）一參照』古、支那にて、諸侯の領地の異稱。

ばうど 暴怒【名】あらあらしく怒ること。激怒。

ばうど 冒度【名】『度はわたる義』他人の名を冒し、通（トホリ）手形を請ひて、關所を通行すること。

はうとう 方冬【名】陰曆十月の異稱。

はうとう 方頭【名】方形なる頭部。

方頭の太刀【句】柄頭（ツカガシラ）の端、平面をなし、側面圖に於て方形を呈せる太刀。

はうとう 疱瘡【名】**はうさう**（疱瘡）に同じ。

はうどう 砲銅【名】〔化〕『英 Gunmetal』砲身の材料とする、堅剛・優秀なる靑銅。銅百、錫二十の割合より成り、その配合率を嚴密にし、鉛・砒素・アンチモン・蒼鉛等の他金屬の混合を避くるを要す。砲金。

はうどう 方等【名】〔佛〕『梵 Vaipulya（釋佛略）の譯語』一『方は、方廣にして、横に十方を兼ぬる義、等は、平等にして、竪に凡聖（ボンシヤウ）に通ずる義』眞如・實相の妙理。方廣。二 大乘の經典の形容。方廣。三『方は廣の義、等は均の義』佛の、廣く藏・通・別・圓の四敎を說きて、機根の優劣にかかはらず、均しく利益（リヤク）あらしめしこと。**はうどうじ**（方等時）參照。〔天台宗の語〕

はうどう 寶幢【名】**ほうどう**（寶幢）を見よ。

ばうとう 冒頭【名】言句・文章の發端。まへおき。

ばうとう 暴騰【名】物價のにはかに騰貴すること。（暴落に對して）

ばうどう 暴動【名】黨を組み、暴行をふるまひて、安寧を害すること。多數の集合

力に因る違法の暴行・強迫。騷亂。騷擾。一揆。

ばう-どう 妄動【名】思慮なく、みだりなるおこなひを爲すこと。まうどう。

ばう-どう-ざい 暴動罪【名】〔法〕**きようさしゆうざい**(兇徒聚衆罪)に同じ。

ばう-どう-さつじん-ざい 暴動殺人罪【名】〔法〕暴動をなしたる上に、殺人をなせる罪。騷擾殺人罪。

はう-どう-じ 方等時【名】〔佛〕五時教の內の第三、卽ち成道(ジヤウダウ)後、十二時より八年の間、維摩經・勝鬘經・金光明經等の諸大乘經を說きし時期。

ばう-どう-に 望東尼【名】〔人〕**のむらばうとうに**(野村望東尼)を見よ。

はう-どう-の-たき 方等瀧【名】〔地〕下野國日光山中にある瀧。男體(ナンタイ)山の東南麓なる絕壁に懸り、高さ約十丈、幅一丈七尺。右方に並びて、般若(ハンニヤ)瀧あり。

ばう-どう-はうくわ-ざい 暴動放火罪【名】〔法〕暴動をなしたる上に放火せる罪。騷擾放火罪。

はう-とく 寶德【名】後花園天皇の御代の年號(紀元二〇〇九年—二一一一年)。

はう-とく 報德【名】恩德にむくゆること。報恩。

はう-どく 芳牘【名】**はうかん**(芳翰)に同じ。

ばう-とく 亡匿【名】逃亡して匿(カク)るること。にげかくるること。

ばう-とく 冒瀆【名】あなどりけがすこと。をかしはづかしむること。

はう-とく-き 報德記【名】〔書〕二宮尊德の言行・事業を、六十餘項に分ちて詳記せるもの。八卷。富田高慶の著。明治十六年、宮內省にて開版す。

はう-とく-くん 報德君【名】〔人〕**にのみやそんとく**(二宮尊德)を、當時の人の尊びていへる稱。

はう-とく-けう 報德教【名】二宮尊德の說きひろめたる敎。荒蕪を開拓し、殖產の道を講ずるは、人たるものの天地の恩德に報ゆる所以なりとて、道德と經濟とを倂せ說きたるもの。

はう-とく-こう 報德講【名】**はうとくしや**(報德社)に同じ。

はう-とく-じんじや 報德神社【名】**はうとくにのみやじんじや**(報德二宮神社)の略。

はう-とく-しや 報德社【名】二宮尊德の敎を遵奉して組織したる、一種の信用組合。駿河・遠江・參河等の地方に行はる。報德講。

はう-とく-せんせい 報德先生【名】〔人〕**にのみやそんとく**(二宮尊德)の敬稱。

はう-とく-にのみや-じんじや 報德二宮神社【名】㊀相模國足柄下郡小田原町小田原城址に鎭座せる縣社。祭神は二宮尊德。明治二十五年の創建。㊁下野國上都賀(カミツガ)郡今市町に鎭座せる縣社。祭神は二宮尊德。なほ二宮尊行・富田高慶を配祀す。明治二十五年の創建。

はう-ど-せんせつ 邦土僭竊【名】〔法〕領土の上に行はるる國家の統治權を無視して、その一部に、他の權力を行ふこと、卽ち領土の橫領。朝憲紊亂の一種にして、內亂罪に屬す。

はう-とね 保刀禰【名】古、保(ホ)の區域內の事務を掌りし職。

はう-とん 砲墩【名】大砲をすゑおく丘。

はう-ない 砲內【名】砲の內部。

はう-ない 邦內【名】**こくない**(國內)に同じ。

はう-ない 方內【名】㊀『**はうぐわい**(方外)を見よ』人の人たるおきての範圍內。(方外に對して) ㊁『史記の封禪書に「方內艾安、民人罷レ疾」、漢書の嚴助傳に「方內無二狗吠之警一」とあり』中國四方の內。はうだい。國內。(方外に對して)

ばう-ない 房內【名】㊀**ばうちゆう**(房中)⊟に同じ。㊁**ばうじ**(房事)に同じ。庭訓往來「房內過度」

はう-なう 胞囊【名】〔動〕『英 Cyst』胞子の內に發生する、膜狀の囊。

はう-にん 庖人【名】**はうじん**(庖人)に同じ。太平記「庖人の肉味を調ずるに異ならず」

はう-にん 放任【名】干涉せずして、その成行に任すること。

はう-にん 保認【名】**ほにん**(保認)に同じ。

ばう-にん 冒認【名】〔法〕他人の財產を、自己の所有なりと僞りて、人に誤認せしむること。

ばう-にん-ざい 冒認罪【名】〔法〕舊刑法にて、他人の所有物を冒認して、これを抵當・典物となし、又は販賣・交換したるによりて成立する罪。新刑法にては、一種の詐欺罪として處分す。

はう-にん-しゆぎ 放任主義【名】放任して干涉せぬ主義。

ばうにやく-むじん 旁若無人・傍若無人【句】**ばうじやくぶじん**(旁若無人)に同じ。

はう-ねう 放尿【名】小便を排泄すること。

はう-ねつ 放熱【名】熱氣を放散すること。

はう-ねつ-き 放熱器【名】『英 Radiator』暖房裝置にて、熱の媒介物たる熱湯・蒸氣などを、內部に通過せしめて、各室に傳送し、放熱せしむるための裝置。中空の鐵管より成る。

はう-ねん 芳年【名】㊀よき年。めでたき年。㊁人の若き時の歲月。青春。

はう-ねん 芳念【名】他人の念慮の敬稱。

はう-ねん 放念【名】氣に掛けぬこと。構はずに置くこと。安心。放慮。放神。

ばう-ねん 忘年【名】㊀『莊子に「忘レ年忘レ義、振二於無竟一」とあり』面白さに、年の老いたるをも忘るること。としわすれ。㊁一年中の苦を忘るること。

忘年の友【句】忘年の交をなす友人。

忘年の交(マジハリ)【句】年齡に多くの差あるにもかかはらず、意氣相投じて交際すること。

ばう-ねん-くわい 忘年會【名】㊀忘年の友の集會。㊁年末に、その年の生活の苦を忘るるとて催す宴會。年忘(トシワスレ)のための宴會。

ばう-ねん-ぷ 防燃布【名】**ばうくわふ**(防火布)に同じ。

ばう-の-つ 坊津【名】〔地〕薩摩國川邊(カハナベ)郡西南方(ニシミナミカタ)村大字坊にある港。古は博多(ハカタ)津・安濃津(アノツ)と共に、三津に數へられたり。口狹くして、奥遠く、水深くして、安全なる港なれども、水面狹くして、大船多き現代には、不適當なるを免れず、且つ陸上交通の不便なる缺點あり。近傍の海岸は、風景絕佳なり。

はう-の-もの 箔物【名】下土器(シタガハラケ)の一種。貞丈雜記「箔の物といふは、したがはらけの事なり。金箔などにて、だみゑを書き、いろどりたるものなり」

はう-は 芳葩【名】美しき花びら。

はう-ば 寶馬【名】うるはしき馬。

はう-はい 胞胚【名】〔動〕『英 Blastula』單に一箇の細胞より成る卵子の、漸次分割して、倍數づつの增加をなし、相合して中空なるゴム毬狀の細胞塊を形成せるもの。

はう-はい 彭湃・澎湃【貌】水の漲り逆卷くさま。波の相觸れて戻るさま。

はう-ばい 傍輩【名】㊀やくなかま。同役。同僚。㊁同じ師に就きて學び、又は、同じ家に奉公して、同じ職業をなせる人。同士。朋輩(ハウバイ)。

はう-はい-れつ-かい 胞背裂開【名】〔植〕『英 Loculicidal dehiscence』果實の、成熟後、縱列するものの一。各室が、その中央線の背部にて縱裂し、各隔膜も、これと共に離れ去ること。鬼百合(オニユリ)・溪蓀(アヤメ)・燕子花(カキツバタ)などの果實に於けるもの、これなり。(胞間裂開・胞膜裂開に對して)

はう-はう 方袍【名】『方形なるによりていふ』**けさ**(袈裟)の異稱。太平記「方袍・圓頂の出塵の徒と成らせたまふ」

はう-ばう 方方【名】㊀あちこち。かたがた。諸方。諸處。諸方面。㊁あちこちに奉公すること。方方にうろつくこと。碁盤太平記「已が年まで方方して、一文字引く事ならぬとは」

はう-ばう 包茅【名】㊀束ねたる茅(チガヤ)。㊁古、支那にて、神前に酒を供ふるに用ひしもの。束ねたる茅に、酒をそそぐなりとぞ。

はう-ばう 寶坊【名】**ほうばう**(寶坊)を見よ。

ばう-ばう 茫茫【貌】㊀廣くして見盡さ

れぬさま。茫然。盛衰記「亘海茫茫としては、眺望、烟波に眼遮れり」 ㊁とりとめのなきさま。漠然。茫然。茫漠。 ㊂草又は毛髪などの生ひ亂れてあるさま。莽莽。蓬蓬。謡曲(井筒)「草茫茫として、露深深」 ㊃うみ疲れたるさま。つかれ困しむさま。

ばう-ばう 芒芒【貌】ばうばう(茫茫)㊃に同じ。

ばうばう-まゆ ばうばう眉【名】眉毛の中に、黛にて、心(シン)を入れたるもの。井筒業平河内通「ばうばう眉とやら、額に引き」

はう-はく 方伯【名】支那周の代に、一方面の諸侯の上に立ちし者。

はう-はく 放泊【名】船が、ただ一箇の錨を投ずるのみにて碇泊すること。

はう-はく 旁礴・磅礴・旁魄【名】『莊子の逍遙遊篇に「之人也、之德也、將下旁二礴萬物一以爲上レ一」とあり』混同して、一つにすること。

はう-はく 旁礴・磅礴・旁魄【貌】氣のひろがり滿つるさま。

ばう-はく 旁博【名】弘く、あまねきこと。

ばう-はく 傍白【名】『英 Aside』俳優の白(セリフ)の、相手に話しかくるに非ず、側面を向きて言ふもの。

ばう-ばく 茫漠【貌】とりとめなきさま。漠然。茫然。

ばう-ばく 茫邈【貌】廣くはるかなるさま。

ばうは-ぐひ 防波杭・防波杙【名】なみよけぐひ(波除杙)に同じ。

ばう-はち 亡八・忘八【名】『幼學須知に「人入二于花柳之中一、其心已忘二孝弟忠信禮義廉恥八字一、故名二忘八一」とあり。仁・義・禮・智・孝・悌・忠・信の八つを失へる義といふ』 ㊀遊里に遊ぶこと。ぢよらうかひ。 ㊁遊女屋の主人。くつわ。

はう-はつ 砲發【名】はっぱう(發砲)に同じ。

はう-はつ 萌發【名】草木の芽の萌え出づること。萌芽。

はう-はつ 迸發【名】ほとばしり出づること。

はう-ばつ 放伐【名】㊀おひはらふことと、うちほろぼすことと。放逐と討伐と。 ㊁支那殷の湯王が、夏(カ)の桀王の暴政を見て、諸侯より起りて、民心を收め、遂に、桀を南巣に放ちて、帝位に即きし事蹟と、周の武王の、殷の紂王の暴虐なるを見、兵を率ゐて討伐し、遂に自ら代りて帝位に即きし事蹟との、二つの革命。

ばう-はつ 暴發【名】にはかにおこること。

はうはつ-がん 迸發岩【名】〔地〕『英 Effusive rock』くわざんがん(火山岩)に同じ。

ばうは-てい 防波堤【名】『英 Break water』波浪の進路を遮り、又はその方向を轉じて、波動を緩和し、港内の靜穩を保持するために、港灣に築造する堤。

はう-はふ 方法【名】しかた。てだて。手段。

はうはふ-がく 方法學【名】〔哲〕次條に同じ。

はうはふ-ろん 方法論【名】〔哲〕『英 Methodology』一の科學を研究するに、一定の方法の下に原理を發見し、又、一定の體系の下に、その原理を敍述する道を講ずるもの。論理學の一部を成し、原理の發見には、事實の集得(觀察・實驗・傳說)・分類・假定・證明の手續を要し、原理の敍述には、定義・分釋・說明の順序を經るを要す。

はう-はん 芳飯・苞飯【名】飯の上に、煮又は炙りし種種の蔬菜・乾肴などを、細かに裂きて載せ、汁をかけたる食品。甲陽軍鑑「芳飯の事、常より珍しき仕立(シタテ)なり」

はう-はん 放飯【名】大食すること。おほぐらひ。暴食。

ばう-はん 亡叛【名】逃亡して叛くこと。

はうはん-じる 芳飯汁【名】蒲鉾・栗・生姜(シヤウガ)・玉子・茗荷(ミヤウガ)など、何にても細かく刻みあはせたる汁。

はう-ひ 包皮【名】外面を包む皮。

はう-ひ 包被【名】〔植〕『英 Indusism』大部分の羊歯植物の葉の裏面に生ずる、一種の被膜。形は線形・腎臟形・楯形など、種種あり。附著點も、葉脈の中途・先端・葉緣など、種種あり。普通、子囊群を保護して、これを被ふ。永く殘留することも、子囊の成熟に伴ひて脫落することもあり。包蓋。子蓋。

はう-ひ 放屁【名】へをひること。おなら。てっぱう。

はう-ひ 芳菲【名】花又は草の繁くかうばしきこと。春の草。

はう-び 芳眉【名】美人の眉。

はう-び 砲尾【名】砲身の後端、即ち砲口と反對なる一端。

はう-び 褒美【名】㊀褒むること。褒賞。賞美。新可笑記「家中、子細なく治まる事、御子息御自分にまさりて掟正しきと、褒美仕うまつるに」 ㊁褒めて與ふる物。賞與。褒賞。

ばう-ひ 妄批【名】ばうひやう(妄評)に同じ。

ばう-び 防備【名】敵を防禦するそなへ。

はう-びき 寶引【名】德川時代に、正月に行ひし、一種の福引。綱を幾筋も集めて一つに括り、その内の一筋の一端に橙を貫きおき、一筋幾文と價を定めて、これを引かせ、橙を貫ける綱を引き當てたる者に、賭錢を得させしこと。すほひき。**あめはうびき**(飴寶引)・**どうふぐり**(胴ふぐり)・**さござい**・**つじはうびき**(辻寶引)參照。織留「さる大名がたに、御吉例とて、正月三日の夜、大書院にて家久しき者ばかり召し寄せられ、寶引を仰せ付けられける。襖障子の内より、五色の長緒を、數百筋投げ出して、手ごとに一筋づつ引き取り、この緒の末に附けおかれし物を下されける」

はうびき-ぜに 寶引錢【名】寶引の賭錢。胸算用「掛(カケ)どもを集めて來たらば、まづそなたの寶引錢一貫除(ノ)けておいて、有り次第に拂うて」

はうびき-し 寶引師【名】寶引をなすことを職業とする人。

はうびき-なは 寶引繩【名】寶引の繩。五人女「戀は引く手の寶引繩、女子の春なぐさみ」

ばうび-たい 防備隊【名】佐世保鎭守府の管下に屬して、朝鮮の鎭海灣及び永興灣に置かれ、司令官・參謀・副官・分隊長・機關長・軍醫長・主計長等の職員ありて、所在の港灣及び附近の海岸・海面の防備・警衞を掌り、軍需品の配給をなす軍隊。

はう-ひん 白濱【名】雅樂のうち、高麗樂の一。雙調に屬す。

はう-びん 芳鬢【名】美人の鬢。

ばう-ひやう 妄評【名】㊀みだりに批評すること、又その批評。まうひやう。妄批。 ㊁自己の批評の謙稱。まうひやう。

ばう-ひやう 暴評【名】亂暴に評すること、又その評。

はう-ふ 報符【名】太政官より報じ來れる符。

はう-ふ 砲夫【名】舊海軍卒の一。海軍砲の運用に從事せしもの。明治五年に設置し、同九年廢止す。初は一等より四等までに分ち、同六年、五等までに改めたり。

はう-ふ 抱負【名】㊀抱くことと、背負ふことと。或は抱へ、或は負ふこと。携帶。 ㊁心に抱きてある志望。將來に實行せんとする自信。かんがへ。計畫。

ばう-ふ 亡父【名】死にし父。亡(ナ)き父。先考。先人。

ばう-ふ 亡夫【名】死にし夫。亡(ナ)き夫。

ばう-ふ 亡婦【名】㊀死にし婦人。死にし女。 ㊁死にし妻。亡妻。 ㊂死にしよめ。

ばう-ふ 旁婦・傍婦【名】めかけ。妾。傍妻。

ばう-ふ 傍附【名】傍に附屬すること。

ばう-ふ 暴富【名】俄かに富貴になること。にはかぶげん。なりきん。

ばう-ふ 防腐【名】物の腐るを防ぎとどむること。くさりどめ。

ばう-ふ 防風【名】〔植〕**ばうふう**(防風)㊁の略。

ばうふ 防府【名】〔地〕『佐波村は、古、國府(コフ)所在の地なりしより、周防國の府の義にて名づく』周防國佐波(サバ)郡の町。明治三十五年、三田尻(ミタジリ)村と佐波村とを合併して立てたるもの。

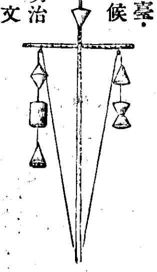
ばう-ふう 暴風【名】㊀吹き荒るる風。はげしき風。强風。烈風。 ㊁〔地〕速力一秒間に十メエトル若しくは、それ以上なる風。强風。

ばう-ふう 防風【名】㊀風をふせぐこと。 ㊁〔植〕『中風(チウブウ)を防ぐ効ありといふ義』繖形科に屬する多年生の草。根は長くして、三四尺に達し、莖は直立して、三尺ばかりに至り、分枝す。葉は羽狀複葉を

なし、各小葉は二深裂及び數淺裂をなし、各裂片は狹長・鋭尖。夏秋の候、白色・五瓣の小花、複繖形花序をなして開く。原産地は支那。享保年間、渡來して、大和國の宇陀と山城國の八幡（ヤハタ）とに栽ゑ、爾來、各地に栽培す。莖と葉とは、生のまま又は煮又は漬けて食ふべく、根は煎じて驅風劑に供す。うだばうふう。はまおほね。はますかな。はまばうふう。ふでばうふう。やほやばうふう。やまぜり。やまばうふう。

ばうふう-う 暴風雨 **【名】** 雨を伴ふ暴風。はげしき風雨。あらし。

ばうふうう-へう 暴風雨標 **【名】**『英 Non-local storm signal』暴風雨の位置及び進行の方向等を周知せしめて、航路を安全ならしむるために、中央氣象臺よりの豫報により、港務部・海軍望樓・海軍測器庫・要港部・燈臺・築港局・測候所などに設置する標。明治四十一年、文部省告示によりて定められ、大正三年の改正を經たり。插畫の柱頭の一標は時刻を、横架の一端なる標は中心の三位置を、他端なる二標は進行の方向を示す。又、夜間は、紅燈と綠燈とを揭げて、中心の位置のみを示す。



（ばうふううへう）

ばうふう-けいはう 暴風警報 **【名】** 暴風又は暴風雨の襲來する虞ある旨の報告。中央氣象臺より、全國に亙りて發するものと、地方測候所より、その所屬地方廳管内に發するものとありて、前者を全國暴風警報、後者を地方暴風警報といふ。

ばうふうけいはう-しんがうへう 暴風警報信號標 **【名】** 地方暴風警報を表示する信號。港灣・漁村等に設く。公設と私設とあり。信號に赤球・赤圓筒・赤圓錐の三種あり。球は「風强かるべし」の意、圓筒は「風雨强かるべし」の意、圓錐は「暴風雨の虞あり」の意を示し、夜間は、紅燈一箇を球に、二箇を圓筒に、三箇を圓錐に代用す。

ばうふう-りん 防風林 **【名】** 風害を防止するために、冬季の乾風・寒風等に對しては、樟（クス）・樫（カシ）・椎（シヒ）・杉・檜（ヒノキ）等の常綠樹、暴風に對しては、以上の外、欅（ケヤキ）・椋（ムク）・しほぢ・楡（ニレ）・櫟（クヌギ）・小楢（コナラ）などにて仕立てたる林。

はう-ふく 袍服 **【名】** はうも（袍裳）に同じ。

はう-ふく 飽腹 **【名】** はうしよく（飽食）に同じ。

はう-ふく 抱腹 **【名】**『「腹を抱（カカ）ふ」といふ語あるによりて混同せるなり』ほうふく（捧腹）の誤。

はう-ふく 報復 **【名】** **一** むくゆること。報償又は報仇。返報。 **二**〔法〕ふくきう（復仇）に同じ。 **三** 返事。返答。返書。

はう-ふく 芳馥 **【名】** かうばしきこと。

ばうふ-ざい 防腐劑 **【名】**『英 Antiseptics』防腐の目的にて用ふる物質。食品貯藏の際に用ふるもの、外科手術・瘡傷等の局所に用ふるもの、傳染病菌消滅のためなる、所謂、消毒劑などを含み、隨って、その種類も多し。普通のは、サルチル酸・硼酸・テレビン油・昇汞・亞硫酸・ナフタリン・アルコオル・石炭酸・石灰・ホルマリン・沃土ホルム等なり。防腐藥。制腐劑。

はうふ-しやう 褓負商 **【名】** 褓商と負商と。共に、朝鮮にて、雜貨類を負ひ、隊を成して、各地に小賣を營む行商。前者は、褓商ともいひ、吳服・小間物などを賣り、後者は、陶器・漆器・草鞋・乾魚等を賣る。李朝の仁宗、淸の太宗に襲はれし時、同志を糾合して、軍資・糧食を獻じ、輜重の役にも從ひてより、半官的の團體となり、一時、不振なりしが、太院君の時に至りて、また重用せられ、市場征税の特權を付與せらるるに至れり。

ばうふ-せき 望夫石 **【名】**『神異經に「武昌貞婦望レ夫、化而爲レ石」とあり』古、貞婦が、夫の遠國に行くを見送りて、悲歎の餘、死して化したりといふ石。支那の武昌の北山にも、我國肥前の松浦潟（マツラガタ）にもあり。**まつらさよひめ**（松浦佐用姬）參照。

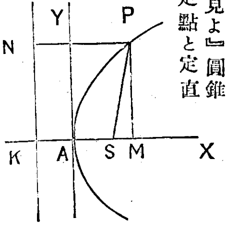
はう-ふつ 髣髴・彷彿・仿佛 **【名】** まことの事物と殆ど異ならぬこと、又その狀態にすること。「ほぼ、その髣髴を寫し得たり」「その一生の事跡を髣髴し得たるに近し」

はう-ふつ 髣髴・彷彿・仿佛 **【貌】** 遠方に在りなどして、明かに見分くることの難きさま。ほのか。かすか。ぼんやり。はうほつ。盛衰記「髣髴たる事、明月の薄雲を隔てたるが如く」

はう-ぶつ 方物 **【名】** **一**『書經の旅獒篇に「無レ有二遠邇一、畢獻二方物一」とあり』その地方に產する物。土產。 **二**『史記の五帝紀に「民神雜糅、不レ可二方物一也」とあり。方は別の意』多くの物事を、一つごとに名づけ別つこと。

はうふつ-せき 方沸石 **【名】**〔鑛〕『英 Analcite』等軸晶系に屬し、結晶は通常小にして偏體をなすもの多く、又、塊狀・粒狀を爲して現はる。玻璃光澤あり、透明或は半透明にして、白色・黃色なるもの多し。硬度・比重は稍大なり。我國にては越後國間瀨に產す。

はうぶつ-せん 抛物線 **【名】**〔數〕『英 Parabola. 次條を見よ』圓錐曲線の一。定點と定直線とよりの距離が相等しき點の軌跡。その定點を抛物線の焦點、定直線を抛物線の準線といふ。圖に於て、PAは抛物線、Sは焦點、NKは準線にして、PN・PSを抛物線の任意の點とする時は、PよりSまでの距離とNKまでの距離とは、常に相等し。抛射線。抛擲線。



（はうふつせん）

はうぶつせん-うんどう 抛物線運動 **【名】**〔理〕『英 Parabolic motion』その行路の、抛物線狀をなす運動。等速運動と加速運動との混合によりて生ず。發射したる砲丸の如き、すべて直上以外の或方向に抛ちたる物體（抛射體又は抛射物といふ）は、もし空氣の抵抗なしとせば、この運動をなすべきなり。

はうぶつせん-きやう 抛物線鏡 **【名】**〔理〕『英 Parabolic mirror』内面の切口が抛物線をなす鏡。その焦點に光點ある時は、鏡面より反射の後、光線は、すべて軸に平行して出で、球面鏡に於けるがごとき球面收差を起すことなく、光線を遠方に送る効大なるより、燈臺もしくは探照燈などに應用す。抛物面鏡。

はうぶつせん-たい 抛物線體 **【名】**〔數〕『英 Paraboloid』互に直角をなす二つの平面上に、一つづつ抛物線ある時、その一つの抛物線の頂點が、常に他の抛物線の上に在るやうに、且つ二つの平面が、常に直角をなしつつ動きて生ずる體形。二つの抛物線の凹側が同一方向に在る時と、反對の方向に在る時とありて、前者を楕圓抛物線體といひ、後者を雙曲抛物線體といふ。

はうぶつ-めん 抛物面 **【名】**〔數〕『英 Parabolic surface』抛物線體の表面、即ち抛物線を、その軸の周圍に廻轉せしむる時、得る曲面。軸を含む平面にての切口は、常に抛物線をなす。

はうぶつめん-きやう 抛物面鏡 **【名】**〔理〕 はうぶつせんきやう（抛物線鏡）に同じ。

ばうふ-のり 防腐糊 **【名】** 防腐劑を加へ、永く使用し得るやうに製した糊。

ばうふ-はうたい 防腐繃帶 **【名】** 防腐劑を浸み込ませたる繃帶。

はう-ふん 方墳 **【名】**〔佛〕 そとば（卒都婆）に同じ。

はう-ぶん 邦文 **【名】** こくぶん（國文）に同じ。

はうぶん-たいぷらいたあ 邦文タイプライタア **【名】** 我國の假名・數字及び實用上の漢字を、歐文タイプライタアの如く印字し得るやうに組み立てたる器械。杉本京太の考案に係り、大正三年完成す。

ばうふ-やく 防腐藥 **【名】** ばうふざい（防腐劑）に同じ。

はうぶり 葬 **【名】** はうぶること。はふり。はうむり。

はうぶる 葬る **【動四他】**『はふる（葬る）の

延』はうむる(葬る)に同じ。名義抄「葬、ハウブル・ツカ・カクス・ハカ」

はう‐へい 寶瓶【名】たふとき瓶(メカ)。ほうびやう(寶瓶)參照。

はう‐へい 砲兵【名】陸軍兵種の一。火砲を用ひて、戰鬪をなすもの。野戰砲兵と重砲兵とに分つ。

はう‐へい 包蔽【名】つつみおほふこと。

はう‐へい 保平【名】年號の保元と平治と。

保平の亂【句】保元の亂と、平治の亂と。

ばう‐へい 暴兵【名】亂暴なる兵卒。

はうへい‐がしら 砲兵頭【名】德川幕府職制の一。砲兵組の長。

はうへい‐きゆう 寶瓶宮【名】〔天〕十二宮の一。

はうへい‐ぐみ 砲兵組【名】德川幕府職制の一。慶應二年に、編成したる砲兵隊。

はうへい‐くみがしら 砲兵組頭【名】砲兵組の指揮を掌りし長。

はうへい‐くわいぎ 砲兵會議【名】りくぐんはうへいくわいぎ(陸軍砲兵會議)の略。

はうへい‐けんえつし 砲兵檢閲使【名】兵部省三兵本部の職員の一。砲兵の監視・檢閲を掌りしもの。正(勅任)・權(奏任)の別ありて、後者は砲兵權檢閲使といへり。明治四年設け、同五年兵部省を廢し、陸軍・海軍の二省これに代り、三兵本部の、陸軍省内の一部たるに及びて、その職員となり、翌年、三兵本部と共に廢したり。

はうへい‐こうくわ‐がくかう 砲兵工科學校【名】りくぐんはうへいこうくわがくかう(陸軍砲兵工科學校)の略。

はうへい‐こうしやう 砲兵工廠【名】陸軍大臣の管理の下に、提理・課長・製造所長・主計官・軍醫正・軍醫・技師・准士官・下士及び判任文官等の職員ありて、陸軍用の兵器・彈藥・器具・材料を製造又は修理し、及び海軍用の彈藥並びに一般の火藥類をも製造する官署。人民より銃砲等製造の依賴ある場合にも、陸海軍用品の製造に差支なき限に於て、これに應ずるを得。軍用兵器製造の需に對しては、陸軍大臣の許可を受くるを要す。舊砲兵本廠と砲兵支廠とに代れるものにて、現今、東京及び大阪に置く。

はうへい‐ごんけんえつし 砲兵權檢閲使【名】はうへいけんえつし(砲兵檢閲使)を見よ。

はうへい‐ししやう 砲兵支廠【名】明治八年大阪に置かれ、專ら銃砲・彈藥その他兵器・武器の分配・支給を主司せしめ、兼ねて、兵器・武具の製造・修理の事を管理せし官廳。同十二年に廢止す。はうへいこうしやう(砲兵工廠)參照。

はうへい‐しやてき‐がくかう 砲兵射的學校【名】りくぐんはうへいしやてきがくかう(陸軍砲兵射的學校)の略。

はうへい‐じよそつ 砲兵助卒【名】砲兵の助卒。

はうへい‐たい 砲兵隊【名】砲兵を以て編成をせる一隊。

はうへい‐はうめん 砲兵方面【名】銃砲・彈藥その他、諸種の兵器・武具の分配・支給のために分ちたる方面。砲兵本廠と砲兵支廠とを、各その中心とする二方面に分つ。

はうへい‐ほんしやう 砲兵本廠【名】明治八年東京に置き、專ら銃砲・彈藥その他兵器・武具の製造・修理の事を主司し、兼ねて、その分配・支給を管理せし官廳。同十二年に廢止す。

はうへい‐ゆそつ 砲兵輸卒【名】『輸の字の音、正しくはシュ』砲兵隊に屬し、砲及び砲丸運搬等に從事する兵卒。

ばう‐へう 望標【名】さんかくてん(三角點)に同じ。

はう‐へき 胞壁【名】〔生〕細胞の側壁。

はう‐へん 褒貶【名】㊀ほむることと、貶(オト)すことと。褒め或はけなすこと。太平記「褒貶の短册取出だし、心しづかに詠吟し」㊁次條の略。

褒貶の歌合(ウタアハセ)【句】衆人の、各、當座にて作りたる歌を批評すること。衆議判(シユウギハン)。太平記「軍勢、皆、軍を止めければ、慰む方や無かりけん、或は碁・雙六を打って日を過し、或は百服茶、褒貶の歌合なんどを翫んで、夜を明す」

はう‐べん 方便【名】㊀〔佛〕『梵 Upāya(偃和)の譯語』その道に導くための便宜の手段。一切衆生の機に契(カナ)ふ方法を使用すること。ぜんげうはうべん(善巧方便)參照。源氏「佛の、いと美しき心にて說きおきたまへる御法(ミノリ)も、方便といふ事ありて、悟なき者は、ここかしこたがふ疑をおきつべくなん」曾我「彌陀如來こそ極重惡人、無他方便と誓ひ」㊁目的のために一時利用する手段。てだて。たばかり。義經記「京都に候ひしが、内内、平家、方便をつくる由承り候ふ間、奧州に下向仕りて」

方便の殺生(セッシヤウ)【句】〔佛〕『探玄記の卷十九に見ゆ』方便のために、殺生を爲すこと。謠曲(熊坂)「似合はぬ僧の腕だて、さこそをかしと思すらめ。さりながら、……方便の殺生は、菩薩の六度に勝れりとか」

方便の矢【句】〔佛〕佛が衆生(シユジヤウ)を救ふ手段を、武器に譬へていふ語。謠曲(放下僧)「愛染明王も、神通(ジンヅウ)の弓を張り、方便の矢を爪搓(ツマヨ)って、」

方便の弓【句】〔佛〕佛が衆生(シユジヤウ)に結緣せんがために用ふる手段を、弓に譬へていふ語。謠曲(熊坂)「愛染は、方便の弓に、矢をはげ」

方便を作る【句】手段を考へ出す方法をたくらむ。義經記「義經も、……七歳の時、鞍馬に參りて、十六まで、かたの如く學問を仕り、さては京都に候ひしが、内内、平家、方便を作る由承り候ふ間、奧州に下向仕りて」

はう‐べん 放免【名】檢非違使廳(ケビヰシノチヤウ)の下部。もと犯人の放免(ハウメン)せられし者にして、罪人の追捕・囚禁又は流人の護送などに從事し、賀茂の祭の時には、警護に任ぜり。平家「伊豆國にゐてまかるに、放免兩三人をぞ連れられける」盛衰記「廳の下部放免二人も、下向すべきにてありけるが」

放免の著物(ツケモノ)【句】賀茂祭の日に、放免の水干を著し、その袖口には、花などの作物(ツクリモノ)を附けて、異裝をなすこと。また手には、捩木(ネヂキ)の枠といふを持ちて、當日を警護せり。徒然「建治・弘安の頃は、祭の日の放免のつけ物に、異樣(コトヤウ)なる紺の布四五端にて、馬を造りて、尾髮には燈心をして、蜘蛛のい書きたる水干に著けて」

ばう‐べん 妄辯【名】條理の立たぬ辯說。暴論。

はうべん‐うよど 方便有餘土【名】〔佛〕『下文に記せる人人は、皆、空觀の方便道を修して、見思の惑を斷ぜるによりて、方便といひ、未だ中觀を修せず、隨ひて、無明(ムミヤウ)の惑盡きざるによりて、有餘といふ』四佛土の一。聲聞(シヤウモン)・緣覺の二乘の證果を究竟したる者と未だ十地(ヂフヂ)に達せざる菩薩との生ずべき、三界以外の淨土。方便土。

はうべん‐けもん 方便假門【名】〔佛〕はうべんもん(方便門)に同じ。

はうべん‐ごと 方便事【名】㊀便宜のために假說したる事柄。㊁たくみごと。いつはりごと。世間手代氣質「この方便事を、うまうまと參るが、御腹は立てられな」

はうべん‐ど 方便土【名】〔佛〕はうべんうよど(方便有餘土)に同じ。

はうべん‐ぶくろ 方便嚢【名】種種の物を入れおく袋。

はうべん‐ぼん 方便品【名】〔書〕㊀法華經二十八品中の第二品。法華經以外の三乘の法は、畢竟するに、一乘眞實の敎の方便なる旨を說きたるもの。榮花「方便品は、土御門の御匣殿(ミクシゲドノ)などのたまはせつつ」㊁維摩經の第二品。維摩(ユヰマ)居士が、種種の方便を以て、衆生を化(ケ)し、且つ現に、方便を以て、疾を毘耶離(ビヤリ)城に現ずる旨を說きたるもの。

はうべん‐もん 方便門【名】〔佛〕眞實の道に敎へ導かんがために、假に設けたる敎。方便假門。

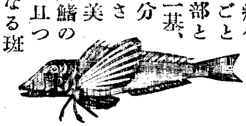
はうべん‐りき 方便力【名】〔佛〕佛が下根(ゲコン)の衆生(シユジヤウ)を敎化(ケウ)するに用ふる方便・權智(ゴンチ)の作用。太平記「長數珠を爪繰りて、以大神通方便力、忽令墮在諸惡趣と、高らかに啓白してぞ居たりける」釋迦如來誕生會「天王如來の方便力」

はう‐ぼ 保母・保姆【名】『禮記に「其次爲二保母一」、枚乘の七發に「内有二保母一、外有二

傳父」とあり』守役(モリヤク)の女。ほぼ(保姆)「母。先妣。参照。

ばうぼ 亡母【名】死にし女親。亡(ナ)き

はうぼう 魴鮄・竹麥魚【名】〔動〕硬骨類に屬する魚。體の長さ一尺餘に達し、頭部は、著しく大く、諸骨相癒合して、恰も冑を被れるがごとく、斜方形をなし、額と側部とは、稜角をなす。脊鰭は二基、胸鰭は大にして、三刺は分離し、且つ關節を有せるさま恰も指の如し。色彩は美なる帶黄紅色にして、胸鰭の内面は濃青藍色をなし、且つ淡色の邊緣を有せる大なる斑紋を有す。概して、形・色共に方頭魚(カナガシラ)に類し、味優れり。各地の近海に產す。


（はうぼう）

はうぼく 放牧【名】牛馬を、一年中又は一定の期間だけ、放飼にすること。のがひ。はなちがひ。

はうぼく 芳墨【名】一にほひよき墨。二他人の書簡又は筆蹟の敬稱。

はうぼくし 抱朴子【名】一〔人〕支那晉の道家葛洪の號。二〔書〕儒教を却けて、道教を進むるを旨とせるもの。內篇二十卷、外篇五十一卷(今本は內外篇各四卷)。支那晉の葛洪の著。「に同じ。

はうぼくち 放牧地【名】ぼくぢやう(牧場)

はうほつ 髣髴・彷彿・仿佛【貌】はうふつ(髣髴)に同じ。運歩色葉集「髣髴、ハウホツ」

はうほん 邦本【名】『書經の五子之歌篇に「民惟邦本、本固邦寧」とあるに本づく』「こと。たみ。人民。

はうほん 報本【名】その根本に、報ずる

報本・反始(ハンシ)【句】『禮記の郊特牲篇に「社供二粢盛一、所三以報レ本反レ始也」とあり』父祖の恩に報ゆること。

ばうほん 坊本【名】民間の出版に係り、市中にて賣る本。

はうほんがくしや 報本學舍【名】野野口隆正の、京都に在りて、諸生に敎授せし時の塾。

ばうまい 茫昧【貌】『味は暗き義』ばっとして知り難きさま。漠然。

ばうまう 防網【名】ばうぎよまう(防禦網)の略。「略。

ばうまう 紡毛【名】ばうまうし(紡毛絲)の

ばうまうおりもの 紡毛織物【名】經絲・緯絲共に紡毛絲、又は羊毛纖維に、他種の纖維を、紡毛絲紡績と同様の方法にて混じて紡ぎたる絲を用ひたるもの、又は以上の紡毛絲もしくは混紡絲を主體とし、これに他種の纖維より成る絲を混用せる織物の總稱。

ばうまうき 紡毛機【名】紡毛絲の製造に使用する紡績機械。

ばうまうし 紡毛絲【名】綿羊毛・山羊毛、又は髮毛、或は、これに他の各種の纖維を混合し、種種の工程を施して、必要に應じて、これを撚り合はせて、諸撚絲又は飾撚絲に製する毛纖維の總稱。

ばうます 坊枡【名】古の一種の枡。

はうまつ 泡沫【名】一水のあわ。あわつぶ。二存在のはかなき物の譬。「じ。

泡沫・芭蕉【句】〔佛〕「芭蕉・泡沫」に同

泡沫・夢【句】〔佛〕人世のはかなさを譬へていふ語。夢幻・泡影(ハウヤウ)。

はうまつぐわいしや 泡沫會社【名】權利の讓渡などのみを目的として、名義上の成立にとどめ、實務を行はぬ會社。みづかぶ(水株)參照。

はうまん 飽滿【名】一飽食して、腹に滿つること。滿腹。二〔化〕はうわ(飽和)二に同じ。

はうまん 放漫【名】ほしいままにすること。やりばなし。粗放。

ばうまん 暴慢【名】粗暴にして、放肆なること。「(竈門山)に同じ。

はうまんざん 寶滿山【名】〔地〕かまどやま

はうまんてん 飽滿點【名】〔化〕はうわてん(飽和點)に同じ。「あぢ。

はうみ 芳味【名】かうばしきあぢ。よき

はうむ 邦務【名】こくむ(國務)一に同じ。

ばうむ 防務【名】國防上の政務。

ばうむくわいぎ 防務會議【名】內閣總理大臣の監督の下に、陸海軍備の施設に關する重要なる事項を審議し、軍備・外交及び財政の調和を圖るを目的とする合議機關。大正三年の創設に係り、內閣總理大臣・外務大臣・大藏大臣・陸軍大臣・海軍大臣・參謀總長・海軍軍令部長を以て組織し、幹事長・幹事(二人)の職員を置く。

ばうむでうれい 防務條例【名】〔法〕首府(東京)及び永久の目的にて、海岸に建設したる防禦地點(吳・佐世保・紀淡海峽・鳴門(ナルト)海峽・藝豫海峽・下關(シモノセキ)海峽・對馬)の作戰は、陸・海軍協同して任ずべきものとなし、その指揮・任務を規定したる條例。明治二十八年の發布に係り、東京は、東京防禦總督が、要塞司令官・師團長(或は野戰指揮官)・橫須賀鎭守府司令長官を統べて、計畫・指揮に任じ、吳・佐世保は、鎭守府司令長官が、要塞司令官と海軍各部とを統べ、紀淡・鳴門・藝豫・下關の各海峽は、要塞司令官が、海上防禦司令官と守備諸兵とを統べ、對馬は警備隊司令官と要港司令官との內の、高級古參の者が、所屬部隊と他の司令官とを統べて、その任に當るものとす。「はうぶり。葬送。

はうむり 葬【名】はうむること。はふり。

はうむる 葬る【動四他】『はうぶる(葬る)の轉』一死體を、土中に埋む。はふる。はうぶる。埋葬す。二死體を入れ納む。「魚腹に葬る」三不都合なる行跡などを、世間に知れ渡らぬやうにす。「事件を、闇(ヤミ)から闇に葬る」四不都合なる所爲ありし者を、世間に出られぬやうにす。「社會から葬る」

ばうんど (英 Bound)【名】庭球などにて、球が、地上に落ちて、飛び跳ぬること。

ぱうんど 磅【助數】ぽんど(磅)に同じ。

はうめい 邦名【名】こくめい(國名)に同じ。

はうめい 芳名【名】一かうばしき名聲。よき評判。芳聲。令名。二他人の姓名の敬稱。若聲。

はうめい 芳茗【名】かうばしき茶。よき「茶。

はうめい 芳命【名】他人の命令の敬稱。おほせごと。「じ。

はうめい 報命【名】ふくめい(復命)に同

はうめい 保命【名】ほめい(保命)に同じ。

ばうめい 暴命【名】亂暴なる命令。

ばうめい 亡命【名】『命は名、即ち名籍の義』戸籍を脫して、逃亡すること、又その人。かけおち。おちうど。出奔。逐電。

亡命の客【句】次條に同じ。

ばうめいかく 亡命客【名】次條に同じ。

ばうめいしや 亡命者【名】亡命したる人。おちうど。逃亡者。亡命客。

はうめいしゆ 保命酒【名】備後國鞆(トモ)町の名產なる一種の酒。味醂又は燒酎を基とし、桂皮・茴香(ウヰキヤウ)・甘草・大棗・丁子・白檀(ビヤクダン)・龍腦・沈木・龍眼肉・桃仁・砂糖等を混和・浸漬し、後、その液汁を搾取せしもの。粘稠にして、黃色を呈し、甘味に富み、芳香あり。「じ。

ばうめつ 亡滅【名】めつばう(滅亡)に同

はうめん 方面【名】一方形なる額。角ばりたる額。ぢゆうばこづら。「方面大耳」二むき。かた。方角。一方。一面。一方面。

方面の寄(キ)【句】『名臣言行錄に「自謂當二方面寄一、不二敢辭一」とあり』或一方を引き受けて守る大將の役目。

はうめん 放免【名】一放ち免(ユル)すこと。二刑期の終りたる囚人を、獄舍より放ちやること。三〔法〕拘留を受けたる刑事被告人の、證據十分ならざる時、その事件、罪とならざる時、その事件、公訴の時效に罹りたる時、その事件、已に確定判決を經たる時、大赦ありたる時、又は、その事件が、その裁判所の管轄に屬せざる時、豫審判事が、その拘留を解くこと、又、既に有罪の判決ありたる囚人に對し、特赦の宣下ありたる時、一定の手續を經て、釋放すること。四はうべん(放免)に同じ。

はうめん 芳免【名】前條一の敬語。御ゆるされ。平家「芳免に預からば、……依って、年來の愁眉を開き、一期(イチゴ)の安榮を得ん」

ばうめん 傍面【名】一かたはら。そば。二かたはらの面。そとがは。

はうめん-かんさつ 方面監察【名】警視廳の舊職員の一。管內を二方面に分ち、その各方面の警察事務の實況を監察する任に當りし者、卽ち警視廳の監察官。警視を以て補したり。

はうめん-かんとく 方面監督【名】警視廳の舊職員の一。巡査總長の命を受け、各方面の巡査長以下の掌務を監督せし奏任官。明治十四年設置、同十八年一旦廢止し、翌年再び置かれ、警視これに補せられ、總監又は本署長の命を承け、主任の方面內を巡廻して、警察の事務を監督し、又、臨時に命を承けて、署長以下を指揮するを得たり。同二十六年、廢せられたり。

ばう-めんせき 傍面積【名】〔數〕**そくめんせき**(側面積)に同じ。

はうめん-ちがひ 方面違【名】擇みし學科・職業などの、その人に適せぬこと。

はうめん-ゐゐん 方面委員【名】區劃したる一方面の事務を擔當する委員。

はう-も 袍裳【名】僧の、左肩より掛けて著用する僧祇支(ソウギシ)及び右肩より掛けて著用する覆肩衣(フケンエ)と、腰部に穿つ裙(クン)との併稱。僧祇支・覆肩衣の二者を併せては、袍といふ。袍服(法服と書くは誤)。

ばう-も 亡母【名】**ばうぼ**(亡母)に同じ。謠曲(海士)「さては亡母(バウモ)の手跡かと、披きて見れば、魂、黄壞に去って十三年」

はう-もつ 寶物【名】**ほうもつ**(寶物)を見よ。

はう-もん 砲門【名】**一**大砲のつつ口。砲のすぐち。**二**砲を照準・發射するために、砲臺の胸壁、又は軍艦の舷側に設けたる、方形の孔。**はうがん**(砲眼)參照。

はう-もん 訪問【名】とひおとづるること。見舞ふこと。

はう-もん 芳問【名】**一**しつもん(質問)の敬稱。**二**はうもん(訪問)の敬稱。庭訓往來「依レ無二指事一、常不二申通一、疎略之至、驚入候之處、芳問之條、珍重珍重」

ばう-もん 坊門【名】**一**『唐書に「今暫逢二霖雨一、卽閉二坊門一」とあり』まちの門。市街の門。**二**まちすぢ。まち。坊。

ばう-もん 坊門【名】**一**〔地〕平安京の區劃に於て、二條以南の各坊の間を縱横に劃したる通路の、東西に貫通せるもの、卽ち二條・三條等の大路の中間にありて、これと並行せる小路。例へば、二條と三條との間に二條坊門ある類。**二**姓氏の一。藤原氏の支族。藤原道隆の第三子隆家より出で、その第五世の孫信隆、後鳥羽天皇の外祖となりて、左大臣となり、その子信清及び第五子隆清、共に、始めて、この姓を用ふ。信清の子忠信は、承久の役に、官軍に屬して、越後國に流され、隆清四世の孫清忠は、後醍醐天皇に仕へしが、その後、世に聞えず。水無瀨(ミナセ)は、その一族。

ばう-もん 茅門【名】**一**かやぶき屋根の門。**二**わびしき住居。茅屋。**三**己が家の門、又はその家の謙稱。

はうもん-きしや 訪問記者【名】新聞又は雜誌の記者の、訪問して、材料を蒐集することを擔當するもの。

ばうもん-どの 坊門殿【名】〔人〕**あしかがよしあきら**(足利義詮)に同じ。

はうもん-ふく 訪問服【名】他家を訪問する時に著る衣服。

ばう-もり 坊守【名】**一**寺坊の番人。**二**『法然上人の、親鸞の妻玉日(タマヒ)を見て、「子細なき坊守なり」と云ひしに始まる由、御因緣祕傳鈔に見ゆれど、平安朝の末、既に天台宗の妻帶僧の、常に外に出でて、俗間の敎化に從事せし間、その妻が寺坊を守護せし事實あり、殊に眞宗にては、惠信尼、稻田の寺坊を守護し、覺信尼、大谷の寺坊を守護せし事實あるによりて、自然に言ひならはししもの』一向宗の僧侶の妻。眞宗寺のだいこく。ないはう。

ばう-や 【名】**一**『「坊よ」と呼びかくる意』幼兒を、親しみて呼びかくる語。坊。子守謠「坊やは、いい子だ、ねんねしな」**二**男の兒の、年頃になりても、世間馴れぬ者。ぼっちゃん。

はう-やう 泡影【名】〔佛〕『金剛般若經に「一切有爲法、如二夢幻泡影一、如レ露亦如レ電、處レ作二如レ是觀一」とあり』**はうえい**(泡影)に同じ。

はう-やう 褒揚【名】ほめそやすこと。賞揚。

はう-やう 保養【名】**ほやう**(保養)に同じ。

はう-やう 放養【名】はなちやしなふこと。はなしがひ。

はう-やう 彷徉【名】さまよひ遊ぶこと。徘徊。

はう-やう 滂洋【名】海の水などの、ゆたかに滿ち足れること。

ばう-やう 茫洋・芒洋・望洋・望羊【貌】廣く遠くして目あてのつかぬさま。

ばう-やう 亡羊【名】次條を見よ。

亡羊の嘆【句】『「多岐(タキ)亡羊」を見よ』途方に迷ひて、如何にせんかと思ひわづらふこと。

はう-やく 方藥【名】**一**『漢書の華佗篇に「精二于方藥一」とあり』藥劑を調合すること。調劑。**二**輕薄にして、無責任なる所爲。日暮草「書きおきし藥方のままに、秤にて懸け合せ、分兩加減のわかちなく、藥數多く包みやり、ただ運に任せて療するは、これぞ、浮世の實なきを方藥といふは、これなるべし」

はう-やく 砲藥【名】大砲に用ふる火藥。

はう-やく 邦譯【名】國語にて譯すること、又その譯。國譯。

はうやく-ばらひ 方藥拂【名】輕薄にして、役に立たぬ者を追放すること。阿房拂(アハウバラヒ)の類。甲陽軍鑑「方藥拂といふものに成りければ」

ばう-ゆう 暴勇【名】亂暴にてつよきこと。

はう-よ 方輿【名】『宋玉の賦に「方地爲レ輿、圓天爲レ蓋」とあり』**よち**(輿地)に同じ。

はう-よ 寶輿【名】**じようよ**(乘輿)の敬稱。

はう-よ 褒譽【名】**しやうよ**(賞譽)に同じ。

はう-よう 方円・方向【名】『方圓を方円と書きたるを誤寫せしより生ぜし語なるべしといふ』**はうゑん**(方圓)**一**に同じ。

はう-よう 芳容【名】**一**美人の容貌。**二**他人の容貌の敬稱。

はう-よう 放鷹【名】**たかがり**(鷹狩)に同じ。

はう-よう 包容【名】**一**包みいるること。

二度量廣くして、人の說などをよく容るること。寛容。

ばう-よう 抱擁【名】いだきかかふること。

ばう-よう 貌容【名】**ようばう**(容貌)に同じ。太平記「貌容、人に勝れ、心樣、優にやさしかりき」

ばう-よう 妄用【名】程度をはからず、妄りに用ふること。

はうよう-し 放鷹司【名】養老・天平頃に置かれ、鷹犬を調習して、遊獵の用に供することを掌りし司。天平寶字八年廢止せり。**はうじやうし**(放生司)參照。

はうよう-らく 放鷹樂【名】雅樂の內、我國新製のものの一。乞食(コツジキ)調に屬し、左手に鷹をすゑ、右手に楚(ズハエ)を持ち、放鷹の體をなす。弘仁三年より始まり、野の行幸に奏せり。

は-うら 羽裏【名】鳥の翼のうら。

は-うら 葉裏【名】草木の葉のうら。俳諧古選(都雪)「晴間まで葉裏にゆるる螢かな」

はう-らい 方來【名】〔佛〕『方(サマ)に來る時の義』**みらい**(未來)**一**に同じ。榮花「福二助過去一、恢二弘方來一」

ばう-らい 暴雷【名】急に烈しく鳴るかみなり。迅雷。

はうらい-し 寶來紙【名】**わたうし**(和唐紙)に同じ。

はう-らう 放浪【名】ほしいままにして、物に拘らず行動すること。氣ままに遊びあるくこと。さまよひあるくこと。

ばう-らう 暴浪【名】はげしく荒れたる浪。

はうらう-きん 報勞金【名】勞力に報ゆるための金。

はうらう-せいくわつ 放浪生活【名】一定の住所も職業も無く、心の向ふままに渡りあるく生活。

はう-らく 放樂【名】**ほふらく**(法樂)に同じ。

はう-らく 炮烙・焙烙【名】**一**炮(アブ)り烙(ヤ)くこと。**二**古、支那にて、殷の紂王の行ひし刑罰。炭火の上に油を塗りたる銅柱を架け渡し、罪人をして、その上を渡らしめ、すべり落ちて燒け死ぬるやうにせしもの。太平記「南庭に、炮烙を建てて、后の見物にぞ成しける」**三**はうろく(炮烙)**一**に同じ。一代男「柳に貫きし餠花を散ら

し、炮烙に香らせ」

はう‐らく 包絡【名】心臟を包める薄き膜。

ばう‐らく 暴落【名】物價のにはかに下落すること。（暴騰に對して）

はうらく‐いちご はうらく苺【名】〔植〕なはしろいちご（苗代苺）に同じ。

はう‐らち 放埒【名】次條に同じ。三代男「はうらちといふは、美しき思はくの分(ワケ)なく」

はう‐らつ 放埒【名】『馬が埒を放れたるがごとくなる義』㊀行爲のしまりなきこと。素行の修まらぬこと。遊蕩。春花五大力「身持(ミモチ)放埒」㊁定式に外れてあること。だらしなきこと。「放埒の句」

はう‐らん 放卵【名】鳥、卵を生みはじむ。

はう‐らん 芳蘭【名】よき香を放つ蘭。

はう‐らん 保籃【名】〔兵〕普通一メエトルの長さの骨杭七八箇に、樹枝又は割竹を卷きくるみて編み造りたる、圓筒形の籠。通常高さ八十サンチメエトル、外徑六十サンチメエトルありて、土砂を塡充し、壘壁各部斜面の被覆に用ふ。

はう‐らん 保鑾【名】古、支那にて、天子の親兵の異稱。我國の近衞兵に當る。

ばう‐らん 暴亂【名】㊀らんばう（亂暴）に同じ。㊁ばうどう（暴動）に同じ。

はう‐り 邦里【名】我邦の里數。（英里・淸(シ)里・露里などに對して）

はう‐り 方里【名】一里四方。一平方里。

はう‐り 方里【接尾】一里四方を單位として、土地の面積を計るに用ふる語。

ばう‐り 暴吏【名】暴虐なる官吏。殘吏。酷吏。

ばう‐り 暴利【名】方外なる利潤。不當の利益。

ばう‐り 忙裏【名】せはしきなか。いそがはしきあひだ。忙中。

はう‐りう 放流【名】㊀『放(ホシイママ)に流す義』すこしも堰(セ)きとめずに流しやること。㊁『放逐・流謫の義』つゐはう（追放）に同じ。

はう‐りう 保留【名】ほりう（保留）に同じ。

はうり‐せき 方里積【名】一里四方を單位として計算したる、土地の面積。一里平方の面積。

ばう‐りつ 茅栗【名】しばぐりの實。

ばうり‐とりしまり 暴利取締【名】奸商の暴利を貪らぬやうに取締ること。

ばうりとりしまり‐れい 暴利取締令【名】〔法〕暴利を目的とする賣買を取締る法令。大正十二年の公布。

はう‐りん 芳林【名】花の咲きてある林。

はう‐りやう 方量【名】㊀けんち（檢地）に同じ。㊁かぎり。際限。方圖。狂言（寢聟）「慮外な奴の。ゆるして置けば、はうりやうもない奴の」㊂草などのはびこること。

はう‐りやう 方領【名】㊀『漢書の王莽傳に「衣二白單衣、赤績、方領」、隋書の儒林傳に「方領矩歩之徒」とあり』方形なるえり。半臂(ハンピ)・下襲(シタガサネ)・衵(アコメ)・直垂(ヒタタレ)・長絹(チヤウケン)などに於けるがごとく、前方にて搔合はするやうにせるえり。かくえり。たりくび。（盤領(バンリヤウ)に對して）㊁古、堂上家が、部局(ツボネ)に勤仕する場合に、家領の外にあてがはれし知行。

ばう‐りやう 坊領【名】坊主の所有に屬する知行。盛衰記「僧都・僧正にも成り、寺領・坊領をも申さんずるにやと」

はうりやう‐だいこん 方領大根【名】『尾張國海東郡方領村に產するより名づく』〔植〕大根の一品種。葉は濃綠色にして、下垂して根頸を覆ひ、根は肥大にしてやや短く、味は宮重(ミヤシゲ)大根には及ばざれども、煮食用として珍重す。

はう‐りやく 方略【名】㊀はかりごと。てだて。方策。計略。計畫。㊁〔兵〕一般方略と特別方略との總稱。㊂王朝時代に、文章(モンジヤウ)得業生の、宣旨を蒙りて、對策せしこと、又その對策。

方略の宣旨(センジ)【句】王朝時代に、文章(モンジヤウ)得業生を對策せしめし宣旨。空穗「おもしろき文(フミ)作れり。進士になされて、方略の宣旨下りぬ」

はうりやく 寶曆【名】桃園天皇の御代の年號（紀元二四一一年―二四二四年）。

寶曆の變(ヘン)【句】桃園天皇の御代に、德大寺公城・久我(コガ)敏通の二卿、攝關の、關東を畏怖するを憤り、皇權恢弘に意あり、同志の公卿と謀議し、竹内式部の講說を聞き、天皇に內奏して、諸事の宸斷を勸め奉りしに、事洩れて、寶曆八年七月二十四日、謀議に與りし諸公卿、皆處罰せられ、式部も、追放の刑に處せられし事變。寶曆事件。

ばう‐りやく 暴掠【名】無法に掠奪すること。

はうりやく‐かふじゆつ‐げんれき 寶曆甲戌元曆【名】次條に同じ。

はうりやく‐かふじゆつ‐れき 寶曆甲戌曆【名】寶曆四年十一月、貞享(チヤウキヤウ)曆を少しく改めて、これに代へて頒布し、寬政九年十一月十七日まで行はれし曆。安倍泰邦・澁川光洪等の撰定に係る。寶曆曆。寶曆甲戌元曆。

はうりやく‐さく 方畧策【名】方略㊂に就きての對策。

はうりやく‐じけん 寶曆事件【名】「寶曆の變」に同じ。

はうりやく‐れき 寶曆曆【名】はうりやくかふじゆつれき（寶曆甲戌曆）に同じ。

はう‐りよ 芳慮【名】はうねん（芳念）に同じ。

はう‐りよ 放慮【名】はうねん（放念）に同じ。

ばう‐りよ 亡慮【名】むりよ（亡慮）の誤讀。

ばう‐りよ 亡虜【名】㊀逃亡したる俘虜。㊁逃亡したる者を賤しみていふ語。太平記「彼の尊氏・直義(タダヨシ)等、遠蠻の亡虜、東夷の降卒なり」

ばう‐りよう 傍稜【名】〔數〕そくりよう（側稜）に同じ。

はう‐りよく 砲力【名】大砲の威力。

ばう‐りよく 暴力【名】亂暴なる力。無法なる力。

ばうりよく‐だん 暴力團【名】富豪などの家に闖入し、制裁を加ふと稱して、暴力に訴ふる團體。

はう‐るゐ 方類【名】たぐひ。種別。

はう‐るゐ 堡壘【名】㊀とりで。堡砦。㊁〔兵〕軍隊が、敵火に對して、わが兵員・材料を掩護し、且つ射擊の便を得しめ、敵の近接を障碍する、土石の築造物。分派堡・獨立堡・前進堡・海堡等の別あり。

ばう‐れい 亡靈【名】ばうこん（亡魂）に同じ。

ばう‐れい 坊令【名】奈良朝時代の奈良及び平安朝時代の京都の坊四つごとに、一人を置きて、坊長と力を協せて、その管轄の坊内を監督し、戶口を檢校し、賦徭を催すことを掌りしもの。

ばう‐れい 耄齡【名】たいれい（頽齡）に同じ。

ばう‐れい 傍例【名】定式以外の法例。庭訓往來「傍例・納法・律令」

ばう‐れい 暴戾【名】あらあらしくして、道理にそむきもとること。よこしま。

はうれい‐わた 芳禮綿【名】はふれいわた（法令綿）に同じ。

ばう‐れう 坊寮【名】僧の住む家。僧坊。坊舍。

はう‐れき 寶曆【名】㊀『隋書の煬帝記に「朕肅膺㆓寶曆㆒」とあり』はううん（寶運）に同じ。㊁はうりやく（寶曆）を見よ。

はうれき‐かふじゆつ‐げんれき 寶曆甲戌元曆【名】はうりやくかふじゆつげんれき（寶曆甲戌元曆）を見よ。

はうれき‐かふじゆつ‐れき 寶曆甲戌曆【名】はうりやくかふじゆつれき（寶曆甲戌曆）を見よ。

はう‐れつ 砲列【名】大砲を排列すること、又その排列。

はう‐れつ 放列【名】〔兵〕砲兵射擊のために、火砲を配列したる狀態。

はう‐れつ 芳烈【名】㊀うるはしき義烈の精神。㊁はげしき香氣を有すること。

はうれつ‐こう 芳烈公【名】〔人〕いけだみつまさ（池田光政）の諡號。

はうれつ‐せん 放列線【名】〔兵〕砲兵射擊のために配烈したる火砲の線、即ち砲兵の戰鬪線。

はう‐れん 菠薐【名】〔植〕『漢字の宋音』はうれんさう（菠薐）の略。

はう‐れん 寶輦【名】ほうれん（鳳輦）の敬稱。

はう‐れん 方廉【名】方正にして、廉直なること。

ばう‐れん 暴斂【名】租稅を、亂暴に收斂すること。無法なるとりたて。

はうれん-さう 菠薐草・菠薐 【名】〔植〕『漢字の宋音』藜（アカザ）科に屬する一二年生の草。高さ一二尺に達し、葉は三角狀卵形をなし、葉脚の兩側、鋭尖に突出す。花は、單性にして、雌雄異株、雄花は黃綠色なる四片の花被を有し、雌花は花被なくして、二箇の小苞に包被せらる。莖と根とは、淡紅色にして、甘味あり。栽培して食用に供す。せきさい。

（うさんれうは）

ばう-ろ 茅廬 【名】ばうをく（茅屋）に同じ。

ばう-ろ 暴露 【名】ばくろ（暴露）の誤讀。

ばう-ろう 望樓 【名】㊀物見（モノミ）のための高どの。ものみ。觀樓。㊁かいぐんばうろう（海軍望樓）の略。

ばうろう-かんとくくわん 望樓監督官 【名】鎭守府の職員の一。鎭守府司令長官の命を承けて、所屬海軍望樓に關することを掌るもの。

ばうろう-しゆ 望樓手 【名】海軍望樓の職員の一。望樓長の命を承けて服務するもの。

ばうろう-ちやう 望樓長 【名】海軍望樓の職員の一。望樓所在の海軍區を管する鎭守府の望樓監督官（旅順鎭守府にては參謀長）若しくは、要港部參謀長に隷して、その望樓の事務を掌理するもの。

はう-ろく 炮烙・炮碌・焙烙・焙碌・焙爐具 【名】『炮烙（ハウラク）の轉』㊀素燒（スヤキ）又は鑄鐵製の平たき鍋。物を炮（イ）るに用ふ。あさなべ。いりなべ。いりがら。いりごら。淺甌（センオウ）。㊁はうろくづきん（炮烙頭巾）の略。

炮烙千（セン）に、槌一（ヒトツ） 【句】『炮烙は、千箇ありても、槌一つのためにたやすく割らるとの意』つまらぬ者が何人合同したりとも、すぐれたる者一人にも敵しえぬ譬。煎餅（センベイ）に金槌（カナツチ）。〔諺語〕（錄外御書）「權宗の人人、無量に言ひ狂ふとも、ただ焙烙千に槌一つなるべし」

炮烙の一倍 【句】炮烙を賣りても、一倍の利は得らる。〔諺語〕

炮烙の行列 【句】『物炒（イリモノ）に、入費の嵩む意の物入（イリモノ）を言ひかけたる語』入費の續くこと。〔諺語〕

炮烙の割（ワレ）も、三年置けば役に立つ 【句】世の中に、無用なる物とては、一つも無し。〔諺語〕

はうろく-あそび 炮烙遊・焙烙遊・炮碌遊・焙碌遊 【名】炮烙を用ひてする遊戲。（狂言、鞨鼓炮碌）「炮烙遊などと申す事、御座りますまい」

はうろく-し 炮烙師・焙烙師・炮碌・師焙碌師 【名】炮烙の製造を職とする人。

はうろく-じあひ 炮烙仕合・焙烙仕合・炮碌仕合・焙碌仕合 【名】**はうろくてうれん**（炮烙調練）に同じ。

はうろく-づきん 炮烙頭巾・焙烙頭巾・炮碌頭巾・焙碌頭巾 【名】炮烙の形したる頭巾。專ら僧侶の間に用ふ。大黑づきん。まるづきん。はうろく。（長町女腹切）「炮烙頭巾の醫者殿」（平假名太平記）「焙烙頭巾紫の色に引かるる揚屋町」

はうろく-づつ 炮烙筒・焙烙筒・炮碌筒・焙碌筒 【名】江戸時代の、一種の大砲。

はうろく-てうれん 炮烙調練・焙烙調練・炮碌調練・焙碌調練 【名】江戸時代の末に、軍事の調練のために、各、徒步又は馬上にて、炮烙を頭上に載せ、竹刀にて打合ひ、割られたる者を負とせし技。はうろくじあひ。

はうろく-びや 炮烙火矢・焙烙火矢・炮碌火矢・焙碌火矢 【名】戰國時代に、銅製の丸に、火藥を籠め、布にて包み、漆を塗り、火を點じ、敵中に投じて爆發せしめしもの。今の破裂彈の類。たいさんびや。

はうろく-むし 炮烙蒸・焙烙蒸・炮碌蒸・焙碌蒸 【名】炮烙の中に鹽を敷き、魚・松蕈などを入れて、蓋をなし、蒸燒にすること、又その製法に依る食品。はうろく燒。

はうろく-やき 炮烙燒・焙烙燒・炮碌燒・焙碌燒 【名】前條に同じ。

はうろく-わり 炮烙割・焙烙割・炮碌割・焙碌割 【名】各、頭上に炮烙を載せ、目隱を施したる者、二手に分れ、竹刀などにて打合ひ、相手の炮烙を多く割りたるを勝とする競戲。

ばう-ろん 放論 【名】氣まま勝手に議論「すること。

ばう-ろん 暴論 【名】亂暴なる議論を吐くこと、又その議論。

はう-わ 飽和 【名】『梁肅賀の文に「於レ焉飽和、百骸自理、滓濁如レ洗」とあり』㊀極限の度に達して、過不及なきこと。㊁〔理・化〕『英 Saturation』溶質が、一定の狀況の下に於ける一定の溶媒中に、極限の量だけ溶解し盡し、又、蒸氣が、一定の溫度に於ける一定の空間に含まれ得る量だけ含まれ盡したる狀態。飽滿。㊂〔美〕『英 Saturation』色彩の純粹の度、即ち色彩感覺に於て、黑色もしくは白色の混ずることの、最も少なきもの。

ばう-わう 暴橫 【名】**わうばう**（橫暴）に同「じ。

ばうわう-せつ バウワウ說 【名】〔語〕『英 Bowwow theory』**ぎせいきげんせつ**（擬聲起源說）に同じ。

はうわ-えき 飽和液 【名】〔化〕**はうわようえき**（飽和溶液）に同じ。

はうわ-ざい 飽和劑 【名】『獨 Saturations』炭酸鹽類と酸類（殊に有機酸類）とを中和せる藥劑。殆どアルカリ性及び酸性を消失し、その液中には、化成せる有機鹽類を溶解し、且つ遊離せる炭酸の一部を飽有す。これを用ふる目的は、通常、この遊離炭酸を主とす。

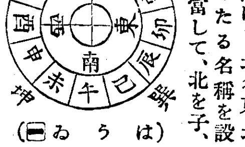
はうわ-じようき 飽和蒸氣 【名】〔理〕『英 Saturated vapour』一定の空間に飽和したる蒸氣、即ち溫度の增加せざる限は、その空間には、それ以上液體の蒸發を見ざる密度に達したる蒸氣。この蒸氣は、溫度を下し、或は壓縮する時は、その一部は液化す。

はうわ-てん 飽和點 【名】〔理・化〕『英 Saturating-point』飽和㊁の極點。飽滿點。

はうわ-ようえき 飽和溶液 【名】〔化〕『英 Saturated solution』溶質の飽和せる溶液、即ち一定の狀況の下に出來るだけ多量の溶質の溶解したる溶液。飽和液。

はう-ゐ 寶位 【名】天皇の御位。たからのくらゐ。くらゐ。天位。寶祚。（保元）「萬乘の寶位を忝くす」

はう-ゐ 方位 【名】㊀東・西・南・北の四方及びその各の中間なる四隅等の位置。支那傳來の四隅の名稱は、東南・西南・東北・西北なれども、近來は、西洋流に、South-east, South-west, North-east, North-west の直譯なる南東・南西・北東・北西を用ひ、なほ、北より北東までの間にも、北ィ東・北北東・北東ィ北など細分したる名稱を設く。又、古來、十二支を配當して、北を子、東を卯とし、その間に丑・寅を配し、以下順次に右旋して、辰・巳・午（南）・未・申・酉（西）・戌・亥と呼ぶもの、又、易經に本づきて、坎（北）・震（東）・離（南）・兌（西）・艮（ウシトラ東北）・巽（タツミ東南）・坤（ヒツジサル西南）・乾（イヌヰ西北）の八字を用ふることあり。時刻に十二支の名を用ふるも、各、その方位に太陽を見るに因るなり。方角。㊁陰陽と五行生剋（ゴギヤウシヤウコク）との說に基づき、十干循環の法によりて、各方角に向ひて、旅行・轉居・婚姻・開業等の事を行ふに、吉凶・禍福を生ずといふ迷信。吉方（エハウ）を最も吉なりとし、金神（コンジン）・鬼門（キモン）を最も凶なりとし、なほ歲破・月破・年月暗劍殺・五黃（ゴワウ）殺・本命方・的殺方の六大凶などあり。方角。方。



（㊀ゐうは）

はう-ゐ 邦威 【名】**こくゐ**（國威）に同じ。

はう-ゐ 包圍 【名】周圍を取卷くこと。つつみかこむこと。

はう-ゐ 抱圍 【名】兩手にていだき圍むこと、又その方法にて計りたる長さ。

ばう-ゐ 亡位 【名】二位・三位に敘せられながら、昇殿を聽されぬこと。

ばう-ゐ 暴威 【名】亂暴なる威勢。

ばう-ゐ 坊圍 【名】㊀ふせぎかこむこと。㊁〔法〕內外より起るべき障害を豫防する

ために設くる建築物。かこひ。

はうゐ-かく 方位角【名】**一**〔天〕『英 Azimuth 又 True bearing of heavenly body』一の天體の位置を示すに、その天體を通過する垂直面と觀測者を含む子午線面とのなす角を以てする、その角度。**二**〔地〕**へんかく**(偏角)に同じ。

はうゐ-ぎ 邦域【名】くにのさかひ。一國の範圍。

はうゐ-ぐん 包圍軍【名】包圍攻撃に參與する軍。

はうゐ-けん 方位圈【名】〔天〕『英 Azimuth circle』天頂と天底との兩點を貫き、地平圈に垂直に交る、假設の大圈。天體又は地物の方位又は高度を測る時の標準となる。垂直圈。**ばういうけん**(卯酉圈)參照。

はうゐ-こうげき 包圍攻撃【名】**一**敵を包圍して攻撃すること。**二**四方より論難すること。

はうゐ-てん 方位點【名】〔天〕『英 Cardinal point』地平面と子午線及び卯酉(バウイウ)圈との交叉によりて生ずる、四つの點。

はう-ゐん 芳韻【名】他人の作りたる漢詩の押韻、又はその漢詩の敬稱。

はう-ゐん 砲員【名】砲を操縱する役の兵員。

ばう-ゑい 防衛【名】敵を防ぎ、味方をまもること。

はう-ゑん 方圓【名】**一**方形と圓形と。諺「水は、方圓の器に隨ふ」**二**陣法の一種。はういう。**はちぢん**(八陣)參照。

方圓施すべし【句】『齊書の沈憲傳に「補二烏程令一。太守褚淵嘆レ之曰、此人方員可レ施』とあり。員は圓に同じ』「方に隨ひ、圓に就く」に同じ。〔諺語〕

はう-ゑん 芳園【名】**はなぞの**(花園)に同じ。

ばう-ゑん 防援【名】**一**ふせぎたすくること。**二**王朝時代の獄官の一。囚人の戒護・護送及び監獄の取締等に從ひしもの。

ばうゑん-きやう 望遠鏡【名】〔理〕『英 Telescope』遠方の物體を廓大して、眼の近くにあるが如くに見えしむる光學器械。レンズ又は凹面鏡を應用して造る。對物レンズ又は凹面の反射鏡によりて、遠方の物體の實像を造らしめ、接眼レンズによりて、これを廓大せしむ。屈折望遠鏡と反射望遠鏡とに大別す。前者は實像を造らしむる對物レンズを用ひ、後者は凹面の反射鏡を用ふ。

はうゑん-しや 方圓社【名】本因坊第十四世秀和の高足村瀨秀甫の、明治十三年創立せし圍碁の社團。秀甫の後、中川龜三郎・巖崎健造・中川龜三郎(二世)等、相繼ぎて社長となる。

ばう-をく 茅屋【名】**一**かやぶきやね、又その家。茅庵。茅宇。茅廬。**二**見すぼらしき住屋。あばらや。茅庵。茅宇。茅廬。茅門。**三**己が家の謙稱。茅庵。茅宇。茅廬。茅門。

ばう-をく 房屋【名】**一**いへ。家屋。**二**〔法〕家屋の一部。

はえ 映【名】はゆること、又そのさま。つや。光彩。源氏「見知らん人にこそ見せめ。何のはえあるまじきわたりを」

はえ 鮠・鰷【名】〔動〕**一うぐひ**(石斑魚)に同じ。**二**硬骨類に屬する魚。體は長さ五六寸に達し、美麗なる赤斑あり。幼魚及び雌は、色彩蒼白にして白鮠(シラハエ)と稱す。又、一種、頭小にして、體圓く、脂肪多きを、諸子(モロコ)といふ。何れも淡水に產し、食用に供す。はい。はや。おひかは。

はえ【名】**一**『梵 vāyu(婆庾)の訛なるべしといふ』南風。〔中國・西國・琉球の方言〕**二**水中に隱れて見えざる岩。かくれいは。暗礁。

ばえ【名】〔動〕**ばい**(貝)の轉訛。

はえ-あふ 映合ふ【動四自】對照せられて、一層よく見ゆ。はえやふ。

は-えい 波影【名】波のすがた。

はえ-いづ 生出づ【動下二他】草木出生す。おひいづ。發芽す。狂言(鈍根草)「塚から、蓼一本はえ出づる」

はえい-はえい【感】口說歌(クドキウタ)の掛聲にいふ語。重帷子「揃ふ拍子も容態(フリ)もよく、それそれ、それそれ、やっとせ、はえい、はえい、難波江の蘆の假寢の一夜さへ、長き契と結びはすれど」

はえ-いろ 映色【名】はゆる色。はえたる色。新六「君がねは綠も朱(アケ)もはえ色の山橘のときはかきはに」

ば-えき 馬疫【名】馬の疫病。我國にては、獸疫豫防規則によりて、炭疽・鼻疽及び皮疽・流行性鵞口瘡・狂犬病・假性皮疽の五種に限定す。

はえ-ぎは 生際【名】額などの、髮の生えたる際。からぎは。かみぎは。くしぎは。五人女「目の張(ハリ)、りんとして、額の生際、自然とうるはしく」

はえ-くさ はえ草【名】〔植〕**たかとうだい**(高燈臺)**二**に同じ。字鏡「大戟、波衣草」

はえ-さがり 生下【名】**おひさがり**(生下)に同じ。色道大鑑「はえさがりは、無き方まさるべし」

はえ-す 生す【動佐變自】**はゆ**(生ゆ)に同じ。〔古語〕萬葉「柳こそ伐ればはえすれ世の人の戀に死なむをいかにせよとぞ」

はえ-どまり 生止【名】生えたるままにてとどまること。一代女「額は、わざとならず、自然の生えどまり」

はえ-ぬき 生拔【名】**一**生れたる時より、その土地、その家などを離れずに生長し來りしこと。ねぬき。「はえぬきの江戸っ兒」「はえぬきの息子」**二**幼き時より、現在と同じ狀態にて生長し來りしこと。うまれつき。丹波與作「年は、ことし十一、五つの年から馬追うて、一代、若衆にならずに、はえぬきの念者」百合若大臣野守鏡「はえぬきの町人」

はえ-ぬく 生拔く【動四自】草木が、雪などの上へ拔け出づ。芭蕉「木曾の情雪や生えぬく春の草」

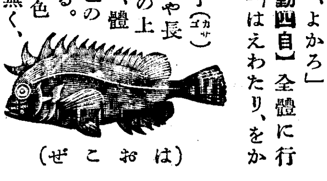
はえ-ばえし 映映し【形二】色と色とのうつりよし。甚だはえあり。見ばえあり。枕「打當てたるは、いみじう興ありとうち笑ひたるも、いとはえばえし」正統記「一統のしるしおぼえて、……、都の中はえばえしくこそ侍りけれ」

はえ-もの 生物【名】地上に生え出づるもの。即ち草木など。川中島合戰「地からはえ物、木になり物」

はえ-やふ 映合ふ【動四自】**はえあふ**(映合ふ)の轉訛。狂言(烏帽子折)「下には、白小袖を召しませう。して、又、中には、紅梅がようござりませう。上には、熨斗目(ノシ)を召さっしゃれたが、ようござりませう。おう、これは、はえやうて、よかろ」

はえ-わたる 映渡る【動四自】全體に行きわたりて映ゆ。榮花「はえわたり、をかしう見ゆ」

はおこぜ【名】〔動〕笠子(カサゴ)科に屬する魚。體形やや長く、頭は鈍く尖り、その上部に棘質の突起部あり、體色は紅色にして、白色の斑紋は網狀斑紋を作る。體側にやや大なる淡灰色の一點あり。鱗は殆ど無く、體長は二三寸に過ぎず。



(はおこぜ)

は-おしろい 端白粉【名】**はらや**(水銀粉)に同じ。

はおち-づき 葉落月【名】陰曆八月の異稱。

は-おと 羽音【名】**一**鳥の、兩翼をうちたたく音。平家「水鳥ども、軍勢に恐れて飛び立ちける羽音に驚きて」**二**矢の羽の、風を切りて飛ぶ時の音。

は-おと 葉音【名】葉に物の觸れて發する音。俳諧新選(嘯雨)「涼風の通りて竹の葉音かな」

は-おと 齒音【名】物を嚙む時、齒に當る音。

は-おと 刃音【名】刃物にて物を切る時、その刃の當りて發する音。一代男「生玉(イクタマ)の御池(ミイケ)の蓮葉(ハチスバ)、毎年七月十一日に刈る事ありて、……、鎌の刃音に驚く」川中島合戰「劍の刃音、天に響き」

ばおばぶ(英 Baobab)【名】〔植〕木綿(パンヤ)科に屬する常綠灌木。高さ六丈餘、直徑二十五尺に達し、葉は掌狀、大形・白色の花、葉腋に一箇づつ開き、細長にして、質、瓢簞に似たる實を結ぶ。果皮を容器とし、果實の髓と若葉とは、食用に供し、樹皮は解熱劑となり、纖維は織物の料とし、生長せる葉は、屋根を葺くに用ひ、又、防汗劑とす。原產地は亞弗利加。

は-おん 琶音【名】〔音〕**あるぺじお**に同じ。

は-おり 羽織【名】**一**『はふり著る物の義

にて、たふる(倒る)をタオルの如く發音すると同樣の音韻の轉訛を經たるものといふ。はおる(羽織る)參照』上衣（ウハギ）の上に著用する、短き衣。道服の變化したるものといふ。蝙蝠（カウモリ）羽織・長羽織・廣袖羽織・平袖羽織・革羽織・打裂（ブツサキ）羽織などの種類あり。足利義政の頃以來のものならんといひ、もと褻（ケ）の服なりしが、明治維新以後、上下（カミシモ）の廢止に伴なひて、黑地に家紋を白く染出せるものは、袴と相具して、和裝の禮服たるに至れり。㊁ぐそくばおり(具足羽織)の略。㊂はおりげいしや(羽織藝者)の略。柳樽「打掛へ羽織が附いて六十匁」 仕懸文庫「羽織といふは衣服に非ず、新子（シンコ）と呼ぶは餅米に非ず、……、羽織化（ケ）して子供となるなんどは、未だ禮記（ライキ）の月令（グワツレイ）にも見ず」

羽織・袴【句】㊀羽織と袴と。㊁羽織を著、袴を穿ちたる、和服の禮裝。

はおり-げいしや 羽織藝者【名】羽織を著用して宴席に侍する藝妓。江戸深川の藝妓の風俗として有名なりき。はおり。

はおり-ごろ 羽織破落戸【名】次條の略。

はおり-ごろつき 羽織破落戸【名】『羽織を著たる破落戸（ゴロツキ）の義』然るべき服裝をしながら、恐喝などを行ひ、殆ど破落戸と同樣なる者。はおりごろ。

はおり-し 羽織師【名】江戸時代に、羽織の仕立を業とせし人。

はおり-はかま 羽織袴【句】はおり(羽織)の條下を見よ。

はおりはかま-やく 羽織袴役【名】德川幕府の目見（メミエ）以下の格式。羽織・袴を著用して出仕せしもの。

はおり-ひも 羽織紐【名】羽織の紐。

はおり-や 羽織屋【名】羽織などの仕立を業とする家、又その人。〔江戸時代の語〕

はおり-れん 羽織連【名】『羽織を著用せる遊惰なる姿の、特に目立ちしよりいふ』文金風の風俗をなしたる人人。〔江戸時代の語〕

は-おる 羽織る【名】『はおり(羽織)㊀を見よ』上衣（ウハギ）の上に打掛けて著る。

はか 墓【名】死人の遺骸を葬りたる處。おくつきどころ。つか。墳墓。

墓の工（タクミ）【名】墓を造る工人。聖德太子傳曆「墓工隨ㇾ命可ㇾ絕者絕、可ㇾ切者切」

はか【名】あてど。めあて。かぎり。はかり。〔古語〕 小大君集「われ死なばいづこをはかと尋ねてかこの世に盡きぬ事も語らん」

はか 果【名】仕事のしあがりぐあひ。はかどり。進度。

果が行く【句】はかどる(果取る)に同じ。

果も無し【句】はかなし(果無し)に同じ。和泉式部集「はかもなき夏の草葉におく露を命とたのむ蟲のはかなさ」

は-か 薄荷【名】はくか(薄荷)の略。〔古語〕 和名「薄荷、波可」

はか【助】云云のみより以外にはの意。よりほか。のみ。ほか。長町女腹切「私を、お袋とはか言ひませぬ」 伊賀越道中雙六「道具諸式を値（ネ）にして取ってくれといふ事なれど、……、見込に思うた佛壇が、こりや、百が物はか無い」

はか【助數】稻などを植ゑつけ、又は刈るにつきての田地の地積の單位。〔奥州の方言〕「二はか」「三はか」

はが 黐擌・擌【名】はご(黐擌)に同じ。和名「唐韻云、擌、波賀。所㆓以捕㆑鳥也」 保元「擌も立てず、黐繩（モチナハ）も引かず、いかにして魚鳥を取るぞ」

はが 芳賀【名】〔地〕㊀下野國八郡の一。郡役所を眞岡（マヲカ）町に置く。㊁下野國芳賀郡にありし村。今の眞岡（マヲカ）町の古稱。慶長(一說に天正)中、今の稱に改むといふ。㊂姓氏の一。本姓は淸原。前項の地に配流せられし瀧口高重の子孫。後、宇都宮（ウツノミヤ）氏に屬し、益子氏(本姓は紀)と並びて、その雙翼たりしが、慶長二年、宇都宮氏と共に滅ぶ。

ばか 馬鹿・馬嫁（梵 Baka(慕何)）【名】『原語は、痴漢また無賴漢の義』㊀おろかなること、又その人。あはう。愚。愚人。㊁効果なき、くだらぬ行爲。「馬鹿な目に遇ふ」「馬鹿を見る」㊂里神樂（サトカグラ）にて、下僕に扮ちて、種種の滑稽を演ずる者。㊃〔動〕ばかがひ(馬鹿貝)の略。

馬鹿と鋏は使ひやう【句】切れぬ鋏にても、使ひやうによりては役に立つが如く、馬鹿にても、使ひやう次第にて役に立つものなり。〔諺語〕

馬鹿と餅には、強く當れ【句】愚者には、增長せしめぬために、きびしく扱ふを要し、餅は粘氣を强くするために、よく搗くを要す。〔諺語〕

馬鹿な面（ラツ）【句】相手の動作を嘲りていふ語。八笑人「馬鹿な面な。雨裝束に編笠をかぶるといふが、あるものか」

馬鹿にす【句】侮り輕んず。うつけにす。虛假（ケコ）にす。

馬鹿に附ける藥が無い【句】馬鹿者は、敎へ導く方法無し。〔諺語〕

馬鹿の一覺（ヒトツオボエ）【句】愚かなる者は、一を聞きて十を知るが如き、物事の大體に通ずること能はずして、一つ一つに念を入れて覺ゆるものなり。〔諺語〕

馬鹿をいふ【句】愚しき事をいふ。

馬鹿を盡す【句】遊蕩なる所行を爲し盡す。柳樽「日本橋馬鹿を盡したさしむかひ」

はか-あな 墓穴【名】死骸を葬るために地に掘りたる穴。墓穴（ボケツ）。今昔「墓穴の有るに、我にもあらず走り入りぬ」

は-かい 破戒【名】〔佛〕一旦受戒したる者の、戒法に違反すること。

破戒・無慙（ムザン）【句】佛の戒法に違反して、良心に恥ぢざること。宇治「破戒無慙の者にて、晝夜に、佛の物を取り使ふ」

は-がい 齒痒【形】次條の語幹。文武五人男「ええ、齒がいや、辛氣（シンキ）やと、頭を掻きてぞ留まりける」

は-がいい 齒痒い【形】はがゆし(齒痒し)の轉訛。女殺油地獄「ええ、はがいい。毆き出して吳れん」

はか-いき 果行【名】はかゆき(果行)に同じ。賀古教信七墓廻「初の程ははかいきと、心に祝ひ直せしが」

はか-いし 墓石【名】墓に据ゑてしるしとする石。石塔。墓石（ボセキ）。

は-かいしき 葉搔敷【名】㊀かいしき(搔敷)に同じ。㊁鶉を燒鳥にし、兩羽を切りひろげ、その上に、檜葉（ヒバ）を敷きて盛るもの。

ばか-いんぎん 馬鹿慇懃【名】ばかていねい(馬鹿丁寧)に同じ。雪女五枚羽子板「馬鹿慇懃の固侍（カクザムラヒ）」

ばか-いわし 馬鹿鰯【名】〔動〕㊀にしん(鯡)の異稱。㊁大さ四五寸ほどの小形の鯡。〔北海道の方言〕

は-かう 波高【名】波の高さ。

は-かう 跛行【名】跛（ハチン）を曳きて行くこと。

は-かう 爬行【名】はひゆくこと。

は-かう 巴港【名】〔地〕『半島、海水を包みて、巴字形をなせるによりていふ』渡島國函館港の別稱。

ば-かう 馬耕【名】馬を用ひて耕作すること。

ばかう-ぎよ 馬鮫魚【名】〔動〕さはら(鰆)の漢名。

はかう-ほんゐ-せい 跛行本位制【名】〔經〕『英 Limping standard』貨幣の本位制の一。金・銀二種の本位貨幣を認め、その内の銀貨のみに對し、金銀の市場比價より生ずるグレシャムの法則の作用を回避せんとすること。複本位制より金單本位制への過渡に際して、適切なる方法とせらる。

ばか-がひ 馬鹿貝【名】〔動〕瓣鰓類に屬する軟體動物。殼は、やや三角形をなし、質脆薄にして、長さ二寸五六分、高さ一寸七八分、表面は、淡黃褐色を呈し、殼頂より腹緣に向へる數條の濃褐色線を有し、足は狹くして長く、美しき帶黃紅色を呈す。專ら東海に產し、殊に東京灣に多く、肉よりも、肉柱を賞美す。かむりがひ。くつわがひ。ばか。

は-かがみ【名】〔植〕次條の略。

はかがみ-さう はかがみ草【名】〔植〕かめばさう(龜葉草)㊀に同じ。

は-がき 葉書・端書【名】㊀紙片などに書きつくる覺書。㊁いうびんはがき(郵便葉書)の略。

はーがき 羽書・端書【名】享保の頃より明治維新前まで、伊勢國山田にて、禰宜（ネギ）神主組合より發行して、通用せし紙幣。表に細密の繪あり、又、銀目をも書きたり。

はがきーだい 葉書代・端書代【名】葉書を買ふための金錢。

はーかく 破格【名】格をはづすこと。法式に合はぬこと。出格。例外。格外。

はーかく 齒缺く【句】は（齒）の條下を見よ。

ばーかく 馬革【名】馬のつくりがは。馬の皮。

馬革に屍（シカバネ）を裹（ツツ）む【句】『支那後漢の馬援の「方今、匈奴・烏桓、尙擾二北邊一。欲二自請擊一レ之。男兒要下當二死於邊野一、馬革裹レ尸還葬上耳。何能臥二床上一在二兒女手中一邪」といひし故事（後漢書）に本づく』戰に赴くに、生還を期せざる譬。

ばーかく 馬角【名】「馬、角を生ず」を見よ。

ばーがく 馬學【名】さうばがく（相馬學）に同じ。

ばかーくさし 馬鹿臭し【形二】ばからし（馬鹿らし）に同じ。

はーがくる 葉隱る【動下二自】木の葉の間に隱る。 爲忠百首「峰しめてはやす梢に葉がくれて空にも響く蟬の聲かな」 猿蓑（金峯）「葉がくれぬ花を牡丹の姿かな」

はーがくれ 葉隱【名】葉がくるること、又、葉がくれてある處。はかげ。 山家集「葉がくれに散りとどまれる花のみぞ忍びし人に逢ふ心地する」

ばかーぐれ 馬鹿呉【名】適度を超えて、みだりに物を與ふること。 甲陽軍鑑「ばかぐれと云ふものに、むざと知行くれたる故なれば」

ばかーくわはう 馬鹿果報【名】馬鹿者の、仕合せよきこと。

はーかけ 齒缺【名】下駄などの、齒の缺け損じてあること、又その下駄。はっかけ。

はーかげ 葉陰【名】葉のかげ。葉がくれ。 蕪村「蜉の軒も合歡（ネム）の葉蔭かな」

ばかーげ 馬鹿氣【貌】ばからしきさま。 誰が身の上「馬鹿氣なる町人、その子に、隱藝なりとて、兵法（ヒヤウホフ）を習はする處」

はかけーあしだ 齒缺足駄【名】齒の缺け損じたる足駄。 犬筑波「一二一二と文字ぞ見えける（といふ句に）雪ふりに齒かけ足駄をはきつれて」

ばかーげる 馬鹿氣る【動下一自】馬鹿らしく思ふ。つまらなく感ず。 和合人「あんまり馬鹿げきった事だ」

はーがさね 羽重【名】㊀鳥などの、一つの羽の上に、他の羽を重ぬること。㊁物を一端は、隣接の物の他端に蔽はれ、他の一端は、その隣接の物の端を蔽ふやうにして、順次に重ね並ぶること。

ばかーざむらひ 馬鹿侍【名】馬鹿なる侍。 阿波鳴門「主膳といふ馬鹿侍にたらされ、毎日、毎夜の廓がよひ」

ばかさーれ 化され【名】ばかさるること。 八笑人「化されの仕打、十分にやる」

ばかされーて 化され手【名】ばかさるる人。 和合人「そんなら、己（オレ）も、ばかされ手にならう」

ばかーさわぎ 馬鹿騷【名】小供の、遊に耽りて、又は大人の、酒興に乘じなどして、度はづれに騷ぐこと。そこぬけさわぎ。ばかっさわぎ。

はかし 佩刀【名】みはかし（御佩刀）を見よ。

はかーし 博士【名】はかせ（博士）に同じ。〔古語〕 榮花「御ふみのはかしには、藏人辨廣業、勾欄のもとに立ちて、史記の第一の卷をぞ讀む」

ばかし【助】ばかり（計）の轉訛。 膝栗毛「煩ってでもゐるだんべいと思ったばかしで、便（タヨリ）聞くべいにも、あてずっぽふなり」

ばかしーごと 魅事【名】迷はすためのわざ。 本朝三國誌「寄手迷はさんため、智略らしく甘えて見せるばかし事」

はがしーごよみ 剝曆【名】めくりごよみ（捲曆）に同じ。

はーがしは 葉槲・葉柏【名】〔植〕かしは（槲）㊀に同じ。 後拾遺「榊知る卯月になれば神山の楢の葉柏もとつ葉もなし」

はかーしま 波賀島・波鹿島・波嘉嶋【名】〔地〕隱岐國知夫（ブチ）郡知夫村に屬し、知夫里島の東南にある島。

ばかーしんじん 馬鹿信心【名】度はづれに信心すること、又その信心。 大織冠「世の人の馬鹿信心を散ぜん」

はがーじやう 芳賀城【名】下野國芳賀（ハガ）郡眞岡（マヲカ）町にありし城。文治年中、芳賀高親の築造に係り、初は五行川の東岸にありしを、天正五年、十郎高繼の時、眞岡に移ししなり。

ばかーしやうぢき 馬鹿正直【名】正直に過ぎて、機轉のきかぬこと。ばかりちぎ。

はかーしよ 墓所【名】はかば（墓場）に同じ。 盛衰記「親・祖父（オホヂ）が墓所」

墓所の土で洗ふ【句】屍に書きたる文字は、墓所の土にて洗へば、消え落つといふ迷信。 和合人「なんだ、買物を、手の平へ書きつけて行（イ）ったのか。智慧の無（ネ）え。……ひよっとその字が消えずば、墓所の土で洗ふがいいさうだぜ」

はかーじるし 墓標【名】俗名又は戒名を記して、墓の上に建ておく木又は石。 太平記「墓じるしを、他所へ移し候はん程」

はーかす 齒滓【名】はくそ（齒糞）に同じ。

はかす 佩かす【動四他】はく（佩く）の敬語。みはかし（御佩刀）參照。 記「はかせる大刀（タチ）」

はかす 魅す【動四他】『はく（魅く）を見よ』ばかす（魅す）に同じ。〔古語〕 玉葉「さりともと賴む心にはかされて死なれぬものは命なりけり」

はーかず 葉數【名】草木の葉のかず。 千載「君が代にくらべていはば松山の松の葉數は少なかりけり」

はーかず 羽數【名】鳥の羽ばたく數。 長秋「逢はでのみふしみの里に立つ鴫の羽數に落つるわが涙かな」

はがす 剝す【動四他】剝ぎ取る。へぐ。めくる。

はがす 放す【動四他】はなつ（放つ）に同じ。〔古語〕 萬葉「赤駒を山野にはがしとりがてて多摩の横山かしゆかやらむ」

ばかす 魅す【動四動】『はかす（魅す）の轉』人の心を迷はしぼけしむ。だます。つまむ。たぶらかす。はかす。

魅す魅すで魅される【句】「騙（マ）すで騙される」に同じ。〔諺語〕

ばーかず 場數・塲數【名】㊀場所の數、多くの場所。㊁場數を踏むこと。 甲陽軍鑑「武邊の强みなる場數は、輝虎といへども、結句信長と名を呼ぶ者、多し」

場數の人【句】場數を踏みたる人。

場數を踏む【句】ばなる（場馴る）に同じ。

ばかーすけ 馬鹿助【名】『人名に擬するため、助といふ語を添へたるもの』ばかもの（馬鹿者）に同じ。

はーがすみ 齒涇【名】はくそ（齒糞）に同じ。

はかせ 佩刀【名】みはかせ（御佩刀）を見よ。

はかせ【名】越前國邊の一種の船。七八百石積にて、その制、常の海船に異なり、川舟の如く平底を用ひ、船首も川舟の如く、臺・垣立（カキタツ）なく、取置の上はぎ板なく、又、櫓は表の方より立て、舵は轆轤舵を用ふ。うづら。はかせそ。はかひそ。

はかーせ 博士【名】㊀はくし（博士）㊀に同じ。 源氏「馬頭（ウマノカミ）、物さだめのはかせになりて」 ㊁支那にて、古、學藝を敎授し、兼ねて、諮問に備はりし職。秦代に始めて設置せり。 ㊂古、大學寮に於ける紀傳（後に文章（モンジヤウ）と改む）・明經（ミヤウギヤウ）・明法・算・音、陰陽（オンヤウ）寮に於ける陰陽・曆・天文・漏刻等の諸道につき、各その學業の敎授、學生の課試などを掌りし官。太宰府及び諸國にも置かれ、大學の紀傳・明經・明法・算に對しては、四道の名稱ありき。 ㊃みやうきやうはかせ（明經博士）又はもんじやうはかせ（文章博士）の略。 空穗「文人（モンニン）・はかせより始めて、進士（シ）より出でたる人二十人、擬生（ギサウ）も召したり」 ㊄明治の初年に、生徒の敎試、國史の修撰、洋書の飜譯、病院治療の事を掌りし奏任官。大・中・少の三等あり。二年七月設置、同年十二月、大學校の大學と改稱せらるるに及び、これに屬し、四年、大學の廢せられて、文部省の設けらるるに及び、勅任官（但し少博士は奏任）となり、五年廢止せられたり。 ㊅明治三年、宣敎使を改稱したるもの。大・中・少の三等に分れ、各等とも、更に正と權とに分れ、正・權の大・中博士は奏任官、正・權

の少博士は判任官たりしが、同五年、權中博士は判任官となり、同年、宣教使と共に廢せられたり。㊆ふしはかせ（節博士）の略。㊇手本。模範。兼好法師物見車「人の心、世の有様、蟲の泣く音に至るまで、その折折をはかせとして、隱遁の情をあらはせば」㊈はくし（博士）㊂に同じ。

は-かぜ 葉風【名】草木の葉を吹き鳴らす風。千載「秋立つと聞きつるからにわが宿の荻の葉風の吹きかはるかな」

は-かぜ 羽風【名】㊀鳥蟲などの飛ぶ時の羽ばたきより生ずる風。源氏「むら鳥の立ち迷ふ羽風、近う聞ゆ」㊁人の舞ふ時、その袖より生ずる風。〔古語〕新六「庭火たく烟もともに立ちぞまふかなづるきねが袖の羽風に」

はかせ-がう 博士號【名】**はくしがう**（博士號）に同じ。

はかせ-くわい 博士會【名】**はくしくわい**（博士會）に同じ。

はかせそ【名】はかせに同じ。

はかせ-みやらぶ 博士命婦【名】**ぢよし**（女史）㊂に同じ。

はかた 博多【名】㊀〔地〕『地形の、羽の形に似たるに因る名といふ』筑前國福岡市の東半部。那賀川を界とす。明治維新前は、その境界に郭門を設け、商業地として、福岡の城市なると區別したり。㊁**はかたおり**（博多織）の略。

博多の戰【句】元弘三年三月十三日、筑前國博多に於ける、菊池武時と北條英時（ヒデトキ）との戰。

はかた 伯太【名】〔地〕㊀和泉國泉北（センボク）郡にある村。渡邊氏の舊藩地。〔伯田〕㊁明治の初年設置の縣の一。四年、和泉國舊泊太藩の地に立てしもの。同年、堺縣に入り、十四年、遂に大阪府に入る。

は-がた 刃方【名】刀の鎬（シノギ）より刃先に至る間の部分。

は-がた 齒形【名】齒にて嚙みたる痕。小大君集「春宮（トウグウ）にて、なすびのゆゆしげなるに、齒形の附きたるを見て」

は-がた 羽形【名】矢羽（ヤバネ）の形。

はかた-おび 博多帶【名】博多織の帶。

はかた-おり 博多織【名】筑前國博多より產出する練織物。經には、細き片撚又は諸撚の絹絲を、密に配列し、緯には、やや太き片撚の絹絲を用ひ、強く打込みて、多くは平織にす。縞織・浮織あり。琥珀織に似て厚く、多くは帶地なれども、袴地に用ふるは、帶地のに比して、一般に地合薄く、經・緯の太さの割合も大ならず。もと唐土の人より傳習せりとて、博多唐織（カラオリ）ともいふ。はかた。**めんはかた**（綿博多）・**こくらおり**（小倉織）參照。

はかた-かう 博多港【名】〔地〕筑前國福岡市博多にある港。古來有名なる要津にして、今も特別輸出港なれど、灣內遠淺にして、大船は、沖に碇泊せざるべからず。

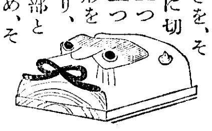
はかた-からおり 博多唐織【名】**はかたおり**（博多織）に同じ。

はかた-こぢよらう 博多小女郎【名】㊀筑前國博多柳町遊廓の女郎。一代男「筑前の柳町を見にまかりぬ。昔は、博多小女郎と申して、冠氣者（カブキモノ）ありける」若風俗「玉水主人（モンド）とて、美形に飛ぶ鳥落ちて、博多小女郎かと、見し人疑ふ程なり」㊁次條の略。

はかたこぢよらう-なみまくら 博多小女郎浪枕【名】近松門左衞門の作りし淨瑠璃。京都の商人小町屋惣七、肥前國博多なる馴染の娼婦の家にて、毛剃（ケゾリ）九右衞門以下の海賊の仲間に引入れられ、逮捕せられて、自殺する筋に作りしもの。

はかた-ごま 博多獨樂【名】緒を卷きつけて廻す獨樂。筑前國博多より起りしものといふ。

はかた-じし 博多獅子【名】昔、筑前國博多の近在にて造り、博多町に鬻ぎし、獅子頭の玩具。松の材の圓きを、そのまま、三寸ほどの長さに切り、更に、これを、縱に二つに割り、又、二つに割りたる片割を、又、二つに割り、上部に眼・鼻の形を刻み、額の所に毛皮を張り、下部を頷とし、上部と下部とを、細き繩絲にて結び止め、その結び目を耳の如くにして、蘇枋にて赤く塗りたるもの。上部の端を手に持ちて、上下に動せば、ぱくぱくと口を開く。


（はかたじし）

はかた-しぼり 博多絞【名】瑠璃色・紺地の眞岡木綿に一二寸或は三五寸の花形、その他、種種の紋樣を、白く絞染にせるもの。天保の末年に流行したり。

はかた-じま 博多縞【名】博多織の、縞あるもの。

はかた-にんぎやう 博多人形【名】筑前國博多より產出する、一種の土人形。精緻なる彩色を施せり。

はかた-ねりざけ 博多練酒【名】筑前國博多にて釀造せる練酒。有名なり。

はかた-ひやくゐん 博多百韻【名】〔文〕宗祇法師の、文明十二年に、筑前國博多の龍宮寺に寓して興行せし百韻の連歌。

はかた-ひら 博多平【名】袴地に織りたる博多織。

はかた-ぶし 博多節【名】筑前國博多より流行したる、一種の小唄節。

はかた-まつり 博多祭【名】筑前國博多なる櫛田神社（中殿は、櫛稻田姬、一說には、大若子神、右殿は、祇園牛頭天王、左殿は、天照皇太神宮を祀る）の祭禮。祭日は、古は、六月十六・十七の兩日なりしが、後、十五日となり、その日、三基の神輿と、六基の山車とを出し、山車の大さ、京都の祇園會のに四倍し、形は、上部に至るに從ひて張り擴がるやうに組み上げて、階上、凡そ百人を居らしむべく、一基を引く者、凡そ千人ほどにて、階上には、鎧を著せたる人形を立て、その甲冑には、皆、姓名を記ししが故に、昔は、領主の家臣、競爭して、美しき鎧を出す習慣なりきといふ。

は-がため 齒固【名】『齒（ヨハヒ）を固むる義なりといふ』古、正月の元日に供せし、猪（又は雉）・鹿（又は鳴）・押鮎（オシアユ）・煮鮎・大根・瓜等の食物。土佐「芋も、あらめも、齒がためもなし」源氏「齒がための祝して、もちひかがみさへ取寄せて」

はがため-もち 齒固餅【名】新年に食ふ雜煮餅。古の齒固の遺制なり。

はかた-ゆり 博多百合・天香【名】〔植〕てっぽうゆり（鐵砲百合）に同じ。

ばか-たらう 馬鹿太郎【名】『人名に擬するため、太郎といふ語を添へたるもの』**ばかもの**（馬鹿者）に同じ。

はかた-わん 博多灣【名】〔地〕筑前國福岡市の前面なる灣。海中道（ウミノナカミチ）と稱する一條の砂洲、前面を遮りて、志賀島に連なり、防波堤の用をなす。灣口約十二浬。一名、福岡灣。

はかち【名】西北より吹く風。〔江戸の語〕

はか-ち 墓地【名】**はかば**（墓場）に同じ。

はがち【名】〔動〕**むかで**（蜈蚣）を云ふ。〔常陸國・下總國の方言〕

ばか-ぢから 馬鹿力【名】度はづれの力。あはうぢから。くそぢから。

はがつ 放つ【動四他】はなつ。はがす。〔古語〕紀「廢㆓渠槽㆒、此云㆓祕波鵝都㆒」

ばか-っ-さわぎ 馬鹿騷【名】**ばかさわぎ**（馬鹿騷）の音便。

ばか-っ-つら 馬鹿面【名】**ばかづら**（馬鹿面）の音便。續膝栗毛「馬鹿っ面め、その袋に入れる物（モン）だあ、どれ、何處にある」

ばか-っ-ていねい 馬鹿丁寧【名】**ばかていねい**（馬鹿丁寧）の音便。

ばか-っ-ぱなし 馬鹿話【名】**ばかばなし**（馬鹿話）の音便。

ばか-づら 馬鹿面【名】おろかなる顏つき。あはうづら。ばかっつら。

は-がつを 齒鰹【名】〔動〕『兩顎と口蓋骨とに、一列の齒ありて、強く圓錐狀をなせるによりていふ』**すぢがつを**（條鰹）に同じ。

ばか-ていねい 馬鹿丁寧【名】度はづれに丁寧なるを嘲りていふ語。ばかいんぎん。ばかっていねい。

はか-どころ 墓所【名】**はかば**（墓場）に同じ。更科「この乳母（メノト）、墓どころ見て、泣く泣く歸り去りし」盛衰記「勳功の時、河原太郎と藤田行安が子どもに、生田（イクタ）の庄を賜ふ。その墓所のためなり」

はか-どり 果取・捗【名】はかどること。はかのゆくこと。進度。

ばか-どり 馬鹿鳥【名】〔動〕**あはうどり**（阿呆鳥）に同じ。

はか-どる 果取る・捗る【動四自】事、滯なく進む。仕事、仕上(シアゲ)に近づく。はかゆく。進捗す。一代男「この人も、望の奉公はかどらず」假名手本忠臣藏「女の文(フミ)の跡や先、まゐらせ候で、はかどらず」

はか-な 果無・儚【貌】『はかなし(果無し)の語幹』はかなきさま。蜻蛉「斯くはかなながら、年立ちかへるあしたにはなりにけり」太平記「我ながら、はかなの心まよひやな」

ばか-ながし 馬鹿長し【形一】度はづれに長し。八笑人「あんまりたわいの無(ネ)え事を、馬鹿長くひっぱったぞ」

はかな-ごと 果無事・儚事【名】はかなしごと(果無事)に同じ。空穗「かかる身をもちて、なぞ、このはかな事は」

はか-なし 果無し・儚し【形一】たしかならず。賴みにならず。もろくかりそめなり。ちよっとしたる事なり。取りとめたる事なし。(果果(ハカバカ)しに對して) 古今「行く水に數書くよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり」源氏「月、いとあかうさし入りて、はかなき旅のおまし所は、奥まで隈なし」

果無くなる【句】世を去る。死ぬ。いたづらになる。空しくなる。

はかなし-ごと 果無事・儚事【名】はかなごと。はかなき事件又は事實。源氏「すこし打解けて、はかなし事なども言ふ」同「はかなし事と知りながら、いたづらに心動き」

はかな-だつ 果無立つ・儚立つ【動四自】はかなきさまに見ゆ。弱弱しく見ゆ。はかなぶ。源氏「手は、はかなだちて、よろぼはしけれど」

はかな-ぶ 果無ぶ・儚ぶ【動上二自】前條に同じ。源氏「はかなびたるこそ、女はらうたけれ」

はかなむ 果無む・儚む【動四他】はかなく思ふ。古今「寢ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな」

はかな-もの 果無者・儚者【名】はかなき者。弱き人。源氏「惡靈(アクリヤウ)はしふねきやうなれど、業障(ゴツシヤウ)にまつはれたるはかなものなり」

は-がに 齒蟹【名】〔動〕『眼の兩脇に二三の鋸齒狀突起あるによりていふ』つがに(蟛蟹)を云ふ。〔越前國の方言〕

ばか-に 馬鹿に【副】馬鹿馬鹿しく。ひどく。度はづれに。非常に。無法に。法外に。「馬鹿に强い」「馬鹿に面白し」

ばか-にしゆ 馬鹿二朱【名】ぐわいこくぎんくわざうゐいちぶぎん(外國銀貨同位一分銀)の俗稱。

ばか-にんぎやう 馬鹿人形【名】馬鹿者を、人形に譬へていふ語。春花五大力「身どもは、奥へ參り、あの馬鹿人形を、そろそろと遣ひかけませう」

ばか-ぬり 馬鹿塗【名】つがるぬり(津輕塗)「に同じ。

は-がね 鋼・鋼鐵【名】『刃金の義』㊀鑄鐵を融解して高壓を加へ、空氣を吹き入れ、炭素の幾分を酸化せしめて製したる鐵。灰白色にして彈力あり、熱して任意の硬度を得。諸種の刃物その他用途廣し。からてつ。㊁力のすぐれたる點。うでまへ。盛衰記「打込の軍は、剛臆見えず、いかにも追手(オツテ)にてはがね顯さんと思ひて」

は-がね 羽金【名】『英Puddle-wall』漏水を防ぐため、堤防の内身、運河又は貯水池の周圍に使用すべき隔壁。多くは粘土を用ひて作る。

ばか-ね 馬鹿値【名】法外なる高價又は「廉價。

はがね-づくり 鋼造・鋼鐵造【名】㊀鋼鐵にて造ること、又その造りたる物。㊁身體の、きはめて强健なること、又その人。

ばか-ねん 馬鹿念【名】念を入れすぎて、何の効もなきこと。生寫朝顏話「やあ、いらざる、うぬが馬鹿念」

ばか-の-き 馬鹿木【名】〔植〕あわぶき(泡吹)に同じ。

はか-の-ちち はかの乳【名】〔植〕のうるし「(野漆)に同じ。

ばか-のり 馬鹿海苔【名】寒(カン)を過ぎて、二三月の頃に採取する、品質劣れる海苔。あきのり(秋海苔)參照。

はか-ば 墓場・墓塲【名】墓のある所。はかしよ。はかどころ。つかはら。はかはら。はかち。むしよ。宅兆。墓地(ボチ)。

墓場の酒盛(サカモリ)【句】肥前國長崎の奇習。每年盂蘭盆會(ウラボンヱ)の際、十三日に、棚經等の事あり、十四・十五の兩日、夕刻より、男女盛粧して、菩提寺に至り、各家墓前の燈籠に點火し、そこにて、携へ來りたる辨當を開きて、酒宴を催すこと。

は-がは 葉川【名】みぶ(壬生)㊁を見よ。

ばが-ば 婆伽婆【名】〔佛〕ばぎやば(婆伽婆)に同じ。

はか-ばかし 果果し【形二】しかとしてあり。はきはきとしてあり。賴もし。ものものし。(果(ハカ)無しに對して) 枕「木どもなど、はかばかしからぬ中に、柳といひて、例のやうになまめかしくはあらで」源氏「さしもはかばかしくしたたかなる御うしろみは」

ばか-ばかし 馬鹿馬鹿し【形二】㊀ばかげてあり。ばからし。甚だつまらぬさまなり。㊁度はづれなり。法外なり。甚し。ひどし。

ばか-ばなし 馬鹿話【名】馬鹿げたる、とりとめなき話。ばかっぱなし。

はか-ばん 墓番【名】次條に同じ。

はか-ばんにん 墓番人【名】墓所の番人。はかばん。はかもり。

ばか-ばやし 馬鹿囃【名】『馬鹿踊に用ふること多きよりいふ』をかざきびやうし(岡崎拍子)の俗稱。

はか-はら 墓原【名】㊀はかば(墓場)に同じ。芭蕉「秋の風伊勢の墓原なほすごし」續猿蓑(支梁)「墓原や稻妻やどる桶の水」㊁『一夜の情代三枚の、三昧と同音なるよりいふ』わかしゆ(若衆)の異稱。若風俗「若衆を墓原といへるは、一夜の情代(ナサケダイ)三枚あげし替言葉なり」

は-がひ 齒貝【名】〔動〕たからがひ(寶貝)「に同じ。

は-がひ 葉交【名】多くの葉のまじはり繁ること。〔古語〕題季集「葉がひせし薦もまばらに枯れ果てて莖のわたりぞさびしかりける」

は-がひ 羽交【名】㊀鳥の兩翼を打ちちがへたる所。萬葉「葦邊ゆく鴨の羽がひに霜降りて寒き夕べは大和し思ほゆ」㊁はね。つばさ。嫗山姥「のっさのっさと、はがひ延(ノ)したる夕鴉」

羽交の下(シタ)【句】他の保護を受けてある譬。百合若大臣野守鏡「羽がひの下の温鳥(ヌクメドリ)、恩愛こそは哀なれ」

はがひ-うちは 羽交團扇【名】〔植〕ききやう(鬼臼)の異名なりといふ。

はがひ-がさね 羽交重【名】『鳥の兩翼を打ちちがへたるがごとく重なる義』彼方・此方より集り重なること。雪女五枚羽子板「親もまめ鳥・雛鳥の羽交重に、寶は集る」

はがひ-じめ 羽交締【名】兩手を、相手の腋の下より通し、襟首の所にて組み合はせて、相手の動かれぬやうにすること。曾我會稽山「羽がひ締に引っ縛り」艶容女舞衣「肌押脫がせば、半兵衛が、小手(コテ)を緩めし羽翼締(ハガヒジメ)」

はかひそ【名】はかせに同じ。

ばか-びたき 馬鹿鶲【名】〔動〕上鶲(ジヤウビタキ)又は黃鶲(キビタキ)の雌。

はがひ-ぼね 羽交骨【名】鳥の羽の一部。

はがひ-やま 羽易山・羽買山【名】〔地〕大和國春日(カスガ)山の三峯中の一つの名とも、春日・若草・高圓(タカマド)の三山の總稱ともいふ。ひきてやま(引手山)參照。萬葉「大鳥の羽易の山に吾が戀ふる妹は坐(イマ)すと」

は-かふ 巴峽【名】〔地〕はけふ(巴峽)を見「よ。

はし-かぶ 端株【名】㊀はしたなる株券。數のまとまりてあらぬ株券。㊁〔商〕株式取引所にて賣買・取引する株式の中の、重要ならぬもの。

は-がふ 葉替ふ【動下二自】葉生ひかはる。新六「千早ぶるみむろの山のかえの木の葉がへぬ色は君がためかも」

はかふ-じつだん 破甲實彈【名】〔兵〕破甲彈の一。炸藥の塡實せざるもの。

はか-ぶしん 墓普請【名】墓を築き上ぐること。西遊記「二三十年が程は、常常石工(イシヤ)を雇ひ、墓普請せしとぞ」

東海の墓普請【句】『昔、長崎に、支那より明の亂を避け來り、姓を東海と稱し、子孫、通事を職とせし富裕の家ありて、春德寺の山上に、二三十年を費して、廣大美麗なる墓を築き上げしに本づく由、橘南谿の西遊記に見ゆ』手間のみかかりて、埒の明かぬことの譬。〔肥前國長崎の方言〕

はかふ-だん 破甲彈【名】〔兵〕軍艦の裝甲部・砲塔又は築城の砲塔・鐵壁等を射擊するに用ふる彈丸。侵徹を主効力とし、製法によりて、堅鐵彈と鋼鐵彈とに分ち、炸藥を塡實すると然らざるとによりて、破甲榴彈と破甲實彈とに分つ。

はかふ-りうだん 破甲榴彈【名】〔兵〕破甲彈の一。炸藥を塡實するもの。

はか-べ 墓戶【名】古、朝廷にて、功臣の墓を守護せしむるために置きたる戶。守戶。**りようこ**（陵戶）參照。

は-がへ 葉替【名】はがふること。草木の葉の、枯れて、生ひかはること。夫木「葉がへして蘆もまばらになりはててくきの渡りは淋しかりけり」

は-がへ 羽替【名】鳥の羽の拔けかはること。夫木「雪降ればみ山烏の羽がへして槇の梢に鷺ぞ群れゐる」

は-がへし 羽返【名】**はがやし**（羽返）に同じ。

ばがぼん 婆伽梵・薄伽梵【名】〔佛〕**ばぎやぼん**（婆伽梵）に同じ。

ばがぼん-か 婆伽梵歌・薄伽梵歌【名】**ばぎやぼんか**（婆伽梵歌）に同じ。

はか-ま 袴【名】『穿裳（ハキモ）の轉ならんといふ』㊀上古、脚部より腰の邊までに纏ひし短き衣、卽ち今の猿股（サルマタ）の如くなりしもの。したばかま。はだばかま。〔褌〕「肌の帶」參照。㊁上衣の腰部に結び、腰より兩脚へかけて被ふやうに作りたる、寬き衣。多くは兩脚に當る所、二つに分る。表袴（ウヘノバカマ）・大口袴・小口袴・指貫（サシヌキ）・狩袴・長袴・小袴・半袴・野袴・馬乘袴・平（ヒラ）袴・襠高（マチダカ）袴・行燈（アンドン）袴など、種類多く、羽織と共に、禮服の一部として用ひらる。いんぎんぶくろ。きゆうくつぶくろ。和名「袴、八賀萬」㊂植物の莖をまとひ被ふ皮。苞。犬筑波「春の野に慇懃講の始りて（といふ句に）まづ土筆（ツクヅクシ）袴をぞ著る」㊃酒德利を据ゑ置くに用ふる、方形又は圓形・多角形の、小き匣形の臺。

袴の腰【句】**はかまごし**（袴腰）に同じ。辨乳母集「袴の腰に書かせたまへる」

袴の箱【句】**はかま**（袴）㊃に同じ。

袴・羽織【句】袴を穿き、羽織を著たるいでたち。羽織・袴。和合人「おいらは、袴・羽織としよう」

袴を奉る【句】『他動詞の**たてまつる**（奉る）を見よ』袴著（ハカマギ）の式を行ひたまふ。榮花「姬宮は、入道殿の御服にて、一とせは、御袴も奉らざりしかば、五つにて奉る」

下（シタ）の袴【名】**はかま**（袴）㊀に同じ。〔褌〕字鏡「褌、志太乃波加萬」

は-がま 齒釜・羽釜【名】**かま**（釜）㊀を云ふ。〔畿內・西國・四國の方言〕一代男「小者の一人も見えず、ちんからりに、羽釜一つのたのしみ」栗毛乳「羽釜の中（チウ）のかい餅を、まはし木持って突いてぢや」

はか-まうで 墓詣【名】**はかまゐり**（墓參）に同じ。

はかま-かづら 袴葛【名】〔植〕荳（マメ）科に屬する灌木。莖は蔓狀をなし、卷鬚によりて、他物に攀緣す。葉は心臟形にして、七箇乃至十一箇の肋あり、早落性の托葉を具ふ。小形・綠色にて、長き總狀花序の花を開く。我國、暖地に自生す。わんじゆ。

はかま-ぎ 袴著【名】男兒又は貴族の女兒の、初めて袴を著くる儀式。古は、多くは三歲、後世は五歲又は七歲に行ひ、當日、親戚中の尊貴にして宿望ある者など、招かれて、袴の腰結（コシユヒ）を爲すこと、元服の加冠に於けるが如くし、これを袴著の親といふ。ちやくこ。**もぎ**（裳著）參照。源氏「このみこ三つになりたまふ年、御袴著の事、一の宮に奉りしに劣らず」

袴著の祝【句】前條に同じ。

袴著の親【句】**はかまぎ**（袴著）を見よ。

はかま-き-ず 袴不著【名】〔文〕俳句にて、中の七文字の、用をなさぬこと。

はかま-ごし 袴腰【名】㊀袴の後方・上端の、腰に當る部分。前方のを前腰（マヘゴシ）、後方のを後腰（ウシロゴシ）といひ、男子用のには、後腰の上に、低き梯形（テイケイ）の厚紙又は薄き板を入れたる部分を取附けて仕立つ。膝栗毛「袴腰、橫っちよに曲げて走り」㊁〔建〕**ていけい**（梯形）に同じ。㊂梯形に築きたる土手。㊃茶席の出入口の、上部を袴の腰のごとき形にしたるもの。㊄額の剃り方の一種。色道大鑑「額の取りやう、丸きに若くはなし。……瓦燈がた・袴腰、わろし」

はかまごし-ばり 袴腰梁【名】〔建〕小屋梁と棟との間に在る梁。にぢゆうばり。

はかまごし-やね 袴腰屋根【名】〔建〕上の方は平坦、腰の部分に勾配の附きたる屋根。

はかま-だふし 袴倒【名】袴を著けたる體面をけがすこと。三代男「小比丘尼（コビクニ）の鼻たれ尼、袴だふしの帷子（カタビラ）」

はかま-ぢ 袴地【名】袴を仕立つる料として使用すべき織物。

はか-まつり 墓祭【名】墓に香花（カウゲ）をささげて祭ること。

はかま-のう 袴能【名】仕手（シテ）・脇、その他すべての登場者が、面と裝束とを略し、紋服と袴とを著用せるのみの姿にて演ずる能。所定の裝束調はざる時、或は暑中にて、それを著用しがたき時などに行ふ。

ばか-まひ 馬鹿舞【名】**ばかをどり**（馬鹿踊）㊁に同じ。

はかま-むかばき 袴行縢【名】神事の時の犬追物（イヌオフモノ）・笠懸・流鏑馬（ヤブサメ）などに著用する行縢（ムカバキ）。常の行縢の裾の白毛のかどを筋かひに切りてはく。

はか-まゐり 墓參【名】墓所に詣づること。はかまうで。ぼさん。展墓。

は-がみ 齒嚙【名】『「齒を嚙む」を見よ』**はぎしり**（齒軋）に同じ。空穗「いとようたばかりつべかりけるものをと、齒がみをなして出でぬ」太平記「目をいららげ、齒嚙をして、四方を下知せられけるにこそ」

はか-みち 墓道【名】墓所へ通ずる道。はかばみち。

は-がむ 齒嚙む【動四自】㊀齒を嚙み合はせて、笑をこらへ、聲を出さずしてほほゑむ。㊁**はにかむ**に同じ。〔東國の方言〕

は-かん 波閒【名】波のあひだ。なみま。

は-がん 破顏【名】顏色をやはらげて、すこし笑ふこと。微笑。

ば-かん 馬監【名】廐の役人。うまやくにん。

ば-かん 馬肝【名】馬のきも。

ば-かん 馬銜【名】馬のくつわ。馬勒。

ば-かん 馬韓【名】〔地〕古の三韓の一。五十餘の部落より成り、今の全羅・忠淸の二道及び京畿道の一部を占めしもの。百濟の起るに及びて、亡さる。

は-かんざう 葉甘草【名】〔植〕**あまちやづる**（甘茶蔓）に同じ。

ばか-もの 馬鹿者【名】馬鹿なる人。おろかもの。うつけもの。ばかすけ。愚人。痴者。馬鹿太郎。太平記「いかなる推參の馬鹿者にてかありけん」

はか-もり 墓守【名】**はかばん**（墓番）に同じ。曾我扇八景「墓守の施も人に劣れば、おのづから苔に埋もれ、塵積」

はかもり-ほふし 墓守法師【名】法體の墓守。

はか-や 墓屋【名】墓守の住む家。つかや。今昔「嵯峨野に、大なる墓屋有り、その墓屋に、我、年來住みて」

はが-やいち 芳賀矢一【名】〔人〕文學博士。越前國福井藩士眞咲の長子。明治二十五年文科大學を卒業し、第一高等學校・高等師範學校、尋いで文科大學教授となる。三十三年獨逸へ留學し、歸朝後、國語學・國文學講座を擔任し、側ら國定敎科書編纂を命ぜらる。大正四年帝國學士院會員となり、五年歐米へ出張、七年國學院大學長となり、十年東宮職御用掛仰せ付けられ、同十一年從三位に進み、東京帝國大學名譽敎授となる。昭和二年病革るや勳一等に敍せられて薨ず。年六十一。名望高く、著書また多し。

は-がやし 羽返【名】羽を返すこと。はがへし。蛾歌加留多「さすが馴れたる曲鳥（キヨクテ

ウ)の、宙にて羽がやし二つ三つ、くるりくるりと打返し」

ばか-やらう 馬鹿野郎【名】他人を罵りていふ語。

はか-ゆ 謀ゆ【句】はかる(計る)の條下を見よ。

はか-ゆき 果行【名】『「果(カ)が行く」を見よ』はかどること。はかいき。醍醐笑「今の馬は、我がにしたいぞ。……、あれに乗り、さっさと駈け廻りて、はかゆきに鉢が開きたい」

は-がゆし 齒痒し【形一】他人の爲す所を、傍より見、物足らず感じて、いら立ちたり。もどかし。じれったし。浮世風呂「傍(ハタ)で齒痒い樣だよ」

はから-ざるに 圖らざるに【句】はかる(計る)の條下を見よ。

ばか-らし 馬鹿らし【形二】**一**馬鹿なるさまにてあり。**二**馬鹿げてあり。つまらぬさまなり。無益なるさまなり。あはうらし。ばかばかし。

はから-ず 圖らず【副】思ひもよらず。思ひがけなく。はからざるに。ふと。不意に。馬内侍集「日ぐらしに待ちこころみん梓弓はからず人の思ひ出でよと」

はから-ひ 計ひ【名】はからふこと。始末。處置。太平記「左兵衞督の計として」

はからひ-かた 計方【名】**一**前條に同じ。**二**おはからひかた(御計方)を見よ。

はからひ-の-しゅう 計衆【名】おはからひのしゅう(御計衆)を見よ。

はから-ふ 計らふ【動四他】『はかる(計る)の延』**一**考へ定む。思ひはかる。思量す。分別す。**二**取りきめ行ふ。始末す。處置す。處分す。さばく。とりはからふ。**三**手加減をなす。斟酌す。醍醐笑「武家の臺所に、飯をはからひ盛り、人にすすむる役者を、おごとはいふならし」**四**問ひはかる。相談す。商議す。

はがら-もの 端柄物【名】〔建〕板・小割又は貫(キヌ)類の總稱。やまひきもの。

はかり 計【名】**一**尺度・枡・秤などにてはかること、又、はかりたる數量。〔量〕**二**あてど。めあて。はか。伊勢「門に出でて、と見、かう見、見けれど、何處をはかりとも覺えざりければ」義經記「風をはかりに行く程に、曉方に、そことも知らぬ所に、御船を馳せ上げて、」**三**かぎり。きり。際限。源氏「今しも心ぐるしき御心添ひて、はかりもなくかしづききこえたまふ」

はかり 秤・稱・權・衡【名】『前條の語の轉義』物の重さを量るに用ふる器械。桿秤(サヲバカリ)・天秤(テンビン)・臺秤(ダイバカリ)などあり。かう。かうき。

秤の石【句】秤の錘(オモシ)に用ふる石。おもし。夫木「かけ稻のはかりの石は重くとも、ことしは民の憂あらじな」

秤の重(オモシ)【句】桿秤(サヲバカリ)にて重さを量るに用ふるおもり。分銅(フンドウ)。和名「錘、波加利乃於毛之」

秤のふぐり【句】前條に同じ。〔古語〕字鏡「錘、斤乃不久利」

はかり 蹤血【名】血の附きたる跡。血(チ)の跡。〔獵の時の語〕人麿集「とめゆかんつぶさに跡は見えずとも鹿のはかりは知るといふなり」

ばかり 計【助】のみ**一**に同じ。

ばかり 許・斗【接尾】數量・時間などを大よそに定めていふ意。ほど。ぐらゐ。ごろ。ばかし。ばっかし。ばっかり。伊勢「ひえの山を二十(ハタチ)ばかり重ね上げたらん心地して」竹取「五百日といふ辰の時ばかり」著聞「末代に、貴殿ばかりの歌よみはあるまじきなり」

はかり-うり 計賣・量賣【名】秤目(ハカリメ)又は枡目の多少を標準として、價を定めて賣ること。

はかり-かうずゐ 計香水・量香水【名】瓶詰にせず、計賣(ハカリウリ)にする香水。

はかり-ぎんみ 計吟味・量吟味【名】枡目の多少又は正否を吟味すること。一代男「小米屋に行きて、量吟味するも」

はかり-きり 計切・量切【名】枡にて正しく量りたる外に、少しも加へぬこと。

はかり-ぐさ はかり草・秦艽【名】〔植〕れいじんさう(牛扁)に同じ。和名「秦芃、波可利久散」

はかり-くぢら 計鯨・量鯨【名】計賣(ハカリウリ)にする鯨の切身。浮世親仁形氣「身どもが口には、はかり鯨ほどには存ぜぬ」

はかり-ぐわゐ 量慈姑【名】〔植〕あぎなしに同じ。

はかり-ごつ 謀つ【動四他】『次條の語の語尾を活用せしめたるもの。のりごつ(宣言つ)・ひとりごつ(獨言つ)・まつりごつ(政つ)などと同類の語』**一**謀(ハカリゴト)をめぐらす。はかる。〔古語〕**二**たばかる。たぶらかす。欺く。〔古語〕源氏「人をはかりごちて、西の海の果まで取りもてまかりにしかば」

はかり-ごと 謀・籌・策【名】『計事の義』**一**はかり構へたる方法。もくろみ。たばかりごと。工夫。計畫。計略。計策。籌策。謀計。謀略。**二**欺くこと。たばかり。だまかし。

謀は、密なるを貴ぶ【句】『「事は密を以て成る」を見よ』謀は、洩れやすきものなれば、祕密にすべし。〔諺語〕

謀、婦人に及ぶ【句】『左傳の桓公十六年の條に「桓公曰、謀及二婦人一、宜其死也」とあるに本づく』男子は、自ら事を爲すべきに、これを婦人に謀るは、漏洩の患あり。〔諺語〕

謀を以て、謀を討つ【句】わが謀によりて、敵の謀を打破る。國姓爺後日合戰「柯を伐り、柯を伐る、その法遠からず、謀を以て、謀を打つ軍法の一なり」

はかり-こむ 計込む・量込む【動四他】枡にて量りて枡目以上の量を入る。

はかり-ざ 秤座【名】德川時代に、江戸及び京都に置かれ、全國を東西各三十三箇國づつに分割して、權・衡の製造・頒布及びその檢定を掌りし所。江戸のは、守隨(シズキ)氏、京都のは、神(ジン)氏掌りたり。

はかり-ざら 秤皿【名】量るべき品物を盛るために、秤竿の一端に、絲にてつるし懸くる、淺き皿のごとき物。天秤盤。

はかり-ざを 秤竿【名】桿秤(サヲバカリ)の一部。細長き竿に、貫・匁・分・厘等の目盛(メモリ)を施したるもの。下紐(サゲヒモ)ありて、その一方に、秤皿を懸け、他の一方に、權(オモリ)を懸けて用ふ。さを。

はかり-し 秤師【名】秤の製造を業とする人。

はかり-しほ 計鹽・量鹽【名】計賣(ハカリウリ)の鹽。二代男「借家の者にしたらば、計鹽賣るべき小男」織留「男は、毎日、京に行きて、計量を商賣し、やうやう今日を暮し」

はかり-だか 秤高【名】はかりめ(秤目)に同じ。

はかり-たて 計立・量立【名】租米を量るに、枡に入れたるままにて、斗搔(トカキ)にて落さざること。(出目(デメ)・本石(ホンコク)に對して)

ばか-りちぎ 馬鹿律義【名】ばかしやうぢき(馬鹿正直)に同じ。艶狩劍本地「ええ、馬鹿律義な。仕替へる分別、こっちに無い」

はかり-っ-きり 計切・量切【名】はかりきり(計切)の音便。

はかり-なし 計無し・量無し【形一】計りきれず。甚だ多し。無量なり。鵜鷺合戰「夜討などの事は、しすましつれば、計なき利なり」

量無き命(イノチ)【句】〔佛〕むりやうじゅ(無量壽)に同じ。謠曲(東方朔)「西王母と聞えしは、西方極樂無量壽佛の化現(ケゲ)なれば、はかりなき命の仙人となるぞめでたき」

量無き命(イノチ)の佛【句】〔佛〕『むりやうじゅぶつ(無量壽佛)の直譯』あみだにょらい(阿彌陀如來)に同じ。謠曲(柏崎)「樂(タノシミ)を極め、はかりなき命の佛なるべしや」

はかり-の-め【名】〔植〕あづきなし(小豆梨)に同じ。

ばかり-ばかり【貌】しまりの無きさま。ぼかりぼかり。浮世風呂「ばかりばかり、むだ口をたたいて居ります」

はかり-べり 計減・量減・量耗・斗耗【名】初め餘分に量り込みたるため、終に至りて、量に不足を生ずること。ますべり。

はかり-むし 計蟲【名】〔動〕しやくとりむし(尺取蟲)に同じ。

はかり-め 秤目【名】**一**秤竿の上にある貫・匁・分・厘等の目盛(メモリ)。一代男「商賣の

道を知らではと、春日の里に秤目しるよしして、三條通の問丸（トヒマル）に著きて」新永代藏「九つ・十の時分に秤目を覺え、絹木綿の尺を知り」 **二**秤にてはかりたる高。はかりだか。めかた。量目。二代男「秤目賢く、廢る塵塚までも、錢箔に拵へ」

はかり‐や 秤屋 **【名】** 秤を造り、又は賣る家、又その人。

はかる 計る **【動四他】**『**はか**（果）に語尾の添ひたる語』 **一**物事の程を知らんと試む。重さ・長さ・分量・價などの多少を知らんと試む。計算す。「權る・衡る・稱る・度る・量る・料る・測る・圖る」 **二**斯くあるべしと、おほよそに思ひ定む。「量る・測る・料る」 **三**方法・方針を思ひ定む。おもんぱかる。たくむ。分別す。工夫す。「謀る・圖る」 **四**他の人人と語りあひて定む。相談す。協議す。「議る・詢る」 **五**あざむく。だます。たぶらかす。たばかる。

謀ゆ **【句】** 謀るの受動形「謀らる」の轉なる「謀らゆ」の略。「古語」 記「たしたしにゐ寢てむ後は人はかゆともうるはしとさねしさねてば」

計らざるに **【句】** **はからず**（圖らず）に同じ。宇治「梵天・諸天來りて守りたまひければ、はからざるに寶出で來て」增鏡「道のほとりにも、計らざるに、辱く鳳輦を先だてて、御旗をあげられ」

はかる 別る **【動下二自】** **わかる**（別る）に同じ。「東國の古の方言」 萬葉「道のべのうまらの末（ウレ）にはほ豆のからまる君をはかれか行かむ」

はがる 剝る **【動下二自】** **はぐ**（剝ぐ）**一**に同じ。

ばか‐わらひ 馬鹿笑 **【名】** 馬鹿げたるさまに笑ふこと。らちもなく笑ふこと。

ばか‐をとこ 馬鹿男 **【名】** 馬鹿なる男。若風俗「吉彌（キチヤ）は、かの馬鹿男にしなだれ寄りて」

ばか‐をどり 馬鹿踊 **【名】** **一**しまりなく踊りはぬること。 **二**祭禮の時などに、馬鹿囃に伴なひてする、滑稽なる假面踊（メンヲドリ）。ばかまひ。 五人女「今日・明日ばかりと、名殘に聲を嗄（カ）らしぬる馬鹿踊」

はき 嘔 **【名】** はくこと。嘔吐（トウ）。

はき 掃 **【名】** はくこと。掃除。

はき 疏通 **【名】**『前條の語の轉義』 **はけ**（疏通）に同じ。「水のはきが惡い」

は‐き 霸氣・覇氣 **【名】** **一**一方に覇たらんとする心。他に拔け出でてこれを制せんとする氣象。かちき。 **二**やまぎ。野心。野望。

は‐き 破毀 **【名】** **一**やぶりこぼつこと。やぶれこはるること。破壞。 **二**「法」上告裁判所が、上告を理由ありとして、原裁判所の判決又はその訴訟手續の效力を消失せしむること。無訴權のため、又は裁判の管轄違たるため等の外は、更に適當の裁判をなさしむるため、その事件を、もとの控訴裁判所に差戾し、又は、これと同等なる裁判所に移送すべきものとす。 **はいき**（廢棄）**二**・**とりけし**（取消）**二**參照。

は‐き 破棄 **【名】** やぶりすつること。

はき **【貌】** **はっきり**に同じ。

はぎ 脛 **【名】** 足の、膝より下、踝（クルブシ）より上の部分。すね。むかふずね。

脛に上ぐ **【句】** **一**衣を、脛の上までかかぐ。著衣の裾をまくり上ぐ。「腕（デウ）を捲（マク）る」參照。土佐「ほやのつまのいずし・すしあはびをぞ、心にもあらぬ脛に上げて見せける」 落窪「括（クク）りを脛に上げて來つるが、倒れて、土つきにたり」 **二**かくなりと顯し示すを、衣を脛の上までかかぐるに譬へていふ語。古今「いつしかとまたぐ心を脛に上げて天の川原を今日や渡らん」

脛をかき上ぐ **【句】** 前條に同じ。著聞「老僧、……一人、脛をかき上げて、海のおもてをさし歩みて」

はぎ 伯母 **【名】** **をば**（伯母）を云ふ。「日向國の方言」

はぎ 剝 **【名】** **おひはぎ**（追剝）**二**に同じ。 御所櫻「愛は、名代の姥（バウ）が懷（フトコロ）。狐・狸の業でもあるまい。はぎめらにきはまった」

はぎ 接 **【名】** はぐこと、又、はぎたる部分。

はぎ 萩 **【名】** **一**「植」『萩の字は、支那にては、他の一種の草の名なるを、秋の草の義に取りて用ふ』 荳（マメ）科に屬する多年生の草。莖は叢生して、高さ四五尺に達し、下部は木質を成し、末は垂れて地を蔽ひ、年を經たるは、頗る粗大にして、灌木樣をなす。葉は三小葉より成る羽狀複葉にして、各小葉は楕圓形・全緣、秋季、葉腋と梢頭とに、紅紫色・淡紫色又は白色の蝶形花、總狀花序をなして開く。各地の山野に自生し、又、觀賞用として栽培す。あきしりぐさ。あきちぐさ。あきはぎ。かのつまぐさ。こそめぐさ。こはぎ。しかなくぐさ。しかのしがらみ。たまみぐさ。つきみぐさ。にはみぐさ。はぎくさ。もろみぐさ。やまはぎ。ろくめいさう。をとこぐさ。「胡枝子」 **二**襲（カサネ）の色目の一。表は蘇芳、裏は青。一說に、裏は萌黃とも薄色ともいひ、又、一說に、表は青、裏は濃き萌黃ともいふ。秋用ふ。はぎがさね。榮花「朽葉・女郎花・桔梗・荻などの織物」 **三**紋所の一。草の萩に象りたるもの。抱（ダキ）萩・束（タバネ）萩・萩の丸などの種類あり。 **四**「地」長門國阿武（アブ）郡にある町。北は日本海に臨み、他の三面は、山地に接す。毛利氏の舊藩地。

萩が花妻 **【句】**『**はなづま**（花妻）**二**を見よ』 萩は、鹿の起臥して親しむものなるより、その花を鹿の妻に見なしていふ語。 夫木「人は來ぬ草葉の露の床の上に片敷き寢たる萩が花妻」

萩の遊 **【句】** **はぎあそび**（萩遊）に同じ。萬葉「白露を取らば消（ケ）ぬべしいざ子ども露にきほひて芽子（ハギ）の遊せむ」

萩の宴 **【句】** 萩の花を見はやす酒宴。源氏「かの宮の萩の宴せられける日」

萩の經青（タテアヲ） **【句】** 襲（カサネ）の色目の一。表は、青を經とし、蘇芳を橫として織り、裏は青色なるもの。秋用ふ。 增鏡「萩のたてあをの御上著」

萩の塵 **【句】**『「花の塵」を見よ』 萩の花びらの、塵のやうに散りてあるもの。芭蕉「波の間や小貝にまじる萩の塵」

萩の鍔 **【句】**『光恒は、長門國萩に住せしよりいふ』 明德年中、中井光恒といふ名工の作り初めし鍔。

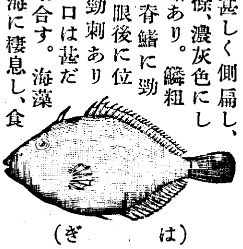
萩の錦 **【句】** 美しく咲ける萩を、錦に譬へていふ語。 夫木「秋の野の萩の錦をわが宿に鹿の音ながら移してしがな」

萩の花の宴 **【句】**「萩の宴」に同じ。續後記「上内二宴清涼殿一、號曰二芳宜華讌一」

萩の筆 **【句】** 萩の木質をなせる莖にて、軸を造りたる筆。

萩の亂（ラン） **【句】** 明治九年十月、前原一誠、時政に平かならず、同志橫山俊彥・奧平謙輔等と謀り、黨與三百人を集め、君側の奸を除くと稱して、兵を、長門國萩城に擧げしこと。

はぎ 剝皮魚・鰏魚 **【名】** 「動」硬骨類に屬する魚。體は甚しく側扁し、長さ一尺二寸餘、濃灰色にして、暗色の斑點あり。鱗粗糙にして小く、脊鰭に勁棘一箇ありて、眼後に位し、腹鰭にも勁刺ありて、よく動く。口は甚だ小くして、齒集合す。海藻の繁茂せる淺海に棲息し、食用に供す。まはぎ。かははぎ。ぎはぎ。



（はぎ）

は‐ぎ 榛 **【名】** 「植」『榛木（ハリキ）の略といふ。但し、異說あり。**はぎはら**（萩原）參照』 **はんのき**（赤楊）に同じ。「古語」

はぎ‐あそび 萩遊 **【名】** 萩の花を見はやして遊ぶこと。萩のあそび。萩の宴。 夫木「植ゑおきてさかりになれりいざ子どもも庭にし出でて萩遊せん」

はぎ‐あはす 接合はす **【動下二他】** 布帛などを、接ぎて、一つに合はす。

はぎ‐あはす 矧合はす **【動下二他】** 異なる鳥の羽を合はせて、一つの箭に矧ぐ。盛衰記「十五束の塗箆（ヌリノ）に、鶴の羽・鷹の羽・鵠の本白、矧ぎ合はせたる箭を以て」

はき‐いそう 破棄移送 **【名】** 「法」上告裁判所が破毀したる事件を、他の同等なる裁判所に移送して、更に辯論と裁判とを行はしむること。

は‐きう 玻球 **【名】** 玻璃の球（タマ）。 謠曲（歌占）「金（コン）・銀（ゴン）・碧瑠璃・玻球・加寶の影」

ば‐ぎう 馬牛 **【名】** **ぎうば**（牛馬）に同じ。

馬牛にして、襟裾（キンキヨ）す **【句】**『韓愈

の符讀二書城南一と題する詩に「人不ㇾ通二古今一、馬牛而襟裾」とあるに本づく」學識なき者の形容。

はぎ-え 剝枝【名】皮を剝ぎたる枝。千五百番歌合「さみだれは賤の垣根に日數經て麻の剝枝を乾すひまぞなき」

はき-おとし 掃落【名】掃きおとすこと、又、掃きおとしたる塵芥。

はき-おとす 掃落す【動四他】❶塵芥などを掃きて、床下に落す。❷掃き方粗略にして、一部分を殘す。浮世床「いくら言っても、掃落しやあがる」

はぎ-がき 萩垣【名】萩の生垣（イケガキ）。若風俗「草庵を結び、萩垣のまばらなるに、蔦の枯葉のまとひ」

はき-かく 吐掛く【動下二他】吐きて、ひっかかるやうにす。はきつく。若風俗「始皇帝に、巫山の神女、唾を吐きかけしに」

はき-かく 掃掛く【動下二他】❶箒にて掃くことを中止す。❷紅（ニベ）・白粉（オシロイ）又は繪具を塗ることを中止す。

はき-かけ 掃掛【名】❶箒にて掃くを、中止すること。❷紅（ニベ）・白粉（オシロイ）又は繪具を塗るを、中止すること。❸一部分をあっさりと染むること、又その染め方。一代女「對（ツキ）のさし櫛、はきかけの置手拭」

はぎ-がさね 萩襲・萩重【名】はぎ（萩）❷に同じ。

はぎ-かづら 萩葛【名】〔植〕はなずはう（花蘇枋）に同じ。

はぎかは-めつぎ 剝皮芽接【名】芽接の一。砧木（ダイギ）の周圍一帶の皮を剝ぎ、接穗（ツギホ）も、これと同じ長さに、一帶の皮を剝ぎて、接合せしむるもの。

はき-かへ 穿替・履替【名】履物（ハキモノ）の損じたる折の豫備として、別に調へ置く履物。二代男「奈良草履のはきかへもいかがと思ひしに」

はき-かへり 齬【名】くひちがひ（食違）に同じ。〔古語〕字鏡「齬、齒不二相値一也。波支加へ利。又加牟・久不」

はき-かへる 齬る【動四他】くひちがふ（食違ふ）に同じ。〔古語〕名義抄「齬、ハキカヘル・キカフ」

は-きき 羽利【名】❶鷹の羽の強きこと。〔鷹飼の語〕❷「羽（ハ）が利く」を見よ」**はばきき**（幅利）に同じ。

はき-きよむ 掃清む【動下二他】❶掃きて、清潔にす。清掃（セイサウ）す。空穗「うつぼのめぐり、掃ききよめてありければ」❷世の亂を鎭む。鎭定す。平定す。萬葉「まつろはぬ人をもやはし掃清め仕へまつりて」

はき-きよめ 掃清【名】はききよむること。はきさうぢ。

は-ぎく 葉菊【名】❶襲（カサネ）の色目の一。表は白、裏は青。秋用ふ。❷紋所の菊の一。その花の形の周圍に、葉を描き添へたるもの。若風俗「上下黑き龍門に、葉菊の五所紋」

はぎ-くさ 萩草【名】〔植〕❶しながははぎ（品川萩）に同じ。❷はぎ（萩）❶に同じ。

はぎく-さう 葉菊草【名】〔植〕大戟（タカトウダイ）科に屬する多年生の草。高さ一二尺に達し、葉は全緣なる線形又は長楕圓形にして、形小く、夏季、莖頂に、淡黃綠色の花、繖形花序をなして開き、中央に一箇の雄花、周圍に數箇の雌花あり、總苞によりて一括せらる。各地の山野に自生し、莖・葉共に、白色の乳液を含み、有毒なり。

はき-ぐすり 吐藥【名】胃中にある飮食物を吐かしむるための藥。吐劑。

はき-くだし 吐下・吐瀉【名】吐くことと、瀉（クダ）すことと。吐瀉（トシャ）。

はき-ぐち 吐口・疏通口【名】❶水などを流し出だす口。❷物貨を賣りさばく方面。販路。

はき-け 吐氣【名】胃中にある飮食物を吐きたくなる感じ。むかつき。

はぎ-こ 接子【名】衣服のはぎ目あるもの、又そのはぎ目。はぎっこ。

はきこき-やまひ 吐瀉病【名】くわくらん（霍亂）に同じ。〔古語〕

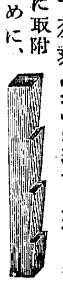
はき-こみ 掃込【名】茶の湯の時、客の前にて炭をつぎたる後、羽帚にて、道具疊（ダウグダタミ）を掃くこと。ざばき。

はき-さうぢ 掃掃除【名】箒にて掃除すること。さうぢ。（拭（フキ）掃除に對して）炭俵（野坡）「はき掃除してから椿散りにけり」

はぎ-ざかり 萩盛【名】萩の花ざかり。夫木「露しげき宮城が原の萩ざかり錦の上に玉ぞ散りける」

はき-さしもどし 破棄差戾【名】〔法〕上告裁判所が破毀したる事件を、原裁判所に差戾して、更に辯論と裁判とを行はしむること。

は-きざみ 羽刻【名】〔建〕下見板を羽重（ハガサネ）に取附くるために、柱を、斜に刻み込むこと、又その木。



（はきざみ）

はぎ-しば 萩柴【名】萩の叢り生えたる莖。五人女「里は、冬がまへして、萩柴折り添へて、降らぬ先より、雪垣など」織留「栗栖野（クルスノ）・小野の萩柴を折りくべて」

はき-じはん 破棄自判【名】〔法〕上告裁判所が、原裁判所にて事實は確定し、單に法律の違背ある場合、その他、無訴權・管轄違もしくは不法の公訴受理ある場合に、原裁判を破毀して、自ら判決すること。

は-ぎしみ 齒軋【名】はぎしり（齒軋）に同じ。津國女夫池「恨の齒ぎしみ」

は-ぎしめ 齒軋【名】前條の轉訛。五人女「齒ぎしめして立ちけれども、……無念の勘忍するうちに」

はぎ-じやう 萩城【名】長門國萩町の海岸指月山に在りし、毛利氏の居城。慶長四年、毛利輝元築造し、爾來累世相傳へしが、文久二年、府を山口に移し、明治維新後、廢城となれり。

はき-しらす 掃白洲【名】掃き清めたる白洲。本朝三國誌「ちぎれ草鞋（ワラヂ）の土ながら、掃白洲を、のっさのっさ」

は-ぎしり 齒軋【名】殘念に思ひたる時、又は睡眠中、咀嚼筋の不隨意運動などによりて、上齒と下齒とを嚙み合はせて、きりきりと音を立つること。いききみ。はがみ。はぎり。はぎしみ。はぎしめ。切齒。

はき-すつ 掃捨つ【動下二他】掃きて捨つ。

はき-すつ 穿捨つ・履捨つ【動下二他】履物（ハキモノ）を、履き得るだけ穿きて、後に捨つ。

はき-すて 穿捨・履捨【名】はきすつること、又その履物（ハキモノ）。はきばなし。一代女「年寄れば、その身は、梧（リキ）の引下駄の踏捨（ハキステ）の如く、行方（ユクガタ）知れずなりて」

はぎ-ずりごろも 萩摺衣【名】『すりごろも（摺衣）』を見よ』萩の花・葉などを摺りつけて、色をあらはしたる衣。夫木「狩にとて露けき秋の野邊に出でて萩すり衣著てや歸らん」

はぎ-その 芳宜園【名】〔人〕たちばなちかげ（橘千蔭）の家號。

はき-そふ 佩添ふ・佩副ふ・帶添ふ・帶副ふ【動下二他】一つの太刀に添へて、他の太刀を腰に佩く。太平記「只今賜りたる金作（コガネヅクリ）の太刀の上に、三尺八寸の黑塗の太刀帶副へ」

はき-そへ 佩添・佩副・帶添・帶副【名】太刀に副へて、腰に佩く小太刀。わきざし。はきそひ。平治「御佩添候はば、御恩に蒙り候はん」

はき-ぞめ 掃初【名】新年に入りて、正月元日には掃除をせず、二日に至りて、始めて掃除をなすこと。

はき-ぞめ 佩初【名】刀などを、始めて帶ぶること。

はき-ぞめ 穿初・履初【名】下駄・雪駄の類の新しきを、始めてはき用ふること。

はぎ-だか 脛高【名】衣の裾の、脛の上部まで達して、それより下を露出してあること。盛衰記「薄黑染の脛高なるを脫いで打懸けたり」同「黑袴、脛高に著、同色の袈裟懸けて」

はき-たがふ 穿違ふ・履違ふ【動下二他】はきちがふ（穿違ふ）に同じ。沙石集「草鞋（ワラヂ）をはきたがへて」

はき-だし 掃出【名】掃出すこと、又その所。

はきだし-ぐち 掃出口【名】❶掃出す口。❷次條に同じ。

はきだし-まど 掃出窓・掃出窻【名】疊と同じ面（ツラ）に設けて、室內の塵を、戶外へ掃出す用に供する窓。はきだしぐち。

はき-だす 掃出す【動四他】❶塵などを掃きて、屋外へ出す。❷多くの中より、惡しき物を除き去る。

はき-だす 吐出す【動四他】❶はく（吐く）

一・**二**・**三**に同じ。**二**貯へたる金品を手ばなす。吐出すやうに言ふ【句】慍をふくんで、無愛相に言ふ。

はき-だち 佩太刀・帶刀【名】腰に佩く、常用の太刀。運歩色葉集「帶刀、ハキダチ」

はき-たて 掃立【名】**一**掃きてより時間を經ぬこと。**二**養蠶にて、孵化せる蠶兒を、種紙（タネガミ）より、他の紙へ移し取ること。

はぎ-だふす 剝倒す【動四他】他人の財物を、欺きて奪ひ取る。草茅危言「第一謙德など名づけて、諸國の在在をまはりて、渡世をなし、貧民を剝倒す者、四方に遍し」

はき-たむ 掃溜む【動下二他】塵芥などを、掃きて、一箇所に溜め集む。八笑人「尻から煙の出る程、煙草も呑み、灰吹のこぼれる程、唾をはき溜め」

はき-だめ 掃溜【名】**一**塵芥を掃き溜めておく所。ごみため。ちりづか。**二**種種雜多の物の集合せる處。柳樽「掃溜のまはりが凡そ十六里」（江戸は諸國の人人の集合する地にて、廣袤四里四方といへるに因る句なり）

掃溜に鶴の下（オ）りたやう【句】つまらぬ場處にすぐれたる者の入り來りたる譬。掃溜の鶴。〔諺語〕

掃溜の鶴【句】前條の略。〔諺語〕

はきだめ-やま 掃溜山【名】塵埃を掃き溜めて積みたる所。ちりづか。雪女五枚羽子板「掃溜山へ上って、海老（エビ）の皮で、足突かんな」

はぎ-たる 剝垂る【動四他】皮を剝ぎ取りて垂らす。萬葉「足引のこの片山のもむ楡を五百枝（イホエ）はぎ垂り天照るや日のけに干し」

はき-ちがふ 穿違ふ・履違ふ【動下二他】**一**履物（ハキモノ）を間違へて穿く。はきたがふ。**二**思ひちがふ。感違（カンチガヒ）をなす。

はき-ちらす 吐散す【動四他】**一**吐きて、そのあたりに散らす。**二**さまざまの事を言ひ立つ。言ひちらす。盛衰記「院中の有る事、無き事、吐きちらして、追從してこそ出づべきに」

はぎ-つぎ 剝接【名】つぎき（繼木）に同じ。

はぎ-つけ 矧附【名】荷船の上棚（ウハダナ）の上に矧ぎ附くる板。早船・小舟等にあり。

はぎ-っ-こ 接子【名】**はぎこ**（接子）の音便。

はぎ-つば 萩鍔【名】長門國萩の工人の製作せる鍔。

はき-っ-ぱなし 穿放【名】**はきばなし**（穿放）の音便。

はき-つる 穿連る・履連る【動下二他】つれだちて穿く。犬筑波「雪ふりに齒かけ足駄をはき連れて」一代男「ばら緒の藁草履はき連れて、二十四五人」

はぎ-でら 萩寺【名】東京市本所區龜戸町龍眼（リユウゲン）寺の別稱。庭内に萩多きを以て、その名聞えたり。

はぎ-どり 樺鴫【名】〔動〕『萩鳥の義か』鵐（シトド）に似、好みて、萩の叢生せる所に棲むといふ鳥。

はぎ-とる 剝取る【動四他】他の身に附けたる衣服又は裝飾品などを奪ひ取る。

はき-ながす 掃流す【動四他】塵などを、掃き落して、水に流す。太祇「掃き流す橋の埃（ホコリ）や夏の月」

はき-には 掃庭【名】掃き淸めたる庭。若風俗「雨月も、内より固め、掃庭に、葉右衞門ひとり立ちわづらはせ」浮世風呂「松がたった一本、外に何もなしの掃庭」

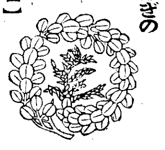
ば-ぎぬ 馬衣【名】馬に掛くる衣。

はぎ-の-たてあを 萩の經青【句】**はぎ**（萩）の條下を見よ。

はぎ-の-と 萩戸【名】古、禁中の淸涼殿の夜御殿（ヨルノオトド）の北、弘徽殿（コキデン）の上御局（ウヘノミツボネ）と藤壺の上御局との間に在りし一室。東西一間、東北二間。前庭に萩を栽ゑてありしよりの名といふ。月淸集「萩の戸の花の下なるみかは水千とせの秋の影ぞうつれる」

はぎ-の-はな 萩花【名】**一**粥の如く柔かに炊ぎたる飯を、椀に盛り、小豆（アヅキ）の粉を添へたる食品。**二はぎのもち**（萩餅）に同じ。

はぎ-の-まる 萩丸【名】紋所の一。下の圖を見よ。



（はぎのまる）

はぎ-の-もち 萩餅【名】糯米（モチゴメ）と粳米（ウルチ）とを混ぜて炊ぎ、擂粉木にて擂りつぶして、小く丸め、餡又は黃粉（キナコ）・胡麻などを附けたる食品。おはぎ。はぎのはな。ぼたもち。かいもちひ。

はぎ-の-や 萩廼家【名】〔人〕**おちあひなほぶみ**（落合直文）の家號。

はぎ-の-やま 萩山【名】〔地〕三河國にある山。夫木「色色の錦とぞ見る萩の山しがらむ鹿や秋は立つらん」

はぎの-よしゆき 萩野由之【名】〔人〕國史家。文學博士。佐渡國相川の人。明治十五年東京大學古典科卒業後、元老院に於ける德川制度、貴族院に於ける古代法制の取調に從事し、後、學習院・東京高等師範學校・東京帝國大學文科大學に敎鞭をとること三十四年、尋いで宮内省御用掛・帝國學士院會員・維新史料編纂會委員等に擧げられ、國史研究に終始一貫せり。大正十三年歿す。年六十五。著書多し。

はぎ-は 矧羽【名】矢に矧ぐに用ふるはね。

はぎ-は 羽際【名】鳥の羽のきは。はねもと。賴政集「狩りゆけば片野のみ野に立つ鳥の羽ぎはも見えぬ夕霞かな」

はき-はき【貌】氣質又は仕事などの、澁滯せず、すばやきさま。てきぱき。ばきばき。

はぎ-はぎ 接接【名】多くのはぎのあること。つぎはぎ。

ぱき-ぱき【貌】**はきはき**に同じ。

はき-ばなし 穿放【名】**はきすて**（穿捨）に同じ。

はぎ-はら 萩原【名】『萬葉集に榛原の字を用ひたるも、實は萩原にて、山振の字を山吹に充てたると同類の用法なる上、榛（ハリ）は喬木にて、その花は觀賞すべきほどのものにあらざる等の點もあれば、萬葉集の榛の字は、萩の意に用ひたるものなるべしといふ。**はりはら**（榛原）參照』萩の一面に生ひしげりたる地。萬葉「引馬野（ヒクマヌ）ににほふ榛原入り亂り衣にほはせ旅のしるしに」古今「すがる鳴く秋の萩原朝立ちて旅行く人をいつとか待たん」

はぎ-はら 萩原【名】**一**〔地〕常陸國鹿島（カシマ）郡輕野村の大字。利根川に近し。夫木「秋ならぬ花に心やとどめまし霜に枯れたる萩原の里」**二**〔地〕尾張國中島郡の町。美濃街道の小驛。起（オコシ）町の東南一里。天正の頃までは荒野なりしを、關ケ原の役後、美濃路の開通ありてより、宿驛となれりといふ。元政法師身延紀行「牡鹿ねし野邊の萩原霜枯れてあだなる露のかたみだになし」**三**〔地〕紀伊國日高郡東内原（ヒガシウチハラ）村の大字。歌枕の一。新千載「萩原や野邊より野邊に移りゆく衣手したふ露の月影」**四**姓氏の一。卜部兼煕（ウラベカネヒロ）の第十世兼從（カネヨリ）を祖とす。兼從、慶長十三年豐國大明神の社務となる。その子員從（カズヨリ）、後西院天皇より、藤原姓を稱すべしとの仰を蒙り、員從の孫兼武に至り、正德元年、卜部氏に復し、藤原となる。爾來、子孫相繼ぎ、明治維新後、子爵を授けらる。

はぎはら-しうがん 萩原秋巖【名】〔人〕古書家。名は翬、字は文侯、通稱は祐助。梁漁師と號す。卷菱湖の門に學び、遂に一家を成す。明治十年歿す。年七十五。

はぎはら-せん 萩原錢【名】『勘定奉行萩原重秀の指揮に依りしよりいふ』德川幕府が、元祿十年、江戸龜井戸村にて鑄造せし寬永錢。

はぎはら-どの 萩原殿【名】〔人〕**一**花園天皇の崩御ありし殿邸。山城國葛野（カド）郡花園村なる妙心寺の地にて、玉鳳院はその遺跡なり。**二**次條に同じ。

はぎはら-の-ゐん 萩原院【名】〔人〕『萩原の仙洞にて崩御せられしによりて申す』**はなぞのてんわう**（花園天皇）に同じ。

はぎはら-ひろみち 萩原廣道【名】〔人〕國學者。通稱は鹿左衞門。葭沼と號し、又、鹿鳴草舍・出石居・蒜園等の別號あり。備前國岡山の人。大阪に住む。最も源氏物語に精しく、源氏物語評釋の著あり。文久三年歿す。年五十一（一說には四十九）。

はぎはら-ほふわう 萩原法皇【名】〔人〕**はぎはらのゐん**（萩原院）に同じ。太平記「萩原法皇の第一の御子」

は-きふ 波及【名】『波の四方へ擴がるが如くに行き及ぶ義』事の、漸漸と行きわたること。影響。

はきふ 破急【名】昔の音樂にて、序・破・急の三段に分れたる中の、破と急と。（増鏡）「その後、御遊はじまる。……。例の安名尊(アナタフト)・席田(ムシロダ)・鳥の破急」

ばきん 馬琴【名】〔人〕きよくていばきん(曲亭馬琴)を見よ。

はぎめ 接目【名】接ぎ合はせたる部分。

はぎもち 萩餅【名】はぎのもち(萩餅)を云ふ。〔豐前國・豐後國の方言〕

はきもの 履物【名】草履・下駄・靴など、すべて足にはく物。

はきやう 破鏡【名】㊀破れたる鏡。㊁『太平廣記』に「陳太子舍人徐德言之妻、後主叔寶之妹、封二樂昌公主一、方屬二時亂一、恐レ不二相保一、謂二其妻一曰、以二君之才容一、國亡必入二權豪之家一、儻情緣未レ斷、猶冀相見宜レ有二以信一レ之。乃破二一鏡一、各執二其半一、約曰、他日必以二正月望一、賣二於都市一。及二陳亡一、其妻果入二越公楊素之家一。德言至レ京、遂以二正月望一訪二於都市一、有下蒼頭賣二半鏡一者上、德言出二半鏡一以合レ之、乃題レ詩曰、鏡與レ人俱去、鏡歸人不レ歸、無二復姮娥影一、空留二明月耀一。陳氏得レ詩、涕泣不レ食、素知レ之、卽召二德言一、還二其妻一」、神異經に「昔有二夫婦一、相別、破レ鏡各執二其半一。後其妻與レ人通、鏡化レ鵲飛至二夫前一。後人鑄レ鏡、背爲二鵲形一、自レ此始也」とあり』夫婦離別すること。「破鏡の嘆(タン)」㊂『古詩に「破鏡飛上レ天」とあり』かたわれづき。半月。

破鏡重ねて照さず【句】『丹鉛總錄に、洞山語錄を引きて、「破鏡不二重照一、落花難レ上レ枝」とあり』一旦破れたる物の、元狀に復すべからざる譬。覆水、盆にかへらず。〔諺語〕

破鏡再び合ふ【句】離別したる夫婦、また元のごとく一所になる。〔諺語〕

破鏡再び照さず【句】「破鏡重ねて照さず」に同じ。〔諺語〕（謠曲(八島)）「落花枝に歸らず、破鏡再び照さず」

はきやう 破鏡【名】〔人〕和泉國岸和田藩士某の女。近江國膳所(ゼゼ)藩士菅沼外記に嫁す。資性貞淑、和歌及び筑紫箏を巧みにす。夫某、故ありて、享保五年七月、人を殺し、自殺せしかば、遂に尼となりて、攝津に隱れ、箏を彈じ、歌を詠じて、世を終ふ。その箏は、後世、破鏡流と稱せられて、今なほ世に存す。歿年詳かならず。

はぎやう 波行【名】〔語〕五十音圖中の第六の行、卽ち「は」・「ひ」・「ふ」・「へ」・「ほ」の五音。

ばぎやう 場行・塲行【名】その場の行儀。（和合人）「場行がくづれて、惡(ワル)い」（同）「張(ハリ)公と己(オレ)は濟んだから、揚(ヤウ)公も、茶見(チャミ)的も、是非一地口(ヒトヂグチ)づつやらっし。場行が惡(ワリ)い」

はきやうりう 破鏡流【名】はきやう(破鏡)を見よ。

はぎやき 萩燒【名】長門國阿武(アブ)郡松本村より產出する陶器。質緻密にして、釉藥は、帶白赤色を呈し、軟滑なり。もと毛利家にて、朝鮮の陶工を、長門國萩に招きて燒かしめしに創まるといふ。まつもとやき。（生玉心中）「露の萩燒大皿出だし」

はきやく 破却【名】やぶること。そこなふこと。破壞。（太平記）「法然上人の墳墓を破却せしむ」（伊達娘戀緋鹿子）「燒け殘った道具・著類(キルイ)も、賣り、破却して、親子三人、その日から、すぐに袖乞」

はきやく 跛脚【名】びっこ。あしなへ。ちんば。

ばきやく 馬脚【名】馬のあし。馬足。

馬脚を露(アラハ)す【句】『元曲の陳州糶米劇に「露二出馬脚一來」とあり』詐り飾りたる事、露顯す。化(バケ)の皮あらはる。尻尾(シッポ)を出す。

ばぎやば 婆伽婆(梵Bhagavat)【名】〔佛〕次條に同じ。

ばぎやぼん 婆伽梵・薄伽梵(梵Bhagavān)【名】〔佛〕『薄伽は德、梵は有、卽ち有德の義』せそん(世尊)に同じ。（榮花）「孤獨園(コドクヲン)の昔の庭には、薄伽梵失せて、人も住まずなり」

ばぎやぼんか 婆伽梵歌・薄伽梵歌(梵Bhagavandgītā)【名】西暦第二三世紀の頃、印度に出で、對話の形式を用ひて作れる神歌。作者明かならず。摩訶婆羅多の第六卷第二十五章より第四十二章に亙りて出で、全篇第十八章より成り、印度の宗教・文學・哲學を研究するに缺くべからざるものにて、佛・英・獨・羅甸・希臘・伊太利等の諸國語にも譯せられたり。

はぎやまやき 萩山燒【名】尾張國名古屋城北字萩山にて製出せし陶器。萩山燒の印あり。色赤く、釉藥も同色のを用ひ、その上に、白釉或は青釉にて、畫を現す。

はぎり 葉桐【名】德川幕府にて、その發行の金銀貨に、極印として打ちたる、五三の桐に似たる形。

はぎり 齒切【名】㊀「齒を切る」を見よ。㊁はぎしり(齒軋)に同じ。（御伽名代紙衣）「齒ぎりをして悔しがるこそ、不便なれ」㊂齒にて嚙み切る感じ。

ぱぎりぱぎり【貌】幅廣き掌を打ちて鳴らす音。（柳樽）「馬喰町(バクロチヤウ)ぱぎりぱぎりと手を叩き」

はぎれ 齒切【名】㊀食物を嚙み切る時の工合。「齒ぎれ善し」「齒ぎれ惡し」㊁人の、事を處置する態度。「齒ぎれ善し」「齒ぎれ惡し」

はぎれ 刃切【名】刀の、刃先より刃文(ハモン)を越えて、地鐵(ヂガネ)に移る所まで、横に切れたる疵。實用には害なけれど、甚しく忌み嫌はる。

はく 白【名】㊀しろきこと、又その色の物。しろ。㊁はくじん(白人)㊀の略。（誹諧細卯月の紅葉）「それにはあらぬ白の風(フウ)」㊂次條を見よ。

白を擧ぐ【句】㊀『珊瑚詩話に「飲レ酒痛醻、謂二之擧一レ白。唐人云、卷二白波一、義起二于漢擒二白波一」とあり』酒を溢るるほど、盃に酌みて飲む。㊁『淮南子の道應訓に「魏文侯觴二諸大夫於曲陽一……蹇重擧レ白而進レ之曰、請浮レ君」とあり。浮は罰の義』罰杯を酌む。

はく 伯【名】㊀しやく(爵)㊁㊂を見よ。㊁神祇官の長官。初は從四位下相當なりしが、後には、三位又は二位にて、これを帶するに至り、伯三位・伯二位の稱あり。㊂をさ。かしら。首長。㊃兄弟中の最も年長なる者。長兄。「伯・仲・叔・季」

はく 帛【名】良質なる絹。

帛の御裝束(オンシャウゾク)【句】天皇の、帛の衣(キヌ)の袍と、無文の冠帶とを著用せられたる御裝。もと天皇の御正裝なりしが、嵯峨天皇の弘仁十一年の詔にて、黃櫨染(クワウロゼン)の御袍を御正裝と定められしより後は、專ら神事の御裝となれり。（禁祕抄）「奉幣發遣時、帛御裝束也」

帛の御袍(オンハウ)【句】天皇著御の、帛の衣(キヌ)の袍。前條參照。

帛の衣(キヌ)【句】白色・無紋の練衣(ネリギヌ)。前條參照。（大寶令）「除二帛衣一外、通二用雜色一」（和名）「帛、波久乃岐奴」

はく 箔【名】㊀金屬を、紙の如く薄く平に敲き延ばしたるもの。〔薄・鉑〕（宇治）「漆の價のほどは、まづ得て、箔も著せ」㊁能(ノウ)の裝束の一。女の仕手(シテ)の唐織・水衣(ミヅギヌ)などの下に著用する小袖。無地なるものと、模樣あるものとあり。

箔が落つ【句】すぐれたる値打が失策の爲になくなる。估券がさがる。

箔が附く【句】㊀すぐれたる値打が、世間一般に認めらる。折紙附(ヲリガミツキ)になる。金箔が附く。㊁缺點・惡事などが、世間一般に有名になる。金箔が附く。**はくつき**(箔附)參照。（浮世床）「箔の附いた居候が來た」（八笑人）「總身(ソウミ)へ箔のついたる懶者(ナマケモノ)」

箔の團扇(ウチハ)【句】金・銀の箔をおける團扇。江戸時代に、遊女が、七月の贈物にしたりといふ。

箔の小袖【句】絲の縫紋なく、金・銀の箔にて模樣を置ける小袖。（望一後度千句）「春の日の光りかがやくこし車（といふ句に）箔の小袖のうららなる體」

箔の太鼓【句】箔をおきて飾りたる太鼓。

箔を置く【句】箔㊀をかぶす。**はくおき**(箔置)參照。

箔を押す【句】前條に同じ。**はくおし**(箔押)參照。（芭蕉）「箔押せよどちも身のため夕すずみ」

箔を散らす【句】まばらに箔を置く。（増鏡）「紅の三重(ミヘ)の單(ヒトヘ)、これも、箔を散らす」

はく 鉑【名】㊀はく(箔)㊀に同じ。㊁〔鑛〕**くわうどうくわう**(黃銅鑛)に同じ。

はく 柏【名】〔植〕『古來、この字を「かしは」と訓じ來りたるは、誤なり』常綠喬木なる側柏(コノテガシハ)・扁柏(ヒノキ)・羅漢柏(アスナラウ)・圓柏(ビャクシン)などの總稱。「松・柏」

はく 魄【名】㊀支那にて、人のたましひの、陰(イン)に屬して、死後、この世に留まるといふもの、卽ち肉體の元氣。こんぱく(魂魄)參照。㊁きせいはく(旣生魄)を見よ。

はく 駁【名】ぶち。まだら。不純。

駁を解く【句】曇去る。雲きゆる。

はく 薄【名】うすきこと。「厚・薄」

はく 璞【名】山より掘り出したるままにて、未だ琢(ミガ)かぬ玉。人工を加へぬ寶石。あらたま。璞玉。

はく 化く【動下二自】ばく(化く)に同じ。〔古語〕字鏡集「妖、ハケタリ・バク・タブラカス」 著聞「狐、常にはけけり」 徒然「未練の狐、はけ損じけるこそ」

はく 疏通く【動下二自】㊀滯らずに流れ行く。㊁滯なく悉く賣れ行く。

はく 吐く【動四他】㊀口の中にある飲食物を、外へ出す。はきだす。ほきだす。㊁胃の中にある飲食物を、口外へ出す。もどす。反吐(ヘド)をつく。つく。はきだす。あぐ。〔嘔く〕 ㊂言葉に出す。語る。言ふ。口外す。「大言を吐く」 ㊃内にある物を、外へ出す。「雲、月を吐く」「山、月を吐く」

はく 掃く【動四他】㊀塵芥などをはらひ除く。はらふ。掃除(サウヂ)す。油糟「高砂の能の面(オモテ)の煤はきて」 ㊁塗る。塗抹す。舞の本「直垂(ヒタタレ)……地(チ)をば、山鳩色に、一刷毛(ヒトハケ)、さっとはいて」

はく 穿く・履く【動四他】『はくを見よ』下半身に著く。穿つ。紀「臂著ニ稜威之高鞆一、ヒヂニハイツノタカトモヲハキ」

はく 佩く・帶く【動四他】『はくを見よ』刀を腰に著く。おぶ。さす。

はく 佩く・帶く【動下二他】はかしむ。帶ばしむ。〔古語〕記「一つ松人にありせば太刀はけましを、衣(キヌ)著せましを」

はく【動四他】『はく(穿く)・はく(佩く)と同語なるべし』前條及び前前條に同じ。〔古語〕萬葉「近江のや矢橋(ヤバセ)の小竹(シヌ)を矢にはかずまことありえむや戀しきものを」 同「陸奥のあだたらま弓はじきおきて反(セ)らしめきなば弦(ツル)はかめかも」

はく【動下二他】『前を條見よ』はぐに同じ。〔古語〕萬葉「梓弓絃緒(ツラヲ)取りはけ引く人は後の心を知る人ぞ引く」 同「馬にこそ絆(フモダシ)かくもの牛にこそ鼻繩はくれ」

はく【貌】はくり㊀に同じ。〔古語〕落窪「車の床縛(トコシバリ)を、ふつふつと切りてければ、大路なかに、はくとひき落しつ」

はく 泊【助數】宿泊したる夜の數。とまり。宿(シュク)。「一泊」「二泊」

はく 拍【助數】〔音〕『英 Beat』音の長短の單位。普通、四分音符を一拍として數へ、短鞭を左右に往復せしめ、又は手掌を拍ち、或は足ぶみにて數ふるを常とす。助數詞のひやうし(拍子)參照。

はぐ 剝ぐ【動下二自】㊀塗りたる物、むけ落つ。はがる。剝落す。落窪「くろ塗の箱の、……所所はげたるを」 ㊁毛髮など脫け落つ。〔禿ぐ〕 宇治「鬢はげたる男の、六十ばかりなるが」 ㊂色消ゆ。若風俗「涙に墨染もはぐるばかり歎きぬ」 ㊃雲など散じて、靑空あらはる。

はぐ 剝く【動四他】㊀むき取る。離し取る。はがす。へがす。へぐ。㊁身に著けたる物を脫ぎ取る。ぬがす。裸にす。宇治「盜人のわが衣剝がんとしつれば」 平治「落人(オチウド)の歸り來るにてぞあらん。擊ち留めて、物具(モノノグ)剝げ」 ㊂官位などを取上ぐ。褫奪す。〔褫ぐ〕

はぐ 接ぐ【動四他】㊀つづり合はす。つぎ合はす。㊁組み立てて作る。太平記「兵を集め、楯をはがせて」

はぐ 矧ぐ【動四他】『四段活用のはくの轉か』羽を、矢竹に附けて、矢を作る。萬葉「近江のや矢橋(ヤバセ)の小竹(シヌ)を矢にはがずまことありえむや戀しきものを」

はぐ【動下二他】『下二段活用のはくの轉か』引き懸く。取り附く。塡(ハ)む。はく。宇治「矢をはげて射んとて」 同「首かしなどいふ物はげられて」

ばく 博【名】ばくえき(博奕)に同じ。

ばく 幕【名】まく(幕)㊀に同じ。平家「韋(オシカハ)のたまき、かものばく、以て風雨を防ぎ」

ばく 縛【名】しばること。しばらるること。なはめ。

縛の索(ナハ)【句】〔佛〕こんがうさく(金剛索)㊀に同じ。心中萬年草「情(ナサケ)の羈絆(キヅナ)、縛の繩、不動坂にもさし懸り」

ばく 貘・獏【名】㊀支那にて、形、熊に似て、鼻は象の如く、目は犀の如く、尾は牛の如く、足は虎の如く、毛は黑白の斑にして、頭小く、人の惡夢を食ひ、その皮を敷きて寢ぬれば、瘟氣を避け、これを畫にすれば、邪氣を避くといふ、想像上の獸。邦俗にも、夢惡を見たる時は、「獏食へ、獏食へ」と唱へて、これを祓ふ習俗あり。㊁〔動〕奇蹄類に屬する哺乳動物。形、犀に似、大さは驢よりやや小く、皮は厚く、毛短く、且つ少く、尾は短し。肢も短く、前肢に四趾、後肢に三趾ありて、何れも蹄を有す。眼は小く、鼻は、長く突出して、吻狀をなし、屈伸自在なり。性、孤獨を好み、溫柔にして抵抗力なく、深林・水際に棲み、又、人に馴れ易く、木の芽・果實等を食とす。南亞米利加及び印度諸島に產す。㊂宿屋の下女。〔相模國小田原の方言〕

(㊀ ば く)

貘の札(フダ)【句】貘の形を描きたる札。寢所に敷けば、惡夢を避くとて、昔、寶船と共に賣りたるもの。貘の繪。一代男「厄拂の聲、夢違(ユメチガヒ)の貘の札・寶舟賣」

貘の枕【句】貘の形を描きたる箱枕。貘の札(フダ)を下に敷きて寢ぬる時の枕。ばくちん(貘枕)參照。婚禮法式「枕二つ、箱枕なり。黑塗・蒔繪にて、一方には貘、一方には家の紋を書く。これ本式なり」

貘の繪【句】「貘の札」に同じ。

ばく 化く【動下二自】『はく(化く)の轉』㊀異形のものに變ず。妖怪の姿となりて現る。はく。㊁素姓(スジヤウ)を包み隱し、又は裝を變へて、別人のごとく見せかく。本體を變じて、他の風に見せかく。

ば-ぐ 馬具【名】乘馬に裝ふ一切の具、卽ち鞍・鐙(アブミ)・手綱などの類。うまぐ。

はく-あ 白堊【名】『堊の字の音、正しくはアク』㊀白色のつち。しろつち。㊁しらかべ(白壁)に同じ。㊂〔化〕『英 Chalk』石灰岩の一種。白色・粉狀の軟き物質。化學成分は炭酸カルシウム。天然に產出す。西洋白墨の原料となり、不純物を多く含まざるものは、石灰の原料となる。

はく-あい 博愛【名】博く衆を愛すること。汎愛。仁道。

ばく-あい 莫哀【名】『哀(カナ)しむ莫しといふ義。杜甫の短歌行贈ニ王郞司直一に「王郞酒酣、拔レ劍斫レ地歌ニ莫哀一、我能拔ニ爾抑塞磊落之奇才一」とあり』支那古代の歌曲の名にて、その詞、傳はらずといふ說普通なれども、一說に、曹植の愍志賦に「哀莫レ哀ニ於永絕一、悲莫レ悲ニ於生離一」とあるに本づきて、杜甫の用ひしものともいふ。

莫哀を歌ふ【句】人を安んじ慰む。

はくあい-しや 博愛社【名】にっぽんせきじふじしや(日本赤十字社)の舊稱。

はくあい-しゆぎ 博愛主義【名】『英 Philanthropy』種族・地位等の如何を論ぜず、人類はすべて平等に愛すべきものなりといふ主義。

はくあ-き 白堊紀【名】〔地〕『英 Cretaceous period』地質時代中、中世代の最も新しき時代。この時代に成りたる地層、卽ち白堊系は、白堊層・礫岩・泥板岩・石灰岩等より成り、植物には、雙子葉植物多く、動物には、軟體動物・魚類・爬蟲類等あり。我國にては、その露出の區域多く、歐洲にては、廣き層をなして存在す。

はく-あく 白堊【名】はくあ(白堊)を見よ。

はくあ-くわん 白堊館【名】ほわいとはうす(白館)に同じ。

はくあ-けい 白堊系【名】〔地〕『英 Cretaceous system』地質系統中、中世界の最も新しきもの。はくあき(白堊紀)參照。

はくあ-しつ 白堊質【名】一白堊と同一なる質。二〔醫〕『羅Cementum』齒根の象牙質面の全面を被覆し、齒牙の植立に資し、又、齒牙の生機を助くるもの。

はく-あん 伯庵【名】瀬戸燒の茶碗の名器。伊勢國津の醫師曾谷(ソヤ)伯庵の所有せしものといふ。

はくあん-で 伯庵手【名】前條と同質なる茶碗。

はく-い 白衣【名】一白色の衣。二官位なき人。賤しき人。布衣。三『漢書の龔勝傳に「聞二之白衣一、戒二君莫一レ言」とあり』官府に奉仕する賤吏。

白衣の宰相【句】『南史の陶弘景傳に「陶弘景脱二朝服一、上レ表辭レ祿。賜以二束帛一、勅二所在一月給二茯苓一。時號二白衣宰相一」とあり』官位なくして、國事の顧問に備はり、宰相の待遇を受くる者。

白衣、酒を送る【句】『續晉陽記に見ゆ』支那江州の刺史王弘の、酒を白衣の使者に携へさせて、陶淵明に送りし故事。

はく-い 薄衣【名】うすき衣服。「菲食・薄衣」太平記「元より薄衣なる人、飼ふ事無かりし馬ども、ここやかしこに凍え死んで」

はく-い 伯夷【名】〔人〕『伯は兄の義』支那殷の處士。孤竹君の子、叔齊の兄。父の死後、兄弟相讓りて立たず、西伯文王に歸す。文王の子武王の殷を討たんとするを諫めて、用ひられず、周の粟を食ふを愧ぢて、首陽山に隱れ、薇を食ひて、遂に餓死せり。

はくい【形】上等なり。上手(ジヤウズ)なり。

はく-いし 箔石【名】〔鑛〕きらら(雲母)に同じ。

はく-いん 博引【名】例證に、博く諸說を引用すること。「博引・旁證」

はくいん 白隱【名】〔人〕禪僧。駿河國原の人。俗姓は長澤、諱は慧鶴、別號鵠林。故鄉の松蔭寺の單嶺傳公に謁して剃髮す。後、宗格禪人正受端公に見え、松蔭寺に住す。明和五年寂す。年八十四。勅諡を賜はりて、神機獨妙禪師といふ。著書多し。

はく-う 白雨【名】一ゆふだち。むらさめ。にはかあめ。驟雨。二へう(雹)に同じ。

はく-う 白羽【名】白き羽毛。しらは。

ばく-う 麥雨【名】『麥の熟する頃に降るよりいふ』さみだれ。さつきあめ。

はくう-せん 白羽扇【名】『支那の扇は、すべて團扇なり。はくせん(白扇)參照』白羽にて造れる團扇(ウチハ)。古、支那にて、諸葛亮が、陣に臨みて、軍配に代へたりといふによりて有名なり。

はくう-せん 白羽箭【名】白羽を矧ぎたる矢。

はく-うち 箔打・薄打【名】箔類を打ちのばすこと、又その人。

ばく-うち 博打【名】ばくち(博打)一に同じ。〔古語〕新猿樂記「博打、バクウチ」

はくうち-は 箔團扇【名】箔を置きたるうちは。俳諧新選 嘯山「遣ふともなしや美人の箔團扇」

はくうち-や 箔打屋【名】はくや(箔屋)に同じ。

はく-うん 白雲【名】白色のくも。しらくも。

白雲の鄕(キヤウ)【句】『莊子の天地篇に「乘二彼白雲一、遊二于帝鄕一」とあり』天帝の居るといふ世界。帝鄕。

はく-うん 薄雲【名】うすき雲。うすぐも。

はく-うん 薄運【名】運命の惡しきこと。ふしあはせ。薄倖。不幸。微運。薄命。

はくうん-がん 白雲岩【名】〔鑛〕『英Dolomite』白雲石の岩石。多くは石灰岩の一部が、苦土の溶液の浸入によりて變質したるもの。

はくうん-ざん 白雲山【名】〔地〕上野國妙義山の別稱。

はくうん-し 白雲子【名】〔人〕書家。通稱は筒井左京進。吟龍軒と號す。京都の人。御家流の書を善くし、一家を成す。世に白雲子流と稱せらる。

はくうん-じやう 箔運上【名】江戸時代に、箔類・金銀の粉・梨地等を製造又は請賣したる箔屋・下金屋の納めし運上。

はくうんし-りう 白雲子流【名】書法の一。白雲子を流祖とするもの。

はくうん-せき 白雲石【名】〔鑛〕『英Dolomite』炭酸苦土に炭酸石灰の混合して成りたるもの。極めて方解石に似たれども、結晶面に富まず、且つ硬度それより高く、酸類に溶くる程度低し。變質せる岩石中又は鑛脈中に在り、白・帶赤・帶綠白色等を呈し、透明にして、玻璃光澤を有す。佐渡國相川、羽後國院內、常陸國町屋等に產す。

はくうん-ぼく 白雲木・玉鈴花【名】〔植〕齊墩果(エゴノキ)科に屬する落葉喬木。高さ二三丈、周圍四尺に達し、樹皮は赭黑色、葉は廣楕圓形にして、粗鋸齒を有し、質厚く粗糙にして、裏面に微毛あり、葉柄の基部擴大して、幼芽を包む。初夏、白色の花、總狀花序をなして開く。各地(殊に東北地方・北海道)の山地に自生し、種子よりは、油を採りて、蠟燭に製すべく、又、庭園に植ゑて、觀賞用に供す。おほかのき。

はくうん-も 白雲母【名】〔鑛〕『英White-mica』雲母の一種。成分は加里・アルミニウムの硅酸鹽類。板狀をなし、白色・淡色又は無色にて、眞珠光澤又は絹光澤を有し、彈性强し。加里雲母。銀雲母。白(シロ)雲母。

はくうんもくわかう-がん 白雲母花崗岩【名】〔鑛〕白雲母を多量に含める花崗岩。

はく-え 白衣【名】びやくえ(白衣)に同じ。謠曲(俊寛)「麻衣のしをるるを、只そのままの白衣にて」

はく-え 薄衣【名】はくい(薄衣)に同じ。運歩色葉集「薄衣、ハクエ」

はく-えい 白翳【名】〔障〕はくないしやう(白內障)に同じ。

ばく-えい 幕營【名】一幕を張りたる陣營。二〔兵〕野外に、天幕を張りて宿營すること。

ばく-えき 博奕【名】ばくち(博打)に同じ。太平記「博奕をして遊びける」

ばくえき-ざい 博奕罪【名】〔法〕とばくざい(賭博罪)に同じ。

はく-えふ 柏葉【名】『はく(柏)を見よ』柏の葉。

はくえふ-しゆ 柏葉酒【名】『はく(柏)を見よ』柏葉を浸したる支那酒。これを飲めば、邪氣を掃ふといふ。柏酒。

はくえふ-てつ 白葉鐵【名】ぶりき(錻力)に同じ。

はくえふ-てん 柏葉點【名】〔美〕南畫の點苔の一。多くは雙筆を用ひて、夾み點ずるもの。參差(シンシ)・不齊なるを妙とす。

はく-えん 白烟・白煙【名】白きけむり。しろけむり。

はく-えん 白鹽【名】白きしほ。

はく-えん 白鉛【名】〔鑛〕『英White lead』えんぱく(鉛白)に同じ。

はく-えん 柏筵【名】〔人〕いちかはだんじふらう(市川團十郎)二を見よ。

ばく-えん 幕燕【名】『元史の外夷傳に「鼎魚幕燕、亡在二旦夕一」とあり。「燕(ツバメ)、幕上に巢(スク)ふ」を見よ』極めて危險なる譬。

はくえん-くわう 白鉛鑛【名】〔鑛〕『英Cerussite』鉛鑛の一。成分は鹽基性炭酸鉛。板狀又は錐狀の結晶或は塊狀をなし、質甚だ脆くして、比重やや大、大抵白色なれど、白灰色・暗灰色なるもあり。金剛光澤・脂肪光澤又は玻璃光澤を帶び、硝酸に分解して、泡を發す。鉛の原鑛となる。

はく-おう 白鷗【名】羽毛の白き鷗。

はく-おき 箔置【名】『「箔を置く」を見よ』箔一を貼りつけてあること、又その物。はくおし。二代男「箔置の木脇差」鶉衣「箔置の佛」

はく-おし 箔押【名】『「箔を押す」を見よ』前條に同じ。

ばく-おん 爆音【名】一爆發する音。二自動車・飛行機のガソリンの、機關に供給せらるるに先だちて氣化する時の音。

はく-か 薄荷【名】一〔植〕脣形科に屬する多年生の草。莖は方形にして、高さ一尺五寸內外に達し、特別の芳香を有し、葉は對生し、長圓形にして、尖頭を有し、鋸齒あり。秋季、葉腋に小形・淡堇紫色の脣形花簇生す。莖と葉とを乾して、薄荷油・薄荷腦を採取す。おほあらぎ。おほあららぎ。はか。はめりぐさ。めぐさ。二はくかせい(薄荷精)の略。

はく-が 博雅【名】一博く物事を識りてあること、又その人。博識。二〔書〕くわうが(廣雅)の舊稱。

はくが 博雅【名】〔人〕みなもとはくが(源博

雅)を見よ。

はくが 白蛾【名】〔人〕あらゐはくが(新井白蛾)を見よ。

はくが 伯牙【名】〔人〕支那周代の音樂家。嘗て成運に就きて、琴を學び、三年にして成らず、成運に伴はれて、一海島に至り、修練して、終に天下の妙手となる。ちいん(知音)㊀參照。

伯牙の絃(ゲン)【句】次條に同じ。

伯牙、絃(ゲン)を絕つ【句】ぜつげん(絕絃)㊁に同じ。

ばくーか 幕下【名】㊀張りたる幕の下。陣營。陣屋。帳下。㊁大將軍の膝もと。㊂大將の配下。はたもと。てした。㊃左右近衞府の大將の唐名。㊄將軍又は大將軍。

ばくーが 麥芽【名】㊀麥の芽。㊁〔化〕『英 Malt』大麥又は小麥・ライ麥・オオト麥等に適當なる濕氣と溫度とを與へて發芽せしめ、かくて酵素ヂアスタアゼを生成せしめ、その芽の五六分に達せし時、焙りて、芽の發育を止めたるもの。ビイルの釀造、又は水飴の製造等、澱粉を糖化せしむるに用ふ。

はくーがい 迫害【名】せまりて、妨害を加ふること。

はくーかう 白膠【名】十種香の一。

はくーかう 薄行【名】輕薄なるおこなひ。

はくーかう 薄倖【名】はくうん(薄運)に同じ。

はくーがう 白毫【名】白き毛。びやくがう。

はくーかうこう 白降汞【名】水銀の、アンモニヤと抱合したる藥。純白色の塊片又は白色・無晶形の粉末をなし、多くは軟膏として、疥癬・苔癬・匐行疹・黴毒性發疹等に用ふ。

はくがうーしゆぎ 白濠主義【名】はくじんがうしうしゆぎ(白人濠洲主義)の略。

はくかうーぼく 白膠木【名】〔植〕ごんずゐ(野鴉椿)に同じ。

はくかーえふ 薄荷葉【名】薄荷腦製造の目的にて採取したる、薄荷㊀の葉。

はくーかく 白鶴【名】羽毛の白色なるつる。

はくーがく 博學【名】博く諸學に通ぜること。多學。博識。博洽。

ばくーかく 麥角【名】〔植〕『羅 Secale cornutum』麥角菌(バククキン)の生殖部。形、ほぼ鰹節に類し、子宮の收縮を促す作用あるがために、陣痛微弱・子宮出血等の藥用に供し、又、止血藥として、吐血・喀血に應用することあり。劇藥に屬す。

ばくかくーきん 麥角菌【名】〔植〕子囊菌類に屬する菌類。麥類その他の禾本科植物に寄生し、宿主の子房より、その生殖部なる角狀・黑紫色・角狀の堅き體を出して、多數の胞子を生じ、これによりて蔓延す。我國には、未だ發見せざれども、この物の寄生したる花穗は、全く結實せざるが故に、農業上の損害甚し。

ばくかくーちゆうどく 麥角中毒【名】〔醫〕麥角を過用したるによりて發する中毒症。皮膚に蟻走・疼痛・痲痺樣の感あり、嘔吐・下痢、全身の搐搦ありて、數日に死し、又、輕症なるも、血管壁の收縮によりて、身體、殊にその末梢部なる指趾の尖端、耳・鼻尖等に貧血を生じて、蒼白色又は紫青色を呈し、且つ著しく冷却し、終に營養不良の結果、その部は壞死・潰爛するに至る。これを麥角壞疽(ヱ)といふ。

ばくかくーびやう 麥角病【名】『英 Ergot』麥角菌の寄生によりて、種種の禾本科植物、殊にライ麥、時に小麥・大麥の花穗に發生する病。

ばくかくーゑそ 麥角壞疽【名】〔醫〕ばくかくちゆうどく(麥角中毒)を見よ。

はくかーしやりべつ 薄荷舍利別【名】薄荷葉を、酒精にて濡し、蒸餾水を注ぎたる上に、白糖を溶解したる藥品。綠褐色を呈し、芳香性矯味臭藥として、合劑に配す。

はくかーすゐ 薄荷水【名】薄荷精を溶したる水。みづばくか。

はくかーせい 薄荷精【名】〔化〕『羅 Spiritus menthae』薄荷油十分、酒精九十分の割合に混じたる、無色・透明の液。健胃・驅風等に用ふ。

はくーがた 箔形【名】箔にて形を附けたること、又その物。一代女「紅(モミ)がへしの下著に、箔形の白小袖を重ね」

はくかーたう 薄荷糖【名】砂糖を固めて、薄荷の香を加へたる菓子。

ばくがーたう 麥芽糖【名】〔化〕『英 Malt-sugar 又 Maltose』麥芽㊁の醱酵素(即ちヂアスタアゼ)が、澱粉に作用し、これを液化せしめて生ずる、一種の砂糖分。純粹なるは、無色・針狀の結晶體にして、成分は蔗糖に同じく、即ち蔗糖に對して、異性體をなす。水飴の甘きは、これあるがためにて、酸(サン)を以て加水・分解する時は、悉く葡萄糖に變じ、又、醱酵して、アルコオルを生成す。

はくかーぢやう 薄荷錠【名】薄荷油一分、白糖九十九分の割合に混じて、錠劑としたるもの。應用は、薄荷油に同じ。

はくかーなう 薄荷腦【名】〔化〕『羅 Mentholum』薄荷油を、食鹽と氷とにて強く冷却し、その本成分のみを固結せしめて析出したる、無色・針狀の結晶。特異なる竄透性の香氣あり。味は、はじめ灼くがごとく、後に冷凉を感ず。香水・齒磨粉等に混じ、又は鎭痛劑とす。

はくかーぱいぷ 薄荷パイプ【名】卷烟草のパイプに似たる形の物に、薄荷を裝塡したるもの。喫烟の習を擲むるに用ふ。

はくーかふ 博洽【名】諸種の學問に、博く洽(アマネ)く行き渉ること。博學。

はくーかん 薄寒【名】すこし寒きこと。うすらさむきこと。

はくーかん 白汗【名】あせ(汗)に同じ。謠曲(歌占)「面(オモテ)には白汗を流して、袂には露の繁玉(シゲタマ)」

はくーかん 白鷴【名】〔動〕『李白の詩に「請以㆓雙白璧㆒買㆓君雙白鷴㆒」とあり』山雞に似て、色白き鳥といふ。行止閑暇、支那の李昉、これを閑客に擬したりといふ。若風俗「白鷴、枯木の陰に宿し」

はくーがん 白眼【名】㊀しろめ(白眼)に同じ。㊁『晉書の阮籍傳に「籍能爲㆓青白眼㆒、見㆓禮俗之士㆒、以㆓白眼㆒對㆑之」とあり』にらむ目つき。人を冷遇する目つき。(靑眼に對して)よものあか「黑鴨(クロガモ)を連れて、五侯の門に入らんや。はた、白眼にして、世上の人を見下(ミクダ)さんや」

はくーがん 白雁【名】〔動〕游禽類に屬する鳥。羽毛、一般に純白にして、翼の風切のみ黑く、嘴は淡紅色、脚は暗紅色、翼の長さ一尺六寸。幼鳥は、頭・頸・背及び胸は灰色を呈し、嘴と脚とは褐色なり。亞米利加の極北地に產し、冬季は南方に渡り、我國にも來る。曾呂利物語「溜池あり、その內に、白雁を放し飼ひ」一代男「臺所は、白雁の胴がら、鯿汁(フナジル)の跡」

はくーがん 白岩【名】〔鑛〕『英 Granulite』多くは白色なる、片麿岩に似たる岩石。合分の鑛物は、主として長石と石英とにして、又、柘榴石などをも含有す。我國には、殆ど產せず。白粒岩。

はくーがん 剝岩【名】〔鑛〕けっしやうへんがん(結晶片岩)に同じ。

はくかーゆ 薄荷油【名】〔化〕薄荷葉に水蒸氣を通じ、蒸餾して得る、無色又は淡黃色又は帶綠淡黃色の、稀薄なる揮發油。芳香と辛味とを有す。興奮・健胃・驅風等の目的にて、醫藥に供し、又、外用として、偏頭痛・神經痛・齒痛等にも用ふ。

はくかーゑん 薄荷圓【名】薄荷精を材料として、圓形に固めたる藥。和合人「鼻紙袋に貯へおきたる富山(トヤマ)製の薄荷圓」

はくーき 白氣【名】白色の氣。白き雲氣。

白氣、日を貫く【句】「白虹(ハクコウ)日を貫く」に同じ。續紀「有㆓白氣㆒貫㆑日」

はくーき 白旗【名】しらはた(白旗)に同じ。

白旗を揭ぐ【句】降參の意を示すために、白色の旗を立て揭ぐ。降參す。降伏す。白旗を立つ。白幟(ハクシ)を立つ。

白旗を立つ【句】前條に同じ。

はくーき 博戲【名】㊀博奕の遊戲。ばくち。㊁〔法〕射利を目的として、行爲者の關與せざる偶然の事項に就きて、輸贏を決すること。

はくーき 博棊【名】碁を打つこと。

はくーき 百鬼【名】ひやくき(百鬼)に同じ。太平記「三尸・百鬼の夜深けて」

はくーぎ 薄儀【名】他人に贈る物の謙稱。菲儀。

はくーぎ 薄技【名】淺薄なる技藝。

はく-ぎ 白蟻 【名】〔動〕しろあり(白蟻)に同じ。

はく-ぎ 駁議 【名】駁撃するための議論。「批難。駁論。

は-ぐき 齒莖・齦 【名】齒の根を包める肉。はじし。はぶし。堤中納言物語「はぐきは、皮のむけたるやうにやあらん」 芭蕉「鹽鯛の齦も寒し魚の店(タナ)」

は-ぐき 羽莖 【名】羽毛の生えたる根もと。はぶし。後京極鷹三百首「はし鷹の上毛の露を打拂ひ羽莖の弱き習ひをやする」

ばく-ぎ 幕議 【名】幕府の評議。

ばく-ぎ 博戲 【名】はくぎ(博戲)に同じ。

はく-きふ 薄給 【名】少なき給金。些細の給料。

はく-きん 白金 【名】〔鑛〕㊀『爾雅に「白金謂二之銀一、其美者曰レ鐐」、説文に「銀白金也」とあり』ぎん(銀)に同じ。㊁貴金屬元素の一。銀白色にして、强き光澤を有し、黄金よりも重く、且つ堅く、通常の火には、熔くることなく、酸水素焰の高熱によく熔け、又、王水その他二三の藥品以外には侵さるることなし。性、黄金に類し、線又は箔となすことを得。世界中、産出の地域、極めて狹く、用途は、學術上には、實驗用の坩堝(ルツボ)・皿・針金・薄板・藥匙・天秤用小分銅・弗化水素用器・電解用電極等、工業上には、硫酸製造用蒸發鍋を製し、電氣機械の局部に使用す。ぷらちな。えんぶたごん。

はく-ぎん 白銀 【名】㊀〔鑛〕『書經の禹貢篇の疏に「黄金以下、惟有二白銀與レ銅耳」とあり』ぎん(銀)に同じ。㊁江戸時代に、銀を、三寸ほどの平たき橢圓形に延ばして、紙に包めるもの。通用銀の三分に當り、多くは賞與・獻呈・贈答などに用ひ、銀何枚と呼びたり。銀子。銀。

はくきん-いしわた 白金石綿 【名】〔化〕『英 Platinised asbestos』乾燥せる石綿を、鹽化白金の水溶液にて潤し、次に鹽化アンモニウムの濃溶液少量を滴下して乾したる後、磁製の坩堝(ルツボ)に入れて强熱する時、灰白色の白金粒にて被覆せらるるに至りたる石綿。鹽化アンモニウムは、加へずとも可なり。

はくきん-いんぐわし 白金印畫紙 【名】蓚酸第二鐵を、蓚酸溶液に溶し、これに、鹽化白金加里を加へたるものを塗布したる感光紙。

はくきん-えんくわ-あんもにうむ 白金鹽化安母紐謨 【名】〔化〕『英 Ammonium-chloroplatinate』はくきんえんくわすゐそさん(白金鹽化水素酸)を見よ。

はくきん-えんくわ-かりうむ 白金鹽化加留謨 【名】〔化〕『英 Potassium chloroplatinate』次條を見よ。

はくきん-えんくわ-すゐそ 白金鹽化水素 【名】〔化〕次條に同じ。

はくきん-えんくわ-すゐそさん 白金鹽化水素酸 【名】〔化〕『英 Hydroplatinichloric』白金を王水に溶かしたるものを徐徐に熱して得る、黄赤色の結晶。蒸發すれば、六分子の結晶水を含める綠色の結晶を生ず。又、アルカリに遇へば、數種の鹽(エン)を生ず。その内、最も重要なるは、白金鹽化アンモニウム・白金鹽化カリウムにして、何れも黄色・美麗なる結晶をなし、僅に水に溶解すれども、酒精には全く不溶なるより、アンモニウム及びカリウムの定量に用ふ。くろろ白金酸。鹽化白金。

はくきん-えんくわすゐそさん-あんもにうむ 白金鹽化水素酸安母紐謨 【名】〔化〕はくきんえんくわあんもにうむ(白金鹽化安母紐謨)に同じ。

はくきん-えんくわすゐそさん-かりうむ 白金鹽化水素酸加留謨 【名】〔化〕はくきんえんくわかりうむ(白金鹽化加留謨)に同じ。

はくきん-こく 白金黑 【名】〔化〕『英 Platinum black』白金鹽化水素酸或はそのアンモニウム鹽を熱する時、析出せらるる、灰黑色・極微粒狀の白金。多量の酸素を吸收する性あるにより、强き酸化劑となり、又、接觸作用をなすにより、氣體化合の觸媒として用ふ。

はくきん-しやしん 白金寫眞 【名】『英 Platino-type』白金の鹽類(エンルヰ)を用ひて燒きつけたる寫眞。黑色・帶青黑色・褐色等を呈し、雅致ありて、永く變色せず。西曆一八七三年、英人ウイリス(W. Willis)の發明に係る。

はくきん-ぞく-げんそ 白金屬元素 【名】〔化〕『英 Platinum family』白金に親近なる金屬元素。ルテニウム・ロヂウム・パラヂウム(以上三者は、原子量も少く、比重も輕し)・オスミウム・イリヂウム・白金(以上三者は、原子量も多く、比重も重し)の六金屬。何れも、産出量少く、貴金屬に屬し、殆ど常に相伴なひて産出す。

はくきん-でんとえき 白金電鍍液 【名】白金面上に、黑色白金を電鍍するに用ふる溶液。

はくきやう-きん 白殭菌 【名】〔動〕『羅 Botritis bassiana』蠶兒を硬化する病の一たる白殭病の病原菌。

はくきやう-びやう 白殭病 【名】蠶の硬化病の一。白變・硬化して、死に至るもの。白殭菌の寄生によりて發す。夏蠶最もこれに罹りやすし。しやり。おしやり。こしやり。せきくわいびやう。

ばく-ぎやく 莫逆 【名】ばくげき(莫逆)を見よ。

はく-きゆう 白宮 【名】ほわいとはうす(白館)に同じ。

はく-ぎよ 白魚 【名】㊀白色の魚。平家「周の武王の舟にこそ白魚は躍り入りたるなれ」㊁〔動〕しらうを(白魚)の漢名。㊂〔動〕にごひ(似鯉)の漢名。

白魚、舟に入る 【句】『史記の周紀に見ゆ』支那周の武王の、殷の紂を討たんとて、黄河の孟津を渡りし時、中流にて、白魚躍りて、その舟に入りきといふ故事。魚は介鱗の物なれば、兵の象、白は殷家の正色、故に、殷の天下の周に歸すべき前兆なりといふ。

はく-きよい 白居易 【名】〔人〕支那唐の詩人。字は樂天、香山居士と號す。貞元十七年、進士となり、次いで翰林學士となり、事に由りて、江州の司馬に貶せらる。後、諸官を經て、致仕し、大中元年卒す。年七十五。尙書右僕射を贈らる。詩名、李・杜に比せられ、その詩文集白氏長慶集は、廣く我國にも行はれ、殊に平安朝の文學は、これに負ふ所多し。

白居易の三友 【句】『白居易の北窓三友詩に見ゆ』白居易が、常に友として愛せし三つのもの、即ち琴・酒・詩。

白居易の四友 【句】白居易が、最も親しく交はりたる四人の友、即ち僧如滿・韋楚・劉夢得・皇甫明。

はくぎよ-かん 白魚羹 【名】白豇豆(シロササゲ)を材料として、羊羹のごとくにし、魚の形を拵へたる中に、茹でたる栗を入れ、蒸して、よき時分に切りたる食品。

はく-ぎよく 白玉 【名】白色のたま。しらたま。

白玉の微瑕(カヒ) 【句】『貞觀政要に「君子小過、蓋白玉微瑕、小人小善、乃鉛刀之一割」、史記の龜策傳に「黄金有レ疵、白玉有レ瑕」とあり』「白璧(ハクヘキ)の微瑕」に同じ。

はく-ぎよく 璞玉 【名】はく(璞)に同じ。

はくぎよく-きやう 白玉京 【名】『李白の詩に「天上白玉京、十二樓五城」とあり』天帝の宮殿。天宮。

はくぎよく-しふ 柏玉集 【名】〔書〕後柏原天皇の歌集。十卷。三玉集の一。

はくぎよく-ばん 白玉盤 【名】『李白の詩に「小時不レ識レ月、呼作二白玉盤一」とあり』つき(月)㊀の異稱。

はくぎよく-ろう 白玉樓 【名】『唐書の李賀傳に「李賀夢二人持レ版告白、天帝白玉樓成、請レ君爲レ記。賀遂卒」とあるに本づく』文人・墨客などの死後に赴くといふ處。玉樓。

白玉樓中の人となる 【句】文人・墨客の死去するにいふ語。白玉樓成る。白玉樓に上(ノボ)る。

白玉樓成る 【句】前條に同じ。

白玉樓に上(ノボ)る 【句】前條に同じ。

はく-く 白駒 【名】㊀毛色の白きこま。㊁日かげ。光陰。

白駒、隙(ゲキ)を過ぐ 【句】『莊子の知北遊篇に「人生二天地之間一、若二白駒過一レ隙、忽然而已」、史記の留侯世家及び魏豹傳に「人生二一世間一、如二白駒過一レ隙」とあり』白駒は日影、隙は壁隙の義なる由、

史記の魏豹傳の顏師古の註に見ゆれど、墨子の「猶㆓駟之過㆑郤」、禮記の三年問篇なる「若㆓駟之過㆑隙」、莊子の盜跖篇なる「無㆑異㆓騏驥之馳過㆑隙」、史記の李斯傳なる「如㆘騁㆓六驥㆒過㆗決隙㆖」など、何れも同義なれば、駒は實際の駒と解すべく、白は、ただ白日の意を寓したるなるべし』光陰の經過の迅速なる譬。〔諺語〕

はく-ぐう 薄遇【名】れいぐう(冷遇)に同じ。(厚遇に對して)

はくくつ-さい 白屈菜【名】〔植〕くさのわう(白屈菜)の漢名。

はぐくみ 育【名】はぐむこと。養育。保護。源氏「上下のはぐくみは、おしなべてわが御あつかひにてなん」

はぐくみ-たつ 育立つ【名】やしなひたつ。育て上ぐ。養育す。夫木「春雨を花もさこそは賴むらめはぐくみたつるかぞいろはとて」

は-ぐくむ【動四他】『羽含(クク)むの義』㊀親鳥が、雛を、翼にて抱き被ひて育つ。萬葉「旅人の宿(ヤドリ)せむ野に霜降らば吾が子羽裹(ハグク)め天(アメ)の鶴(タヅ)むら」㊁養ひそだつ。養育す。はごくむ。〔育む〕源氏「はぐくむ人、あまたあるやうなりしかど」同「いわけなき內親王ひとり、とりわきてはぐくみおほして」㊂撫でいつくしむ。たすけ守る。擁護す。守護す。萬葉「大舟に妹乘るものにあらませばはぐくみ持ちて行かましものを」新千載「うきをなほはぐくむ神の誓こそ身のことわりのたのみなりけれ」

は-ぐくもる【動四他】前條㊁㊂に同じ。〔古語〕萬葉「武庫(ムコ)の浦の入江のすどりはぐくもる君を離れて戀に死ぬべし」

は-ぐくもる【動四自】はぐくみ護らる。こもる。〔古語〕夫木「草深き霞の谷にはぐくもる鶯のみや昔戀ふらし」

はく-くわ 白火【名】白色の火。

はく-くわ 白花・白華【名】白色のはな。

はく-くわ 白禍【名】『英 White peril. くわうくわ(黃禍)に對して言ひ出したる語』白色人種が、同人種以外の人種を攻擊・迫害すること。白人禍。

はく-くわ 舶貨【名】舶來せる貨物。たうぶつ。舶來品。

はく-ぐわ 白畫【名】はくべうぐわ(白描畫)に同じ。

はく-くわう 白光【名】㊀白色のひかり。㊁〔天〕ころな㊀に同じ。

ばくくわう-し 麥光紙【名】麥藁にて漉きたる一種の紙。

はく-くわく【名】〔植〕かきつばた(燕子花)㊀に同じ。

はくくわ-さい 白花菜【名】〔植〕ふうてうさう(風鳥草)の漢名。

はくくわさい-くわ 白花菜科【名】〔植〕ふうてふさうくわ(白花菜科)に同じ。

はくくわ-の-ふなばら 白花白薇【名】〔植〕くさたちばな(草橘)に同じ。

はく-くわん 薄官・薄宦【名】薄給の官吏。

はく-ぐわん 白館【名】ほわいとはうす(白館)に同じ。

はく-くわん 剝官【名】舊陸海軍刑法の附加刑の一。將校及び同相當武官の官職を剝奪するもの。

ばく-くわん 爆管【名】〔兵〕『英 Primer』發火の火具の一。藥莢の底に嵌裝し、莢內の裝藥に點火するに用ふるもの。火管。

はく-け 博戲【名】はくき(博戲)に同じ。紀「博戲、ハクケ」

はく-け 伯家【名】しらかは(白川)㊂を見よ。

はく-けい 伯兄【名】第一の兄。長兄。

はく-げい 博藝【名】諸種の藝能に通ずること、又その人。

ばくけい-あん 麥計庵【名】ばくと(麥斗)を見よ。

はく-げき 迫擊【名】せまりうつこと。

はく-げき 搏擊【名】㊀手にてうつこと。たたくこと。㊁くみうち。挌鬪。㊂責めつくること。おさへつくること。

ばく-げき 駁擊【名】他人の言論を批難・攻擊すること。

ばく-げき 莫逆【名】『莊子の大宗師篇に「四人相視而笑、莫㆑逆㆓於心㆒」とあり。心に逆(サカラ)ふこと莫(ナ)しとの義』意氣相投じ、極めて親密なること。「莫逆の契(チギリ)」「莫逆の交(マジハリ)」「莫逆の友」

はくげき-はう 迫擊砲【名】〔兵〕『英 Bomb-gun』步兵の敵壘に突貫する時、これを援助するため、敵の間近に運びゆきて發射する、裝置輕便なる火砲。形、花火の筒に類し、日露戰爭の時、我軍にて、旅順攻擊に使用せしを始とす。擲射砲。

はくけ-しんたう 伯家神道【名】神祇伯白川家にて唱道せる、一派の神道。神祇官にて祀れる宮中・京中・五畿・七道諸國の天神・地祇すべて三千一百三十二座の神を主神とし、古事記・日本紀・古語拾遺・新撰姓氏錄・延喜式を經典とす。初は、單に行事・作法に重きを置きしが、後には、他の神道との對抗上、學說にも力を用ふるに至り、遂に復古神道と混成するに至れり。

はく-げつ 白月【名】㊀光の明かなる月。明月。㊁びやくぐわつ(白月)を見よ。

はく-けっきう 白血球【名】〔醫〕『英 White corpuscle』血球の一。無色・有核の單一なる細胞。柔軟なる一種の原形質より成り、赤血球よりやや大なれども、數は遙かに少く、血液中のみならず、淋巴腺樣組織・上皮細胞間及び諸部腺細胞にも存在して、アミイバ樣の運動をなし、身體內に侵入し來れる細菌を撲滅する作用をなす。脾・肝・骨髓・淋巴腺等の內にて生成せられ、脾・骨髓內等にて赤血球に化し、更に脾・肝等に於て死滅す。淋巴細胞。(赤血球に對して)

はくけつ-びやう 白血病【名】〔醫〕『羅 Leucaemoie』造血系統の機能障害によりて、白血球非常に增加し、甚しき貧血を極むる病氣。二十歲乃至五十歲頃の人の、貧血性なる者に多く、血液は、肉眼にても、淡白・稀薄に見ゆ。

はく-けふ 迫脅【名】けふはく(脅迫)に同じ。

はく-けん 白犬【名】しろいぬ(白犬)に同じ。

はく-けん 白鍵【名】〔音〕『英 White key』ピヤノ・オルガンなどの鍵の、白色なるもの。木の臺に象牙又はセルロイドを貼りて造る。(黑鍵に對して)

はく-けん 剝權【名】皇族の懲戒罰の一。皇族の特權の全部を剝奪するもの。

はくげん-がく 博言學【名】『英 Philology』言語及び文字を通して、人文の發達を研究する學問。久しく言語學と混同せられたれど、その目的とする所は、大いに異なり。

はく-こ 白虎【名】㊀毛色の白きとら。㊁びやくこ(白虎)を見よ。

はく-こ 白狐【名】びやくこ(白狐)を見よ。

はく-こ 白袴【名】白き袴。

はく-こ 博古【名】古の學問・考證に通ずること。

はく-こ 泊乎【貌】はくぜん(泊然)に同じ。

ばく-こ 邈乎【貌】他人をうとみ輕んずるさま。貌焉(ベウエン)。

はく-こう 白虹【名】白色の虹。はこう。白氣。扶桑略記「有㆑星、其光如㆓白虹㆒、本細、末漸廣、程十里許」

白虹、日を貫く【句】『戰國策の魏國の條に「聶政之刺㆓韓傀㆒也、白虹貫㆑日」とあり』白氣、日を侵す。支那にて、古、國に兵亂ある天象としたり。平治「信西、九日の午の刻に、白虹日を貫くといふ天變を見て、今夜御所へ夜討入るべしとは知りたりけるにや」平家「蒼天許したまはねば、白虹、日を貫いて徹らず、秦の始皇は遁れて、燕丹遂に亡びにけり」

はく-こう 薄厚【名】こうはく(厚薄)に同じ。

はくこう-ろくでふ 白孔六帖【名】〔書〕支那唐の白居易の六帖三十卷と宋の孔傳の續六帖三十卷とを合はせしもの。成語・故事を雜載して、詞藻の用に供す。一百卷。ぎそろくでふ(義楚六帖)・めいぶつろくでふ(名物六帖)參照。

はく-こく 白黑【名】こくびやく(黑白)に同じ。謠曲(卒都婆小町)「臂に掛けたるあじかには、白黑の田烏子(クワヰ)あり」

はく-こく 白國【名】〔地〕べるぎい(白耳義)に同じ。

はくごく-ぎれ 白極切【名】名物切(メイブツギレ)の一。花色の緞子にて、襷に尾長鳥の二羽組合ひたる丸紋に、寶づくしを散したるもの。足利義政に仕へし鼓打白極某所

持の鼓の袋の地と同種のものといふ。

はくーこつ 白骨【名】雨露に曝されて、白くなりたる骨。しやりこつ。

白骨の御文(オフミ)【句】本願寺の蓮如上人の御文(オフミ)の內、朝に紅顏を誇れる身も、終には白骨と化するが、人間の實相なる由を說きたるもの。染模樣妹背門松「元朝のお勤、これからが白骨のお文樣、そなたや、わしや、腹の子の未來の引導聽聞しや」

はくこーづ 博古圖【名】〔書〕支那宋の徽宗の時、宣和殿內に藏せし古器に就き、三代より隋に至るまでの鼎・彝・尊・罍・簠・簋・鐘・磬等を摸寫して、その說明・考證をなししもの。收むる所の古器、眞贋雜糅すといふ。三十卷。宋の王黼の撰。詳しくは、宣和博古圖といふ。

はくこつーくわん 白骨觀【名】〔佛〕九想の一。無常を知って、執著の念を拂はん爲に、白骨を觀ずること。骨想。骨鎖觀。

はくこーつうぎ 白虎通義【名】〔書〕びやくこつう(白虎通)を見よ。

はくーさ 白沙【名】はくしや(白沙)に同じ。謠曲(海士)「骸(カバネ)を白沙に埋んで、日月の算を經」

はくーざ 箔座【名】德川幕府にて、箔屋を取締り、箔運上を取扱はしむるために設けし所。元祿九年に設置し、寶永六年に廢止せり。

はーぐさ 葉草【名】くさば(草葉)に同じ。〔古語〕

はーぐさ 莠・稂【名】水田に生じて、稻を害する雜草。たのひえ。祕藏抄「作るべきぬしやなからん小山田にはぐさまじりのそろゐ生ひけり」

はーぐさ【名】〔植〕せんにんさう(仙人草)に同じ。

はくーさい 薄才【名】淺薄なる才智。非才。

はくーさい 白菜【名】〔植〕さんとうはくさい(山東白菜)の略。

はくさい 百濟【名】〔地〕ひやくさい(百濟)に同じ。聖德太子和讚「百濟の阿佐太子禮(ライ)せしむ」

はくーさい 博採【名】ひろく採り入るること。

はくーさい 舶載【名】一 船舶に載すること。船舶に載せて運ぶこと。二 はくらい(舶來)に同じ。

ばくーさい 博塞【名】『杜甫の詩に「相與博塞爲㆓歡娛㆒」とありて、註に「邵寶曰、博賭塞博爲㆑樂也、博局、戲博盡㆓關塞㆒」と見ゆ』雙六(スゴロク)を打つこと。

はくさいーおび 白犀帶【名】犀角にて飾りたる革帶。和名「白犀帶、白氏詩云、通㆑天白犀帶、照㆑地紫麟袍」

はくーさう 白草・白艸【名】〔植〕『漢書に「鄯善國多㆓白草㆒」とありて、顏師古の註に「白草似㆑莠而細、無㆑芒、其乾熟時、正白色、牛馬所㆑嗜也」と見ゆ』中央亞細亞邊に產して、色白く、牛馬の嗜み食ふといふ、一種の草。

はくーさう 白桑【名】〔植〕まぐは(眞桑)の漢名。

はくーさう 薄葬【名】葬式を簡略にすること、又、簡略なる葬式。

はくーさう 剝棗【名】陰曆八月の異稱。

はくーざう 白象【名】毛色の白き象。宇治「普賢菩薩、白象に乘りて、やうやうおはして」

はくーざう 白藏【名】『五色を四季に配する時、秋は白色に當り、且つその收藏の季なるによりていふ』あき(秋)の異稱。

はくーざうす 白藏主【名】『ざうす(藏主)を見よ』能(ノウ)の狂言「こんくわい」の中に、或獵師の伯父なる由に記せる僧。古狐、これに化け、獵師を說得して、殺生を思ひとまらせんとする趣に作れり。若風俗「白藏主の棲みたまへる松林寺の三足狐咄(ミツアシキツネバナシ)も、をかしからず」鶉衣「異見いふ尻に尾花や白藏主」

はくさーかづら はくさ葛【名】〔植〕あをつづら(青葛)に同じ。

ばくーさく 摸索【名】もさく(摸索)を見よ。

はくーさつ 搏殺【名】手にて搏ちて殺すこと。はりころすこと。

はくーざつ 駁雜【名】ざっぱく(雜駁)に同じ。

はくーさん 白山【名】〔地〕『四時白雪を戴くによりていふ』加賀・飛驒の兩國に跨れる休火山。北陸道第一の高山。大汝(オホナンジ)嶽・劒ケ嶽・御前(ミサキ)嶽・別山(ベツサン)の四峯に分れ、御前嶽最も高く、高さ八九一七尺あり。富士山・立山(タチヤマ)と共に、我國の三大山と稱せらる。しらやま。別稱、天山・越白嶺(コシノシラネ)。

はくさんーあふひ 白山葵【名】〔植〕まひづるさう(舞鶴草)に同じ。

はくさんーいちげ 白山一華【名】〔植〕次條の略。

はくさんーいちげさう 白山一華草【名】〔植〕毛茛(キンポウゲ)科に屬する多年生の草。高さ一尺餘に達し、葉は地下莖より出て、長き葉柄を具ふる三出複葉にして、各小葉は更三裂し、各裂片は、更に分裂して、線形の小片となる。毛茸を有し、花莖は直立して、葉狀の總苞を有し、夏季、その頂に、花冠なくして、白色・花冠樣の萼を有する花、繖形花序をなして開く。高山に自生す。はくさんいちげ。

はくさんーかたゐ 白山癩【名】びやくらい(白癩)に同じ。

はくさんーかづら 白山葛【名】〔植〕あをつづら(青葛)に同じ。

はくさんーこざくら 白山小櫻【名】〔植〕なんきんこざくら(南京小櫻)に同じ。

はくさんーさいこ 白山柴胡【名】〔植〕繖形科、みしまさいこ屬の草。高さ二尺許、梢葉は葉柄無く、短くして尖り、根葉は箆形なり。花は繖形花序に排列し、綠色を呈す。各地の山地に自生す。とうごくさいこ。

はくさんーさう 白山瘡【名】はくさんかたゐ(白山癩)に同じ。

はくさんーじ 柏山寺【名】羽前國山形市千歲公園にある天台宗の寺。本尊は藥師如來。僧行基の開基。もと國分寺の一。公園も、もとこの寺の境內たりし地にして、毎年、四月八日と八月八日とに、大法會を行ふ。

はくさんーしちしや 白山七社【名】加賀國の白山比咩(シラヤマヒメ)神社の本社と、その攝社・末社と、即ち白山・金劍・岩本・三宮(以上、本宮四社)・中宮・佐羅・別宮(以上、中宮三社)の總稱。

はくさんーじんじや 白山神社【名】一 東京市小石川區白山前町に鎮座せる郷社。祭神は伊弉册(イザナミ)尊・菊理姫(ククリヒメ)尊・黃泉道守(ヨモツチモリ)神。二 美濃國郡上(グジヤウ)郡長瀧村に鎮座せる縣社。祭神は伊弉册(イザナミ)尊。加賀國白山の開創と同時の建立に係り、爾來白山中宮と呼ばれ、その別當を長瀧寺といへり。加賀國白山の美濃國遙拜所なるべしといふ。明治十二年類燒し、舊觀を失へり。しらやまじんじや(白山神社)・へいせんじ(平泉寺)參照。

はくさんーしやくなげ 白山石南【名】〔植〕石南(シヤクナゲ)科に屬する常綠灌木。高さ一丈餘に達することあり。葉は革質にして、長橢圓形又は長倒卵形をなし、下面に帶褐白色の毛密生し、花は合瓣花にして、數箇づつ集り生じ、通常白色なり。高山に自生し、觀賞用に供す。しろしやくなげ。

はくさんーすげ 白山菅【名】〔植〕莎草(カヤツリグサ)科に屬する多年生の草。莖は簇出して、高さ七寸乃至一尺五寸に達し、淡綠色にして微毛あり。葉は扁平・狹長、花は四五月の頃開き、無柄にして、莖頂に四箇乃至九箇、短き橢圓形又は殆ど球狀なる小穗狀花序に配列し、銀色の微毛あり。高山に自生す。

はくさんーぜんぢやう 白山禪定【名】佛法修行のために、加賀國の白山に登ること。ぜんぢやう(禪定)二參照。謠曲(佛の原)「われ、未だ白山禪定せず候ふほどに」

はくさんーちどり 白山千鳥【名】〔植〕蘭科に屬する多年生の草。莖は平滑にして、直立し、分枝せず、高さ六七寸乃至一尺ばかり。葉は下部のは倒披針形、上部のは、廣線形をなして、基脚の花莖を包む。花莖の上部に、夏季、淡紅色の不整齊花、總狀花序をなして開く。觀賞用として培養し、根はサレップ根に代用す。各地の山地に自生す。

はくさんーなでしこ 白山撫子【名】〔植〕しらひげさう(白髭草)に同じ。

はくさんーはたざを 白山旗竿【名】〔植〕十字花科に屬する草。高さ一尺餘に達し、根生葉は、大根のに似て、羽狀に深裂し、梢葉は卵形にて、粗鋸齒を有し、葉・莖共

に微毛あり。夏季、白色の小花、總狀花序をなして開き、長角にして、長さ約五分の果實を結ぶ。各地の山地に自生す。

はくさん-ふうろ 白山風露・白山牻牛兒苗・紫地楡【名】〔植〕牻牛兒（フウロサウ）科に屬する多年生の草。高さ一二尺に達し、莖は上部に毛を有す。葉は長き葉柄と卵形の托葉とを具へ、掌狀に五裂乃至七裂し、裂片又分裂缺刻あり。夏季莖頂に五瓣・紅紫色の花を開く。各地の山地に自生す。あかぬまふうろ。）

はくさん-ふうろさう 白山風露草・白山牻牛兒苗・紫地楡【名】〔植〕前條に同じ。

はくさん-ぼく 堅莢樹【名】〔植〕忍冬（スヒカツラ）科に屬する喬木。高さ二三十尺に達し、葉は廣卵形にして、先端銳尖をなし、粗鋸齒あり。白き小花、大なる聚繖花序をなして開き、漿果を結ぶ。我國南方の暖地に產す。やまてらし。

はくさん-ぼん 白山本【名】加賀國白山比咩（シラヤマヒメ）神社傳來の古書。近古、本願寺の僧の掠奪に會ひ、今、纔かに存するものの內、親房の再撰に係るといふ神皇正統記、又、同社の戰國時代に於ける盛衰を知るに必要なる莊嚴講中舊錄など、珍重せらる。

はくさん-ほんぐう 白山本宮【名】しらやまじんじや（白山神社）を見よ。

はくさん-よもぎ 白山蓬【名】〔植〕あさぎりさう（朝霧草）に同じ。

はくさん-らん 白山蘭【名】〔植〕㊀ぎんらん（銀蘭）に同じ。㊁すずらん（鈴蘭）に同じ。

はくざん-ろ 博山爐【名】『富士山に象（カタ）どれるものにて、博の字も、富と支那音相近きによりて用ひたりといふ』形、我國の富士山に似たる、支那の香爐。

はくさんゐ 伯三位【名】『位は、上の三の字の韻に引かれて、ミと發音す』はく（伯）㊁を見よ。

はくさん-をみなへし 白山女郎花【名】〔植〕きんれいくわ（地花菜）に同じ。

はく-ざめ 箔鮫【名】〔動〕つのざめ（角鮫）に同じ。

はく-し 白紙【名】㊀色の白き紙。しらかみ。㊁物を書きてあらぬ紙。㊂和歌の會などに、題と作者の官位・姓名とのみを認めて、歌を書かぬこと。著聞「白紙を置く事は、作法ある事なり。題・位置ばかりを書きて」㊃唐紙（タウシ）の一種。色白くして、質甚だ薄きもの。一帖は九十六枚ありて、多くは畫をかくに用ふ。

はく-し 白絲【名】白き絲。染めぬ絲。

白絲に泣く【句】『馮衍の顯志賦に「楊朱號㆓乎衢路㆒兮、墨子泣㆓乎白絲㆒、知㆓漸染之易㆒㆑性兮、怨㆓造作之弗㆒㆑思」とあるに本づく。「岐路（キロ）に泣く」參照』白き絲のいかなる色にも染め得るより、人の性の移りやすきを思ひて、悲しむ。

はく-し 白齒【名】白き齒。しらは。

はく-し 白髭【名】白きうはひげ。

はく-し 白幟【名】白きはた。白旗（ハクキ）。

白幟を立つ【句】『五代史の閩世家に「舟中僞立㆓白幟㆒請㆑降」とあり』「白旗を揭ぐ」に同じ。

はく-し 白熾【名】はくねつ（白熱）に同じ。

はく-し 白詩【名】白居易の詩。

はく-し 博士【名】㊀『顏氏家訓に「鄴下之諺曰、博士買㆑驢、書券三紙、未㆑有㆓驢字㆒」とあり』博學の士。ものしり。學者。㊁支那の官職の一。秦代には、學識博通の士任ぜられ、淸代には、國子監と欽天監とにありて、七品以下の小官なりき。㊂現今の學位の稱號。法學博士・經濟學博士・醫學博士・藥學博士・文學博士・理學博士・工學博士・農學博士・林學博士・獸醫學博士・商學博士の十一種あり。はかせ。どくとる。㊃學位の受領者。㊄その年に、方位に向ひて興造するに宜しといふ吉神。寅・卯・辰の年は未申、巳・午・未の年は戌亥、申・酉・戌の年は丑寅、亥・子・丑の年は辰巳の方に在りといふ。

はく-し 箔師・箔師【名】箔打（ハクウチ）を業とする人。

はく-し 薄志【名】㊀薄弱なる意志。「薄志・弱行」㊁すんし（寸志）に同じ。

はく-し 百司【名】ひやくし（百司）に同じ。平家「九州を統領し、百司を進退して」

はく-じ 白字【名】㊀白色の顏料にて書きたる文字。㊁中くぼに印刻したる文字。即ち捺せば白く表はる。陰文。識。

はく-じ 白磁【名】純白の磁器。

ばく-し 幕使【名】幕府の使者。

ばぐ-し 馬具師【名】馬具を造り、又は賣る人。

はくし-いん 白紙印【名】はんし（判紙）に同じ。

はく-しう 白秋【名】『はくざう（白藏）を見よ』あき（秋）に同じ。（青春・朱夏・玄冬に對して）

はく-しう 柏舟【名】『はく（柏）を見よ』柏の材にて造りたる舟。

柏舟の操（ミサヲ）【句】『詩經の鄘風柏舟篇に本づく』寡婦の貞操。

はく-しう 伯州【名】〔地〕はうき（伯耆）に同じ。柳樽「はうきの國をはく州とはいい理窟」

ばく-しう 麥秋【名】『季節は夏なれども、百穀成熟の時は秋なるより譬へていふ』㊀麥を刈る時。むぎあき。㊁陰曆四月の異稱。

ばく-しう 麥秀【名】次條を見よ。

麥秀の詩【句】〔文〕『史記の宋世家に「箕子朝㆑周、過㆓故殷墟㆒……乃作㆓麥秀之詩㆒以歌㆓詠之㆒」とあり』支那殷の王族なる箕子、周に朝せんとして、殷の故墟を過ぎ、宮室毀壞し、禾黍の生ひたるを見て、感傷の餘、詠じたる「麥秀漸漸兮、禾黍油油、彼狡童兮、不㆓與㆑我好㆒兮」の詩。

麥秀の嘆【句】『前條の故事に本づく』故國の頹廢せるを嘆ずること。

はくしう-もの 伯州物【名】伯耆國の刀工の鍛へたる業物（ワザモノ）。

はく-しき 博識【名】博く事物を識りてあること。ものしり。博學。博聞。

はくし-くわい 博士會【名】文部大臣の監督の下に、學位の授與・褫奪に關する事項を審查する議決機關。法學博士會・經濟學博士會・醫學博士會・藥學博士會・工學博士會・文學博士會・理學博士會・農學博士會・林學博士會・獸醫學博士會・商學博士會の十一種あり。各、當該博士を以て組織し、各博士會を通じて、互選の上、文部大臣の認可を經たる會長一人、外に幹事（文部省の高等官）一人、書記（文部屬）二人を置き、議決は、會員の過半數出席を要し、學位授與の議事は、出席會員の三分の二以上、褫奪は四分の三以上の多數によりて決す。

はくしくわい-くわいゐん 博士會會員【名】博士會を組織する會員。

はくし-くわんぷ 白紙官符【名】捺印せざる官符。

はくし-しゆぎ 白紙主義【名】『英國にて經驗說を唱へたる哲學者ロック（J.Locke）の、人の心を白紙に譬へて、吾人の觀念は、すべて、吾人が所動的に受け入るるものなりと云ひしに本づく』一定の政見・政綱を發表せず、臨機應變に、是を是とし、非を非として、適宜の施政を爲さんとする主義。政友會總裁故原敬（サトシ）の標榜せしもの。原敬（ハラケイ）主義。

はく-じた 箔下【名】箔押（ハクオシ）をなす時の下塗。山梔（クチナシ）若しくは石黃（セキワウ）・雌黃（シワウ）などを用ふ。油糟「箔下に塗りし膠や强からん」

はくし-ちやうけいしふ 白氏長慶集【名】〔書〕はくしもんじふ（白氏文集）を見よ。

はく-しつ 白質【名】〔生〕種種の方向に走れる神經纖維より成り、概して腦質の內部を形成す。

はく-じつ 白日【名】㊀晴天の日光。「晴天・白日」參照。太平記「浮雲の擁蔽を拂ひ、將に白日の餘光を耀かさんとす」㊁はくちう（白晝）に同じ。太平記「院院の燒燈、白日に異ならず」

白日、度を失はず【句】「明月地に墜ちず、白日度を失はず」を見よ。

はくじつ-さう 白實草【名】〔植〕あやめ（菖蒲）㊀の漢名。

はくじつ-む 白日夢【名】『英 Day-dream』空想を逞しくすること。

はくーしふ 白集 【名】〔書〕はくしもんじふ(白氏文集)の略。

はくーしん 白臣 【名】 匹夫・野人にして、官に任ぜられたるもの。

はくーじん 白人 【名】 ㊀しろうと(白人)の音讀。はく。〔徳川時代の語〕 ㊁『顔一面に白粉(ヲシロイ)を施したるによりていふ。一說に、遊藝の心得なきによりてなりと』かくし賣女。密淫賣婦。しろくび。〔江戸の語〕 ㊂徳川時代の大阪の非官許の遊女中、最上なるもの。もと、前帶に、雪駄を穿き、後世は、帶を背後に結び、晴雨にかかはらず下駄を穿きたり。〔娟人・素人〕 織留「風呂屋素人(ハクジン)を忍び連れて」 天の網島「曾根崎の茶屋紀ノ國屋の小春といふ白人に」 ㊃はくしよくじんしゆ(白色人種)の略。

はくーじん 白刃 【名】 刀の拔身(ヌキミ)。しらは。ぬきみ。白兵。

白刃前に交れば、流矢を顧みず 【句】『宋書の袁顗傳に「白刃交レ前、不レ顧ニ流矢一、事有ニ緩急一故也」とあるに本づく』大難に際しては、小難を顧みる暇なき譬。〔諺語〕

白刃踏むべし 【句】『中庸の第九章に「子曰、天下國家可レ均也、爵祿可レ辭也、白刃可レ踏也、中庸不レ可レ能也」とあるに本づく』勇氣ある形容。〔諺語〕

白刃胸に扞(フセ)げば、目に流矢を見ず 【句】『荀子の彊國篇に「白刃扞ニ乎胷一、則目不レ見ニ流矢一、拔戟加ニ乎首一、則十指不レ辭レ斷。非レ不ニ以レ此爲レ務也。疾養緩急之有ニ相先者一也」とあるに本づく』「白刃前に交れば、流矢を顧みず」に同じ。〔諺語〕

ばくーしん 幕臣 【名】 幕府の臣下。即ち旗下(ハタモト)及び御家人(ゴケニン)。

ばくーじん 麥蕈 【名】〔植〕しようろ(松露)㊁に同じ。

はくじんーがうしうーしゆぎ 白人濠洲主義 【名】『英 White Australia』 濠洲人が、白人以外の人種の入國・植民を許可せざらんとする主義。白濠主義。

はくじんーくわ 白人禍 【名】 はくくわ(白禍)に同じ。

はくーじんしゆ 白人種 【名】 はくしよくじんしゆ(白色人種)の略。

はくじんーや 白人屋 【名】 白人㊂を抱へ置く家。 假名手本忠臣藏「槌でお家を白人屋の亭主」

はくしーもんじふ 白氏文集 【名】〔書〕 支那唐の白居易の詩文集。七十一卷。もと七十五卷あり、その內、後集二十卷、續後集五卷を除きたる五十卷は、居易の友元稹の長慶四年の編に係り、白氏長慶集といふ。一說に、後・續二集は、寶曆以後の作なれども、舊名を襲ひて、全部を長慶集と稱すべしと。宋に至りて、續集數卷逸し、七十一卷となれり。我國平安朝時代には、單に文集と呼び、廣く朝野に傳誦せられたり。

はくーしや 白砂・白沙 【名】 色の白きすな。しらすな。

はくーしや 拍車 【名】 馬に乘る人の、靴の踵に取附け、一端に齒車ありて、馬の腹部を刺激して駕御する用をなす金屬(銅・鐵・洋銀など)製の裝置。陸軍にては、將官のは金色に、佐官以下は銀色に著色す。

(はくしや)

はくーしや 薄謝 【名】 手薄き謝儀。禮物の謙稱。薄儀。

はくーじや 白蛇 【名】 病的に色素の缺乏せる蛇。 盛衰記「沛公は、貴坊が屬鏤(シヨクル)を傳へ、白蛇の靈を切って」

はくーじやう 薄情 【名】 義理・人情のうすきこと。輕薄。

はくーじやう 白狀 【名】 ㊀己れの罪狀を白(マヲ)すこと。 ㊁罪人の白(マヲ)し出でたる箇條を記したる狀。くちがき。口供。平家「西光が白狀取って參れ」 愚管抄「白狀書かせて、判おさせて」 ㊂心中に包み隱したる事實を打明くること。和合人「あぶなく淵(アド)へ抛りこまれ、はぐりましたといふが實錄だと、自身の白狀でござい」

ばくーしやう 幕將 【名】 幕府の大將。

はくしやうーれい 白漿令 【名】 もんどのかみ(主水正)の唐名。

はくーしやく 伯爵 【名】 しやく(爵)㊁㊂を見よ。

はくーじやく 薄弱 【名】 ㊀かよわきこと。虛弱。薄脆。 ㊁たしかならぬこと。「證據薄弱」

はくしやくーぎゐん 伯爵議員 【名】 華族議員の一。伯爵を有する者にて、滿二十五歳に達し、同爵の互選によりて議員となりたるもの。

はくしやみ 【名】 くさめ(嚔)に同じ。

はくーしゆ 薄酒 【名】 香味のすくなき酒。

はくーしゆ 白首 【名】 ㊀しらがあたま。しらがくび。白頭。 ㊁としより。老人。白頭。

はくーしゆ 白鬚 【名】 白きあごひげ。しらひげ。

はくーしゆ 柏酒 【名】 はくえふしゆ(柏葉酒)に同じ。

はくーしゆ 拍手 【名】 掌を打鳴らすこと。かしはで。

はくーじゆ 白綬 【名】 ㊀白色の綬。 ㊁じゆ(綬)㊁に同じ。

ばくーしゆ 麥酒 【名】 ㊀『後漢書の范冉傳に「齎ニ麥酒一、於ニ道側一設レ壇、以待レ之」とあり』麥にて釀造したる酒。 ㊁びいる(麥酒)に同じ。

はくーしゆく 伯叔 【名】 ㊀兄と弟と。 ㊁父の兄弟。をぢ。

ばくしゆーぜい 麥酒稅 【名】 びいるぜい(麥酒稅)に同じ。

はくーしよ 薄暑 【名】 夏の初の、少しの暑氣。

はくーじよ 泊如 【貌】 はくぜん(泊然)に同じ。

ばくーしよ 曝書 【名】 書物の蟲ぼし。

はくよしい 【感】 ㊀嚔(クサメ)の聲。 ㊁他人を嘲る時の聲。

はくーしよく 白色 【名】 白きいろ。

はくーしよく 薄蝕 【名】 太陽の、薄く蝕すること。東鑑「令レ奉ニ薄蝕勘文一」

はくーしよく 剝職 【名】 ㊀官職を剝奪すること。 ㊁職務に違背したる保又は甲の役員に、地方長官の科する懲罰三種の一。その職を剝奪するもの。罰金より輕く、譴責より重し。

ばくーしよく 麥食 【名】 ばくはん(麥飯)に同じ。

はくしよくーじん 白色人 【名】 次條に同じ。

はくしよくーじんしゆ 白色人種 【名】 人種の一。皮膚の色比較的白く、髮軟かに、額廣く、顎の突出の度、黃色人種よりも更に少きもの。白晳人種。白人。からかしやん。(黃色人種・褐色人種・赤色人種・黑色人種に對して)

はくしよくーとうえふしやう 白色桐葉章 【名】 旭日章の一。白色の桐葉をあらはしたるもの。勳八等の者に賜ふ。

はくーしろ 箔代 【名】 金銀箔を購入する料金。 娼妓絹籭「如意輪觀音が箔しろの建立(コンリフ)に出たといふ身で、頰杖をしてゐる女郎は」

はくしーゐにんじやう 白紙委任狀 【名】 法律行爲を委託する場合、その委任狀に委任事項を記載し、委任者、これに記名・捺印するのみにて、受任者の氏名と日附とを記載せざる書面。

はくーす 博す 【動佐變他】 贏(カ)ち得。取る。まうく。占む。「喝采を博す」「虛名を博す」「大捷を博す」「一粲を博す」

はくーす 駁す 【動佐變他】 他の言論を非難・攻擊す。駁擊す。

ばくーす 駮す 【動佐變他】 前條に同じ。

ばくーす 縛す 【動佐變他】 しばる。いましむ。

はくーすな 箔砂 【名】 箔の粉末。

はーぐすり 齒藥 【名】 齒を白くする藥。

はくーすゐ 白水 【名】 白き水。淸き水。

白水の如し 【句】『左傳の僖公二十四年の條に「公子曰、所レ不下與ニ舅氏一同上レ心者、有レ如ニ白水一、投ニ其璧於河一」とあり』心、潔白にして、隱す所なき譬(古、支那にて誓の時に述べし語)。

ばくーすゐ 麥穗 【名】 むぎのほ。

麥穗兩岐(リヤウギ) 【句】『後漢書の張堪傳に「桑無ニ附枝一、麥穗兩岐」とあり』 麥の穗の、二またになること。(穀物の豐熟を形容していふ)

はくずゐかうーひ 白瑞香皮 【名】 瑞香(ジンチヤウゲ)科の一種の植物の皮を、開花に先だちて採取・乾燥したる藥品。長き帶狀をなし、外面淡渦色を呈し、柔靭にして味苛

烈、發泡藥に供す。

はくすゐ-しんじん 白水眞人【名】『後漢書の光武紀に「王莽忌㆓惡劉氏㆒、以㆔錢文有㆓金刀㆒、故改爲㆓貨泉㆒、或以㆓貨泉字文㆒爲㆓白水眞人㆒」とあり。支那にて、錢を泉貨といひ、泉の字を分解すれば、白水の二字となり、貨の字を分解すれば、眞人の二字となるよりいふ』ぜに(錢)㊀の異稱。

はくすゐ-らう 白水郎【名】『支那唐の元稹の詩に「黄家賊用㆓鐵刀㆒利、白水郎行㆓旱地㆒稀」とあり』あま(海人)に同じ。

はく-せい 百姓【名】ひやくせい(百姓)に同じ。謠曲(藤榮)「百姓も、萬民も、皆、朝恩に誇りて榮ゆる御代とぞなりにける」

はく-せい 剝製【名】脊椎動物の皮を剝ぎ、骨骼・筋肉・內臟等を除き去り、皮の裏に藥品を塗り、中に綿などを塡めて縫ひ合はせ、全身を、生ける時の形に製作すること、又その製品。

はく-ぜい 薄税【名】輕き税。少なき租「税。

はく-ぜい 薄脆【名】薄くして脆きこと。薄弱。てうす。

はく-ぜい 搏噬【名】つかみ附きてかむ「こと。

ばく-せい 幕政【名】幕府の政治。

ばく-せい 幕制【名】幕府の制度。

ばく-せい 瀑聲【名】『瀑の字の音、正しくはボク』たきのおと。

はく-せき 白石【名】白き色の石。

はくせき 白石【名】〔人〕あらゐはくせき(新井白石)を見よ。

はく-せき 白皙【名】皮膚の色の、白くつ「やあること。

はく-せきえい 白石英【名】〔鑛〕『英 White quartz』無色・透明なる石英。

はくせき-じんしゆ 白皙人種【名】はくしよくじんしゆ(白色人種)に同じ。

はくせき-しゆかん 白石手簡【名】〔書〕新井白石の書簡を集めたるもの。二册・十一卷。第一册は、加賀の小瀨復庵に應酬したるもの百通を、平澤元愷輯錄し、第二册は、室直淸に送りしもの九卷、內匠頭に送りしもの、及び本佐錄附書三種を合本せるもの。

はくせきせんせい-よかう 白石先生餘稿【名】〔書〕新井白石の詩稿を集めたるもの。三卷。白石の子明卿の編。

はくせき-そうしよ 白石叢書【名】〔書〕白石の著述及び白石に關係ある文書を集めたるもの。三十册。新井白石の撰。

はくせき-よかう 白石餘稿【名】〔書〕はくせきせんせいよかう(白石先生餘稿)の略。

はく-せきれい 白鶺鴒【名】〔動〕鳴禽類に屬する鳥。體の長さ六寸二三分、眼の前後に黑き條あり、頰白くして、喉部に黑色部を存せり。上面は一般に灰褐色、下面は綠白色。夏季、北海道・千島・カムチャッカ等に蕃殖し、秋季、我國に渡來す。

はく-せつ 白雪【名】㊀しらゆき。ゆき。㊁『「陽春・白雪」を見よ』調の高き詩歌。

はく-せつ 薄雪【名】少し積りたる雪。うすゆき。謠曲(常陸帶)「來ゐる鶯、春かけて鳴けども、いまだ薄雪(ハクセツ)の」

はく-せつ 駁說【名】駁擊する論說。

はくせつ-かう 白雪糕【名】米・糯米に蓮の實・白砂糖などを交へて製し、落雁に似て色白き乾菓子。昔、母乳に代用せり。

はくせつ-き 拍節機【名】〔理〕めとろのおむ(拍節機)に同じ。

はく-せん 白扇【名】書畫を書きてあらぬ、白紙のままの扇。

白扇、倒(サカシマ)に懸る【句】『石川丈山の詩「仙客來遊雲外巔、神龍栖老洞中淵、雪如㆓紈素㆒煙如㆑柄、白扇倒懸東海天」とあるに本づく。但し、扇は、支那にては團扇(ウチハ)なれば、詩意、支那人には通ぜず』富士山の、雪を戴きて聳え立てるさまの形容。

はく-せん 白線【名】㊀白きすぢ。㊁〔醫〕橫腹筋の、腱膜より成りて、腹壁の正中線に在るもの。上端は劍狀突起に連り、下端は恥骨接合に終る。㊂獸類の蹄の前面中央にある、黃白色の細き縱線。

はく-せん 白癬【名】しらくも(白雲)㊁に同じ。

はく-せん 白戰【名】㊀空手にて戰ふこと。㊁〔文〕漢詩にて、咏物の詩を互に競ひて作る時、約して、その物と直接比較す

る體言(雪の時ならば、玉・鹽・鶴・鷺・月・梨・梅・銀などの文字)を用ひず、倂せて、その物を正面より形容する語(雪の詩ならば、白・素・皓・淸などの文字)を用ゐざること。支那宋の歐陽叔の好んで用ひし法なり。

はく-せん 搏戰【名】手にてうち合ふこと。くみうち。格鬪。搏鬪。

はく-せん 白鮮【名】〔植〕芸香(ヘンルウタ)科に屬する草。莖はやや木質を帶び、高さ二三尺に達し、葉は羽狀複葉にして、各小葉は卵形又は倒卵形をなし、微鋸齒を有す。夏季、白色又は淡紅色の花、總狀花序をなして開く。香氣に富み、觀賞用に供す。ひつじぐさ。

はく-ぜん 白髯・白髥【名】白き頰ひげ。

はく-ぜん 薄膳【名】㊀粗末なる膳部。㊁他人を饗する食膳の謙稱。粗膳。

はく-ぜん 泊然【貌】淡泊なるさま。泊如。泊乎。

ばく-せん 瀑川【名】『瀑の字の音、正しくはボク』瀑のごとき狀態をなして流るる川。天神記「谷には、瀑川、石流れて、夜、孤林の月を碎く」

ばく-せん 瀑泉【名】『瀑の字の音、正しくはボク』瀑となりて出づる水。たき。瀑布。

ばく-ぜん 爆然【貌】大砲・地雷火・煙火・爆竹などの爆發するさま。

ばく-ぜん 驀然【貌】急速に眞直に進むさま。まっしぐら。眞一文字。一散。

ばく-ぜん 藐然【貌】遠きさま。及ぶべからざるさま。邈邈(バクバク)。

ばく-ぜん 邈然【貌】はるかなるさま。漠「然。

はくぜん-くわ 白前科【名】〔植〕ががいもくわ(蘿藦科)に同じ。

はくぜん-さう 白前草【名】〔植〕るりさらのを(瑠璃虎尾)に同じ。

はくせん-しふ 泊船集【名】〔書〕『次條の泊船堂の名に本づく』松尾芭蕉の句集。六卷・三册。門人風國の編。第二卷より第五卷までは芭蕉の句集なれども、第一卷には、野ざらし紀行を載せ、第六卷には風國選の蕉門各家の句を載す。元祿十一年の刊行にて、芭蕉句集の最初のもの。

はくせん-だう 泊船堂【名】『深川は海に近き地にて、江戸の西方には、富士山の雪を戴きたるが見ゆるより、杜甫の詩の「窓含西嶺千秋雪、門泊東吳萬里船」といふ句によりて名づく』ばせをあん(芭蕉庵)を見よ。俳諧水滸傳「其角・才丸は、楊水を案內に賴みて、深川の泊船堂に來りて、翁に謁して、入門の禮を盡し」

はくせん-なづな 白鮮薺【名】〔植〕十字花科に屬する多年生の草。高さ約二尺に達し、上部に微毛有り。根葉は卵形にして、葉柄長く、銳頭と細鋸齒とを有し、梢葉は廣披針形にして、葉柄甚だ短く、又は無し。夏季、白色の小花、莖頂に、長く密なる總狀花序を成して開く。各地の高山に自生す。

は-くそ 齒屎【名】齒にたまるかす。はか「す。はがすみ。

はく-そ 白鼠【名】毛色の白きねずみ。鼠百年を經れば白色となる由、抱朴子に見ゆ。しろねずみ。

はく-そ 白疏【名】『白(マウ)して分疏する義』事情を陳述する書狀。太平記「當山有㆑愁之時、通㆓白疏㆒而談㆓懇情㆒」

はく-そく 迫促【名】そくはく(促迫)に同「じ。

はく-ぞく 白俗【名】『蘇軾の祭㆓柳子玉㆒文に「郊寒島瘦、元輕白俗」とあり』支那唐の白樂天の詩の、平易を旨とせしがために、卑俗に流るる嫌あること。

ば-ぐそく 馬具足【名】うまよろひ(馬鎧)に同じ。尺素往來「笠懸、……馬具足、定被㆑致㆓其用意㆒歟」

はく-だ 白蛇【名】はくじや(白蛇)に同じ。

はく-だ 白打【名】『はくせん(白戰)㊀を見よ』くみうち(組討)に同じ。

はく-たい 白帶【名】〔醫〕はくたいげ(白帶「下)の略。

はく-たい 博帶【名】幅の廣き帶。「褒衣(ハウイ)・博帶」參照。

はく-たい 薄待【名】はくぐう(薄遇)に同じ。

ばく-たい 莫大【名】ばくだい(莫大)に同「じ。

莫大も無い【句】莫大なり。

ばく-だい 莫大【名】『「莫㆑大㆓於焉㆒」(これより大なるは莫し)の略。易經の繫辭上

傳に「法象莫㆑大㆓乎天地㆒、變通莫㆑大㆓於四時㆒」、後漢書の樂成靖王傳に「專已凶暴、慾罪莫㆑大、甚可㆑恥也」とあり』極めて大なること。非常に多きこと。

ばく-だい 莫大【副】『前條の轉義』甚だ。大いに。鴉鷺合戰「塊鳩（ツチクレバト）の藤太農豊業（トヨナリ）は、おもくれては候へども、打見には莫大變りて、かひがひしく」

ばくだい-おどり 莫大劣【名】甚しく劣りてあること。太平記「賴政が、鵺を射たる勸賞（ケンジヤウ）に傾城を賜はりたるは、面目なれども、所領か御引出物かを賜はりたらんずるには莫大劣かな」

はくたい-げ 白帶下【名】〔醫〕『たいかい（帶下醫）を見よ』子宮の疾患、殊に、子宮内膜炎のために、白色・乳樣の分泌物を、膣より排出すること。最初、子宮粘膜より分泌する時は、無色・透明なる粘液なれども、膣内に入るや、剝脫せる膣粘膜上皮等を混ずるによりて、白色・乳樣となる。しらち。

はく-たう 白湯【名】㊀物のまじらぬ、ただの湯。さゆ。㊁普通の洗湯。（藥湯・鹽湯などに對して）

はく-たう 白糖【名】〔化〕しろざたう（白砂糖）に同じ。（但し醫藥用のは、普通のよりも精製してあり）

はく-だう 白道【名】㊀『李白の詩に「百里望㆓火光㆒、往來成㆓白道㆒」とあり』白き花の、長く咲きつづきてあること。㊁『人の往來繁きため、遠く望めば、その色白きよりいふ』大どほり。大路。㊂〔天〕『英 Moon's path among the stars. 漢書の天文志に「白道二、出㆓黃道西㆒」とあり』天球上に於ける月の軌道。黃道と約五度八分四十秒の角をなす平面に在る大圓。（黃道・赤道に對して）

白道の最近點【句】〔天〕白道上、地球に最も近き點。即ち月の軌道とその長徑との交點の一にして、地球に近き點。

はく-たうど 白陶土【名】〔化〕純粹の粘土の、白色なる粉末。成分は水と珪酸アルミニウムとの化合物と見るべきものにて、天然に產出す。我國にては、肥前國・尾張國等に多し。創傷と皮膚病とに撒布し、丸藥の賦形劑として、藥用に供し、又、陶器・セメント・紙などの製造にも用ふ。抱水珪酸アルミニウム。

はく-たく 餺飥【名】饂飩粉にて製したる、一種の食物。はうたう。小右記「餺飥・椿餠・粽等」伊呂波字類「餺飥、ハクタク。博託二音、䴵飥、杵麵方切名也」

はく-たく 白澤【名】『山海經に見ゆ』能く言語し、有德の王者ある時に世に出づといふ、想像上の獸。**はくたわう**（白澤王）參照。

はく-たく 剝啄【貌】『高適の重陽の詩に「豈有㆓白衣來剝啄㆒」、蘇軾の觀㆑棊と題する詩に「小兒近㆑道、剝啄信㆑指」とあり』戶を叩く時、碁を打つ時などの音。

はく-だく 白濁【名】㊀白く濁れること。㊁りんしつ（痳疾）に同じ。

はく-だつ 剝脫【名】はげおつること、又はがし取ること。

はく-だつ 剝奪【名】はぎうばふこと。はぎとること。褫奪。

はくだつ-こうけん 剝奪公權【名】〔法〕舊刑法の附加刑の一。重罪の刑に處せられたる者は、宣告なくして、國民の特權（政治上の權利、殊に公の選擧權）、官吏となる權、勳章・年金・位記・貴號・恩給を有する權、外國の勳章を佩用する權、兵籍に入る權、裁判所の證人となる權、後見人と爲る權（親屬の許可を得て子孫のためにするものを除く）、分散者の管財人、又は會社及び共有財產を管理する權、學校長・敎師・學監となる權を、終生剝奪せらるること。公權剝奪。**のうりよくけい**（能力刑）參照。

はくだつこうけん-しや 剝奪公權者【名】剝奪公權を科せられたる人。

はく-だみ 箔彩【名】金泥などにてだむこと。運步色葉集「薄濃、ハクダミ」

はく-だん 白團【名】**けいらん**（鷄卵）の異稱。

ばく-だん 爆彈【名】適宜の發火裝置を備へ、手力・弓弩又は小銃より放擲するやうに仕掛け、放擲後、適當の時期に爆裂するごとくに造りたる、小き火藥の罐。ばくれつだん。

はくた-わう 白澤王【名】『**はくたく**（白澤）を見よ』古、淸涼殿の鬼の間に、鬼を斬るさまに描かれし勇士、即ち漢の季將軍の像。禁秘抄「南壁白澤王切㆑鬼繪」著聞「鬼の間の壁に白澤王を書かれたることは、昔、かの間に鬼の棲みけるを鎭められける故に」名目抄「白澤王、ハクタワウ」

はく-ち 白雉【名】㊀白色のきじ。しらきじ。㊁びやくち（白雉）を見よ。

はく-ち 白痴・白癡【名】腦髓の疾患又はその發育障礙のために、非常に愚かなること、又その人。からばか。

はく-ち 白地【貌】『地は接尾語』㊀あからさま。㊁『李白の越女詩に「相看月未㆑墜、白地斷㆓肝腸㆒」とあり』わけもなきさま。

はく-ち 迫地【名】肥沃ならぬ土地。やせち。庭訓往來「除㆓迫地㆒、撰㆓熟田㆒」運步色葉集「迫地、ハクチ」

はく-ぢ 薄地【名】〔佛〕『下地に薄（セマ）る地位の義』凡夫の境界。無智・庸愚なること。平家「凡夫薄地、是非に惑へるが故に、志を猶恣にせず」盛衰記「凡夫の薄地、是非に迷ふが故に」

は-ぐち 刃口【名】刀劍の刃の先。

は-ぐち 齒口【名】喰物などの種類。和合人「その座の喰物に、ちと詭がありやす。先づ蕎麥さ。ちとはぐちは違ふが。金龍山（キンリユウザン）の餠」

は-ぐち 羽口【名】㊀堤防の法（ノリ）。㊁鼓風爐の下部なる、熱風を送り込む口。

ばく-ち 博打・博奕【名】㊀『**ばくうち**（博打）の略。博を打つ義。**はくす**（博す）・**うつ**（打つ）㊅及び**めんち**參照』**ばくちうち**（博奕打）に同じ。〔古語〕空穗「世の中にかしこきばくちの、せまり惑ひたるを召して」徒然「その時を知るを、よきばくちといふなり」㊁盤と采とを用ひ、金錢或は物品を賭けなどして、勝負を爭ふ遊戲。後には骨牌（カルタ）を用ひて行ふもあり。方法も種種あれども、すべて法律上禁ぜらる。ばくえき。ちよぼ。かりうち。一六。丁半。㊂**ばくちじる**（博打汁）の略。貞佐獨吟百韻「今はばくちのすたる世の中（といふ句に）菜ばかりの汁をこの頃もてなして」

ばく-ち 驀地【貌】**ばくぜん**（驀然）に同じ。

ばくち-いくさ 博打軍・博奕軍【名】豫め勝利を期すること難きいくさ。

はく-ちう 白晝【名】ひるなか。まひる。日中。白日。

ばくち-うち 博打打・博奕打【名】『博打㊀に、更に**うち**（打）を添加せるものにて、實は重複の語なり。**めんちうち**（めんち打）參照』ばくちを打つを職業の如くにする人。しようぶし。ばくうち。ばくち。博徒。宇治「紬のきぬを脫ぎて取らすれば、ばくちうちは、急ぎて取りていぬ」

ばくち打のちぎれ草履【句】「女郎買（チヨラウカヒ）の尻切草履」に同じ。〔諺語〕

ばくち-えふ ばくち葉（獨 Bakutiblätter）【名】ばくちの樹の新鮮なる葉を藥用に供する時の稱。**ばくちすゐ**（ばくち水）參照。

ばくち-がに 博打蟹・博奕蟹【名】〔動〕かぶとがに（兜蟹）を云ふ。〔薩摩國の方言〕

ばく-ちく 爆竹【名】㊀『竹を爆發せしむる義』支那にて、短く小き竹筒に、火藥を籠め、數多並べて、その一端に火を點ずれば、火力次第に傳りて、すべての竹筒の爆爆するやうに仕掛けたるもの。もと正月元日に用ひしが、後には、廣く祝日等に用ふるに至れり。㊁左義長（サギチヤウ）に燒く火。とんど。

ばくちく-ばしら 爆竹柱【名】〔建〕**さぎちやうばしら**（左義長柱）に同じ。

はくち-ごえ 葉朽肥【名】樹木の葉の、落ち朽ちて、肥料となるもの。

はくち-ざう 白地藏【名】**かくれあそび**（隱遊）㊀に同じ。

ばくち-ざら 博打皿・博奕皿【名】底に穴のある南京皿。

はぐち-しば 羽口芝【名】羽口㊀の保護に用ふる芝。土芝・振芝・蒔芝・平芝・積芝など、數種あり。

はくち-しや 白痴者・白癡者【名】白痴なる人。

ばくち-じる 博打汁・博奕汁【名】小く采の目に切りたる豆腐を實(ミ)とせる汁。

ばくち-すゐ ばくち水（獨 Bakutiwasser）【名】ばくち葉(フエ)の搗き碎きたるものを、普通の水に入れて蒸餾し、その得たる液に、酒精を加へたる藥品。成分・性狀・用法等は、苦扁桃水及び杏仁水に同じ。

ばくち-ぜに 博打錢・博奕錢【名】博打に賭くるぜに。犬筑波「打ちやみて後も乞はるる博打錢（といふ句に）碁會の汁やはたごなるらん」

はく-ちづ 白地圖【名】はくづ(白圖)に同じ。

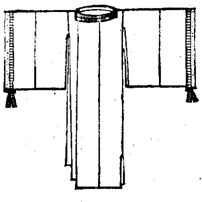
ばくち-の-き ばくちの樹【名】〔植〕薔薇(バラ)科に屬する喬木。葉は、互生し、披針形にして、光澤ある綠色を呈し、上端尖銳、鋭齒を有し、秋季、葉腋に花枝を抽き、枝は分るること二三、五瓣の短梗花、穗狀をなして附著し、開く時は、反轉して、萼背に向ひ、萼は盞狀にして五出す。果實は、長さ五六分、熟すれば紅紫色となり、次第に黑變す。我國、暖地に自生し、老樹は外皮剝離す。はだかぎ。びらん。

ばくち-ば 博打場・博奕場【名】ばくち㊁を行ふ所。とば。

ばく-ちん 貘枕・獏枕【名】貘の貌を彫刻せる枕。「貘の枕」參照。嬉遊笑覽「或寺に獏枕あり。傳へていふ。加藤清正朝鮮より將來せし物なりといへり。その枕を見しに、すべて木彫にて、漆を塗り彩りたり。齒と爪とは、獸の眞物を鏤む」

ばく-ちん 爆沈【名】爆破して沈沒すること。

はく-ちやう 白張・白丁【名】㊀『白張(シラハリ)の音讀』仕立方、ほぼ狩衣に同じくして、白張(シラハリ)の布製なる衣服。こはり。著聞「白張に立烏帽子著たる男の、藁沓はきたる」㊁白張(ハクチヤウ)を著たる仕丁。傘・沓などを持ち、又、口取などを勤むるもの。㊂神事又は神葬などに、物を持ち運ぶ人夫。



（はくちやう ㊀）

はくちやう-えぼし 白丁烏帽子【名】白丁㊁のかぶる、柳さびの烏帽子。くはがた。

はくちやう-げ 白丁花【名】〔植〕はくてふげ(滿天星)に同じ。

はくちやう-どくり 白丁徳利【名】はくてうどくり(白鳥徳利)に同じ。和合人「十日の菊から白丁徳利のお酒が來るはさ」

ばくち-やど 博打宿・博奕宿【名】博打場として貸す家。

はく-ちゆう 白柱【名】雅樂の一。盤涉(バンジキ)調に屬する唐樂。白紵の誤なるべしといふ。一名、徳貫子・兒女子。增鏡「盤涉(バンシキ)調に調べととのへて、採桑老・蘇合・白柱・千秋樂など、いみじう面白し」

はく-ちゆう 伯仲【名】㊀長子と、その次の子と。㊁『伯仲の間』を見よ』互によく似てあること。甲乙なきこと。大差なきこと。「相伯仲す」

伯仲叔季(シユクキ)【句】支那に於ける兄弟の順序を並べ擧げたる語。伯は長子、仲はその次、叔は又その次、季は末子。（男女に共通していふ）

伯仲の間(アヒダ)【句】『兄弟は互に相似てあるよりいふ』互によく似てある間がら。「伯仲の間に在り」

ばく-ちゆう 幕中【名】まくのうち。幕府の中。

はく-ちよ 白著【名】ちよめい(著明)に同じ。

ばくち-わざ 博打業・博奕業【名】博打を爲すこと。本朝二十不孝「歌留多の勝負を始めける。……、氣遣うてや、斯かる博奕業を遊ばしける事、思ひもよらずといへば」

はく-づ 白圖【名】大陸・島嶼・國境など、地形の輪廓を示したるのみにて、學生をして練習のため、都邑・山川などの名を記入せしむるやうに造りたる地圖。白地圖。

はく-つう 博通【名】㊀博く物事に通ずること。㊁はくぶつつうろん(博物通論)の略。〔俚語〕

はく-つき 箔附【名】㊀箔の附きてあること、又その物。㊁『箔が附く』を見よ』値打の、既に定まりてあること、又その物。公評の一致してあること、又その物。きんばくつき。（善惡共にいふ）

ぱく-つく【動四自】ぱくぱくと口を開きて食ふ。〔俚語〕

はく-づゑ 箔杖【名】能樂の小道具の一。所作事に用ふる、金銀の箔を捺したる杖。旅行する女性など携ふ。

はく-てい 白丁【名】『漢書の鄒陽傳に「毆㆓白徒之衆㆒。」とありて、註に「白徒言㆔素非㆓軍旅之人㆒、若㆔今言㆓白丁㆒矣」とあり。白は空の義』㊀訓練を經ざる兵丁。白徒。㊁事に熟練せず、又、身分なき者。平民。白徒。

はく-てい 白帝【名】『はくしう(白秋)及びせいてい(青帝)を見よ』秋をつかさどる神。西方の神。たいはくじん(太白神)參照。

はく-てい 白梃【名】白き太き棒。

はく-てう 白鳥【名】㊀羽毛白き鳥。しらとり。㊁〔動〕游禽類に屬する鳥。羽毛純白、形、鵞鳥に似て大きく、頸長くして、嘴は黑褐色、その前部、額に近き所に、黃赤色の瘤狀突起あり。脚は淡黑色にして、尾と共に短く、飛力大なり。關東に多く、春時北に去り、夏季は、北海道地方の淡水に群棲し、雛をその地に養ふ。秋冬の候は、田澤に多けれども、海に浮ぶこと屢ばなり。概ね雌雄共棲し、鳴聲、喇叭の如し。羽毛は、裝飾・防寒・箭羽・洋筆等の用に供すべく、幼禽の肉は、美味なり。しろどり。くぐひ。こふ。〔鵠〕太平記「白鳥の羽にてはぎたる矢の、十五束三臥(ミツブセ)有りけるを」㊂〔動〕『夏小正傳に「白鳥者謂㆓蚊蚋㆒也」とあり』支那にて、か(蚊)の異稱。㊃『形、白鳥㊁に似たるよりいふ』陶磁器の徳利の一種。白色にして、頸細長く、胸圓き一升徳利。白鳥徳利。白丁徳利。

白鳥の汁【句】白鳥㊁の肉を實とせる味噌汁。

はくてう-おり 白鳥織【名】羽後國より織り出だす、一種の織物。

はくてう-どくり 白鳥徳利【名】はくてう(白鳥)㊃に同じ。

はく-てつ 白鐵【名】㊀はくじん(白刃)に同じ。㊁はくえふてつ(白葉鐵)に同じ。

はく-てっくわう 白鐵鑛【名】〔鑛〕『英 White iron pyrite 又 Marcasite』黃鐵鑛と共に、天然に產出する二硫化鐵の一。色は、黃鐵鑛よりもやや白く、比重もやや低けれども、物理性も、化學性も殆ど相同じく、結晶形不明なる場合には、區別しがたし。產出量多からず。まあかさいと。

はくてつ-じんしゆ 白哲人種【名】はくせきじんしゆ(白晳人種)の誤。

はく-てふ 白蝶【名】〔植〕次條に同じ。

はくてふ-げ 白蝶花・滿天星・六月雪【名】〔植〕茜草(アカネ)科に屬する灌木。高さ三四尺ありて、枝多く、葉は楕圓形にして小く、先端は銳尖、全緣・革質にして、光澤有り。春夏の候、小形・白色にして、上端外方の往往紫色を帶びたる花、枝梢に開く。栽培して、觀賞用に供す。いはぎきやう。こてふぼく。はくてふぼく。

はくてふ-さう はくてふ草【名】〔植〕やまもゝさう(山桃草)に同じ。

はくてふ-ぼく 白蝶木【名】〔植〕はくてふげ(滿天星)に同じ。

はく-てん 白點【名】白き點。白きぼち。

はく-てん 白顚【名】馬の額の上に、白き毛の生えたるもの。

はく-てん 薄奠【名】輕少なる供物。

はく-でん 白田【名】『白は水無く乾ける義にて、我國の畠(ハタ)といふ字は、この白田の二字を合はせて作りしもの』はた。はたけ。

はく-でん 薄田・迫田【名】『瘠薄なる田の義』せきでん(瘠田)に同じ。運歩色葉集「迫田、ハクデン」

ばく-でん 麥田【名】むぎた。むぎばたけ。

ばくてん-せきち 幕天席地【句】『劉伶の酒徳頌に「幕天席地、縱㆓意所㆒㆑如」とあり。天を幕とし、地を席とする義』志大にして、世間の小事に局促せざること。

ばくてりや（英 Bacteria）【名】〔植〕さいきん(細菌)に同じ。

はく-と 白徒【名】はくてい(白丁)に同じ。

はく-と 白兎・白兔【名】毛の色白きうさぎ。しろうさぎ。

はく-ど 白土【名】白色のつち。しらつち。

ばく-と 博徒【名】ばくちうち(博打打)に同じ。

ばく-と 麥斗【名】武藏國南葛飾(ミナミカツシカ)郡隅田村木母寺境內に在りし茶屋。明治二十年頃まで存したり。嬉遊笑覽「向島の茶店武藏屋權三は、寛延の頃は、麥飯ばかりをたきて賣れり。それゆゑ麥計庵と號す。計を斗と訛りて、麥斗と唱へし」

ばく-ど 麥奴【名】〔植〕くろほびやう(黑穗病)に同じ。

はく-とう 白頭【名】はくしゆ(白首)に同じ。

白頭新(アラタ)**なるが若**(ゴト)**し**【句】『史記の鄒陽傳に、「諺曰、白頭如レ新、傾蓋如レ故、何則知與レ不レ知也」とあるに本づく』心の合はざる人は、互に白頭になるまで交際しても、新しき友人の如くにて、交情厚からず。〔諺語〕

白頭の雪【句】頭髮の白きを雪に譬へていふ語。謠曲(龍虎)「昨日は少年、今日白頭の雪とのみ積り積りて、老が身の」

はく-とう 陌頭【名】みちばた。路頭。道傍。

はく-とう 搏鬪【名】はくせん(搏戰)に同じ。

はく-どう 白銅【名】㊀〔化〕銅とニッケルとの合金。百分の十五以上のニッケルを含み、色澤銀白乃至灰白にして、硬度と抗腐蝕力とは、靑銅に讓らず。工藝品及び補助貨幣製造用等に供す。白銅貨幣は、純ニッケルにて鑄造する國と百分の二十五のニッケルを含めるものにて鑄造する國とあり。支那にて古來用ひしものは、銅・ニッケルの外、多量の亞鉛を含み、小銃丸の蔽としては、銅百分の八十、ニッケル百分の二十のものを用ふる等、混合の比は一樣ならず。ぎんがまひ。につける銅(カネ)。㊁はくどうくわへい(白銅貨幣)の略。

はくどう-くわ 白銅貨【名】次條の略。

はくどう-くわへい 白銅貨幣【名】白銅にて鑄造せる貨幣。我國のは、百分の二十五のニッケルを含み、補助貨幣として、明治二十一年より鑄造し、初は五錢の一種のみなりしが、後、大正十年に至りて、十錢のをも鑄造するに至れり。

はくどう-くわろ 白銅火爐【名】古、天皇卽位に際し、紫宸殿の南階より約七十尺南方の庭上に、二つの榻(シ)を左右に据ゑ、その上にて香を燒きし、徑約二尺の火爐。卽位の由を天に告ぐる意といふ。

はくとう-さん 白頭山【名】〔地〕ちやうはくさん(長白山)に同じ。

はくとう-をう 白頭翁【名】㊀白髮の老人。㊁〔動〕むくどり(椋鳥)の漢名。㊂〔植〕おきなぐさ(白頭翁)の漢名。

はく-とく 薄德【名】㊀德の足らざること。德を積むこと少きこと。菲德。寡德。㊁自己の德行の謙稱。菲德。寡德。

はく-どく 白讀【名】そどく(素讀)に同じ。

ばくと-けつがふ-ざい 博徒結合罪【名】〔法〕博徒を集めて、利を圖るによりて成立する罪。

はく-ないしやう 白內障【名】〔醫〕そこひの一種。水晶體の混濁により、瞳子の、灰白色・靑色又は赭色をなして透明ならざるもの。うみぞこひ。しろぞこひ。

はく-にとうきん 膊二頭筋【名】〔醫〕『羅 Musculus biceps brachii』上膊の前面に位する絕大なる筋。上端は、長短の二頭をなして、肩胛骨に附著し、下端は、橈骨の上端なる粗糙部に附著し、前膊を肘關節にて屈曲し、又、上膊を肩胛關節に於て擧上するを助く。

はく-にゐ 伯二位【名】はく(伯)㊂を見よ。

ばく-ねう 麥繞【名】むぎへん(麥偏)に同じ。

はく-ねつ 白熱【名】『英 White-heat 又 Incandescent』物質が、強度に熱せらるる結果、白色の光輝を發するに至ること。

はくねつ-がす 白熱瓦斯【名】次條の略。

はくねつ-がすとう 白熱瓦斯燈【名】〔理〕『英 Incandescent gas-burner』白熱套を用ひたる瓦斯燈。白熱套は、瓦斯の焰によりて白熱せらるるがために、頗る強き光を發し、瓦斯の消費量少くて事足り、極めて經濟的なり。白熱瓦斯。あうえる燈。

はくねつ-たう 白熱套【名】〔理〕『英 Incandescent mantle』瓦斯燈の焰を包みて、その光力を強からしむるもの。綿絲(メンシ)・人造絹絲等にて造りたる網狀の袋を、硝酸トリウム・硝酸セリウムの溶液に浸し、燒きて得たる爐骸。酸化トリウム九九と酸化セリウム一とより成る。西暦一八八五年、墺太利人アウエル・フォン・ウェルスバッハ(Auer von Wellsbach)の發明に係る。瓦斯まんとる。

はくねつ-でんきとう 白熱電氣燈【名】〔理〕次條に同じ。

はくねつ-でんとう 白熱電燈【名】〔理〕『英 Incandescent electric lamp』茄子狀の硝子球內に、短き白金線を柄として、炭素線を輪狀に曲げて封入し、球內の空氣を排除したるもの。炭素線は、竹の纖維或は紙・綿の細線を、稀硫酸に浸したる後、爐中にて炭化したるもの。前者は、西暦一八七九年、エヂソン(Edison)、後者は、翌年、スワン(Swan)の發明に係れるものなり。炭素線に電流を通ずれば、その抵抗大なるを以て、強く發熱し、ために炭線を白熱せしむ。然れども、球は眞空なるが故に、線は燃燒することなし。一燭光に要する電力は二・五ワット乃至四ワット、耐久力は九百時間乃至千四百時間。現今にては、炭素線を作るに、セルロイドの線又は人造絹絲を用ひ、或は炭素線に代ふるにタングステン燈・オスミウム燈・タンタル燈等を以てすること多し。電燈。白熱燈。白熱電氣燈。(弧燈に對して)

はくねつ-てき 白熱的【貌】熱心の度の極めて高きさま。「白熱的歡迎」

はくねつ-とう 白熱燈【名】〔理〕『英 Incandescent lamp』白熱して、強き光を放つ燈火。卽ち白熱電燈・白熱瓦斯燈などの類。

はく-の-おんさうぞく 帛の御裝束【句】はく(帛)の條下を見よ。

はく-の-おんはう 帛の御袍【句】はく(帛)の條下を見よ。

はく-の-きぬ 帛の衣【句】はく(帛)の條下を見よ。

ばく-の-なは 縛の索【句】ばく(縛)の條下を見よ。

はく-は 白波【名】㊀白く泡立てる波。しらなみ。㊁『支那後漢の代に、叛賊張角の餘類の、白波谷にて盜をなし、又その後、黃巾の餘黨の、同じく白波谷に起りて、太原に寇せし事實に本づく』たうぞく(盜賊)の異稱。

はく-ば 白馬【名】㊀毛色の白きうま。しろうま。あをうま。㊁次條の略。太平記「如來の權實(ゴンジツ)、徒に堅石・白馬の論となり」

白馬、馬に非ず【句】支那戰國時代の公孫龍の說きし、一種の詭辯。「堅白(ケンパク)同異の辯」參照。

白馬の節會(セチエ)【句】「白馬(アヲウマ)の節會」に同じ。太平記「白馬・踏歌の節會も行はれず」

ばく-ば 駁馬【名】まだらうま。ぶちうま。

ばく-は 爆破【名】爆藥を用ひて破壞すること。はっぱ(發破)參照。

はく-ばい 白梅【名】㊀白き色の梅花、又その花の咲く梅。しらうめ。㊁名香の一。沈香の一種。木の色、黃味ありて薄白く、匂(ニホヒ)は、中川よりもしみじみとすこやかなるもの。

はく-ばう 白望【名】きよめい(虛名)に同じ。

はく-ばう 白茅【名】『易經の上經に「藉用二白茅一、无レ咎」とあり』白きちがや。

はく-ばう 白帽【名】白色の帽子。

はく-ばう 白旄【名】白きはぐま、卽ち旄牛(バウギウ)の尾を、旗竿に附けて飾とせる旗。

白旄の旗【句】前條に同じ。保元「白旄の旗を靡かし、黃鉞のほこを輝かし」

はく-はく 白白【名】『韓愈の詩に「是遊百花林、朱朱兼二白白一」とあり』白き色と、白き色と。

はく-はく 白白【貌】㊀極めて白きさま。㊁めいめいはくはく(明明白白)を見よ。

ばく-ばく【貌】**一**物の附著せる部分のはづれたるさま。ばくばく。**二**幾びたも口を廣く開くさま。ばくばく。ばくりばくり。

ばく-ばく 莫莫【貌】『詩經の周南葛覃篇に「維葉莫莫」とありて、傳に「莫莫成就之貌」とあり』勢こもりて盛んなるさま。

ばく-ばく 漠漠【貌】廣く遠きさま。散布してとりとめなきさま。茫漠。

ばく-ばく 寞寞【貌】物靜かなるさま。寂寞。

ばく-ばく 幕幕【貌】『張衡の思幻賦に「建二罔車之幕幕一」とありて、劉良の註に「幕幕、盛也」と見ゆ』盛んなるさま。

ばく-ばく 藐藐【貌】**一**『詩經の大雅抑篇に「誨レ爾諄諄、聽レ我藐藐」とありて、正義に「藐藐者、王不二聽受一之貌」と見ゆ』人の言葉に心を留めぬさま。**二**『詩經の大雅崧高篇に「寢廟既成、既成藐藐」とありて、傳に「藐藐、美貌」と見ゆ』美しきさま。

ばく-ばく 邈邈【貌】ばくぜん(藐然)に同じ。

ばく-ぱく【貌】ばくばくに同じ。「ばくばくと食ふ」『ばくばくと煙草を吸ふ』

ばく-はくち 白白地【貌】はくち(白地)に同じ。

ばくぱく-の-き【名】〔植〕からぼくに同じ。

ばくばく-ばあさん ばくばく婆樣【名】『口元のしまりなくなりたる者の義』年寄りて、齒も拔け果てたる老婆。〔俚語〕

はくば-くわい 白馬會【名】明治二十七年、佛國の留學より歸朝せし黑田清輝・久米桂一郎等の、明治美術協會より分離して、新に組織せし、繪畫の團體。二十九年の秋より、十餘回の展覽會を開き、四十四年の春解散せり。畫風は、佛國の外光派乃至印象派を學びて、一時大いに畫壇を風靡せしが、漸次、當初の主張と特色とを失ふに至れり。

はく-ばし 箔箸【名】箔押(ハクオシ)の時、箔を挾むに用ふる、竹製の箸。

はくば-じ 白馬寺【名】『經卷を白馬に馱し來りしより、白馬を名とし、鴻臚寺に留りしによりて、寺といふ。寺の字は、もと役所の義なるを、これより後、佛敎の堂舍を稱するに至れり』支那後漢の明帝の永平十年、中印度の僧迦葉摩騰(カセフマトウ)・竺法蘭(ヂクホフラン)の、始めて支那洛陽に來りし時、暫く、鴻臚寺に留めたる後、翌年、雍門外に建設して居らしめし佛寺。支那寺院の最初のものとして有名なり。後、興廢して、今僅かに存す。

はくば-だけ 白馬嶽【名】〔地〕『毎年晩春の頃、峯の殘雪の形が白馬の姿に似たるより信濃の方面にてかく呼ぶ』長野縣北安曇郡と富山縣下新川郡と新潟縣西頸城郡とに跨れる山。高さ九六七九尺。しろうまだけ。

はく-はつ 白髮【名】しらが(白髮)に同じ。

白髮三千丈【句】『李白の秋浦歌に「白髮三千丈、緣レ愁如レ箇長、不レ知明鏡裏、何處得二秋霜一」とあるに本づく』白髮の極めて長き形容。

ばく-はつ 爆發【名】化學上の變化により、爆裂して發散すること。

ばくばつ-かい 莫筏海【名】料理に用ふる藥種。消毒の功ありといふ。

ばくはつ-がす 爆發瓦斯【名】〔化〕ばくはつせいがす(爆發性瓦斯)に同じ。

ばくはつがす-けんていき 爆發瓦斯驗定器【名】『英 Gas indicators』爆發瓦斯の存在を驗し、又はその分量を量るに用ふる器械。種類多し。

ばくはつ-くわん 爆發罐【名】棉火藥又は黃色火藥などを、一の罐中に塡實せる、破壞用の火具。我國のは、亞鉛製の罐に、黃色火藥を塡實し、蓋の中央に雷管室を設けたるを用ひ、騎兵、これを携行す。

ばくはつ-けいむがう 爆發警霧號【名】『英 Exprosive signal』ばくはつしんがう(爆發信號)に同じ。

ばくはつ-ざい 爆發罪【名】火藥・汽罐等を破裂せしめ、又は爆裂彈のごとき爆發物を使用するによりて成立する罪。

ばくはつ-しんがう 爆發信號【名】晝夜の別なく、一定の時間を隔てて、電氣の應用によりて、棉火藥を爆發せしむるやうにしたる霧中信號。爆發警務號。

はくはつ-しやう 白髮症【名】〔醫〕『羅 Canities』老年ならざるに、毛髮の白色に變ずる病症。精神及び神經の疾患と關係あるらしく、又、屢ば遺傳の關係を認む。

ばくはつせい-がす 爆發性瓦斯【名】〔化〕『英 Exprosive mine gas』空氣又は酸素と混合したる上、火焰に接すれば、直ちに爆發する性ある瓦斯。水素・メタン・石炭瓦斯及び石炭坑中に發生する天然瓦斯など、皆これにして、最後のものは、主成分はメエセンにして、尙、その他の氣體、メエセエン・プロペエン等の炭水化合物を含み、比重約〇・五五九なり。爆發瓦斯。

ばくはつ-ぜらちん 爆發ゼラチン【名】〔化〕『英 Blasting gelatine』ニトログリセリン九十三分とニトロセルロオズ七分との混合物。半透明ゼラチン狀をなし、點火すれば燃え、强き爆發力を出だすが故に、無烟火藥の一材料とす。

ばくはつ-ぶつ 爆發物【名】爆發すべき性質の物。

ばくはつぶつ-とりしまり-ばっそく 爆發物取締罰則【名】治安を妨げ、又は人の身體・財產を害する目的を以て、爆發物を使用し、若しくは、その使用に供すべき器具を製造・輸入・所持・注文する者、及びこれが敎唆・從犯並びに事後從犯等を嚴罰し、爆發物に關する取締を嚴重にするための罰則。明治十七年の公布。その後、刑法施行法第二十二條のために消滅したる第十條の外は、今も効力を有す。

ばくはつ-やく 爆發藥【名】ばくやく(爆藥)に同じ。

はく-はん 拍板【名】支那の音樂に附屬して、拍子をとるに用ふる、木製の樂器。堅き木にて、扇子狀に造れる板を、二枚づつ合はせ、これを紐にて繫ぎ、片手にて相擊つ。びんざさら。和名「拍板、樂器名也」

(はくはん)

はく-はん 白斑【名】白色のまだら。しろぶち。

はく-はん 白幡【名】白色の幡(ハタ)。しらはた。

はく-はん 白飯【名】**一**『晉書の五行志に「昔年食二白飯一、今年食二麥飯一」とあり』米の飯。**二**肴を副へぬ飯。きめし。すめし。**三**『薄き木を以て作るによりて名とすといふ』德川時代に、幕府及び諸侯にて、年頭などに、式三獻・雜煮三獻・五五三などに用ひし、白木又は素漆の、三方の類なる、一種の盤。

ばく-はん 麥飯【名】むぎめし(麥飯)に同じ。和爾雅「麥飯、バクハン・ムギメシ」

ばくはん-せき 麥飯石【名】〔鑛〕山谷の間より產し、その狀、麥飯をまるめたるが如き鑛石。

ばくは-やく 爆破藥【名】ばくやく(爆藥)に同じ。

はく-ひ 薄皮【名】薄き皮。うすかは。

はく-ひ 白皮【名】白き皮。白き皮膚。若風俗「一切の女、紅粉の翠黛は、只、白皮を綵りてこそ見よげになりぬれ」

はく-ひ 白賁【名】『易經の賁卦に「上九、白賁无レ咎」とありて、象傳に「上得レ志也」と見ゆ』白色のかざり。

はく-ひ 白砒【名】〔化〕『英 White arsenic』むすゐあひさん(無水亞砒酸)に同じ。

はく-び 白眉【名】**一**白きまゆ。**二**『蜀志の馬良傳に「良字季城、宣城人、兄弟五人並有二才名一、鄕里爲二之諺一曰、馬氏五常、白眉最長。良眉中有二白毛一、故以稱レ之」(五常とは、五人の兄弟、何れも、その字に常の字あるに由る)とあるに本づく』衆人の中にて最も傑出せるもの。

はぐ-ひ 羽咋【名】〔地〕**一**能登國四郡の一。郡役所を羽咋町に置く。**二**能登國羽咋郡にある町。西は日本海に面し、羽咋川に臨む。七尾(ナナヲ)鐵道の停車場あり。邑知(オフチ)潟の水運の便あり。

はぐひ-じんじや 羽咋神社【名】能登國羽咋郡羽咋町に鎭座せる縣社。祭神は石撞別(イハツキワケ)命、なほ石城別(イハキワケ)命及びその弟苅幡戸辨(カリハタトベ)命を配祀す。創始の年代詳ならず。もと式內の、小社に列す。

はくひ-むし 葉喰蟲【名】〔動〕いもむし(芋蟲)に同じ。

はく-ひん 白蘋【名】白色の田字藻（デンジサウ）。

はく-びん 白鬢【名】白き鬢の毛。

ばく-ひん 幕賓【名】「入幕の賓」の略。

はく-ひよう 薄氷・薄冰【名】薄く張れる氷。うすごほり。うすらひ。

薄氷を履(フ)むが如し【句】『詩經の小雅小旻篇に「戰戰兢兢、如レ臨二深淵一、如レ履二薄冰一」、又、同書の小雅小宛篇にも「戰戰兢兢、如レ履二薄冰一」とあるに本づく』極めて危險なる譬。〔諺語〕太平記「人の心、皆、薄氷を履んで、國の危き事、深淵に臨むが如し」

はく-ふ 伯父【名】年長のをぢ。父又は母の兄。(仲父・叔父・季父に對して)

はく-ふ 白布【名】白色のぬの。しろぬの。

白布の瀑(タキ)【句】白布を垂れたるがごとく見ゆる瀑。今國姓爺「名に流れたる白布の瀧、布を晒せる如くにて」

はく-ふ 白傳【名】〔人〕『傳とは、白居易、太子大傅たりしよりいふ』**はくきよい**(白居易)の異稱。

はく-ふ 拍浮【名】水を泳ぐこと。浮拍。

は-くふ 齒食ふ【動四自】齒を食ひ合はせて、語らず。つぐむ。名義抄「噤、ハクフ・ツグム・トヅ」

はく-ぶ 百步【名】**はくぶかう**(百步香)の略。源氏「公忠の朝臣のことにえらびつかうまつれりし百ぶの方など思ひえて、よに似ずなまめかしきを取り集めたる」

ばく-ふ 幕府・莫府【名】『軍旅は一定の居所なく、帳幕を張りて居處を構へ、その中に在りて事を治むるよりいふ』㊀將軍の居所。將軍の陣營。柳營。㊁**このゑふ**(近衞府)の唐名。拾芥抄「近衞司(幕府、羽林親衞)」㊂**このゑのだいしやう**(近衞大將)の異稱。㊃鎌倉・室町・江戶の三時代に於ける將軍の政務を扱ひし所。武家の政府。覇府。(朝廷に對して)㊄鎌倉・室町・江戶の三時代に於ける將軍(征夷大將軍)の異稱。

ばく-ふ 瀑布【名】『瀑の字の音、正しくはボク』**たき**(瀑)に同じ。

はくぶ-かう 百步香【名】『**はくわかう**(百和香)を見よ』薰物(タキモノ)の一。はくぶ。

はく-ふく 薄福【名】福運のうすきこと。ふしあはせ。薄幸。薄命。

はく-ぶだう 白葡萄【名】**しろぶだう**(白葡萄)に同じ。

はく-ぶだうしゆ 白葡萄酒【名】**しろぶだうしゆ**(白葡萄酒)に同じ。

はく-ぶつ 博物【名】㊀博く物事に通じてあること。ものしり。「博物の君子」㊁**はくぶつがく**(博物學)の略。

はくぶつ-か 博物家【名】博く物事に通じてある人。ものしり。

はくぶつ-がく 博物學【名】『英 Natural history』理學の一部。動物學・植物學・鑛物學・地質學等の總稱。博物。

はくぶつがく-しや 博物學者【名】博物學に通達せる人。

はくぶつ-きよく 博物局【名】㊀明治初年、文部省に附屬せし一局。六年同省附屬の博物館・書籍館・小石川藥園と共に、博覽會事務局に合併せられ、八年また合併を解かる。㊁明治九年、博物館㊁に附設せられて、その事務を扱ひし所。十四年四月、農商務の所管に移り、六月、天產・農業・藝術・工藝・史傳・圖書・兵器・教育・庶務の九課に改め、十月、上野舊本坊跡に移轉し、十五年、舊開拓使の札幌物產課博物場をも管理することとなり、上野に新築せる博物館を開き、翌月、園藝課を設置し、十六年、札幌博物場を北海道事業管理局に引渡し、翌年又、嘗てその管理に屬せし奈良正倉院勅封御保管の事務を宮內省に移し、十九年の農商務省官制改定の際、自然消滅に歸す。**はくらんくわいじむきよく**(博覽會事務局)參照。

はくぶつ-くわん 博物館【名】㊀古今・東西の天然もしくは人工の諸物の、參考となるべきものを、博く蒐集・陳列して、公衆の縱覽に供する所。**ていしつはくぶつくわん**(帝室博物館)參照。㊁明治の初年、文部省に附屬せし一局所。六年、同省附屬の書籍館・博物局・小石川藥園と共に、博覽會事務局に合併せられ、八年、またこれと分離す。**はくらんくわいじむきよく**(博覽會事務局)參照。

はくぶつ-し 博物志【名】〔書〕地理略・地・山・水・山水總論より典禮考・樂考・服飾考・器名考・物名考・異聞・史補・雜說に至るまで、數十目に分ちて、種種の事物を蒐め記したるもの。十卷。もと支那晉の張華の撰なりしが、舊本は散逸し、現本は、後人、その遺文を採り、傍ら他說を雜取して補足せしものなり。

はくぶつ-つうろん 博物通論【名】博物學科中の各部に於て授けたる箇箇の事實の中、最も重要なる事項を、更に相連絡せしむるものとして了解せしむるを目的とし、生物・無生物の關係、生物體の組織、生物の繁殖・遺傳・進化・分布、自然界と人生との關係等の事項を說明せる學科。

はくぶつ-へうほん 博物標本【名】博物學に必要なる標本、即ち動物・植物・鑛物などの標本。

はく-ふん 白粉【名】㊀白色の粉。㊁**おしろい**(白粉)に同じ。盛衰記「紅顏、色鮮かにして、白粉、媚を造れり」謠曲(卒都婆小町)「桂の眉黛靑うして、白粉を施さず」一代女「顏に、白粉絕えて」

はく-ぶん 白文【名】㊀**はくじ**(白字)に同じ。㊁本文のみにて、註釋を施してあらぬ漢文。そぶん。海錄「註釋なき書籍を、素本(ソホン)といへり。……思ふに、白文といふよりおほせし名のやうにきこゆれど、しかもあらず(白文といふ名も、ふるくは見えず、明の嘉靖の人袁褧が六家文選跋に白文と云ふ事見えたり)」㊂訓點を施してあらぬ漢文。無點。文會雜記「周禮・儀禮の白文の刊行久しくあり」

白文・訓點【句】白文㊁に訓點を施すこと。

はく-ぶん 博文【名】『文は、文武の文にて學問の義』博く學問すること。諸藝太平記「博文・廣才の人なれども」

博文・約禮【句】『論語の雍也篇に「君子博學二於文一、約レ之以レ禮、亦可二以弗一レ畔矣夫」、同書の子罕篇に「博レ我以レ文、約レ我以レ禮」とあり』博く學問して事理を究めたる上、禮を以てこれを取締りて、正道を踏み過たぬやうにすること。

はく-ぶん 博聞【名】博く物事を聞き知りてあること。

ばく-ふん 爆粉【名】〔兵〕『英 Detonating-powder』多くは、雷汞・鹽素酸加里・硫化アンモニヤ等を混和して製する爆藥。主として、門管・信管等の發火藥として使用す。單純の雷汞に比すれば、分解緩徐にして、瓦斯の發生量多く、且つ火焰長くして、爆藥點火の狀況良好なり。

はく-へい 白兵【名】**はくじん**(白刃)に同じ。

はく-へい 白幣【名】白き幣帛。織留「番匠は、烏帽子・裝束を改め、白幣をかざし」

はくへい-せん 白兵戰【名】白刃を揮ひて接戰すること。

はく-へう 白票【名】㊀白色の投票紙又は白球などを用ふる投票。無記名投票の時に用ひて、多くは贊成の意を表す。(靑票に對して)㊁**むきめいとうへう**(無記名投票)に同じ。

はく-べう 白描【名】繪畫を描くに、墨にて輪廓のみを描き、彩色を施さぬこと。すがき。素描。

ばく-べう 麥苗【名】麥のなへ。

はくべう-ぐわ 白描畫【名】白描の法に依れる繪畫。白畫。

はく-へき 白壁【名】白く塗りたるかべ。しらかべ。

はく-へき 白璧【名】㊀外邊圓くして、中心に孔ある、白色のたま。しらたま。はくぎよく。㊁貴重なる物の譬。

白璧の微瑕(カビ)【句】『支那梁の蕭統の陶淵明集序に「白璧微瑕、惟在二閒情賦一」とあり』大體は完全にして、ただ僅かに缺點ある譬。玉に瑕(キズ)。白玉（ハクギヨク）の微瑕。〔諺語〕

はく-へき 薄壁【名】うすき壁(カベ)。

はく-へん 白片【名】白き一片。

はく-へん 薄片【名】薄き一片。薄きかけ。

はく-べら 蘩蔞【名】〔植〕㊀**はこべ**(蘩蔞)

に同じ。〔古語〕和名「蘩蔞、波久倍良」㊁**たびらこ**(田平子)㊁に同じ。

はく-ぼ 薄暮【名】『暮に薄(セマ)る時の義』ゆふぐれ。たそがれ。ひぐれ。くれがた。はくや。

はく-ぼ 伯母【名】年長のをば。父又は母の姉、又、伯父の妻。

はく-ぼう 薄俸【名】少額の俸給。「薄給。薄祿。小給。

はく-ほう 白鳳【名】〔動〕㊀白き羽毛の鳳。㊁**はくてう**(白鳥)㊁に同じ。

はくほう 白鳳【名】私年號の一。孝德天皇の五年を元年とし、十六年繼續せしもの、齊明天皇の七年を元年とし、十一年〔一說に、六年とも、二十三年とも、二年とも〕繼續せしもの、天智天皇の元年を元年とし、六年(一說に十四年)繼續せしもの、弘文天皇の元年を元年とせしもの、天武天皇の元年を元年とせしもの等あり。

はく-ぼく 白墨【名】もとは白堊の粉末、近來は石膏の粉末を捏ね、棒狀の型に詰めて固めたるもの。主に黑板に書くに用ふ。ちよおく。白堊。

はくぼく-しつ 白木質【名】〔植〕**しらた**(白太)を見よ。

はく-ぼたん 白牡丹【名】花の色の白き牡丹。しろぼたん。俳家奇人談(玄玄)「野小屋へも御幸の沙汰や白牡丹」

はく-ま 白麻【名】支那唐の代の制度にて、翰林の、天子の內勅を奉じて書き記すに用ひし、白き麻の紙。將相の拜免、征伐の號令に用ひたり。**くわうま**(黃麻)參照。

はぐ-ま 白熊【名】犛牛(ヤク)の尾の、色白きもの。支那より舶來し、長大にして、馬の尾のごとく總狀をなし、光澤あり。黑きを黑熊(コグマ)、赤く染めたるを赤熊(シヤグマ)といふ。拂子(ホッス)に作り、又は旗・槍・兜などの裝飾に用ひたり。

はぐ-ま【名】〔植〕『前條の語の轉義。白毛あるよりいふ』㊀**おきなぐさ**(翁草)㊀に同じ。〔白頭翁〕㊁**くるまばはぐま**(鬼督郵)に同じ。〔鬼督郵〕

はく-まい 白米【名】白く搗き精(シラ)げたる米。しらよね。つきごめ。精米。

はくまい-しやう 白米商【名】白米を賣る家、又その人。こめや。

はく-まう 白毛【名】白き毛又は羽毛。

はくまう-ゐので 白毛ゐので【名】〔植〕**みやましけしだ**(深山しけ羊齒)に同じ。

はく-まく 白膜【名】㊀白色の膜。㊁〔醫〕**きようまく**(鞏膜)に同じ。

はく-まく 薄膜【名】うすき膜。

薄膜の色【句】〔理〕『英 Colour of thin menbrane』光の干涉によりて生ずるもの。日光が薄膜に入射する時は、その表面より反射するものと、膜の下面より反射し來るものとは、相重なる。若し膜の或部分に於て、青の光波の、谷と峯とが相重なりて、互に打消す時は、この部分より來る光は、青を缺くために、その餘色なる橙色を呈し、又、薄膜の他の部分に於ては、膜の厚さやや異なるを以て、他の色が干涉のために打消さるるが故に、膜は所によりて、種種の色を表はす。

はぐま-さう 鬼督郵【名】〔植〕**はぐま**(鬼督郵)㊁に同じ。

はく-まつ 白沫【名】白色を呈する飛沫。

ばく-まつ 幕末【名】德川幕府時代の末。

は-ぐみ 葉組【名】煙草の葉を刻む前に、種類によりて、香味・色澤等の異なるものを、適度に混和・配合すること。

はく-みん 白民【名】**はくてい**(白丁)㊁に同じ。

はく-む 白霧【名】しろき色を呈するきり。

はく-むし 箔蟲【名】〔動〕**しみ**(衣魚)に同じ。

は-ぐん 破軍【名】〔天〕**はぐんせい**(破軍星)の略。堀川波鼓「四人嬉しき辻占の……さあ、破軍が直った。仕濟した」

ば-ぐん 馬群【名】馬のむれ。

ぱくん【貌】**ぱくり**に同じ。

はぐん-せい 破軍星【名】〔天〕北斗の第七の星。劍の狀をなし、每月運轉して、十二時に隨ひて、その處を變ふるより、その變化を建(ヲザ)すといひ、陰陽家にては、その方角を萬事に不利なりとして忌む。斗柄。**をざす**(建す)參照。

はぐんだて-かぶと 破軍立兜【名】紋所の一。兜の鉢の前方へ七曜星を添へて描けるもの。

はく-めい 薄明【名】〔天〕『英 Twilight』日出前又は日沒後の若干時の間、日光が、大氣の層より反射及び屈折して、地面に達するために、全く暗くなりきらずして、幾らか明くなり居る現象。その繼續時間は、大氣層の高さ・密度及び日日の黃道面と觀測地の地平面とがなす角度に關係す。故に、赤道地方に於ては短く、高緯度の地方に至るにつれて長し。

はく-めい 薄命【名】つたなき運命。ふしあはせ。不幸。不運。薄福。若風俗「薄命の身」

ばく-めい 幕命【名】幕府の命令。

ばくめい-き 爆鳴氣【名】〔化〕『英 Detonating gas』水素二容と酸素一容との混合氣體。點火すれば、烈しく爆發して、音を發す。

ばく-めう 麥苗【名】**ばくべう**(麥苗)に同じ。盛衰記「三月雨風起、麥苗不レ秀、多黃死」

はく-めん 白面【名】㊀年若くして、色のなまじろき顏。㊁**すがほ**(素顏)に同じ。㊂年若くして、世の經驗・閱歷に乏しきこと。黃吻。「白面の書生」

はく-めん 白綿【名】鷹の頭の一部。

はくめん-らう 白面郎【名】㊀年若くして、色のなまじろき男。㊁年若くして、世の經驗・閱歷に乏しき男。黃吻兒。

はく-もくれん 白木蓮・玉蘭【名】〔植〕木蘭(モクレン)科に屬する落葉亞喬木。高さ約二丈に達し、形ほぼ木蓮に類すれど、葉多少小く、且つ花瓣と萼との區別明かならず。葉は廣楔形にして、微凸頭を有し、全緣にして互生す。早春、白色の芳香有る大花を開く。花蓋は、九片あり、倒卵形にして厚し。觀賞に供し、又、種子及び芽は、藥用として、發汗・解熱・興奮の効ありといふ。いとまきざくら。おほこぶし。はくれんげ。ぎよくらん。むえふらん。

はく-もつ 白物【名】**おしろい**(白粉)に同じ。盛衰記「女の憍慢は、天狗と成りぬれば、頭にかつら懸けて、紅粉・白物の様なるものを、頰に附けたり」

はく-もん 箔紋・薄紋【名】箔をおきてあらはしたる模樣。浮世風呂「箔紋とは、……紋所や總模樣を、摺箔でおいた物さ」

はく-もん 白紋【名】〔天〕『羅 Faculae』太陽の表面に著しく輝きて見ゆる、水泡狀の紋。數・光度・形狀及び大さは一定せず、表面の緣に近くのみ見え、且つ緣に於て光輝最も強く、中心に近づくに從ひて弱くなる。太陽の表面を構成する物質と同一にして、表面上に凸起したるものなるべしといふ。

ばくもん-どう 麥門冬【名】〔植〕**やぶらん**(藪蘭)に同じ。薩摩歌「詮議まちまち麥門冬」

はく-や 箔屋・薄屋【名】金・銀・銅などの箔を打ち、又賣るを業とする家、又その人。はくうちや。浮世風呂「花屋の松さん、箔屋の金さん」

はく-や 薄夜【名】『夜に薄(セマ)る時の義』**はくぼ**(薄暮)に同じ。

はく-や 白夜【名】露西亞などにて、緯度高きため、夏至(ゲシ)及びその前後に於ては、午後十一時に近き頃、日沒となり、午前二時に近き頃には曉となり、その中間と雖も、日光の反映のために、全然暗黑とはならぬこと。

ばく-や 莫邪・鏌鋣【名】㊀古の、支那の名劍の一。**かんしやう**(干將)參照。㊁銳利なる名劍。㊂**かたなかぢ**(刀鍛冶)に同じ。曾我「鏌鋣を召し、三箇月に作らせ、一箇月に磨かせ」

莫邪の劍も持つ人柄(ヒトガラ)【句】利器も、これを持つ人の如何によりて用をなす譬。〔諺語〕

ばぐ-や 馬具屋【名】馬具を商ふ家、又その人。馬具師。

はく-やう 白羊【名】毛色の白き羊。

はく-やう 白楊【名】〔植〕**はこやなぎ**(箱柳)に同じ。太平記「青塚忽ち破れて、白楊已に枯れぬれば」

ばく-やう 博奕【名】『漢字の呉音の音便』**ばくち**(博打)㊁に同じ。〔古語〕大和「ばくやうをして、親にも、はらからにも、憎まれければ」

はくやう-きゆう 白羊宮【名】〔天〕黃道十二宮の一。「黃道の十二宮」を見よ。

はくやう-じゆ 怕痒樹【名】〔植〕さるすべり（百日紅）の漢名。

ばく-やく 爆藥【名】『英Explosive』熱又は强壓による化學的變化のために、瞬時に高溫度の瓦斯を多量に發生する、固狀或は液體狀の化合物又は混合物。彈丸を遠距離に飛行せしめ、或は堅牢なる物體を破壞するに用ふ。尋常藥・無烟藥・黃色藥等の別あり。爆破藥。爆發藥。爆裂藥。破壞藥。

はく-ゆ 白楡【名】ふんゆ（枌楡）㊀に同じ。

はくゆう 白雄【名】〔人〕江戶の俳人。信州上田の藩士。姓は加舍（カヤ）、通稱は五郞。昨雨、又、春秋庵と號す。白井烏醉の門に學びて、蕉風中興の一家となる。寬政三年歿す。年五十三。その著俳諧寂栞（サビシヲリ）は、今も、俳人の机邊に珍重せらる。

はくゆう-やわ 白雄夜話【名】〔書〕俳諧に關する雜件五十條を論述せるもの。一卷。加舍（カヤ）白雄の著。

はく-よう 舶用【名】船舶に使用すること。

はくよう-きくわん 舶用機關【名】水の抵抗に打克ちて、船舶を推進せしむるに使用する原動機。卽ちピストン式蒸氣機關など。複式・三聯成・四聯成機關等あり、すべて直立式なり。軸などの內部を空虛にして、場所を省き、又、成るべく重量を減ずることあり。

はくよう-きくわん 舶用汽罐【名】『英Marine boiler』船舶に使用するボイラア。陸上にて用ふるものと、形狀も構造も同じからず。

はくようきくわん-がく 舶用機關學【名】舶用機關に關する事項を硏究する學問。

はぐら-あづままろ 羽倉春滿【名】〔人〕かだあづままろ（荷田春滿）に同じ。

はぐら-ありまろ 羽倉在滿【名】〔人〕かだありまろ（荷田在滿）に同じ。

はく-らい 白癩【名】びやくらい（白癩）に同じ。

はく-らい 舶來【名】㊀外國より船載して齎し來ること。 物の、外國より渡來すること。㊁はくらいひん（舶來品）の略。㊂『外國より輸入する品は、すべて內地製造の品より優るとの誤想によりていふ』物事のすぐれてあること。上等なること。〔俚語〕

はくらい-しゆ 舶來種【名】舶來の品種。

はくらい-ひん 舶來品【名】舶來する品物。舶載品。

はくらい-もの 舶來物【名】前條に同じ。

はく-らう 白浪【名】碎けて、白色を呈するなみ。白波。

はく-らう 伯勞【名】〔動〕もず（鵙）の漢名。

はく-らう 伯樂・博勞【名】『康煕字典に「伯樂之樂、魯刀反、廣韻作二博勞一」とあり』㊀支那にて、天馬を典（ツカサドル）るといふ星。㊁〔人〕支那古代の、馬を馭するに巧なりし人。姓は孫、名は陽。世人、天馬を典るといふ星の名を取りて呼ぶ。

ばく-らう 博勞・伯樂・馬喰【名】『前條㊁の轉義』㊀馬を善く相する人、又、馬の病を療する人。はくらく。奈留別志「ばくらうといふも、伯樂の誤なるべし」㊁馬を賣買する商人。又、馬ばくらう・牛ばくらうなどいふ語もあり。うまあきんど。うまばくらう。ばくろ。東鑑「長沼五郎宗政可レ奉二行伯樂事一之旨被二仰付一」㊂『鈕雨亭隨筆に「俗謂二互市馬一曰二博勞一、伯勞一作二博勞一、乃知互市際、能相レ馬者、或稱レ之曰二博勞一、後訛爲二互市之義一、又至二諸物交易總一稱二博勞一、轉借失レ義甚矣」とあり』物と物とを交換すること。交易。互市。

ばく-らう 麥浪【名】麥の穗の風に靡くさまを、浪に譬へていふ語。麥の穗浪（ホナミ）。

ばくらう-うま 博勞馬【名】博勞の飼育せる馬。盛衰記「博勞馬の、兎角つくろひ飼ひたれば、……はや乘り損じて、物の用に立ちがたし」

ばくらう-がしら 博勞頭【名】德川幕府の職制の一。江戶より驛馬・人夫を出すことを掌りしもの。

ばくらう-ぐち 博勞口【名】かげぐち（陰口）に同じ。卜養狂歌集「かげごとをあしげにいひて鼻つき毛ばくらうぐちぞとかく許さぬ」

はぐら-がく 羽倉學【名】國學の一派。羽倉春滿（アヅママロ）の學統。古道の復興を唱道せしもの。

はぐらかす 逸らかす【動四他】㊀はぐれしむ。紛れ離れしむ。㊁問はれたる事を答へず、他事を言ひて、相手を迷はす。ごまかす。膝栗毛「ええ、いまいましい。一番はぐらかしやあがった」

はぐら-かんだう 羽倉簡堂【名】〔人〕儒者。名は用九、字は士乾、通稱は外記。別號天則・可也、後に蓬翁といふ。古賀精里を師とし、好みて歷史を誦す。德川幕府に仕へ、諸州の代官を經て、納戶頭に進み、機務に參ず。天保年中、沿岸及び諸島を巡視して、海防の議を陳ず。後、讒に會ひて罷められ、文久三年歿す。年七十四。

はく-らく 伯樂【名】㊀〔人〕はくらう（伯樂）㊁の誤讀。㊁ばくらう（伯樂）に同じ。

はく-らく 剝落【名】剝げ落つること。

はく-らくてん 白樂天【名】㊀〔人〕はくきよい（白居易）に同じ。㊁謠曲の一。支那唐の白樂天、我國に渡らんとせしに、住吉明神、假に漁翁と現じて、歌道を論じ、遂にこれを逐ひ返したまふ事を作れるもの。

はぐら-たみ 羽倉蒼生【名】〔人〕かだたみ（荷田蒼生）に同じ。

はく-らふ 白蠟【名】びやくらふ（白蠟）に同じ。

はく-らふ 白鑞【名】しろめ（白鑞）に同じ。

はく-らべ 羽校【名】鷹の翼の一部。

はく-らん 【名】くわくらん（霍亂）の轉訛。新永代藏「醫者の家に久しく使はれて片言をぬかすと、道三叱らるるを構はず、くわくらんを、はくらんと書いて」

はく-らん 白藍【名】〔化〕『英Indigo-White』藍靛（ランテン）を還元して得る、結白色・晶性の粉末。容易に酸化して、藍靛となる。無色にして、アルコオル・エエテル及びアルカリの溶液に溶解し、その溶液を、藍染に用ふ。あゐたてはふ（藍建法）參照。

はく-らん 博覽【名】博く書物を覽て、物事を識ること。博學。

はくらん-ぐすり はくらん藥【名】霍亂を治する効ある藥。新永代藏「格子に、はくらんぐすりと、看板出しぬ」

はくらん-くわい 博覽會【名】『英Exhibition』學術を勸め、農・工・商・牧畜等の事業を振興し、兼ねて、百般の技藝の連絡を增進するために、廣く人造及び天然の諸物を蒐集・陳列して、公衆の觀覽・購買に供し、同時に、その優劣を品評する會。內國勸業博覽會・萬國聯合博覽會等の別あり。內國通例、時期を定めて開く。西曆一七九八年に、ナポレオン第一世が巴里にて開設したるを嚆矢とし、我國にては、明治十年大久保利通の主唱にて、內國勸業博覽會を、東京上野に開きしを、初とす。

はくらんくわい-じむきよく 博覽會事務局【名】明治五年正院中に開設せられ、日比谷（ヒビヤ）門內舊本多邸內に置かれし一局。同年山下門內舊佐土原及び中津邸に移り、翌年文部省附屬の博物館・書籍館・博物局・小石川藥園を合併し、十月、文書・會計・用度の三課を置き、七年改めて博物・考證・工業・庶務の四科とし、七月、淺草の舊米廩を書籍收藏の所として、淺草文庫と名づけ、八年舊文部省附屬博物館・書籍館・博物局・小石川藥園の合併を解き、その翌月、博物館と改稱して、內務省に屬せしめ、五月、第六局と改稱せしが、九年博物館の稱に復し、四月、博物館を、その物品陳列場の名稱とし、別に事務所を併置して、博物局と稱し、十四年局は農商務省の所管に歸して、十月、上野本坊跡に移轉し、博物館も、上野に新築せられて、十五年開館の運に至れり。これ今の東京帝室博物館の前身なり。

はくらん-こげん 博覽古言【名】〔書〕六經・正史・諸子・家訓等より、修身・道德に關する要言を拔抄して、君道・政事・文學・武備・禮法・官制・祭祀・人倫・人事等の項目の下に類聚せるもの。十卷。菅原道眞の著。

はく-り 白痢【名】〔植〕しゆんらん（春蘭）に同じ。

はく-り 白痢【名】〔醫〕赤痢菌及びアミイバによりて起り、大便の中に多く膿汁を混和する、一種の傳染病。なめ。びやくり。

はくーり 薄利【名】㊀薄き利益。僅かなる利益。㊁薄き利息。僅かなる利子。

薄利・多賣【句】僅かなる利益を得て、なるべく多數を賣ること。

はくーり 剝離【名】はがれ離るること、又、はがし離すこと。

はぐり 葉栗【名】〔地〕㊀尾張國九郡の一。郡役所を、葉栗村大田島に置く。㊁尾張國葉栗郡にある村。明治三十九年、光明寺・大田島・佐千原(ハサチ)の三村を併合したるもの。郡役所あり。

はぐり 羽栗【名】〔地〕美濃國の舊郡の一。明治二十九年、中島郡と併せて、羽島(ハシマ)郡の新稱を立つ。もと前條㊀の域内なりしに、木曾川の河道變遷のため、美濃國に入り、葉を羽に改めたるなり。

ばくーり 幕吏【名】幕府の役人。

ばくーり 麥李【名】〔植〕**さもも**(早桃)の漢名。

ばくり【貌】㊀物を突き据うる音。どたり。ばたり。〔古語〕落窪「我にもあらず、大臣(オトド)の前に引き出で來て、ばくりとつい据ゑられて」㊁粘著してありし物の、急に離れかかるさま。ばくり。㊂口を廣く開きて食ひつくさま。ばくり。

ばくり【名】ばくること、又その人。〔俚語〕

ぱくり【貌】**ぱくり**に同じ。

はくりうげんぶがん 白榴玄武岩【名】〔鑛〕『英 Leucite-basalt』橄欖石を含みたる玄武岩の斜長石を、白榴石にて置き換へたりと見做すべきもの。顯微鏡を用ひざれば、眞の玄武岩と辨別するを得ず。

はくりうーせき 白榴石【名】〔鑛〕『英 Leucite』硅酸鑛物の一。火成岩の中などに存し、多くは白色又は灰色にして、玻璃光澤あり、正立方形の結晶をなす。水を含まざれども、方沸石に相當せる化學成分を有し、且つ種種の點に於て、これに類似す。

はくーりく 博陸【名】㊀『次條を見よ』**くわんぱく**(關白)の唐名。盛衰記「遷二博陸之配所於夷夏西鎭一」運歩色葉集「關白、唐名、殿下・博陸・執柄」㊁『說文事始に「烏曹氏始作二博陸一」とあり』**すごろく**(雙六)に同じ。〔博六〕

はくりくーこう 博陸侯【名】『漢書の霍光傳に「遺詔……光爲二博陸侯一」とあるに本づく』**くわんぱく**(關白)の唐名。拾芥抄「關白、博陸殿下・博陸侯・總已公官・執柄」

ぱくりーじよせい ぱくり書生【名】ぱくりを行ふ、無頼の書生。〔俚語〕

ぱくりーぱくり【貌】**ぱくぱく**に同じ。浮世風呂「烟草を、ぱくりぱくり飲んで」

はくりふーがん 白粒岩【名】〔地〕**はくがん**(白岩)に同じ。

ばくりふーしゆ 麥粒種【名】〔醫〕眼瞼に存する腺の急性化膿。

はくーりん 白燐【名】〔化〕**わうりん**(黃燐)に同じ。

ばくりんーか 麥林下【名】〔人〕**ばくりんしや**(麥林舍)に同じ。

ばくりんーしふ 麥林集【名】〔書〕中川乙由が、自詠の俳句を、春・夏・秋・冬・神祇・餞別・留別・畫讚・悼等に分類して集めたるもの。三卷。一名、麥林舍發句集。

ばくりんーしや 麥林舍【名】〔人〕『常に麥畝の間に庵居せしによりていふ』俳人中川乙由(イオツ)の庵號。

ばくりんしやーほっくーしふ 麥林舍發句集【名】〔書〕**ばくりんしふ**(麥林集)に同じ。

ばくーりやう 曝涼【名】日にさらし、風に當つること。むしぼし。延喜式「凡暴二涼佛像經典一者、起二七月上旬一、盡二八月上旬一」

はくりやうーたい 柏梁體【名】〔文〕『支那漢の武帝、柏梁臺を造り、その上にて、群臣と共に宴飮せし時、毎句押韻の七言聯句を作らしめし故事に本づく』漢詩の一體。句毎に押韻する七言古詩。

はくーりよう 白龍【名】白色の龍。謠曲(東方朔)「白龍に乘じて顯れたまふ」

白龍魚服【句】『次條を見よ』貴人の微行の譬。

白龍魚服して、豫且(ヨシ)に困(クル)しめらる【句】『莊子の外物篇、史記の龜策傳諸先生補續等に見ゆ。謠曲「羽衣」の漁夫の名を「はくれう」といへるも、この故事に依れるなるべし』㊀神靈なる白龍が、魚に化して、豫且と稱する漁人に捕へられし故事。㊁『張衡の東京賦に「白龍魚服、見レ困二豫且一」とあり』高貴の者が微行して、却りて、賤人に困しめらるる譬。〔諺語〕

はぐる 逸る【動下二自】連(ツレ)の人を見失ふ。同行の者に紛れ離る。

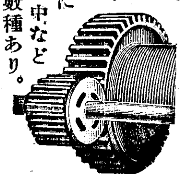
はぐる【動四他】剝ぎ取る。まくる。めくる。「紙をはぐる」

はぐる【接尾】**そこなふ**(損ふ)に同じ。柳樽「光る君軒端で蟬を取りはぐり」和合人「あぶなく溷(ドブ)へはふり込まれはぐりました」

ばくる【動四他】店先の商品などを掠め取る。ばくりを行ふ。〔俚語〕

はーぐるま 羽車【名】三種の神器の一なる御鏡の御還幸の時などに載せ奉る御腰輿。貞方記「御辛櫃一合、奉レ載二羽車一、加輿丁著二白丁一奉レ昇レ之」

はーぐるま 齒車【名】『英 Toothed wheel』輪の周圍に、齒を刻み、その咬合によりて、一軸より他の軸に運動を傳達して、諸機械を運轉するに用ふるもの。時計の中などにもあり。齒狀に數種あり。



(はぐるま)

はーぐるま 杷車【名】車輪によりて移動せしめつつ、米穀・牧草類を搔聚むるに用ふる農具。

はぐれ 波久禮【名】〔地〕武藏國大里郡にある地。荒川の北岸。秩父(チチブ)鐵道の一驛。關東平野の一極限、秩父山中に入る關門たり。

はくーれい 魄靈【名】**いうれい**(幽靈)に同じ。謠曲(舞政)「嵐と共に、燈火を吹き消して、暗まぎれより、魄靈は失せにけり。魄靈の影は、失せにけり」

ばくーれう 幕僚【名】㊀『宋史の顏衍傳に「藩鎭幕僚、勿レ得レ任二臺官一」とあり』大將の旗下に屬して、その謀議に參與する者。㊁陸海軍の司令官又は總督などに直屬して、參謀の事務を執る將校。㊂或人に屬して、その計畫に與(アヅカ)る者。顧問。幕友。

はくーれき 白礫【名】白色の小石。

ばくーれつ 爆裂【名】火藥等の力によりて、一時にはじけ裂くること。破裂。**ばくやく**(爆藥)參照。

ばくれつーだん 爆裂彈【名】**ばくだん**(爆彈)に同じ。

ばくれつーやく 爆裂藥【名】**ばくやく**(爆藥)に同じ。

ばくれつーりうだん 爆裂榴彈【名】破壞力の激烈なる黃色藥・ダイナマイト等を炸藥としたる榴彈。地雷榴彈と劇爆榴彈との二種あり。各その條を見よ。

はくーれん 白練【名】白色のねりぎぬ。

はくーれん 白蓮【名】㊀花の色の白き蓮。びやくれん。㊁〔植〕**はくもくれん**(白木蓮)の略。

ばくーれん 莫連【名】女のすれっからし。「女のならずもの。

はくれんーくわい 白蓮會【名】一種の迷信を主旨とせる宗教團體。支那の天津・北京等北部一帶の地に廣がり、その根底甚だ堅し。義和團の如きはその支派に屬す。

はくーれんげ 白蓮花【名】〔植〕**はくもくれん**(白木蓮)に同じ。

はくれんーけう 白蓮教【名】支那元の韓山童の開創せし、祕密結社組織の敎派。祈禱と念呪とを以て、民衆を惑はし、淸代に及びて、乾隆及び嘉慶の際に、その敎徒、叛亂を起して、淸朝を苦しめ、尋いで討平せられたれど、支派なほ各地に蔓延せりといふ。

ばくれんーもの 莫連者【名】次條に同じ。

ばくれんーをんな 莫連女【名】莫連なる女。すれっからしをんな。ばくれんもの。

はくーろ 白露【名】㊀露の白く光りてあるもの。しらつゆ。㊁二十四節の一。秋分前の十五日、卽ち陽曆九月八日頃。

白露、霜となる【句】『詩經の秦風蒹葭篇に「蒹葭蒼蒼、白露爲レ霜」とあるに本づく』季節の、漸次陰氣に向ふ形容。

はくーろ 白鷺【名】しらさぎ(白鷺)に同じ。

白鷺は塵土の穢（ケガレ）を禁ぜず【句】元來潔白なる性質の者は、境遇・地位のために、その質を變ずることなし。〔諺語〕用明天皇職人鑑「白鷺は塵土の穢を禁ぜずとや」

はーぐろ 齒黑【名】はぐろめ（齒黑）に同じ。（後世、多くは接頭語**お**（御）を添へて呼ぶ）堤中納言「はぐろも、更に、うるさし、きたなしとて、附けたまはず」

はぐろ 羽黑【名】〔地〕**はぐろさん**（羽黑山）の略。義經記「出羽の國羽黑の山伏にて候」

ばくーろ 博勞・伯樂・馬喰【名】**ばくらう**（博勞）の轉訛。

ばくーろ 暴露・曝露【名】『暴は、日光にさらす義、露はあらはにする義』㊀風雨にさらさるること。雨露に、身體をさらすこと。野宿（ノジユク）。「大兵を、滿洲の野に暴露す」㊁惡事・陰謀などのあらはるること。露見。發覺。

ばくーろう 麥隴・麥壠【名】『隴はうね、又はたけの義』むぎばたけ。「菜圃・麥隴」

はぐろーがね 齒黑鐵漿【名】**はぐろめ**（齒黑）に同じ。

ばくろーかふはん 暴露甲板【名】『英 Weathered deck. 風波に暴露する甲板の義』最上部なる甲板。

はくーろく 白鹿【名】毛色の白きしか。

はくーろく 薄祿【名】**せうろく**（少祿）に同じ。

はくーろく 博陸【名】**はくりく**（博陸）を見よ。

はくろくどうーがくき 白鹿洞學規【名】支那南宋の朱熹が、白鹿洞書院を主りし時、その學生に示しし規約。朱子文集卷七十四に見え、白鹿洞書院揭示と題せり。

はくろくどうーしよゐん 白鹿洞書院【名】『白鹿の名は、唐の李渤、その兄渉と共に廬山に書を讀み、一の白鹿を畜ひしが、寶曆中、李渤の、江州刺史たるに及び、故處に於て臺樹を創め、號して白鹿洞と呼びしが、後、南唐の代、國學の設立ありて、初は廬山國學、後には白鹿國學と改稱せられしに起る』支那南宋の朱熹が、江西省南康府なる廬山の五老峰下にある、南唐の時の學館の遺址に開きたる私塾。

はくろくどうしよゐんーけいじ 白鹿洞書院揭示【名】**はくろくどうがくき**（白鹿洞學規）を見よ。

はぐろーごんげん 羽黑權現【名】**はぐろさんじんじや**（羽黑山神社）の舊稱。

はぐろーさう はぐろ草【名】〔植〕爵牀（キツネノマゴ）科に屬する草。莖は方柱狀にして、高さ一二尺に達し、葉は橢圓形にして、全緣、對生し、夏季、白色・淡紅の花、枝梢の頂に生ずる大・小二片の苞の間に、二三箇づつ開く。各地の藪陰・樹間等に自生す。めごしつ。

はぐろーさん 羽黑山【名】〔地〕㊀羽前國東田川郡手向（タウゲ）村の東半里にある山。高さ一一八八尺。月山（グワツサン）・湯殿山（ユドノサン）と並びて、羽前三山と稱せらる。山上に羽黑山神社あり。**はぐろは**（羽黑派）參照。㊁下野國河内郡羽黑村に屬し、宇都宮市の北に聳ゆる山。高さ一四九七尺。羽黑神社あり。

はぐろさんーごんげん 羽黑山權現【名】次條の舊稱。

はぐろさんーじんじや 羽黑山神社【名】羽前國東田川郡手向（タウゲ）村羽黑山上に鎭座せる國幣小社。祭神は稻倉魂（ウカノミタマ）命・玉依姫（タマヨリヒメ）命。推古天皇の御代の創建。正しくは出羽（イデハ）神社。舊稱、羽黑山權現・羽黑權現。

はぐろさんーだいごんげん 羽黑山大權現【名】**はぐろさんごんげん**（羽黑山權現）の尊稱。

はぐろさんーは 羽黑山派【名】**はぐろは**（羽黑派）に同じ。

はぐろさんーまつり 羽黑山祭【名】羽黑山神社㊀の祭禮。

はぐろーじんじや 羽黑神社【名】下野國河内郡羽黑村に鎭座せる神社。羽前國の羽黑山神社を勸請したるもの。

ばくろーちやう 馬喰町【名】〔地〕『江戸時代に、博勞頭の居りし所なるより名を得たり』東京市日本橋區にある町。常磐橋より淺草橋に至る大路に當り、本町（ホンチヤウ）・傳馬町に續く。江戸時代以來、旅宿多く、殊に、昔は、公事宿（クジヤド）の所在地として有名なりき。柳樽「新田（シンデン）を手に入れて立つ馬喰町」八笑人「長門鮓とは何處だ。馬喰町よ。この男も、あの鮓屋を知らねえか」

はぐろーは 羽黑派【名】修驗道（シユゲンダウ）の一派。崇峻天皇の第三皇子蜂子皇子の起し給へるものといひ、羽前國東田川郡手向（タウゲ）村羽黑山權現にて修行せり。羽黑山權現は、江戸時代には、天台宗輪王寺門跡の配下に屬せしが、明治以後、純然たる神社に改めらるるに及びて、山伏は廢せられたり。羽黑山派。

はぐろーまうで 羽黑詣【名】羽黑山神社に詣づること。

はーぐろみ 齒黑【名】**はぐろめ**（齒黑）に同じ。建内記「予女（九歲）有㆓祝著事㆒、齒久呂美三筆、予附㆓初之㆒」

はくーろん 駁論【名】他人の意見又は議論を非難・評論すること、又その論。論駁。駁議。

はーぐろめ 齒黑・齒黑女・鐵漿【名】鐵片を、酒又は酢などに浸して、密閉して、久しく貯へ、酸化せしめたる液。褐色にして、不快なる臭氣あり。齒を黑く染むるに用ふ。はぐろ。はぐろみ。おはぐろ。かね。つけがね。和名「黑齒、波久路女」

はぐろめーざら 齒黑皿・齒黑盤【名】はぐろめにて齒を染むる時、その液の滴を承くる盤。

はぐろめーつぼ 齒黑壺【名】はぐろめを入れおく壺。おはぐろつぼ。

はぐろめーふで 齒黑筆【名】はぐろめを齒に染めつくるに用ふる、筆のごとき形の羽楊枝。

はぐろーやまぶし 羽黑山伏【名】羽黑山に屬する山伏。義經記「羽黑山伏の渡賃（タワシチン）關手（セキテ）なす事はなきぞ」

はーくわ 破瓜【名】㊀『瓜の字を分解する時は、二箇の八の字となりて、二八十六なるよりいふ。孫綽の情人碧玉歌に「碧玉破瓜時、郎爲㆑情顚倒」とありて、通俗編に「俗以㆓女子破身㆒爲㆓破瓜㆒、非也。瓜字破㆑之爲㆓二八字㆒、言㆓其二八十六歲㆒耳」とあり』女子の十六歲の異稱。㊁『瓜の字を二分したる二箇の八は、八八六十四なるよりいふ。事文類聚に「呂洞賓謁㆓張洎㆒留詩云、功成當㆑在㆓破瓜年㆒、消㆓年六十四㆒卒」とあり』六十四歲の異稱。

はくーわ 白話【名】㊀むだばなし。空談。㊁支那の口語體の文章。

はーくわ 葩華【名】**はな**（花）に同じ。

はーくわい 破壞【名】やぶりそこなふこと、又、やぶれそこなはるること。こはすこと、又、こはるること。はゑ。

はーくわい 破潰【名】やぶれつひゆること、又、やぶりつひやすこと。やぶること、又、やぶるること。

はくわいーかぢゆう 破壞加重【名】**はさいかぢゆう**（破碎加重）に同じ。

はくわいーきやうりよく 破壞强力【名】**はさいきやうりよく**（破碎强力）に同じ。

はくわいーこうざう 破壞構造【名】〔地〕『英 Cataclastic structure』岩石の合分たる鑛物の粒が破壞したる構造。火成岩の壓せられたるもの。

はくわいーしや 破壞射【名】〔兵〕攻城に際して、墻壁を破壞するための射擊法の一。約二千メエトル以上の遠距離より、墻壁の或部面に射彈を集中して、破壞し、崩墜せしむるもの。（破墻射に對して）

はくわいーせつ 破壞說【名】他の議論又は計畫などに對し、反對を唱へて、それを破壞する意見。

はくわいーやく 破壞藥【名】**ばくやく**（爆藥）に同じ。

はーくわう 波光【名】波の色。

はーくわう 百王【名】**ひやくわう**（百王）に同じ。謠曲（伏見）「百王萬歲に、平（タヒラ）の都なるべし」

はくわーがう 百和香【名】『杜甫の詩に「雷聲忽送千峰雨、花氣渾如㆓百和香㆒」とあり。**はくぶかう**（百步香）參照』種種の香料を合はせて製したる薰物（タキモノ）。古今「百和香。花ごとにあかず散らしし風なればいくそばくわがうしとかは思ふ」

はくーわん 薄椀【名】薄き形に造りたる一種の椀。岩代國會津にて製するもの、

最も有名なり。

ば-くわん 馬關【名】〔地〕『赤馬關(アカマガセキ)』しものせき(下關)に同じ。

馬關砲擊【句】「下關(シモノセキ)の戰」に同じ。

ばくわん-でうやく 馬關條約【名】日淸戰爭の結果、わが伊藤博文・陸奧宗光と淸國の李鴻章との長門國下關(シモノセキ)にて取結びたる媾和條約。明治二十八年四月十七日成立、五月十三日公布せらる。十一箇條より成り、その主なる條項は、朝鮮獨立の確認、遼東半島・臺灣及び澎湖列島の割讓、庫平銀二億兩の賠償、沙市(湖北省荊州府)・重慶(四川省)・蘇州(江蘇省)・杭州(浙江省)の開港等なり。下關(シモノセキ)條約。「三國(サンゴク)干涉」參照。

はく-ゑ 箔繪・薄繪【名】箔をおきてあらはしたる繪。 淸水物語「出家の武道、みめよき比丘尼(ビクニ)、木綿足袋の箔繪とかやうの事は、世に多かんめる」

はくゑ-し 箔繪師・薄繪師【名】箔繪を作るを職とする工人。

はく-ゑん 白猿【名】毛色の白き猿。

はく-をく 白屋【名】屋根を枯茅にて葺きたる賤しき人の家、又その家に住む人。(朱屋に對して) 平家「忠盛、靑雲の翅(ツバサ)をかい刷(ツクロ)ふと雖も、世の民なほ、白屋の種を輕んず」 太平記「白屋・東夷の卑きに下らせたまひて」

はけ 術【名】てだて。はかりごと。じゅつ。〔古語〕 紀「術、ハケ」

はけ 刷毛【名】㊀『掃(ハキ)毛の略かといふ』獸の毛などを束ね、薄板二枚の間に植ゑ並べて、その端を切り揃へ、糊・漆などを塗るに用ひ、又、桿心(ミゴ)などにて作り、物の上をこすりて、その塵・泥を拂拭し、又は洗濯用とする具。かみばらひ。ぶらし。〔刷子〕 和名「陸詞切韻云、鬃、漢語抄云、鬃、筆波介。以㆑漆塗㆑物也」 ㊁はけさき(刷毛先)に同じ。 新永代藏「髮は、茶屋女をまなびて、二のはけを引出して、島田、元ゆひ廣く」

はけ 疏通【名】㊀はくること。水の滯らず流るること。疏通(ソツウ)。㊁商品の賣れ行くこと。さばけゆくこと。

は-け 破家【名】〔佛〕次條を見よ。

破家・散宅(サンタク)【句】〔佛〕『家宅を破散する義』大悟徹底して、生死(シヤウジ)の家を破し、無明(ムミヤウ)の宅を散ずること。 遠羅天釜「慧可(ヱカ)大師は、臂を斷って、自(ジ)の本源に徹し、……、臨濟は、痛棒を喫して、破家散宅す」

はげ 剝【名】塗りたる物の離れ落つること、又その離れ落ちたる痕。

はげ 禿・兀【名】『前條の語と同義』㊀毛髮の脫け落つること、又その痕。㊁はげあたま(禿頭)の略。㊂山などに、樹木の生えてあらぬこと。

はげ【名】〔植〕よめな(嫁菜)を云ふ。〔近江國の方言〕

は-げ 破夏【名】〔佛〕夏安居(ゲアンゴ)の中途に、法界を出でて外遊すること。

ばけ 化【名】㊀ばくること、又、ばけたるさま。おばけ(御化)參照。 宇治「狸を射殺して、そのばけを現しけるなり」 ㊁素性(スジヤウ)・眞相などを包み隱して、人目を欺くこと。ごまかし。しっぽ。化の皮。馬脚。 太平記「畠山狐の皮の腰當に化の程こそあらはれにけり」 八笑人「手間どってゐる內、化が現れちゃあ、つまらねえもんだ」 ㊂しよさごと(所作事)を云ふ。〔大阪の語〕 ㊃釣魚用の擬餌鉤(ギジコウ)。

化の皮【句】前條㊁に同じ。 八笑人「長居をしては、化の皮があらはれんと」

はげ-あがる 禿上る【動四自】額の際生(ハエギハ)深く禿ぐ。はげいる。

はげ-あたま 禿頭・兀頭・禿天窓【名】はげたる頭、又その人。あかびかり。はげ。禿顱。禿頭(トクトウ)。 和合人「夕日に向った禿天窓、まぶしくって、目がばちばちすらあ」

はげ-あと 禿痕【名】はげたるあと。毛髮の脫け落ちたるあと。

は-けい 波形【名】波のごとく起伏せる形。波狀。

は-けい 葩經【名】〔書〕『韓愈の進學解に「詩正而葩」とあるに本づく』しきやう(詩經)の異稱。

ば-げい 馬藝【名】㊀馬に乘りつつ種種の技を演ずること、又その技。 後紀「覽㆓種種馬藝㆒」 徒然「御隨身近友(チカトモ)が自讚とて、七箇條書きとどめたる事あり。みな、馬藝、させることなき事どもなり」 ㊁馬のする藝。

はけい-てつ 波形鐵【名】なまこいた(海鼠板)に同じ。

は-げいとう 葉雞頭・雁來紅【名】〔植〕『雞頭に似て、葉の色を賞するよりいふ』莧(ヒユ)科に屬する一年生の草。高さ二三尺に達し、葉は長楕形にして、葉脚尖り、且つ銳尖頭を有し、葉柄長くして互生し、成長後には、黃色と紅色との斑をなし、極めて美し。花は單性にして、形小く、葉腋間に集り生じ、夏・秋の際に黃綠色となる。觀賞用とす。かきつかばな。かるくさ。かまつか。がんらいこう。にしきけいとう。

はげ-いる 禿入る【動四自】頭髮、生際(ハエギハ)深く禿ぐ。はげあがる。 落窪「髻は塵ばかりにて、額はげ入りて」

は-けう 灞橋【名】支那長安の東、灞水(末は渭水に入る)に架れる橋。

はけ-がき 刷毛書【名】文字又は繪を、刷毛にて書くこと、又その書きたるもの。紙面などに、刷毛目の、層をなしてあらはるるを利用して書くものにて、その繪なるを、刷毛繪(ハケヱ)といふ。

はけ-かた 疏通方【名】はけゆくさま。はけぐあひ。さばけかた。

ばけ-かた 化方【名】ばくる方法、又、ばけたる狀態。

はげ-がみ 禿髮【名】㊀禿げ落ちたる毛髮。おちがみ。㊁はげあたま(禿頭)に同じ。

ばけ-く 化句【名】〔文〕冠附(カムリヅケ)にて、言はんとする語を、殊更に解し難き他の語に變へて言ひあらはす句。例へば、「おたのしみ」といふに「金龍山で菩薩まき」と附けて、米を菩薩といふより、淺草海苔にて飯を卷くをいひ、海苔卷を作る意に言ひなす類。

はけ-くち 疏通口【名】はけみち(疏通道)に同じ。

ばけ-ぐち 化口【名】盜まれなどしたる品物の行方。 春花五大力「樣子を聞けば、盜物、そのばけ口も、あたしが働て」

ばけくらべ-うしみつ-の-かね 化競丑滿鐘【名】〔書〕種種の動物を、人類の如くに動作せしめて作りたる滑稽小說。三卷。「化の川原」「滕罔神(モモシジン)やしろ」(以上、上卷)・「箱根の先化住居(バケズマヒ)」(中卷)・「山男旅籠屋」(下卷)の四段より成る。曲亭馬琴の著。

はげ-ごうちやく 剝ごうちやく【名】塗物などの、剝げ損じたること。

はけ-さき 刷毛先【名】㊀刷毛(ハケ)の先端。㊁髻(モトドリ)の先端。はけ。

はけさき-たけぐし-いれ 刷毛先竹串入【名】たつまつふう(辰松風)に同じ。

はげし 烈し・劇し・激し【形二】㊀勢銳し。勢强し。あらし。おそろし。きびし。すごし。たけし。劇烈なり。㊁一かたならず。甚し。ことごとし。嚴重なり。 枕「寺へ詣で、物へも行くに、……、用意はげしからず、あまり見苦しとも見つべくはあらぬに」 ㊂けはし。險阻なり。 空穗「はげしき道に打越えて、深き山の奧を」

はげ-しばり はげ縛【名】〔植〕みねばりに同じ。

はげ-しやう 禿性【名】頭髮の禿易きたち。

はげ-しやう 半夏生・三白草【名】〔植〕次條に同じ。

はげしやう-ぐさ 半夏生草・三白草【名】〔植〕はんげしやう(半夏生)㊁に同じ。

はげ-しよ 半夏生【名】はんげしやう(半夏生)㊀の訛。

ばけ-ずまひ 化住居【名】妖怪の、人の姿に化けて住むこと、又その家。 化競丑滿鐘「玉くしげ箱根の先は、化物のおさだまりなる隱里(カクレザト)、野暮に際れる化住居」

はげ-ちやう 禿頂・兀頂【名】はげ(禿)㊀を罵りていふ語。 膝栗毛「額のはげちやうが無くて」

はげ-ちやびん 禿茶瓶・兀茶瓶【名】はげあたま(禿頭)を云ふ。〔京都・大阪の語〕

はげ-ちやん 禿ちやん・兀ちやん【名】禿頭の人を嘲りて云ふ語。〔東京の俚語〕

ばけつ (英 Bucket の轉訛)【名】亞鉛・ブリキ・銅・鐵などにて、桶の如き形に造り、水などを汲み入るるに用ふる器。

はけ-ついで 刷毛序【名】一糊刷毛(ノリバケ)を用ひて、或物を糊貼にしたる序に、他の物をも貼ること。二或事の序に、他の事をも爲すこと。膝栗毛「彌次郞兵衞・北八とて、拔參の刷毛序にまぐれ出たれども」和合人「當春(タウハル)は、文溪堂が年始のいでたち、これはあきれが御禮かと云へば、全く左に非ず、近江までのはけついで」

ばけつ-うんくわうき バケツ運鑛機（英 Bucket-conveyer）【名】數箇のバケツを、針金などにて並べ吊し、その針金を廻轉せしめて、鑛山・選鑛場・精煉所等にて、鑛石・石炭等を、垂直なる又は垂直に近き高所に運搬するに用ふる機械。

はげ-っ-ちやう 禿頂・兀頂【名】はげちやう(禿頂)の音便。浮世風呂「小鬢先のはげっちやうでも治(ナホ)すが能い」

はげ-っ-ちよ 禿頂・兀頂【名】前條の訛。浮世床「かかあたばねに、兀っちよを附けて、三十八文」

ばけ-どり 化鳥【名】一鳥の妖怪。化鳥(ケテウ)。二いうぢよ(遊女)を云ふ。〔加賀國の方言〕

はけ-なが 刷毛長【名】德川時代の末年に、男子殊に俠客などの間に多少流行したる、髮の結ひ方。刷毛先を特に長くしたるもの。

ばけ-ばけし 化化し【形二】いかにもばけたるさまなり。ばけたる樣子、いちじるし。堀川狂歌集「白粉(オシロイ)をばけばけしくも塗り散らす顏は師走(シハス)の雪女かも」

は-けふ 巴峽【名】〔地〕『峽の字の音、正しくはカフ。蜀、即ち今の四川省の重慶府は、古の巴郡の地にて、今も、その府城の地を、巴といへり』支那の揚子江の、蜀の地を流るる所にある、三つの峽、即ち西陵峽・歸鄕峽・巫峽の總稱。支那の里數にて兩岸、七百里に亙り、山嶽峙ちて、亭午に非ざれば、天日をも見る能はずといふ。三峽(サンカフ)。

は-げふ 霸業・覇業【名】覇者となる事業。覇者となる功業。

は-けぶり 羽烟・羽煙【名】多數の鳥が、塵烟の立ち上る如く飛び立つこと、又そのために起る塵烟。爲忠集「田面(タヅラ)にぞ羽けぶり立つるむら雀穗浪かたよる風にまかせて」

はげます 勵ます【動四他】一勵むやうになす。精を出さす。勢を附く。勇ます。鼓舞す。奬勵す。二心又は聲などを荒立つやうにす。「聲を勵ます」

はげ-まはる 剝廻る【動四自】一面に剝げゆく。孕常磐「赤銅鍔も物錆びて、雲の空鞘(ソリザヤ)、剝げまはり」

ばけ-まはる 化廻る【動四自】ばけて、此處・彼處とまはりゆく。用明天皇職人鑑「ばけ廻りしを突きとめたるが、覺(オボエ)あらう」

はげみ 勵【名】はげむこと。精を出すこと。勉勵。奮勵。

はげみ-あひ 勵合【名】はげみあふこと。

はげみ-あふ 勵合ふ【動四自】互に勵みて、勝たんことを爭ふ。

はけ-みち 疏通道【名】一水の流通。水の疏通。二商品のはけゆく方面。はけくち。うれくち。

はげむ 勵む【動四自】氣力をはげしくす。氣を荒立つ。心をふるひ起す。精を出す。勉勵す。字鏡「類、切齒怒也。久比波介毛」源氏「おくれたる筋の心をも、なほくちをしくは見えじと思ひはげみつつ」

はげむ 勵む【動四他】心をはげしくして爲す。著聞「旱魃の愁ありければ、とかく祈雨を勵めども、叶はず」用明天皇職人鑑「心すずしく義兵をおこし、一戰をはげみ申すべし」

は-げむし 葉毛蟲【名】〔動〕黃色の毛蟲。〔出雲國の方言〕

は-けん 霸權・覇權【名】覇者の權力。首領たる權力。

は-けん 派遣【名】『派の字の音、正しくはハイ』手くばりして送り遣ること。諸方へ分けつかはすこと。命じて出張せしむること。

は-けん 破顯【名】〔佛〕「破邪(ハジヤ)・顯正」の略。

は-げん 波源【名】〔理〕『英 Wave source』波動の生ずる源、即ち、その處を中心として、波動の各方に波及するもの。音波の場合には、音源と稱し、光波の場合には、光源(即ち發光體)と稱す。

は-げんくわ 端喧嘩【名】小き喧嘩。取るに足らぬ喧嘩。こっぱげんくわ。用明天皇職人鑑「九州者は、端喧嘩せず」

ばけん-じよ 馬見所【名】馬術の練習、又は競馬を見るために、馬場の側に建てたる高き家。

ば-けんちゆう 馬建忠【名】〔人〕支那清代の學者。江蘇省鎭江府丹徒縣の人。佛蘭西に遊學し、後、馬氏文通を著す。歿年詳かならず。

はけ-め 刷毛目【名】一刷毛にて塗り、又は塵などを拂ひたる痕。二紙の染模樣、茶碗・鐵釜などの表面に現したる形象の、前記の痕に似たる形のもの。三微塵縞(ミヂンジマ)などの織物に、經絲・緯絲とも、濃淡二色を、一本おきに配列し、各一絲づつ互違に打込みて織り、表を縱縞、裏を横縞にせるもの。

ばけ-もの 化物・妖物【名】鬼・魔・惡神・狐・狸などの化けて、怪しき姿をなすもの。へんげ。妖怪。

化物も引込む時分【句】人の、時機におくれて、その場に來りたる時に、嘲りていふ語。〔諺語〕「もう、いい加減に、化物も引込む時分だのに、何をぐずぐずしてゐるんだらう」

ばけもの-でうし 化物調子【名】化物のごとくなる態度・樣子。和合人「可笑しくっても、例のやうに愛嬌を含んで、笑はずに、けた、けた、けたたと、怪物(バケモノ)調子にやらかさう」

ばけもの-ばなし 化物話【名】化物に關する話。百ものがたり。妖怪談。怪談。鬼話。

ばけもの-まつり 化物祭【名】羽後國鶴岡町なる天滿宮の祭禮。男女、さまざまに變裝して、市中を踊りまはり、見物人に戯れなどす。もとは陰暦三月二十五日、今は四月二十五日に行はる。

ばけもの-やしき 化物屋敷【名】化物の現るといふ噂のある家。千紅萬紫「拂はずに年ふる狸酒買ひに行くや化物屋敷なるらん」和合人「見屆けたの、何(ナン)のと、化物屋敷ぢやあるめえし」

ばけもの-らふそく 化物蠟燭【名】影繪の一種。種種の人の形に切りたる紙を、二つづつ、裏あはせに、竹の串に貼りたるものを、薄紙を隔てて動し、時時裏がへしては變化せしむるもの。

ばけもの-ゑ 化物繪【名】赤口・拔首(ヌケクビ)・猫又・雪女・見越(ミコシ)入道などの化物を描きたる繪。江戶時代、安永・天明の頃、最も行はれ、鳥山石燕の描きたるもの、最も名ありき。

はけ-やうじ 刷毛楊枝【名】はみがきぶらし「(齒磨ブラシ)に同じ。

はげ-やま 禿山・兀山【名】草木の生えてあらぬ山。ばうずやま。童山。蕪村「日歸の兀山越ゆる暑さかな」

はける 疏通る【動下一自】はく(疏通く)の口語形。浮世床「江戶でなくては、荷のはける所がねえ」

はげ-わし 禿鷲【名】〔動〕鷲の一種。全部黑褐色を呈し、頭部と頸とは皮膚裸出し、僅かに綿毛の生ずるのみ。歐羅巴と亞細亞との南部及び亞非利加に產し、我國にても、朝鮮と臺灣とに產すれど、その數多からず。

はけ-ゑ 刷毛繪【名】はけがき(刷毛書)を「見よ。

はこ 箱・筥・匣・筐・篋・匯【名】『はこぶ(運ぶ)を見よ』一木又は紙・竹などにて、種種の形に造り、物を入れおくに用ふる器。又多くは蓋(フタ)あり。二『「屎(シ)の箱」の略の轉義』くそ(糞)に同じ。著聞「はこのしたかりければ」東海道名所記「樂阿彌、斯くぞつぶやきける、四季ともにはこねは畑のこやしかな。この坂は、あまりに難所なれば、いかなる旅人も、くたびれて糞(ハコ)を垂るる故に、はこねといふらん」三牛車(ギッシャ)の車箱(クルマバコ)。四汽車の客車の車體。五さみせんばこ(三味線箱)の略。和合人「箱持へい、御免なさいまし。只今、すぐに參じます。この箱を、憚ながら、それへ」六はこや(箱屋)の略。七女子の陰部。〔九州の方言〕

箱が入（ハヒ）る【句】客の求に應じて、料理屋などに、藝妓來る。

匣の鏡【句】匣の中に納めおく鏡。（曾丹集）「氷するのみはらの池の池づつみおほはぬ匣の鏡とぞ思ふ」

匣を得て、珠を還す【句】『韓非子の外儲篇に「楚子有㆘賣㆓其珠於鄭㆒者㆖、爲㆓木蘭之櫃㆒、薫以㆓椒桂㆒、綴以㆓金玉㆒。鄭人買㆓其櫃㆒而還㆓其珠㆒」とあるに本づく』無用の事物に心を奪はれて、有用の事物を忘るる譬。〔諺語〕

箱を止（ト）める【句】料理屋などの、藝妓への支拂の滯りたるに對して、藝妓、その料理屋などよりの招に應ぜず。はこどめ（箱止）參照。

はこ　箱【助數】㊀箱に入れたる物の數。㊁『三味線箱の數の義』宴席へ招く藝妓の數。（和合人）「酌人を一箱呼ばずばなるめえが」㊂千兩箱の數。（膝栗毛）「はした金使ふ事は嫌だから、無駄骨の一箱と二箱は、別に爲替（カハセ）に振って」

はご　擌・黐擌【名】㊀鳥を捕ふるために、木の枝・竹・蘆・繩などに黐（モチ）を附けておくもの。傍に囮（ヲトリ）を置くこともあり。はが。（雪女五枚羽子板）「手足も叶はず、はごに罹りし野末の鳥」㊁『鳥のはごに罹りたるに譬へていふ』借金のために、身うごきの出來ぬこと。負債。

擌を背負ふ【句】他人の借財又はその他の難儀を引き受く。

はーご　羽子【名】はね（羽根）㊄に同じ。

ばーこ　馬戸【名】しこ（飼戸）に同じ。

はこーあし　箱足【名】箱に取附けたる脚。

はごーいた　羽子板【名】㊀羽子を突くに用ふる板。桐又は杉などにて造り、長方形にして、下方に至るに從ひて幅狹く、その下に柄あり、表に、繪を畫き、又は押繪を附けなどす。こきいた。㊁紋所の一。羽子板に象（カタド）りたるもの。ただ一箇を縱に描きたるものの外、三（ミツ）羽子板・五（イツツ）羽子板・違（チガヒ）羽子板・丸に三羽子板などの種類あり。

はごいたーかなもの　羽子板鐵物【名】一半は丸棒、他半は平板にて、丸棒の部分の端には螺旋あり、平板部には、孔ありて、他のボルトを支持するやうに造りたる繋鐵物（ツナギカナモノ）。

はごいたーづつみ　羽子板包【名】包物の一。長方形の紙を、一方の角を中央にして、上は廣く下はごく狹く、羽子板狀の五角形に襞（ヒダ）を設けて折り疊み、下部三分の一ほど裏面へ折り曲ぐ。

はごいたーや　羽子板屋【名】羽子板を賣る家、又その人。

はこーいり　箱入【名】㊀箱に入りてあること、又その入りたる物。㊁『大切なる物は箱に入れて藏するよりいふ』大切にすること。（吉野忠信）「箱入の心中、二つ心の無きことは」㊂はこいりむすこ（箱入息子）の略。㊃はこいりむすめ（箱入娘）の略。

箱入の娘【句】はこいりむすめ（箱入娘）に同じ。（末摘花）「箱入の娘内から蟲が附き」

はこいりーむすこ　箱入息子【名】かしづき養はれて、世の俗事に馴れぬ息子。おぼっちゃん。おぼこむすこ。

はこいりーむすめ　箱入娘【名】深窻にかしづき養はれて、世の俗事に馴れぬ娘。いつきむすめ。おぼこむすめ。祕藏娘。（八犬傳）「主の祕藏の箱入女兒（ハコイリムスメ）を疵物にして、勇悍（タケダケ）しく言ひ爭ふも、誰かは聽かん」

箱入娘に蟲が附く【名】かしづき育てたる處女、男子にそそのかされて、不品行を爲す。〔諺語〕

はーこう　八講【名】〔佛〕はっこう（八講）の略。〔古語〕（源氏）「十二月十五日ばかり、中宮の御はこうなり」

はーこう　白虹【名】はくこう（白虹）の略。〔古語〕

白虹（ハコウ）、日を貫く【句】「白虹（ハクコウ）、日を貫く」に同じ。（源氏）「白虹（ハコウ）、日を貫けり、太子懼（オ）ぢたりと、聲いとゆるらかにうち誦（ズン）じたるを」

ばこう　馬公【名】〔地〕臺灣澎湖島にある港市。澎湖灣の東南に位し、風浪の危險なく、極めて安全なる錨地。澎湖廳等あり。海軍の要港たり。媽宮（マキユウ）。

はーこうぎやう　端興行【名】引續きてするにあらざる興行。臨時の興行。

はこーえ　筥衣【名】はこへを見よ。（武家裝束抄）「袍の名所……後に袋のやうなるを、はこえと云ひ、又、かく袋ともいふ」

はこーおし　箱押【名】次條に同じ。

箱押の鮓【句】はこずし（箱鮓）に同じ。

はこーおんーのーじ　箱御字【名】「御」の字を、草書に、四角ばりて、[illegible]の形に書き、江戸時代に、下ざまの人への手紙に用ひしもの。

はこーがき　箱書【名】古書畫・古器物などを入れたる箱の蓋に、その中なる物の名を書きたるもの。はこがきつけ。

はこーがきつけ　箱書附【名】前條に同じ。

はこーかせぎ　箱挊【名】はこし（箱師）に同じ。

はこーがた　箱形・筥形【名】㊀箱の形。㊁下襲（シタガサネ）などの模樣の、四角の形なるもの。（名目抄）「筥形、非㆓定文㆒、染裝束之時、多下重用㆑之」

はこーがみ　筥髮【名】おしきり（押切）㊀に同じ。

はこき【名】〔植〕やまならしに同じ。

はーこく　霸國・覇國【名】霸者の國。

はーごく　破獄【名】囚人が、獄舍を破壞して逃れ出づること。牢やぶり。

はこくにぬーのーみこと　葉木國野尊【名】『葉木は含む義、國は組（クミ）の轉にて、物の集り凝る義と、初めて萌え出づる義とを兼ぬといふ。つのぐむ（角ぐむ）參照』とよくもぬのかみ（豐雲野神）に同じ。

はーごくみ　育【名】はぐくみ（育）に同じ。

はごくみーかへす　育返す・孚返す【動四他】育まれたる恩に報ゆるために、目上の者を育む。（先代萩）「忠と敎ふる親鳥の、軒端の竹に飛びかはす、子は孝行に面瘦せて、はごくみかへす烏羽玉（ウバタマ）の」

はごくみーたつ　育立つ・孚立つ【動下二他】はごくみて、生ひ立たしむ。やしなひたつ。（平治）「かひ子ぞよ歸り果てなば飛び翔りはごくみ立てよ大鳥の神」

はーごくむ　育む・孚む【動四他】はぐくむ（育む）の轉。（方丈記）「人をはごくめば、恩愛に繫がる」（盛衰記）「如來は、……、衆生を、一子と孚みたまへり」

はこーぐるま　箱車【名】小き荷車の上に、箱を取附け、中に商品などを入れて、引きあるくもの。

はこーげすゐ　箱下水【名】『英Box drain』箱の如く底ありて、板にて、上部を覆ふ下水溝。

はこーざいく　箱細工【名】箱類を造ること。さしもの。

はこざいくーし　箱細工師【名】箱細工を業とする人。指物（サシモノ）師。

はごーさう　羽子草【名】〔植〕つくばね（衝羽根）㊁に同じ。

はこざき　箱崎【名】〔地〕㊀筑前國糟屋（カスヤ）郡にある町。福岡灣に臨み、福岡市の東北三十二町、千代（チヨ）の松原の中に位す。筥崎宮・郡役所及び鐵道九州線の停車場等あり。もと蘆津（アシツ）浦といひしが、應神天皇の胞衣を箱に納めて埋めたるより、今の名に改むと傳ふ。寬仁三年刀伊（トイ）の賊、文永十一年蒙古の兵船、來襲せしことあり。〔筥崎〕㊁壹岐國壹岐郡にある村。壹岐島の東北部に位し、月讀神社・少貳資時の古墳等あり。㊂東京市日本橋區の町。一丁目より四丁目まであり。一丁目地先より小網町に架せる橋を箱崎橋といひ、その川を箱崎川といふ。三丁目は、明治の初年、開拓使廳の在りし所。箱崎川の隅田川に合する所は、中洲（ナカズ）なり。

はこざきーのーまつばら　箱崎松原【名】〔地〕ちよのまつばら（千代松原）に同じ。

はこざきーのーみや　筥崎宮【名】筑前國糟屋（カスヤ）郡箱崎町に鎭座せる官幣中社。祭神は應神天皇を中心とし、玉依姬命・仲哀天皇・神功皇后を合祀す。社殿壯麗にして、宇佐・石淸水（イハシミヅ）と併稱せられ、古來朝廷の尊信厚く、社殿の西向せるは、西域の外寇に對する防護の神意に出づといふ。樓門には、醍醐天皇の宸筆と傳ふる「敵國降伏」の額を揭ぐ。筥崎八幡宮。

はこざきーのーみやうじん　筥崎明神【名】前條に同じ。（若風俗）「箱崎の明神への願文」

はこさき－とたて 箱先戸立【名】和船の吾妻水押(アヅマミオシ)の先に附けたる戸立(トタテ)。

はこざき－はちまん 筥崎八幡【名】次條の略。

はこざき－はちまんぐう 筥崎八幡宮【名】はこざきのみや(筥崎宮)に同じ。

はこざきはちまんぐう－ゑえんぎ 筥崎八幡宮繪緣起【名】筑前國筥崎八幡宮の由來と、その靈驗とを描ける卷物。現在二本を藏す。寛文年間、住吉具慶の作と傳ふ。

はこ－し 箱師・函師【名】汽車・電車の中にて掏摸(スリ)をなし、目的を達するや、直ちに下車して、跡を晦ます者。はこかせぎ。

はこし 破胡紙【名】〔植〕荳(マメ)科に屬する一二年生の草。高さ三四尺に達し、葉は圓形に近く、葉脚は心臟形にして、細き鹵牙あり、托葉を有す。夏秋の際、淡紫色形の、萩のに似たる花、花梗上に、頭狀に集りて開く。果實は圓く小くして、莔麻(イチビ)のに似たり。近年の舶載に係る。いちびぐさ。おらんだびゆ。

は－ごし 葉越【名】立木の葉と葉との間より、物の透きて見ゆること。新古今「和歌の浦を松の葉ごしに眺むれば梢に寄する蜑の釣舟」

は－ごし 羽ごし【名】鳥の翼の先端。

はこ－じやく 箱尺・函尺【名】すゐじゆんせうしやく(水準照尺)に同じ。

は－ごしらへ 葉拵【名】葉煙草を截り刻むに先だちて、その葉を、一枚ごとに、表裏の砂塵を掃き落し、中央の葉脈を去り、葉卷をなすこと。伊賀越道中雙六「烟草、…、刻んで見ませう。幸、爰に切臺・庖丁、底に劒の葉拵」

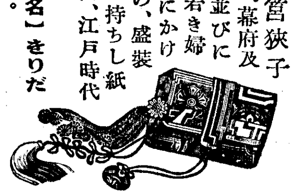
はこ－ずし 筥鮓【名】おしずし(壓鮓)を云ふ。〔京都・大阪の語〕

はこ－すゑ 筥陶【名】はこすゑのつかさ(筥陶司)の略。(その職員を呼ぶにつきていふ)「筥陶正(ハコスヱノカミ)」「筥陶佑(ハコスヱノジヨウ)」

はこすゑ－の－つかさ 筥陶司【名】古の宮內省の被管の一。正(カミ)・佑(ジヨウ)・令史(サクワン)各一人及び使部・直丁(チヤウチヤウ)等の職員あり。なほ筥戸(ハコベ)若干附屬して、筥陶・器皿を造る事を掌りし所。大同三年、大膳職に合併す。

はこすゑもの－の－つかさ 筥陶司【名】前條に同じ。

はこ－せこ 筥迫・筥狹子【名】江戸時代に、幕府及び諸侯の奥女中並びに武家中流以上の若き婦女、又、明治年間にかけても、少女などの、盛裝の時、懷中に插み持ちし紙入。明治年間のは、江戸時代のよりも形小し。



(はこせこ)

はこ－ぜん 箱膳【名】きりだめ(切溜)㊁に同じ。

はこ－そ 箱訴【名】德川時代に、庶民より將軍に直訴するために、目安箱に訴狀を投げ入れしこと。はりそ(張訴)・やきすてそじやう(燒捨訴狀)參照。

はこ－そり 箱橇【名】㊀稻藁を編みて造りたる、一種の橇。㊁稻藁にて、前記の物のごとき形に小く造りたる玩具。

はこ－たたき 箱叩【名】はこまはし(箱廻)㊁に同じ。

はこ－だて 箱楯【名】箱にて造れる楯。

はこだて 函館・箱館【名】〔地〕『戰國時代に、津輕の安東氏、松前に渡り、その臣河野政通の、文安二年この地に館を築くに及び、その地形、箱に似たるより名づく。アイヌ名は「ウショロケシ」、訛りて「ウスケシ」といひ、宇須岸・臼岸など稱したり』渡島(ヲシマ)國に在る區。北海道第一の都會。內地よりこの地方に入る關門をなすを以て、商業盛んなり。函館山を背にして、その麓より龜田半島に連れる砂嘴上に在り。舊稱、龜田。

函館の役【句】はこだてせんさう(函館戰爭)に同じ。

はこだて－かう 函館港・箱館港【名】〔地〕渡島(ヲシマ)國函館にある港。舊五港の一。港口に、辯天島砲臺あり。港灣は、山を負ひ、風波を凌ぎ、北海道唯一の良碇泊所なり。地形巴字形を成すを以て、一に巴港とも稱す。

はこだて－ごかんぢやうぎんみかたあらためやく 箱館御勘定吟味方改役【名】箱館奉行の屬僚の一。

はこだて－ごほり 函館氷・箱館氷【名】北海道函館なる五稜廓の外濠の水を凍結せしめて伐り出す氷。明治の前半頃まで、人造氷の製造普及せざりし時代に、各地に搬送・販賣したり。

はこだて－せんさう 函館戰爭【名】明治元年十月より翌年五月にかけて、榎本武揚を主將とする幕府脫走軍と、官軍との戰爭。函館の役。

はこだて－ちんぶそうとく 箱館鎭撫總督【名】北海道箱館地方の民心鎭撫のため、明治二年三月晦日に置かれ、同年六月十日廢せられし總督。

はこだて－つうはう 箱館通寶【名】次條の略。

はこだて－つうはうせん 箱館通寶錢【名】安政四年、渡島國箱館にて發行し、箱館・蝦夷(エゾ)松前に通用せし鐵錢。徑七分强にして、圓孔あり。表面に「箱館通寶」の四字、裏面に「安」の字あり。

はこだて－はちまんぐう 函館八幡宮【名】渡島國函館區谷地頭(ヤチガシラ)町に鎭座せる國幣中社。祭神は品陀和氣(ホンダワケ)命。慶安年間の遷座なりといふ。

はこだて－ぶぎやう 箱館奉行【名】德川幕府の職制の一。箱館に駐在して、蝦夷地を支配し、兼ねて邊防の事に當りし遠國奉行。享和二年に設置、初は蝦夷奉行と稱せしを、その五月改稱し、文化四年駐在地を松前に移して、松前奉行と改稱す。人員も二人より四人に增加せしが、後、三人となり、又二人となり、文政四年、蝦夷地全部を松前氏に還付するに及び、一旦廢せられ、安政元年、米使との和親條約締結後、六年に至りて復活し、松前に駐在して、箱館奉行と稱し、元治元年に廢せらる。

はこだてぶぎやう－しはいくみがしら 箱館奉行支配組頭【名】箱館奉行の屬僚の一。

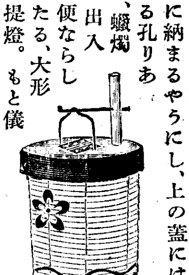
はこだてぶぎやう－しはいしらべやく 箱館奉行支配調役【名】箱館奉行の屬僚の一。

は－ごたへ 齒應【名】嚙みて、齒に強き感覺あること。はあたり。

はこ－だん 箱段【名】はこばしご(箱梯子)に同じ。

はこ－ぢやう 箱錠【名】箱形に造りし錠。

はこ－ぢやうちん 箱提燈【名】上と下とに圓く平たき蓋ありて、疊めば、全部、蓋の中に納まるやうにし、上の蓋には、開閉し得る孔ありて、蠟燭の出入に便ならしめたる、大形の提燈。もと儀式の時に用ひ、後世は、遊里にて、茶屋より妓樓に客を送迎する時に用ふ。一茶「餅買ひに箱提燈や春の雨」



(はこぢやうちん)

ば－こつ 馬骨【名】馬のほね。

はこ－つき 筥坏【名】筥の形をなせる坏。延喜式「筥坏・小坏」

はこ－づくり 箱造【名】㊀箱を造ること、又その人。㊁あづまおもて(吾妻表)に同じ。

はご－づくろひ 羽子繕【名】羽子の、羽のねぢれなどしたるを直し繕ふこと。夕霧阿波鳴渡「出でて初音の鶯の、羽子づくろひの君もあり」

はこ－つつじ 箱躑躅【名】〔植〕みやまつつじ(深山躑躅)に同じ。

はこ－づめ 箱詰【名】㊀箱に物を詰むること、又その詰めたる物。㊁餘地の少しもなきほどに詰め込むこと。

は－ごて 刃鏝【名】漆喰(シツクイ)又は石膏にて、彫塑の原形を、直接に作る時の用具。

はこ－てんじん 箱天神【名】がんだうがへし(強盜返)に同じ。

はこ－でんじゆ 箱傳授【名】和歌の家なりし冷泉(レイゼイ)家の本家なる上冷泉家にて、父子相傳の箱を傳へ、奏聞の上ならでは開き見ることなかりきといふもの。諸道聽耳世間猿「內藏の箱傳授も、いつのまにか明殼となりて」

はこ－どひ 箱樋【名】箱形なる樋。水車などの呼水(ヨビミヅ)の用に供す。はこひ。

はこ－どほし 箱簁【名】簁(トホシ)の一種。

はこ-どめ 箱止 【名】『「箱を止（ト）める」を見よ』料理屋などの、藝妓への支拂の滯りたるに對して、藝妓の、その料理屋などの招に應ぜぬこと。

はこ-どり 箱鳥 【名】かほどり（貌鳥）に同じ。〔古語〕源氏「み山木にねぐら定むる箱鳥のいかでか花の色にあくべき」

はこどり-の 箱鳥の 【枕】箱といふ緣より、あく（明く）にかけていふ。六帖「取返すものにもがもや箱鳥のあけてくやしき物をこそ思へ」

はこ-には 箱庭 【名】方圓の箱に、石を置き、砂を敷き、草花を植ゑなどして、庭園又は山水の景を摸せるもの。せきだい。

はこ-によし 箱水押 【名】あづまおもて（吾妻表）に同じ。

はこね 箱根・筥根・函嶺 【名】〔地〕一 相模國足柄下（アシガラシモ）郡箱根山上にある町。蘆湖（アシノコ）の東南岸に位す。關所の在りし所にて、東海道の舊一驛、又、溫泉を以て名高し。湖畔に離宮・箱根神社等あり。二 はこねやま（箱根山）の略。はこねぢ（箱根路）・もとはこね（元箱根）參照。萬葉「足柄の箱根飛び越えゆく田鶴のともしき見れば大和し思ほゆ」平家「各、鎌倉を立って、足柄を歷て行くもあり、箱根にかかる人もあり」

箱根から此方（コッチ）には、野暮（ヤボ）と化物（バケモノ）とは無い 【句】江戸の人が、江戸の繁華を誇りて言ひし語。

箱根七湯（シチタウ） 【句】〔地〕はこねをんせん（箱根溫泉）を見よ。

箱根八里 【句】はこねぢ（箱根路）を見よ。東海道名所記「箱根八里ものうぐひすの初音かな」蜀山人「この茶屋は箱根八里の中なれば登にもより（寄り・四里）降（クダ）りにもより（寄り・四里）」

はごね 【名】齦（ハグキ）の根。齒の根。謠曲（水無月祓）「はごねも、眉も亂髮の」

はこね-いくさ 箱根軍 【名】相模國箱根にての戰爭。太平記「菊池肥後國武重、箱根軍の先懸して」

はこね-うつぎ 箱根空木・箱根溲疏 【名】〔植〕一 忍冬（スヒカヅラ）科に屬する落葉灌木。高さ約十尺、葉は卵形・楕圓形又は倒卵形をなし、鋭頭にして、鋸齒を有し、對生す。五月頃、筒狀の花、聚繖花序をなして開き、その色、初は白色なれど、後、次第に紅色に變じて、甚だ美し。各地の山地に自生し、又、觀賞用として栽培す。くろはぎ。さらさうつぎ。すゐうつぎ。はこねうのはな。はこねばな。べんけいうのはな。やまうつぎ。〔錦帶花〕二 **ふぢうつぎ**（藤空木）に同じ。

はこね-うのはな 箱根卯花 【名】〔植〕前條一に同じ。

はこね-おろし 箱根颪 【名】箱根山より吹きおろす風。箱根靈驗躄仇討「竹杖を持つ手も寒き雪おろし、箱根颪の風の足」

はこね-ぎく 箱根菊 【名】〔植〕**まつむしさう**（松蟲草）に同じ。

はこね-ぐさ 箱根草 【名】〔植〕**はこねさう**（箱根草）に同じ。

はごね-ごんげん 箱根權現 【名】**はこねじんじや**（箱根神社）の舊稱。

はこね-こめつつじ 箱根米躑躅 【名】〔植〕石南（シャクナゲ）科に屬する灌木。枝・葉共に對生し、葉は小くして、倒卵形又は楕圓形を呈し、全緣にして、質厚く、殆ど無柄なり。七月頃、白色の筒狀花、葉腋に開く。相模國箱根山の高地に自生す。

はこね-ざいく 箱根細工 【名】相模國箱根の溫泉場附近にて造り、土產物として賣る、刳物（クリモノ）・寄木（ヨセギ）などの細工物。

はこね-さう 箱根草・石長生 【名】〔植〕水龍骨（ノキシノブ）科に屬する多年生の草。莖は根莖をなし、黑褐色の毛茸密生して、橫臥し、葉は根莖より叢生し、常綠にして二三回複葉をなし、高さ三四寸に達し、春の新葉は紅色を呈して美しく、各小葉は倒心臟形にして、葉柄は紫黑色を呈して、光澤あり。子嚢群は各小葉の頂邊に著生し、褐色の被膜を有す。幽谷の石の上に自生し、又、觀賞用として栽培す。葉を藥用に供し、枝を箒に用ふ。あをね。いてふぐさ。いししだ。いてふさう。いてふしだ。いてふしのぶ。いてふやなぎ。いはふやなぎ。おらんださう。かっぺらさう。たまばはき。ぬりばし。はこねぐさ。はこねしだ。

はこね-さんせうを 箱根山椒魚・黑魚 【名】〔動〕有尾類に屬する兩棲類。長さ三四寸乃至六七寸。體形やや蠑螈（ヰモリ）に似たれども、腹は赤からず、淡褐色にして白斑あり、頭は褐色にして黑斑あり、背部は赤褐色にして、脊と尾との中央線に沿ひて、一條の幅廣き黃色、又は紅色の帶あり、又その帶の緣は黑色、帶の中には、褐色の斑點あり、橫腹と肢とには、暗褐に灰色の斑紋あり。短き四肢ありて、趾端に、黑き小爪を具ふ。本土・四國の深山・溪流に棲息し、箱根・天城（アマギ）・日光等にては、春季捕獲し、串に刺し、火に炙りて、藥用とす。ひぢはり。さんせううを。

はこね-しだ 箱根羊齒 【名】〔植〕**はこねさう**（箱根草）に同じ。

はこね-じんじや 箱根神社 【名】相模國足柄下（アシガラシモ）郡箱根村、蘆湖（アシノコ）の北岸に鎭座せる縣社。祭神は彥火火出見（ヒコホホデミ）尊・瓊瓊杵（ニニギ）尊・木花開耶（コノハナサクヤ）姬。なほ、大國主命・少彥名（スクナヒコナ）命・櫛御毛奴（クシミケヌ）命・大山祇（オホヤマツミ）命・橘姬命を脇殿に配祀す。舊稱、箱根權現。

はこね-たうげ 箱根峠 【名】〔地〕箱根山の峠。東海道名所記「畑村は、箱根峠の坂口なり。峠までは一里なれども、難所なれば草臥（クタビ）れるなり」

はこね-だけ 箱根竹 【名】〔植〕**つうしちく**（通絲竹）に同じ。

はこね-ぢ 箱根路 【名】〔地〕箱根山中を通ずる道路。後世は、相模國足柄下（アシガラシモ）郡小田原町より、同郡箱根村を經て、伊豆國田方郡三島町に通じ、その道程、小田原町より箱根村まで四里十町、箱根村より三島町まで三里二十町、合はせて約八里、依りて箱根八里の稱あり。東海道の要路なれど、古代は、足柄山を本道とし、箱根は間道たりしに過ぎず。金槐集「箱根路をわが越え來れば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ」

はこね-の-うみ 箱根海 【名】〔地〕**はこねのみづうみ**（箱根湖）に同じ。

はこね-の-しほで 箱根牛尾菜 【名】〔植〕**しほで**（牛尾菜）に同じ。

はこね-の-せき 箱根關 【名】〔地〕昔、東海道の箱根山中に設けし關所。創設は鎌倉時代か。江戸時代には、遠江國荒井關と共に重要視し、小田原藩主これを預りて、嚴重に女人・武器の西上を取締り、手形なければ通過せしめず。尙、根府川・仙石原（センゴクガハラ）・矢倉澤・川村・谷ケ村（ヤツガムラ）の各地に、裏關の設ありき。**ねぶかはのせき**（根府川關）・**やぐらざはのせき**（矢倉澤關）參照。

はこね-の-みづうみ 箱根湖 【名】相模國蘆湖（アシノコ）の別稱。はこねのうみ。

はこね-ばな 箱根花 【名】〔植〕**はこねうつぎ**（箱根空木）一に同じ。

はこね-ぶぎやう 箱根奉行 【名】鎌倉幕府の職制の一。相模國箱根權現の修造、その他すべての雜事を掌りしもの。

はこね-ほふし 箱根法師 【名】相模國箱根權現社に仕へし僧。太平記「汝が生前は、箱根法師なり」

はこね-まうで 箱根詣 【名】相模國箱根權現に參詣すること。謠曲（調伏曾我）「箱根詣の御ために、明くるを待つや、星月夜、鎌倉山を朝立ちて」

はこね-やま 箱根山・筥根山・函嶺山 【名】〔地〕相模國足柄下（アシガラシモ）郡の西部にある休火山。蘆湖（アシノコ）・箱根溫泉等あり。最も高き駒ケ嶽・二子（フタゴ）山の外、臺ケ嶽・早雲（サウウン）山・冠（カムリ）嶽の諸峯、湖の東北に聳ゆ。東海道第一の險要。**はこねぢ**（箱根路）參照。夫木「玉くしげはこねの山の峯深く湖見えてすめる月影」東海道名所記「あまりに難所なれば、いかなる旅人も、くたびれて糞（ハコ）を垂るる故に、はこねといふらん。古き歌に、四里（シリ）のぼり谷より谷にへめぐりて二里二里くだるはこ根山かな　と詠みけるぞかし。きたなき坂のやうに聞ゆ」

はこね-りきゆう 箱根離宮 【名】相模國足柄下（アシガラシモ）郡箱根村蘆湖（アシノコ）畔にある離宮。

はこね-れいげん-ゐざり-の-あだうち 箱根靈驗躄仇討 【名】司馬司叟の作に係

る淨瑠璃。眞柴久吉の臣、飯沼勝五郎の仇討を敍したるもの。勝五郎は、俗に躄（ヰザリ）勝五郎といひ、妻を初花（ハツハナ）といひ、俗謠に傳誦せらる。

はこね-をんせん 箱根溫泉【名】〔地〕相模國箱根山中に在る溫泉。古來、麓より順次に數へて、湯本（ユモト）・塔澤（タフノサハ）・宮下（ミヤノシタ）・堂島（ダウガシマ）・底倉（ソコクラ）・木賀（キガ）・蘆湯（アシノユ）の七箇所を、七湯（シチタウ）を呼びて、有名なりしが、近時、小涌谷（コワクダニ）・湯花澤（ユノハナザハ）・仙石・強羅（ガウラ）・姥子（ウバコ）の五湯を加ふるに至れり。

はご-のき 羽子木【名】〔植〕つくばね（衝羽根）に同じ。

はご-のこ 羽兒子【名】㊀はご（羽子）に同じ。㊁〔植〕前條に同じ。

はこ-のり 箱乘【名】名士の、汽車にて旅行する時、これを知りたる新聞記者の、記事製作のため、同乘して、感想などを尋ぬること。

はこ-ばしご 箱梯子・箱階子【名】各段の側面に戸棚又は抽出（ヒキダシ）を取附けたる梯子段。はこだん。五人女「箱階子おりて」風俗文選（聽簑）「傾城の、箱階子、荒らかに踏み鳴らすは」

はこ-ばしや 箱馬車【名】乘る所を箱形に造れる馬車。（幌馬車に對して）

はこ-ひ 箱樋【名】㊀**はこどひ**（箱樋）に同じ。

はこび 運【名】㊀はこぶこと。運搬。運送。㊁あるくこと。あゆみ。紀「歩運、カチハコビ」㊂すすむこと。はかどり。はか。進歩。㊃移し進むること。動かしめぐらすこと。曾我會稽山「床（トコ）の硯を引寄せて、……時宗が筆の運には」㊄めぐりあはせ。まはりあはせ。をり。

はこび-あめ 運雨【名】止みては降り、降りては止む雨。梅雨の候に多し。

はこび-いづ 運出づ【動下二他】運びて、持ち出だす。もちだす。送り出す。夫木「鶯のねぐらによるはをさめたる聲朝な朝なはこびいづなり」

はこび-くだす 運下す【動四他】運びて、下流の地又は地方に送る。方丈記「資財・雜具、船に積み、福原へ運び下す」

はこび-て 運手【名】物を運ぶ人。運送する人。運搬する人。

はこび-とる 運取る【動四他】運び來て、わが物とす。運びて奪ひゆく。落窪「この年頃造りつる草木を、物入れて、それ運び取りたまへ」沙石集「强盜五六人、彼の房に打入って、房主を捕へて、布施物を運び取る」

はこ-ひばち 箱火鉢【名】箱形に造れる火鉢。立方形・三味線胴・五角形・六角形など、種種の形ありて、丸火鉢と同じく、主として、客用とす。八笑人「跡ずさりするはずみに、箱火鉢につかへ、尻もちをつけば、掛けてありし土瓶をこはし」

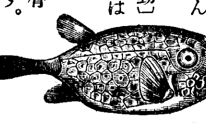
はこび-よす 運寄す【動下二他】運び來らしむ。宇治「勸進し集めたる物を、皆、運びよせて」

はこび-わたす 運渡す【動四他】運びて、先方へ渡す。源氏「皆、かの宮に運びわたし」

はこ-ふ 【動下二他】『**はこゆ**の方正しといふ』衣を著る時、折り褰げて、ふくらむやうにす。ひきはこふ。**はこへ・ひきはこふ**（引きはこふ）參照。〔古語〕

はこぶ 運ぶ【動四自】『次條の語の轉義』㊀すすむ。はかどる。進捗す。㊁氣がすすむ。拾玉「大寺の池の蓮の花ざかりはこぶ心にたむけてぞ見る」

はこぶ 運ぶ【動四他】㊀『**はこ**（箱）に語尾の添ひたるものにて、箱に入れて送る義に本づくといふ』持ち又は積み載せて送る。持ち又は積み載せて行く。送り屆く。運送す。運搬す。㊁移し進む。動かしめぐらす。「步（アユミ）を運ぶ」盛衰記「勅諚には、忠を抽んで、志を運びき」


（はこふぐ㊀）

はこ-ふぐ 箱河豚【名】〔動〕㊀固顎類に屬する魚。體は箱狀にして、長さ七八寸、頭部小く、口吻突出し、眼の位置高く。口は低く、脣厚く、齒は小く且つ突出す。體側の各鱗に青色の點を有し、運動の遲緩なること、普通の河豚（フグ）より甚し。數種あり。食用に供すること稀なり。㊁**いとまきふぐ**（絲卷河豚）に同じ。

はこ-ぶね 箱船・方舟【名】㊀方形なる船。㊁『希伯來 Tēbhā. 舊約聖書の創世記に見ゆ』エホバ（Iehovah）の、當時、人漸く多くして、惡に充ちたる世界を絕滅せんとして、洪水を起しし時、人類の始祖アダム（Adam）の第十世の裔にして、ラメク（Lameck）の子なりといふノア（Noah）の、神の恩寵を得て製作し、家族並びに神命による禽獸と共に乘りて、難を避けたりといふ、方形の小船。

はこ-ぶみ 筥文【名】『筥に入れて取扱ひしよりいふ』**まうしぶみ**（申文）㊀に同じ。建武年中行事「筥文は四合なり」

はこ-ぶらんこ 箱鞦韆【名】下部を箱形に造り、その處に腰を掛くるやうにしたるぶらんこ。主に幼兒の使用に供す。

はこ-ぶろ 箱風呂【名】風呂の一種。諸道聽耳世間猿「おしでは、俄かに三味線の稽古、箱風呂の洗（アラヒ）・磨（ミガキ）」

はこへ 【名】『**はこふ**の居名詞。**はこえ**と書く方正しともいふ』袍を著るに、背後を少し褰げて、腰の邊を袋のごとくにすること。玉葉「御はこへの事、中云、凡人著袴之時、引直衣造㆑尻、如㆓主上御引直衣㆒、……奏㆓直衣㆒に有㆓はこへ㆒之條、古今未㆑聞者」

はこ-べ 筥戸【名】筥陶司（ハコスヱノツカサ）に附屬して、筥陶・器皿の製造に從事せし戸。令集解「筥戸百九十七戸」

はこべ 繁縷・蘩蔞・雞腸草【名】〔植〕石竹（セキチク）科に屬する多年生の草。莖は細長く且つ軟弱にして、五六寸に達し、地上に蔓延し、殊に、節間に在る下向の細毛によりて、雨露を自己の根元に導くを以て、乾ける地にもよく繁茂するを得。葉は全緣の卵形にして、對生し、下部のものには、細毛の生じたる長き葉柄あり。花は白色・小形にして、花梗長く、二裂せる五瓣を有し、秋末より早春にかけて、聚繖花序をなして開く。四時枯るることなし。春の七草の一。葉・莖・種子を、小鳥の飼料とし、葉は、ひたし物、又、蒸して、打身の痛除けとし、はこべ鹽にも製す。くさのいと。にっしゅつさう。はくべら。はこべら。へづり。へづる。へんづる。みきくさ。

はこべ-じほ 繁縷鹽・蘩蔞鹽【名】繁縷を、青きまま炒り付けて、水氣を去り、鹽を交ぜて更に炒り、粉としたるもの。齒を磨くに用ふ。

はこべ-じる 繁縷汁・蘩蔞汁【名】繁縷を實（ミ）とせる味噌汁。

はこ-べん 箱辨【名】次條の略。

はこ-べんたう 箱辨當【名】辨當箱に入れたる辨當。はこべん。

はこべ-ら 繁縷・蘩蔞・雞腸草【名】〔植〕はこべ（繁縷）に同じ。〔古語〕拾玉「今日ぞかし薺はこべら芹摘みてはや七草のおもの參らん」

はこ-べり 箱緣【名】『その形、箱のごとくなるによりていふ』和船の吾妻表（アヅマオモテ）の左右にある板。

はこ-ぼり 箱堀【名】石垣にて、兩岸を切立（キッタチ）にし、箱のごとき形に造れる堀。

は-こぼれ 刃毀【名】刃物の刃の、堅き物を切りなどする時、毀れ損はるること、又その部分。

はこ-ぼれ 【名】〔植〕**せんにんさう**（仙人草）に同じ。

はこ-まくら 箱枕【名】板を組合はせて、細長き箱のごとき形に造れる木枕。上に小枕を載せて用ふ。さしまくら。丹波與作「そなたに預けし箱枕」

はこ-まはし 箱廻【名】㊀**はこや**（箱屋）に同じ。㊁淡路國三條村より出づる傀儡子（クワイライシ）。はこたたき。

はこ-むね 箱棟・方桴【名】箱に組み、横樋のごとき形にせる大棟。續山井「風を入るる箱棟もがな家櫻」八犬傳「登りはてたる三層（サンヂユウ）の屋背（ヤネ）には、……高瀨の如き方桴（ハコムネ）に」

は-こん 波痕【名】波の打ち寄せたるあと。なみあと。

は-こん 破婚【名】婚約を破棄すること。

はこ-めがね 箱眼鏡【名】底部の開ける方形の箱の、底板を玻璃とし、又は凸鏡を嵌めて造り、海底を透視して、海鼠（ナマコ）・鮑（アハビ）・底魚（ソコウヲ）などを捕獲するに用ふるもの。のぞきめがね。

はこ-も 葉薦【名】葉を編みて作れる薦、又、竹の簀に、錦などの緣を附けて、簀薦（スゴモ）に擬したるもの。江次第「先敷㆓葉薦㆒、其上敷㆓長莚㆒」夫木「柴の菴にはごもの圍（カコ）ひそよめきてすどほるものは嵐なりけり」

はこ-もち 箱持【名】はこや（箱屋）㊁に同じ。梅暦「梅次は、手拭を、米八（ヨネハチ）が膝へ掛ける。……、もう酒もいいのと、勘定を、供の男にさせ（箱持にはあらず、送なり）」和合人「口を掛けたる藝者の箱持」

はこ-もの 箱物・篋【名】箱に入れて送る物。太平記「高麗、わが朝に順ひて、多年、その貢を獻る。……、大紋の高麗緣（カウライベリ）も、その篋とぞ承る」

はこ-もん 筥紋【名】草木その他、物の像を、方形に描きなしたる紋。

は-ごもる 葉隱る【動四自】葉蔭に隱（カク）る。はがくる。〔古語〕萬葉「さす竹の葉隱りてあれわがせこがわれがり來ずばわが戀ひめやも」

はこ-や 箱屋【名】㊀箱を造り、又は賣る人、又その家。膝栗毛「箱屋をおっぱじめ申したは。あにが、重箱だあ、櫛箱だあのと、色色、箱どもを、づなく買ひ込んで」㊁『昔は三味線を箱に入れて携へ行きしよりいふ。はこ（箱）㊅參照』三味線を持ちて、客の座敷に赴く藝妓に從ひ行く男。はこまはし。はこもち。

はこや 藐姑射【名】はこやのやま（藐姑射山）の略。

はこやの御世（ミヨ）【句】『萬葉集卷五の憶良長歌自註に「瞻浮州人壽一百二十歲」とある瞻部（ブセン）州を、藐姑射の山の仙人說と混同していふ』上壽百二十歲まで生くること。壽命最も長きこと。月詣集「もろ人の悅び來ます六十（ムソヂ）をばはこやの御世のなかばとぞ聞く」

はこ-や【名】〔植〕やまならしに同じ。

はこ-やなぎ 箱柳【名】〔植〕㊀楊柳科に屬する落葉喬木。高さ約十丈、樹皮は、平滑にして、灰色を呈す。葉は廣卵形又は類圓形にして、鋭頭と鋸齒とを有し、嫩葉には白色の毛茸多く、葉柄は縱に扁くして長く、葉身と直角を成す。花は春開き、單性雌雄異株にして、川柳に似たり。材は輕軟にして腐朽し易く、柳行李・マッチの軸木・器具等に用ひ、殊に製紙原料に適す。原產地は歐亞大陸。いぬやなぎ。はくやう。〔白楊〕㊁やまならしに同じ。

はこや-の-とじ 藐姑射刀自【名】〔書〕名のみ源氏物語の中に見えて、今は傳はらぬ小說。源氏「唐守（カラモリ）・藐姑射の刀自・かぐや姬の物語」

はこや-の-やま 藐姑射山【名】『莊子の逍遙遊篇に「藐姑射之山有㆓神人㆒居焉、肌膚若㆓氷雪㆒、淖約若㆓處子㆒」山海經に「廬其山之南三百八十里、曰㆓姑射之山㆒、無㆓草木㆒、多㆑氷」とあり』㊀支那にて、仙人の住めりといふ、想像上の山。姑射山。㊁上皇・法皇の御所を祝し奉りていふ稱。仙洞。萬葉「心をし無何有（ムカウ）の鄉に置きたらば藐姑射の山を見まく近けむ」增鏡「藐姑射の山の峯の松も、やうやう枝を連ねて、千代に八千代を重ね」

はこ-やま 藐姑山【名】前條に同じ。

はこゆ【動下二他】はこふを見よ。

は-ごり 羽織【名】はおり（羽織）㊀を云ふ。〔安房國の方言〕

は-ごろも 羽衣【名】㊀鳥の羽を編みて、薄く輕く作り、天女の著て、空中を飛翔すといふ衣。あまのはごろも。あまごろも。竹取「天人の中に持たせたる箱あり、あまの羽衣入れり」㊁鳥・蟲などの翅の雅。はねごろも。續俳家奇人談（柳居）「蝶もその羽衣干して花一木」柳樽「蟬に逃げられ羽衣が手に殘り」㊂〔植〕はごろもさう（羽衣草）の略。㊃謠曲の一。駿河國三保（ホ）の松原に天女降り、その羽衣の、松の梢にかかれるを、白龍といふ一漁夫の取りて歸らんとせしが、天女の請により、返還を承諾する代りに、天人の舞樂を所望する由を作りたるもの。

は-ごろも 葉衣【名】木の葉にて作れる衣。川中島合戰「身には、千草の葉衣を重ね」

ばごろも-がし 羽衣樫【名】〔植〕次條に同じ。

はごろも-がしは 羽衣槲【名】〔植〕槲の一變種。葉の羽狀に深裂せるもの。はごろもがし。

はごろも-かんらん 羽衣甘藍【名】〔植〕甘藍の一品種。矮小にして、葉は縮み且つ密生し、深紫色を呈し、芳香を有す。綠葉甘藍。

はごろも-ぎく 羽衣菊【名】〔植〕のこぎりさう（鋸草）に同じ。

はごろも-ぐさ 羽衣草【名】〔植〕薔薇（バイ）科に屬する多年生の草。高さ約一尺、葉は長柄によりて根生し、或は莖上に、大小一箇づつ對生し、掌狀をなす。八月頃、葉腋に、花梗生じ、淡黃綠色にして細小なる花、繖形花序をなして開く。我國、中部の草本帶に稀に自生す。

はごろも-さう 羽衣草【名】〔植〕のこぎりさう（鋸草）に同じ。

はごろも-の-まつ 羽衣松【名】駿河國三保（ホ）の松原の御穗（ホ）神社の東南七町の地にある松。高さ凡そ九丈、周圍丈餘、謠曲「羽衣」に記されたる事蹟に關係あるものと傳ふれど、古のは、地震に遭ひて、土地と共に陷沒し、今存するものは、後人の繼植に係るといふ。

はごろも-やま 羽衣山【名】〔地〕駿河國富士山の別稱。

はこ-わう 箱王【名】〔人〕次條の略。

はこわう-まる 箱王丸【名】〔人〕『幼時、箱根權現に在りしよりいふ』そがときむね（曾我時致）の幼名。

はさ【名】『夾む義』田舍にて、刈り取りたる稻の穗などを掛けて乾す具。はつき。はて。

ばさ【貌】ばさりに同じ。

ば-さ 婆娑【貌】『詩經の陳風東門之枌篇に「東門之枌、宛丘之栩、子仲之子、婆㆓娑其下㆒」とありて、傳に「婆娑舞也」とあり。又、班固の答㆓賓戲㆒に「婆㆓娑術藝之場㆒」とあり。ばさら（婆娑羅）參照』衣服の袖・裾、草木の葉、又は音樂の調子などの、輕くゆらめき動くさま。蕪村「古傘の婆娑と月夜の時雨かな」

ばざあ（英 Bazar 又 Bazaar）【名】『もとは波斯語』㊀東洋各國、殊に回教の弘布せる地方に行はるる賣店又は市場。㊁所得を慈善事業に寄付する目的にて、中流以上の人人を招待し、物品を即賣する展覽場。慈善市。

は-さい 波際【名】なみうちぎは。汀。

は-さい 破碎【名】破り碎くこと、又、破れ碎くること。

ば-さい 禡祭【名】『禮記の王制篇に「禡㆓於所㆑征之地㆒」とあり』軍隊の留る地にて、軍神を祭ること。

はさい-かぢゆう 破碎荷重【名】『英 Breaking load』特定の方法に於て、材片に破碎を生ずるに要する荷重。その材片の破碎强力と同一の數値をなす。破壞荷重。

はさい-き 破碎機【名】かうさいき（嚙碎機）に同じ。

はさい-きやうりよく 破碎强力【名】『英 Breaking strength 又 Ultimate strength』材片の破碎荷重によりて破碎するまでの强力。その材片の破碎荷重と同一の數値を有す。破壞强力。

はさ-いた 挾板【名】はさみいた（挾板）に同じ。運歩色葉集「挾板、ハサイタ」

は-さう 破窓・破窻【名】破れたるまど。太平記「五更に燈消えて、破窻の雨に向ひ」

ば-さう 馬裝【名】陸軍の規定として、軍人の乘馬する時、その服裝に準じて用ふる馬具及び裝飾。馬具の形狀と裝飾とは、將校と下士卒とによりて差異あり。將校用の中にても、將官・佐官・尉官によりて、裝飾に差等あり。

ば-さう 馬槽【名】秣を入れて、馬に食はしむるに用ふる槽（ヲケ）。かひばをけ。

は-さうあい 破草鞋【名】破れたるわらぢ。太平記「喚㆓渡口船㆒立、失㆓山頭路㆒歸る、烟蓑雨笠、破草鞋の底」

はさ-がた 夾形【名】古、幅五分、長さ一尺ほどにて、下髮（サゲガミ）を結ぶに用ひし、羅

（モツス）の紐。箔を打ちなどしたるもあり。はすがた。

は-ざかひ 端境 【名】 古米と新米との入りかはる時期。端境期。

はざかひ-き 端境期 【名】 前條に同じ。

はさかる 挾る 【動四自】 はさまる（挾る）に同じ。

は-さき 羽先 【名】 鳥などの羽（ハネ）の先端。（爲忠集）「さみだれに聲もさだかに鳴きわたり羽先しをれぬ時鳥かな」

は-さき 葉先 【名】 草木などの葉の先端。（新六）「春かけて葉さき色づく若楓さもあらましを何いそぐらん」

は-さき 刃先 【名】 やいばの先端。きっさき。刀鋩。（謠曲（一角仙人））「玉具の劒の刃先を揃へ、一時が程は戰ひけるが」（平假名盛衰記）「番場忠太を相手に、鎌田隼人（ハヤト）、忠義に遮るきっさき、刃さき」

はさ-ぎ はさ木 【名】 はさとする立木。

は-ざくら 葉櫻 【名】 ㊀花散りて、若葉の生じたる頃の櫻。みざくら（實櫻）㊀參照。（俳諧古選附錄（丈右））「葉櫻に意地のわるさは風もなし」 ㊁紋所の一。櫻の花を、大小二つ重ね合はせ、その各瓣の間に、一枚づつの葉を細長き形に插み添へたる形のもの。

はざくら-げいしや 葉櫻藝者 【名】 『向島の堤の櫻の花の散りて、葉櫻になるや、直ちに居を他に轉ぜしよりいふ』 東京向島（ムカフジマ）なる藝者の異稱。〔明治中期の語〕

ばさける 【動下一自】 頭髮みだれ散る。毛筋みだれちらばる。

は-ざさ 葉笹 【名】〔植〕 くまざさ（熊笹）に同じ。

はささぐ 【動下二他】 『はさす（馳さす）の連用形の語尾とあぐ（上ぐ）の語幹との約まりて成れる語』 馳せさせて、上らしむ。〔古語〕（萬葉）「を林に駒をはささげ心のみ妹がりやりてわはここにして」

は-ざし 羽指・羽刺 【名】 捕鯨の際、長袖の短衫を著、銛（モリ）を携へて、鯨を刺す業に從事する者。

は-ざし 葉插 【名】 插木の一。葉を土に插し、その葉より根を生ぜしめて、繁殖せしむること。菊・秋海棠など、この法に依ることあり。

はさす 馳さす 【動下二他】 馳せさす。走らす。〔古語〕（萬葉）「さざれ石に駒をはさせて心いたみあが思（モ）ふ妹が家のあたりかも」

ばさ-つく 婆娑つく 【動四自】 『婆娑は假借の文字』 ばさばさとす。

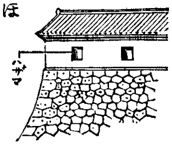
はさっぺい 【名】〔植〕 きやうのひも（京紐）に同じ。

ばさ-ばさ 婆娑婆娑 【貌】 『婆娑婆娑は假借の文字』 ㊀乾きて輕くなりたる物の、相觸れて發する音の形容。 ㊁水分の乾き去れるさま。ぼそぼそ。ぼそぼそ。

は-ざふ 半插・匜・楾 【名】 はんざふ（半插）の略。〔古語〕（落窪）「御手水（テウヅ）參らせんと、はざふ求めありきて、御方には、いづくのはざふ・盥かあらん、三の御方のを取りもて來て、御前に參らせんとて」

はさ-ま 狹間・迫間 【名】 『はざめ（狹間）を見よ』 ㊀次條㊀に同じ。〔古語〕（紀）「ならのはさまにししじものみづくへこもり」 ㊁次條㊁に同じ。〔古語〕（紀）「谷、此云二波佐麻二」

はざ-ま 狹間・迫間 【名】 『前條の轉』 ㊀物と物との間なる、狹き處。あはひ。はざめ。（落窪）「格子のはざまに入れ奉りて」 ㊁谷あひ。かひ。（新六）「山はざまきびしくたたむ岩角に年經て切れぬ瀑の白絲」 ㊂城砦の牆壁に穿ちて、矢・鐵砲などを放つ孔。さま（狹間）㊁參照。 ㊃ほど。をり。ま。（宇治）「時時、阿彌陀佛を申す。そのはざまは、脣ばかり働くは、念佛なめりと見ゆ」 ㊄昔の鶯籠の蓋に附けたる、丸き透（スカシ）。



（はざま㊂）

はざま-きへゑ 間喜兵衞 【名】〔人〕 はざまみつのぶ（間光信）に同じ。

はざま-くぐり 狹間潛・迫間潛 【名】 籠城せる兵士の、味方の敗軍を見越して、怯氣を生じ、ひそかに脫走すること、又その兵士。

はざま-じふじらう 間十次郎 【名】〔人〕 はざまみつおき（間光興）に同じ。

はざま-しんろく 間新六 【名】〔人〕 はざまみつかぜ（間光風）に同じ。

はざま-みつおき 間光興 【名】〔人〕 赤穗四十七士の一人。光延の子。通稱は十次郎。父と共に報仇の擧に加り、義央（ヨシナカ）を刺して、その首を斬る。元祿十六年二月四日死を賜る。年二十六。

はざま-みつかぜ 間光風 【名】〔人〕 赤穗四十七士の一人。光興の弟。通稱は新六。父と共に報仇の擧に加り、元祿十六年二月四日死を賜る。年二十四。

はざま-みつのぶ 間光信 【名】〔人〕 赤穗四十七士の一人。通稱は喜兵衞。淺野長矩に事へて馬廻たり。元祿の變起るに及び、姓名を變じて、杣莊（ソマシヤウ）喜齋と稱し、醫師となりて跡を晦し、報仇の事に加る。元祿十六年二月四日、細川邸に死を賜る。年六十九。

はさまる 挾る・介る 【動四自】 ㊀物と物との間に入る。間になる。はさかる。はせかふ。 ㊁人と人との間に立ちて、仲介者となる。

はさみ 鋏・鉸刀・鉸子・剪刀 【名】 『はさむ（挾む）の居名詞』 ㊀二つの刃の相對するやうに造り、中間に物を挾みて切るに用ふる具。吳服鋏・花鋏など、種類多し。剪刀（センタウ）。（和名）「鉸刀、波佐美」 ㊁紋所の一。前記の鋏に象（カタド）りたるもの。丸に一鋏（ヒトツバサミ）・丸に違鋏（チガヒバサミ）などの種類あり。

鋏を入る 【句】 ㊀改札掛の者又は車掌などが、入場者又は乘客の差出したる切符に、パンチにて、穴を穿つ。改鋏す。 ㊁刈込（カリコミ）をなす。ていれす。

はさみ 螯・鉗 【名】 『前條の語と同義』 蟹・蝎（サソリ）などの脚の內、前方にある左右二本の、特に發達して、鋏のごとき形を爲し、且つその働をなすもの。

はさみ 挾・楸 【名】 川船の步板（アユミイタ）。

はさみ-あぐ 挾上ぐ 【動下二他】 箸などにて挾みてもたぐ。（和合人）「火箸にて挾み上げて見て」

はさみ-いた 挾板・夾板 【名】 ㊀物を挾む板。 ㊁門の左右に取附くる、板作の袖。左右の立柱に溝を鑿り、その溝に板を橫に挾み入れて取附く。はさいた。（東鑑）「詞未レ終、懸二手於挾板上一者、諸人屬レ目、是盛時也」

はさみ-いる 插入る 【動下二他】 物の間に入れこむ。はさみこむ。插入（サフニフ）す。

はさみ-いる 挾入る 【動下二他】 物を、箸などにて挾みて、他に移し入る。

はさみ-うち 挾擊 【名】 挾みうつこと。挾擊（ケフゲキ）。

はさみ-うつ 挾擊つ 【動四他】 敵を、中に挾みて、左右又は前後より攻め擊つ。挾擊（ケフゲキ）す。

はさみ-おび 挾帶・插帶 【名】 ㊀つきこみおび（突込帶）に同じ。（八笑人）「著附（キツケ）は、黑羽二重の紋附、萠黃博多の挾帶」 ㊁はさみむすび（挾結）に同じ。

はさみ-かせ 挾械 【名】〔建〕 掘建柱（ホツタテバシラ）の根を固むるために、その左右に取附けたる根械（ネガセ）。

はさみ-がみ 插紙 【名】 ㊀書册の中の必要なる部分に、後日の注意のために、紙片を挾むこと、又その紙。（續古事談）「申文（シヤウモン）……所所にはさみ紙をして、この事尋ぬべし、この事重ねて問ふべしなど、御手づから書きつけて」 ㊁重ねてある物品の擦れ合はぬやうに、紙を、その間に插むこと、又その紙。

はさみきり-がた 鋏切形 【名】 紙を疊みて、鋏にて截り取りたる、種種の紋形。もんほり。

はさみ-きる 剪切る 【動四他】 鋏にて切る。はさむ。

はさみ-ぐさ 鋏草・剪刀草 【名】〔植〕 ㊀くわゐ（慈姑）㊀に同じ。 ㊁せんだんぐさ（鬼鍼草）に同じ。

はさみ-ことば 挾詞・插語 【名】 ㊀文章の間に插める語。 ㊁語句の毎音の下に、同韻の加行の音を挾みていふ、一種の隱語。例へば、「雨が降る」を「あかめけがかふくるく」といふ類。江戸時代の末に、岡場所

にて流行せしものといひ、明治時代にも、兒女の戯に行はれたり。いちじばさみ。

はさみ-ごひ 夾戀【名】〔文〕連句にて、普通の春秋の句に、戀の句を附け、その次ぎに、又、普通の春秋の句を附くること。俳諧にては嫌ふ。

はさみ-こむ 插込む【動四他】はさみいる（插入る）に同じ。

はさみ-ざかな 挾肴【名】酒宴などの席にて、箸にて挾み取りて配る肴。とりざかな。はさみもの。

はざみ-じねんこ はざみ自然秔【名】〔植〕けかものはし（毛五瓜草）に同じ。

はさみ-じやう 挾狀【名】嗷訴を行ふ時に、竹の先又は木の枝に挾み、道側又は橋の下などより高く捧げて、通行の貴人に呈する書狀。

はさみ-しやうぎ 挾將棊【名】將棊の駒を用ひて行ふ、一種の遊戯。互に盤の端に、横一列に駒を並べ、相手の駒を、前後又は左右より挾む目的にて、交番に、一つの駒を、縦横に動し、挾み得ればこれを取り、早く取り盡したる方を勝とするもの。

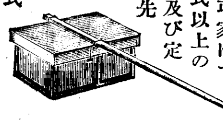
はさみ-だけ 挾竹【名】㊀物を挾む竹。㊁昔、衣服・袴などを、板二枚にて、上下兩面より覆ひたる上を、更に竹にて挾み、從僕に擔ひ持たしめしもの。後、變じて、挾箱となる。甲陽軍鑑「草履取二十内外の小者ども十五人、挾竹を持ち」

はさみ-だけ 插竹【名】書物の間に、讀みかけなどの目じるしに插みおく竹。夾算(ケフサン)の類。

はさみ-だす 挾出す【動四他】中にある物を、箸などにて挾みて取り出す。和合人「その唐辛子(タウガラシ)をはさみ出して」

はさみ-ばこ 鋏箱・鋏筥・鋏子筥【名】鋏を入れておく筥。類聚雜要「鋏子筥(ハサミバコ)、銀廿兩」

はさみ-ばこ 挾箱【名】㊀昔、著替の上下(カミシモ)などを中に納れ、棒を通して、從僕に擔はせし箱。挾竹(ハサミダケ)㊁の遺制なりといふ。慶長の頃よりの物なるべしといひ、江戸時代、公武共に、貴族他出の際、これを用ひしが、武家にては、大抵、槍を立つる格式以上の家は許されて、その數及び定紋の附け方など、家格・先例によりて一定し、江戸市民にも、中期まで行はれしが、後には、年始の廻禮に、年玉の扇などを納めて擔はすると、葬式用とに限らるることとなれり。又、飛脚も、文書を納めて運ぶに用ひたり。㊁はさみばこかぜ（挾箱風）の略。


（はさみばこ㊀）

はさみばこ-おほひ 挾箱覆【名】挾箱に、雨などに濡れぬやうに覆ひかぶするもの。諸道聽耳世間猿「挾箱覆の青漆皮(セイシツガハ)」

はさみばこ-かぜ 挾箱風【名】耳下腺の、焮衝を起して腫れ脹るる、一種の風邪。はさみばこ。おたふくかぜ。蝦蟆瘟。

はさみばこ-ぶぎやう 挾箱奉行【名】諸侯の行列にて、挾箱を預り掌りし役。

はさみばこ-ぶね 挾箱船【名】疊船(タタミブネ)の一種。疊めば、挾箱の形となるもの。

はさみばこ-もち 挾箱持【名】挾箱を擔ひて、主人に從ひ行く男。

はさみ-ばり 挾梁【名】〔建〕小屋組の束(ツカ)と束とを結束するために、束と直角に取附けたる梁。

はさみ-ぶた 狹蓋【名】和船の箱造の一部。吾妻表(アツマオモテ)の戸立(トダテ)の上に打つ板。

はさみ-ふなばり 挾船梁・𦨞船梁【名】挾(ハサミ)の間(マ)の横梁にある、上下二本の船梁。上なるを上船梁、下なるを下船梁、又は根船梁といふ。みなおりふなばり。

はさみ-むし 挾蟲・蠷螋【名】〔動〕直翅類に屬する昆蟲。我國に產するもののみにても二十餘種あり。體は細長くして、約一寸に達し、翅無く、觸角長くして、二十節あり。全體、黑褐色にして、脚は黃色、尾端に角質・鋏狀の物ありて、敵を防ぎ、又、よく小蟲を捕ふ。中には、作物に害をなすものもあり。しりばさみ。

はさみ-むすび 挾結【名】帶を結ぶに、端を結ばずに折込むもの。はさみおび。一代男「繻子の幅廣、挾結にして」

はさみ-もの 挾物・插物【名】㊀板・扇・紙などを、串に挾みて、矢の的とし、步立(カチダチ)にて射るもの。的板は、薄くして、もと方四寸なりしが、後世は、方八寸を正式とし、その四分の一、卽ち方四寸なるを四半、九分の一なるを九半といふ。㊁はさみざかな（挾肴）に同じ。

はさみ-やき 波佐見燒【名】肥前燒の一種。肥前國東彼杵(ヒガシソノギ)郡波佐見村邊より產するもの。慶長十一年、平左衞門（姓は未詳）の創始に係り、有田燒に類す。

はさみ-ようし 挾用紙・插用紙【名】〔植〕『英 Specimen sheet』腊葉(サクエフ)を作るに、壓搾の際、直ちに植物を挾むに用ふる紙。大形の壓紙を可とす。長さ凡そ一尺三寸五分、幅一尺八寸、これを半折して、その間に植物を挾む。古新聞紙を用ふるも可なり。

はさむ 挾む【動四他】㊀二つの物の間に在り。〔介む〕㊁二つの物の間に入れて、落ち又は動かぬやうにす。㊂物と物との間に差入る。差こむ。插入す。〔插む〕

はさむ 挾む・插む【動下二他】前條に同じ。大鏡「櫛笥(クシゲ)の鏡の影見えがたく、研(ト)ぐわざも知らず、打ちはさめておきたるに」　著聞「左右の殿上人、階をはさめて、欄干に候ひて」

はさむ 剪む【動四他】『はさむ（挾む）の轉義』鋏にてはさみて切る。はさみきる。つむ。

は-ざむらひ 葉侍・端侍【名】取るに足らぬ武士。はしさぶらひ。はむしや。こっぱむしや。籾井日記「葉侍どもに目かけな」

は-さん 破散【名】破りちらすこと。破壞。

は-さん 破算【名】算盤にて、數へたる珠の位置をくづすこと。

は-さん 破產【名】㊀家產を破り失ふこと。身代かぎり。家資分散。㊁〔法〕『英 Bankruptcy』商人が、自己の財產にて負債を完濟する能はずして、支拂を停止せし場合に、本人又は債權者の申立により（產業組合にありては、裁判所の職權により）、裁判所の決定せる宣告に基づき、その財產を、各債權者に配當するを目的とする、民事の特別訴訟手續。

破產宣告【句】〔法〕支拂を停止せし商人に、破產手續の開始を命ずる裁判の決定。

ばさん 馬山【名】〔地〕朝鮮慶尙南道の南海岸中部馬山府にある市街。釜山より陸路十二里。高麗時代の合浦(ガフホ)の地にして、元軍の我國に來寇せんとして、艦隊を艤裝せし所、又、倭寇の根據ともなれり。今、新馬山・舊馬山の二部に分れ、前者は、內地式の市街にして、後者は鮮人と內地人との雜居地たり。明治三十二年開港地となりしが、同四十四年閉鎖せらる。ばさんわん（馬山灣）參照。

はさん-くわんざいにん 破產管財人【名】〔法〕『英 Trustee in bankruptcy』破產主任官の指揮・監督の下に、破產財團の一般的强制執行、卽ち占有・管理・換價及び配當をなす公の執行機關。恰も箇箇の强制執行に於ける執達吏と同一の地位に在り。破產宣告の度每に、破產管財人名簿中より、破產裁判所これを選定し、任期を三箇年とし、破產財團より報酬を支拂ふ。

はさんくわんざいにん-めいぼ 破產管財人名簿【名】〔法〕司法大臣の、各地方裁判所の意見を聽き、その所轄地方の需要に應じて、破產事件に際して、破產管財人に選任せらるべき人を、豫め選定し、各地方裁判所の、これによりて作製する名簿。前條參照。

はさん-けっていしよ 破產決定書【名】〔法〕裁判官が、破產者と定めたる判決書。

はさん-さいけんじや 破產債權者【名】〔法〕破產財團より辨濟を受くべき債權者。

はさんさいけんじや-しふくわい 破產債權者集會【名】破產債權者の共同利益のために、破產管財人及び破產債權者が、破產主任官の指揮の下に集會すること。

はさん-ざいだん 破産財團【名】〔法〕『獨 Konkursmasse』破産手續によりて破産債權者に配當せらるべき、破産者の總財團、即ち破産宣告の當時破産者に屬したる財産、及び破産手續の終結の時まで、破産者に歸屬したる財産にて、强制執行の目的となることを得、且つ破産管財人の支配に屬するものの總稱。

はさん-さいばんしよ 破産裁判所【名】〔法〕『英 Court of bankruptcy』破産事件を管轄する裁判所。普通、破産者の營業所又は住所の地を管轄する地方裁判所、これに任じ、家資分産に關しては、區裁判所、これに任ず。

はさん-さいむしや 破産債務者【名】〔法〕その財産に破産手續の開始せられたる債務者、即ち破産宣告を受けし者。破産者。

はさん-じけん 破産事件【名】〔法〕破産の訴訟事件。

はさん-しや 破産者【名】〔法〕**はさんさいむしや**（破産債務者）に同じ。

はさん-しゆにんくわん 破産主任官【名】〔法〕『獨 Konkurskomissor』破産裁判所が、破産宣告と同時に、その判事中より一人を選定して、破産手續を指揮・監督せしむるもの。

はさん-たうじしや 破産當事者【名】〔法〕『獨 Konkurspartei』破産債權者と破産債務者との併稱。

はさん-てつづき 破産手續【名】〔法〕破産財團を、その總債權者に平等的に配當・辨濟する、裁判上の手續。

破産手續參加（サンカ）【句】〔法〕『英 Proof of debts』破産債權者が、破産手續に參加して、その權利を行使すること。

はさん-のうりよく 破産能力【名】〔法〕『獨 Konkursfähigkeit』破産債務者となる能力。

はさん-ばこ 挾箱【名】**はさみばこ**（挾箱）の音便。和合人「誰（タレ）ぞ、革羽織で、挾箱（ハサンバコ）を持たねえか」

はさん-はふ 破産法【名】〔法〕『英 Bankruptcy act』破産の開始原因・破産手續・破産機關・破産債權者及び債務者、その他破産の効力につきて規定したる法律。明治二十三年始めて發布、同二十六年、多少の修正を經、大正十一年、更に現行法發布せらる。

ばざんほ 馬山浦【名】〔地〕**ばざん**（馬山）「に同じ。

ばざん-わん 馬山灣【名】〔地〕朝鮮鎭海灣の一支灣。斜に南北に長く、東西に狹く、波靜かにして、南西部最も深く、一萬噸以上の大船を容るるに足る。灣頭に馬山の市街あり。

はざ-め 狹間・迫間【名】『**はざま**（狹間）の轉か、又、下二段活用の**はさむ**（挾む）の居名詞の轉か』**はざま**（狹間）に同じ。〔古語〕枕「おき口のはざめに、塵ゐなど、打捨てたるさま、こよなしかし」

はざ-め 眦【名】**ふたへまぶち**（二重瞼）に同じ。〔古語〕字鏡「眦、目重瞼也。波坐目」

ばさら 跋折羅・伐折羅（梵 Vajra）【名】『金剛又は金剛杵と譯す』〔佛〕㊀**こんがう**（金剛）㊀に同じ。㊁**こんがうしよ**（金剛杵）に同じ。

ばさら 婆娑羅・婆沙羅・婆佐羅【名】『文選の註に「婆娑、放逸貌」とある婆娑に接尾語**ら**の添ひたる語かとも、前條の語の轉義にて、斟酌なく振舞ふを、金剛の物を摧くに譬へていふかともいふ。**ばしやれる**（婆娑れる）參照』㊀斟酌せず振舞ふこと。尻ごみせずして爲すこと。だて。風流。豪奢。續教訓抄「下﨟の笛ともなく、ばさらありて仕るものかな」貞丈雜記「古、婆娑羅なる人といひしを、今は、伊達者（ダテシヤ）といふなり。婆娑羅を好むなどと、舊記に見えたり」㊁しまりなきこと。粗放。狼藉。亂暴。ばしやら。鴉鷺合戰「けしからぬ軍、ばさらにて、煉貫（ネリヌキ）の母衣（ホロ）を掛く」

ばさら-あふぎ 婆娑羅扇【名】はでなる扇。或は、婆娑羅繪を描きたる扇ならんか。建武元年落書「ばさら扇の五骨（イツポネ）」

ばさら-がみ 婆娑羅髮【名】ばさけたる髮。みだれがみ。關八州繫馬「思ひ亂るるばさら髮」

ば-さらし 場曝・塲曝【名】花合（ハナアハセ）㊂にて、手役（テヤク）の盡きたる時に、手札を、すべて場にさらして、仲間に見すること。

ばさら-だいしやう 伐折羅大將【名】〔佛〕十二神將の一。本地（ホンチ）は勢至菩薩にて、丑の神。

ばさら-もの 婆娑羅者【名】しまりなき者。粗放なる人。俗曲（染幟菖蒲の色彩）「色氣離れたばさら者、ひとり浮れて走り行く」

ばさら-ゑ 婆娑羅繪【名】扇・團扇（ウチハ）・繪馬などに描きたる、粗放なる繪。太平記「その頃、靈佛・靈社の御手向、扇・團扇のばさら繪にも、阿保・秋山が河原軍とて書かせぬ人はなし」土佐節淨瑠璃（草摺引）「扇・團扇のばさら繪にも、腕押・首引・草摺引」

ばさり【貌】輕く幅廣き物の、觸れあひ、倒れなどする音。ばさ。ばっさり。俳諧新選（智光）「そよと吹けばばさりと受ける芭蕉かな」

はし 端【名】㊀物事の起るもと。はじめ。こぐち。いとぐち。端緒。本源。千載「世をいとふはしと思ひし通路にあやなく人を戀ひわたるかな」㊁物事の盡きんとする處。ふち。へり。はじ。はた。さき。すゑ。終端。邊端。萬葉「いとのきて短き物を端切るといへるがごとく」㊂**へり**（緣）㊁に同じ。榮花「錦のはしすりたる長疊ども」㊃家の一部、外面に近き處。**はしぢか**（端近）參照。大和「はしの間（マ）に、梅、いとをかしう咲きたり」㊄**きれはし**（切端）の略。蜻蛉「布のはし」枕「木のはし」㊅**かたはし**（片端）㊁の略。蜻蛉「世の中に大かたなる物語のはしなどを見れば」曾我會稽山「曾我五郎時宗といふかつえ人、主人祐經一門のはし」㊆何れとも定まらぬこと。あひだ。あはひ。はした。**はしばし**（端端）參照。〔古語〕萬葉「行く鳥の爭ふはしに」古今「木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしに吾が身はなりぬべらなり」㊇**はしぢよらう**（端女郎）の略。

端が端【句】『端の中の、最も端なる者の義』きはめて取るに足らぬ、卑しき者。はしばし。源氏「人にめでられんとなりたまへる御有樣なれども、端が端にも覺えたまはぬは」

端の「い」【句】『伊呂波歌の中にて、初にある字なるよりいふ』「い」の字を、これと發音同一なる場合ある「ひ」・「ゐ」と區別していふ稱。

端の「え」【句】『伊呂波歌の中にて、初の方にあるよりいふ』「え」の字を、これと發音同一なる場合ある「へ」・「ゑ」と區別していふ稱。

端の「へ」【句】『「へ」はエと發音す。伊呂波歌の中にて、初の方にあるよりいふ』「へ」は「え」と發音同一なる場合あるによりて、「え」及び「ゑ」と區別していふ稱。

端の「ほ」【句】『「ほ」はオと發音す。伊呂波歌の中にて、初の方にあるよりいふ』「ほ」は「お」と發音同一なる場合あるによりて、「お」及び「を」と區別していふ稱。

端の女郎【句】**はしぢよらう**（端女郎）に同じ。色音論「あれに見えける上らうは、格子の君と申しけり。これをば、はしの上らうと」

端の「を」【句】『伊呂波歌の中にて、初の方にあるよりいふ』「を」の字を、これと發音同一なる場合ある「ほ」・「お」と區別していふ稱。

はし 嘴・觜【名】『**はし**（端）㊀の轉義』**くちばし**（嘴）に同じ。伊勢「白き鳥の、はしと足と赤き」

はし 橋・梁【名】岸と岸と、又は家と家と、又は物と物との間などに架け渡して、往來の道とするもの。昔は、多く木にて造りたれど、岸と岸との間のには、石・土などを用ひたるものあり、又、近世は、鐵材をも用ふ。橋梁（ケウリヤウ）。水梁（スヰリヤウ）。

橋が無ければ渡られぬ【句】『「橋を渡す」㊁を見よ』或目的を達せんがためには、先づ手段を要す。〔諺語〕

橋の板【句】**はしいた**（橋板）に同じ。枕「橋の板を踏み鳴らしつつ、聲合はせて舞ふほども、いとをかしきに」

橋の音【句】橋を踏む足音。太祇「寒月や我一人ゆく橋の音」

橋の鬼【句】『その鐵棒を手にせるさま、地獄の鬼に似たるよりいふ』徳川時代に、江戶日本橋の袂に、常に一人づつ居りし橋番の異稱。柳樽「橋の鬼一口茄子(ヒトクチナス)もおっぱらひ」

橋の霜【句】橋の上に置ける霜。曠野(宗因)「里人の渡り候ふか橋の霜」

橋の袂【句】次條に同じ。八笑人「先刻(サッキ)から、橋の袂に待ってゐたのよ」

橋の詰(ツメ)【句】次條に同じ。

橋の本(トモ)【句】はしもと(橋本)に同じ。蜻蛉「瀨田の橋の本、行きかかる程にぞ、ほのぼのと明けゆく」

橋の會(エ)【句】はしくやう(橋供養)に同じ。赤染衞門集「橋造りける聖(ヒジリ)の、河原にて、橋の會すべしと聞きて」

橋一つ越すと、鹽氣(シホケ)が無くなる【句】煮物・握飯などに附け加ふる鹽氣は、少し時を經れば、內部にしみ込みて、鹹味減少するを、橋一つを渡れば、下の水のために減少するものと考へていひし語。[諺語]

橋を掛く【句】㊀橋によりて通路をつくる。㊁關係を附く。橋を以て對岸につづく。人橋をかく。渡(ワタリ)を附く。本朝二十不孝「我と男を見つけ、…… 人頼(ヒトダノミ)して、橋を懸け」

橋を越せば淡(スウ)くなる【句】「橋一つ越すと鹽氣(シホケ)が無くなる」に同じ。[諺語]

橋を渡す【句】㊀「橋を掛く」に同じ。㊁雙方の間に立ちて媒介す。はしわたしをなす。

はし 梯【名】『もとはし(橋)と同義の語』はしご(梯子)㊀に同じ。字鏡「梯、波志」大鏡「裏板に物のすすけて見ゆる所のありければ、梯にのぼりて見るに」

梯の子(コ)【句】きざはしの段。はしごの上段(アガリダン)。著聞「寢殿の前を經て、はしの子を斜におりくだりて」

はし 階・堦【名】『もとはし(梯)と同義の語』㊀きざはし(階)に同じ。和名「堦、波之」源氏「御階(ミハシ)のもとに、みこたち・上達部つらねて」㊁階級。位階。增鏡「文治元年四月、二のはしをのぼりしも、八島(ヤシマ)の內の大臣(オトド)宗盛を生捕(イケドリ)の賞と聞ゆ」

階の間(マ)【句】「階隱(ハシカクシ)の間」に同じ。榮花「寢殿の御階の間に、御几帳、うるはしく立てさせたまひて」

はし 箸・筯【名】食物を挾みて、口に運び、又は他の器に移すに用ふる、細く小さき二本の棒。竹・木・象牙又は銀などの金屬にて造る。又、火箸(ヒバシ)・箔箸(ハクバシ)・香箸(カウバシ)などあり。各その條を見よ。

箸が轉(コ)ける【句】些事の譬。曾我會稽山「血筋の恩愛にだまされ、何事も隱さず、曾我が家內、箸のこけた事まで、京の小四郎が內通聞くは」

箸下(タク)る【句】『「箸を下す」を見よ』箸にて、物を食ふこと始まる。[古語]空穗「御前ごとに案まゐり、かはらけ初まり、箸くだりて」

箸で含(クク)める【句】「嚙(カ)んで含める」に同じ。

箸に目鼻を附けても、男は男【句】『箸は細き物なれば、「瘦せても、枯れても」の意にていふ』男は、つまらぬ者にても、女よりは貴し。[諺語]

箸にも棒にも掛らず【句】㊀物を煮る時、とろけ崩れなどして、手の附けやう無きに至る。㊁人墮落して、救ふべき方法なきに至る。てこずる。

箸の上下(アゲオロシ)【句】些細なる一一の事に對して、口やかましくいふ形容。浮世風呂「いびいびと、箸の上下だから、うるせえ」

箸の餘(アマリ)【句】他人の食ひ餘したる物。天の網島「諸人の箸のあまりで、身命(シンミヤウ)繫ぐとも」

箸の臺【句】はしだい(箸臺)に同じ。榮花「若宮の御前の小き御臺六つ……御箸臺の洲濱(スハマ)など、いとをかし」

箸も持たぬ乞食(コジキ)【句】身體の外は、全く無一物なる乞食。

箸を下(タク)す【句】『晉書の何曾傳に「日食、萬錢、猶曰無㆓下㆑箸處㆒」とあり』物を食ふために、その物を、箸にて挾まんとす。てをつく。

箸を立つ【句】次條に同じ。平家「大臣殿は、御物(オモノ)參らせけれども、胸せき塞って、御箸をだにも立てられず」

箸を著(ツ)く【句】物を食ふために、箸にて、その物を挾む。

箸を取る【句】物を食ふために、箸を手に持つ。俳諧三十棒「膳を出せ、わたしも御相伴仕らう、……と、各、箸を取るに」

箸を持って食ふばかりに【句】膳立(ゼンダテ)を調ふる形容。八笑人「箸を持って食ふばかりに拵(コセ)へて渡さあ」

はし 波斯【名】㊀〔地〕ぺるしや(波斯)に同じ。空穗「俊蔭が船は、波斯國に放たれぬ。その國の渚に打寄せられて」㊁〔人〕はしのくわう(波斯匿王)の略。

はし 愛し【形二】愛すべくあり。かはゆし。いとほし。いつくし。はしけし。[古語]萬葉「み芳野の玉松が枝ははしきかも君が御言を持ちて通はく」同「早瀨には鵜を沈めつつ月に日にしかし遊ばねはしきわがせこ」

はしきやし【句】『前條の語の連體形に、感嘆の意なる助詞**や**と、語氣を強むる助詞**し**との添ひたる語』愛すべき。いとほしき。はしきよし。はしけやし。[古語]萬葉「はしきやし我家(ワギヘ)の毛桃もとしげく花のみ咲きてならざらめやも」

はしきよし【句】『**よ**は、前條の**や**と同じく、感嘆の意の助詞』前條に同じ。[古語]記「はしきよし我家(ワギヘ)の方ゆ雲ゐ立ち來(ク)も」

はしけやし【句】前條の語の轉。[古語]記「はしけやし我家(ワギヘ)の方よ雲ゐ立ち來(ク)も」

はじ 端【名】はし(端)㊁の轉訛。

はじ 櫨・黃櫨【名】㊀〔植〕はぜのき(櫨)に同じ。㊁襲(カサネ)の色目の一。表は赤、裏は黃。一說に、表は黃、裏は萌黃なりともいふ。秋用ふ。

櫨の匂【句】はじにほひ(櫨匂)に同じ。平治「櫨の匂の鎧」

櫨の縅【句】はじをどし(櫨縅)に同じ。

はじ 土師【名】はにし(土師)の略。[古語]萬葉「駒つくる土師の志婢麻呂(シビマロ)白(シロ)なればうべ欲しからむその黑色を」

はじ 巴字【名】「巴」といふ文字。

巴字の盃【句】『水の渦卷き流るるを、巴の字に譬へ、その上に浮ぶる盃なるよりいふ』曲水の宴に用ふる盃。

ば-し 馬士【名】うまかた。まご。

ば-し 馬矢【名】ばふん(馬糞)に同じ。

ば-し 馬齒【名】ばれい(馬齡)に同じ。

ば-し 馬史【名】〔書〕『司馬遷の作れる歷史なるよりいふ』しき(史記)㊁の異稱。

ば-し【助】は㊀に同じ。[古語]更科「釜ばし引拔かれなば」新六「漕ぎかへる三島がくれのもより舟ほにばし戀ふな人知れずのみ」太平記「判官兄弟、何れも恙なくしてばし歸り參りて候はば」

ば-じ 馬耳【名】馬のみみ。

馬耳東風【句】『李白の詩に「世人聞㆑此、皆掉㆑頭、有㆑如㆔東風射㆓馬耳㆒」、蘇軾の詩に「說向市朝公子、何殊㆓馬耳東風㆒」とあり。東風は春風にて、春風は、人體には快く感ずれども、馬の耳には何の感じをも與へぬ義』人の意見・批難などに對して、少しも介意せぬ譬。馬の耳に念佛。[諺語]

はし-あがり 端上【名】端女郎(ハシヂヨラウ)の、圍(カコヒ)に出世せるもの。[江戶時代の語]

はし-いた 橋板【名】人馬の踏み渡るため、橋桁の上に敷きたる板。

はし-いれ 端入【名】川船の舵の一部。

はじ-いろ 櫨色・黃櫨色【名】櫨の葉の霜にあひて、黃に變りたる時のに同じき染色、即ち黃色に赤みのさしたるもの。

はし-うけおひにん 橋請負人【名】江戶時代に、架橋に關する一切の事を擔當し、渡橋者より橋錢を取りて、その費用に充てし者。

はし-うす 端薄【名】端の薄きこと。義經記「四國がたの杉舟の端薄なるに、大勢こみ乘りて」

はじ-うんじやう 櫨運上【名】江戸時代に、櫨に課せし運上。畠に課するものと、木一本ごとに、銀若干と定めて課するものとありたり。

はし-うら 橋占【名】古、橋の邊に立ちて、往來の人の言葉を聞き、それによりて、事の吉凶を卜ひ判ぜしこと。辻占の類。盛衰記「一條堀河戻橋にて、橋より東の爪に車を立てさせ給ひて、橋占をぞ問ひ給ふ」

はし-おき 箸置【名】**はしだい**（箸臺）に同じ。

はし-おや 箸親【名】食初（クヒゾメ）の時、箸にて、その子に食物を哺ましむる人。烏帽子親（エボシオヤ）などの類。

はしか【名】㊀麥の芒（ノギ）。㊁**さたう**（砂糖）を云ふ。［尾張國名古屋の方言］

はしか 麻疹・痲疹【名】［醫］傳染病の一。病原は未詳。主に小兒を冐し、初に惡寒（ヲカン）を感じ、四十度程の發熱あり、眼と咽喉とに加答兒（カタル）を起し、二三日にて顏面に、次の一晝夜に於て全身に、小圓形・淡紅色なる發疹をなし、八九日を經れば、表皮、粃狀の小鱗屑となりて脫落し、熱下りて治す。誰も、一度は必ずこの病に罹り、以後、再感することなし。あかがさ。麻疹（マシ）。あかもがさ。いなめがさ。

麻疹は命定（イノチサダメ）、疱瘡は見目定（ミメサダメ）【句】「疱瘡は見目定、痲疹は命定」に同じ。［俚語］

はしかい【形】**はしこし**に同じ。［俚語］

はし-かうぶり 圭冠【名】**はしはかうぶり**（圭冠）に同じ。

はし-がかり 橋掛・橋懸【名】㊀能樂にて、樂屋より舞臺への通路として、橋又は廊下の如くに構へて、欄干を取附け、斜に掛けわたしたるもの。**はなみち**（花道）㊀參照。太平記「新座・本座の田樂……。新本（シンホン）の老若、東西に幄（カリヤ）を打って、兩方に橋懸を懸けたりける」醍睡笑「神事能あるを見物に行き、橋掛の脇に居たり」㊁劇場の舞臺の右にありて、茜幕（アカネマク）を掛けてある所。

はしがかり-なぬし 橋掛名主【名】江戸時代に、その持場の橋の事務を取扱ひ、出火・出水等の時、橋吏・橋番・請負人等と共に、橋附抱（カカヘ）人足及び附近の船持・船乘・車力等を率ゐて、橋の防禦に從事せし者。

はし-がき 端書【名】㊀書簡文の端に書き添ふること、又その文言。かへしがき。なほなほがき。おってがき。二伸。追啓。源氏「なほ、ただこの端書のいとほしげに侍るぞやとて、廣げたれば」㊁和歌の初に書き添ふる文言。はしことば。はしづくり。散木「端書に、里をば書けり」㊂書物の初に、その書に關せる事などを記載する文。はしことば。序。序言。序文。

はしがき-ぶり【名】［書］八代集の端書を、四季・戀・雜に分類して集めたるもの。一卷。建部綾足（アヤタリ）の著。なほ「後編はしがきぶり」一卷あり。

はしか-ぐさ はしか草【名】［植］茜草（アカネ）科に屬する草。莖は軟弱にして、地に臥し、各節より鬚根を下し、葉は卵圓形にて、對生し、夏季、白色・鐘狀にして、先端四裂せる無柄の花、葉腋に開く。各地の原野・路傍等に自生す。

はし-がくし 階隱・階藏【名】寢殿の正面に御輿を寄するに便せんがために、階の前に、二本の柱を立て、屋根を作りかけたる所。雨の階をぬらすを防ぐためなり。源氏「階がくしのもとの紅梅、いととく咲く花にて、色づきにけり」

階隱の間（マ）【句】『間（マ）は、柱と柱との間の義』寢殿造の家の階隱の中央に當る間。即ち階を昇り、簀子（スノコ）を歷て廂に入る所。日隱（ヒガクシ）の間。階（ハシ）の間。御階（ミハシ）の間。狹衣「寢殿の南面の階隱の間ばかりをあけて」平家「法皇、寢殿の階隱の間へ御幸（ゴカウ）成って」

はし-かけ 橋掛・橋架【名】『「橋を掛く」を見よ』**はしわたし**（橋渡）に同じ。

はし-かけ 嘴掛【名】鵜飼に用ふる鵜の、未だ馴れざる間、人を咬むを防ぐため、繩にて、嘴を縛りおくこと。

はしかけ-の-の-じ 橋掛のの字【名】變體平假名の「孔」の字。堀川狂歌集「橋。名字をばのの字とやいはん杖を突き橋かけさする普請奉行を」

はしかし 夫人【名】『百濟語』**ふじん**（夫人）に同じ。紀「夫人、ハシカシ」

はしかし【形二】觸れて、いらいらと感ず。ちくちくと痛し。こそばゆし。字鏡集「眯、ハシカシ」孕常盤「御年は、十六までは往くまい、姬君樣には似合頃、……我我には、ちとはしかからうと云ひければ、……はしかうても、こそばうても、たとへ、ゑぐうて、後（アト）で口が腫れても、身は構はぬとさざめく聲」俳諧新選（卜友）「麥秋のはしかさもなき早苗かな」

はし-がため 橋固【名】橋邊を警固すること、又その人。思儘日記「橋がための官人、佐佐木某とかや承る」

はし-がっせん 橋合戰【名】橋の上にての合戰。平家「橋合戰の事。……、橋の上の戰、火出づる程にぞ見えたりける」

はし-がね 端金【名】端に著くる金屬。延喜式「棟端金四枚」

はじかの 初鹿野【名】［地］甲斐國東山梨郡にある村。笹子（ササゴ）峠の西口。鐵道中央線の一驛。

はしか-の-き 麻疹木・痲疹木【名】［植］**みづき**（水木）に同じ。

はじ-かへり【名】［植］**ほがへりがや**（穗返茅）に同じ。

はしか-ぼり 波志加雕・波志加彫【名】堆朱（ツイシユ）の類にて、彫刻の淺きもの。

はしか-まへ 麻疹前【名】幼くして、未だ麻疹に罹らぬこと。

はし-がみ 箸紙【名】紙を折り疊みて、これに箸を插して、客に差出すもの。食し終へたる時は、これにて箸を拭ひ、膳に載せて戻すを法とす。

は-じかみ【名】㊀［植］『辛くて、齒のしかむ義。**なるはじかみ**（蜀椒）・**ふさはじかみ**（蜀椒）及び**はじかみいを**（山椒魚）參照』**さんせう**（山椒）に同じ。［椒］［古語］㊁［植］『もと**あなはじかみ**（穴はじかみ）・**くれのはじかみ**（吳のはじかみ）などいひしを、後、單に**はじかみ**・**つちはじかみ**（土はじかみ）といふに至りしなりといふ』**しやうが**（生姜）に同じ。［薑］［古語］記「垣もとに植ゑしはじかみ口ひびく」輔親集「はじかみのめにもつきたる心かなかどかどしくてこれをおこすな」㊂『形、生姜の地下莖に似たるよりいふ』病氣のために、手の指の先の腐れくづれたるもの。しやうが。しやうがで。諺「手がはじかみならば、生姜三へぎ」

薑の置合（オキアハセ）【句】次條に同じ。［諺語］淸水物語「かやうの人も、座敷に一つの挨拶にはよけれども、薑の置合とかや、一つの菜（サイ）には成りがたし」

薑の食合（クヒアハセ）【句】その物のみにては、さして要なけれど、多くの物と共にあれば、それ相應に必要なる譬。［諺語］狂言（胸突）「お目にかかりたいと存じて、……けつまづきましたが、悲しう御座るやら、逢ふ事が嬉しう御座るやらで、嬉し悲しいと申してござる。おお、はじかみの食合とやらで、そないな事もおぢやろ」

はじかみ-いを 山椒魚【名】［動］**さんせううを**（山椒魚）に同じ。［古語］和名「鯢鱺魚、波之加美伊乎」

はじかみ-うり 薑賣【名】はじかみを賣る者。狂言（酢薑）「罷り出でたるは、山城國はじかみ賣でござる」

はじかむ【動四自】**かじかむ**に同じ。

はし-から 端から【貌】順次に。次第に。漸次に。はじから。

はじき 彈【名】㊀はじくこと、又、はじく力。彈力。紀「抛、ハジキ」㊁はじくために仕掛けたる機。ばね。［發條］㊂**いなづま**（稻妻）㊄に同じ。㊃**いしはじき**（石彈）㊀の略。㊄**おはじき**（御彈）を見よ。二代男「ままごとの昔を今に、はじきといふなどして遊びぬ」㊅**そうづからうす**（添水唐臼）を云ふ。［加賀國の方言］

彈の石【句】石彈（イシハジキ）にてはじく石。紀「抛石、ハジキノイシ」

はじき-いし 彈石【名】**いしはじき**（石彈）㊀に同じ。

はしき-うらぼたん 葉敷裏牡丹【名】紋所の一。裏より見たる牡丹の花の下に、その葉を添へたるもの。

はじ-きがう は字記號【名】〔音〕『英 C. Clef』音部記號の一。音名の「は」に相當し、普通第三線の上に置く、中音部の記號。但し使用すること稀なり。

はじき-がね 彈金・彈鐵【名】機械に仕掛けて、はじく用をなさしむる金具(カナグ)。はじき。ばね。

はしき-ぎく 葉敷菊【名】紋所の一。横向の菊花の下に、その葉三枚を添へて、圓形に描けるもの。

はしき-きくすゐ 葉敷菊水【名】紋所の一。菊水の右の下の方に、菊の葉二枚を添へたるもの。

はしき-さくら 葉敷櫻【名】紋所の一。櫻花の花瓣と花瓣との間に、その葉五枚を添へたるもの。

はじき-ざる 彈猿【名】弓形に曲げたる材の、弦に相當する絲に、括猿(ククリザル)を附け、下よりはじき上ぐるやうに仕掛けたる翫具(オモチャ)。

はじき-しやうぎ 彈將棊【名】一方は小駒、一方は大駒を用ひて、各、盤の兩端に並べ、己が駒一つを指にて彈き、相手の駒に當つるに、その相手の駒、盤外に落つれば、これを己の所得とし、若し雙方の駒落つる時は、得失なく、彈きたる己の駒のみ落つる時は、相手に取られ、早く駒の盡きたる方を負とする遊戲。

はし-ぎたう 橋祈禱【名】古、橋の架設又は修築の終れる時に、その橋の上にて行ひし祈禱。

はじき-だす 彈出す【動四他】㊀はじきて、外へ出だす。㊁除者(ノケモノ)にして押出す。著聞「心得つ雁食はんとて、若黨が老いたる者をはじきだすとは」㊂算盤(ソロバン)にて計算して、出費の道を講ず。

はしき-たちばな 葉敷橘【名】紋所の一。五枚の橘葉を圓形に描き、その中央に一つの橘花を描けるもの。

はしき-ぼたん 葉敷牡丹【名】紋所の一。横向の牡丹の花の下に、大小の二葉を添へて、圓形に描けるもの。

はし-ぎやうじ 橋行事【名】中世、行幸・行啓などに、檢非違使(ケビヰシ)又は守護・所司代等の補せられて、橋渡の事を務めし役。はしけいご。はしわたしのつかひ。

はしき-やし 愛しきやし【句】はし(愛し)の條下を見よ。

はしき-よし 愛しきよし【句】はし(愛し)「の條下を見よ。

はし-きらず 端不切【名】㊀和紙の一種。漉きたるままにて、端を切り揃へざるものなるべしといふ。東寺百合文書「はしきらず五帖」㊁ほそかはがみ(細川紙)に同じ。

はじく 彈く【動四他】㊀たわめ曲げたる反動力によりて、打ち又ははね飛ばす。反撥す。㊁受け附けず。寄り附かせず。「油が、水をはじく」㊂除者(ノケモノ)にす。はねのく。はじきだす。除外す。

はじく 彈く【動下二自】㊀勢滿ちて、裂け開く。ゑみて割る。はぜる。俳諧新選(冠那)「さや豆のはじけて今日の別かな」㊁さいはじく(才彈く)の略。

はし-くぎ 橋釘【名】橋板を打つに用ふる釘。大形の折釘を用ふ。

はし-ぐひ 橋杭・橋杙【名】橋桁を支ふる杙。橋柱。橋脚。狂言(鱸庖丁)「淀の橋杙の二番目の杙」八笑人「ぽんと飛び込む橋杭の問數(マカズ)も多き、その中に」

はし-くやう 橋供養【名】橋の架設の終りたる後、その橋の上にて行ふ供養。橋の會(ヱ)。盛衰記「渡邊の橋供養あり。……盛遠(モリトホ)、……、その日の奉行しければ」

はし-くやう 箸供養【名】平素、食事に使用して折れなどしたる箸を集めて、供養すること。

はしくら-つねなが 支倉常長【名】〔人〕はせくらつねなが(支倉常長)に同じ。

はし-くれ 端くれ【名】『くれは榑(クレ)の義か』同種類の物の中の、末位に在るもの。すゑ。曾我會稽山「緣者の端くれ、御咎のとばしる掛らん事を痛み」奥州安達原「筋目も本名も書いてござんす、これ見てたべと差出すを、取次ぐ紙の端くれも」

はしけ 艀【名】㊀はしけぶね(艀船)の略。「艀を拂ふ」㊁はしけちん(艀賃)の略。

はし-けいご 橋警固【名】はしぎやうじ(橋行事)に同じ。帝王編年記「天皇行二幸石清水宮、大渡橋警固、飯沼判官」

はし-げいせい 端傾城【名】はしぢようらう(端女郎)に同じ。東海道名所記「はし傾城は、蜂の巣の如くに、めんめんに、小き局一つ一つをかかへて」

はしけ-えいげふ 艀營業【名】艀にて、陸と碇泊中の大船との間に、乘客又は貨物などを運送する營業。

はし-けし 愛しけし【形二】はし(愛し)に同じ。〔古語〕紀「はしけくもいまだいはずて明けにけり吾妹(ワギモ)」「同じ。

はしけ-せん 艀錢【名】はしけちん(艀賃)に

はし-げた 橋桁【名】橋杙の上に渡して橋板を受け支ふる材。盛衰記「矢切但馬(ヤギリタヂマ)・淨妙・一來、これら三人、橋桁を渡りける」

はしけ-ちん 艀賃【名】艀の運賃。はしけ「せん。はしけ。

はしけ-ちやう 端舟長【名】舊軍艦乘組員の一。端舟の指揮・統帥を掌る海軍下士。大・中・小の三等あり。明治五年に規定せられ、同十七年廢せらる。「を見よ。

はじけ-どき 彈時【名】「日陰の豆も彈時」

はしけ-はいたつ 艀配達【名】電報の指定事項の一。艀配達電報なることを指定するもの。艀船(フセン)配達。

はしけはいたつ-でんぱう 艀配達電報【名】特殊取扱電報の一。艦船宛(テア)の電報の、艀船によりて配達すべきもの。艀船(フセン)配達電報。

はしけ-ぶね 艀船・艀舟【名】陸と碇泊中の大船との間に、乘客又は貨物を運送するに用ふる小船。はしけ。傳馬船。脚船。艀船(フセン)。

はじけ-まめ 彈豆【名】㊀豌豆・蠶豆(ソラマメ)などの、炒りてはじけたるもの。㊁年頃の女の陰部。妹背山女庭訓「宵の中、内證の御祝言がある筈と、暮れぬ中から騷いでちや。……、卯月あたりのはじけ豆、豆腐の御用が急ぐにと」

ばし-けん 馬齒莧【名】〔植〕すべりびゆ(馬「齒莧)の漢名。

ばしけん-くわ 馬齒莧科【名】〔植〕すべりひゆくわ(馬齒莧科)に同じ。

はしけ-やし 愛しけやし【句】はし(愛し)の條下を見よ。

はしけ-やど 艀宿【名】艀營業をなす家。

はしける 艀ける【動下一他】㊀端の方より、少しづつ盜み取る。そっと盜む。㊁陸と碇泊中の大船との間を、小舟にて、乘客又は貨物を、少しづつ送迎す。

はしけ-わたし 艀渡【名】〔商〕『英 In Lighter』取引せる商品を、艀に積み込みたる際に引渡すこと。(甲板渡・船腹渡・波止場渡などに對して)「じ。

はし-こ 端こ【名】はし(端)㊁㊃㊄㊅に同

はし-ご 梯子・梯【名】㊀『「梯(ハシ)の子」を見よ』低き處より高き處へ登るために寄せかけ、立てて用ふる具。木・竹又は鐵材などを用ひ、二本の長き材に、足がかりとすべき數條の横木を取附けたるもの。かけはし。のぼりばしご。梯子(テイシ)。㊁きざはし(階)に同じ。㊂はしござけ(梯子酒)の略。㊃はしごもち(梯子持)の略。

はじ-こ 端こ【名】はしこ(端こ)の轉訛。

はしご-うり 梯子賣【名】梯子を賣りあるく人。はしごや。「を見よ。

はしご-がた 梯子形【名】ていけい(梯形)に同じ。

はし-こく 波斯國【名】〔地〕はし(波斯)㊀に同じ。

はしご-ざけ 梯子酒【名】幾度も場處を替へて、酒を飲みあるくこと。はしごのみ。はしご。

はし-こし 【形二】『はしは、はしる(走る)と語源相同じく、こしは、接尾語』㊀走ること疾し。はしっこし。㊁智覺するどく、擧動はやし。氣轉はやし。すばやすし。ばしこし。さとし。敏捷なり。はしっこし。

はしご-しだ 梯子羊齒【名】〔植〕水龍骨(ノキシノブ)科に屬する多年生の草。根莖は黑褐色の密毛ありて、地面に近く横走し、葉は蕨のに似て、疎生し、子嚢群は葉裏に生ず。各地の山地に自生す。

はしご-だて 梯子立【名】梯子を、物に寄せかくること。

はしご-だん 梯子段【名】❶梯子❷の足がかりとする所。階段。❷はしご(梯子)❷に同じ。

はしご-っ-ぺ 梯子屁【名】はしごべ(梯子屁)の音便。

はし-ことば 端詞【名】はしがき(端書)❷❸に同じ。

はしご-のぼり 梯子上【名】梯子又は梯子段を上ること。一代女「はし子のぼりの早め足」

はしご-のみ 梯子飲【名】はしござけ(梯子酒)に同じ。

はしご-のり 梯子乘【名】大勢が、梯子を鳶口にておさへ、一人、その上に上りて、種種の危げなる藝を行ふ技。消防夫の出初(デゾメ)式の時に行ふ。

はしご-ぶね 梯子船・梯子舟【名】昔、水戰の時に、敵の大船に乘りかけし小船。

はしご-べ 梯子屁【名】短き屁を、續けざまにひること。はしごっぺ。千紅萬紫「一代を四割(ヨツワリ)にして、初・盛・中・晩のはしご屁といひしも、盛唐くさきの、僞唐くさいのと、ぶうぶうをひりちらして、今は、放翁・誠齋のすかし屁をこく世とはなりぬ」風來山人六六部集(放屁論)「階子粲(ハシゴベ)・數珠續(ジユズベ)は、言ふも更なり」

はしご-もち 梯子持【名】出火の際、梯子を擔ぎ行く消防夫。

はしご-や 梯子屋【名】はしごうり(梯子賣)に同じ。

はし-ざぶらひ 端侍【名】はざむらひ(葉侍)に同じ。賀古敎信七墓廻「家中一味の端ざぶらひ、雲霞の如く馳せ集り」

はし-ざむらひ 端侍【名】前條に同じ。

はし-し 箸師【名】箸を造る職人。

はし-じし 齒肉・齗【名】はぐき(齒莖)に同じ。〔古語〕和名「齗、波之之」

はし-した 橋下【名】橋より下流に沿へる地。

はし-じとみ 橋蔀【名】らうかばし(廊下橋)に同じ。

はし-じま 端島・端嶋【名】列島の中の端にある島。盛衰記「端島の者どもが、硫黄取りに越ゆるかと思ふ程に、近く漕ぎ寄せ」

ば-じしやく 場磁石・場磁石【名】〔理〕『英 Field magnet』ダイナモの磁場を造るための磁石。發電子と共に、ダイナモの主要部たり。通常、電磁石にして、そのコイルに通ずる電流は、或はそのダイナモ自身より發するを用ひ、或は他に發生せるを用ふ。

はし-すう 端數【名】はすう(端數)に同じ。

はし-すずみ 橋涼【名】橋の上にて涼むこと。俳諧新選(春來)「またぐらを舟の往來や橋すずみ」

はし-すぢ 橋筋【名】橋に通ずる、眞直の道すぢ。一代男「深川の八幡、築地・本庄の三目(ミツメ)の橋筋」

はじ-すり 榛摺【名】はんずり(榛摺)に同じ。

はし-ぜい 橋税【名】はしせん(橋錢)に同じ。

はし-ぜせり 端拵【名】❶端の方をせせること。❷端女郎をあさりて買ひあるくこと。博多小女郎波枕「昨日までも端ぜせりした我我、俄分限(ニハカブゲン)は見らるる通り、今日からは太夫狂」

はし-せん 橋錢【名】橋を渡るにつきて拂ふ錢。はしぜい。はしちん。傍廂「假橋なれば、請負人の願にて、橋の雙方に番小屋ありて、武士の外は、橋錢二文づつ取りしを」

はし-ぞめ 箸初【名】くひぞめ(食初)に同じ。

はし-ぞろへ 箸揃【名】前條に同じ。

はし-た 端【名】❶物事の、何れとも附かぬこと。都合わるきこと。どちらつかず。なかぞら。はんぱ。中間(チユウゲン)。はし。半途。〔間・半〕竹取「皇子(ミコ)は、立つもはした、居るもはしたにてゐたまへり」❷數の揃はぬこと。數の不足なること。はんぱ。はんちく。❸數の、或單位に滿たぬもの。はんぱ。はんちく。博多小女郎波枕「身請代金千四百五十兩な。端錢(ハシタ)があつて、やかましい。五十兩は、亭主にやる」膝栗毛「はした貟けて上(ア)ぎよはいな」❹はしため(端女)の略。〔半〕一代男「去る大名の北の御方に召し使はれて、日の目もつひに見たまはぬ女郎達なり、おはしたなり」花襷會稽褐布染「座敷の掃除、腰(コシモト)・婢(ハシタ)寄りぞり」

はしたの女房【句】前條❹に同じ。二代男「はしたの女房・腰元」

はしたの者【句】はしたもの(半者)に同じ。謠曲(熊坂)「下女や、半の者までも」

はし-だい 橋臺【名】橋行を支ふ臺、即ち一種の橋脚。けうだい。

はし-だい 箸臺【名】箸を載せおくに用ふる臺。はしおき、延喜式「膳、器……銀箸臺二口」

はした-いろ 半色【名】❶織色の一。經(タテ)も緯(ヌキ)も薄紫なるもの。❷襲(カサネ)の色目の一。表も裏も薄紫色なるもの。空穗「御衣(ミゾ)、はした色の小きも、綾のうちあはせ一かさね」

はし-たか 鷂【名】〔動〕はいたか(鷂)に同じ。〔古語〕和名「鷂、波之太加。似レ鷹而小者也」

はし-たか 箸鷹【名】はつたか(初鷹)に同じ。

はした-がね 端金【名】はしたなる金。わづかなる金。一代男「はした銀(ガネ)も、有るに任せて、手に持たず」

はした-ぎく 葉下菊【名】紋所の一。柄の附きたる菊花の下部に、その葉二枚を左右に添へ、圓形に描けるもの。

はし-たけ 箸竹【名】箸を製造する材料に供する竹。延喜式「凡神祇官卜竹、及諸祭・諸節等所レ須箸竹・柏生・蔣・山藍等類」

はした-しゆう 端衆【名】みなん(末男)に同じ。

はした-ぜに 端錢【名】はしたなる錢。わづかなる錢。はしたせん、一代男「それ買へとて、腰に著けたる端錢を投ぐれば」

はした-せん 端錢【名】前條に同じ。

はした-だきぎく 葉下抱菊【名】紋所の一。柄附の側面下より見たる菊花に、その葉二枚を左右より抱くやうに圓形に描けるもの。

はした-ぢよらう 端女郎【名】はしぢよらう(端女郎)に同じ。

はし-だつ 梯立つ【動下二自】高き處へ上りゆかんがために、梯子を立つ。伊勢集「音に聞く天の橋立はしだてて及ばぬ戀もわれはするかな」

はし-たて 箸立【名】使用後の洗ひ清めたる箸を立ておく具。多くは筒形をなす。

はし-だて 梯立【名】高き處へ上りゆかんがために、梯子を立つること、又そのさまなること。〔古語〕紀「隨樹梯之、ハシダテノママニ」

はし-だて 箸立【名】くひぞめ(食初)に同じ。

はしたて-あな 箸立穴【名】魚の頭の一部。

はしだて-がひ 橋立貝【名】〔動〕うちむらさき(内紫)に同じ。

はしだて-くわんおん 橋立觀音【名】『音は、觀の字の韻に引かれてノンと發音す』はしだてでら(橋立寺)に同じ。

はしだて-ちりめん 橋立縮緬【名】丹後國より産する、一種の縮緬。經(タテ)絲には、生絲(キイト)を用ひ、緯(ヌキ)絲には、普通の縮緬緯に生絲を合はせたるものを、左撚四本、右撚四本づつ織り込みたるもの。外見、鶉縮緬に似たり。

はしだて-でら 橋立寺【名】武藏國秩父(チチブ)郡影森(カゲモリ)村大字上影森字橋立にある眞言宗の寺。本尊は馬頭觀音。石龍山と號す。秩父三十四番札所の第二十八番。橋立觀音。

はしだて-の 梯立の【枕】❶高き倉に上るには、梯子を立つるにより、くら(倉)にかけていふ。記「梯立のくらはし山をさかしみと岩かきかねてわが手取らすも」❷梯子は、そばだちてさかしきものなるより、さかし(嶮し)にかけていふ。紀「梯立のさかしき山も吾妹子(ワギモコ)と二人越ゆればやすむしろかも」❸梯子には段を構ふるより、組木(クミギ)の義にて、地名くまぎ(熊來)にかけていふ。萬葉「楷楯(ハシタテ)の熊來酒屋(クマキサカヤ)に眞罵(マヌ)らる奴(ヤツコ)わし誘(サス)ひ立て率(キ)て來なましを」

はしだて-まつり 橋立祭【名】丹後國切戶(キレド)の文殊會(モンジユエ)。六月二十五日に行はる。

はした-な【貌】『はしたなしの語幹』はしたなきさま。堀次「さもこそは峰の嵐の荒か

らめあなはしたなの槇の板戸や」

はしたーなし【形一】『なしは甚しき意の接尾語』間（ハシタ）にてあり。どちらつかずなり。都合惡し。たよりなし。むやみなり。蜻蛉「文（フミ）ものすれど、返事（カヘリゴト）もなく、はしたなげにのみあれば」源氏「歸らんにもはしたなく、心をちなく出で立ちにけるを思ふに」著聞「布施はしたなく多く取りて上るとて」

はしたなむ【動下二他】はしたなく思ふやうに仕向く。きびしく咎む。困らす。源氏「念佛より外のあだわざなせそと、はしたなめられしかば」同「下﨟なりとも、かの主（ヌシ）たちをば、いかが、いと、さははしたなめん」

はじーだん 櫨緂【名】菊・龍膽（リンダウ）・紅葉などの模樣を繍物（ヌヒモノ）にしたる組紐。九月・十月の頃用ふ。榮花「御几帳、朽葉の裾濃（スソゴ）に、秋の繪を書きて、櫨緂の紐をせさせたまへり」

はしたーめ 端女・半女【名】**はしたもの**（端者）に同じ。

はしーだめし 橋試【名】橋が幾許の重さに堪ふるかをためすこと。幸充日次記「五條橋試之車、（重目相量乘レ之、常車）、牛而被レ令レ牽レ之」

はしたーもの 端者・半者【名】『身分高からざれども、又、むげに下衆（スゲ）にもあらずして、間（ハシタ）なる者の義』召使の女。はしため。はした。枕「若くてよろしきをのこの、げす女の名を言ひ馴れて呼びたるこそ、いとにくけれ。はしたもの・わらはべなどは、されどよし」

はしたーもの 端物・半物【名】數の揃はぬ物。はんぱの物。

はしたーやま 半山【名】［地］近江國にありといふ山。散木「しぐれするはしたの山はもみぢ葉の色づくほどの名にこそありけれ」

はしたーわらは 端童・半童【名】『**はしたもの**（端者）を見よ』召使のわらは。落窪「はしたわらはのあるに、さうぞきかへさせて」

はしーぢか 端近【名】㊀『**はし**（端）㊃を見よ』家の一部、端に近き所。あがりばな。源氏「人目もしげき頃なれば、常よりも端近なるを、そら恐ろしうおぼゆ」㊁奧ゆかしからず、淺薄なること。上品ならぬこと。［古語］榮花「御心おきて・有樣などは、いかで、かう古代ならず、今めかしう、さりとて、端近になどやはおはしつる」

はしーぢかし 端近し【形一】はしぢかなり。入口のあたりなり。源氏「端ぢかきおまし所なりければ、遣戸をひきあけたまひて」

ばしちーてん 鉢私地天【名】［佛］三十三天の一。

はしーちん 橋賃【名】**はしせん**（橋錢）に同じ。

はしーぢよらう 端女郎【名】**つぼねぢよらう**（局女郎）に同じ。**みせぢよらう**（見世女郎）參照。好色いせ物語「むかし、田村と申すけち、おはしましけり。（注）けち、一名局、一名はし女郎」

はしーつーかた 端方【名】はしの方。はし近き方。［古語］源氏「端つ方のおましに、……おほとのごもれば」

はしーづくり 橋造【名】橋を造ること、又その人。拾遺「葛城（カツラギ）や我やは久米の橋づくり明けゆく程は物をこそ思へ」

はしーづくり 端作【名】**はしがき**（端書）㊁に同じ。二判問答「慈惠大師法樂和歌懷紙端作事」

はしーっーこ 端っこ【名】**はしこ**（端こ）の音便。

はじーっーこ 端っこ【名】**はじこ**（端こ）の音便。

はしーっーこし【形一】**はしこし**の音便。

ばしーったーせん 婆悉吒仙（梵 Vasistha）【名】［人］印度吠陀（ヴエダ）時代の仙人。その作に係る讚歌多し。

はしーづつ 箸筒【名】箸を入れおくに用ふる筒。はしたて。折焚く柴の記「箸筒の、黑く塗りしかきつばたの蒔繪」

はしーつぼ 箸壺【名】箸を載せおくに用ふる壺。延喜式「箸壺・片盤八十四口」

はしーつぼね 端局【名】**つぼねぢよらう**（局女郎）に同じ。一代女「それより品下りて、端局の事どもいふに、限もなく」

はしーづま 愛妻【名】愛（ハ）しき妻。かはゆき妻。愛妻（アイサイ）。［古語］記「山背（ヤマシロ）にいしけ鳥山いしけいしけわがはしづまにいしき遇はむかも」

はしーづめ 橋詰・橋爪【名】橋の兩端の地。方角を示していふ時は、東詰（ヒガシツメ）・西詰・南詰・北詰などいふ。橋のたもと。橋のもと。はしもと。つめ。百錬抄「祇園西大門前大路在家、南北兩面拂レ地燒亡、西及二橋爪一」盛衰記「橋爪に打立って、禦矢射けり」

はしーでまへ 橋手前【名】橋より此方（コナタ）にある土地。（橋向（ハシムカフ）に對して）浮世床「兩國橋へかかると、橋手前から、中年增（チユウドシマ）が、先へ立って行（イ）きやす所で」

はしーてんま 端傳馬【名】大船・小船に添へ置く傳馬船（テンマブネ）。

はしーでら 橋寺【名】山城國宇治橋の東岸彼方（ヲチカタ）町にある放生（ハウジヤウ）院常光寺の俗稱。僧道登の、始めて宇治橋を架設せし時の設置に係る。「宇治橋の碑」參照。

はじーでら 土師寺【名】『土師の姓を賜りし野見宿禰の住地なりしよりいふ』**だうみやうじ**（道明寺）の異稱。謠曲（道明寺）「河内なる土師の里にも著きにけり。これに出でたる老人は、この里の名も土師寺の佛神に仕へ申す者なり」

はしどい【名】［植］木犀（モクセイ）科に屬する落葉喬木。高さ三丈、周圍三尺に達し、樹皮帶褐黑色、葉は廣卵形にして、裏面に白毛密生し、花は白色・小形にして、六月頃、圓錐花序をなして開き、香氣あり。北海道・本州等の山地に自生し、材は薪炭用又は小細工用に供し、又、庭樹・盆栽とすることあり。ぎんつくばね。

はしーどの 橋殿・梯殿【名】㊀谷又は低地などの上に、橋の如くに掛け渡して造りたる家。空穗「ろうの西・東（ヒンガシ）の橋殿に向へて立つ」落窪「清水（キヨミツ）に詣づ。……。中將殿の御車どもは、橋殿に引き立てて」㊁天台宗の傳說にて、近江國比叡山の麓、大宮權現垂跡（スヰジヤク）の地なりといふ處。「波止土濃」「山王（サンワウ）二十一社」參照。平家「大宮の橋殿より八王子の御社まで、回廊作りて參らせんとなり」太平記「釋尊、これを聞しめして、この波の流れ止らんずる所、一つの國となりて、わが敎法弘通（グヅウ）する靈地たるべしと思しめしければ、……、この葦の葉、果して一つの島となる。今の比叡山の麓、大宮權現、跡を垂れたまふ波止土濃なり」

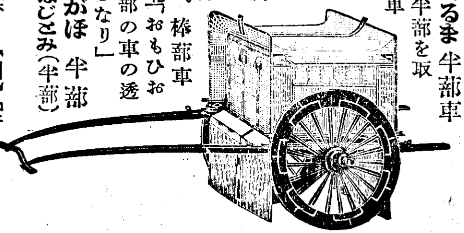
はーじとみ 半蔀【名】㊀**こじとみ**（小蔀）㊀に同じ。一說に、上半のみを蔀として、外へ揚ぐるやうにし、下は格子又は鰭板（ハタイタ）などを打ちたるもの。**こはじとみ**（小半蔀）參照。源氏「上（カミ）は、半蔀、四五間ばかり上げわたして、簾なども、いと白う涼しげなるに」㊁**こじとみ**（小蔀）㊁に同じ。建武年中行事「御倚子の前に進みて舞ふ事もあり、主上、半蔀より御覽ず」㊂謠曲の一。源氏物語夕顏の卷を基とし、立花供養の時に、花の精あらはれ出でて、昔を語ることを作れるもの。古名、半蔀夕顏。

はじとみーぎれ 半蔀切【名】名物切（メイブツギレ）の一。地は花色、紋は淺黃にて、夕顏に似たる唐草紋を織り出せる緞子（ドンス）。

はじとみーのーくるま 半蔀車【名】物見に、半蔀を取附けし網代車（アジログルマ）。主として、攝政・關白・大臣・大將の乘用なれども、上皇乘御の例もあり、又、高僧・女房も用ひたり。棒蔀車（ボウジトミノクルマ）。榮花「おもひおもひなる半蔀の車の透きとほりたるなり」

はじとみーゆふがほ 半蔀夕顏【名】**はじとみ**（半蔀）㊂に同じ。

はしーなく 端無く【副】『唐の賈島の「度二桑乾一」と題する詩に「無レ端更度二桑乾水一、却望二并州一是故鄕」とあり。「環（タマキ）の端無きが如し」參照』何のためとも



（はじとみのくるま）

なく。はからず。ふと。ゆくりなく。われ知らず。そぞろに。

はし-なまり 箸訛【名】食事の時、同一の菜(サイ)のみを、いつまでも食ひて、椀を持ち居ること。(作法上、忌むべきこととす)

はじ-にほひ 櫨匂・黃櫨匂・梔匂【名】鎧の縅毛の一。上を櫨色に、袖と草摺との末を黃色に、又その次を薄黃色に縅せるもの。**はじをどし**(櫨縅)參照。太平記「櫨匂の鎧に、薄紫の母衣(ホロ)懸けたる武者」

はし-ぬひ 端縫【名】**はぬひ**(端縫)に同じ。一代女「日野絹の幅廣を、……端縫なしに」

はじ-のき 櫨樹・黃櫨樹【名】〔植〕**はぜ**(櫨)に同じ。

はしのくわう 波斯匿王 (梵 Prasenajit 鉢邏犀那時多))【名】〔人〕『玄弉は勝軍と譯し、義淨は勝光と譯せり』憍薩羅(コサラ)國の王。梵授王の子。釋迦と同日に生れて、その敎法に歸依せしより、同國舍衛(シャヱ)城は、一時佛敎の中心たるに至れりといふ。摩揭陀(マカダ)國の王頻婆娑羅(ビンバシャラ)と婚を通じ、妹を嫁せしめしが、頻婆娑羅の、その子阿闍世(アジャセ)に弑せらるるや、妹は憤死し、王は阿闍世と戰を交へて、俘にし、後、又、一女を與へて、和を結びしが、その王子の謀叛により、遁れて阿闍世王に倚らんとし、急に病を得て歿す。

はし-の-こ 梯の子【句】**はし**(梯)の條下「を見よ。

はし-の-ま 階の間【句】**はし**(階)の條下「を見よ。

はし-の-みはか 箸墓【名】『命、大物主(オホモノヌシ)神の妻となりしが、神、夜のみ來りて晝は見えざるより、一夜、明旦その形を見んことを欲すといふ。神いふ。汝の櫛笥(クシゲ)の中に居るべしと乃ち櫛笥を、開き見れば、美麗なる小蛇あるを見、驚き叫ぶや、神、人の形に化して、虛空に去り、命、悔みて、箸にて陰を撞きて薨ぜられし由、日本書紀に見ゆ』孝元天皇の皇女倭迹迹日百襲(ヤマトトトビモモソ)姫命の御墓。大和國磯城(シキ)郡織田村大字箸中の西北に在り。

はし-のり 端乘【名】㊀物の端に乘ること。㊁かりそめに乘ること。ちよっと乘ること。宇治「この馬、端乘に賜はり候はんとて、引返しぬ」

はしは 圭【名】**けい**(圭)㊀に同じ。名義抄「圭、ハシハ・ハカリ・カサヌ」

はしば 橋場・橋塲【名】〔地〕『古、隅田川の橋、ここに架りて、奧州街道の通路たりしよりいふとぞ』東京市淺草區にある町。總泉寺といふ曹洞宗の寺あり、その門前を、昔、淺茅原(アサヂガハラ)と呼びたり。俗曲(梅の春)「橋場・今戶の朝烟、續く竈も賑うて」

橋場總泉寺の敵討【句】享保年中、紀州の浪人清水新次郎といふ者、江戶橋場なる總泉寺にて、その義兄鶴岡傳内の敵なる軍藏を討取りし事蹟。

はしば 羽柴【名】『織田信長の四天王なる丹羽長秀と柴田勝家との姓の一字づつを取りたるもの』姓氏の一。豐臣秀吉の、豐臣姓を稱する前、用ひしもの。又、親戚・近臣にも用ひしめたり。**ほり**(堀)㊂參照。

はしは-えばうし 圭烏帽子・端芝烏帽子【名】圭冠(ハシハカウブリ)に似たる烏帽子。

(はしはえぼうし)

はしは-かうぶり 圭冠【名】漆にて塗り、形、圭に似て、上は圓く尖り、下は方形なる、上古の冠。後代の烏帽子に似たるもの。はしからぶり。紀「圭冠、ハシハカウブリ」

はし-ばこ 箸箱・箸匣【名】箸を入れおく「細長き匣。

はしばさみ-いし 橋挾石【名】造庭法にて、泉水に架する橋の兩側の袂に立つる石。はしびきいし。

はし-ばし 端端【名】㊀あち・こちの端。あの物事、この物事につきての、少しづつのかど。そばそば。源氏「おぼさるらん端端をもあきらめ聞えまほしくなん」西遊記「京の端端よりは、今一きはまされるやうに覺ゆ」㊁「端が端」に同じ。〔古語〕金葉「數ならぬ身をうぢ河のはしばしといはれながらも戀ひわたるかな」

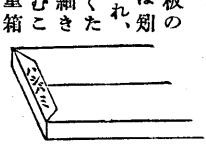
はし-ばしら 橋柱【名】橋桁を支ふるために立てたる臺。橋脚。公任集「三島江を經て、長柄の橋にて、橋ばしら無からましかば流れての名をこそ聞かめあとを見ましや」若風俗「難波の橋柱にて、指すこし疼(タイ)ませ」

橋柱の誓(チカヒ)【句】「柱(ハシラ)に題す」を見よ。堀太「思ふこと橋柱にぞ書きつけて昔の人は位增しける」

はしば-ひでよし 羽柴秀吉【名】〔人〕**とよとみひでよし**(豐臣秀吉)を見よ。

はしはま 波止濱【名】〔地〕伊豫國越智(ヲチ)郡にある町。瀨戶内海に面し、今治(イマハル)の北一里餘に在り、風波のために、今治にて、貨物の積卸をなすこと能はざる場合、この地、これに代る。

はし-ばみ 端喰【名】板の木口を隱すため、又は剝(ハ)ぎ合はせたる板の離れ、又は板の反(ソ)るを防ぐために、兩端の木口に、細き材を横に塡(ハ)め込むこと、又その材。本箱・重箱などの蓋には、必ずこの法を用ふ。



(はしばみ)

はし-ばみ【名】〔動〕**はいたか**(鷂)に同じ。

は-しばみ 榛・蓁栗【名】〔植〕『榛(ハシ)柴實の略』樺木(カバノキ)科に屬する落葉喬木。高さ四丈に達す。葉は三四寸、心臟形を呈し、闊大にして尖り、重鋸齒を有して、互生す。花は單性、且つ雌雄同株にして、雄花は花蓋を缺き、二小苞を有し、長穗狀花序をなして、暗褐色を呈し、雌花は花蓋を具へ、若干頭狀に集りて、綠色を呈す。春、葉に先立ちて開き、榛(ハシ)の木の蕾に似て黃なり。果實は、柴栗ほどにて、葉狀の殼斗に包まれ、仁は白く、生にて食へば、栗の味あり。山野に自生す。

はし-ばん 橋番【名】橋を見守り、取締などすること、又その人。はしばんにん。はしもり。「橋の鬼」參照。八笑人「今ぞ川へ飛び入るけしき。……、橋番から出てつかめへられるだらう」

はしばん-うけおひにん 橋番請負人【名】江戶時代に、橋番人の事を請負ひし人。

はし-ばんにん 橋番人【名】江戶時代に、橋の掃除、その他橋の取締等を掌り、出火・出水等の時、橋掛名主・橋番請負人・水防請負人等と共に、橋附抱人足(ハシツキカカヘニンソク)及び附近の船持・船乘・車力等を指揮して、橋を防禦せしもの。常にその事務に從ふ定番人と、定番人を補助する添番人と、定番人の支配の下に、その事務に從事し、夜番等を勤むる下番人とに分れたり。

はしばん-や 橋番屋【名】橋番人の住む小屋。

はしびき-いし 橋引石【名】**はしばさみいし**「(橋挾石)に同じ。

はし-ひめ 橋姬【名】橋を守るといふ女神。主として山城國宇治橋のにいひ、橋の下にゐて、これを守るといひ、又、橋北なる離宮(リグウ)といふ神の、夜ごとに通ひ、その歸りゆく時、宇治川の波の夥しく立つ音聞ゆなどいふ傳說あり。**りぐうみやうじん**(離宮明神)參照。古今「ちはやぶる宇治の橋姬なれをしぞかなしと思ふ年の經ぬれば」源氏「橋姬の心を汲みて高瀨さす棹の雫に袖ぞ濡れぬる」

はしひめ-の-やしろ 橋姬社【名】山城國宇治橋の西南にある小社。前條、宇治の橋姬を祀れるものといふ。

は-しぶ 葉銹【名】『英 Rust fungus』銹金(シウキン)族と呼ぶ細菌寄生によりて生ずる、植物の病害。葉は鐵銹を塗布したるが如き觀を呈す。銹病(シブビヤウ)。

はし-ぶぎやう 橋奉行【名】橋普請の事を掌る奉行。

はし-ぶしん 橋普請【名】橋を造修する「こと。

はし-ぶと 嘴太【名】〔動〕次條の略。

はしぶと-がらす 嘴太烏【名】〔動〕鳴禽類に屬する鳥。嘴甚だ太く、體も大くして、背は黑く、綠色の光輝あり。嘴細烏と同じく、各地の人家の附近に棲む。

はしぶと-たけがらす 嘴太嶽烏【名】〔動〕**ほしがらす**(星烏)を見よ。

はし-ぶね 端艇・端舟【名】大船に附屬せる、小き船。あしつぎぶね。はしけ。紀「艇、ハシフネ」枕「端舟とつけて、いみじう小きに乘りて漕ぎありく」宇治「淀にて船に乘りける程に、……、端舟にて商する者ども寄り來て」

はし-ぶみ 端書【名】はしがき(端書)［二］［三］に同じ。

ばし-ぶんつう 馬氏文通【名】〔書〕支那古典の文法を、西洋の文典に倣ひて、述べたるもの。十卷。支那清の馬建忠の著。

はし-べ 端邊【名】はた。ほとり。はし。〔古語〕榮花「道のはしべの石の、思ひ思ひに背く」

はじ-べ 土師部・土部【名】はにしべ(土師部)の略。

はし-べんけい 橋辨慶【名】謠曲の一。牛若と辨慶とが、京都の五條の橋にて、主從の緣を結ぶことを作れるもの。

はじ-ほ 齒鹽【名】しせき(齒石)に同じ。

はし-ぼそ 嘴細【名】〔動〕次條の略。

はしぼそ-がらす 嘴細烏・慈烏【名】〔動〕鳴禽類に屬する鳥。烏屬中、最も普通なるものにて、嘴細く、背の羽毛は、黑くして、紫色の光輝あり。嘴太烏と同じく、各地の人家近くに棲む。さとがらす。

は-しま 坻【名】『端島の義』水中に在る小洲。

はし-ま 橋間【名】『ま(間)［二］を見よ』橋を支ふる柱と柱との間。八笑人「兩國の洲(ス)か、橋間の船込(フナゴミ)の中へ附けてゐて」

はしま 羽島・羽嶋【名】〔地〕美濃國十五郡の一。郡役所を笠松町に置く。明治三十九年中島・羽栗の二郡を併合せるもの。

はし-まい 端米【名】［一］僅かの米。［二］不十分なる給養。諺「憎まれ子の端米」

はし-ますがた 橋枡形【名】橋を、枡形に架すること。

はし-まつり 橋祭【名】橋の架設又は修繕終りし時に行ふ祭。

はじまり 始・初【名】［一］はじまること。はじめ。開始。［二］はじめ(始)［二］［三］に同じ。

はじまる 始る・初る【動四自】［一］あらたに起る。あらたに發生す。［二］平生の癖が、言葉又は行爲の上に現る。和合人「又始まったと思へど、あまり横ぐはへの耳學問がにくさに」

始らず【句】さしたる効果も見えず。力及ばず。しかたなし〔東京の俚語〕八笑人「みんなが呑んでばかり居ては、始らねえぜ。明日(アシタ)は、誰がする」同「呼んだ所で、はじまらねえ、達者な時さへ役にたたねえ」

はじむ 始む・初む【動下二他】『はじ(端)に語尾の添ひたる語』あらたに起す。しだす。開始す。

始めたる【句】はじめての。〔古語〕榮花「はじめたる事にこそ」同「ことの外にめでたければ、これをはじめたる例(タメシ)になりぬべし」

より始め【句】次條に同じ。〔古語〕枕「聲よりはじめ、樣・形も、さばかりめでたく」同「御文取り入るるよりうちはじめ、茵(シトネ)さし出づる袖口など」榮花「御乳母(メノト)よりはじめ、命婦(ミヤウブ)・藏人、陣の吉上・衞士(ヱジ)・仕丁まで」

より始めて【句】次條に同じ。〔古語〕源氏「大將たちより始めて、下(オ)りたまふに」盛衰記「神武天皇より始め奉りて、御裳濯(ミモスソ)川の流涼しく」

を始め【句】次條に同じ。宇治「梵天・帝釋(タイシヤク)を始め、聽聞せさせたまへば」平家「大臣殿を始め奉り、平家一門の公卿・殿上人」

を始めて【句】次條に同じ。〔古語〕竹取「親を始めて、何事とも知らず」平治「信賴を始めて、上皇を賴みまゐらせて參り集りたる謀叛の輩五十餘人」

を始として【句】云云の人又は物事を第一として、その他の人又は物事までもの意。平家「弟の四郎兵衞を始として、これを見る兵、皆、涙を流して」

はし-むかふ 橋向【名】橋を隔てたる彼方(カナタ)に在る土地。(橋手前(ハシテマヘ)に對して) 和合人「新宿も通り拔け、橋むかふへ行けば」

はし-むかふ 箸向ふ【枕】愛(ハ)しく向はるといふ意にて、**おと**(弟)にかけていふ。一説に、箸は二本對するものなるより、兄弟の、二人、常に相對する義にていふと。**はしよりきやうだい**(箸折兄弟)參照。萬集「父母がなしのまにまに箸向ふおとの命は」

はじ-むらご 櫨村濃・黄櫨村濃【名】櫨色のむらご。夫木「色色に取染めてけり立田姫はじむらごなる衣手の森」

はし-むらさき 端紫【名】端の方の紫色なること、又その色の物。一代女「尻げたに懸けたる端紫の鹿子帶(カノコオビ)」

は-しん 把針【名】『漢字は假借にて、針師(ハリシ)の訛なるべきか』裁縫すること、又それをする人。ぬひはり。おはり。しんめう。〔京都の語〕

は-しん 波心【名】波の眞中。波のそこ。

は-しん 波臣【名】『莊子の外物篇に「莊周顧視、車轍中有㆓鮒魚㆒焉。周問㆑之曰、鮒魚來、子何爲者邪。對曰、我東海之波臣也」とあり』魚類の異稱。一説に、波蕩の臣なりと、又、一説に、水官の義なりと。

は-しん 破身【名】『身を破る義』處女の、始めて男子と交接すること。

ば-しん 婆心【名】**らうばしん**(老婆心)に同じ。

はし-め 端女【名】**はしぢよらう**(端女郎)に同じ。

はじめ 始・初【名】［一］はじむること。てはじめ。開始。［二］發端。最初。おこり。はじまり。［三］もと。おこり。根源。起源。［四］さき。まへかた。最初。

初あらざるなし。克(ヨ)く終あること鮮(スクナ)し【句】『詩經の大雅蕩篇に「天生㆓烝民㆒、其命匪㆑諶、靡㆑不㆑有㆑初、鮮㆓克有㆒㆑終」とあるに本づく』人は、その終を保つ者、稀なり。〔諺語〕

始ありて、終無し【句】『晉書の劉聰載記に「小人有㆑始無㆑終、不㆑能㆑如㆓貫高之流㆒也」とあるに本づく』事に著手しても、操守なきがために、成功せず。〔諺語〕

始ある者は必ず終あり【句】『楊子法言に「有㆑生者必有㆑死、有㆑始者必有㆑終、自然之道也」とあるに本づく。**いうしゆう**(有終)參照』物事には、必ず始と終とあるものなり。〔諺語〕撰集抄「靜かに世の中を思ふに、始ある者は終あり、生ある者は必ず死す」

初から長老にはなれず【句】物事は、一定の順序を經て發達する譬。〔諺語〕

初耳語(ササヤキ)、後のどよめき【句】初は隱れて行ひたる事の、後にあらはれて、世の評判となること。〔諺語〕

始無き罪【句】〔佛〕「無始(シ)の罪」に同じ。夫木「始なき罪のつもりの悲しさをぬかの聲聲くどきつるかな」

初の秋【句】しよしう(初秋)に同じ。

初の老(オイ)【句】しよらう(初老)に同じ。謠曲(關寺小町)「また古事になりゆく身の、せめて、今は又、初の老ぞ戀しき」

初の耳語(ササヤキ)、後のどよみ【句】「初耳語、後のどよめき」に同じ。〔諺語〕

初の夏【句】しよか(初夏)に同じ。

初の春【句】［一］しよしゆん(初春)に同じ。［二］多くの年の最初の春。千載「千代經べき初の春と知りがほにけしきことなる花櫻かな」

始は處女の如く、後は脫兎の如し【句】『孫子の九地篇に「始如㆓處女㆒、敵人開㆑戶、後如㆓脫兎㆒、敵不㆑及㆑拒」とあるに本づく』まづ靜かにして、敵に油斷せしめ、然る後に、敏捷に活動して、敵をして拒ぐに遑なからしむ。〔諺語〕

はじめ 初【副】まへかた。まへに。もと。以前。最初に。

はじめ-きらめき 初煌【名】物事の、初のみきらきらしく花やかなること。乳母草子「名目にも、初きらめきと申すことにて候」

初きらめき、神・烏帽子(エボシ)【句】神の靈驗も、烏帽子の光澤も、日を經れば、次第に衰ふ。〔諺語〕

初きらめき奈良刀【句】『**ならがたな**(奈良刀)を見よ』初の間のみよく見ゆる譬。〔諺語〕

はじめ-つ-かた 始方・初方【名】はじめの頃。はじめの方。まへかた。〔古語〕源氏「睦じう聞えたまひし上達部などは、始つ方は、とぶらひ聞えたまふありき」

はじめ-て 始めて・初めて・甫めて【副】あらたに。あたらしく。新規に。

はし-めなう-おび 波斯馬腦帶【名】波斯(ハシ)國より產する馬腦を飾とせる革帶。和名「革帶、今按、革帶以㆓其所㆑附金玉・石

角等一爲レ名、故有二白玉帶一…… 波斯馬腦帶……等之名」

はじめ-に 初に【副】はじめ(初)に同じ。

はじめ-をはり 始終【名】物事のはじめと、をはりと。もとすゑ。あとさき。顚末。始終(シジユウ)。古今「詞かすかにして、はじめ・をはり、確かならず」

はし-もと 橋本【名】はしづめ(橋詰)に同じ。（爲忠百首）「植ゑしより橋本さらぬおそ櫻春の暮をや待ちわたるらん」

はしもと 橋本【名】㊀京都の上賀茂神社の境內にありて、藤原實方の靈を祀れる末社。在原業平を祀れる岩本(イハモト)の祠と共に、後世、和歌を學ぶ者、これに祈る。（徒然）「賀茂の岩本・橋本は、業平・實方なり」㊁〔地〕『天正年間、紀ノ川に長橋を架して高野山往來に便せしに本づく。橋は三年にして流失し、爾來專ら渡船に依る』紀伊國伊都(イト)郡にある町。大和街道・高野街道の交叉點、紀ノ川の北岸。紀和鐵道の一驛。㊂〔地〕『對岸山崎との間に、古、山崎橋のありしに本づく』山城國綴喜(ツツキ)郡八幡(ヤハタ)町の大字。河內國の國境に接し、淀川に瀕し、京都街道に沿ふ。（蕪村）「若竹や橋本の遊女ありやなし」

はしもと-がはう 橋本雅邦【名】〔人〕畫家。江戶の人。狩野雅信の門人。東京美術學校敎授となり、帝室技藝員に任ぜられ、後、岡倉覺三氏等と美術學校を去りて、日本美術院を起す。明治四十一年歿す。年七十四。

はしもと-さない 橋本左內【名】〔人〕勤王家。越前國福井の藩士。長綱の子。名は綱紀、字は伯綱。景岳又は黎園と號す。博覽・强記にして、醫を緒方洪菴に學び、漢書に精し。常に尊王・攘夷の說を持し、慶喜を立てて將軍となさんと謀り、幕府の忌諱に觸れて、安政六年、江戶小塚原に刑せらる。年二十六。明治二十四年正四位を贈らる。

はしもと-ちやう 橋本町【名】〔地〕『德川時代に、博勞役橋本源七の受領地なりしによりていふ』東京市神田區の町。一丁目より三丁目まであり。元、四丁目までありしが、明治五年、三丁目を江川町に編入し、四丁目を改めて、三丁目としたり。（八笑人）「橋本町へはいって、この笈で喰ふ氣だ。いやはや、こなたも、生若いざまをして、腑甲斐ねえ男ぞ」

はしもと-つなつね 橋本綱常【名】〔人〕軍醫總監。橋本左內の弟。長崎に遊學して、蘭醫シントレル及びポオトインに就き、又、江戶の松本順に學ぶ。慶應二年、藩の醫學館外科敎授方となり、明治四年軍醫寮に出仕し、翌年海外に留學し、十年、陸軍軍醫監に任ぜらる。後、醫學博士を授けられ、貴族院議員・宮中顧問官・日本赤十字社監督を經、日淸戰爭の功により、男爵を授けられ、陸軍軍醫總監・帝國學士院會員を經、日露戰役後、子爵に陞敍せられ、同四十二年薨ず。年六十五。

はしもと-つねあき 橋本經亮【名】〔人〕京都の國學者。洛西梅宮(ウメノミヤ)の祠官。姓は橋氏。橋窓・梅窓・香圃などと號す。高橋圖南に學び、和歌を善くし、最も有職・故實に精しく、奇行に富む。文化三年歿す。年四十七。

はし-もの はし者【名】言行、道に背きて、「我に益なき友」

はじ-もみぢ 櫨紅葉・黃櫨紅葉【名】㊀櫨の葉の、秋に至りて紅葉せるもの。（新古今）「鶉鳴く片野に立てるはじもみぢ散らぬばかりに秋風ぞ吹く」㊁〔植〕はぜのき(櫨)に同じ。㊂襲(カサネ)の色目の一。表は黑ばみたる蘇芳、裏は黃。女房の五衣(イツツギヌ)には、上に黃、次に山吹の濃淡・紅・蘇芳、單(ヒトヘ)は紅とす。秋用ふ。

はし-もり 橋守【名】はしばん(橋番)に同じ。（紀）「守橋者、ハシモリ」

はし-や 箸屋【名】箸を製造し、又は販賣する家、又その人。（日本永代藏）「木屑より箸を削りて、……箸屋甚兵衞と、鎌倉柯枝(シガ)に隱なく」

は-しや 霸者・覇者【名】霸道を行ひて、天下を治むる者。諸侯のかしら。はたがしら。

は-しや 跛者【名】あしなへ。びっこ。

は-じや 破邪【名】邪說・邪道を說破すること。

破邪・顯正(ケンシヤウ)【句】㊀〔佛〕邪道を破壞して、正法(シヤウボフ)を發揮すること。破顯。㊁邪說・邪道を論破して、正義・正道をあらはし弘むること。

ば-しや 馬車【名】人又は貨物を載せて、馬に牽かする車。うまぐるま。

ぱしや (土 Pasha)【名】『もと波斯語にて、統治者の義』土耳古及び埃及の高貴の稱號。もと皇族に限られしが、後には、文武高官にも授與せらるるに至れり。

は-しやう 八省【名】はっしやう(八省)㊁の略。〔古語〕（源氏）「はしやうに立てつづけたる出車(イダシグルマ)どもの袖口・色あひなど」

は-じやう 端城【名】はじろ(端城)に同じ。

は-じやう 波上【名】なみのうへ。

は-じやう 波狀【名】波の起伏する如き形、卽ち線の兩側に、交互に、多少彎曲せる形。

ば-しやう 馬廠【名】〔兵〕師團輜重の一。豫備馬匹を貯へて、馬匹の補充に任ずる部隊。

ば-じやう 馬上【名】㊀馬のうへ。（太平記）「馬上にて腹切って、道の傍にぞ臥したまひける」㊁馬に乘ること、又、乘りてあること。乘馬。馬乘。（若風俗）「奧小姓殘らず馬上仰せ付けられしに」㊂騎馬の者。騎者。（長門本平家）「馬上二十八萬五千餘騎とぞ記しける」㊃ばじやうぢやうちん(馬上提燈)の略。

馬上の作物(ツクリモノ)【句】流鏑馬(ヤブサメ)・笠懸・犬追物(イヌオフモノ)など、すべて、作物を的として、馬上よりする、射術の練習。

はじやう-えん 波狀緣【名】〔植〕葉緣の形の、波狀なるもの。

はじやう-おん 破障音【名】〔語〕はれつおん(破裂音)に同じ。

は-しやうが 葉生姜【名】葉の附きたるままの生姜。（千紫萬紅）「遊ニ生姜市一。秋風吹送葉生姜、薑出藤花千木箱、目腐市名無ニ勿體一、雨晴天照大神光」

はじやう-かうはん 波狀鋼板【名】なまこいた(海鼠板)に同じ。

ばじやう-ぐつ 馬上沓【名】昔、馬に乘る時に用ひし沓。鞣革にて造り、爪先に十二の皺ありて、黑漆にて塗りしもの。

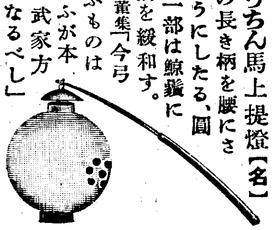
はしやう-こう 破墻孔【名】〔兵〕破墻射によりて破壞したる墻壁の部分。侵入縱隊の要塞內に突入する進路となる。

ばじやう-さん 馬上盞【名】昔、旅立の時に、馬に乘り居て、酒を酌みかはし、別を告げしこと、又その時に用ひしさかづき。（下學集）「馬上盞、バジヤウサン」

はしやう-しや 破墻射【名】〔兵〕攻城に際して、墻壁を破壞するための射擊法の一。加農(カノン)砲を近距離に進め、彈著を移轉しつつ、壘濠の內岸壁を射擊し、壁面を矩形(クケイ)に切り破りて崩壞せしむるもの。(破壞射に對して)

はじやう-せん 波上線【名】〔地〕『英 Contour line』とうかうせん(等高線)に同じ。

ばじやう-ぢやうちん 馬上提燈【名】乘馬の時、その長き柄を腰にさして携ふるやうにしたる、圓き提燈。柄の一部は鯨鬚にて作りて動搖を緩和す。ばじやう。（骨董集）「今弓張提燈といふものは馬上提燈といふが本名にて、元は武家方に始りしものなるべし」


(ばじやうぢやうちん)

ばじやう-づつ 馬上筒・馬上銃【名】馬上にて發射するに用ふる小銃。筒先、普通のよりやや短し。

ばじやう-ばかま 馬上袴【名】うまのりばかま(馬乘袴)に同じ。

はしやう-ふう 破傷風【名】〔醫〕小なる刺創等より、土塊と共に破傷風菌の侵入するに因りて起る病。潛伏期は一二週間にして、その間、前驅病として、精神の不安と不眠とあり。創傷部の疼痛・化膿等ありたる後、痙攣を起して、口を開く能はず、身體弓のごとく反轉し、呼吸困難となり、體溫の上昇を來す等の特徵を呈す。破傷風血淸を注射する法あれども、效能確

かならず、早きは數時、遲きは數日にして死す。

はしやうふうーきん 破傷風菌【名】〔植〕『羅 Bacillus tetani』破傷風の病原たる桿狀菌。中等大にして、一端に芽胞を生じ、帽子のピンの如き形をなすを特異とす。空氣中にては發育せず、土壤、殊に肥料を施せる土地に存在す。明治三十年、醫學博士北里柴三郎の發見に係る。

はしやうふうーけっせい 破傷風血淸【名】破傷風の毒素を、馬に注射し、免疫せしめて製したる血淸抗毒素。

ばじやうーぼん 馬上本【名】しうちんぼん（袖珍本）に同じ。甲子夜話「巾箱本・袖珍本の事を、本邦にて、馬上本と唱へし由、五山釋家の文にて見しと、近藤重藏の物語れり」

ばしやーうま 馬車馬【名】㊀馬車を曳く馬。㊁他人に驅使せらるることの譬。㊂物事を、脇目もふらず、一途（イチヅ）に爲すことの譬。㊃花合（ハナアハセ）㊂を行ふに、七人にて行ひ、最後の人は、兩手にて目を隱し、他人の逃札（ニゲフダ）を集めて切りたる中より、更に七枚を貰ひて引くこと。

ばじやうーめん 馬上免【名】鎌倉・室町兩時代に、騎馬の役を免じて、その役料を徵收せしもの。

はしやぐ 燥ぐ【動四自】㊀かわく。ひる。乾燥す。㊁調子に乗りて騷ぎ・喋（シヤベ）りなどす。うかれ戲る。艶狩劍本地「好い加減で止みやらぬと、はしやいだちよぼちよぼ口、抓って、抓って、抓り上げて置くぞや」

ばーしやく 馬借【名】貨馬を業とすること、又その人。うまかし。丹波與作「在所の衆が養て、やうやう馬を追ひ習ひ、今は、近江の石部の馬借に奉公しまする」

ばしやくーどひや 馬借問屋【名】馬借を營業とする問屋。丹波與作「馬借問屋へことわられ、惡名が立てば」

ばしやーぐわいしや 馬車會社【名】貨馬車又は乘合馬車を營業とする會社。

はじやーけんしやう 破邪顯正【名】〔書〕はいかいはじやけんしやう（俳諧破邪顯正）の略。

はじやーけんしやう 破邪顯正【句】はじや（破邪）の條下を見よ。

はしーやすめ 箸休【名】食物の際、飯の間に、他物を食ふこと。

ばしやーてつだう 馬車鐵道【名】馬車の通行する軌道。てつだうばしや。

ばしやーみち 馬車道【名】馬車・鐵道馬車などの往復する道。

ばしやら 婆娑羅【名】ばさら（婆娑羅）の訛。去來抄「この前句（マヘク）、今やうばしやらの女と見ゆ」

ばしやれーもの 婆娑者【名】ばしやれたる者。しまりの無き人。夕霧阿波鳴渡「あの傾城のばしやれ者」

ばしやれる 婆娑れる【動下一自】婆娑羅（バサラ）㊂の狀態に見ゆ。ばさらになる。遊冶なるさまなり。取亂れたるさまになる。心中刃は氷の朔日「町方に居る分に言ひなした私が身が、ばしやれた形で逢はれもせず」

はーしゆ 把手【名】とって（取手）に同じ。

はーしゆ 播種【名】種子を蒔くこと。

ばーしゆ 馬首【名】㊀馬のくび。㊁馬の首の向ふ方、卽ちゆくて。

はしゆーき 播種器【名】播種に用ふる器械。

はーしゆつ 派出【名】『派の字の音、正しくはハイ』㊀或事務を取扱はしむるために、分ちて出張せしむること。㊁はしゆつじよ（派出所）の略。

ばーじゆつ 馬術【名】馬を乘りまはす術。

ばじゆつーし 馬術師【名】馬術に秀でたる人。

はしゆつーじよ 派出所【名】『派の字の音、正しくはハイ』㊀派出せられたる人の駐在する事務所。出張所。㊁市中の要所に配置せる巡査の事務所。交番。

はしゆつーふ 派出婦【名】『派の字の音、正しくはハイ』看護婦會のごとき組織の下に團體を作り、隨時、他の需に應じて、その家に出張し、裁縫・洗濯・料理等それぞれ專門の業務に從事する女。大正十年頃より行はれはじむ。

はじーゆみ 波士弓・櫨弓【名】櫨の木にて造りたる弓。萬葉「はじ弓をた握り持たしまかご矢をたばさみ添へて」

天（アマ）の櫨弓【句】神代の櫨弓。記「天のはじ弓を取持ち」

はじゆん 波旬（梵 Pāpiyas 又 Pāpiman（波卑夜・波俾椽・播裨）の訛。又、巴利 Pāpimā）【名】〔佛〕『殺者・惡者・極惡・惡魔・惡中惡・障礙善などと譯す。慧琳音義に「旬の字、もと旬に作りしを、書寫の際誤り傳へ、久しきに互りて遂に固定せるものなり」とあり』惡魔。魔王。てんしま（天子魔）參照。太平記「天魔・波旬の所行かと覺えて」

ばーしよ 場所・塲所【名】㊀ところ。地點。位置。㊁ゐどころ。ばせき。㊂相撲（スマフ）をする場所。㊃賑かなる地。繁華なる土地。目貫（メヌキ）の地。

ばしよーいり 場所入・塲所入【名】力士が、場所㊂に入ること。

ばーじよう 馬乘【名】馬に乘ること。騎馬。乘馬。馬上。大磯虎稚物語「馬乘の達者と呼ばれ」

ばしよーうち 場所內・塲所內【名】場所の內。場內。

はしようーまめ 八升豆【名】〔植〕はっしようまめ（八升豆）に同じ。

ばしよーがよひ 場所通・塲所通【名】力士が、場所㊂に通ふこと。

ばしよーがら 場所柄・塲所柄【名】場所のありさま。場所の次第。場所の適不適。八笑人「肝心の螢といふ景物は後れるし、場所柄は惡（ワル）し」

はーしよく 播植【名】種子を播（マ）き、植ゑつくること。

はーしよく 播殖【名】種子を播（マ）きて殖すこと。

ばーしよく 馬食【名】㊀馬の、物を食ふこと。㊁『史記の范雎傳に「令㆔兩鯨徒夾而馬㆓食之㆒」とあり』箸㊂を用ひずに、馬の如く直ちに口を食器につけて、食ふこと。㊂馬の如くに大食すること。「牛飮・馬食」

ばじよくーき 馬耨器【名】『英 Horse-hoe』馬に牽かせて、作物の畦間なる草を除去するに用ふる農具。

はしーよす はし寄す【動下二自】走り寄す。太平記「後より追ひ懸けて、はし寄せたりしかば」

ばしよーちがひ 場所違・塲所違【名】ところたがへ（所違）㊁に同じ。

ばしよてきーぶんげふ 場所的分業【名】〔經〕三大分業の一。生產の場所を標準として區別せるもの。我國の製絲に於ける、佛蘭西と伊太利との美術に於ける、英・米・獨諸國の商工業に於けるが如く、世界の各國が、各、その生產業に特色あるを、國際的分業といひ、同じく我國の內にても、京都府と靜岡縣との製茶に於ける、信濃國以東の地の養蠶に於ける、又、地方は概して、農業を營み、都會は商工業を以て生活するが如きを、國內的分業といふ。地方的分業。（技術的分業・職業的分業に對して）

ばしよーふさげ 場所塞・塲所塞【名】空所をふさげて、邪魔になる物。

はしよりーかがみ 箸折屈【名】次條を見よ。

箸折屈の兄弟（キヤウダイ）【名】『箸の一對なるよりいふ』二人のみの兄弟の、顏かたち互に似てあること。

はしよりーきやうだい 端折兄弟【名】兄弟ただ二人のみなること。

はしーよる 端折る【動四他】『はしをる（端折る）の訛』㊀裾の端を折りかかげて、帶に插む。㊁詰めて、短く濟ます。はぶく。簡單にす。省略す。浮世床「又、それも省略（ハシ）ったかして、何もなしさ」

はしら 柱【名】㊀土臺の上に直立して、棟（ムネ）と梁（ハリ）とを受け、屋根を支ふる、長き材。㊁直立して、物を支へ持つ、長き材。謠曲（松風）「この船は、柱を立て、帆を引くばかりの船にて候ふ程に」㊂たよりとなるべき人の譬。いしずゑ。柱石。㊃かひのはしら（貝柱）の略。

柱に題す【句】『成都記に出づ』支那前漢の司馬相如が、故郷を出づる時、蜀城の北七里に在る昇仙橋の柱に、大夫高車・駟馬に乘らずば、復びこの橋を過

ぎじと題して、その覺悟を示したりといふ故事。

柱の栓(セン)【句】和船の筈緒を掛くる所にある、樫にて造れるもの。又、北國船の檣を、表より立つるにも用ふ。

心(シン)の柱【句】〔建〕殿堂などを建築する時、先づその中央に立つる、大なる柱。しんばしら。〔檫〕してんばしら(四天柱)參照。和名「檫、心乃波之良」

はしら 柱【助數】『立ち並べるを、家の內に柱の立てるに擬へたるならんといふ』神佛又は極めて高貴なる人を數ふるに用ふる語。紀「五男、イツハシラノヒコミ」記「三柱の神」落窪「一日に、佛一はしらを供養せんと、始めたまへりければ」

はしら-いし 柱石【名】㊀くついし(沓石)に同じ。㊁青石の花石に似たる、堅く薄き方形の石。

はし-らう 橋廊【名】上方にやや反(ソ)らしめて、橋形に作れる廊下。

はしら-おとし 柱落【名】古の船戰にて、木石などを投じて、敵の小船を打碎く法。

はしら-おに 柱鬼【名】鬼ごっこの一。その場にある柱につかまりてある間は、鬼に追ひかけらるることなき約束の下に行ふもの。

はしら-かく 柱角【名】はしらくちいし(柱口石)を見よ。

はしら-かくし 柱隱【名】竹・板又は陶器などにて、柱と同じほどの幅に造り、多くは書畫などを書き、柱の表に懸けて裝飾とするもの。はしらかけ。柱聯。其角「格枝亭柱がくし、 空や秋水ゆりはなす山おろし」

はしら-がくれ 柱隱【名】柱の陰に隱るること。源氏「柱がくれに、少しそばみたまへりつるを」榮花「柱がくれにて、まほにも見えず」

はしら-かけ 柱懸・柱掛【名】はしらかくし(柱隱)に同じ。

はしら-かざり 柱飾【名】藥などを入れて、柱に掛け置く物。

はしらかし 走【名】㊀『米をとぐ時に流し走らかすものなるよりいふ』しろみづ(白水)に同じ。一代女「黑米・はしらかしに朝夕を送れば、何時となく、艷らしきを形を失ひ」㊁次條の略。

はしらかし-じる 走汁【名】ざっと火取りたる羹。手輕くつくれる汁。はしらかし。阿蘭陀丸二番船「蜑小船さしたる事も候はず(といふ句に)浦は濱名のはしらかし汁」

はしらかす 走らかす【動四他】㊀はしらす(走らす)㊀に同じ。盛衰記「淺くなれば、物の具の水走らかし」太平記「その邊の町屋へ、人を走らかし、錢五十文を以て、續松(タイマツ)を十把買って」㊁はしらす(走らす)㊁に同じ。東海道名所記「隔子(カウシ)の內には、金屛はしらかして」

はしらくち-いし 柱口石【名】相模國より產する出來合の堅石にて、厚さは概ね一邊の半分程なるもの。一尺二寸角なるを二寸柱角、一尺三寸角なるを三寸柱角などいふ。

はしら-ごよみ 柱曆【名】一枚刷に作り、家の柱・壁などに貼り附け、又は懸けおきて見るやうにしたる略曆。大小(ダイセウ)。(綴(チト)曆に對して)繇八卦柱曆「柱曆の紙破れて」

はしらす 走らす【動四他】㊀走るやうにす。馳す。とばず。はしらかす。㊁引きめぐらす。立てまはす。張る。はしらかす。「幕をはしらす」

はしら-ずゑ 柱据【名】ざだい(土臺)㊀に同じ。

はしら-せがい 柱脊櫂【名】和船の一部。子持(コモチ)㊃の、筒に寄せて打つ木。

はしら-だい 柱臺【名】ざだい(土臺)㊀に同じ。

はしら-たいまつ 柱炬火・柱松明【名】㊀高き柱の上にて焚くたいまつ。㊁「嵯峨の柱炬火」を見よ。

はしら-だて 柱立【名】家屋の建築に當り、始めて柱を建つること、又その時に行ふ祝賀の式。棟上(ムネアゲ)に先だちて行ふ。續古今「文永二年八月十五夜、內宮の御柱立に當りて侍りければよめる、 宮柱立つるこよひの秋の月また幾度かめぐりあふべき」出世景淸「南部東大寺大佛再興の御願にて、……今日吉日の柱立」

はしら-だな 柱棚・桅棚【名】船の帆柱の橫木。

はしら-づゑ 柱杖【名】尺杖(シャクツエ)に、貫(ヌキ)・梁(ハリ)・楣(マグサ)などの如き、建物中の各部の位置を盛り付けたるもの。

はしら-どけい 柱時計【名】柱・壁などに懸け置くやうに造れる時計。かけどけい。

はしら-ぬき 柱貫【名】柱の上部に、橫に貫き通る材。はしらよせ。〔欄額・櫳・楶〕和名「欄額、波之良沼岐」字鏡「栜柱奴支。又、波自支」

はしら-ね 柱根【名】柱の根もと。はしらもと。盛衰記「鳥居の左の柱根を、三尺掘りたれども」增鏡「門は、……、柱根朽ちて明かざりけるを」

はしら-びき 柱引【名】㊀帆檣を起し、又は仆す時、船の首尾へ引く綱。さきて。ひきて。まきて。㊁『英 Removal of pillars』柱掘を行ふに、漸次に鑛床柱を取拂ふこと。

はじ-らふ 櫨蠟・黃櫨蠟【名】はぜらふ(櫨蠟)に同じ。

はしら-ぶみ 柱蹈【名】〔建〕中途にある柱を支承する梁。

はしら-ぼり 柱掘【名】『英 Pillar working』石炭採掘法の一。鑛床を、互に直交する二系の並行坑道にて分割し、その間に、矩形又は方形の鑛床柱を殘して、天井を支へしめ、次に鑛區の境界に達して、これより漸次に鑛床柱を取拂ふもの。

はしら-ま 柱間【名】柱と柱との間。ま(間)㊂參照。

はしら-まき 柱卷【名】次條を見よ。

柱卷の見得(ミエ)【句】役者の見得の一。鳴神上人(ナルカミシャウニン)の狂言に於けるが如く、片足を柱に卷きつけながらするもの。

はしら-まつ 柱松【名】下方を地中に掘り埋めて焚くたいまつ。たてあかし。たちあかし。〔古語〕榮花「日の暮るる程に、所所の柱松、又、手ごとにともしたる火どもなどの、晝と見ゆるに」

は-じらみ 葉虱・葉蝨【名】〔動〕有吻類に屬する昆蟲。體は長さ一分、油蟲に類し、太く短くして、暗褐色を呈し、大なる複眼と、黃赤色の三單眼とを有し、絲狀・黑褐色にして、末端に二つの刺を具ふる觸角を具ふ。翅は大形にして半透明、暗褐の翅脈と絲紋とを有す。幼蟲は遲鈍なれども、梨などの葉裏に寄生して、樹液を吸收し、大害を與ふ。きじらみ。

は-じらみ 羽蝨・羽虱【名】〔動〕はむし(羽蟲)に同じ。

はしら-みぞ 柱溝【名】〔建〕柱に、飾などのために彫りたる筋。

はしら-もち 柱餅【名】肥前國長崎の風習にて、年末の餅搗の日に、最後の一臼の餅を、家の柱に卷き附けおき、正月十五日、左義長(サギチヤウ)の火にて炙りて食ふもの。胸算用「長崎の柱餅……仕舞一臼を、大黑柱に打著け置き、正月十五日の左義長の時、これを炙りて祝ひける」

はしら-もと 柱本【名】柱の根もと。はしらね。榮花「御簾(ミス)のひまびまの、柱もと・そばそばなどより、わざとならず出でたる袖口」

はしら-よせ 柱寄【名】はしらぬき(柱貫)に同じ。義經記「柱よせに上り、手を掛けて見るに」

はしら-わり 柱割【名】〔建〕柱の大いさを定むること。

はしら-ゑ 柱繪【名】柱にゑがきたる、蓮花・佛像などの繪。榮花「沈(チン)・紫檀を勾欄にし、……柱繪なども、世の常ならず」

はしり 走【名】㊀はしること。馳すること。㊁逃ぐること。かくるること。逃走。㊂すべること。滑走。㊃はしりぎ(走木)の略。太平記「橋桁を渡る者あらば、走を以て推し落す樣にぞ構へたる」㊄ながし(流)㊂を云ふ。〔京都・大阪の語〕今宮心中「走のさきの菜刀でありとも、一人死ねばよいものを」㊅『古、年の初、兎又は鹿などの走る物を用ひしより起るといふ』魚・鳥・野菜などの初物(ハツモノ)。はつ。はしりもの。はしりで。㊆昔の船戰にて、打根の如く作り、緒を長く附け置き、投げ突きにせしもの。又、鎗を代用せしことあり。㊇逃げ失すること。逃亡。新版歌祭文「八卦なら、爰でもって見てやる。失物(ウセモノ)

か、走か、心中がかった者なら、奇妙に所を見て見せるぞ」㊈せんせき（煽石）の俗稱。㊉〔動〕なよし（名吉）を云ふ。〔遠江國の方言〕

はしり 走【助數】『はしらす（走らす）㊂を見よ』幕を二反づつ合はせて數ふるに用ふる語。「幕、一はしり」

はーじり 端尻【名】いとぐち。こぐち。はぐち。端緒（タンショ）。春花五大力「少しにても素振（ソブリ）・はじりを聞出してたもれば、それを手づるに詮議し出し」

ばじり（羅Ungentum basilicnm の略）【名】オリイブ油・黃蠟（ワウラフ）などにて製したる、吸出の膏藥。ばじりかう。

はしりーあがる 走上る【動四自】走りてあがる。かけあがる。狂言（若市）「高き所に走りあがり」

はしりーあそび 走遊【名】走りあそぶこと。隆信集「みどり子、走遊をして」

はしりーあそぶ 走遊ぶ【動四自】馳けまはりて遊ぶ。濱松「若君、何心なう走りあそびたまふ」

はしりーあふ 走合ふ【動四自】走りて出合ふ。はせあはす。宇治「おそろしげなる者、走りあひて」義經記「直江（ナホエ）の御堂に騷動する事聞えければ、辨慶走り合はんと、急ぐ」

はしりーいづ 走出づ【動下二自】走りて、外へ出づ。かけいづ。かけだす。源氏「言ひもはてず、走り出ではべりぬるに」

はしりーいで 走出【名】はしりで（走出）を見よ。

はしりーいる 走入る【動四自】走りて、内に入る。かけこむ。かけ入る。竹取「竹取の翁走り入りていはく」

はしりーうま 走馬【名】㊀走り行く馬。奔馬。逸馬。㊁いそぎの馬。はやうま。增鏡「京よりの走馬といへば、何事ならんと驚きながら、使召し寄せて聞くに」㊂競馬（ケイバ）、又それに用ふる馬。〔古語〕續紀「令三群臣五位已上出二走馬、天皇臨觀焉」太平記「五月には、……四日は、走馬の番（ツガヒ）並に毛色を奏す」

走馬にも鞭【句】よき上にも、なほよくなるやうに、手段を盡すべき譬。〔諺語〕

ばじりーかう バジリ膏【名】ばじりに同じ。

はしりーかかる 走掛る【動四自】㊀走りてかかる。勢烈しく寄りつく。とびかかる。枕「まことかとて、しれもの走りかかりたれば」㊁液體ほとばしりてかかる。石の勢よくはねてひっかかる。伊勢「その栗の上に走りかかる水は、小柑子（セウカウジ）、水、大きさにてこぼれ落つ」

はしりーがき 走書【名】文字をつづけざまに、すらすらと書くこと。達筆に書くこと。はやがき。走筆（ソウヒツ）。

はしりーかく 走書く【動四他】はしりがきに書く。達筆に書く。源氏「うち讀み、走り書き」

はしりーがさ 走笠【名】足利時代に、走衆（ハシリシユウ）の被りし笠。

はしりーかさなる 走重る【動四自】多くの人が、次次に走り集る。撰集抄「人の走りかさなりて、既にはかなくならせたまひぬといふに」

はしりーがね 走金【名】いうぢよ（遊女）を云ふ。〔志摩國鳥羽の方言〕

はしりーかふ 走交ふ【動四自】はしりちがふ（走違ふ）に同じ。〔古語〕枕「わらべ……走りかひ」

はしりーぎ 走木【名】木を滑らせて投げやること、又その木。はしり。太平記「官軍、楯を覆ひて入らんとすれば、衆徒、走木を出だして突き落し」

はしりーぐさ 走瘡【名】たんどく（丹毒）に同じ。

はしりーぐも 走蜘蛛【名】〔動〕くさぐも（草蜘蛛）に同じ。

はしりーくら 走競【名】次條㊀に同じ。望一後千句「尻をつぼるはよそ目恥かし（こいふ句に）恐らくといひしも負くる走くら」

はしりーくらべ 走競【名】㊀共に走りて、遲速を競ぶること。かけくらべ。かけっくら。かけっこ。はしりくら。競走（キヤウソウ）。㊁急ぎて著手すること。競爭。枕「昔の藏人（クラウド）は、今年の春より泣きたちけれ、今の世には、走りくらべをなんする」

はしりーぐるま 走車【名】走りゆく車。大鏡「走車の輪には、薄墨に塗らせたまひて」

はしりーこ 走子【名】はしりで（走出）㊃を云ふ。〔伊豫國の方言〕

はしりーこきり 走こきり【名】次條に同じ。用明天皇職人鑑「隱んぼ・走こきり」

はしりーこくら 走こ競【名】はしりくらべ（走競）㊀に同じ。古今夷曲集「帆を掛けてひいふうみつの浦風にはしりこくらや足早き船」

はしりーこむ 走込む【動四自】はしりいる（走入る）に同じ。狂言（拔殼）「身を投げて死んでのけう。……この邊から走り込まう」

はしりーざふしき 走雜色【名】走使をする雜色。

はしりーじま 走島・走嶋【名】〔地〕備後國沼隈（ヌマクマ）郡に屬する島。鞆（トモ）町の東南三海里の海中にあり。面積約三方里。全島、走島の一村を成す。

はしりーしもべ 走下部【名】走使をする下部。檢非違使（ケビヰシ）廳の下部などにいふ。增鏡「別當左兵衞督資明、はしりしもべとかやいふ者八人」

はしりーしやう 走性【名】先走（サキバシリ）する性質。氣早なる性質。

はしりーしゆ 走衆【名】次條に同じ。

はしりーしゆう 走衆【名】㊀鎌倉・室町幕府の職制の一。將軍御成の時、徒歩にて前驅して、途上の狼藉を警戒せしもの。室町時代の末には、諸大名・旗本衆の中にも置かれたり。かちばしり。㊁わかたう（若黨）に同じ。〔戰國時代に於ける德川家の語〕甲陽軍鑑「若黨を……家康は、走衆と名付けて呼ぶ」

はしりしゆうーのーかしら 走衆頭【名】かちがしら（徒士頭）に同じ。

はしりーすぐ 走過ぐ【動上二自】㊀馳けて通る。走り行く。㊁走るあまりに停るべき處を失ふ。目的の地點を通り越すほど走る。㊂早合點す。推量しすぐ。

はしりーずみ 走炭【名】『はしる（走る）㊄を見よ』はねずみ（跳炭）に同じ。

はしりーすゐかん 走水干【名】水干を著て、供奉（グブ）の先驅を勤むる者。

はしりーだいこく 走大黑【名】『はしる（走る）㊁を見よ』逃亡したる者の戻り來るやうに祈りて、効驗ありといふ大黑の像。その足に針をさして祈るといふ。

はしりーぢ 走痔【名】『患部より血の走り出づるによりていふ。はしる（走る）㊃參照』ぢけつ（痔血）に同じ。

はしりーちがふ 走違ふ【動四自】走りて行きちがふ。多くの者、方向を一定せずに、入りまじりて走る。はしりかふ。はせちがふ。盛衰記「大の長刀（ナギナタ）の鞘はづして立ち向ひたりけるを、景廉（カゲカド）、走り違ふ樣にして、弓手（ユンデ）の脇より、馬手（メテ）の脇へ差し貫きて」

はしりーちる 走散る【動四自】㊀走りて亂れ散る。逃げ散る。宇治「物おそろしかりければ、やがて、向きたる方ざまに、皆走り散る」㊁水・血など、ほとばしり散る。はねちる。字鏡「迸、波志利知留」

はしりーぢゑ 走智慧【名】先走（サキバシリ）する智慧。淺はかなる智慧。五人女「走智慧なる兄嫁なんどが、何として知るべし」

はしりーづかひ 走使【名】走りまはりて使をすること、又その人。はせつかひ。

はしりーつき 走附【名】徒歩にて附き隨ふ、身分賤しき者。盛衰記「恥をも知りたる者は、敵に組んで討たれぬ。走附の奴原は、海に入り、山に籠りけれども」

はしりーつく 走著く【動四自】走りて到著す。曾我會稽山「十郎殿、をりあひたまへと呼ばはれば、祐成續いて走りつき」

はしりーづみ 走摘【名】茶などを、早く摘み取ること、又その摘み取りたる物。尺素往來「朝日并深灘之走摘、不レ散二一葉一可レ被レ納レ之候」

はしりーで 走出【名】㊀山の、走り出でたるが如き狀勢。〔古語〕萬葉「靑幡（アヲハタ）の忍坂（オサカ）の山は走出（ハシリデ）のよろしき山の出立（イデタチ）のくはしき山ぞ」㊁家の門近き處。門の出口。わしりで。萬葉「携へてわが二人見し趨出（ハシリデ）の堤に立てる槻

(キツ)の木の」㊂はしり(走)㊅に同じ。㊃藪の外に走り出でて生じたる筍。

はしりどころ 走野老・莨宕・狼蓎・虎茄【名】〔植〕茄(ナス)科に屬する多年生の草。高さ一尺餘に達し、肥厚せる地に下莖を有す。葉は互生し、長楕圓形・全緣にして尖り、花は鐘狀・淡紫色、長き花梗を有し、春季、葉腋に一つづつ開く。我國各地の深山陰濕の地に自生し、有毒にして、食する時は狂氣して走行す。鎭痙・鎭痛等の藥用に供す。おにひるぐさ。おほみくさ。おほみるくさ。さはなすび。ななつぎきやら。やまくさ。やまなすび。やまめ。らうたう。をめきぐさ。

ばじりなんから バジリ軟膏【名】ばじり「に同じ。

はしりにしん 走鯡【名】漁期の初、即ち春の土用(四月中旬以前)に漁獲したる鯡。未だ産卵期に達せざるが故に、體肥え、脂肪多く、肉の品質も良好にして、從ひて價も貴し。

はしりぬく 走拔く【動四自】あくまで走る。體力の續く限り走る。

はしりぬく 走拔く【動下二自】走りて通り拔く。和合人「四人は、そこそこに、茶見藏(チャミザウ)等が後(ウシロ)を走り拔け」

はしりのしゅう 走衆【名】はしりしゅう(走衆)に同じ。

はしりのないし 走內侍【名】古、行幸の時、先發し、大袋を持ち行きて待ち受け奉りし役。禁秘抄「行幸走內侍同車之時聽ㇾ之、近代事也」

はしりのぶ 走延ぶ【動上二自】にげのぶ(逃延ぶ)に同じ。宇治「三町ばかり走り延びて、例のやうにのどかに歩みて」

はしりのま 走間【名】矢倉なき小船の武者走(ムシャバシリ)。

はしりび 走火【名】『はしる(走る)㊄を見よ』はねび(跳火)に同じ。枕「騷しきもの、はしり火、板屋の上にて、鳥の齋(トキ)の生飯(サバ)食ふ」

はしりびきやく 走飛脚【名】はやびきやく(早飛脚)に同じ。丹波與作「あれへ見える早提灯(ハヤヂャウチン)、走飛脚と覺えたり」

はしりびと 走人【名】『はしる(走る)㊁を見よ』逃亡したる人。かけおちもの。はしりもの。平假名盛衰記「愚僧が占は祕傳の投算、或は失物(ウセモノ)・走人・夢合・夢判(ユメハンジ)」

はしりぶね 走船・走舟【名】走る船。脚の疾き船。保憲女集「わたつみに風波高し月も日も走舟して冬の來ぬれば」

はしりほ 走穗【名】最も早く實のりたる穗。夫木「みしぶつき植ゑしわさ田の走穗にいでや程なきよとこそは見れ」鬼貫「わが宿の雪の走穗見にござれ」

はしりぼし 走星【名】〔天〕りうせい(流星)に同じ。

はしりほだし 走絆・縜【名】馬の前足を繫ぎとむる繩。字鏡「縜、絆二馬前足一、波志利保太之」

はしりまどふ 走惑ふ【動四自】あわてて走る。蜻蛉「天(ア)の下ゆすりて、西の宮へ、人走りまどふ」

はしりまはり 走廻【名】㊀走りまはること。はせまはり。㊁なみなみ。通常。授業編「はしりまはりの書などは、讀み置くも、よし」

はしりまはる 走廻る【動四自】走りて行きめぐる。かけまはる。はせまはる。はねまはる。はしりめぐる。宇治「庭火を、十まはりばかり走りまはりたるに」

はしりまふ 走舞ふ【動四自】入り亂れて走りまはる。義經記「門あけんとする者もあり、橋渡さんとする者もあり、走り舞ふ所に」膝栗毛「お前さん方に賣りたうて、賣りたうてならんさかひ、やうやう走り舞うて參じたはいな」

はしりみづ 走水【名】〔地〕相模國三浦郡浦賀町の大字。その岬端は觀音崎にして、その海面は、日本武尊東征の時、橘媛遭難の所と傳へらる。

はしりみづぶぎやう 走水奉行【名】德川幕府の職制の一。相模國三浦郡走水村に建てたる番所に在りて、海岸の非常警衞に任ぜし遠國奉行。寛永元年の設置に係り、與力六騎、同心三十人、これに屬せしが、後、與力五騎に減じ、元祿九年廢せられたり。

はしりめぐる 走廻る【動四自】はしりまはる(走廻る)に同じ。宇治「庭火を三めぐりばかり走りめぐらん」

はしりもと 走元【名】ながしもと(流元)を云ふ。〔京都・大阪の語〕艶狩劍本地「はしり本で味噌擂らせ、釜の下焚かせたり」

はしりもの 走者【名】はしりびと(走人)に同じ。重井筒「外の缺落・走者と違うて、明日尋ねうとはいはれぬ」

はしりもの 走物【名】㊀雅樂にて、その舞の行步の、疾走する樣をなすもの、即ち散手(サンジュ)・陵王・拔頭(バトウ)・還城樂(ゲンジャウラク)・納蘇利(ナソリ)など。㊁はしり(走)㊅に同じ。今昔「年の始の走物を、生を食(ハ)まざらんは、忌忌しきことなり」

はしりやぐら 走矢倉・走櫓【名】內を廣く作りて、奔走するに便なるやうにしたる櫓。鎌倉大草紙「所所、堀切・鹿垣を結ひ渡し、走矢倉をあげ」

はしりゆ 走湯【名】㊀『ほとばしりて湧き出づる湯の義』をんせん(溫泉)に同じ。〔古語〕堀次「ましらの濱の走湯浦さびて今はみゆきの影もうつらず」㊁伊豆國田方郡熱海(アタミ)町伊豆山(イヅサン)にある溫泉。鹽類泉に屬し、瀧湯とも稱す。海岸に向へる山脚の空洞中より湧出せるを、筧(カケヒ)にて各戶に引く。高所より導くために、飛泉をなして降る。

はしりゆく 走行く【動四自】走りてゆく。かけはしる。かけゆく。

はしりゆごんげん 走湯權現【名】いづさんじんじや(伊豆山神社)の舊稱。東海道名所記「伊豆の山は、走湯山ともいふ。ここにましますす御神をば、走湯權現と申し奉る」

はしりゆやま 走湯山【名】〔地〕いづさん(伊豆山)に同じ。東海道名所記「伊豆の山は、走湯山ともいふ。……此所に出湯(イデユ)あり、石走る瀧の如くなれば、走湯とは申すとかや」

はしりゆやまごんげん 走湯山權現【名】いづさんじんじや(伊豆山神社)の舊稱。

はしりよす 走寄す【動下二自】次條に同じ。太平記「後より追ひ懸けて走り寄せたりしかば」

はしりよる 走寄る【動四自】走りて近寄る。かけよる。枕「若き人人二十餘人ばかり、そなたに行きて走り寄り」

はしりわたり 走互【名】相撲(スマフ)の手の一。曾我「蹴逆手(ケサカデ)・蹴腕組(ケウデグミ)・前互・後互・走互……相撲の手ども、その數を盡し」

はしりわらは 走孺【名】徒步にて齋王(イツキノミコ)の御車などに隨ひ行く女のわらは。延喜式「齋王駕ㇾ車赴向、走孺十二人、車副二十四人」

はしりゐ 走井【名】㊀はしゐ(走井)を見よ。㊁『はしりゆ(走湯)㊀を見よ』ほとばしりて湧き出づる清水。近江國逢坂の關の附近なる「關の清水」をいへること多し。枕「井は堀兼(ホリカネ)の井、走井は、逢坂なるがをかしき」謠曲(蟬丸)「逢坂の關の清水に影見えて、……水も走井の影見れば」㊂催馬樂(サイバラ)の律の曲の一。催馬樂「走井のこがやかりをさめおけそれにこそ繭つくらせて絲ひきなさめ」

はしる 走る・奔る・趨る【動四自】『はしこしを見よ』㊀足早に行く。速力を早めて行く。駈く。わしる。㊁逃ぐ。のがる。逃亡す。出奔す。宇治「物おそろしければ、やがて、向きたる方に走り散る」冥途飛脚「大分、人の金をあやまり、擧句に、所を走って、この在所まで、詮議の最中」㊂敗れて逃ぐ。負けてのがる。敗走す。㊃その人の配下となる。㊄早く流る。水・血・火など、勢鋭く飛びはぬ。ほとばしる。伊勢「瀧落し、水走らせなどして」いほぬし「檜木(ヒノキ)を人の焚くが、はしりはためくを」㊅逸(ソ)る如くに、動きゆく。すべる。「刀、鞘より走る」㊆自由に動く。「筆を走らせて書く」㊇落ちつかず。わくわくとす。蜻蛉「胸、つぶつぶとはしるに」㊈先走(サキバシリ)す。はやる。傾城佛原「某が思案があるといふに、走りすぎた」㊉しぬ(死ぬ)に同じ。〔甲斐國の方言〕

走る湯【句】はしりゆ（走湯）に同じ。相模集「走る湯に行き通ひしに水ぐきは神の心はゆかざらめやは」金槐集「走る湯の神とはむべもいひけらし早きしるしのあればなりけり」

走れば蹪（ツマヅ）く【句】物事をあわてて行へば、仕損ず。〔諺語〕

はじるし-けんち 八印間知【名】堅石の間知石にて、面一尺五六寸、方長二尺三寸ほどなるもの。

は-じろ 端城【名】えだじろ（枝城）に同じ。大友興廢記「堺目の端城は、敵の城となり」

は-じろ 羽白【名】羽の色の白きもの。

ば-じろめ 馬白目【名】銅・鐵・砒素・アンチモンを含有する製煉物。白目の類にて、馬の齒に似たる形をなす。

はし-わたし 橋渡【名】『「橋を渡す」を見よ』㊀橋を架くること、又その人。㊁昔、行幸などの時、その道筋の河川に、浮橋を架せしこと。東鑑「可ㇾ有㆓兩社行幸㆒、橋渡行事所ㇾ奉ㇾ之也」㊂なかだちをすること、又その人。とりもち。媒介人。重帷子「橋が無ければ渡（ワタリ）が無い。臺子（ダイス）が緣の橋渡」㊃本人の來るまで、代りて、その事を扱ふこと。

橋渡の使【句】古、前條㊁をなしし役。增鏡 檢非違使（ケビヰシ）、これを勸めたり。「昔、八幡（ヤハタ）の行幸ありし時、橋渡の使なりし佐佐木の佐渡の判官といふ者」

はし-ゐ 走井【名】山川などの、水淸くして、飲料水として酌むべき處。**はしりゐ**（走井）參照。〔古語〕萬葉「この小川霧ぞ結べるたぎちゆくはし井の上に計擧（コトアゲ）せねど」同「落ちたぎつ走井の水の淸くあれば渡らふ吾は行きがてぬかも」

はし-ゐ 端居【名】家の端近く出で居ること。地下歌合「せき入るる庭の遣水袖はへて端居に夏をおくる宿かな」蕪村「端居して妻子を避くる暑さかな」

はし-ゐる 端居る【動下一自】端居をなす。鴨長明集「端ゐつつむすぶ雫のさざ波にうつるともなき夕月夜かな」

はじ-をどし 櫨緘・黄櫨緘【名】鎧の緘の一。櫨色の絲にて緘せるもの。**はじにほひ**（櫨匂）參照。

はし-をる 端折る【動四他】**はしよる**（端折る）に同じ。醒睡笑「白き帷子（カタビラ）をはしをりたる男」八笑人「草稿あれども、丁數限あれば、ぐっとはしをる」

はす 蓮【名】㊀〔植〕『**はちす**（蓮）の略』睡蓮（ヒツジグサ）科に屬する多年生の草。地下莖は、長くして肥大し、所所に節を有し、節間の内部には、多數の縱行せる束管狀の空隙ありて、この節より、葉・鱗狀葉・根等を生ず。葉は大なる圓形楯狀をなし、全緣にして、表面は深綠色、裏面はやや白色を呈し、その中央に長き葉柄を著け、或は水面高く、或は水面に葉身を浮ぶ、花は夏開き、大形にして、白色又は淡紅色を呈し、果實は椎實（シヒ）狀にして、大なる倒圓錐形の花托中に埋沒す。原產地は熱帶亞細亞。水田・池沼等に栽培し、地下莖及び種子は食用に供す。いけみぐさ。うきば。つまなしぐさ。つゆたへぐさ。つゆたまぐさ。つれなしぐさ。はちす。みたへぐさ。みづきぐさ。みづくさ。みづたへぐさ。㊁〔植〕**やまのいも**（山芋）を云ふ。〔女の語〕㊂**れんげ**（蓮華）㊁に同じ。

蓮の絲【句】**はすいと**（蓮絲）に同じ。謠曲（當麻）「これなる池は、蓮の絲をすすぎて淸めし、その故に、染殿の井とも申すとかや」油糟「蓮の絲で袈裟や織らうと思ふらん」

蓮の飯（イヒ）【句】**はすめし**（蓮飯）に同じ。本朝二十不孝「蓮合（ツレアヒ）の佛壇も飾らず、蓮の飯の祝ふべき始末も無く」

蓮の浮葉（ウキハ）【句】蓮の葉の開きて、水面に浮べるもの。蓮の水葉（ミツハ）。枕「蓮の浮葉のらうたげにて」

蓮の臺（ウテナ）【句】「蓮（ハチス）の臺」に同じ。釋迦如來誕生會「蓮の臺に、天人・菩薩に敬はれ」

蓮の莖【句】蓮の葉柄。〔茄・芀勒〕

蓮の莖根（クキネ）【句】**れんこん**（蓮根）に同じ。

蓮の錢葉（ゼニハ）【句】蓮の葉の、初生のもの。〔荷錢〕

蓮の立葉（タチハ）【句】蓮の葉の、後れて出づるもの。〔芰荷〕「蓮の卷葉（マキハ）」參照。堀太「雨降れば蓮の立葉にゐる玉の絶えずこぼるるわが涙かな」

蓮の根【句】**れんこん**（蓮根）に同じ。

蓮の根節（ネフシ）　蓮の根莖の節。

蓮の鼻【句】蓮の葉柄の、蓮身と接續する部位、卽ち葉身の裏面中央。

蓮の葉の飯（イヒ）【句】**はすめし**（蓮飯）に同じ。

蓮の葉の宴【句】蓮の葉を觀賞する宴會。續紀「始設㆓蓮葉宴㆒」

蓮の葉の飯（メシ）【句】**はすめし**（蓮飯）に同じ。織留「蓮の葉の飯、ぬくもりも冷（サ）めぬに」

蓮の蔤（ハヒ）【句】『蔤は這にて、泥土の中を這ひひろがる義なるべしといふ』**れんこん**（蓮根）に同じ。

蓮の飯（ヒ）【句】「蓮の飯（イヒ）」の略。

蓮の卷葉（マキハ）【句】蓮の立葉の、卷きて、まだ開展せぬもの。

蓮の實【句】蓮の果實。「蓮（ハチス）の實」參照。

蓮の水葉（ミツハ）【句】「蓮の浮葉（ウキハ）」に同じ。

蓮の實の杓子【句】蓮の實の胚。

蓮の實の飛び出たやう【句】若き者の元氣の盛んなる譬。〔諺語〕

蓮の飯（メシ）【句】**はすめし**（蓮飯）に同じ。二代男「旦那殿より、蓮の飯を賜はり」

はす 鰣・早子【名】〔動〕硬骨類に屬する魚。鯽に似て大く、體の長さ一尺二三寸に達す。背靑く、腹白く、尾赤く、又、頭は突出し、眼小く、口大くして、甚だ斜なり。近江國の琵琶湖・淀川及び若狹國等に產し、味美ならず。よく跳ねて、船をも越ゆることありといふ。はそ。

はす 斜【名】『蓮の卷葉の形に本づける語かといふ』ななめ。すぢかひ。はすかけ。はすかひ。なぞへ。「はすに切る」

斜の圖（ヅ）【句】〔建〕一面のみにては了解しがたき場合に、斜に描きて、正面と二側面との形を見せたる圖。

はす【名】**はすばんざ**の略。〔俚語〕

はす 馳す【動下二自】はしる。かけ行く。かく。

はす 馳す【動下二他】走るやうになす。はしらす。とばす。宇治「馬を馳せて鹿逐ふ」著聞「尿（シト）、散散にはせ散されにけり」

はす 破す【動佐變他】論破す。說破す。（立（リツ）すに對して）沙石集「埒の外達磨を破する人をこそ法（ノリ）知らずとはいふべかりけれ」

はす 派す【動佐變他】『「派」の字の音、正しくは「ハイ」』出張せしむ。つかはす。派遣す。「人を、各方面に派す」

はず 筈【名】㊀弓の兩端なる、弦輪（ツルワ）を掛くる部分。矢を射る時、上方に位するを末筈（ウラハズ）、下方に位するを本筈（モトハズ）といふ。ゆはず。〔弭・彇〕盛衰記「上下の筈に角（ツノ）入りたる重籐（シゲドウ）の弓」㊁**やはず**（矢筈）に同じ。㊂『「筈合ふ」の義』然あるべきこと。すぢ。すぢみち。わけ。道理。狂言（秀句大名）「この傘をくれう筈はないが、何と思うてくれた」㊃一錢の隱語。餓鬼。〔楊弓又は大弓にて、錢を賭物（カケモノ）にする時の語〕㊄船の蟬挾（セミバサミ）の上部。

筈合ふ【句】『弓の弦に、矢の筈の合ふ義』物事の調子・都合、よく合ふ。適合す。跋（ツバ）が合ふ。光廣公職人歌仙「巫女。弦音に問ふ口占（クチウラ）をまかせけり梓の弓の筈は合はねど」

筈に嵌（ハ）む【句】あてがふ。あてはむ。あてにす。浮世親仁形氣「筈にはめたる人百兩」

筈を合はす【句】筈の合ふやうにす。跋（ツバ）を合はす。犬子集「筈を合はする人のかしこさ（といふ句に）結（ツケ）したる身に藥をや呑ますらん」

筈を返す【句】射たる矢、當りて、はね返る。太平記「その矢、正成が臂のかかりに答へて、したたかに立ちぬと覺えけるが、素裸（スハダ）なる身に、少しも立たずして、筈を返して飛び翻る」

ばず（獨 Bass）【名】〔音〕べえすに同じ。

ぱず【名】㊀『英 Pass』及第すること。合格。㊁『英「Trespass の略」』無賃乘車劵・無賃入場劵・旅行免狀、又、轉じて、定期乘車劵・電車回數劵。㊂ばすぼおるの略。

はす‐いけ 蓮池【名】蓮を植ゑたる池。蓮池(レンチ)。新永代藏「生玉(イクタマ)の蓮池、花散るあとの水遊」

はすいけ 蓮池【名】〔地〕㊀肥前國神崎郡にある村。佐賀市の東一里半。鍋島氏支藩の舊藩地。蓮池城址・蓮池神社など有り。「はすのいけ」ともいふ。㊁明治の初年設置の縣の一。四年七月、肥前國舊蓮池藩の地に立てしもの。同年十一月、伊萬里(イマリ)縣に入る。みつま(三豬)㊁參照。

はすいけ‐じやう 蓮池城【名】肥前國佐賀郡蓮池村に在りし城。戰國時代、小田政光據りて、龍造寺氏に滅され、慶長中、鍋島直澄修築して居り、子孫世襲して、明治維新に及び、維新後、公園となし、蓮池神社を建てて、藩祖を祀る。

はす‐いと 蓮絲・藕絲【名】蓮の莖の纖維を集めて、絲につくりたるもの。極樂往生の緣を結ぶ等の俗説あり。蓮(ハス)の絲。蓮(ハチス)の絲。

蓮絲の袈裟(ケサ)【句】蓮絲にて織りたる袈裟。大和國當麻(タイマ)寺に在るもの名高く、中將姬の製作する處と傳ふ。

蓮絲の曼陀羅【句】たいまんだら(當麻曼陀羅)に同じ。

はす‐いも 蓮芋・白芋【名】〔植〕天南星(テンナンシヤウ)科に屬する多年生の草。葉形は、蓮のに似て小く、塊根は里芋のに似て、小く、葉柄は蘞味(エグミ)なく、多くの縱孔を具ふ。塊根は味佳なり。てうせんいも。くりいも。

は‐すう 端數【名】はんぱの數。はした。

ばす‐おり 馬巢織【名】經(タテ)に綿絲・麻絲又は毛等を、緯(ヌキ)に馬の尾毛を用ひて、平織又は綾織とせる織物。その彈力を利用して、多く洋服の襟部の心(シン)に用ふ。

はす‐かけ 斜掛【名】はす(斜)に同じ。

はす‐がた 夾形【名】はさがた(夾形)に同じ。

はす‐かづら 蓮葛【名】〔植〕はすのはかづら(蓮葉葛)に同じ。

はず‐がなもの 弭金物【名】古、弓の末弭(ウラハズ)に冠らせし金物。

はす‐かひ 斜交【名】はす(斜)に同じ。

はすかひ‐いとこ 斜交從兄弟【名】從兄弟同士の者の一方と、他の一方の者の子との關係。

はず‐かむり 筈冠・弭冠【名】絹・皮の類を、袋樣の形に縫ひ、弓弭(ユハズ)の傷はるるを防ぐために、これに冠らするもの。

はす‐がめ 蓮甕【名】蓮を植ゑおくに用ふる、扁く淺き甕。

ぱすかる‐の‐げんり パスカルの原理（英 Pascal's principle）【句】液體は、その一部に受けたる壓力を、增減なく各方に傳達するものなりといふ原理。佛蘭西人パスカルの創説に係り、この原理を應用せしものに、水壓機あり。

はず‐ぎぬ 筈絹・弭絹【名】つるさいて(弦裁出)に同じ。甲陽軍鑑「塗弓に、自然、白弦を掛くる事あるべし。その時は、筈ぎぬを、黑にて染むべし」

はず‐ぎは 筈際【名】矢筈のきは。矢筈のはし。盛衰記「十郎が馬の草別(クサワキ)を、筈際射込みたれば」

はす‐きり 斜切【名】はすに切ること。源氏冷泉節「胴切か、縱割か、斜斷か」

はすきり‐ばな 蓮切鼻【名】『蓮根の橫斷面に似たるよりいふ』低くして、孔の上方にあらはれたる鼻。日本振袖始「盥口に蓮切鼻」

はす‐ぐさ 蓮草【名】〔植〕かたばみ(酢漿草)を云ふ。〔相模國の方言〕

は‐ずくな 葉少【名】葉の散りて、少なくなりたること。夫木「葉ずくなに吹きからさるる浦松の潮かぜ寒みなほ立てるかな」

ばすけっと（英 Basket）【名】㊀『原語は、單に笊・籃(カゴ)などの意』遠足・旅行などに、當用の食品・小器具などを入れて、提げゆく籃。籐(トウ)又は木通(アケビ)の蔓などを編みて造り、多くは矩形にて、蓋と、提ぐるに便なる鉉(ツル)とあり。㊁競技用の具。金屬製の輪に吊したる、底の無き網。次條參照。

ばすけっと‐ぼおる 籠球（英 Basket-ball）【名】㊀競技の一。五人づつ二組に分れ、互に、ボオルを、味方に渡しながら、敵の同一の動作に妨害を加へつつ、競技場の後方なるバスケットの中に、ボオルを投げ入れ、その數の多少によりて、勝負を決す。㊁小學校の戶外遊戲の一。地上に立てたる二本の柱に、各、一箇の籃(カゴ)を取附け、總人員、二組に分れて、地上に散亂せる球を拾ひて、味方の籃に投げ入れ、入れ得たる數の多き方を勝とす。

はず‐ごみ 筈込【名】矢を、筈際(ハズギハ)まで深く射込むこと。天神記「筈込に射て吳れん」

はず‐さがり 筈下【名】矢を箙(エビラ)に盛りて負ふ時、その筈の低くなるやうにすること。(筈高に對して) 義經記「矢壺(コシ)の矢、筈さがりに負ひなし」

はず‐さし 筈刺【名】矢筈を刺すに用ふる小刀。はんざし。

はす‐だ 蓮田【名】蓮を植ゑ附けたる田。

はすだ 蓮田【名】〔地〕武藏國南埼玉(ミナミサイタマ)郡綾瀬(アヤセ)村の大字。鐵道東北本線の一驛。

ぱすた（羅 Pasta）【名】〔醫〕『原語は英 Paste と同義』粉末狀の藥品を、主として皮膚の局所に塗布するに便ならしむるため、ワセリン又は油・グリセリンなどのごとき液狀の藥品と捏合・混和して製したる、泥狀又は軟膏狀のもの。ぱすと。

はすだ‐いちごらう 蓮田市五郎【名】〔人〕はすだまさざね(蓮田正實)に同じ。

はず‐だか 筈高【名】矢を箙(エビラ)に盛りて負ふ時、その筈の高くあらはれて見ゆるやうにすること。(筈下(ハズサガリ)に對して) 太平記「たかうすべ尾の矢三十六指(サ)いたるを、筈高に負ひ成し」

はすだ‐まさざね 蓮田正實【名】〔人〕水戶の藩士。通稱は市五郎。勤王の志厚く、常に幕府の專橫を憤る。萬延元年三月三日、同志の士と、井伊直弼を櫻田門に要擊し、直ちに自首す。翌年、本多氏の邸にて刑せらる。

はず‐だまり 筈溜【名】弓弦の、矢筈を受くる處。さぐり。

はす‐ぢ 蓮痔【名】ぢろう(痔瘻)に同じ。

はす‐ちや 蓮茶【名】煮えたちたる濃き煎茶を、蓮の花の中につぎこみ、花びらを寄せ合はせて、紙撚(コヨリ)にて結び、倒に吊しおき、これを薄く煎じて、別に盛りたる茶の中に、少しづつ入れて、香氣をよくして飮むもの。**はすのみ**(蓮飮)參照。

はす‐っ‐かけ 斜掛【名】はすかけ(斜掛)の音便。

はす‐っ‐かひ 斜交【名】はすかひ(斜交)の音便。

ぱすてる（英 Pastel）【名】㊀著色せるチョオク。㊁次條の略。

ぱすてる‐ぐわ パステル畫【名】パステルにて、糙粗なる紙面、又は特別なる地質の畫布に描きたる西洋畫。畫法ほぼ木炭畫に同じ。著色の剝落し易き缺點あるは、材料の性質上免れ難き所なれども、長所は、色調の明るさ、色彩の鮮麗、一種軟き天鵞絨(ビロオド)樣の外觀を呈する等の點にありて、最も婦人・小兒の皮膚、花卉等を描くに適す。ぱすてる。

ぱすと（英 paste）【名】〔醫〕ぱすたに同じ。

はす‐なは【名】〔動〕ころびがき(轉牡蠣)を云ふ。〔和泉國の方言〕

はす‐ね 蓮根【名】㊀れんこん(蓮根)に同じ。㊁小兒に發する一種の瘡。ながれはすね(流蓮根)參照。諺「瘦子(ヤセゴ)に蓮根」

はすの‐いけ 蓮池【名】〔地〕はすいけ(蓮池)を見よ。

はすのいけ‐じやう 蓮池城【名】はすいけじやう(蓮池城)を見よ。

はすのは‐がさ 蓮葉笠【名】蓮の葉の形したる笠なるべしといふ。太平記「蓮葉笠をうち傾け」一代女「蓮葉笠を著たるやうなる小兒等の面影」

はすのは‐かづら 蓮葉葛・千金藤【名】〔植〕防已(ツヅラ)科に屬する多年生の草。莖蔓によりて、他物に纏繞す。葉は全緣にして、楯狀卵形又はやや三角形に近く、夏

日、黄色の花、葉柄より生じ、繖形花序をなして開く。各地の山野に自生す。いぬつづら。べらづる。やきもちかづら。

はすのは-がひ 蓮葉貝【名】〔動〕たこのまくら（蛸枕）に同じ。

はすのは-づる 蓮葉蔓・千金藤【名】〔植〕はすのはかづら（蓮葉葛）に同じ。

はすのはな-がさ 蓮花笠【名】『はながさ（花笠）㊀㊂を見よ』蓮の花を頭に戴くを、笠を著たるに擬へていふ語か、或は蓮の花又はその形の物を取附けて、飾としたる笠なるべし。雙生隅田川「鯉・鮒が、蓮の花笠、しやんと著て、踊る振（リ）がしほらし」

はすのは-めし 蓮葉飯【名】はすめし（蓮飯）に同じ。

はすのは-もの 蓮葉物【名】品質劣りてある物。はすはをんな（蓮葉女）㊀參照。一代女「物の宜しからぬを、蓮の葉ものといふ意なり」

はす-のみ 蓮飲・蓮呑【名】蓮の葉に酒を注ぎて飲むこと。はすちや（蓮茶）參照。

はす-は 蓮葉【名】㊀蓮の葉。㊁はすはをんな（蓮葉女）の略。一代男「問屋方に、はすはと申して、みめ大かたなるを、東國・西國の客のねどころさすため抱へて」新永代藏「はすはに風俗を拵へ、髪は茶屋女をまなびて」㊂女の身持惡しく、貞操なきこと、又その女。曾根崎心中「草のはすはな世に交り、三十三に御身を變へ、色で導き、情で教へ」梅暦「蓮花魁（オイラン）に、此糸（コイト）と呼ぶお職あり。……、蓮葉にあらぬ温順（シトヤカ）さは」

はすは-あきなひ 蓮葉商【名】時によりて、價に甚しき高低あるあきなひ。際物（キハモノ）の商。

はすは-むすめ 蓮葉娘【名】はすはなる娘。うはきむすめ。しりがるむすめ。

はすばんど （英Husband）【名】をっと。良人。はす。

はすは-もの 蓮葉者【名】次條㊁に同じ。

はすは-をんな 蓮葉女【名】㊀旅人宿の下女を云ふ。〔京都・大阪邊の語〕一代女「難波の浦は、日本第一の大港にして、諸國の商人、爰に集りぬ。……客馳走のために、蓮葉女といふものを拵へ置きぬ。これは、飯炊女の見よげなるが、その身持隱なく、面の皮厚くして、人中を恐れず、尻据ゑてのちよこちよこあるき、びらしやらするが故に、この名を附けぬ。物の宜しからぬを蓮の葉ものといふ意なり」五人女「八橋（ヤツハシ）の長といへるはすは女を、女房にして」㊁はすはなる女。身持惡しく、貞操なき女。はすは。はすはもの。はすのはもの。

ばす-ぼおる （英Passed-ball）【名】野球にて、投手の投げたるを、捕手の逸したる球。ばす。

はす-ぼくたう 蓮木刀【名】形のみにて、實際の用はなさぬことの譬。

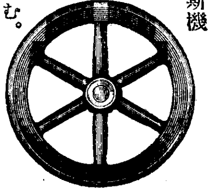
はず-まき 筈卷【名】㊀弓の筈に卷きたる籐。〔弭卷〕㊁矢の筈の下を、絲にて卷き固むること。ねたまき（ねた卷）參照。

はずみ 機【名】㊀はずむこと。はねかへること。㊁勢に乘ずること。調子づくこと。好機會。八笑人「おれが後（ウシロ）から打込むを、安波（アハ）公が、左の刀を逆手（サカテ）に、うしろで受け止める、だんだんはずみになりたる所へ」㊂馬の、とめどなく走ること。

はずみを打つ【句】はずむ㊀に同じ。蘆屋道滿大內鑑「織りかけし布機の蹉踏（マネキ）・掛板・卷竹よ、縢（チキリ）・梭（ヒ）・箴（ヲサ）よ、籰（ワク）なんど、はずみを打って投げ飛ばし」

はずみを喰ふ【句】他の勢に驅らる。餘勢を受く。

はずみ-ぐるま 機車【名】〔理〕『英Fly-wheel』蒸氣機關・瓦斯機關等の廻轉軸に裝置する、一種の車。質量大にして、その慣性を利用して、廻轉を續けしめ、兼ねて廻轉の速度を調整せしむ。


（まるぐみずは）

はずむ 【動四自】㊀反動力によりて、元に歸る。はねかへる。㊁勢に乘ず。機會に乘ず。調子づく。「話がはずむ」㊂せはしくなる。あらくなる。盛衰記「馬の足の立たん程は、手綱をすくへ。馬の足はずまば、手綱をくれて游がせよ」㊃機を捉ふ。機に乘ず。色道大鑑「はずむ。蹴鞠より出でたる言葉なり。言語・座配にあらず、體利口のきて、氣味のよき貌なり。すべて、機に乘ずる所に用ひる」

はずむ 【動四他】奮發して買ふ。おごる。一代男「投節唄ふ女に、紫檀の接棹（ツギザヲ）をはずみ」壽の門松「この千兩は、初より身請（ミウケ）にあてた。……。三百兩は、亭主にはずむ」浮世風呂「わっちが負けたら、鱣（ウナギ）を、二朱はずまう」

はす-めし 蓮飯【名】蓮の若葉を纖（セン）に打ち、鹽にて揉みて、固く絞り、飯の火を引く前に振り込みて蒸せしめ、又は若葉を細かく刻み、二重漉にかけて、その汁のみを入れて炊ぎたる飯、又、蓮の葉に糯米（モチゴメ）を包みて蒸し、中元に佛前に供し、又は、親戚に贈りなどするもの。蓮の香氣うつりて、風味佳し。

はず-もと 筈本【名】矢の筈の根もと。太平記「篦（ノ）の太さは、……、長船打（ヲサフネウチ）の鏃の五分鑿（ゴブノミ）ほどなるを、筈本まで、中子（ナカゴ）を打徹（ウチトホシ）にしてねぢすげ」

はず-やり 弭槍【名】弓の末弭（ウラハズ）に、小さき袋穗の槍を冠らしめ、弦切れ、又は、弓を引く暇なき程に、敵の接近せし場合に、防禦の用に供せしもの。足利時代の末より行はれたり。

は-ずり 葉摩【名】葉と他物と、又は葉と葉と摩れあふこと。出觀集「ゆく鹿の荻の葉ずりの音聞けばあはれしづをの矢頃なるらん」

ば-ずれる 場摺れる・塲摺れる【動下一自】場數を多く踏みて、人ずる。梅暦「酒が言はする惡口も、金と場摺れた人の辯」

は-すゐせん 波垂線【名】〔理〕『英Wave normal』波面㊁に垂直なる線。

ばすゐ-ぼく 馬醉木【名】〔植〕あせび（馬醉木）に同じ。

は-ずゑ 葉末【名】㊀葉のすゑ。葉のさき。新古今「あけくれは昔をのみぞしのぶ草葉末の露に袖ぬらしつつ」㊁まつえふ（末葉）に同じ。傾城酒呑童子「桓武天皇の御葉末、雲井を出でて遠からず」

ば-ずゑ 場末・塲末【名】都の端の、田舍に近きあたり。まちはづれ。後者昔物語「場末までも、家を列ね」

はず-を 筈緒【名】帆柱の筈に附けて、船首へ引く綱。

はせ 玉莖【名】いんきやう（陰莖）に同じ。〔古語〕和名「房內經云、玉莖、男陰名也。楊氏漢語抄云、屎、破前、一云、麻良」

はせ 長谷【名】㊀〔地〕伊勢國多氣（タケ）郡佐奈村の大字。大和國の長谷（ハセ）寺に擬したる近長谷（キンチヤウコク）寺あり。㊁はせでら（長谷寺）の略。㊂〔地〕相模國鎌倉町の一部。最も人家稠密の地域にて、新長谷寺あり。

長谷の觀音【句】㊀はせでら（長谷寺）を見よ。㊁しんはせでら（新長谷寺）㊁を見よ。

はせ 初瀨【名】〔地〕大和國磯城（シキ）郡の町。泊瀨（ハセ）山間の一小市。奈良より六里三〇町。初瀨（ハセ）川に臨む。長谷寺（ハセデラ）あり。古稱、初瀨（ハツセ）。

は-せ 八仙【名】くろはせ（崑崙八仙）の略。

はぜ 糅【名】㊀糯米（モチゴメ）の籾殼（モミガラ）を、やや濕して炒り、雪花（キラズ）の如くに白く爆（ハ）ぜしめたるもの。乾菓子（ヒグワシ）の原料とし、又は養魚の餌となし、古は正月用ふる春盤の中に盛り、又、東京にては、雛祭に供ふ。〔葩煎・葉是〕㊁〔植〕さぎごけ（鷺苔）に同じ。

はぜ 破精【名】麴を製造するに、床揉（トコモミ）操作を行ひ、蒸米（ムシマイ）の上に、種麴を撒布し、適當の溫度に保つ時、蒸米に、白色の斑點の生ずるに至りたるもの。

は-ぜ 羽瀨【名】簗（ヤナ）の一種。肥前・筑前等にて、遠干潟の中央適當の場處に、口を陸方に向け、竹簀又は葭簀等を半圓狀に建てまはして、滿潮に灣內深く入り込みたる魚の、干潮に至りて、沖合に去らんとするを遮りて捕獲す。

はぜ 櫨・黃櫨【名】〔植〕はぜのき（櫨樹）に同じ。

はぜ 沙魚・鰕虎魚【名】〔動〕硬骨類に屬する魚。體形牛尾魚(コチ)に似て小く、大なるも五六寸を出でず。頭やや大く、兩眼は相接近す。口廣くして、腮大なり。脊鰭は二基に分れ、後脊鰭と臀鰭とは、長くして、殆んど相對生し、腹鰭は小く、互に癒著して吸盤をなし、岩石等に吸ひつくに適す。背部は褐色を呈して、淡黑色の斑紋を有し、以て砂に擬するを得。淺海に產し、河にも溯る。肉味美なり。まはぜ。

ばせ 支【接尾】人の身體の一部の名、又は心といふ語などに添へて、その狀態を示すに用ふる語。「腰ばせ」「額ばせ」「心ばせ」

はせ-あはす 馳合はす【動下二自】はせあふ(馳合ふ)に同じ。太平記「敵の近づく處へ馳せあはせ、馳せあはせ、八方の敵を拂ひて」

はぜ-あはせ 馳合【名】馳せあはすること。盛衰記「礪並(トナミ)山を越えて、松永邊・柳原・小矢部(ヤベ)の河原へ打出でなば、馳合の軍なるべし」

はせ-あふ 馳合ふ【動四自】かけあふ(駈合ふ)に同じ。保元「糟毛なる馬に乘り、惡七別當と名乘って驅け出でたり。海老名(エビナ)源八、馳合ひて戰ひけるが」

は-せい 波聲【名】なみのおと。濤聲。

は-せい 霸政・覇政【名】霸道を以て、天下を治むること。霸者の政治。

は-せい 派生【名】『派の字の音、正しくはハイ』同根より分岐すること、又その物。

ば-せい 罵聲【名】ののしる聲。惡口する聲。

ば-せい 馬聲【名】馬の嘶く聲。

ば-せい 馬政【名】馬匹の飼養・支給・補充・拂下・育成・調教・衞生・改良・蕃殖等に關する行政。

ばせい-きよく 馬政局【名】陸軍大臣の管理の下に、馬政長官・馬政官・書記官・種馬牧場長・種馬育成所長・種馬所長・技師・書記・技手の職員ありて、馬匹の改良・蕃殖その他馬政に關する一切の事務を掌る行政官廳。明治三十九年の設置に係る。

ばせい-くわん 馬政官【名】馬政局の職員の一。三年以上馬匹に關する職務にたづさはりたる陸軍現役の佐尉官、又は馬政局の技師を以て充て、馬政に關する事務を掌る。

ばせい-くわんく 馬政管區【名】馬匹に關する監督の便宜上より定めたる管區。

ばせい-し 馬政司【名】明治初期の軍務官の一司。知司事・判司事・權判司事の職員ありて、馬政に關する一切の事務を掌りしもの。元年閏四月設置、翌年七月軍務官と共に廢せられたり。

ばせい-じちやう 馬政次長【名】馬政局の舊職員の一。馬政長官を佐けて、局務を整理せし勅任官又は奏任官。大正二年廢止せられたり。

はせい-じゆえう 派生需要【名】〔經〕『英Derivod demand. 派の字の音、正しくはハイ』或貨物の生產に關して生ずる間接的需要。

ばせい-ちやうくわん 馬政長官【名】馬政局の長官。現役の陸軍中將又は少將を以て充て、陸軍大臣の指揮・監督の下に、局務を總理し、所屬の土地・建物の經營を管掌する勅任官。

はせい-りつ 派生律【名】『英Derivedlaw 派の字の音、正しくはハイ』一般的法則の、特殊の場合に應用せらるるもの。

はせ-いる 馳入る【動四自】かけいる(駈入る)㊀に同じ。盛衰記「主從二騎駈け出でつつ、……城戶口(キドグチ)へぞ馳せ入りたる」

はせ-いる 馳入る【動下二他】馳せ入らしむ。馬を走らせて入らしむ。盛衰記「深田に馬を馳せ入れて、打てども、打てども、行かざりけり」

ばせい-ゐゐん 馬政委員【名】馬政委員會を組織する委員。馬政長官・主馬頭及び陸軍大臣の奏請によりて、內閣の命じたる陸軍將官又は上長官、農商務省の高等官を以て充つ。

ばぜいゐゐん-くわい 馬政委員會【名】陸軍大臣の監督の下に、委員長・委員を以て組織し、書記これに屬して、馬匹改良に關する事項及びその施行方法を審議する委員會。

ばせいゐゐん-ちやう 馬政委員長【名】馬政委員會の委員長。陸軍大臣の奏請により、內閣にて命ず。

ば-せう 芭蕉【名】㊀〔植〕芭蕉科に屬する多年生の草。高さ一丈に達し、葉は大にして、長楕圓形をなし、全緣にして、表面は深綠色、中肋の兩側に、平行脈を具へ、葉柄の內側に縱溝あり。花莖は葉間より抽出し、花は不整齊にして、黃色を帶び、雌雄同株。大形の苞に包擁せられ、三年每に、夏季に開く。果實は肉質にして、長く、味甘し。觀賞用に供す。せんじせん。にはみぐさ。ばせを。㊁紋所の一。芭蕉㊀に象(カタド)れるもの。抱(ダキ)芭蕉・三枚芭蕉・芭蕉巴・一折(ヒトツヲリ)芭蕉などの種類あり。㊂謠曲の一。芭蕉の精現れて、僧の弔を受くる事を作れるもの。㊃〔植〕ばなな(甘蕉)を云ふ。〔大阪の語〕

芭蕉の布【句】ばせうぬの(芭蕉布)に同じ。薩摩歌「上方(カミガタ)で、芭蕉の布を見る時は、形見と思うて下さんせ」

芭蕉・泡沫【句】〔佛〕『維摩經に出づ』人の身は、久しく存するを得ざること、水の泡の如く、中に堅き所無きは、芭蕉の如くなること。謠曲(葵上)「人間の不定(フヂヤウ)、芭蕉・泡沫の世の習」

ばせう 芭蕉【名】〔人〕ばせを(芭蕉)を見よ。

ばせう-あん 芭蕉庵【名】ばせをあん(芭蕉庵)を見よ。

ばせう-いか 芭蕉烏賊【名】〔動〕あふりいか(障泥烏賊)に同じ。

ばせう-おり 芭蕉織【名】ばせうふ(芭蕉布)に同じ。

ばせう-かぢき 芭蕉舵木・芭蕉旗魚【名】〔動〕硬骨類に屬する魚。體は扁くして、細長く、長さ一丈に達し、上顎は下顎より突き出でて、劍狀をなす。鱗は微細にして、腹鰭は一本の棒狀をなし、脊鰭は二基ありて、前部のは甚だ廣闊なり。背部は碧藍、腹部は銀白を呈し、全體に淡青色の斑點を有す。我國、九州に多く、遠海に棲む。はたうを。まさむね。

ばせう-き 芭蕉忌【名】ばせをき(芭蕉忌)を見よ。

ばせう-くかい 芭蕉句解【名】〔書〕ばせをくかい(芭蕉句解)を見よ。

ばせう-くせん 芭蕉句選【名】〔書〕ばせをくせん(芭蕉句選)を見よ。

ばせうくせん-ねんかう 芭蕉句選年考【名】〔書〕ばせをくせんねんかう(芭蕉句選年考)を見よ。

ばせう-くわ 芭蕉科【名】〔植〕顯花植物・被子類・單子葉門の一科。すべて、舊世界熱帶の產に屬す。

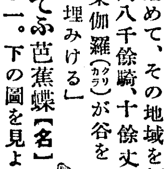
ばせう-せんべい 芭蕉煎餅【名】砂糖餅の薄きものを、火に炙りながら押しのべて、芭蕉の葉の形に擬したるもの。

ばせう-づな 芭蕉綱【名】芭蕉の纖維にて作れる大綱。海船の碇綱とす。

はせ-うち 馳擊【名】馬を走らせつつ、劍にて擊つこと。はせひき(馳引)參照。

はせ-うづむ 馳埋む【動四他】大勢、馬を馳せ進めて、その地域を埋む。盛衰記「平家一萬八千餘騎、十餘丈の俱梨伽羅(クリカラ)が谷をぞ馳せ埋みける」

ばせう-てふ 芭蕉蝶【名】紋所の一。下の圖を見よ。



(ばせうてふ)

ばせう-どもゑ 芭蕉巴【名】紋所の一。芭蕉の葉を、巴の如き形に描きたるもの。その一枚を、一巴(ヒトツドモヱ)と同樣の形に描けるを、芭蕉一巴といひ、又、芭蕉三巴(ミツドモヱ)芭蕉四巴(ヨツドモヱ)もあり。

ばせう-な 芭蕉菜【名】〔植〕おほがらし(大芥)に同じ。

ばせう-ぬの 芭蕉布【名】ばせうふ(芭蕉布)に同じ。薩摩歌「私や一人寢の芭蕉布」

ばせう-の-まる 芭蕉丸【名】紋所の一。芭蕉の葉を曲げて、圓形をなすやうに描きたるもの。

ばせう-ば 芭蕉葉【名】芭蕉の葉。猿蓑(乙州)「芭蕉葉やうち返しゆく月の影」

芭蕉葉の旋毛(ツジ)【句】けんくわ([illegible]花)に同じ。

芭蕉葉の露【句】人生のはかなきことの譬。花襌會稽褐布楽「人の命は、芭蕉の露とは知れど」

芭蕉葉の夢【句】『列子の周穆王篇に「鄭人有下薪二於野一者上遇二駭鹿一御而擊レ之、斃レ之。恐二人見一レ之也、遽而藏二諸隍中一、覆レ之以レ蕉、不レ勝二其喜一。俄而遺二所レ藏之處一、遂以爲レ夢焉、順レ塗而詠二其事一。傍人有二聞者一、用二其言一而取レ之。既歸告二其室人一曰、向薪者、夢得レ鹿、而不レ知二其處一。吾今得レ之。彼直眞夢者矣。室人曰、若二將是夢一見二薪者之得一レ鹿邪、詎有二薪者一邪。今眞得レ鹿。是若之夢眞邪。夫曰、吾據得レ鹿、何用レ知二彼夢我夢一邪」とあり』人生得失の、夢の如くはかなきものなる譬。蕉鹿夢。謡曲（井筒）「ほのぼのと明くれば、古寺の松風や、芭蕉葉の夢も破れて」

ばせう-ひとつどもゑ 芭蕉一巴【名】ばせうどもゑ（芭蕉巴）を見よ。

ばせう-ふ 芭蕉布【名】絲芭蕉の葉柄の纖維にて織りたる布。褐色を呈し、生平（キビラ）の如し。多くは無地なれども、縞・絣にも織り、單物地に用ふ。絲太く、地合粗きものは、襖張に良し。沖繩縣の特產。せうふ。ばせうぬの。蕉紗。

ばせう-みつどもゑ 芭蕉三巴【名】ばせうどもゑ（芭蕉巴）を見よ。

ばせうものがたり-はなやじっき 芭蕉談花屋實記【名】〔書〕ばせをものがたりはなやじっき（芭蕉談花屋實記）を見よ。

ばせう-よつどもゑ 芭蕉四巴【名】ばせうどもゑ（芭蕉巴）を見よ。

はぜ-うるし 櫨漆・黃櫨漆【名】〔植〕はぜの「き（櫨樹）」に同じ。

ばせう-ゑことばでん 芭蕉繪詞傳【名】〔書〕ばせをゑことばでん（芭蕉繪詞傳）を見よ。

ばせうをう-くかい-たいせい 芭蕉翁句解大成【名】〔書〕ばせををうくかいたいせい（芭蕉翁句解大成）を見よ。

ばせうをう-しちぶしふ 芭蕉翁七部集【名】〔書〕ばせををうしちぶしう（芭蕉翁七部集）を見よ。

ばせうをう-しゆうえん-の-き 芭蕉翁終焉記【名】〔書〕ばせををうしゆうえんのき（芭蕉翁終焉記）を見よ。

ばせうをう-ほごぶみ 芭蕉翁反古文【名】〔書〕ばせをものがたりはなやじっき（芭蕉談花屋實記）を見よ。

はせ-かいだう 初瀨海道【名】〔地〕伊賀國及び大和國宇陀郡より初瀨町を經て、大和平野方面に通ずる海道。日本永代藏「大なる灯籠を作らせ、初瀨海道の闇（ヤミ）を照し」

はせ-かさなる 馳重る【動四自】重りあふ程に馳せ集る。盛衰記「馬には人、人には馬、彌（イヤ）が上に馳せ重って」

はせがは-かずいへ 長谷川一家【名】〔人〕砲術家。土井利勝の臣。通稱は八郎兵衞。長谷川流砲術の祖。寛永頃の人。

はせがは-せったん 長谷川雪旦【名】〔人〕畫家。名は宗秀。一陽庵、又、巖岳齋と號す。江戶の人。等伯の後。法橋に敍せらる。雪舟風の畫を善くし、殊に名所・舊蹟の繪を巧みにす。嘗て江戶名所圖會・東都歲事記を畫き、その名、海內に鳴る。天保十四年歿す。年六十六（一說に六十八）。

はせがは-せんし 長谷川千四【名】〔人〕大阪の淨瑠璃作者。もと大和國長谷寺の僧。還俗して、竹田出雲の門に入り、竹本座の作者となる。歿年詳かならず。壇浦兜軍記・鬼一法眼三略卷などの作名あり。

はせがは-そうき 長谷川宗喜【名】〔人〕劍術家。長谷川流劍法の祖。富田流劍法を學び、遂に一家を成す。左近將監と名を齊しくし、技を以て豐臣秀次に謁せり。文祿頃の人。

はせがは-たつのすけ 長谷川辰之助【名】〔人〕はせがはふたばてい（長谷川二葉亭）に同じ。

はせがは-とうはく 長谷川等伯【名】〔人〕畫家。長谷川流の畫祖。能登國七尾の人。初、狩野派の畫を學び、後、永德・山樂等の右に出で難きを思ひ、雲谷派の畫に轉ず。肖像畫に長じ、畫く所、法に泥まずして、風韻あり。遂に一家を成す。文祿頃の人。

はせがは-ふたばてい 長谷川二葉亭【名】〔人〕『少時、小說を愛讀せしため、「くたばってしめへ（「死んでしまへ」の義）」と、父より叱責せられし語を取りて、二葉亭四迷と號せりといふ』小說家。名は辰之助。二葉亭四迷（シメイ）とも號す。舊尾張藩士吉數の子。露語に通ず。東京外國語學校敎授に任ぜられ、大阪朝日新聞記者となり、露國に赴き、明治四十二年、歸朝の船中にて歿す。年四十八。

はせがは-よしみち 長谷川好道【名】〔人〕元帥。陸軍大將。舊岩國藩士。明治初年大阪兵學校に入り、五年少佐に進み、西南の役及び日淸・日露兩戰役の功によりて男爵を授けらる。後、大將に進み、伯爵に進み、參謀總長・朝鮮總督等の要職を拜し、元帥府に列せらる。大正十三年病革るや從一位大勳位に敍せられて薨ず。年七十六。

はせがは-りう 長谷川流【名】㊀劍術の一派。長谷川宗喜を祖とするもの。㊁砲術の一派。長谷川八郎兵衞一家（カズイヘ）を祖とするもの。㊂繪畫の一派。長谷川等伯の畫風を傳ふるもの。

はせ-かふ 挾ふ【動四自】はさまる（挾る）に同じ。猿蓑（荷兮）「鱸魚の齒にはせかふや秋の暮」

はせ-かへる 馳歸る【動四自】馳せて歸る。走り戾る。宇拾「人人走せ歸りて」

はぜ-かへる 撥反る【動四自】後の方へ反（ソ）る。そりかへる。

ば-せき 場席・塲席【名】㊀居るべき所。場所。坐席。㊁ばあひ。をり。しほ。

ば-せき 馬跡【名】馬の足あと。

ば-せき 馬籍【名】市町村內にて飼養する馬一頭毎に、その名稱・性・種類・毛色・特徵・產地・生年月日等を記載せるもの。

ばせき-はふ 馬籍法【名】馬籍に關する法律。大正十年の公布。

はぜ-くさ 粿草【名】〔植〕㊀さぎごけ（鷺苔）に同じ。㊁はしくさ（星草）に同じ。

はせ-くだる 馳下る【動四自】㊀高地より低地に向けて馳す。（馳上（ハセボ）るに對して）㊁馳せて、都より、地方へ赴く。（馳上（ハセボ）るに對して）

はぜ-くち 爆口【名】ざくろぐち（柘榴口）㊁に同じ。

はせ-くははる 馳加はる【動四自】馳せ集りて、一緒になる。盛衰記「判官は、無勢（ブセイ）におはしつるぞ、急げ、急げとて、追繼（オツツギ）・追繼に馳せ加はる」

はせくら-つねなが 支倉常長【名】〔人〕伊達政宗の臣。幼名與市、通稱六右衞門。慶長十八年、政宗の命を奉じ、兼ねて德川家康の日西貿易の使命を果さんがために、西班牙に航して、國王に謁し、羅馬に入りて、法王ポオル第五世に謁し、善く國情を視察し、滯留殆ど八年にして、元和六年歸朝し、同八年歿す。年五十二。

（がなねつらくせは）

はせくら-ろくゑもん 支倉六右衞門【名】〔人〕前條に同じ。

はせ-こし 馳越【名】『英 Overflow dam』河岸に沿ひ、又は分派流の入口を橫切りて作りたる低き堤防、又は堰堤。その高さは、浸水面以下に保たしめ、平水は遮りて、通過せしめず、洪水に際し、これを越えて流過せしめて、漲溢の害を除くもの。

はぜ-こひ はぜ鯉【名】〔動〕さんせううを（山椒魚）㊀に同じ。

はせ-こむ 馳込む【動四他】馬を馳せて入り込ましむ。盛衰記「我先にと馳せ込みける程に」太平記「谷底に、馬を馳せ込みて」

はせ-こゆ 馳越ゆ【動下二自】馬を馳せて通り過ぐ。盛衰記「備前・備中・備後・安藝・周防を馳せ越えて」

はせ-さんず 馳參ず【動佐變自】はせまゐる（馳參る）に同じ。謡曲（土蜘蛛）「御聲の高く聞え候程に、馳せ參じて候」

はせ-じに 馳死【名】馬を戰場に馳せ進めて死ぬること。盛衰記「死は何れも同じ事、さらば、出して、馳死せよ」

はぜ-だま 爆彈【名】ばくれつだん(爆裂彈)に同じ。

はせ-ちがふ 馳違ふ【動四自】はしりちがふ(走違ふ)に同じ。平家「馬・車の馳せちがふ音、天も響き、大地も搖ぐ程なり」曾我「北條四郎・岡部五郎・橘川小次郎、弓手(ユンデ)・馬手(メテ)より出で來り、中を隔てて馳せちがへば」

はせ-ちらす 馳散す【動四他】一馬を馳せ進めて、敵を蹴散らす。二散散に走らす。宇治「馬に乘りて、馳せ散らして、殿に參りて」三迸せ散らす。著聞「尿(トシ)、散散にはせ散らされにけり」

はせ-ちる 馳散る【動四自】人人、四方・八方に馳す。太平記「追手どもとおぼしき者ども、百四五十騎、馳せ散って」

はせつ【名】〔植〕くまつづら(馬鞭草)に同じ。

はせ-づかひ 馳使【名】はしりづかひ(走使)に同じ。

はせつか-べ 杖部・丈部【名】『杖と書くは、走るに杖を用ひしためかといふ。丈は杖の字の略』古、驅使(ハセツカヒ)に從事せし部民。

はせ-つく 馳著く【動四自】馳せて、早く到著す。盛衰記「寅の終に、一の城戸口(キドグチ)へ馳せ著きたり」

はせ-つく 馳著く【動下二他】馳せて、早く到著するやうにす。義經記「ただ風に任せよとて、御舟をば、佐渡の島へ馳せつけて」

はぜ-つり 沙魚釣【名】沙魚を釣ること。其角「沙魚釣や山村水郭酒旗の風」

はぜつり-ぶね 沙魚釣船【名】沙魚釣の目的にて漕ぎ出したる船。織留「秋の頃、三軒屋川口へ沙魚釣舟に出でし人、酒に亂れて後、釣りたる沙魚を丸燒にして」

はせ-でら 長谷寺【名】一大和國磯城(キシ)郡初瀬(ハセ)町にある寺。本尊は楠木の十一面觀音。豐山神樂院と號す。新義眞言宗豐山(ブザン)派の本山。西國巡禮第八番の札所。俗に長谷の觀音といひ、構造、京都の清水寺に似、境内廣く、その櫻花と牡丹とは、關西第一の美と稱せらる。二しんはせでら(新長谷寺)の略。三東京市麻布區笄(カウガイ)町にある曹洞宗の寺。普陀山と號す。本尊は十一面觀世音。「ちやうこくじ」ともいふ。下野國大中寺の末寺。駒込の吉祥寺、三田の功運寺と共に、江戸の檀林と稱せらる。四「丹生(ニ)の長谷寺」を見よ。

はせでら-えんぎ 長谷寺緣起【名】長谷寺の由緒を書きたるもの。

はせでらえんぎ-ゑまき 長谷寺緣起繪卷【名】一大和國初瀬(ハセ)町の長谷寺の緣起を描きたるもの。現に長谷寺に存するものの六種、なほ、その外にも數多く存す。二相模國鎌倉の長谷寺の緣起を描きたるもの。もと三卷なりしが、今は上・中の二卷のみ傳存す。書・畫共に、筆者詳かならず。鎌倉長谷寺緣起畫卷の名を以て、世に知らる。

ばせどおし-びやう バセドオ氏病(羅 morbus Basedowii)【名】〔醫〕甲狀腺腫脹して、心悸亢進・眼球突出及び震顫の徵候を伴ふ病。女子に多し。

はせ-ならぶ 馳並ぶ【動下二他】馬を馳せ進めて、相手の馬と並行するやうにす。平家「寄れ、組まう、手塚とて、馳せ並ぶる所に、手塚の郎等、主を討たせじと」

はぜ-の-き 櫨樹・黃櫨樹【名】〔植〕漆樹(ウルシ)科に屬する落葉喬木。高さ三丈に達し、葉は奇數羽狀複葉にして互生し、各小葉は長卵形披針狀をなし、先端尖り、全緣にして無柄。秋季の紅葉美し。花は單性にして雌雄異株、小形・淡黃綠色、五六月頃、總狀花序をなして開く。果實は、漆のよりやや大く、扁平にして堅し。果實の中果皮より蠟を採り、材は質やや堅硬・緻密にして、器具・函・弓などの材料とす。さつまはぜ。はじ。はぜ。はぜうるし。はにし。やまうるし。らふのき。りうきうはぜ。

(はぜのき)

はせ-のぼる 馳上る【動四自】馳せて、都方へ赴く。(馳下(ハセクダ)るに對して) 盛衰記「京都にて、源氏の方人(カタウド)の、惡事を始めたるによって、馳せ上りたるやらん」

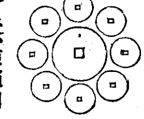
はせ-はちまんぐう 長谷八幡宮【名】山城國愛宕(オタギ)郡岩倉村大字長谷(ナガタニ)の東方なる山下に鎭座せる神社。祭神は應神天皇。惟喬(コレタカ)親王の創建に係る。

はぜ-ばな 粰花【名】〔植〕一さぎごけ(鷺苔)に同じ。二しじみばな(蜆花)を云ふ。〔京都・大阪の語〕

はせ-ひき 馳引・馳挽【名】馬を馳せ進め、弓を引くこと、又、馬を馳せ進めながら弓を挽くこと。はせゆみ。平治「馬に乘り、馳引・早足・力持など、偏に武藝をぞ稽古せられける」庭訓往來「尋常射手、馳挽達者」

はぜ-ぶくろ 粰袋・米花袋【名】粰を袋に入れたるもの。俗曲(十日えびす)「十日えびすの賣物は、粰袋に、とり鉢・錢叺(ゼニガマス)・小判に金箱・立烏帽子・煠蓮(ユデバス)・さいづち・束熨斗(タバネノシ)・おささをかたげて、千鳥足」

はせべ-せん 長谷部錢【名】紋所の一。下の圖を見よ。



(はせべせん)

はせべ-の-ぶつら 長谷部信連【名】〔人〕武士。以仁(モチヒト)王の侍臣。後、源賴朝に仕ふ。右馬允爲連の子。武功に依りて左衞門尉に任ぜらる。治承四年以仁王、平氏の殄滅を謀りて、事洩るるや、王をして遁れしめ、自ら留りて奮鬪し、捕へられたれども、王の所在を告げず。淸盛、その勇烈を壯とし、伯耆國日野に流す。文治二年鎌倉に出でて、賴朝の家人となる。建保六年歿す。子孫、長(チャウ)を姓とし、世世能登國に居る。

はせべ-わかささぎ-の-すめらみこと 長谷部若雀天皇【名】〔人〕すじんてんわう(崇神天皇)の異稱。

はせ-ほふし 初瀬法師【名】大和國の初瀬(ハセ)町なる長谷寺(ハセデラ)の僧侶。蕪村「頭巾著て聲こもりくの初瀬法師」「種。

はぜ-まつ はぜ松【名】〔植〕赤松の一品

はせ-まはり 馳廻【名】はしりまはり(走廻)に同じ。

はせ-まはる 馳廻る【動四自】はしりまはる「(走廻る)に同じ。

はせ-まゐる 馳參る【動四自】馳せて參上す。駈けつけて參る。馳せ參ず。國姓爺「すは例の花軍と、馳せ參る勢(セイ)も無く」

はせ-むかふ 馳向ふ【動四自】馬を馳せて赴く。續古事談「北山花園寺にて出家の由聞えければ、檢非違使馳せ向ひて尋ぬるに」「じ。

は-せん 端錢【名】はしたぜに(端錢)に同じ。

は-せん 波線【名】波狀の線。

は-せん 破線【名】-・-・-・-・-の形なる線。多くは切斷線として用ふ。(點線・折線などに對して)

は-せん 破船【名】船の、暴風雨に遭ひ、又は暗礁に觸れなどして、難破すること、又その難破したる船。難船。太平記「一箇の破船ありけるに乘りて」

は-ぜん 皤然【貌】頭髮の白きさま。

ば-せん 場錢・塲錢【名】劇場などの席料。諸藝太平記「江戸の芝居……札錢・場錢も、上方に二倍して」

ば-せん 馬氈・馬韉【名】くらおほひ(鞍覆)に同じ。大友記「鞦(ハルビ)を、馬氈の上に引き出し、前輪に引き上げ、しかと締め」

ば-ぜん 馬前【名】一馬のまへ。騎馬の前。二馬に乘れる君主、又は貴人の前。

は-ぜんまい 葉薇【名】〔植〕薇(ゼンマイ)科に屬する多年生の草。高さ二三尺に達し、葉は二回羽狀複葉にして、根莖より叢生し、各小葉は楕圓狀卵形又は披針狀楕圓形をなす。子囊は葉先部に生じ、成熟後、暗褐色を呈す。各地の山地に自生す。

はせ-めぐる 馳廻る【動四自】はせまはる(馳廻る)に同じ。

はせ-もの 挾物【名】物と物との間に挾みたる物。はさみもの。

はせ-やま 初瀬山・泊瀬山【名】〔地〕大和國磯城(キシ)郡初瀬(ハセ)町の西北にある山。南方は遙かに多武(タム)峰に對し、西は三輪山と並立す。高さは著しからず。古稱、初

瀬（ハツセ）山・小初瀬（ヲハツセ）山。

はせ-ゆく 馳行く【動四自】馳せて行く。走り行く。盛衰記「内裏より、やがて三井寺へ馳せゆきて」

はせ-ゆみ 馳弓・馳射【名】馬に乘りて走らせながら、弓を射ること。はせひき。

はぜ-らふ 櫨蠟・黄櫨蠟【名】櫨の樹の實より採りたる蠟。鬢附・石鹼の製造用、藥用・皮革用に供す。

はぜ-らん はぜ蘭【名】〔植〕馬齒莧（スベリヒユ）科に屬する多年生の草。高さ約二尺に達し、下部はやや木質、葉は長楕圓形又は倒披針形をなす。夏季、紅色の小花、圓錐花序をなして開く。亞弗利加・南亞米利加・西印度の熱帶地方に自生し、近年舶載して、我國にも栽培し、觀賞用に供す。

は-ぜり 葉芹【名】〔植〕あかせり（赤芹）に同じ。

ぱせりい【名】〔植〕おらんだぜり（和蘭芹）に同じ。

はぜる 爆る【動下一自】開きて裂く。ふくれて反（ソ）りかへる。はじく。「炒米（イリゴメ）がはぜる」「肉がはぜる」

はせ-わたす 馳渡す【動四自】馬を急がせて、水を渡る。保元「河を、直違（スヂカヒ）に馳渡して、遁れ參って候ふ」

ば-せを 芭蕉【名】〔植〕『ばせう（芭蕉）の古き假名遣』ばせう（芭蕉）に同じ。隆祐集「ふる里の庭のばせをのかひろ葉をあまたになして秋風ぞ吹く」

ばせを 芭蕉【名】〔人〕まつをばせを（松尾芭蕉）を見よ。

ばせを-あん 芭蕉庵【名】㊀東京市深川區萬年橋の北際、舊紀伊家の邸内に在りし、松尾芭蕉在住の遺跡。芭蕉、江戸に下りて、鯉屋杉風（サンプウ）に身を寄せ、同人よりその別莊内のこの庵を讓られしなりといふ。六疊又は八疊の一室なりしものの如く、その傍なる採茶庵は、杉風自身の居室たりき。芭蕉、天和元年、この庵に入り、翌春、庭前に芭蕉を植ゑしよりの名といふ說あれど、實は初よりの名稱なりしが如し。「古池や蛙飛び込む水の音」の句も此處にての吟にて、その古池、大正十二年九月の大震火災の前までは殘存したり。一名、泊船堂。㊁山城國愛宕（オタギ）郡修學院村大字一乘寺なる金福寺の境内にある、松尾芭蕉舊居の址。㊂東京市小石川區關口臺町（セキグチダイマチ）なる故田中光顯伯の邸内に在る庵。もと松尾芭蕉の、目白（メジロ）臺より早稻田（ワセダ）田圃の方を眺めて、近江國粟津原附近の趣ありとて愛賞せしに本づき、後、宗瑞・馬光などいふ俳人、芭蕉の「さみだれに隱れぬものや勢多の橋」といふ短冊を塚に藏めて、五月雨塚と呼びしものも、同邸内に殘存す。

ばせを-き 芭蕉忌【名】松尾芭蕉の忌日（十月十二日）に、俳人等が、追憶のために營む法會。時雨忌（シグレキ）。蕪村「浪花遊行寺にて、芭蕉忌を營みける柳庵に、蓑笠の衣鉢（エハツ）傳へて時雨かな」

ばせを-くかい 芭蕉句解【名】〔書〕芭蕉の俳句を註解せるもの。大島蓼太の著。

ばせを-くせん 芭蕉句選【名】〔書〕芭蕉の俳句を選び集めたるもの。華雀の選。

ばせを-くせん-ねんかう 芭蕉句選年考【名】〔書〕芭蕉句選に擧げたる芭蕉の句に就き、一一詳細なる考證をなしたるもの。九卷。石河（イシコ）積翠の撰。

ばせを-ば 芭蕉葉【名】ばせうば（芭蕉葉）に同じ。和名「芭蕉、波勢乎波」古今「ささ・まつ・びは・はせをば。いささめに時まつまにぞひは經ぬる心ばせをば人に見えつつ」

ばせを-ものがたり-はなやじっき 芭蕉談花屋實記【名】〔書〕松尾芭蕉が、難波にて病に罹りしより、御堂前（ミダウマヘ）南久太郎町なる旅舍花屋仁左衞門といふ者の裏座敷に移され、遂に死去するに及びしまでの日記、及び歿後の葬式、遺物の顚末などを、惟然（ヰネン）・次郎兵衞・支考・去來等が、その病床に侍して、記したるものに基づき、肥後國八代（ヤツシロ）の俳僧文曉の編撰せるもの。二卷。一名、芭蕉翁反古文・花屋日記。

はせ-をる 端折る【動四他】はしをる（端折る）の轉訛。手習鑑「裾はせ折った下著の褄先」

ばせを-ゑことばでん 芭蕉繪詞傳【名】〔書〕松尾芭蕉の一生を、繪を插みて記したるもの。一卷。僧蝶夢の撰。寛政五年成りて、近江國義仲寺に納めしもの。

ばせををう-くかい-たいせい 芭蕉翁句解大成【名】〔書〕松尾芭蕉の俳句を註釋せるもの。茂呂何丸（モロニマル）の著。

ばせををう-しちぶしふ 芭蕉翁七部集【名】〔書〕はいかいしちぶしふ（俳諧七部集）に同じ。

ばせををう-しゆうえん-の-き 芭蕉翁終焉記【名】〔書〕次條に同じ。

ばせををう-ほごぶみ 芭蕉翁反古文【名】〔書〕ばせうものがたりはなやじっき（芭蕉談花屋實記）に同じ。

はそ 鯡【名】〔動〕はす（鯡）に同じ。和名「鯡、波曾」

ば-そ 馬祖【名】〔人〕支那唐の禪僧。成都の人。道一と號す。南嶽懷讓の法嗣。姓は馬氏。時に馬祖と稱し、又、馬大師とも稱せらる。貞元四年寂す。年八十。元和中、大寂禪師の謚號を賜はり、雍正十二年、普照禪師の號を追贈せられたり。

は-そう 破僧【名】〔佛〕はわがふそう（破和合僧）の略。

は-そく 跛足【名】あしなへ。びっこ。ちんば。

は-そく 頗側【名】かたよること。かたむくこと。橫になること。

は-そく 把捉【名】握りつかむこと。捕捉。

ば-そく 馬足【名】㊀うまのあし。馬脚。㊁〔醫〕『獨 Pferdefuss』足首の、蹠（アシウラ）の方に屈曲して、運動の不十分なるに至る病。筋の痲痺、足關節の諸病等によりて發す。尖足（センソク）。

馬足の塵【句】馬の足にて揚ぐる土ぼこり。

ば-ぞく 馬賊【名】㊀馬を盜むを專業とする賊。㊁『日清戰爭前後よりの名稱なるがごとしといふ』支那の滿洲地方を、馬に乘り、隊を組み、各、首領ありて、出沒・橫行する賊。淸末以來のものにて、處處に散在すれど、大規模の統一的勢力あるものにはあらず。

は-そで 羽袖【名】㊀羽を、袖に擬へていふ語。俳諧新選（土髪）「白鷺の羽袖よごるる汐干かな」㊁舞樂の時に、舞人の著る衣の袖。謠曲（雲林院）「夜遊の舞樂も、時移れば、名殘の月も、山藍のは袖かへすや」

は-そば 葉斑【名】葉に斑點の生ずる、稻の病。

は-そん 破損【名】㊀破れそこなふこと。㊁破れいたみたる所を繕ふこと。修繕。禁祕抄「如㆓障子破損㆒」〔下野國の方言〕

はそん-せん 破損船【名】なんぱせん（難破船）に同じ。

は-ぞり 端反【名】陣笠又は椀などの、端の上方又は外方へ反（ソ）りたること。

はぞり-がさ 端反笠【名】端反せる形の陣笠。

はた 旗・幡・旌・幟・旆【名】㊀多くは、布・絹にて作り、竿の先に附けて、儀式の時、又は軍陣にて、目標若しくは裝飾に用ふる具。大さ・形など種種あり。幢。㊁たこ（凧）を云ふ。はたや（旗屋）㊂參照。〔肥前國長崎の方言〕㊂紋所の一。旗㊀に象（カタド）れるもの。丸に一旗（ヒトツハタ）・三旗（ミツハタ）の丸などの種類あり。

旗の足【句】長く垂れ靡きたる旗の下部。はたあし。斿。旒。盛衰記「旗の足を見て、五十騎・三十騎、ここ・かしこより馳せ集る」

旗の手【句】長く垂れ靡きたる旗の上部。はたて。承久記「旗の手の靡かぬ所は候はず」

旗を揚ぐ【句】㊀軍を起す。兵を擧ぐ。太平記「新田左衞門佐義治を喚び奉り、これを大將にて旗を擧げんとぞ企てける」㊁表むきに事を起す。はたあげ（旗揚）參照。平家「去年秋、爲㆑達㆓宿意㆒揚㆑旗」

旗を押す【句】軍陣にて、旗を進む。三河物語「その方へ、御旗を押しける」

旗を下（オロ）す【句】掲げたる旗を撤去す。

旗を絞る【句】「旗を卷く」㊀に同じ。太閤記「旗を絞り、指物（サシモノ）を持たせ、密かに小牧山を忍び出でよ」

旗を立つ【句】「旗を揚ぐ」に同じ。狂

言（生捕鈴木）「一門に旗を立てさし申し」

旗を開く【句】巻き納めたる旗を開きて立つ。

旗を巻く【句】㊀掲げたる旗を下して巻き納む。昔の軍陣にては、旗を横上(ヨコガミ)の邊に巻き上げ、風帶にて結び束ぬるを、方式としたり。平家「旗をば巻かせて持たせつつ」太平記「三百餘騎、旗を巻きて、降人に出づ」㊁企畫を中止す。見込立たず手をひく。

はた 機【名】㊀經絲(タテイト)をわたし、緯絲(ヨコイト)を通して、布帛に織る器械。おりばた。たなばた。はたもの。㊁**はたもの**(機物)㊁の略。

機を織る【句】機にて、布帛を織る。機物(ハタモノ)を織る。

はた 畑・畠【名】『畑も畠も和字にて、前者は、火田の合字、草を燒きて、種を蒔きつくる田の義、後者は白田の合字。**はくでん**(白田)參照』野菜又は穀類を値ゑ作る耕地。くがた。はたけ。

畑を燒く【句】肥料に供するために、冬・春にかけて、畑の草を燒く。拾遺「片山に畑燒くをのこ彼の見ゆるみ山櫻はよぎて畑燒け」

はた 端・側【名】㊀はし。へり。ふち。ほとり。あたり。へた。和名「孫愐切韻云、甄、都伎乃波太。器緣謂口邊也」宇治「大なる川のはたを行くに」㊁傍にゐる人。近所に住める人人。和合人「これさ、起惚(オキボ)けると、端へ障(ハサ)る。靜かに、靜かに」㊂劇場の揚幕(アゲマク)の側なる下棧敷。㊃器物などの耳。

はた 鰭【名】㊀**ひれ**(鰭)㊀に同じ。一說に、ひれは、左右の鰭と背部の鬣との總稱、はたは、左右にある物のみの稱にて、同一ならずと。〔古語〕萬葉「鸕河立ち捕らさむ鮎のしがはたは吾にかき向け思ひし思(モ)はば」㊁〔動〕硬骨類に屬する魚。體は扁くして、大なるは六七寸に達し、色は紫褐にして、數條の淡色なる横帶あり。腹部は、概して淡色を呈す。頭部前額骨の左右に突起あり。我國、東海の沿岸に産す。

鰭の狹物(サモノ)【句】鰭の狹き魚、即ち小さき魚。(「鰭の廣物」に對して)〔古語〕紀「鰭狹、ハタノサモノ」

鰭の廣物(ヒロモノ)【句】鰭の廣き魚、即ち大なる魚。(「鰭の狹物」に對して)〔古語〕紀「鰭廣、ハタノヒロモノ」祝詞「はたの廣物、はたの狹物(サモノ)」

はた 秦【名】『仁德天皇、この秦氏の機織に係る絹布の、柔軟にして、肌膚に適するを嘉して、弓月王の子普洞王(浦東王)に、姓を波陀公と賜ひしより、秦の字の訓となるに至りしもの』尸(カバネ)の一。蕃別の一。支那秦の始皇帝嬴政の第三世(但し、この世數には疑あり)の孫孝武王の裔。孝武王の子功滿王、仲哀天皇の八年に來朝し、その子弓月王(融通王)、應神天皇の朝に歸化したるに出づ。

はた 幡多【名】〔地〕土佐國七郡の一。郡役所を中村町に置く。中世、畑と稱し、貴顯配流の地たりき。〔畑〕宇治「土佐國幡多の郡に住む下種(スゲ)ありけり」平家「高倉の宮…御謀叛、既に顯れさせたまひて、土佐の畑へ移しまゐらせんがために」

はた 將【名】〔動〕**ばった**(飛蝗)に同じ。

はた 將【副】云云の上に又。それより外に又。やはり又。さすがにまた。なぜに。また。もしくは。但しは。又しても。一說に、心に願はぬことなれど、己むを得ざる意と。萬葉「命あらば逢ふこともあらむわが故にはたな思ひそ命だに經ば」伊勢「二日といふ夜、男、われて逢はむといふ。女も、はた逢はじとも思へらず」

將又【句】それから。**またはた**。

はたや【句】『**はた**に疑問の助詞**や**の添ひたる語』或は又。もしや又。萬葉「みよし野の山の嵐の寒けくにはたや今宵もわがひとりねむ」

はたやはた【句】『**はた**を重ね、中間に感嘆の助詞**や**を插みて、その意を強めたる語』又もや又も。この上にも又。またぞろ。萬葉「瘦す瘦すも生けらばあらむをはたやはた鰻(ムナギ)を取ると川に流るな」

はた 將【接】上の意を翻して、下を起す意。それとも。それとは變って。或は。但しは。若しくは。「霞か、雲か、はた雪か」

はた 礑【貌】㊀物の強く打當る音。ばたり。ばたり。はった。落窪「大路なかに、はたと引落しつ」著聞「御手を、はたと打たせたまひて」保元「爲朝、これを弓手に相請けて、はたと射る」㊁さし詰りて當惑するさま。はった。はったり。徒然「具氏、……承らんと申されけるに、大納言入道、はたと詰りて」㊂睨む時の視線の鋭きさま。はった。盛衰記「入道を、はたと睨みたり」

はた 杯【助數】**はい**(杯)に同じ。〔古語〕宇治「湯ぶねに、藁を、こまごまと切りて、一はた入れて」

はた 二十・廿【數】十を二倍したる數。にじふ。源氏「とを・はた・三十(ミソ)など數ふるさま」

はだ 肌・膚【名】㊀うはかは。表皮。〔古語〕和名「鐵落、鐵乃波太」㊁**はだへ**(肌)に同じ。萬葉「笹が葉のさやぐ霜夜に七重(ナナヘ)著(カ)る衣にませる子ろが肌はも」枕「夜は、誰と寢ん。常陸の介(スケ)と寢ん。寢たる肌もよし」㊂きめ。膚理。源氏「高麗(コマ)の紙の、はだこまかに、なごう、なつかしきが」㊃**はだぎぬ**(肌衣)の略。源氏冷泉節「一とせ君と添寢の夜の御肌を、幡(ハタ)に織り」㊄**はだあひ**(肌合)に同じ。「肌が合はず」「勇(イサミ)肌」

肌に添ふ【句】「肌を離さず」に同じ。

肌に著く【句】前條に同じ。

肌の帶【句】**ふんどし**(犢鼻褌)に同じ。**はだばかま**(肌袴)參照。運歩色葉集「膚帶、ハダノオビ」

肌の守【句】**はだまもり**(肌守)に同じ。太平記「觀音經を入れたりける膚の守に、矢當って」謠曲(夜討曾我)「時宗も、肌の守を取出し」

肌の物【句】**はだぎ**(肌著)に同じ。緋縮緬卯月の紅葉「肌の物に縫うてしや」

肌は慣物(ナレモノ)【句】皮膚の暑さ・寒さに對する感じは、習慣次第にて、大抵堪へ得るものなり。〔諺語〕後撰夷曲集「次第次第暑くなりなば今日替へし給物もや肌は慣物」

肌を合はす【句】心を合はす。共謀す。傾城反魂香「親方と肌を合はせ、手形の日附を、とっとあとの月にして」

肌を入る【句】肌を脫ぎゐたる人、元の如くに、衣を著る。武玉川「いさかひのいっちしまひに肌を入れ」

肌を汚(ケガ)**す**【句】女犯さる。婦人操を破る。肌身(ハダミ)を汚す。身を汚す。

肌を脫ぐ【句】㊀衣服を脫ぎて、身體をあらはす。肩を脫ぐ。「諸肌(モロハダ)を脫ぐ」「肌を入る」參照。㊁奮發して事に當る。義俠的に熱心に助力す。

肌を離さず【句】肌に附けて、大切にす。肌身を離さず。

肌を觸る【句】男女同衾して、肌と肌と接觸す。記「わがなく妻をこぞこそは易くはだふれ」丹波與作「緣なればこそ、肌觸れて、抱(ダ)いつ締めつのわりない事」箱根靈驗記「現在敵(カタキ)に肌觸れて、枕を交(カハ)す苦(クルシミ)は」

肌を許す【句】㊀女が、男の求に應じて、肉交を承諾す。肌身(ハダミ)を許す。吾吟我集「添ふとても肌ゆるされぬきぬ蝨うつりやすげな人の心に」箱根靈驗躄仇討「女ながらも、近寄るこそ幸、肌を許させ、一刀にても恙通せと」㊁附けねらはるるを防がんとする心ゆるむ。曾我會稽山「これも、敵に肌許させ、本望を遂げさせんと、勘當も、親の慈悲」

は-だ 陂陀・坡陀【貌】地の平ならぬさま。

ばた 牛酪(英 Butter)【名】牛乳より分離せしめたる脂肪の、約百分の十五の脫脂乳を含有せるもの。ぎうらく。

ばた【名】〔動〕**ばった**(螇蚸)を云ふ。〔上野國の方言〕

はた-あきなひ 旗商【名】『昔、大阪堂島の米市にて、旗を信號として行ひし習慣に基づくといふ。**はたうり**(旗賣)參照』米穀の投機取引をする商人。はたし。〔大阪の語〕一代女「北濱の旗商する人」

はた-あげ 旗揚【名】㊀兵を擧ぐること。㊁表むきに事を起すこと。

はた-あし 旗足・旗脚【名】「旗の足」に同じ。〔旒〕 和名「旒、波多阿之、旌旗之末垂者也」

はた-あしがる-ぐそく 旗足輕具足【名】最も簡略なる具足。

はた-あはせ 旗合【名】江戸時代に、長崎港に入津せる和蘭船に、長崎奉行の檢使行き向ひて、その船長携帶の祕密旗と、かねて和蘭の瓜哇(ジャワ)政廳より呈出したる祕密旗とを勘合せしこと。兩旗相同じきを、我國と通商の和蘭船たる證とせり。

はだ-あひ 肌合【名】氣まへ。氣だて。はだ。意氣。性質。

はた-あひづ 旗合圖【名】汽車信號中の一。紅・綠・白三種の旗を用ひ、紅旗は停止の合圖(夜間は紅燈)・綠旗は徐行の合圖(夜間は綠燈)・白旗は行進の合圖(夜間は白燈)。多くは踏切番の列車を進行せしめん爲の合圖として用ふ。

は-だい 齒代【名】車の借用賃。車の損料。

は-だい 破題【名】漢文又は漢詩の起首に於て、直ちにその題意を述ぶること。

ば-だい 場代・塲代【名】芝居などの棧敷又は土間(ドマ)などの席を借りたるに對して拂ふ料金。

ば-だい 馬代【名】㊀昔、馬に代へて贈りたる金銀。黄金一片を大馬代、南鐐一片を小馬代といひたり。㊁借馬の賃錢。

ば-だい 馬臺【名】〔地〕やばだい(野馬臺)の略。

馬臺の織文(シンモン)【句】〔文〕「野馬臺の詩」に同じ。平家「忠盛、昇殿を許されし時、都鄙の老少、皆、蓬戶の瑕瑾を惜しみ、內外(ゲナイ)の榮幸、各、馬臺の織文に啼く」

ば-だいし 馬大師【名】〔人〕ばそ(馬祖)を見よ。

はだいし-いも はだいし芋【名】〔植〕つくねいも(佛掌薯)を云ふ。〔陸奧國の方言〕

はた-いた 鰭板・端板【名】家の內部を、外部より見えぬやうに覆ひ隱す、薄き板、即ち板がこひ・板屏の類。一說に、緣側のゆきどまり、庇の兩端など、すべて端に用ひてある板ならんと。〔古語〕和名「板、伊太」。功程式「有㆓波多板・步板㆒」 平家「福原へ御幸(ゴカウ)成し奉る。四面に端板して、口一つ開きたる內に」

たた-いと 機絲【名】機を織るに用ふる、經(タテ)・緯(ヨコ)の絲。おりものいと。七一職人歌合「はたおり、夜さへや織りとほさまし機絲のたてぬきしるく見ゆる月影」

はた-いろ 旗色【名】㊀旗の翻る樣子によりて、形勢の良否の知らるること。(もと軍隊の上にいひし語なれど、旗を用ひて相圖する米相場などの上にもいふ)「旗色、善し」 諸藝太平記「北濱の旗色を見て、肥後米二十石買ふ」 ㊁勝負又は吉凶の樣子。形勢。

は-たう 波濤【名】大なる波。大波。巨濤。濤波(タウハ)。

波濤を疊む【句】大波の盛んに起ちて打寄する形容。謠曲(山姥)「海は、苔の露より滴りて、波濤を疊む萬水たり」

は-たう 坡塘・陂塘【名】つつみ。どて。堤防。塘坡(タウハ)。

は-たう 波蕩・波盪【名】『後漢書の公孫述傳に「四海波蕩、匹夫橫議」、晉書の紀瞻傳に「方今六合波盪、人未㆓安居㆒」などあり』波の如く搖れ動くこと。動搖。動亂。

は-たう 播蕩【名】『左傳の襄公二十五年の條に「夏氏之亂、成公播蕩」とあり。播は散る義』流れ移りて所を失ふこと。流離。流越。

は-だう 霸道・覇道【名】武力・權謀を用ひて、國を征服し、且つ治むること。霸者の政道。(王道に對して)

ば-たう 罵倒【名】激しく罵ること。ひどくけなすこと。

ば-だう 馬道【名】ばじゆつ(馬術)に同じ。

は-たうがらし 葉唐辛【名】唐辛の實(ミ)の、まだみのり終らぬ內に、葉と共に食用とするもの。

はた-うこん 畑欝金・畠欝金【名】〔植〕しろもじ(白文字)に同じ。

ばたう-さう 馬刀瘡【名】瘰癧(ルイレキ)に類する、一種の病。

はた-うち 畑打・畠打【名】鋤などを用ひて、土を掘り返すこと、又その人。太祇「畠打やいづくはあれど京の土」

はた-うり 旗賣【名】〔商〕『はたあきなひ(旗商)を見よ』からうり(空賣)に同じ。〔取引所の語〕

はた-うを 旗魚【名】〔動〕ばせうかぢき(芭蕉旗魚)に同じ。

はたえだ-やき 幡枝燒【名】山城國愛宕(オタギ)郡岩倉村大字幡枝村より產する土器。木野村燒。

はた-おと 機音【名】機を織る音。織留「今織の機音せし門に、乘物立てて」

はだ-おび 肌帶・膚帶【名】「肌の帶」に同じ。

はた-おり 機織【名】㊀機にて、布帛を織ること、又その工人。織工。七一職人歌合「機織。あこよう、くだ持(モ)て來(コ)よ」 ㊁〔動〕『翅と肢とを觸れて、はたはたと音を發するによりていふ。はたはた(螇蚸)參照』きりぎりす(螽斯)に同じ。一說に、ばった(飛蝗)㊁に同じと。〔古語〕枕「はたおり、きりぎりす」

はたおり 畑下【名】〔地〕下野國鹽原溫泉の七湯(シチタウ)の一。

はたおり-うた 機織唄【名】機を織りながらうたふ唄。

はたおり-きかい 機織機械【名】機を織るに用ふる機械。織機。

はたおり-ぐさ 機織草【名】〔植〕つゆくさ(露草)を云ふ。〔上總國の方言〕

はたおり-ど 畑下戶【名】〔地〕はたおり(畑下)に同じ。

はたおり-ば 機織場・機織塲【名】㊀機織の業をなす工場。㊁機織の業を營む者の多く住める土地。はたば。はたばしよ。機業地。

はたおり-ばった 機織螇蚸【名】〔動〕はたおり(機織)㊁に同じ。

はたおり-ひめ 機織姬【名】たなばたつめ(棚機津女)㊁に同じ。萬葉千紅「年年の七夕七首、彥星の、引く手に汗し、機織姬の、梭も投げつべし」

はたおり-むし 機織蟲【名】〔動〕はたおり(機織)㊁に同じ。

はたおり-め 機織女【名】㊀機を織る女。はたおりをんな。はため。織女。㊁〔動〕はたおり(機織)㊁に同じ。〔古語〕和名「絡緯。一名、促織、波多於利米。鳴聲如㆓急織㆑機、故以名㆑之」 六帖「雁がねの羽風を寒みはたおりめくだまく音のきりきりと鳴く」

はたおり-をんな 機織女【名】〔動〕前條㊁に同じ。

はた-おる-むし 機織蟲【名】〔動〕はたおり(機織)㊁に同じ。拾遺「秋來れば機織る蟲のあるなべに唐錦にも見ゆる野邊かな」

はだ-か 裸【名】『肌赤の略』㊀衣類を著てあらぬこと。全身の肌のあらはれてゐること。あかはだ。すはだ。裸體。赤身。赤裸。㊁品物の、被はず、包まず、又、器物に入れてもあらぬこと。心中二枚繪草紙「小判は、頭巾に、ぐわらりと入れ、裸一步を手に握れば」 ㊂衣類・道具などを所持してあらぬこと。㊃嫁入するに、支度の少しも無きこと。

裸一貫(イッカン)【句】㊀わが身體の外、何物をも有せぬこと。㊁毫も資本なくして經營すること。

裸で道中なるものか【句】裸にては道中するを得ず。無一物にては、旅行すること能はず。〔諺語〕

裸で荊(バラ)**を背負**(セオ)**ふ**【句】『史記の廉頗藺相如傳に「廉頗聞㆑之、肉袒負㆑荊因㆓賓客㆒至㆓藺相如門㆒謝㆑罪」とあり』苦痛を忍ぶ譬。俗謠「あの子と添ふなら、三年三月も、裸でばらも背負ひませう」

裸で物を落す例(タメシ)**無し**【句】元來無一物なる者は、損害を受くる事も無し。〔諺語〕

裸八貫、犢鼻褌(フンドシ)**一貫**【句】無一物なる譬。〔諺語〕

裸百貫【句】「男は裸百貫」を見よ。

裸百貫、編笠(アミガサ)**一蓋**(イッカイ)【句】「裸八貫、犢鼻褌一貫」に同じ。〔諺語〕

裸百匹(ヒャッピキ)【句】「裸百貫」に同じ。〔諺語〕 夕霧阿波鳴渡「儕の裸百匹を、直(グス)に男に槍持に過ぎたる妻が優しさや」

はだ-か 裸【接頭】被はず、包まず、又、入物(イレモノ)に入れてもあらぬ意。「裸蠟燭」「裸硯」

はだか‐いくさ 裸軍【名】部下も助勢もなく、單身にてする戰。今國姓爺「語らひ置きたる軍兵も居り合はず、我一人の裸軍、死者狂して見せん」

はだか‐うま 裸馬【名】鞍を置かぬ馬。はだせうま。**はだかぐら**（裸鞍）參照。平家「鞍置馬三十匹、裸馬三十匹」盛衰記「鞍置馬・裸馬、各一匹」

はだか‐えび 裸蝦【名】小き蝦を、茹（ユ）でて乾し、甲殼・鬚・足等を除き去れるもの。

はだか‐おに 裸鬼【名】著物を著ぬ鬼。裸體の鬼。

はだか‐がたな 裸刀【名】鞘に插してあらぬ刀。ぬきみ。犬筑波「戀はただ裸刀のごとくにて（こいふ句に）もみ杉原は拭（ゴ）ふにぞよき」

はだか‐がね 裸金【名】物に包まぬ金。胸算用「駿河町見世（ミセ）に、裸銀山のごとくなるを」櫻陰比事「棚より枡を下（オロ）せば、中に、小判は無かりき。……裸金なれば、よもや鼠は曳くまじ」

はだか‐ぎ 裸木【名】〔植〕**ばくちのき**に同じ。

はだか‐ぐら 裸鞍【名】四方手（シホデ）・切附（キツケ）などを附けてあらぬ鞍。**はだかうま**（裸馬）參照。

はた‐かくる 半隱る【動下二自】なかば隱る。少し隱る。〔古語〕小町集「しどけなき寢くたれ髮を見せじとやはた隱れけん今朝の朝がほ」源氏「御几帳を、少し引寄せて、みづからは、はた隱れたまへり」

はだか‐くろぼ 裸黑穗【名】黑穗病の一種。大麥及び裸麥に發生し、害を受けたる穗は、濃色の輕鬆なる粉末に變ず。

はだか‐ご 裸子【名】衣類を著ぬ子。裸體の子。はだかわらは。俳諧古選（言水）「いかのぼり裸子は見ぬ都かな」

はだか‐こほろぎ 裸蟋蟀【名】〔動〕**こほろぎ**（蟋蟀）を云ふ。〔加賀國の方言〕

はた‐かざり 旗飾【名】旗に附くる、總（フサ）などの飾。

はだか‐じま 裸島・裸嶋【名】住民の、すべて裸體にて生活せる島。五人女「世界の圖にある裸島とて、家內（ヤウチ）殘らず、女郎はいやがれど、無理に帷子（カタビラ）脫がせて、肌の見ゆるを恥ぢける中にも」

はだか‐じめ 裸絞【名】柔道の固業（カタメワザ）の一。相手の著物を捉へず、裸體の時にても差支なきやう咽喉を締むる業の總稱。

はだか‐しやうばい 裸商賣【名】㊀裸體にてする職業。例へば相撲取（スマフトリ）・川越（カハゴシ）人夫などの類。㊁無資本にて商賣すること。

はた‐がしら 旗頭【名】㊀旗の上方。はたさき。はたて。（旗尻（ハタジリ）に對して）盛衰記「雲の中より、白旗一流おり下って、判官の旗頭にひらめきて」㊁『源平時代以後、戰陣には、諸將、いづれも、氏族の標章として、紋所をあらはしたる旗を押し立てしよりいふ』一部隊のかしら。**はたした**（旗下）參照。太平記「白旗一揆の衆には、縣（アガタ）下野守を旗頭として」㊂一地方の大小名のかしら。覇者。蘆名家記「二本松右京亮吉次、仙道旗頭として」㊃江戸時代に、彥根藩・津藩の如く、有事の日には、附近の他の諸侯を率ゐて、京都に備ふる地位にありし大藩。㊄仲間の內にて勢力ある者。かしらぶん。頭領。

はだか‐じろ 裸城【名】櫓又は塀などを缺きたる城。信長記「片端より火を懸け、即時に裸城にぞしたまひける」

はだ‐かす【名】〔動〕**はんざき**（鯢魚）を云ふ。〔丹波國の方言〕

はだか‐すがた 裸姿【名】裸の姿。紫式部日記「朔日の裝束は取られざりければ、さりげもなくてあれど、裸姿は忘られず」

はだか‐すずり 裸硯【名】箱などの中に入れてあらぬ硯。芭蕉「七夕（タナバタ）や裸硯の俄旅」

はだか‐すまふ 裸相撲【名】裸にて相撲を取ること、又その相撲。一代男「或時は裸相撲、生絹（スズシ）の腰絹をさせて」

はだ‐がたな 肌刀【名】**ふところがたな**（懷刀）に同じ。武家義理物語「懷中を探しけるに、案の如く肌刀さしてあり」武道傳來記「肌刀を拔きて、傳兵衞が脇腹を刺し通し」

はだ‐かたびら 肌帷子【名】直接に肌に著けて汗取とする帷子。一代男「肌帷子の紋所に、地藏を附けて居るこそ、いかさま仔細らしく見えける」

はだか‐つるはぎ 裸鶴脛【名】衣の裾を、高く褰（カカ）げて、脛を出すこと。〔古語〕

はだか‐にんぎやう 裸人形【名】著物を著せてあらぬ人形。五人女「目・鼻なしの裸人形」

はだか‐ね 裸寢・裸寐【名】著物を著ずに寢ぬること。

はだか‐ばう 裸坊【名】㊀はだかなる人。はだかんばう。㊁賭博に負け、又は酒色に耽り、又は盜難に逢ひなどして、金錢・衣服の類を、一切失ひたる者。はだかむし。

裸坊の洗濯【句】㊀著がへの衣服を所持せぬ人の、ただ一枚の衣類を洗濯するを嘲りていふ語。裸蟲の洗濯。〔諺語〕㊁「雪の翌日（アシタ）は裸坊の洗濯」を見よ。

はだか‐ひとへ 裸單【名】束帶の際、單（ヒトヘ）の上に、打衣（ウチギヌ）・衵（アコメ）などを著ぬこと。

はだか‐ぶみ 裸文【名】表包（ウハヅツミ）をせず、又は封筒に封入してあらぬ書狀。

はだか‐ほほづき 裸酸漿・龍珠【名】〔植〕茄（ナス）科に屬する一年生又は二年生の草。高さ二三尺。葉は長卵形にして全緣・平滑、夏季、葉腋ごとに、一箇乃至三箇の淡黃色の花開き、果實は球形・多汁にして、熟すれば、深紅色となる。有毒なり。各地の山野・陰地に自生す。あかこなすび。やまほほづき。

はだか‐まつり 裸祭【名】**なおひまつり**（儺追祭）に同じ。

はだか‐まゐり 裸參【名】**かんまゐり**（寒參）に同じ。

はだか‐み 裸身【名】㊀裸のからだ。はだか。裸體。赤身。一代男「行水の御裸身見るに、久米の仙も、こんな事なるべし」和合人「浴衣（ユカタ）を脫ぎて、裸身へ半天を著」

はだか‐むぎ 裸麥【名】㊀〔植〕禾木科に屬する一二年生の草。全形、ほぼ大麥に同じけれども、小穗には通常芒無く、粒子は、容易に穀を剝脫し去る。我國、各地に廣く栽培す。種子を飯とし、或は味噌・醬油の原料とす。味は大麥に劣れども、早熟にして、且つ栽培し易きを以て、關西地方にては盛んに栽培して、單に麥と稱す。あかはだか。ふとむぎ。㊁「田植（タウエ）布子に裸麥」を見よ。

はだか‐むし 裸蟲【名】㊀羽・毛・甲・鱗などのなき蟲の總稱。㊁『禮記の月令篇に「中央土、其蟲倮」とありて、註に「人爲二倮蟲之長一」と見ゆ』**じんるゐ**（人類）の異稱。㊂**はだかばう**（裸坊）㊁に同じ。

裸蟲の洗濯【句】「裸坊の洗濯」に同じ。

はだかん‐ばう 裸坊【名】**はだかばう**（裸坊）の音便。

はた‐がや 旗萱【名】〔植〕莎草（カヤツリグサ）科に屬する草。根莖より、狹長なる葉叢生す。花莖は甚だ細くして、葉間より抽出し、その頂に、多くの小穗簇生し、九月頃、淡褐色となる。各地の原野・水濕の地に自生す。ひめがや。

はだか‐やき 裸燒【名】釉（ウハグスリ）を掛けてあらぬ茶壺。

はだか‐やぐら 裸櫓【名】蒲團（フトン）などを被ひてあらぬ火燵櫓（コタツヤグラ）。俳諧新選（嘯山）「爐塞（ロフサギ）や裸櫓の十日ほど」

はだか‐やま 裸山【名】**はげやま**（禿山）に同じ。

はだか‐らふそく 裸蠟燭【名】火を點じたる儘の、むきだしの蠟燭。

はだか‐りゆう 裸龍【名】神社・佛閣の破風（ハフ）・欄間などに彫刻せる龍の、雲形を添へず、むきだしにしてあるもの。

はだかる【動四自】㊀ひろがり開く。ひろがる。落窪「そこに書ける物を見るに、むげに落窪の手なれば、目口もはだかりぬ」㊁立ちながら、跨をひろぐ。名義抄「跨、ハダカル・マタガル」「立ちはだかる」

はだか‐わらは 裸童【名】**はだかご**（裸子）に同じ。芭蕉「花木槿（ハナムクゲ）裸童のかざしかな」

はだか‐をどり 裸踊【名】裸にて踊ること。

はたき【名】㊀はたくこと。たたき。〔批・叩〕㊁羽毛又は裂きたる紙・布片などを

束ねて、柄を添へ、戸障子又は器物の塵埃を拂ふに用ふる具。うちはらひ。ちりはらひ。さいはい。ちりはたき。ほこりはらひ。㊂はたきこみ(批込)の略。［批］

はだ-ぎ 肌著・肌衣【名】直接に肌に著けて著、長さ腰の邊までなる衣。じゆばん。はだつき。はだぎぬ。膚衫。襯衣。

はたき-こみ 批込・叩込【名】相撲（スマフ）の四十八手の一。相手の進み來るところを、突然、その首又は肩などを叩きて、前方へ倒すこと。くじきたふし。くびたふし。はたき。

はだ-ぎぬ 肌衣【名】はだぎ(肌著)に同じ。

はた-ぎやうれつ 旗行列【名】多くの人が、手に手に旗を持ち、列を組みて邌（ネ）り行くこと。祝意を表するため、又は示威運動・廣告などのために行ふ。提灯行列などの類。

は-たく 破宅【名】はをく(破屋)に同じ。

はたく 批く・叩く【動四他】㊀搗き碎く。たたく。つく。うつ。ひっぱたく(引批く)參照。（新永代藏）「枯れたる樒を、抹香にはたかせて」㊁拂ひおとす。拂ひ除く。はらふ。「塵をはたく」㊂費し盡す。殘らず拂ふ。はたけ出す。「身代をはたく」「財布の底をはたく」

はた-ぐ 機具【名】織物を織るに用ふる器具、即ち機（ハタ）㊀の外、千切（チギリ）・綜絖（アヤトリ）・筬（ヲサ）・機張（バタバリ）・杼（ヒ）などの總稱。

はだく 【動下二他】㊀はだかるやうにす。開き延ばす。張りひろぐ。ひらく。（著聞）「この尼、……、前をはだけて」（太平記）「大手をはだけて追ひける間」（醒睡笑）「目口をはだけ悶ゆれば」㊁搔き撫づ。こする。さする。「刷く」（保元）「年頃・日頃宮仕へ、旦暮（アサユフ）に撫ではだけ奉りて」

ば-たく 馬鐸【名】上古、飾馬の胸繋（ムナガイ）の裝飾に用ひし、扁平・鐘狀の鐸。

はた-くさ 機くさ【名】くさに同じ。

ばた-くさ 【貌】ばたばたと音を立てて急ぎ騷ぐさま。どたくさ。どさくさ。（鷹筑波）「四條五條に埃こそ立て（といふ句に）ばたくさと數寄屋疊の表替」

ばた-くさし 牛酪臭し【形二】㊀バタの臭氣あり。㊁西洋の風習に心醉してあり。ハイカラなり。

はた-くび 旗首【名】はたさき(旗先)に同じ。（信長記）「南向に、旗首を揃へ」

はた-ぐも 旗雲【名】旗の如くたなびける旗。［古語］（文德實錄）「有二白雲一自レ艮至レ坤、時人謂二之旗雲一」

はた-ぐわゐ 畑慈姑・畠慈姑【名】［植］あまな(山慈姑)に同じ。

はた-け 畑・畠【名】『畑毛（ハタケ）の義か。け(毛)㊄參照』㊀はた(畑)に同じ。（和名）「白田、一曰二陸田一、八多介」㊁專門とする業務の範圍。「畑が違ふ」㊂『男子の精蟲を胤（タネ）といふより、種子（タネ）を播く場所の義に取りなしていふ』婦女の受胎する機能。［俚語］

畑に蛤（ハマグリ）【句】次條の略。［諺語］

畑に蛤（ハマグリ）、掘っても無い【句】「木に緣（ヨ）って魚を求む」に同じ。［諺語］

畑に蛤（ハマグリ）を求むるやう【句】前條に同じ。［諺語］

はた-け 疥・乾瘡【名】白癬（シラクモ）の一種。主として、小兒の顏面・項部・頸部等に、圓形なる白屑面を作るもの。大抵、白癬頭（シラクモアタマ）に伴なひて發し、成年に至れば、自然に治癒するを常とす。又、婦人の、煉白粉・水白粉を用ふるにあたり、これを介して、皮膚に附著せる黴（カビ）の、深く表皮間に蕃殖するによりて發することもあり。はたけがさ。（紀）「癩、ハタケ」

は-だけ 羽長【名】矢に剝（ハ）ぎたる羽の長さ。

は-だけ 葉竹【名】特にその葉を賞美する種類の竹。即ち寒山竹（カンザンチク）など。

はたけ-あさがほ 畑朝顏・畠朝顏【名】［植］ひるがほ(晝顏)を云ふ。［和泉國の方言］

はたけ-いね 畑稻・畠稻【名】［植］をかぼ(陸稻)に同じ。

はたけ-いも 畑芋・畠芋【名】［植］さといも(里芋)に同じ。

ばた-けえき (英 Butter cake)【名】雞卵の黄味、牛酪及びメリケン粉を混じ、カステラを燒くが如くにして燒きたる西洋菓子。

はたけ-がき 畑垣・畠垣【名】畑の境に結ひたる垣。（心中刃は氷の朔日）「狼狽へて、白たへ潜る畑垣」

はたけ-がさ 疥瘡・疥癩【名】はたけ(疥)に同じ。（字鏡集）「疥、ハタケガサ・イツツクマヒ」

はたけ-がたな 畑刀・畠刀【名】百姓の所持する刀。（國姓爺）「高が土民の畑刀」

はだけ-がみ はだけ髮【名】はだけひろげたる髮。（著聞）「はだけ髮結はせて」

はたけ-ぐさ 連翹【名】［植］れんげう(連翹)に同じ。（延喜式）「連翹。伊多知久佐・伊多知波世・波多久左」

はたけ-ささげ 畑豇・畠豇【名】［植］はたささげ(畠豇豆)に同じ。

はたけ-すゐれん 畑水練・畠水練【名】『畑の中にて、水泳を習ふ意』たたみずゐれん(疊水練)に同じ。（太平記）「畠水練しつる者ども、弓をはづし、兜を脫ぎて、我先にと降人に出でける間」（北窓瑣談）「沈存中も、東坡などと同じく、儒にして醫の事をいふことを好み、かの畠水練の徒なり」

はたけ-ぜり 畑芹・畠芹【名】［植］きけまん(黃菫)に同じ。（新六）「いたづらに荒るる園生のはたけ芹わびしげにてもある世なりけり」

はたけ-だす 刷出す【名】【動四他】拂ひ出だす。殘らず出だす。はたく。（吉野都女楠）「この頃續く不仕合（フシアハセ）、鍋・釜……糠味噌桶まではたけ出し」

はたけだ-もの 畠田物【名】備前物の一種。備前國畠田に住せし畠田一派の刀工。建久の頃より應永にかけての作多し。

はたけ-ちがひ 畑違・畠違【名】『はたけ(畑)㊁を見よ』業務の種類・範圍の異なること。おかどちがひ。

はたけ-つくり 畑作・畠作【名】畑を耕し、穀物・野菜などを作ること、又その人。はたさく。はたつくり。（五十年忌歌念佛）「和泉の國水間の里の佐治右衞門、畠作の田烏や、鳶が生んだる高給取（カウキフトリ）の」

はたけ-つち 畑土・畠土【名】畑に用ふる土。耕作に適する土。

はたけ-つ-もの 畑物・畠物【名】はたけもの(畑物)に同じ。［古語］（和名）「陸田種子、波太介豆毛乃」

はたけ-どなり 畑隣・畠隣【名】畑つづきの隣家。（猿蓑（去來））「筝や畑隣に惡太郎」

はたけ-な 畑菜・畠菜【名】［植］㊀蕓薹（アブラナ）の一品種。小くして、丈低く、葉の色淡きもの。春蒔きて、嫩葉又は花莖を食用に供し、又、葉より油を製す。㊁みづな(水菜)を云ふ。［京都の語］

はたけ-ぬし 畑主・畠主【名】畑の持主。はたぬし。（醒睡笑）「畑主腹立し、わめきければ」

はたけ-ねずみ 畑鼠・畠鼠【名】［動］はたねずみ(畑鼠)に同じ。

はたけ-ふ 畑生・畠生【名】畠の、麥・粟・黍などの生えてある處。［古語］（散木）「はたけふに黍食（ハ）むしじめしじめきてかしましきまで世をぞ恨むる」

はたけ-ほほづき 畑酸漿・畠酸漿【名】［植］せんなりほほづき(千生酸漿)に同じ。

はた-けみ 畑檢見・畠檢見【名】畑作に對して行ふ檢見。

はたけ-みち 畑道・畠道【名】畑の間に通じてある道。はたみち。（本朝三國誌）「山科（ヤマシナ）の山よせを、在所づたひの畑道」（冥途飛脚）「反故障子を、細目に開けて、見るや野風の畑道」

はたけ-むしろ 【名】［植］みぞかくし(溝隱)に同じ。

はたけ-むら 畑村・畠村【名】畑の多數ある村。（芭蕉）「麥生ひてよきかくれがや畑村」

はたけ-もの 畑物・畠物【名】畑に作る物。畑より收穫する物。はたさく。はたもの。蔬菜。（油糟）「いづ方も日照の年の畑物」

はたけ-やま 畑山・畠山【名】はたやま(畑山)に同じ。

はたけ-やま 畠山【名】㊀［地］武藏國大里郡本畠（ホンハタ）村の大字。荒川に沿ふ。當國の名族畠山氏の莊名を取りて名づく。㊁姓氏の一。桓武平氏の支族。村岡忠賴の

長子將恒(マサツネ)より出づ。將恒の子武基、秩父(チヽブ)別當と號し、その六世の孫重能、武藏國畠山莊司たりしより、氏とす。重忠、その子として、源賴朝に仕へ、後、北條氏に殺さる。重能の父重弘の三弟は、河越・高山・江戶三氏の祖、重弘の弟有重は小山田(ヲヤマダ)氏の祖たり。一名、秩父。**二**姓氏の一。淸和源氏の支族。源義家六世の孫泰國を祖とす。子孫、豐臣秀吉に仕へ、德川時代には、水戶家に仕へたり。

はたけやま-しげただ 畠山重忠【名】〔人〕武將。源賴朝の臣。武藏國の人。常に先鋒に當りて、戰功頗る多く、親重せらる。賴朝の死後、遺命によりて賴家を輔佐し、遂に北條時政の嫉を受けて讒せられ、建久二年、義時に討たれ、流矢に中りて死す。年四十二。

はた-こ 旗子【名】旗下に屬する家の子など。栂井日記「當家をさへ、……、旗下の樣にも、一旗子方の樣にも致し」

はた-ご 旅籠【名】**一**古、旅行の時、馬の飼料を盛るに用ひし籠。〔篼〕和名「篼、漢語抄云、波太古。俗用㆓旅籠二字㆒。飼㆑馬籠也」**二**古、旅行の時、食物・雜品などを入るるに用ひし器、又その食物。行李。はたごどころ(旅籠所)參照。空穗「旅籠二かけに、道の程の物入れて、馬におほせたり」宇治「宿を借り、旅籠開きて、物など食ひ」**三**はたごや(旅籠屋)の略。**四**はたごせん(旅籠錢)の略。

旅籠の馬【句】はたごうま(旅籠馬)に同じ。夫木「旅人の旅籠の馬のゆきずりに夏野の草をすさめやはせぬ」

旅籠の駒【句】前條に同じ。出觀集「畦(アゼ)傳ふ小田の中道霧こめて旅籠の駒もあしみたどれり」

はだ-こ 肌子【名】はだぎ(肌著)を云ふ。〔越中國の方言〕

はたご-うま 旅籠馬【名】旅籠**一****二**を負はせて運ばしむる馬。〔古語〕空穗「旅籠馬は嵯峨の院に、割籠(ワリゴ)は后(キサイ)の宮に」宇治「近く水やあると騷ぎ求むれど、御旅籠水も無し。こは、いかがせんずる、御旅籠馬にや、もしあると問へば」

はだ-ごえ 肌肥【名】播種の際、種子と共に肥料を施すと、又その肥料。

はたご-くひ 旅籠食【名】旅籠屋又は茶屋にて、飯を食ふこと。

はだ-ごころ 肌心【名】はだざはり(肌觸)に「同じ。

はた-ごしらへ 機拵【名】機を織る準備として、糊附・繰返・整經・經卷(ヘマキ)、綜絖(アヤトリ)の引込、筬通(ヲサドホシ)・機上(ハタアゲ)・管卷などの諸工程の總稱。

はたご-せん 旅籠錢【名】旅籠屋に拂ふ宿泊料又は食料。やどせん。はたごちん。はたごれう。はたご。宿料。東海道名所記「旅籠錢は、宵に渡すべからず、朝立つ時に渡すべし」續膝栗毛「旅籠錢ども取らせて、身が黨の借り受けたこの座敷ども、即ち今晚一夜は、この方の宅も同前ぢや」

はだ-こそで 肌小袖・膚小袖【名】綿入小袖の下に著る、袷の小袖。鎌倉年中行事「公方樣、白小袖、白綾なり。御袷衣は加賀絹、又說は肌小袖」置土產「太夫樣からはなむけに、二百目程入る肌小袖を取って、置土產に小判進ぜて」

はたご-ちん 旅籠賃【名】はたごせん(旅籠錢)に同じ。

はたご-ちやう 旅籠町【名】〔地〕東京市日本橋區にある町。具さには通(トホリ)旅籠町といふ。大傳馬(オホデンマ)町・小傳馬(コデンマ)町等に相接して、古、旅人の往來繁く、旅籠屋を業とする者多かりしよりの名といふ。輕口男「飢を助くる旅籠町、弓手(ユンデ)も馬手(メテ)も蕎麥切(ソバキリ)屋、おはひりあれや、殿樣たち、一杯六文、掛値(カケネ)無し、蒸蕎麥切の根本と、聲聲に呼ばはれば」

はたご-どころ 旅籠所【名】古、旅行の途中にて、旅籠**二**を開き、食事などしたため し處。〔古語〕蜻蛉「酉の時ばかりに下(オ)りて休みたれば、旅籠所とおぼしき方より、きりおほねもの汁して」

はたご-の-き はたごの木【名】〔植〕にはとこ(接骨木)を云ふ。〔加賀國の方言〕

はたご-ぶるひ 旅籠振【名】次條に同じ。〔古語〕空穗「旅籠ぶるひのあるじする日」

はたご-ぶるまひ 旅籠振舞【名】旅行より無事に歸りたる時に催す祝宴。はたごぶるひ。〔古語〕平治「粟田の大臣上りて、旅籠振舞せらるるな」

はたご-や 旅籠屋【名】旅人を休泊せしめ、又はその食事を取賄ふを業とする家。やどや。はたご。旅人宿。旅宿。旅館。二代男「自然、旅籠屋の女房に逆旅(ゲキリヨ)ならりよも知れぬ浮世」

はたご-れう 旅籠料【名】はたごせん(旅籠錢)に同じ。

はた-さうらう 秦滄浪【名】〔人〕儒者。名は鼎、字は子鉉。尾州藩明倫堂の教授たり。その學博綜にして、古書を校正し、後學を益すること多し。天保二年歿す。年七十一。

はた-ざうろく 秦藏六【名】〔人〕鑄金家。通稱は米藏。明治二十二年京都に歿す。年六十八。

はたさ-えび 草蝦【名】〔動〕てながえび(手長蝦)を云ふ。〔豐後國の方言〕

はた-さき 旗先【名】立てたる旗の上の方。はたがしら。はたて。はたくび。三河物語「御旗先を見て」

はた-さく 畑作・畠作【名】**一**はたつくり(畑作)に同じ。**二**はたけもの(畑物)に同じ。

はた-ささげ 畑豇・畠豇戮豇・粢紅豆【名】〔植〕豇豆の一品種。莖は殆ど蔓狀をなさず、纏繞性なく、莢は普通の豇豆よりも短く、種子紅色なるもの。我國、各地の園圃に栽培して、食用とす。はたけささげ。みどりささげ。

はた-さし 旗指・旗差【名】軍陣にて、馬に乘りながら、大將の旗を持つ侍。はたとり。はたもち。のぼりさし。旗手(キシユ)。**はたぞへ**(旗副)・**はたぶぎやう**(旗奉行)參照。盛衰記「旗指具して、親子三騎、坂を下りに歩ませたり」太平記「その行粧(ギヤウサウ)、見物の目をぞ驚しける。先づ旗差、その次に、逞しき馬に、厚總懸けて、一樣の鎧著たる兵八百餘騎」

はたさし-の-もの 旗指者【名】德川幕府の職制の一。旗指の事を掌りしもの。

はだ-ざはり 肌觸・膚觸【名】肌に觸るる感じ。肌に觸れた時の心もち。はだごころ。八笑人「男の肌ざはりは、氣味が惡い」

はだ-さむ 肌寒・膚寒【名】肌寒きこと。俳諧新選(丙谷)「肌寒を苦にせぬ顏のあはれなり」

はだ-さむし 肌寒し・膚寒し【形一】肌に觸るる時、冷かなり。萬葉「旅ごろも八つ著重ねて寢ぬれどもなほ肌寒し妹にしあらねば」「に同じ。

はた-ざめ 幡鮫【名】〔動〕かすざめ(扁鯊)

ばた-ざら バタ皿【名】西洋料理にて、各自、その麵麭に塗るバタを取分くるために、パン皿の側に添へて配付する小皿。

はた-さわがせ 傍騷【名】他人を騷がするのみにて、效果なきこと。ひとさわがせ。

はた-ざを 旗竿【名】**一**旗を取り附けて揭ぐるに用ふる竹又は棒。はたつり。**二**〔植〕十字花科に屬する二年生の草。高さ二三尺に達し、葉は披針形又は長楕圓形をなし、葉脚の左右、やや尖り、春夏の交、白色・小形の花、總狀花序をなして開き、後、直立せる細長き果實を結ぶ。各地の原野に自生す。〔南芥菜〕

はた-し 旗師【名】『師は借字にて、爲(シ)の義』はたあきなひ(旗商)に同じ。

はだ-し 跣【名】『肌足(ハダアシ)の略』**一**足袋(タビ)もはかず、履物(ハキモノ)も著けずに、地上を行くこと。徒跣。**二**『次條の略』とても敵(カナ)はぬこと。非常に劣りてあること。一代女「きのふの和布刈(メカリ)の舞は、高安はだしと譽め」浮世風呂「なんと、江戶子は素足(ハダシ)ぢやろが」

はだし-で-にげる 跣で逃げる【句】**一**とても敵(カナ)はずして、跣のまま逃げ出だす。**二**比較にならぬほど劣りてある形容。風來六六部集(放屁論後篇)「穢銀杏(ヨゴレギンナン)が辯說には、蘇秦・張儀も、跣で逃げ」

はたし-あひ 果合【名】はたしあふこと。「決鬪。

はたし-あふ 果合ふ【動四他】互に恨ある者共が、死を決して、最後まで鬪ふ。決鬪す。

はたし-がほ 果顏【名】したりがほ(爲たり顏)に同じ。

はたし-じやう 果狀【名】果合(ハタシアヒ)をせんことを申し遣る書狀。決鬪狀。若風俗

「天神の松原に出合ひ給へと、果狀を認め」和合人「先から果狀を附けられては、百年目だ」

はた-した 旗下 【名】㊀旗頭の下に直屬すること。部下。配下。麾下。甲陽軍鑑「晴信を取立て候はば、まさしく、我等、旗下に極まり候間」㊁他人の下風に立つこと。

はだし-たび 跣足袋 【名】車夫・人夫などが穿きて、草鞋に代用する足袋。

はたし-て 果して 【副】思ひし如く。案の如く。言ひし如く。

はたし-とぐ 果遂ぐ 【動下二他】はたす（果す）㊀に同じ。徒然「眞俗につけて、必ず果し遂げんと思はん事は、機嫌を言ふべからず」

はた-じね 機纏 【名】しねいと（纏）に同じ。

はたし-まなこ 果眼 【名】果合（ハタシアヒ）をなさんとする時のごとき、鋭きまなざし。諸國物語「御返答承らんと、果眼に成っていへば」

はだし-まゐり 跣參 【名】祈願のため、日數を限り、跣にて、神佛に參詣すること。蕪村「かかげあへぬ跣參や皐月雨（サツキアメ）」續鳩翁道話「ただ一人、讃州象頭山・金毘羅大權現へはだし參を致されました」

はた-しん はた秦 【名】支那秦の時代の「秦」の字を、同音にて、同じく支那の歷朝の一なる晉などと區別するためにいふ語。すすむ晉の類。

はた-しんでん 畑新田・畠新田 【名】しんはた（新畑）に同じ。

はだ-じゆばん 肌襦袢 【名】はだぎ（肌著）に同じ。

はだ-じらみ 衣蝨 【名】〔動〕『その白色の卵が襯衣（ハダギ）に產みつけらるるによりて名づく』しらみ（虱）を見よ。

はた-じり 機尻 【名】『機織女の腰の形の義に出づといふ』たなじり（棚尻）に同じ。

はた-じり 旗尻 【名】旗の末端。（旗頭（ハタガシラ）に對して）

はた-じるし 旗印・旗號 【名】旗に、神佛の名・紋所などを記して標章とせるもの。太平記「宮方と引き合ひて、旌（ハタジルシ）を擧げたり」

はた-じろ 鰭白 【名】〔動〕一種の魚。形、藻魚（モウヲ）に似て、身首短く、鰭小く、鰭に黑白の文あり。冬より春にかけて出で、味淡泊なり。

はたす 果す 【動四他】㊀爲し遂ぐ。しおほす。㊁敵を殺す。醒睡笑「この内に居るは、いかなる奴（ヤツ）ぞ。是非出でよ。はたさん」

はた-すすき 旗薄 【名】『旗の靡くがごとくに見ゆるよりいふ』穗の高く表れて靡きひらめける薄。萬葉「み雪ふる秋の大野に旗すすきしぬをおしなべ」

はた-すすき 旗薄 【枕】薄の穗といふ意より、ほ（穗）にかけていふ。萬葉「はたすすき久米の稚子（ワクゴ）がいましけむ三穗の窟は荒れにけるかも」（この歌にては、第四句の三穗の穗にかけていへるなりといふ）同「新室（ニヒ）の蠶時（コドキ）に至ればはたすすきほに出でし君が見えぬこの頃」

はた-すそご 端裾濃・耳裾濃・耳末濃・耳坐滋・鰭裾濃・端裾濃 【名】鎧の縅（ヲドシ）の一。左右の兩端を濃く、中央を淡き色に縅したるもの。盛衰記「越中次郎兵衞盛嗣は、滋目結（シゲメユヒ）の直垂（ヒタタレ）に耳裾濃の鎧を著たり」

はた-すはみ 【名】〔植〕そば（蕎麥）に同じ。

はた-すみざね 畑奧實 【名】〔人〕射禮家。通稱は五郎左衞門。岩代國會津の人。小笠原長時及びその子貞慶より、射術の奧義を授けられ、遂に畑流を起す。足利時代の末の人。

はだ-せ 肌背・膚背 【名】㊀はだ。はだへ。赤染衞門集「なみなみの事にもあらず天の川さてはだせをも斯くぞ打たれし」㊁鞍を置かざる馬の背。〔裸背〕運步色葉集「裸馬・裸背、ハダセ」曾我「鞍置くべき暇なければ、膚脊に打ち乘り」

はた-せいち 秦星池 【名】〔人〕書家。名は其馨、字は子聲、通稱は源藏。別號菊如齋。江戶の人。長崎に遊びて、淸人胡兆新の筆法を學び、最も楷・行を巧みにす。文政六年歿す。年六十一。

はだせ-うま 肌背馬・裸背馬 【名】はだかうま（裸馬）に同じ。義經記「判官殿の祕藏せられける大夫黑といふ名馬に、肌背馬にぞ乘りにける」

はた-そうは 秦宗巴 【名】〔人〕醫師。字は德岩、又、立安と稱す。山城國の人。初、豐臣秀次に仕へ、法印に敍せられ、號を壽命院と賜はり、後、德川家康の侍醫となる。傍ら文學を好み、博く典籍に通ず。

はた-そで 端袖・鰭袖 【名】袍・直衣（ナホシ）・直垂（ヒタタレ）などの製に袖の幅を廣くするために、一幅の奧袖に、更に、半幅だけ著け加へたる袖。源氏「わが御直衣よりは色深しと見たまふに、端袖もなかりけり」平家「褐（カチン）に、赤地の錦をもって、端袖いろへたる直垂に」

はた-ぞへ 旗副 【名】旗指（ハタサシ）に副ふる騎兵。おはたぞひ。了俊大草紙「錦の御旗差には、御旗副と號して、好き兵或は七騎或は三騎などを副へらるるなり」

はた-そり 畑橇・畠橇 【名】畑の中にて用ふる橇。

はた-た 螇蚸 【名】〔動〕『はたはた（螇蚸）の略』ばった（飛蝗）に同じ。

はた-だい 旗臺 【名】旗を立ておくに用ふる臺。はたや。

はた-だいこん 畑大根・畠大根 【名】〔植〕いぬがらし（犬芥子）を云ふ。〔陸前國仙臺の方言〕

はた-だいしやう 旗大將 【名】はたぶぎやう（旗奉行）㊀に同じ。

はたた-がみ 霹靂神・霆 【名】『霹靂（ハタタ）く神の義』烈しき雷。迅雷。〔古語〕

は-たたき 羽撃・翥 【名】はたたくこと。はばたき。鼓翼。東海道名所記「庭鳥も、羽たたきしてうたふ」

はた-たぎ 【名】『はたは袖の端、たぎはたぐりあぐる義といふ』左右の手を張り、袖をたぐり揚げて、わが身に著けたる衣を見ることといふ。〔古語〕記「沖つ鳥むな見るとき、はたたぎもこしよろし」

は-たたく 羽撃く・翥く 【動四自】はばたく（羽撃く）に同じ。爲忠集「朝露にこぬれはたたく鷺の散らまく惜しき梅の花かも」

はたたく 霹靂く 【動四自】雷烈しく鳴る。〔古語〕字鏡「磤磕、霹、止止呂久。又、奈留。又、比比佐久。又、波多多久」竹取「水無月（ミナツキ）の照りはたたくにもさはらず來けり」

はたたて-やま 旗立山 【名】〔地〕しらはたやま（白旗山）に同じ。

はた-ち 畑地・畠地 【名】畑として用ふる地。（田地・宅地などに對して）

はた-ち 二十 【名】二十歲。狹衣「はたちに、今二つばかりや足りたまはざらん」

はた-ち 二十 【數】『ちは接尾語』十の二倍。はた。にじふ。伊勢「比叡（ヒエ）の山をはたちばかり重ね上げたらん程して」

ば-たち 場立・塲立 【名】〔商〕てふり（手振）㊂に同じ。〔取引所の語〕

はたち-かづら 二十葛 【名】〔植〕擔子菌類に屬する菌類。菰（マコモ）に寄生し、病害を與ふ。まこもずみ。まこものすみ。

はたち-ばうず 二十坊主 【名】二十歲の僧。若年の僧。

二十坊主に牛の睪丸（フグリ）、五十坊主に鹿の角 【句】『おつ（落つ）㊆參照』少年の僧は、墮落するやうに見えて、反りて墮落せざること、牛の睪丸の、垂れて落ちさうにて落ちざるが如く、老僧は、墮落すまじく見えて、反りて墮落する者多きこと、鹿の角の、堅くいかめしげに見えながら、たやすく脫落するに似たり。〔諺語〕

はたち-やま 二十山 【名】〔地〕『伊勢物語に「富士の山を見れば、……、その山は、ここに譬へば、比叡（ヒエ）の山を、二十（ハタチ）ばかり重ね上げたらん程して」とあるに本づく』駿河國富士山の異稱。

はたつ 蕑 【名】〔植〕あけび（通草）に同じ。字鏡「蕑、山女也。阿介比。又、波太豆」

は-だつ 【動下二他】㊀はじむ。くはだつ。著手す。㊁改めて特に爲す。世間娘氣質「口が惡いとて、朝夕菜好（サイゴノミ）して、はだてて、煮たきさせ」

はだつ-かづら 蕑葛 【名】〔植〕あけび（通草）を云ふ。〔紀伊國の方言〕

はだ-つき 肌著・肌附【名】㊀衣服などの、直接に肌につくこと。㊁はだぎ(肌著)に同じ。一代男「空色の御肌著、中には樺繻子にこぼれ梅の散(シナヨ)」

はだ-つき 肌付【名】肌のやうす。源氏「透(ス)きたまへる肌つきも、いとうつくし」

はだつき-がね 肌著金・肌附金【名】はだつけがね(肌附金)に同じ。五人女「道中の肌附金」

ばた-つく【動四自】ばたばたとす。五人女「小町踊を見しに、……、聲せはしく、足音ばたつき」

はた-つくり 畑作・畠作【名】はたけつくり(畑作)に同じ。

はた-つけ 旗附【名】はなくり(花繰)に同じ。

旗附の緒(ヲ)【句】前條に同じ。

はだ-つけ 肌附・膚附【名】㊀馬具の一。馬の背に當て、兩脇の鐙(アブミ)の當る所に垂れ被ふもの。おほなめ。なめ。㊁じゆばん(襦袢)を云ふ。〔關西の方言〕

はだつけ-がね 肌著金・肌附金【名】肌身を離さず、大切に所持する金。五人女「油斷のならぬ世の中に、殊更見せまじき物は、道中の肌附金」

はた-づつ 旗筒【名】鎧の脊後に取附け、軍陣にて、小き旗をさす筒。うけづつ。奥羽永慶軍記「矢部が小旗を取って、わが旗筒に指し」

はた-つ-まり 畑守・畠守【名】〔植〕はたつもり(畑守)の轉。

はた-つ-もり 畑守・畠守【名】〔植〕りやうぶ(令法)に同じ。〔古語〕新六「はたつもり積りし雪も消えぬれば賤(シツ)がすさみに若菜摘むらん」

はた-つり 旗吊【名】はたざを(旗竿)に同じ。

はた-つ-もの 畑物・畠物【名】はたけもの(畑物)に同じ。〔古語〕紀「陸田種子、ハタツモノ」

はたて 果・涯・盡【名】はて。かぎり。際涯。〔古語〕萬葉「敷きませる國のはたてに咲きにける櫻の花の」古今「夕ぐれは雲のはたてに物ぞ思ふあまつ空なる人を戀ふとて」

はた-て 旗手【名】旗の上部。はたがしら。(旗足に對して)謠曲(木曾)「山鳩、翅を並べつつ、味方の旗手に飛びかけり」

はた-て【名】なかぬひそに同じ。

はた-で 鰭手【名】鰭(ハタ)に袖をかけていへる語とも、鰭に傍(ハタ)をかけていへる語ともいふ。〔古語〕記「遊びくる鮪(シビ)がはたでに妻立てり見ゆ」

はた-ときよし 畑時能【名】〔人〕武將。新田義貞の臣。通稱は六郎左衞門。武藏國の人。建武の初年、新田義貞の義兵を擧ぐるや、これに屬して、軍功あり。義貞死するに及び、脇屋義助に從ひて、越前の湊城を守る。奇計を以て屢ば賊を破り、延元四年、十六騎を以て鷹巣城を出で、足利高經の大軍と戰ひ、流矢に當りて死す。

はた-とせ 二十年・二十歳【名】十年の二倍。二十箇年。空穗「今年、はたとせあまり三十(ミ)とせには、まだ足らぬ程になん」

はた-どの 機殿・服殿【名】㊀機を織る殿。機を織る家。はたや。〔古語〕記「織殿、ハタドノ」㊁伊勢國多氣(タケ)郡大垣内(オホガイト)村と同國飯南(イヒナミ)郡井口村とにある殿舍。前者は、伊刀麻神と麻刀方神とを祭神とし、正しくは神服部機殿(カンハトリノハタドノ)といひ、里人は下館と呼び、後者は、神麻續屋姬(カンヲミヤヒメ)命を祭神とし、正しくは神麻續機殿(カンヲミハタドノ)といひ、里人は上館と呼ぶ。

はたどの-まつり 機殿祭【名】機殿㊁の祭。神代に天照大神の齋機殿(イミハタドノ)にて神衣を織りたまひきといふ緣による。四月十四日に行ふを荒妙(アラタヘ)の神衣(カンミソ)祭といひ、九月十四日に行ふを、和妙(ニキタヘ)の神衣祭といふ。

はた-どり 旗取【名】㊀はたさし(旗指)に同じ。籾井日記「物司、旄取(ハクトリ)どもと見え」㊁次條の略。

はたどり-きやうさう 旗取競爭【名】目的の場處に立て並べたる旗を、數多く又は早く取りたるを勝とする競技。

はた-なか 畑中・畠中【名】畑の中。俳諧古選(左菊)「畑中にひとり吉野の柳かな」

はだな-だいこん はだな大根【名】〔植〕はだのだいこん(秦野大根)の轉訛。

はた-なりた 畑成田・畠成田【名】畑の、田に成りたるもの。東寺文書抄「畠成田五十束代直五斗」

はだ-なる 肌馴る・膚馴る【動下二自】男女、膚を觸れて馴れあふ。一代男「大臣といはるる程の人、いかなる者か寐息とめし、その跡を肌馴るる事」

はた-ぬ 旗野・波多野【名】〔地〕古、大和國高市に在りし野。今の高市村畑の地ならんといふ。萬葉「霰降りいたも風吹き寒き夜や波多野に今宵吾が一人寢む」

はだ-ぬぎ 肌脫・膚脫【名】㊀『「肌を脫ぐ」を見よ』肌を脫ぐこと。肉袒。㊁次條の略。

はだぬぎ-すがた 肌脫姿・膚脫姿【名】手古舞(テコマヒ)の者の、肌脫になりて、襦袢を現したるもの。はだぬぎ。

はだ-ぬぐ 肌脫ぐ【動四他】「肌を脫ぐ」に同じ。

はた-ぬし 畑主・畠主【名】はたけぬし(畑主)に同じ。狂言(瓜盜人)「畠主も見舞は致すまい」

はだ-ぬり 肌塗・膚塗【名】蒔繪にて、地肌を緻密ならしむるため、ろせ漆にて、錆上(サビアゲ)の上を塗ること。

はた-ねずみ 畑鼠・畠鼠【名】〔動〕嚙齒類に屬する哺乳動物。小形にして、體長三寸に達し、背面は帶褐灰黑色、腹面は灰白色、口吻尖らず、尾短し。畑に穴を掘りて棲み、農作物を食害し、穀物等を巢に貯ふ。はたけねずみ。もぐらねずみ。

はた-ねんぐ 畑年貢・畠年貢【名】畑に課する年貢。狂言(筭)「畑年貢を出しまする」

はだの 秦野【名】〔地〕相模國中郡にある町。湘南輕便鐵道ありて、鐵道東海道線二宮(ニノミヤ)驛と連絡し、葉煙草專賣支局及び同試驗場あり。

はだの-だいこん 秦野大根・波多野大根【名】〔植〕大根の一品種。守口(モリグチ)大根と、品質相同じく、昔、相模國秦野町及びその附近より作りて出だししもの。ながねだいこん。

はだの-たばこ 秦野煙草・波多野煙草【名】相模國秦野町及びその附近より產出する煙草。

はたの-よこやま 波多横山【名】〔地〕伊勢國一志(イチシ)郡八太(ハタ)鄕にある山。萬葉「十市皇女(トイチノヒメミコ)、伊勢神宮に赴かれし時、波多の横山の巖を見て、吹黃刀自(フキトジ)の作(ヨ)める歌」

はた-ば 機場・機場【名】はたおりば(機織場)㊁に同じ。

はだ-ばかま 肌袴・褌【名】はかま(袴)㊀に同じ。盛衰記「鹿島與一とて、無雙の水練あり、鎧脫ぎ置き、褌(ハダバカマ)をかき」

は-たばこ 葉烟草・葉煙草【名】烟草の葉の、採取したるままにて、刻まず、貯藏するやうにしたるもの。(刻(キザミ)烟草に對して)績留「葉烟草刻むも、烟の種とぞなりにける」

はた-ばこ 旗箱・旗筥【名】旗を藏めおくに用ふる箱。

はた-ばしよ 機場所・機場所【名】はたば(機場)に同じ。

はた-はた 雷魚・鱩・鰰【名】〔動〕『霹靂神(ハタタガミ)の時、多く群るよりいふ。鱩も鰰も和字』硬骨類に屬する魚。鱚(スキ)の類。體は長さ七八寸に達し、鱗なく、背部は淡褐色にして、銀色を含み、前鰓蓋に五箇の强き棘あり、側線の下には、濃褐色の條線あり、脊鰭二あり、その根基に沿ひて、方形・暗褐色の斑板あり。北海・日本海沿岸の特產にして、冬季漁獲す。又、十一二月の頃、岩礁の間に群來して、夜中、卵を海藻に產みつく。これを「ぶりこ」と呼び、食ふべし。おきあぢ。

はた-はた 蟿螽【名】〔動〕『はたおり(機織)㊁を見よ』ばった(飛蝗)㊁に同じ。和名「蟿螽、波太波太」

はた-はた【貌】ばたばた㊀に同じ。落窪「爪はじき、はたはたとして」新六「吹きたつる槇の板戸のはたはたと身をふるはるる山颪かな」武家義理物語「女を、はたはたと取卷き、懷中を探しけるに」

ばた-ばた【名】芝居の狂言にて、忙しく舞臺に駈出で來るしぐさの足音に合はせて鳴らす附拍子(ツケヒヤウシ)。八笑人「そこで、又立(タテ)だが、それも、ばたばたや、どっこいと見えになっては、よくねえぞ」

ばた-ばた【貌】一幅廣き物と物との、續けざまに烈しく當り、又は風の物に續けざまに吹き付くる音。はたはた。ばたばた。ほとほと。醒睡笑「雞は、ばたばたとして、とつてこうと鳴く」二草履などをはきて、人の走る時などの音。はたはた。ばたばた。一代女「ばたばた歩み」三幅廣き物の、續けざまに倒るる音。四物事の速かにはかどるさま。

ぱた-ぱた【貌】前條一二三に同じ。

はたはた-ずし 雷魚鮨・鮨鱩・鰰鮓【名】鱩にて作りたる鮨。羽後國秋田の名產。毛吹草「羽州秋田のはたはた鮨」

ばた-ぱん 牛酪麪麭【名】一バタを加へて製したるパン。二食麪麭(シヨクパン)を薄く切りて、その面に、バタを塗りたるもの。

はた-ばり 端張【名】一ひろがり。はば。幅員。平家「備前國福隆寺繩手は、端張、弓杖(ユンヅエ)一杖(ヒトツエ)ばかりにて、遠さは、西國道の一里なり」七一職人歌合「白布(シロヌノ)召せ。はたばりも、尺も、よく候ぞ」二はば。權勢。謠曲(錦木)「細布のはた張も無き身にて」

はた-ばり 機張【名】しんし(伸子)に同じ。

はた-ばる 端張る【動四自】一幅廣くあり。ひろがる。のぶ。ふみはたばる(蹈端張る)參照。枕「指貫(サシヌキ)のはたばりたる」盛衰記「太く逞しきこたへ馬の、はたばりたる逸物(イチモツ)なり」二幅が利(キ)く。威勢そなはる。

はた-び 旗日【名】國旗を揭ぐべき日、卽ち大祭・祝日。

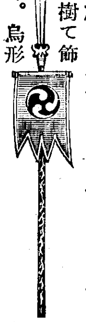
はた-ぶぎやう 旗奉行【名】一昔、戰時に、主將の旌旗を掌りし職。武者奉行にも次ぐほどの要職たり。古くは旗差(ハタサシ)といへり。旗大將。幟大將。幟(ノボリ)奉行。甲陽軍鑑「六本の御旗奉行一人、總旗奉行一人」二德川幕府の職制の一。老中支配の下に、德川氏傳來の總白の旗、金扇の大馬標、半月の小馬標以下の諸旌旗を掌りしもの。菊の間南敷居外詰にて、平時は、儀式の時に登營するに止まり、定員は、本丸にては二人若しくは三人、西の丸にては一人にて、與力一人、同心十五人づつこれに屬したり。

はた-ぶくろ 旗袋・幡袋【名】旗を包みおくに用ふる袋。

はだ-ふところ 肌懷【名】一はだへと、ふところとにて、懷中の義か、又、内懷(ウチブトコロ)に同じきか。釋迦如來誕生會「一生に覺えぬ肌懷を探され、盜人の名を附いたか」

はだ-へ 肌・膚【名】『へはへ(重)の義か』一人畜の身體の外面の、皮の被へる處。はだ。かはべ。皮膚。二刀劍の身の表面。はだ。狂言(長光)「備前長光……はだへは、いかやうにあるぞ」

はた-ぼこ 旗鉾・幢・橦【名】『幡鉾の義』小き旗を、上部に附け、儀式の時、戰時などに樹て飾る鉾。烏形(ウギヤウ)幢・日像(ニチザウ)幢など。萬葉「婆羅門の作れる小田(ヲダ)を食(ハ)む烏まなぶた腫れて幡幢(ハタホコ)にをり」和名「寶幢、波多保古」



(はたほこ)

はたほこ-の-をんせん 旗鉾溫泉【名】〔地〕信濃國小縣(チヒサガタ)郡中村にある溫泉。別稱、子持溫泉。古稱、那須溫泉。

はた-まがき 旗籬【名】旗を屋外に立てて結ひ附けおくために、埓の如く作れるもの。武邊咄聞書「さしたまふ馬印(ウマジルシ)・馬簾(バレン)を取つて、旗籬に立つる」

はだ-まき 肌卷【名】ふんどし(犢鼻褌)に同じ。

はた-また 將又【副】はた(將)を強めていふ語。(漢文の訓讀にいふ)紀「抑又、ハタマタ」東鑑「將又高橋生押領武士任レ口申すをば」

はだ-まもり 肌守【名】肌に著けて大切にする守札(マモリフダ)又は守本尊(マモリホンゾン)。肌の守(マモリ)。

はだ-み 肌身【名】はだ。からだ。身體。

肌身に添ふ【句】次條に同じ。謠曲(高野物狂)「肌身に添ふるこの文(フミ)」

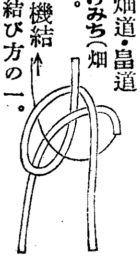
肌身を離さず【句】「肌を離さず」に同じ。狂言(墨塗)「朝夕肌身を離さず持たせられた鬢鏡」合邦が辻「この盃、肌身離さず抱き締めて、いつか鮑の片思」

肌身を汚す【句】「肌を汚す」に同じ。梅暦「肌身を汚すやうな勤をさしては」

肌身を許す【句】「肌を許す」に同じ。

はた-みち 畑道・畠道【名】はたけみち(畑道)に同じ。

はた-むすび 機結【名】緒の結び方の一。下の圖を見よ。



(はたむすび)

は-たん 破綻【名】破れほころぶること。事の成立たぬこと。

は-だん 破談【名】取極めたる相談を止むること。相談の不成立に歸すること。

ばたん【貌】ばたり一に同じ。

はたん-きやう 巴旦杏【名】〔植〕『巴旦は、爪哇(ジヤバ)島の地名(Bantam)に宛てたる漢字』薔薇(バラ)科に屬する喬木。高さ二丈五尺位に達し、葉は披針形にして、鋸齒あり、光澤を有す。五瓣・淡紅色の美花、葉に先だちて開き、實は肉硬く、熟すれば、裂開して、核を現す。核は藥用又は食用とし、その未熟なるは生食に適す。あめんどう。かんへんたう。

はだん-ばなし 破談話【名】破談の話。八笑人「役まはりは、おれが持前(モチマヘ)の女形(ヲヤマ)だ。はあ、これも、まづ破談咄らしいの」

はた-め 傍目【名】よそめ(餘所目)三に同じ。

はた-め 機女【名】はたおりめ(機女)に同じ。國基集「尾張なるはたりの絲を手玉(タダマ)ゆふはための織れるきぬの著ほしき」

はた-めいわく 傍迷惑【名】他人の迷惑となること、又その事柄。

はた-めく【動四自】はたはたと鳴る。〔古語〕字鏡「爆、皮太女久」いほぬし「檜木(ヒノキ)を人の焚くが、はしりはためくを」

はた-もち 旗持【名】一旗を持ちゆく役、又その人。二地位低き部下。

はた-もと 旗本【名】一軍中にて、大將の居る所。本陣。本營。麾下。太平記「將軍の御旗本に、輪違の旗打立て」二『はたした(旗下)を見よ』本陣に居て、大將に直屬し、その護衞に當る兵士。大將に直隷して、その號令を受くる兵士。三德川氏の家臣の、萬石未滿・御目見(オメミエ)以上の者。

(習慣に由れるにて、公稱にはあらずといふ)ごけにん(御家人)參照。

旗本八萬騎(ハチマンギ)【句】『吹塵錄に「世間また云ふ、德川氏の旗下總數八萬騎と。これは石高(コクダカ)八百萬石より誤稱するが如し。旗下士の稱ある者にして、その祿萬石に及ばざる者、實數三萬三千餘家のみ。然れども、世に三萬騎と稱するもの、又その原因あり。譜代の臣下にして、萬石以上の祿を食(ハ)む者、卽ち世俗に譜代大名と稱する輩百數十家、これ等の家臣、昔時は、皆、旗下の隊に編成せしものなれば、これを通算する時は、その數、八萬前後に及ぶべし」といへり』德川幕府の旗下の士の概數をいへる語。

はたもと-いくさぶぎやう 旗本軍奉行【名】武家の職制の一。陣中にて、各部隊の軍奉行以外、主將の旗本に屬して、軍事を總裁せしもの。

はたもと-ぐみ 旗本組【名】はたもとしゆう(旗本衆)に同じ。甲陽軍鑑「信玄公旗本組」

はたもと-しはい 旗本支配【名】『旗本三を支配する職なるよりいふ』わかどしより(若年寄)の別稱。

はたもと-しゆう 旗本衆【名】旗本に屬する人人。はたもとぐみ。

はたもと-はつと 旗本法度【名】しよしはつと(諸士法度)に同じ。

はたもと-やつこ 旗本奴【名】江戶時代に、旗本の士にして、男伊達の所行をなし者。(町奴(マチヤツコ)に對して)

はた-もの 機物【名】一はた(機)一に同じ。〔古語〕紀「機、ハタモノ」後撰「から衣たつたの山のもみぢ葉ははたものもなき錦なりけり」二機(ハタ)一にて織りたるもの。おりもの。はた。萬葉「千名(チナ)には人はいふとも織りつがむわが機物の白麻ごろも」

はた-もの はた物【名】磔(ハリツケ)にする木材。今昔「この男の髮に、繩を附けて、幡物といふ物に寄せて、背を出させて、足を結ひ曲めて、拈りおきて」

機物に上ぐ【句】磔(ハリツケ)の刑に處す。甲陽軍鑑「伯耆座光寺を搦め捕り、機物にあげ」

はたもの はた物【名】いがた(鑄型)に同じ。〔古語〕和名「鎔、世遖乃波太毛能」

はたもの 畑物・畠物【名】はたけもの(畑物)に同じ。◯

はたや 機屋【名】機を織る家。織物㊀をする家。

はたや 旗屋【名】㊀旗・幕などを納めおく所。甲陽軍鑑「御旗屋に火事出來候へども」㊁はただい(旗臺)に同じ。㊂瓜を賣る店、又その人。〔肥前國長崎の方言〕長崎歳時記「この日、市中のはた屋ども、野中に假店をしつらひ、硝子(ビイドロ)よま・はたを商ふ」

はたや 將や【句】はた(將)の條下を見よ。

はたやす 果安【名】〔人〕和銅年間の大和國添下(ソフノシモ)郡の人。性順良にして、よく父母に孝に、又、慈悲の心に富む。近鄕の人、その義に感じ、敬愛すること、親の如し。朝廷旌表して、終身課役を免ず。

はたやはた 將や將【句】はた(將)の條下を見よ。

はたやま 畑山・畠山【名】畑のある山。はたけやま。新六「はた山のをのへつづきの高がやに臥す豬(ヰ)ありやと人とよむなり」

はだよし 肌好【名】土器の肌を美しく磨きたること、又その土器。うちぐもり。

はだよしいも 肌佳薯【名】〔植〕つくねいも(佛掌薯)に同じ。

はだら 斑【名】はだれ(斑)に同じ。〔古語〕萬葉「夜を寒み朝戸を開き出でて見れば庭もはだらにみ雪降りたり」顯輔集「輕(カル)の池の入江をめぐる鴨鳥のうは毛はだらにおける朝露」

はだらあみ はだら網【名】揚繰(アグリ)網の一種。長方形にして、長さ百三十五尋、幅二十二三尋。その長き一方に浮子(アバ)を、他の一方に沈子(イハ)を附し、十人乘の網船二艘と、三人乘の手船一艘又は二艘とにて使用し、その他の方法は、普通の旋網に異なる所なし。主に鰶(コノシロ)・江鰶魚(コハダ)を漁獲するに用ふ。

はたらかす 働かす・活かす【動四他】働くやうにす。はたらかしむ。うごかす。活用す。枕「蛇(ナハ)……尾はたらかさんを、雌(メ)と知れ」盛衰記「源三、騂(ハ)ね返さんとしけれども、三位、力增(チカラマサリ)なりければ、抑へて、更に働かさず」

はたらき 働【名】㊀はたらくこと。うごくこと。動作。活動。勞働。㊁勉めて事を爲すこと。ほねをり。てがら。いさを。功勞。㊂運轉。作用。生玉心中「千萬碎く氣の働」㊃世を渡るにつきて、巧に事を處理すること。才能の機轉。心の運用。うでまへ。和合人「さすが櫻田立作者(タテサクシヤ)のはたらきといふものさね」㊄雜役に使はるる小使。でっち。㊅〔語〕語尾の變化。活用。「四段のはたらき」㊆能(ノウ)の舞の、笛・大小鼓・太鼓ありて、歌謠を伴なはず、勇猛・奮迅の樣をなす、短きもの。まひはたらき。

はたらきうごく 働動く【動四自】はたらく(働く)㊀に同じ。著聞「しばし念誦(ネンズ)の間に、その瓜はたらき動きけり」

はたらきかけ 働掛【名】㊀相手に、擧動を仕掛くること。(受身に對して)㊁〔語〕『英Active voice』他に向ひて、動作を起す性質の動詞。「書く」・「見る」・「與ふ」の類。能相。能動。(受身に對して)

はたらきくわい 働會【名】多くの派出婦を養ひ置き、諸方の需要に應じて派出する會。

はたらきことば 働詞【名】〔語〕どうし(動詞)に同じ。

はたらきざかり 働盛【名】世に立ちて、さかんに働く年輩。活躍の時代。

はたらきしろ 働代【名】働きたるに對する報酬の金。新版歌祭文「彌忠太樣、けふの働代は、え、それ、金二兩」

はたらきて 働人【名】はたらく人。

はたらきばち 働蜂【名】〔動〕こうほう(工蜂)に同じ。

はたらきぶり 働振【名】㊀働く時の樣子。㊁よく働きてあるやうに見せかくること。

はたらきもの 働者【名】㊀よく働く人。よくかせぐ人。㊁腕まへのある人。巧みに事を處理する人。

はたらきをとこ 働男【名】下働(シタバタラキ)をなす男。下男。

はたらきをんな 働女【名】下働(シタバタラキ)をする女。下女。

はたらく 働く【動四自】『はたははたと動く義。らは助語。働は人の動く義にて作りたる和字』㊀うごく。活動す。空穗「鯉・鯛は、生きてはたらくやうにて」著聞「屍に向って、聲をあげて加持するに、屍はたらぎ動きて、起き上りて」平治「未だ目ははたらき、息通ひけるを」一代男「心のはたらかぬ故ぞ」㊁勉めて仕事を爲す。精を出して從事す。骨を折る。勞働す。勉勵す。活動す。㊂作用生ず。効用あらはる。活用す。運用す。㊃良き品を安く賣る。㊄〔語〕語尾變化す。活用す。

働けば廻(マハ)る【句】家業に勉勵すれば、金廻(カネマハリ)よくなる。〔諺語〕

はだらご 斑子【名】〔動〕このしろ(鰶魚)を云ふ。〔筑前國の方言〕

ばだらひ 馬盥【名】㊀馬を洗ふに用ふる、大なる盥。うまだらひ。俳諧新選(必化)「馬盥にさみだれ傘や數十本」㊁形を前記のに摸して作り、花を活くるに用ふるもの。

はだらゆき 斑雪・沫雪【名】はだれゆき(斑雪)に同じ。〔古語〕蜻蛉「今年いたう荒ることなくて、はだら雪、ふたたびばかりぞ降りつる」

ばたり【貌】㊀重く又は幅廣くして長き物の落ち、倒れ、打當り、閉ぢなどする時の音。ばったり。ばたり。ばったり。ばたん。ばたん。㊁事の俄に止りたるさま。ばったり。ばたり。ばったり。ばたん。ばたん。

ぱたり【貌】前條に同じ。

はたりづかひ 徵使・促使【名】租稅を徵集する使。〔古語〕

はたる 徵る・促る【動四他】責めうながす。催促す。紀「責、ハタル」萬葉「檀越(ダンヲチ)や然(シカ)もな言ひそ里長等(サトヲサ)がえだち徵(ハタ)らば汝(ナ)も哭(ナ)かむ」

はだれ 斑【名】㊀まだら。まばら。はだら。まんだら。〔古語〕萬葉「沫雪かはだれに降ると見るまでに流らへ散るは何の花ぞも」夫木「しぐれするはだれの山はもみぢ葉の色づくほどの名にこそありけれ」㊁はだれゆき(斑雪)の略。〔古語〕萬葉「笹の葉にはだれ降りおほひ消(ケ)なばかも忘れむといへばまして思ほゆ」

はだれしも 斑霜【名】はだれに降りたる霜。まだらに置ける霜。〔古語〕萬葉「天雲のよそにかりがね聞きしよりはだれ霜降り寒しこの夜は」

はだれゆき 斑雪【名】㊀はだれに降りたる雪。まだらに降れる雪。はだらゆき。はだれ。〔古語〕夫木「はだれ雪あだにもあらで消えぬめり世にふることや物憂かるらん」頼政集「はだれ雪降るかと見れば九重に散りかさなれる花にぞありける」㊁ほろほろと降る雪。〔越後國邊の方言〕

はち 八【名】『はちざゑもん(八左衞門)・はちべゑ(八兵衞)㊀を見よ』㊀げっけい(月經)を云ふ。〔信濃國上田の方言〕㊁『はちかんを見よ』幼稚なる子女の、早く才氣づきて、輕佻なる言行をなすこと。おてんば。はちかん。はちべゑ。〔京都・大阪邊の語〕

はち 蜂【名】〔動〕㊀膜翅類に屬する昆蟲中、蟻類を除きたる他の一類。體は細長くして硬く、胸腹の間細く、尻大きく、頭上に一對の觸角あり。通常、複眼の外に、三箇の單眼を具ふ。前後二對の翅は、膜質・透明にして、脈少なく、黃・褐色又は黑紫色を呈し、或は、これらの斑紋を有するものあり。前翅は、後翅よりも大きく、密著して、宛も一翅に似たり。又、稀には、翅を缺くものあり。雌は、尾端に、毒腺及び管狀の毒劍を具ふ。種類多く、中にて、雀蜂(スズメバチ)・熊蜂・自我蜂(ジガバチ)・泥蜂(ドロバチ)・足長蜂・蜜蜂など、普通なるものなり。㊁すずめばち(雀蜂)の特稱。㊂あしながばち(足長蜂)の特稱。

蜂に上下の禮あり【句】『關尹子に「聖人師レ蜂立二君臣一」とあり』蜂に主從の別あり。〔諺語〕聖德太子繪傳記「蜂に上下の禮あり、烏に反哺の孝あり」

蜂の巣に礫(ツブテ)を打ったやう【句】甚しく噪ぎ立つさま。蜂の巣をつついたやう。〔諺語〕

蜂の巣をつついたやう【句】前條に同じ。〔諺語〕

蜂を拂ふ【句】次條を見よ。

身の蜂を拂へ【句】次條に同じ。〔諺語〕重帷子「彼(アレ)めも、身の蜂拂ひかね、お暇申し捨て、缺落(カケオチ)致す處を」

面面(メンメン)の蜂を拂へ【句】他人の事をかまふよりは、先づ自己を顧みよ。人の蠅を逐ふより、己の蠅を逐へ。**はちはらひ**(はち拂)參照。〔諺語〕嵐雪「面面の蜂を拂ふや花の春」八犬傳「面面の蜂を拂ふに增すことなし」

わが蜂を拂へ【句】前條に同じ。〔諺語〕諺「人事言はんより、わが蜂拂へ」

はち 鉢（梵 Patra(鉢多羅)の略）【名】㊀『體・色(シキ)・量の三者、何れも法に應ぜる義、又、賢聖(ケンシヤウ)の人の供養を受くるに應ぜる義にて、應器又は應量器と譯す』印度の食器。鐵製・石製・陶製あり。鉢盂(ハチウ)。**えはち**(衣鉢)參照。和名「鉢、波知。學二佛道一者食器也。胡人謂二之盂一也」㊁皿よりは深く、瓶(カメ)よりは開き、食物・氷などを入れおくに用ふる器。多くは陶製なれど、別に木鉢(キバチ)もあり。又、手洗(テアラヒ)鉢・金魚鉢・乳(ニユウ)鉢などあり。どんぶり。㊂托鉢僧の、鉢に受くる米錢。狂言(惡坊)「行脚(アンギヤ)の僧に、鉢を入れさっしやい。はっち、はっち」㊃**うゑきばち**(植木鉢)の略。俳諧新選(移竹)「鉢の梅待つも二粒三粒かな」㊄掘り起したる植木の根の、土を帶びて塊をなせる部分。〔植木屋の語〕㊅人畜の頭の頭蓋(ヅガイ)骨の部分。生玉心中「天窗(アタマ)の鉢」㊆兜の、頭の上部を覆ふ部分。多くは鐵製なり。〔盔〕盛衰記「胄の鉢かけて、からりと射ぬき」

鉢の油を覆(クツガヘ)す【句】『付法傳の卷三に見ゆ』商那和主(シヤウナワス)の門人優婆毱多(ウバキクタ)三十二相・八十種好を具へざれども、その功德、佛に等しとて、無相好佛(ムサウゴウブツ)と稱せらる。嘗て鉢の油數滴を棄てし時、他の比丘(ビク)より、佛在世の時は、粗暴の比丘すら、一滴の水を覆す事をもせざりしにといはれて、自ら悔い自ら責めたりしといふ故事。

鉢の油を擎(ササ)ぐ【句】『菩薩處胎經の卷四に「智者將レ護レ身、堅固不二傾動一、如三彼犯罪人擎二持滿鉢油一、若棄二油一滴一罪交入二大辟一」、義楚「律云、護二持淨戒一、如レ擎二油鉢一、若レ護二浮嚢一也」とあり。**ゆだん**(油斷)參照』戒律の嚴守を、油を滿てて擎げたる鉢を傾けざるに譬へていふ語。榮花「いとど戒律を守りて、鉢の油を傾(カタブ)けず」

鉢の油を持つ【句】前條に同じ。

鉢の物【句】**かはらけもの**(土器物)に同じ。

鉢を開く【句】『**たくはつ**(托鉢)の訓讀。托は、拓に通ず』鉢を持ちて、米錢を乞ひあるく。托鉢をなす。**はちひらき**(鉢開)參照。狂言(手負山伏)「貧僧、……道道、鉢を開いて通ります」醒睡笑「毎朝鉢を開く者、その類、二三人寄りあひ」

はち 土師【名】『土師(ハジ)の轉か、又は**はちばうず**(鉢坊主)の略か』**おんばう**(御坊)㊀を云ふ。〔伊賀國の方言〕

はち 發【名】次條を見よ。

發の緒(ヲ)【句】箏(サウ)の琴の調子の絃。雙調にては第三の絃、盤渉(バンシキ)調にては第五の絃の類。源氏「一越(イチコチ)調の聲に、はちの緒を立てて、ふとも調べやらでさぶらひたまへば」

はち 鈸【名】**ごうばち**(銅鈸)に同じ。**ねうはち**(鐃鈸)參照。

はち 八【數】四の二倍。七に一を加へたる數。やっつ。や。

はぢ 恥・耻・辱【名】恥づること、又、恥づべきこと。恥辱。

恥有り【句】恥づべきことを知れり。體面を重んず。恥かしからず。(「恥無し」に對して)盛衰記「この城戸口(キドグチ)には、恥ある者もなきか。……いつまで命を惜しむらん」吉野拾遺「河内國にて少しなる所を知らさんと云ひけれども、恥ある一矢をも射さぶらひてこそとて、辭しにけり」

恥言はにや、理が聞えず【句】「恥を言はねば、理が立たず」に同じ。〔諺語〕

恥隱る【句】恥の隱れて、人に知れぬやうになる。空穗「後はとまれかくまれ、知るとだにのたまはば、恥かくれぬべし」

恥無し【句】㊀恥しくなし。おくれを取らず。源氏「今の淺はかなるも、昔のあとに恥なく賑はしく」榮花「恥なき程の女房十人」㊁恥づべきことを知らず。良心なし。あつかまし。厚顔なり。(「恥有り」に對して)源氏「かたくなしき姿をも恥なく」榮花「さべき五位の女などの、恥なき程なりつるを」

恥の上塗(ウハヌリ)【句】「恥の恥」に同じ。八百屋お七「すごすご歸りたまふは、恥に上塗する同前」風來六六部集(放屁論後篇)「なほ、いつまでか活き延びるほど、恥の上塗」

恥の上(ウヘ)の損【句】恥をかきたる上に、損をすること。太平記「仕出したる事もなくて、若干討たれにければ、あはれ、恥の上の損かなと、諸人、口ずさみは、なほ止まず」

恥の搔上(カキアゲ)【句】次條に同じ。

恥の恥【句】恥の上の恥。重ねて恥を受くること。恥を搔きたる上に、恥を搔くこと。恥の上塗。恥の搔上(カキアゲ)。川中島合戰「跡で詮索、恨言ふほど恥の恥」

恥を言はねば、理が聞えず【句】次條に同じ。〔諺語〕膝栗毛「恥さあ語り申さにやあ、理が聞え申さないが、その雷が、私共(ワタシドモ)の娘と、がらい懇のうしまして、互に、はあ、離れべい樣子もおざんないから」

恥を言はねば、理が立たず【句】自己の恥を打ち明くるに非ざれば、事の條理、分明せず。〔諺語〕

恥を思はば命を捨てよ、情を思はば恥を捨てよ【句】恥を重んぜば、命を顧みず、情に殉ぜんとせば、恥を捨つべし。〔諺語〕

恥を搔く【句】㊀恥を受く。面目を失ふ。太平記「物具を捨て、馬を失ひ、恥をかく事多ければ」御伽草子(鉢かづぎ)「只今恥をかくべき事の悲しさよ」㊁折角さし出したる食物に、箸を著けざりし時、その食物が恥を受くる意にていふ語。

恥を清む【句】「恥を雪(スス)ぐ」に同じ。平家「賴朝、君の御憤を休め奉り、父の恥を清めんと思ひ立ちし上は、平家を亡さんことは、案の内に存ぜしかども」

恥を曝す【句】わが恥となるべき事を、他に知らす。公衆の面前にて、恥を受く。著聞「つひに定めて搦めいだされて恥をさらし、からき目をこそ見候はんずれ」

恥を知る【句】恥づべき行を辨へ知りて、これを爲さず。曾我會稽山「仕損じては一期(イチゴ)の不覺、恥を知ったる男子なるぞ」

恥を雪(スス)ぐ【句】『史記の越世家に「昔者、君臣辱二於會稽一、所二以不レ死、爲二此事一也。今既以雪レ恥、臣請從二會稽之誅一」とあるに本づく。**せつじよく**(雪辱)參照』恥をぬぐふ。恥辱を除く。恥を淸む。

恥を捨つ【句】恥を顧みずに事を行ふ。恥を恥とも思はず。竹取「かの鉢を棄てて又言ひけるよりぞ、面(オモ)なき事をば、はぢを捨つとはいひける」一代女「煮賣屋に、恥を捨てて驅け込み、饂飩すこしと云ひさま」

恥を見す【句】恥を見るやうに仕向く。恥をかかす。はづかしむ。竹取「こらのおほやけ人に見せて、恥見せんと腹だちをり」

恥を見る【句】「恥を搔く」に同じ。穗空「わが幸なく、恥見るべき宿世(スクセ)のありければ」

は‐ち 把持【名】物を手に、しかと持つこと。握り持つこと。

ばち 撥【名】『絃を撥(ハ)ふやうにして用ふるよりいふ』琵琶・三味線などの絃に觸れしめて彈き鳴らすに用ふる具。本は厚く狹く窄まり、端は薄く扁くして、銀杏(イテフ)の葉の形したるもの。多くは牙にて製すれども、木製もあり。

ばち 桴・枹【名】㊀太鼓又は銅鑼を撃ちて鳴らすに用ふる圓き棒。ぶち。和名「槌。一名、枹亦作レ桴。俗云、豆豆美乃波知、所三以撃二大鼓一也」著聞「大鼓……撥をあてけり」㊁方磬（ハウケイ）を撃ちて鳴らすに用ふる具。〔撥〕

ばち 罰・罸【名】㊀神佛が、人の惡行に罪を與へて懲すこと。冥罰（ミヤウバツ）。㊁惡事のむくい。たたり。天罰。

罰が當る【句】神佛の罰を受く。ばちあたり（罰當）參照。

罰は三味線に當る【句】『罰を撥（バチ）に言ひかけたる語』罰が當るぞと言はれたる時、洒落（シャレ）ていふ語。〔諺語〕

罰・利生（リシヤウ）【句】㊀冥罰（ミヤウバツ）と利生と。罰（バチ）と利益（リヤク）と。甲陽軍鑑「罰・利生明かにす」賀古敎信七墓廻「罰・利生ある佛法不思議」㊁罰し責むることと、慈しみ庇ふことと。緩嚴。心中刃は氷の朔日「罰・利生ある親方にて」

罰は目の前【句】因果應報のめぐり來ることは、速かなり。天罰覿面。〔諺語〕

罰を當つ【句】罰の當るやうに仕向く。

ぱち【名】古綿の打返（ウチカヘシ）又は古綿の詰替（ツメカヘ）などの時、その幾分をごまかし盜むこと。〔綿屋の職人の語〕

はち-あし 鉢脚【名】植木鉢の脚。

ばち-あし 撥足【名】机などの脚の、端が、外の方へやや反りたるもの。

ばち-あしゆらわう 婆稚阿修羅王（梵Bhandhishura）【名】〔佛〕『法華經の序品に見ゆ』阿修羅王の名。謠曲（春日明神）「婆稚阿修羅王」

ばち-あたり 罰當・罸當【名】㊀罰が當ること、又その當りたる人。狂言（鬮罪人）「罰あたりめ、何とせう」㊁恩も義も知らぬ行爲、又その人。綴留「あの罰當ども、……、親方へ聞えたらば、追出さるるは知れた事」

ばち-あたり 撥當【名】撥のあたりたる工合。撥の觸れたる時の感じ。

はち-あはせ 鉢合【名】㊀行き合ひて、己の額と他の額とを打ち當つること。浮世風呂「盲人（メクラ）に鉢合をするとは、明盲（アキメクラ）め」㊁衝突。撞著。

ばち-あはせ 撥合【名】琵琶などを彈き初むる時、先づ調子を彈き試むること。

はぢ-あふ 恥敢ふ・耻敢ふ【動下二自】終まで恥づ。恥ぢおほす。（打消の語を伴ふ）源氏「繁く渡らせたまふ御方は、え恥ぢあへたまはず」

はち-いし 鉢石【名】手洗鉢を載せおくための立石（タテイシ）。鎌倉三代記「刀の切先（キッサキ）試みんと、椽の鉢石、心の目あて、突出す槍を、……、しっかと取って」

ばち-いち 撥一【名】島田髷の、一の方を、三味線の撥に似たる形に結ひたるもの。

はち-いつ 八佾【名】はついつ（八佾）に同じ。

はち-いん 八音【名】㊀『書經の舜典に「四海遏二密八音一」、又、「八音克諧、無レ相二奪倫一、神人以和」とあり』金（鐘）・石（磬）・絲（琴・瑟）・竹（簫・笛）・匏（笙）・土（塤篪（ケンチ））・革（鼓）・木（柷敔（シュクギョ））の八種より成る樂器の音。はっちん。㊁平調（ヒヤウデウ）・盤渉（バンシキ）調・黃鐘（ワウシキ）調・壹越（イチコツ）調・雙調・大食（タイシキ）調・上無（カミム）調・下無（シモム）調の總稱。㊂はちおん（八音）を見よ。㊃〔音〕おくたあぶに同じ。

はぢ-いる 恥入る・耻入る【動四自】深く恥づ。

ばち-うま ばち馬【名】驢馬に類する、劣等の馬。體小く、耳長く、步行鈍く、尾は犬のに似たり。

はち-うゑ 鉢植【名】植木鉢に植うること、又その植ゑたる草木。盆栽。

はち-うを はち魚【名】〔動〕ぎぎ（黃顙魚）を云ふ。〔陸奥國・越後國の方言〕

はち-えう 八曜【名】紋所の一。九曜に似て、星の數の一つ少なきもの。

はち-えふ 八葉【名】㊀八枚の葉（ハ）。㊁紙八枚。㊂父子八代。㊃八つの片（ヒラ）の集りて成れる形。㊄〔佛〕八方に分れ出でたる形。八葉の蓮華（レンゲ）に象（カタド）りたる形。はっかくだう（八角堂）・「八方・八楞の幢」參照。盛衰記「衆生（シユジヤウ）本覺の心蓮は、八葉の貌（カタチ）なり」謠曲（富士山）「頂上は八葉にして、內に滿池を湛へたり」

八葉・九尊（クソン）【句】〔佛〕「八葉の蓮臺」を見よ。

八葉心蓮（シンレン）**の都**【句】「八葉の峯」に同じ。鴉鷺合戰「高野山は、八葉心蓮の都、九品（クホン）最上の土なり」

八葉肉團【句】〔佛〕「八葉の肉團心」の略。盛衰記「八葉肉團の胸の間には、三十七尊、光圓を耀かし」

八葉の車【句】はちえふのくるま（八葉車）を見よ。

八葉の中尊（チユウゾン）【句】〔佛〕胎藏界の八葉院の九體の佛の內、中央なるもの、即ち大日如來。平家「東曼陀羅（ヒガシマンダラ）をば、淸盛書かんとて、自筆に書かれける。八葉の中尊の寶冠をば、いかが思はれけん、わが頭の血を出して書かれけるとぞ聞えし」

八葉の中尊（チユウゾン）**の寶冠**【句】『八葉の蓮華に象（カタド）りて、胎藏界八葉院の九尊を表すとていふ』山伏の冠。平家「八葉の中尊の寶冠をば」

八葉の肉團心【句】〔佛〕『にくだんしん（肉團心）を見よ』吾人の心臟を、瑜伽（ユガ）觀を修して、三密相應する時は、開敷（カイフ）して八葉となり、胎藏界八葉院の九尊を顯現すとて呼ぶ語。

八葉の蓮（ハチス）【句】「八葉の蓮華」に同じ。著聞「磬（ウチナラシ）に、八葉の蓮を中にて、孔雀の左右に立ちたるを、文に鑄つけたりけるを」盛衰記「衆生本覺の心蓮は、八葉の貌（カタチ）なり。一乘妙法の首題も、八葉の蓮なり」

八葉の寶冠【句】「八葉の中尊の寶冠」に同じ。

八葉の峰【句】『八葉の蓮華に比していふ』由緒ある高山の、絕頂の平地を中心として、四方・四隅に、尾と谷との分れ出でたる形を、胎藏界の曼陀羅なる中臺と八葉院とに譬へていふ語。太平記「高野山に詣でて、三日逗留し、院院・谷谷拜み廻るに、聞きしよりなほ尊くて、八葉の峯、空に聳えて」謠曲（高野物狂）「眞如平等の八葉の峰を、しづかに吹き渡り」

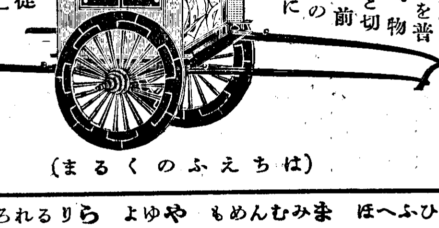
八葉の蓮華（レンゲ）【句】㊀八瓣の蓮華。はちえふれんげ。㊁〔佛〕分陀利華（フンダリゲ）の花瓣の、八方に向ひて、各、一葉を出せる形。はちえふれんげくわん（八葉蓮華觀）・「八方（ハッパウ）・八楞の幢」參照。曾我虎が磨「色鼻緒の雪駄には、八葉の蓮華を踏へ」

八葉の蓮座（レンザ）【句】〔佛〕次條に同じ。盛衰記「八葉の蓮座のいとめでたきに、左の足を指上げて、登らん登らんとしたまひけるに」

八葉の蓮臺（レンダイ）【句】〔佛〕胎藏界曼陀羅（マンダラ）の第一院中臺。中央に大日如來ありて、中胎といひ、四方の八葉に、寶生（ホウシヤウ）・開敷（カイフ）蓮王・無量壽・天鼓雷音（テンクライオン）の四佛、普賢・文殊（モンジユ）・觀音・彌勒（ミロク）の四菩薩あり、合はせて九尊、これ、吾人の心臟の、瑜伽（ユガ）觀によりて、三密相應する時、開敷せる相なり。

はちえふ-だけ 八葉嶽【名】〔地〕駿河國富士山の別稱。芙蓉峯。

はちえふ-の-くるま 八葉車【名】網代車（アジログルマ）の一種。車箱（クルマバコ）に八葉㊃の紋（徑約八寸を普通とす）を畫けるもの。物見に、長（ナガ）物見なると切（キリ）物見なるとあり。前者は、攝政・關白・大臣の乘用にて、上皇も內內に乘御せられ、後者は、卑しく、公卿・僧正以下僧綱の乘用たりき。又、小八葉（コハチエフ）の車に對して、大八葉の車ともいへり。東鑑「駕二八葉車一、扈從衞府三人、共侍二十人」



（はちえふのくるま）

はちえふ-れんげ 八葉蓮華【名】〔佛〕㊀「八葉の蓮華」に同じ。賀古敎信七墓廻「參るといふ字を書き並べ、八葉蓮華と拜まれ

たまへ」㊁『八葉の肉團心に譬へていふ』しゆみせん（須彌山）の異稱。〔密敎の語〕

はちえふれんげ-くわん 八葉蓮華觀【名】〔佛〕吾人の心臟に於て八葉の蓮華を觀想し、胎藏界の九尊を示現せしむる觀法。「八葉の肉團心」參照。

はちえふ-ゐん 八葉院【名】〔佛〕胎藏界の中臺。「八葉の蓮臺」參照。

はち-えん 八埏・八殥【名】地の八方のはて。八垓。盛衰記「押二領於四海・八埏一」

ばちえらあ（英 Bachelor）【名】英・米の大學にて、卒業者に授與する稱號。**ますたあ**㊁參照。

ばちえらあ-おぶ-ああつ（英 Bachelor of Arts）【名】英國の學位の一。文學・法學の得業生。

ばちえらあ-おぶ-えんじにやりんぐ（英 Bachelor of Engineering）【名】英國の學位の一。工業の得業生。

ばちえらあ-おぶ-さいえんす（英 Bachelor of Science）【名】英國の學位の一。理學の得業生。

ばちえらあ-おぶ-めぢしん（英 Bachelor of medicine）【名】英國の學位の一。醫學・藥劑の得業生。

ばち-えり 撥襟【名】衣服の襟の、下方の幅やや廣くなるやうに取附けたるもの。

はちおく-しせん 八億四千【數】次條及びはちまんしせん（八萬四千）參照。

八億四千の思（オモヒ）【句】〔佛〕次條に同じ。保元「人は、一日・一夜を經るにも、八億四千の思ありといふ。異なる思なき人も、さほどの罪のあるなるに」

八億四千の念【句】〔佛〕「八億四千萬の念」に同じ。太平記「人間の習、一日・一夜を經る間に、八億四千の念有り、一念、惡を發せば、一生の惡身を得、十惡念を發せば、十生、惡身を得、乃至、千億の念も、亦、然なりと云へり」

はちおく-しせんまん 八億四千萬【數】㊀一億の八倍と、一千萬の四倍と。㊁〔佛〕數量の多きを示すに用ふる語。**はちまんしせん**（八萬四千）參照。

八億四千萬の念【句】〔佛〕『安樂集の卷下に「淨度菩薩經云、人生二世間一、凡經二一日一夜一有二八億四千萬念一、一念起レ惡受二一惡身一、十念起レ惡得二十生惡身一、乃至惡法既爾、善法亦然」とあるに本づく』人間の、晝夜の間、絕えず惱まさるるを免れずといふ、多くの思念。八億四千の念。

ばち-おと 撥音【名】撥にて彈き鳴らす音。源氏「ぢゆうさすほど、撥音のさま變りて、なまめかしう聞え」

はち-おん 八音【名】㊀**はちいん**（八音）に同じ。㊁〔佛〕『音便にて、ハットンと發音す』如來の音聲・言辭の、淸雅にして、よく聞法（モンボフ）・開悟せしむるにつきて、その一音の上に、八種の特色を備ふとていふ語。一に、極好音とて、聽者の厭くことなしといふもの、二に、柔軟（ニウナン）音とて、慈悲・柔軟の心より發し、よく人情に順應するが故に、聽者、剛强の心を失ふといふもの、三に、和適音とて、常に中道の理地に安住し、調雅なるが故に、聽者よく聲に應じて了解すといふもの、四に、尊慧（ソンヱ）音とて、佛德尊高、識見明徹にして、慧解せしむるが故に、聽者よく尊重すといふもの、五に、不女（フニヨ）音とて、常に首楞嚴（シユリヨウゴン）三昧に住して、大雄の德を具へ、聽者敬畏するが故に、天魔・外道（ゲダウ）と雖も歸伏せざるなしといふもの、六に、不誤音とて、諦明にして誤差なく、聽者、ために正見（シヤウケン）を得といふもの、七に、深遠（ジンヲン）音とて、遠近の差、音調を妨げず、聽者遠きにありても、よくその化を受くといふもの、八に、不竭音とて、無限・常恆の眞理を包擁するが故に、聽者、その所陳の語義を尋ぬるに、義理に於て無盡・無窮なりといふもの。鴉鷺合戰「四辯・八音の如來に親しみて」㊂〔音〕**おくたあぶ**に同じ。

はぢか【名】『はつき（泊木）の轉訛か』**ものほしざを**（物乾竿）に同じ。

はち-かい 八戒【名】〔佛〕八つの佛戒、即ち高く廣くして、美麗なる牀上に坐せぬこと、身に香を塗り、花鬘などを飾り、歌舞を視聽せぬこと、非時の食を食せぬこと

との三戒を、五戒に加へたるもの。八戒齋。八關齋戒。八支齋。八齋。盛衰記「戒に、八戒あり」

はち-かい 八海【名】〔佛〕「九山（クセン）・八海」を見よ。

はち-がい 八亥【名】『亥は亥（ヰ）の刻にて、一日の時刻の最終なるよりいふ』八晝夜。八日間。平家「弟子、北闕の雲を辭して八亥、涼燠（リヤウイク）の多く廻ることなしといへども」

はち-がい 八垓【名】國の八方のはて。八荒。八表。八垠。八埏。

はち-がい 八愷【名】『左傳の文公十八年の條に「昔高陽氏有二才子八人一蒼舒・隤敳・檮戭・太臨・龐降・庭堅・仲容・叔達、齊聖廣淵、明允篤誠、天下之民謂二之八愷一」とあり。史記の五帝紀にも見ゆ。愷は和の義。**はちげん**（八元）・**にはち**（二八）㊂參照』八名の善人。太平記「所謂堯の八元、舜の八愷……互に非を諫め、國を鎭めて、只、天下の無爲ならん事をのみ思へり」

はちかい-さい 八戒齋【名】〔佛〕『**はちしさい**（八支齋）を見よ』**はちかい**（八戒）に同じ。

はぢ-かがやく 恥赫く・耻赫く【動四自】顏の赤くなるほどに恥ぢ入る。はにかむ。はぢらふ。〔古語〕源氏「なかなかに恥ぢかがやかんよりは、罪ゆるされてぞ見えける」

はぢ-かき 恥搔・耻搔【名】『「恥を搔く」㊀を見よ』恥を受くること。面目を失ふこと。はぢさらし。はぢっかき。

はぢかき-まど 恥搔窗・耻搔窓【名】他人に見られては、恥しき物の見ゆる窓。

はち-かく 八角【名】**はっかく**（八角）を見よ。　「角形」を見よ。

はちかく-けい 八角形【名】**はっかくけい**（八角形）を見よ。

はぢ-かくし 恥隱・耻隱【名】人に見られては外分惡しき處の見えぬやうに造ること、又その造り方の物。御伽名代紙衣「恥かくしに拵へておいた押入（オシイレ）」

はちかく-しよくこう 八角蜀紅【名】**はっかくしよくこう**（八角蜀紅）を見よ。

はぢ-かくす 恥隱す・耻隱す【動四他】恥ぢて、繕ひ隱す。落窪「いかにして、斯く恥

ぢ隱す事はしつるぞ」

はちかく-すゐ 八角錐【名】〔數〕**はっかくすゐ**（八角錐）を見よ。

はちかく-ちゆう 八角柱【名】〔數〕**はっかくちゆう**（八角柱）を見よ。

はちかく-どけい 八角時計【名】**はっかくどけい**（八角時計）を見よ。

はちかく-ふさぐつわ 八角太轡【名】**はっかくふさぐつわ**（八角太轡）を見よ。

はちかく-めだま 八角目玉【名】**はっかくめだま**（八角目玉）を見よ。

はちかく-もち 八角持【名】**はっかくもち**（八角持）を見よ。

はぢ-かくる 恥隱る・耻隱る【動下二自】恥しく思ひて隱る。枕「をさめ・みかはやうど・たびしかはらといふまで、いつかは、それを恥ぢ隱れたりし」

はち-かじん 八歌人【名】八人の有名なる歌人、即ち六歌仙に、柿本人丸・山部赤人を加へていふ稱。

ばち-がた 撥形【名】三味線の撥の如き形。

はちがた-じやう 鉢形城【名】武藏國大里郡鉢形村にありし城。寄居（ヨリヰ）町の南。荒川の斷崖・深潭に臨む。文明の頃、長尾景春據守して、上杉顯定と戰ひしが、敗れて、顯定の居城となり、後、永祿・天正の頃、北條氏邦城主として、武藏の西北部を鎭し、北條氏の滅後、廢城となれり。

はち-かづき 鉢被【名】〔書〕御伽草子の一。河內國交野（カタノ）の邊なる備中守さねたかの一女、母の命にて、常に頭上に、肩も隱るる程の鉢をかづきゐたりしが、母病歿の後、父、鉢を除かんとすれども、除くを得ず、その不具なるによりて、繼母の憎を受けたれど、後に山蔭三位中將の末子宰相の妻となるに及んで、頭上の鉢よりは數數の寶物出で、三位中將の他の子息の嫁との管絃・和歌の競爭にも、勝を制して、榮華の身となりし事を、初瀨の觀音の利生に因る由に記せるもの。

はちかづき-の-さうし 鉢被草子【名】〔書〕前項の御伽話を記せるもの。二卷。萬治二年刊行。寬文六年、「はちかづ

き姫」として出版せる繪入草子も見ゆ。

はちかづき-ひめ 鉢被姫【名】㊀はちかづき(鉢被)に同じ。㊁〔書〕前條を見よ。

ばち-かは 撥革・撥皮【名】三味線の胴の革の、撥の當るべき所に、別に貼りたる小き皮。小犬の皮を用ふ。

はぢ-がはし 恥がはし・耻がはし【形二】はぢがまし(恥がまし)に同じ。醒睡笑「その身の分にては、はぢがはしき人の」

はぢ-かはす 恥交す・耻交す【動四自】恥ぢあふ。互にはぢらふ。枕「同じ所に住む人の、かたみに恥ぢかはし、聊かのひまなく用意したりと思ふが」

ば-ちがひ 場違・塲違【名】本場(ホンバ)より産したるにあらざる物。「場違の海苔(ノリ)」

はちかひ-の-おとど 蜂飼大臣【名】〔人〕ふぢはらむねすけ(藤原宗輔)の異稱。十訓抄「京極太政大臣宗輔公は、蜂を幾らともなく飼ひたまひて、何丸・彼(カ)丸と名をつけて、……世には、蜂飼のおとどとぞ申しける」

はぢ-がまし 恥がまし・耻がまし【形二】いかにも恥となるべき樣なり。はづかし。はぢがはし。源氏「人のため恥がましき事なく、いづれをもなだらかにもてなして、女の恨な負ひそ」

はち-がみ【名】かぶとがに(兜蟹)を云ふ。〔周防國の方言〕

はち-かん【名】『名詞のはち(八)㊁を見よ』おてんば(御轉婆)を云ふ。〔遠江國の方言〕

はち-かん 八寒【名】〔佛〕はちかんぢごく(八寒地獄)の略。盛衰記「永く八寒・八熱に沈むべし」

ばちかん(英 Vatican)【名】伊太利國羅馬にある、羅馬法王の宮殿。

はちかん-ぢごく 八寒地獄【名】〔佛〕八大地獄の傍に横に列次せりといふ、八種の寒き地獄。即ち第一に、頞浮陀(アブダ)地獄、譯して、皰といひ、中なる衆生(シユジヤウ)、寒苦に逼られて、皮肉皰起すといふもの、第二に、尼剌浮陀(ニラブダ)、譯して皰裂といひ、寒苦に逼られて、皰裂即ち拆裂すといふもの、第三に、頞哳陀(アセツダ)とて、寒苦のために脣動かず、唯、舌の中にて、頞哳陀(Atata)の聲を作すといふもの、第四に、嚯嚯婆(クワクワクバ)とて、舌動かず、唯、脣の間に嚯嚯婆(Hahava)の聲を作すといふもの、第五に、虎虎婆(コヽバ)とて、脣・舌共に動かず、唯、咽喉の内にて氣を振ひて、虎虎婆(Huhava)の聲を作すといふもの、第六に、嗢鉢羅(ウツパラ)、青蓮華(シヤウレンゲ)と譯し、皮肉開拆して、青蓮華の如くになるといふもの、第七に、鉢特摩(ハドマ)、紅蓮華(グレンゲ)と譯し、肉大に拆けて、紅蓮華の如くになるといふもの、第八に、摩訶鉢特摩(マカハドマ)、大紅蓮華(ダイグレンゲ)と譯し、肉拆けて、大紅蓮華の如くになるといふもの。八寒。(八熱地獄に對して)

はち-がめ はち龜【名】〔動〕かぶとがに(兜蟹)を云ふ。〔安藝國の方言〕

はぢ-かる【動四自】**またがる**(跨る)に同じ。

はち-ぎ 八議【名】支那唐代の法律に於ける刑の輕減の一。親(皇帝の祖免以上の親及び太皇太后・皇太后の總麻以上の親、皇后の小功以上の親)・故(天子の舊知)・賢(一般人にして、大德行ある者)・能(一般人にして、大才業ある者)・功(國家に大功勳ある者)・貴(職事官三品以上、散官二品以上及び爵一品なる者)・勤(國家に大勤勞ある者)・賓(前代の王者の裔にして、國賓たる者)の一に該當する者の場合に、議親・議故・議賢・議能・議功・議貴・議勤・議賓とて、十惡を犯せる者以外、流罪以下各一等を減ぜしこと。我國の大寶律に、六議の目を設けたるも、これに倣へるなり。

はち-ぎやく 八虐【名】大寶令にて、極めて重しとしたる、八種の罪、即ち謀反・謀大逆・惡虐・不道・大不敬・不孝・不義。大赦の時にも、恩典に浴するを得ず。もと支那唐の十惡の制に倣へるにて、初は、同じく十惡の目を立てしが、後に、不睦・內亂の二を除きたるなり。

はち-ぎやく 八逆【名】㊀〔佛〕**はったう**(八倒)に同じ。㊁前條の誤。保元「本は一家の主君なれども、今は八逆の兇徒なり」

はちきやく-るゐ 八脚類【名】〔動〕**はっきやくるゐ**(八脚類)に同じ。

はち-きれる はち切れる【動下一動】『ばちんと切る義。**はちわれる**(鉢割れる)參照』滿ち溢れて切れ裂く。はりきる。

は-ちく 淡竹【名】〔植〕竹類の一種。高さ二三丈に達す。地上莖は、地下莖より出で、苦竹(マダケ)のよりやや低く、節には二條の環狀突起有り。葉は披針形、籜(カハ)には、細毛密生し、細線狀の紫紋理を有すれども、苦竹の如き斑點なし。稈は堅靭にして緻密、細かに割り易く、建築用とし、又は籠・簾・笛・釣竿を造るに用ひ、籜は笠・草履の料とし、筍は食用に供す。あはだけ。おはだけ。おほだけ。からだけ。くれたけ。

はち-く 八苦【名】〔佛〕**はっく**(八苦)を見よ。

は-ちく 破竹【名】㊀『「刃(バイ)を迎へて解く」を見よ』竹を割ること。㊁『晉書の杜預傳に「今兵威已振、譬如ㇾ破ㇾ竹。數節之後、迎ㇾ刃而解」とあり。竹を割るに、刃を加へて、初の一節を割れば、その餘は、力を藉らずして容易に裂くるよりいふ』勢の烈しくして止め難き譬。

破竹の勢【句】『北史の周高祖紀に「嚴ㇾ軍以待、擊ㇾ之必克、然後乘㆓破竹之勢㆒、鼓行而東、足㆔以窮㆓其窟穴㆒」とあり』勢に乘じて、進むこと。

はぢく【名】〔植〕ぎしぎし(羊蹄菜)に同じ。

はち-ぐう 八隅【名】八方のすみ。八方。

ばち-ぐさ 撥草【名】〔植〕『實の形、撥に似たるよりいふ』**なづな**(薺)に同じ。

はちく-ざうり 淡竹草履【名】淡竹の籜(カハ)にて造れる草履。はちくの皮草履。曾我虎が磨「隱れぬ足の八文字、破竹草履の甲斐性(カヒシヨ)なき」

はち-くどく 八功德【名】〔佛〕**はっくどく**(八功德)を見よ。

はちくどく-すゐ 八功德水【名】〔佛〕**はっくどくすゐ**(八功德水)を見よ。

はちくどく-ち 八功德池【名】〔佛〕**はっくどくち**(八功德池)を見よ。

はちく-の-かは-ざうり 淡竹皮草履【名】**はちくざうり**(淡竹草履)に同じ。新永代藏「淡竹の皮草履を切らし步きて」

はち-くま 蜂熊・八角鷹【名】〔動〕『くまは**くまたか**(熊鷹)の義』猛禽類に屬する鳥。體の長さ一尺五寸餘。のすりに似たれども、眼前に小羽あり、上面は茶褐色、頭頂は灰色、下面は一般に白く、茶褐色の横條と點紋とあり。本島內各地の山地に居り、好みて蜂類及びその幼蟲を捕食す。はちくまだか。

はちくま-だか 八角鷹【名】〔動〕前條に同じ。

はちくん-し 八君子【名】〔人〕**はっくんし**(八君子)を見よ。

はち-ぐら 鉢鞍【名】鞍橋(クラボネ)の輪の圓き鞍。

ぱちくり【貌】驚き呆れたる時など、目を見開きてしばたたくさま。ぱちぱち。「驚いて、眼をぱちくりする」

はち-くれる【動下一自】**はぜる**(爆ぜる)に同じ。

はち-くゎ 八科【名】**はっくゎ**(八科)を見よ。

はち-くゎう 八紘【名】**はっくゎう**(八紘)に同じ。運歩色葉集「八紘、ハチクワウ。八方」

はち-ぐゎつ 八月【名】年の第八に當る月。はづき。

八月の暴蚊(アバレカ)【句】死期に近づきたる蚊の、烈しく人を螫すもの。〔諺語〕

八月のいら蒸(ムシ)【句】八月の甚しく蒸暑きこと。〔諺語〕

八月の風で、そばがたまらぬ【句】『蕎麥に傍(ソバ)を言ひかけたる語』傍に居る者がたまらずといふ洒落(シヤレ)。〔諺語〕藘屋道滿大內鑑「こりや手ひどい。八月の風で、そばがたまらぬ」

八月離月(ハナレヅキ)【句】結婚には、八月を忌むとていふ語。〔諺語〕

はちぐゎつ-しば 八月柴【名】八月頃の柴。

八月柴は嫁に焚かすな【句】「夏の火は娘に焚かせよ。冬の火は嫁に焚かせよ」に同じ。〔諺語〕

はち-くゎん 八卷【名】**はっくゎん**(八卷)を見よ。

はちくゎん-さい 八關齋【名】〔佛〕**はっくゎんさい**(八關齋)を見よ。

はちくゎんさい-かい 八關齋戒【名】〔佛〕**はっくゎんさいかい**(八關齋戒)を見よ。

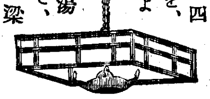
はち‐け 八家【名】はっけ(八家)を見よ。

はち‐けい 八刑【名】はっけい(八刑)を見よ。

はち‐けう 八敎【名】〔佛〕はっけう(八敎)を見よ。

はち‐げだつ 八解脫【名】〔佛〕三界の煩惱(ボンナウ)を離れ、繫縛(ケバク)を脫する、八種の禪定(ゼンヂヤウ)。盛衰記「天に八天、龍に八龍あり、八福田あり、八解脫あり」

はち‐けん 八間【名】㊀『燈光、八の間遠きを照すといふ』高さ七寸、四方三尺づつ位に、木製の框を、障子の棧の如く組立て、內より紙を張り、大なる銅製の秉燭(ヒヤウソク)に、火を點ずるやうにしたる掛行燈。昔、湯屋・寄席(ヨセ)又は臺所などにて、人の出入等に危險なきやう、梁又は鴨居などに高く吊して用ひしもの。八方(ハツパウ)。㊁次條を見よ。



(㊀はちけん)

八間放つ【句】『發言放つの轉訛』高言す。大言壯語す。雁金文七「この家の亭主めが首取って歸り、主人へ言譯すべえと、八間放ってわめきける」

はち‐げん 八元【名】『左傳の文公八年の條に「高辛氏有㆓才子八人㆒、伯奮・仲堪・叔獻・季仲・伯虎・仲熊・叔豹・季狸・忠肅恭懿、宣慈惠和、天下之民謂㆓之八元㆒」とあり。元は善の義。はちがい(八愷)・にはち(二八)㊂參照』八人の才ある人。平治「四岳・八元の民を撫づる」盛衰記「高陽・高辛の代には、八元・八凱の臣を以て、天下を治むと見えたり」

はちけんや 八軒屋【名】〔地〕大阪市東區に屬し、淀川の南岸、天滿橋と天神橋との間にあり。伏見との間の、淀の川船の發著する所。おほえ(大江)參照。膝栗毛「飛び乘ったるは、大阪八軒家の登船なり」

はち‐こう 八講【名】〔佛〕はっこう(八講)を見よ。

はち‐こう 八公【名】くまこうはちこう(熊公八公)を見よ。

はち‐こく 八石【名】〔植〕はとむぎ(鳩麥)を云ふ。〔上總國の方言〕

はち‐こく 八穀【名】はっこく(八穀)を見よ。

は‐ぢごく 破地獄【名】〔佛〕地獄の苦を解脫(ゲダツ)すること。津國女夫池「破地獄の祕文(ヒモン)を唱へ」

はち‐こくり 鉢こくり【名】はちばうず(鉢坊主)に同じ。關八州繫馬「走り走りめぐる鉢こくり」

はち‐こっくり 鉢こっくり【名】前條に同じ。

ばち‐ごま 撥駒【名】三味線などの撥と、駒と。嫗山姥「三味線…… 親の撥駒・紙駒の音色優しく彈きなせり」

はち‐こゆみ 蜂小弓【名】蟲を射る小弓なるべしといふ。狂言(八幡聟)「弓こそは、小い時から、はちこ弓の射手にて」

はち‐ざ 八座【名】㊀『定員八人なりしよりいふ』さんぎ(參議)㊁の異稱。職原抄「大同御宇、罷㆓參議㆒、置㆓五畿七道觀察使㆒、合八人、弘仁御宇、罷㆓觀察使㆒、皆爲㆓參議㆒、八人自㆑此而始、依㆑之有㆓八座㆒」㊁賀茂の攝社なる片岡・貴船(キブネ)・新宮・大田・若宮・奈良・澤田・氏神の八社。㊂〔佛〕ほっけはっこうゑ(法華八講會)を見よ。

はち‐さい 八災【名】〔佛〕はっさい(八災)を見よ。

はち‐さい 八齋【名】はっさい(八齋)を見よ。

はち‐さいかい 八齋戒【名】はっさいかい(八齋戒)を見よ。

はち‐さいげん 八災患【名】〔佛〕はっさいげん(八災患)を見よ。

はち‐さう 八相【名】〔佛〕はっさう(八相)を見よ。

はちざう 八藏【名】〔人〕高取燒の祖。もと朝鮮の人。慶長年中、征韓の師歸るに際し、黑田長政に從ひて歸化し、名を八藏と改む。陶器の製造を巧みにし、筑前國高取に窯を開く。

はちさう‐じやうだう 八相成道【名】〔佛〕はっさうじやうだう(八相成道)を見よ。

はち‐ざかな 鉢肴【名】配膳にて、燒魚などを、鉢に盛りて出だすもの。八笑人「お約束の鉢肴を差上げます」

はち‐さき【名】魚の尾の一部。

ばち‐さき 撥先【名】撥の先端。

はぢ‐さらし 恥曝・耻晒【名】わが身の恥となる物事を、他人の前にて示すこと、又その人。

はち‐ざゑもん 八左衞門【名】『はち(八)㊀・はちべゑ(八兵衞)㊀を見よ』げっけい(月經)を云ふ。〔陸奥國の方言〕

はち‐し 八史【名】はっし(八史)を見よ。

はち‐し 八使【名】はっし(八使)を見よ。

はち‐じ 八字【名】㊀八の字に似たる形。はちのじ。はちもんじ。公事根源「はとり出でて、帳を、八字にかかぐ」㊁『薛逢の夜宴觀㆑妓と題する詩に「愁傍㆓翠蛾㆒深㆓八字㆒、笑回㆓丹臉㆒利㆓雙刀㆒」とあり。はちのじ(八字)參照』まゆ(眉)の異稱。

八字の霜【句】次條に同じ。八犬傳「八十(ヤソ)あまりの翁一人、眉には、八字の霜を置き」

八字の霜の眉【句】年老いて、白くなりたる八字の眉。夫木「年のあくる神の玉の戶今あいて八字の霜の眉ぞ開かん」

八字の鬚【句】八の字の如く、兩方に分れて生えたる口ひげ。はちじひげ。

八字の眉【句】㊀『李商隱の蝶の詩に「壽陽公主嫁射妝、八字宮眉捧㆑額黃」とあり』末の垂れて、八の字の形をなせる眉。㊁額をしかめたる時の眉。愁眉。

雪山(セッセン)の八字【句】〔佛〕「雪山の半偈(ハンゲ)」に同じ。

はち‐しかんたい 八四艦隊【名】超弩級戰艦八隻と巡洋戰艦四隻とを主力とし、これに順應せる諸種の艦船を附屬せしめて編制したる一艦隊。はちはちかんたい(八八艦隊)參照。

はちじかん‐らうどう 八時間勞働【名】『英 Eight hours labour』工場に於ける職工の勞働時間を、法律にて、八時間に限定し、これによりて、勞働の能率を高め、且つ勞銀をも低下せしめずして、職工の經濟上の地位の改良と學術上・道德上の進步とを得しめんとする論。獨逸人ブレンタノ(Brentano)唱道に係る。

はち‐しき 八識【名】〔佛〕はっしき(八識)を見よ。

はち‐し‐さい 八支齋【名】〔佛〕はっしさい(八支齋)を見よ。

はち‐し‐さいかい 八支齋戒【名】〔佛〕はっしさいかい(八支齋戒)を見よ。

はちじっしゅ‐こう 八十種好【名】〔佛〕『法華經の提婆達多品に「佛三十二相・八十種好、身色紫金」とあり。さうごう(相好)參照』佛陀の三十二相を、更に細別して、八十種としたるもの。ずゐぎやうこう(隨形好)參照。榮花「三十二相・八十種好あらたにて」

はちじっちやう‐だて 八十挺立【名】關船(セキブネ)の、八十挺の艪を立てて漕ぐもの。

はちじ‐ひげ 八字鬚【名】「八字の鬚」に同じ。

はち‐じふ 八十【數】㊀十の八倍。やそ。やそぢ。㊁八十歲。八十年。

八十の賀【句】八十歲の算賀。榮花「殿のおまへは、御八十の賀にや」

八十のちよろちよろわっぱ【句】「八十の三兒(ミツゴ)」に同じ。〔諺語〕

八十の手習【句】晚學の譬。〔諺語〕小野道風靑柳硯「八十の手習と、人の笑ふがおとましさに」

八十の三兒(ミツゴ)【句】年老いて、再び子供の如くになること。〔諺語〕

八十の三歲兒(ミトセゴ)【句】前條に同じ。〔諺語〕

はちじふはち‐し 八十八使【名】〔佛〕小乘敎にて、十惑を、その所迷の諦理に就きて、欲界に於て三十二、色(シキ)界・無色(ムシキ)界に於て各二十八、即ち三界を通じて、八十八に差別していふ語。鵯鵞合戰「八十八使の見惑」

はちじふはち‐や 八十八夜【名】陰曆にて、立春より八十八日目に當る日。陽曆の五月一二日頃に當り、霜は、この節以後降らずとして、農家にては、耕作に著手し、養蠶家は、掃立をなす。

八十八夜の別霜(ワカレジモ)【句】霜の降るは、八十八夜の節を限とすること。わすれじも。

はちじふはっ‐か‐しよ 八十八箇所【名】『八十八の數は、八十八佛などに因みしならんといふ』㊀四國にある、佛敎の八十八箇所の靈地。即ち靈山(リヤウゼン)寺・極樂

寺・金泉（コンセン）寺・大日寺・地藏寺・安樂寺・十樂寺・熊谷（クマダニ）寺・法輪寺・切幡（キリハタ）寺・藤井寺・燒山寺・一の宮寺・常樂寺・國分寺・觀音寺・井戶寺・恩山寺・立江（タチエ）寺・鶴林寺・大龍寺・平等（ビヤウドウ）寺・藥王寺（以上、阿波）・東寺・津寺・西寺・神峰（カウノミネ）寺・大日寺・國分寺・一の宮寺・竹林寺・禪師峰（ゼンジブ）寺・雪蹊寺・種間（タネマ）寺・清瀧（キヨタキ）寺・青龍寺・岩本（イハモト）寺・金剛福寺・延光寺（以上、土佐）觀自在寺・龍光寺・佛木寺・明石（アケイシ）寺・大寶寺・岩屋（イハヤ）寺・淨瑠璃寺・八阪（ヤサカ）寺・西林寺・淨土寺・繁多寺・石手（イシテ）寺・太山寺・圓明寺・延命寺・南光坊・泰山寺・八幡札所・仙遊寺・國分寺・橫峰（ヨコミネ）寺・香園寺・一の宮・吉祥寺・前神（マヘガミ）寺・三角寺（以上、伊豫）・雲邊寺・大興寺・琴彈八幡・觀音寺・本山（モトヤマ）寺・彌谷（イヤダニ）寺・曼荼羅寺・出釋迦寺・甲山（カフヤマ）寺・善通寺・金倉（コンザウ）寺・道隆寺・鄕照寺・高照院・國分寺・白峰（シラミネ）寺・根香（ネゴロ）寺・一の宮・屋島寺・八栗（ヤクリ）寺・志度寺・長尾寺・大窪（オホクボ）寺（以上、讃岐）。弘法大師の點示に係るといひ、西國三十三箇所と同樣に、信者巡拜す。㊁東京・大阪などにて、その近在の寺寺八十八箇所を定めて、上述のに擬するもの。（これらと區別して、前項を特に四國八十八箇所と呼ぶ）

はちじふはっかしよ-まゐり　八十八箇所參【名】八十八箇所に參詣すること。四國のは、四國參ともいふ。（東京・大阪にては、六阿彌陀詣などと同じく、春秋の彼岸に行ふ）

はちじふ-まっしや　八十末社【名】㊀伊勢內宮に屬する、八十の末社。狂言（禰宜山伏）「內宮が八十末社、外宮が四十末社」㊁末社㊀の數多くある形容。淀鯉出世瀧德「出入の者、兵法遣（ヒヤウホフツカヒ）・座頭（ザトウ）・茶湯者（チヤノユシヤ）・古道具屋（コダウグヤ）・大酒（タイシユ）・食悅（シヨクエツ）、お蔭を蒙る八十末社、さすがの曲輪（クルワ）、駕籠きれて」

はちじふり-ごえ　八十里越【名】〔地〕岩代國大沼郡に屬し、越後國との通路に當る所。

はぢ-しむ　恥しむ・耻しむ【動下二他】はづかしむ（辱しむ）に同じ。源氏「ほけたり、ひがひがしとのたまひはぢしむるは」

はちじ-もんじゆ　八字文珠【名】〔佛〕次條の略。平家「八字文珠・普賢・延命に至るまで、殘る所なう修（シユ）せられけり」太平記「八字文珠・普賢・延命・金剛童子の法」

はちじもんじゆ-ほふ　八字文殊法【名】修法（ズホフ）の一。八字の眞言を誦する文殊法。天變及び兵陣の難を避くとなすもの。

はち-じや　八邪【名】〔佛〕㊀八つの邪なる道、即ち邪見・邪思惟・邪語・邪業（ジヤゴフ）・邪命（ジヤミヤウ）・邪方便・邪念・邪定（ジヤヂヤウ）。（八正道に對して）謠曲（願誓寺）「十惡・八邪の迷の雲も、空晴れ、眞如の月の西方も」㊁人身を害する八種のもの、即ち風・寒・暑・濕（以上、外邪）・飢・飽・勞・逸（以上、內邪）。

はち-しやう　八聖【名】〔佛〕はっしやう（八聖）を見よ。

はち-しやう　八正【名】〔佛〕はっしやう（八「正」を見よ。

はち-じやう　八成【名】〔佛〕はちさうじやうだう（八相成道）の略。

はち-しやうじ　八庄司【名】はっしやうじ（八「庄司」を見よ。

はち-しやうしやく　八聖跡【名】じゆんはちしやうしやく（巡八聖跡）を見よ。

はち-しやうだう　八正道・八聖道【名】〔佛〕はっしやうだう（八正道）を見よ。

はち-じゆ　八儒【名】〔人〕『韓非子の顯學篇に「孔子之後、儒分爲レ八」、北史の文苑傳序に「八儒・三墨之異」とあり』孔子の歿後、儒道を傳へたる、八人の學者、即ち子張氏・子思氏・顏氏・孟氏・漆雕氏・仲良氏・孫氏・樂正氏。

はち-しゆう　八宗【名】〔佛〕はっしゆう（八「宗」を見よ。

はぢ-しらず　恥不知・耻不知【名】恥を恥とも思はぬこと、又その人。鐵面皮。狂言（貰聟）「恥知らずが尋ねてなど來る事がござろ程に」

はぢ-しらふ　恥しらふ・羞しらふ【動四自】はぢらふ（羞らふ）に同じ。〔古語〕住吉「恥しらひたる姿、いとめやすく、いとほしきさまなり」

はち-す　蜂巢・蜂窩【名】蜂の巢。空穗「今一つのくぼありて、はちすの如く生みひろぐめり」

はち-す　蓮【名】〔植〕『實の、花托に抱擁せらるる形、蜂の巢に似たるよりいふ』はす（蓮）に同じ。記「くさか江の入江のはちす」

蓮の池【句】はすいけ（蓮池）に同じ。山家「松山の涙は海に深くなりてはちすの池に入れよとぞ思ふ」

蓮の絲【句】はすいと（蓮絲）に同じ。榮花「蓮の絲を、むらごの組にして、九體の御手より通して」

蓮の臺（ウテナ）【句】〔佛〕れんだい（蓮臺）に同じ。夫木「曉の蓮の臺いろいろにしみまさるなり絲竹の聲」謠曲（實盛）「寶の池の蓮の臺こそ寶なるべけれ」

蓮に住む【句】「蓮の上に上（ノボ）る」に同じ。榮花「くもりなくたづねゆかばや月よりもあかきはちすに君をすませて」

蓮の上【句】〔佛〕「蓮の臺（ウテナ）」に同じ。長秋「願ひおきし花のもとにて終りけりはちすの上もたがはざらなん」

蓮の上に上る【句】〔佛〕蓮の臺（ウテナ）に生る。拾遺「一たびも南無阿彌陀ぶといふ人のはちすの上にのぼらぬはなし」

蓮の上の露の願【句】〔佛〕次條に同じ。源氏「ただ御事を心にかけて、はちすの上の露の願をばさしおきてなん念じ奉りし」

蓮の上の願【句】〔佛〕蓮の臺（ウテナ）に生るる願。極淨淨土に生るる願。一蓮托生の願。源氏「晝夜（ヒルヨル）の六時の勤に、みづからの蓮の上の願をばさるものにて、ただ、この人を、高き本意（ホイ）かなへたまへとなん念じはべる」

蓮の座【句】〔佛〕「蓮の臺（ウテナ）」に同じ。源氏「後の世には、蓮の座を分たんと契りかはし」

蓮の數珠（ズズ）【句】蓮の實を、緒にて綴りたる數珠。定頼集「尼上の蓮のずずを、鼠の食ひたりけるを見て」

蓮の中の世界【句】〔佛〕極樂淨土。極樂世界。源氏「はちすの中の世界、にまだ開けざらん心ちも斯くや」

蓮の根【句】れんこん（蓮根）に同じ。名義抄「藕、ハチスノネ」

蓮の法（ノリ）【句】〔書〕ほけきやう（法華經）の異稱。夫木「いさぎよく蓮の法をうつしてぞはとも硯の水を添へける」

蓮の蔤（ハヒ）【句】『「蓮（ハス）の蔤」を見よ』れんこん（蓮根）に同じ。〔古語〕後撰「はちすのはひを取りて」和名「爾雅云、其本蔤。波知須乃波比。郭璞曰、莖下白弱在二泥中一者也」

蓮の實【句】蓮の果實。「蓮（ハチス）の數珠」參照。和名「蓮實、波知須乃美」盛衰記「蓮の實の念珠」

蓮の本の白莖（シロクキ）【句】れんこん（蓮根）に同じ。〔古語〕字鏡「蔤、荷本乃白久支」

蓮の宿【句】〔佛〕「蓮の臺（ウテナ）」に同じ。源氏「隔なく蓮のやどを契りても君が心やすまじとすらん」

蓮開く【句】〔佛〕『「八葉の蓮臺」を見よ』蓮の花開くを、悟の開くるに譬へていふ語。著聞「この道の悟りがたきを思ふにも蓮開けばまづ尋ね見よ」

同じ蓮【句】次條に同じ。きのふはけふの物語「いざや、一所に身を投げて、同じ蓮の緣となるべき由仰せければ」

一つ蓮【句】次條の略。

一つ蓮に生れ合ふ【句】〔佛〕いちれんたくしやう（一蓮托生）に同じ。保元「西に向って、南無阿彌陀佛と唱へて、西方極樂に往生し、父御前と一つ蓮に生れ合ひ奉らんと思ふべし」

はちす【名】〔植〕㊀あさがほ（朝顏）㊁に同じ。字鏡集「蕣、ハチス・キハチス・アサガホ」㊁『きばちす（木蓮）の略』むくげ（木槿）を云ふ。〔東國の方言〕

はちす-おり　蜂巢織【名】ますおり（枡織）「に同じ。

はちすか　蜂須賀【名】姓氏の一。清和源氏より出で、足利氏の支流たり。足利高經の八世の孫小六（コロク）正利、尾張國海東郡蜂須賀の地を領し、地名を取りて姓とす。正利、豐臣秀吉に仕へ、その曾孫至鎭（ヨシシゲ）、

關ケ原の役に、東軍に屬し、松平の稱號を許され、領國たりし阿波に、淡路國を加賜せらる。爾來、子孫相襲ぎ、明治維新後、侯爵を授けらる。

はち‐すけ 八介 【名】出羽國の秋田城介（アキタジヤウノスケ）、相模國の三浦介（ミウラノスケ）、下總國の千葉介、上總國の上總介、伊豆國の狩野介（カノウノスケ）、加賀國の富樫介（トガシノスケ）、周防國の大內介、遠江國の井伊介の總稱。何れも、侍の面目とせられたり。

はち‐す‐ば 蓮葉 【名】㊀はちすの葉。はすば。古今「はちす葉のにごりにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく」㊁〔植〕**はちす**（蓮）に同じ。

蓮葉の臺（ウテナ） 【句】〔佛〕次條に同じ。謠曲（誓願寺）「實（ゲ）に安樂の國なれや、安く生る蓮葉の臺の緣ぞ誠なる」

蓮葉の花の臺（ウテナ） 【句】〔佛〕「蓮（ハチス）の臺」に同じ。義經腰越狀「せき女がとく女が泣く聲、直（スグ）に經・陀羅尼、手向となつて、未來の家土產（イヘヅト）、寂光淨土の蓮葉の花の臺に至り至らん彼の岸の」

蓮葉の蕋（ハヒ） 【句】「蓮（ハチス）の蕋」に同じ。〔古語〕後撰「はちすのはひを取りて、蓮葉のはひにぞ人は思ふらんよにはこひぢの中に生ひつつ」

はちす‐ばな 蓮花 【名】㊀はちすの花。蓮花（レンゲ）。新拾遺「善惡（ヨシアシ）の人を分かじと蓮ばな九品（ココノシナ）まで咲きかはるなり」㊁〔植〕ふよう（芙蓉）㊁に同じ。

はちす‐ぼくたう 蓮木刀 【名】**はすぼくたう**（蓮木刀）に同じ。

ばち‐せん 罰錢・罸錢 【名】**ばっきん**（罰金）に同じ。運步色葉集「罰錢、バチセン」

はち‐せんにん 八仙人 【名】〔人〕**はっせんにん**（八仙人）に同じ。

はち‐そ 八祖 【名】〔人〕㊀「淨土の八祖」を見よ。㊁「眞言の八祖」を見よ。

はちだ‐あみ 八手網・八田網・八駄網 【名】全部麻絲又は綿絲にて造り、浮子（アバ）と沈子（イハ）とを具へたる、方形の敷網（シキアミ）。鰯（イワシ）・鰺（アヂ）・鯖（サバ）などを捕獲するために、多く九州地方にて用ふ。

はち‐たい 八體 【名】**はったい**（八體）を見よ。

はち‐だい 八代 【名】㊀支那の五帝と三王との世。㊁支那の歷朝の內、後漢・魏・晉・宋・齊・梁・陳・隋の八朝。

八代の衰を起す 【句】「文（ブン）は八代の衰を起す」を見よ。

はち‐だい 鉢臺 【名】植木鉢・手水鉢などを載する臺。

はち‐だいか 八大家 【名】〔人〕**たうそうはちだいか**（唐宋八大家）の略。

はち‐だい‐こんがらどうじ 八大金剛童子 【名】〔佛〕不動明王の使者なりといふ八人の大童子、即ち慧光（ヱクワウ）童子・慧喜童子・阿耨達多（アノクタツタ）童子・指德童子・烏倶婆迦（ウクバカ）童子・淸德童子・矜羯羅（コンカラ）童子・制吒迦（セイタカ）童子。何れも手に金剛杵を持つ。八大童子。八童子。吉野忠信「八大金剛童子、甍（イラカ）を並べ立てたまへば」

はち‐だい‐し 八代史 【名】〔書〕支那の八部の歷史、即ち晉書・宋書・齊書・梁書・陳書・周書・隋書・唐書。

はち‐だい‐しふ 八代集 【名】〔書〕八部の勅撰和歌集、即ち三代集に、後拾遺・詞花・金葉・千載・新古今の五部を合はせての稱。八代和歌集。**じふだいしふ**（十代集）・**じふさんだいしふ**（十三代集）・**にじふいちだいしふ**（二十一代集）參照。拾芥抄「古今集・後撰集・拾遺集・後拾遺集・金葉集・詞花集・千載集・新古今集、已上謂二之八代集一」

はちだいしふ‐せう 八代集抄 【名】〔書〕八代集を解釋せるもの。五十卷。北村季吟の著。天和二年刊行。

はち‐だい‐しんしやう 八大神將 【名】〔佛〕輪藏の周圍に安置する神將。密迹（ミツシヤク）金剛力士二軀（俗に二王といふ）と梵天・帝釋（タイシヤク）と四天王との併稱。一說に、天龍八部をいふと。

はち‐だい‐ぢごく 八大地獄 【名】〔佛〕贍部（センブ）州の地下五百由旬（ユジユン）以下に竪に重なれりといふ、八種の地獄、即ち一に、等活地獄とて、種種の斫刺磨擣に遇ひても、暫く涼風に吹かるれば、また前に等しく活くといふもの、二に、黑繩（コクジヨウ）地獄とて、まづ黑繩にて支體を秤量して、後に

斬鋸すといふもの、三に、衆合（シユガフ）地獄とて、衆多の苦具、倶に來り合して、身を責むといふもの、四に、叫喚地獄とて、衆苦に責められて、號叫の聲を發すといふもの、五に、大叫喚地獄とて、劇苦に責められて、大叫聲を發すといふもの、六に、焦熱地獄とて、火熱の苦に堪へがたしといふもの、七に、大焦熱地獄とて、火熱の苦の更に一層なりといふもの、八に、阿鼻地獄、譯して、無間（ムゲン）地獄といひ、苦を受くること間斷なしといふもの。八熱地獄。**はちかんぢごく**（八寒地獄）參照。太平記「八大地獄の罪人の、刀山（タウセン）・劍樹に貫かれ」

はち‐だい‐どうじ 八大童子 【名】〔佛〕㊀**はちだいこんがらどうじ**（八大金剛童子）に同じ。井筒業平河內通「八大童子は、八識の道を導き」㊁文殊（モンジユ）菩薩の使者なりといふ、八人の童子、即ち光網童子・地慧（ヂヱ）童子・無垢光（ムクワウ）童子・不思慧童子・召請（セウシヤウ）童子・髻設尼（ケイセツニ）童子・救護慧（クゴヱ）童子・鄔婆髻設尼（ウバケイセツニ）童子。

はち‐だい‐ならく 八大奈落 【名】〔佛〕**はちだいぢごく**（八大地獄）に同じ。盛衰記「一期命終（イチゴミヤウジユウ）の刻に臨まん時は、八大奈落の底に入らんか」

はち‐だい‐ぼさつ 八大菩薩 【名】〔佛〕藥師佛に附屬すといふ、八體の菩薩、即ち金剛手・慈氏・文殊（モンジユ）・虛空藏（コクザウ）・普賢・除蓋障・觀自在・地藏、又、一說に、虛空藏・文殊・救脫（グダツ）・跋陀和（バダワ）・觀世音・勢至・堅勇・釋彌男（シヤクミナン）。その他、諸經、種種の異說あり。榮花「藥師如來、八大菩薩を添へて」

はち‐だい‐やしや 八大夜叉 【名】〔佛〕八體の夜叉、即ち寶賢・滿賢・散支・衆德・應念・大滿・無比力・蜜嚴（ミツゴン）。

はちだい‐りう 八代流 【名】花道の一派。足利八代將軍義政に從ひて、花道を專ら翫びし早野泰則入道長樂齋を流祖とするもの。

はち‐だい‐りゆう 八大龍 【名】〔佛〕次條に同じ。松風村雨東帶鑑「海上、俄かに震動するは、八大龍の怒かや」

はち‐だい‐りゆうじん 八大龍神 【名】〔佛〕次條に同じ。松風村雨東帶鑑「八大龍神・

大海神、力を加へたびたまへ」

はち‐だい‐りゆうわう 八大龍王 【名】〔佛〕八體の龍神、即ち難陀（ナンダ）・跋難陀（バツナンダ）・娑羯羅（シヤカツラ）・和修吉（ワシユキツ）・德叉迦（トクシヤカ）・阿那婆達多（アナバダツタ）・摩那斯（マナシ）・優鉢羅（ウハツラ）。難陀・跋難陀の二者は、釋尊降誕の時、天上より、これに溫涼二種の水を注ぎたりと傳ふ。**はちぶしゆ**（八部衆）・**はなみだう**（花御堂）參照。金槐集「時により過ぐれば民の歎なり八大龍王雨止めたまへ」

はち‐だい‐わかしふ 八代和歌集 【名】〔書〕**はちだいしふ**（八代集）に同じ。

はち‐たう 八倒 【名】〔佛〕**はったう**（八倒）を見よ。

はち‐だう 八道 【名】㊀〔地〕『道の稱は、もと支那唐代の制に倣へるもの』我國、朝鮮・樺太・臺灣の、未だ領域に入らざりし時代に、畿內以外の地を、東海道・東山道・山陽道・山陰道・南海道・西海道・北陸（ホクロク）道・北海道の八つに區分したるもの。もと七道なりしが、蝦夷（エゾ）の地に、新に北海道の名を命じてその一に加へしなり。㊁〔地〕朝鮮を八つに區分したるもの、即ち京畿道・江原道・咸鏡道・平安道・黃海道・忠淸道・慶尙道・全羅道。今は京畿・黃海の二道以外を、各南・北に分ちて十三道とす。㊂〔佛〕**はっしやうだう**（八正道）に同じ。

ばち‐だこ 撥胼胝 【名】三味線を彈き馴れて、撥のために、指に出來るたこ。

はち‐たたき 鉢扣・鉢敲 【名】**くうやねんぶつ**（空也念佛）を見よ。猿蓑（乙州）「鉢たたき憐は顏に似ぬものか」

鉢扣の歌 【句】鉢扣の唄ふ歌。空也上人の作と傳へたるは、「諸法實相と聞く時は、峰の嵐も法（ノリ）の聲、八萬法一如と觀ずれば、はまの螻蟻も佛なり」

はちだ‐とものり 八田知紀 【名】〔人〕**はったとものり**（八田知紀）を見よ。

はちだ‐ふろしきあみ 八手風呂敷網・八田風呂敷網・八駄風呂敷網 【名】四艘張網の一種。長さ三十五尋、幅三十尋餘にて、四方に引綱と石塊とを結び、浮子（アバ）と沈子（イハ）とを有せず、漁船四艘、點火船十艘にて使用し、鰺（アヂ）・鯖（サバ）などを捕るに用ふ。

はちぢく 八軸 【名】 ほっけはちぢく（法華八軸）を見よ。 空穗「ただ八軸を友だちにてぞこもりゐためる」

八軸の妙文（メウモン） 【句】 〔書〕 ほけきやう（法華經）の異稱。 平家「八軸の妙文、九帖の御書も置かれたり」

はちぢん 八陣 【名】 八樣の陣立。 通例は、天・地・風・雲・龍・虎・鳥・蛇の八物に象（カタド）れども、兵家によりて、その名稱同じからず。 卽ち諸葛孔明のと稱するは、洞當・中黃・龍騰・鳥翔・連衡・握機・虎翼・折衝、又、吳子のは、車箱・車輪・曲・鋭・直・卦・衝陣・鵞鸛、又、孫子のは、方・圓・牝・牡・衝方・罘罝・車輪・雁行、又、大江維時の唐より傳へ來れりといふは、魚鱗・鶴翼・雁行・彎月（一に、偃月）・鋒尖・衡軛・長蛇・方圓。

はちぢんしゆご 八陣守護 【名】 次條の略。

はちぢんしゆごじやう 八陣守護城 【名】 加藤淸正毒殺せられ、その子忠廣の德川家康に屬せし由の傳說に據りて作りし淨瑠璃。 中村漁眼・佐川藤太の合作。 主として、厭蝕（エンシヨク）太平記に據りしものの如く、淸正を政淸と變へたる外、森三左衞門は池田左衞門、兒島元兵衞政次は後藤又兵衞基次、佐佐木左衞門高綱は眞田左衞門幸村、片岡殿は片桐且元等、當時の史上の人物に當てて作れるに似たり。

はちぢやう 八丈 【名】 ❶〔地〕 はちぢやうじま（八丈島）の略。 ❷はちぢやうぎぬ（八丈絹）の略。 諺「襤褸（ボロ）でも八丈」 宇治「八丈をば賣らで」

はちぢやうがひ 八丈貝 【名】 〔動〕 にしきがひ（錦貝）に同じ。

はちぢやうかりやす 八丈刈安 【名】 〔植〕 こぶなぐさ（藎草）に同じ。

はちぢやうぎぬ 八丈絹 【名】 『古は、その長さ八丈ありしより名づけたるなるべしといふ』 ❶古、尾張國と美濃國とより產出せし絹。 東鑑「八丈絹二疋」 ❷八丈島より製出する絹布。 黃絲と樺色絲との縱橫の縞なるを、黃八丈といひ、その他、鳶色及び黑色なるものは、各、鳶八丈・黑八丈と呼ぶ。 色の褪めぬと練絲の力强きとを、特色とす。 又、羽後國秋田より產出する秋田八丈あり。

はちぢやうぐは 八丈桑 【名】 〔植〕 桑の一品種。 八丈島より產し、葉の質良好にして、最も養蠶に適すといふ。

はちぢやうけいま 八丈けいま 【名】 〔植〕 ばくちのき（ばくちの木）に同じ。

はちぢやうさう 八丈草 【名】 〔植〕 あしたば（鹹草）に同じ。

はちぢやうしだ 八丈羊齒 【名】 〔植〕 裏白（ウラジロ）科に屬する多年生の草。 裏白の類にて、八丈島に產す。

はちぢやうじま 八丈縞 【名】 八丈絹❷又は秋田八丈の縞物。 心中二枚繪草「うそ汚れた八丈縞」

はちぢやうじま 八丈島・八丈嶋 【名】 〔地〕 伊豆七島の最南部に位する火山島。 東京の正南百七十海里。 七島中第一の大島にて、周圍十里。 その形富士山に似たる甑（コシキ）峯峙ち、俗に八丈富士といふ。 屬島に、靑ケ島・鳥島等あり。

はちぢやうつぐみ 八丈鶫 【名】 〔動〕 鶫の一種。 普通のと同樣なれど、ただ、喉の邊、赤色を帶び、尾の羽も赤褐色を呈す。

はちぢやうつむぎ 八丈紬 【名】 八丈絹❷の內、紬絲を使用したるもの。 一代女「羽織は紅鳶にして、八丈紬のひっかへし」

はちぢやうな 八丈菜 【名】 〔植〕 ❶菊科に屬する多年生の草。 根莖は地中を匍匐し、地上莖は、直立して、高さ三四尺に達し、これを斷てば、白き汁浸出す。 葉は長橢圓形にて、細鋸齒を有し、夏季、葉腋より、花枝生じ、その頂に、黃色・小形の頭狀花序を著く。 山野に自生す。 はまにがな。 ❷はまにがな（濱苦菜）❶に同じ。

はちぢやうびな 八丈雛 【名】 八丈島の島人の製する、紙製・男裝の雛人形。 墨にて、眼・鼻・口・髮の毛、又は著物の模樣を書き、赤き紙を帶とす。

はちぢやうふじ 八丈富士 【名】 〔地〕 はちぢやうじま（八丈島）を見よ。

はちぢやうまめ 八丈豆 【名】 〔植〕 はっしようまめ（八升豆）に同じ。

はぢっかき 恥搔・耻搔 【名】 はぢかき（恥搔）の訛。

はちつけ 鉢附・鉢著 【名】 次條の略。 義經記「鉢附を、したたか突かれけれども、仔細は無し」 同「首の骨を、ふっと射ちぎりて、雁股（カリマタ）は、鋒附に立つ」

鉢附の板 【句】 冑の錏（シコロ）の一枚目の板。 保元「左の眼（マナコ）を、兜の鉢附の板に射附けられながら」 太平記「兜の鉢附の板に、ひしと差して」

鉢附の板の横縫（ヨコヌヒ） 【句】 「鉢附の横縫」に同じ。 太平記「鉢著の板の横縫切れて、矢尻の見ゆるばかりに射籠みたりければ」

鉢附の鋲（ビヤウ） 【句】 鉢附の板の四箇所に、二本づつ寄せて打ちたる飾鋲。

鉢附の横縫 【句】 鉢附の板の一部。

はちつけびやう 鉢附鋲 【名】 兜に鉢附の板を打附くる鋲。

はぢづら 恥面・耻面 【名】 次條を見よ。

恥面搔かす 【句】 當人の面前にて、恥を搔かす。 義經腰越狀「こなたが、何（ナン）の、以前が武士、竹のふしか、木のふしか、鰹節でもあるまいと、恥面かかせど、きよろりが味噌」 嫩軍記「やあ、にっくい女め。 靡かぬ上に、色色の雜言、恥面かかされ、堪忍ならず」

はちて 蜂手 【名】 昔、船戰に用ひし具。

はちでう 八條 【名】 ❶〔地〕 平安京の東西の條里の一。 ❷姓氏の一。 本姓は藤原。 四條家の一門櫛笥（クシゲ）より出づ。 從一位・內大臣隆賀の第二子隆英を祖とす。 明治維新後、子爵を授けらる。

はちでうだじやうだいじん 八條太政大臣 【名】 〔人〕 たひらきよもり（平淸盛）に同じ。 平家「平相國禪門をば、八條太政大臣と申しき。 八條より北、坊城より西に、一町の亭ありし故なり」

はちでうどの 八條殿 【名】 ❶にしはちでうどの（西八條殿）に同じ。 盛衰記「此所をば、八條殿の蓬が壺とぞ申しける」 ❷〔人〕 正親町（オホギマチ）天皇の皇孫智仁（トモヒト）親王の稱號。

はちでうのみや 八條宮 【名】 〔人〕 ❶あつざねしんわう（敦實親王）の異稱。 ❷皇族の宮號の一。 正親町（オホギマチ）天皇の皇孫智仁（トモヒト）親王（後水尾天皇の皇子）に至りて、第三世穩仁親王（後水尾天皇の皇子）に至りて、京極宮と稱せられ、その後、三世を經、作宮（靈元天皇の皇子）に至りて、常磐井宮と稱せられ、その御繼嗣文仁親王（同じく靈元天皇の皇子）京極宮の稱に復せられ、二世を經て、盛仁（タケヒト）親王（光格天皇の皇子）の時、桂宮と改めらる。 かつらのみや（桂宮）參照。

はちでうふさしげ 八條房繁 【名】 〔人〕 八條流馬術の祖。 近江守と稱す。 關東の人。 小笠原流の馬術を學び、遂に一家を成す。 永正五年歿す。

はちでうへんぜうしんゐんぶぎやう 八條遍照心院奉行 【名】 足利幕府の諸奉行の一。 八條遍照心院に關する事務を掌りしもの。

はちでうもく 八條目 【名】 四書の一なる大學の內容をなせる格物・致知・誠意・正心・修身・齊家・治國・平天下の八項。（三綱領に對して）

はちでうりう 八條流 【名】 馬術の一派。 八條房繁を祖とするもの。

はちでふじき 八疊敷 【名】 ❶疊八疊を敷く室。 ❷疊八疊を敷く室だけの廣さ或は大さを有するもの。 譬「狸の睾丸（キンタマ）八疊敷」 大織冠「八疊敷の落雁二箱」 和合人「この古狸めが、……、入道に化けるのは、己の得手だ。 八疊敷を締め上げるぞと、股の間へ、手を突っ込まれ」

はちてん 八天 【名】 〔佛〕 はってん（八天）を見よ。

はちてんぐ 八天狗 【名】 はってんぐ（八天狗）を見よ。

はちど 八度 【名】 〔音〕 おくたあぶに同じ。

はちどうじ 八童子 【名】 〔佛〕 はちだいこんがうどうじ（八大金剛童子）に同じ。 十訓「夢に八童子ありて、林懷が護法なりとて、腹をたたきて、雜穢（ヱザフ）を驅り出すと見る」

はちとく 八德 【名】 はっとく（八德）を見よ。

はちどはい 八度拜 【名】 兩段再拜を重ねて拜禮すること。 江次第「以二八度拜一、爲二兩段再拜一」

はちどり 蜂鳥【名】〔動〕鳴禽類に屬し、約五百種ありて、分類上、蜂鳥科を形成する鳥。體長七八寸を超ゆるものなく、小なるは二寸ほどに過ぎず。羽は美しく、概ね綠・青・褐等の諸色を呈し、嘴は細長くして、管狀をなし、花間に昆蟲を索めて食ふ。南亞米利加の熱帶地方に多し。

はちなん 八難【名】**一**〔佛〕佛を見、法を聞くに就きて、障難となるものの八種。即ち地獄・畜生・餓鬼・長壽天・欝單越(ウツタンヲツ)・盲聾瘖・世智辨聰・生在佛前佛後。初の三種は、三惡道に在るものにして、苦惱劇甚なるがために、次の二種は、樂多きがために、又、後の三種は、苦樂の中間なる人間に生れて、見佛・聞法の緣多きに拘らず、或は五根不具なるがために、或は世智ありて、外に交るがために、或は不幸にして、佛世に遇はざるがために、すべて法を聞くを得ずと說く。 榮花「所はこれ不退なれば、三途(サンヅ)・八難のおそりを免れたり」 **二**飢・渴・寒・暑・水・火・刀・兵の八種の難儀。 **三**多くの非難すべき點。 多くの缺點。 諺「色の白いは、八難隱す」

ばちなんだ 跋難陀【名】〔佛〕**ばつなんだ**(跋難陀)を見よ。

はちにん 八人【名】**一**人數一人の八倍。 **二**『火の字を分解すれば、八人の二字となるによりていふ』**ひ**(火)の隱語。

はちにんがた 八人肩【名】人夫八人にて舁くこと。 はちまいがた。 一代男「八人肩の大乘物、五人の太鼓持」

はちにんぐるま 八人車【名】『撥車に比して、日に八倍の功程をなすといふによりて稱す』紡車の一種。

はちにんげい 八人藝【名】一人にて、腹に鼓を掛け、胸に笛あり、頭上にも鳴器あり、足の踵の上に小き鉦を附け、片足には撥を附け、歩行きながら打鳴らし、八人分の役を勤むる藝。又、一人にて、物陰に居て、數人の音聲・動作を演ずる藝。 浮世風呂「八人藝と申して、一人で、八人の眞似を致します」

はちにんざとう 八人座頭【名】前條に同じ。

はちにんどうじ 八人童子【名】『**ひやうちやうどうじ**(丙丁童子)を見よ』**はちにん**(八人)［二］に同じ。 宗長手記「古今著聞集五冊、口傳切紙八枚、氏輝へ參らせ置き候間、あとはかもなきこと、恥かしく思はぬには侍らねど、氏輝、手にも餘り、この道、いたく深くせさせたまひて後、自見ありて、無用の物とも思ひ捨てたまはば、八人童子に與へらるべからんや」

はちねつ 八熱【名】〔佛〕次條の略。 盛衰記「當來には、必ず萬劫・千劫を限り、永く八寒・八熱に沈むべし」

はちねつぢごく 八熱地獄【名】〔佛〕**はちだいぢごく**(八大地獄)に同じ。(八寒地獄に對して)

はちのき 鉢木【名】**一**鉢植の木。 謠曲(鉢木)「鉢の木に好(ス)き、數多木を集め持ちて候ひしを」 **二**『常世夫婦の、薪乏しきがため、かねて愛培せし鉢植の木を焚きて、時賴に啜を進むる事あるよりいふ』謠曲の一。北條時賴が、剃髮の後、諸國の吏民の狀態を視察せんとて、鎌倉を出で、六十餘州を行脚せし、その旅行中、上野國にて、雪に降りこめられ、はからず佐野源左衞門常世(ツネヨ)が佗住せる家に宿りて、一族のために土地を押領せられたるを知り、かかる貧苦の裡にも、鎌倉幕府に對する忠誠の念を忘れざるに感じ、遂に押領せられし土地に、新領をも併せて賜ふに至りし事を作れるもの。

はちのきおび 鉢木帶【名】『謠曲の鉢木に本づきたる名』黑地に梅・櫻・松などを處處に織り附けたる女帶。 德川時代に流行せり。

はちのこ 鉢子【名】『**そでのこ**(袖子)を見よ』**はち**(鉢)**一**に同じ。 運步色葉集「鉢子、ハチノコ」 曠野(卜枝)「鉢の子に木綿を受くる法師かな」 太祇「鉢の子に煮え立つ粥や今年米」

はちのこ 【名】**一**〔動〕**みみず**(蚯蚓)に同じ。〔古語〕 字鏡「蟺、波知乃子」 **二**榧(カヤ)の實。

はちのじ 八字【名】**はちじ**(八字)**一**に同じ。

額(ヒタヒ)に八の字を寄す【句】『**はちじ**(八字)［二］を見よ』憂へ悶えて、左右の眉の間に、縱に二三條の皺生ず。

はちのじさう 八字草【名】〔植〕**みぞそば**(溝蕎麥)に同じ。

はちのじみづひき 八字水引【名】〔植〕**みづひきぐさ**(水引草)に同じ。

はちのす 蜂巢【名】『形、昆蟲の蜂の巢に似たるよりいふ』マイクロフォンの、音聲を受くる部分の俗稱。

はちのひれ 蜂比禮【名】十種(トクサ)の神寶(カンダカラ)の一。

はちのへ 八戶【名】〔地〕**一**陸奧國三戶(サンノヘ)郡、馬淵(マベチ)川口の南にある町。海陸交通の便ありて、繁華なること、郡中に冠たり。 南部氏の舊藩地。一名、小南部(コナンブ)。 **二**明治の初年設置の縣の一。 **ひろさき**(弘前)［二］參照。

はちのもの 鉢の物【句】**はち**(鉢)の條下を見よ。

はちのを 發の緒【句】**はち**(發)の條下を見よ。

はちはい 八杯・八盃【名】**一**一杯の八倍。 **二**はちはいどうふ(八杯豆腐)の略。

ばちはい 罰杯・罸盃【名】**ばっぱい**(罰盃)に同じ。 運步色葉集「罰盃、バチハイ」

はちはいどうふ 八杯豆腐【名】水四盃、醬油二盃、酒二盃の割合にて煮たる汁にて、細く薄く溫飩の如く切りたる豆腐を煮たるもの、又その豆腐。 うどんどうふ。 はちはい。

はちばう 鉢坊【名】**はちばうず**(鉢坊主)の略。 俳諧新選(飛良)「鉢坊の手にも渡るや今年米」

はちはうさんごるゐ 八放珊瑚類【名】〔動〕珊瑚類に屬する海產腔腸動物の一類。 殆ど全部群生にして、觸手八本あり、時として突起を列生し、羽狀・鋸齒狀をなす。 隔膜も八箇ありて、その腹側には筋帶あり。 管(クダ)珊瑚・海雞頭(ウミケイトウ)・磯花(イソバナ)・赤珊瑚・海松(ウミマツ)・木賊(トクサ)・珊瑚・海鰓(ウミエラ)など、これに屬す。 磯花類。 八射珊瑚類。 八出珊瑚類。 八放線類。

はちばうず 鉢坊主【名】**一**托鉢してあるく乞食坊主。 はちびらき。はちばう。はちもらひ。 はっちばうず。 はっちばう。 はちこくり。 はちこっくり。 織留「天王寺に、鉢坊主に衣の日借(ヒガリ)を渡世にする出家あり」 **二**身持の惡しき僧。 墮落坊主。

鉢坊主が米をこぼしたやう【句】繰言(クリゴト)のやうに呟く譬。〔諺語〕

鉢坊主の手の內ほど【句】『「手の內」を見よ』極めて僅かなる扶持米の形容。〔諺語〕 繼八卦柱曆「武士の眞似をして、鉢坊主の手の內ほど、米も取ったこの梅龍」

鉢坊主の報謝米(ホウシヤマイ)ほど【句】前條に同じ。〔諺語〕

はちはうせんるゐ 八放線類【名】〔動〕**はちはうさんごるゐ**(八放珊瑚類)に同じ。

はちはうゐ 八方位【名】**はっぱうゐ**(八方位)に同じ。

はちはち 八八【名】花合(ハナアハセ)［二］の方法の一。三人乃至六人にて行ひ、一回を三人に限り、一點(單に花卉のみを描きたるもの)・五點(短册を描き添へたるもの)・十點(鶯の添ひたる梅、橋桁の添ひたる菖蒲、蝶の添ひたる牡丹、猪の添ひたる萩、雁の添ひたる芒、盃の添ひたる菊、鹿の添ひたる紅葉、燕の添ひたる柳)・二十點(鶴の添ひたる松、幔幕の添ひたる櫻、月の添ひたる芒、人の添ひたる柳、鳳凰の添ひたる桐)の四種に分ち、總點數二百六十四點、勝負を決する點數を八十八點と定め、これに超えたる點數を取得とし、足らざる差點を損失として計算す。

はぢはぢ 【貌】怖れ震ふさま。 ぶるぶる。 わなわな。 戰戰。 堀川波の鼓「身の毛も立って怖しく、はぢはぢ慄うて居たりしが」

ばちばち 【貌】**一**次條**一**に同じ。 **二**覿面に論じ付くるさま。

ぱちぱち 【貌】**一**物の、熱を受けてはね散り、又、堅き物の、互に強く突當りて跳ね返る音。 一茶「朝晴にぱちぱち炭の機嫌かな」 **二**扇子を繁く開閉し、又は算盤を彈(ハジ)きなどする音。 **三**目をしばしばたたくさま。 和合人「夕日に向った兀天窓(ハゲアタマ)、まぶしくって、目がぱちぱちすらあ」

はちはち-かんたい 八八艦隊【名】超弩級戰艦八隻と巡洋戰艦八隻とを主力とし、これに順應せる諸種の艦船を附屬せしめて編制せる一艦隊。**はちしかんたい**(八四艦隊)參照。

ばちぱち-ぐさ ぱちぱち草【名】〔植〕あ「ぶのめに同じ。

はち-ばみ 蜂喰【名】次條を見よ。

蜂喰の羽(ハネ)【句】角鷹(クマタカ)の一種の羽。判官物語「はちばみの羽をもってはいだる一つ中差を」

はち-はん 八判【名】**はちはんうらがき**(八判裏書)を見よ。

はち-ばん 八蠻・八蕃【名】一『書經の旅獒篇に「惟克レ商、遂通二道于九夷八蠻一」、唐書の西域傳に「東至二高麗一、南至二眞臘一、西至二波斯・吐蕃・堅昆一、北至二突厥・契丹・靺鞨一、謂二之八蕃一」とあり』古、支那にていひし、八種の蠻人の國。即ち天竺・咳首・僬僥・跛踵・穿耳・儋耳・狗軹・旁脊。二えびす。外夷。偏土。太平記「四夷・八蠻起り合って、急を告ぐる事、隙なかりければ」

はちはん-うらがき 八判裏書【名】德川時代に、三奉行八人の捺印せし、評定所の目安裏書。

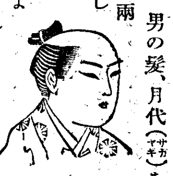
はち-はらひ 鉢拂【名】物の盡くること。

はち-はらひ はち拂【名】『「蜂を拂ふ」に關係ある語か』聽き入れずして、一向に言ひ退くること。擯斥。

はち-びたひ 鉢額【名】拔け上りたる額なるべし。一心二河白道「お額からの不束(フツツカ)さ、腮鰓(ヤリオトガヒ)に鉢額」

はち-ひん 八貧【名】**ふかがははちひん**(深川「八貧)を見よ。

ばち-びん 撥鬢【名】男の髮、月代(サカヤキ)を、廣く深く剃り込み、兩鬢と後頂部とに殘したる毛にて、髷を短く結ひしもの。淨瑠璃太夫江戶半太夫より始り、寶永頃、流行したりといふ。いとびん。ばちわげ。やっこあたま。


(ばちびん)

ばちびん-せうせつ 撥鬢小說【名】『明治の中期、村上浪六作の小說に對する評語』撥鬢奴を主人公として、その性格をゑがくを主とせる小說。

ばちびん-やっこ 撥鬢奴【名】一**ばちびん**(撥鬢)に同じ。二髮を撥鬢に結ひたる町奴。風來六六部集(放屁論)「中肉にして、色白く、三日月形(ミカヅキナリ)の撥鬢奴」

はち-びやう 八病【名】〔文〕漢詩又は和歌にて忌み嫌ふ八つの病。漢詩のは、沈約(シンヤク)の定めしものにて、平頭(五言兩句十字の中、第一・第六の兩字と第二・第七の兩字との同聲なるもの)・上尾(第五・第十の兩字の同聲なるもの)・蜂腰(第二・第五の兩字の同聲なるもの)・鶴膝(第五・第十の兩字の同聲なるもの)・大韻(韻字以外の九字の中に、それと同韻の文字を用ひたるもの)・小韻(韻字以外の九字の中に、韻字に關係なき同韻の字を用ひたるもの)・傍紐(丈と梁とのごとき發音相近き文字を用ひたるもの)・正紐(壬と任・紝等とのごとき發音相近き文字を用ひたるもの)の八種にて、中にも、上尾と鶴膝とを最も忌み、和歌のは、漢詩のに倣へるものにて、同心・亂思・欄蝶・渚鴻・花橋・老楓・中飽・後悔の八種。謠曲(草紙洗小町)「四病・八病、三代・八部、同じ文字・文字も、かほどの誤は、昔も今も有りぬべし」

はち-ひらき 鉢開【名】一『「鉢を開く」を見よ』鉢の使ひはじめ。醒睡笑「今日の振舞は、ただ亭主の鉢開にて候ふ」きのふはけふの物語「さる寺にて、順禮と鉢ひらきと寢物語するを聞きければ」二**はちばうず**(鉢坊主)一に同じ。醒睡笑「鉢開どもの見て、その中の宿老がいひける」

はち-ふ 八府【名】王朝時代の禁衞の官府八箇、即ち左右兵衞府・左右衞士府・中衞府・近衞府・外衞(ゲ)府の總稱。**ごゑふ**(五衞府)・**ろくゑふ**(六衞府)參照。

はち-ふ 八不【名】〔佛〕**はっぷ**(八不)を見「よ。

はち-ぶ 八分【名】一一分の八倍。二**はちぶどほり**(八分通)に同じ。鎌田兵衞名所盃「味方八分の負軍」三**はちぶんめ**(八分目)に同じ。四杉原紙の一種。

はち-ぶ 八部【名】一〔佛〕**はちぶしゆ**(八部衆)に同じ。二〔書〕**はちだいしふ**(八代集)に同じ。謠曲(草紙洗小町)「四病・八病、三代・八部」三〔書〕**はちぢく**(八軸)に同じ。

八部の鬼衆【句】〔佛〕**はちぶきしゆ**(八部鬼衆)に同じ。

はち-ふう 八風【名】〔佛〕**はっぷう**(八風)「を見よ。

はちぶ-がっしやう 八部合唱【名】〔音〕『英 Eight-voiced chorus』八組に分れて、八つの聲音にて歌ふ合唱。大抵は、四組より成る合唱二つに區分す。

はちぶがっしやう-きよく 八部合唱曲【名】〔音〕『英 Octet』八箇の樂器にて奏する曲。

はちぶ-きしゆ 八部鬼衆【名】〔佛〕一四天王の所領する八種の鬼衆、即ち乾闥婆(ケンダツバ)・毘舍闍(ビシヤジヤ)・鳩槃荼(クハンダ)・餓鬼・諸龍・夜叉(ヤシヤ)・羅刹(ラセツ)。二**はちぶしゆ**(八部衆)に同じ。

はち-ぶく 蜂吹く【動四自】『蜂の飛び來る時、吹き拂ひて寄せつけぬ義とも、撥無に語尾の添ひたるにて、拂ひ除くる義ともいふ。**ばちむ**(撥無)參照』嫌ひて却く。擯斥す。〔古語〕 源氏「鬢がちにつなしにくき顏を、鼻など打赤めつつはちぶき言へば」 同「いとむくつけき事をもおぼし寄りけるかな、何しに參りつらんとはちぶく」

はち-ふくでん 八福田【名】〔佛〕**はっぷく**「でん(八福田)を見よ。

ばち-ぶくろ 撥袋【名】三味線などの撥を入れ置く袋。

はちぶ-しゆ 八部衆【名】〔佛〕『**ぶしゆ**(部衆)を見よ』法に歸依(キエ)し、これを擁護(オウゴ)すと信ぜらるる、八種の生類(シヤウルヰ)、即ち天・龍・夜叉(ヤシヤ)・乾闥婆(ケンダツバ)・阿修羅(アシユラ)・迦樓羅(カルラ)・緊那羅(キンナラ)・摩睺羅伽(マゴラガ)。天は又六道の一に數へらるるものにて、その外の七種は、神祕的鬼畜に屬す。八部鬼衆。八部。龍神八部。人非人。**てんりゆうはちぶ**(天龍八部)・**りゆうじんはちぶ**(龍神八部)・**はちぶきしゆ**(八部鬼衆)・**にじふはちぶしゆ**(二十八部衆)參照。

はちぶせ-やま 鉢伏山【名】〔地〕攝津國武庫(コム)郡の西部にある山。播磨國に跨り、鐵拐(テツカイ)ケ峯に連る。

はちぶ-ぞり 八分反【名】延寶の頃、江戶にて流行せし、一種の編笠。

はちぶ-だま 八分玉【名】直徑八分の玉。和合人「江戶珊瑚珠にて、八分玉の緒〆を、薄羽織の下より、ほのかに赤つかせ」

はちぶ-ちゆうだう 八不中道【名】〔佛〕**はっぷちゆうだう**(八不中道)に同じ。

はちぶ-どほり 八分通【名】十中の八ぐらゐの程度。はちぶんめ。はちぶ。

はちぶ-まめ 八分豆【名】**がんくひまめ**(雁喰豆)を云ふ。〔常陸國茨城の方言〕

はちぶん-おんぷ 八分音符【名】〔音〕『英 Quaver』**おんぷ**(音符)を見よ。

はちぶん-ぎ 八分儀【名】**おくたんと**に同じ。**しぶんぎ**(四分儀)・**ろくぶんぎ**(六分儀)參照。

はちぶん-きうしふ 八分休止符【名】〔音〕全休止符の八分の一の長さだけ休止すべきことを示す休止符。

はちぶん-め 八分目【名】一全量の十分の八ぐらゐ。はちぶ。和合人「猪口(チヨク)へ、八分目ばかり酒を注(ツ)ぎ」二物をひかへめにすること。

はちぶん-ゑんき 八分圓器【名】**はちぶんぎ**「(八分儀)に同じ。

はちぶ-やま 八分山【名】嘉永の頃、江戶にて流行せし、幅一寸八分の男帶。

はち-へいじ 八平氏【名】「坂東の八平氏」を見よ。

はち-べん 八辨【名】八種の辨官、即ち左右大辨・左右中辨・左右少辨及び左右權少辨。

はち-へんけい 八邊形【名】〔數〕**はっかく**「けい(八角形)に同じ。

はち-べゑ 八兵衞【名】一『**はち**(八)一・**はちざゑもん**(八左衞門)を見よ』**げっけい**(月經)を云ふ。〔岩代國の方言〕二女子の、活潑に過ぎて、男子の如く振舞ふもの。はち。〔大阪の語〕三女の、年もゆかぬに、大人びたるもの。〔伊勢國の方言〕四犢鼻褌を著けざること、又、裸體。〔尾張國の方言〕五何事もうちあけて語ること。〔尾張國の方言〕六小兒のぼんのくどに剃り殘しておく髮。七〔人〕元祿頃の、小唄・淨瑠璃の名人。其角「八兵衞や泣かざなるまい虎が雨」

はちぼ　八墓【名】平安朝時代の制にて、天皇の御近親の外戚たる八人の墓。十陵と同じく、毎年荷前（ノサキ）の使を差遣せられたり。宇多天皇以來の制にて、歷代の親疎によりて加除ありしかど、多武峰（タウノミネ）なる藤原鎌足の墓のみは、常に除かれざりき。**しぼ**（四墓）・**ごぼ**（五墓）參照。

はちぼく　八木【名】㊀松・柏・桑・棗・橘・柘・楡・竹の八種の木。㊁『米の字を分解すれば、八木の二字となるによりていふ』**こめ**（米）の異稱。東鑑「八木一萬石」鸚鵡合戰「八木など、何千俵も積み重ねていふ」世間子息氣質「北濱の米問屋と相談して、八木を思ふほど買ひ」㊂〔植〕**なんばんきび**（南蠻黍）を云ふ。〔伊勢國の方言〕

はちぼこり　蜂誇【名】蜂の誇るが如くに誇ること。戴恩記「にっくき惟任（コレタフ）が蜂誇に誇り」

はちぼふ　八法【名】〔佛〕**はっぽふ**（八法）を「見よ。

はちまいがた　八枚肩【名】**はちにんがた**（八人肩）に同じ。曾我會稽山「乘物やれ、參れと傳へて、八枚肩、歩徒（カチ）すねっ脛、やっこらさ」

はちまいかんばん　八枚看板【名】昔、劇場にて、八人の立役（タテヤク）と四人の女方とによりて、一座を組織せし時、八人の立役一人づつの名を記して、その正面に掲げたる、八枚の看板。又これらの八人を表（オモテ）八枚といへり。表附（ヘウツケ）。

はちまいぎしやう　八枚起請【名】淨土宗にて、法然（ホフネン）上人の一枚起請に、聖光上人（辨長）相傳の一紙を添へられし後、記主禪師（鎌倉光明寺の開山）の文永六年八月二十九の誓詞、良曉師の正和二年二月十五日の誓、定惠師の康永二年八月二十三日の誓、順譽師の應永十年五月二十六日の誓、良順師の永享五年十一月三日の誓、常譽師の康正二年の誓詞をも加へ、光明寺一流に於ける正流の相承として、元祖の教誡に違はざるしるしとするもの。八師相傳の法文（ホフモン）。

はちまき　鉢卷【名】㊀頭の鉢を、布帛にて卷くこと。昔の武裝には、先づ烏帽子を著けたる上より、その緣（ヘリ）に、これを施し、然る後、兜を被りたり。ゆひがしら。**ひたひがね**（額金）參照。盛衰記「採烏帽子引立てて、薄紅梅の鉢卷して」㊁〔建〕土藏又は箱棟などの軒下にありて、横に、一段厚く細長く土を塗りたる處。かしらまき。㊂細帛にて、帽子の鉢の緣を卷きしもの。

はちまへ　鉢前【名】手水鉢を前にして、手を淨めし水を流す所。即ち吸込及びその周圍のあしらひ等。てうづまへ。和合人「鉢前の脇の泥を附けて」

はちまん　八幡【名】㊀**はちまんじん**（八幡神）の略。㊁**はちまんぐう**（八幡宮）の略。八幡三所（サンジヨ）【句】宇佐八幡宮・石淸水（イハシミヅ）八幡宮、又、鶴が岡八幡宮などに祀れる三座、即ち應神天皇・神功皇后・玉依姬。**はちまんぐう**（八幡宮）㊀參照。平治「手づから大師に授けたまひし紫の袈裟には、光明赫奕として、八幡三所も、おはしますなり」平家「八幡三所、春日の大明神、竊かに影向（ヤウガウ）を垂れ」

はちまん　八幡【名】〔地〕㊀近江國蒲生（ガマフ）郡にある町。南近江第一の地。鐵道東海道線の停車場あり。㊁美濃國郡上（グジヤウ）郡、吉田・上保（カミノホ）二川の合する所にある町。岐阜市を距る十三里二十六町。

はちまん　八萬【數】㊀一萬の八倍。㊁**はちまんしせん**（八萬四千）㊁に同じ。八萬諸聖敎（シヨシヤウゲウ）皆（カイ）是（セ）阿彌陀【句】〔佛〕釋迦一代の幾多の說敎も、歸する所は、阿彌陀の一佛に在ること。我國淨土門の古德の釋文にて、佛經中の成語には非ずといふ。謠曲（當麻）「八萬諸聖敎皆是阿彌陀ともありげに候ふ」八萬の法藏【句】〔佛〕「八萬四千の法藏」に同じ。盛衰記「八萬の法藏を說きたまへり」八萬の法門【句】〔佛〕「八萬四千の法門」に同じ。

まちまん　八幡【副】㊀『八幡神に冥護を乞ふ義』呼びかけて助を請ふ語。「弓矢（ユミヤ）八幡」參照。川中島合戰「八幡免せ人遣、御免、御免」㊁全く。甚だ。至極。一代男「八幡氣に入り申し候ふ」重帷子「八幡、我等も、心底變らぬ」

はちまんかか　八幡嚊【名】口喧しき老「婆。

はちまんがし　八幡河岸【名】〔地〕東京の深川八幡宮の邊なる河岸。俗曲（妻夫春雨柳）「二人一緒に去（イ）のよりも、永代橋と思ひしに、……八幡河岸の小船に乘り」

はちまんがね　八幡鐘【名】江戸の深川八幡宮の明（アケ）の鐘。（昔は、神佛混淆なりし故に、鐘を撞きしなり）俗曲（八幡鐘）「八幡鐘のきぬぎぬに、別れともない送舟」俗曲（色山解深川）「そもそも、富岡（トミガヲカ）と申せしは、……撞いてくりやるな、八幡鐘よ。かはい男といちやつきは、うまい仲町（ナカチヤウ）ぢやないかいな」

はちまんぎ　八萬騎【名】「旗本（ハタモト）八萬騎」を見よ。

はちまんぐう　八幡宮【名】㊀八幡神を祀れる神社。各地にありて、大抵は、比賣神（ヒメカミ）・息長帶姬（オキナガタラシヒメ）神の二柱をも配祀す。豐前國の宇佐八幡宮、京都の男山八幡宮、相模國鎌倉の鶴が岡八幡宮、東京深川の富が岡八幡宮等、最も名高し。㊁**はちまんじん**（八幡神）に同じ。平治「天照大神・正（シヤウ）八幡宮は、王法を、いかに守りたまひぬるぞ」

はちまんぐうぶぎやう　八幡宮奉行【名】足利幕府の諸奉行の一。石淸水（イハシミヅ）八幡宮の事を沙汰せしもの。

はちまんぐうゑえんぎ　八幡宮繪緣起【名】〔美〕八幡宮の由來と靈驗とを記したる繪卷。種類多き中に、石淸水（イハシミヅ）八幡宮所藏の二卷、最も名あり。又、河内國譽田（ホンダ）神社所藏のものに、譽田宗廟緣起三卷、神功皇后緣起二卷あり。以上、今、國寶に指定せられ、又、共に、永享五年、足利將軍義敎の寄進に係り、詞書は義敎、畫は土佐光信と傳ふれど、明かならず。その他、大和國手向山（タムケヤマ）神社所藏の二卷、筑前國筥崎宮（ハコザキグウ）所藏の二卷等あり。

はちまんぐさ　八幡草【名】〔植〕**べんけいさう**（辨慶草）に同じ。

はちまんぐどうくん　八幡愚童訓【名】〔書〕㊀神功皇后の征韓、應神天皇の御降誕より、欽明天皇御宇の託宣、和氣淸麿の宇佐派遣等を記し、蒙古襲來の事などに及べるもの。二卷。享祿五年、僧快元の著。群書類從に收めらる。㊁八幡神の垂跡・名號・遷座・御體・本地・王位・氏人・慈悲・放生・受戒・正直・不淨・佛法・後世等の事項を記したるもの。二卷。卜部（ウラベ）兼俱の奧書あり。續群書類從に收めらる。

はちまんざ　八幡座【名】『武道守護の神なる八幡神の宿る所の義』兜の鉢の頂上中央に孔ありて、菊座を施し、これを神宿（カンヤドリ）とも、息拂（イキハラヒ）とも、息出（イキダシ）とも、菊重（キクガサネ）とも、いひ、孔の緣に、臺座（ダイザ）・菊座（キクザ）・上玉（アゲタマ）等の金物あり。しゆみざ。天邊（テヘン）。

はちまんざい　八萬歲【名】〔佛〕『八萬四千歲の略』增減劫の人壽中、最長なるもの（最短は十歲）。水鏡「人の命の八萬歲ありしが」

はちまんさう　八幡草【名】〔植〕**べんけいさう**（辨慶草）に同じ。

はちまんざう　八萬藏【名】〔佛〕「八萬四千の法藏」に同じ。保元「調達が八萬藏を諳んずる、終に奈落の底に墮す」

はちまんしせん　八萬四千【數】㊀一萬の八倍と、一千の四倍と。㊁〔佛〕數量の多きを示すに用ふる語。八萬。**はちおくしせんまん**（八億四千萬）參照。「八萬四千の塵勞」榮花「百寶の色相、葉に具せり。八萬四千の葉ありて、無量妙法備へたり」正統記「八萬四千の塔を建て」八萬四千の敎門【句】〔佛〕「八萬四千の法門」に同じ。八萬四千の相好（サウガウ）【句】〔佛〕『觀無量壽經に見ゆ』天台宗にて、三身の報身に、自受用・他受用の二を分ち、後者を、自受用に對して、應身といひ、且つ第三の劣應身に對して、勝應身と名づけ、その勝應身の具有すといふ相と好との數（劣應身の三十二相と八十種好とに對せしめたるもの）。盛衰記「八萬四千の相好は秋の月」

八萬四千の法藏【句】〔佛〕『法華經の寶塔品に見ゆ』衆生に八萬四千の煩惱(ボンナウ)あるがために、これが對治の經典も八萬四千あること。八萬の法藏。

八萬四千の法門【句】〔佛〕『勝鬘經に見ゆ』釋迦一代の說敎の總稱。衆生に八萬四千の煩惱(ボンナウ)あるによりて、これが對治の法門にも、同數を設けたるものといひ、又、異說あり。八萬の法門。

はちまん‐じん 八幡神【名】『八幡は、阿彌陀の三昧耶形(サマヤギヤウ)なりといひ、佛說の八正道に擬したる八色の幡(ハタ)を、八方に立つる事あるより出でしものといふ。「八正(ハツシヤウ)の幡(ハタ)」・やはた(八幡)參照』應神天皇の神號なりといへど、この神を最初に奉祀したる宇佐神宮の社家大神比義の假託に出で、その說、始めて宇佐託宣集に見えたるものにて、古說には、神武天皇の第三皇子、神功皇后所生の第三皇子、或は彥波瀲武鸕鷀草葺不合(ヒコナギサタケウガヤフキアヘズ)尊・彥火火出見(ヒコホホデミ)尊など見えたるが中にも、最後の彥火火出見尊を申すとの說、最も當を得たるが如しといふ。**はちまんだいぼさつ**(八幡大菩薩)參照。續紀「迎二八幡神於平群郡一」

はちまん‐しや 八幡社【名】**はちまんぐう**(八幡宮)㊀に同じ。續紀「筑紫住吉八幡二社」

はちまん‐せん 八幡船【名】**ばはんせん**(八幡船)「蟠船」を見よ。

はちまん‐だいじん 八幡大神【名】**はちまんじん**(八幡神)の敬稱。

はちまん‐だいぼさつ 八幡大菩薩【名】『神佛混淆の結果、菩薩と申せるなりといふ。**だいじざいわうぼさつ**(大自在王菩薩)參照』**はちまんじん**(八幡神)に同じ。太平記「八幡大菩薩と申すは、應神天皇の應化(オウゲ)、百王鎭護の御ちかひ新なれば」

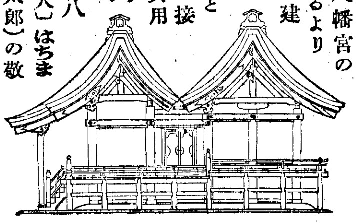
はちまん‐だいぼさつ 八幡大菩薩【副】**はちまん**(八幡)に同じ。豐臣秀吉書簡「筑前は、御葬禮過ぎ、追腹十文字に切り候うても、八幡大菩薩恨無二御座一候」

はちまん‐たらう 八幡太郎【名】〔人〕『長男にて、八幡の社前にて元服せしよりいふ』**みなもとよしいへ**(源義家)の異稱。

はちまん‐ぢごく 八萬地獄【名】〔佛〕『**はちまん**(八萬)㊁を見よ』衆生の多くの煩惱(ボンナウ)を、地獄に譬へていふ語。八萬奈落。源氏冷泉節「身は、八裂に切り裂かれ、八萬地獄に落つるとも、毒藥調合致すべし」

はちまん‐ちやうじや 八萬長者【名】おほがねもち。金滿家。百萬長者。今國姓爺「八萬長者になればとて、……人交(ヒトマジハリ)のなるべきか」

はちまん‐づくり 八幡造【名】『宇佐八幡宮及び男山八幡宮の本殿の樣式なるよりいふ』神社の建築樣式の一。普通、內陣と外陣とを別棟とし、兩者の軒の接する處には、共用の樋を懸け、うつぼ柱を立つ。



（はちまんづくり）

はちまん‐どの 八幡殿【名】〔人〕**はちまんたらう**(八幡太郎)の敬稱。平家「昔、八幡殿の、後三年の御戰に」

はちまん‐どりゐ 八幡鳥居【名】鳥居の一種。柱は圓くして、轉(コロ)あり、笠木と島木との鼻に、反增(ソリマシ)の無きは、春日鳥居に似たれども、笠木等の鼻を襷墨(タスキズミ)にて切りたる點に於て異なるもの。

はちまん‐ならく 八萬奈落【名】〔佛〕**はちまんぢごく**(八萬地獄)に同じ。一心二河白道「出家の身で、女に心を移さば、八萬奈落へ沈まんが」平假名盛衰記「舟に過ある時は、八萬奈落の憂き目を見」

はちまん‐ばと 八幡鳩【名】㊀〔動〕**しらこばと**(白子鳩)に同じ　㊁紋所の一。大小二羽の鳩を向ひ合はせて、八の字の形に描きたるもの。

はちまん‐ぶぎやう 八幡奉行【名】**はちまんぐうぶぎやう**(八幡宮奉行)に同じ。

はちまん‐ぶね 八幡船【名】**ばはんぶね**(八幡船)を見よ。

はち‐まる 八丸【名】德川時代に、長門・周防・土佐などの諸國にて、錢八十文を百文に充てしこと。

はち‐みつ 蜂蜜【名】蜜蜂の內、職蜂の花藥又は樹脂の蠟分を嘗め、胃の一部なる蜜囊に貯へて、巢に歸り、反芻して出し貯へたるもの。水分は蒸發して、普通の蜜となり、香氣と色とは、花の種類によりて同一ならざれど、色は白色又は帶黃色又は帶靑色を呈し、成分は、主として、果糖と葡萄糖とにして、花蜜中の蔗糖の變化せるものとす。食用又は藥用に供す。

ばち‐む 撥無・撥撫【名】『撥は絕又は除の義』道理を否定すること。擯斥。用明天皇職人鑑「四韋駄(シヰダ)と號す外道(ゲダウ)の書、この法を學ぶ者は、因果を撥無し、來世を期(ゴ)せず、現身に、虛空(コクウ)を飛行(ヒギヤウ)し」

は‐ちん 波珍【名】〔動〕一種の蟲。平治「西山には波珍といふ蟲あり。首に、諸の財を戴き、常に佛を供養し奉る思あり」

は‐ぢん 破陣【名】㊀陣を攻め破ること。㊁**はぢんらく**(破陣樂)の略。體源抄「破陣曲事、秦王太平樂者、陣中には、これを用ひず、天下泰平の時の樂なり」

ぱちん【名】**ぱちんどめ**(ぱちん止)の略。

ぱちん【貌】固き物のうち當る、小き音。

ぱちん‐こ【名】『ぱちんは彈く時の音』護謨の紐を、二叉になれる木の小枝の兩端に結び、その護謨に、小石を載せ、彈き飛ばして、小鳥などを打ち落すに用ふる小供の玩具。

ぱちん‐どめ ぱちん止【名】ぱちんと鳴りて食ひあふ金具を取り附けたる、女の帶どめ。ぱちん。

は‐ぢん‐らく 破陣樂【名】㊀舞樂にて、武舞に屬する皇帝(ワウダイ)破陣樂・秦王破陣樂・散手(サンジユ)破陣樂・陪臚(バイロ)破陣樂・武將破陣樂の五曲の總稱。㊁**じんわうはぢんらく**(秦王破陣樂)の略。

はちめ【名】〔動〕あかう(赤魚)を云ふ。「加賀國の方言」

はち‐めん 八面【名】㊀**はっぱう**(八方)㊀に同じ。㊁八つの平面。㊂八つのかほ。「八面・六臂」㊃各方面。

八面玲瓏【句】㊀何れの方面より觀ても、光澤ありて、透明なること。謠曲(野守)「南西北方を寫せば、八面玲瓏と明らかに、天を寫せば、非想非非想天まで、限なく」㊁心中にわだかまりなく、人と交りても圓滿に、事を處しても滯なく巧なる形容。

八面・六臂(ロッピ)【句】㊀八つの顏と、六つの臂と。(佛像などの造り方にいふ)㊁何れの方面に當りても、巧に處理する手腕あること。

ばち‐めん 撥面【名】琵琶の胴の、撥の當る處、即ち撥革を貼りてある處。禁祕抄「撥面文消、所所有二赤色一」平家「琵琶、……、夏山の峯の綠の木の間より、有明の月の出でけるを、撥面に書かれたりける故に」

はちめん‐たい 八面體【名】〔數〕『英 Octahedron 又 Octaedron』八箇の平面にて圍まれたる立體。

はちめん‐びじん 八面美人【名】**はっぱうびじん**(八方美人)に同じ。

はち‐もく 八木【名】**はちぼく**(八木)を見よ。

はち‐もじ 八文字【名】**はちもんじ**(八文字)に同じ。

はち‐もの 鉢物【名】㊀草木の、鉢植にしたるもの。㊁料理の肴の、鉢に盛りたるもの。

はち‐もん 八門【名】㊀八箇の門。㊁遁甲にていふ八箇の入口又は方面。八箇の方面、即ち福・生・養・社・崇・死・驚・開。四方・四隅に出行する時、その日の十干・十二支によりて相違あり。福・生・崇・開に當る方に出行すれば吉、養・社に當る方に出行すれば半吉・半凶、死・驚に當る方に出行すれば大凶なりといふ。

はち‐もんじ 八文字【名】㊀**はちじ**(八字)㊀に同じ。太平記「中差(ナカザシ)取って番ひ、狹間(サマ)の板、八文字に排(ヒラ)いて」同「刀を取り、腹八文字に搔破り」曾我會稽山「乘物の戶を、八文字に開かせ」㊁遊女の道中の足の踏みかた。內八文字と外八文字と

あり。三代男「高島田、いとはでに、棲かいどりて、八文字の踏みやう」

はちもんじ-さう 八文字草【名】〔植〕みぞそば（溝蕎麥）に同じ。

はちもんじ-や 八文字屋【名】德川時代に、京都の麩屋町誓願寺下る處にありし本屋。名を八左衞門自笑といひ、もと役者評判記を賣物とせしが、元祿の頃より、西鶴の浮世草子に倣ひ、その友江島屋其磧等をして小說を作らしめ、八文字屋自笑の名を署し、大に行はれ、所謂、八文字屋物の名を博したり。享保頃は、全盛の時代にして、正德三年、其磧は、自笑と分離せしが、享和四年にまた和解し、爾後、兩人連署にて世に出すこととなりたり。

はちもんじや-じせう 八文字屋自笑【名】〔人〕京都の書肆。通稱は安藤八左衞門。延享二年歿す。年八十。前條參照。

はちもんじや-ぞめ 八文字屋染【名】元祿頃、京都の八文字屋にて染めたる染物。

はちもんじや-ぼん 八文字屋本【名】はちもんじや（八文字屋）を見よ。

はちもんじや-もの 八文字屋物【名】前條に同じ。

はち-もらひ 鉢貰【名】はちばうず（鉢坊主）に同じ。

はちや 蜂屋【名】㈠〔地〕美濃國加茂郡の西南部にある村。蜂屋柹の產地。㈡〔植〕はちやがき（蜂屋柹）の略。

は-ぢや 葉茶【名】茶の樹より若芽を摘み取り焙じて、飲用し得るやうに製したるもの。ちや。（挽茶（ヒキチヤ）に對して）

は-ちやう 波長【名】〔理〕『英 Wave length』波動をなせる物質に於ける波の長さ、卽ち、その同一狀態にある相隣れる部分の間の距離。一秒間の波の速さを、一秒間の振動數にて除すれば、これを得。

ば-ちやう 場帳・塲帳【名】取引所の立會中、その取引を記す帳簿。にはちやう。

はちや-がき 蜂屋柹・塔柹【名】〔植〕柹の一品種。果實は長楕圓形にして、蔕（ヘタ）は方形にして極めて淺く、果皮薄くして光澤強く、橙黃色を呈し、成熟後も赤色とはならず、果肉は柔軟・多汁、白柹（コロガキ）に適す。美濃國加茂郡蜂屋村の原產。はちや。をはりがき。

はち-やき 鉢燒【名】料理にて、煎鳥（イリトリ）を、鉢物とせるもの。

はぢや-つぼ 葉茶壺【名】葉茶を入れおくに用ふる壺。茶壺。犬筑波「葉茶壺の口のせばきに大袋」

ばちや-ばちや【貌】水などをかきまはす時の音。

ぱちや-ぱちや【貌】前條に同じ。

はぢや-や 葉茶屋【名】葉茶を賣る家、又その人。

は-ちゆう 波中【名】なみのなか。波上。波間。

は-ちゆう 爬蟲【名】〔動〕爬蟲類に屬する動物の總稱。ちちゆう。はふむし。

は-ぢゆう 把住【名】㈠とりとむること。㈡〔哲〕『英 Retention』一旦生起したる精神作用の結果を、意識の中に保留すること。把住せる過去の經驗の、再現する時、これを過去に於ける經驗として再認するものは、卽ち記憶なり。

はちゆう-るゐ 爬蟲類【名】〔動〕脊椎動物の一綱。外形・習性等に於ては、互に著しく異なれども、體面には甲又は角質の鱗を被り、皮膚は皮腺に乏しくして、常に乾燥し、冷血・卵生にして、心臟は概ね三室より成り、肺にて呼吸す。鰐類・龜類・蜥蜴（トカゲ）類・蛇類の四目に分たれ、蛇類は四肢を缺けども、その他は、多くはこれを全備して、爬行又は游泳の具に供す。

はちらう-がた 八郎潟【名】〔地〕羽後國第一の大湖。琵琶湖に次ぐ大湖にして、周圍二十里二十町。山本・南秋田の二郡に圍まれ、西北方は、狹長なる砂嘴によりて、日本海と隔絕す。別稱、琴湖（コトノウミ）・大方八郎潟・八郎大潟・八龍潟。

はぢらふ 恥らふ・羞らふ【動四自】恥しき樣に見ゆ。はづかしがる。はにかむ。はぢしらふ。源氏「いたうはぢらひて、口おほひしたまへるさへ」

はち-り 八里【名】㈠一里の八倍。㈡次條㈡に同じ。〔肥前國の方言〕

はちり-はん 八里半【名】㈠〔植〕はっしようまめ（八升豆）に同じ。㈡『栗に近き美味を有すとの義を、栗と九里と音相同じきによりていへる語』やきいも（燒芋）の異稱。浮世風呂「八里半とは、九里に近いと申すことだ」

はち-りん 八りん【名】はちいん（八音）の訛といふ。謠曲（白樂天）「八大龍王は、八りんの曲を奏し」（改正本には、「八音」と書きて、「はっちん」と讀ませたり）

はちりん-せん 八厘錢【名】『明治以後、八厘に通用したるによりていふ』てんぱうつうはうせん（天保通寶錢）の異稱。

はち-りんぽう 八輪寶【名】りんぽう（輪寶）㈡を見よ。

はちりやう-ばん 八兩判【名】慶長年間、德川幕府にて吹き、小判八兩に通用したりといふ判金。

はち-りゆう 八龍【名】㈠〔佛〕はちだいりゆうわう（八大龍王）に同じ。盛衰記「天に八天、龍に八龍あり」謠曲（海士）「守護神は、八龍並み居たり」㈡八大龍王に擬したる、八つの龍の形。太平記「白星の五枚甲（ゴカブト）に、八龍を、金にて打ちて著けたるを」㈢源家世襲の八領の鎧の一。保元「重代相傳仕り候ふ月數・日數・源太が產衣（ウブギヌ）・八龍・澤瀉（オモダカ）・薄金・楯無（タテナシ）・膝丸と申して、八領の鎧候ふ」平治「嫡子惡源太義平は、生年十九歲、……、八龍とて、胸板に、龍を八つ打って著けたる鎧を著て」㈣次條の略。東鑑「二十八日可レ有二御進發一、而件日八龍也。御出門之後者、不レ可レ憚事歟」

はちりゆう-にち 八龍日【名】春の甲子と乙亥との日。陰陽家にて、百事に用ひて凶なりといふ。八龍。山槐記「三日・四日五日（甲子）八龍日次之間、及二今日一也」

はち-りよう 八龍【名】『後漢書の荀淑傳に「有二子八人一儉・緄・靖・燾・汪・爽・肅・專幷有二名稱一、時人謂二之八龍一」とあるに本づく』八人のすぐれたる子。

ばちるす（英 Bacillus）【名】㈠〔植〕さいきん（細菌）を見よ。㈡或物事に附き纏ひて、利益を吸收し、害をなす人。

はち-ろくじ 八祿時【名】九星にて、その日の吉時なりといふ時刻、甲の日の寅、乙の日の卯、丙戊の日の巳、丁巳の日の午、庚の日の申、辛の日の酉、壬の日の亥、癸の日の子の總稱。

はちろ-べゑ 八郎兵衞【名】つまみぐひ（摘食）㈠を見よ。〔尾張國の方言〕

はち-わうじ 八王子【名】㈠〔佛〕法華經の序品（ジヨボン）に、父王に隨ひて出家し、大乘の意を發し、梵行を修したる由に記せる、八人の王子。㈡天照大神の、素盞嗚（スサノヲ）尊と誓約したまひし時に生（ナ）りませる五男・三女の御神。佛家にて、前項のに附會せるものといふ。諸國の神社にも、この名稱のものあれど、すべて、この八神を祀れるものとは限らず。はっしやうじん（八將神）參照。

はちわうじ 八王子【名】〔地〕『ハチヨウジと發音す。もとその西北約一里なる元八王子村（古稱、神護寺村）に在りしを、小田原の役に、八王子城陷落の後、居民を今の地に移ししものにて、八王子社を城の鎭守とせしよりの名』武藏國にある市。東京市の西十一里。織物の產出を以て名高し。大正六年に市制を施行す。

はちわうじ-ぎぬ 八王子絹【名】武藏國八王子より產する絹織物。秩父絹（チチブギヌ）に似て麁なり。

はちわうじ-じやう 八王子城【名】武藏國南多摩郡元八王子村の西南字城山に在りし城。小田原の北條氏の屬城。永祿の頃、北條氏照、武田氏の武藏侵入に備ふるために築く。小田原の役に、攻陷せられてより、廢城となれり。

はちわうじ-せんにんがしら 八王子千人頭【名】次條を見よ。

はちわうじ-せんにんぐみ 八王子千人組【名】德川幕府の職制の一。槍奉行の支配に屬し、武藏國八王子に在住して、甲州口を警衞し、又、交替して、日光・江戸の兩所、寶永五年以後は、日光のみの火の番を勤めしもの。同心百人を一組として、十組あり、合はせて千人、各組に組頭一人ありて、八王子千人頭と稱したり。八王寺千人同心。八王子千本槍の衆。長柄同心。

はちわうじ-せんにんどうしん 八王子千人同心【名】前條に同じ。

はちわうじ-せんぼんやり-の-しゆう 八王子千本槍衆【名】前條に同じ。

はちわうじ-ひら 八王子平【名】夏の袴地に用ふる、一種の八王子絹。

はち-わうにち 八王日【名】〔佛〕『天地諸神陰陽交代するによりて名づくといふ』立春・春分・立夏・夏至・立秋・秋分・立冬・冬至の稱。

ばち-わげ 撥髷【名】ばちびん(撥鬢)に同じ。

はち-わる 鉢割る【動四他】『次條を見よ』わる(割る)に同じ。〔伊豫國の方言〕

はち-われる 鉢割れる【動下一自】『ばちんと割るる義。鉢は假借の文字。はちきれる(はち切れる)參照』おのづから割る。

はち-ゐ 八位【名】くらゐ(位)㈢を見よ。

はつ 初【名】㈠はじめ。おはつ。最初。柳樽「野掛道親仁(オヤヂ)の豐後初に聽き」浮世風呂「山座(ヤマザ)さんのお唄ひなさる所を、初に聽かせたいなら」㈡しよくわい(初會)㈢に同じ。はつみやうだい(初名代)參照。娼妓絹籭「忠兵衞さんの、初に來なんしたは、去去年(ヲトトシ)の三月」同「こっちは、久しくとやかうと思ってゐた心からは、初の、裏のと思ひはしねえ」㈢はつぢや(初茶)の略。山門五三桐「母(カカ)さん、はつを呑んで參りました」

はつ 鉢【名】はち(鉢)㈠に同じ。謠曲(關寺)「朝に一鉢を得ざれども、求むるに能はず」徒然「一鉢のまうけ、藜のあつものいくばくか人の費をなさん」

はつ 髮【名】かみ。あたまのけ。頭髮。

髮、冠を衝く【句】『戰國策の燕國の條に「士皆瞋ㇾ目、髮盡上衝ㇾ冠」とあり』「怒髮、天を衝く」に同じ。

髮を被り、衽を左にす【句】「被髮(ヒハツ)左衽」に同じ。太平記「洛中は、今、靜謐の體にて、髮を被り、衽を左にする人は無けれども、遠國は、なほ靜まらで」

はつ 發【名】發すること。出で立つこと。出發。「神戸發の列車」「正午發の汽船」

はつ【名】〔動〕まぐろ(鮪)を云ふ。〔京都・大阪の語〕「はつの肉(ミ)」

はつ 果つ【動下二自】㈠をはる。きはまる。盡く。すむ。㈡しぬ(死ぬ)に同じ。源氏「燈火などの消え入るやうにて、はてたまひぬれば」

はつ 泊つ【動下二自】『前條の語の轉義』船、港に到著してとまる。碇泊す。〔古語〕萬葉「もも船のはつる對馬のあさち山しぐれの雨にもみだひにけり」

泊つる泊(トマリ)【句】船の到著してとまる所。萬葉「大船の泊つるとまりのたゆたひに物思(モモ)ひ痩せぬ人の子ゆゑに」

はつ 初【接頭】㈠始めての・新しき等の意。うひ。「初秋」「初物」「初尾花」㈡一年の內の初の意。(陰曆にては、やがて春の初の意)「初嵐」「初寅(ハツトラ)」

はつ 發【助數】銃砲の彈丸、又は矢の發射の回數。

はっ【貌】㈠俄かに胸にこたふるさま。凱陣八島「諸卿、一度に冠を下げ、はっと感じて靜まれり」㈡ばっ㈠に同じ。平治「平家の侍、防ぎかね、はっと引いてぞ入りにける」平家「水鳥どもが、……一度にはっと立ちける羽音の、雷・大風などのやうに聞えければ」

はっ【感】㈠意外に感じ、急に思ひつきなどしたる時に發する聲。宇治「これを聞き傳へたる者ども、一度にはっとどよみ笑ひけり」狂言(萩大名)「はっ、これは又、見苦しい所へ御腰掛けられうと御ざりまする」㈡下僕などの、主君の質問・命令に對する返事の聲。狂言(萩大名)「やい、亭主に、これへ出られいといへ。はっ、御亭、これへ出さっしゃれい」㈢他人又は物事を輕んじ侮りて、殆ど心に掛けぬ意を示す聲。狂言(文相撲)「取らうといふか。左樣で御座る。はっ、彼奴(キャツ)が相撲(スマフ)も知れた」

はづ 撚綿軸【名】綿より絲をつむぐに用ふる、一種の機械。

はづ【名】がき(餓鬼)㈣に同じ。

は-づ 巴豆【名】〔植〕大戟(タカトウダイ)科に屬する常綠灌木。高さ二丈に達し、葉は卵形にして、鋭頭を有し、葉脚に二箇の蜜腺を有す。花は單性にして、雌雄同株、雄花は各花叢の上部、雌花は、その下部に在りて、花瓣を缺き、共に蒴果を結び、二箇の種子あり。種皮は堅くして、油分を含み、有毒なり。これを搾取したるものは、巴豆油と呼び、峻烈なる下痢藥となり、又、グリセリン・オリイブ油等と混じて、皮膚の引赤劑に供す。原產地は東印度。あぢものまめ。辰巳婦言「斯くの如く不利(ツケ)しる時は、巴豆を配劑といふ場だ」

はづ 幡豆【名】〔地〕三河國十郡の一。郡役所を西尾町に置く。

はづ 恥づ・耻づ・羞づ・愧づ・慚づ・慙づ【動上二自】㈠わが身に缺點ありと悟りて、面目なく思ふ。㈡わが面目を汚さんことを思ひて、忌み嫌ふ。

恥ぢず【句】或位置に立ち、又は或事を爲すにつきて、十分の價値あり。はづかしからず。著聞「伊成も、鬼王の形を現はして、力士の忽に來るかと覺えたり。弘光、又、敵討に恥ぢずと見えける」

ばつ【名】『ばつ(跋)の義かといふ』前後の工合(グアヒ)。結末。「ばつが惡い」「ばつを合はす」

ばつ 罰・罸【名】『罸は俗字』㈠罪過ある者を責め懲すこと。しおき。ばち(罰)參照。㈡勝負に負けたる時に、强ひられて爲すべき事。

ばつ 跋【名】書物の本文の終に、著者又は他人の記し添ふる文。おくがき。跋文。後序。(序に對して)

ばつ 鈸【名】ざうばち(銅鈸)に同じ。

ばつ 閥【名】先輩の功績・名譽に縋り、結託して、各自の地位を高むるやうにすること。「藩閥」「學閥」「軍閥」「閥を作る」

ばっ【貌】㈠一時に四方へ擴がり、開きなどするさま。謠曲(調伏曾我)「某が仕業と、ばっと風聞仕り候」醒睡笑「髮を、ばっと亂し」八笑人「皆(ミンナ)に、ばっと相談すると」㈡一時に勢よく事を爲すさま。盛衰記「敵、後の山より跋と落さば」太平記「大石を、一度にばっと發す」生玉心中「長作が銀(カネ)持って來るか。ここへも、ばつとはずまうし」㈢現れて忽ち消ゆるさま。盛衰記「ばっと消え、ばっと燃え上りなどしけり」㈣とりとめなきさま。ぼんやり。漠然。漫然。

ば-づ 馬爪【名】馬の爪を、鼈甲に代用するもの。心中萬年草「浮名やばっとちり紙の」

ぱっ【貌】ばっに同じ。

はつ-あき 初秋【名】しよしう(初秋)に同じ。

初秋の七日(ナヌカ)【句】陰曆の七月七日。謠曲(關寺小町)「涼風と衰鬢と一時に來る、初秋の七日の夕に、早なりぬ」

はつ-あきかぜ 初秋風【名】初秋の頃に吹く風。秋の初風(ハツカゼ)。後撰「吹き出づるねどころ高く聞ゆなり初秋風はいざ手ならさじ」

はつ-あきぎり 初秋霧【名】初秋の頃に立つ霧。拾遺「睦しき妹脊の山と知らねばや初秋霧の立ち隔つらん」

はつ-あきなひ 初商【名】新年になりてはじめての商。はつうり。

はつ-あさ 初朝【名】正月元日の朝。元朝。一代男「丹波口の初朝」

はつ-あつさ 初暑【名】はじめの暑氣。女殺油地獄「卯月なかばの初暑さ」

はつ-あはせ 初袷【名】その年、はじめて著る袷。俳諧新撰(五始)「彌陀賴む肩衣古しはつ袷」

はつ-あん 發案【名】考案を立つること。議案の提出。

はつあん-けん 發案權【名】〔法〕議案を提出する權限又は權利。

はつ-あらし 初嵐【名】陰曆七月末より八月半ばにかけて吹く嵐。猿蓑(旦藁)「そよそよや藪の內より初嵐」

はつ-あられ 初霰【名】冬になりてはじめて、霰の降ること、又その霰。娥歌加留多「時雨まじりの初霰、御庭の梢落葉して」

はつ-い 發意【名】㈠思ひたつこと。考へ出だすこと。ほつい。㈡〔哲〕『英 Conation』意識の能動的要素。衝動・欲求・執意等に於て、最も能くこれを發見するを得。動能。動向。

はつ-いく 發育【名】發生し、成育すること。そだち。生長。

はつ-いくさ 初軍・初戰【名】はじめての

合戰。初合戰。（吉野都女楠）「出合頭の初軍に、敵に一しほ氣を附けて」

はついくし 發育史【名】『英 Life history. 獨 Entwickelungsgeschichte』生物學の一科。生物の系統的發生及び箇體的發生を研究するもの。**はっせいがく**（發生學）參照。

はづいし 幡豆石【名】〔鑛〕三河國幡豆地方より產する花崗岩。黑雲母を多量に含有す。

はついち 初市【名】新年にはじめて市の立つ日。普通、正月二日に開く。（猿蓑（嵐蘭））「初市や雪に漕ぎ來る若菜船」

はついつ 八佾【名】『論語の八佾篇に「八佾舞㆑庭」とあり』支那周代の制にて、王者の用ふべき舞樂の、八人づつ一列になりて、八列をなすこと。諸侯は六佾、大夫は四佾、士は二佾を法とし、何れも一佾は八人一列をなすとの說（服虔の說）と、一列の人數は佾の數と同一にて、例へば六佾は六六三十六人を用ふとの說（杜預の說）とあれども、前說可なりといふ。

はついはひ 初祝【名】はじめての祝。

はついん 發音【名】**はつおん**（發音）に同じ。

はついん 八音【名】**はちいん**（八音）に同じ。

はついん 發引【名】『引は、布を車の前に取附けて引く義』柩の車を送り出だすこと。

はついんがく 發音學【名】**はつおんがく**（發音學）に同じ。

はついもひ 初斎【名】年の初のいもひ。（夫木）「知るやいかに君をみたけの初いもひ心のしめも今日かけつとは」

はついろ 初色【名】**はつこひ**（初戀）に同じ。（五十年忌歌念佛）「その但馬屋の初色に、立つや浮名の濡草鞋」

はつう 初卯【名】その月又は新年のはじめての卯の日。新年のには、初卯詣（ハツウマウデ）といふことあり。又、二の卯・三の卯などもあり。

初卯の杖【句】**うづゑ**（卯杖）に同じ。（夫木）「淺ましや初卯の杖のつくづくと思へば年の積りぬるかな」

はつう 鉢盂【名】**はち**（鉢）㊀に同じ。

はつうぐひす 初鶯【名】春になりてはじめて鳴く鶯、又その聲を聞くこと。初鶯（ショアウ）。（山家）「子の日しに霞たなびく野邊に出でて初鶯の聲を聞くかな」

はつうた 初歌【名】はじめて歌ふこと、又その歌。（源氏烏帽子折）「返らぬ水のうたかたに、初歌謠ふ初蛙」

はつうのはな 初卯花【名】その年、はじめて咲きたる卯の花。（新古今）「鳴く聲をえやは忍ばぬ時鳥初卯の花の蔭に隱れて」

はつうま 初馬【名】**はつせ**（初脊）に同じ。（袖中抄）「鞍置かぬ馬をば、初馬といひ、初背（ハツセ）といふ」

はつうま 初午【名】二月の初の午の日。この日、初午祭あり、又、二の午・三の午などもあり。（新六）「きさらぎやけふ初午のしるしとて稻荷の杉はもとつ葉もなし」

はつうまうで 初卯詣【名】新年の初卯の日に、東京にては、東京府南葛飾（ミナミカツシカ）郡龜戶（カメキド）町龜戶神社境內の妙義社、大阪にては、攝津國の住吉神社などに參詣すること。はつうまゐり。

はつうまおろし 初午卸【名】『二月の初午の日にすむつがりを調ふるに用ふるよりいふ』大根おろしの類。松板に、兩方より、諸刃の如く削りたる竹釘を打込みたる器。

はつうまきやうげん 初午狂言【名】昔、芝居にて、二月の初午の日、稻荷祭をなし、素人交りの狂言を演ぜしこと。はつうましばゐ。

はつうまご 初孫【名】**はつまご**（初孫）に同じ。〔古語〕（榮花）「東宮のはつうまごの生れたまへりしを」

はつうましばゐ 初午芝居【名】**はつうまきやうげん**（初午狂言）に同じ。

はつうままうで 初午詣【名】二月の初午の日、稻荷社に參詣すること。山城國伏見の稻荷社のは、殊に名高く、門前の家にて、百穀・雜菜の種子、大小の陶器を賣る。その陶器の大なるを、傳法といひ、小なるを、つぼつぼといふ。又、この日、民家、多く、その神前に投ずる錢、たまたま簾の間にとどまる時は、その人、福を得たりとなし、請ひえて、家珍とす。いなりまうで。ふくまゐり。

はつうままつり 初午祭【名】初午の日に、山城國伏見の稻荷社、その他、諸國の同社にて祭事を行ふこと。

はつうまゐり 初卯參【名】**はつうまうで**（初卯詣）に同じ。

はつうん 發運【名】**かいうん**（開運）に同じ。

ばつうん 末運【名】**まつうん**（末運）に同じ。

はつうり 初瓜【名】その年の季節のはじめに實りたる瓜。（著聞）「南都より、早瓜（ハツウリ）を奉りけるに」

はつうり 初賣【名】新年になりてはじめての賣出（ウリダシ）。その年の賣初（ウリゾメ）。うりそめ。はつあきなひ。

はつえ はつ枝【名】『**はつ**は初又は果の義』㊀**こずゑ**（梢）に同じ。〔古語〕（古今）「梅のはつえ」 ㊁子孫。後胤。はつこ。（東關紀行）「鎌倉の始を申せば、故右大將家と聞えたまふ水の尾の御門の九つの世のはつえを、武き人にうけたり」

ばつえい 末裔【名】**まつえい**（末裔）に同じ。

ばつえつ 伐閱・閥閱【名】㊀『史記の功臣年表に「太史公曰、古者人臣功有㆓五品㆒、……、明㆓其等㆒曰㆑伐、積㆑日曰㆑閱」、後漢書の章帝紀の註に「明㆓其等㆒曰㆑閥、積㆓其功㆒曰㆑閱」とあり』功を積み、閱歷を經ること。㊁いへがら。貴族。門地。門閥。

ばつえふ 末葉【名】**まつえふ**（末葉）に同じ。

はつえん 發烟・發煙【名】烟を發すること。

はつえんせうさん 發烟硝酸・發煙硝酸【名】〔化〕『英 Fuming nitric acid』多量の過酸化窒素を吸收せる濃硝酸。赤褐色の液にして、空氣中に放置するときは、過酸化窒素の煙を發す。その作用、硝酸より激しく、化學及び工業上の用途多し。

はつえんだん 發烟彈・發煙彈【名】〔兵〕『英 Tracer』砲丸の一。目標と射彈經路との關係位置の觀測を便ならしむるために、烟を發しながら飛行するやうに製したるもの。飛行機・飛行船などより發射するに用ふ。

はつえんにち 初緣日【名】新年初めての神佛祭日。この日、開運を祈る參詣者多し。

はつえんりうさん 發烟硫酸・發煙硫酸【名】〔化〕『英 Fuming sulphuric acid』強く發煙する無色の液體。通常、硫酸に三酸化硫黃を溶解して製す。比重一・八八にして、通常、硫酸よりも激烈なる作用を有し、熱すれば、硫酸と三酸化硫黃とに分解するを例とし、冷却すれば凝固す。

はつおん 發音【名】㊀音聲又は音響を發すること。㊁言語を音聲にあらはす時の高低・長短等の工合。

ばつおん 撥音【名】〔語〕『「きん」・「おん」など、他の音の下に添へて、一音節としていふ時、その音節の末尾の「ん」となるを撥（ハ）ぬといふによりていふ』**びおん**（鼻音）に同じ。

はつおんがく 發音學【名】〔語〕**せいおんがく**（聲音學）に同じ。

はつおんきくわん 發音器官・發音機關【名】〔醫〕『英 Organs of speech』人體中、音聲を發する器官。主として喉頭の聲帶なれども、氣管・肺・鼻腔・口腔も、その一部に算入すべきものとす。

はつおんたい 發音體【名】〔理〕『英 Sound source』音響を發する物體。必ず彈性を有す（彈性を有する物、必ずしも發音體にあらず）。彈性なき物、例へば綿の如きは、槌にて打ちても、音を發せず。**はげん**（波源）參照。

はつおんふ 發音符【名】〔語〕次條に同じ。

はつおんふがう 發音符號【名】〔語〕『英 Phonetic symbol』文字にたよらず、言語の實際の發音を、なるべく精密正確に表記するに用ふる符號。**ばんこくはつおんふがう**（萬國發音符號）參照。

はつか 二十日【名】㊀一日の二十倍。二十晝夜。㊁每月の二十日目に當る日。

はつか 初蚊【名】夏になりて、はじめての蚊。（俳諧古選（秋慰））「一悇（ヒトコサヘ）螫させて見たる初蚊かな」

はっか【名】くずみづ(葛水)を云ふ。〔女の語〕

はっーか 客家【名】支那の南方に住する、一派の漢人。

はっーか 薄荷【名】〔植〕**はくか**(薄荷)を見よ。

はつーか 僅【貌】『**はつ**は、**はつはつ**の**はつ**に同じ』**わづか**(僅か)に同じ。〔古語〕 古今「春日野の雪間を分けて生ひ出づる草のはつかに見えし君かも」 源氏「御几帳の、しどけなく引遣られたるより、御目とどめて見とほしたまへれば、……、はつかなれど、いと美しげならんと見ゆ」

はつーが 發芽【名】草木の、芽を出だすこと。めぐみ。めざし。出芽。

はつーが 發駕【名】**ほつが**(發駕)に同じ。

ばっか【接尾】**ばかり**(許)に同じ。 續膝栗毛「これ、婆(バン)様、酒をちくと、肴は何が有らず。豆腐と蕨ばっかでござる」

はっーかい 八戒【名】〔佛〕**はちかい**(八戒)を見よ。

はっーかい 八海【名】〔佛〕「九山(クセン)・八海」を見よ。

はっーかう 發港【名】船の、港を出發すること。出港。(著港に對して)

はっーかう 發航【名】船の、航海のために出港すること。出帆。(歸航に對して)

はっーかう 發向【名】出發して、目的地に向ふこと。でむくこと。ほっかう。 太平記「南方へ發向したりしかば」

はっーかう 發行【名】㊀世の中に行はるるやうにすること。㊁印刷して、世の中にひろむること。發刊。發兌。刊行。㊂はやること。流行。〔俚語〕「御發行の神様」

はっーかう 醱酵【名】〔化〕『英 Fermentation』㊀狹義には、酵母の作用によりて、糖類が、酒精及び炭酸瓦斯に分解すること。釀醱。㊁廣義には、菌類の作用によりて誘起せる種種の物質の、分解又は分子轉換。釀醱。

はっかうーかう 發航港【名】〔法〕船の、その航海のために出發せる港。

はっかうーがく 發行額【名】發行せるたか。發行高。

はっかうーきん 醱酵菌【名】〔化〕**はっかうそ**(醱酵素)に同じ。

はっかうーざい 醱酵劑【名】醱酵を起さしむるに用ふる藥品。

はっかうーさがく 發行差額【名】公債を借り替ふる時に、前・後兩公債の利子等の條件に關する差額。

はつーかうしん 初庚申【名】新年になりてはじめての庚申の日。この日、帝釋(タイシヤク)天に詣づる習慣あり。

はっかうーしや 發行者【名】發行する人。發行の擔當者。發行人。

はっかうーじよ 發行所【名】印刷物を發行する所。

はっうかーぜい 發行税【名】發行するにつきて納付する税。兌換券の制限外發行を行ふ時、その發行者(日本銀行)が、五分以上の發行税を納付するが如き、これなり。

はっかうーせいげんーはふ 發行制限法【名】〔經〕紙幣發行法の一。特定の機關を限りて、兌換紙幣の發行を許すもの。

はっかうーそ 醱酵素【名】〔化〕**かうそ**(酵素)に同じ。

はっかうーだか 發行高【名】**はっかうがく**(發行額)に同じ。

はっかうだかーせいげんーはふ 發行高制限法【名】〔經〕紙幣發行法の一。その高に制限を附するもの。定額發行法・全額準備法・比例準備法・證券準備法・制限屈伸法の種類あり。

はっかうーだて 醱酵建【名】醱酵劑を用ひ、醱酵作用によりて、藍を建つること。くわんげんだて。

はっかうーち 發航地【名】發航する土地。

はっかうーち 發行地【名】印刷物を發行する土地。

はっかうーにん 發行人【名】**はっかうしや**(發行者)に同じ。

はっかうーひ 發行費【名】發行に要する費用。

はっかうーぶつ 醱酵物【名】〔化〕單純なる化合物に變じ得る複雜なる諸物質。

はっかうーぼ 醱酵母【名】〔化〕**かうぼ**(酵母)に同じ。

はっかうーよりよく 發行餘力【名】〔經〕引換準備資金の定額と一億二千萬圓との合計より差引きたる差額。即ち日本銀行は、引換準備資金の外、政府發行の公債證書・大藏省證券、その他、確實なる證券又は商業手形を保證として、一億二千萬圓を限り、兌換券を發行する權利あるを以て、その一億二千萬圓と正貨準備額とより、兌換券の實際の發行高を差引きたる差額を稱して、發行餘力といふ。**せいげんぐわいはっかう**(制限外發行)參照。

はつかーえびす 二十日夷・二十日惠比須【名】毎年十月二十日に行ふ夷講。

はつーかがみ 初鏡【名】次條を見よ。

初鏡の祝【句】女の鏡開(カガミビラキ)の祝。はつかほいはひ。**はつかしやうぐわつ**(二十日正月)參照。

はつかーぎう 二十日灸【名】昔、正月二十日に、新年になりて、はじめて灸をすゑしこと。又その日にすゑし灸。

はっーかく 八角【名】『**はちかく**(八角)の音便』㊀八つの角(カク)。㊁次條の略。**はっかくだう**(八角堂)參照。 盛衰記「南圓堂と申すは、八角・寶形(ホウギヤウ)の伽藍(ガラン)なり」㊂紋所の一。やや太き單線にて、八角形に描きたるもの。㊃八角柱形に木取りたる材木。 若風俗「松の皮附、槻(ケヤキ)の八角、又は唐木(カラキ)を用(ツカ)ひ」

八角の幢(ハタホコ)【句】〔佛〕次條に同じ。 盛衰記「八葉の蓮(ハチス)なり。八角の幢は、極樂の瑠璃を治め」

八角・八楞(ハチリヨウ)の幢(ハタホコ)【句】〔佛〕「八方・八楞の幢」に同じ。

はっーかく 發覺【名】隱したる事の現るること。露顯。暴露(バクロ)。

ばつーがく 末學【名】**まつがく**(末學)に同じ。

はっかくーけい 八角形【名】〔數〕『英 Octagon』八つの直線にて圍まれたる多角形。八角。

はつかーぐさ 二十日草【名】〔植〕『支那唐の白居易の牡丹芳と題する詩に、「花開花落二十日、一城之人皆如レ狂」とあるに本づく。詞花集の歌にも「咲きしより散りはつるまで見しほどに花のもとにて二十日經にけり」とあり』**ぼたん**(牡丹)㊀の異稱。 鶉衣「油斷すな鼠の名にも二十日草」

はっかくーしよくこう 八角蜀紅【名】模樣の一。きりこを四方連續模樣としたるもの。

はっかくーすゐ 八角錐【名】〔數〕『英 Octagonal pyramid』底面が八角形なる角錐。

はっかくーだう 八角堂【名】『「八方・八楞の幢」を見よ』八角形に建てたる佛堂。大和國法隆寺の夢殿、興福寺の南圓堂等、阿彌陀又は觀音に關係ある佛堂は、多くこの形を成す。圓堂と稱するは、八角形は、殆ど圓形なるに依る。

はっかくーちゆう 八角柱【名】〔數〕『英 Octagonal prism』底面が八角形なる角壔。

はっかくーどけい 八角時計【名】縁を八角形に造りたる柱時計。

はっかくーふとぐつわ 八角太轡【名】紋所の一。太轡(フトグツワ)の輪廓の八角なるもの。

はっかくーめだま 八角目玉【名】角立ちたる目つき。 平家女護島「南圓堂には、八角目玉のがんくわう法師」

はっーかけ 八掛【名】『總丈を、身四つ、衽(オクミ)二つ、衿先(エリサキ)二つ、合はせて八つに裁ちて用ふるによりていふ』**すそまはし**(裾廻)に同じ。

はーっーかけ 齒缺【名】**はかけ**(齒缺)の音便。

はつーかげ 初影【名】新年になりてはじめて映る物の影。 乙二「鶯の初影うつる襖かな」

はっかーこく 八箇國【名】㊀八つの國。八州。㊁〔地〕**ばんどうはっかこく**(阪東八箇國)の略。 平家「實盛ほど射候者は、八箇國には、幾らも候」 盛衰記「八箇國の大名・小名皆歸伏の上は」

はづかし 羽束師【名】〔地〕山城國乙訓(オトクニ)郡にある村。欝蒼たる森林ありて、古來、羽束師の森の名著る。 方丈記「遙かに故郷の空を望み、木幡山(コハタヤマ)・伏見の里・鳥羽・羽束師を見る」

はづかし 恥し・耻し・羞し・辱し【形二】㊀

恥づべし。面目なし。おもぶせなり。かくはやし。㊁相手に對し、己の劣れることを感じて、おもはゆし。はにかむ感じあり。きまり惡し。源氏「斯くはづかしき人參りたまふを、御心づかひして見え奉らせたまへ」盛衰記「件(クダン)の人は、目も心も辱しき人なり。文(フミ)の樣(ヤウ)、尋常(ヨツネ)なるべし」

恥しからず【句】「恥ぢず」に同じ。

ばっかし【助】ばっかり(計)訛。傾城反魂香「ほんにつべこべつべこべと、私が言ふこと、ばっかし」

はづかしがり 恥しがり・耻しがり【名】はづかしがること、又その人。

はづかしがる 恥しがる・耻しがる【動四自】恥しく思ふ。遠慮がちなる行動をなす。はにかむ。

はづかしじんじや 羽束師神社【名】山城國乙訓(オトクニ)郡羽束師村大字志水(シミヅ)に鎭座せる式内の社。祭神は高皇產靈(タカミムスビ)神及び神皇產靈(カムミムスビ)神。

はつかしのとものみやつこ 涅部・泥部【名】大寶令の制にて、宮内省土工司の職員の一。職員令「涅部廿人」令集解「泥部者、古言波都加此乃友造」

はづかしむ 辱む【動下二他】㊀他人に恥を與ふ。はぢしむ。㊁女を犯す。姦す。㊂それだけの價値なき人が、その地位・職業に就く。汚す。

はっかじん 八歌人【名】〔人〕**はちかじん**(八歌人)に同じ。

はづかしめ 辱【名】はづかしむること。はぢ。恥辱。

はつかしやうぐわつ 二十日正月【名】陰曆の正月二十日。昔は、この日を、正月の祝納(イハヒヲサメ)として遊び、二十日團子とて、赤小豆(アヅキ)の團子を食ふ。この日、又、初鏡(ハツカガミ)の祝又は初顏祝(ハツカホイハヒ)とて、女の鏡餅を祝ふは、二十日と、初顏(ハツカホ)と、音の似たるより、初顏を祝ふ意なりとぞ。

はづかしわらひ 恥笑・耻笑【名】恥しがりながら笑ふこと。井筒業平河內通「にっと片頰に恥し笑」

はつがすみ 初霞【名】その年になりてはじめて立つ霞。初春の霞。俳諧古選附錄(超波)「芝浦や車の上に初がすみ」

はつかぜ 初風【名】その季候の初に吹く風。源氏「秋にもなりぬ。初風涼しく吹き出でて」

はつかせんだい 二十日先代【名】**なかせんだい**(中先代)に同じ。

はつかだいこん 二十日大根・二十日萊菔【名】〔植〕大根の一品種。もと歐米より舶來せるものにて、根は小くして、形は球狀、楕圓形・長圓形等あり。色も白・黃・赤・紫等あり。二月末より十一月頃までに播種し、蒔きて二三十日にして、食ふべし。

はつかだんご 二十日團子【名】二十日正月(ハツカシヤウグワツ)に、緣起を祝ひて食ふ、赤小豆(アヅキ)の團子。

ばっかつ 菝葜【名】〔植〕**さるとりいばら**(菝葜)の漢名。

はつがつら 初鰹・初松魚【名】**はつがつを**(初鰹)の轉訛。浮世風呂「生きてゐる內に、初松魚(ハツガツヲ)で一盃(イツパイ)飮ませる方が遙かに功德だと」

はつかづき 二十日月【名】陰曆二十日の夜の月。

はつかっせん 初合戰【名】初度の合戰。これに續くものを、順次に、二の合戰、三の合戰など呼びたり。はついくさ。

はつがつを 初鰹・初松魚【名】その年になりて、はじめて市場に出でし鰹。江戶の風俗として、これを食ふを誇としたり。蜀山人「鎌倉の海より出でし初鰹みな武藏野のはらにこそ入れ」浪華の風「文化の末、堀芳川翁の句に「初松魚袷をころす毒魚かな」といへる句あり。實に江戶人の氣性をよくいへりといふべし。……。然るに、近來は、この風俗・人情、追追に衰へ、初松魚など、價論ぜず食ふ者は稀になりし」

はつかねずみ 二十日鼠・鼷鼠【名】〔動〕嚙齒類に屬する哺乳動物。形は普通の鼠に似て、體長三寸餘、毛は一樣に灰黑色にして、頭は尖り、耳は比較的長く、尾は體と長さ等し。人家に近き土中に穴居し、一年に三回乃至五回、四匹乃至八匹の子を產む。南京鼠はその變種なり。あまくちねずみ。こきしり。けいそ。

はつかはづ 初蛙【名】その年になりて、はじめて鳴く蛙、又その鳴聲。濟彥「その聲をやりておかれな初蛙」鶉衣「初蝶とも、初蛙とも云ふことを聞かず」

はつがはふ 發芽法【名】『英 Budding』㊀〔植〕個體增加のため、やがて母體と同一の形となるべき體を、無性的に生ずること。例へば或藻類に於て、體上に小芽發生し、やがて切離して一箇體となり、酵母菌の體上に小突起生じ、やがて大形となりて、母體より分離し、苔類の葉狀體上又は體中の或部分に、無性芽の生ずる類、各種の胞子形成の場合、又、酵母菌に於ける如き場合の外、單細胞植物の上には、この語を適用せず。出芽法。㊁〔動〕無性生殖の一。個體の一小部分の、生長して、一新個體となること。出芽法。

はつがひ 初買【名】㊀一月二日に、(多くは衣類・小間物など)を買ふこと。かひそめ。㊁初春に遊女を買ふこと。正月買(シヤウグワツガヒ)。二代男「傍(ソバ)から思うた程の物入にもあらず、面白きは初買なり」俗曲(梅の春)「よろづよし原・三谷堀(サンヤボリ)寶船漕ぐ初買に、よい初夢をみつ蒲團」

はづかひ 羽遣【名】**はねづかひ**(羽根遣)に同じ。曾我扇八景「鷲の羽づかひ隼か、雲井に落す月屋おとし」

はつがぶあひ 發芽步合【名】〔農〕**はつがりつ**(發芽率)に同じ。

はっかふだざん 八甲田山【名】〔地〕陸奧國の中部に盤踞せる集合火山。青森市の南東約七里に位し、高さ六二八一尺。

はっかぶん 八家文【名】〔書〕**たうそうはっかぶんさくほん**(唐宋八家文讀本)の略。

はつかへで 初楓【名】秋になりてはじめて紅葉したる楓。源氏十二段長生島臺「姬君は、今更に、御恥しさ彌增り、お顏の紅葉初楓」

はつかほ 初顏【名】初春の顏。**はつかしやうぐわつ**(二十日正月)參照。

はつかほいはひ 初顏祝【名】『二十日(ハツカ)を祝ひの義に言ひかけたるもの』「初鏡(ハツカガミ)の祝」に同じ。

はつがま 初釜【名】新年に、はじめて茶の湯の釜を据ゑること。

はつかみなり 初雷【名】その年になりて、はじめて鳴る雷。はつらい。狂歌百人一首(栗栗庵葛麿)「二日灸すゑし後にもまた一度はつ雷に臍をおさへつ」

はっかん 八寒【名】**はっかんぢごく**(八寒地獄)の略。雪女五枚羽子板「今宵の雪にうづもれて凍やかし殺されし、この世からの八寒の苦患(クゲン)は、わが身一つにて」

はっかん 發汗【名】汗の出づること。あせをかくこと。

はっかん 發刊【名】**はっかう**(發行)㊁に同じ。

はっかん 發緘【名】『封緘を發(ヒラ)く義』**かいふう**(開封)に同じ。

ばっかん 麥稈【名】**むぎわら**(麥稈)に同じ。

はっかんくわたしやう 發汗過多症【名】〔醫〕**たかんしやう**(多汗症)に同じ。

はっかんざい 發汗劑【名】風邪に冒されたる時など、發汗を促すために服用する藥劑。例へば薄荷葉・メリッサ葉・カミルレ花・阿片・樟腦・アルコオル・揮發油類・ピロカルピン・ニコチン・サルチル酸などの類。

はっかんぢごく 八寒地獄【名】〔佛〕**はちかんぢごく**(八寒地獄)に同じ。

はっかんよく 發汗浴【名】『獨 Schwitzbad』發汗せしめて、皮膚の排泄機能を良好ならしむるため、又それに伴なひて、身體內の毒物を除去するために行ふ溫浴。

はっかんれうはふ 發汗療法【名】發汗せしめて、病氣を療治すること。

はつがらす 初烏【名】元日の朝早く鳴き渡る烏。馬明「初烏三つ四つからは見えにけり」

はつかり 初雁【名】秋、はじめて北地より渡り來れる雁、又その鳴聲。はつかりがね。萬葉「なが月のその初雁(ハツカリ)の使にも思ふ心は聞えこぬかも」

はつがり 初狩【名】その季節に入りてはじめて狩をすること、又その狩。

はつがり 初刈【名】㊀その年成熟した穀物を、はじめて刈り取ること。散木「こ

り果てぬ賞の初刈あさりする宿にもあらで人歸しつる」㊁新年に、はじめて頭髮を刈り込むこと。

ばっ-かり 許【助】ばかり(許)の音便。ばっかし。傾城反魂香「心で思ふたばつかり」

はつかり-がね 初雁音【名】㊀初雁の鳴く音。初雁の聲。古今「秋風にはつかりがねぞ聞ゆなる誰が玉づさをかけて來つらん」㊁はつかり(初雁)に同じ。拾玉「夕月夜ほのめく秋のたそがれにはつかりがねの聲なかりせば」

はつかり-ごろも 初狩衣【名】初めて著る狩衣。初狩に著る衣。新千載「はし鷹の外山の里の秋風に初狩衣今や打つらん」

はつが-りつ 發芽率【名】〔農〕發芽を驗するために播きたる種子に對する、實際發芽したる數の百分率。發芽歩合。

はつかり-の 初雁の【枕】語路の等しきより、**はつか**(僅か)にかけていふ。古今「はつかりのはつかに聲を聞きしより中空にのみ物思ふかな」

はつ-き 泊木【名】枝ある木二本を柱とし、これに竿又は繩などを渡し、物を掛けて乾すに用ふるもの。はて。はさ。堀次「ぬれ衣今ぞはつ木にかけてほすかづきしてけり與謝(ヨサ)のあま人」

はつ-き 張著【名】こしまき(腰卷)㊀に同じ。

はっ-き 八旗【名】支那清朝の兵制にて、七千五百人づつを一團とし、各團に、各色を異にせる一旗を授け、皇帝の親軍たらしめたるもの。初は滿・蒙・漢の三民族混同したりしが、後、蒙古八旗・漢軍八旗を分設し、その數は滿洲八旗より少く、すべて滿洲及び、京城を警衞するを主とし、又、全帝國内の要地を守備したり。

はっ-き 發揮【名】『易經の文言に「六爻發揮、旁㆓通情㆒也」とありて、疏に「六爻發越揮散、旁㆓通萬物之情㆒也」と見ゆ』ふるひおこすこと。あらはし出だすこと。

はっ-き 發起【名】ほっき(發起)に同じ。

はつ-ぎ 發議【名】意見を申し立つること。動議を起すこと。議案を提出すること。いひたて。ほつぎ。提議。

は-つき 端月【名】次條を見よ。

は-つき 露隱(ツユゴモリ)の端月【句】陰曆十一月の異稱なりといふ。〔古語〕秘藏抄「十一月、露ごもりのは月。つゆごもりのはつきの空を眺むればなほ雪げにぞなりわたりける」

は-づき 葉月・八月【名】陰曆八月の異稱。續後拾遺「朝ぼらけ鳴くね寒けきはつかりのはづきの空に秋風ぞ吹く」

ばっ-き 罰期・罸期【名】懲罰を受け居る期間。罰限。

ばっ-き 末季【名】まっき(末季)に同じ。

ばつ-ぎ 末技【名】まつぎ(末技)に同じ。

はつき-ききやうのまる 葉附桔梗丸【名】紋所の一。桔梗の花の上に、葉附の枝を添へて、圓形に描けるもの。

はつき-ぎく 葉附菊【名】紋所の一。菊の花に、その葉を添へて描けるもの。

はつぎ-けん 發議權【名】〔法〕發議をなす權限又は權利。

はつ-ぎしき 發儀式【名】年のはじめの儀式。初春(ハツ)の儀式。源氏烏帽子折「袂ゆたかに初儀式、始る國の兆なる」

はつぎ-しや 發議者【名】發議する人。

はつき-せきちく 葉附石竹【名】紋所の一。石竹の花に、葉を添へて描けるもの。

はつき-のぼたん 葉附牡丹【名】はつきぼたん(葉附牡丹)に同じ。胸算用「今は、世間に、皆、紋所を、葉つきの牡丹と四銀杏(ヨツイチ)この丸、女中がたのはやり物」

はっ-きふ 發給【名】發行・給付すること。出だして與ふること。交付。

はっ-きふすう 發級數【名】〔數〕はっさんきふすう(發散級數)に同じ。

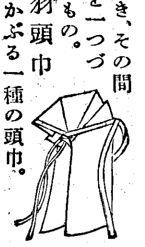
はっき-へい 八旗兵【名】支那清朝時代の、八旗に屬せし兵。

はつき-ぼたん 葉附牡丹【名】紋所の一。牡丹の花に、その葉を添へて描けるもの。

はつ-きみ 初君【名】初買㊁の遊女。雪女五枚羽子板「西に姉里戀廓。正月買の初君の」

はつき-みつなすび 葉附三茄子【名】紋所の一。茄子の葉三枚を間隔相等しく、放射狀に描き、その間に、その實を一つづつ添へたるもの。

は-づきん 羽頭巾【名】山伏のかぶる一種の頭巾。



（はづきん）

ばっ-きん 罰金・罸金【名】㊀罰として出ださしむる金錢。制裁を加ふる意味にて徴收する金錢。㊁〔法〕財産刑の一。舊刑法にては、二圓以上を徴收する主刑又は附加刑、新刑法にては、二十圓以上(これ以下に減輕することを得)を徴收し、多きは各本條に讓り、總則には規定せざる主刑。

ぱっきんぐ（英 Packing）【名】機械又は機關の運動部又は管の接合部などより、液又は瓦斯の漏るるを防ぐための塡料。品種と形狀とは、目的によりて一樣ならず。

はっ-きやう 發狂【名】氣が狂ふこと。氣ちがひとなること。

はっ-きやう 發鄕【名】故鄕を出發すること。

はっ-きやう 發京【名】都を出發すること。京外へ行くこと。

はっきやう-かい 八境界【名】〔文〕文章を作るにつきての、八つの法則、即ち抑・揚・褒・貶・擒・縱・與・奪。

はつ-きやうげん 初狂言【名】新年に、はじめて演ずる芝居の狂言。德川時代には、正月二日より始むる習なりき。はつしばゐ。若風俗「芝居見物せしに、今日より初狂言のかはり」と。

はっ-きやく 撥却【名】はらひのくること。

はっきやく-るゐ 八脚類【名】〔動〕脚の八本あるに依りて稱す。節足動物中の蜘蛛類と蠍(サソリ)類との總稱。

はっ-きよく 八極【名】『はっくわう(八紘)を見よ』天下の、八方の極遠の地。八荒。

はっきり【貌】あきらか。さだか。はき。分明。判然。明瞭。

はつ-ぎり 初霧【名】秋に、はじめて立つ霧。初秋の霧。夫木「時雨にも雨にもあらぬ初霧の降るにも空はさえ曇りけり」

はっ-く 發句【名】〔文〕㊀きく(起句)に同じ。㊁短歌の最初の五文字の句。(胸句・腰句・腹句・尾句に對して) ほっく(發句)參照。萬葉集代匠記「大野(オホノラノ)黑髮山(クロカミヤマノ)山草(ヤマスゲニ)小雨(コサメ)零敷(フリシキ)益益所(マスマスゾ)思(オモフ)、發句はオホノラニと讀みて、第二句の下を句絶とすべし」

はっ-く 八苦【名】〔佛〕生涯に被るべき八種の苦惱、即ち生(シヤウ)・老・病・死の四苦に、愛別離苦・怨憎會(ヲンゾウヱ)苦・求不得(グフトク)苦・五陰盛(ゴオンジヤウ)苦を加へていふ稱。愛別離苦は、自己の愛する者に別れ離るる苦、怨憎會苦は、我が怨み憎む人にも忌み嫌ふ事物にも會せざるべからざる苦、求不得苦は、物を求めて得ること能はざる苦、五陰盛苦は、人各五陰(五蘊)を具ふるによりて熾盛なる衆苦を得ること。五陰盛苦を廣義に解する時は、前七苦も、その中に包括せらる。十訓「人間の八苦の中には、怨憎會苦といへるは、物の怨めしきなり」

はっ-く 八九【名】〔商〕『八錢と九錢との中間の義』八錢五厘。〔取引所の語〕「八九買、九やり」

はっ-く 八區【名】『漢書の楊雄傳に「天下之士、雷動雲合、魚鱗雜襲、咸營㆓於八區㆒」とありて、註に「八區、八方也」と見ゆ』八方の區域。

ばっく（英 Back）【名】はいけい(背景)に同じ。

ばっ-く 拔苦【名】次條を見よ。盛衰記「阿證坊の印西(インサイ)と申すは、……釋尊平等の思に住し、菩薩拔苦の惠(エ)あり」

拔苦・與樂【句】佛の慈悲を以て、人の煩惱(ボンナウ)の苦を除き去り、解脫(ゲダツ)の樂みを與ふること。じひ(慈悲)㊀參照。

ぱっく（英 Puck）【名】㊀西洋にて、體格小くして惡戲を好む仙人なりといふもの。㊁滑稽味を帶びたる諷刺。

はつ-くさ 初草【名】㊀わかくさ(若草)に同じ。伊勢「初草のなど珍しき言の葉ぞうらなく物を思ひけるかな」㊁幼き子などの譬。源氏「初草の生ひゆく末も知らぬ間にいかでか露の消えんとすらん」

はっくしよ【感】嚏(クサメ)の聲。へっくしよ。

はつ-くだり 初下【名】はじめて、首府より地方に赴くこと。(初上(ハツノボリ)に對して) 織留「江戸への初下といふ」

はっ-くつ 發掘【名】土中に在る物を掘り出だすこと。

はっ-くどく 八功德【名】次條を見よ。

八功德の池【句】〔佛〕はっくどくち(八功德池)に同じ。

八功德の池の水【句】〔佛〕次條に同じ。榮花「八功德の池の水澄みて」

八功德の水【句】〔佛〕はっくどくすゐ(八功德水)に同じ。

はっくどく-すゐ 八功德水【名】〔佛〕澄淨・淸冷・甘美・輕輭・潤澤・安和及び飮む時、飢渴等無量の過患を除き、飮みをはりて、定めて能く諸根を長養し、四大增益す(一說には甘・冷・輭・輕・淸淨・不臭及び飮む時、喉を損はず、飮み終りて腸を傷めず)といふ八種の功德ある水。極樂の池中及び須彌山(シュミセン)と七金山(シチコンセン)との內海には、皆、これを滿ふといふ。八功德の池の水。八功德の水。八德の水。平家「岩間につもる水をば、八功德水と思し召す」

はっくどくすゐ-さう 八功德水想【名】〔佛〕十六觀想の一。極樂の八功德水の相を觀想する行法。寶池觀。

はっくどく-ち 八功德池【名】〔佛〕八功德水を滿へたりといふ、極樂の池。たからのいけ。寶池。月淸「つひにわが願ふすみかは極樂の八功德池の蓮(ハチス)なりけり」謠曲(初雪)「八功德池の汀に遊び」

はつ-くに 初國・肇國【名】はじめて建設せられ、又は國政のはじめて革新せられたる國。次條參照。〔古語〕

はつくに-しらす-すめらみこと 御肇國天皇【名】〔人〕『しらす(知らす)を見よ』**すじんてんわう**(崇神天皇)を、その御功業によりて申す稱。紀「始馭天下之天皇、ハツクニシラススメラミコト」同「御肇國天皇、ハツクニシラススメラミコト」

はつ-くび 初首【名】**いちばんくび**(一番首)に同じ。

ばっ-くん 拔群【名】『群(グン)を拔く義、卽ち最も拔け出づる義』多くの物の中に、殊にすぐれてあること。ばつぐん。絕類。絕群。超群。出群。逸群。拔萃。著聞「形體拔群、勇力、人に軼(ス)ぐ」先代萩「丈(タケ)拔群の大鼠」

ばつ-ぐん 拔群【名】前條に同じ。

はっ-くんし 八君子【名】〔人〕支那宋代の八人の學者、卽ち趙韓公・韓魏公・文潞公・司馬溫公・王荊公・六一居士・東坡居士・山谷老人。

ばっくん-に 拔群に【副】非常に。甚しく。謠曲(安宅)「先の關をば、はや、拔群に程隔りて候間、この處に、暫く御休あらうずるにて候」鵜鷺合戰「近年は、田舍のすまひにて、農業を事として、世間樣も拔群に心安くなり候」

はつくら 初倉【名】〔地〕遠江國榛原(ハイバラ)郡にある村。大井川の南岸。古の初倉鄕の遺稱。東海道は、もと掛川よりこの地に懸りて、駿河國小川(コガハ)驛に出でしが、掛川とこの地との間は、山路にて、道も遠きにより、その間に菊川驛を置き、文明の頃、菊川・掛川間に日坂(ニッサカ)驛を置き、又、金谷(カナヤ)も宿驛となりたる點より見れば、この地の通過は、その頃より廢止せられしならんといふ。古くは「波津倉」又は「播豆藏」と書きたり。海道記「播豆藏の宿(シユク)を過ぎて、大堰(オホヰ)川を渡る」

はつくら-やま 初倉山【名】〔地〕遠江國榛原(ハイバラ)郡にある山。藻鹽草「うち渡す八十瀨(ヤソセ)あまたの大井川見えてぞ遠き初倉の山」

ぱっくり【名】『次條の轉義』月經の通じ初むること。〔俚語〕

ぱっくり【貌】ぱくりの音便。

は-づくろひ 羽繕【名】鳥の飛ばんとする時に、先づ羽毛を整ふること、はねづくろひ。和名「翩、波豆久路比須。鳥理毛也」平家「鷺、羽づくろひして立たんとす」

はっ-くわ 八科【名】漢方の醫術の八種の分科、卽ち大人科・小兒科・婦人科・眼目科・口齒科・鍼科・按摩科。

はっ-くわ 八卦【名】はっけ(八卦)に同じ。

はっ-くわ 發火【名】㊀火を發すること。火の燃え出づること。㊁銃砲に、實彈を用ひず、火藥のみをこめて發射すること。「發火演習」㊂**ほくち**(火口)に同じ。

はつ-くわい 初會【名】新年になりての、はじめての會合。浮世風呂「二十日頃に、初會と翠簾開(ミスビラキ)とごっちゃにして」

はっ-くわい 發會【名】㊀はじめての會合又は集會。㊁〔商〕取引所に於ける、その月のはじめの立會(タチアヒ)。

ばつ-ぐわい 閥外【名】門閥・藩閥・學閥などの範圍の外に在ること。

はっくわい-しき 發會式【名】發會の儀式。

はっ-くわう 發光【名】光を發すること。

はっ-くわう 八荒【名】八方の荒遠なる土地。八極。盛衰記「八荒風和ぎ、四海、浪靜まらん事」

はっ-くわう 八紘【名】『淮南子の地形訓篇に「九州之外、乃有二八殥一、八殥之外、而有二八紘一、八紘之外、乃有二八極一」とあり。紘は維の義、卽ち天地を維ぎて、これが綱紀となる義』天下の八方の遠き地。地のはて。八表。

ばっ-くわう 末光【名】**まっくわう**(末光)に同じ。

はっくわう-き 發光器【名】〔兵〕『英 Holmes light』魚形水雷演習發射の際、その紛失を免れんがために、燐化石灰をブリキ製の罐に入れて、頭部なる爆藥室の先端又は浮室等の一部に裝入したるもの。海水との作用によりて、燐光を放つが故に、夜間にありては、その光輝によりて、その位置を發見し得べく、晝間にありては、その臭氣によりて、追跡搜索を行ふに便なり。

はっくわう-きん 發光菌【名】〔植〕『英 Luminous fungi』暗所にて、自ら發光する高光菌類及び細菌類。

はっくわう-し 發光紙【名】『英 Luminous papers』强靱なる紙などに、發光性の塗料を施し、暗黑の場所にて、光を發せしむるに用ふるもの。塗料としては、普通、硫化バリウム又は硫化カルシウムを主とし、これに少量の重クロム酸加里を加へ、魚膠又はジェラチンと共に練り、その稀釋液を、數回反復して塗布す。

はっくわう-たい 發光體【名】〔理〕『英 Luminous body』自ら光を發する物體、又、光を發してある物體。太陽・恒星、燃えつつある蠟燭などの如き、これなり。光源。(暗體に對して)**はげん**(波源)參照。

はっくわう-ち 發光地【名】〔佛〕十地の一。十波羅密中の忍辱(ニンク)波羅密を成就して、有(ウ)・無の二邊を離れ、中道の智慧の顯發する地位。

はっくわう-てん 發光點【名】〔理〕**くわうてん**(光點)に同じ。

はっくわう-どうぶつ 發光動物【名】〔動〕『英 Luminous animals』光を發する動物。夜光蟲のごとき微細なる單細胞動物より螢烏賊(ホタルイカ)・烏鮫(カラスザメ)・などのごとき魚類に至るまで、種類甚だ多し。

はっくわう-とれう 發光塗料【名】『英 Luminous paints』暗所にて燐光を發する塗料。發光性硫化石灰などを、油その他の媒介物と混合して製す。浮標などに塗布すれば、夜間の認識に便あり。

はっくわ-えんしふ 發火演習【名】〔兵〕實彈を用ひず、火藥のみにて行ふ演習。

はっくわ-くわぐ 發火火具【名】〔兵〕電流・摩擦・衝擊などによりて發火し、火兵の裝藥に點火する具、卽ち門管・爆管・雷管などの總稱。

はっくわ-さうち 發火裝置【名】〔兵〕火砲・小銃等の裝藥の發火、及び水雷の爆藥の爆發を起さしむる裝置。電氣的なるものと機械的なるものとに大別するを得。

はっくわ-てん 發火點【名】〔化〕『英 Ignition point 又 Flashing point』或物質の燃燒を起すに必要なる溫度。黃燐は攝氏六十度、赤燐は二百三十度なる類。引火點よりも、數度高きを常とす。又、發火點が平溫以下に在る物質にありては、酸素の存せざる他物質、例へば液體等の中に貯へおく必要あり。發火溫度。

はっ-くわん 八卷【名】㊀書册の卷の數八つ。㊁**はちぢく**(八軸)に同じ。

はっ-くわん-さい 八關齋【名】〔佛〕次條に同じ。

はっくわんさい-かい 八關齋戒【名】〔佛〕『禁閉して犯さしめざるより、關といふ』**はっさいかい**(八齋戒)に同じ。

はっくわ-やく 發火藥【名】〔兵〕衝擊・摩擦等によりて容易に爆發し、その爆發瓦斯の震動作用によりて、他の爆發を轟發せしむる爆藥。即ち雷汞・爆粉などの類。

はっくわ-をんど 發火溫度【名】〔化〕**はっくわてん**(發火點)に同じ。

は-つけ 磔・張附【名】**はりつけ**(磔)の略。義經記「水の底に柴漬(フシヅケ)にもし、深山にはつけにもせよ」

はっ-け 八卦【名】㊀八種の卦、即ち乾(ケン)☰・兌(ダ)☱・離(リ)☲・震(シン)☳・巽(ソン)☴・坎(カン)☵・艮(ゴン)☶・坤(コン)☷。支那の伏羲氏の畫せしところといふ。はっくわ。**はっしやう**(八象)・**たいきよく**(太極)參照。㊁うらなひ。易。卜占。卜筮。膝栗毛「當るも八卦、當らぬも八卦どっちやでも見料は十六銅づつ」 ㊂八卦八百(ハツピヤク)、嘘(ウソ)九百(クヒヤク)【句】賣卜者の言ふ所の信ずべからざるを罵りていふ語。當るも八卦、當らぬも八卦。〔諺語〕

はっ-け 八家【名】〔佛〕㊀我國の高僧の、入唐して、密敎を將來せしもの八人、即ち高野の弘法大師、安祥寺の慧運、禪林寺の宗叡、小栗栖(ヲグルス)の常曉、靈巖寺の圓行(以上、東寺の五家)と傳敎・慈覺・智證(以上、台密の三家)と。眞言の八家。㊁**はっしゆう**(八宗)に同じ。㊂**くわんとうはっけ**(關東八家)の略。

八家・九宗(クシユウ)【句】〔佛〕『八家も、九宗の一部なれども、別に提擧していふこと、「天龍・八部」・「八相・成道」などと同樣の言ひ方』八宗と、八宗に禪宗を加へたるものと。

ばっ-け 末家【名】**まっけ**(分家)に同じ。

はっ-けい 八景【名】一つの名所又は一國の內にて、八種の佳景を選びて列擧したるもの。支那の瀟湘の八景、又それに倣ひたる我國の近江八景・南都八景・金澤八景、又は日本八景など。也有「八景の內二つ三つしぐれけり」

はっ-けい 八刑【名】『周禮の地官に出づ』八つの刑罰、即ち不孝・不睦・不婣・不悌・不任・不恤・造言・亂民。**じふあく**(十惡)㊀參照。

ばつ-げい 末藝【名】**まつげい**(末藝)に同じ。

はつ-げいこ 初稽古【名】はじめて稽古をなすこと、又その稽古。

はっけい-ざら 八景皿【名】一箇の形は扇面の地紙のごとくにて、八箇排置すれば、圓形をなす、南京燒の皿。

はっ-けう 八敎【名】〔佛〕天台宗にて、釋迦が五時㊁の間に說きたりとする、化法の四敎と、化儀(ケギ)の四敎と。化法の四敎とは、一に、三藏敎とて、經・律・論の三藏部類判然し、因緣生滅(シヤウメツ)の四諦(シタイ)を說きて、正しく聲聞(シヤウモン)・緣覺(エンガク)の二乘を敎へ、傍ら菩薩を化するもの、二に、通敎とて、即空無生の四眞諦を說き、三乘を通じて同學せしむるもの(但し菩薩を正機とし、二乘を傍機とす)、三に、別敎とて、二乘の人に共同せず、別して、菩薩に對して、大乘無量の法を說くもの、四に、圓敎とて、最上利根の菩薩に對して、事理圓融の中道實相を說くもの。化儀の四法とは、一に、頓敎とて、頓大の機に對して、頓に別敎・圓敎の大法を說くもの(華嚴時の說相)、二に、漸敎とて、漸機に對して、漸漸に次第して、化法の四敎を說くもの(鹿園・方等・般若の三時の說相)、三に、祕密敎とて、一種の機に對して、祕密に法を說き、如來身口意(シンクイ)の不思議力に由り、一會(イチヱ)の人をして、自他互に知らしめぬもの、四に、不定(フヂヤウ)敎とて、一會の中に一法を說き、聞く者をして異解せしめ、得益(トクヤク)不定なるもの。謠曲(現在七面)「世尊の敎法は、五時・八敎に配立し」

はっけ-けう 八卦敎【名】支那の祕密結社の一。白蓮敎の後、諸方に起りし妖敎の一にて、淸の仁宗の嘉慶の末、河南・直隷の二省方面に擴まり、愚民の心を得て一勢力となりしが、後、天理敎と改稱せり。

はつ-けぶり 初烟・初煙【名】はじめて立ちのぼる烟。夫木「これやさは人をおもひの初烟はれぬ眺の空の浮雲」

はっけ-おき 八卦置【名】うらなひしや。さんおき。はっけみ。賣卜者。

はっけ-み 八卦見【名】前條に同じ。

はっ-けん 法眷【名】〔佛〕『法門の眷屬の義』同一の法味樂に住し、同一の法門を學修する者。ほっけん。ほふけん。〔禪宗の語〕

はっ-けん 發見【名】見つけ出すこと。

はっ-けん 發遣【名】送りつかはすこと。派遣。差遣。發遣(ホッケン)。

はつ-げん 發現・發見【名】あらはれ出づること、又、あらはし出だすこと。現出。出現。四言敎講義「これらは、必ず眞志の發見にあらずといへども、皆、よくその念を遂ぐることを得」

はつ-げん 發源【名】㊀水の湧き出づること。みなもと。㊁物事のおこりもとづくこと。起源。

はつ-げん 發言【名】言葉を出だすこと、又その言葉。ほつごん。

ばっ-けん 罰權・罸權【名】懲罰を科する職權。

ばっ-けん 拔劍【名】劍を拔きはなつこと、又、拔きはなちたる劍。

ばつ-げん 罰限・罸限【名】懲罰を受け居る期限。罰期。

はっけん-ぎんかう 發券銀行【名】兌換券を發行する銀行。

はつげん-けん 發言權【名】發言する權利。

はっけん-じだい 發見時代【名】『英 Discovering age』第十五世紀の始より、一五二二年マガリヤエンス(Magalhães)の世界周航まで百餘年に亙りて、地理上の發見の續出せし時代。

はっけん-しや 發見者【名】發見したる人。

はつげん-しや 發言者【名】發言する人。

はっけん-でん 八犬傳【名】〔書〕**なんそうさとみはっけんでん**(南總里見八犬傳)の略。

はっけ-よい【感】相撲(スマフ)の行司の、土俵の上にてのかけごゑ。

はつ-こ 裔【名】『果子の義』子孫、後裔。はつえ。〔古語〕伊呂波字類「裔。ハツコ」

はっ-こ 八股【名】**はっこぶん**(八股文)の略。

はつ-ご 初子【名】はじめて生れたる子。うひご。

はつ-ご 發語【名】㊀**はつげん**(發言)に同じ。㊁文句の發端に用ふる、「それ(夫)」・「およそ(凡そ)」・「いざ」・「さて(扠・偖)」・「そもそも」などの類。

ばっ-こ 跋扈【名】『跋は蹈みつくる義、扈は篇にて、魚を捕ふる竹籠の義。即ち大魚の籠の中に入らず、跳ね上りて脫し去るに譬へていふ。一說に、扈は、卑くして大なる山の義、行くに正路に由らず、山卑くして大なれば、蹈み踰えて行かんとするに譬へていふと』權威を恣にして、上を淩ぎ犯すこと。のさばること。放恣。

ばつ-ご 跋語【名】跋として記す語句。

はっ-こう 八講【名】㊀〔佛〕**はっこうゑ**(八講會)の略。源氏「御八講のいそぎを、さまざまに心づかひせさせたまひけり」增鏡「內の御八講にも劣らず見えたり」 ㊁**はっこうぬの**(八講布)の略。雍州府志「八講布、……今省㆓布字㆒、稱㆓八講㆒」

はっこう-でんそう 八講傳奏【名】古、宮中の法華八講會に、臨時に置かれし傳奏。

はっこう-ぬの 八講布【名】古、越中・加賀の兩國より產せし、一種の麻布。古、宮中の法華八講會に、布施に用ひしもの。

はっこう-ふ 八講布【名】前條に同じ。

はっこう-ゑ 八會講【名】〔佛〕**ほっけはっこうゑ**(法華八講會)の略。

はっ-こく 八穀【名】『吳越春秋に「春種㆓八穀㆒、夏長而養、秋成而聚」とあり』八種の穀物、即ち稻・黍・大麥・小麥・大豆・小豆・粟・麻。**ごこく**(五穀)參照。

はつ-こひ 初戀【名】成長して、はじめて戀情を起すこと。はじめての戀。はついろ。太祇「初戀や燈籠に寄する顏と顏」

はっこ-ぶん 八股文【名】〔文〕『股は對偶の義』支那にて、科擧の科目に用ひし、一種の文體。多く經書の句を題とし、題の義を、八面より論じ去り、餘蘊なからしむるを目的とし、第一股より第二股・第三股と、數句づつ相對したる文にて辨じ、第八股に至りて止むもの。もと思想の練磨を豫料せしに出づれども、因襲の久しきにつれて、平凡なる形式的のものと化し了り、清朝の末年、科擧の廢止に先ちて廢せられたり。八股。

はつ-ごほり 初氷・初冰【名】冬になりてはじめて張りたる氷。傾城酒呑童子「主水司(モンドツカサ)の初氷、佛の閼伽(アカ)と碎かれて」

はつ-ごん 發音【名】はつげん(發言)に同じ。八笑人「先づ、私から發言(ハツゴン)致しませう」

はっこ-めぐり 八湖廻【名】富士山麓の八湖を巡覽すること。ふじはっこ(富士八湖)參照。

はつ-ごよみ 初曆【名】その年の曆を、新年にはじめて用ふること、又その曆。

はつ-ごゑ 初聲【名】㊀新年にはじめて聞く聲。千五百番歌合「春風のをのへの雪を吹くからに音づれそむる松の初聲」㊁鳥獸又は蟲などの、それぞれの季節にはじめて鳴く聲。はつなき。はつね。古今「ほととぎす初聲聞けばあぢきなくぬし定らぬ聲せらるはた」後撰「松蟲の初聲さそふ秋風は音羽山より吹きそめにけり」

はっ-さ 八蜡【名】『蜡は索にて、萬物の、神を索めて、徧くこれを饗する義』十二月、冬至後の第三の戌の日、萬物成就し、歲事終らんとする時、先嗇(神農氏)・司嗇(后稷)・農(この業を傳へて、我に敎授せしもの)・郵表畷(畷に建築して、耕作を監督せし番小屋)・猫虎(田鼠・田豕を驅除するもの)・坊(水を蓄むるもの)・水庸(水を受け又これを泄すもの)の、農事に功ある七種と、昆蟲(害をなさざらんことを祈る)とを祭ること。夏(カ)に嘉平、殷に淸祀、周に蜡、漢に臘といふ。

はっ-さ 發作【名】㊀おこりたつこと。發動。はっさく。㊁ほっさ(發作)に同じ。

ばつ-ざ 末座【名】まつざ(末座)に同じ。

はっ-さい 八災【名】〔佛〕禪定(ゼンヂヤウ)を妨害する八つの災患、即ち憂・苦・喜・樂・尋(事理を尋ね求むる作用)・伺(事理を伺ひ案ずる作用)・出息・入息。火・水・風の三災を外災といふに對して、內災といひ、この八災を離れたるが即ち色(シキ)界の第四禪定なりと說く。はっさい。八災患(ハツサイゲン)。徒然「八災といふ事を忘れて、誰かおぼえたまふといひしを」

はっ-さい 八齋【名】㊀〔佛〕はっしさい(八支齋)に同じ。㊁ろくさい(六齋)を見よ。

はっ-さい 發才【名】婦女の、才はじけて、しとやかならぬこと。おちゃっぴい。〔京都・大阪の語〕

ばっ-さい 伐採【名】竹木をきりとること。

はっさい-かい 八齋戒【名】〔佛〕はっしさい(八支齋)に同じ。

ばっさい-き 伐採期【名】伐採に適當なる時期。

はっさい-げん 八災患【名】〔佛〕はっさい(八災)に同じ。

ばっさい-れっく 伐採列區【名】林業上、一作業級に屬する森林に就きて、樹齡の整理、伐採順序、伐採面積の調節、木材搬出の便宜、風害・火災などの豫防等の目的にて設定する區分の數箇。

はつ-さう はつ草【名】〔植〕いちはつ(鳶尾)に同じ。

はっ-さう 八草【名】八種の草。菖蒲(シヤウブ)・艾(ヨモギ)・車前草(オホバコ)・蓮(ハス)・蒼茸(ナモミ)・忍冬(ニンドウ)・馬鞭草(クマツヅラ)・蘩蔞(ハコベ)なりともいひ、その他、種種の異說あり。庭訓往來「五木・八草之湯治」

はっ-さう 八相【名】〔佛〕㊀釋迦牟尼佛(シヤカムニブツ)の一生涯八度の變相。はっさうじやうだう(八相成道)參照。㊁生(シヤウ)・住・異・滅に大小の二相ありて、四本相・四隨相と呼ぶものの併稱。萬物の、この八相を以て遷流(センル)するを、八相遷物(センモツ)といふ。㊂觀相上の、八種の人相、即ち威相・厚相・淸相・古相(骨氣の岩稜なるもの)・孤相(孤獨の相)・薄相・惡相・俗相。

はっ-さう 八雙【名】劍道又は薙刀の構へ方の一。正面より右へ寄せて立てて構ふるもの。玉藻前曦袂「そこ動くなと、裾引上げ、長押(ナゲシ)の長刀おっ取って、石突てうと、庭の面、八雙・三段・水車」

はっ-さう 發喪【名】㊀喪を發表すること。㊁哀(アイ)を擧ぐること。

はっ-さう 發想【名】〔音〕『英Expression』樂曲に內在せる感じを表現するやうに演奏する技巧。樂曲の各節或は各音の緩急・强弱及び種種の奏法と、その奏法に伴ふ音色とは、最もこれに關係あり。

ばつ-ざう 末造【名】まつざう(末造)に同じ。

はっさう-かなもの 八雙金物【名】先端二股に岐れ、門扉・板唐戶等に橫に取り附けて用ふる金具。

はっさう-きがう 發想記號【名】〔音〕『英Marks of expression』樂譜上に、發想に關し、强弱・緩急等の別を示す、種種の記號。發想符號。表情記號。表情符號。

はっさう-じやうだう 八相成道【名】〔佛〕『成道は、八相の一なれども、その主腦なるによりて、別にその名を揭げ出せるなり』釋迦一代に示したる八種の相、即ち降兜率(ゴウトソツ)(兜率の內院は、菩薩の最後身の住處にて、釋迦も、菩薩として、その天の四千歲、即ち人間の五十六億七千萬歲の間、住したる後、時機の熟するを見て、白象に乘じて、その天より下る相)・入胎(白象に乘じて、母胎に入る、即ち摩耶夫人の右脇より入る相)・住胎(母胎に在りて、行住・坐臥する相)・出胎(四月八日、摩耶夫人の右脇より出生する相)・出家(十九歲にして、世の無常を觀じて、王宮を出で、山に入りて道を學ぶ相。但し、十九歲は、一說に二十五歲ともいふ。)・成道(六年の苦行を經て、菩提樹下に成佛・得道する相)・轉法輪(成道以後、五十年間、法を說きて、人天(ニンデン)を度する相)・入滅(八十歲にして、沙羅雙樹の下に涅槃(ネハン)に入る相)。以上は、大乘起信論に見え、天台大師の四敎儀には、降兜率・託胎・出生・出家・降魔・成道・轉法輪・入涅槃(ニフネハン)とあり。八成(ハチヂヤウ)。「一期(イチゴ)の四相」參照。榮花「扉押し開きたるを御覽ずれば、八相成道を書かせたまへり」

八相成道は利物(リモツ)の終(ヲハリ)【句】〔佛〕「和光(ワクワウ)同塵は結緣の始、八相成道は利物の終」を見よ。

はちさう-せんもつ 八相遷物【名】〔佛〕はっさう(八相)㊁を見よ。

はっさう-ばり-あみ 八艘張網【名】四艘張網の一種。漁船八艘を使用して、鰮(イワシ)・鰺(アヂ)・鯖(サバ)を捕獲するに用ふるもの。形狀・構成・使用法、すべて四艘張網に同じ。

はっさか-あみ 八阪網【名】旋網(マキアミ)類に屬する有囊の網。形、箕に似て、周邊三方に浮子(アバ)、前方の兩方に袖網を附け、その端に引網を附けたるもの。二十四人乘の網船二艘と十二人乘の手船二艘とにて使用し、鰯を捕ふるに用ふ。手船は魚群の搜索、揚網の手傳、捕魚の取揚及び處理の任に當る。

はつ-さかづき 初杯・初盃【名】新年にはじめて飲む酒盃。壽の門松「天も醉うたり、人も醉ふ、初盃の內祝」

はつ-ざかな 初肴・初魚【名】魚類の初物(ハツモノ)。日本新永代藏「町人とても、金銀次第にて、お大名より先に、時時の初肴を賞翫仕ること」

はっ-さき 鉢崎【名】〔地〕越後國中頸城(ナカクビキ)郡米山(ヨネヤマ)村の大字。米山の西口に當り、德川時代に、高田藩の番所ありし地。鐵道信越本線の停車場あり。

はづ-さき 羽豆崎【名】〔地〕尾張國知多(チタ)郡にある岬。知多半島の先端師崎(モロザキ)より南方に突出す。三河國伊良湖(イラゴ)岬と相對し、風光明媚なり。

はつ-ざき 初咲【名】花の、その季節に、又は草木に、はじめて花の咲くこと、又その草木。二代男「水仙の初咲」

はつざき-ざくら 初咲櫻【名】初咲の櫻。曾我會稽山「初咲櫻・續穗(ツギホ)櫻、盛の花の嫁たちの」

はっ-さく 八朔【名】『朔は朔日の義』㊀陰曆八月一日。この日、農家にて、その年の穀を收め、田實(タノミ)の節とて、これを祝ふ。支那にても、古、この日、膢臘とて、米穀の成熟を祀る祭事を行ひし由なれば、我國のも、これに倣へるなるべし。㊁德川幕府の節日の一。家康、天正十八年のこの日に、初めて江戶城に移りしより、關東入國の日と稱し、大小名及び直參の諸臣は、白帷子を著て登城し、祝詞を將軍に奉れり。

八朔の賀【句】「田實(タノミ)の祝」に同じ。

八朔の雪(ユキ)【句】德川時代に、八朔の日、遊女の、白無垢を著たりしこと。

八朔の禮【句】「八朔の賀」に同じ。

はっ-さく 發作【名】はっさ（發作）に同じ。

はっ-さぐ【動四自】はしやぐ㊀に同じ。

ばっ-さく 末作【名】まっさく（末作）に同じ。

はっ-さく-あみ 八作網【名】浮刺網（ウキサシアミ）の一種。目の大さ一寸八分乃至二寸にて、幅八尋乃至十尋、長さ八十尋餘なるもの。沿岸に群り來る鱅（コノシロ）を捕ふるに用ふ。

はっ-さく-うめ 八朔梅【名】〔植〕**はっさくばい**（八朔梅）に同じ。

はっ-さく-そうぶぎやう 八朔總奉行【名】**たのむそうぶぎやう**（憑總奉行）に同じ。

はっ-さく-にんぎやう 八朔人形【名】備後國沼隈（ヌマクマ）郡松永邊にて、毎年舊八朔に、糝粉（シンコ）にて造りて、小兒の弄ぶ人形。

はっ-さく-ばい 八朔梅【名】〔植〕**はやさきうめ**（早咲梅）に同じ。

はっ-さく-ぶぎやう 八朔奉行【名】**おたのみぶぎやう**（御憑奉行）に同じ。

はつ-ざくら 初櫻【名】最初に咲きたる櫻の花。咲きてより多くの時を經ぬ櫻の花。はつはな。光經集「朝霞たつたの梢つぼむより春をいそがす初櫻かな」芭蕉「初櫻折しも今日はよき日なり」

ばっ-さつ 罰札・罸札【名】罪狀をしるしたるふだ。

はつ-さなへ 初早苗【名】はじめて取る早苗。堯孝集「花見んと春も急ぎし櫻田にまた初早苗取りや添へまし」

はっ-さん 八算【名】〔數〕『法の數一より九までの九種ある中に、一にて割りたる商は、原數と同一なるより、二より九までの八種と見ていふ』和算に於ける、一桁の割算。九歸（キキウ）法。**けんいち**（見一）參照。日本新永代藏「代算も知らずして、地算（ヂサン）にて埒のあく、大商人の心、格別なるもの」

はっ-さん 發散【名】㊀外へ發し散ること。外へ發し散らすこと。㊁〔數〕『英 Divergency』一定の法則に從ひ、逐次に數を算出しゆきて、止まることなく、且つ逐次に算出せらるる數が、竟には限なく大きくなりゆくこと。例へば、無限等差級數の各項の和、即ち1＋2＋3＋……の類。（收斂・振動に對して）

はつ-ざん 初産【名】**うひざん**（初産）に同じ。

ばつ-ざん 拔山【名】山を拔くほどの勢なること。「拔山の力」「拔山の勇（ユウ）」

拔山蓋世（ガイセイ）【句】「力、山を拔き、氣は世を蓋ふ」を見よ。

はっ-さん-きふすう 發散級數【名】〔數〕『英 Divergent series 又 Diverging series』各項の和が無限に大きくなりゆく級數。例へば、1＋2＋4＋8＋16＋32＋64＋……の類。（收斂級數に對して）

はつ-さんくわい 初參會【名】新年に於けるはじめての參會。醒睡笑「正月、初參會に出でて、祝儀を申さんや」

はっ-さん-さよう 發散作用【名】〔植〕發散する働き、例へば、植物體中の水分は常に水蒸氣となりて、葉の氣孔より發し散ずる類。

はつ-ざんま 初秋刀魚【名】その年にはじめて漁獲して市に出す秋刀魚。即ち十一月上旬頃のもの。

はっ-さん-りう 發散流【名】〔植〕葉面より水分の發散するを補ふために、根より葉へ絶えず水分の昇る現象。つらはつりう。

はっ-さん-れんず 發散レンズ【名】〔理〕『英 Diverging lens. 光線の通過する時、緣の方に向ひて屈折し、從ひて發散するによりていふ』**あふれんず**（凹レンズ）に同じ。（收斂レンズに對して）

ばっ-さり【名】㊀**ばさり**の音便。㊁輕く一度におほひかくるさま。㊂一刀にたやすく斬りつくるさま。

はつ-ざる 初申【名】二月のはじめの申の日。この日、春日神社の祭典あり。堀次「きさらぎの初申なれや春日山峯とよむまでいただきまつる」

はつし【名】**はつり**に同じ。

はっ-し 八子【名】革を細く平めて、先に鈴を附け、唐鞍（カラクラ）の後の所より、左右に、四つづつ下ぐるもの。

はっ-し 八史【名】左大史・右大史・左少史・右少史、各二人ある、その總稱。

はっ-し 八使【名】『各道一人づつなりしよりいふ』**じゅんさつし**（巡察使）に同じ。

はっ-し 發止・發矢【貌】『漢字は、何れも假借の文字』堅き物の、勢よく打當る音。**はっしはし**（發止發止）參照。「丁丁はっしと斬り結ぶ」平家「矢、……胸板に、はっしと立ちて」

ばっ-し 末子【名】**まっし**（末子）に同じ。

ばっ-し 拔齒【名】齒を拔き取ること。

はっしう-まんだら 髮繡曼陀羅【名】毛髮にて繡（ヌヒ）を施したる曼陀羅。

はっ-しう 八州【名】㊀八つの國。八箇國。㊁〔地〕**ばんどうはっしう**（坂東八州）の略。㊂德川幕府の制にて、關東八州の地方を巡廻せし捕吏。

八州を取るも亦誅せらる【句】『日本外史の卷一に「武藏守興世王、兇陰喜レ亂、往說二將門一曰、關東八州、沃饒而四塞、可三據以霸二天下一。夫取二一州一誅、取二八州一亦誅、誅一耳公安所レ決。將門大悅、延爲二謀主一、遂攻二下野上總武藏相摸一、悉下レ之」とあるに本づく』大事に死するも、小事に死するも、死は一なれば、寧ろ大事に死せん。〔諺語〕

はっ-しき 八識【名】〔佛〕『梵 Aṣṭan vijñānāni の譯語』法相宗にて、人の心の主となるものを、八種に分ちたるもの、即ち眼（ゲン）識・耳（ニ）識・舌識・身識（以上、色（シキ）・聲（シヤウ）・香・味・觸（ソク）の五境を生ずる根本となるものにて、すべて感覺に依る）・意識（前の五識の如く色・聲・香・味・觸の一に依るに非ずして、よく一切に通じて、これを了別し、又、過去を想ひ、未來を考ふる等、睡眠・悶絶など以外には、この識の生ぜざることなし）・末那識（梵 Mana 意の當體の義）・阿賴耶識（梵 Alaya. 有爲（ウヰ）・無爲（ムヰ）の萬法を攝藏して、諸識の根本となるもの、即ち宇宙萬有は、すべてこの識の發現せるものとす。而して、この識の上に、種種の思慮分別を起し、意識の善惡を分別して、或は迷ひ、或は悟る原因となるもの、即ち前の末那識なり）。倶舍（クシヤ）宗にて、眼・耳・鼻・舌・身・意の六識に、二識を加へしもの。はっしき。太平記「淡海公建二興福寺一、以瑩二八識・五重之明鏡一」

はっ-しき 八色【名】八つの種類。八種。

八色の姓（カバネ）【句】**はっしやう**（八姓）に同じ。

はつ-しぐれ 初時雨【名】冬になりて、はじめて降るしぐれ。源氏「はつしぐれ、いつしかとけしきだつに」

はっ-しさい 八支齋【名】〔佛〕『八戒、實は八戒と齋法との九支ありて、歸する所、一の齋法を資助するに在るよりいふ』**はっかい**（八戒）に同じ。

はっ-しさいかい 八支齋戒【名】〔佛〕前條に同じ。

はっ-し-はっし 發止發止【貌】**はっし**（發止）を重ねていへる語。狂言、俄道心「まづ高札を打たう。はっし、はっし」同（文相撲）「さても、早い相撲（スマフ）ぢや。やっというて手合（テアハセ）をすると否や、はっしはっしと打って來たれば」

はつ-しばゐ 初芝居【名】**はつきやうげん**（初狂言）に同じ。若風俗「極月（ゴクゲツ）二十二三日頃まで、うかうかと、……、はや、初芝居も程無く」四方のあか「春のはじめの初芝居」

はつじ-べんらん 發字便覽【名】平上去入の四聲の字を、畫引に排列したる漢字辭彙。二畫より二十五畫に至る七百十八字を收錄す。一卷。雄風館大峯先生塾の編輯と記し、冢田虎の序あり。

はつ-しほ 初潮・初汐【名】㊀最初に汲む潮。夫木「須磨の浦に秋燒く蜑の初潮の烟ぞ霧の色を染めける」㊁その時刻になりて、最初にさし來る潮。㊂陰曆八月十五日の大潮。蕪村「初潮や朝日の中に伊豆相模」

はつ-しほ 初入【名】『しほ（入）を見よ』㊀染色を施すに、先づはじめて、染汁に入れ浸すこと。ひとしほ。㊁春又は秋の季節になりて、草木の葉の色づきそむることの譬。風雅「淺綠はつしほ染むる春雨に野なる草木ぞ色まさりける」龜山殿七百首「嵯峨の山西こそ秋と露や待つはつしほ染むる紅葉なるらん」

はつしほ-ごろも 初入衣【名】初入染（ハツシホゾメ）のころも。隣女集「山藍のはつしほ衣いつのまに心に深く思ひそめけん」

はつしほ-ぞめ 初入染【名】初入のままにて染め上げたる物。うすき色の染物。夫木「紫のはつしほ染のにひごろも程なく色のあがれとぞ思ふ」

はつ-しま 初島・初嶋【名】〔地〕伊豆國熱海(アタミ)町に屬する島。網代(アジロ)村の海上、東方四海里に在り。東西八町、南北四町、周圍二十六町。

はっ-しん 八神【名】「神祇官の八神」を見よ。

はっ-しん 發信【名】音信を發送すること。郵便又は電信を出だすこと。(受信に對して)

はっ-しん 發疹【名】小き腫物の生ずること。

はっ-しん 發震【名】地震の搖れはじむること。

はつ-じん 發軔【名】㊀『淮南子の兵略訓篇に「車不ㇾ發ㇾ軔」とあり』齒止(ハドメ)を取りのけて、車を動し始むること。㊁旅行に出で立つこと。たび ㊂物事を始むること。

はっしん-き 發信器【名】〔理〕『英Communicator』電報を發信するに用ふる器械。木製の臺に、金屬製の梃子(テコ)を附したるもの。梃子の右端にある鈕を押さざる間は、梃子の一端にあるばねの作用によりて、電池と他局に至る電線との連絡を斷ち、自局の受信器と他局の受信器とを連絡し、鈕を押す時は、受信器との連絡を絶ちて、電線と電池とを連絡し、電流を、他局の受信器に通ず。(受信器に對して)

はっしん-きょく 發信局【名】次條に同じ。(著信局に對して)

はっしん-きょくしょ 發信局所【名】電報を發送したる電信局所。發信局。(著信局所に對して)

はっしん-しゅぎ 發信主義【名】〔法〕『獨Übermittelungstheorie』隔地者間に於ける意思表示に於て、相手方に通知を發したる時を、その效力發生の時期とする主義。通知主義。(受信主義・表白主義・了知主義に對して)

はっしん-ち 發信地【名】發信したる土地。(受信地に對して)

はっしん-ちふす 發疹窒扶斯【名】〔醫〕『羅Typhus exanthematicus』強き傳染性を有する急性・發疹性の病。原因は不明なれど、患者及びこれと接觸せる物品より傳染し、傳染後、一二週間にして、俄かに戰慄・高熱・頭痛・四肢痛等を發し、眩暈・嘔吐等を伴なひ、精神は朦朧となり、三日乃至五日にして、特殊の薔薇疹を發し、二三週間の後、疹は熱と共に消散す。心臟の衰弱又は肺炎・腎炎・耳炎等の併發症を發することあり。戰爭ちぶす。

はっしん-でん 八神殿【名】古、平安京大內裡の神祇官の西院の西、築墻(ツイガキ)の內にありて、神皇產靈(カムミムスビ)神・高皇產靈(タカミムスビ)神・玉留產靈(タマツメムスビ)神・生產靈(イクムスビ)神・足產靈(タルムスビ)神・大宮賣(オホミヤノメ)神・御食津(ミケツ)神・事代主(コトシロヌシ)神の八神を祀りし神殿。北方を第一殿として、八社相並び、南北十丈、東西三丈、東・南・北の三方に朱の玉垣を圍らし、第一・第五・第八の三殿の東面に鳥居あり。各殿の棟上には、丸木の堅魚木(カツヲギ)を置き、又、搏風(ハフ)あり、殿內には神體を安んぜず、只、榊を用ふといふ。安元三年四月二十八日、大極殿燒亡の際燒失し、後、再建ありしが、豐臣秀吉の檢地後、慶長二年吉田に遷さる。しんでん(神殿)㊂參照。

はっしん-にん 發信人【名】發信する人。(受信人に對して)

はっしん-はふ 八針法【名】〔美〕日本畫にて、松の葉の、八種の描き方、卽ち寶塔針・虎鬚針・亂撒針・鼠尾針・車輪針・疊錢針・馬鬣針・銀齒針。

はつ-しも 初霜【名】㊀冬になりてはじめて置く霜。早霜。初霜(シヨサウ)。源氏「九月にもなりぬ。初霜むすぼほれ、えんなるあしたに」㊁しろざけ(白酒)を見よ。

はつしも-がれ 初霜枯【名】冬になりてはじめて草木の霜枯るること。霜枯時の初期。建保二年八月歌合「山里は雪よりさきも住みわびぬ初霜枯の長月の空」

はつしも-こんぶ 初霜昆布【名】しらがこぶ(白髮昆布)に同じ。

はつしも-づき 初霜月【名】陰曆十月の異稱。藏玉集「十二月異名。十……初霜月。草も木も初霜月の朝ぼらけ眺も白き人のをち方」

はっ-しもの 發物【名】ふきでもの。ふきで。

はっ-しや 發車【名】汽車・電車などの出發すること。(著車に對して)

はっ-しや 發射【名】矢を射、又、彈丸をうち出すこと。

はっ-しやう 八省【名】㊀大寶令の制にて、太政官の中に置かれたる、八箇の中央行政官廳、卽ち中務(ナカツカサ)省・式部省・治部省・民部省・兵部(ヒヤウブ)省・刑部(ギヤウブ)省・大藏省・宮內省。㊁はっしやうゐん(八省院)の略。はしやう。太平記「八省の諸寮」

はっ-しやう 八象【名】八卦の象。乾は天に、坤は地に、坎は水に、離は火に、艮は山に、兌は澤に、巽は風に、震は雷に當る。

はっ-しやう 八正【名】〔佛〕はっしやうだう(八正道)の略。正統記「八正とは、內典に正見・正思惟・正語・正業(シヤウゴフ)・正命(シヤウミヤウ)・正精進(シヤウジヤウジン)・正念・正定(シヤウジヤウ)、これを八正道といふ」

八正・慈悲【句】〔佛〕八正道によりて、慈悲を主とすること。盛衰記「釋迦如來は、八正慈悲の門より出でて、八相成道(ハツサウジヤウダウ)の窻に入り」

八正の幡(ハタ)【句】八正道に象(カタド)りたる、八色の幡。「八方・八楞の幢(ハタホコ)」・はちまんじん(八幡神)參照。正統記「八正の幡を立てて、八方の衆生を濟度したまふ本誓、よくよく思ひ入って仕うまつるべきにや」

はっ-しやう 八聖【名】〔佛〕㊀聲聞(シヤウモン)乘の四向・四果。㊁はっしやう(八正)に同じ。

はっ-しやう 八姓【名】天武天皇の時に定められたる八種の姓(カバネ)、卽ち眞人(マヒト)・朝臣(アソン)・宿禰・忌寸(イミキ)・道師(ミチノシ)・臣(オミ)・連(ムラジ)・稻置(イナキ)。道師以上の五姓は新制に屬し、上代に上級に位せし臣・連等を、却って下級に置きしもの。後、漸次變化して、遂に幾多の姓氏を生ずるに至れり。

はっ-しやう 八將【名】くわんとうはっしやう(關東八將)の略。

はっ-しやう 發祥【名】『詩經の商頌長發篇に「濬哲維商、長發㆓其祥㆒」とあり』天命を受けて、天子となる吉兆をあらはすこと。

はつ-じやう 發情【名】㊀情念を發すること。㊁春情を發すること。

ばっ-しやう 末將【名】まっしやう(末將)に同じ。

はっしやう-ぐん 八將軍【名】はっしやうじん(八將神)に同じ。

はっしやう-じ 八庄司【名】大和國吉野山中の八鄕(卽ち鹿瀨(カセ)・蕪坂・湯淺・阿瀨川・小原・中津河・吉野)の長。太平記「獻芹の賂は、心を奪はんがためなれば、慾心強盛の八庄司ども、これを見てければ」

はっしやう-じん 八將神【名】陰陽家にて、牛頭(ゴヅ)天王の八王子にて、四季と四土用との行疫神なりといふ、八柱の神、卽ち太歲・大將軍・太陰・歲刑(サイギヤウ)・歲破・歲殺(サイセツ)・黃幡(ワウバン)・豹尾。八將軍。

はっしやう-だう 八正道・八聖道【名】〔佛〕『梵Ārya-astāngika mārga. 聖道は、聖者(シヤウジヤ)の行くべき道の義』八種の正しき道、卽ち佛敎の實踐修行の要件たる德目の分類にて、正見(苦・集・滅・道の四諦(シタイ)の理を明かにすること)・正思惟(シヤウシユヰ)(四諦の理を思惟・分割して、眞智を增進すること)・正語(眞智によりて、口業(クゴフ)を修め、一切非理の語をなさざること)・正業(シヤウゴフ)(眞智によりて、身の一切の邪業を除くこと)・正命(シヤウミヤウ)(身・口(ク)・意の三業を淸淨にし、正法(シヤウボフ)に依りて生活すること)・正精進(シヤウジヤウジン)(眞智を發用して、涅槃(ネハン)の道を修むること)・正念(眞智によりて、邪念を去ること)・正定(シヤウヂヤウ)(眞智によりて、淸淨なる禪定に入ること)の總稱。これを三學に配すれば、初の二は慧(ヱ)に屬し、中の五は戒に屬し、終の一は定(ヂヤウ)に屬す。榮花「念佛の聲響きて、池の浪も、五根・五力・七菩提分・八聖道をのぶと聞え」

はっしやう-ち 發祥地【名】發祥の土地。

はっしやう-ゐん 八省院【名】平城・平安兩京の宮城內の正廳。天皇臨御して政を聽かれ、又、國儀・大禮を行ひたまひ、百官

登廳して庶政を行ひし所。その正殿は即ち大極殿にして、諸堂これに屬して、一區劃をなし、繞らすに廻廊を以てし、南面の外面を應天門といひ(朱雀門の北一町)、諸門の數、すべて五大門・二十通門あり。はしやう。大極院殿。朝堂院。八省。

八省院の十二堂【句】八省院の會昌門(南面の內門に)內にある昌福・含章・承光・明禮(以上東)・延休・含嘉・顯章・延祿(以上西)・暉章・康樂・修式・永寧(以上南)の十二の堂。八省院には、別に、會昌門外に東西兩朝集堂あり、併せて十四堂より成り、延喜式には、八省院の座は、昌福堂は太政大臣・左右大臣、含章堂は大納言・中納言・參議、承光堂は中務(ナカツカサ)・圖書・陰陽、明禮堂は治部・雅樂・玄蕃・諸陵、延休堂は親王、含嘉堂は彈正、顯章堂は刑部・判事、延祿堂は大藏・宮內・正親、暉章堂は少納言・左右辨官、康樂堂は民部・主計・主稅、修式堂は式部・兵部、永寧堂は大學なる由記せり。

はっしや-かく 發射角【名】〔兵〕**じやかく**(射角)に同じ。

はっ-しやく 八尺【名】「丈六・八尺」を見よ。

はっしや-くわん 發射管【名】**ぎよけいするゐらいはっしやくわん**(魚形水雷發射管)の略。

はっしや-くわやく 發射火藥【名】〔兵〕火兵の彈丸を發射するに用ふる火藥。爆發反應緩かにして、瓦斯の發生急速ならず、よく藥勢を修正するを得、その効力齊一にして、燃燒生成物は應用火器を損せざる性能を有し、裝藥に供用し得るものにて、尋常火藥・無烟火藥など、これなり。拋射藥。放射火藥。

はっしや-さんご-るゐ 八射珊瑚類【名】〔動〕**はちはうさんごるゐ**(八放珊瑚類)に同じ。

はっしや-しけん 發射試驗【名】『英Proof-firing』新造し、又は修理を加へなどしたる砲につきて、砲身の耐力を試驗するために行ふ發射。

はっしや-そくど 發射速度【名】『英Rapidity of fire』銃砲より彈丸を發射する速度。

ばっ-しゆ 罰酒・罸酒【名】勝負に負け、宴會に遲參しなどしたる者に、罰として、強ひて酒を飮ましむること、又その酒。罰杯。

はっ-しゆう 八宗【名】〔佛〕平安朝時代に我國に弘通(グツウ)せし、佛教の八箇の宗派、即ち倶舍(クシヤ)・成實(ジヤウジツ)・律・法相(ホツサウ)・三論・華嚴(ケゴン)・天台・眞言。華嚴以上を南京(ナンキヤウ)の六宗といひ、天台と眞言とを北京(ホクキヤウ)の二宗といふ。なほ、七宗・十宗・十三宗・十五宗の名あり。各條を見よ。

はつ-じゆう 發銃【名】小銃を發射すること。

はっしゆう-かうえう 八宗綱要【名】〔書〕佛教の八宗に、なほ禪・淨土の二宗を附屬せしめて、その宗名、所依(シヨエ)の經論、祖師、經論の傳譯、教判、教義などを說きたるもの。二卷。東大寺戒壇院凝然の著。

はっしゆう-けんがく 八宗兼學【名】㊀〔佛〕八宗の教義を兼ね學ぶこと。㊁奈良の東大寺にて、華嚴(ケゴン)宗を主とし、兼ねて、八宗中の他の七宗をも學び修むること。㊂博く諸種の學藝に熟達すること。

はっ-しゆつ 發出【名】發しいづること、又、發しいだすこと。

ばっ-しゆつ 拔出【名】『後漢書の荀彧傳に「況君奇謨拔出、興亡所レ係」とあり』ぬけ出でたること。すぐれてあること。

はっしゆつ-さんご-るゐ 八出珊瑚類【名】〔動〕**はちはうさんごるゐ**(八放珊瑚類)に同じ。

はづし-ゆみ 外弓【名】弦をはづしたる弓。一方の弦輪(ツルワ)を末筈(ウラハズ)に掛け、他方をば、弓に添へて垂すを法とす。

はっ-しよう 發縱【名】『漢書の蕭何傳に「高帝曰、夫獵、追二殺獸兎一者狗也、發二縱指示獸處一者人也」とあり』繩を解きて、獵犬を放つこと。

はっしよう-いも 八升芋【名】〔植〕**じやがたらいも**(馬鈴薯)を云ふ。〔但馬國の方言〕

はっしよう-まめ 八升豆・藜豆【名】〔植〕『もと八丈島より傳來して、八丈豆と呼ばれしものの轉訛なりといふ』荳(マメ)科に屬する一年生の草。莖と葉とは、刀豆(ナタマメ)に類して小く、莢は中形にして、白毛多く、中に三四箇の楕圓・淡灰色なる種子を藏し、味佳良にして、煑て食ふ。原產地は東洋の熱帶地方。てんぢくまめ。はちぢやうまめ。

はっ-しよく 發色【名】〔美〕繪畫にて、繪具の、色彩を發する具合。

はっしよ-みたま 八所御靈【名】京都の御靈社(ゴリヤウシヤ)の祭神たる吉備大臣・崇道天皇・伊豫親王・藤原夫人(伊豫親王の母)・藤原廣繼・橘逸勢(ハヤナリ)・文屋(フミヤ)宮田麿・火雷天神(即ち菅原道眞)。

はっしよみたま-まつり 八所御靈祭【名】八所御靈の祭禮。

はつ-しらうを 初白魚【名】その季節になりて、はじめて漁獲したる白魚。續猿蓑（杉風）「一驪に初白魚や雪の前」

はつ-しるし 初首・初印【名】**はつくび**(初首)に同じ。

はつしろ-ぐさ 初代草【名】正月の門松の異稱。

はっ-す 發す【動佐變自】㊀外部にあらはる。現ず。發現す。㊁はじまる。おこる。生ず。發生す。㊂出で行く。出でたつ。出發す。「都を發す」㊃酒席などにて、心浮き立ちて、歌などうたふ。和合人「酒宴は、とかく相酌では發しませぬもの故」

はっ-す 發す【動佐變他】㊀外部に出す。あらはす。發表す。「喪を發す」㊁あばく。摘發す。㊂おこす。引きおこす。はじむ。生ぜしむ。發生せしむ。「音を發す」㊃放つ。射る。發射す。枕「のり弓に、……はっしたる矢」㊄出だしやる。つかはす。發遣す。「使を發す」

はつ-す 解す【動四他】はつるるやうになす。ほぐす。はづす。ほぐす。

はづ-す 外す【動四他】㊀はづれしむ。掛け・塡(ハ)めなどしてありたる場所より取り去る。撤去す。宇治「門の關木(クワンノキ)をはづして」㊁狙(ネラヒ)を違ふ。當てそこなふ。取りそこなふ。逸す。失(シツ)す。㊂遠慮して、その場より退き避く。「席をはづす」狂言（八句連歌）「彼奴(キヤツ)めは、いつも裏道へ外すと申す。裏道へ向けて參らうず」八笑人「私(ワタシ)が飛び込むのを見ると、すぐに出る筈にしておきやしたが、大方、この舟へ落ちたもんだから、そこで、皆(ミンナ)はづしやしたらう」㊃放屁す。とりはづす。太祇「膳の時はづす遊女や納豆汁」㊄遊女が、客と交接する時、快味を感じて、淫液を出だす。〔遊里の語〕㊅病氣などにて、思はず放尿す。

ばっ-す 罰す・罸す【動佐變他】罪を糺(タダ)して責め懲す。罰を行ふ。

ぱっ-す【名】**ぱす**に同じ。

はつ-すがた 初姿【名】はじめて裝ひたる姿。夕霧阿波鳴渡「九つで戀の小使、十歲(トヲ)や十五の初姿、髱(カモジ)入れずの千髮ふさふさ」

はつ-すずり 初硯【名】**かきぞめ**(書初)に同じ。〔俳諧に用ふる語〕

はっ-すん 八寸【名】㊀一寸の八倍。㊁高さ八寸ある足附の膳。八寸膳。柳樽「八寸を四寸づつ食ふ仲の善さ」㊂上野・信濃などの國より產する、一種の厚紙。大八寸・中八寸・小八寸の種類あり。はっすんがみ。

はっすん-がみ 八寸紙【名】前條㊂に同じ。

はっすん-くぎ 八寸釘【名】極めて長く大なる釘。**ごすんくぎ**(五寸釘)參照。心生玉中「姉が耳へ八寸針を打たるるよりも、なほこたへる」

はっすん-ぜん 八寸膳【名】**はっすん**(八寸)㊁に同じ。

はつ-ずり 初刷【名】㊀或印刷物の最初の印刷、又その最初に印刷したる印刷物。㊁日刊・月刊等の出版物の、新年に入りて、はじめての印刷、又その印刷物。

ばっ-すゐ 拔萃【名】㊀『孟子の公孫丑上篇に「出二於其類一、拔二乎其萃一」、後漢書の蔡邕傳に「曾不レ能下拔二萃其群一、揚レ芳飛上レ文」とあり。萃(アツマ)れる事物の中より拔け出でたる義』**ばっくん**(拔群)に同じ。㊁『萃(アツマ)れる事物の中より拔き出す義に誤解して用ひ來れる語』すぐれたる部分を書き拔くこと、又その書き拔きたる物。ぬきがき。抄錄。摘錄。

ばっ-すゐ 拔粹 【名】 前條の誤。盛衰記「生れて異相あり、拔粹にして、聽敏なり」

はつせ 初瀨・泊瀨 【名】 ㊀〔地〕『初瀨川は、大和川の源流なるが故に、第一の瀨の義にて名づけしなるべし』**はせ**(初瀨)の古稱。蜻蛉「年頃願(グワン)あるを、いかで泊瀨にと思ひ立つを」 ㊁**はつせでら**(初瀨寺)の略。 ㊂香(カウ)の一。花やかに艶あり、新伽羅の中にありても、重重しくよく匂ふもの。 ㊃「丹生(ニフ)の初瀨」を見よ。

初瀨の寺 【句】 **はつせでら**(初瀨寺)に同じ。謠曲(玉葛)「大和路や唐土(モロコシ)までも聞ゆなる初瀨の寺に詣でつつ」

はつ-せ 初脊 【名】 馬に、はじめて荷を負はしむること。一說に、**はだせ**(肌脊)に同じと。〔古語〕續詞花「山がつのつがひの駒も歸るめり初脊に草をしがひかけつつ」

はつせ-あさくら-の-みや 泊瀨朝倉宮 【名】 **はつせのあさくらのみや**(泊瀨朝倉宮)を見よ。

はっ-せい 八姓 【名】 **はっしやう**(八姓)に同じ。

はっ-せい 八政 【名】『書經の洪範篇に出づ』民を治むるにつきての八種の要件、即ち食・貨(二者、共に民の生を養ふ所以)・祀(本に報ずる所以)・司空(土を掌りて、その居を安んずる所以)・司徒(教を掌りて、その性を成す所以)・司寇(禁を掌りて、その姦を治むる所以)・賓(諸侯を懷け、遠人を禮し、往來交際する所以)・師(即ち軍隊にて、殘を除き、暴を禁ずる所以)。

はっ-せい 發生 【名】 ㊀おこりはじまること。發現。 ㊁生ひ出づること。はえ出づること。 ㊂〔生〕『英 Development』動・植物の、卵より漸次に生育發達して、一箇の成體となること。系統發生に對して、箇體發生とも呼び、箇體發生は、系統發生の狀態を繰返すを常とす。例へば蝌蚪(オタマジヤクシ)の發生して、蛙となるまでの間に示す變化は、水陸兩棲類が、魚類より發生し來りたる徑路を繰返す類。

はっ-せい 發聲 【名】 ㊀聲を發すること、又その聲。 ㊁『禮記の月令篇に「是月也、日夜分、雷乃發聲」とあり』最初に聲を出だすこと。 ㊂歌會の時、講師の一回讀み上げたる歌を、講頌の、衆口同音に、節を附けて、吟詠唱和するに當り、講頌の中、まづ初五文字を詠じ出づること。 ㊃**おんど**(音頭)に同じ。

ばっ-せい 末世 【名】 **まっせい**(末世)に同じ。

ばっ-せい 伐性 【名】 次條を見よ。

伐性の斧 【句】『呂氏春秋の本性篇に「靡曼皓齒、鄭衞之音、務以自樂、命レ之曰二伐性之斧一」、枚乘の七發「皓齒娥眉、命曰二伐性之斧一」とあり』女色を性命を斷つ斧なりとしていふ語。「美女は命を斷つ斧」參照。

はっせい-がく 發生學 【名】〔生〕『英 Embriology』生物の箇體發生の順序を講究する學問。形態學の一分科にして、醫家にては、胎生學といふ。

はっせい-き 發聲器 【名】〔動〕『英 Vocal organs』發聲㊀の器官、即ち人類に於ける、聲帶・口腔・鼻腔などの類。

はっせい-くわつどうしやしん 發聲活動寫眞 【名】 映畫の撮影と同時に、特種の方法にて、音・聲をフイルムに影としてうつし入れ、映寫の時、映畫と共に音・聲を發す活動寫眞。

はっせい-しや 發聲者 【名】 發聲する人。おんどとり。

はっせいてき-けんきう 發生的研究 【名】 事物の發生當時の狀態を調査して、その現在の狀態に至るまでの變遷・發達の經路を明かにする研究。

はっせいてき-しんりがく 發生的心理學 【名】〔哲〕『英 Genetic psychology』精神發達の徑路及びその法則を研究する心理學。動物心理學・民族心理學など、これに屬す。

はっせい-はふ 發聲法 【名】 ㊀聲の出し方。發聲の方法。 ㊁〔音〕『英 Tone-production』唱歌に於ける聲の出し方。呼氣の出し方と、聲の作成及び共鳴に關係する喉頭・口蓋・舌・脣等の位置の取り方とを包含す。

はっ-せう 發燒 【名】〔兵〕火藥の藥片の表面もしくは一片より、火炎が、他片に傳播すること。爆藥の性質によりて、緩急の差あり。

はっせう-じん 八笑人 【名】〔書〕**はなごよみはっせうじん**(花暦八笑人)の略。

はつせ-かぜ 初瀨風・泊瀨風 【名】 大和國初瀨の地方を吹く風。飛鳥(アスカ)風・伊香保(イカホ)風の類。萬葉「泊瀨風斯く吹くよはいつまでか衣片敷きわがひとり寢む」

はつせ-がは 初瀨川・泊瀨川 【名】〔地〕『**はつせ**(初瀨)㊀を見よ』大和國にある川。源を磯城(キシ)郡上之郷(カミノガウ)村金ゲ平山に發し、西南に流れて、初瀨(ハセ)町の南を經、纒向(マキムク)山・三輪(ミワ)山の南麓を繞りて、西に折れ、三輪町を過ぎて、奈良平野に出て、西北に緩流し、佐保川以下大和盆地の諸流を集めて、大和川となる。

はつせ-がは 泊瀨川 【名】〔人〕**かせん**(歌川)に同じ。

はつ-せき 初席 【名】 藝人の、新年に出演する寄席(ヨセ)。一月十五日限にて交替し、十六日より出演するを、二の席といふ。

はっ-せき 發跡 【名】『司馬相如の封禪文に「公劉發二跡于西戎一」とあり』身を起すこと。立身の基を發すること。なりいづること。

はっ-せき 發赤 【名】〔醫〕炎症などのために、皮膚・粘膜の赤色を呈すること。

ばっ-せき 末席 【名】 **まっせき**(末席)に同じ。

ばっ-せき 罰責・罸責 【名】 その罪過を咎めて罰すること。

はっせき-たん 八石丹 【名】 古の藥の一。四時丹。和名「八石丹」

はっ-せつ 八節 【名】 二十四節の中、立春・春分・立夏・夏至・立秋・秋分・立冬・冬至の八種の節。

ばっ-せつ 末節 【名】 **まっせつ**(末節)に同じ。

はつ-ぜっく 初節句 【名】 生れてはじめての節句、即ち初幟(ハツノボリ)と初雛(ハツビナ)と。初(ハツ)の節句。

ばつぜつ-ぢごく 拔舌地獄 【名】〔佛〕『往生要集に見ゆ』口業(クゴフ)の惡を作る者の墮する地獄。鴉鷺合戰「誹謗起らねば、拔舌地獄の恐なし」

はつせ-でら 初瀨寺・泊瀨寺 【名】 **はせでら**(長谷寺)の古稱。

はつせ-の-あさくら-の-みや 泊瀨朝倉宮 【名】 雄略天皇の皇居。今の大和國磯城(キシ)郡朝倉村大字出雲、即ち長谷(ハセ)寺の南方にありしものといふ。あさくらのみや。

はつせ-の-しばがき-の-みや 泊瀨柴垣宮 【名】 欽明天皇の離宮。今の大和國磯城(キシ)郡朝倉村邊にありしなるべし。泊瀨列樹(ハツセナミキ)宮と同一所なるべしともいふ。

はつせ-の-なみき-の-みや 泊瀨列城宮 【名】 武烈天皇の皇居。今の大和國磯城(キシ)郡朝倉村大字出雲、即ち長谷(ハセ)寺の南方にありしものといふ。

ばっ-せふ 涉跋 【名】 ㊀山野を跋(フ)み越え、水を涉(ワタ)ること。「山川を跋涉す」 ㊁諸處を遍歷すること。

はつせ-べ 長谷部 【名】 雄略天皇の御名大泊瀨(オホハツセ)に因みて置きたまへる部民。記「白髮(シラカ)太子の御名代(ミナシロ)として、白髮部(シラガベ)を定めたまひ、又、長谷部の舍人(トネリ)を定めたまひ」

はつせべ-の-すめらみこと 泊瀨部天皇 【名】〔人〕**すしゅんてんわう**(崇峻天皇)の異稱。

はつせ-まうで 初瀨詣 【名】 初瀨寺に詣づること。謠曲(玉葛)「これより初瀨詣と志して候」一茶「三助が初瀨詣や春の雨」

はっ-せん 八仙 【名】 **こんろんはっせん**(崑崙八仙)を見よ。

はっ-せん 八專 【名】『日數は八日にて、上の十干と下の十二支と五行同一にて、その氣專一なるよりいふ』陰暦壬子の日より癸亥の日に至る十二日間の中より、間日(マビ)即ち癸丑・丙辰・戊午・壬戌(何れも、上の十干と下の十二支と、五行異なる日)の四日を除きたる殘り八日。一年に六度あり。壬(ミヅノエ)も子も水、甲(キノエ)も寅も木なる等、すべて、上の十干と下の十二支と五行同一なる日にて、水に屬する性多きため、この間、多くは雨降るといひ、又、嫁娶もしくは奴僕を抱へ、六畜を求め、賣買及び事を爲しはじむるに凶なりといふ。八專日。艶狩劍本地「この艾(モグサ)の威德には、……、土用・八專、かまひ無し」

照入(テリイリ)八專、降(フリ)八專【句】八專の最初の日に晴天なる時は、その後の七日間は、大抵雨天なりといふ俗說。

降入(フリイリ)八專、照(テリ)八專【句】八專の最初の日に雨降る時は、その後の七日間は、大抵晴天なりといふ俗說。

はっ-せん 八線【名】〔數〕『英 Eight lines』ろくせん(六線)を見よ。

はっ-せん 發船【名】船を出だすこと。ふなで。出帆。解纜。(著船に對して)

ばっ-せん 拔染【名】捺染術の一法。無地に染めたる布帛に、拔染劑を加へたる糊形(ノリカタ)を置き、蒸氣にて蒸し、又は適當の藥液に通じ、その部分の地色を拔き消して、模様を染め出だすこと。白色拔染、著色拔染の二種あり。ぬきぞめ。ぬきぞめはふ。拔染法(バツセンハフ)。

ばっ-せん-ざい 拔染劑【名】拔染をなす時、地色を拔き消すに用ふる藥劑。即ち酸性亞硫酸曹達・亞鉛末・水化亞硫酸曹達・鹽化第一錫・醋酸鹽・赤血鹽・黃血鹽・鹽素酸アルカリ・苛性曹達・亞硫酸加里の類。

はっ-せん-じらう 八專次郎【名】八專の二日目。

はっ-せん-にち 八專日【名】はっせん(八專)に同じ。

はっ-せん-にん 八仙人【名】〔人〕支那の八人の仙人、即ち鐵拐(テツカイ)・風僧哥・鍾離先生・呂洞賓・藍采和・懸壺・曹國舅・韓令。屢ば畫題として用ひらる。

ばっ-せん-はふ 拔染法【名】ばっせん(拔染)に同じ。

はっ-せん-びより 八專日和【名】八專八日の間の、雨天がちなること。

はっ-せん-や-こゑ 八千八聲【名】時鳥の、しきりに鳴く時の聲の數を、大よそにいふ語。千紅萬紫「かしましい八千八聲鳴かずとも三千本をたった千本」

はつ-せ-め 初瀨女・泊瀨女【名】大和國初瀨邊に住める女。はつせをとめ。萬葉「泊瀨女の造るゆふ花みよしのの瀧のみなわに咲きにけらずや」

はつ-せ-やま 初瀨山・泊瀨山【名】〔地〕はせやま(初瀨山)の古稱。萬葉「こもりくの初瀨の山は眞木立つ荒山道を」金葉「初瀨山雲井に花の咲きぬればあまの川浪立つかとぞ見る」

はつせ-をぐに 初瀨小國・泊瀨小國【名】〔地〕『を(小)は接頭語』はつせ(初瀨)㊀の邊の古稱。萬葉「こもりくの泊瀨小國に妻しあれば石は踏めどもなほぞ來にける」

はつせ-をとめ 初瀨少女・泊瀨少女【名】はつせめ(初瀨女)に同じ。萬葉「こもりくの泊瀨をとめが手に纒(マ)ける玉は亂れてありといはじやも」

はっ-そ 八祖【名】〔人〕はちそ(八祖)に同じ。

はっ-そう 發送【名】物を送り出すこと。

ばっ-そう【名】『南蠻の語といふ』二文又は三文を、餅にて重ね著けて、けしの賭博に用ふる錢。〔肥前國長崎の方言〕

はっ-そう-がかり 發送掛【名】發送の事を取扱ふ役。

はっ-そう-しや 發送者【名】發送する人。

はっ-そう-ち 發送地【名】發送する土地。

はっ-そく 八足【名】次條に同じ。

八足の机【句】「八足(ヤツアシ)の机」に同じ。

はっ-そく 八則【名】社會・國家に必要なる八種の法則、即ち祭祀・法則・廢置・祿位・賦貢・禮俗・刑賞・田役。

はっ-そく 發足【名】ほっそく(發足)に同じ。

ばっ-そく 罰則・罸則【名】刑罰又は懲罰に關する事項を定めたる規則。罰例。

ばつ-ぞく 閥族【名】門閥の一族。貴き家がら。

ばつ-ぞく 末屬【名】まつぞく(末屬)に同じ。

ばつ-ぞく 伐賊【名】賊を征伐すること。

ばつぞく-せいぢ 閥族政治【名】閥族が、權力を私して行ふ政治。

はつ-そし 初祖師【名】毎年、一月三日に、東京なる堀內(ホリノウチ)の法華寺、池上(イケガミ)の本門寺及び日本橋小傳馬(コデンマ)町の上野祖師堂にて、祖師即ち日蓮上人のために、法會を營むこと。

はつ-ぞへ 初添【名】清酒を釀造する時、添掛とて、一定の配合量に從ふ蒸米・麴及び水を、三回に分ちて仕込む作業の、第一回の仕込。第一回の添掛。

はつぞへ-しこみ 初添仕込【名】前條に同じ。

ばっ-そん 末孫【名】まっそん(末孫)に同じ。

はつ-ぞめ 初染【名】色にはじめて染むること、又その染物。はつしほぞめ。

はつ-そら 初空【名】㊀はじめてその季節らしくなりたる空。千五百番歌合「けさよりは雪げの雲のあと晴れて綠にかへる春の初空」後鳥羽院集「山川や岩根の水のいはねども嵐に知る冬の初空」㊁『次條を見よ』初春の空。俳諧新選(麻齋)「初空やげに神路山神路山」一茶「初空やさし出す獅子の頭かな」

はつ-そら-づき 初空月【名】『前條㊁を見よ』陰曆正月の異稱。藏玉集「十二月異名。正……初空月。雪はなほふる年ながら立つ春は冴えにしままの初空の月」

はつ-た 初田【名】㊀はじめて開墾せる田。新田。㊁はじめて稻を刈る田。夫木「山本の初田かりがね來鳴くなり庵もる賤(シヅ)も淚落つらん」

はっ-た【貌】はたの音便。太平記「尻目に、はったと睨みて」謠曲(攝待)「御著背長(オンキセナガ)の草摺に、はったと射留む」狂言(目近大名)「はったと忘れた事がある」天神記「一言に、はったと詰められ」

はつ-だ 發兌【名】『兌の字の音、正しくはタイ』はっかう(發行)㊁に同じ。

ばっ-た 飛蝗【名】〔動〕『はたた(螇蚸)の訛か』㊀直翅類に屬する昆蟲類にて、蝗(イナゴ)科中、蝗(イナゴ)の類を除ける多數のものの總稱。我國に產するもの、四十餘種あり。不完全變態をなし、口は咀嚼に適し、觸角は絲狀をなして短く、前翅は狹長に、後翅は、幅廣けれど、縱に疊むを得。後肢は發達して、跳躍に適し、幼蟲・成蟲共に植物の葉を食し、多數群棲して、被害多し。きちきちばった・殿樣ばった・精靈(シヤウリヤウ)ばった・車ばった・瓦ばった・土ばった等、その主要なるものとす。㊁直翅類に屬する昆蟲。體は長さ一寸六七分、色は灰褐、鞭狀なる二本の觸角を有し、その間に一箇の單眼あり。前翅は褐色にして、暗色の條紋あり、後翅は半透明なり。幼蟲は體長一寸、最初は淡黑、漸次黑褐となり、翅を缺き、軟毛を被り、天鵝絨(ビロオド)樣の光澤あり。成蟲は穀草・竹・牧草等を食害す。きちきち。きちきちばった。しやうりやうばった。はたはた。〔螇蚸〕

ばっ-た【貌】捨賣にするさま。〔東京の俚語〕「ばったに賣る」

ばっ-たあ(英 Batter)【名】野球にて、バッチングを爲す者。

はっ-たい 糗・麨【名】『臼にて碎(クダ)くによりていふかといふ』米又は麥の新穀を炒りたる上、碾きて、粉に製したるもの。こがし。〔畿內・西國の方言〕箱根靈驗躄仇討「男が、錢百、紙包(カミツツミ)、下女は、はったい、紙袋、胸一盃に、淚まで添へて遣るこそ殊勝なれ」

はっ-たい 八體【名】㊀漢字の八種の書體、即ち古文・大篆・小篆・隸書・飛白・八分(ハップン)・行書・草書。但し各種の名目には、異說あり。なほ、三體・五體・十體などの名目あり。八體書。㊁〔文〕俳句を風姿の上より分類したる八種、即ち幽玄體・有心體・無心體・悠遠體・風艷體・風情體・寓言體・風曲體。㊂〔文〕俳諧附合(ツケアヒ)の附け方の八種。人によりて、類別の法同一ならず。

はつ-だい 發題【名】しゆつだい(出題)に同じ。

ばつ-だい 末代【名】まつだい(末代)に同じ。

ばっ-たい 跋提・拔提【名】〔地〕ばったいが(跋提河)の略。謠曲(白髭)「拔提の波と消えたまふ」

はったい-いし 糗石・麨石【名】砂と鐵鑛との結合して、團塊をなし、黑褐色を呈して、中空なる石。かなつぼいし。こもちいし。

ばったい-が 跋提河・拔提河(梵 Hiraṇyavatī(醯羅拏跋提・呬剌拏伐底)の略)【名】〔地〕『有金河また金河(コンガ)と譯す』今の印度北部なるガンダク(Gandak)河の古稱。附近に釋迦及びその弟子たちの遺跡多く、佛教にては聖河として尊崇す。釋迦入滅の地たる中天竺枸尸那(クシナ)城なる沙羅雙樹も、この河の附近にて、佛教徒巡禮

の地たりき。太平記「釋尊、……遂に、滅度を、抜提河の邊、雙林樹下に唱へ給ふ」

はったい-ご 粿粉・麨粉【名】はったい(粿)を云ふ。〔筑前國の方言〕

はつ-だいし 初大師【名】その年のはじめの、大師の緣日、即ち一月二十一日。

はったい-しよ 八體書【名】はったい(八體)㊀に同じ。

はったい-ちや 粿茶・麨茶【名】粿糧(ハッタイ)を加へたる茶。浮世床「はったい茶十何盃と呑ました代錢」

はつ-たいめん 初對面【名】しよたいめん(初對面)に同じ。

はっ-たう 法堂【名】〔佛〕『大法を演說する堂の義』こうだう(講堂)に同じ。〔禪宗の語〕

はっ-たう 八倒【名】〔佛〕凡夫(ボンプ)・二乘の迷執する、八種の轉倒。その內、常樂我淨(ジャウラクガジャウ)を、凡夫の四倒とし、非常非樂非我非淨を、二乘の四倒とす。八逆。

ばっ-たう 拔刀【名】刀を、鞘より拔きはなすこと、又、拔きはなしたる刀。ぬきみ。

ばったう-じゅつ 拔刀術【名】ゐあひ(居合)に同じ。

ばったう-たい 拔刀隊【名】白刃を揮ひて、敵陣に切り込む一隊。

はつ-たか 初鷹【名】初鳥屋出(ハツトヤダシ)の鷹。箸鷹(ハシタカ)。夫木「初鷹のはつとやだしの秋風にまだきしをれぬ野らのかるかや」

はっ-たぎ【名】〔動〕ばった(飛蝗)を云ふ。〔奥州の方言〕

ばっ-たく 拔擢【名】ばってき(拔擢)を見よ。

はつ-だけ 初茸・靑頭菌【名】〔植〕擔子菌類に屬する菌類。菌傘は徑一二寸、十分成長すれば、上面中凹となり、淡紅褐色を呈し、菌柄は割合に短く、傷くれば綠色を呈す。秋季、各地の松林中に生じ、炙り又は煮て食す。あをずり。あをはけ、あをはつだけ。あをはつ。

はつだけ-がり 初茸狩【名】山野に分け入りて、初茸を探し取ること。若風俗「伏見の城山へ、初茸狩にまかるとて」

はつだけ-めし 初茸飯【名】初茸を鹽蒸(シホムシ)にしてまぜたる飯。

はったち-やくしだう 波立藥師堂【名】磐城國雙葉(フタバ)郡久之濱(ヒサノハマ)町にある臨濟宗の寺。靈王山・波立寺と號す。德一大師の開基。

はっ-たつ 發達【名】㊀發育して、完全なる形體に達すること。のびたつこと。成長。㊁事の進歩して、完全なる狀態に達すること、

はっ-たつ 八達【名】㊀道路の、八方へ通じてあること。道路の、何れの方角へも達すること。「四通・八達」㊁何事にも達すること。㊂『世說の任誕上篇と晉書の光逸傳とに、胡母輔之・謝鯤・阮放・畢卓・羊曼・桓彝・阮孚・孟光の八人を、當時の人の稱せる由、記せり』八人の宏達の士。

はった-とものり 八田知紀【名】〔人〕歌人。鹿兒島藩士。通稱は善右衞門。桃岡と號す。香川景樹の門人。熊谷直好と並び稱せらる。明治五年、宮內省八等出仕に補せられ、歌道御用掛となり、同六年歿す。年七十五。家集をしのぶ草といふ。

はつ-たび 初旅【名】はじめての旅行。盛衰記「西國の初旅なり。攝津國と播磨との境なる山の案內をば、爭(カイ)でか知るべき」柳樽「初旅は灸も仕度の數に入り」

はっ-たん 八反【名】㊀はったんがけ(八反掛)の略。㊁はったんおり(八反織)の略。

はっ-たん 發端【名】『宋史の文彦博傳に「發端爲ㇾ難」とあり』ほったん(發端)に同じ。

ばったん (佛 Battant)【名】㊀手織機用の筬框(ヲサカマチ)の一種。左右兩端に杼箱(コヒバ)あり、中央に筬を垂直に保持する設備ありて、杼が、杼道を、筬面に沿ひて進行し、一端の杼箱に達すれば、杼箱內に裝置せる杼受(ルサ)にて、進行運動停止し、次に織工は、その手にて、次の開口に、その杼を投ずる代りに、杼箱の中に在る杼受を急劇に動して、杼を一方に彈けば、杼は前回と同樣の順次を經て、他端の杼箱內に達す。織工は、又、投杼一回每に、その筬框を、織前に打附けて、緯絲を定位置に就かしめ、これを筬打また緯絲の打込といふ。杼箱は、

筬框の左右兩側に一箇づつ備ふるを、二挺杼バッタン、三箇を備ふるを、三挺バッタンといふ。㊁ジャガアド紋織機に於て、そのシリンダアを支へ、これを橫針に接觸せしめ、或は、そのシリンダアに回轉の餘地を與ふるために、これを分離せしむるに便なる裝置。

ばったん【貌】ばたんに同じ。

はったん-おり 八反織【名】『その一反が、普通の絹織物の八反の重量に等しとていふ』八丈に似て、地の厚く、縱橫の縞模樣ある、黃褐色の綾絲織。武藏國八王子等より產し、座蒲團地・蒲團地又は三尺帶地等に使用す。はったん。

はったん-がけ 八反掛【名】㊀『その一反を黃紬八反に替ふるによりていふ』八丈島より織り出だす八丈絹の一種。合絲(アハセイト)を二つに合はせ撚りたるものを用ひて、綾織とせるもの。帶地に用ふ。おびおり。はったん。一代男「淺黃八丈の八反懸」㊁『一反に要する絲の量約五十匁にて、その八反分を、一機にて織るによりていふ』陸前國仙臺より織り出だす、良質なる、一種の絹絲織。はったん。

はったん-ぎり 八反切【名】出雲國地方にて用ふる、一種の車馬鍬。

はつ-だより 初便【名】新年になりてはじめて得る音づれ。芭蕉「蓬萊に聞かばや伊勢の初だより」

はったり【貌】はッたに同じ。河原達引「はったりと忘れてゐた」義經腰越狀「ほんにあんまり嬉しさで、妹に逢はするのを、はったりと忘れた」

ばったり【貌】ばたりの音便。狂言(瓜盜人)「この綱を引けば上る。下げると下る。ばったり、ばったり」俳諧新選(可幸)「ばったりと跡の淋しき花火かな」お夏淸十郎壽連理の松「ばったり投げ込む金の包」

ぱったり【貌】ぱたりに同じ。

はつ-たれ 初垂【名】はじめて垂れたる鹽。萬葉「難波の小江(エ)の初垂(ハツタレ)をからく垂れきて」

はつ-だわら 初俵【名】〔動〕『形、俵に似た

るよりいふ』なまこ(海鼠)に同じ。〔正月一日より十五日までの間、緣喜にいふ〕

ばっち【名】ばばっちいの略。〔幼兒の語〕

ばっち【接尾】ばっかしの訛。

ぱっち 袙襠【名】『ばあちの訛』㊀絹布にて仕立てたる股引。㊁絹・木綿などにて仕立てたる長き股引。〔京都・大阪の語〕

ぱっち【接尾】ばっちに同じ。

ばっちい【名】ばばっちいの略。〔幼兒の語〕

はつ-ちぎり 初ちぎり【名】果物を、枝より、初めてちぎること、又そのちぎりたる果。加賀千代「澁かろか知らねど柿の初ちぎり」

はっち-ばう 鉢坊【名】次條の略。

はっち-ばうず 鉢坊主【名】はちばうず(鉢坊主)の音便。井筒業平河內通「愚痴・無智のはっち坊主同然の御修行」

はっち坊主の報謝米(ホウシャマイ)ほど【句】「鉢坊主の報謝米ほど」に同じ。〔諺語〕假名手本忠臣藏「足輕……はっち坊主の報謝米ほど取ってゐて」

はっち-はっち 鉢鉢【名】はっち坊主の、米錢を乞ふ時にいふ語。狂言(惡坊)「行脚の僧に鉢を入れさっしゃい。はっち、はっち」一茶「慰のはっちはっちや秋日和」

はっち-ひらき 鉢開【名】はちひらき(鉢開)の音便。

はっ-ちん 八音【名】はちいん(八音)㊀を見よ。

はっ-ちん 八珍【名】㊀八種の珍味。牛・羊・麋(トナカイ)・鹿・麕(クジカ)・豕・狗・狼なりともいひ、龍肝・鳳髓・兎胎・鯉尾・鴞炙・猩脣・熊掌・酥酪(一說に豹蹄)なりともいひ、その他、異說多し。㊁立派なる料理。さかんなる食膳。

はつ-ぢん 發陣【名】しゅつぢん(出陣)に同じ。源氏十二段長生島臺「御謀叛思召し立たまふに付き、御發陣あるべき旨」

ばっちんぐ (英 Batting)【名】野球にて、投手の投げたる球を、バットにて打つこと。

ぱっちんそん-はふ パッチンソン法 (英 Pattinson process)【名】〔化〕方鉛鑛より製したる鉛により、往往にして、これに含有せる微量の銀を得る方法。まづこの合

金を融解して、徐徐に冷却すれば、殆ど純粹の鉛は、結晶して析出するが故に、これを取除き、殘れる液體を、再三同樣に處理すれば、遂に銀に富みたる合金を得。

はっちや【感】これはと怖しく感じて發する聲。狂言（那須與一）「はっちやこはもの、はっと心に存じ」

はつ-ぢや 初茶【名】煎茶のでばな。

はつ-ちやう 初帳【名】正月より記し初むる帳面。織留「有銀(アリガネ)一萬貫目と總勘定を仕立て、正月、初帳に寫し見せける」

はっ-ちやう 八挺【名】㊀**はってう**を見よ。㊁巧者・達者などの意にて、やや卑しむ意を含めていふ語。諺「口も八挺、手も八挺」

はっ-ちやう 八丁【名】**どてはっちやう**(土手八丁)を見よ。柳樽「八丁と五町のあひだ五十間」

はっちやう-がね 八打鉦【名】**やからがね**(やから鉦)に同じ。

はっちやう-きゆう 八張弓【名】弓を、その制によりて區別したる八種、即ち式之藤(シキノトウ)一名太平弓(タイヘイキユウ)・羅形弓(ラギヤウキユウ)・相位弓(サウヰキユウ)・蛇形弓(ジヤギヤウキユウ)・四足弓(シソクキユウ)・陰陽弓(インヤウキユウ)・福藏弓(フクザウキユウ)・世平弓(セヘイキユウ)。

はっちやう-こばや 八挺小早【名】**はっちやうだて**(八挺立)に同じ。

はっちやう-じらう 八丁次郎【名】〔人〕鎌田政家(源義朝の臣)の下人。嘗て、敵の、馬上にて逃げゆくを、徒歩にて、遙か後方より、八丁の內に追ひつきて、首を取り、平治の亂に、平賴盛の、馬を走らせて逃ぐるを追ひたる事蹟にて有名なり。平治「鎌田が下人八丁次郎とて、大力の剛の者、早走(ハヤバシリ)の手利(テキキ)あり」

はっちやう-だち 八挺立【名】次條に同じ。

はっちやう-だて 八挺立【名】小早(コハヤ)の、艪の數八挺にて漕ぐもの。やかぢ。

はっちやう-どら 八丁銅鑼【名】**やからがね**(やから鉦)に同じ。

はっちやう-ぼり 八丁堀【名】〔地〕東京市京橋區、眞福寺橋畔より稻荷(イナリ)橋までの、長さ八町の運河。寬永年中、隅田河口より、漕舟用として開鑿せるものにて、その北を本八丁堀(一丁目より五丁目まで)、その南を南八丁堀(一丁目より三丁目まで。明治五年以前は、五丁目まで)といふ。本八丁堀五丁目より靈岸島に架れる橋を、高橋(タカバシ)といひ、本八丁堀より、附近なる岡崎町にかけて、江戸時代には、町奉行附屬の與力・同心居住し、市人は、これを八丁堀御役人衆又は八丁堀の旦那と稱して、畏憚せり。

八丁堀の旦那(ダンナ)【句】次條に同じ。

はっちやうぼり-おやくにんしゆう 八丁堀御役人衆【名】**はっちやうぼり**(八丁堀)を見よ。

はっちやう-みそ 八丁味噌【名】「みそ(岡崎味噌)」に同じ。

はっ-ちやく 發著・發着【名】發することと著すること。出發と到著と。

はっちやく-じよ 發著所・發着所【名】汽船などの發著する所。

はっ-ちゆう 八柱【名】『薛道衡の老子碑に「四紀維レ地、八柱承レ天」とあり』八極にありて、天を支ふといふ、想像上の柱。太平記「四維方絕、八柱再傾、可レ無レ益レ噬レ臍」

ばつ-ぢよ 末女【名】**まつぢよ**(末女)に同じ。

ばつ-ぢよ 祓除【名】穢(ケガレ)・災などをはらひ去ること。

ばつぢよ-ざいく-ぜんじん 祓除罪垢善神【名】〔佛〕十六善神の內の右方の一。身色青黑にして、裸體に雜色の袈裟を著け、目を瞋らし、口を開きて、牙は上下に出で、毛髮逆立ち、右手に五叉の棒を持ち、左手は、拳をつくりて、頂上に置ける形に造る。

ぱっちり【名】頸(エリ)などに塗る白粉(オシロイ)。

ぱっちり【貌】目つきの、はっきりとしてあるさま。

はづち-を-の-かみ 羽槌雄神【名】**あめのはづちをのかみ**(天之羽槌雄神)に同じ。

はつつ【名】鳥の飛びあがること。はふること。〔古語〕和名「翥、波都都。飛擧也」

はつ-づき 初月【名】㊀**しよげつ**(初月)㊀に同じ。㊁秋の新月。謠曲(融)「まだ初月の宵宵に、影も、姿も、少きは」芭蕉「初月やむかひに家の無き處」

はつ-づきよ 初月夜【名】㊀初月の出でたる夜。㊁秋の初月の出でたる夜。猿蓑(半殘)「粟稗とめでたくなりぬ初月夜」

はっ-つけ 磔・張附【名】**はりつけ**(磔)の音便。盛衰記「西寂を虜(イケド)りて、高縄の城に將ゐ行いて、八付(ハツツケ)にして」

はっつけ-ばしら 磔柱・張附柱【名】㊀**はりつけばしら**(磔柱)の音便。㊁次條に同じ。丹波與作「馬方仲間の恥さらし、ええ、はっつけ柱め」

はっつけ-やらう 磔野郎・張附野郎【名】『張附の刑に處せらるべき野郎の義』人を惡しざまに罵りていふ語。はっつけばしら。膝栗毛「我等が頭を足蹴にひろいだ。はっつけ野郎め。かったゐ野郎め」

はつ-つゆ 初露【名】秋になりてはじめて置く露。夫木「しぐれつる今朝の村雲ほどもなく入日にみがく山の初露」去來「初露や猪の臥す芝の起きあがり」

はって【感】はての音便。

はつ-で 初出【名】㊀はじめて出づること。㊁はじめて奉公に出づること。五十年忌歌念佛「彼奴(キヤツ)が初出に著て失せた布子があらう」

はつて-あはせ 初手合【名】はじめての手合。

はっ-てい 發程【名】**しゆっぱつ**(出發)に同じ。

ばっ-てい 末弟【名】**まってい**(末弟)に同じ。

はっ-てう【名】『八挺(ハッチヤウ)の義か』**あさって**いを云ふ。〔紀伊國熊野の方言〕

はつ-でう 發條【名】**ぜんまい**(薇)㊁に同じ。

ばってう-がさ ばってう笠【名】淺く大形に造りたる、一種の竹子笠(タケノコガサ)。聖德太子繪傳記「ばってう笠の軒深き、小家のありくに異ならず」

ばってえら（葡 Bateira）【名】**ぼおと**(端艇)に同じ。

はっ-てき 發摘【名】**てきはつ**(摘發)に同じ。

ばっ-てき 拔擢【名】『擢の字の音、正しくはタク』引拔きて擧げ用ふること。えりぬくこと。拔選。

ばってき-ほぢよ 拔擢補除【名】『擢の字の音、正しくはタク』陸軍武官の進級の方法の一。實役停年の最下期限を超えたる者より拔擢して、進級せしむること。

はって-はて【感】『**はって**を見よ』**はてさて**(はて扠)の音便。

はつ-てふ 初蝶【名】春になりてはじめて飛び來る蝶。壬二「尋ねくるはかなき羽にも匂ふらん軒端の梅の花の初蝶」猿蓑(半殘)「初蝶や骨なき身にも梅の花」

はっ-てん 八天【名】〔佛〕㊀三界の內、色(シキ)界の四禪天と、無色(ムシキ)界の四空處と。㊁**はっぱうてん**(八方天)に同じ。盛衰記「天に八天、龍に八龍あり」

はっ-てん 發展【名】㊀のびひろがること。發達。㊁女色を漁り、遊蕩に耽ること。〔俚語〕

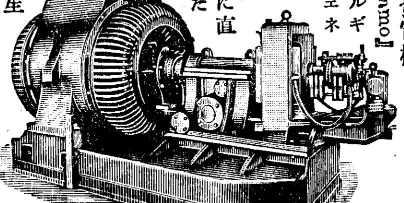
はつ-でん 發電【名】㊀〔理〕**たいでん**(帶電)に同じ。㊁電報を發すること。電報をうつこと。打電。

ばっ-てん 罰典・罸典【名】懲罰を定めたる法典。

ばってん【接】**けれども**に同じ。〔肥前國・肥後國の方言〕

はってん-か 發展家【名】女色を漁り、遊蕩に耽る人。多淫の人。〔俚語〕

はつでん-き 發電機【名】〔理〕『英 Generator 又 Dinamo』機械的エネルギイを電氣的エネルギイに變ぜしむる機械。一定の磁界の方向に直角に置かれたる導體を横に動す時は、磁電誘導によりて、その兩端に起電力發生し、その兩端を導線にて連結しおけば、電流これに通ずる原理に基づきて成れるもの。工業上、大仕掛に電流を得んとする場合に、常に用ふるものにて、種類多し。だいなも。



（はつでんき）

はっ-てんぐ 八天狗【名】山城國の、愛宕

（アタゴ）山、近江國の比良（ヒラ）山、伯耆國の大山（ダイセン）、大和國の大峯（オホミネ）、山城國の鞍馬（クラマ）山、信濃國の飯縄（イヅナ）山、豐前國の彦山（ヒコサン）、讃岐國の白峯（シラミネ）の八箇所の山に棲むといふ天狗、即ち愛宕榮術太郎・鞍馬僧正坊・比良次郎坊・飯縄三郎・大山伯耆・彦山豐前坊・大峯善鬼・白峯相撲坊。

八天狗を働く【句】忙しく、種種の事をかけもちて爲す。

はつでん-し 發電子【名】〔理〕**ああまちゆあ**を見よ。

はつでん-しつ 發電室【名】發電機を裝置し、電氣を發生せしむる室。

はつ-てんじん 初天神【名】その年のはじめの、天神の緣日、即ち一月二十五日。

はつでん-しんがう 發電信號【名】列車の運轉中、前方の線路に危險ありたる場合に、その列車の乘務員に、爆發の裝置によりて發する信號。

はつでん-しよ 發電所【名】『英 Electrical power plant』原動機と發電機とを備へて、電流發生の裝置を施したる場所。原動機の種類によりて、水力發電所・火力發電所の二種に分ち、前者は、多く山間避遠の地にあり。

はつでん-すゐりよく 發電水力【名】電流を發生せしむるに利用する水力。

はってん-せつ 發展說【名】〔哲〕**しんくわろん**（進化論）🈩に同じ。

はつでん-たい 發電體【名】〔理〕**たいでんたい**（帶電體）に同じ。

はつでん-りやくがう 發電略號【名】商店・會社などにて、電報にて取引する際、簡明を期するために、豫め公表しおく、その店名・社名又は商品の名目等の略號。電信略號。電略。

ばってら【名】**ばってえら**に同じ。

ばってら-むし バッテラ蟲【名】〔動〕**まつむむし**（松藻蟲）に同じ。

はっ-と 發途【名】**はってい**（發程）に同じ。

はっ-と 法度【名】🈩おきて。法律。法令。制度。ほっと。〔武家時代の語〕🈔おきてにて禁止すること。禁制。禁斷。狂言（鍋八撥）「その様な事は、法度ぢや」

はっ-と 八斗【名】一斗の八倍。

八斗の才【句】『南史の謝靈運傳に「天下才共有㆓一石㆒、曹子建獨得㆓八斗㆒」とあるに本づく』世にすぐれたる大才。

ばっと（英 Bat）【名】木にて、形、德利の如く、手許より次第に太く造りたる棒。ベエスボオル又はクリッケット等にて、球を打つに用ふ。

ぱっど（英 Pad）【名】〔美〕ワニスの塊を、絹に包みたるもの。彫版上、適度に熱したる版面の上に、ワニスを平に塗るに用ふ。

はっ-とう 撥鐙【名】『鐙は燈の古字にて、燈を挑（カカ）ぐるがごとく急ならず徐ならざる義とも、又、鐙は「あぶみ」にて、筆を、中指と人さし指との先端に著けて淺く持てば、撥動しやすきこと、鐙の、淺く踏めば、轉運しやすきに似たるよりいふともいふ』漢字の運筆法の一。

はっ-とう 八東【名】〔地〕因幡國の舊郡の一。明治二十九年、八上（ヤカミ）・智頭（チヅ）の二郡と併せて、八頭（ヤヅ）郡を立つ。

はつ-どう 發動【名】うごきだすこと。活動。空穗「脚病（カクビヤウ）の發どうしはべりて、久しう內にも參らず侍りつるを」

ばっ-とう 拔頭【名】**ばとう**（拔頭）に同じ。

はつどう-き 發動機【名】🈩〔理〕**げんどうき**（原動機）に同じ。🈔〔理〕**でんきはつどうき**（電氣發動機）の略。🈪蒸氣を用ひざる推進用機關。

はつどうき-せん 發動機船【名】〔理〕『英 Motor ship 又 Motor boat』發動機🈪を備へ、その動力によりて、推進機を廻轉せしむる小形の船。もおたあぼおと。

はつどうきせん-きくわんし 發動機船機關士【名】次條の略。

はつどうきせん-さんとうきくわんし 發動機船三等機關士【名】湖川港內のみを航行する發動機船に限りて、船舶職員となることを得べき三等機關士。

はつどうきせんさんとうきくわんし-しけん 發動機船三等機關士試驗【名】及第者が發動機船三等機關士たるを得べき試驗。年齡滿二十年以上にて、一箇年以上

發動機船に乘り組み、機關運轉に從事したる者は、この試驗を受くるを得。

はっと-がき 法度書【名】法度の箇條がき。さしとめがき。敎條。

はつ-とがり 初鳥狩【名】**こたかがり**（小鷹狩）に同じ。〔古語〕萬葉「いはせ野に秋萩しぬぎ馬なめて初鷹狩（ハツトガリ）だにせでや別れむ」

はっ-とく 八德【名】🈩仁・義・禮・智・信・忠・孝・悌の八種の德。🈔『その制、十德に似たるによりていふとぞ』**ごうふく**（胴服）に同じ。時慶卿記「紹巴・昌叱は禪衣也。玄仍は八德也」🈪〔佛〕**はっくどく**（八功德）に同じ。

八德の水【句】〔佛〕**はっくどくすゐ**（八功德水）に同じ。盛衰記「八德の水は、寶國の金砂池に湛へたり」

はつ-どこ 初床【名】**みづあげ**（水揚）🈔に同じ。〔遊里の語〕好色伊勢物語「初床の名も迷惑の事ながら賣らるるものと思ひけるかな」（頭書に「初床、一名、水あげ。禿（カブロ）の內より、大夫・天神、それぞれの女郎につきて、この里のわけより始めて、三味・小歌、その他の藝、大方なれば、器量と利發の程程によりて、初めて女郎の名を賣る。これを買初める大臣を、水あげするとも、又、初床ともいへり」とあり）

はつ-とざん 初登山【名】その年はじめて、又は生れてはじめて、山に登ること。はつやま。はつのぼり。

はっとせ-をどり はっとせ踊【名】陸前國仙臺地方に行はるる、一種の女の手踊。歌の終ごとに「はっとせ」といふ拍子言葉を添ふ。

はっと-ば 法度場・法度場【名】**しおきば**（仕置場）に同じ。炭俵（野坡）「法度場の垣より內は菫かな」

はっと-ぴん（英 Hat-pin）【名】女の帽子を抑ふるために、その帽子を貫きて、頭髮に插すピン。

はっと-むぎ はっと麥【名】〔植〕**はとむぎ**（鳩麥）に同じ。

はっ-とん 八音【名】〔佛〕**はちおん**（八音）🈔を見よ。

はつ-とやだし 初鳥屋出【名】鷹の、夏の間に脫けたる羽の、秋になりて出揃ひたるを見て、はじめて鳥屋より出だすこと。はじめての鳥屋出。**はつたか**（初鷹）參照。夫木「初鷹のはつとやだしの秋風にまだきしをれぬ野べの刈萱」

はつ-とら 初寅【名】🈩その月の初の寅の日。🈔正月の初の寅の日。🈪次條の略。

はつとら-まゐり 初寅參【名】初寅の日に、京都にては鞍馬寺に、東京にては、芝區金杉二丁目の正傳寺、牛込區神樂坂上の善國寺、品川番場の連長寺等の毘沙門天に詣づること。鞍馬にては、この日、土民、福良木（フクラギ）にて鑰を作り、福德を搔取るといふ意にて、福搔（フクカキ）と稱へて賣る。又、多聞天（タモンテン）の使はしめなりとて、生きたる蜈蚣（ムカデ）を賣り、これをお福蜈蚣といひ、鞍馬山中にて、雞を飼はざるも、鷄は蜈蚣を好み食ふが故なりといふ。又、東京にては、百足小判（ムカデコバン）と守札とを出す。はつとら。俗曲（初寅參）「年增（トシマ）ざかりの初寅參、忍ぶ頭巾の、つい見しられて」

はつ-とり 初鳥【名】その季節に、はじめて鳴く鳥。爲尹千首「何となく寐覺の枕ものさびし秋この頃の初鳥の聲」

はつ-とり 初鷄・初雞【名】🈩元朝にはじめて鳴く鷄。🈔**いちばんどり**（一番鷄）に同じ。

はつ-とり 初酉【名】十一月の初の酉の日、又その日の酉の町。

はっ-とり 服部【名】**はっとりたばこ**（服部烟草）の略。伊賀越道中雙六「煙草、……、服部か、國分（コクブ）か」

はつ-とりがり 初鳥狩【名】**はつとがり**（初鳥狩）を見よ。

はっとり-げんけう 服部元喬【名】〔人〕**はっとりなんくわく**（服部南郭）を見よ。

はっとり-たばこ 服部烟草・服部煙草【名】攝津國島上（シマガミ）郡服部村より產したる烟草。淀鯉出世瀧德「はっとり烟草入・烟管の餘計あるならば」

はっとり-なんくわく 服部南郭【名】〔人〕儒者。名は元喬、字は子遷、通稱は小右衞門。京都の人。物徂徠の門に入りて、專ら

古文辭を修め、詩文を善くす。寶曆九年歿す。年七十七。自ら修して、服(ク)元喬ともいへり。

はっとり-らんせつ 服部嵐雪【名】〔人〕『嵐雪の名は、新勅撰和歌集の「花さそふ嵐の庭の雪ならでふりゆく者はわが身なりけり」の語を取りたるものといふ』俳人。幼名は久馬助(一說に久米之助)、通稱は彥兵衞。淡路國の人。芭蕉に學び、其角と並び稱せられ、雪中庵と號す。雪門の祖。寶永四年歿す。年五十四。

は-づな 端綱・絆繩・縶【名】『張綱(ハリツナ)の略といふ』馬の口に著けて牽く綱。

はつ-なき 初啼・初鳴【名】鳥・蟲などの、生れてはじめて、又はその季節になりてはじめて鳴くこと、又その鳴聲。はつごゑ。躬恆集「初聲を我に聞かせよ時鳥まづ初鳴を我に聞かせよ」

はつ-なぎ 初凪【名】正月元旦の凪。虛栗「初凪やしらけの島の空(ツウ)せ椎」

はつな-ぐさ 初名草【名】〔植〕かんばい(寒梅)の異稱。〔古語〕藏玉集「初名草。冬梅。萬代に咲ける中にも初名草春を待たでや花を見るらん」

はつ-なし 初梨【名】はじめて採收して、市場に出したる梨の實。一茶「初梨の天から降った社壇かな」

はつ-なへ 初苗【名】はじめて採り又は植うる苗。夫木「この程は民の草葉の初苗を取りもたゆまず幾日經ぬらん」

ばつ-なん 末男【名】まつなん(末男)に同じ。

ばつなんだ 跋難陀(梵 Upananda)【名】〔佛〕はちだいりゆうわう(八大龍王)を見よ。榮花「釋迦佛の、摩耶の右脇より生れさせたまひて、難陀・跋難陀二つの龍の、空よりして、湯あびし奉りけるより始めて」

ばつなんだ-りゆうわう 跋難陀龍王【名】〔佛〕前條に同じ。謠曲(春日龍神)「すは八大龍王よ。難陀龍王・跋難陀龍王」

はつ-なり 初生【名】果實の、はじめて生(ナ)ること、又その果實。御湯殿上日記「あこだ參る。はつなりめでたし」

はつ-に 初荷【名】新年又はその季節にははじめて運び出だす商品の荷物。新年のは、一月二日、裝飾を施したる荷車に積み、新しき法被(ハッピ)を纏ひなどしたる者附き添ひて、景氣よく市中を引き廻る。

はつ-に 初土【名】『はつえ(初枝)を見よ』上方に在りて、はじめて發掘する土。〔古語〕記「はつにははだ赤らけみ、しはにはにぐろき故」

はつに-うま 初荷馬【名】初荷の車を挽く馬。

はつ-にじ 初虹【名】その年にはじめてあらはれたる虹。

ばつ-にち 伐日【名】陰陽家にて、下より上を相剋すといふ日、即ち甲申・丙子・戊寅・庚午・壬辰・壬戌・乙酉・丁亥・己卯・辛巳・癸未・癸丑の日。鴉鷺合戰「道虛(コクウ)・往亡(ワウマウ)・婦亡・伐日・六蛇・七鳥・八龍・九虎・十惡日、此は萬に凶なり」

はつ-ね 初子【名】㊀その月の初の子の日。㊁正月の初の子の日。古、朝廷にては、この日、群臣に宴を賜ひ、野に行幸したまひ、臣庶の間には、野外に遊び、小松を引き、若菜を摘む等の事行はれたり。たまはき(玉箒)㊁參照。萬葉「初春の初子の今日の玉はき手に取るからにゆらぐ玉の緖」㊂十一月の初の子の日。この日、大黑天の祭行はる。

初子の忌(イミ)【句】ねいみ(子忌)に同じ。夫木「春立てば初子の忌に旅寢して神の下なる小松をぞ引く」

初子の小松【句】「子(ネ)の日の松」に同じ。堀太「野べに引く初子の小松更に植ゑて今日を千とせの始めと思はん」

初子の日【句】初子の當日。公任集「又の年二月初子の日」

初子の松【句】「初子の小松」に同じ。堀太「生ひそむる初子の松を引きつれば今日こそ千代の始なりけれ」

はつ-ね 初音【名】はつこゑ(初聲)に同じ。金葉「聞くたびに珍しければ郭公いつも初音の心地こそすれ」

初音の里【名】〔地〕根岸㊀の雅稱。もと上野法親王宮の京都產の鶯を放たれしより起れる名にて、弘化の頃までは、その記念の梅樹三株ありきといふ。

初音の僧正【句】〔人〕興福寺の別當。永緣(永圓とも書き、天治二年寂す)の、その詠歌によりて得たる綽號。平家「花林院の僧正永緣は、……優にやさしき人にておはしけり。ある時、子規の鳴くを聞きて、聞くたびに珍しければ子規いつも初音の心地こそすれといふ歌を詠みてこそ、初音の僧正といはれたまひけれ」

はつね-だな 初音棚【名】違棚の一種。

はつ-ねつ 發熱【名】病氣のために、體溫の亢進すること。熱の出づること。ほつねつ。

はつねつ-はんおう 發熱反應【名】〔化〕『英 Exothermal reaction. 應は、反の字の韻に引かれて、ノウと發音す』變化に際して、熱を發生する化學反應。例へば、苛性加里と硫酸との反應などの類。

はつね-どうしん 初子燈心【名】十一月の初子の日に、大黑天に供ふる燈心。

はつね-なます 初音鱠【名】うぐひすのはつねなます(鶯初音鱠)の略。

はつね-にんぎやう 初音人形【名】腹部に笛を仕掛け、これを押せば、啼聲を出だすやうに造りたる人形。

ばつ-ねん 末年【名】まつねん(末年)に同じ。

はつ-のせっく 初節句【名】はつぜっく(初節句)に同じ。

はつ-のぼり 初幟【名】㊀男の兒の初節句に立つる幟。(初雛(ハツビナ)に對して) ㊁男の兒の初節句の祝。(初雛(ハツビナ)に對して)

はつ-のぼり 初上【名】㊀はじめての上京。(初下(ハツクダリ)に對して)〔初登〕㊁新年に、川などを溯ること。俗謠(越中國の)「船はあたらし、船頭衆は若いし、川は新川(シンカハ)、初のぼり」㊂はつとざん(初登山)に同じ。〔初登〕

はつ-のみ 初飲【名】あらくち(新口)に同じ。

はつ-のり 初乘【名】のりぞめ(乘初)に同じ。

は-っぱ【名】は(葉)に同じ。〔幼兒の語〕

はっ-ぱ 發破【名】『英 Blasting』岩石に鑽孔を穿ちて、爆藥を裝塡し、これを爆破する作業。

はっ-ぱ 八八【數】八に八を乘じたる數、即ち六十四。

ぱっ-ぱ(羅 Papa)【名】『父の義』羅馬の法王。

ぱっ-ぱ【名】めし(飯)を云ふ。〔上總國・下總國の小供の語〕

ぱっ-ぱ 烟草・煙草【名】『次條㊃の轉義』㊀たばこ(煙草)を云ふ。〔幼兒の語〕㊁きせる(烟管)を云ふ。〔幼兒の語〕

ぱっ-ぱ【貌】㊀美しく光るさま。一代男「ぱっぱの大小落指(オトシザシ)」夕霧阿波鳴渡「ぱっぱの鮫鞘・象眼鐔」㊁ひらめき散り、又飛びはぬるさま。㊂頓著なく行ひ、又惜しげもなく費すさま。浮世風呂「金銀……、ぱっぱと、湯水の樣に使っては」㊃烟草(タバコ)を吸ふさま。すっぱすっぱ。

はつ-ばい 發賣【名】賣り出だすこと。うりだし。

ばっ-ぱい 罰杯・罸杯【名】宴席にて、勝負事に負けなどしたる人に、酒を強ふること。罰酒。

はつばい-きんし 發賣禁止【名】印刷物の、風俗を壞亂し、又は治安を妨害する虞ある時など、その發賣を禁止すること。

はっ-ぱう 發泡【名】はっぱうざい(發泡劑)に同じ。

はっ-ぱう 八方【名】㊀東西南北と、その四隅、即ち東北・西北・東南・西南と。四方と四隅と。八方位。しはう(四方)・ろくはう(六方)・じっぱう(十方)・じふにはう(十二方)參照。㊁はうばう。諸方。諸方面。周圍。㊂はちけん(八間)に同じ。㊃御花獨樂(オハナゴマ)に用ふる獨樂。八面に春・夏・秋・冬・花・鳥・風月の八文字を書きたるもの。

八方切死(キリジニ)【句】敵軍の中に駈け入り、八方に轉戰して切死すること。井筒業平河內通「よし負けたらばそれまで、八方切死」

八方・八楞(ハチリヤウ)の幢(ハタホコ)【句】〔佛〕『觀無量壽經に「下有二金剛七寶幢一擎二瑠璃地一、其幢八方八楞具足、一一方面百寶所レ成」とあり。楞は稜と同字にて、四方の木の義。八方・八楞は阿彌陀の三昧耶形(サマヤギヤウ)にて、阿彌陀と觀音とは同體

なりとし、これらの諸尊を蓮華部といひ、蓮華を、その三昧耶形とするも、密教に於ける八葉（ハチエフ）の蓮華の義に依り、觀音の淨土補陀落仙（フダラクセン）は八角形をなすと說き、八幡を阿彌陀の三昧耶形と說く等、皆、同義に基づく。はっかくだう（八角堂）・はちまんじん（八幡神）・「八正（ハツシヤウ）の幡」參照』「八角の幢」に同じ。

八方微塵（ミヂン）【句】八方の敵を、微塵に討ち散らすこと。吉野都女楠「八方微塵に討ち立つれば」

はっぱう 發砲【名】大砲又は鐵砲をうつこと。大砲又は小銃の發射。

はっぱうあんどん 八方行燈【名】はちけん（八間）に同じ。桂川連理柵「ともす八方行燈の灯、佛壇のみあかし」

はっぱうがしら 八方頭【名】八方に頭ある金屬製の龍。兜の飾に附く。

はっぱうころび 八方轉【名】『何れの方向にもころがるによりていふ』眞珠の、全く球形なるもの。

はっぱうざい 發泡劑【名】身體の局所を激しく刺戟して、引赤せしめ、且つ水泡を生ぜしめて、疼痛を去るに用ふる藥劑。カンタリス製劑、番椒及びその製劑などを用ひ、肋膜炎・腹膜炎・肺炎・神經痛等に效あり。はっぱう。はつぽ。發泡藥。

はっぱうじろ 八方白【名】兜の鉢の前後・左右及びその中間に、金銀又は白鑞（シロ）を張りたるもの。一說に、**にはうじろ**（二方白）に同じと。

はっぱうでん 八方天【名】〔佛〕東方なる帝釋（タイシヤク）天、東北方なる伊舍那（イザナ）天、南方なる閻魔天、東南方なる火天、西方なる水天、西南方なる羅刹（ラセツ）天、北方なる毘沙門天、西北方なる風天の總稱。八天。

はっぱうな 八方菜【名】慈姑（クワイ）・人參・栗・長芋・牛蒡・椎茸・麸などの八種を細かに切りて、味をつけ置き、別に豆腐の水をしぼり、饂飩粉を少し入れて、前に用意せる八品を包み、油にて揚げ、昆布だし醬油にて加減し、薄葛をかけて、卸山葵（オロシワサビ）を添へたる食品。

はっぱうにらみ 八方睨【名】㊀八方に目を配りて、注意を怠らぬこと。㊁畫像などの、何れの方より見ても、睨み居るやうに見ゆること、又その畫像など。

はっぱうばらひ 八方拂【名】八方を切り拂ふこと。謠曲（烏帽子折）「熊坂も、大太刀遣の曲者（クセモノ）なれば、さそくを遣って、十方切・八方拂や、腰車、破圦（ハニ）の返（カヘシ）、風（カザ）まくり」

はっぱうびじん 八方美人【名】㊀何れの方向より見ても、缺點なき美人。㊁何人に對しても、如才なくあしらふ人。

はっぱうふさがり 八方塞【名】㊀『ふさがり（塞）㊁を見よ』陰陽家にて、何れの方角に對しても、事を爲せば、不吉の結果を生ずといふこと。㊁誰に對しても、信用を失ひて、途方に暮るること。

はっぱうむぐう 八方無隅【名】八方の隅隅、殘る處なくすること。松風村雨束帶鑑「大手をひろげ、此處彼處、八方無隅に追ひまはす」平家女護島「虛空（コクウ）を相手に八方無隅、受けつ流しつ切り合ひしが」

はっぱうむげ 八方無礙・八方無碍【名】次條に同じ。

はっぱうむじん 八方無盡【名】**じゅうわうむじん**（縱横無盡）に同じ。國姓爺「太刀差しかざし、群る中へ割って入り、八方無盡に割り立て割り立て撫で捲る」

はっぱうめん 八方面【名】㊀八つの方面。多くの方面。㊁**はうよう**（方円）に同じ。

はっぱうやく 發泡藥【名】**はっぱうざい**（發泡劑）に同じ。

はっぱうよし 八方好【名】何れの點にも醜く惡しき所なきこと、又その物。二代男「難波女に、ははの足らはぬ所なしとて、八方好といふ者あり」

はっぱうゐ 八方位【名】**はっぱう**（八方）㊀に同じ。

はつはぎ 初萩【名】秋にはじめて花の咲きたる萩。風雅「わが心また變らずよ初萩の下葉にすがる露ばかりだに」

はっぱく 八白【名】九星の一。土星に配し、本位は東北即ち艮。この星に生るる人は、表面は溫順なるやうなれども、性剛にして、極めて短氣なるために、事を破ることあり、又、氣迷を生じやすしといふ。

はつはつ 端端【貌】㊀極めてわづかなるさま。かすか。はつか。萬葉「はつはつに人をあひ見ていかならむ何れの日にか又よそに見む」㊁辛うじて、その程度に届くさま。辛うじて達せんとする狀。

はつはつ 潑潑・撥撥【貌】『邵說の筌蹄賦に「魚潑潑、以隨レ波樂只」、元稹の汎渭賦に「魚樂兮泉底鬐撥撥兮尾溦溦」とあり』**はつらつ**（潑剌）に同じ。

はっはっ【貌】氣遣ひ危ぶむさま。浮世風呂「とつさんがじれ出しなさるだらうと思って、はっはっとしてゐるに」

ぱっぱっ【貌】ぱっぱ㊁㊂に同じ。

はつはつし 初初し【形二】**うひうひし**（初初し）に同じ。浮世風呂「又、初初しく泣言（ナキゴト）か」

はつはな 初花【名】㊀その季節の初に咲く花。初咲（ハツザキ）の花。萬葉「來て見べき人もあらなくに吾家（ワギヘ）なる梅の初花散りぬともよし」古今「谷風に融くる氷のひま毎に打ち出づる浪や春の初花」㊁その草木にはじめて咲く花。國姓爺「雨に萎れし初花に、目鼻を附けし如くなり」㊂**はつざくら**（初櫻）に同じ。㊃十七八歳頃の少女の譬。曾根崎心中「十八九なる顔世花（カホヨバナ）、今咲きだしの初花に」㊄**はつやく**（初役）㊂に同じ。㊅名物の茶入の一。唐物にて、三河國額田（ヌカ）郡岡崎郷なる含蓄、これを徳川家康に獻じて、朱印狀を得たり。

はつはなざくら 初花櫻【名】春にはじめて咲きたる花櫻。隣女集「咲きそむる初花櫻なべて世の人にふるさぬ色を見せばや」一茶「袖たけの初花櫻咲きにけり」

はつはなすすき 初花薄【名】**はつをばな**（初尾花）に同じ。謠曲（祇王）「初花薄露重み」

はつはなぞめ 初花染【名】紅花（ベニ）の初花にて染むること、又その染めたる物。古今「紅のはつ花染の色深く思ひし心われ忘れめや」拾遺「袖觸れば色までうつる紅の初花染に咲ける梅が枝」

はっぱふ 八法【名】**えいじはっぱふ**（永字八法）を見よ。

はっぱへいち【名】愚かなること、又その人。〔筑前國博多の俚語〕

はっぱん 發煩【名】熱を起すこと。ほとぼり。

はつはる 初春【名】春のはじめ。新春。春初。初春（シヨシユン）。（陰暦にては、新年と同義）萬葉「あたらしき年の始のはつ春の今日降る雪のいやしけよごと」

はつはるづき 初春月【名】陰暦正月の異稱。藏玉集「十二月異名。正、初春月。霞立つ初春月の朝日影のどけき色や空に見ゆらん」

はつひ 初日【名】元日の朝日。はつひので。俳家奇人談（一晶）「初日かな光り輝く鏡山」和合人「とりあへませず、初日の心得にて、斯樣年始の支度で上（アガ）りました」

はっぴ 法被【名】㊀禪院にて、椅子を覆ひ包む被布。一說には、佛前の斗帳・垂衣（タレギヌ）などの類なりと。庭訓往來「法被・打敷・水引」㊁武家にて、中間（チユウゲン）に、その家の紋又は特別の標（シルシ）を附けて著用せしめし半纏。〔半被〕㊂能（ノウ）の裝束の一。袷にて、胸紐なきこと狩衣に似たれど、袖に露なく、且つ襟にも相違ありて、武將の甲冑を著けたるに擬する際、又は鬼畜の類の表衣として使用す。㊃**しるしばんてん**（印絆纏）に同じ。〔半被〕

はつひかげ 初日影【名】初日のかげ。炭俵（利牛）「初日影われ莖立と摘まればや」

はつびな 初雛【名】㊀女の兒の初節句に飾る雛人形。（初幟（ハツノボリ）に對して）㊁女の兒の初節句。（初幟（ハツノボリ）に對して）

はつひので 初日出【名】元旦の日の出。はつひ。

はっぴんし 八品詞【名】〔語〕單語を、八種の品詞に分別したるもの。もと希臘のヂオニシウス、トラクス（Dionisius Thrax）が自國語を八種に分ちしに基づき、羅甸語の分類にも、多少の變更を加へて應用し、歐洲諸國の文法家、また多く、これに倣ひ、我國にても、名詞・動詞・形容詞・助動

詞・副詞・接續詞・助詞(てにをは)・感動詞の八種に分ちたり。

はっぴん-しやう 八品商【名】德川幕府が、贓品を取締る必要上、特別の規定を設けたる、八種の商業、即ち古著屋・古著買・古鐵(フルガネ)屋・古鐵買・古道具屋・小道具屋・唐物屋・質屋。

はっぴん-しやうばいにん 八品商賣人【名】八品商を營む人。

はつ-びやう 發病【名】病氣をおこすこと。病の發生。ほつびやう。

はっ-ぴやく 八百【數】㊀百の八倍。㊁物事の數の多き形容にいふ語。八百八(ハッピヤクヤ)。夕霧阿波鳴渡「頭痛八百」河原達引「ひとへに御蔭と、禮の八百」續膝栗毛「小言(コゴト)八百」

八百の主(ヌシ)【句】「千年の田地、八百の主」を見よ。

はっぴやく-びくに 八百比丘尼【名】若狹國小濱(ヲバマ)に比丘尼の多きをいふ語。

はっぴやく-や 八百八【數】㊀百の八倍と八つと。㊁はっぴやく(八百)㊁に同じ。

はっぴやくや-かは 八百八川【名】近江國の琵琶湖に注ぐ川の多きをいふ語。風俗文選(湖水賦)「八百八川、湖水を圍む」

はっぴやくや-ぎつね 八百八狐【名】多くの狐。本朝十種香「誠や、當國諏訪明神は、狐を以てつかはしめと聞きつるが、明神の身體に等しき兜なれば、八百八狐附添うて守護せる奇瑞に、疑なし」

はっぴやくや-ごけ 八百八後家【名】『ごけ(後家)㊃を見よ』越後國新潟に、一種の私娼の多きをいふ語。四十八(シジフヤ)後家。

はっぴやくや-しな 八百八品【名】種類の多きをいふ語。織留「渡世は八百八品といふに、醫者は、その中(チウ)の選屑(ヨリクヅ)なるべし」

はっぴやくや-しま 八百八島・八百八嶋【名】陸奧國松島の島島の多きをいふ語。

はっぴやくや-しやうばい 八百八商賣【名】商賣の種類の多きをいふ語。

はっぴやくや-たに 八百八谷【名】比叡山に谷の多きをいふ語。俳諧六日飛脚「非寺里坊主の竹の葉がくれ(友雪)」（といふ句に）住みすつる八百八谷虎臥して(遠舟)」

はっぴやくや-ちやう 八百八町【名】江戸市中に町(マチ)の多きをいふ語。

はっぴやくや-ねぎ 八百八禰宜【名】大和國奈良の春日(カスガ)神社の禰宜の數の多きをいふ語。一代男「春日の里に、……、罷り出でたるは、このあたりに八百八禰宜の子ども」

ばっ-ぴよう 伐氷・伐冰【名】次條を見よ。

伐冰の家【句】『大學に「伐冰之家、不レ畜二牛羊一」とあり。喪祭の時に、氷を用ひて浴せしむる制なりしよりいふ』古、支那にて、卿大夫以上の貴き家。

はつ-ぶ 八部【名】はちぶ(八部)に同じ。紀「丈六繡像、俠侍八部(ハップ)等、四十六像」

はっ-ぷ 髮膚【名】髮の毛と、皮膚と。

はっ-ぷ 八不【名】〔佛〕三論宗にて、法界萬有に對する一切の思想的見地を統括して、不生(フシヤウ)・不滅・不去(コフ)・不來・不一・不異・不斷・不常の八としたるもの。生・滅・斷・常は時間的に見たる存在變化の觀念、去・來・一・異は空間的に見たる動靜・一多の觀念と見るべきものなり。盛衰記「八不の湛水、底澄めり」

はっ-ぷ 發布【名】こうふ(公布)に同じ。

ばっ-ぷ 巴布・琶布(蘭 Pap)【名】〔醫〕ばっぷざい(琶布劑)に同じ。

はっ-ぷう 八風【名】㊀『淮南子の地形訓に見ゆ』八種の風、即ち炎風(東北)・條風(東)・景風(東南)・巨風(南)・涼風(西南)・飂風(西)・麗風(西北)・寒風(北)。㊁〔佛〕『世間の愛する所、憎む所、能く人心を煽動して、正法(シヤウボフ)に安住する能はざらしむるによりて、風といふ』はっぽふ(八法)に同じ。

はっ-ぷくでん 八福田【名】〔佛〕『ふくでん(福田)を見よ』福德の本となる、八種のもの、即ち佛・聖人(シヤウニン)・僧・和尙・阿闍梨(アジヤリ)・父・母・病人の八つの者を救濟することとも、曠路に義井を設くること、水路橋に梁を架すること、險隘を平かにすること、父母に孝養すること、三寶を恭敬(クギヤウ)すること、病人に給事すること、貧窮を救濟すること、無遮會(ムシヤヱ)を設くることともいひ、その他、種種の說あり。

ばっぷ-ざい 巴布劑・琶布劑(蘭 Pap)【名】大麥・小麥の粗粉・麪包粉・亞麻仁末又は粗く刻みたる莨菪葉・菲沃斯草(ヒヨスグサ)・罌粟殼などに、液體を注ぎて、粥狀となし、紗布等に包みて、皮膚の局部を罨法(アンパフ)するに用ふるもの。ばっぷ。

はつ-ぶたい 初舞臺【名】㊀生來初めて舞臺に上り、又その舞臺に初めて上りて、芝居・能(ノウ)などの技を演ずること。㊁生來初めて、公衆の前に出でて、その技を行ふこと。

はつ-ふどう 初不動【名】その年の最初の、不動の緣日、即ち正月二十八日。

はっぷ-ちゆうだう 八不中道【名】〔佛〕法界の萬有に八不の理を觀じ、生(シヤウ)と滅、斷と常(ジヤウ)等の偏見を脫落して、自ら中道に契(カナ)ふこと。三論宗の根本義とす。

はつ-ぶな 初鮒【名】その年に、はじめて捕りて賣る鮒。

はつ-ぶみ 初文【名】はじめての文(フミ)。その年の最初の手紙。浮世風呂「松葉のしの附いた初文が來たらう」

はっ-ぷん 八分【名】『八の字の分散したるが如き形に書くより名づくとも、又、篆書二分、隸書八分を取りて混用したる書體の義なりともいふ』漢字の書體の一。支那秦の頃に始りたるもの。八分書。

はっ-ぷん 發憤・發奮【名】いきどほりを發すること。目的を達せんとて、心を奮ひ起すこと。奮發。

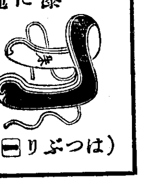
ばつ-ぶん 跋文【名】ばつ(跋)に同じ。

ばつ-ぶん 罰文・罸文【名】罰を記載せる文書。

はっぷん-しよ 八分書【名】はっぷん(八分)に同じ。

はつ-ふゆ 初冬【名】しよとう(初冬)に同じ。蕪村「初冬や日和になりし京はづれ」

は-つぶり 半首・半頭【名】㊀鐵面(カナメン)の一種。兜の下に著けて、內兜を射られざるために、頭より兩頰の邊にかけて被ふに用ふる、鐵製の具。又、半頰と倂せ著けて、面頰(メンボホ)の用に供し、又、輕裝の時、烏帽子の上に著けて、兜に代へなどもしたり。黑漆にて塗り、紐にて、後の頭に結びて用ひ、又、覆輪を施し、或は染革にて包みたるもあり。保元「御曹子の半首に、からりと當って」㊁額金(ヒタヒガネ)を入れたる鉢卷。題鐵。



(はつぶり㊀)

はつ-ぶろ 初風呂【名】正月二日の入湯。はつゆ。

はっ-ぺう 八表【名】はっくわう(八紘)に同じ。

はっ-ぺう 發表【名】世の中にあらはし示すこと。公示。

ばつ-べう 拔錨【名】船の、錨を上げて、港を出づること。(投錨に對して)

はつ-ほ 初穗【名】㊀その年はじめて實のりたる稻穗。〔早穗〕夫木「風渡る野田の初穗の打ち靡きそよぐにつけて秋ぞ知らるる」織留「麥秋(ムギアキ)・綿時、新米の初穗とて呉れければ」㊁その年はじめて出でたる穗。〔早穗〕夫木「かれねただ初穗のすすきたまくらに結ばば露の散りもこそすれ」㊂穀物・野菜・果實などの、その年はじめて出來たるもの。うはぶん。はつもの。〔早穗〕㊃收穫したる穀物の、先づ神佛に奉るもの。〔早穗・最花〕祝詞「初穗は甕(ミカ)の閉(ヘ)高知り、甕の腹滿て雙(ナラ)べて」㊄神佛に奉る金銀・米錢など。〔早穗・最花〕源氏「蕨・つくづくし、をかしき籠(コ)に入れて、これはわらはべのくやうじて侍るはつほなりとて奉れり」三代實錄「仍所二鑄作一之早穗二十文乎左馬助從五位下多治眞人藤吉乎差使天」㊅未だ食ひ試みざる食物、又、最初に味を食ひ試むること。〔最花〕㊆少しばかりの物。

初穗の枕【句】薄の初穗を入れたる枕。續後拾遺「花すすき初穗の枕そのままにうらがるるまで訪はぬ君かな」

はつ-ぼ 發泡【名】はっぽう(發泡)の訛。

ばっ-ぽう 罰俸・罸俸【名】官吏などの懲戒罰の一として、一定の期限內、その俸給の全部若しくは一部を納付せしむるもの。げんぽう(減俸)㊁參照。

はつ-ぼく 發墨【名】硯にて磨る墨の磨れ工合。

ばつ-ぼく 伐木【名】立木（タチキ）を伐ること。

伐木の契（チギリ）【句】「斷金・伐木の契」を見よ。

はつ-ぼたる 初螢【名】その季節にはじめて出でたる螢。一茶「初螢ついと外（ソ）れたる手風かな」

はつ-ほ-とり 初穗取・早穗物【名】初穗を採り集むる人。

はっ-ぽふ 八法【名】〔佛〕人心を煽動して、正法（シヤウボフ）に安住する能はざらしむる利・衰・毀・譽・稱・譏・苦・樂の八種。八風。**ふうき**（風鬼）參照。

はっ-ぽん-は 八品派【名】〔佛〕**ほんもんほっけしゅう**（本門法華宗）を見よ。

はっ-ぽん-やぐるま 八本矢車【名】紋所の一。八本の羽を、輻射狀に並べ描きたるもの。

はつ-ほ-もの 初穗物・早穗物・最花物【名】神佛に獻る物。義經記「鎧・腹卷を入れたる唐櫃を、薦にて包み、注連（シメ）を引き、熊野の初穗物といふ札を附けたり」

はつ-ま 初馬【名】**はつうま**（初馬）の略。

ばつ-ま 伐魔【名】『英Exorcism』惡魔を攘ひ除く術。古代の諸文明國に、信仰に伴なひて、遍く行はれ、その遺風は、羅馬敎會にも存すといふ。

はつ-まうで 初詣【名】**はつまゐり**（初參）に同じ。

はつ-まくは 初眞桑【名】その季節に初めて出でたる眞桑瓜。眞桑瓜の初物（ハツモノ）。芭蕉「初眞桑縱にや割らん輪にやせん」

はつ-まくら 初枕【名】**にひまくら**（新枕）に同じ。一代女「**初枕**の夜も、何の縺なしに」若風俗「假綴にして手日記（テニツキ）。この上書に、初枕と記せり」

はつ-まご 初孫【名】**うひまご**（初孫）に同じ。

はつ-まり-ごえふ 葉詰五葉【名】〔植〕姬子松の變種。葉のつまりて短きもの。

はつ-まゐり 初參【名】新年の初の參詣。はつまうで。

はつ-み【名】〔植〕**しひたけ**（椎茸）を云ふ。〔女の語〕

はつみ-ぐさ 初見草【名】❶〔植〕**うのはな**（卯花）に同じ。藏玉集「卯花。はつみぐさまだ咲かぬ間に時鳥立田の山の里に鳴きける」❷〔植〕**ふゆぎく**（冬菊）に同じ。藏玉集「冬菊。しぐれ降る庭にけふしもはつみぐさ花咲きにけり霜やおくらん」❸〔植〕**はぎ**（萩）❶の異稱。❹〔植〕**まつ**（松）❶の異稱。藏玉集「松。年ごとに綠の色も初み草變らぬ色の名にやめづらん」❺**ゆき**（雪）の異稱。

はつみ-づき 初見月【名】陰曆正月の異稱。

はつ-みみ 初耳【名】はじめて耳にすること。はじめて聞くこと。

はつ-みやうだい 初名代【名】『**はつ**（初）❷を見よ』初會より、名代❷を敵方（アヒカタ）とすること。娼妓絹籭「この間中から、お前（ヘ）を仕廻（シメ）によこしても、御全盛といふもので、つひによい晩がなく、初名代で來るも、何か己（ウヌ）ぼれらしいから」

はつ-みゆき 初雪【名】**はつゆき**（初雪）に同じ。堀次「はつみゆき降りにけらしな有乳（アラチ）山越（コシ）の旅人橇に乘るまで」

はつ-む 撥無・撥撫【名】〔佛〕**ばちむ**（撥無）に同じ。

はつ-むかし 初昔【名】『三月二十一日に摘むための名にて、「廿一日」の三字を合はすれば、「昔」となるよりいふ』一種の上等なる煎茶・抹茶。以後に摘みて製したるに、後昔などあり。重雌子「昨日は今日の初昔、世の口に合ふ茶の名所」

ば-づめ 馬爪【名】**ばづ**（馬爪）を見よ。

はつ-めい 發明【名】❶『史記の愼到傳に「學㆓黃老道德之術㆒、因發明序㆓其指意㆒」、後漢書の徐防傳に「發㆓明章句㆒」とあり。開發・彰明の義』ひらき明かにすること。啓發。❷あらたに考へ出し、又、あらたに考へて造り出すこと。新工夫。❸かしこきこと。りこう。怜悧。利發。武家義理物語「發明らしき貌つき」梅曆「さすが發明のお長（チヤウ）なれども、……、心附かぬも道理なり」

はつめい-か 發明家【名】**はつめいにん**（發明人）に同じ。

はつめい-げつ 初名月【名】陰曆八月十五日の夜の月。十五夜の月。（「後（ノチ）の月」に對して）淀鯉出世瀧德「徒歩（カチ）で、これ程行くことも、初名月や一口（イモアライ）」

はつめい-しや 發明者【名】次條に同じ。

はつめい-にん 發明人【名】發明❷をする人、又それをしたる者。發明家。發明者。

はつめい-ひん 發明品【名】發明❷の結果造り出したる物品。

はつ-も 初藻【名】その年はじめて刈る藻。夫木「おほ淀のあまの少女子春されば神の初藻のみるめ刈るなり」

ばつ-もく 罰目・罸目【名】懲罰の名目。

ばつ-もく-てう 拔目鳥【名】〔動〕『十天經に「一名㆓無常鳥㆒、二名㆓拔目鳥㆒、……我汝舊果化成㆓烏鳥㆒、示㆓怪語㆒、鳴㆓阿和薩和㆒」とあり』**からす**（烏）❶の異稱。鴉鷺合戰「烏鳥……、冥界に住みては、拔目鳥と呼ばれ、邪見の威を振ひ」

はつ-もとゆひ 初元結【名】❶古、公卿の元服に、髮を結ぶに用ひし、紫の組紐。拾遺「ゆひそむる初元ゆひの濃紫衣の色に移れとぞ思ふ」❷はじめて元服すること。源氏「いときなき初元ゆひに長き世を**契る心は結びこめつや**」太平記「一人の女あり。養はれて深窓に在りし時より、若紫の匂ことに、初元結の寢亂髮、末如何ならんと、見るに、心も迷ひぬべし」❸〔植〕**こんぎく**（紺菊）に同じ。

はつ-もの 初物【名】❶穀物・野菜・果實などの、その季節の初に出來たるもの。はつほ。新永代藏「町人とても、金銀次第にて、お大名より先に、時時の初物を賞翫仕る事」❷その年はじめて食する物。俳諧古選附錄（布門）「初物に喰はれてをかし三月蚊」

初物七十五日【句】初物を食へば、七十五日生き延ぶる義とも、又、前後七十五日の間は、すべて初物と呼ぶ義とも、又、花落ちてより、七十五日にして、その實食ふべしとの義ともいふ。〔諺語〕

はつもの-ぐひ 初物食【名】初物を好みて食ふ人。

はつ-もみぢ 初紅葉【名】❶次條に同じ。伊勢「かへでの初もみぢを拾はせて、歌を詠みて、書きつけて」❷襲（カサネ）の色目の一。表は萌黃（モエギ）、裏は薄萌黃。

はつ-もみぢば 初紅葉【名】秋になりて、はじめて色づきたる紅葉。はつもみぢ。萬葉「めづらしとわが思（モ）ふ君は秋山の始黃葉（ハツモミヂバ）に似てこそありけれ」

はつ-もん 發問【名】問を發すること。

ばつ-もん 罰文・罸文【名】起請文（キシヤウモン）に、誓盟に違背せば、神佛の罰を蒙るべき旨を記したる文句。

はつ-もんび 初紋日【名】はじめての紋日。壽の門松「昇夫（オツセ）・揚屋の附屆（ツケトドケ）、初紋日の買論も、妾（ワシ）が獨の胸算用」

は-づや 刃艷・刃光澤【名】刀劍類を仕上ぐる時、研ぐに用ふる砥石。

はつ-やう 發揚【名】❶『禮記の樂記篇に「發揚蹈厲之已蚤何也」とあり』ふるひおこすこと。立ち上り、又は足ぶみすること。振作。❷『後漢書の樊準傳に「發㆓揚巖穴㆒、寵㆓進儒雅㆒」とあり』引き上げて、世にあらはすこと。

はつ-やく 初役【名】❶はじめての役。❷從來、位置低かりし俳優の、はじめて、狂言中の主要なる役（例へば、「勸進帳」ならば、辨慶・富樫（トガシ）・義經などの類）を勤むること。❸はじめて、月役（ツキヤク）の通ずること。はつはな。〔關西の語〕

はつ-やく 初厄【名】長門國下ノ關市等にて行はるる習俗。三歲の小兒あらば、これまで結べる紐を放し、本裁の著物に、初めて帶を結ばしめて、舊曆十月十五日又は新曆十一月十五日或は誕生日に氏神に參詣して、神官にその兒の無病息災の祈念を賴み、後、親戚知己の家へ見せ廻はるを例とす。

はつ-やま 初山【名】❶**はつとざん**（初登山）に同じ。❷**おほやままゐり**（大山參）を見よ。〔關東の方言〕

はつ-やまいり 初山入【名】遠江國周智（スチ）・磐田（イハタ）兩郡地方にて、毎年一月四日に、各村の人人の、鎌・鋸などを携へて、山林に入り、まづ山神に洗米と餅とを捧げ、今年の無事を祈り、少しの薪材を樵り取りて歸る風習。

はつ-やり 初槍【名】**いちばんやり**（一番槍）に同じ。

はつ-ゆ 初湯【名】㊀うぶゆ(産湯)に同じ。萬代「古の御代の初湯に汲みそめて遠く澄むべきわが寺の水」・㊁はつぶろ(初風呂)に同じ。浮世風呂「ふる年の顔を洗ふ初湯のけぶり」

はづ-ゆ 巴豆油【名】巴豆より採りし油。峻烈なる下劑となり、又、グリセリン・オリイブ油に混じて、皮膚の引赤劑とす。

はつ-ゆき 初雪【名】㊀冬になりてはじめて降る雪。初雪(ショセツ)。萬葉「はつ雪は千重に降りしけ戀しくの多かる我は見つつしぬばむ」㊁新年になりてはじめて降る雪。新雪。金葉「あら玉の年の始に降りければ初雪とこそいふべかりけれ」㊂襲(カサネ)の色目の一。表は白、裏は白の少し曇りたるもの、又は紅梅。㊃謠曲の一。寵愛せる鳥を失ひて悲しめる所に、その亡靈あらはれ出で、功力(クリキ)に引かれて、舞を舞ひ、成佛する事を作りたるもの。㊄紋所の一。圓の中心より柄の太き飯匙(イヒガヒ)に似たる形を、六方に放射狀に描けるもの。

初雪の見參(ゲンザン)【句】中古、初雪の降りたる日、群臣の參內せしこと、又その儀式。延曆十一年十一月、始めて行はる。公事根源「昔、初雪の降る日、群臣參內しはべるを、初雪見參と申すなり」

はつゆき-の-ものがたり 初雪物語【名】〔書〕古き物語なれど、今は傳らず。無名草紙「はつ雪といふ物語御覽ぜよ」榮花「かの初雪の物語の女御どのに參りこみし人人よりも、これはめでたし」

はつ-ゆふぐれ 初夕暮【名】その季節になりてはじめての夕暮。夫木「秋立ちて初夕暮に吹く風のやがて淋しき荻の音かな」

はつ-ゆめ 初夢【名】㊀その年になりてはじめて見る夢。㊁一月二日の夜に見る夢。たからぶね(寶船)㊁參照。夫木「年暮れぬ春來べしとは思ひねのまさしく見えてかなふ初夢」

はつゆめ-あはせ 初夢合【名】初夢によりて、吉凶をうらなひ判ずること。佐夜中山集「門松はけさの初夢合かな」

はつゆめ-づけ 初夢漬【名】花落の茄子の蔕(ヘタ)を切り取りて、甘く鹽押にし、芥子(カラシ)と麴とにて漬けたる食品。和合人「初夢漬で、一杯茶づって」

はつ-ゆり はつ百合【名】〔植〕㊀かたくり(片栗)㊀に同じ。㊁ばいも(貝母)に同じ。

はつ-よ 初夜【名】その季節の最初の夜。堀太「冬來てはこよひぞ初夜いつの間に片敷く袖の冴えわたるらん」

はつ-よぐさ 初代草【名】かどまつ(門松)の異稱。〔古語〕藏玉集「初代草。門松。大內やももしき山の初代草いくとせ人にふれて立つらん」

はつ-らい 初雷【名】はつがみなり(初雷)に同じ。

はつ-らう 初老【名】しよらう(初老)に同じ。

はつ-らつ 潑剌・潑溂・潑刺・跋剌【貌】㊀魚の躍り跳ぬるさま。ぴちぴち。潑潑。㊁元氣よく活動するさま。

はつ-らつ 撥剌【貌】『張衡の思玄賦に「彎㆓威弧之撥剌㆒」とありて、註に「撥剌、張ㇾ弓貌」と見ゆ』弓を、十分に張りたるさま。

はつ-らん 撥亂【名】『亂を撥(ハラ)ふ義』世の中の亂れたるを治めととのふること。

撥亂・反正【句】『公羊傳の哀公十四年の條に「撥㆓亂世㆒、反㆓諸正㆒」とあり』世の中の亂れたるを治めて、平和なる正しき道に反すこと。

はつり【名】絹布の類をほぐして、絲として使ふもの。はつし。空穗「針の、耳いと明らかなるに、信濃のはつりを、いとよき程にすげて」

はつり 削・斫【名】はつること。

はつりを取る【句】はつる(削る)㊁に同じ。はつりとり(削取)㊁參照。

は-つり 羽釣・束釣【名】ジャガアド紋織機・空引機(カラヒキバタ)等に於ける通絲を、針にて釣りて、連續的に目板の穴に通るやうにする方法。

ばつ-りう 末流【名】まつりう(末流)に同じ。

ばつり-ぢやうちん 場吊提燈・場吊提灯【名】劇場の見物席に吊す提燈。江戸の顔見世狂言には、土間の上に、俳優の定紋を附けたるを、三とほりに吊したり。

はつり-とり 削取・斫取【名】㊀少しづつ削り取ること。諺「大物(モツタイ)ははつりとり」㊁「はつりを取る」を見よ。口錢を取ること。うはまへとり。

はつ-る【動下二自】編みたる絲などが、片端より解け離る。ほつる。ほぐる。ほどく。貫之集「藤衣はつるる絲はわび人の涙の玉の緖とぞなりける」

はつ-る 削る・斫る【動四他】㊀片端より少しづつ削り取る。へつる。㊁口錢を取る。上前(マヘ)を取る。はつりを取る。

はづ-る 削る・斫る【動四他】前條の轉訛。

はづ-る 外る【動下二自】㊀はまりたる物、脫け離る。㊁その中に入らず。逸(ソ)る。「道理にはづる」㊂思ふとほりにならず。目的に副はず。「計略はづる」

ばつ-るゐ 末類【名】まつるゐ(末類)に同じ。百日曾我「判官の末類を、……一兩人生け捕つて吳るるなれば」

はづれ 外【名】㊀はづるること。あたらぬこと。㊁はし。はて。をはり。つまり。保元「法性寺の北のはづれ」同「草摺のはづれを射させてひるむ所を」㊂片はれ。すゑ。はした。末輩。㊃つまはづれ(褄外)の略。御伽草子(鉢かづき)「手足のはづれの美しさよ」一代男「地顔・素足の尋常、はづれゆたかに細く」二代男「物貫にしては、如何にしても賤しからぬはづれ」

はつ-れい 初禮【名】新年になりて初めての謝禮。若風俗「太夫元への初禮、同じ道に誘(サソ)へば、喜び」

はつ-れい 發令【名】法令を發布すること、又その法令。

ばつ-れい 罰例・罸例【名】ばつそく(罰則)に同じ。

はづれ-いづ 外出づ【動下二自】はづれて出づ。こぼれいづ。はみだす。榮花「御衣の、わざとならずはつかにはづれ出でたる程のにほひ・有樣」

はづれ-はづれ 外外【名】ここ・かしこの端。一部分・一部分。徒然「けはひなんど、はづれはづれ聞えたるも、ゆかし」

はつれ-ゆき 斑雪【名】はだれゆき(斑雪)に同じ。犬子集「踏みちらす人の小鬢よはつれ雪」

はつ-れん 發輦【名】天皇の、御出立遊ばさるること。

はつ-ろ 發路【名】はつと(發途)に同じ。正統記「冬十月に、將軍發路す」

はつ-ろ 發露【名】あらはるること。露顯。暴露。發覺。太平記「發露涕泣して、罪障懺悔(サンゲ)するに」

ばつ-ろ 末路【名】まつろ(末路)に同じ。

はつ-ろん 發論【名】議論を發すること。論じ出だすこと。

はつ-わ 發話【名】話をはじむること。話しかくること。

はつ-わうて 初王手【名】將棋を差し、はじめて、王手をかくること。娼妓絹籭「將棊……。初會の席上(ザシキ)に初王手あり」

初王手、目の藥【句】初王手は、相手の目をさます。〔諺語〕

はつ-わかくさ 初若草【名】はじめて萌え出でたる若草。爲家千首「武藏野や初若草のつまこめて八重立ちかくす朝霞かな」

はつ-わかな 初若菜【名】はじめて生え又は摘み採りたる若菜。夫木「今日も摘む雪げの澤の初若菜明日よりとこそ人はしむらめ」

はつ-わかみづ 初若水【名】はじめて汲む若水。山家「解けそむる初若水のけしきにて春立つ事のくまれけるかな」

はつ-わらひ 初笑【名】新年になりて、はじめて笑ふこと。

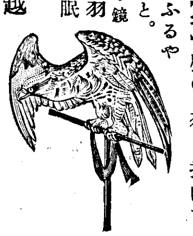
はつ-わらび 初蕨【名】その季節に、はじめて生え出でたる蕨。源氏「君にとてあまたの春をつみしかば常を忘れぬはつ蕨かな」

はつ-ゐ 室【名】はつゐぼし(室星)に同じ。

ばつ-ゐ 末位【名】まつゐ(末位)に同じ。

はつゐ-ぼし 室星【名】二十八宿の一。北方にあり。

は‐づゑ 羽杖【名】鷹の、羽を擴げて、拳（コブシ）をおさふるやうにすること。百合若大臣野守鏡「白めの鷹、羽杖を突きて眠り居る」


（はづゑ）

はつ‐ゑつ 發越【名】香氣などの、盛んに散りひろがること。ほつをつ。

はつ‐を 初緒【名】桿秤（サヲバカリ）の紐の、一番目のもの、即ち目方の最も輕き物をはかるに用ふ。

はつ‐を はつ尾【名】『果尾の義』末の尾。しだりを。一說に、秀（ホ）の尾の義にて、尾の中の長き尾なるべしと。〔古語〕萬葉「山鳥のをろのはつ尾に鏡掛けとなふべみこそ汝（ナ）に寄（ヨ）そりけめ」

はつ尾の霞【句】山の尾に立つ霞といふ時の「尾」を、山鳥のはつ尾にいひかけたる語。夫木「春來ぬと見ゆばかりにや山鳥のはつ尾の霞けさは立つらん」

はつ‐をばな 初尾花【名】初穗の出でたる薄（ススキ）。はつはなすすき。萬葉「はつをばな花に見むとし天の川へなりにけらし年のを長く」

はて 果【名】❶果つること。をはり。すゑ。かぎり。最後。結果。結局。「身のはて」『果無し』❷人の死後、四十九日の最後の日、又は一周忌。源氏「年かはりて、宮の御はても過ぎぬれば、世の中、色改りて」榮花「二月には、故院の御はてあるべければ、天の下急ぎたり」❸人の、種種の境遇を經來れる結果。なれのはて。あがり。醒睡笑「奉公のはてとおぼしきが」

果の事【句】「果の業」に同じ。蜻蛉「今は、果の事をとて、こたびばかりは、かのありし山寺にてぞする」落窪「こたびこそ果の事なればとて、大將殿、いといかめしうおきてたまひけり」

果の月【句】一年の最後の月、即ち十二月。しはす。蜻蛉「果の月の十日・六日（ムユカ）ばかり」

果の年【句】一周忌に當る年。枕「圓融院の御はての年、皆人、御服脫ぎなどして」

果の業【句】果❷の日に營む佛事。果の事。後拾遺「成順に後れはべりて、又の年、果のわざしはべりけるに」

果の緒【句】箏の末の緒、即ち巾（キン）。**とゐきん**（斗爲巾）參照。千載「今はとてかきなす琴の果の緒の心細くもなりまさるかな」

は‐て 八手【名】**はつき**（泊木）に同じ。堀太「宿も狹（セ）に朝ごと稻をほすよりははてを結ひてぞ掛くべかりける」

はて【感】怪み、惑ひなどして發する聲。はてな。「はて怪しや」狂言（貫智）「はて、こちへは歸りませぬが」

は‐で 破手・端手【名】**はでぐみ**（破手組）の略。（本手（ホンテ）に對して）

は‐で 派手【名】『前條の語の轉義。即ち三味線の派手は、本手よりも、花やかなるよりいふ』色どり・裝・聲などの花やかなること。つやめきたること。華美。浮華。

ぱて（英Putty）【名】❶酸化錫或は炭酸石灰を、亞麻仁油の如き乾性の油にて捏ね、又、鉛丹を、亞麻仁油にて捏ねたる粘氣ある柔き塊。前者は、障子に硝子板を取附くる塗料として、又は、ペンキを塗る前に、木の節・割目（ワレメ）などに詰むるに用ひ、後者は鐵管の繼目などに、麻絲などと併せて用ひて、漏を防ぐ塗料とす。❷硝子・鐵などを磨くに用ふる酸化亞鉛末。

は‐てい 波底【名】なみのそこ。海底。

はてい【感】**はて**に同じ。丹波與作「はてい、味方があれば氣が後（オク）れる。何處ぞへ、とっと退（ノ）いて居や」

ば‐てい 馬丁【名】馱馬又は乘馬の口取。馬方（ウマカタ）又は別當。

ば‐てい 馬蹄【名】❶馬のひづめ。❷**ばていけん**（馬蹄硯）の略。

馬蹄の塵となる【句】馬の蹄に踏みにじらる。太平記「財寶は、大路に引散されて、馬蹄の塵となりにけり」

ばてい‐ぎん 馬蹄銀【名】支那にて、巨額の取引に、通貨の如く用ふる銀塊。やや馬蹄の如き形をなし、大小一ならざれども、普通は、一箇五十兩（四百九十匁弱）內外の重量あり、表面に、製造所の極印を打記し、又その量目を墨書す。

ばてい‐けい 馬蹄形【名】馬の蹄のごとき形。

ばてい‐けん 馬蹄硯【名】水を入るる所を馬蹄形に穿ちたる硯。馬蹄。

ばてい‐じせき 馬蹄磁石【名】**ていてつけいじせき**（蹄鐵形磁石）に同じ。

ばてい‐しやう 馬蹄傷【名】馬に蹴られたる傷。〔軍隊の語〕

ばてい‐せき 馬蹄石【名】蒼黑色にして、表面に馬蹄の如き形ある石。庭の置石に用ふ。

ばてい‐てつ 馬蹄鐵【名】**ていてつ**（蹄鐵）に同じ。

は‐てう 巴調【名】『巴人の調の義。巴人は歌曲の名。「陽春・白雪」を見よ』❶鄙俗なる歌曲の調。❷自作の詩文の謙稱。

は‐てう 八調【名】〔音〕樂曲の、八音を主音とする調子。

は‐てう 破潮【名】次條を見よ。

破潮の鰭【句】魚類の腹部にある鰭。

はて‐がた 果方【名】事の終らんとする時。はてつかた。〔古語〕宇治「日暮れて、事、やうやう果方になるに」

は‐てき 破敵【名】攻むれば破ることを得る敵。甲陽軍鑑「名人の大將にも、破敵・隨敵の二あり。破敵とは破るる敵、隨敵とは隨ふ敵」

はで‐ぎぬ 派手衣【名】派手なる衣服。花やかなる衣裳。吉野忠信「色のはでぎぬ脫ぎ替へて、墨に染めぬる尼衣」

はで‐ぐみ 破手組・端手組【名】三味線の曲節の、本手（ホンテ）組に屬せぬもの。柳川撿挍の新作に係り、「待つにござれ」・「葛の葉」・「比良（ヒラ）や小松」・「長崎」・「下總ほそり」・「京鹿子（キヤウガノコ）」・「端手片琉（カタバチ）」の七曲あり。はて。

はでくらべ‐いせものがたり 競伊勢物語【名】『競の字、もと「はなくらべ」と訓じたり』奈河龜助の作に係る淨瑠璃。惟喬（コレタカ）・惟仁（コレヒト）兩親王の皇位を爭ひて、角力によりて、事を決せんとする事を作れるもの。

はで‐こそで 派手小袖【名】派手なる小袖。花やかなる小袖。日本武尊吾妻鑑「派手小袖、たけ長長と、裄みじか」

はて‐さて【感】はてはて。さてさて。•はってさて。狂言（石神）「はてさて、それは、氣の毒な事ぢや」

はて‐し 果【名】『**はて**（果）❶に、意味を强むる助辭しの添ひたるもの』❶かぎり。はて。際限。心中刃は氷の朔日「言うて居ては、はてしが無い」❷**ばうじ**（房事）の異稱。〔德川時代の末、江戶藥研堀（ヤゲンボリ）の藝者の隱語〕

はで‐し 派手師【名】**はでもの**（派手者）に同じ。

はで‐しや 派手者【名】前條に同じ。

はで‐すがた 派手姿【名】はでづくりの姿。

はですがた‐をんな‐まひぎぬ 艶容女舞衣【名】竹本三郎兵衞・豐竹應律・八民平七の合作に係る淨瑠璃。三勝（サンカツ）といふ舞子と馴染客なる半七との事を作れるもの。

はて‐だいこ 果太鼓・果太鼔【名】**うちだしだいこ**（打出太鼓）に同じ。

はて‐つ‐かた 果方【名】**はてがた**（果方）に同じ。〔古語〕狹衣「念佛の回向はてつかたは、ただ、うち聞く人のあはれなるを」

は‐てっせん 葉鐵線【名】紋所の一。圓を中心として鐵線の花と葉とを交互に放射狀に各三出せしめたる形に描きしもの。

ぱて‐どめ パテ止【名】パテ❷にて、硝子板を、框に取附くること。

はて‐な【感】**はて**に同じ。和合人「はてな、何（ナン）の用だ知らん」

はて‐は 果は【副】果には。つひには。つまり。結局。結句。

はて‐はて 果果【名】はてのはて。末の末。とどのつまり。終極。源氏「人の恨を負ひしはては、かううち捨てられて」同「思へば悲しとて、はてはてはまめだち涙ぐみたまふ」

はて‐はて【感】**はて**を重ねて、その意を强めたる語。さてさて。はてさて。

はてんくわう 破天荒【名】『北夢瑣言に「荊州毎歲解送二擧人一、多不レ成レ名、號曰二天荒一、至下劉蛻舍人以二荊解一及第上、爲二破天荒一」とあるに本づく。天の洪荒を、田園の荒蕪に譬へ、率先して、これを開く意といふ』人の未だ爲さざりし事を爲すこと。

はでもの 派手者【名】物事を派手にする人。派手に飾ることを好む人。はでし。はでしや。浮世風呂「お前（メ）ん所（コト）の小指も、派手者だの」

はでやか 派手やか【貌】はでなるさま。はなやか。華美。

はてるまじま 波照間島・波照間嶋【名】〔地〕琉球國八重山列島の一。西表（イリオモテ）島の南十二浬にあり。周回三里餘。

ばてれん 伴天連（葡Padreの訛）【名】『師父の義』㊀昔、基督敎の我國に傳來せし時、宣敎に從事せし、エスイタ(Jesuits)のコンパニヤ(Companhia)・フランシスコ(Francisco)・アゴスチニヨ(Agostinhio)・ドミンゴ(Domingo)四派の正會員。藩翰譜「バテレン・イルマンなどいひて、彼の國の師二人、資財を打捨て、西を指して逃げゆく」 ㊁次條の略。

ばてれんしゆう 伴天連宗【名】やそけう（耶蘇敎）に同じ。〔德川時代の語〕

はと 鳩【名】㊀〔動〕鳩類に屬する鳥の總稱。㊁紋所の一。鳩の象を描きたるもの。單に鳩と呼ぶものの外、「孔雀（クジヤク）鳩」・「向（ムカ）ひ鳩」・「八幡（ハチマン）鳩」・「鳩の丸」などの種類あり。軍神なる八幡神の使はしめなりとの迷信に本づきて用ひ初めしなるべしといふ。

鳩が豆鐵砲を喰ったやう【句】「豆鐵砲を喰った鳩のやう」に同じ。〔諺語〕

鳩に三枝の禮あり【句】『學友抄に「鳥有二返報食一、鴿有二三枝禮一」とあるに本づく』鳩は、禮讓を辨へたる鳥にて、子鳩は、親鳩の居れる枝より三つ下の枝にとまる。〔諺語〕 百合若大臣野守鏡「鳩に三枝の禮あり、烏に反哺の孝あり」

鳩の車【句】はとぐるま（鳩車）に同じ。

鳩の小屋（ヤコ）【句】はとべや（鳩部屋）に同じ。人倫訓蒙圖會「北方の横町にあたりて、鳩の小屋の内に住みて、夏冬なしに、すすはなを垂らし、無常迅速を觀じたまふ」

鳩を憎み、豆を作らぬ【句】㊀鳩の啄まんことを憎みて、必要多き豆を耕作せず。〔諺語〕 ㊁些細なる事を惡み嫌ひて、本務を怠り、却って、自家の損害を招く。〔諺語〕 伊曾保物語「かるが故に、諺にも、鳩を憎み、豆作らぬとかや」

はと 法度【名】はっと（法度）に同じ。

はと 波止・波戸・馬頭【名】陸より、海中に、土石を築き出して、波浪の襲來を防ぎ、港內碇泊の船舶の安全を計り、又、荷物の揚卸の通路にも使用することあるもの。はとば。埠頭。防波堤。

はと【名】〔植〕はひねず（這鼠）に同じ。

ばど 馬奴【名】うまかた。まご。

はとあはせ 鳩合【名】物合の一。鳩の、優劣を較べ定めて、勝負を決するもの。明月記「今日於二馬場殿一有二鳩合負態（マケワザ）一、左金吾經營也。其風流只金銀錦繡、盡レ善盡レ美」

はとう 波頭【名】なみのうへ。海上。

はとう 巴豆【名】〔植〕はづ（巴豆）を見よ。

はどう 波動【名】㊀波の動くこと。㊁〔理〕『英Wave motion 又 Undulation』彈性を有する媒質中の一部に變位起りて、媒質は、全體としては移動せざれども、その變位の、媒質中に順次に傳はり、以てエネルギイの傳播する現象。波動をなせる媒質の各點は、一處に於て、變位の發動點に遠き程少しづつ後れて、同一週期の振動を反復するが故に、媒質中には、相反せる異樣の狀態生じ、交互に相續きて進行するを波（ナミ）と呼び、その進行の速さは、媒質の種類によりて定まり、又、波に縱波・橫波の別あり。㊂〔地〕すゐへいざう（水平動）に同じ。

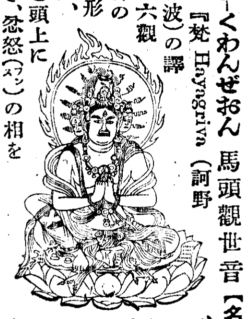
ばとう 馬頭【名】㊀うまのかしら。馬首。㊁『通鑑の唐穆宗紀に「於二黎陽一築二馬頭一、爲二度レ河之勢一」とありて、胡三省の註に「附二河岸一築レ土植レ木、夾レ之至二水次一、以使二兵馬入レ船、謂二之馬頭一」と見ゆ』はと（波止）に同じ。〔碼頭〕

ばとう 馬痘【名】『英Horse-pox』馬に稀に發する傳染病。蹄鐵工・馬丁等の手腕との接觸により病毒感染して、四肢の繋部後面に痘瘡生じ、發熱して、元氣衰へ、跛行するもの。數日の後、自然に痂皮を結びて治癒す。

ばとう 拔頭・撥頭・髮頭【名】舞樂の一。もと西域の樂にて、胡人の子の、己が親を噬み殺したる獸を求め出だして殺し、復讐するさまに擬したるもの。乞食（コツジキ）調に屬す。宗妃樂。枕草「ばとうは、頭髮よりかけたる、まみなどはおそろしけれど、樂も、いとおもしろし」

ばとうくわんおん 馬頭觀音【名】『音は、觀の字の韻に引かれて、ノンと發音す』〔佛〕次條の略。

ばとうくわんぜおん 馬頭觀世音【名】〔佛〕『梵Hayagriva（訶野訖利波）の譯語』六觀世音の一。形像は、馬を頭上に戴き、忿怒（フンヌ）の相をなし、面と臂とは、三面・二臂、三面・四臂、四面・二臂、四面・八臂、一面・四臂など、種種あり。師子無畏觀世音。



（ばとうくわんぜおん）

ばとうこつ 馬鐙骨【名】耳の鼓室內にある、鐙の形に似たる小聽骨。とうこつ。

ばとうさう 馬頭瘡【名】〔醫〕るゐれき（瘰癧）に同じ。

はどうせつ 波動說【名】〔理〕『英Undulatory theory 又 Wave theory of light』光線の本性はエエテル內に起る橫波なりといふ學說。和蘭人ホイヘンス(Huyghens)は、この唱導に係り、光に關する諸現象の想定によりて、十分に解說することを得と考へられしが、近來、又、新に電磁說起れり。びりふしせつ（微粒子說）參照。

ばとうばん 馬頭盤【名】馬の頭の如き形にて、四脚を具へ、古、箸・匕を据うるに用ひし盤。江次第「供二御銀匙一……居二馬頭盤一」 日中行事「陪膳、進みて、馬頭盤の左に居り」

ばとうへき 馬頭壁【名】『ばとう（馬頭）㊁を見よ』がんぺき（岸壁）に同じ。

ばとうゆ 馬桐油【名】旅人の、馬上にて、荷物と共に身を被ふ、大なる桐油合羽。

ばとうれいくわ 馬兜鈴科【名】〔植〕うまのすずくさくわ（馬兜鈴科）に同じ。

はどうろん 波動論【名】〔理〕波動の狀態・傳播・反射・屈折などにつきて論ずること。

はとかへ 鳩換【名】豐前國宇佐八幡宮にて、三月十八日と八月一日とに行ふ行事。前日より、鳩の形したるものに各番號を附したるを、宇佐町各商店にて發賣し、人人買ひ取りて、當日、神苑の境內にて互に交換し、午後十時に打鳴らす鐘を相圖に、交換を停止し、當籤の番號の者に、金鳩又は銀鳩を、神宮より授與す。古來の行事にて、一旦廢絕せしを、明治三十七年再興す。門司（モジ）市の縣社甲宗八幡宮にても、明治四十年以來、毎年十一月擧行す。うそかへ（鶯替）參照。

はとかみ【名】〔植〕ががいも（蘿藦）に同じ。

はとがや 鳩谷【名】〔地〕武藏國北足立（キタアダチ）郡にある町。日光街道に當る。浦和の東二里餘。

はとくさ 菘藍【名】〔植〕たいせい（大青）に同じ。和名「大青、波止久散」

はとくそ 鳩糞【名】〔鑛〕武藏國秩父（チチブ）地方より產する、美しき模樣ある蛇紋岩。まだらいし（斑石）參照。

はとぐるま 鳩車【名】『支那にも鳩車（キウシヤ）といふ玩具ありし由、博物志に見ゆ』土にて、鳩の形に作りたるものに、車輪を附け、紐にて挽くやうにしたる、小兒の玩具。はとのくるま。

はとこ【名】再從兄弟及び三從兄弟。（從兄弟（イトコ）に對して）甲陽軍鑑「從弟・はとこ・緣類・知音」

はとこんじやう 鳩根性【名】『鳩の聲の

含聲（フクミゴエ）なるにつきていふか』不滿がちなる根性。其角「下闇（シタヤミ）や鳩根性のふくれ聲」

ば-どころ 場處・塲處 【名】 ば（場）㊁に同じ。甲陽軍鑑「敵も、味方も、入りまじり、場どころを取りつ取られつ致すならば」

はと-ざけ 鳩酒 【名】 鳩の腸・毛及び頭尾・翅・脚を去り、肉を刮き、骨を碎き、よくたたきて、上等なる酒に入れ、一二度火を加へたるもの。腰痛・下冷に効ありといふ。

はと-ぞめ 鳩染 【名】 **きくぢん**（麴塵）㊀に同じ。

はと-づくり 鳩作 【名】 太刀の金具に、鳩の形を蒔繪にすること、又その造り方の太刀。東鑑「被レ奉二祕藏御劒（鳩作）於石淸水宮一」

はと-づゑ 鳩杖 【名】 **はとのつゑ**（鳩杖）を見よ。

はと-にほや 鳩寓生 【名】 紋所の一。鳩三羽を、寓生の周圍に取合はせて描けるもの。熊谷直實用ひはじめたり。盛衰記「熊谷は、褐（カチ）の鎧直垂（ヨロヒヒタタレ）に、家の紋なれば、鳩に寓生をぞ縫ひたりける」

はと-の-かい 鳩のかい 【名】 詐欺を行ひて世を渡る者。ごまのはひの類。一說に、法度の害にて、不正を行ひて、人を誑すことなりと。正章千句「見とほしといふ聲も霞めり（といふ句に）門口に立てる姿は鳩のかいめかい」 一代男「胡散（ウサン）なる鳩のかいと、何（ナン）でもなら聞き捨てしに」

はと-の-かひ 鳩のかひ 【名】 前條を見よ。後撰夷曲集「さまざまにかたり附けても靡かぬは鳩のかひなき君が心中」

はと-の-つゑ 鳩杖 【名】『支那にも鳩杖（キウヂヤウ）といふ物ありて、鳩は食する時、噎（ムセ）ばぬ鳥なるより、老人の噎ばぬやうにとの意に取りしものなる由、後漢書の禮儀志に見ゆ』鳩の形を頭部に刻みつけたる杖。老人の用ふるものにて、高齡の祝賀に贈物とし、今も八十歲以上の元老には、宮中より、優待の思召にて、これを賜ふ。夫木「八幡（ヤハタ）山神や切りけん鳩の杖老いて坂ゆく道のためとて」 良經日記「其北置二鳩杖一、以レ銀作レ之。件杖竹形也。其上居レ鳩也」

はと-の-まる 鳩丸 【名】 紋所の一。鳩の翼を擴げたる狀を、圓形に描きたるもの。

はと-の-みさき 鳩岬・波戶岬 【名】〔地〕 肥前國東松浦郡にある岬。土器（カハラケ）岬・禿毛（ハゲ）岬と共に、唐津灣と伊萬里（イマリ）灣とを隔つ。

はと-の-みね 鳩峯・鳩峰 【名】〔地〕『山上に男山八幡宮あり。鳩は八幡神の使はしめなりとていふ』山城國男山の別稱。

はと-の-め 鳩目 【名】 ㊀**せいしうみやせん**（勢州宮錢）に同じ。置土產「內證聞きてから、鳩の目一文のたよりにならぬ事、うちやつておけ」 後撰夷曲集「人人散錢まくを見て、散錢も處によりて變りけり難波のあしを伊勢の鳩の目」 ㊁北條氏康の關東を領せし頃、下總國相馬にて鑄造せしめたりといふ鐚錢（ビタゼン）。

はと-の-やま 鳩山 【名】〔地〕 **はとのみね**（鳩峯）に同じ。

はと-の-を 鳩尾 【名】〔植〕 **あまな**（山慈姑）に同じ。

はと-ば 波止場・波戶場・埠頭 【名】 波止のある場所。**はと**。

はとば-いろ 鳩羽色 【名】 染色の一。濃き紫を帶びたる鼠色。はとばねずみ。

はとば-うけとり 波止場受取・波戶場受取・埠頭受取 【名】〔商〕 積荷を、波止場にて受取ること。**はとばわたし**（波止場渡）參照。

はとば-うけとりしよ 波止場受取書・波戶場受取書・埠頭受取書 【名】〔商〕 船荷を受け取りたる波止場主が、その荷主に交付する證書。

はとば-ぜい 波止場稅・波戶場稅・埠頭稅 【名】 官設の波止場に對して拂ふ使用料。

はとば-ぬし 波止場主・波戶場主・埠頭主 【名】 波止場の所有者。

はとば-ねずみ 鳩羽鼠 【名】 **はとばいろ**（鳩羽色）に同じ。

はとば-わたし 波止場渡・波戶場渡・埠頭渡 【名】〔商〕『英 Ex quay』 賣買せる商品を、波止場にて受渡すること。（甲板渡・船腹渡などに對して） **はとばうけとり**（波止場受取）參照。

はと-ふく 鳩吹く 【動四自】 秋の頃、獵人の、鹿の居るを人に知らせ、又、人を呼ぶ時などに、左右の掌を合はせ、口にて吹鳴らして、鳩の聲をなす。曾丹集「まぶしさし鳩吹く秋の山人はおのが住處（スミカ）を知らせやはする」

はと-べや 鳩部屋 【名】『鳩を飼ふ庭籠に似たるによりていふこと、歌舞伎の下棧敷の、鶉籠の如くなるより、鶉といふが如し』 **つぼね**（局）㊂に同じ。俳諧古選（乙由）「鳩部屋に腹立聲や春の雨」

はと-ぽっぽ 鳩ぽっぽ 【名】 ㊀〔動〕『ぽっぽはその鳴聲』**はと**（鳩）を云ふ。〔幼兒の語〕 ㊁土にて鳩の形に造りて燒き、笛を仕掛けて、吹けば鳴るやうにしたる玩具。

はどま-ぢごく 鉢特摩地獄 （梵 Padma）【名】〔佛〕 **ぐれんぢごく**（紅蓮地獄）に同じ。

はと-むぎ 鳩麥・薏苡 【名】〔植〕 禾本科に屬する一年生の草。高さ四五尺に達し、葉は細長くして尖り、花は川穀（ジユズダマ）のに似て、夏開き、單性・雌雄同株にして、葉腋に生じ、果實は形楕圓、果皮は琺瑯質樣ならざること、川穀のと異なり。園圃に栽培し、種子は舂きたる上、飯とし、又、粉團とし、或は炒りて香煎とす。しこくむぎ。たうむぎ。たまづし。じゆずだま。ずずだま。つしだま。つすだま。つつだま。てうせんむぎ。

はと-むね 鳩胸 【名】 ㊀人の胸骨の、異常に發達して、前方に張り出でたるもの。〔龜胸・雞胸〕 ㊁鎧（ヨロヒ）の一部。前方の鳩の胸の如く圓く反り返りたる處。 ㊂三味線の棹の、胴に接する部分の下面の、少しく張り出でたるところ。

はと-め 鳩目 【名】 ㊀**はとのめ**（鳩目）㊁に同じ。 ㊁『形、鳩の目に似たるよりいふ』煙草入又は靴に、紐などを通すために取り附けたる、環狀の金物。しとどめ。

は-どめ 齒止 【名】 車の輪を動かぬやうにすること、又それに用ふる物。即ち臨時に石などを輪の下にかひ、又は車體に取り附けたる制動機を用ふ。とめば。

はとめ-せん 鳩目錢 【名】 琉球の貨幣の一種。錢質は黑銅、形は鳩の目の如く、質脆弱、量も亦薄小なるもの。直徑一分五厘乃至二分五厘。一枚を一文とし、五十文を、銅錢一枚に代ふ。普天滿錢（フテマセン）。

はとや-ばら はとや薔薇 【名】〔植〕 **なにはいばら**（難波薔薇）に同じ。

はとり 服部 【名】『機織（ハタオリ）の約』 ㊀機を織ること、又それを業とする人。祝詞「服部（ハトリ）・麻續（ヲミ）の人等」 夫木「人の國に織るてふはとり傳へてもあやしやいかにここにしも著る」 ㊁**はとりべ**（服部）の略。 ㊂姓氏の一。神別。天御中主（アメノミナカヌシ）神の第十一世の孫天御桙（アメノミホコ）命より出づ。姓（カバネ）は連（ムラジ）。又、熯之速日（ヒノハヤヒ）命第二世の孫、麻羅宿禰より出でしもあり。

は-とり 執翳 【名】 御卽位・朝賀等の大禮の時、天皇高御座（タカミクラ）にまします時、左右八人づつ相並び、各、翳（ハ）を取り、さしかざして、龍顏を蔽ひ奉りし女孺（ニヨジユ）。公事根元「執翳出でて、帳を八字にかかぐ」

ば-とり 場取・塲取 【名】 **だんだかばとり**（段高場取）を見よ。

はとり-べ 服部 【名】『機織部（ハタオリベ）の略』 機織を業とせし部民。はとり。

は-どる 羽取る 【動四他】 矢羽を見つくろふ。〔弓工の語〕

ば-どる 場取る・塲取る 【動四自】 「場（バ）を取る」に同じ。鶉衣「舟は、もとより一葉の、事事しからず、……場取らぬ趣向ながら、今日の乘合に、手並知れる曲者あれば、樽一つを、いかめしく突き据ゑたり」

はと-るゐ 鳩類 【名】〔動〕 **きうかふるゐ**（鳩鴿類）に同じ。

はとろん 【名】 **はとろんし**（ハトロン紙）の略。

ぱとろん （蘭 Patroon）【名】 **はやご**（早具）に同じ。

ぱとろん （英 patron の訛）【名】 ㊀或人に、物質上の保護を加へて、その事業・學藝などを成さしむる人。 ㊁**ざるだん**（弗旦）に同じ。〔花柳界の語〕

はとろん-し ハトロン紙 【名】 茶褐色なる三尺に四尺判の西洋紙。おほつがみ。

はとろん。

はとーを 鳩尾【名】きうび(鳩尾)[二]に同じ。

はとをーのーいた 鳩尾板【名】きうびのいた(鳩尾板)に同じ。

はな 花【名】[一]〔植〕植物の枝又は莖に生じて、生殖作用をなす機關。外部に萼、その内に花冠あり。更に、その内部に、生殖作用に最も必要なる雄蕊と雌蕊とあるを、普通とす。[二]花を著けたる枝。「花を折る」[三]櫻の花。一說に、古は梅の花をいへりと。このはな。古今「久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらん」[四]麗しきこと。美しきこと。花やかなること。華美。大鏡「御直衣(ナホシ)の裏、はななりけるが、かへりて、いと斑にて」若風俗「未だ十七、花なるに、可惜(アタラ)前髪おろし」[五]露草の花被より取りたる繪具。枕「みちのくに紙のたたう紙の細やかなるが、花か、紅(クレナヰ)か、少しにほひうつりたるも」榮花「頭には花を塗り、額には紅(ベニ)・白い物を著けたらんやうなり」[六]『めいくわ(名花)[二]を見よ』美女の譬。若風俗「その女はひとり娘にて、……、三月八日に、開かぬ花散りて、兩親(フタオヤ)の歎き悲しむ事、限無し」重帷子「主ある花は、是非が無い。あったら男に、戀がさめた」[七]**はなぞめ**(花染)の略。枕「ちずりの裳の、花かへりたる」書言字考節用「縹帽子、ハナダバウシ・ハナノバウシ」[八]花やかに快きこと。愉快。名譽。榮華。諺「言はぬが花」同「火事は、江戸の花」曾我會稽山「朽木の櫻、春過ぎて、又、いつの世の花をだに、待つに甲斐なき曾我の里」四谷怪談「待つ内が花だ」八笑人「ちっとは、言葉の花といふ事があるものだは」[九]花やかに徒(アダ)なること。萬葉「霞立つ春日(カスガ)の里の梅の花はなに問はむとわが思(モ)はなくに」[十]『花に代用する義にていふ』樒(シキミ)又は榊(サカキ)の枝葉を、墓前に手向くる時の稱。[十一]**からうぢばな**(麴花)[一]の略。「花が附く」參照。[十二]茶を煎る時に生ずる、輕く細かき湯玉(ユダマ)。**はなが**(花香)參照。[十三]『東海道名所記に「仕舞柱に贈り遣す花の枝は、舞臺にさし上げて、色を爭ひ」とあるがごとく、古、人に物を贈る時、草木の枝に取附けて贈りしによりていふ』**てんとう**(纏頭)に同じ。**かみばな**(紙花)參照。若風俗「勸子(ツトメ)の習とて、何れにても花といふ一字にて、自由に詠(ナガ)めらるる事なればこそ、人死(ヒトジニ)の無けれ」天の網島「磯市が花、銀五つ」[十四]**あげだい**(揚代)に同じ。[十五]**はなくじ**(花鬮)の略。[十六]**はなあはせ**(花合)[二]の略。[十七]「花に立つ」を見よ。

花多きは實少し【句】外部の裝飾に富める物は、却って實質劣りてあり。言葉の巧みなる者は、却って實意無し。「花も實(ミ)もあり」參照。〔諺語〕

花が咲く【句】面白くなる。賑やかになる。榮ゆ。諺「女やもめに、花が咲く。男やもめに虱がわく」萬葉「すめろぎの御代榮えむと東(アヅマ)なるみちのく山に黃金花咲く」續鳩翁道話「悋氣喧嘩が始まった。そこで、隣の妙琳が聞きつけて、挨拶すると、いよいよ喧嘩に花が咲く」

花が附く【句】『はな(花)[十一]を見よ』麴の製造に於て、麴花生ず。

花咲かず【句】世にうづもれて、立身せず。榮えず。平家「花咲かぬ埋木(ムモレギ)とこそ思ひしにみのなる果ぞあはれなりける」新續古今「春にあふ片枝を見ても歎くかな花咲かぬみのをふの浦梨」

花咲く【句】「花が咲く」を見よ。

花咲く松【句】「松の花」[二]を見よ。

花七日(ナノカ)【句】櫻の花は、咲きてより散るまでの期間短く、まことのさかりは、僅かに七日ほどなり。〔諺語〕

花に風【句】「月に叢雲(ムラクモ)、花に風」を見よ。

花に三春の約あり【句】花は、あらかじめ約束せるが如く、毎年、必ず三春の候に咲く。〔諺語〕謠曲(鞍馬天狗)「花に三春の約あり、人に一夜を馴れそめて」

花に立つ【句】[一]相方と豫め相談の上、名代をつくりおきて、相方に會ふこと。〔江戸時代の語〕色道大鑑「花に立つる。下略して、花とばかりもいふなり。わが思ふ女郎は、さしあひ有るか、又は遣手(ヤリテ)、この男に賣ることを承引せざる所を、女郎と密談して、各、別の女郎をはなし置き、心ざす女郎をかかふる事なり」[二]青樓の主人、遊女をかかふる時、周旋人の主人を欺くにいふ語。〔江戸時代の語〕色道大鑑「傾城屋の、女子をかかふるにも、肝煎(キモイリ)の者に迷はされて、花に立てらるるといふ名目あり。されども、これはいらざることなれば、平生の者、知りても益なし」

花の【句】[一]花の咲きてある。源氏「花の枝(エ)」古今「櫻散る花の所は春ながら雪ぞ降りつつ消えがてにする」芭蕉「花の山二町のぼれば大悲閣」[二]花の散りしきてある。萬葉「秋風の吹きこきしける花の庭淸き月夜(ツクヨ)に見れどあかぬかも」壬二「吹く風に花の上波(ウハナミ)立ちにけり淵瀨も見えぬ吉野川かな」[三]花にて飾りてある。花を取添へてある。謠曲(生田敦盛)「花の冠」同(鼓瀧)「花の薪(タキギ)」[四]花を見るための。金葉「幾とせの君ぞ語らんつもりゐて面白かりし花のみゆきを」後拾遺「うらやましいる身ともがな梓弓伏見の里の花のまとゐに」[五]花の咲く頃の。花時(ハナドキ)の。鶉衣「綿入を木曾路の夏や花の旅」[六]花の如く美しき。立派なる。花やかなる。盛衰記「花の栖(スミカ)を迷ひ出でて、草の枕に假寢して」

花の朝(アシタ)**、月の夕**(ユフベ)【句】『**くわてう**(花朝)と**げっせき**(月夕)とを見よ』春にも、秋にも。

花の跡【句】花の散り又は咲きたる跡。新古今「散りにけりあはれ恨の誰なれば花の跡訪ふ春の山風」續拾遺「見し秋の露をば霜におきかへて花の跡なき庭のふゆ草」

花の兄【句】〔植〕『黃山谷の詩に「含レ香體素欲レ傾レ城、山礬是弟梅是兄」とあり。百花に先だちて咲くよりいふ』**うめ**(梅)[一]の異稱。(「花の弟」に對して)謠曲(難波)「花の中にも始なれば、梅花を、花の兄ともいへり」

花の雨【句】花(主に櫻の花)に降り注ぐ雨。俳家奇人談(貞德)「甜らせて養ひ立てよ花の雨」

花の主(アルジ)【句】花のぬし。花の所有者。後撰「露だにも名だたる宿の菊ならば花のあるじや幾代なるらん」

花の色【句】[一]花の色合。古今「花の色は移りにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」[二]花染の色。拾遺「花の色に染めし袂の惜しければ衣替へうき今日にもあるかな」

花の浮橋(ウキハシ)【句】花の、水に散り敷けるを、橋に譬へていふ語。新後拾遺「渡るべき物とも見えず山川に風のかけたる花の浮橋」

花の浮世(ウキヨ)【句】花に榮枯あるごとくに、盛衰の運を免れぬ人の世。續後撰「咲けばちる花のうきよと思ふにもなほうとまれぬ山櫻かな」

花の臺(ウテナ)【句】[一]**うてな**(臺)[二]に同じ。[二]〔佛〕「蓮(ハチス)の臺」に同じ。新後撰「露の身に結べる罪は重くとも洩さじものを花のうてなに」箱根靈驗躄仇討「やっぱり輪廻(リンヱ)に引かされて、花の臺の未來まで迷ふはいのと」

花の宴【句】[一]花(多くは櫻の花、稀には秋草の花)を觀ながら催す酒宴。花見の宴。空穗「南殿(ナデン)の櫻は、さかりになりぬらん。一とせの花の宴に」禁祕抄「南殿櫻……同三月有二花宴一」[二]『源氏物語の巻の名に基づきて名づく』香(カウ)の一。香(カヲリ)古くして艶あり、澪標(ミヲツクシ)より遙かにすぐれたり。

花のお江戸【句】江戸の繁華なるを形容していふ語。竹齋物語「花のお江戸に著きにけり」

花の弟【句】〔植〕『百花に後れて咲くよりいふ』**きく**(菊)[一]の異稱。(「花の兄」に對して)夫木「百草の花の弟となりぬればやへやへにのみ見ゆる白菊」

花の賀【句】春の花の頃に行ふ賀の祝。寅・卯・辰の年の人は、正・二・三月の内の誕生日に行ふものとす。(「扇の賀」・「菊の賀」・「紅葉の賀」・「雪の賀」などに對

して）伊勢「春宮（トウグウ）の女御の御かたの花の賀に、召しあげられたりけるに」

花の鏡【句】花の影の、池水などに映ずるを、鏡に譬へていふ語。古今「年を經て花の鏡となる水は散りかかるをや曇るといふらん」

花の影【句】花の色。花のすがた。花の、光を受けて、物にうつれる影。古今「春がすみ色のちくさに見えつるはたなびく山の花の影かも」

花の蔭【句】花の咲ける木の下蔭。後撰「暮れてまた明日とだになき春の日を花の蔭にて今日はくらさん」

花の笠【句】咲き覆へる花を、笠に譬へていふ語。**はながさ**（花笠）參照。空穗「佐保姬や物うかるらん春の野に花の笠縫ふ枝の見えねば」

花の風【句】花（主に櫻の花）を吹く風。芭蕉「夏近しその口ばたへ花の風」

花の形見【句】花を思ひ浮ばする形見。新勅撰「うつろへば人の心ぞ跡もなき花のかたみは峰の白雲」

花の鬘【句】**はなかづら**（花鬘）に同じ。金葉「棚機のあかぬ別の涙にや花のかづらも露けかるらん」

花の香取（カトリ）【句】花の香を移し取ること、又その移し取りたる物を、縑（カトリ）に言ひかけたる語。新千載「別れにし花のかとりの夏ごろも春のかたみやなほ殘るらん」

花の顏【句】㊀花を、人の顏に譬へていふ語。堀太「秋萩は去年（コゾ）に變らぬ色なれどなほ珍しき花の顏かな」㊁花の如く美しき顏。花顏（クワガン）。源氏「見つる花の顏も、思ひくらべまほしくて」

花の顏ばせ【句】前條㊁に同じ。「花の顏ばせ、月の眉」

花の木【句】花の咲く木。花木（クワボク）。花樹（クワジユ）。古今「花の木も今は掘り植ゑじ春立てば移ろふ色に人倣ひけり」

花の君【句】〔植〕『祕中抄に「業平（ナリヒラ）東下（アヅマクダリ）の時、三河の八橋（ヤツハシ）にて、一夜泊りて、かきつばたを詠める、都よりはるばる來つつ東路の花の君にも一夜馴れにき」とあり』**かきつばた**（燕子花）の異稱。

花の塢（クサヲカ）【句】**くわだん**（花壇）に同じ。

花の匣（クシゲ）【句】蕾める花を、匣に譬へていふ語。伊勢集「九の宮の御息所（ミヤスドコロ）の御もとに、小箱合（コバコアハセ）の頃、箱に紅梅の蕾めるを入れて參らせたる、君にとし思ひかくれば鶯の花のくしげも惜まざりけり」

花の果物（クダモノ）【句】大和國吉野郡にて、古、二月一日、花供養の時、諸人に施し、又、山中の僧侶に與へし餅。夫木「をり櫻に花のくだもの積みてけり吉野の人のみやたてにして」

花の脣（クチビル）【句】**くわしん**（花脣）の直譯。武家義理物語「花の脣より物言ふかと過ぎたる程の艷女」

花の雲【句】咲き續ける櫻の花を、雲に譬へていふ語。風雅「峰しらむ梢の空に影落ちて花の間に有明の月」芭蕉「花の雲鐘は上野か淺草か」

花の君子【句】〔植〕『周茂叔の愛蓮說に「牡丹、花之富貴者也。蓮、花之君子者也」とあるに本づく』**はちす**（蓮）の異稱。

花の雲路（クモヂ）【句】花の雲の中の道筋。謠曲（吉野夫人）「花の雲路をしるべにて、吉野の奧を尋ねん」

花の供養（クヤウ）【句】花を活けて、佛に供養すること。立花供養。**はなくやう**（花供養）參照。謠曲（半蔀）「さても、われ、一夏（イチゲ）の間、花を立て候ふ。はや、安居（アンゴ）も過方（スギガタ）になり候へば、色よき花を集め、花の供養を取行はばやと存じ候ふ」

花の心【句】㊀花にも、人と同じく、心ありと見なす、その心。後撰「打ちはへて春はさばかりのどけきを花の心や何いそぐらん」㊁花に關する風情。枕「春の歌、花の心」㊂あだめきたる心。

花の言葉【句】花も、人と同じく物言ふものと思ひなしていふ語。山家「白川の春の梢の鶯は花のことばを聞く心地する」

花の頃【句】**はなごき**（花時）に同じ。拾愚「吉野山雲に心のかかるより花の頃とは空にしるしも」

花の衣（コロモ）【句】㊀花やかなる衣。躬恒集「皆人の花の衣を著る中にひとりぞ老に沈みはてぬる」㊁花染の衣。拾愚「降る雪にさてもとまらぬみかり野を花の衣のまづかへるらん」㊂花を、鶯などの著る衣と見なしていふ語。拾遺「春風の今朝早ければ鶯の花の衣も綻びにけり」

花の衣手（コロモデ）【句】前條に同じ。新六「かぞいろの見ぬ世の花の衣手にかげにやかかる墨染の袖」

花の宰相【句】〔植〕『牡丹を「花の王」と呼ぶによりて、これに次ぐ意にていふ』**しやくやく**（芍藥）の異稱。

花の盃【句】㊀花を見ながら飲む盃。㊁**さかづき**（盃）の美稱。夫木「めぐりくる三月も久し三千とせになるてふ桃の花の盃」

花の盛（サカリ）【句】㊀**はなざかり**（花盛）に同じ。㊁年若く美しき人の形容。一谷嫩軍記「熊谷次郎直實、花の盛の敦盛を討って、無常を悟りしか」

花の三月（サングワツ）【句】陰曆にて、櫻花のさかりに咲く三月。花の春。傾城反魂香「花の三月、はや過ぎて」八笑人「一年に一度の花の三月でござります」

花の柵（シガラミ）【句】水に散りしける花をせきとむる柵。續後撰「吉野川かへらぬ春も今日ばかり花のしがらみかけてだにせり」

花の下紐（シタヒモ）【句】花の蕾を、下紐に譬へていふ語。花の紐。新古今「臥して思ひ起きて詠むる春雨に花の下紐いかに解くらん」

花の下臥（シタブシ）【句】花の下蔭に寢ぬること。新後拾遺「吉野山花の下ぶし日數經て匂ぞ深き袖の春風」

花の下道（シタミチ）【句】花の下にある道。續千載「櫻色に山わけ衣うつろひぬかつ散りかかる花の下道」

花の雫【句】花より滴る雨露。**はなしづく**。新古今「露しげみ野邊を分けつつ唐ころも濡れてぞ歸る花の雫に」

花のしなひ【句】花の房の、しなやかに垂れてあるもの。伊勢「藤の花ありけり。花のしなひ、三尺六寸ばかりなんありける」

花の時分【句】「花の頃」に同じ。狂言（花盜人）「あれに、梢がすこし見ゆるが、あの花さうな。いつも、花の時分は、これからよう見えたが」

花のしまき【句】花を吹きまく風。夫木「海かけて比良山おろしゆきかへり花のしまきの波高く見ゆ」

花の霜【句】白き花を、霜に譬へていふ語。後拾遺「おしなべて咲く白菊は八重八重の花の霜とぞ見え渡りける」

花のしらゆふ【句】白く咲きたる花を木綿（ユフ）に譬へていふ語。千載「神垣のみ室の山は春きてぞ花のしらゆふかけて見えける」

花の姿【句】㊀花のありさま。花の樣子。枕「夕顏は、朝顏に似て、言ひつづけたるもをかしかりぬべき花の姿にて」㊁花のごとく美しき姿。拾玉「織女（タナバタ）もいく代の秋のほどまでか花の姿もしぼまざるらん」

花の鈴【句】『天寶遺事に「寧王春時、于二後園中一、紐二紅絲一爲レ繩、密綴二金鈴一、繫二于花梢之上一、每レ有二鳥鵲翔集一、則令下園吏掣二鈴索一以驚上レ之、蓋惜レ花之故也」とあり』春、園中の花を保護する目的にて、紅色の絲を引渡し、多くの鈴を取り附け、鳥の來る時は、引鳴らして逐ひ拂ふやうにしたるもの。護花鈴。

花の制札【句】花の枝を折らせぬための制札。甲陽軍鑑「關東の上杉管領、花の制札」

花の袖【句】㊀花の衣の袖。櫻色に染めたる袖。花染の袖。月淸集「花の袖替へまく惜しき今日なれや山ほととぎす聲は遲きに」㊁花のごとく美しき袖。謠曲（東方朔）「さながら袖の袖を連ね一

花の堂【句】はなみだう(花御堂)に同じ。東都歲事記「八日、灌佛會(諸宗寺院、……、本堂中又は境內に、花の堂を儲け)」

花の瀧【句】散り落つる花を、瀧に譬へていふとも、花の散りまじりて落つる瀧なりとも、高處より垂れ下りたる花を、落つる瀧に譬へていふとも、又、花の如く美しき瀧なりともいふ。謠曲(嵐山)「嵐山、戸無瀨(トナセ)に落つる白波も、散るかと見ゆる花の瀧」

花の塔【句】㊀昔、江戸の風俗にて、町町の家毎に、籠を竿に懸けて、高く屋上に建て置きしもの。㊁昔、尾張國熱田(アツタ)神宮にて、陰曆四月八日に行ひし灌佛會。

花の袂【句】㊀花の衣の袂。櫻色に染めたる袂。花染の袂。千載「たづね來てたをる櫻の朝露に花の袂の濡れぬ日はなし」㊁花を、衣の袂に譬へていふ語。拾遺「かりにのみ人の見ゆればをみなへし花の袂ぞ露けかりける」

花の便(タヨリ)【句】㊀花の開きたるついで。拾遺「訪ふ人もあらじと思ひし山里に花のたよりに人目見るかな」㊁**くわしん**(花信)に同じ。

花の塵【句】『「萩の塵」を見よ』散りてある花を、塵に譬へていふ語。芭蕉「年年や櫻を肥やす花の塵」

花の露【句】花の上に置ける露。新古今「駒とめてなほ水飼はん山吹の花の露添ふ井出の玉川」

花の時【句】「花の頃」に同じ。嵯峨野(薄之「あらけなや風車賣る花の時」

花の常磐(トキハ)【句】花の永久に衰へず、散らずにあること。後撰「かくながら散らで世をやはつくしてぬ花のときはもありと見るべく」

花の扃(トザシ)【句】㊀咲きこめたる花を、とざしに譬へていふ語。㊁花に圍まれたる家。

花の樞(トボソ)【句】前條に同じ。新古今「これやこの浮世の外の春ならん花のとぼその曙の空」

花の錦【句】㊀美しき花を、錦に譬へていふ語。はなにしき。新千載「裁ち縫はぬ霞の衣春きては花の錦を織り重ねつる」㊁衣の上に散りかかる花を、錦に譬へていふ語。源氏「珍しと故郷人も待ちぞ見ん花の錦を著て歸る君」

花の春【句】『年の始に、花は無けれど、花やかに美しくさかんなる意を含ませていふ』**はつはる**(初春)に同じ。芭蕉「二日にもぬかりはせじな花の春」

花の日【句】或團隊が、その賣上を慈善事業・公共事業などに寄付する目的にて、造花を商ふ日。

花の火【句】花を、火に譬へていふ語。夫木「花の火を櫻が枝にたきつけて烟となれる朝霞かな」

花の紐【句】「花の下紐(シタヒモ)」に同じ。後拾遺「いろいろの花の紐とく夕暮に千世まつ蟲の聲ぞ聞ゆる」

花の房【句】**はなぶさ**(花房)に同じ。源氏「山吹を、同じき花の房もいかめしう」

花の衾(フスマ)【句】身に散りかかる花を、衾に譬へていふ語。夫木「木のもとに旅寐をすれば吉野山花のふすまを著する春風」

花の淵【句】多く咲き亂れたる花を、淵に譬へていふ語。夫木「鈴鹿(スズカ)川八十瀨(ヤセ)の波の春の色は降りしく花の淵とこそなれ」

花の吹雪【句】**はなふぶき**(花吹雪)に同じ。山家「春風の花のふぶきに埋もれて行きもやられぬ志賀の山道」

花の父母【句】草木を潤ひ養ふ雨露を、父母に譬へていふ語。謠曲(熊野)「草木は雨露の惠、養ひえては、花の父母なり」「同じ。

花のほぞわた【句】**はなばかま**(花苞)に

花の幕【句】花見の時に張りめぐらす幕。はなまく。はなみまく。**こそでまく**(小袖幕)參照。蕪村「花の幕兼好を覗く女あり」

花の枕【句】「花の下臥(シタブシ)」に同じ。謠曲(西行櫻)「殘る夜櫻の花の枕の夢は覺めにけり」

花の祭【句】花の盛を長からしめんとてなす祭。謠曲(泰山府君)「花の命を延ばへんと、……金銀・珠玉色色の花の祭を急ぐなり」

花の水嵩(ミカサ)【句】花の散り重なるを、水の出で加はるに譬へていふ語。謠曲(櫻川)「山おろしの、木木の梢に吹き落ちて、花の水嵩は、白妙(シロタヘ)の波かと見れば、上より散る。櫻か、波か、花かと、浮き立つ雲の、川風に」

花の都【句】繁華なる都。花洛(クワラク)。「花のお江戸」參照。源氏「咲きてとく散るはうけれど行く春は花の都をたちかへり見よ」後拾遺「急ぎつつ船出ぞしつる年の內に花の都の春にあふべく」

花の下(モト)【句】㊀花の咲ける木のもと。花の蔭。山家「願はくは花のもとにて我死なんそのきさらぎの望月の頃」㊁『もと連歌の會を催すに、花の下などにてせしこと多きよりいふか。十訓抄に「土佐判官道淸といふ者ありけり。源氏・狹衣(サゴロモ)、たてぬきに覺え、歌よみ、連歌を好みて、花の下、月の前、すきありきけり」、菟玖波集の序にも「久しく、雲の上のもてあそび、花のもとのたはぶれとなれり」とあり』連歌師の團隊の號なるべしといふ。禁中にての連歌の御會に、花の下に圓座を賜はりしによりて、連歌の宗匠の、朝廷より許されて稱ふる號となるに至れりともいひ、又、宗祇初めてこの號を賜はり、宗長・貞德相次ぎて賜はれりとの說もあれど、確かならず。太平記「軍を止められければ、徒然に、皆、堪へかねて、花の下の連歌師どもを呼び下し」䜌八卦柱曆「花の下の連歌の會に、夜をふかし」㊂名譽ある主領。甲陽軍鑑「兩大將を、弓矢の花の本に申す」

花の下(モト)**の好士**(カウシ)【句】**れんがし**(連歌師)の異稱。

花のやう【句】美しき形容。䜌娘昔八丈「お主(シユウ)みためとは云ひながら、花のやうな子を殺す俺(オレ)が心を推量しや」

花の雪【句】㊀白く咲きたる花を、雪に譬へていふ語。暖雪(ダンセツ)。新古今「又や見ん交野(カタノ)のみのの櫻狩花の雪散る春のあけぼの」㊁香(カウ)の一。質は伽羅、香(カヲリ)、古めき、冷かに、消ゆるやうにて、火末、殊に花やかなるもの。

花の夕立【句】花に降りそそぐ夕立。夫木「水上に花の夕立しきるらし吉野の川の波のまされる」

花の橫雲【句】曙の花を、たなびき橫たはる雲に譬へていふ語。玉葉「ほのぼのと花の橫雲あけそめて櫻にしらむみ吉野の山」

花の王【句】〔植〕『**くわわう**(花王)㊁及び「花の宰相」を見よ』**ぼたん**(牡丹)㊀の異稱。

花の會(ヱ)【句】生花(イケバナ)の集會。謠曲(花軍)「洛陽に於て、遊樂の瓊筵盡きせぬ中に、殊にもてあそび候ふは、花の會(ヱ)にて候ふ」

花の踊【句】㊀花やかなる盆踊。㊁花を見ながら踊ること。

花は櫻木、人は武士【句】次條に同じ。〔諺語〕假名手本忠臣藏「花は櫻木、人は武士」

花は櫻に、人は武士【句】㊀同類の內にて、最もすぐれたる物を並べ擧げたる語。木は檜(ヒノキ)人は武士。〔諺語〕㊁武士のいさぎよくすぐれたるをいふ語。〔諺語〕

花は根に歸る【句】咲きたる花は、その木の根元に落ち散りて、その肥料となる。物みなその本に歸す。〔諺語〕千載「花は根に鳥は古巢に歸るなり春のとまりを知る人ぞなき」

花はみ芳野、魚(サカナ)**は鰹**(カツヲ)【句】「花は櫻に、人は武士」㊀に同じ。〔諺語〕春花五大力「あっぱれ侍、花はみ芳野、さかなは鰹ぢやなあ」

花はみ芳野、人は武士【句】「花は櫻に、人は武士」に同じ。〔諺語〕

花は折りたし、梢は高し【句】欲しけれども、これを得る方法の見出だし難き譬。高嶺(タカネ)の花。〔諺語〕鶉衣「花は折りたし、梢は高しと、心づくしの木のもとに、これをもって曳き撓めて、欲しき枝をも、たやすく得べければ」

花吹く秋【句】菅家文章に「九日侍レ宴、同賦二吹レ花酒一」とある如く、九月九日に、菊の酒を飲む時、盃中の花を吹きてまじなふ事あるによりて、九月一箇月の內、九日以後をいふとも、又、野分(ノワキ)の風などの花を吹き亂る、秋なりともいふ。散木「惜しまれて花吹く秋も移ろへる菊をばえこそ見捨てざりけれ」

花吹く酒【句】前條を見よ。

花降(フ)る【句】『てんげ(天華)を見よ』天上界の花、下界に散り來る。謠曲(羽衣)「緑は浪に浮島がはらふ嵐に花降りて」一茶「寢ておはしても佛ぞよ花の降る」

花見て枝を手折(タヲ)る【句】優美なる物に對して、情なき行をなす。〔諺語〕謠曲(和田酒盛)「色ある人に色なきは、花見て枝を手折るとかや」

花もあり、果(コノミ)もあり【句】次條に同じ。〔諺語〕父子相迎「枝には、春秋をさらへて、花もあり、このみもあり」

花も實もあり【句】『「花多きは、實少し」を見よ』外觀も美しく、內容も充實せり。花實(クワジツ)兼備せり。艶姿女舞衣「夜明けぬ中に早お行きやれと、十內が花も實もある櫻井の」

花も實も具す【句】前條に同じ。源氏「さ月まつ花橘の、花も實も具して、おしをれるかをりおぼゆ」

花も折らず、實も取らず【句】「虻蜂(アブハチ)取らず」に同じ。〔諺語〕

花や蝶や【句】榮耀のわざに奔走する形容。はなてふ。枕「皆人の花や蝶やといそぐ日もわが心をば君も知りける」

花より團子【句】花を眺むるよりも、物食ひて、腹を充すに若かず。即ち風流を解せぬ譬、又、空情よりも、實利を貴ぶ譬。〔諺語〕犬筑波「花よりも團子と誰かいはつつじ」八笑人「江都の飛鳥山(アスカヤマ)、花より團子の下戶・上戶」

花を打つ【句】纏頭を與ふ。花を遣る。一目千軒「遊所にて、花を打つとて、紙を出だす。これを、紙花といふ」

花を飾る【句】花やかに飾る。見場(バ)をよくす。諺「賣物には花を飾れ」織留「けふ棟上の祝儀とて、……、一門の女中、花を飾り」

花を咲(サ)かす【句】㊀面白くす。賑かならしむ。「論戰に、花を咲かす」太平記「大衆(シユイ)の立てつる所の不審、一一に、言に花を咲かせ、理に玉を聯ねて答へける」㊁榮ゆるやうにす。繁榮の運を拓く。「一花咲かす」

花を鬪す【句】花合(ハナアセ)の技を行ふ。

花を散す【句】花の散りたるやうに、美しく見ゆ。庭訓「騎馬殿上人、前駈北面等、美美敷、綺羅輝レ天、陣頭散レ花」

花を取る【句】毛を散らす。〔鷹飼の語〕

花を吹く酒【句】「花吹く酒」を見よ。

花を結ぶ【句】㊀絲にて、花を束ね合はす。續詞花「藥玉(クスダマ)の料に、人の許に、花むすびに遣したりけるを」㊁花結(ハナムスビ)㊀をなす。盛衰記「歌詠み、連歌し、繪書き、花結び、あくまで、御心に情おはします人なり」㊂『舞御覽の記に「藏人(クラウド)召されて、軒の花を折らせる。弓の弭にて一枝ひき折りて參らするけしきも、いとつきづきし。それを文臺にて、和歌を講ぜらる」とあり』花の枝を結びて造る。花を結びて、文臺にせられたるを召さる。增鏡「その後、歌どもは、保安のためしとぞいふめりし」

花を持たす【句】相手の者に、勝をゆづる。相手に譽を讓る。

花を遣る【句】㊀花やかなる裝をなす。犬子集「紅葉にてまた花をやる櫻かな」織留「繻珍の帶、紫皮の足袋にて、花をやりしに」㊁面白き事を行ふ。義經千本櫻「離座敷は隣知らず、餅搗せうと、おおをかし。こちらは、爰に天井ぬけ、寢て花やろと、蒲團敷く」㊂「花を打つ」に同じ。

花を折る【句】㊀花の咲ける枝を折る。㊁『「折花(セツクワ)・攀柳」を見よ』女色を漁(アサ)る。㊂容姿・衣裝などの花やかなる形容。落窪「花を折りてさうぞきて」小右記「上下之人、經營數日之間、裝束數重、改レ色折レ花、無レ不二綾羅錦繡一」

青い花【句】〔文〕『獨 Die blaue Blume』第十九世紀に於ける獨逸國のロマンチック派の詩人ノバリス(Novalis)が、その作に係る哲理的小說 Heinrich von-Ofterdingen の中に最高の存在と最高の戀愛との象徵として用ひたる語。

異鄉の花【句】外國に出稼せる賤業婦。海外の醜業婦。

解語の花【句】「物言ふ花」に同じ。

四種の花【句】〔佛〕しげ(四華)に同じ。謠曲(大會)「空より四種の花降りくだり」

高嶺(タカネ)の花【句】欲しけれども、見てゐるのみにて、手に入ることの叶はぬ物の譬。花は折りたし、梢は高し。

莟の花【句】年若く美しき人の譬。一谷嫩軍記「敦盛、……、玉織姬。……え、どちらを見ても、莟の花」

手活(テイケ)の花【句】手元に置きて、愛する女。「する女。

隣の花は赤し【句】他人の物は、とかくよく見ゆ。人の花は赤し。〔諺語〕

人の花【句】他人の愛する女。一谷嫩軍記「生けおいて、人の花と詠めさすも、無益(ムサク)しい」

人の花は赤し【句】「隣の花は赤し」に同じ。〔諺語〕

增す花【句】もと愛せし女に思ひかへたる、他の女。

物言はぬ花【句】草木の花。重之集「鶯の聲に呼ばれてうち來れば物言はぬ花も人招きけり」

物言ふ花【句】美女の形容。解語の花。若風俗「物いふ花山に入り、春の夜のならべ枕」

闇(ヤミ)に咲く花【句】いんばいふ(淫賣婦)に同じ。

闇(ヤミ)の花【句】前條に同じ。

はな 端【名】物事の始。まっさき。最初。發端。先端。

はな 鼻【名】㊀ぐわいび(外鼻)に同じ。㊁はなうた(鼻唄)の略なるべしといふ。堀河波の鼓「さても、見事なおつづら馬や。七蒲團(ナナツブトン)に出衆するゐて、蒲團ばりして、小姓衆を乘せて、海道百里を、はなで行(ユ)る」㊂『相手に、自己なることを示す時、自己の鼻を指にてさし示す習あるによりていふ。夜談隨錄にも「自指二其鼻一曰、我三官保豈畏レ人者」とあり』己れ自身。自己。はなさま(鼻樣)參照。持統天皇歌軍法「都の町の紙問屋に名を知られた、吉野の紙漉(カミスキ)萬九とは、この鼻」㊃はなしる(鼻汁)の略。〔洟〕和名「洟、須須波奈」

鼻うそあく【句】次條に同じ。盛衰記「鼻うそあいてぞ思はれける」

鼻うそやぐ【句】をかしさを忍びこらへて、鼻の動くやうなる心地す。鼻まじろぎせらる。鼻をうごかす。盛衰記「それそれと云ひければ、佐殿(スケドノ)、鼻うそやぎては思はれけれども」

鼻が明(ア)く【句】目あての事物を、他人に奪はれ、又妨げらる。だしぬかれて失望す。

鼻が胡坐(アグラ)をかく【句】あぐらばなにてあり。小鼻大なり。「腐れ損はる。

鼻が落ちる【名】黴毒のために、鼻部

鼻が高い【句】㊀自慢してあり。傲るに十分なり。㊁名譽を得たり。

鼻が詰(ツマ)る【句】㊀鼻加答兒などのために、鼻の呼吸十分なるを得ず。はなつまり(鼻詰)參照。㊁淚のために、鼻の呼吸十分ならず。むせび聲になる。

鼻が凹(ヘコ)む【句】自慢したるため、やりこめらる。鳩翁道話「高(タカ)なしの氣髓・氣儘、さるによりて、折折鼻がへこみます」

鼻白(ジロ)む【句】『しろむ(白む)は四段活用』臆して、鼻白く見ゆ。氣おくれしたる顏色をなす。はなじろ(鼻白)參照。源氏「さての人人は、皆、臆しがちに、鼻しろめる、多かり」

鼻、白(ジロ)む【句】『しろむ(白む)は下二

段活用』前條に同じ。思儘日記「才覺はかばかしからぬ輩は、鼻しろめてをこがましき事多かり」

鼻高し【句】得意なるさまなり。誇らはし。**はなだか**(鼻高)㊁參照。

鼻であしらふ【句】相手の言葉に對し、ろくに挨拶もせず、極めて冷淡にあしらふ。鼻の先であしらふ。**はなあしらひ**(鼻あしらひ)參照。室町千疊敷「御臺(ミダイ)が、ふうんと、萬事を鼻であしらはば、十度に一度は、お腹も立ていで」

鼻と鼻と突合はす【句】「鼻を突合はす」に同じ。

鼻に掛(カ)る【句】音聲、鼻腔の共鳴によりて發す。**はなうた**(鼻唄)・**はなごゑ**(鼻聲)㊁參照。

鼻に掛く【句】「鼻を高くす」㊀に同じ。一代女「いやしからぬ先祖を鼻に掛けぬ公家(クゲ)の娘」狂歌百人一首(短册三折)「石を持ちし力を今の眼鏡より鼻に掛けたる昔戀しき」

鼻に附く【句】いやになる。飽く。柳樽「目に附いた女房やがて鼻につき」

鼻の頭(アタマ)【句】「鼻の先」㊀に同じ。

鼻の孔【句】鼻のうつろになりたる處。鼻腔(ビカウ)。落窪「鼻の穴よりは、人通りぬくべく吹きいらげて」

鼻の先【句】㊀鼻の尖端。はながしら。はなづら。はなさき。八笑人「かの侍の鼻先へ、によいと杖を突き出せば」㊁鼻の先端に極めて近き處。目のまへ。まのあたり。めさき。てさき。はなづら。はなさき。目前。**はなもと**(鼻元)㊁參照。狂言(菊花)「身共が鼻の先をすりこすって通って」㊂顏の表面。かほいろ。顏面。千代萩「悅喜、鼻の先にあらはなり」㊃**はなのさきぢゑ**(鼻先智慧)の略。手習鑑「鼻の先な女子(ヲナゴ)の了簡」

鼻の先であしらふ【句】「鼻であしらふ」に同じ。

鼻の先にぶら下(サガ)ってゐる【句】㊀近く目の前に存在する形容。㊁自慢らしき様子の、誰人の目にも附く形容。

鼻の先にぶらついてゐる【句】前條に同じ。俗曲(尾上岩藤)「その用足顏(ヨウタシガホ)の高慢が、鼻の先にぶらついて、これ、この顏に見ゆるはいなう」

鼻の先へ出(ダイ)す【句】「鼻に掛く」に同じ。甲陽軍鑑「その手柄を、鼻の先へ出し」

鼻の先をひこつかす【句】「鼻をひこつかす」に同じ。膝栗毛「蒲燒の匂に、二人は、鼻の先をひこつかし」

鼻の下(シタ)【句】**くち**(口)㊀の隱語。

鼻の下(シタ)が上(アガ)ったり【句】「鼻の下が乾上る」に同じ。

鼻の下(シタ)が動く【句】物を食ふ。「鼻の下の動いてゐる間は、おとなしい」

鼻の下(シタ)が濡れる【句】「口が濡れる」に同じ。

鼻の下(シタ)が乾上(ヒアガ)る【句】「腭(アゴ)が乾上る」に同じ。長町女腹切「年寄ったこの親が、鼻の下が乾上る」俗曲(鞍馬獅子)「これをお前に上げては、わたしの鼻の下が乾上る」

鼻の下(シタ)長し【句】「鼻毛長し」に同じ。**びかちやう**(鼻下長)參照。

鼻の下(シタ)の宮殿(クウデン)の建立(コンリフ)【句】『宮殿の宮(クウ)に食(ク)ふの意を含ませていふ語』次條に同じ。〔諺語〕

鼻の下(ダシ)の建立(コンリフ)【句】㊀神社・僧侶等の、寺社等に寄進を募るも、實は自家の餬口のためになること。〔諺語〕㊁餬口のわざ。生活。〔諺語〕

鼻の下(シタ)をかはいがる【句】美食を欲し求む。

鼻の障子【句】**はなばしら**(鼻柱)㊀に同じ。

鼻の峰【句】**はなみね**(鼻峰)に同じ。空穂「この内の徒らなる所は、耳のはた、鼻のみねなりけり」

鼻の結絲(ムスビイト)【句】守刀に、靑き絲を附けて、兒の嚔(クサミ)する時、その絲を結びてまじなひとせしもの。

鼻は人の面(オモテ)の山なり【句】鼻は、人類の顏面中、最も高き所なり。〔諺語〕若風俗「鼻は人の面の山なりと、古詞に申し傳へし」

鼻へ食(タ)べる【句】夕方、燈火を點ぜずして、食事する形容。

鼻も引掛(ヒッカ)けず【句】金品等を與へても、見くびりて、少しも嬉しがらぬ形容。不愛憎なる態度にてあしらふ。

鼻を明かす【句】他人の目あてとしをりし物事を奪ひ妨げて、失望せしむ。だしぬく。**はなあかし**(鼻明)參照。

鼻を明(ア)く【句】鼻があくやうなる結果を招く。意外なる事となりて、失望するやうになる。小倉之色紙明星茶屋「この茶屋の女子(ヲナゴ)十八九・はたちばかり、皆、止袖(トメソデ)にて、多くは鐵水(カネ)をば附けず、……賣者かと思うて、うかと泊り、鼻をあく。念入れて宿るべし」

鼻を動かす【句】「鼻うそやぐ」に同じ。織留「素人(シロウト)らしく見せかけ、……鼻も動さず僞(ウソ)いへば」

鼻を缺く【句】割合に多くの犧牲を拂ふ。失ふ所、得る所より多し。諺「時の用に、鼻を缺け」平治「一日猿樂に鼻を缺くといふ世俗の諺こそあるに、信賴は、一日の軍に鼻を缺きたり」

鼻をかむ【句】㊀鼻息を強くして、鼻汁を拭ひ去る。和名「涕、波奈加無。以レ手去二鼻洟一也」㊁『**はなすすり**(鼻啜)㊁を見よ』すすり泣をなす。源氏「人人、……、めでたう覺ゆるに、忍ばれで、……、鼻を、忍びやかにかみわたす」大鏡「この殿の御事申すは、忝くも、あはれにも侍るかなとて、聲うち變りて、鼻たびたびうちかむめり」

鼻をすする【句】㊀鼻汁をすすり上ぐ。すすり鼻を爲す。㊁すすり泣をなす。鼻をかむ。源氏「御前なる人人も、さまざまに悲しく、……鼻すすりあへり」

鼻を高くす【句】㊀誇る。自慢す。鼻に掛く。㊁名譽を得。面目を施す。

鼻を突合はす【句】㊀『**はなつきあひ**(鼻突合)を見よ』向ひ合ひて、極めて近く寄る。猿蓑(凡兆)「水無月も鼻突き合はす數寄屋かな」和合人「醬油樽ほどの面(ツラ)の化物と鼻を突き合はせたので、今度は、眞正に、きやっと云って」㊁向ひあへる家に住む。互に近所に住む。

鼻を突く【句】㊀『鼻を挫かるる義』仕損ず。失敗す。諺「得手(エテ)に鼻突く」㊁譴責を受く。主人より勘當せらる。空穂「御供に仕うまつりたりし人人は、皆、鼻つき放たる」東鑑「左親衞突レ鼻事、今日有二免許一」

鼻を撮(ツマ)まれさう【句】夜など、極めて暗き處を進み行く時の形容。

鼻を撮(ツマ)む【句】㊀臭氣を避くるために、鼻を撮みおさへて、鼻の孔を塞ぐ。㊁忌む。嫌ふ。**はなつまみ**(鼻撮)參照。和合人「天窓(アタマ)あって足なきは幽靈、足を取って元(アタマ)を失ふを、氣の善き高利貸とす。……。天窓あって足無きも、足あって元なきも、人の以て鼻を撮む所なり」

鼻を詰(ツマ)らす【句】「鼻が詰る」に同じ。

鼻を並ぶ【句】居並ぶ。列坐す。盛衰記「三人、鼻を並べ、隙間もなく、つと寄る」

鼻を苦(ニガ)む【句】澁面(ジフメン)を作る。盛衰記「先王の舞を舞ふなるには、面模(メンモ)の下にて鼻をにがむる事にて侍るなり」

鼻を延(ノ)ばす【句】「鼻を高くす」に同じ。續鳩翁道話「おれが商をしてやらずば、且那があの藏(クラ)は出來はせまい、わしがお飯(メシ)焚いてやらずば、家内中が、皆、ひだる腹かかへて、かつえるであらうと、我も我もと、鼻を延ばして、家内中がおれがの會ぢや」

鼻を彈かる【句】「慢心、鼻を彈かる」を見よ。

鼻をひこつかす【句】鼻神經を刺戟せられて、鼻筋をひこひこと動す。浮世風呂「鼻をひこつかせて、ああ臭い」

鼻をひこひこする【句】前條に同じ。井筒業平河内通「うつぶいて、鼻をひこひこ」

鼻を嚔(ヒ)る【句】**はなひる**(嚔る)に同じ。萬葉「うち嘆き鼻をぞ嚔つる劒太刀

身に添ふ妹が思ひけらしも」枕「鼻を、高くひたれば、あな心う、そらごとするなりけり、よしよしとて」

鼻を吹く【句】荒荒しく鼻息(ハナイキ)をなす。百日曾我「幾年(イクトシ)ふりし猪の。……大きに呀(ケク)って、巖窟を木立(コダチ)に構へ、鼻を吹き、寄らば駈けんず、その勢」

鼻を折る【句】恥を與へて、相手の慢心を挫く。

はな 花【貌】**はなやか**(花やか)に同じ。古今「君によりわが名は花に春霞野にも山にも立ちみちにけり」

はな 花【接頭】㊀或植物を、その花を賞するにつきていふ語。「花菖蒲(ハナアヤメ)」「花薄(ハナススキ)」「花橘(ハナタチバナ)」㊁造花、又は、その他の物にて、花やかに飾りなしたる意。「花瓦斯」「花電氣」「花簪」「花櫛」

はな【助數】人の組合はせの數。持統天皇歌軍法「跡から、親王・長歌が、幾はな出ようも知れまいぞ」五十年忌歌念佛「組んづ轉んづして居たを、幾はなか見て來た」

はな-あか 鼻垢【名】**はなくそ**(鼻糞)に同じ。諺「目脂(メヤニ)鼻垢を笑ふ」

はな-あかし 鼻明【名】『「鼻を明す」を見よ』だしぬきて、失望せしむること。

はな-あさ 花麻【名】〔植〕大麻(アサ)の雄株。

はな-あさぎ 花淺葱・花淺黃【名】『**はなぞめ**(花染)を見よ』露草にて染めたる淺葱。東北院職人歌合「疎くなる人の心の花淺黃幾しほ染めて色あがるらん」

はな-あしらひ 鼻あしらひ【名】『「鼻であしらふ」を見よ』相手を、極めて冷淡にもてなすこと。心中宵庚申「顏を背けて、鼻あしらひ」

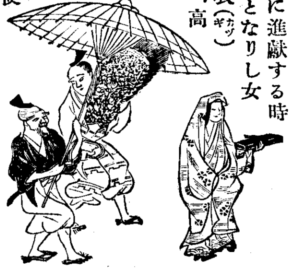
はな-あせ 鼻汗【名】鼻の表皮に、汗をかくこと、又その汗。

はな-あはせ 花合【名】㊀人人、左右に分れ、各、花(主に櫻の花)を持ち合ひて、優劣を鬪はし、和歌などを詠む遊。はなくらべ。榮花「花合・菊の宴など、をかしき事を好ませたまひて」㊁花骨牌(ハナガルタ)にて勝負を爭ふ遊。はな。㊂**はながるた**(花加留多)に同じ。

はな-あはび 花鮑【名】鮑の肉を、貝より放し、周圍の耳を去り、裏面より縱に細く線を入れ、薄く小口切とせるを、沸湯に投じて、湯煮とせる食品。

はな-あぶ 花虻【名】〔動〕雙翅類に屬する昆蟲。體は長さ五分、黑褐色を呈し、蜜蜂に類して肥大に、頭部、半球狀にして、黃色の短毛あり。口吻は肉質、四箇の剌毛を具へ、腹部に黃色の横紋と横線とあり。幼蟲は蛆狀にして、糞尿の溜壺、汚水の中に居り、尾長きが故に、尾長蛆(ヲナガウジ)の名あり。成蟲は諸種の草花に來りて、花蜜を吸ふ。

はな-あふぎ 花扇【名】近世、七夕(タナバタ)の雅興に、陽明家(近衞家)より、薄(ススキ)・女郎花(ヲミナヘシ)・桔梗・仙翁花(センヲウゲ)・花蓮・小車・夏扇の七種の草花を束ね、檀紙にて包み、水引にて飾りて、扇形とし、禁裡に進獻せしもの。甲陽軍鑑「能(ノウ)の次第。花扇などは、左に持ち、猿樂に、下手(シタテ)に取らする如く渡すものなり」



（はなあふぎのつかひ）

花扇の使【句】近世、陽明家より、花扇を禁裡に進獻する時の使者となりし女房。被衣(カツギ)を著け、高き塗下駄を穿き、左の手に蒔繪の文箱を持ち、使丁二人を從へて、當日正卯の刻進獻し、使丁の一人は、長柄の大傘をさしかけ、他の一人は、花扇を肩にし、禁裡にては、勾當內侍(コウタウノナイシ)、これを受取り、小御所(コゴショ)の前なる池に泛べて、二星に手向けたりといふ。

はな-あふひ 花葵【名】〔植〕㊀錦葵(ゼニアフヒ)科に屬する一二年生の草。高さ一二尺、葉は下部のは殆ど圓形、上部のは心臟形にして、鈍鋸齒を有し、缺刻あり。梅雨の前、上部の葉腋に、單瓣又は重瓣にて、紅色又は白色なる美花を開く。原產地は地中海沿岸。觀賞用として栽培す。つゆあふひ。㊁**たちあふゐ**(立葵)㊀に同じ。

はなあふひ-ぎり 花葵桐【名】紋所の一。花葵の葉と花とを、桐の紋所の形に描けるもの。

はな-あぶら 鼻油・鼻脂【名】小鼻のあたりに分泌するあぶら。

鼻油を引く【句】平滑ならしめ、又は光澤を附くるために、鼻脂を塗る。無名抄「これは椋(ムク)の葉みがきして、鼻油引ける御歌なり」

はな-あやめ 花菖蒲【名】〔植〕㊀**あやめ**(菖蒲)㊀に同じ。山家「櫻散る宿にかさなるあやめをば花菖蒲とやいふべかるらん」㊁襲(カサネ)の色目の一。表は白、裏は萠黃。一說には、表は靑、裏は薄靑。夏用ふ。

はな-あらし 鼻嵐【名】鼻息を、嵐の如くはげしく吹き立つること、又その鼻息。はなかぜ。曾我會稽山「乘り入れもせぬ野髮の馬、……人を嚇して、鼻嵐」

はな-いか 花凧・花紙鳶【名】菊・牡丹など、種種の花の形に造れるいかのぼり。心中刃は氷の朔日「菊や牡丹の花凧を戴きあぐる太鼓いか」

はな-いかだ 花筏【名】㊀花の散りて、水面を流るるを、筏に譬へていふ語。「紅葉(モミヂ)の筏」參照。㊁花の枝を折り添へたる筏。花の散りかかりたる筏。俳家奇人談(長門)「流(ナガレ)なる身に似合はしき花筏」㊂紋所の一。花を載せたる筏に象りたるもの。信濃國舊飯山(イヒヤマ)藩主本多氏の定紋。犬子集「河の瀨の紋所かや花筏」㊃白粉下(オシロイシタ)に用ふる化粧料。「花異香多」㊄〔植〕五加(ウコギ)科に屬する落葉灌木。高さ七八尺に達し、葉は楕圓形にして、銳頭・細鋸齒を有す。花は單性・雌雄異株にして、五六月の頃、葉の上面中央に、二三箇づつ開き、雌花・雄花共に、淡綠色の四瓣を具へ、黑色の果實を結ぶ。若葉は食用に供するを得。いぼなのき。ちばのき。ちばみのき。ままこもち。〔靑莢葉〕

はな-いかり 花錨【名】〔植〕龍膽(リンダウ)科に屬する二年生の草。高さ四五寸、葉は輪生して、全緣の長楕圓形をなす。夏、葉腋・莖・枝の頂に、淡黃綠色にして四裂せる花を開き、葉腋なるは、一箇乃至三箇づつ開き、頂端なるは繖形花序をなす。我國、中部以北の高山に自生す。

はな-いき 鼻息【名】㊀鼻にてする息、又その息づかひ。鼻息(ビソク)。㊁人の機嫌。鼻息(ビソク)。

鼻息荒し【句】意氣込はげし。

鼻息に心を附く【句】次條に同じ。新永代藏「朝夕・日夜、人の鼻息にも心を附くる折柄」

鼻息を窺ふ【句】「鼻息(ビソク)を仰ぐ」に同じ。

はな-いくさ 花軍【名】㊀花花しく戰ふこと。籾井日記「搦手口をば請け取りて、花軍を致すべきと存ずる」㊁花にて擊ち合ふ遊。犬子集「落ちゆくは臆病風か花いくさ」㊂**はなあはせ**(花合)㊀に同じ。㊃謠曲の一。女郎花(ヲミナヘシ)の精あらはれて、白菊の寵を專にする恨を述べ、同心の花を語らひて、菊を征伐する事を作れるもの。

はな-いけ 花生・花活【名】㊀花の枝をいけること。㊁花をいけおくに用ふる陶製・金屬製・竹製などの器。はながめ。はないれ。はなさし。はなたて。くわびん。

はな-いし 花石【名】靑石などの方石。大・小種種あり。

はな-いたや 花板谷【名】〔植〕**もみぢ**(紅葉)㊂に同じ。

はな-いぢり 花拵【名】草花の栽培、又は活花(イケバナ)によりて、自ら心を慰むること。

はな-いばな 花いばな【名】〔植〕紫草(ムラサキ)科に屬する草。土器菜(カハラケナ)に似、花は淡碧色にして、夏季、下部の葉腋に開き、花序の先端卷旋する事無し。各地の原野・路傍等に自生す。

はな-いれ 花入【名】**はないけ**(花生)㊁に同じ。芭蕉「打ち寄りて花入さぐれ梅椿」

はな-いろ 花色【名】㊀花の色。謠曲(松蟲)「はや夕影も深綠、草の花色露深き」㊁**はなだいろ**(縹色)に同じ。謠曲(源氏供養)「移ろひやすき花色の、襲(カサネ)の衣の」

はないろ-うら 花色裏【名】花色㊁の絹を裏地として用ふること、又その著物。女

の著用に供す。

はないろ-ぎぬ 花色衣【名】はないろごろも（花色衣）㈡に同じ。謠曲（草紙洗小町）「花色衣の袂には、梅の匂やまじるらん」

はないろ-こそで 花色小袖【名】花色㈡の小袖。德川幕府の制、重陽の嘉儀に當り、萬石以上の大名は、これを著用して出仕するを、本儀としたり。ちくさ。

はないろ-こもん 花色小紋【名】花色㈡の小紋。三代男「母親らしきが、花色小紋の帷子（カタビラ）著たる」

はないろ-ごろも 花色衣【名】㊀或花の色したる衣。古今「山吹の花色ごろも主やたれ問へど答へずくちなしにして」夫木「垣根にはまだ咲きあへぬ卯の花の花色ごろも袖ぞ涼しき」㊁花色㈡の衣。はないろぎぬ。はなぞめごろも。新六「早くより花色ごろもたちかへて今日ともわかぬ墨染の袖」

はなう-さぎ 花兔・花兎【名】紋所の一。將棋の駒の上部の角を削った輪廓の内に花の隧道（トンネル）あり、その中に眞向と横向の二兎を描けるもの。丹波與作「時代の金襴、鶴菱（ツルビシ）・欅・花兎・窠（クワ）に霰」

はなう-そあく 鼻うそあく【句】はな（鼻）の條下を見よ。

はなう-そやぐ 鼻うそやぐ【句】はな（鼻）の條下を見よ。

はなう-た 鼻歌・鼻唄【名】鼻にかかりたる低き聲にて、小唄などうたふこと、又その唄。織留「王城の忝さは、高腰掛けて、鼻歌うたへど、誰咎むる事もなし」

鼻唄で行（ヤ）ってゆく【句】のんきなる態度にて事を爲す形容。

はなうた-まじり 鼻歌交・鼻唄交【名】事を行ふに、鼻唄をうたひながら、手輕に爲すこと。

はなう-つぎ 花空木・花溲疏【名】花の咲きたるうつぎ。爲尹千首「籬なる竹より下の花うつぎ埋みし雪を見せて咲きけり」

はなう-つぼ 花空穗【名】花を插したるうつぼ。猿蓑（半殘）「鼠ども春の夜荒れそ花うつぼ」

はなう-ど 花獨活【名】〔植〕繖形科に屬する多年生の草。莖は縱に稜條を有し、高さ一丈に達し、長毛密生す。葉は二回羽狀複葉をなし、各小葉は、廣卵形又は圓形にて、三乃至五深裂し、各裂片は、鋸齒を有し、表裏兩面共に白毛あり。葉柄は扁平にして廣し。五六月の頃、帶黃白色の小花、複繖形花序をなして開く。莖は食ふべし。山地に自生す。くはずらど。だいにんじん。

はなう-ま 鼻馬・端馬【名】馬に乘り、列をなして進む中の、先頭の馬。落穗集「大科人ども引渡され候ふ節、……忠彌は鼻馬にて、そのあとに、段段相續き」

はなう-めばち 花梅鉢【名】紋所の一。梅鉢の各花瓣の間ごとに、花梗の先端に蕾の附きたる形を、一箇づつ配せるもの。

はなう-ら 花占【名】大なる花束をつくりて人人に引かせ、未來の配偶・將來の運命、或は職業・性質などを豫知・判定せしむる遊戲。西洋にても座興として行はる。

はなう-り 花賣【名】花を賣ること、又その人。はなや。俳諧新選（鶴英）「花賣の手にかかはらぬ紅葉かな」

はなう-り 花瓜【名】〔植〕うりのき（瓜木）㈠に同じ。

はなう-るし 花漆【名】器物の面に塗りたるままにて、光澤を發する漆。蠟色（ロイロ）漆に、荏油（エノアブラ）二割を加へたるもの。研磨の手數を省き得るため、上塗用として廣く用ひ、普通の漆器は、大抵これにて塗り上ぐ。黑色なる黑（ロク）花漆と、任意の顏料を加へて用ふる透（キス）花漆とあり。ぬりたてうるし。金葉「花漆こやぬる人のなかりけるあな腹ぐろの君が心や」

はなえ-びら 花箙【名】花の枝を插し添へて飾りたる箙。盛衰記「梶原は、……咲き亂れたる梅が枝を、蠶薄（ヤナグヒ）に添へてぞ指したりける。……平家の公達（キンダチ）は、花箙とて、優なり、やさししと、口口にぞ感じたまひける」

はなお-ち 花落【名】胡瓜（キウリ）・茄子などの實の、花の落ちてより程經ぬ中に採りたるもの。

はなお-ほひ 花覆【名】花をおほふ物。俳諧新選（杜支）「花おほひ捲くれば蝶のこぼれけり」

はなお-もだか 花澤瀉【名】紋所の一。澤瀉の葉とその花を描けるもの。

はなおもだか-びし 花澤瀉菱【名】紋所の一。二箇の花澤瀉を菱形に描けるもの。

は-なか 羽中【名】次條を見よ。

羽中の節（シフ）【句】矢の篦（ノ）の節の、矢羽を剝ぎたる中にあるもの。

はな-が 花香【名】㊀『はな（花）㈩を見よ』茶の香氣。太功記「茶釜のそば、花香のこもる姑（シウトメ）のしぶしぶ機嫌を取りかぬる」㊁にほひ。つや。染模樣妹脊門松「義理ある聟殿の緣を切り、儕（ワレ）を娶（メアハ）せ、花香もないない、お氣にも濟まぬ祝言させ」

はなが【名】〔植〕いぬくす（犬楠）を云ふ。〔伊豫國の方言〕

ば-なか 場中・塲中【名】㊀多くの人の集れる席。油糟「にがにがしくもをかしかりけり（こいふ句に）利口いふ人が塲中で恥かきて」㊁『ば（場）㈡を見よ』對陣せる敵・味方の間の地。

場中の高名【句】場中にて、敵の首を取ること。

場中の勝負【句】對陣せる敵・味方の雙方より、數人づつ出でて戰ふこと。

はな-がい 鼻繫【名】はななは（鼻繩）に同じ。

はな-かいらぎ 梅華皮【名】かいらぎ（梅華皮）に同じ。太平記鬣鎧「浮世模樣の染浴衣（ソメユカタ）、かざしの花の染帽子、花かいらぎの御腰つき」

はな-から 花香【名】かうげ（香花）に同じ。三十二番歌合「しきみうり。よしや身の佛くさきをわざにしてうき世の袖にしめぬはなかう」

はな-かうがい 花笄【名】花の形の飾を附けたる笄。御殿風の結髪、又は婚禮の時に用ふ。

はな-かうじ 花柑子【名】〔植〕はなかんじ（花柑子）に同じ。著聞「花かうじ・しらまゆみといへる文字鎖（モジグサリ）を、歌の句の上にすゑて」

はな-がき 花垣【名】㊀花の木を結ひ込めて造りたる垣。㊁花の木を保護するために、その周圍に結ふ垣。謠曲（老松）「手折りやすると守（モ）る梅の花垣、いざや圍はん」

はながき 花垣【名】〔地〕『もと餘野莊と呼びしを、上東門院、奈良興福寺の八重櫻の料にとて寄付せられしより、花垣の里と呼ばれしに基づく』伊賀國名賀郡の村。猿蓑（芭蕉）「伊賀國花垣の庄は、そのかみ、奈良の八重櫻の料に附けられけるを言ひ傳へはべれば、一里（サト）は皆花守の子孫かや」

はな-かく 劓く【動四他】はなきる（劓る）に同じ。字鏡「劓、波奈加久」

はな-かくし 鼻隱【名】建物の軒先にて、極（キタル）の木口を隱すため、又、橋の兩側にて、桁（ケタ）の兩端を隱すための横板。

はな-かけ 鼻缺【名】㊀劓（ハナキリ）の刑に處せられたること。字鏡「劓、ハナカケ」㊁鼻の缺け落ちてあること、又その人。はなそげ。はなっかけ。二代男「生れ附きたる風俗を、俄かに作り直しても、鼻缺は直らず」

はな-かげ 花蔭【名】花の咲ける木の下かげ。花の木蔭（コカゲ）。はなしたかげ。

はなかけ-ざる 鼻缺猿【名】鼻の缺けたる猿。今昔「舍衞（シヤヱ）國の鼻缺猿、帝釋（タイシヤク）を供養する語（モノガタリ）」太平記「只一つの、直なる猿が、九つの鼻缺猿に笑はれて迯げ去りけるに異ならず」

鼻缺猿、ただの猿を笑ふ【句】多數の愚者が、一人の賢者を笑ふ譬。〔諺語〕

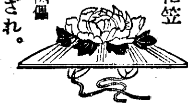
はなかけ-ぢざう 鼻缺地藏【名】石地藏の鼻のあたりの缺け損じてあるもの。和合人「この地藏さまは、鼻が無いぢやあねえか。だから、鼻缺地藏といふ名が高いので御座るぞ」

はな-かご 花籠【名】㊀花を摘み入れ、又は花枝を盛るに用ふる籠。はなこ。はながたみ。㊁けこ（華筥）に同じ。榮花「花かご、この持たる僧どもの裝束の色にととのへさせたまへり」

はなが-ごえふ 葉長五葉【名】〔植〕てうせんまつ（朝鮮松）に同じ。

はな-かごめ 花籠目【名】模樣の一。籠目の、目ごとに花形を加へたるもの。

はながさ 花笠【名】㊀花を頭に戴くを、笠を戴きたるに擬へていふ語。**うめのはながさ**(梅花笠)・**はすのはながさ**(蓮花笠)・「花の笠」・「紅葉(モミヂ)の笠」參照。㊁花の散りかかりたる笠。定頼集「限ありて雨にさはらぬ春なれば散る花笠を著てや行くらん」㊂造花を取り附けて飾りたる笠。**はすのはながさ**(蓮花笠)參照。其角「花笠を著せて似合はん人は誰」俗曲(傀儡子)「花が見たくば芳野へござれ。今は芳野の花ざかり。よいさ、よいさ、花ざかり。花笠著つれ、しやなしやなと」㊃紋所の一。花笠の形に象(カタド)れるもの。㊄〔植〕**びぢよざくら**(美女櫻)に同じ。


（はながさ ㊂）

はながさ-くらげ 花笠水母【名】〔動〕水母類に屬する腔腸動物。東海に產し、鐘狀にして、直徑二寸餘、觸手は鐘の外面より突出するものと、その緣より生ずるものとあり。放射管及び生殖線、共に六箇。頗る美麗なり。

はな-がさね 花重【名】劍法の一。謠曲(烏帽子折)「熊坂も、大太刀つかひの曲者(クセモノ)なれば、……紅葉重(モミヂガサネ)・花重(ハナガサネ)、三頭(ミツガシラ)より火を出して、鎬(シノギ)を削って戰ひしが」

はながさ-ぶんきやう 花笠文京【名】〔人〕**はながさろすけ**(花笠魯助)に同じ。

はながさ-やっこ 花笠奴【名】花笠を著けたる奴。元祿頃に流行せる風俗なり。

はな-かざり 鼻飾【名】鼻の一部に孔を穿ち、これに物品を貫きて、飾としたるもの。野蠻人の間に、往往行はる。**みみかざり**(耳飾)參照。

はながさ-ろすけ 花笠魯助【名】〔人〕戲作者兼狂言作者。越後國高田藩の侍醫東條氏の長男、儒者琴臺の兄。四代鶴屋南北の門に入りて、狂言作者となり、又、蜀山人に勸められて、文京と號し、戲作者となる。萬延元年、落魄して歿す。年七十六。

はな-がしら 鼻頭【名】「鼻の先」㊀に同じ。

鼻頭を反(ソラ)す【句】「鼻を高くす」に同じ。鵜鷺合戰「鬱むれば、よきぞと心得て、鼻頭を反し慢ずれども」

はな-かず 花數【名】『**ひとかず**(人數)㊁を見よ』花の一つとして數へらるること。萬葉「松の花花數にしも吾がせこが思へらなくにもとな咲きつつ」

はな-がす 花瓦斯【名】花やかなる裝飾を加へたる瓦斯燈。

はな-かぜ 鼻風【名】㊀**はなあらし**(鼻嵐)に同じ。承久軍物語「川おもて白浪ひるがへるに驚きて、鼻風吹きて、取って返す」㊁風邪のために發する鼻加答兒(カタル)。はなかぜ。〔鼻感冒〕

はな-かぜ 花風【名】陰曆三月頃、即ち櫻の咲く頃に吹く風。〔古語〕枕「三月ばかりの夕ぐれに、ゆるく吹きたる花かぜ、いとあはれなり」

はな-がた 花形【名】㊀花のかたち。花をゑがける模樣。花紋。雪女五枚羽子板「ほんじやり咲いて匂うた、梅の花形見さいな」㊁あばた。痘痕。大鏡「四十ばかりなる人の、色黑くて、額に、はながた打ちつきて」㊂『**りようくわ**(菱花)㊁を見よ』我國在來の金屬製の鏡。〔女の語〕㊃障泥(アフリ)の紐とほしの緒の座金(ザガネ)。㊄俳優などの、年若くて、花やかに扮(イデ)つ者。㊅年若くて人氣ある者。

はながた-ごま 花形獨樂【名】獨樂の一種。厚紙にて、梅・櫻・菊・桔梗などの花の形を造り、銀地・胡紛地に塗りて、美しく著色し、眞中を摘みて捻れば、廻るやうにせるもの。はなごま。

はな-がたみ 花筐【名】㊀花又は菜などを摘み入るる籠。はなかご。はなこ。古今「花がたみめならぶ人の數多あれば忘られぬらん數ならぬ身は」㊁香(カウ)の一。香(カヲリ)一段花やかにて艷あり、火末は辛し。㊂〔植〕**みみかきぐさ**(耳搔草)に同じ。

はながた-やくしや 花形役者【名】㊄の役者。はなやくしや。

はなかたる-かざをれえぼし 花信風折烏帽子【名】**ももちどりむすめだうじやうじ**(百千鳥娘道成寺)を見よ。

はながた-ゐづつ 花形井筒【名】紋所の一。二箇の井筒を組合はせて、八角形の如き花形とせるもの。

はな-がつみ 花勝見【名】〔植〕『**かつみ**(勝見)を見よ』**かまやまあやめ**(釜山菖蒲)に同じとも、**でんじさう**(田字草)に同じとも、**まこも**(菰)に同じともいふ。〔古語〕萬葉「をみなへしさき澤に生ふる花勝見かつても知らぬ戀もするかな」

はな-がつみ 花勝見【枕】語路によりて、かつ(且)にかけていふ。古今「みちのくの淺香の沼の花がつみかつ見る人に戀ひやわたらん」

はな-かづら 花鬘・花縵【名】㊀季節の花を、絲に貫きて、插頭(カザシ)にしたるもの。**はねかづら**(はね鬘)參照。萬葉「唐人(カラヒト)も舟を浮べて遊ぶとふ今日ぞわがせこ花縵せよ」㊁山の上に咲ける花を、花鬘に譬へていふ語。雲葉集「雲のゐる遠山姫の花かづら霞をかけて吹く嵐かな」㊂花にて飾れる鬘。㊃〔植〕烏頭(トリカブト)の一品種。蔓軟弱にして、蔓狀をなすもの。はなづる。㊄〔植〕**かのこぎ**に同じ。㊅〔植〕**はなのき**(花木)に同じ。㊆〔植〕**さみせんかづら**(三味線蔓)を云ふ。〔西國の方言〕

はな-がつを 花鰹【名】『花びらの如く見ゆるよりいふ』鰹節を、細かく薄くかき削りて、豆腐・浸物(ヒタシモノ)・酢物(スノモノ)などの上に振り掛けたるもの。

はな-がに 花蟹【名】〔動〕川の邊に棲む、一種の小く美しき蟹。一代女「肴に、東(アツマ)なる最上(モガミ)川に棲みける花蟹といへるを、鹽漬にして」

はな-がは 鼻革・紲革【名】覊(オモガイ)の一種。鼻の上に當る部分を革にて作りたるもの。宗五大雙紙「馬の鼻革十間」

はなかはど 花川戶【名】〔地〕東京市淺草區にある町。隅田川に沿ひ、一時、淺草寺の境內に屬せしことあり。歌舞伎十八番の隨一なる助六(スケロク)の狂言によりて、有名なり。

はな-がはら 花瓦【名】**あぶみがはら**(鐙瓦)に同じ。

はなかは-をどし 花革縅【名】鎧の縅し方の一。札(サネ)を、御免革(ゴメンガハ)にて包みたるもの。

はな-がひ 花貝【名】〔動〕**さくらがひ**(花貝)㊀に同じ。夫木「枝ながら渦なく浪もをらねばやちりぢり寄する千代の花貝」和合人「風荒き時は、浪うち揚げて、……花貝とて、彩色したる如き貝あり。櫻貝ともいふ」

はな-がへし 鼻返【名】草鞋(ワラヂ)の一種。運歩色葉集「鼻返、ハナガヘシ」

はな-かへで 花楓【名】〔植〕㊀楓樹(カヘデ)科に屬する落葉喬木。高さ六七丈に達し、雌雄異株にて、樹皮は白色を帶ぶ。葉は卵形又は卵狀圓形にして、下面白色、三裂又は不規則に淺裂す。北米に多く產し、我國にても、美濃・近江の兩國に自生す。はなかつら。はなのき。㊁**かのこぎ**に同じ。㊂**うりのき**(瓜木)㊀に同じ。

はな-がへり 花歸【名】新婦の、里歸(サトガヘリ)より歸ること。　「を見よ。

はな-かへる 花返る【句】**はな**(花)の條下

はな-かまずぶね 鼻不捗船【名】「最上(モガミ)川の鼻不捗船」を見よ。

はな-がみ 鼻紙【名】鼻汁を拭ふに用ふる紙。常に疊みて懷中するより、疊紙(タタウガミ)又、懷紙(フトコロガミ)といふ。德川時代には、小杉原・延(ノベ)・小菊などの紙を使用したり。はなかみ。醒睡笑「鼻紙を乞ひけるに」

はながみ-いり 鼻紙入【名】次條に同じ。二代男「四年半に七十六兩一歩、襟數十三、その他、鼻紙入(ハナガミイリ)二度」

はながみ-いれ 鼻紙入【名】**はながみぶくろ**(鼻紙袋)に同じ。胸算用「鼻紙入に、一歩(イチ)二つ三つ、豆板三十目ばかりも入れて」色道大鑑「近代、鼻紙入(ハナガミイレ)用ふること盛りなれば、下物(サゲモノ)は廢れげなり」

はながみ-さし 鼻紙差【名】當用の品を入れ、小菊の鼻紙を挾み、昔、鼻紙袋と共に懷中せしもの。これを用ふる場合には、鼻紙袋には、金子その他要用の品を入れたり。形、種種ありき。

はながみ-しろ 鼻紙代【名】次條に同じ。浮世風呂「その代り、只は使はぬ。鼻紙代として、錢五百づつ、月月に遣るはな」

はながみ-だい 鼻紙代【名】**はながみれう**(鼻紙料)に同じ。

はな-か-み-の-うめ 花香實梅【名】〔植〕梅の一品種。花の色うるはしく、香高く、實もまた佳なり。

はながみ-びたひ 鼻紙額【名】額の生際(ハエギハ)を、圓き形に、少し剃りたるもの。伊勢貞丈雜筆「額を四角にせしは、越前の追手といふ相撲(スマフ)のせしを、皆眞似てなり。昔は、鼻紙額とて、まろらかに少し拔きしなり」

はながみ-ぶくろ 鼻紙袋【名】昔、疊紙(タタウガミ)又は布帛・革などにて製し、外出の際に、鼻紙その他の藥品・金子・小楊枝などを入れて懷中せし袋。はながみいれ。かみいれ。懷中物。はながんぶくろ。**はながみさし**(鼻紙差)參照。三代男「ごろふくれんの鼻紙袋、裏は金(コガネ)なして鍛子(ドンス)」和合人「兼ねて何(ナン)ぞの用に立てんと、鼻紙袋に貯へおきたる富山(トヤマ)製の薄荷圓を」

はながみぶくろ-や 鼻紙袋屋【名】昔、鼻紙袋を賣りし家。蜘蛛の絲卷「鼻紙袋といふ物は、余の父の物語に聞きしは、寶永の比よりの物にて、……初は、絹にもあれ、木綿にもあれ、四角に縫ひ、括るべき紐を附け、內には途中用の物を入れしを、鼻紙袋とて、妻などに細工させ、今の如く(天明をさしていふ)、鼻紙袋屋といふもの無かりしといはれき」

はながみ-れう 鼻紙料【名】小額の心づけの金。はながみしろ。はながみだい。

はな-かんざし 花簪【名】❶造花にて飾れる簪。少女の插すもの。❷〔植〕菊科に屬する一年生の草。高さ一二尺に達し、無毛にして、その上部より數多の枝を出し、枝頭ごとに、一箇の大形なる頭狀花序を著く。葉は互生にして、短き線狀をなし、頭狀花序をなす。周邊の舌狀花は、淡紅色を呈し、艷麗、少女の花簪に似たり。原產地は墺太利。

はな-かんじ 花柑子【名】〔植〕**ぶしゆかん**(佛手柑)に同じとも、**ゆかう**(柚柑)に同じともいふ。或は又、花咲ける頃の柑子か。はなかうじ。拾遺「はなかんじ。五月雨にならぬ限はほととぎす何かは啼かん忍ぶばかりに」

はながん-ぶくろ 鼻紙袋【名】**はながみぶくろ**(鼻紙袋)の音便。

はな-がめ 花瓶【名】花を插すに用ふる瓶。はないけ。花瓶(クワビン)。枕「面白く咲きたる花を長く折りて、大きなる花瓶に插したるこそをかしけれ」

はな-がら 花殼・花柄【名】❶佛に供へたる花の、不用になりて棄つるもの。宇治「閼伽棚(アカダナ)の下に、花がら多くつもれり」❷僧侶などに施す錢。謠曲(關寺小町)「花がら賜(タ)べよ旅人、ちよっと賜(タ)べよ旅人」

はな-からくさ 花唐草【名】花の形をまじへ描きたる唐草模樣。

はな-がるた 花歌留多・花骨牌【名】花合(ハナアハセ)❷に用ふるカルタ。松・梅・櫻・藤・燕子花(カキツバタ)・牡丹・萩・薄・菊・紅葉・柳・桐の十二種を畫きて、一年十二箇月に配當し、各種四枚づつ、合はせて四十八枚より成り、一枚の價値に、二十點・十點・五點・一點の四等を分つ。德川時代に、西洋傳來のカルタの禁止せらるるに及びて、めくりと同時に案出せられたりといふ。

はな-ぎ 鼻木【名】❶牛の鼻に掛くる、環狀の木。〔桊〕和名「桊、牛乃波奈岐」❷**はなぐれ**(鼻樽)に同じ。〔端木〕

はな-ききやう 花桔梗【名】紋所の一。八重の桔梗の花を、正面より少し下にて見て、描けるもの。

はな-きっかふ 花龜甲【名】紋所の一。龜甲の輪廓中に、四瓣の花の正面を描けるもの。

はな-ぎぬ 花絹【名】唐草の模樣などを描ける絹。きぬざらさ。

はな-きり 花切【名】草木の花・枝などを切るに用ふる刃物。二代男「お氣に入らぬとて、花切の刃物にて打ちたまへば」

はな-きり 劓【名】五刑の一。鼻頭を切取るもの。はなそぎ。

はな-ぎり 花桐【名】紋所の一。桐の花を中央に五箇、その左右に三箇づつ描き、その下方に其の葉一枚を添へたるもの。

はな-きりん 花麒麟【名】名物切(メイブツギレ)の一。紫地又は白地に、金にて、唐花の蔓を啣へたる麒麟を織り出したる金襴。

はな-きる 劓る【動四他】劓(ハナキリ)の刑に處す。名義抄「劓、ハナキル・ハナサク・ハナカク」

はな-きれ 鼻切【名】**はなきれぐつ**(鼻切沓)の略。西宮記「鼻切、四位五位上官著㆓用之㆒、近代公卿及六位、任意著用、未㆑知㆓可否㆒」

はな-ぎれ 鼻切・端切【名】**はなぐれ**(鼻樽)に同じ。

はなきれ-ぐつ 鼻切沓【名】鼻高(ビカウ)の先端を殺ぎ取りたる形の沓。はなきれ。江次第「今日二藍下重、丸鞆帶、鼻切履」

はな-ぐ 花供【名】『高野山の學侶方の僧の、藥師會を行ひ、花を供ふる日と同日なるよりいふ』紀伊國高野山にて、毎年四月二十一日、弘法大師の像の衣を新しく替ふる式。寶龜院の住持、代代この事に預り、衣は檜皮(ヒハダ)色のを用ふ。

はな-くぎ 花釘【名】頭部を圓く造り、又その部分に花形の飾を附けたる釘。雅亮抄「御簾(ミス)を掛くることは、……長さは、長押(ナゲシ)の下よりしもの長押の花釘の隱るるほどに取るなり」

はな-ぐき 鼻莖【名】**はなばしら**(鼻柱)に同じ。和名「齃、波奈久岐。鼻莖也」

はな-ぐさ 花草【名】花の咲きてある草。謠曲(木賊)「草の原、露わけごろも、しほたれて、刈れや、刈れや、花草」

はなくさ-もち 花草餅【名】**はなくそだんご**(花糞團子)に同じ。

はな-くじ 花鬮【名】賴母子講(タノモシコウ)などにて、本籤以外に加へて、若干の金錢の配分に預り得る鬮。

はな-ぐし 花櫛【名】背に造花を取り附けて飾とせるさしぐし。少女の用ふるもの。

はな-ぐすり 鼻藥【名】❶子供をすかし宥むるために與ふる菓子など。❷『「目藥ほど」を見よ』少額の賄賂。**くちぐすり**(口藥)參照。癇癖談「人の世に賄賂(マヒナヒ)といひ、俗には、これを、鼻ぐすりとも、袖の下ともいふは」

鼻藥をかふ【句】鼻藥を與ふ。

はな-くそ 鼻糞・鼻屎【名】❶鼻孔の中にて、鼻液などの乾き固まりたるもの。❷『花供(ハナク)の轉訛かといふ』正月の餅花を、涅槃會(ネハンヱ)に煎りて、佛に供ふるもの。〔畿內の方言〕洛陽集「涅槃。鼻屎や濟度方便一つかみ」

鼻糞も尊みがら【句】「鰯の頭も信心から」に同じ。〔諺語〕

はなくそ-だんご 鼻糞團子【名】『**はなくそ**(鼻糞)❷を見よ』**いただきもち**(戴餠)に同じ。

はな-くた 鼻腐【名】鼻を傷ひたるために、聲の濁ること、又その人。浮世風呂「鼻くたの中年增」

はな-ぐつわ 花轡【名】紋所の一。二重圓の中に、同幅の二重の十を描けるもの。

はな-ぐはし 花細し【形二】花美し。花めでたし。終止形のままを、草木の名に冠らせて、枕詞の如くに用ふ。**いすくはし**(勇細し)・**なぐはし**(名細し)參照。〔古語〕紀「花ぐはし櫻のめでことめでは早くはめでず我がめづるこら」

はな-くばり 花配【名】**くばり**(配)❷に同じ。

はなくま-じやう 花隈城・花熊城【名】攝津國神戸市北長狹通(キタナガサドホリ)舊花熊村にありし城。永祿十年、織田信長の命によりて築造せしもの。天正三年、荒木村重の男村正ここに居りて、密かに毛利氏に通じ、石山本願寺に糧食を送り、後、本願寺の將雜賀(サヒガ)孫市等據守せしが、同八年、池田信輝に攻め落さる。

はな-くみこ 花組子【名】〔建〕花欄間(ハナランマ)にある、模樣附の組子。はなこ。

はな-ぐも 花蜘蛛【名】〔動〕**ひともしぐも**(火點蜘蛛)に同じ。

はな-ぐもり 花曇・養花天【名】櫻の咲く頃、水蒸氣多く、空の曇りがちなること。

爲尹千首「何となく雨にはならぬ花ぐもり咲くべき頃やきさらぎの空」

はなくやう 花供養【名】灌佛會に、花御堂（ハナミダウ）をしつらひて、佛に供養すること。釋迦如來誕生會「卯月八日の花供養」

はなぐら 鼻藏【名】きせる（煙管）を云ふ。〔武藏國秩父邊の方言〕

はなくらべ 花競【名】**はなあはせ**（花合）㊀に同じ。北條九代記「女房を召し集め、繪合・花くらべ、雛の遊に、夜日を費し」俳諧古選（一休）「目に立つや卯月八日の花くらべ」

はなくらべいせものがたり 花競伊勢物語【名】**はでくらべいせものがたり**（競伊勢物語）を見よ。

はなくり 花栗【名】栗の實を、皮をむきたる上、砂糖湯に浸して熟せしめ、花の形に切りたる食品。續五元集「さまざまに刻みてみよき栗生姜（クリシヤウガ）（こいふ句に） 投入（ナゲイレ）にする四五文が花」

はなくり 花繰【名】昔の軍陣用の旗竿に、蟬本（セミモト）に穿ちたる孔に通して、輪とし、旗を結び附くるための革緒。旗附（ハタツケ）の緒。

はなくり 鼻繰【名】**はなはな**（鼻繩）に同じ。字鏡集「紼、ウシノツナ・ハナクリ」

はなぐり 花栗【名】**ぢよしよく**（女色）を云ふ。〔羽後國秋田の方言〕

はなぐるま 花車【名】㊀**はなみぐるま**（花見車）に同じ。一說に、花を積み載する車。謠曲（野宮）「野の宮の秋の千草の花車、われも、昔に廻り來にけり」㊁紋所の一。車輪の周圍に、八片の花瓣を配したるものに、これと同形のものの一部を見せたるものを添へたるもの。㊂〔植〕**はんくわいあざみ**（樊噲薊）に同じ。

はなぐれ 鼻榑・端榑【名】材木の切端（キレジ）。はなぎれ。はなぎ。

はなぐろ 鼻黑【名】㊀魚鳥などの、鼻端の色の黑きこと、又その魚鳥など。㊁小面（コツラ）の黑き煉瓦。

はなくわい 花會【名】㊀職人又は博徒などの、知合の人より、金錢を貰ひ集めんがために催す會合。㊁唄・淨瑠璃・踊などの名びろめの會。

はなくわん 花環【名】**うちこみくわん**（打込環）に同じ。

はなぐわゐ 花慈姑【名】〔植〕**おもだか**（澤瀉）㊀に同じ。

はなげ 鼻毛【名】㊀鼻孔の內面に生ずる毛。㊁『次條を見よ』女に迷ひ溺るる性質、又その人。犬子集「吹き散るも知らぬば春の鼻毛かな」

鼻毛長し【句】女に迷ひ溺るる性質なり。鼻の下長し。

鼻毛にて蜻蛉を釣る【句】「阿房の鼻毛で蜻蛉繫ぐ」に同じ。〔諺語〕

鼻毛を數ふ【句】「鼻毛を讀む」に同じ。

鼻毛を拔く【句】だしぬく。たぶらかす。鼻を明（ア）かす。

鼻毛を延ばす【句】女色に溺る。女にたぶらかさる。似我蜂物語「鼻毛のばして月な見そ、桂をのこのまねぎやる」

鼻毛を讀む【句】『讀むは數ふる義。相手の男の鼻毛長くして、一一數へ得る程なる意』女が、相手の男の己に迷ひ溺れたるを見拔きて、思のままに弄ぶ。心中宵庚申「どこで鼻毛をよまれて居た」

はなげし 花芥子【名】花の咲きてある芥子。俳諧古選（親當）「花芥子の無常すすむる夕かな」

はなげぬき 鼻毛拔【名】**けぬき**（毛拔）に同じ。和名「鑷子、波奈介沼岐。拔㆓取毛髮㆒也」

はなけんかたばみ 花劍酸漿草【名】紋所の一。劍漿酸の劍さきを、横向の花の如き形に現はしたるもの。

はなこ 花籠【名】**はなかご**（花籠）に同じ。榮花「花こに花のあれば、例の尼君のかと仰せられて」

はなこ 花子【名】〔建〕**はなくみこ**（鼻組子）「に同じ。

はなこ 花粉【名】河內國道明寺の名物なるべけれど、實物詳かならず。若風俗「妹は、……、河內國道明寺に、十九の夏、衣を墨に染めしこの方、……、過ぎつる五月（サツキ）頃、音づれの文書きて、名物の花粉などを貽る志は、萬里に屆きて」

はなごけ 花苔・石蕊【名】〔植〕地衣類に屬する隱花植物。各地の山地に四時共に自生し、高さ二三寸に達し、白色にして淡黃色を帶び、繁く樹枝狀に枝を分つ。胞子器は、枝の頂端に生ず。煮て、酢味噌に和して、食ふを得。

はなごころ 花心【名】㊀移りやすくあだなる心。うはきごころ。うつりぎ。源氏「花心におはする君なれば」㊁花やかなる心。謠曲（西王母）「三千年（ミチトセ）に咲く花心の、をり知る春のかざしとかや」

はなござ 花茣蓙・花蓙【名】**はなむしろ**（花莚）㊀に同じ。膝栗毛「名栗の建場に著く。ここは、花ござを織って商ふ」

はなこざね 花小札【名】鎧の札の、櫻の花瓣に似たるもの。

はなことば 花詞【名】『英 Language of flowers 又 Floriography』西洋にて、種種の花に、その特質に基づく意味を含ませたるもの。例へば薔薇は香氣高きによりて、純潔なる愛の意を含ませ、雛菊を無邪氣の象徵、月桂樹を光榮の象徵とする類。希臘時代より行はれ、羅馬時代を經て、漸次發達し來れり。

はなごのみ 花好【名】花を好むこと。聖德太子繪傳記「心を和げ、善心に引き入れんための花ごのみ、老の榮耀と思ふかや」

はなこはや 花小早【名】**だてこはや**（伊達小早）に同じ。

はなこふじん 花子夫人【名】『鼻と花とは同音なるより、殊更に美人なるがごとくに言ひなせる語』鼻の大いなる女を、婉曲に嘲りていふ語。〔俚語〕

はなごま 花獨樂【名】**はながたごま**（花形獨樂）に同じ。

はなこんじやう 花紺青【名】繪具の一。コバルトの鑛石を碎き、反射爐にて熟したる上、細末とし、加里と硅石とを調合し、坩堝（ルツボ）に入れて熔して製したる一種の靑硝子を、更に碎きて、細末とし、水簸法などを行ひ、細粉の部分を集めて乾したるもの。

はなごんにやく 花蒟蒻【名】蒟蒻を、梅又は櫻の花形に打ち拔きたるもの。

はなごめに 花籠に【副】花の著きたるまま。花ぐるみ。花ながら。萬葉「わが宿の花橘を花ごめに玉にぞ我が貫（ヌ）く待たば苦しみ」

はなごよみ 花曆【名】昔、一年中の、種種の花の咲くべき季節を、春・夏・秋・冬の順を追ひて記し、その各條の下に、それぞれの花の名所を揭げて、遊覽に便じたるもの。例へば、東京ならば、二月は梅（龜井戶・杉田）、三月は櫻（向島・上野・道灌山・小金井）、四月は藤（龜井戶・目黑）、五月は菖蒲（堀切）などの類。八笑人「山、ふところに早蕨（サワラビ）の握拳を開くより、盛（サカリ）違へぬ花曆、年年歲歲相似ても」

はなごよみいろのしよわけ 花曆色所八景【名】長唄と常磐津節とにて、掛合に演ずる舞踊。八變化（ハチヘンゲ）中の一。惡七兵衞景淸の丹前姿、廓がよひの樣を描ける、江戶深川富岡（トミガヲカ）八幡宮の額畫の拔け出でたる心を示し、五條坂の阿古屋を配し、景淸の源賴朝刺殺の計畫を仕組みたるもの。通常「景淸」の名を以て呼ばる。

はなごよみはっせうじん 花曆八笑人【名】〔書〕瀧亭鯉丈の作れる滑稽小說。初篇・二篇・同追加・三篇・同追加・四篇・同追加、各上下二冊づつより成り、有德なる商人の惣領息子左次郎（サジラウ）と、その道樂友達七人とが、同氣相求め、年中茶番に遊び暮して、失策を演ずる趣を述べたるもの。春・夏の前半のみにて、後半は世に出でざりき。略して、單に八笑人ともいふ。

はなごろも 花衣【名】㊀櫻襲（サクラガサネ）の衣。新後拾遺「今日といへばはや脫ぎかへぬ花ごろも散りて幾日のかたみなるらん」㊁花やかなる衣。一說に、花染（ハナゾメ）の衣。**ひとはなごろも**（一花衣）參照。玉葉「花ごろもかささぎ山に色變へてもみぢの洞に月を眺めよ」

はなごゑ 鼻聲【名】㊀淚に咽びて、鼻のつまりたる聲。「鼻をかむ」㊁參照。源氏「しばしば押拭ひ、鼻打ちかみたまふ。……御息所（ミヤスンドコロ）も、鼻ごゑになりたまひ

て」㊁鼻に掛りて濁りたる聲。鼻腔に共鳴せしめて發する音聲。（宇治）「聲は、鼻聲にて、高くて、物言へば、一うち響きて聞えける」

はな-さかき 花榊【名】〔植〕しきみ(樒)を云ふ。〔伊勢國の方言〕（松の落葉）「昔、さかきとて、神わざに用ひし木は、樒にて、豊受(トユ)宮にては、これを花さかきといふよし、故荒木田久老神主のいひしも、ここによくかなへり」

はなさか-ぢぢ 花咲爺【名】御伽噺の一。犬を愛せし爺、その犬の敎によりて、地中より寶を得しを、隣家の多慾の爺羨みて、その犬を借りて、寶を掘り當てんとして得ず、却りて汚物を掘り出ししより、怒りて、その犬を殺し、榎の下に埋めしに、犬主の爺、その榎を貰ひ受けて、臼に造り、又、多くの寶を搗き出ししかば、多慾の爺、その臼を借りて用ひしに、この度も汚物のみ出でしより、臼を燒き棄てしに、犬主の爺、その灰を掻き集め、枯木に振り掛けて花を咲かせ、國主より褒美の品を授けられしを、多慾の爺も、同じく灰を振り掛けしに、國主の眼を害し、重く罰せられたりといふ筋のもの。

はな-ざかり 花盛【名】㊀花の盛りに咲きたること、又その頃。滿開。㊁容色の最も美しき頃の年齡。（若風俗）「その頃、村山座の花ざかり、藤村初太夫、すぐれて美しく、時勢粧(イマヤウスガタ)を舞ふ事を得たり」㊂花やかなること。景氣よきこと。（胸算用）「昔より、食酒(ケザ)を呑む者は、貧乏の花盛といふ事あり」

はな-さき 鼻先【名】「鼻の先」㊀㊁に同じ。（八笑人）「かの侍の鼻先へ、によいと杖を突き出せば」

はなさき 花咲【名】〔地〕㊀根室國五郡の一。根室支廳の所管。㊁根室國根室半島の南岸に在る港。根室町と相距ること一里半なれども、その一部に編入せらる。水面氷結することなきため、冬季、根室港に代りて、貨物の陸揚場となる。

はな-さぎ 花詐欺【名】花合(ハナアハセ)㊁にことづけ、共謀して、金錢を欺き取ること、又その人。

はなさき-じあん 鼻先思案【名】はなさきふんべつ(鼻先分別)に同じ。

はなさき-じろ 鼻先白・玉鼻尖【名】馬の鼻先の白きもの。

はなさき-ふんべつ 鼻先分別【名】『「鼻の先」㊁を見よ』目前の事のみによりての分別。間(マ)にあはせの思案。遠き慮のなきこと。のどもとじあん。はなのさきあんない。はなのさきじあん。はなのさきぢゑ。はなのさきふんべつ。はなもとじあん。はなのさき。淺慮。

はなさく-まつ 波那佐久松【名】〔書〕古歌によりて、南朝三代の事實を論じ、殊に長慶天皇の事につきて、詳密に辨じたるもの。一卷。塙保己一の著。

はな-ざくら 花櫻【名】㊀〔植〕櫻の一品種。花の、重瓣・淡紅色なるもの。（空穗）「花ざくらのいとおもしろき花びらに」（源氏）「一重散りて、八重咲く花ざくら、盛過ぎて」㊁『はな(花)は接頭語』櫻を、その花を賞するにつきていふ語。（寛平后宮歌合）「鶯はうべも鳴くらん花ざくら咲くと見しまにうつろひにけり」㊂襲(カサネ)の色目の一。表は白、裏は靑。春用ふ。（增鏡）「花櫻のあはひ匂はしきに、山吹の上著、裳ひきかけて」

はなざくら-くえう 花櫻九曜【名】紋所の一。櫻の花九箇を、九曜の星の如くに配置したるもの。但馬國舊出石(イヅシ)藩仙石家の定紋。

はな-ざくろ 花石榴【名】〔植〕『はな(花)は接頭語』石榴の一種。花の重瓣にして、實を結ばぬもの。(實(ミ)石榴に對して)

はな-さし 花插【名】はなづつ(花筒)に同じ。（織留）「花さしに、鳶尾(シャガ)を使はせず」

はな-さふらん 花泊夫藍【名】〔植〕泊夫藍の一品種。秋、球根を植込み、早春、高さ三寸程にして、白・黄・紫・淡紅・絞等の愛らしき花を開く。

はな-さま 花狹間【名】花形模樣附の格狹間(カウザマ)。但し今は花欄間(ハナランマ)をもいふに至れり。（淀川）「玉章(タマヅサ)をこよひ鼠に引かれけり（こある句に）枝に油や塗りし花狹間」

はな-さま 鼻樣【名】『はな(鼻)㊂を見よ』自己を誇り指していふ語。はなばう。

はな-さん 鼻樣【名】㊀鼻の、度を越えて高き人、又は鼻の無き人などを、戯れて呼ぶ稱。〔俚語〕㊁『前條を見よ』自慢する人。〔俚語〕

はな-ざら 花皿【名】けこ(華筥)に同じ。（運歩色葉集）「花皿、ハナザラ」

はな-ざる 鼻猿【名】〔植〕てんぐざる(天狗猿)に同じ。

はな-ざろん 花品字梅・鴛鴦梅【名】〔植〕品字梅(ザロンウメ)の一品種。一朶に數花を著くるもの。

はなし 話・咄・噺【名】『咄の字は、別義の漢字を、口より出す義に取りなして用ひしもの、噺の字は、口より新しく出す意なる和字』㊀はなすこと。ものがたり。談話。㊁おとしばなし。輕口噺(カルクチバナシ)。落語。（河原逹引）「咄・萬歳(マンザイ)・居合拔(ヰアヒヌキ)」㊂うはさ。評判。㊃言説のみにて、實際の事にてはあらざること。「まるで話のやうな騷」「單に一場の話に止(ト)まる」

話が下(シモ)に下(サガ)る【句】談話が、次第に下(シモ)がかる。

話が附く【句】相談まとまる。

話替(カハ)って【句】長き物語の中途にて、局面の轉ずる場合にいふ語。

話が見えず【句】相語るに、闇中にて氣乘(キノリ)せぬ時にいふ語。（箱根靈驗躄仇討）「何を言うても、この闇では、一向に咄が見えない」

話が解(ワカ)る【句】互に理解す。相談ととのふ。

話食(ク)はう【句】『はなしかう(話から)を見よ』小兒など、話に聞きたる飮食物を、即座に飮食せんとせがむ。（浮世風呂）「咄食はうで、どうも困ります。もうちっと聞譯がありさうなもんでございますが」

話では無し【句】云云の程度にも達せず。「引合った話では無し」「それ處の話ではなし」

話にならず【句】かれこれと言ふだけの價値なし。あまりの事に、あきれて、物が言はれず。（娼妓絹籭）「話にならぬ、けちな仕儀」（膝栗毛）「いや、もう、話にもならぬ、飛んだ目に逢った」

話の腰を折る【句】「腰を折る」㊁を見よ。

話半分【句】『話と半分とは、頭韻を成す』物事は、とかく誇大に傳へらるるが故に、事實は話の半分ほどの程度なりと思ふがよし。〔諺語〕「話半分に見積っても」

話を賣る【句】「韋駄天(ヰダテン)はお話を賣る」を見よ。

話を附く【句】相談をまとむ。掛け合ひて、事の結末を附く。

早い話が【句】簡單に話せば。手取早(テツトリバヤ)く言へば。

は-なし 齒無【名】齒の拔け落ちて、生えてあらぬこと、又その人。はぬけ。

齒無の大蛸(オホダコ)【句】㊀齒の無き癖に、蛸を食はんとすること。㊁柄(ガラ)に似合はぬ事を企つること。〔諺語〕

齒無の骨だくみ【句】『「法師(ホフシ)の櫛だくみ」を見よ』㊀齒の無き癖に、骨をも食はんとすること。㊁前條に同じ。〔諺語〕

はなし 放【接尾】或事を爲したる儘に捨ておく意。「遣りばなし」「作りばなし」

はなし-あひ 話合【名】話しあふこと。●相談。談合。（八笑人）「それで善(イ)いとしておいて、話合は、どうだ」

はなし-あひて 話相手【名】㊀話のよく合ふ相手。睦じく話しあふ仲間。はなしづれ。はなしなかま。あひくち。㊁相談する相手の人。相談相手。

はなし-あふ 話合ふ【動四自】互に話す。かたらふ。相談す。

はなし-いる 放入る【動下二他】自由に入り込ましむ。（太平記）「使、先づ彼所に蒞みて、大勢を庄家に放し入れて、譴責する事、法に過ぎたり」

はなし-うち 放打【名】放召人(ハナシメシウド)を討ち取ること。（甲陽軍鑑）「武邊の時も、はなし打の時も、數度、少しづつ手負ひ」

はなし-うま 放馬 【名】 はなちうま（放馬）に同じ。

はなし-か 話家・咄家・噺家 【名】 話㊁を業とする人。しか。落語家。

はなし-から 話から 【名】『話買はうの義か。かはかう（肩買）及び「話（ハナ）喰はう」參照』或物を近日の内に買ひ與へんといふに、小兒の滿足せずして、卽時にその物をほしがること。

はなし-がうしや 話巧者 【名】 はなしじやうず（話上手）に同じ。

はなし-がき 放書 【名】 はなちがき（放書）に同じ。

はなし-かく 話掛く 【動下二他】 話をしかく。

はなし-がひ 放飼 【名】 ㊀はなちがひ（放飼）に同じ。基佐集「夏の野に大野の原の草しげり放飼なる駒も勇める」 ㊁はうじやう（放生）に同じ。㊂放任しておくこと。のばなし。浮世風呂「何でも角（カ）でも言ひなり次第、離飼といふ物だから」

はなし-がひ 話甲斐 【名】 話すだけのかひ。話したる效果。いひがひ。

はなし-がめ 放龜 【名】 はなちがめ（放龜）に同じ。

はなし-きやうげん 離狂言 【名】 一幕又は一番づつ離して演ずる、芝居の狂言。（續（ツヅ）き狂言に對して）

はなし-ぐさ 話種 【名】 話の種。かたりぐさ。話柄（ワヘイ）。

はなし-ぐせ 話癖 【名】 話す時の言葉の癖。その人に特有なる話し方。

はなし-くたびる 話草臥る 【動下二自】 話し續けたるためにくたびる。膝栗毛「乘合の人人も噺しくたびれ、めいめい、柳ごりに肘をもたげて、居ねぶりをするもあり」

はなし-くち 話口 【名】 ㊀話の小口（コグチ）。話の端緒。㊁話の樣子によりて推察せらるる眞意。はなしぶり。くちぶり。

はなし-こむ 話込む 【動四自】 興に乘じて、時間の立つも覺えず話しつづく。

はなし-ごや 話小屋・咄小屋 【名】 話㊁を興行する小屋。

はなし-ごゑ 話聲 【名】 話しあふ聲。談話の聲。

はなし-じっとく 放十德 【名】 はなちじっとく（放十德）に同じ。

はなし-じやうず 話上手 【名】 話を巧にすること、又その人。くちがうしや。能辯。（話下手（ハナシベタ）に對して）

はなし-しゆう 話衆・咄衆・放衆 【名】 織田・豐臣時代以來、主君に侍して、話の相手となり、その徒然を慰めし者。はなしのしゆう。はなしのもの。**はなしばん**（談伴）參照。甲陽軍鑑「信玄公御放（ハナシ）衆小笠原慶安齋」

はなし-ずき 話好 【名】 人と話しあふを好むこと、又その人。

はな-したかげ 花下蔭 【名】 はなかげ（花蔭）に同じ。〔古語〕盛通集「折るも惜し見捨てて歸る空もなし花下蔭に身を盡してん」

はなし-だす 話出す 【動四自】 話しはじむ。かたり出づ。

はな-しづく 花雫 【名】「花の雫」に同じ。

はなし-づく 話盡 【名】 話合（ハナシアヒ）を十分に盡しての上にて決すること。

はな-じっぺい 鼻竹篦 【名】 鼻を、竹篦㊁にて打つこと。狂言（盤山伏）「まだ性（シヤウ）が有る。鼻じっぺいを當ててやらう」

はなし-っ-ぺた 話下手 【名】 はなしべた（話下手）の音便。

はな-しづめ 花鎭 【名】 次條の略。新拾遺「のどかなる春の祭の花しづめ風をさまれとなほ祈るらし」

花鎭の祭 【句】 ちんくわさい（鎭花祭）に同じ。

はなし-て 話手 【名】 ㊀話をなす人。㊁話の上手なる人。

はなし-づれ 話連 【名】 はなしあひて（話相手）㊀に同じ。

はな-じどうしや 花自動車 【名】 花電車と同樣に飾り立て、祝日又は祭日などに運轉する自動車。

はなし-とぎ 話伽 【名】 面白き話をして、御伽をすること。新永代藏「伊勢參宮の道中、話伽にと、たってさそはれしを」 諸道聽耳世間猿「近所の附合も絶えて、近所の話伽には」

はなし-どぢやう 放鰌 【名】 捕へ又は買ひたる鰌を、追善のために、池・川などに放し遣ること、又その鰌。放生（ハウジヤウ）の料とする鰌。

はなし-どり 放鳥 【名】 はなちどり（放鳥）㊁に同じ。俳諧新選（止角）「捕って賣る人あればこそはなし鳥」

はなし-なかま 話仲間 【名】 はなしあひて（話相手）㊀に同じ。

はな-しね 花稻 【名】 神に手向くるために、米を紙に包みて、木の枝などに結び附け、幣（ヌサ）のごとくにしたるもの。一說に、さんまい（散米）に同じと。はなよね。夫木「山櫻吉野まうでの花しねを尋ねん人の袖に包まん」

はなし-ねいり 話寢入・咄寐入 【名】 話しながら寐入ること。艷狩劔本地「北の方も旅づかれ、咄寐入の袖枕」

はなし-の-しゆう 話衆・咄衆 【名】 はなししゆう（話衆）に同じ。きのふはけふの物語「關白秀次公の御話の衆に、曾呂利と申す者、あまりによく話をつかまつるゆゑ」

はな-しのぶ 花葱 【名】〔植〕 ㊀花葱科に屬する多年生の草。高さ一二尺。葉は九箇乃至二十一箇の小葉より成る羽狀複葉にて、各小葉は披針形をなし、花は穗をなして、莖頂に生じ、鮮青色を呈す。㊁はくせん（白鮮）に同じ。

はなしのぶ-くわ 花葱科 【名】〔植〕 顯花植物・被子類・雙子葉門・合瓣花區の一科。すべて草本にして、主として西部亞米利加に多く分布し、美花を開くもの多し。くわにんくわ。

はなし-のみ 刃無鑿 【名】 鑿の一種。刃鈍く、解船などに用ふるもの。

はなし-の-もの 話者・咄者 【名】 はなししゆう（話衆）に同じ。老人雜話「承禎の子は、四郎殿とて、太閤の時は咄の者に成りて、知行二百石なり」

はなし-はじめ 話初・噺初 【名】 せかいさだめ（世界定）に同じ。

はなし-ばん 談伴 【名】 德川幕府の職制の一。廣く老練の徒を選みて補し、直日を定め、交番に將軍の御前に伺候し、その談話に侍せしもの。話衆（ハナシシユウ）の遺制なり。

はなし-はんぶん 話半分 【句】 はなし（話）の條下を見よ。

はなし-ぶり 話振 【名】 ㊀話す樣子。㊁はなしくち（話口）㊁に同じ。

はな-しへ 鼻しへ 【名】 鼻の病の一種。鼻淵（ビエン）の類なりと。〔古語〕字鏡「鼽、鼻病也。波奈志戸」

はな-しべ 花蘂 【名】 しべ（蘂）に同じ。

はなし-べた 話下手 【名】 談話の拙きこと、又その人。訥辯。（話上手（ハナシジヤウズ）に對して）

はな-しほ 花鹽 【名】 型に詰めて、種種の花形に製したる燒鹽。播磨國赤穗の名產。二代男「雪に深草の花鹽を交ぜて」

はなし-ぼん 話本・咄本 【名】 話㊁を記し集めたる本。

はな-しぼり 花絞 【名】 花模樣をあらはしたる絞染。

はなし-めしうど 放召人 【名】 武家時代に、罪ある貴族又は僧侶などを、刑具を用ひず、一所に拘置せしこと、又その刑に處せられたる者。**はなしうち**（放討）參照。太平記「萬里小路（マデノコウヂ）中納言藤房・六條少將忠顯二人をば、主上に近侍し奉るべしとて、放召人のごとくに、六波羅にぞ留め置かれける」

はなし-めぬき 放目貫 【名】 刀の、目釘（メクギ）の上を卷かざるもの。禮式用の刀は、目釘の走り脫くるを防ぐ必要なきため、この造り方に依る。はなちめぬき。長町女腹切「放目貫の性（シヤウ）よしと」

はな-しやうぶ 花菖蒲 【名】 ㊀〔植〕 はなあやめ（花菖蒲）㊀に同じ。二代男「淺澤の杜若（カキツバタ）、中津川の花菖蒲」 ㊁鳶尾（イチハツ）科に屬する多年生の草。高さ二三尺に達し、葉は劒狀にして尖り、平行脈を有し、中肋脈は葉の兩面に於て隆起し、花は大形、溪蓀（アヤメ）のに似て、濃紫・淡紫・青・白・斑等の諸色あり。觀賞用に供す。〔玉蟬花〕

はな-じゆんさい 花蓴・莕菜 【名】〔植〕 あさざ（莕菜）に同じ。

はなしり-ぐさ はなしり草 【名】〔植〕 ちどめぐさ（血止草）に同じ。

はな-しる 鼻汁・洟 【名】 鼻孔内面の粘膜より分泌する粘液。はなみづ。はな。

はな-じろ 鼻白 【名】 ㊀魚・鳥などの、鼻端の色の白きこと、又その魚・鳥など。㊁〔動〕鰤（ブリ）の幼き（主として二歲頃）もの。

㊂『「鼻、白(シロ)む」を見よ』驚きて臆すること。一說に、**はなつき**(鼻突)㊀に同じと。曾我「彌五郎、ひまなくつっと入り、瀧口が小股をかいて、鼻じろにおし据ゑたり」曾我扇八景「筋違橋(スヂカヒバシ)の見附にて、鼻じろに、はたと行き違うたり」

はな-しろむ 鼻白む【句】**はな**(鼻)の條下を見よ。

はなす 離す【動四他】㊀附著してある物を解き別く。離れしむ。分(カツ)つ。はがす。はがつ。はなつ。萬葉「上野(カミツケヌ)佐野の船橋とりはなし親は離(サ)くれどわは離(サカ)るがへ」㊁遠く隔て遣る。離れしむ。はなつ。とほざく。〔放す〕著聞「守屋、……箭を放さしむるに、太子の御鎧に當りたり」㊂捕へおきたる動物の束縛を解きて、自由にせしむ。ゆるし遣る。はなつ。はなし飼ふ。〔放す〕「鳥をはなす」㊃除き去る。取り去る。取拂ふ。撤す。〔放す〕

はなす 話す・咄す【動四他】㊀言葉にあらはす。かたる。告ぐ。言ふ。㊁語りあふ。談話す。㊂『遊女を呼びて話し遊ぶよりいふ』遊女を買ふ。〔遊廓の語〕

話すに足る【句】話相手とするだけの價値あり。語るに足る。はなせる。

話せない【句】何を話しても、張合なし。共に語るに足らず。

話せない龜の子【句】『「話す」を、放龜(ハナシガメ)の意の「放す」に言ひかけたる語』何を話しても、張合なき人。共に語るに足らぬ人。

話せる【句】「話すに足る」に同じ。

はな-すがた 花姿【名】㊀花の姿。㊁花のごとき、美しき姿。「年は二八の花姿」

はな-ずき 花好【名】花を好むこと。花を愛すること。狂言（花盗人）「愚僧も花ずき、そなたも花をすかるれば」

はな-すげ 花菅・知母・水香稜【名】〔植〕百合(ユリ)科に屬する多年生の草。葉は根莖より生じ、細長く、深綠色を呈し、葉間より花莖抽出し、高さ二尺に達し、その上部に、夏季、淡紫色の六瓣花、穗狀花序をなして開く。庭園に栽培し、根莖は藥用に供す。からすすげ。からすのすすき。ちも。やまし。やますげ。やまところ。

はな-すすき 花薄【名】㊀『**はな**(花)は接頭語』穗に出でたる薄。をばな。萬葉「めづらしく君が家なる花すすき穗に出づる秋の過ぐらく惜しも」㊁襲(カサネ)の色目の一。表は白、裏は薄縹(ウスハナダ)、秋用ふ。

はな-すすり 鼻啜・洟啜【名】㊀鼻汁をすすること。名義抄「洟、ハナススリ・ハナタリ・ススハナ」㊁『「鼻をかむ」㊁を見よ』深く心に感じて、鼻汁をすすり上げつつ泣くこと。すすりなき。源氏「忍びがたげなる鼻すすりを聞きたまひて、われも、忍びやかに打ちかみたまひて」

はな-すぢ 鼻筋【名】眉間(ミケン)より鼻の尖端までの線。鼻柱のすぢ。はなみち。大織冠「乳房を啣(フク)む口元も、目つき・鼻筋、やあ、金松(キンマツ)ではないかいの」

鼻筋が通る【句】鼻筋きはだちて、容貌を引立たしむ。五十年忌歌念佛「黑目がちなる目の中に、鼻筋通って櫻色」

はな-ずはう 花蘇枋・紫荊【名】〔植〕荳(マメ)科に屬する落葉喬木。高さ一丈餘に達し、葉は圓き心臟形にして、鋭頭を有し、春季、葉に先だちて、節上に紅紫色の不整齊花簇り開く。果實は莢にて、種子は豆より小し。原產地は支那。すはうのき。すはうばな。はなむらさき。

はな-すはま 花洲濱【名】紋所の一。洲濱の紋をくづして、花の如くせしもの。

はな-すひ 花吸【名】〔動〕**めじろ**(目白)を云ふ。〔薩摩國の方言〕

はな-ずまふ 花相撲【名】『もと木戸錢を取らずして見物せしめ、ただ、その纏頭(ハナ)のみを受けしよりいふ。**はなのう**(花能)參照』春・夏の二期に興行する本場所のもの以外に、練習の意味にて、三日以上八日以內を期間として興行する相撲。

はな-ずり 花摺【名】萩又は露草の花を衣に摺りつけて、色を染め出だすこと。新千載「露分くる袖にぞ移る紫の色濃き野べの萩が花ずり」

はなずり-ごろも 花摺衣【名】花摺の衣。すりごろも。新古今「秋萩を折らでは過ぎじ月草の花摺衣露に濡るとも」續千載「武藏野はなほ行く末も秋萩の花ずりごろも限知られず」

はな-ぜうえう 花逍遙【名】花見のために遊びあるくこと。〔古語〕古事談「惟成秀才、雜色(ザフシキ)たる時、花逍遙に、一條一種物しけり」

はな-ぜきしやう 花石菖【名】〔植〕百合(ユリ)科に屬する多年生の草。各地の濕潤なる岩石上に叢生し、葉は短小なる根莖より出で、線形にして平滑、二列に排列し、深綠色を呈す。六七月頃、花莖出でて、高さ五六寸に達し、その上部に、白色にして、背部に淡紫色を帶びたる總狀花を開く。いはしやが。いはぜきしやう。

はな-せせり 花拼・花蝶【名】〔動〕**はまくりむし**(濱栗蟲)に同じ。

はな-せん 花氈【名】**はなまうせん**(花毛氈)の略。一代男「車三輛の上に、花氈を敷かせ」

はな-せん 花錢【名】**のぶせ**(野布施)に同じ。

はな-せん 鼻栓【名】〔建〕一の木の端に平枘(ヒラボソ)を附し、他の木の枘孔を貫きて、なほ突出するやうにしたる時、その突出部に打ちて固むる栓。

はなせる 話せる【句】**はなす**(話す)の條下を見よ。

はな-そぎ 劓【名】**はなきり**(劓)に同じ。

はな-そげ 鼻殺【名】鼻のそげ落ちてあること、又その人。はなかけ。若風俗「鼻そげにても」

鼻殺が、三年醫(エクボ)に見えた【句】「瘂痕(アバタ)も醫(エクボ)」に同じ。〔諺語〕

鼻殺にも醫(エクボ)【句】㊀前條に同じ。〔諺語〕㊁醜き者にも、長所はあり。〔諺語〕

はな-その 花園【名】花の咲く草木を多く培養せる園。はなばたけ。花圃。花園(クワエン)。

はなぞの 花園【名】〔地〕㊀古、近江國の志賀の都にありし地。新古今「あすよりは志賀の花園稀にだに誰かは訪はん春のふるさと」謠曲（志賀）「花の吹雪(フブキ)の志賀の山越えても同じ花園の里も春めく近江の海の」㊁山城國葛野(カドノ)郡にある村。即ち花園上皇の、その風景を愛して、離宮を營みたまひし處。上皇、後、離宮を捨てて寺となしたまへるもの、即ち今の妙心寺なり。㊂山城國愛宕(オタギ)郡岩倉村の大字。修學院(シユガクヰン)村大字高野(タカノ)の西北。花園上皇の、前項葛野郡の花園に離宮を營まれし時、替地として、清原良枝に賜ひし處。花園踊を以て著る。

はなぞの 花薗【名】**はなぞのぶし**(花薗節)の略。

はなぞの-さだいじん 花園左大臣【名】〔人〕**みなもとありひと**(源有仁)に同じ。

はなぞの-てんわう 花園天皇【名】〔人〕第九十五代の天皇。御名は富仁(トミヒト)。伏見天皇第二の皇子。御母は顯親門院藤原季子。在位十一年(紀元一九六八年—一九七八年)。貞和四年崩ず。壽五十二。

はなぞの-ぶし 花薗節【名】淨瑠璃の一派。薗八(ソノハチ)節に關係あるものにて、豐後節より出でて、劇場にも用ひられしものならんといふ。

はなぞの-やま 花園山【名】〔地〕三河國碧海(ヘキカイ)郡にある山。堀太「細川の岩間の氷とけながら花園山の峯のかすめる」

はなぞの-をどり 花園踊【名】『山城國花園の地にて行はれしよりいふ』**とうろうをどり**(燈籠踊)に同じ。

はな-ぞめ 花染【名】㊀櫻の花の色に染めたる衣。「花の袖」參照。新拾遺「夏衣たちかへてしも忘れぬは別れし春の花染の袖」㊁露草の花にて染むること、又その染めたる物。**はないろ**(花色)㊁參照。古今「世の中の人の心は花染のうつろひやすき色にぞありける」

はなぞめ-ごろも 花染衣【名】花染の衣。はないろごろも。千載「棚機に花染衣脫ぎ貸せば曉露のかへすなりけり」

はな-ぞろへ 花揃【名】美しき物を集め揃ふること。若風俗「坂田小傳次・山本左源太、振袖の色香を含ませ、梅か、櫻か、これぞ花ぞろへ」

はな-だ 縹・花田【名】『露草の花にて染むるよりいふとぞ』㊀**はなだいろ**(縹色)の略。

紀「紺、フカキハナダ」　催馬樂（石川）「花田の帶の中は絕えたる」❷襲（カサネ）の色目の一。表も裏も縹色。但し宿老の人は、裏を白くすといふによりて、表・裏共に縹色なるは、特に圓縹（マルハナダ）と呼ぶ。四季共に用ふ。❸〔動〕なまこ（海鼠）㊀を云ふ。〔女の語〕

縹の絲【句】縹色の絲（歌に、青柳に譬へていふ）。躬恒集「青柳の縹の絲をより合はせ絕えずも鳴くか鶯の聲」

はなだい 花代【名】『はな（花）〔十二〕を見よ』藝・娼妓などに、纏頭として與ふる金。はな。若風俗「都にも、舞臺子の遊は、稀に花代も、一歩づつに、なべて極め」新永代藏「堺町・木挽（コビキ）町の野郎も、大坂より入れかはる事にて、花代の高いといふまでにて、さして變らぬ遊興と」

はなだい 花臺【名】だし（山車）を云ふ。〔土佐國の方言〕

はなだいろ 縹色【名】薄き藍色なる染色。濃き空色。はないろ。はなだ。つゆくさいろ。淺葱（アサギ）。花田（クワデン）。

はなだいろをどし 縹色縅【名】鎧の縅しの方の一。縹色の絲を用ひたるもの。はなだをどし。

はなたか 鼻高【名】❶鼻の高きこと、又その人。鷺「目細（メボソ）・鼻高・櫻色」❷てんぐ（天狗）に同じ。❸びかう（鼻高）に同じ。❹練歩（レンポ）の一。江次第抄「練作法有レ二、謂、笏引・鼻高也」

はなだか 鼻高【名】❶前條㊀に同じ。❷『「鼻高し」を見よ』自慢らしき樣子。得意なる態度。狹衣「鼻高に、きらきらしき樣にやあらん」

はなたかぐつ 鼻高沓【名】びかうぐつ（鼻高沓）に同じ。

はなたかだか 鼻高高【貌】いかにも自慢らしきさま。得意なるさま。ほこりか。

はなたかまつり 鼻高祭【名】『當日の陵王の舞に用ふる假面は、鼻高きよりいふ』每年、四月八日、大和國奈良の興福寺の中門にて行ふ灌佛會の俗稱。この日、伶人の舞樂あり。

はなたかめん 鼻高面【名】鼻を高く造りたる假面。天狗の假面。

はなだきめうが 花抱蘘荷【名】紋所の一。蘘荷の花を、左右相向はしめて、抱き合ふやうに描けるもの。

はなだぐさ 縹草【名】〔植〕つゆくさ（露草）に同じ。篠目抄「夏秋をかくてぞ露のはなだぐさ色に餘れる言の葉なれば」

はなだけ 鼻茸【名】〔醫〕びじよう（鼻茸）に同じ。下學集「齆鼻、ハナタケ」

はなだし 花山車【名】花を飾りし山車。

はなたき 鼻叩【名】鼻の上の白粉（オシロイ）を滑かにするに用ふる、小き眉掃（マユハキ）。

はなたちあふひ 花立葵【名】紋所の一。葵の花の左右に、その葉一枚づつを添へたるもの。

はなたちばな 花橘【名】『夏蜜柑の異名、あへ橘の異名、百兩金（カラタチバナ）の異名など、種種の說あれど、はな（花）は、はなあやめ（花菖蒲）・はなすすき（花薄）などのに同じかるべし。接頭語のはな（花）㊀參照』❶花の咲きてある橘。記「花橘は、上枝（ホツエ）は鳥ゐがらし」古今「今朝（ケサ）來鳴きいまだ旅なるほととぎす花橘に宿は借らなん」❷襲（カサネ）の色目の一。表は朽葉、裏は青。五月用ふ。增鏡「花橘の下がさねを著たまへりし」❸香（カウ）の一。質は眞南蠻（マナバン）、香（カヲリ）早く出で、輕く、薄く、柔かに、涼しく、匂は早く消ゆ。❹紋所の一。柄に著ける六箇づつの小橘花を向ひ合はせ、その下に、一箇の大橘花を添へたるもの。

はなだつ 花立つ【動四自】花開く。〔古語〕夫木「梅が枝はまだ花だたず雪の中に匂ばかりは風に知られて」

はなたて 花立【名】はなづつ（花筒）に同じ。

はなたで 花蓼【名】〔植〕蓼科に屬する一年生の草。高さ二尺乃至四尺、下方は多少橫臥す。葉は、やや闊く、楕圓形にして、銳尖を有し、全緣、兩面共に微毛生じ、夏季、鏑形・淡紅色にして、五裂・平開せる小花、穗狀花序をなして開く。各地に產す。

はなたば 花束【名】『佛 Bouquet』草花を、數本括り合はせたるもの。

はなだばうし 縹帽子【名】天台・眞言兩宗にて、僧侶中、一定の資格ある者の、裹頭（クワトウ）に用ひし、縹色の帽子。花の帽子。

はなだな 花棚【名】花を載する棚。花の棚。

はなたばこ 鼻烟草・鼻煙草【名】かぎたばこ（嗅烟草）に同じ。

はなたび 花足袋【名】模樣の附ける足袋。我衣「寶永頃迄、小兒の花足袋無し」

はなだまき 花田卷【名】紙の一種。伊豫國より產する淸帳（セイチヤウ）。

はなだんぎ 花談義【名】花の頃の御談義。春の說法。櫻陰比事「東山の花談義に、一家殘らず參詣すれば」

はなだら 鼻だら【名】❶あはう。うつけ。ばか。❷他人を嘲りていふ語。❸はなしる（鼻汁）を云ふ。〔三河國の方言〕

はなたらし 鼻垂・洟垂【名】鼻汁を垂すこと、又その人。はなったらし。二本棒。❷意氣地なき人を卑しめていふ語。はなたれ。はなったらし。二本棒。甲陽軍鑑「武藤新三郎の鼻たらしめが、出頭にまかせ、氏眞（ウヂザネ）公をだましまゐらせ」

はなたりやまひ 鼻垂病・洟垂病【名】風邪にて、鼻汁を垂す病。はなかぜ。かぜ。

はなたれ 鼻垂・洟垂【名】❶鼻汁の垂れ出づること、又その人。はなったれ。❷はなたらし（鼻垂）㊁に同じ。雙生隅田川「何國（イヅク）の誰が手柄とて、鼻垂一匹連れても來ぬ」八笑人「武士鼻たれの愚痴ぞをかしき」

はなたれあま 鼻垂尼・洟垂尼【名】意氣地無き尼。三代男「小比丘尼の鼻たれ尼」

はなたれこぞう 鼻垂小僧・洟垂小僧【名】意氣地の無き少年。

はなだをどし 縹縅【名】はなだいろをどし（縹色縅）に同じ。

はなち 放【名】次條を見よ。

放の髮（カミ）【句】「放（ハナチ）の髮」に同じ。夫木「うなゐ子がはなちの髮をとりたててまきそめ川よ淵瀨かはるな」

はなぢ 鼻血・衄【名】鼻より出づる血。衄血（チクケツ）。和名「衄、波奈知。鼻出血也」

はなちあぐ 放上ぐ【動下二他】聲を張り上ぐ。〔古語〕榮花「歌をぞ放ちあげてうたはせたまひける」

はなちいで 放出【名】中古、母屋（モヤ）より續けて造り出だしし屋。一說に、家の外ざまの明るき方に向ひたる所。又、一說に、大客ある時、臨時に遣戶・障子の類を放ち出して、圍ひ廣めたる所。こしよゐん。こざしき。源氏「寢殿とおぼしき東の放出に」同「南のおとどの西の放出に」

はなちうま 放馬【名】繫ぎ置きてあらぬ馬。放飼にせる馬。はなしうま。はなちごま。蜻蛉「川づらに、放馬どものあさりありくも」

ばなぢうむ（英 Vanadium）【名】〔化〕ばなぢんに同じ。

はなちがき 放書【名】未だ文字を書くに馴れずして、一字づつはなして書くこと。つぶつぶがき。源氏「かの御はなちがきなん、なほ見たまへまほしき」

はなちがひ 放飼【名】動物を、一定の場所に繫ぎ、又は押込めおくことなくして飼ふこと。かひばなし。はなしがひ。

はなちがみ 放紙【名】「日給（ニッキフ）の簡（フダ）」を見よ。日中行事「簡の三段に、名の下におしたる紙を、放紙といふ。その紙に、名の下に、參りたる者をば、日を書く。午とも未とも書くなり。宿したるをば、その傍に、夕と書く。藏人（クラウド）、これを勘むるなり」

はなちがみ 放髮【名】「放（ハナチ）の髮」に同じ。

はなちがめ 放龜【名】❶池などに放飼にする龜。❷龜を放生（ハウジヤウ）の料として放ち遣ること、又その龜。はなしがめ。

はなちぎ 放著【名】羽織を著る如く打ち掛けて著ること。

はなちこじ 放巾子【名】透額（スキビタヒ）の冠の巾子を、磯より取り放ちて造りたるもの。堂上家の子息の元服の時に用ひたり。ぬきこじ。

はなちごま 放駒【名】はなちうま（放馬）に同じ。萬葉「妹が髮あげささば野（ヌ）の放駒あらびにけらし逢はぬ思へば」

はな-ぢさ 花莔苣【名】〔植〕きくぢさ（菊莔苣）に同じ。

はなち-じっとく 放十德【名】下に袴を穿かず、中帶ばかりにて、十德を著ること。はなしじっとく。宗五大草紙「放十德は、御禁制のうちなり」

はな-ぢしや 花莔苣【名】〔植〕はなぢさ（花莔苣）の訛。

はなち-じやう 放狀【名】『はなつ（放つ）六を見よ』武家時代に、莊園などを人に讓り與ふる時、その讓り渡す理由を書きたる狀。ゆづりじやう。ゆづりじょうもん。

はなち-たぶさ 放髻【名】ちやせんがみ（茶筅髮）一に同じ。

はなち-で 放出【名】はなちいで（放出）の略。空穗「東（ヒンガシ）のはなちでの、母屋（モヤ）二つを」

はなち-どり 放鳥【名】一 翅を切りなどして、園池に放飼にしてある鳥。萬葉「島の宮池の上なる放鳥あらびな行きそ君まさずとも」 二 鳥を、放生（ハウジヤウ）の料として放ち遣ること、又その鳥。はなしどり。放鳥（ハウテウ）。新六「この內の名殘忘るな放鳥心のままにあくがれぬとも」

はなち-なほし 放直衣【名】昔、主上の、引直衣の御時、帶を締めず、下に紅の袴を著用せられしこと。

ばなぢん（獨 Vanadium）【名】〔化〕稀有なる金屬元素の一。その主なる鑛物は褐鉛鑛にして、淡灰色を帶び、攝氏一、六八〇度以上にて融解し、比重五・九、空氣中にて、徐徐に酸化し、白金と合金をなす性あり。又、三鹽化バナヂン・酸鹽化バナヂン・三酸化バナヂン・五酸化バナヂン等、種種の鹽化物及び酸化物を生ず。西曆一八〇一年、化學者デル・リオ（Del Rio）の發見に係る。

はなち-めぬき 放目貫【名】はなしめぬき（放目貫）に同じ。若風俗「割胡桃（ワリクルミ）の放目貫の小脇指」

はなち-もとどり 放髻【名】烏帽子をかぶらず、髻をあらはし居ること。禁秘抄「御放本鳥時付二左御袖一」

はな-ちやうじ 花丁字【名】一〔植〕おにしばり（黃瑞香）に同じ。二〔植〕こせうのき（胡椒樹）に同じ。三 紋所の一。花丁字の形に象（カタド）れるもの。

はなち-やのみ 花茶實【名】紋所の一。中心より三箇の茶の實を放射狀に配し、その間に、茶の小花五箇づつを介（ハサ）みたるもの。

はなち-やる 放遣る【動四他】はなつ（放つ）四に同じ。紀「載二葦船一而流之アシブネニノセテハナチヤリキ」

はなち-よろぎ 花草石蠶【名】〔植〕にがくさ（苦草）一に同じ。

はな-ちるさと 花散里【名】『源氏物語五十四帖の一なる名稱に本づきて名づけしもの』香（カウ）の一。質は羅國の上品なるべく、香（カヲリ）きやしやにて、風流に甘く、苦きもの。

はな-ぢわう 花地黃【名】〔植〕せんりごま（地筋）に同じ。

はなつ 放つ【動四他】一 はなす（離す）一に同じ。源氏「御ぞは、まことに身放たず、傍に置きたり」 二 はなす（離す）二に同じ。紀「順レ風放棄、カゼノマニマニハナチスツ」 三 はなす（離す）三に同じ。源氏「この野に、蟲どもを放たせたまひて」 四 逐ひはらふ。流罪に處す。追放す。はなちやる。濱松「おほやけに罪せられて、筑紫に放たれおはせしに」 五 はなす（離す）四に同じ。紀「毀二其畔一。毀、此云二波那豆一」 蜻蛉「皆人も起きて、格子放ちなどすれば」 六 手ばなして、人に讓る。賣り拂ふ。源氏「受領（ズリヤウ）どもの面白き家づくり好むが、この宮の木立を心につけて、放ちたまはせてんやと、ほとりにつきて案內（アナイ）申すを」 金葉「家を人に放ちて立つとて、柱に書きつけはべりける」 七 出だす。おこす。發す。竹取「よごとを放ちて、立居なくなくよばひたまふこと」 鴉鷺合戰「樣樣の雜言を放つ」 八 射る。發射す。「矢を放つ」 九 のけものにす。さしおく。空穗「御子ども、中納言を放ちては、皆御供にまうでたまふ」 大鏡「みかど・東宮を放ち奉りては」 十 見はなす。見捨つ。甲陽軍鑑「天道に放たれ奉り」 十一「髻（モトドリ）を放つ」を見よ。

火を放つ【句】火をかく。火をつく。放火す。

はな-づか 鼻塚【名】みみづか（耳塚）を見よ。

はなっ-かけ 鼻缺【名】はなかけ（鼻缺）二の音便。

はなっ-かぜ 鼻風【名】はなかぜ（鼻風）二の音便。

はなっ-かみ 鼻紙【名】はながみ（鼻紙）の音便。八笑人「鼻っ紙まで入れたか」

はな-つき 鼻突【名】はたと出合ふこと。であひがしら。はなじろ（鼻白）參照。宇治「鹽の滿ちければ、船は浮きたりけるを、鼻つきに少し吹き出されたりけるに、干潮（ヒシホ）に引かれて」 平家「資盛朝臣、大炊（オホヒ）の御門、猪熊（ヰノクマ）にて、殿下の御出に、鼻つきに參り合ふ」

はな-つきあひ 鼻突合【名】『「鼻を突き合はす」一を見よ』あらそひ。いさかひ。一代男「合點がゆかぬと、夫婦、鼻つき合ありけるに」

はな-つく 鼻突く【句】はな（鼻）の條下を見よ。

はな-づくし 花盡【名】種種の花を描きあらはしたる模樣。大磯虎稚物語「祐成には、練絹に花盡、時宗には、唐綾に鶴龜繡（ヌ）うたる御小袖」

はな-つくり 花作【名】花卉を培養すること、又それを業とする人。本朝廿四孝「花つくりの養作（モノサク）」 本朝十種香「我、民間に育ち、人に面を見知られぬを幸に、花つくりとなって入り込みしは」

はな-づくゑ 花机【名】かうげつくゑ（香花机）に同じ。源氏「佛の御かざり、花机のおほひ」

はなっ-さき 鼻先【名】はなさき（鼻先）の音便。

はなっ-たらし 鼻垂・洟垂【名】はなたらし（鼻垂）の音便。

鼻ったらしにす【句】「馬鹿（バカ）にす」に同じ。膝栗毛「おいらを、いい鼻ったらしにしやがった」

はなっ-たれ 鼻垂・洟垂【名】はなたれ（鼻垂）の音便。

はな-づつ 花筒【名】花を插すに用ふる筒。花いけの筒。はなたて。はなさし。本朝三國誌「木草（サク）の珍花、思思の花桶・花筒」 箱根靈驗躄仇討「花筒携へて一間（ヒトマ）を出づる母の顏」

はな-づき 花月【名】陰曆三月の異稱。莫傳抄「花っ月花より後の名のあらば空しく我は袖濡れぬべし」

はな-つづき 花つづき【名】〔植〕こもちまんねんぐさ（子持萬年草）に同じ。

はなっ-つぶれ 鼻潰【名】はなつぶれ（鼻潰）の音便。

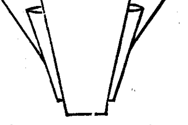
はなっ-つまみ 鼻摘【名】はなつまみ（鼻摘）の音便。

はなっ-つまり 鼻詰【名】はなつまり（鼻詰）の音便。

はな-つづみ 花つづみ【名】〔植〕しらひげさう（白髭草）に同じ。

はな-づつみ 花包【名】折形の一。草花と木の花とに別あり。

はな-づな 鼻綱【名】はななは（鼻繩）に同じ。



（みつづなは）

はな-づの 鼻角・奴角【名】犀の鼻の上にある角。さいかく。和名「奴角、犀乃波奈都能」

はな-つばき 花椿【名】花の咲ける椿。椿の花。芭蕉「落ちざまに水こぼしけり花椿」

はなっ-ぱしら 鼻柱【名】はなばしら（鼻柱）の音便。

はなっ-ぱり 鼻張【名】人に向ひて强げに見せかけながら、實は弱きこと。虛勢。

はなっ-ぴい 鼻低【名】次條の訛。和合人「出額助（デコスケ）に、鼻っぴいに、小鬢の兀げたのに」

はなっ-ぴく 鼻低【名】はなひく（鼻低）の音便。

はな-つぶれ 鼻潰【名】鼻柱の、きはめて低きこと、又その人。はなひしげ。はなひしやげ。はなっぷれ。

はな-づま 花妻【名】一 花の如く美しき妻。萬葉「撫子がその花妻にさゆり花ゆりもあはむと」 二 或動物の、特に親しみ馴るる花。（主に、萩を鹿の親しむものとしていふ）萬葉「わが岳にさ牡鹿來鳴く初秋の花妻とひに來鳴くさを鹿」 三 花を

親しみていふ語。夫木「色深く思ひそめてし撫子のその花妻は今もあかれず」

はな-つまみ 鼻撮・鼻摘【名】『「鼻を撮む」を見よ』甚しく他人に忌み嫌はるること、又その人。はなっつまみ。

はな-つまり 鼻詰【名】『「鼻が詰る」を見よ』鼻加答兒(カタル)など、鼻腔の疾病のために、鼻液及び氣息流通などの閉塞すること。はなひせ。はなふさがり。はなっつまり。

はなつみ 花摘【名】❶野邊の草花などを摘み取ること、又その人。古今「やよひのつごもりの日、花摘より歸りける女どもを見てよめる」❷昔、四月八日即ち灌佛の日に、老若の女人の、花を携へて、比叡山に登り、花摘堂に參詣せしこと。比叡山は、平生は女人禁制の地なりしに拘らず、當日に限り、女人にも、この堂までの登山を許したり。

はなつみ 花摘【名】〔書〕榎本其角の、その母の靈に手向くるため、その死歿せし貞享四年四月八日(即ち灌佛の日)より七月十九日までの一夏(イチゲ)にものせし百句と、その日その日の諸家の發句・歌仙とを集め、自ら板下を書きて上梓せしもの。二卷。元祿三年の刊行。

はなつみ-だう 花摘堂【名】比叡山の東面、麓より十町ほどの所にある堂。東坂本に屬す。桁行二間三尺一寸、梁行二間九尺五分。比叡山は、古、女人禁制なりしため、開祖傳教大師の母の、大師を訪はんとする時、大師下山して、謁せし地の舊跡といふ。

はなつみ-まつり 花摘祭【名】和泉國の官幣大社大島神社の神事。四月十三・十四の兩日、近村の漁人、網を引きて贄(ニヘ)を奉り、稚兒・花摘女・仕丁數十人、裝束を著けて、渡御に供奉し、仕丁は花車を曳き、花摘女は菜花・麥穗など、時の花を奉ること。古は、社の東數町の所にて行はれしが、今は、濱寺公園内に行宮所を設けて、渡御あり、地方官以下參列す。

はな-つんぼ 鼻聾【名】鼻の神經に故障ありて、臭の感ぜぬこと。〔東京の俚語〕

はな-づら 鼻面【名】「鼻の先」①②に同じ。

はな-づら 糜・牛糜【名】『鼻貫の義』**はななは**(鼻繩)に同じ。字鏡「糜、波奈豆良」

鼻づらに籐(トウ)を通す【句】『牛の鼻づらに鼻輪を附けて使ふに譬へていふ』人を殘酷に使役する譬。〔諺語〕

はな-つる 花蔓【名】〔植〕**はなかづら**(花鬘)④に同じ。

はな-つるな 花蕃杏【名】〔植〕**まつばぎく**(松葉菊)に同じ。

はな-てがみ 花手紙【名】筆には書き難き所へ、花・葉などを貼(ハ)りつけ、又は一言の文句も記さず、花・葉のみを封入するなどの類。

はな-てっせん 花鐵線【名】紋所の一。鐵線蓮花の花瓣を便化して、ほぼ圓の内に入るやうなる形に描けるもの。

はな-てぬぐひ 花手拭【名】薄き絹を、五色に染め、花鳥の形などを皺(シボ)に寄せ作りたる、舶來の手巾。

はな-てふ 花蝶【名】❶花と蝶と。❷「花や蝶や」に同じ。〔古語〕榮花「花蝶といひつるほどに、年も暮れぬ」同「花蝶に附けても、今はただ、おりゐなばやとのみぞ思されける」

はな-でんしや 花電車【名】車輛の周圍を美しく飾りたる電車。祝日などに、特に作り、多くは客を乘せずに運轉す。**はなじどうしや**(花自動車)參照。

はな-どうろ 花燈籠【名】造花にて飾り、又は花模樣を畫きたる燈籠。

はな-どき 花時【名】春、花の盛りに咲く時、即ち彌生(ヤヨヒ)の頃。花の頃。花期。花時(クワジ)。

はな-どめ 花留【名】**はなくばり**(花配)に同じ。

はな-どもゑ 花巴【名】紋所の一。二重輪の内に、左三つ巴を描けるもの。

はな-とり 花鳥【名】花と鳥と。花鳥(クワテウ)。後撰「花鳥の色をも音をもいたづらにものうかる身はすぐすのみなり」

はな-どり 花鳥【名】花に宿る鳥。俳諧歳時記「季吟曰く、花にやどる鳥なり。……。○花と鳥と二つをいふ時は、鳥の字、淸(ス)

みて訓むなり」

はな-どんす 花緞子・花曇子【名】**くわどんす**(花緞子)に同じ。

はな-どろばう 花泥坊【名】**はなぬすびと**(花盜人)❶に同じ。

はな-な【名】〔植〕**はなやさい**(花椰菜)に同じ。

ばなな 甘蕉(英Banana)【名】〔植〕『もと亞弗利加ギネヤ(guinːə)の土人の語の、西班牙を經て傳はりしもの』芭蕉科に屬する多年生の草。高さ二丈餘に達し、全形、芭蕉に類す。頂上に八箇乃至十箇の大葉を叢生し、初夏、叢生葉の中央より花莖出で、淡黃色の花、穗狀花序をなして開き、長さ四五寸、直徑一寸ほどの黃色の實を結ぶ。果肉柔く、芳香・甘味を有し、種子無くして、營養分に富み、產地の土人の主要なる食物たり。我國、臺灣・小笠原島など熱帶地方に產す。

はなし-くだもの 無花果【名】〔植〕『無花果の漢字を直譯したるもの』**いちじゅく**(無花果)に同じ。

はな-なでしこ 花撫子【名】❶〔植〕**しらひげさう**(白髭草)に同じ。❷襲(カサネ)の色目の一。表は紫、裏は紅。夏用ふ。

はな-なは 鼻繩【名】牛の鼻に懸くる繩。はながい。はなづら。はなくり。はなづな。萬葉「馬にこそふもだし懸くもの牛にこそ鼻繩はぐれ」

はな-にくけい 花肉桂【名】〔植〕**いぬがし**(犬樫)①に同じ。

はな-にしき 花錦【名】「花の錦」①に同じ。夫木「花錦折らでは人の山櫻一むら盜め四方の山風」

はな-にほひ 花匂【名】花やかに、なまめき匂ふこと。一說に、花の匂なりと。萬葉「見渡せばむかつをのへの花にほひ照りて立てるは愛(ハ)しき誰が妻」

はな-にんぎやう 花人形【名】花と葉とを組み合はせて、種種の形につくりたる人形の總稱。例へば菊人形・朝顏人形・躑躅人形などの類。

はな-ぬ 花野【名】**はなの**(花野)に同じ。〔古語〕萬葉「秋萩のはなぬのすすき穗にはでずわが戀ひわたる籠妻(コモリヅマ)はも」

はな-ぬすびと 花盜人【名】❶花の枝を折り取りて盜む人。はなどろばう。公任集「われが名は花盜人と立てばただ一枝は折りて歸らん」❷能(ノウ)の狂言の一。花を好む男、或寺の奧庭に忍び入り、その名花を折り取らんとして、寺僧に發見せられたれど、その執心の優なると連歌の巧なるとのために、一旦赦されしが、なほ思ひ止ること能はずして、遂に一枝を折り取りて逃ぐる事を作れるもの。さくらあらそひ。

はな-ぬり 花塗【名】花漆にて、上塗(ウハヌリ)を施すこと。狂言(拄杖)「花塗になさるるか」

はな-ねぢ 鼻捩・鼻捻【名】荒馬の鼻先を確と挾み、捩ぢまはしながら引きて、これを動かしむるに用ふる具。はなひねり。一代男「さばき髮して、片肌脫ぎ、懷に鼻ねぢ。手に白刃取り、この所の色町を、いさかひの場にするぞかし」

はな-ねんぶつ 花念佛【名】『明治維新前までは、念佛に先だち、花擧式・獻花式とて、寺僧、櫻の一枝を折り、附添の世話方と同行して、所司代屋敷に獻じ、所司代よりは、資料米を馬背に積み、使者、馬上にて來るを例とし、これにて行事終りたりとし、心祝の酒宴を催し、翌日より、念佛を開始せしよりいふ』**せんぼんねんぶつ**(千本念佛)に同じ。

はな-の 花野【名】草花の多く咲ける野。はなぬ。玉葉「村雨の霽るる日影に秋草の花野の露や染めてほすらん」

はな-の-あな 鼻孔【名】**びかう**(鼻腔)に同じ。

はな-のう 花能【名】『**はなずまふ**(花相撲)を見よ』婦女にも觀覽を許す能。〔德川時代の語〕犬子集(德元)「花能か役者呼ばせよ櫻川」

はな-の-うへ-の-ほまれ-の-いしぶみ 花上野譽石碑【名】**こんぴらりしやうきはなのうへのほまれのいしぶみ**(金比羅利生記花上野譽石碑)の略。

はな-の-えん 花の宴【句】**はな**(花)の條下を見よ。

はな-の-き 花木【名】〔植〕❶**はなかへで**(花

械)㊀に同じ。㊁しきみ(樒)に同じ。㊂にはとこ(接骨木)を云ふ。〔上野國の方言〕

はな-の-くも-さくら-の-あけぼの 花雲佐倉曙【名】『佐倉を櫻の義に取りなして、花の雲といふ語を冠らせたるもの』佐久間松長軒・登與島和軒の合作に係る淨琉璃。佐倉宗五郎の傳説を脚色したるもの。十一段に分る。

はなの-こし-づき 花殘月【名】陰曆四月の異稱。藏玉集「十二月異名、……四。花殘月。暮れはてて春の名殘や山深みしげみがくれの花のこし月」

はな-の-ごしよ 花御所【名】むろまちどの(室町殿)の俗稱。南方紀傳「將軍の館に、いろいろ花の數を盡し植ゑられける故に、時の人、花の御所と申すなり」

はな-の-さき 鼻の先【句】はな(鼻)の條下を見よ。

はなのさき-あんない 鼻先案內【名】次條に同じ。小町踊(常長)「名ははな先の案內かけふの春」

はなのさき-じあん 鼻先思案【名】次條に同じ。吾吟我集「人の心、鼻の先思案になりにける」

はなのさき-ぢゑ 鼻先智慧【名】次條に同じ。一代女「總じて、母の親、鼻の先智慧にて、大かたに生れつきし娘自慢」

はなのさき-ふんべつ 鼻先分別【名】はなさきふんべつ(鼻先分別)に同じ。

はな-の-たう 花撓【名】次條の略。

花撓の神事(ジンジ)【句】熱田神宮の相殿なる日本武尊の御陵の祭。舊曆四月八日に行はれ、未明より、神宮の神庫に納れる農事上の飾物を取出して、神宮大前の左右に展列し、衆人、これを拜觀して、年の豐凶をトす。又、當日、境內の露店は、農具のみを賣る。一名、白鳥御陵祭・豐年祭。

はな-の-つゆ 花露【名】薔薇の花を蒸溜して得たる液に、別に蒸溜器にて得たる丁子・片腦・白檀(ビャクダン)の混合液少量を加へて製し、顏面などに塗りて、肌理(キメ)を細かにし、つやを出だすに用ふるもの。一代男「鼈甲の插櫛、花の露といふ物も知りて、すこし匂をさす事」若風俗「黑き筋なき薄鬢に、花の露をそそぎ、卷立(マキタテ)に結ひなすも、をかし」

はな-の-ばうし 花帽子【名】はなだばうし(縹帽子)に同じ。

はな-の-はちす-の-めうきやう 花蓮妙經【名】〔書〕ほけきやう(法華經)に同じ。

はなの-はら 花野原【名】はなの(花野)に同じ。俳諧新選(天露)「一つ家の居心問はん花野原」

はな-の-ひ 花の日【句】はな(花)の條下を見よ。

はな-の-もち 花餅【名】昔、江戸目黑なる不動の傍にて賣りし、一種の餅。赤と白との二色あり。梅・櫻などの花の形に作れる薄きものにて、小き網袋に入れて賣れり。參詣の歸途、土產に購ひ、燒きて食ひしなり。もちばな(餅花)參照。

はな-の-やま 花山【名】〔地〕はなやま(花山)に同じ。續後撰「年を經ていたくなめでそ花の山菩提の種にならぬものゆゑ」

はな-の-れん 花暖簾【名】鮮(アザヤカ)なる色を取り合はせて、花模樣を朦染(オボロゾメ)にしたる暖簾。

はなは 塙【名】山のさし出でたる處。土の、小高くもりあがれる處。重之集「年を經てたれをまつとか武隈(タケクマ)のはなはにのみは出で立てるらん」

はなは 花房【名】〔地〕㊀安房國安房郡西條(サイデウ)村の大字。明治維新の初、遠江國橫須賀の西尾氏の、一時移封せられし地。「はなぶさ」ともいふ。㊁明治初年設置の縣の一。四年七月、安房國舊花房藩の地に立てしもの。同年十一月、木更津縣に入る。

はなば-いろ 花葉色【名】襲(カサネ)の色目の一。表は山吹、裏は青。春用ふ。

はな-ばう 鼻坊・花坊【名】はなさま(花樣)に同じ。

はな-ばかま 花袴【名】〔植〕はう(苞)に同じ。

はなは-けんげう 塙撿挍【名】〔人〕はなはほきいち(塙保己一)に同じ。

はな-ばこ 花箱・花筥【名】花を摘み入るるはこ。

はな-ばさみ 花鋏【名】草木の花・枝などをはさみ切るに用ふる鋏。

はな-ばさみ 鼻挾【名】はなめがね(鼻眼鏡)を見よ。

はな-ばしら 鼻柱【名】㊀鼻の左右の孔を隔つる肉。鼻の障子。はなみね。鼻のみね。はなっぱしら。鼻梁(ビリヤウ)。和名「鼻柱。水溝在㆓鼻柱下㆒。波奈波之良」㊁はなすぢ(鼻筋)に同じ。炭俵(利牛)「初雪の見事や馬の鼻ばしら」

はなは-じらう 塙次郎【名】〔人〕國學者。名は忠寶。保己一の第四子。德川幕府に仕へ、父の後を承けて、和學講談所を管せしが、幕府の末葉に際し、廢帝の論議に參し、勤王家の忌む所となり、文久三年十二月二十二日、當時の浪士伊藤博文等に刺殺せらる。年四十九。一說には、幕府の命を受けて、外國人待遇の恒例を調べたるを、誤傳せられしに因るともいふ。

はなはだ 甚・太・孔・酷【副】過度に。いたく。いみじく。大いに。いと。

はな-ばた 花畠・花畑【名】次號に同じ。用明天皇職人鑑「東の御花畠、殘菊の御酒宴」

はな-ばたけ 花畠・花畑【名】草花(主に秋の)を培養する畠。はなぞの。花圃。おはなばたけ(御花畠)參照。

はなばたけ-ぐみ 花畠組・花畑組【名】次條に同じ。(德川時代には、接頭語お(御)を添へて呼びたり)

はなばたけ-ごばんしゆう 花畠御番衆・花畑御番衆【名】次條に同じ。(德川時代には、接頭語お(御)を添へて呼びたり)

はなばたけ-の-ごばん 花畠御番・花畑御番【名】次條に同じ。(德川時代には、接頭語お(御)を添へて呼びたり)

はなばたけ-ばん 花畠番・花畑番【名】『明曆の大火前は、後の黑書院の西湖の間を詰所に充てられ、その庭は花畠なりしによりていへるもの』こしやうぐみ(小姓組)の、明曆三年以前の稱。(德川時代には、接頭語お(御)を添へて呼びたり)

はなばたけばん-がしら 花畠番頭・花畑番頭【名】花畑番の頭。(德川時代には、接頭語お(御)を添へて呼びたり)

はなばたけ-ぶぎやう 花畠奉行・花畑奉行【名】ふきあげはなばたけぶぎやう(吹上花畑奉行)の略。(德川時代には、接頭語お(御)を添へて呼びたり)

はな-はたざを 花旗竿【名】〔植〕十字花科に屬する草。莖は直立して、高さ二尺に達し、葉は披針形、緣邊に少しく鋸齒あり、六月頃、梢上に、淡黃色の花、總狀花序をなして開き、後、五分乃至一寸五分の長角を結ぶ。各地の山地に自生す。

はなはだし 甚し【形二】過度なり。非常なり。いたし。いみじ。はげし。

はなは-だんゑもん 塙團右衞門【名】〔人〕はなはなほつぐ(塙直次)に同じ。

はな-ばち 花蜂【名】〔動〕膜翅類に屬する昆蟲。蜜蜂に近き種類にて、我國に產するもの三十餘種あり。體長二三分、體色黑くして、灰白の毛を生じ、常に花に來り集りて、花蜜を嘗め、花粉を肢に集めて、地中の巢に入り、これを幼蟲の食餌とす。

はな-ばちす 花蓮【名】花の咲きてあるはちす。記「くさかえの入江のはちす花ばちすみのさかり人ともしきろかも」

はな-ばな 花花【名】花の一つ一つ。後撰「折るからにわが名は立ちぬをみなへしいざ同じくは花花に見ん」

はな-ばな 花花【貌】花花しきさま。花やか。きらびやか。はでやか。落窪「はなばなと物笑する人にて」、枕「櫻の直衣(ナホシ)、いみじくはなばなと」、榮花「內わたり、花花とめでたくいみじきに」

はな-ばなし 花話【名】花に話をなさしむる義にて、自分から口に出していひ難き場合などに、花を示して、自己の意を先方に解せしむ。例へば、私と結婚して下さいといふ場合に、菩提樹(ボダイジユ)を示し、我を思うて下さいといふ場合に、三色菫(パンシイ)を示すの類。

はな-ばなし 花花し【形二】花やかなり。きらびやかなり。立派なり。十訓「心をもてしづめぬ人は、何事も花花しくけしからぬなり」

はなは-なほつぐ 塙直次【名】〔人〕武將。

本名は尙之。團右衞門と稱す。尾張國羽栗の人。初は織田信長、後、加藤嘉明に仕ふ。征韓の役、功ありしも、軍令に背きて、その怒に觸れ、去りて數君に遊事し、最後に福島正則に仕へしが、皆、志を得ず、遂に薙髮して、名を鐵牛と改め、妙心寺に入る。豐臣秀頼の兵を集むるや、大野治房に隷し、元和元年四月二十九日、淺野氏の軍と戰ひて戰死す。年四十九。

はなば-の-き【名】〔植〕りやうぶ（令法）に同じ。

はな-ばへ　花蠅【名】〔動〕雙翅類に屬する昆蟲。體は黃色、胸背は暗褐色にして、腹部に四條の黃帶あり。蒲公英（タンポポ）の花に多く來り集る。

はなは-ほきいち　塙保己一【名】〔人〕國學者。姓は萩野、通稱は辰之助。後、千彌また保木野一と稱す。水母子、又、溫故堂と號す。武藏國兒玉郡保木野村の人。塙の姓は、幼時の絃歌・鍼法の師雨宮撿挍須加一の本姓を冒ししもの。七歲にして明を失ひ、十歲の時、國典に志し、刻苦勉勵、中世の事一も通ぜざるなく、名聲大に振ひ、記錄・雜書を搜索校訂して、群書類從を編纂・刊行し、又、幕府に請ひて、和學講談所を設立す。續群書類從をも編せしが、刊行するに及ばずして、文政四年歿す。年七十七。

（ほなはほきいち）

はな-ばん　端番【名】最初の當番。㊁劇場の出方（デカタ）の、每日、順番にて、木戸の前に出でて、觀客を場內に案內することを掌るもの。

はな-び　花火・烟火・煙火【名】種種の火藥を調合し、點火して、種種の煙色・火光又は形象を發せしむるもの。普通には、打揚（ウチアゲ）花火とて、半ば地中に埋めたる木筒又は張筒に盛りて點火し、高く空中に打ち揚ぐるもの、及び仕掛（シカケ）花火とて、筒に裝塡せるを一定の枠（ワク）に取り附け、山水・家屋その他の形狀を現出せしむるもの、又、小兒の玩弄に供する線香花火・鼠花火などもあり。燒化砲。

はな-ひく　鼻低【名】鼻の低きこと。はなっぴく。はなっぴい。

はなび-ぐさ　鼻火草【名】〔書〕野野口立圃の俳諧の集。一冊。寬永二十年の刊行。

はな-びし　花菱【名】㊀織文の、菱形の周圍を、花瓣の狀に變化したるもの。㊁紋所の一。割菱に加工して、花形に美化したるもの、即ち四瓣の花を、菱形におし平めたる形のもの。普通の花菱の外「三（ミツ）花菱」・「鬼花菱」・「三割（ミツワリ）花菱」・「利久（リキウ）花菱」・「蔓（ツル）花菱」など、種類多し。

はなび-し　花火師【名】花火の製造、又はその打揚を職業とする人。

はなびし-くづし　花菱崩【名】紋所の一。普通の花菱を崩して描けるもの。

はな-ひしげ　鼻拉【名】はなつぶれ（鼻潰）に同じ。

はなびし-さう　花菱草【名】〔植〕きんえいくわ（金英花）に同じ。

はなびし-つる　花菱鶴【名】紋所の一。花菱の內に鶴を描けるもの。

はなびし-どもゑ　花菱巴【名】紋所の一。花菱の內部を巴にしたるもの。

はな-ひしやげ　鼻拉【名】はなひしげ（鼻拉）に同じ。膝栗毛「この坊主、鼻ひしやげにて、鼻聲なり」

はな-ひせ　鼻塞【名】はなつまり（鼻詰）に同じ。〔古語〕和名「鼻塞、波奈比世。洟久不㆑通、遂至㆓鼻塞㆒也」

はなび-ぜきしやう　花火石菖【名】〔植〕燈心草（ヰ）科に屬する草。形やや笄（カウガイ）石菖に似、花被、割合に小く、又、子房、割合に大きくして、紫褐色を呈す。花は赤褐色にして、春・夏の候開く。各地の水田・濕地などに自生す。

はなび-せんかう　花火線香【名】せんかうはなび（線香花火）に同じ。織留「花火線香して、朝夕のけぶり細く」

はな-ひねり　鼻捻【名】はなねぢ（鼻捩）に同じ。人車記「左右居飼二十人（裝束如㆑常。但大烏帽子・蒲扇・鼻捻、已上插㆑腰、二行列㆑之）」

はなび-ぶね　花火船【名】花火を打ち揚ぐる設備ある船。四方のあか「夏の涼（スズミ）は、……、玉屋・鍵屋が花火船」

はな-びら　花片・花瓣【名】㊀くわべん（花瓣）に同じ。和名「葩、波奈比良。草木花片也」㊁さんげ（散華）に同じ。㊂次條の略。御伽草子（猫の草子）「正月に、かがみ・花びら・煎餅・あられ・かき餅・おこし氷など」

はなびら-もち　花片餅・花瓣餅【名】形、花びらに似たる餅。はなびら。永正狂歌合「花びらもちのいしげなる氣味を賞玩申しはべるべし」

はなびら-ゆき　花片雪・花瓣雪【名】綿帽子の如き大片の雪。〔西國の方言〕

はな-ひり　嚏【名】はなひること。くさめ。

はなひり-ぐさ　嚏草【名】〔植〕㊀ちどめぐさ（血止草）に同じ。㊁ごきんさう（兜巾草）に同じ。

はなひり-の-き　木藜蘆【名】〔植〕石南（シヤクナゲ）科に屬する落葉灌木。高さ二三尺に達し、葉はやや革質・互生し、卵形又は長楕圓形にして、緣邊に細鋸齒あり。七八月頃、壺狀・帶白色の花、穗狀花序をなして開く。有毒にして、葉を鼻に入るれば嚏を發し、その汁を廁に撒けば、殺蟲の効ありといふ。あくしよぐさ。あくしよのき。くさめのき。

はな-ひる　嚏る【動上一自】『ひる（放る）』嚏（クサメ）をなす。鼻をひる。萬葉「眉根搔き鼻鳴（ハナヒ）紐解け待てりやもいつかも見むと思へるわぎみ」和名「嚏、波奈比流」

はな-ぶえ　鼻笛【名】㊀笛を鼻の孔に當てて、鼻息にて、吹鳴らすこと、又その事によりて、錢を乞ひあるく乞食。㊁呼子の笛。艶狩劒本地「腰より鼻笛取り出だし、吹かんとするを」

はな-ふき　鼻拭【名】鼻をかむに用ふる、小き手巾。はんけち。

はな-ぶくろ　鼻袋【名】廁などの臭氣を避けんがために、紫縮緬などにて袋形に作り、紐を兩耳にかけて、鼻をおほふやうにせるもの。

はな-ぶくろ　花袋【名】㊀一種の香袋（ニホヒブクロ）。五色の絹を縫ひあはせて、花形に造れるものなるべしといふ。寬永發句帳「絲柳よれて緖になれ花袋」㊁花の蕾。雅筵醉狂集「縫ひ立つるむばらの針のたもちなく綻ぶもよき花袋かな」

はな-ぶさ　花房【名】㊀がく（萼）に同じ。和名「萼、波奈布左。一云、花房。承㆑花跗也」㊁數多集り、總狀をなして咲く花。〔英〕枕「花ぶさ長く咲きたる藤」㊂〔植〕すずしろさう（鈴白草）に同じ。

はなぶさ　花房【名】〔地〕はなは（花房）を見よ。

はなぶさ-いってふ　英一蝶【名】〔人〕畫家。姓は多賀。石川侯の侍醫伯庵の子。大阪に生る。名は信香。貞享中、剃髮して、潮湖といふ。十五歲にして、江戸に來往し、俳諧を芭蕉に、畫を狩野安信（一說に狩野時信）に學ぶ。又、土佐の畫法をも究めて、一機軸を出す。元祿六年罪を獲て、伊豆國三宅島に流され、在島十二年、將軍綱吉薨去の大赦に遭ひて、寶永六年江戸に歸り、名を一蝶と改め、母の姓花房を取りて、英を稱す。畫く所、輕快縱橫、名聲高し。享保九年歿す。年七十三。

はな-ふさがり　鼻塞【名】はなつまり（鼻詰）に同じ。

はなぶさ-ぎれ　花房切【名】名物切（メイブツギレ）の一。天鵞絨（ビロウド）地に、金の三重菱の內に、萬の字を織り出だしたる金襴。

はなぶさ-は　英派【名】〔美〕繪畫の一派。英一蝶を祖とするもの。

はな-ぶし　花ぶし【名】〔植〕からすざんせう（烏山椒）に同じ。

はな-ふしべ　鼻ふしべ【名】はなたけ（鼻茸）に同じ。〔古語〕字鏡「齆、奇肉也。惡肉也。波奈布志倍」

はな-ふだ　花札【名】はながるた（花歌留多）に同じ。

はなぶたい-かすみ-の-さるひき　花舞臺霞猿曳【名】常盤津の曲に合はせて演ずる舞踊。能（ノウ）の狂言の靱猿（ウツボザル）を飜案せるもの。

はなぶち 花藤【名】紋所の一。藤花を左右より垂らして、圓形に描けるもの。

はなぶちのみさき 花淵岬【名】〔地〕陸前國宮城郡にある岬。松島の南に位す。

はなぶね 花船【名】花やかなる船。若風俗「七月十日の夜……、若衆七八人の花舟、外とは棹り、謠・鼓の音もなくて」

はなぶぶき 花吹雪【名】㊀花の、はらはらと散りて、吹雪の如く見ゆること。㊁次條の略。

はなぶぶきふじのすげがさ 花吹雪富士菅笠【名】常磐津節の曲の一。

はなぶんどう 花分銅【名】紋所の一。分銅の輪を、あやをつけて花形に美化したるもの。

はなふり 花降【名】次條の略。

はなふりぎん 花降銀【名】㊀『光澤ありて、面に、細小なる花紋のごとき斑あるよりいふ』德川幕府の金座にて、諸鑛山より送り來れる地金より、純金を得て、殘留せる銀・銅・鉛等の混合物に、二回の灰吹（ハイブキ）の法を加へて得たる純銀。㊁德川時代に、加賀國の藩主前田利長の時、同國にて鑄造せるものといふ、一種の銀貨。面に星形連なり、花降の二字あるもの。拾兩なると壹兩なるとあり。重量、前者は四十三匁、後者は四匁五分。

はなべちや 鼻べちや【名】『「鼻が高い」といふ語あるより、その反對を形容していふ』面目を失ふこと。〔俚語〕

はなぼう 端棒【名】㊀さきぼう（先棒）に同じ。㊁先に立ちて事をすること。しよつぱな。最初。浮世床「勸化（クワンゲ）……、おれが端棒で附けて見せねえぢやあ、いかねえはさ」

はなほこ 花桙・花槍【名】柄などを彩り飾れる桙なるべし。〔古語〕延喜式「花槍二十口、幡十二旒、別各著柄」

ぱなま 巴奈麻（英Panama）【名】㊀〔地〕中央亞米利加の一共和國。同名の首府あり。㊁〔地〕巴奈麻共和國の首府。㊂〔植〕ぱなまさう（巴奈麻草）の略。㊃ぱなまばうし（巴奈麻帽子）の略。

はなまうせん 花毛氈【名】花模様などありて、美しき毛氈。はなせん。三日太平記「花毛氈の紅（クレナヰ）も」和漢三才圖會「毯（音揖）絨、俗云二花毛氈一」

はなまがり 鼻曲【名】㊀鼻の形の曲りてあること、又その人。㊁〔動〕鮭（サケ）の雄の、老いて、下顎骨の先端堅く鈎狀をなし、上顎骨は延長し、且つ凹形をなして、下顎の鈎狀部を受け、爲に、口は全く閉鎖するを得ざるに至れるもの。諺「南部の鮭は鼻まがり」

はなまき 花卷【名】はなまきそば（花卷蕎麥）の略。

はなまき 花卷【名】〔地〕陸中國稗貫（ヒエヌキ）郡にある町。北上（キタカミ）平野の中央、北上川の西岸。奥州街道の要路に當る。古稱、鳥谷（トヤ）。安倍賴時築造の城址あり。

はなまきそば 花卷蕎麥【名】炙りて、細かに採みたる海苔を振りかけたる掛蕎麥（カケソバ）。はなまき。

はなまく 花幕【名】「花の幕」に同じ。

ぱなまさう 巴奈麻草【名】〔植〕巴奈麻草科に屬する多年生の草。全形、棕櫚に似、莖は甚だ短くして、殆ど無莖の狀をなし、葉は棕櫚のより大きく、長さ約三尺に達す。原産地は熱帶亞米利加。嫩き葉を採り、晒し乾して、帽子・卷烟草入等を作る。

（ばなまさう）

ぱなまさうくわ 巴奈麻草科【名】〔植〕顯科植物・被子類・單子葉門の一科。多年生の草又は灌木。これに屬するものは、すべて亞米利加に産す。

はなまじろぎ 鼻まじろぎ【名】表面には追從しながら、內心には服從せずして、鼻をうごめかすこと。〔古語〕源氏「下には鼻まじろぎをしつつ追從し、けしき取りつつ從ふほどは」

はなまだら 花斑【名】〔鑛〕珊瑚を含む石灰岩。美濃國赤坂に産す。

はなまちぐさ 花待草【名】〔植〕うめ（梅）㊀に同じ。

はなまつぼ 花眞壺【名】花の繪模様ある壺。

ぱなまばう 巴奈麻帽【名】次條の略。

ぱなまばうし 巴奈麻帽子【名】『もと、中央亞米利加の巴奈麻地方より輸出せしよりいふ』パナマ草の嫩葉を晒し乾して編み製したる帽子。夏季用として、時好に投ずること久し。ぱなま。たわいんばなま（臺灣巴奈麻）參照。

はなまんどう 花萬燈【名】會式（エシキ）の時などに用ふる、造花にて飾りたる萬燈。

はなまり 花鞠【名】周圍に、繪具にて、花模様を描き飾りたるゴム鞠。

はなみ 花實【名】㊀花と實と。㊁さかゆること。榮花。傾城島原蛙合戰「頭の雪に埋木（ウモレギ）の、いつの花實とながらへて」㊂名と實と。花實（クワジツ）。「花も實も有り」參照。曾我會稽山「御詞に、花實を交ぜ」

花實が咲く【句】時めく。さかゆ。花が咲く。花實榮ゆ。諺「死んで花實が咲くものか」曾我會稽山「一生花實も咲かざりし天運の拙さよ」

花實榮ゆ【句】前條に同じ。俗曲（花舞臺霞猿曳）「花實も榮ふ目出たさよ」

はなみ 花見【名】㊀花（主に櫻の花）を觀て遊び樂しむこと。觀花（クワンクワ）。後撰「花見にと出でにしものを秋の野の霧に迷ひて今日は暮しつ」季吟「一僕とぼくぼくありく花見かな」㊁花牌（ハナガルタ）の遊をなすことの隱語。㊂赤砂糖の中にて、赤みの淡きもの。

花見の酒【句】はなみざけ（花見酒）に同じ。

はなみ 齒並【名】はならび（齒並）に同じ。

はなみ 羽並【名】㊀鳥の翼の、羽の揃ひてあるさま。㊁多くの鳥の、羽を並べて列なれるさま。はぶり。爲忠集「むら鳥たそがれ時にうちむれて急ぐ羽なみはをちの山もと」

はなみ 葉並【名】葉の並び揃ひてあるさま。はぶり。曾丹集「上そよぐ竹の葉並の片寄るを見るにつけてぞ夏は涼しき」

はなみがさ 花見笠【名】花見㊀に行く時、かぶる笠。一茶「今の世や猫も杓子も花見笠」

はなみがへり 花見歸【名】花見㊀より歸ること、又その人。一代男「花見がへりの御所女」

はなみがほ 花見顏【名】花見㊀をしてあるらしき顏つき、又は樣子。芭蕉「菜畠に花見顏なる雀かな」俳諧新選（數舌）「非藏人（ヒクラウド）や御階（ミハシ）に出でて花見顏」

はなみきやく 花見客【名】花見㊀に出かくる人。

はなみぐさ 花見草【名】〔植〕㊀かんぎく（寒菊）の異稱。〔古語〕藏玉抄「しぐれ降る庭にふけしも花見草花咲きにけり霜やおくらん」㊁〔動〕うぐひす（鶯）を云ふ。〔女の語〕

はなみぐるま 花見車【名】花見㊀の時、乘りて行く車。謠曲（右近）「花見車の八重一重、見えて櫻の色色に」

はなみごころ 花見心【名】花見㊀の時の心もち。芭蕉「四御器（ヨツゴキ）の揃はぬ花見心かな」

はなみこそで 花見小袖【名】花見㊀の時に著る小袖。こそでまく（小袖幕）參照。鷹筑波「ゆるゆると心もしたる春の比（といふ句に）花見小袖の上の下帯」

はなみざけ 花見酒【名】花見㊀の場所にて飲む酒。俳諧奇人談（西鶴）「平樽や手なく生る花見酒」

はなみざとう 花見座頭【名】能（ノウ）狂言の一。勾當、女房を紐にて自分の帶に結ひ著け、清水にて、花見をして居る時、猿引、女の腰をはづし、小猿をそれに結ひ著け置き、女を他所へ伴ひ行く事を作れるもの。さるざとう。

はなみじま 花見縞【名】櫻・梅の花などの形を描ける衣服の模樣。

はなみじらみ 花見蝨【名】花見時に、暖氣に催されて、衣服の縫目より這ひ出づる蝨。狂歌咄「春來ては飾磨（シカマ）のかちの古布子花見蝨や飛んで散るらん」

はなみぞ 鼻溝【名】鼻の下より、上唇の

上にかけて、中央の窪める所。人中（ニンチユウ）。

はなみだう 花御堂【名】灌佛會（クワンブツヱ）に、釋迦の誕生の立像を安置し、種種の草木の花にて葺き飾りたる、小き堂。釋迦の、無憂樹（ムウジユ）の花爛漫たる下にて降誕せるに擬せるものかといふ・くわちん。**はなくやう**（花供養）參照。

（はなみだう）

はなみだうまうで 花御堂詣【名】灌佛會（クワンブツヱ）に、寺に參詣すること。

はなみち 花道【名】**一**劇場にて、俳優が揚幕と舞臺との間を通ふために設けたる、長き路。もと俳優に贈る花を持ち行く道とし、幅狹く造りて、兩側に、高欄の如く、竹の埒を結ひしもの。俳優の出入は、能舞臺をそのままに、橋掛（ハシガカリ）よりせしに、後、俳優の出入はこの道よりすることとなり、舞臺と同樣に板張となれりといふ。見物席の左方に片寄せて設くるを本花道といひ、これと並行して、右方に幅狹く設けたるを、東の歩（アユミ）又は假花道と呼ぶ。**きりあな**（切穴）**三**參照。**二**『もと左方より出づる力士は、頭に葵の花を插し、右方よりする者は、夕顏の花を插す習なりしに本づくといふ』力士の土俵に出づる通路。

はなみち 鼻道【名】**はなすぢ**（鼻筋）に同じ。

はなみちやばん 花見茶番【名】花見**一**の場所にて行ふ茶番。八笑人「時に、斯ういふ相談だ。この連中で、花見茶番と號して」

はなみづ 鼻水・洟【名】**はなしる**（鼻汁）に同じ。

はなみづ 花水【名】佛前に花を手向くる時の水。謠曲（井筒）「庭の板井をむすびあげ、花水とし」

はなみづいはひ 花水祝【名】**みづいはひ**（水祝）を云ふ。〔越後國の方言〕

はなみづがは 花水川【名】〔地〕相模國にある川。源を雨降（アフリ）山の南麓に發し、秦野（ハタノ）町を過ぎ、平塚町の西を經て、相模川に注ぐ。上流を金目（カナメ）川といふ。

はなみづき 花見月【名】**一**陰曆三月の異稱。藏玉集「十二月異名……三。花見月。うす曇空も一つに花見月なべて心もあくがれぬらん」八笑人「梢に結ぶ短册も、おもひおもひの花見月」**二**その花を見る月。謠曲（烏追船）「道ある御代の花見月」

はなみづさう 花水草【名】〔植〕**まんじゆしやげ**（曼珠沙華）**二**に同じ。

はなみづざか 花水坂【名】〔地〕**ふじみさんけい**（富士見三景）を見よ。

はなみづつぎ 花水注【名】花瓶に花を插したる後、水を注ぎ添ふるに用ふる、銅製の器。形平たく、注口長くして、把手なく、鋏と共に、花臺・花盆に具す。

はなみづはこべ 花水繁蔞・花水蘩蔞【名】〔植〕馬齒莧（スベリヒユ）科に屬する草。莖は多數に分岐して、蔓延し、又、上昇するもあれど、概して弱く、葉は對生し、楕圓狀にして、鈍頭を有し、夏季、五瓣の花曲垂して生ず。廣く水濕の地に生ず。おほみづはこべ。ぬまはこべ。

はなみてぬぐひ 花見手拭【名】『職工などが、團隊にて、春の花見に趣く時にかぶるよりいふ』紅色・茜（アカネ）などにて、華美なる形・模樣などを染め出したる手拭。

はなみどき 花見時【名】花見**一**をする季節、即ち三四月頃。

はなみどり 花見鳥【名】〔動〕**うぐひす**（鶯）の異稱。藏玉集「花見鳥。鶯。春ははや比に成りゆく山里の軒に來て鳴け今日花見鳥」

はなみね 鼻峰・鼻梁【名】**はなばしら**（鼻柱）に同じ。（主として、牛馬のにいふ）字鏡「鶡、波奈久支。又、波奈彌禰」和名「鼻梁、波奈美禰」

はなみびと 花見人【名】花見**一**をしてをる人。八笑人「往來の花見人を、さまざまそしりなどして」

はなみぶね 花見船【名】岸・島山などに咲ける花を賞するために、乘りて行く船。又、水路をとりて、花見に行く船。

はなみまく 花見幕【名】「花の幕」に同じ。日本振袖始「花見幕、簸（ヒ）の川岸の櫻狩」

はなみみ 鼻耳【名】**こばな**（小鼻）に同じ。

はなみやしき 花見屋敷【名】花見**一**のために設けたる屋敷。櫻陰比事「東山の花見屋敷」

はなみやま 花見山【名】〔地〕備中國阿賀郡にある山。夫木「今ぞ知る散らぬ櫻の花見山風もうららに治れる世を」

はなむくげ 花木槿【名】花の咲きてある木槿。芭蕉「花木槿裸童のかざしかな」

はなむぐら 花葎【名】〔植〕**一**茜草（アカネ）科に屬する多年生の草。莖は細くして直立し、高さ一二尺に達し、往往分枝し、下向せる小刺密生す。葉は線狀披針形にして、鈍頭をなし、概ね六箇づつ輪生す。夏日、葉腋に花梗を生じ、白色の小花簇生し、多く濕地に自生す。**二かなむぐら**（金葎）に同じ。

はなむぐり 花潛【名】〔動〕鞘翅類に屬する昆蟲。金龜子（コガネムシ）の類にて、體は楕圓形・扁平にして、長さ五六分、背面、綠色にして、數箇の白斑あり、又、多くは體の表面に、短毛あり。花に集りて、花蜜を嘗め、花粉を食す。小（コ）花潛・黑（クロ）花潛・虎（トラ）花潛・扁（ヒラ）花潛などの種類あり。

はなむけ 鼻向【名】臭を嗅ぐために、その方向に、鼻を向くること。

　鼻向もならず【句】臭穢にして、近づくに堪へず。鼻持（ハナモチ）がならず。

はなむけ 餞・贐【名】『「馬の鼻向（ハナムケ）」の略。もと、旅立つ人に、酒肴などすすめ、その馬の口を取りて、馬の鼻を、行くべき方へ向けて見送り、道途の安全を祝する習ありしに本づく』旅立つ人に、品物又は詩歌などを贈ること、又その贈る物。たむけ。餞別。謠曲（烏帽子折）「東路の御はなむけと思し召され候へとて」

はなむこ 花聟【名】結婚してより多くの日數を經ぬ聟。初婚の聟。新郎。（花嫁に對して）

はなむし 鼻蟲【名】鷹の鼻の中に、蛭の如き蟲の生ずる病なりといふ。

はなむしろ 花筵【名】**一**種種の色に染めたる藺（ヰ）にて、花模樣などを織り出したる筵。あやむしろ。はなござ。ゑむしろ。五人女「花筵・毛氈敷かせ」**二**草花などの一面に咲き、又は櫻の花などの散り敷けるさまを、筵に譬へていふ語。天神記「御臺所の花見の酒宴、菫（スミレ）片敷く花筵」**三**下の文を見よ。俳諧歲事記「落花の上に坐するをもいひ、又、花見の敷物をもいひ、又、花見の席をもいふといへり」**四**〔動〕**むしろがひ**（筵貝）に同じ。

はなむしろけんさじよ 花筵檢査所【名】農林大臣の管理の下に、輸出花筵の檢査、及び試驗に關する事務を掌る所。所長（技師の中より選任せらる）・技師・書記・技手の職員あり。

はなむすび 花結【名】**一**『「花を結ぶ」**三**を見よ』調度・衣服の飾として取り附くるために、絲にて、種種の花の形を結ぶこと、又その結びし物、又これを結ぶ人。十二段淨瑠璃「日本名譽の花結が、祕曲を盡して結ばれたるとも」**二**草木の花の名を鬮引（クジビキ）にし、それを題として、歌を詠み、又は男女の名に準へ、緣結のごとくにする、女子の戲。

はなむすめ 花娘【名】花のごとく美しき娘。

はなむらさき 花紫【名】**一はなむらさきいろ**（花紫色）の略。謠曲（加茂物狂）「花紫の藤枝の、幾春かけて匂ふらん」**二**〔植〕**はなずはう**（花蘇枋）に同じ。

　花紫を戴く【句】紫帽子をかぶる。傾城酒呑童子「三の君、花紫を戴いて、びらりしやらりの町風も」

はなむらさきいろ 花紫色【名】**えどむらさき**（江戸紫）に同じ。

はなんぼ【名】〔植〕**なうり**（菜瓜）を云ふ。〔大和國の方言〕

はなめ 花芽【名】草木の花の芽だち。

はなめうが 花蘘荷【名】**一**〔植〕蘘荷科に屬する多年生の草。高さ一尺餘に達し、葉は蘘荷のに似て小く、四五葉互生し、背に軟毛あり。夏日、舊莖の葉心より、一花莖出でて、三四寸に至り、白質にして紅斑ある花、穗狀花序をなして開く。種子を

藥用に供す。やましやうが。はなやりやうきやう。㈡〔植〕やぶめうが(藪蘘荷)に同じ。㈢紋所の一。蘘荷の花に象(カタド)れるもの。

はなめうが-くづし 花蘘荷崩【名】紋所の一。前條の紋を崩して、簡略にしたるもの。

はなめ-がね 鼻眼鏡【名】『佛 Pince-nez』耳に掛くべき蔓などは取り附けず、二つの玉を結合する緣の、山形をなせる部分にて、鼻筋を挾み落ちぬやうに支持したる眼鏡。鼻ばさみの眼鏡。

はな-めく 花めく【動四自】㈠花やかに見ゆ。はなやぐ。落窪「人人參り集りて、さうぞき花めきたるを見れば」㈡時めく。さかゆ。唐物語「その頃、時にあひ、花めかせたまふ居、おはしましけり」

はな-めぐり 花巡【名】花を見めぐりて旅行すること。去來「吉野山また散る方に花めぐり」

はな-めど 鼻めど【名】びこう(鼻孔)に同じ。〔俚諺〕

はな-もじ 花文字【名】『英 Capital letter』西洋の文字の一種。一文章中の最初の語、又、英語等にては固有名詞、獨逸語にてはすべての名詞の最初、及び英語に於ける代名詞 I、感嘆詞 O などに用ふる、大形のもの。おやもじ。

はな-もち 花餅【名】㈠ささもち(笹餅)に同じ。もちばな(餅花)參照。二代男「井筒道心をもてなしに、茶事の花餅などして」㈡春、花の頃、大和國吉野にて賣る餅。竹串を、半ばほど、團扇(ウチハ)の骨の如く細く裂き、その一つ一つに、小き餅を貫きたるもの。あやめ團子の類。御福(ゴフク)。

はな-もち 鼻持【名】嗅覺に感ずること。

鼻持がならず【句】㈠臭氣、堪へ忍ぶべからず。鼻むけがならず。㈡品性に嫌ふべき處あり。

はなもち-わちがひ 花持輪違【名】紋所の一。輪違の中央に一箇の大なる四瓣花を、輪の交叉點なる上・下・左・右に、各一箇の小なる花を描けるもの。

はな-もつやく 花沒藥【名】『英 Stick-lack』舶來品なる一種の染料。波斯・印度その他の熱帶亞細亞地方に産出し、コックス、ラッカ(Coccus Lacca)と稱する小蟲の、杜松等の樹枝を螫すによりて生ずる一種の樹脂と、枝梢とより成り、長さ一二寸、圓木を二つ割にしたる如き形をなし、新しきは、茶褐色にして光あれど、年を經れば、黑色に變ず。枝梢中には、小蟲の死殼を藏し、その體中に、一種の紅色色素を含有するが故に、碎きて枝梢を去り、古來、染料とし、又、臙脂の製造用に供す。

はな-もと 鼻元・鼻許【名】㈠鼻の附根。鼻のきは。㈡手近き處。目の前。はなさき(鼻先)㈡參照。甲陽軍鑑「利根すぎたる大將は、鼻もとに分別ありて」

はなもと-じあん 鼻元思案【名】はなさきふんべつ(鼻先分別)に同じ。八笑人「今までの鼻もと思案と違って、まづ、筋はからだ」

はなもと-ゆひ 花元結【名】美しく染めたる元結。

はな-もの 花物【名】㈠上べのみ花やかなる物。あだあだしくはかなき物。〔古語〕萬葉「しらがつくゆふは花物言(コト)こそはいつのまさかも常忘らえね」㈡生花(イケバナ)・園藝などにて、花を主とする草木。(葉物に對して)

はな-もみぢ 花紅葉【名】花ともみぢと。花又はもみぢ。春花秋葉。源氏「はかなき花紅葉といふも、をりふしの色あひ、つきなくはかばかしからぬは」武家義理物語「美なる娘の兄弟ありて、何れか花紅葉」

花紅葉を折る【句】㈠花・紅葉の枝を折る。㈡「花を折る」㈡に同じ。榮花「花紅葉折りし袂も今はとて藤の衣を著るぞ悲しき」

はな-もや 端母屋・鼻母屋【名】〔建〕軒に最も近き母屋。

はな-もやう 花模様【名】花形の模樣。花紋。

はな-もり 花守【名】花の咲ける草木を守る者。花の番人。夫木「すぎねとやあなことごとし花守のわが籬にも秋はあるらん」

はな-もり 花盛【名】料理にて、色色に染めし食品を取り合はせて盛ること、又その料理。

はな-や 花屋【名】花を賣る家、又これを賣る人。はなうり。

はな-やか 花やか【貌】はなばなしきさま。きらびやか。はでやか。華美。(光・色・聲・香などにいふ)萬葉「紫の斑のかづら花やかに今日見る人に後戀ひむかも」源氏「花やかに枕「夕日、花やかにさして」さし出でたる夕月夜」

はなやか-がる 花やかがる【動四自】自ら花やかなりと思ふ。稚癖談「おやま・藝子は、四十をなほ老いたりともせじ。花やかがるなん、世の末、またいかならん」

はな-やかた 花屋形【名】鬮船などの矢倉の上に、美しき立木にて設けたる樓。

はなやぎ 花柳【名】藤間(フヂマ)・西川と共に、劇場の振附の一派。花柳壽輔を祖とす。花柳派。わかやぎ(若柳)參照。

はなやぎ-じゆすけ 花柳壽輔【名】〔人〕花柳派の踊の始祖。江戸芝神明前(シンメイマヘ)の玩具屋淸兵衞の長男。幼名は芳松。吉原の臺屋魚吉に養はれ、幼時より俳優となりて、市川鯉吉と名乘り、後、振附二代西川扇藏に踊を學び、名を芳次郎と改め、後、更に姓を花柳、名を壽輔と改め、振附の一派を立て、一時、江戸三座に於ける振附の全權を握る。明治三十六年歿す。年八十四。

はなやぎ-は 花柳派【名】はなやなぎ(花柳)に同じ。

はな-やぐ 花やぐ【動四自】花やかになる。はでになる。花めく。源氏「花やぎたるところつきて、物わらひしたまふおとどの」

はな-やくしや 花役者【名】はながたやくしや(花形役者)に同じ。

はな-やさい 花椰菜【名】〔植〕葉牡丹(ハボタン)の一品種。數多の花蕾、莖の先端に集り、白色・柔軟の毬(マリ)をなすもの。

はな-やしき 花屋敷【名】㈠多くの花を培養して、人の來觀に供ふる所。㈡東京市淺草公園にありて、鳥獸を飼養し、生(イキ)人形を飾り、芝居などを興行して、人の來觀に供ふる所。設立の當初は、花卉を觀覽せしめたり。

はな-やすり 花鑢・瓶爾小草【名】〔植〕瓶爾小草科に屬する多年生の草。根は蔓延して、處處に、高さ三四寸に達する莖生じ、四月頃、莖と同じ程なる長さの、匙形・淡綠色なる一葉を著け、梢上に、長さ一尺ほどにて鑢のごとき形の囊狀物を出だし、熟すれば、胞子を散亂す。そうらくぎぼし。でんでこばな。へびのした。

はなやすり-くわ 瓶爾小草科【名】〔植〕隱花植物・羊齒(シダ)類に屬する一科。皆小草にして、熱・溫兩帶地方に分布す。へいじせうさうくわ。

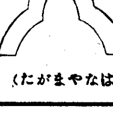
はな-やなぎ 花柳【名】㈠襲(カサネ)の色目の一。表は白、裏は青。春用ふ。㈡はなやぎ(花柳)を見よ。

はなや-にっき 花屋日記【名】〔書〕ばせをきうはなやじっき(芭蕉翁花屋實記)に同じ。

はなやま 花山【名】〔地〕山城國宇治郡山科(ヤマシナ)村の大字。上花山・北花山の二に分る。はなのやま。げんぎやうじ(元慶寺)參照。拾遺「待てといはばいともかしこし花山に暫しと鳴かん鳥の音(ネ)もがも」

はなやま-がた 花山形【名】紋所の一。下の圖を見よ。

はなやま-たばこ 花山烟草【名】昔、山城國宇治郡花山にて刻みて賣りし烟草。



(はなやまがた)

はなやま-でら 花山寺【名】げんぎやうじ(元慶寺)に同じ。

はなやま-ぶき 花山吹【名】襲(カサネ)の色目の一。表は薄朽葉、裏は黃。一說に、表は經(タテ)紅、緯(ヌキ)黃なる織物、裏は黃。女房の襲には、上より下まで山吹色を重ね、單(ヒトヘ)を靑くす。增鏡「花山吹のうへの袴」

はな-やり 端槍【名】いちばんやり(一番槍)に同じ。太閤記「最初、花槍(ハナヤリ)六度突きはべりしが」

はなや-りやうきやう【名】〔植〕はなめうが(花蘘荷)㈠に同じ。

はな-ゆ 花柚【名】柚(ユズ)の花の蕾の、香味料として用ふるもの。とこゆ。一代男「たばね牛蒡に、花柚など下げて」曾我會稽山

「秩父殿は精進汁、花柚散らして進まれたり」

はな-よね 花米【名】はなしね（花稻）に同じ。

はな-よめ 花嫁【名】結婚してより多くの日數を經ぬ嫁。初婚の嫁。新婦。（花聟に對して）

はなよめ-ご 花嫁御【名】前條の敬稱。丹波與作「御養子分の約束にて、蕾から取る花嫁御」

はなよめ-そば 花嫁蕎麥【名】上野國館林（タテバヤシ）附近の風俗として、花嫁の輿入ありて、三三九度の祝儀終りたる時、侍女の持ち出でて、來客に供する蕎麥。細く長く親愛の情を重ねんとの意に出づといふ。

はな-より-だんご 花より團子【名】『「花より團子」を見よ』明治二十七年頃より、京都嵐山の附近にて賣る、名物の團子。

ば-ならし 場慣・塲慣【名】場所に慣るるやうに、練習を積むこと。場馴れしむること。新竹齋物語「晝より相撲の場ならし」

は-ならび 齒並【名】口中の齒の並び方。はなみ。

はな-らふそく 花蠟燭【名】軸に花紋などを畫きたる蠟燭。會津（アヒヅ）蠟燭などに、その例あり。

はな-らんま 花欄間【名】〔建〕花形模樣の附きたる欄間。はなざま（花狹間）參照。

はなり 放【名】うなゐ（髫髮）に同じ。〔古語〕萬葉「橘のこばのはなりが思ふなむ心うつくしいであれは行（イ）かな」

放の髮【句】前條に同じ。〔古語〕萬葉「少女らがはなりの髮をゆふの山雲なたなびき家のあたり見む」

はなり-そ 離礒【名】はなれそ（離礒）に同じ。〔古語〕萬葉「たたみけめむらじが礒のはなりその母を離れて行くが悲しさ」

はなる 離る・放る【動四自】次條に同じ。（動詞としての用例はなけれど、はなり（放）・はなりそ（離礒）などの假體言の形の殘存せる以上、この四段活用の語も存在せしなるべし）〔古語〕

はなる 離る・放る【動下二自】㊀分れ分れになる。附著又は接近してあらず。隔り遠ざかる。分離す。㊁場處・官職、又は夫妻の間などの關係絕ゆ。萬葉「はしけやし家をはなれて」竹取「はなれたまひし元のうへは」拾遺「大將はなれはべりて後は」

離れぬ中（ナカ）【句】關係親密なる間がら。狹衣「母上の御せうとの宰相中將、はなれぬ中にて、おのづから見たまひて」增鏡「爲道は、大納言の孫、爲世の太郎なり。はなれぬ中にて、いといたくいどみかはしたり」

ば-なる 場馴る・塲馴る【動下二自】經驗に富み、事を處するに馴る。座馴る。

はなれ 離・放【名】㊀はなるること。物と物とのあひだ。へだたり。距離。㊁はなれざしき（離座敷）に同じ。㊂〔文〕俳諧にて、句中に取り合はせたる物事の、互にひたと附かざること。

ば-なれ 場馴・塲馴【名】場馴るること、又、場馴れてあること。

はなれ-いし 離石【名】庭園などに、他の石と離れて据ゑてある石。賴政集「いとはるるわがみぎはには離石の掛くる淚にゆるぎげぞなき」

はなれ-いは 離岩【名】海又は湖沼などの中に孤立せる岩。爲忠百首「沖津島ゆく人難き離岩に安くも鳥の立居するかな」

はなれ-いほ 離庵【名】人家より遠ざかれる所にあるいほり。傾城島原蛙合戰「隱者ずまひの離庵」

はなれ-う 放鵜【名】綱を放れてある鵜。新六「いかにしてゐかふ入江のはなれ鵜のしばしの程も心休めん」一茶「放鵜が子の泣く舟に戻りけり」

はなれ-うま 放馬【名】人手又は綱を放れてある馬。はなれごま。保元「主もなき放馬、源氏の陣へ驅け入ったり」太平記「鞍の上空しき放馬、四五百匹」

はなれ-ぎたなし 離穢し【形一】㊀未練多くして、容易に離れず。㊁だしぎたなし（出穢し）に同じ。

はなれ-きやうげん 離狂言・放狂言【名】芝居の狂言の、一幕づつはなればなれなるもの。（續（ツツキ）狂言に對して）

はなれ-こじま 離小島・離小嶋【名】陸地より遠く離れてある小島。萬葉「荒磯（アリソ）ゆもまして思へや玉の浦の離小島の夢（イメ）にし見ゆる」

はなれ-ごま 放駒【名】はなれうま（放馬）に同じ。堀太「梓弓はるの澤べのはなれ駒やがて荒れのみまさる頃かな」

はなれごま-しろざゑもん 放駒四郎左衞門【名】〔人〕江戸の園藝家。始めて淺草海苔を製す。享保頃の人。

はなれごま-しろべゑ 放駒四郎兵衞【名】〔人〕町奴。幡隨院長兵衞の子分。のち斬に處せらる。

はなれ-ざか 離坂【名】〔地〕信濃國の沓掛（クツカケ）と輕井澤との間にある坂。謠曲（鉢木）「今ぞ浮世を離坂、墨の衣の薄氷（ウスヒ）川」

はなれ-ざしき 離座敷【名】母屋（オモヤ）と離れてある小座敷。はなれや。はなれ。孤亭。

はなれ-じま 離島・離嶋【名】陸地より遠く離れてある島。孤島。夫木「浪荒き南の海の離島たがためのりの船浮ぶらん」一代女「離島の隱岐の國の人は」

はなれ-す 離洲【名】陸より離れたる所にある洲。夫木「汐がれのひかたの浦の離洲に鶴（ツル）ぞ鳴くなる友呼ばふらし」

はなれ-そ 離礒【名】遠く海上に突き出で、離れてある礒。はなりそ。〔古語〕萬葉「はなれそに立てる檉（ムロ）の木うたかたも久しき時を過ぎにけるかも」

はなれ-づき 離月【名】「八月は離月」を見よ。

はなれ-ばなれ 離離【名】互に離れてあること。きれぎれ。ちりぢり。ばらばら。

はなれ-まつ 離松【名】他の樹木より離れて立てる松。孤松。貞應三年百首「波かかる礒邊に立てる離松いく汐風を身にならふらん」

はなれ-め 離目【名】物と物との合はせ目の隙間（スキマ）。すき。すきま。

はなれ-もの 離物【名】㊀仲間より分れ離れてある物。分離してある物。のけもの。若風俗「その中に、美少一人、はなれ物にて、艫櫓（トモロ）に上り」㊁普通と同じからぬ物。特殊なる物。平家女護島「慈悲・善根なんどで子が生る程ならば、世に難產は有るまいが、產の道ははなれ物」㊂鎧の胴と袖との、縅毛（ヲドシゲ）の色の互に異なること、又その鎧。諺「合物（アハセモノ）は離物」㊃離るべき筈の物。

はなれ-や 離家・離屋【名】㊀隣のなき家。ひとつや。孤屋。㊁母屋（オモヤ）と離れてある家。子亭。

はなれ-わざ 離業【名】普通よりもかけ離れてすぐれたるわざ。奇拔なる技藝。

はなれ-を 離尾【名】他の山と遠く離れてある山の尾。太平記「東のはなれ尾に二引兩（フタツヒキリヤウ）の旗の見ゆるは」

はな-ろくしやう 花綠青【名】『英Emerald green』顏料の一。砒酸銅又は醋酸銅より成る、鮮綠色の粉末。歐洲より舶來し、有毒なり。西洋綠靑。えめらるど綠（リヨク）。

はな-わ 花輪【名】『英Wreath』浮輪の如く丸く縮ねたる骨組に、隙間なく、生花又は造花を取り附け飾りたるもの。歡迎又は哀弔の意を表するために、人に贈る。

はな-わ 鼻輪【名】牛の鼻に通す輪繩。はながい。

はなわ 花輪【名】〔地〕陸中國鹿角（カヅノ）郡にある町。能代（ノシロ）川の上流なる米代（ヨネシロ）川の右岸。

はな-わく 花框【名】花模樣にて飾りたる框。種種あり。

はなわけ-ごろも 花分衣【名】花咲ける野山を分け行く時に著る衣。花を分け來たる衣。〔古語〕萬代「秋の野の花わけごろも都まで色はやつさじ見ん人のため」

はな-わちがひ 花輪違【名】紋所の一。輪違の一種。東海道名所記「名にしおふ花輪ちがひに桐の紋は、八千世とかや、島一番の大夫ぞかし」

はな-わら【名】〔植〕すずざいこ（徐長卿）に同じ。

はな-わらび 花蕨・陰地蕨【名】〔植〕瓶爾小草（ハナヤスリ）科に屬する多年生の草。高さ五六寸に達し、通常、一葉と共に一穗を抽き、多數の子囊、穗狀をなして生ず。葉は數回羽狀に分裂し、蕨のに似て、小く厚く、深

綠色を呈す。莖の末に、多くの枝を生じて、粟粒の如き小花を開く。盆栽とし、又、葉を食用に供す。かげわらび。つゆわらび。とこわらび。ひかげわらび。ふゆのはなわらび。ふゆわらび。

はな-ゑみ 花笑・花咲【名】咲きたる花のごとくに、笑を含めること。〔古語〕萬葉「道のべの草深ゆりの花咲にゑまししからに妻といふべしや」

はな-を 鼻緒【名】『端(ハシ)の緒にて、もとその一部なる前緒のみの稱なりしなるべしといふ』履物にすげたる緒。

はなをか-ずゐけん 華岡隨軒【名】〔人〕醫師。名は震、字は伯行。青洲と號す。紀伊國の人。上京して吉益南涯・大和見水等に學び、後、蘭法及び漢法を折衷して、一家を成し、外科の面目を一新す。文久二年、紀州侯に辟されて、醫員となり、後、侍醫に準じ、天保六年歿す。年七十六。

はな-をけ 花桶【名】㊀花を入るる桶。甲陽軍鑑「勸進能の時は、御簾(スミ)の面に花桶有らば、庶子なり、總領のは鶯籠なり」一代男「水草の花桶入れて、心の涼しきやうなして」㊁墓參の時に、花・水など入れて携へ行く桶。

はな-をこぜ 花虎魚【名】〔動〕硬骨類に屬する魚。海岸の馬尾藻(ホンダハラ)の中に棲み、體短くして、やや側扁し、且つ鱗を缺き、體の所所より、海草の葉のごとき皮質の突出物あり、この突出物と體の色彩とのために、所在を發見すること難く、纖維狀のものを用ひて、巧みに巢を營む。

はな-をずれ 鼻緒擦【名】鼻緒の堅きために、足の甲の擦すること、又その傷。かんかふさう。のいずみ。一代男「鼻緒擦の痕なき御方あり」

はな-をぢ 鼻緒地【名】鼻緒に使用する緞地。

はな-をどり 花踊【名】美しく賑かなる踊。若風俗「難波の昔、太夫藏人、お國が女歌舞伎も絕えて、若衆をあまた抱へ、これぞ、世界の花踊」

はなをり-こんぶ 花折昆布【名】元揃昆布中の良品を選みて、一枚の折板に當て、その板より餘れる部分を、兩端より內部へ折り込み、その七八枚を重ね合はせ、兩端を縛して、一把となせるもの。

はな-をれ 鼻折【名】〔動〕次條の略。

はなをれ-だひ 鼻折鯛【名】〔動〕きだひ(黃鯛)に同じ。

は-に 埴【名】『古事記中卷の應神天皇の歌に、「はつには膚赤らけみ」とある初土(ハツニ)の略なりとも、黃赤色を呈するより、映土(ハエニ)と呼びしものの約なりともいふ』質緻密にして、黃色又は赤色なる粘土。瓦・陶器などを作る材料とし、古代は、衣に摺りつけて、模樣をあらはすにも用ひたり。そほに。ねばつち。へな。〔古語〕記「海(ワタ)の底に入りて、底のはにを咋(ク)ひ出でて、天(アメ)の八十(ヤソ)ひらかを作り」

は-にかみ【名】㊀はぎしり(齒軋)に同じ。〔古語〕靈異記「齘、波爾加美、又、伊岐岐美」㊁恥しがること。

はにかみ-や はにかみ屋【名】はづかしがりや(恥しがり屋)に同じ。

はにか-む【動四自】㊀齒ぎしりす。いめく。〔古語〕字鏡「齘、齒重生。波爾加无、又、久不、又、加无」㊁恥しがる。はぢらふ。しぐむ。(小兒・女などにいふ)

は-にく 齒肉【名】齒の根元の肉。はぐき。はじし。

ば-にく 馬肉【名】馬の肉。食用とす。さくらにく。

はにくちをか-の-みささぎ 埴口丘陵【名】飯豐青(イヒトヨアヲ)皇女の御陵。大和國北葛(キタカツ)城(ラギ)郡新莊村大字北花內の南にあり。土俗、三歲(サンサイ)山といふ。

ばにく-や 馬肉屋【名】馬肉を賣り、又は馬肉を食はする、飮食店。

はに-ざふ 半插・匜・楾【名】はんざふ(半插)に同じ。〔古語〕和名「匜、波爾佐布。俗用二楾字二」

はに-し 土師【名】『埴爲(ハニシ)の義。師は假借の文字』上古、埴輪(ハニワ)などの土器の製作を業とせし者の官職。はじ。紀「土師、ハニシ」

はに-し 土部【名】『前條の語の轉義』諸陵司(ミサザキノツカサ)の職員の一。葬式・陵墓などの事を掌りしもの。

はにし 櫨・黃櫨【名】〔植〕はぜ(櫨)に同じ。〔古語〕和名「櫨、波邇之。今之黃櫨木也」

はにしな 埴科【名】〔地〕信濃國十六郡の一。郡役所を屋代(ヤシロ)町に置く。萬葉「人皆の言(コト)は絕ゆとも埴科の石井の手兒(テコ)が言な絕えそね」

はにし-の-むらじ 土師連【名】古、土師部(ハジベ)を率ゐて、供御(ゴク)の齋器及び皇室の凶儀を掌りし職。

はにし-べ 土師部【名】古代、土器の製作を業とせし部民。はじべ。記「土師部を定めたまひき」

ばにちい (英 Vanity)【名】きよえい(虛榮)に同じ

はに-つかひ 埴使【名】「埴採(ハニトリ)の神事」に同じ。

ばにっく (英 Panic)【名】風說に脅されて發生する、經濟界の恐慌。

はに-つち 埴土【名】はに(埴)に同じ。〔古語〕紀「埴土、ハニツチ」枕「屐子(ケイシ)のつややかなるが、埴土多く附いたるを穿(ハ)きて」

はにつち-ぶね 埴土船【名】古、素戔嗚(スサノヲ)尊の、乘りて、東に渡りたまひきといふ船。埴土にて造りしものか、又は埴土にて塗り飾りしものかなるべしといふ。

はに-とり 埴採【名】【句】攝津國の官幣大社住吉神社にて、毎年、祈年祭・神嘗祭の當日、神職、大和國畝火(ウネビ)山に至り、畝火山口神社の神職と共に土を採る儀式。その地の井水にて手を淨め、口に榊葉を含み、三握半の土を採り、その山の榊を折り添へて持ち歸り、その土にて平瓮(ヒラカ)を造り、神供(シンク)の具を調ず。神武天皇の、天香山(アマノカグヤマ)の埴を採り、八十平瓮(ヤソヒラカ)を造らしめて、諸神を祭らしめ給ひし吉例に則りしものともいふ。中古以來中絕せしを、明治三十九年復興す。一名、使埴(ハニツカヒ)。

はに-ひ 半臂【名】はんぴ(半臂)に同じ。〔古語〕字鏡「半臂、波爾比」

はに-ふ 埴生【名】㊀埴(ハニ)ある地。〔古語〕萬葉「草枕旅ゆく君と知らませば岸の埴生に匂はさましを」㊁次條の略。**はにふずみ**(埴生住)參照。傾城反魂香「埴生にかくまへ參らする夫婦が所存ぞ賴もしき」

埴生の小屋(コヤ)【句】「埴生の小屋(ヲヤ)」に同じ。夫木「ますらをが埴生の小屋の棟弱み幾重になりぬ雪のうはぶき」

埴生の床【句】土の上に筵など敷きたる寢床。〔古語〕金槐集「旅の空馴れぬ埴生のよるの床わびしきまでにもる時雨かな」

埴生の小屋(ヲヤ)【句】土の上に筵など敷けるのみなる、小く賤しき家。賤(シヅ)が伏屋(フセヤ)。萬葉「遠方(ヲチカタ)の埴生の小屋に小雨(コサメ)降り床さへ濡れぬ身に添へ我妹(ワギモ)」

はにふ 羽生【名】〔地〕㊀武藏國北埼玉(キタサイタマ)郡の町。忍(オシ)町の東北二里半。東武鐵道の一驛。近世、羽生領七十四箇村の首邑たりし地。㊁下總國結城(ユフキ)郡大花羽(オホナハ)村の大字。鬼怒(キヌ)川の右岸。水海道(ミツカイダウ)の北約二十三町。

ばにふ-がは 馬入川【名】〔地〕相模國相模川の別稱。

はにふ-ざか 埴生坂【名】〔地〕河內國南河內郡古市より同郡埴生村を經て、大和國に通ずる古道。履中天皇、皇太子たりし時、仲皇子の難を脫れて、難波の火を見たまひし處。一名、丹比(タヂヒ)坂。記「はにふ坂に到りまして、難波宮を見やり給へば」

はにふさかもと-の-みささぎ 埴生阪本陵【名】仁賢天皇の御陵。河內國南河內郡長野村大字野中にあり。

はにふ-ずみ 埴生住【名】『はにふ(埴生)㊁を見よ』埴生の小屋に住むこと。雙生隅田川「隅田河原の邊(ホトリ)に近き埴生住、夫婦も元は都鳥、有るか無きかのかせ所帶」

はにふ-の-かへし 破圦返【名】劒法の一手。謠曲(烏帽子折)「熊坂も、大太刀使のくせ者なれば、さそくを使って十方切・八方拂や腰車、破圦の返、風(カザ)まくり」

はにふ-はちまん 埴生八幡【名】ごこくはちまん(護國八幡)を見よ。

はにふ-やき 埴生燒【名】越中國西礪波（ニシトナミ）郡埴生（ハニフ）村より燒きて出す陶器。文政中、村民太田某の創始に係り、茶碗・土鍋の類多し。村は俱利伽羅（クリカラ）越の舊道の懸る處にして、埴生八幡あり。

はに-べ 埴瓮・埴瓶【名】埴にて作りたる瓶。〔古語〕紀「埴瓮、ハニベ」

はに-ま 埴馬【名】上古、埴にて、馬の形を作り、埴輪に立てしもの。〔古語〕紀「土馬、ハニマ」

は-にんじん 葉人參・葉胡蘿蔔【名】秋季、人參㊁の未だ根の延びざるに當り葉を取りて食ふ時の稱。

はに-もの 土物【名】埴輪に立つるに用ふる物。〔古語〕紀「土物、ハニモノ」

はにやす-の-いけ 埴安池【名】〔地〕大和國磯城（シキ）郡香具山（カグヤマ）の西北麓にありし池。今も香久山（カグヤマ）村大字南浦に、その痕跡を留む。大和「埴安の池の堤のかくれぬのゆくへを知らずとねりは迷ふ」

はにやす-の-かみ 埴安神【名】次條に同じ。

はにやすびこ-の-かみ 埴安彥神【名】『埴安は埴（ハニ）挻（ネヤ）すの約にて、糞の形に本づきたるものといふ』伊弉冊（イザナミ）神、火神を生みて病み苦しみたまふ時、埴安姬神と共に、その糞に成りましきといふ男神。土壤を司るといふ。

はにやすびめ-の-かみ 埴安姬神【名】前條の男神と同時に成りて、同じく土壤を司るといふ女神。建埴安神（タケハニヤスノカミ）。

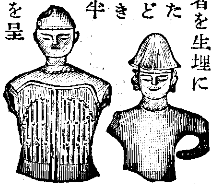
はにやまびめ-の-かみ 埴山姬神【名】前條に同じ。

ば-にゆう 馬乳【名】㊀馬のちち。㊁『圖經本草に「蒲萄子、紫白二色、又有下似二馬乳一者上」とあり』蒲萄の實の異稱。

ばにら 華尼拉（英 Vanilla）【名】『もと西班牙語』㊀〔植〕蘭科に屬する草。原產地は西印度・メキシコ及びブラジルなれども、今は、普く熱帶諸國に培養す。わにら。㊁前記の植物の果實。帶黑褐色にして、光澤を有し、單房性にして、多數の種子を包藏し、稀薄油樣の液、これを圍繞す。バニリンを含有し、香水・香料等の原料に供し、又、食物の香料及び芳香性健胃藥たり。わにら。わにるら。

ばにりん 華尼林（英 Vanillin）【名】バニラの香素。辛辣なる味を有し、熱湯又は酒精に溶解する、白色・針狀の結晶體。現時は、人工によりてコニフエリン又は丁子油などよりこれを採集す。香料に供し、又、フロログルチンと共に、酒精に溶解し、鹽酸試驗用に賞用す。わにりん。

はに-わ 埴輪【名】上古、野見宿禰（ノミノスクネ）の建言に依り、殉死者を生埋にする風習に代ふるために、人・馬・甕などを、埴にて造り、燒きて、陵墓の周圍に、半ば地に埋めて、車輪の如く立て列ねしもの。赤褐色を呈し。表面に、櫛などにて搔きたるが如き痕跡を留む。たてもの。



（はにわ）

はに-わり 半月【名】『半割の義』陰部の、男性ともなり、女性ともなるもの。一箇月の中、上半月は男性にして、下半月は女性となるといふ。ふたなり。はんいんやう（半陰陽）參照。和名「半月。內典云、五種不男、其五曰二半月一、波邇和利。或說云、一月卅日、其十五日爲レ男、十五日爲レ女之義也」

はに-わり 埴破【名】雅樂の一。高麗樂の壹越（イチコツ）調に屬し、埴の玉五つを懷にし、舞の間に取り出して、巴の紋ある所に打ち當つることを爲す。とうぎよくまひ。はんなり。はんわり。和名「高麗樂曲、埴破、波爾和利」

はぬ 跳ぬ・撥ぬ【動下二自】㊀躍りあがる。をどり立つ。とびあがる。とびかへる。跳躍す。〔刎ぬ〕㊁飛び散る。ほとばしる。飛散す。はねかる。㊂はじく。はぜる。反撥す。「泥水はぬ」「炭火はぬ」〔反ぬ〕七偏人「手桶の箍（タガ）が反（ハ）ねたのか、ばちん」㊃『もと次條の語の轉義。昔の芝居は、入口に薦（コモ）懸りゐて、見物人の出入ごとに撥（ハ）ねたりしに因る』興行場にて、その日の演技終り、見物人散る。浮世風呂「芝居がはねたから」

はぬ 撥ぬ【動下二他】㊀末を上げて拂ふ。萬葉「沖つ櫂（カイ）いたくなはねそ邊（ヘ）つ櫂いたくなはねそ」㊁文字を書くに、筆の先を拂ひ上ぐるやうにす。㊂薙ぎ斬る。切り落す。〔刎ぬ〕平家「河原へ引き出でて、頭をはねよとのたまひける」㊃除き去る。投げ棄つ。〔刎ぬ〕盛衰記「沈石（カイリ）を下（オロ）し、荷を刎ね、船を直しけれども」薩摩歌「心の種のささ舟に、情の上荷はねられて」㊄突き返す。突き戻す。㊅「頭（アタマ）を張る」に同じ。丹波與作「八文であつた物、一文はねて、七つにして」

は-ぬき 齒拔【名】蟲齒などを拔き取りて、療治するを職とする人。

は-ぬけ 齒拔・齒脫【名】齒の脫けてあること、又その人。はなし。

は-ぬけ 羽拔・羽脫【名】鳥の羽の拔け落ちてあること、又、拔けかはること。新六「今はまた羽ぬけになれる水鳥の立居かなはぬ身をいかにせん」

はぬけ-ぐさ 葉拔草・葉脫草【名】〔植〕しびとばな（死人花）を云ふ。〔豐後國の方言〕

はぬけ-どり 羽拔鳥・羽脫鳥【名】羽の拔け落ちてある鳥、又、羽の拔けかはる頃の鳥。夫木「夏草の野澤がくれの羽ぬけ鳥ありしにもあらずなるわが身かな」一茶「なかなかに安堵顏なり羽拔鳥」

は-ぬひ 端縫【名】布帛などの切端のほつるるを防ぐために、細く折り返して縫ふこと。はしぬひ。ふちぬひ。著聞「端縫といふ物して、うづくまりて居たりけるを」

は-ね 羽根・羽【名】㊀鳥の羽の根もと。和名「羽本曰レ翮、波禰。一云、羽根也」㊁鳥の全身を被ふ毛。羽（ハ）。萬葉「梅が枝に鳴きてうつろふ鶯のはね白たへにあわ雪ぞ降る」㊂鳥類又は蟲類の飛翔の器官。つばさ。羽（ハ）。〔翅〕古今「白雲にはねうちかはし飛ぶ雁（カリ）の數さへ見ゆる秋の夜の月」㊃やばね（矢羽根）の略。㊄羽子板（ハゴイタ）にて高く突き上げつつ玩ぶもの。もと小き羽三枚乃至六枚を、細き短き竹を中心として束ねて排き、竹の一端に無患子（ムクロジ）の核を取り附く。羽の色は、昔は黑又は白なりしが、今は種種の色に美しく染めたるものあり。はご。はねこぎ。こぎのこ。つくばね。〔羽子〕㊅器械などの一部、翅の形に似たるもの。「風車のはね」㊆四錢。〔楊弓・大弓にて、錢を賭物とする時の隱語〕㊇『鳥の、羽根あるによりて、飛翔自在なるに譬へていふ』かね。金錢。〔博徒の語〕「羽根が出來る」㊈紋所の一。羽根㊄に象（カタド）りたるもの。一箇のみを描きたるものの外、「三寄（ミツヨセ）羽根」・「三割（ミツワリ）羽根」・「三羽根丸（ミツハネマル）」・「四羽根丸（ヨツハネマル）」・「羽根桐（ハネギリ）」など、種種あり。

羽根が生えて飛ぶ【句】商品景氣よく、數多賣れゆく。浮世風呂「そのくせ、羽が生えて飛ぶぜ。おつそろしい」

羽根並ぶ鳥【句】「比翼（ヒヨク）の鳥」に同じ。榮花「はねならぶ鳥となりては契るとも人忘れずばかれじとぞ思ふ」

羽の觴（サカヅキ）【句】うしやう（羽觴）の直譯。雅筵醉狂集「花に醉ひ蝶と飛びつき作る詩も李白がはねのさかづきの數」

羽根の生えた飯（メシ）【句】强（コハ）き飯。山井「羽根の生えた飯に漬けてや雀鮓」

羽の林【句】うりん（羽林）の直譯。〔古語〕長秋詠藻「左少將が中將になりて侍りしに、經家の三位の許より。日に添へて花咲く宿の梢かな羽の林に枝を連ねて」

羽根を交（カ）せる鳥【句】「比翼（ヒヨク）の鳥」に同じ。玉葉「生きての世死にての後の後の世も羽根をかはせる鳥となりなん」

羽根を垂る【句】しほしほとして閉口す。雌伏す。平身低頭す。「尾羽（ヲバ）打ち枯らす」參照。平治「長田（ヲサダ）四郎忠致（ムネ）は、平家の侍どもにも惡まれしかば、西國へも參らず、……羽を垂れて、鎌倉殿へぞ參りける」

羽根を突く【句】羽根突（ハネツキ）の遊をなす。

羽根を並ぶ【句】㊀鳥の、翼をならべたるごとく、二人離れず。比翼の契を結ぶ。源氏「朝夕のことぐさに、はねをな

らべ、枝をかはさんと契らせたまひしに」㊁臣下相並びて、君主をたすく。源氏「はねを並ぶるやうにて、おほやけの御うしろみをも仕うまつらんと」

はね 跳・撥【名】㊀跳ぬること。躍りあがること。〔刎〕㊁泥又は水などの、ほとばしりて、身體にはねかかるもの。浮世風呂「なぜ、立って居て、はねをかけた」㊂興行物のその日の演技終りて、見物人の散ずること。「芝居のはね」「寄席(ヨセ)のはね」㊃ばね(發條)に同じ。㊄はねかへりもの(跳返者)の略。

はね 撥・撇【名】『前條の語の轉義』文字を書くに、筆の尖を拂ひ上ぐるやうにすること、又その如くにして書きたる部分。

はね 八子【名】唐鞍(カラクラ)の鞍骨(クラボネ)の後より、左右へ出し垂れて、飾とするもの。金屬又は革にて作り、鈴を著く。

はね【助數】兜などを數ふるにいふ語。謠曲(碇潜)「鎧二領に兜二はね」

ばね 發條・彈機【名】『はね(跳)の轉訛』鋼鐵また眞鍮などの細長きものを、螺旋狀に巻き、又は彎曲せしめて、諸器械に取り附け、その撥ね返らんとする力を利用するもの。はじき。

はね-あがる 跳上る・刎上る【動四自】とびあがる。躍りあがる。太平記「岸より上へ、つと刎ね揚り」

はね-あぐ 跳上ぐ・刎上ぐ【動下二他】はねあがるやうにす。はねてあぐ。

はね-あげ 刎上【名】〔商〕相場の刎ね返りて、騰貴すること。〔取引所の語〕

はね-あし 跳足・反足【名】足にて蹴て、跳ねとばすこと。艷狩劍本地「反足に、百間ばかり蹴散らして」

はね-あり 羽蟻【名】〔動〕はあり(羽蟻)に同じ。

ば-ねう 馬尿【名】馬の小便。

はね-うき 羽根浮子・羽浮子【名】鳥の羽にて作りたる浮子。

はね-うつ 羽打つ・羽撃つ【動四自】羽ばたきす。はばたく。はうつ。はねきる。師氏集「澤の面に年經る鶴の千代を經て後ははね打つほども同じとや」

はね-うま 跳馬・駻馬・刎馬【名】はねあがる癖ある馬。じやじや馬。駻馬(カンバン)。和名「駻、馬禰無末。突惡馬也」

跳馬の看板【句】饅頭屋の店頭に出しし、跳馬を畫きたる看板。皇都午睡「饅頭屋の店に、刎馬の看板を出せしは、あらうましといふ昔の謎」

はねうま-の-しやうじ 跳馬障子・駻馬障子【名】古、清涼殿の渡殿(ワタドノ)にありし衝立(ツイタテ)障子。著聞「渡殿に、はね馬・よせ馬の障子を立て、又、同じ渡殿の北邊の朝餉(アサガレヒ)の前に、馬形の障子はべり」盛衰記「裝束をば、駻馬(ハネウマ)の障子に打懸け」

はね-おく 跳起く【動上二自】跳ぬるやうにし、起きあがる。とびおく。蹶起す。

はね-おと 羽根音・羽音【名】**はおと**(羽音)に同じ。字鏡「翽、翼聲也。波禰於止」拾遺「しなが鳥猪名(ヰナ)のふしはら飛びわたる鴫の羽根音おもしろきかな」

はね-おとす 跳落す・駻落す【動四他】はねとばして落す。盛衰記「馬の太腹を射させて駻落さる」

はね-がき 羽根搔・羽搔【名】『「羽(ハ)を書く」を見よ』鳥の、自ら嘴にて、その羽をしごくこと。(多く鴫にいふ) 古今「曉の鴫のはねがき百はがき君が來ぬ夜は我ぞ數かく」元眞集「わびぬれば曉かけてかへりたる鴫のはねがき我ぞ數かく」

はね-かく 羽根搔く・羽搔く【動四自】はねがきをす。拾遺「百羽搔(モモハガキ)羽根搔く鴫もわが如くあしたわびしき數はまさらじ」

はね-かく 撥掛く【動下二他】㊀飛び散らしてふりかく。宇治「その上に土はねかけて、家を思ふままに作りてけり」㊁**はねかす**(撥かす)に同じ。㊂己の義務又は罪を、他人に負はす。ぬりつく。㊃圍碁にて、一箇の石と、これに對して、上下又は左右に、斜に隣接せる二箇の石とを以て、敵の石を狹む。俗曲(十二段君が色香)「假にも騙(マタ)すは、碁の法度(ハット)、……、ただ一目(イチモク)の打ち方にて、切って、おさへて、はねかけて」

はね-かくし 羽隱【名】〔動〕昆蟲類中、鞘翅類に屬する一類。我國に產するもの、四百餘種あり。小形にして細長く、長さ一二分乃至五六分に過ぎず。體色、多くは黑色、青色又は紫色の金屬光澤を有するもの、又、黃褐の斑紋を有するものあり。頭部と前胸部とに、點刻多く、鎌狀の大顋を具ふ。翅鞘は赤褐色にして、黑毛を被り、後翅は發達せるも、物に止る時は、翅鞘の下に隱す。幼蟲・成蟲共に動植物の腐敗物、又は他の蟲を捕食す。ありばち。

はね-かけ 撥掛【名】はねかくること。

はね-かす 撥かす【動四他】はねかかるやうにす。飛ばし散らす。ほとばしらす。はねしむ。はねかく。「水をはねかす」

はね-かづら はね鬘【名】古、女の、やや長じて、髪上(カミアゲ)などする時にせし髪飾。一說に、**はなかづら**(花鬘)㊀に同じと。〔古語〕萬葉「はねかづら今する妹を夢に見て心の内に戀ひわたるかも」

はね-がつを 跳鰹【名】鰹節を、はね返りたるやうなる形に、大きく削ること。

はねかは-あみ 羽根川網【名】因幡國鳥取地方にて、鮎を捕ふるに用ふる、一種の叉手(サデ)網。

はね-かへし 跳返・撥返・駻返・刎返【名】㊀はねかへすこと。はねっかへし。㊁相撲(スマフ)の手の一。竹齋物語「すまひの取手には……はね返・大こし・もとつめ・むかふつき」

はね-かへす 跳返す・撥返す・駻返す・刎返す【動四他】㊀はね上げて、ひっくりかへす。はねっかへす。盛衰記「源三、駻(ハ)ね返さんとしけれども」源氏烏帽子折「力業を好んで、大船を跳ね返し、龍車を留むる勢あり」㊁はね返らしむ。反撥す。はねっかへす。

はね-かへり 跳返・刎返【名】㊀はねかへること。はねっかへり。㊁かるはずみ、又その人。はねっかへり。おてんば。輕佻。

はねかへり-もの 跳返者・刎返者【名】かるはずみなる人。はねっかへりもの。

はね-かへる 跳返る・駻返る・刎返る【動四自】㊀はねて、元に戻る。はずみかへる。はねっかへる。反撥す。盛衰記「郎等、主を助けんとて、高範が髻を取り、引き上げたり。經遠、力を得て、駻(ハ)ね返って」㊁勢強く跳ぬ。跳躍す。はねっかへる。亂暴にとびまはる。㊂下落せる相場が、はねて、元に反る。はねっかへる。〔取引所の語〕

はね-かる 撥かる【動四自】水・泥などが、はねて、物に附く。はぬ。はねかかる。

はね-がや はね茅【名】〔植〕禾本科に屬する多年生の草。高さ二三尺に達し、葉は狹長にして、葉片の長さ一尺に餘るものあり。花は八月頃、疎大なる圓錐花序をなして開き、各小穗は、二枚の大なる穎にて被はれ、中に、淡紫色の長芒ある一花を藏す。各地の山地に自生す。

はね-ぎ 跳木【名】㊀形、梃(コテ)に似て、物を拔き取るに用ふる、木製の具。曾我「矢の根は、腰骨にぞとまりける。はね木を以て拔きければ、肉附きて出で」㊁一端を固定せしめ、中間を他の材に支承せしめ、他端に物を釣らしめて、梃(コテ)のごとき作用をなさしむる材。〔桔木〕

はね-きぐは 刎木鍬【名】鹽田(エンデン)にて、沼井(ヌキ)中より搔き上げたる細かき砂を、再び鹽田の全面に刎ね散らすに用ふる鍬。全部木製にて、箆大なり。

はね-ぎり 羽根桐【名】紋所の一。羽根㊄三箇を倒さに組合はせて、桐の形に描けるもの。

はね-きる 羽根切る・羽切る【動四自】㊀羽ばたきをす。はねうつ。萬葉「埼玉(サキタマ)の小埼(ヲサキ)の沼に鴨ぞ翼(ハネ)きるおのが尾に降りおける霜を拂ふとならし」㊁いそがしく立ち働く。〔古語〕落窪「明日(アス)の臨時の祭、三の君に見せ奉らん、藏人の少將のわたりたまふを、北の方はねきりをるを」

はね-ぐき 羽根莖・羽莖【名】鳥の翼の軸。

ばね-ぐつ 發條靴・彈機靴【名】足の甲に當る革紐を、ばねにて留(ト)めて脫げぬやうにしたる靴。

はねくび 刎首【名】首を刎ぬること。

はねくわうじゆん 撥光順・跋光順【名】手替錢(テガハリセン)の一。

はねくわんえいせん 撥寛永錢・跋寛永錢【名】永の字を撥ねたる形に記してある寛永銅錢。形質、芝錢(シバセン)に同じく、寛文年間の私鑄錢といふ。坂本贋(サカモトニセ)。呼子錢(ヨブコセン)。刑罰錢。

はねけん【名】花合(ハナアハセ)㊁にて、同じ種類のもの三枚と、二枚づつのもの二組とより成れる手役。

はねこうらん 刎勾欄【名】〔建〕隅に寳珠柱(ホウジユバシラ)なく、架木(ホコギ)の端は、刎出(ハネダシ)となりてある勾欄。

はねこぎ 羽根子・羽子【名】『こきいた(胡鬼板)を見よ』はね(羽根)㊄に同じ。

はねごし 跳腰【名】柔道にて、足にて跳ねながら掛くる腰業。

はねこす 跳越す【動四自】はねて、或物の上をこす。とびこす。義經記「これほどの所は、はねこし入らばや」

はねこみ はね込【名】繪畫にて、淡く彩色を施すこと、又その部分。淡彩。

はねこゆ 跳越ゆ【動下二自】はねこす(跳越す)に同じ。源氏烏帽子折「飛鳥の身も輕く、飛び越え、跳ね越え、踊り越え」

はねごろも 羽衣【名】はごろも(羽衣)㊂に同じ。(鳥にいふ) 保憲女集「水鳥の上は氷れる羽衣出で入り洗ふ波の間もなし」

はねざいく 羽根細工・羽細工【名】鳥の羽毛にて造ること、又その細工物。

はねざうり 跳草履【名】爪先のはね上れる形に製したる草履。つまがくし。雙生隅田川「ぴんと跳ねたる跳草履」

ばねじかけ 發條仕掛・彈機仕掛【名】ばねにて動くやうにしたる裝置。

はねしやうぎ 跳將棊【名】こびしやうぎ(飛將棊)に同じ。

はねず 唐棣【名】㊀〔植〕にはざくら(庭櫻)㊀に同じかるべし。〔古語〕萬葉「夏まけて咲きたるはねず久方の雨うち降らばうつろひなむか」㊁次條の略。〔朱華〕〔古語〕紀「朱華、此云㆓波泥孺㆒」

はねずいろ 唐棣色【名】『はねずの花の色に似たりとていふ』白くして、紅色を帶びたる染色。はねず。〔古語〕萬葉「山吹の匂へる妹がはねず色の赤裳の姿夢に見えつつ」

はねずいろの 唐棣色の【枕】はねず色は、移ろひ易きものなるより、うつろふ(移ろふ)にかけていふ。萬葉「思はじといひてしものをはねず色のうつろひやすきわが心かも」同「はねず色の移ろひやすき情(ココロ)あらば年をぞ來(キ)經(フ)る言(コト)は絶えずて」

はねずぐさ はねず草【名】〔植〕はす(蓮)㊀に同じ。

はねずばな はねず花【名】〔植〕前條に同じ。

はねずみ 跳炭・爆炭【名】火に爆(ハ)ぜて、飛びはぬる性質の木炭。はしりずみ。

はねせん 撥錢・刎錢【名】上前(ウハマヘ)をはね掠めたるぜに。

はねだ 羽田【名】〔地〕武藏國荏原(エバラ)郡にある町。多摩川口の北岸なる三角洲上に位し、東京灣に臨む。天保年中、德川幕府新に砲臺を築き、羽田奉行を置きたり。

はねだいもく 撥題目・跳題目【名】ひげだいもく(鬚題目)に同じ。小町踊(永治)「鶯の撥題目か法(ノリ)の聲」

はねだし 刎出【名】〔建〕足場板などの端の、支(ササヘ)のなき部分。

はねだすき 刎襷【名】芝居にて、勇士に扮したる者の兩肩に掛くる襷。中心に針金を入れて、その結び目、上方に刎ね上るやうにす。

はねだぶぎやう 羽田奉行【名】德川幕府の職制の一。天保十三年十二月より弘化元年五月まで、武藏國羽田に於ける工事を掌らしめし遠國奉行。老中の支配に屬し、芙蓉間に詰めたり。

はねづかひ 羽根遣・羽遣【名】はづかひ(羽遣)に同じ。

はねっかへし 跳返・騂返・刎返【名】はねかへし(跳返)の音便。

はねっかへす 跳返す・騂返す・刎返す

【動四他】はねかへす(跳返す)の音便。

はねっかへり 跳返・刎返【名】はねかへり(跳返)の音便。

はねっかへりもの 跳返者・刎返者【名】はねかへりもの(跳返者)の音便。

はねっかへる 跳返る・刎返る【動四自】はねかへる(跳返る)の音便。

はねつき 羽根突・羽子突【名】『「羽根を突く」を見よ』はご板にて、羽根㊄を突き上げ、その落つるを受けては遊ぶこと。

はねつく 跳付く【動四自】はねまはる。はぬ。六帖「毛の末にはねつく馬は繫ぐとも人の心をいかが頼まん」

はねつく 撥付く・刎付く【動下二他】㊀はねて戻す。はねかへす。膝栗毛「馬方、はねつけられ、三間むかふへのた打ちまはる」㊁しりぞく。受けつけず。拒絕す。はねかへす。

はねづくり 羽根作・羽作【名】次條に同じ。曠野(釣雪)「五月雨やにはとりとまる羽根づくり」

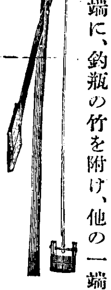
はねづくろひ 羽根繕・羽繕【名】㊀はづくろひ(羽繕)に同じ。㊁みじたく(身支度)に同じ。御伽草子(鉢かづき)「人人、……、鉢かづきが、あさましき體にて出でんを見て笑はんとて、軒端の鳥にあらねども、はねづくろひして待ちゐたり」醒睡笑「もはや立たんと、はねづくろひせしに」

はねつち 埴土【名】はにつち(埴土)の訛。

はねっとばす 跳飛す・撥飛す【動四他】はねとばす(跳飛す)の音便。

はねづま 撥棲・刎棲【名】踊る時などに、足を動して、棲を撥ぬるやうにすること。置土産「揃うたりや、手拍子、……、蹴かへし・撥棲・引足のうるはしく」

はねつるべ 撥釣瓶・桔槹【名】井戸の側の地上に丸太を立て、その上部を支點として、横木を亙し、横木の、井戸の上に臨める一端に、釣瓶の竹を附け、他の一端に石を結び附け、石の重みにて、釣瓶のはね上るやうにし、多くの力を費さずして、水を汲み上げ得るやうに裝置せるもの。鐵綱井(カナヰ)。運步色葉集「桔槹、ハネツルベ」曠野(一桐)「曙や鶯とまるはね釣瓶」


（撥釣瓶）

はねとばす 跳飛す・撥飛す【動四他】はねてとばす。はじきとばす。はねっとばす。

はねならし 羽根馴・羽馴【名】鳥の、羽ばたきして、飛ぶ練習をすること。

はねならはし 羽根習・羽習【名】前條に同じ。〔古語〕後撰「木がくれて五月(サツキ)待つとも時鳥はね習はしに枝うつりせよ」

はねならぶとり 羽根並ぶ鳥【句】はね(羽根)の條下を見よ。

はねに 撥荷・刎荷【名】多くの荷物の中よりはねのけたる荷物。劣等の品を除き、又は難破を防ぐ等の目的にて行ふ。

はねのく 跳退く【動四自】はぬるが如きさまをして退く。とびのく。

はねのく 撥除く・刎退く【動下二他】㊀多くの中より取り出だして除き去る。とりのく。除去す。㊁はね飛すやうに押しのく。押し戻す。はねつく。はねとばす。排除す。七一職人歌合「玉章(タマヅサ)もはねのけらるる荒弓の押しかへしても人ぞ戀しき」増補生寫朝顏話「いやいや、放して、放してと、突き退け、刎ね退け」

はねのさかづき 羽の觴【句】はね(羽根)の條下を見よ。

はねのはやし 羽の林【句】はね(羽根)の條下を見よ。

はねばうき 羽根帚・羽根箒・羽帚・羽箒【名】はばうき(羽帚)に同じ。

はねばかま 撥袴・刎袴【名】著用の際、端端がはね上るやうに、糊を强(コハ)く引きたる袴。室町千疊敷「主の威光のはね袴、嵩(カサ)にかかって著せかくれば」

ばねばかり 發條秤・彈機秤【名】鋼鐵製の螺旋彈機の彈力性を利用し、その彈機の伸張したる長さによりて、物の重さを計り得るやうに仕掛けたる自動秤。

はねばし 撥橋・跳橋・刎橋【名】㊀城門などの要害のために、用なき時には、綱に懸けて釣り上げおく橋、又、河川にて、船

船の航路を開く必要の度ごとに、鉤り上ぐるやうに作りたる橋。後者は全徑を二分し、その雙方又は一方を、この裝置にせるもの多し。つりはし。槐記「そりたる橋は、必ずはねばしなり。大方は脚なき橋なり」 ㊁『英 Basculur bridge. 斜に出したる角材によりて、桁を刎ね上げたる橋の義』深谷などを横ぎりて、橋を架くる時、橋脚の築設困難なるため、角材を、橋臺の中腹より、上方へ斜に突出せしめて、これに梁を結合し、なほ、その上にも、同樣に角材を斜に出して、漸次數層重疊せしめ、その最上部に桁を渡して、橋としたるもの。

はね-び 跳火・爆火【名】㊀爆(ハ)ぜて、ばちばちと、あたりへ飛びはぬる炭火。はしりび。㊁さぎちやう(左義長)に同じ。

跳火を子に拂ふ【句】左義長の火を、わが子の方に拂ひて、子の身に幸あれかしと祈る。藩翰譜「勝重うち笑うて、おことは、世話を知りたまはぬよ。跳火を子に拂ふといふ事は」

はね-ぶた 刎蓋・刎葢【名】一方を蝶番(テフツガヒ)にて固著せしめ、他の一方を手にてはね上げて、開くやうにしたる蓋。

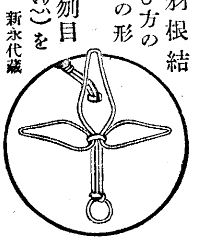
はね-ぶとん 羽根蒲團・羽蒲團【名】鳥類の羽毛を入れて作りたる蒲團。

はね-まはる 跳廻る【動四自】はねてとびまはる。著聞「馬……あたりを拂ひてははねまはりけり」

はね-むし 羽根蟲【名】昔の、一種の駒下駄。多くは角形にて、表なく、桐の正目又は板目にて、男子用のは大形、廣き物は三寸七八分もありたり。

はね-むし 跳蟲【名】〔動〕㊀彈尾類に屬する昆蟲。我國に產するもののみにても、六十餘種あり。體は微小にして、且つ粗毛を生ず。灰黑色を呈し、灰色の斑紋あり、觸角は短くして大、眼は八箇の單眼にして、頭側に在り。翅なけれども、尾端に劍狀の突起を具へ、よく彈き躍る。濕地・溜水等の上に多し。とびむし。㊁はねかへりもの(跳返者)の譬。

はね-むすび 羽根結【名】紐の結び方の一。羽根㊄の形に結ぶもの。


（はねむすび）

はね-め 撥目・刎目【名】上前(ウハマヘ)を撥ぬる割合。新永代藏「錢の小賣を仕あるき、二匁・三匁の內にて、五厘・七厘のはね目を取って」

はね-もと 羽根元・羽元【名】はぎは(羽際)に同じ。

はね-もとゆひ 撥元結・元刎結【名】昔、若き女の髮に掛けたる、ざんざら掛に似たる元結。丈長(タケナガ)紙などにて作り、中に針金を入れて、はね返るやうにしたるもの。はんがけ。一代女「世の人心、一に針金入のはね元結」織留「針金入のはね元結を掛けて」

はね-もの 刎物・撥物【名】器物などの、品質劣等なるために取り除けたるもの。のけもの。ろうずもの。

はね-やうじ 羽根楊枝・羽楊枝【名】細き柄の先に、羽毛を取り附けて造れる楊枝。鐵漿(カネ)を著け又は藥などを塗るに用ふ。

はね-やく 跳厄【名】うしろやく(後厄)に同じ。

はね-やすみ 羽根休・羽休【名】次條に同じ。

はね-やすめ 羽根休・羽休【名】鳥の、飛ぶことを止めて、羽を休むること。夫木「いづちゆく春の使の鶯のはねやすめしてここた鳴くらん」

はねる 跳ねる【動下一自】㊀はぬ(跳ぬ)の口語形。㊁人氣を博す。八笑人「いや、今日の催は、きつとはねるだらう。野呂めえ、うまく案じたよ」

はね-をどり 跳踊【名】踊の一種。嬉遊笑覽「木曾をどり・辻をどり・はねをどり・ばかをどりなど、種種の名あり。踊ぶりに聊かかはりあるなるべし」

は-の-じ 巴の字【句】は(巴)の條下を見よ。

は-の-ね 齒の根【句】は(齒)の條下を見よ。

は-の-はやし 羽の林【句】は(羽)の條下を見よ。

は-のぼる-つゆ 葉上る露【句】は(葉)の條下を見よ。

ぱのらま(英 Panorama)【名】全面一幅の大畫布に、連續せる光景を描きたるを、圓形の建物の內側に揭げめぐらして、兩端を接續せしめ、圓形の中軸點に、觀覽者の立つべき高處を構へ、且つその觀覽場と畫の下部との中間の空地に、畫中の形象と接續せる實物を配置し、屋上より導ける強き光線を利用し、觀覽者をして、眞に實景に對する感あらしむる裝置。獨逸人ブライシヒ(Breisig)の創案に係る。幨畫(トウグワ)。ぢおらま參照。

はは 母【名】㊀親たる女子、卽ち實母・養母・繼母及び嫡母の總稱。をんなおや。はおや。おふくろ。おも。いろは。かか。めおや。たらちね。(父に對して) ㊁實母。うみのはは。(父に對して) ㊂鳥・獸などの親たる雌。萬葉「しが母をとらくを知らずしが父をとらくを知らに」㊃『英 Mother』物事の出來るもと。おや。諺「必要は發明の母」

母が橋を渡すは不孝【句】『古、支那の楚郊といふ人、その母たる寡婦、情夫を設けしより、その忍路の堀に橋を架して、母の往來に便せしに、母、子に密事を知られしを恥ぢて、自殺せりといふ故事に本づく』折角親の爲を思ひても、熟慮を缺く時は、却りて不孝の結果を來す譬。〔諺語〕盛衰記「父が頸を害するは孝子なり、母が橋を亙すは不孝なり、といふ本文あり」

母が痩せると、子が太(フト)る【句】子の健かに育つは、母親の心づくしの賜なり。〔諺語〕

母と子と犯せる罪【句】『犯すといふ語は、子の方にのみ關していふ』一人の女と婚したる後、その女の、前に他人との間に設けたる女子を犯したる罪。祝詞「己が母犯せる罪、己が子犯せる罪、母と子と犯せる罪、子と母と犯せる罪」

母とふ花【句】『とふは「と云ふ」の略』母を、花の如く愛すといふ意にていふ語。萬葉「時時の花は咲けども何すれぞ母とふ花の咲きて來(コ)ずけむ」

母の尼君を以て祈らしむべし【句】次條に同じ。〔諺語〕今昔「人の祈は、僧の淸し濁きにも依らず、只、誠の心を致せるが、驗(シルシ)はあるなりけり。……母の尼君を以て祈らしむべきなりとは、これを、昔より言ひ傳へたるなりけり」

母の尼して祈はすべし【句】祈は、至誠に滿てる人ならでは、顯著なる感應を得ること無し。〔諺語〕

母の親【句】母親の父母。母方の祖父又は祖母。五人女「お七は、母の親、大事に掛け」大磯虎稚物語「母の親とてあなづるか」

母の折檻より、隣の人の扱が痛い【句】まことの母の心には、叱る中にも慈愛こもり、他人の心には、仲裁の勞は取りても、冷淡の氣含まる。親の打つ拳より、他人の摩(サス)るが痛い。〔諺語〕薩摩歌「世話の譬にいふ如く、本(ホン)の母の折檻より、隣の人の扱が痛いといふは、誠ぞや」

母の溜息突くより、小兒の泣くが善い【句】小兒は、病弱にして、母に生先(オヒサキ)を氣遣はるる者よりは、大聲に泣く程に、元氣のある方がよし。〔諺語〕

母の刀自(トジ)【句】ははとじ(母刀自)に同じ。心中宵庚申「母の刀自、泣く泣く又敎訓しけるは」

母の日【句】『英 Mother's day』每年五月二日、母たる人人に、過去の責務に對する敬意を表するため、愉快・親睦・慰安を與ふる目的にて、會合を催すこと。もと、米國ウエストバアジニヤ(West-virginia)州ウエブスタ(Webster)町の日曜學校敎師ヂヤルビス(Jarvis)夫人の女アンナ(Anna)が、亡母、生前に、モオゼの十誡、殊にその第五誡を說明せし時の語を想ひ起して、その每年の追悼會を、西曆一九〇八年(明治四十一年)五月二日、富豪ワナメエカア(Warnermaker)の協贊を得て、同氏經營の店頭

に開催せしに始り、遂に各國基督教信者の間に傳播するに至れり。

母の命(ミコト)【句】はは(母)㊀㊁の尊稱。萬葉「たらちねの母のみことの」

はは 羽羽【名】大蛇。をろち。**あめのははきり**(天羽羽斬)參照。〔古語〕古語拾遺「天十握劍、其名、天羽羽斬、今在㆓石上神宮㆒。古語大蛇謂㆓之羽羽㆒、言㆓斬㆑蛇也㆒」太平記「大蛇の尾の名を、ははと云ふ」

は-は 皤皤【貌】鬢髮の白きさま。はんはん。盛衰記「形は皤皤たる老翁なり」

は-は【感】『はを重ねたる語』㊀合點ゆき、又は思ひ當りたる時などに發する聲。ははあ。狂言(聟貰)「ふん、さては聟殿でござるか、はは」同(同)「はは、女どもの聲がする」㊁これはと驚きたる時などに發する聲。ややあ。おやおや。狂言(どぶかっちり)「はは、深い所へはひりましたはいの」㊂笑ふ聲。はっはっ。

はば 幅・巾【名】㊀物の、横の一端より、他の端までの距離。横の廣さ。よこはば。幅員。(長さ・厚さに對して)㊁**の**(幅)㊁に同じ。㊂はばが利(キ)くこと。はばを利(キ)かすること。はぶり。威勢。威光。御伽名代紙衣「彼の里のわがはばを見せんと」㊃相場と相場との差額。〔取引所の語〕「一二錢幅の動(ウゴキ)」㊄**だいだう**(大道)を云ふ。〔肥前國長崎の方言〕

幅が利(キ)く【句】權勢さかんなり。肩身廣し。羽振(ハブリ)よし。はたばる。はばめく。羽(ハ)が利く。**はばきき**(幅利)參照。和合人「ずゐぶん幅の利きさうな形(ナリ)だ」

幅廣し【句】誰にも憚る所なし。肩身廣し。室町千疊敷「いかに叱手なければとて、幅の廣い傾城の受け樣」

幅を利(キ)かす【句】幅が利くやうにす。幅をなす。威勢を振ふ。**はばきかせ**(幅利)參照。

幅を爲す【句】前條に同じ。室町千疊敷「根引・身請(ミウケ)は、金が幅する」

幅を取る【句】㊀廣き場所を占領す。はばかる。場を取る。㊁前條に同じ。

幅を爲す【句】前條㊁に同じ。梅暦「鬼(キ)兵衞といへるが後見して、威勢(バ)をなし、丹次郎は、日蔭の身となり」

幅を遣る【句】前條に同じ。風流軍配團「さすが武士氣質とて、幅を遣って」

はば【名】『**はばた**(巾太)を見よ』山の崖。〔信濃國の方言〕

は-ば 端場・端塲【名】芝居にて、全狂言中の主要ならぬ場面。

ば-は 馬耙【名】**はらう**(耙耮)に同じ。

ば-ば 婆・婆婆【名】㊀父又は母の母親。おほば。ばばあ。祖母。㊁年寄の女。おうな。ばばあ。老女。老婆。老嫗。俳諧新選(水翁)「婆婆ぞとは更に思はれぬ砧(キヌタ)かな」㊂うば。ばばあ。乳母。

ば-ば 馬場・馬塲【名】乘馬の練習をなし、或は競馬をなすために設けたる平地。うまば。うまのりばば。調馬場。競馬場。

馬場の舍(ヤ)【句】馬術を觀覽又は點檢するために、馬場の埒の外に設けたる屋舍。

ばば 糞・屎【名】㊀**だいべん**(大便)を云ふ。〔小供の語〕浮世風呂「湯の中へ、糞(バ)を垂れて」㊁きたなき物。〔幼兒の語〕

ぱぱ(英 Papa)【名】**ちち**(父)に同じ。(ままに對して)〔洋式を喜ぶ家庭の小供の語〕

ははあ【感】はは㊀に同じ。和合人「金龍山の皮包・札紙を、そっと見せれば、ははあ、淺草餅か」

ば-ばあ 婆・婆婆【名】㊀**ばば**(婆)㊀㊁に同じ。㊁**ばば**(婆)㊂を云ふ。〔江戸の語〕浮世床「そこでおころびだと、御乳母(ババ)大しくじりだ」

婆婆お牛(ウシ)に小僧長右衞門【句】茶番狂言などにて、お牛と長右衞門とを演ずるに、殊更に、お牛を老婆の姿に、長右衞門を小僧にいでたたせて、見物人をして笑はしむること。

ばばあ-ぎつね 婆狐・婆婆狐【名】**ばばぎつね**(婆狐)に同じ。

ばばあ-そだち 婆育・婆婆育【名】**ばばそだち**(婆育)に同じ。

ばばあ-より 婆撚・婆婆撚【名】紙撚(コヨリ)を、皺多く柔かに撚ること、又その紙撚。

ば-はい 馬背【名】馬のせ。馬のせな。

ば-ばいい【形】**まばゆし**(眩し)の轉訛。〔土佐國の小供の語〕

ばはいずむ(英 Bahaism)【名】宗教は人類和合の基礎たらざるべからずとし、すべての宗教は、根本に於て同一たるべく、又、科學と理論とに一致せざるべからずとの信念の下に、波斯國に起りたる新宗教。同國の一靑年バブと稱する者、創唱し、西暦一八五〇年殉教するや、同國人バハア、オラア及びハブジュル、バハアの父子、相次いで世界に宣布せしもの。人類の純一・平等、眞理の獨立研究、男女兩性の平等、全世界の平和、萬國共通の教育、經濟問題の解決等、世界の宗教的統一を理想とし、北米合衆國に信者多し。

ばば-いろ 糞色・屎色【名】大便のごとき色。くそいろ。浮世床「その顏で、色氣があられちやあ、糞(バ)色だ」

は-ばうき 羽帚・羽箒【名】㊀鳥の羽にて作りたる、小き帚。とりはうき。はねばうき。狂言(雁爭)「羽根を何にするぞ。羽帚にするは」㊁紋所の一。前記の羽帚に象(カタド)れるもの。「抱(ダキ)羽帚」・「違(チガヒ)羽帚」・「一(ヒトツ)羽帚」などの種類あり。

はばうき-がひ 羽帚貝・羽箒貝【名】〔動〕辨鰓(ベンサイ)類に屬する軟體動物。たひらぎに似たれども、殼は一尺餘に達して、扁平棒狀をなし、大なる總狀の美しき足絲を具ふ。我國、中部の海中に產す。

はばうき-の-まる 羽帚丸【名】紋所の一。羽帚を圓形に描けるもの。

ば-はうさう 馬疱瘡【名】〔醫〕**すゐさう**(水痘)に同じ。

はは-うへ 母上【名】はは(母)㊀㊁の敬稱。(父上に對して)源氏「大將の御母上失せたまへりしも」

はは-うま 母馬【名】母たる馬。子を持つ馬。一茶「母馬が番して飲ます淸水かな」

は-ばえ 葉生【名】葉の生え出づること、又、葉の生え出でたる物。冥途飛脚「麥の葉ばえに風荒れて」

はは-おとど 母おとど【名】はは(母)㊀㊁の敬稱。〔古語〕源氏「住みつくべきやうもなきを、母おとど、あけくれ嘆きいとほしがれば」

は-ばおび 幅帶【名】平たく絎(ク)けたる帶。即ち男の博多帶、女の普通の帶などの類。(兵兒(ヘコ)帶・丸絎(マルグケ)の帶・名古屋帶などに對して)

はは-おや 母親【名】はは(母)㊀㊁に同じ。(父親に對して)一茶「母親を霜よけにして寢た子かな」

ははか 波波迦・朱櫻【名】〔植〕**うはみずざくら**(上不見櫻)に同じ。〔古語〕記「天香具山(アメノカグヤマ)の眞男鹿(マヲシカ)の肩を、內拔(ウツヌキ)に拔きて、天香山の天(アメ)のははかを取りて占合(ウラ)へ」和名「朱櫻。本草云、櫻桃、一名朱櫻、波波加。一云、加邇波佐久良」

はは-からから 母孝行【名】母に對して、孝行なること。川中島合戰「母孝行とて、身を庇へば、祿盜人の不忠者」

はは-かた 母方【名】母親の血統に屬する方。外戚。(父方に對して)字鏡「外祖父、波波加太乃於保知」

母方より食方(クヒカタ)【句】親戚の關係よりも、己の生活の方が急務なること。〔諺語〕俳諧三十棒「膳を出せ、わたしも御相伴仕らう、母方より食ひ方と、各、箸を取るに」

ばば-がた 婆方・婆婆方【名】演劇にて、老婆に扮すること、又その役。若風俗「同じ時の若衆方は、敵役になり、若女方は、ばば方になりしを思ひ合はせて驚きぬ」

は-ばがたり 端場語・端塲語【名】前座の義太夫語。(心語(シンガタリ)に對して)

ははか-の-み【名】〔植〕**うはみずざくら**(上不見櫻)に同じ。

ははか-び 朱櫻火【名】古、鹿卜(シカウラ)又は龜卜(カメウラ)を爲すに、ははかの木を燒く火にて、その鹿又は龜を燒きて卜ひしこと。

はは-がひ 母甲斐【名】母親たるかひ。母としての親がひ。堀川波の鼓「母甲斐に、私からお燗を見てと引き受けて」

はは-かへす はは返す【動四自】病、再發す。ぶりかへす。

ばば-がへる　婆蛙・婆婆蛙【名】〔動〕つちがへる（土蛙）に同じ。

はばかん-ながら　憚ながら【句】「憚（ハバカリ）ながら」㊁の音便。〔東京の俚語〕

はばからし　憚らし【形二】憚るべくあり。憚あり。はばからはし。はばし。承久記「道の程もはばからしき間、態と申さぬなり」

はばからはし　憚らはし【形二】前條に同じ。〔古語〕濱松「御おもてぶせにもあるべきかなと、はばからはしう思せど」無名抄「名あらはれたるもはばからはしく、面憎まること多かり」

はばかり　憚【名】㊀憚ること。憚るべきこと。恐れ愼むこと。さしひかへ。恐縮。遠慮。忌憚。源氏「古めかしき御身ざまにて、立ち並び顔ならんも、憚ある心ちしけり」百合若大臣野守鏡「己れ如きの下郎めが、秀虎が手に掛るは、憚千萬」㊁はばかりさま（憚様）の略。浮世風呂「流しておくれか。はばかりさま、……、いや、これはそれはおはばかりだね」和合人「へいへい、大きに御苦勞さま、……、いや、これははばかり」㊂『人目を憚る場所の義』厠に行くこと、又、厠。〔女の語〕㊃大・小便。便通。和合人「尻（ケツ）の穴が透（ス）いてゐるから、つい、お憚も出るのだな」

憚ながら【句】㊀憚るべき事にてあれど。言ひ又は爲すべき事ならざらんも。恐多き事なれど。おそれながら。恐縮ながら。〔乍憚〕發心集「はばかりながら、有待（ウダイ）の身は、思はずなる物ぞ」㊁身分不相應なる言分（イヒブン）のやうなれど。遠慮すべき生意氣（ナマイキ）なる言葉ながら。はばかんながら。はばっちんながら。〔乍憚〕加賀千代「私も憚ながら柳かな」

はばかり-いる　憚入る【動四自】いたくはばかる。甚しくはばかる。庭訓往來「百手達者、究竟上手、一兩輩可ㇾ令㆓同道㆒也。但的矢・蟇目等、無沙汰憚入候」

はばかり-がほ　憚顔【名】憚るやうなる顔つき。憚らはしと思ふさま。源氏「はばかり顔にもてなしたまはず」

はばかり-さま　憚樣【名】他人の手を煩し、又は他人の力を借りなどして謝する時にいふ語。恐縮の至（イタリ）。お氣の毒さま。はばかり。浮世風呂「これは、これは、はばかり樣、お手をいただきます」和合人「まづ戴きませう。へい、これは、矢場さん、はばかり樣」

憚樣ながら【句】「憚ながら」の敬語。八笑人「お有難い仕合（シアハセ）。憚樣ながら、お上（カミ）へ、宜しうお禮を仰せ上げられて下さりまし」

はばかり-の-せき　憚關【名】〔地〕古、陸奥國にありし關。後拾遺「知るらめや身こそ人目を憚の關に涙はとまらざりけり」

はばかる【動四自】㊀幅ありて、狹き場所には收らず。ささはりありて、進み得ず。紀「赤駒のいゆきはばかる眞葛原（マクズハラ）何の傳言（ツテゴト）ただにしえけむ」萬葉「荒男（アラヲシ）も立（タ）しやはばかる不破の關越（コ）えて吾（ワ）は行く」㊁ひろがりて、一杯になる。はびこる。はだかる。充滿す。散木「彌陀の身も天つみ空にははばかりて世も狹（セバ）しとや思ひ知るらん」平家「一間にはばかる程の者の面の出で來て」㊂幅を利かす。はびこる。增長す。諺「憎まれ子、世にはばかる」㊃恐れ愼む。氣がねす。遠慮す。〔憚る〕源氏「うとき人に見えばおもてぶせにや思はんと、はばかり恥ぢて」同「人目にはばかりて、元參りこず」

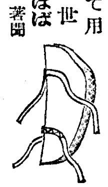
はばかる　憚る【動四他】『前條の語の轉義』忌み嫌ふ。厭はしく思ふ。避く。忌憚す。源氏「かうけのあたり、おそろしく煩はしきものにはばかり怖ぢ」濱松「人のそしりも、とがも、はばからず」

はば-がれひ　幅鰈【名】〔動〕したびらめ（舌鮃）を云ふ。〔越前國の方言〕

は-はき　帚・箒【名】『羽（ハ）掃（ハキ）の義。鳥の羽を用ひたるより起るといふ。或は、又、掃き掃く物の義か。ははく參照』㊀はうき（帚）㊀に同じ。〔古語〕和名「箒、一名、篲、波波岐」㊁〔植〕ははきぎ（地膚）の略。

ははき　伯耆【名】〔地〕はうき（伯耆）を見よ。和名「伯耆、波波岐」

は-ばき　脛巾・脚巾・行纏・脛衣【名】『はばきも（脛巾裳）の略』布帛にて作り、旅行の時、脛に卷きつけて用ふるもの、卽ち後世の脚絆（キヤハン）。ももはばき（股脛巾）參照。著聞「藁沓・はばきを著して、長途を歩み參りたる」


（きばは）

は-ばき　鎺・鈨・脛金【名】㊀はばきがね（鎺金）㊀に同じ。太平記「太刀……銀を以て、金膝纏（ハバキ）の上に、鬼切と云ふ文字を沈めたり」㊁はばきがね（鎺金）㊁に同じ。曾我扇八景「銀の金具に、はばきを入れ」

はばき　幅木・巾木・脛巾【名】〔建〕内壁又は門柱などの最下、床（ユカ）・土などに接する部分に附加せる化粧板。門柱などのは、根包（ネツツミ）とも呼ぶもの、又、箱棟（ハコムネ）の腹板（ハライタ）の下にある狹き板をも呼ぶことあり。字鏡「檽・樠、梁土柱也、構也。波波木。又、加志乃木也」

はばき-いた　幅木板・巾木板【名】木製の幅木。

はばき-がさ　脛巾瘡・臁瘡【名】『脛巾を著くるあたりに生ずるによりていふ』雁瘡（ガンガサ）の一種。

はばき-かせ　幅利【名】幅を利かすること、又その人。はばきき。

はばき-がた　幅木形・巾木形【名】石などの幅木。

はばき-がね　鎺金・鈨金・脛巾金・脛金【名】『人が足に脛巾を著けたるさまに似たるよりいふ。鎺も、鈨も和字』㊀刀・薙刀・槍などの鐔（ツバ）もとにはめて、その刃又は鐔などの搖がぬやうにしたる金具。はばき。盛衰記「脛巾金より太刀打折って」㊁品物の接合部に纏ふ金具。はばき。類聚雜要「帳料……脛金十二枚」

ははき-ぎ　帚木・箒木【名】㊀古、信濃國薗原（今は下伊奈（シモイナ）郡に屬し、美濃國との境界に近し）に在りて、遠く望めば、箒の如き梢あり、近寄れば、その形も見えずなるといひ傳へたる木。そのはら（薗原）參照。六帖「その原やふせやに生ふるははき木のありとは見えてあはぬ君かな」源氏「數ならぬふせやに生ふる名のうさにあるにもあらず消ゆるははき木」㊁〔植〕藜（アカザ）科に屬する一年生の草。高さ約三尺に達し、枝を分つこと繁く、葉も互生して、よく繁り、全綠・細長、深綠にして、毛あり。梢上の葉腋に、綠黃色なる多くの小花開く。莖と枝とは、乾し束ねて、庭帚を作るに用ふ。あかくさ。たまはき。ちふ。にはぐさ。はうきぐさ。ははご。まきくさ。〔地膚〕㊂『初の二音が同一なるによりていふ。ははそ（柞）㊁・ははそばら（柞原）㊁參照』はは（母）㊀㊁の意を含めていふ語。〔古語〕榮花「大后（オホキサキ）の宮、天の下に三笠山と戴かれたまひ、日の本には、ははき木と立ち榮えおはしましてより」謠曲（木賊）「歌人の言葉の林茂るも、その箒木の種ならん」㊃『㊀に擧げたる六帖の歌に本づきていふ』情あるやうに見えて、實意なきことの譬。㊄『江戸吉原の松原屋の抱（カカヘ）なる瀨川といふ遊女が、源氏物語の第二帖の題目が、この帚木といふ語なるより取りて、用ひ初めしものの由、武野俗談にいへり』まぶ（間夫）を云ふ。〔江戸吉原の語〕

はばき-き　幅利【名】『「幅が利く」を見よ』權勢の盛んなること、又その人。はきき。

ははき-ぐさ　地膚・帚草・箒草【名】〔植〕ははきぎ（帚木）㊁に同じ。謠曲（木賊）「箒草に似たる木にて候より、箒木と申し習はして候」

はは-ぎさき　母后【名】后にして、母たる御方。母后（ボコウ）。源氏「母ぎさきのおはしまさぬ御かはりの後見（ウシロミ）に事寄せて」榮花「父みかど・母ぎさき」

ははき-ざや　箒鞘【名】はうきざや（箒鞘）に同じ。

ははき-だけ　帚茸・箒茸・掃帚菰【名】〔植〕ねずみだけ（鼠茸）に同じ。

はは-きたのかた　母北方【名】北の方にして、母たる人。落窪「その母北の方の、强ひのたまふにやあらん」源氏「この姬君の御母北の方のはらから、世におちぶれて」

ばば-ぎつね　婆狐・婆婆狐【名】老いたる牝狐。

はばき-どめ　幅木止・巾木止【名】〔建〕『そ

の橫面に、幅木が突當るよりいふ』額緣（ガクブチ）㊁の下なる沓。

はは き-ぼし 帚星・箒星・彗星【名】㊀〔天〕はうきぼし（帚星）に同じ。〔古語〕和名「彗星、波波岐保之。言其形如二箒彗一也」㊁『けちぎりは、略して、けちともいふを、彗星は凶事の前兆なりといふより、その意のけちに取りなしていふ』けちぎり（假契）に同じ。

はは-ぎみ 母君【名】はは（母）㊀㊁の敬稱。ははうへ。源氏「北の方も、母君を憎しと思ひ聞えたまひける心も失せて」

ははぎみ-だつ 母君だつ【動四自】母君のやうに振舞ふ。母代（ハハシロ）になる。源氏「母君だつやと、いとあはれげなる文を書きておこせたまふ」

ははき-も 脛巾裳・脛裳【名】はばき（脛巾）に同じ。〔古語〕紀「脛裳、ハバキ・ハバキモ」

ははき-もち 帚持・箒持【名】古、葬式の際に、帚を持ちて、供をしたりといふ者。紀「持帚者、ハハキモチ」

はばき-もと 鎺本・鎺元【名】刀劍などの鎺金のある處。狂言（磁石）「はばきもと拔きくつろげ」

ははき-もろこし 帚蜀黍・箒蜀黍【名】〔植〕禾本科に屬する一年生の草。高さ七八尺に達し、全體の形、蜀黍（モロコシ）に似て、多くはそれより細く、夏季、梢上に、分岐し、細長・強韌の小梗を具へたる穗を生じ、綠褐色の花を開く。畑に栽培し、穗軸を以て、帚を製す。

は-はく【動四他】『ハワクと發音す。「附き附く」の「積く」となる類にて、「掃き掃く」の略なるべし。ははき（帚）參照』はく（掃く）㊀に同じ。〔肥前國・豐後國邊の方言〕

ははき-ぐさ【名】〔植〕㊀しきみ（樒）に同じ。㊁『ははくりの轉訛か』ばいも（貝母）に同じ。

はは-くそ 黑子【名】ほくろ（黑子）に同じ。〔古語〕和名「黑子、波波久曾」

はば-ぐひ 幅杭・巾杙【名】『英 Breadth pegs』道路・鐵道・水路などの敷地に使用すべき土地の幅員を示すため、路線に沿ひて、その兩側に打ちたる杭。

ははくひ-どり 母喰鳥【名】〔動〕ふくろふ（梟）の異稱。〔古語〕

はは-くり【名】〔植〕『その根、栗の實に似、且つ母が子を抱けるがごとき形なるより、母栗の義にていふ』ばいも（貝母）に同じ。〔古語〕和名「貝母、波波久利。形似レ聚レ貝、故以レ名レ之」

はは-くろ 黑子【名】ほくろ（黑子）に同じ。愚管抄「腕（カヒナ）を搔出だして、七星のははくろの斯く候ひて」

ははけ-ぐさ ははけ草【名】〔植〕をさこよもぎ（男艾）に同じ。

はは-こ 母子【名】㊀はふこ（這兒）に同じ。和名「菴蘆子、波波古」㊁〔植〕いぬよもぎ（犬艾）に同じ。㊂〔植〕ははきぎ（地膚）に同じ。㊃〔植〕ははこぐさ（母子草）の略。文德實錄「三日不レ可レ造レ餻、以レ無二母子一也」後拾遺「三日（ミカ）の夜の餅（モチヒ）は食はじわづらはし聞けば淀野にははこ摘むなり」

はは-ご 母御【名】ははごぜん（母御前）の略。太平記「わっと泣いて、母御なうとて、……取附きたるを」

ははこ-ぐさ 母子草・鼠麴草【名】〔植〕菊科に屬する二年生の草。高さ尺餘に達し、葉は互生し、やや倒披針形にして莖にも、葉にも、白毛を具ふ。秋、苗を生じ、翌年春夏の候、黃色・筒狀の花冠を有する小花、頭狀花序をなして、簇り開く。葉は餅に搗きまぜて食ひ、又、春の七草（ナナクサ）の一に數へて、御形（ゴギヤウ）と呼ぶ。からちばな。かはちちご。ごぎやうよもぎ。ぢようらうよもぎ。とうご。とんご。ははこ。はうこ。はうこぐさ。もちぐさ。もちよもぎ。用明天皇職人鑑「めは茂り添ふははこ草」

はは-ごぜ 母御前【名】ははごぜん（母御前）の略。薩摩歌「產み落した母御前も、七つの年まで養育」

ばば-ごぜ 婆御前・婆婆御前【名】ばばごぜん（婆御前）の略。

はは-ごぜん 母御前【名】はは（母）㊀㊁の敬稱。ははごぜ。ははご。保元「母御前の聞し召し歎きたまはんこと」

ばば-ごぜん 婆御前・婆婆御前【名】ばば（婆）㊀㊁の敬稱。ばばごぜ。ばばぜ。

はは-こそ 母許曾【名】ははごぜん（母御前）に同じ。〔古語〕

ははこ-もち 母子餅【名】次條に同じ。

ははこ-もちひ 母子餅【名】母子草を搗きまぜたる餅。くさもち。くさもちひ。ははこもち。和泉式部集「花の里心も知らず春の野にいろいろ摘めるははこもちひぞ」

ばば-ころし 婆殺・婆婆殺【名】〔植〕ぶんごう（文豆）を云ふ。〔備前國の方言〕

はば-さ 幅さ【名】幅の廣さ。はば。

ばば-ざき 馬場先・馬塲先【名】馬場の前の方。馬場のあたり。狂言（千鳥）「馬場退け、馬場退けというて、馬場先の人を拂はせられい」

ばばさき-みつけ 馬場先見附【名】馬場先門にありし見張番所。

ばばさき-もん 馬場先門【名】江戸城內郭諸門の一。日比谷（ヒビヤ）門の北、和田倉（ワダクラ）門の南に在りて、東面す。正德元年、將軍家宣の時、此處に馬場を開き、朝鮮人の騎射を閱せし時の設置に係れども、閉鎖して、往來を許さず、不明（アカズ）門の名ありしを、寬文四年、火事のため、通行を許し、外面に橋を架するに及びて、この名を命ずるに至れり。日露戰役後、撤去せられて、道路と化し、凱旋道路の名あり。

はは-さん 母樣【名】はは（母）㊀㊁を云ふ。〔京都の小供の語〕

はは-じ 母字【名】〔語〕反切の時、父字の音と配合して、新しき音を生ずる音を示す文字。例へば、旁は步光の切（セツ）なりといふ場合の光の字の類。

はばし 憚し【形二】はばからし（憚らし）に同じ。〔古語〕今物語「下臈はいかでかと、はばしくいひけるを、なほ責め問はれて」

ははし-ぐさ ははし草【名】〔植〕つきくさ（月草）を云ふ。〔佐渡國の方言〕

はは-じま 母島・母嶋【名】〔地〕㊀小笠原群島の最南部なる母島列島中、最北に在る最大島。東西一里二十六町、南北三里、周圍十四里十九町。地味肥え、樹木繁れども、良港に乏しきため、父島の如く盛んなるに至らず。島內に沖村・北村の二村あり。別稱、南島。㊁隱岐國第一の大島。周圍三十里餘。

はは-じゃ 母者【名】ははぢゃ（母ぢゃ）の訛。本朝廿四孝「干物（ヒモノ）のやうな母じゃの手で」

ははじゃ-が-もの 母者が者【名】ははぢゃがもの（母ぢゃが者）の訛。醒睡笑「父（テテ）じゃ者母じゃが者にうち迷ひ、それにつけてぞおのれできける」

ははじゃ-ひと 母者人【名】ははぢゃひと（母ぢゃ人）の訛。壽の門松「許して下され、母者人」

ははじゃ-もの 母者者【名】ははぢゃもの（母ぢゃ者）の訛。醒睡笑「雄（ウイ）長老の裸でおはせし處へ、客來りければ、私は、母者もの、手織の儘罷り居り候とありし」

はは-しろ 母代【名】母に代りて、後見（ウシロミ）する人。母に准ずる人。天皇のには、准母とも申したり。〔古語〕狹衣「近う臥したる母代、驚きあひて」宇治「二條の大宮と申しけるは、白河院の宮・鳥羽院の御母代におはしましけり」

ばば-すゑ 馬場末・馬塲末【名】馬場の、馬を乘り果つる所。うまとどめ。（馬場本に對して）著聞「高遠空しき轡を持ちて、馬場末にありけるを」

ばば-ぜ 婆前・婆婆前【名】ばばごぜ（婆御前）の略。浦島年代記「內の婆婆ぜが」

はば-せま 幅狹【名】幅の、普通より狹きこと、又その物。（幅廣に對して）

はは-そ 柞【名】㊀〔植〕かしは（槲）㊀に同じ。〔古語〕古今「さほ山のははそのもみぢ散りぬべみ夜さへ見よと照す月かげ」和名「柞、由之。漢語抄云、波波曾。木名、堪レ作レ梳也」㊁『初の二音が同一なるによりていふ。ははそはら（柞原）・ははきぎ（帚木）㊁參照』はは（母）の意を含めていふ語。〔古語〕謠曲（小袖曾我）「同じはははそのもり乳母（メノト）」

ばば-そだち 婆育・婆婆育【名】祖母の手にて育つこと、又その育ちたる子。

婆育は三百値(ネ)が易い【句】次條に同じ。〔諺語〕

婆育は三百安い【句】祖母に育てられたる孫は、甘やかされ來れるため、多少低能になり易し。〔諺語〕

ははそ-の-き 柞木【名】〔植〕ははそ(柞)㊀に同じ。〔古語〕字鏡「楢堅木也。波波曾乃木、又、奈良乃木」

ははそ-の-もり 柞森【名】〔地〕山城國相樂(サウラク)郡祝園(ハフゾノ)村にありて、紅葉の名所なる森。祝園神社あり。一説に、同郡瓶原(ミカノハラ)村大字西村の山下なる森なりと。後拾遺「いかなれば同じ時雨にもみぢするははその森の薄く濃からん」

ははそ-ば 柞葉【名】柞の木の葉。

ははそ-ば-の 柞葉の【枕】音の同じきより、はは(母)にかけていふ。萬葉「ちちのみの父のみこと柞葉の母のみこと」

ははそ-ばら 柞原【名】㊀柞の木の一面に生え連れる地。萬葉「山科(ヤマシナ)の石田(イハタ)の小野(ヲヌ)の柞原見つつや君が山路越ゆらむ」㊁『初の二音が同じきによりていふ。ははそ(柞)㊁・ははきぎ(帚木)㊂參照』はは(母)の意を含めていふ語。〔古語〕新續古今「母身まかりて、……。柞原散りし別を思ひ出でて今日このもとはいかがしぐるる」

ははそ-やま 柞山【名】〔地〕山城國にある山。柞の森の附近なるべし。後撰「ははそ山峰の紅葉の風をいたみふる言の葉をかきぞ集むる」

はば-た 巾太【名】『山崖人(ハバ)の義かといふ』土石などを運ぶを業とする者。輕子の類。はばたにんそく。

はば-たき 羽撃【名】はばたくこと。はたたき。はぶき。はぶり。鼓翼。

はば-たく 羽撃く【動四他】鳥、兩翼を擴げて相撃つ。はたたく。はぶく。はふる。

はば-だし 幅出【名】幅員の收縮せんとし、又は收縮したる織物を、伸子(シンシ)を用ひて、一定の幅員とすること。

はばだし-き 幅出機【名】幅出に用ふる機械。

はば-だたみ 幅疊【名】幅廣にたたむこと、又そのたたみ方にしたる物。一代女「大島田、幅疊の元結(モトユヒ)を、菱結にして」

ばば-たつゐ 馬場辰猪【名】〔人〕志士。土佐國の人。板垣退助の民權自由の説を唱ふるや、これに加り、明治十四年、自由黨組織せらるるや、その副議長となりしが、後、同志の士と共に、別に獨立黨を組織し、十九年、北米に航して、我國の文明を紹介すると同時に、その議院政治を研究す。二十一年歿す。年三十九。

はばた-にんそく 巾太人足【名】はばた(巾太)に同じ。

は-ばち 葉蜂【名】〔動〕蜂類に屬する昆蟲。我國にも、約三百種を産す。體は比較的肥大し、幼蟲は主に植物の葉を食ひ、農作物・果樹等を害するもの少からず。又、その産卵器、鋸齒狀をなし、これを動して、植物の葉又は莖等に卵を産み入るる特性あるによりて、鋸蜂ともいふ。

はは-ぢや 母ぢや【名】ははぢやひと(母ぢや人)の略。

ははぢや-が-もの 母ぢやが者【名】ははぢやもの(母ぢや者)に同じ。

はは-ぢや-ひと 母ぢや人【名】『母である人の訛』はは(母)㊀㊁を親しみていふ語。ははびと。ははぢやがもの。ははぢやもの。ははぢや。

はは-ぢや-もの 母ぢや者【名】『母である者の訛』前條に同じ。

ばはづうる【名】〔人〕ぼくとつ(冒頓)を見よ。

ばば-っ-こ ばばっ子【名】『ばばちい子、即ち忌み避くべき子の義』きたなき又はいたづらなる小兒。〔幼兒の語〕浮世風呂「いい子だ。ばばっ子ぢやねえ」

はば-っ-たし【形㈡】『はばり甚(タイ)しの義。はばる參照』顏面など、引攣るるがごとき感あり。

ばば-っ-ち【名】次條の略。〔幼兒の語〕

ばば-っ-ちい【名】『糞(バ)しき事、又は物の義』きたなきこと、又その物。ばば。ばばっち。ばっち。〔幼兒の語〕浮世風呂「そりや、そりや、ばばっちいだ、ばばっちいだ」

ばば-っ-ちい【形】『糞(バ)しの訛』きたなし(穢し)㊀に同じ。〔幼兒の語〕浮世風呂「ばばっちい。ええ、きたな」

はばっちん-ながら【句】「憚ながら」㊁の訛。〔東京の俚語〕

はは-っ-てう 哵哵鳥・八哥鳥【名】〔動〕形、伯勞(モズ)に似て、とさかあり。舌は長くして、先端爪の如く、これを切る時は、能く他の鳥の聲を眞似て鳴くといふ、一種の鳥。ははとり。

はは-とじ 母刀自【名】はは(母)㊀㊁の尊稱。ははご。おもとじ。〔古語〕萬葉「まき柱ほめて造れる殿のごといませ母とじ面(オモ)がはりせず」

ばば-どの 馬場殿・馬塲殿【名】うまばのおとど(馬場殿)に同じ。

はば-とび 幅飛・幅跳【名】平地に、線などを引きて、遠方より走り來り、その勢にて、一度に成るべく長き距離を飛び越ゆることを競ひあふ運動法。

はは-とり 鳥哵哵・八哥鳥【名】〔動〕ははってう(哵哵鳥)に同じ。

はばな(英Havana)【名】㊀〔地〕西印度キユウバ(Cuba)島の首府。㊁前記のハバナより産する卷煙草。

は-ばな 葉花【名】〔植〕しきみ(樒)に同じ。

はは-なし-ご 母無子【名】母なくして、父の手のみにて育つる子。

はは-にようご 母女御【名】母なる女御。女御にして母なる人。源氏「この御子(ミコ)の御母女御こそは、かの宮の御はらからに物しけめ」大鏡「七つにて位に即かせたまひにしかば、御母女御殿、……、后に立たせたまひて、中宮と申しき」

ばば-のぶかつ 馬場信勝【名】〔人〕武將。武田晴信の臣。信濃國深志(フカシ)城主。美濃守と稱す。世に信房とも傳ふれど、誤なるべし。驍名高く、而も身に一創をも帶びざりきといふ。晴信の歿後、勝頼に從ひ、天正三年、長篠の役に、織田信長の部下岡三郎左衞門に撃たれて死す。

ばば-のぶはる 馬場信春【名】〔人〕武將。信勝の子。信濃國深志(フカシ)城主。天正十年、織田信長に攻められ、圍を衝きて、甲斐に至れば、勝頼已に遁る。追及して、又、二壁に沮まれ、終る所を知らず。

ばば-のぶふさ 馬場信房【名】〔人〕ばばのぶかつ(馬場信勝)を見よ。

はば-のり 羽葉海苔【名】〔植〕褐色藻類に屬する海藻。葉狀體は昆布に似、幅二三分、長さ二三寸、全體黃褐色を呈し、質甚だ柔かに、乾燥すれば、黑褐色を呈す。小圓盤狀の根あり。莖は極めて短く、我國、淺海の干滿線附近の岩石に叢生す。抄(ス)きて乾し、焙りて食ひ、又は熱湯を注ぎて解き、味噌汁の實又は三杯酢などにして食ふ。かしかも。はんばのり。はんば。はばも。のつばも。めんそ。

ばば-のり 馬場乘・馬塲乘【名】馬場にて、馬を乘りまはすこと。當流小栗判官「馬場乘を見せんとて、櫻の馬場に乘り出だし」

ばば-はじめ 馬場始・馬塲始【名】新年になりて、始めて馬場乘をなし、又は新に設けたる馬場を、始めて使用すること。

はは-びと 母人【名】母なる人。はは。ははぢやひと。一代男「九日は、母人の十三年に當り」

はば-びろ 幅廣【名】㊀幅が、普通より廣きこと、又その物。(幅狹(ハバセバ)に對して)若風俗「幅廣の鳥の子三十枚」㊁次條の略。一代女「日野絹の幅廣を、中づもりにして取らせければ」

はばびろ-おび 幅廣帶【名】幅廣く仕立てたる帶。はばびろ。津國女夫池「なら、よい女房、うまい腰つき、巾廣帶で」

ばば-ぶぎやう 馬場奉行・馬塲奉行【名】犬追物(イヌオフモノ)の時、河原の者を支配し、竹垣の戸の開閉、犬の出入、馬糞の取捨、又、十疋即ち一回分濟みたる時の繩際の掃除などの事を下知せし役。定員三人。

ばば-ぶんかう 馬場文耕【名】〔人〕江戸の戲作者。伊豫國の人。通稱は中井文右衞門、また左司馬。講談を業とす。「平假名森之雫」を著して、金森侯の騷動に對する、幕府の處置を依怙(エコ)とし、鞫問に屈せずして、寶曆八年、獄門の刑に處せら

る。自ら修して馬(バ)文耕といへり。

ばば-まつり 馬場祭・馬埸祭 【名】 馬場にて、保食神(ウケモチノカミ)を祭ること。生竹を長さ一尺二寸に切り、牧大明神と書きて、兩方の隅に立てなどして行ふといふ。

はは-みこ 母御子 【名】 皇女又は女王にして、母たる御方。謠曲(加茂)「その母御子も、神となりて、加茂三所の神所とかや」

ははみた 【名】 なまみだ(南無阿彌陀)の轉訛。壬生大念佛「壬生(ミブ)の體を學び……鉦打叩き、ははみた、ははみたと、大念佛を始めたまふ」

ばば-みの 馬場美濃 【名】〔人〕 ばばのぶかつ(馬場信勝)に同じ。

はは-みや 母宮 【名】 皇女又は女王にして、母たる御方、又、皇子・皇女・王・女王の母たる御方。おほみや。源氏「齋宮の女御をこそは母宮も、御後見(ウシロミ)に讓りきこえたまひしかば」 狹衣「いと心もとなしと、母宮おぼしたれば」

はは-みやすどころ 母御息所 【名】 御息所にして、母たる人。源氏「母御息所も、いと重重しく心深きさまに物しはべりしを」 増鏡「御母御息所は、近衞の大殿と聞えし御女(ムス)なり」

はばむ 沮む・阻む 【動四自】 『はば(幅)に語尾の添ひたる語』勢よわる。くじけ衰ふ。ひるむ。挫折す。頓挫す。「敵軍沮む」 字鏡集「沮、ハバム」

はばむ 沮む・阻む 【動四他】 防ぎささふ。こばむ。おしとどむ。「敵、わが軍を、某處に沮む」

はばむ 沮む・阻む 【動下二他】 なじる。責む。詰責す。〔古語〕 字鏡「彈擊、波波女奈是留」

ば-はん 八幡 【名】 ㈠『當時、海外に赴かんとする船は、すべて、下關(シモノセキ)港に立寄りて、大内氏の支配を受くる定なりしより、倭寇の船も、寄港の序を以て、大内氏の尊信せし同港の龜山八幡宮に參詣し、「八幡大菩薩」を記したる幟を立てて、船じるしとせしを見て、明人の、支那音にて「ぱっはん」と呼びしに起る』 **わこう**(倭寇)に同じ。

大織冠「ばはんの海賊乘せ」 ㈡外國の商品を掠奪すること。〔戰國時代の語〕 ㈢他人の物を掠奪すること。〔戰國時代及び德川時代初期の語〕 ㈣あばるること。亂暴すること。〔肥前國長崎の方言〕

ば-はん 馬班 【名】〔人〕 史記を著したる司馬遷と、漢書を著したる班固と。班馬。

ばば-ん 婆・婆婆 【名】 ばば(婆)の音便。假名手本忠臣藏「麥搗(カ)つ歌に、おやぢ出て見や、ばばん連れてと唄ふを聞き」

ばはん-しう 八幡舟 【名】 次條に同じ。南海治亂記「日本船、皆、八幡宮の文字を書きて、舟印とし立てたる故に、異邦人より、日本船をさしては、八幡舟(バハンシウ)と云ふ事も、この時より始まるなり」

ばはん-せん 八幡船 【名】 ㈠『ばはん(八幡)㈠を見よ』倭寇の乘船。ばはんぶね。南海通紀「我國の賊船、各、八幡宮の幟を立て、洋中に出でて、西蕃の市船を侵し掠めて、その財産を奪ふ。故に、その賊船を稱して、八幡船と呼ぶなり」 ㈡昔、國禁を犯して、外海に出で、外國の商船を抄掠し、又は拔荷(ヌケニ)を竇買しなどせし船。〔德川時代初期の語〕

ばはん-ぶね 八幡船 【名】 前條に同じ。用明天皇職人鑑「流人(ルニン)ならで、餘の船の來る所でなし。さては、海賊ばはん船よな」

はば-めく 幅めく 【動四自】 「幅が利(キ)く」に同じ。甲陽軍鑑「當座機に入りたる者を、親類まではばめくやうにするは、依怙(エコ)なり」

はば-も 羽葉藻 【名】〔植〕 はばのり(羽葉海苔)に同じ。

ばば-もと 馬場本・馬埸本 【名】 馬場の、馬を乘り出だす所。うまだし。(馬場末に對して) 著聞「競馬……馬場もとへ走り歸りたりけるに」

は-ばや 羽羽矢 【名】 次條を見よ。草根集「空に射る同じばは矢は見えねども月や神代の天のかご弓」

天(アメ)の羽羽矢 【句】 『羽羽矢は羽張(ハバリ)矢の義なるべしといふ』神代にありたりといふ一種の矢。廣く大なる羽を附けたる矢なるべしといふ。〔古語〕

紀「天の鹿兒弓(カゴユミ)、天の羽羽矢」

ぱぱや 蕃瓜樹・萬壽果 (英 Papaya 又 Papaw) 【名】〔植〕 『もと印度マラバル(Malabar)地方の土人の語』 蕃瓜樹科に屬する落葉喬木。高さ約一二丈に達し、葉は長き葉柄によりて、樹頭に簇生し、闊大にして、掌狀に七裂す。夏、叢葉の下方より花枝を生じ、白色にして淡綠色を帶びたる單性花、總狀花序をなして、雌雄異株に開き、雄花の花冠は漏斗狀にして、上部は五深裂をなし、雌花は雄花よりも大にして、五辨より成る。果實は甜瓜(マクハウリ)のに似て、食用に適し、その汁液は、驅蟲劑及び防蟲劑に供す。熱帶亞米利加の原產。ばんくわじゆ。

ぱぱや-くわ 蕃瓜樹科 【名】〔植〕 顯花植物、被子類、雙子葉門、離辨花區の一科。何れも、小喬木にして、熱帶亞米利加と亞弗利加とに生じ、我國には自生するものなく、ただ、蕃瓜樹の、琉球と臺灣とに栽培せらるるのみ。ばんくわじゆ科。

は-ばやし 刃早し 【形二】 切味(キレアヂ)、銳し。七一職人歌合「研(トギ)……主に問ひ申さん。はばやさは、いかに手を切るぞ」 毛吹草「はばやくもあふや剃刀鶺鴒」

はば-ゆみ 羽羽弓 【名】 次條を見よ。

天(アメ)の羽羽弓 【句】 神代にありし一種の弓。羽羽矢を射るに用ふる弓なるべしといふ。〔古語〕 舊事紀「天羽羽弓、アメノハバユミ」

はは-ゆり はは百合 【名】〔植〕 『ははくりを見よ』 ばいも(貝母)に同じ。

ははら-ぐさ ははら草 【名】〔植〕 みやましきみ(深山樒)に同じ。

は-ばり 刃針・拔針 【名】 外科醫の、瘡などを切開するに用ふる、小き刃物。長さ二寸、幅二三分ほどにて、扁くして、先端尖り、諸刃なり。ひらばり。らんせっと。

ばば-りう 馬場流・馬埸流 【名】 和樣の書道の一流派。江戶の人馬場春水政房(寬延元年八十六歲にて歿す)の創めしもの。

はばる 【動四自】 『張り張るの略か、又、幅に語尾るの添ひたるものか。 はばったし參照』 張り擴がる。かさばる。

はひ 灰 【名】 ㈠物の燒失したる後に殘る粉末。多くは、謂はゆる灰色を呈す。和名「灰、波比。火燼滅也」 ㈡價値なく、取るに取らぬ物の譬。ちりひぢ。ちりあくた。奥儀抄「あやしき身をば、塵・灰などに、人の思へる心なり」

灰合ふ 【句】 「灰差す」に同じ。〔古語〕 源氏「など斯く灰あひがたき紫を心に深く思ひそめけん」

灰後(クオ)る 【句】 「灰返る」に同じ 〔古語〕 源氏「紫の紙の、年經にければ、灰おくれ、古めいたるに」

灰が無ければ、麥蒔くな 【句】 灰は、麥の肥料として、有効なるによりていふ語。〔諺語〕

灰返る 【句】 灰をさして、染めたる色、褪(サ)め衰ふ。灰、後(クオ)る。〔古語〕 枕「えび染の織物の、灰返りたる」

灰差(サ)す 【句】 紫色を染むる時、あざやかに染まるやうに、椿(ツバキ)の木を燒きて造りたる灰を加ふ。灰合ふ。〔古語〕 萬葉「紫は灰指すものぞ椿市(ツバイチ)の八十(ヤソ)の衢に逢へる子や誰」

灰差(サ)す色 【句】 『灰を加へて染むれば、鮮かになる色の義』 紫の色。〔古語〕 堀太「言はねども思ひそめてき錦木の灰さす色に出でやしなまし」

灰同然 【句】 身分などの、吹けば飛ぶほどに輕き形容。

灰と爲(ナ)る 【句】 ㈠火に燒けて、灰に變る。燒失す。㈡火葬せられて、灰に變る。茶毘(ビダ)に付せらる。死ぬ。拾遺「燃えはてて灰となりなん時にこそ人をおもひの止まん期(ゴ)とせん」

灰に爲す 【句】 ㈠火に燒きて、灰に變らしむ。燒失せしむ。㈡火葬す。茶毘(ビダ)に付す。源氏「灰になし奉らんを見たてまつりて」

灰に爲(ナ)る 【句】 灰と爲(ナ)るに同じ。源氏「空しき御骸(カラ)を見る見る、なほおはするものと思ふが、いとかひなければ、灰になりたまはんを見奉りて」

灰に塗(マブ)す【句】けがす。泥を塗る。雄長老百首「狙ひ寄りてすつと外さば面目を灰にまぶしの射手とこそいはめ」

灰に燒く【句】燒きて、灰とす。散木「椿を切りおきて、灰に燒かんとて」

灰の手すさび【句】手すさびに、火箸などにて、灰を弄ぶこと。灰いじり。夫木「うづみ火のあたりのまとゐさ夜ふけてこまかになりぬ灰の手すさび」

灰の手習【句】火箸などにて、灰に文字を書きて習ふこと。雲葉集「うづみ火のあたりの里はさ夜ふけてこまかになりぬ灰の手習」

灰蒔く樣な啌(ソウ)【句】出まかせにて、取留(トリトメ)なき言葉。大風に灰をまくやう。

はひ 蠅【名】〔動〕はへ(蠅)の轉訛。狂言(牛馬)「頤(オトガヒ)で、はひを追ふ」

はひ 蔤【名】『**はひね**(延根)㊁を見よ』**れんこん**(蓮根)に同じ。〔古語〕延喜式「荷葉……波斐四把半」奧儀抄「蓮には、はひと云ふものあり、人の食ふものなり」

はひ【接尾】狀態の意。「過(スギ)はひ」「業(ナリ)はひ」「にぎはひ」

はび 端日・半日【名】**はんび**(半日)に同じ。

はび 巴鼻・把鼻・巴臂【名】『巴は把の義』㊀『碧巖集の普照の序に「頌二出衲僧向上巴鼻一」、同種電鈔に「巴鼻之巴、如三鼻準之可二弁撮一也」とあり』器物の、手にて持ち支ふる所。つまみ。とって。㊁いはれ。おこり。來由。由來。運歩色葉集「巴鼻、ハビ。來由之義也」

ばひ 馬皮【名】うまのかは。馬革。和合人「馬皮・金皮(キンカハ)の胴亂」

ばび 馬尾【名】㊀馬の尾。馬のしっぽ。㊁馬の尾の毛。馬のす。

はひ-あがる 這上る【動四自】**はひのぼる**(這上る)に同じ。

はひ-あし 這足【名】這ひゆく時の足、又は足どり。

ばひ-あし 奪足【名】蹴鞠の時の足の動かし方の一。

ばひ-あひ 奪合【名】ばひあふこと。うばひあひ。

ばひ-あふ 奪合ふ【動四他】『奪(バウ)ひあふの略』互に奪ふ。爭奪す。

ばひあふ物は、中から取る【句】「爭ふ物は中から取る」に同じ。〔諺語〕

はひ-あふひ 這葵【名】〔植〕錦葵(ゼニアフヒ)科に屬する二年生の草。莖は偃臥六七寸乃至一尺內外に達し、葉は圓狀心臟形又は腎臟形にて、淺く五乃至七裂し、鈍鋸齒を有し、葉柄は長し。白色・五瓣の小花、春より冬にかけて開く。觀賞用に供す。

はひ-ありき 這歩行【名】はひありくこと。はひあるき。

はひ-ありく 這歩行く【動四自】㊀這ひてありく。ゐざりありく。枕「孫(ムマゴ)なども這ひありきぬべき人の親どちの晝寢したる」㊁うろつきまはる。徘徊す。はふ。

はひ-あるき 這歩行【名】**はひありき**(這歩行)に同じ。

はひ-あるく 這歩行く【動四自】**はひありく**(這歩行く)に同じ。

はひ-いじり 灰弄【名】火箸などにて、灰を搔きまはし弄ぶこと。灰せせり。灰なぶり。

はひ-いづ 這出づ【動下二自】㊀這ひながら出づ。はひだす。枕「肥えたるちごの、二つばかりなるが、……這ひ出でくるも、いとうつくし」源氏「草の下より、龍膽(リンダウ)の、我ひとりのみ心長うはひ出でて」㊁**いづ**(出づ)を卑しめていふ語。國姓爺「日本の小國より這ひ出で、唐土の地を踏み荒し」

はひ-いで 這出【名】㊀這ひ出づること。はひで。㊁**はしりて**(走出)㊁に同じ。〔古語〕夫木「かまど守(モ)るみづはのをみな庵よりはひいでの小田の早苗取る見よ」

はひ-いらず 蠅不入【名】**はへいらず**(蠅不入)の轉訛。和合人「蠅帳(ハヒチヤウ)に、何(ナン)ぞ食(タ)べあらしは無(ネ)えかと、……明けて見て、蓋物(フタモノ)は大層並んでゐるが、これは、何を入れるために置くのだ。これは、蠅(ハヒ)入らずでは無(ネ)え。菜(サイ)いらずか」

はひ-いり 這入【名】㊀這ひ入ること。㊁**はひり**(這入)㊁に同じ。〔古語〕後撰「妹が家のはひいりに立てる青柳に今や鳴くらん鶯の聲」

はひ-いる 這入る【動四自】這ひながら入る。はひる。はひこむ。落窪「ただ今もはひ入りて、北の方を打殺さばや」宇治「家にはひ入りにけり」

はひ-いろ 灰色【名】㊀灰の色に似たる色、即ち薄黑き白色。白ばめる鼠色。うすねずみいろ。灰白色。㊁**ねずみいろ**(鼠色)㊁に同じ。

はひうけ-いし 灰受石【名】**はひとめいし**(灰留石)に同じ。

はひ-うち 蠅打【名】**はへうち**(蠅打)の轉訛。

はひ-うら 灰占・灰卜【名】埋火(ウヅミビ)又は火桶の灰を見、又は搔きならして、吉凶をうらなふこと。長方集「思ひきやすさびにもする灰占も逢ふてふことは嬉しかりけり」

はひ-え 延枝【名】延び出でたる枝。〔古語〕夫木「風吹けば萩のはひえに浪越えてえもいはぬまのみぎはをぞ見る」

はひ-おく 這起く【動上二自】這ひながら起きあがる。盛衰記「文覺、……ややありて這ひ起き」膝栗毛「這ひおきて、乘出し、襖の間からさし覗き」

はひ-おさへ 灰押【名】次條に同じ。

はひ-おし 灰押【名】香爐・火鉢などの灰を押しならす具。縱に長き金屬製の板に、柄を取り附け、表面に細き溝を、縱に幾條も現はしたるもの。灰を押せば、その面に、溝の痕跡を美しく遺す。はひおさへ。はひけし。はひかき。はひならし。

はひ-おとし 灰落【名】卷煙草などの灰をおとし入るる具。

はひ-おぼどる 這ひおほどる【動四自】はひ延びて、ひろがる。〔古語〕萬葉「葛花にはひおほどれるくそかづら絶ゆることなく宮仕せむ」

はひ-おる 這下る【動上二自】㊀這ひながら下る。(這上るに對して)蘆屋道滿大內鑑「この母(カカ)樣はそでないと、膝を這ひおり、見まはして」㊁這ふやうにして下る。(這上るに對して)

ばひ-かう 馬尾香【名】**にゆうかう**(乳香)に同じ。

はひ-かかる 這掛る【動四自】這ひ行きて及びかかる。はひてまつはりつく。枕「荒れたる家に、葎(ムグラ)はひかかり」源氏「いとあわただしく、小きちごはひかかり、引きしろへば」

はひ-かき 灰搔【名】㊀**はひならし**(灰均)に同じ。藻鹽草「灰かき」㊁火事跡の灰燼を搔き拂ひて、掃除すること、又その人。

はひ-かく 這掛く【動下二自】『**はふ**(這ふ)㊃を見よ』夜這(ヨバヒ)を仕掛く。膝栗毛「心の內には、おのれ、今に這ひ掛けてやらうと、態と寢るふりにて」

はひ-かぐら 灰神樂【名】火氣ある灰の中に、過ちて液體をこぼしたるために、灰の立ちのぼること。

はひ-かくる 這隱る【動下二自】這ふやうにして隱る。逃げ隱る。源氏「深き山里、世離れたる海づらなどに這ひ隱れぬかし」同「あなたにありと見おきたまひてしを、俄かに這ひ隱れたらんも」

はひ-がしら 蠅頭【名】**はへがしら**(蠅頭)の轉訛。若風俗「蠅頭の釣針もたせて、岩井川の汀に、柳鮠(ヤナギバエ)など、手本隙なくかく時」

はひ-がち 灰勝【名】㊀炭火のたちて、灰の方が多くなること。枕「すびつ・火桶の火も、白き灰がちになりぬるは」㊁茶碗の天目の一種。

はひ-かづき 灰被【名】炭火のたちて、白き灰に覆はるること。小町踊「天目の名をかる炭や灰かづき」

はひ-かひ 灰買【名】灰を買ふこと、又その職業の人。はひや。守貞漫稿「灰買」

はひ-がひ 灰貝・蚶子【名】〔動〕斧足類に屬する軟體動物。殼の長さ一寸六七分に達し、外觀は赤貝に似たれども、やや細長くして膨れ、外面暗褐色にして、約二十條の放射狀隆起あり。その上に、又、數箇の結節狀の突起散在し、內面は白し。河水の混入する淺海の沙泥中に多し。肉は美味にして、食用に供し、又、乾製して、支那に

輸出し、介殼は貝灰(カヒバヒ)の原料とす。

はひ-から 灰殼【名】はいからの轉訛。

は-びき 刃引【名】『「刃を引く」を見よ』㊀刃物の刃を引きつぶすこと、又、刃を引きつぶしてある刃物。はまぐりば。若風俗「切付けられて、胴骨も動かず、この脇指刃引なり」武道傳來記「差したる刀・脇差を見れば、刃引にして、目釘竹をはづしおき」㊁刀の如く作りて、刃を引きつぶし、人を制するに用ひし具。三好義長亭御成記「御走衆六人參勤……各、太刀をば持ちて、はびき被レ持レ之」

はひき-の-かみ 波比岐神・婆比支神【名】『這入君(ハヒリキミ)神の義かといふ。はひり(這入)㊁參照』大年(オホトシ)神の御子。母は天知迦流美豆(アメシルカルミヅ)姫。禁中及び民屋等の內外を守護すといふ。

はひ-きんぼうげ 這毛莨【名】〔植〕毛莨(キンポウゲ)科に屬する多年生の草。高さ約一尺にして、通常毛茸を具へ、匐枝を出だす性を有す。根葉は一回又は二回三出複葉にして、小葉は二裂又は三裂す。花は黃色・五瓣にして、四月より七月にかけて開く。各地の溝の附近などに自生す。

はひ-ぎらひ 蝿嫌【名】はへぎらひ(蠅嫌)の轉訛。

は-びく 刃引く【動四他】刃引(ハヒキ)㊀をなす。

はひ-ぐさ はひ草【名】〔植〕やぶたばこ(藪烟草)を云ふ。〔播摩國の方言〕

ばひ-くび 奪首【名】『奪(ウバヒ)首の略』軍陣にて、他人の取りたる敵の首を奪ひて、我が手柄のごとくに装ふこと。甲陽軍鑑「ばひ頸の事は、大きに比興なり」

ばひ-ぐひ 奪食【名】奪ひあひて食ふこと。

はひ-げ 灰毛【名】動物の毛色の、灰色なるもの。ねずみげ。河內鑑「春ごとに燒くや灰毛の猫路山」

はひ-げし 灰けし【名】はひおし(灰押)に同じ。

はひげ-ねこ 灰毛猫【名】はひねこ(灰猫)㊁に同じ。

はひ-こむ 這込む【動四自】㊀這ひながら入り込む。はひいる。㊁這ひ行きて、相手の夜著に入り込む。夜這(ヨバヒ)をなす。

はふ。〔俚語〕和合人「一つ宿屋へ泊ると、年增(トシマ)なんざあ、きっと向ふから這ひ込んで來るんだのに」

はひ-こもる 這籠る【動四自】這ひ隱れて引きこもる。源氏「人げなう、ただ、さる方に這ひこもりて過しつべし」

はびこる 蔓延る【動四自】㊀『はひひろごる(這廣ごる)の略轉』延(ハ)ひのびて繁る。蔓延(マンエン)す。齋宮女御集「はびこれる葛の下吹く風の音も誰かは今は聞くべかりける」俳諧古選(洞水)「はびこりて風の苫になる芭蕉かな」㊁一杯にひろがる。ひろごる。ひろまる。充滿す。ほどこる。はばかる。紀「牛馬被レ野、ウシウマハビコレリ」賀古敎信七墓廻「京・田舍はびこる程の浮名立ち」㊂幅を利(キ)かす。ほしいままに振舞ふ。增長す。橫行す。跳梁す。はばかる。太平記「朝廷、再び傾いて、武家又泮(ハビコ)るべき瑞相」甲陽軍鑑「小身の北條などをば、只今までの如く家老衆に仰せつけられ、げにはびこり候はば」

はひ-ころし 蠅殺【名】〔植〕はへころし(蠅殺)の轉訛。

はひころし-だけ 蠅殺茸【名】〔植〕はへころしだけ(蠅殺茸)の轉訛。

はひ-さう 灰葬【名】三河國額田(ヌカタ)郡の風習として、死後三日間に、火葬の骨を拾ひて葬ること。

ばひ-さう 馬尾藻【名】〔植〕ほんだはら(馬尾藻)の漢名。

はひ-ざくら 這櫻【名】地を這へるやうなる枝ぶりの櫻樹。爲忠百首「言ひたつるかたそにふせるはひ櫻下行く水に根や浮きぬらん」

はひ-さじ 灰匙【名】はひじやくし(灰杓子)に同じ。

はひ-ざむらひ 蠅侍【名】はへざむらひ(蠅侍)の轉訛。

はひ-ざら 灰皿【名】㊀皿のごとき形に造りたる灰おとし。㊁熔鑛爐の底部、灰を受くる處。

はひ-しば はひ柴【名】〔植〕こがねばな(黃金花)㊀に同じ。藻鹽草「はひ柴」

ば-びしやく 馬柄杓【名】馬に水を飲まする時に用ふる柄杓。まびしやく。丹波與作「千兩取るとも、馬方、よしやれ、腰にや馬柄杓、手にや、また、煙管(キセル)」

はひ-じやくし 灰杓子【名】茶の湯にて、爐中の灰をならすに用ふる杓子。はひさじ。はひすくひ。

ばひ-しらがふ 奪ひしらがふ【動四自】互に奪はんとす。ばひあふ。〔古語〕宇治「ばひしらがひて、これを破りくひけり」

はひ-しる 這痴る【動下二自】しれがましくうろつきまはる。愚管抄「人がましかりぬべき子をこそ取り出だせ、さなきは、ただ這ひしれて」

はひ-すくひ 灰掬【名】はひじやくし(灰杓子)に同じ。

はひ-すげ 這菅【名】〔植〕莎草(カヤツリグサ)科に屬する多年生の草。葉は細長く、平行脈を有し、互生す。花は細長き稈の上部に生じ、これを圍める鱗片には、短き絨毛あり。果實は粒狀・黑色にして、やや角稜を呈す。おほいとすげ。

はひすて-ぐち 灰捨口【名】『英 Ash-shoot』汽船にて、各汽罐の艙上に於ける水線上の船側に設けて、使用したる石炭の灰を捨つるための口。

はひ-すべり 蠅滑【名】はへすべり(蠅滑)の轉訛。

はひすべり-どまり 蠅滑止【名】はへすべりどまり(蠅滑止)の轉訛。

はひ-ずみ 灰墨【名】はいずみ(掃墨)の誤。

はひ-ずる 這ひずる【動四自】這ひながらずり行く。だらしなく這ふ。八笑人「迯げんにも、足腰なえて、立上ることさへ出來ず、はひずりながら」

はひ-せせり 灰挵【名】はひいじり(灰弄)に同じ。芭蕉「小野炭や手習ふ人の灰せせり」

ば-びそ 馬鼻疽【名】『英 Glanders and farcy』馬に特有なる、一種の傳染病。病馬と鼻端を相接して相嗅ぐに因り、又は病毒ある馬具などの使用によりて傳染し、人類その他の動物にも感染することあれど、牛には感染せず。

はひ-たか 灰鷹【名】〔動〕はいたか(鷂)の誤か。新永代藏「必ず、人は、精を出し、器量を磨き、家に傳はりたる賣職(バイショク)を、たまかに勤めて、立身すべし。これを、とやかくと沙汰するは、灰鷹といふ者なり。己は、鳥をえ捕らず、馬の古沓などを、やうやうに摑みながら、本鷹(ホンタカ)の鳥の取りやうを詰(ナジ)る」

はひ-だし 這出【名】㊀はひだすこと、又そのもの。㊁都會の地に初めて出で、又はその職に初めて就き、未だ經驗に乏しきこと、又その人。かけだし。やまだし。はひで。

はひ-だす 這出す【動四自】㊀這ひて出づ。はひいづ。㊁這ふことを爲しはじむ。這ひはじむ。

はひ-たたき 蠅敲【名】はへたたき(蠅敲)の轉訛。

はひ-だはら 灰俵【名】灰を入るるための、又それを入れてある俵。冥途飛脚「唐戶・米櫃・灰俵、打返してぞ探しける」

灰俵と百姓は、叩くほど出る【句】灰俵の灰は、叩くほど出で、百姓は促(ハタ)るほど年貢を出だす。手拭と百姓は搾るほど出る。〔諺語〕

灰俵を括ったやう【句】身體の、肥えて、たけ低き形容。(主に女にいふ)

はひ-たもとほる 這徘徊る【動四自】はひもとほる(這徘徊る)に同じ。〔古語〕萬葉「綠子の這ひたもとほり朝よひに哭(ネ)のみぞ我が泣く君なしにして」

はひ-だらけ 灰だらけ【名】はひまみれ(灰塗)に同じ。

はひ-ぢごく 蠅地獄【名】〔植〕はへぢごく(蠅地獄)の轉訛。

はひ-ちやう 蠅帳【名】はへちやう(蠅帳)の轉訛。和合人「蠅(ハヒ)帳に、何(ナン)ぞ食べあらしは無(ネ)えかと」

ば-ひつ 馬匹【名】『一匹・二匹と數ふるよりいふ。ひつば(匹馬)參照』うま。

はひつき-がは 延槻川【名】〔地〕越中國中新川(ナカニヒカハ)郡の川。立山(タテヤマ)の北なる大日嶽に發し、西北に流れて、海に入る。萬葉「新河郡渡二延槻河一時作歌一首」

ばひつ-きふやう-ゐゐん 馬匹給養委員【名】師團にて、動員のために、馬匹の徵發を行ふに當り、その徵發の馬匹を輸送する途中に於ける、宿泊及び給養の事務

を掌らしむるため、師團長の設くる委員。

はひ-つくばふ 這蹲踞ふ【動四自】這ふやうにしてつくばひかしこまる。ひれふす。盛衰記「黨も、高家も、はひつくばうてこそありしか」

ばひつ-ちようはつ-ゐゐん 馬匹徵發委員【名】師團にて、動員のために、馬匹の徵發を行ふ時、その徵發馬匹の差出場所にて、馬匹の檢査をなし、且つ該所にての徵發及び輸送の事務を掌らしむるため、師團長の設くる委員。

はひ-で 這出【名】㊀はひでること。㊁はひだし(這出)㊁に同じ。醒睡笑「酌をする者、酒を、ほかとこぼしたれば、亭主、その給仕は、この程のはひでにて候ゆゑ」 鷹筑波「草も木も春ははひでの今年かな」

はひで-こぶら【名】〔植〕ごしゆゆ(呉茱萸)に同じ。

はびー-てん【名】〔植〕ごしゆゆ(呉茱萸)に同じ。

はひで-もの 這出者【名】はひでの人。かけだしの人。山だしの田舍者。

はひ-でる 這出る【動下一自】はひいづ(這出づ)の訛。俳諧新選(才之)「這ひ出ても附きまとふ家や蝸牛」

はひ-どく 蝿毒【名】〔植〕はへどく(蝿毒)の轉訛。

はひどく-さう 蝿毒草【名】〔植〕はへどくさう(蝿毒草)の轉訛。

はひ-とまら-ず 蝿不止【名】〔植〕はへとまらず(蝿不止)の轉訛。

はひとめ-いし 灰留石【名】火爐などの下にある石。はひらけいし。

はひ-とり 蝿取【名】はへとり(蝿取)の轉訛。

ばひ-とり 奪取【名】ばひとること。奪取(ダツシユ)。小町踊「一聲やばひ取にせん時鳥」

ばひとり-がち 奪取勝【名】我がちに奪ひ取ること。奪ひ取り得たる者を勝とすること。せりあひどり。とりがち。曠野(二雪)「月一つばひとりがちの今宵かな」

はひとり-きのこ 蝿取菌【名】〔植〕はへとりきのこ(蝿取菌)の轉訛。

はひとり-ぐさ 蝿取草【名】〔植〕はへとりぐさ(蝿取草)の轉訛。

はひとり-ぐすり 蝿取藥【名】はへとりぐすり(蝿取藥)の轉訛。

はひとり-ぐも 蝿取蜘蛛【名】〔動〕はへとりぐも(蝿取蜘蛛)の轉訛。

はひとり-ごんべゑ 蝿取權兵衞【名】〔動〕はへとりごんべゑ(蝿取權兵衞)の轉訛。

はひとり-さう 蝿取草【名】〔植〕はへとりさう(蝿取草)の轉訛。

はひとり-さうち 灰取裝置【名】『英 Ash-handling system』汽罐にて、石炭の燃燒によりて生じたる灰を排除する裝置。大なる陸上の動力所、又は船艦等に用ふ。

はひとり-だけ 蝿取茸【名】〔植〕はへとりだけ(蝿取茸)の轉訛。

はひとり-なでしこ 蝿取撫子【名】〔植〕はへとりなでしこ(蝿取撫子)の轉訛。

はひとり-の-き 蝿取木【名】〔植〕はへとりのき(蝿取木)の轉訛。

はひとり-ばな 蝿取花【名】〔植〕はへとりばな(蝿取花)の轉訛。

はひとり-むし 蝿取蟲【名】〔動〕はへとりむし(蝿取蟲)の轉訛。

ばひ-とる 奪取る【動四他】『奪(バ)ひ取るの略』他人の物を、強ひて取る。奪ふ。もぎとる。〔古語〕 蜻蛉「ばひ取りて返したり」 宇治「逃ぐるを追ひて、ばひ取りて」

はひ-なぶり 灰嬲【名】はひいじり(灰弄)に同じ。

はひ-ならし 灰均【名】火鉢・爐などの灰を均すに用ふる、金屬製の扁き匕の如きもの。はひおさへ。はひかき。ひかき。浮世風呂「火吹竹・灰ならしも御座候っ」

はひ-にんぎやう 這人形【名】腹這の形に造りたる人形。はひはひ人形。

はひ-ぬめり 蝿滑【名】〔植〕はへぬめり(蝿滑)の轉訛。

はひ-ね 延根・這根【名】㊀はひのびたる草木の根。はびこりたる根。〔古語〕 夫木「おほともの松のはひ根を枕にて高師(タカシ)の濱にまろ寢してけり」 ㊁『はひ(蔓)を見よ』れんこん(蓮根)に同じ。〔蔓〕

はひ-ねこ 灰猫【名】㊀灰毛の猫。㊁暖まらんとして、竈などの下に入りたるため、灰まみれとなりたる猫。はひげねこ。心中刃は氷の朔日「灰まぶれなる綠猫の、顏ふり上げて」

はひ-ねず 這杜松【名】〔植〕『ねず(鼠)㊁を見よ』松杉科に屬する常綠喬木。全體ねずに似て、それよりも葉短く太く、幹枝は地を這ひ、漿果狀の毬果を結ぶ。海岸に多く、又、觀賞用に供す。ねずみすぎ。

はひ-ねり 灰練【名】あくねり(灰汁練)に同じ。

はひ-の-き 灰木【名】〔植〕灰木科に屬する常綠喬木。葉は楕圓形又は披針形にして、先端尖り、互生し、花は五深裂せる合瓣花にして、多數の長き雄蘂を有し、疎なる總狀花序をなす。我國の特産にして、本州の南部、九州・四國・臺灣等に自生し、木材は白色にしてやや堅きを以て、將棊の駒、箸その他諸種の器具を作るに用ふ。

はひのき-くわ 灰木科【名】〔植〕顯花植物・被子類・雙子葉門・合瓣花區の一科。喬木又は灌木。最も多く熱帶地方に分布す。くわいぼくくわ。

はひ-の-ざ 這座【名】はいのざ(拜座)に同じ。

はひ-の-どく 蝿毒【名】〔植〕はへのどく(蝿毒)の轉訛。

はひ-の-とり 蝿取【名】〔動〕はへのとり(蝿取)の轉訛。

はひ-のぼら-ず 蝿不登【名】〔植〕はへのぼらず(蝿不登)の轉訛。

はひ-のぼる 這上る【動四自】㊀這ひながらのぼる。はひあがる。(這下(ハヒオ)るに對して) 竹取「緣にはひのぼりたまひぬ」 ㊁這ふやうにしてのぼる。はひあがる。(這下(ハヒオ)るに對して) 蜻蛉「山にはひのぼりて、法師になりにけり」

はひ-のる 這乘る【動四自】㊀這ひながら乘る。㊁這ふやうにして乘る。かじりつきて乘る。萬葉「赤駒にしづ鞍打ちおき這ひ乘りて」 蜻蛉「一つ車に這ひ乘りて」

はひ-の-を 蝿尾【名】はへのを(灰尾)の轉訛。

はひ-はう 灰鮑【名】はいはう(灰鮑)を見よ。

はひ-はうろく 灰炮烙・灰土鍋【名】茶の湯にて、用意の撒灰を入れおく、扁平なる土燒の器。

はひ-はち 灰八【名】『灰吹銀八分にて買はるる故にいふ』辻君の類。〔肥前國長崎の方言〕

はひ-はひ 這這【名】㊀這ひありくこと。〔幼兒の語〕 ㊁八朔に贈りて、賀意を表する人形。這兒(ハフコ)の類なるべし。〔和泉國堺邊の方言〕

はひはひ-にんぎやう 這這人形【名】はひにんぎやう(這人形)に同じ。

はひ-はらひ 蝿拂【名】はへはらひ(蝿拂)の轉訛。傾城島原蛙合戰「金の采配千本持っても、蝿拂に劣ったり」

はひ-びやく 這柏・矮檜・矮柏【名】〔植〕次條の略。

はひ-びやくしん 這柏槇・這柏杉・這柏心・矮柏・矮檜・矮柏【名】〔植〕檜柏(ヒヤクシン)の變種。莖は偃臥して、數尺の間に蔓延し、葉は杉のに似たる針狀の短きものと、小形にして、鱗片狀なるものとの二種を有し、果實は漿果樣の毬果にして、鱗片少し。白根山及び東北地方の高山に自生す。插花の料とし、又は庭園に栽培す。じやき。そなれ。そなれまつ。だこ。はひびやく。たちびやくしん(立柏槇)參照。

はひ-ひろごる 這廣ごる・延廣ごる【動四自】はひ延びてひろがる。はびこる。蔓延す。古今「野べに生ふる葛(カツラ)のはひひろごり」

ばひ-ふ 馬脾風【名】〔醫〕次條の略。

ばひ-ふう 馬脾風【名】〔醫〕ぢふてりや(實扶的里)に同じ。

はひ-ふき 灰吹【名】烟草の吹殼を吹き落し、又は叩き入れ、又、唾などを吐き入るるに用ふる筒。多くは竹にて製し、烟草盆に添ふ。唾壺。續猿蓑(不玉)「名月や灰吹捨てる陰もし無」

灰吹から蛇(ジヤ)【句】次條の略。〔諺語〕

灰吹から蛇(ジヤ)が出る【句】次條に同じ。〔諺語〕

灰吹から龍(リユウ)が上(アガ)る【句】「瓢簞から駒が出る」に同じ。〔諺語〕

灰吹と金持とは、溜るほど穢(キタナ)し

【句】「金持と痰吐（タンハキ）とは溜る程穢し」に同じ。〔諺語〕

灰吹に載せた龜の子 【句】手足をもがくのみにて、何事も爲し得ざる譬。〔諺語〕

はひ-ぶき 灰吹 【名】㊀〔化〕骨灰を底としたる反應爐中に、金銀分に富める鉛の熔融せるを入れ、強風を送る時、鉛は酸化して吹き去られ、酸化鉛の殘部は、爐底に吸收せられ、あとに殘存する金銀分を採取すること。薩摩歌「銀座に長長使はれ、駕籠・乘物のはいはひぶき」㊁灰吹の略。

はひぶき-ぎん 灰吹銀 【名】灰吹の方法によりて吹き分けたる銀。きめ粗し。はひぶき。

はひぶき-はふ 灰吹法 【名】灰吹（ハヒキ）㊀の方法。

はひ-ぶし 這臥 【名】這ひざまに臥すこと。〔古語〕 枕「例のはひぶしに習はせたまへるおまへたちなればとて、とりおろしまかない騷ぐ」

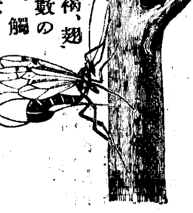
はひ-ふす 這臥す 【動四自】這ひて臥す。腹ばひて横になる。 枕「大きなる木ども倒れ、……萩・女郎花などの上によろぼひはひふせる、いと思はずなり」

はひ-ふるひ 灰篩 【名】灰を篩ひ通して、その中にまじれる粗大なる雜物を去るに用ふる具。

はひ-べや 灰部屋 【名】灰を貯へ置く所。

はひ-ぼう 灰棒 【名】はいぼおの訛。

ばび-ほう 馬尾蜂 【名】〔動〕『產卵管の形、馬の尾のごとくなるよりいふ』膜翅類中、蜂類に屬する昆蟲。體形、赤蜂に似て、長さ五分內外、全身黃褐、翅は飴色にて、多數の濃き斑紋あり。觸角長くして、鞭狀をなし、雌は尾端に五六寸の細長き產卵管を具ふ。幼蟲は、樹幹內の天牛（カミキリムシ）の幼蟲に寄生して、これを斃す。



（ばびほう）

はひ-ほこり 灰埃 【名】くわいじん（灰燼）㊀に同じ。

はひ-まぎる 這紛る 【動下二自】這ひあるきてまぎれ隱る。源氏「いづこにはひまぎれて」

はひ-まぎれ 灰紛 【名】灰の中に紛れて、見つからぬこと。諺「逃栗・追栗・灰紛」

はひ-まじる 這交る・延交る 【動四自】はひ延びて入りまじる。源氏「ときは木にはひまじれる蔦の色」

はひ-まつ 這松 【名】㊀風雪に逢ふこと多きため、枝ぶりが、地を這へる如きさまをなせる松。高山に生ず。㊁〔植〕松杉科に屬する常綠喬木。高山の巓に生じ、樹枝、岩石の間にはひ延びて、長さ數尺に達す。果實は球果にして、唐松（カラマツ）のに似て小く、種子を食用とす。あひづごえふ。いはねまつ。しもふりごえふ。せんざいまつ。せんしようまつ。せんでふまつ。たけまつ。ちはひまつ。みやじまごえふ。ゐざりまつ。〔偃松〕

はひまつ-たい 偃松帶 【名】〔地〕しらびたい（白檜帶）を見よ。

はひ-まつはる 這纏る・延纏る 【動四自】はひ延びてからみつく。古今「よそに見て歸らん人に藤の花はひまつはれよ枝は折るとも」

はひ-まはし 這廻 【名】開（ヒラキ）に乘る時、帆足を取ること。〔船人の語〕

はひ-まはる 這廻る 【動四自】這ひながら動きまはる。はひもとほる。はひたもとほる。はひもとほろふ。

はひ-まぶれ 灰塗 【名】次條に同じ。 心中刃は氷の朔日「灰まぶれの鍛冶屋の仁藏（ニザウ）」 八笑人「火鉢へ腰を懸けたるまま、灰まぶれ、眞白になり」

はひ-まみれ 灰塗 【名】灰にまみるること。灰だらけ。灰まぶれ。

はひ-まゆみ 杜仲 【名】〔植〕まさき（柾）に同じ。〔古語〕 和名「杜仲、一名、木緜、波比末由美。析レ之多二白絲一者也」

はひ-まゐり 蠅參 【名】はへまゐり（蠅參）の轉訛。 運歩色葉集「蠅參、ハヒマヰリ。伊勢參附二道者之尾、譬三諸蠅附二驥尾一也」

はひ-みづ 灰水 【名】あくみづ（灰汁水）に同じ。

はひ-むし 蠅蟲 【名】はへむし（蠅蟲）の轉訛。

はひ-むしや 蠅武者 【名】はへむしや（蠅武者）の轉訛。

はひ-むろ 這杜松 【名】〔植〕はひねず（這杜松）に同じ。

はひ-も 【名】竹の根の傍に生ずる、筍に似たる形のもの。

はひ-もとほる 這徘徊る・延徘徊る 【動四自】はひまはる（這廻る）に同じ。いはひもとほる（い這徘徊る）參照。

はひ-もとほろふ 這徘徊ろふ・延徘徊ろふ 【動四自】前條の延。〔古語〕 記「伊勢の海の大石（オヒシ）に這ひもとほろふ細螺（シタダミ）のい這ひもとほり」 同「稻幹（イナガラ）に延ひもとほろふ野老（トコロ）づら」

はひ-や 灰屋 【名】㊀他日、そこにて火葬をなさんとて、假に葬りおく所。 靈異記「輒不二燒失一、點レ地作レ冢、殯收而置。冢、皮比夜」 ㊁灰を買ふを業とする人。はひかひ。

は-びやう 葉鋲 【名】障子に取り附けたる硝子を動かぬやうにするため、パテを塗る前に棧に打つ、薄く小き三角形の金屬。通常亞鉛を用ふ。亞鉛鋲。とたん鋲。

は-びやう 葉莧 【名】〔植〕ひゆ（莧）を云ふ。〔加賀國の方言〕

はひや-ぎれ 灰屋切 【名】名物切（メイブツギレ）の一。花色の地に、徑四分ほどの巴の模様を、白く散らしたる緞子。

はひ-よけ 蠅除 【名】はへよけ（灰除）の轉訛。

はひ-よけ 灰避 【名】㊀灰を避くるに用ふる物。㊁紙にて、眼鏡の如く作り、目のあたる處に、薄き硝子を用ひて、塵灰を避くるに用ふるもの。文政年中より始る。

はひ-よせ 灰寄 【名】こつあげ（骨上）に同じ。 浮世親仁形氣「灰よせの時も、新しきを著ることにあらず」 一代女「逮夜參（タイヤマヰリ）の更けるを待ち兼ね、灰よせの曙も、別（カワト）と思へば、しばしもうたてき」

はひ-よる 這寄る 【動四自】這ひながら近寄る。ゐざりよる。 源氏「這ひ寄らんも、中中いと輕輕しければ」

ぱぴらす （英 Papyrus）【名】㊀〔植〕『もとは希臘語』莎草（カヤツリグサ）科に屬する多年生の草。莖は三稜を有し、外觀、葦に類し、高さ六尺乃至一丈に達し、その先端に花を著く。古、埃及（エジプト）にて、未だ紙の發明なかりし時代より、この草のニイル河畔に叢生せるを採取し、莖より紙の代用品を製したり。又、莖の內部なる軟質の髓は、食料に適し、莖は綯りて、繩に造り、又は織りて、帆布とす。㊁古、前記の草にて造りし紙狀の品。色純白、纖維縱橫に配列して、美しく、頗る耐久力に富み、數千年前のもの、今なほ存すれども、價貴くして、普くは使用せられざりき。

はひ-り 這入 【名】㊀はひること。はひいり。㊁門を入りて、家に屋達するまでの間の空地。はひりぐち。はひいり。（走出（ハシリデ）に對して）〔古語〕 和泉式部集「見にと來る人だにもなしわが宿のはひりの柳下はらへども」 ㊂纔に這ひ入るばかりに狹きこと、又その所。 醒睡笑「さらでだにいぶせきはひりの小屋、春雨すさぶ永日なれば、暮しかねたるつれづれに」

這入の庭 【句】はひり㊁にある庭。はひり。 堀太「柴の屋のはひりの庭におく蚊火（カビ）の烟うるせき夏の夕暮」

はひり-ぐち 這入口 【名】家の入口。はひり。かどぐち。 曠野（荷兮）「簾して涼しや宿の這入口」

はひ-る 這入る 【動四自】『はひいる（這入る）の略』いる（入る）に同じ。 俳諧古選（蓰然）「世の中を這入りかねてや蛇の穴」

はひる襄荷に出る生薑 【句】『柳樽に「大門（オホモン）をはひる襄荷（メウガ）に出る生薑（シヤウガ）」といふ句あるに本づく。めうが（襄荷）㊁・しやうが（生薑）㊂參照』遊廓の大門を入る者は愚者、出でて歸る者は吝嗇の者なり。〔諺語〕

ぱぴるす 【名】ぱぴらすに同じ。

は-びろ 葉廣 【名】㊀葉の廣きこと、又その草木。一說に、葉の茂り榮えてひろがれ

ること、又その草木。夫木「夏深み庭も葉びろの玉がしはしぐれをならす夜はのむらさめ」㊁萵苣(チサ)の葉。〔女の語〕

はーびろ 刃廣【名】刃の廣きこと、又その物。

はーびろ 羽廣【名】鮫皮の類違(ルヰチガヒ)の一。

はびろーがしは 葉廣柏【名】葉廣なる柏の木。新六「けふこそは葉廣柏に木綿(ユフ)かけてこの森にます神祭るなれ」

はびろーくまがし 葉廣檮【名】葉廣なるくま樫。記「立ち榮ゆる葉廣くまがし」

はひーわたる 這渡る【動四自】㊀這ひながら渡る。一茶「這ひ渡る橋の下よりほととぎす」㊁這ふやうにして赴く。ちよっと往く。源氏「おとど……ゆくりもなく輕(カロ)らかに這ひわたりたまへり」増鏡「院も、內も、這ひわたる程の近さなれば」㊂はひ延びて、こなたよりかなたへ及ぶ。後撰「下にのみはひ渡りにし蘆の根のうれしき雨にあはるるかな」〔延渡る〕八笑人「青葉涼しき夏木立朝顏さへも、我儘に這ひ渡りたる庵の戸」

はふ 法【名】㊀きまり。さだめ。のり。規則。法則。秩序。**ほふ**(法)參照。狂言(じせん石)「京內參(キヤウウチマヰリ)をすれば、主(シユウ)に暇を乞はぬ法でおりさうか」雙蝶蝶曲輪日記「かたわな子がかはいいと、義理も法もわきまへなく」㊁しかた。方法。和合人「まあ、どういふ法にしよう」㊂おきて。法律。法令。法制。刑罰。法度(ハット)。保元「法に任せよといふ程こそあれ、……取って、伏せて、これを搦め」太平記「諸軍勢に向ひて、法を出しけるは」㊃てだて。みち。しかた。方法。手段。㊄〔數〕**ぢよすう**(除數)又は**じようすう**(乘數)に同じ。(實(ジツ)・商に對して)**めやす**(目安)㊂參照。㊅〔語〕『英 Mood』動詞の活用形によりて、述者の述定する樣式・態度を、種種に表はすこと。直接法・接續法・希求法・命令法の四種に分つ。式。

法三章【句】『史記の高祖紀に「沛公西入二咸陽一、召二諸縣父老豪傑一曰、父老苦二秦苛法一久矣。吾當レ王二關中一。與二父老一約二法三章一耳。殺レ人者死、傷レ人及盜抵レ罪、餘悉除二去秦法一。秦人大喜」とあるに本づく』法律の、極めて簡略なること。蕪村「畑打や法三章の札の下(モト)」

法に行ふ【句】おきてに從ひて處分す。刑に處す。三日太平記「信長公も、千本(チモト)姫を法に行ひたまはずば、天下の政道立ちがたし」

法に過ぐ【句】法外なる振舞を爲す。鵜鷺合戰「山鳥の、里に出でて咲(ワラ)はれんは、常の習なれども、これは、法に過ぎたる風情かな」三日太平記「賤しい賣人(バイニン)、上上(ウヘ)樣に直(ヂキ)にお目にかからうとは、法に過ぎたる慮外者」

法の淵源(エンゲン)【句】〔法〕**はふげん**(法源)に同じ。

法は西方より【句】「光は東方より、法は西方より」を見よ。

法を書く【句】策略を案じ出す。梅曆「なにさ、お案じでない。どうかして、法を書いて、……此所を身拔(ミヌケ)をさせ申す手だても、又有りませうはね」

法を撓む【句】私意を以て法律を曲ぐ。

法を鬻(ヒサ)ぐ【句】賄賂を取りて、法律を曲ぐ。

法を舞はす【句】次條に同じ。

法を弄ぶ【句】私意に依りて、法を行ふ。

法を破る道理無し【句】「道理を破る法はあれど、法を破る道理無し」を見よ。

はーふ 破風・搏風【名】〔建〕屋根の切妻(キリヅマ)の合掌形の板、即ち家の兩側面にある切妻屋根の端の、左右に斜に垂れ開きて山形をなし、母屋桁(モヤゲタ)の鼻を隱すため、且つ裝飾的に取り附けたる部分。もと千木(チギ)と破風とは、神明造(シンメイヅクリ)に於けるがごとく、一本の材を用ひしものなれば、破風の形は、直なるを本式とし、これを特に、本破風(ホンハフ)と呼ぶことあり。その他、流(ナガレ)破風・千鳥(チドリ)破風・唐(カラ)破風・素輕(スガル)破風・起(ムクリ)破風・切妻(キリヅマ)破風などの種類あり。

はーふ 破釜【名】『前條の語の轉義なるべし』芝居の舞臺の眞上なる、三階の簀子(スノコ)。紅葉・櫻花などの釣枝を下げ、雨を降らせ、月又は鳥などの形に造りたる物などをも出す所なり。ひおほひ。ひおひ。

はーふ 霸府・覇府【名】㊀霸者が政を行ふ所。㊁**ばくふ**(幕府)に同じ。

はふ 這ふ【動四自】『這は、もと迎ふる義なる文字なるを、古來、この語に宛て來れり』㊀體を地につけて進みゆく。はらばひ行く。匍匐す。記「昆蟲、ハフムシ」枕「三つばかりなる兒(チゴ)の、急ぎて這ひくる道に」㊁物に添ひ傳はりて延ぶ。はびこる。はひわたる。蔓延す。〔延ふ〕萬葉「谷せばみ峰にはひたる玉かづら絶えむの心わが思(モ)はなくに」㊂うろつきまはる。はひありく。さすらふ。盛衰記「いかにも覺(オボ)さんままに、蚑(ハ)ふ方に蚑ひたまへ」㊃夜這(ヨバ)ひをなす。はひこむ。〔俚語〕

這ふままに這はせて見よ【句】『赤子を自由に這はせおくに譬へていふ』爲すがままに放任して、成行を見るがよし。〔諺語〕

這へば立て、立てば歩め【句】子の生長をもどかしく思ふ親心の形容。類柑子「井上阿州公の御吟に、這へば立て立てば歩めと思ふにぞ我が身につもる老を忘るる」

延へけく【句】『けは過去の助動詞**けり**の略なるべし。一說に、**けむ**の略なりと』はひ延びける事。〔古語〕記「水たまる依網(ヨサミ)の池の堰杙(ヰグヒ)打ち菱殼の刺しける知らに蓴(ヌナハ)くり延へけく知らに吾が心しいやをこにして」

はふ 延ふ【動下二他】㊀はひ延ぶるやうにす。延ばし傳はらす。張りわたす。〔古語〕萬葉「足引の山田つくる子ひでずとも標(シメ)だにはへよ守(モ)ると知らなむ」堀太「標(シメ)はふる山田の小田の苗代に雪消(ユキゲ)の水をせきぞかけつる」㊁思をかく。妻どひす。〔古語〕萬葉「谷せばみ峰邊にはへる玉かづらはへてしあらば年に來ずとも」

はぶ 波布・飯匙倩【名】〔動〕蛇類に屬する爬蟲類。琉球諸島・八丈島・大島等に產し、體長五六尺。外觀、やや縞蛇に似たれども、斑紋明かならず。頭は左右に膨大して、飯匙の如く、牙には、前面に、毒液の流通すべき縱溝あり。脊上に、黃褐色の斑紋を具へ、胴鱗には縱溝を有し、腹面は白ばみて、黑色の横紋を有す。全身、灰褐色若しくは鮮黃色なるを、金はぶ、銀灰色なるを、銀はぶと呼ぶ。その毒激烈にして、人畜を害す。皮は三絃の胴に張るを得。

(はぶ)

はぶ【名】〔鑛〕雲母の一種。黑くして、靑みあるもの。

ばふ【名】しまりの無きこと。ばらふ。

ばふ 乏【名】『張衡の東京賦の註に「乏以レ革爲レ之」と見ゆ』牛革にて張りて、衢立(クツテイ)のごとき形とし、楊弓の矢を禦ぐに用ふるもの。乏形(バフカク)。

ばーふ 馬夫【名】まご。うまかた。

ばふ 奪ふ【動四他】**うばふ**(奪ふ)の略。〔古語〕空穗「ばひえつ。これや、この惜しみたまふ御娘なり」源氏「ありしやうにもばひたまはず」

ばーぶ【名】**ばふみ**(馬蹈)の略。

ばーぶ 馬部【名】『古の**めぶ**(馬部)に倣へる名稱』宮內省舊御廐局の職員の一。馬匹の飼養などの雜役を掌りしもの。

ばーぶ 馬舞【名】次條を見よ。

馬舞の災(ワザハヒ)【句】『晉書の藝術傳に「黃平問二索紞一曰、我昨夜夢二舍中馬舞數十人向レ馬拍レ手、此何祥也。紞曰、馬者火也。舞爲二火起一。向レ馬拍レ手、救レ火人也。平未レ歸而火起」とあるに本づく。「馬名者火也」とは、馬を十二支の午の義に取り、方角に配すれば南方、五行に配すれば火なるよりいへるなり』**くわさい**(火災)の異稱。

はふーあん 法案【名】法律・法令の草案。

はふーいがく 法醫學【名】『獨 Gerichtliche Medizin』法の精神を精妙に運用せしむる爲に、自殺人・急死人及びその關係

物體、犯罪人・傷害人乃至精神異常者等の行爲・心身等につきて、疑件を鑑別する等の事を目的とする、醫學の一科。

はふ-いた 破風板【名】〔建〕はふ(破風)に同じ。

はふ-えき 法益【名】〔法〕法律の保護する利益。これを侵害する時は、各種の犯罪又は民法上の不法行爲を構成す。

はふ-か 法家【名】㊀法學を修め、又はこれに精通せる人。㊁支那周末の哲學にて、天下を治むるに、法術を道德以上に重んずる主義の學派。管仲・申不害・商鞅・韓非子等、これに屬す。刑名の學。㊂明法道(ミヤウボフダウ)の家筋、即ち中原・坂上の兩家。太平記「且は先例を引き、且は法令に任せて勘へ申すべき由、法家の輩に尋ね下さる」

はふ-が 法衙【名】司法の官衙。裁判所。

は-ぶか 【名】〔動〕あをざめ(青鮫)に同じ。

はふかい-ぶし 法界節【名】ほふかいぶし(法界節)を見よ。

はふ-がく 法學【名】はふりつがく(法律學)に同じ。

はふ-がくし 法學士【名】學士の一。舊東京大學法學部及び帝國大學の舊法科大學又は法學部を卒業せる者の稱號。

はふがく-つうろん 法學通論【名】法學の全般に亙る概要を研究する學問、又その書物。はふりつがく(法律學)參照。

はふがく-はかせ 法學博士【名】次條に同じ。

はふがく-はくし 法學博士【名】學位の一。法學の蘊奧を究めたる者が、文部大臣より授けらるるもの。はくし(博士)參照。

はふがくはくし-くわい 法學博士會【名】博士會の一。法學博士を以て組織するもの。

はふがく-ぶ 法學部【名】綜合大學の一部。法律の理論・應用を敎授する所。

はふがくぶ-ちやう 法學部長【名】綜合大學の法學部の學務を統理する職。

ばふ-かた 乏形【名】ばふ(乏)に同じ。

はふ-がま 破風窯【名】建武年中、四代目加藤四郎左衞門の製作に係る瀨戸燒。多くは茶壺にて、器の外面高臺に至る間、釉色自ら不足にして、地質、山狀に露れ、その形、家屋の破風に似たり。

はふがみ-びたひ はふ髮額【名】髮ぎはを丸く拔きたる額つき。

はぶかる 省かる・略かる【動四自】除かれて減る。省略せられて、少くなる。

はふ-き 法規【名】㊀法律上の規定。法律。規則。のり。おきて。㊁〔法〕權利・義務に關する規定。一般的に、人の活動を制限するを內容とする準則。

はふ-ぎ 法義【名】㊀『韓非子の說疑篇に「思二小利一而忘二法義一」とあり』法則として守るべき道義。㊁法の意義。

はふ-ぎ 法儀【名】『管子の兵法篇に「制二法儀一、出二號令一」、同書の按法篇に「置レ法以自治、立レ儀以自正」とあり』法則と儀式と。おきて。のり。

は-ぶき 羽振・翥【名】羽ぶくこと。はぶり。はたたき。〔古語〕曾丹集「をし鳥の羽ぶきやたゆき冴ゆる夜の池の汀に鳴く聲のする」

は-ぶき 羽鞴【名】『羽も、皮も、共に動物の體を覆ふものなるより、通じて呼ぶなりといふ』ふいご(吹皮)に同じ。〔古語〕

天(マア)の羽鞴【句】神代にありきといふ吹皮(フイゴ)。〔古語〕紀「天羽鞴、アメノハブキ」

はふ-きん 法禁【名】おきて。はっと。法律。禁令。禁制。太平記「道譽は、法禁を輕んじて、奢侈を恣にす」

はふき-めいれい 法規命令【名】〔法〕命令の一。その內容が法規㊁を定むるものなる場合のもの、即ち法規㊁を、命令の形式にて規定するもの。法律の範圍內に於て、一般に且つ直接に、人の行動を支配するを目的とす。(行政命令に對して)

はふ-きやう 法境【名】或法律の適用せらるる區域。法域。

ばふ-きゆう 乏窮【名】きゆうばふ(窮乏)に同じ。

は-ぶく 羽振く・翥く【動四自】『ふく(振く)を見よ』鳥、翼をふるふ。はぶる。はうつ。はたたく。〔古語〕萬葉「春まけてものがなしきにさ夜ふけてはぶき鳴く鴫誰が田にか棲む」更科「池の鳥どもの、夜もすがら、聲聲羽ぶき騷ぐ音のするに」

はぶく 省く・略く【動四他】㊀のぞく。へらす。ことそぐ。省略す。源氏「人の譏あらん事ははぶき捨て、うるはしだちたまへるに」㊁はふる(放る)に同じ。〔古語〕仲文集「隣より荒れまされりといふなるはいかなる風に身をはぶくらん」

ば-ふく 馬腹【名】馬の腹部。諺「長鞭、馬腹に及ばず」鵯鷲合戰「或時は馬腹・驢胎(リヨタイ)に託し」

はふくず-の 延ふ葛の・這ふ葛の【枕】㊀葛の蔓は、遠く長く延び連りて、物の下などをくぐりゆくより、たえず(絕えず)・した(下)にかけていふ。とほながし(遠長し)・萬葉「はふ葛のいや遠長くよろづ世に絕えじと思ひて」同「はふ葛の絕えずしぬばむ大君のめしし野邊にはしめ結ふべしも」同「藤浪の咲ける春野にはふ葛の下よし戀ひば久しくもあらむ」㊁葛の蔓の物の下をくぐるさまの、物を尋ぬるに似たるより、たづぬ(尋ぬ)にかけていふ。後撰「足引の山下しげくはふ葛のたづねて戀ふるわれと知らずや」

は-ぶくら 羽ぶくら【名】やばね(矢羽)に同じ。太平記「この矢、眉間のただ中を徹りて、喉の下まで、羽ぶくら責めてぞ立ったりける」

はぶくらを飮む【句】『左思の吳都賦に「魂褫氣懾、而自踢跌者、應レ弦而飮レ羽」とあり』射たる矢、深く物に入り込む。東鑑「其矢莫二必不レ飮レ羽(ハブクラ)」

は-ぶくら 刃ぶくら【名】彫刻・裁物(タチモノ)などに用ふる刃物。刃の一方のふくらみて彎曲せるもの。

はふ-くわ 法科【名】㊀法の科條。おきて。のり。㊁法律を研究する學科。㊂はふくわだいがく(法科大學)の略。

はふ-くわ 法貨【名】〔經〕はふていくわへい(法定貨幣)の略。(末貨に對して)

はふ-ぐわい 法外【名】定法にはづること。のりをこゆること。常規の外。どはづれ。不合理。過度。方外。

はふくわ-だいがく 法科大學【名】分科大學の一。帝國大學法學部の舊稱。

はふくわだいがく-ちやう 法科大學長【名】分科大學長の一。帝國大學法學部長の舊稱。

はふ-くわん 法官【名】㊀『唐書の百官志に「推鞫得レ情、處斷平允、爲二法官之最一」とあり』司法の官。訴訟を裁判する官吏。裁判官。法士。法吏。㊁舊明法寮の職員の一。博く古今及び各國の法を研究して、長官の採擇に備へ、及び新法を議し、條例を編修し、疑讞を擬定し、生徒を敎授せしもの。大・中・少の三等に分れ、各等に正と權とあり。明治五年に設置し、同八年に明法寮と共に廢止せり。

はふ-くわん 法冠【名】判事・檢事及び辯護士の、法廷にてかぶる帽子。

はふくわん-ぶ 法官部【名】りくぐんはふくわんぶ(陸軍法官部)を見よ。

はふ-けい 法系【名】〔法〕『英 Legal genealogy』法律の系統。或國の法律と他の國の法律との間に存する系統。印度法系・支那法系・回回(フイフイ)法系・ロオマ法系・イギリス法系・ゲルマン法系・スラブ法系は、その世界古來の最も重要なるものにして、或國の法律が他の國の法律を繼受したるものなる時は、前者を母法、後者を子法といひ、或國と或國との法律が、その他の或國の法律を母法とするものなる時は、その或國と或國との法律を、姉妹法といふ。

ばふ-げつ 乏月【名】『四時纂要に「四月日二乏月一、冬穀既盡、夏麥未レ登、宜下賑二乏絕一救中飢窮上」とあり』陰曆四月の異稱。

はふ-けん 法憲【名】『後漢書の北海靜王傳に「法憲頗峻」とあり』けんぱふ(憲法)㊀に同じ。

はふ-けん 法權【名】はふわうけん(法王權)の略。

はふ-げん 法言【名】㊀『孝經に「非二先王之法言一不二敢言一」とあり』はふご(法語)㊀に同じ。㊁〔書〕やうしはふげん(楊子法言)を見よ。

はふ-げん 法源【名】〔法〕『英 Sources of law』現行法が、法規としての遵守力を現

實に有する淵源。例へば、我國の現行刑法は、主として明治四十年公布の刑法を法源とし、現行民法の主要なる法源は、同二十九年公布の民法なる類。法の淵源。

はふ-こ 這子・這兒【名】㊀這ひ得る程度に達したる赤子。ははこ。はひご。（賀古敎信七墓廻）「うぶ子這ふ子に四つ・五つ」 ㊁**おとぎばふこ**（御伽這子）に同じ。

はふ-ご 法語【名】㊀のっとるべき言語。正しき言語。法言。 ㊁法律學に用ふる語。法令上の用語。 ㊂ほふご（法語）を見よ。

法語の言【句】『論語の子罕篇に「法語之言、能無㆑從乎、改㆑之爲㆑貴」とあり』前條㊀に同じ。

はふこ-ぐさ 母子草【名】〔植〕はうこぐさ（母子草）㊀の誤。（寛永發句帳）「野に遊ぶ人のお伽かはふこ草」

はふ-ごと 法事【名】わざ。術。（八笑人）「法事といふものは、理詰な物で、第一、信仰が無くっては、敎へても、役に立たねえ」

は-ぶさ 羽總【名】つばさ（翼）に同じ。〔古語〕（曾丹集）「をし鳥の羽ぶさやたゆき冴ゆる夜の池の汀に鳴く聲のする」

は-ぶさ 羽房【名】はぶくら（羽ぶくら）に同じ。（長門本平家）「能く引きて放ちたまへば、經忠が鎧の引合（ヒキアハセ）、羽房までこそ射込うだれ」

はふ-さう 法曹【名】司法の官吏。ほっさう。法官。法吏。（徒然）「起請文（キシヤウモン）といふこと、法曹には、その沙汰なし」

はぶ-さう 波布草・蛇滅草・茳芒決明・望江南・江南豆・槐葉柄【名】〔植〕荳（マメ）科に屬する一年生の草。高さ三四尺、羽狀複葉にして、四對乃至七對の卵圓形なる小葉より成り、總葉柄に、一箇の蜜腺を具ふ。夏季、黃色にして、不完全なる蝶形の花、葉腋に開き、後、小豆に似たる莢を結ぶ。葉の採汁と種子とは、毒蟲の毒を除く効あり。琉球・臺灣に產し、薩摩・伊豆・安房等の暖地に栽培せらる。

はふさう-しえうせう 法曹至要抄【名】〔書〕ほっさうしえうせう（法曹至要抄）を見よ。

はふさう-るゐりん 法曹類林【名】〔書〕ほっさうるゐりん（法曹類林）を見よ。

はぶさ-がき 葉房垣【名】めせきがき（目塞垣）に同じ。

はふ-さんしやう 法三章【句】はふ（法）の條下を見よ。

はふ-し 法士【名】はふくわん（法官）㊀に同じ。

はふ-し 法司【名】琉球にて、國政を分掌せし最高機關。親方（オヤカタ）の位階を有する者より投票・選拔し、國王の裁可を得て任じ、慶長以後は薩摩藩、明治維新後置縣前は、政府の認可をも受けて、天・地・人の三部に分れ、藩有財產及び山川・堤防等の事と、各地頭の領地に關する事項、及び他國使節及び貿易に關する事と、藩庫の出納及び各間切（マギリ）の貢租とを分掌したり。一名、阿司多部（アシタベ）。

はふ-じ 八分字【名】はっぷん（八分）に同じ。

は-ぶし 齒節【名】はぐき（齒莖）に同じ。

齒節に出す【句】言葉に出だす。口外す。（國姓爺後日合戰）「今日の事、重ねて齒節へも出さば、命が無いぞ」

は-ぶし 羽節【名】㊀はぐき（羽莖）に同じ。（雙生隅田川）「天狗……鼻も羽節も切り落さんと思ひ設けしこの腕力」

羽節の鰭【名】【句】魚の腮のもとにある鰭。

は-ぶし 羽伏【名】同體に倒るること。（井筒業平河內通）「互に四手（ヨツ）に組み、羽ぶしに、どうとまろぶと見えし」 ㊁**きつねぶし**（狐節）に同じ。

はぶし-あへ 羽節和【名】雉の羽節を、細かに叩き、酢をかへらかしたるを、五六度したみたる上、山葵（ワサビ）を加へたる食品。

はふ-しき 法式【名】法と式と。のり。おきて。儀式。（正統記）「泰時相續ぎて、德政を先とし、法式を堅くす」

はぶし-ざけ 羽節酒【名】雉の羽節の肉と鹽とを混じて造れる酒。

はふ-じつ 法實【名】〔數〕除算又は乘算における法と實と。除數と被除數と、又、乘數と被乘數と。

はふ-じん 法人【名】〔法〕『英 Juristic person』或共同の目的を有する人の團體及び或目的に供せられたる財團の、法律上、普通の個人と同樣に、權力又は權利・義務の主體たる人格を認められたるもの。個人一箇の力とその生命とは限ありて、大規模なる目的を達するに便ならざるが故に、これを認むる必要を生ず。法律關係より、內國法人と外國法人とに、權利關係より、公法人と私法人とに、實質關係より、財團法人と社團法人とに分つ。各條を見よ。（自然人に對して）

はふじん-かく 法人格【名】〔法〕法律上の人格。

はふじん-とうきぼ 法人登記簿【名】私法人に關する事項を登記するため、各登記所に備へおく帳簿。

はふ-しやう 法相【名】しはふだいじん（司法大臣）の異稱。

はふ-じゆつ 法術【名】㊀『後漢書の馮衍傳に「燔㆓商鞅之法術㆒」、新論に「術藏㆓於內㆒、隨㆑務應㆑變、法設㆓於外㆒、適㆑時御㆑人」とあり』法律によりて國を治むる手だて。**はふか**（法家）㊁參照。 ㊁しかた。方法。方術。 ㊂『獨 Rechtkunst』法理を、實地に應用すること。例へば、訴訟の判決、法案の起草・法典の編纂など。

はふ-しよ 法書【名】法則とすべき古人の筆跡を印刷せる書物。その折本（ヲリホン）なるは、法帖といふ。手本。

はぶ-しよ 罷物所【名】『葬所（ハフリドコロ）の義』死人を葬る所。（奇異雜談集）「東寺四塚（ヨツヅカ）に行きて、罷物所（ハブシヨ）において、念佛一二百遍、高聲（カウシヤウ）に唱ふ」

はふ-せい 法制【名】法律と制度と。法律上の制度。おきて。

はふ-せい 法政【名】㊀法律と政治と。おきて。 ㊁〔法〕法律を運用する方面の政治。司法上の政治。（國政・民政に對して）

はふせい-きよく 法制局【名】㊀明治八年、太政官の內史所管の法制課廢止の後を承けて設置し、長官・法制官・書記・御用掛・寫字生の職員ありて、正院（シヤウヰン）の下命を受け、法制の起草・修正を掌りし局。翌年主事の增置あり、同十年主事・法制官・書記廢せられ、太政官の書記官・屬官・局務を掌り、翌年副長官の增置あり、同十三年廢せられたり。 ㊁內閣に屬する官廳の一。長官・參事官・書記官・屬の職員ありて、內閣總理大臣の命によりて、法律・命令の案を起草し、法律・命令の制定・改廢に就きての意見を上申し、各省大臣より閣議に提出する法律・命令の案を審查し、及び內閣總理大臣の諮詢に應じて、意見を上申することを掌る。

はふせいきよく-ちやうくわん 法制局長官【名】法制局㊁の長官。

はふせいきよく-ふくちやうくわん 法制局副長官【名】明治十一年、法制局㊀に置き、法制局長官を輔佐し、法制局長事故ある時、これが代理をなししもの。同十三年、法制局と共に廢せられたり。

はふせい-くわ 法制課【名】明治六年、太政官の內史に設けられ、法規の起草・審查を掌りし一課。同八年廢せられたり。**はふせいきよく**（法制局）㊀參照。

はふせい-くわん 法制官【名】明治八年法制局㊀に置かれ、法制の起草・修正を分任せし奏任官。定員十人、同十年廢せられたり。

はふせい-し 法制史【名】法制の沿革を敍べたる歷史。

はふせい-ぶ 法制部【名】明治十三年太政官に設けし六部の一。太政官の書記官・屬官、その職員に充てられ、主管・參議ありて、統率し、法律・條例・諸規則を起草又は改案し、職制章程を監查し、法律を說明する事を掌りし所。翌年廢せられたり。

ばふ-せう 乏少【名】とぼしく少きこと。十分ならぬこと。輕少。輕微。貧弱。（平家）「所從なども乏少なりけるが」

ばふ-ぜつ 乏絕【名】『禮記の月令篇に「季春之月、命㆓有司㆒、發㆓倉廩㆒、賜㆓貧窮㆒、賑㆓乏絕㆒」とあり』乏しくして、時時絕ゆること、又その物。

はふ-せん 法線【名】『英 Normalline』㊀〔數〕曲線又は曲面上の與へられたる點に於ける切線又は切面に、その點に於て、垂直なる直線。時としては、平面上の一點に於て、これに垂直なる直線をもいふことあり。 ㊁〔理〕入射點に於て、その面上に垂直なる、假定の線。 ㊂河川にて、平水

を流通せしむべき幅を示すため、河敷（カハシキ）中に畫ける線。地形によりて、形は異なれど、多くは適切なる曲線をなす。

はふせん-ぐひ 法線杭・法線杙【名】『英 Normallire marks』法線㊂を示すために河敷（カハシキ）中に打ちたる杭。

はふ-そく 法則【名】㊀法律と規則と。のり。おきて。さだめ。規則。法度。㊁〔哲〕『英 Law』論理學上、或現象が、いかなる事情の下に起るか、或は、それが、いかなる性質を有し、いかなる結果を生ずるか等を規定する命題、即ち現象の狀態に關する一般的表示。定律。㊂〔數〕『英 Law』定理を、文章にて述べたるもの。定律。

はふ-たつ 葉二【名】**あをばのふえ**（靑葉笛）㊀を見よ。

はぶ-たひ 羽二重【名】次條の轉訛。

はぶ-たへ 羽二重【名】㊀『たへは、**あらたへ**（荒妙）・**にぎたへ**（和妙）などの**たへ**にて、栲（タヘ）の義なるべしといふ』優良なる絹絲を用ひて織り、精練したる、一種の絹布。純白・緻密にして、薄く、滑かに、光澤多く、高尙にして、平羽二重・綾羽二重・紋羽二重等の種類あり。㊁俳優が、鬘をかぶる時、己が頭髮を蔽ふに用ふる布片。主に羽二重にて製す。

はぶたへ-かづら 羽二重鬘【名】**じびたひ**（自額）に同じ。

はぶたへ-かなきん 羽二重金巾【名】經（タテ）絲・緯（ヌキ）絲共に細絲を用ひて、極めて緻密に平織にしたる金巾。多くは無地に染色し、壓搾して、著しく光澤を出だせり。裏地などに用ふ。

はぶたへ-じま 羽二重縞【名】瓦斯絲縞に絹絲を交ぜて織りたる織物。

はぶたへ-はだ 羽二重膚【名】㊀人の膚の、羽二重の如く、きめ細やかに白く滑かなるもの。饅頭膚。㊁刀劍の地鐵（ヂガネ）の膚の、羽二重の如く滑かなるもの。

はぶたへ-もち 羽二重餅【名】搗きぬきて、上側の、羽二重の如く滑かなる餅。浮世床「最中（モナカ）・まんぢゆに羽二重餅」

はふ-ち 法治【名】豫め法律を設けおき、それによりて、すべての政治を行ふこと。

はふち-こく 法治國【名】〔法〕『英 Constitutional state』統治作用をすべて法令によりて定むべき狀態にある國。行政法規の整備せる國。憲法國。

ばぷちすと-けうくわい バプチスト敎會【名】**ばぷてすとけうくわい**（バプテスト敎會）に同じ。

ばぷちずま【名】〔基〕**ばぷてずま**を見よ。

ばぷちずむ【名】〔基〕**ばぷてずむ**を見よ。

はふ-ちやう 法廳【名】**はふわうちやう**（法王廳）の略。

はふ-ぢやう 法場・法塲【名】**けいぢやう**（刑場）に同じ。

はふ-づくり 破風造・搏風造【名】屋根の作り方の一。棟を山形に造り、左右の端に破風を設けたるもの。

はふ-つた-の 延ふ蔦の・這ふ蔦の【枕】延び行く蔦の末は、こなたかなたに分るとの意にて、**おのがむきむき**（己が向向）・**わかる**（別る）にかけていふ。萬葉「はふ蔦のおのがむきむき天雲の別れしゆけば」和「はふ蔦の別れしくれば肝向ふ心をいたみ」

はふ-てい 法程【名】『漢書の賈誼傳に「立㆑綱陳㆑紀、輕重同得、後可㆔以爲㆓萬世法程㆒」とあり』**はふしき**（法式）に同じ。

はふ-てい 法廷【名】裁判官が、その裁判を行ふ場所。しらす。裁判廷。霈廷。

はふていに立つ【句】原告又は被告となりて、裁判を受く。

はふ-てい 法定【名】〔法〕法令にて規定せること、又その事物。「法定の要素」

法定の推定家督相續人【句】〔法〕**はふていすゐていかとくさうぞくにん**（法定推定家督相續人）に同じ。

はふてい-か 法定價【名】〔法〕㊀次條の略。㊁**がくめんかかく**（額面價格）に同じ。

はふてい-かかく 法定價格【名】〔法〕法律によりて定められたる價格。協定價格。

はふてい-かとくさうぞくにん 法定家督相續人【名】〔法〕法律の規定によりて、當然家督相續人となるべきもの。即ち推定家督相續人と指定家督相續人又は第一の選定家督相續人なる場合に家督相續人たるべき、被相續人の父・母もしくは最近親の直系尊屬との總稱。前者は、本家相續の必要ある場合以外、原則として、他家に入り、又は一家を創立すること能はず、又、相續の拋棄をもなすこと能はざれども、後者には、かかる制限なし。（指定家督相續人・選定家督相續人に對して）

はふてい-きかん 法定期間【名】〔法〕權利の行使に就きて、法律上限定せる期間。

はふてい-くわじつ 法定果實【名】〔法〕『獨 Gesetzliche Frucht』物の使用の對價として受くべき金錢、又はその他の物。例へば、利息・地代などの類。（天然果實に對して）

はふてい-くわへい 法定貨幣【名】〔經〕『英 Legal tender』國法によりて强制通用力を認めたる貨幣。我國現行の貨幣法にては、金貨は、二十圓・十圓・五圓の三種、銀貨は、五十錢・二十錢・十錢の三種、白銅貨は、十錢・五錢の二種、靑銅貨は一錢の一種（二錢・半錢も、當分通用）を、これと定め、金貨は無制限に强制通用力を有すれども、銀貨は十圓、白銅貨・靑銅貨の二種は一圓までの强制通用力あるものと定む。法貨。强制通貨。法律上の貨幣。

はふてい-けい 法定刑【名】〔法〕法律が各本條に於て、抽象的に規定せる刑。（宣告刑に對して）

はふてい-けつぞく 法定血族【名】〔法〕**じゆんけつぞく**（準血族）に同じ。

はふてい-こうけんにん 法定後見人【名】〔法〕後見人の一。法律の規定によりて、當然後見人たるべきもの。未成年者につきては、遺言に依る後見人なき場合には、戶主が法定後見人にして、禁治產者につきては、配偶者なき場合には、親權を行ふ父又は母、配偶者ある場合には、その配偶者、又その配偶者がその任務を辭するか、後見人たる資格に缺くるかの場合、もしくは禁治產者たる夫が未成年者なる場合には、親權を行ふ父又は母が、法定後見人となる。又、未成年者・禁治產者の何れの場合に於ても、以上の規定に依る後見人なき場合には、戶主が法定後見人たるべきものとす。（指定後見人に對して）

はふてい-ざいさんせい 法定財產制【名】〔法〕夫婦財產制の一。夫婦が、婚姻の屆出前に別段の契約をなさざる場合には、その婚姻の繼續中、當然に適用すべきものとして、法律の定めたるもの。我國にては、妻又は入夫が婚姻前より有せる財產、及び婚姻中自己の名に於て得たる財產は、その特有財產とし、夫婦の何れに屬するか分明ならざる財產は、夫又は女戶主の財產と推定し、夫又は女戶主は、婚姻より生ずる一切の費用を負擔し、その配偶者の財產の使用・收益をなす權利を有し、又、夫は妻（女戶主をも包含す）の財產の管理權を有するを原則とし、妻は日常家事につきては、夫の代理人と見做さるるものとす。（契約財產制に對して）

はふてい-じゆんびきん 法定準備金【名】〔法〕株式會社が、法律の强制によりて、必ず積み立てざるべからざる準備金。我國にては、その資本の四分の一に達するまでは、利益を配當するごとに、その利益の二十分一を、又、額面以上の價格を以て、株式を發行したる場合には、その額面を超ゆる金額は、上記の額に達するまで、準備金中に組み入るべきものと定む。强制準備金。（任意準備金に對して）

はふてい-すゐていかとくさうぞくにん 法定推定家督相續人【名】〔法〕**すゐていさうぞくにん**（推定相續人）に同じ。

はふてい-だいり 法定代理【名】〔法〕『獨 Gesetzliche Stellvertretung』代理の一。本人の意思に基づかず、法律上當然生ずるもの。例へば、親權者・後見人、裁判所の選任せる不在者の財產管理人、相續人の曠缺せる相續財產管理人、法人の假理事、その特別代理人など。又、法人の理事、株式會社の取締役も、法律上、これと同一の地位を有す。法律上代理。（任意代理に對して）

はふてい-だいりにん 法定代理人【名】〔法〕『獨 Gesetzliches Vertreter』代理人の一。法律の規定によりて、當然代理權を

有するもの。法律上代理人。前條參照。（任意代理人に對して）

はふてい-だいゐ 法定代位【名】〔法〕『獨 Gesetzliche Stervertretung』代位の一。第三者が、債務者の債務を辨濟するにより、債權者の承諾を要せずして、當然代位するもの。この代位をなし得る第三者は、保證人・物上保證人・擔保不動產の第三取得者の如く、その辨濟に就きて、正當の利益を有する者に限る。法律上の代位辨濟。（任意代位に對して）

はふてい-ちえき 法定地役【名】〔法〕『佛 Servitude legale』法律上當然存する地役。即ち疆界・牆壁若しくは、建物を築造・修理するに必要なる範圍內にて、隣地を使用し、又は圍繞地を通行する類。我國舊民法には、この語を使用せしが、現行の民法にては、所有權の限界といふ語を用ふ。

はふてい-ちか 法定地價【名】地租を課する標準として、土地臺帳に記載する土地の價格。收益を實查し、これを、當時の金利に還元して算出するを例とす。（賣買地價に對して）

はふてい-ちはふ 法定地法【名】〔法〕『羅 Lex fori』訴訟の提起せられたる裁判所の屬する國の法律。訴訟地法。（本國法・事實發生地法に對して）

はふていちはふ-しゆぎ 法定地法主義【名】〔法〕法定地法を一定の涉外的法律事件の準據法とする、國際私法上の主義。例へば、我國現行の法例が、禁治產の宣告の效力に就きて、この主義を採用せる類。訴訟地法主義。（本國法主義・事實發生地法主義に對して）

はふてい-ちゆうだん 法定中斷【名】〔法〕『獨 Gesetzliche Unterbrechung』時效中斷の一。請求・差押・假差押・假處分又は承認によりて生ずるもの。

はふてい-つみたてきん 法定積立金【名】法律の强制によりてなす積立金。法定準備金。

はふてい-ふやうれう 法定扶養料【名】〔法〕法律の規定によりて、扶養權利者の當然受くべき扶養料。法律上の養料。

はふてい-へいか 法定平價【名】〔經〕『英 Mint par of exchange』各國の貨幣法によりて定れる貨幣の品位・量目を對照して得たる、一國の貨幣の、他國の貨幣に對する相當價格。即ち外國の本位貨幣に含まるる地金の分量に相當する、自國本位貨幣の價格、又は自國の本位貨幣に含まるる地金の分量に對する、外國本位貨幣の價格。公定等價。

はふてい-りし 法定利子【名】〔法〕次條「に同じ。

はふてい-りそく 法定利息【名】〔法〕『英 Legal interest』法令によりて、利率を定めたる利息。當事者又は法律が利率を定めざりし場合には、これに依りて計算す。例へば、我國の民法が、利息を生ずべき債權の利率を年五分と定め、商法が、商行爲によりて生じたる債務の利子を年六分と定めたる類。法定利子。制限利子。（約定利息に對して）

はふてい-りりつ 法定利率【名】〔法〕法律によりて定められたる利率。當事者又は法律が、利率を定めざりし場合には、これに依りて計算す。（約定利率に對して）

はふてい-ゐさんさうぞくにん 法定遺產相續人【名】〔法〕ゐさんさうぞくにん（遺產相續人）を見よ。

はふ-でう 法條【名】㊀おきて。のり。法則。法例。科條。㊁法律の條項。法令の條文。「法條の規定する所」

はふでう-きやうがふ 法條競合【名】〔法〕一箇の行爲に關して、數箇の刑罰法規の競存すること。最も重刑を科定せる罪名を規定する法條を適用す。

はぶて-こがら【名】〔植〕㊀おほけたで（大毛蓼）に同じ。㊁きささげ（木角豆）に同じ。

ばぷてすと-けうくわい バプテスト教會（英 Baptist church）【名】〔基〕しんれいけうくわい（浸禮教會）に同じ。

ばぷてずま（西 Baptismo の訛）【名】〔基〕サクラメントの一。基督教會に入り、恩惠の契約にあづかり、基督に屬する者を表する禮典。或は水を首に灑ぎ、或は全身を水に沈むるなど、宗派によりて相違あり。前者の宗派にては、洗禮と譯し、後者の宗派にては、浸禮と譯すれど、罪を淨むとの意に至りては、相同じ。

バプテズマの約翰(ヨハネ)（英 John the Baptist）【句】〔人〕『新約全書の路加(ルカ)傳・約翰傳・馬太(マタイ)傳に見ゆ』耶蘇基督にバプテズマを施したる、ヨハネといふ人。世を避けて、死海の邊なる寂寞たる猶太(ユダヤ)の曠原に、禁慾的生活をなし、當時の猶太の世相に憤慨して、一大革新を思ひ立ち、「天國は近づけり。悔い改めよ」と叫びて（世に、「野に叫ぶ人の聲」といふ）、公然悔改の教を宣べ、その教に從ひて、新宗教に入る者には、當時、カルデヤ（Caldea）及びその附近の諸國に於て、宗教上の儀式たりしバプテズマを施し、なほ、進みて、ヨルダン（Jordan）川の邊に來りし時、ガラリヤ（Galilea）に在りし耶蘇も、來りて、バプテズマを受け、凡そ三十歲にして、公然、宗教上の新主義（即ち耶蘇教）を唱道し始めたり。

ばぷてずむ（英 Baptism）【名】〔基〕ばぷてずまに同じ。

はふ-でふ 法帖【名】はふしよ（法書）を見「よ。

はふ-てん 法典【名】㊀法式と典則と。おきて。さだめ。㊁〔法〕『英 Code』同一の種類に屬する法律を、包括的に集成したるもの。

はふ-ど 法度【名】法と度と。法則と制度と。はっと。おきて。さだめ。禁制。「法度を失ふ」

はふ-に 白粉【名】『白粉(ハフ)土(ニ)の義といふ』おしろい（白粉）に同じ。〔古語〕和名「白粉卅斤、俗云二波布邇一」榮花「あやしきさましたる妻(メ)どもに、黑き搔練(カイネリ)著せて、はふにといふもの塗りつけて」

はふ-はふ 這ふ這ふ【副】這ひながら。這ふやうにして。辛うじて歩みて。賴政集「翁さびはふはふのぼる位山雲ふむほどにいかでなるらん」盛衰記「池の中より這ひ出でて、這ふ這ふ京へのぼりにけり」

這這の體(テイ)【句】恐縮のあまりに、這はんばかりの樣子。

はふ-びたひ 破風額・搏風額【名】破風のごとき形に造れる額つき。

はふ-ふく 法服【名】㊀規定せられたる正式の服。制服。㊁判事・檢事及び辯護士の、法廷にて著る規定の服。㊂ほふふく（法服）を見よ。

はふ-ぶん 法文【名】法律の文章。

はふ-ま 法馬【名】ふんどう（分銅）㊀に同「じ。

はふ-まう 法網【名】罪ある者が、法律の制裁を免るる能はざるを、魚・鳥などが張りたる網を潛り得ざるに譬へていふ語。法律の網。

法網を潛(クグ)る【句】法律に觸れぬやうにして、巧みに罪を犯す。

はふ-まうし 法申【名】『形(カタ)の如く申して、その實なきよりいふ』外記(ゲキ)の政始に於ける申文の儀に際して、申文なき時、外記、微音に、「司の申せる政申したまふ」といふを例とせしこと。北山抄「無二申文一者、先外記法申、上卿無レ答」

はふ-まめ-の 這ふ豆の・延ふ豆の【枕】はふ豆の蔓といふ意より、からまるにかけていふ。萬葉「道のべの茨(ウマラ)が末(ウレ)にはふ豆のからまる君を別れかゆかむ」

ば-ふみ 馬蹈【名】堤防の上部の、人馬の通路たる處。ばぶ。

はふ-む 法務【名】法律上の事務。法制に關するつとめ。ほふむ（法務）參照。

はふむ-ぎやうせい 法務行政【名】しはふぎやうせい（司法行政）に同じ。

はふむ-きよく 法務局【名】㊀司法省の舊一部局。今の民事局と刑事局との分離以前の稱。㊁陸軍省の一局。軍事司法、理事・錄事・監獄員の人事及び補充、監獄・特赦・罪人引渡に關する事項を掌るもの。

ば-ふん 馬糞【名】うまのくそ。まぐそ。

ば-ぶんかう 馬文耕【名】〔人〕ばばぶんかう（馬場文耕）に同じ。

ば-ふんし 馬糞紙【名】㊀上包又は裏打紙に用ふる、下等なる唐紙。運歩色葉集「馬糞紙、バフンシ」㊁生石灰(キバイシ)にて蒸煮せる麥稈の粗き纖維を材としたる、黑

ばみたる黄色の紙。厚けれども脆弱、本の表紙又は紙箱などの心（シン）に用ふ。ぼおるがみ。まぐそがみ。

ばふん-せき 馬糞石【名】**うまのたま**（馬玉）に同じ。

ばふん-つかみ 馬糞攫【名】〔動〕鷹の一種なりといふ鳥。馬糞鷹（マグソダカ）。甲陽軍鑑「親類の出頭に自慢して、よき人を譏り、己が身にかけては惡しくしなす人をば、馬糞つかみと云ふ鳥に譬へたり。この馬糞つかみは、鷹の自然によりきるを笑ひ、又、鷹の鳥取るを見ても笑ひ、よりをきるは勿體なし、あの樣に取るは惡しき取りやうと批判仕り、己が、いで取らんというて、遙かの野へ舞ひおり、鳥の立ちたる跡に馬糞のあれば、それをやうやう攫むと申し傳へたれば、手柄の侍を譏る人の、三十・四十に成るまでも、何の手柄もなき人を、馬糞つかみ侍とは申しならはすなり」

ばふんつかみ-ざむらひ 馬糞攫侍【名】手柄を立つる腕前なき侍。前條參照。

はふ-や【名】埴生（ハニフ）の屋か。〔古語〕夫木「雪深き谷のはふやに朝ぼらけ明けぞわづらふ柴のくみ垣」

はふ-らう 琺瑯【名】〔化〕『英 Enamel』無色の硝子に、金屬の酸化物を熔融して得る、不透明なる硝子樣物質。無色の硝子としては、鉛硝子最も良好なれども、鉛の含有を不便とする場合には、曹達（ソオダ）硝子又は加里硝子を用ひ、金屬の酸化物として、酸化錫最も適當し、その他、亞砒酸・燐酸石灰・水晶石・螢石等も使用し、色は、白きもあり、金屬酸化物の混合によりて、著色せるもあり。えなめる。

はふらう-しつ 琺瑯質【名】〔醫〕『英 Enamel』齒冠の外面全部を、帽狀に被ふもの。平行に排列する微細の六角柱より成り、人體中最も硬く、よく食物に抵抗し、外物の侵蝕を防ぐ。

はふらう-てっき 琺瑯鐵器【名】琺瑯を、鐵板又は鑄鐵に施したる日用器類。

はふらう-なべ 琺瑯鍋【名】**せとひきなべ**（瀨戸引鍋）に同じ。

はふらう-まく 琺瑯膜【名】〔醫〕『英 Enamel cuticle』角質に變化して、琺瑯質の表面を被ふ薄き膜。内外の二層より成る。

はふらう-りん 琺瑯鱗【名】〔動〕**ししつりん**（齒質鱗）に同じ。

はふらかす 放かす【動四他】**はふらす**（放らす）に同じ。〔古語〕落窪「常に著せ奉れど、はふらかしたまふにや、あくばかりも、え著つきたまはぬ」源氏「わが君を、さる物の中にはふらかしたてまつりては」

は-ぶらし 齒ブラシ【名】『英 Tooth-brush』**はみがきやうじ**（齒磨楊枝）を見よ。

はふらす 放す【動四他】放（ハフ）れしむ。さすらへしむ。打散らす。捨てやる。はふらかす。はぶく。〔古語〕萬葉「つるぎ太刀とぎし心を天雲に思ひはふらし」古今「身は捨てつ心をだにもはふらさじ終にはいかがなると知るべく」

はふり 祝【名】㊀『禍を放（ハフ）る者の義。一說に、神に近侍する者なるによりて、侍在（ハフリ）の義と。又、袖を振りて舞ひ、神意を慰むるより、羽振の義ともいふ』神社にて、神に仕ふるを職とする人。神主・禰宜（ネギ）などをも總稱すれど、普通は、禰宜の次位にありて、專ら祭祀の事に與る人。大祝・權祝・擬祝・副祝・一祝・二祝・三祝・四祝などの稱あり。かんぬし。はふりこ。はふりびと。はふりと。はふりべ。神官。〔祝部〕〔古語〕紀「熱田祝部、アツタノハフリ」萬葉「みぬさ取り三輪の祝が齋（イハ）ふ杉原たきぎきりほとほとしくて手斧取らえぬ」㊁姓（カバネ）の一。

はふり 祝部【名】姓氏の一。神別に屬す。賀茂（カモ）㊇の支族。賀茂賀氏五世の孫宇志丸、天智天皇の御代にこの姓を賜はりしに起る。日枝（ヒエ）神社の祝の祖なり。

はふり 葬【名】『**はふる**（葬る）の假體言』はふむること。葬送。〔古語〕紀「哀葬、ミハフリ」伊勢「そのみこ失せたまひて、御はふりの夜」

はふり【名】『**はふりかたぎぬ**（はふり肩衣）を見よ』**はおり**（羽織）に同じ。

はふ-り 法理【名】法律の原理。

はふ-り 法吏【名】司法の官吏。裁判官。法官。

は-ぶり 羽振【名】㊀羽ぶること。はぶき。はたたき。一說に、羽觸（ハフリ）の義にて、鳥、羽にて、他物に觸ることなりと。〔翥〕〔古語〕萬葉「はろばろに鳴くほととぎす立潜（クク）と羽觸（ハフリ）にちらす藤浪の」㊁羽の樣子。羽のさま。運步色葉集「羽振。ハブリ、鷹、羽樣」㊂幅が利く程度。權勢。新永代藏「羽振のよい方にのみ附き從ひ」

は-ぶり 葉振【名】葉のさま。葉形（エフケイ）。はなみ。

はふり-がく 法理學【名】『明治十四年、法學博士穗積陳重の、この學科を講ぜし時の命名』法理を研究する學問。法律哲學。法論。**はふりつがく**（法律學）參照。

はふり-かたぎぬ はふり肩衣【名】『**はふり**を見よ』昔、本願寺宗門の俗人が、佛前・牌前に禮拜する時にはおりし肩衣。打掛肩衣（ウチカケカタギヌ）の遺風なり。

はふり-かたびら 葬帷【名】送葬の時、棺に覆ふ帷子。〔古語〕字鏡「㡉、葬覆レ棺也、帽同、皮不利帷也」同「帽、皮不利加太比良」

はふり-こ 祝子【名】**はふり**（祝）に同じ。拾遺「はふり子が齋（イハ）ふ社のもみぢ葉も標（シメ）をば越えて散るといふものを」謠曲三輪「ただ祝子が著（チャク）すなる烏帽子・狩衣、もすその上に掛け」

はふり-だす 抛出す【動四他】㊀はふりて、外へ出だす。投げだす。うちすつ。ほりだす。八笑人「足でもすくって、はふり出して」㊁はふるやうに、勢烈しく差出し又はつまみ出す。㊂容赦せずに除外す。はねだす。馘首す。免職す。㊃はふることを爲しはじむ。

はふ-りつ 法律【名】㊀法と律と。國法と刑律と。のり。おきて。㊁統治者の制定又は認定したる規則。㊂〔法〕帝國議會の協贊と天皇の裁可とを經て、制定・公布したる規則。**めいれい**（命令）㊃參照。

法律に代るべき勅令【句】〔法〕**きんきふちよくれい**（緊急勅令）に同じ。

法律に代るべき命令【句】〔法〕前條に同じ。

法律の錯誤【句】〔法〕實在せる法則を認識せざるか、又は實在せざる法則を幻覺すること。

法律の停止【句】〔法〕法律の執行を停止すること。

法律の反射作用【句】〔法〕法律が、直接に臣民に權利を與ふるにあらざれども、間接に利益を與ふること。例へば、穀物輸入税の賦課によりて、農民が利益を受くる類。

法律の免除【句】〔法〕法律の適用を免除すること。

はふりつ-あん 法律案【名】〔法〕法律の草案。即ち政府もしくは議院より提出して、議決の手續を經、上奏するまでのもの。天皇の裁可によりて、始めて法律となる。**はつあんけん**（發案權）參照。

はふりつ-えうけん 法律要件【名】〔法〕『獨 Juristischer Tatbestand』**はふりつじじつ**（法律事實）を見よ。

はふりつ-か 法律家【名】法律に精通せる人。法律に明かなる人。法律者。

はふりつ-かうゐ 法律行爲【名】〔法〕『獨 Rechtsgeschäft』私法上の效力を生ぜしむることを目的とする意思表示。即ち賣買・贈與・貸借・組合等の諸種の契約及び遺言・寄付行爲・取消・解除等の諸種の單獨行爲を包含す。權利行爲。

はふりつ-かうゐのうりよく 法律行爲能力【名】〔法〕『獨 Geschäftsfähigkeit』行爲能力の一。自己の意思を以て、法律行爲をなし、自己の欲したる法律上の效力を生ぜしめ得る能力。能力。

はふりつ-がく 法律學【名】『英 Science of law』法律を研究する學問。法學通論・法理學等の一般法律學と、憲法學・民法學・刑法學・國際法學等の特別法律學とあり。法學。

はふりつ-がくし 法律學士【名】司法省所轄法學校正則科の卒業生、東京法學校の卒業生、又は明法寮生徒にて、明治十七年七月一日の當時、現に在官し、或は代言人たり得べき學力ある者に授けし稱號。

はふり-つく 抛付く【動下二他】**はふる**（抛る）㊀を强めていふ語。

はふりつ-がくしや 法律學者【名】法律學に通ぜる人。法律家。

はふりつ-くわんかつ 法律管轄【名】〔法〕法令がその效力を及すべき範圍。

はふりつ-くわんけい 法律關係【名】〔法〕『獨 Rechtsverhältnis』人と人と又は人と物との、法定の關係。

はうりつ-じじつ 法律事實【名】〔法〕『獨 Juristische Tatsache』法律上の効果發生の要件。人の行爲なることあり、又、人の行爲以外の事實なることあり。法律要件ともいへど、又、數箇の事實が結合して、一の法律上の効果發生の要件となる場合には、その各箇の事實を法律事實といひ、その全體を法律要件といふことあり。

はふりつ-しや 法律者【名】はふりつか(法律家)に同じ。

はふりつじやう-だいり 法律上代理【名】〔法〕はふていだいり(法定代理)に同じ。(任意上代理に對して)

はうりつじやう-だいりにん 法律上代理人【名】〔法〕はふていだいりにん(法定代理人)に同じ。(任意上代理人に對して)

はうりつ-しよ 法律書【名】㊀法律に關する書物。㊁諸種の法律・命令を蒐錄したる書物。

はふりつ-てき 法律的【貌】法律に關するさま。

はふりつてき-おうはう-しゆぎ 法律的應報主義【名】〔法〕刑罰は一種の應報なりとは認むれども、神意又は道德の命令に基づく應報に非ずして、法律の命ずる應報なりとする主義。

はふりつ-てつがく 法律哲學【名】『英 Law philosophy』はふりがく(法理學)に同じ。

はふりつ-とりしらべ-ゐゐんくわい 法律取調委員會【名】司法大臣の監督の下に、その指定したる民事・刑事に關する法律を調査・審議する委員會。

はふり-つ-もの 葬物【名】はふりもの(葬物)に同じ。〔古語〕紀「喪具、ハフリツモノ」

はふりつ-や 法律屋【名】はふりつか(法律家)を卑しめていふ語。

はふり-と 祝人【名】『祝人(ハフリビト)の略』はふり(祝)に同じ。〔古語〕

はふり-べ 祝部【名】㊀前條に同じ。〔古語〕㊁伊勢内外兩宮の攝社・末社・所管社に置かれ、神社の守衛、その御匙・御鑰の保管及び掃除の監督を掌る職。大正二年の設置に係る。

はふり-め 祝女【名】かんなぎ。みこ。〔古語〕

はふり-もの 葬物【名】葬(ハフリ)に必要なる財物。はふりつもの。葬具。〔古語〕紀「賻物、ハフリモノ」

はふ-りよく 法力【名】法のちから。法律の威力。法制の効力。

はふり-わざ 葬業【名】葬(ハフリ)に關するわざ。葬事(サウジ)。〔古語〕紀「視喪者、ハフリワザノモノ」

はふる 放る【動四他】㊀よりどころ無からしむ。さすらへしむ。捨て去る。追放す。はふらす。はふらかす。はぶく。〔古語〕記「大君を島にはふらば船餘(フナアマリ)い歸り來むぞ」續紀「みまし大臣(オホオミ)の家の内の子どもをもはふりたまはず、失ひたまはず」㊁こまかに切る。切散らす。屠(ホフ)る。〔古語〕記「十拳劍(トツカツルギ)を拔きて、その蛇(ヲロチ)を斬りはふりたまへば」

はふる 葬る【動四他】㊀『前條の語の轉義、即ち死者を、住み馴れたる家より、野山へ放(ハフ)る義』はうむる(葬る)に同じ。〔古語〕萬葉「かむはふりはふりいませてあさもよし城上(キヘ)の宮を常宮(トコミヤ)と定めまつりて」宇治「泣く泣くはふりてけり」㊁火葬にす。茶毘(ダビ)に付す。〔古語〕著聞「薪を積みて、はふりて、上に、石の卒都婆を立てたりけり」今物語「はふりけるに、その火に、この女飛び入りて」

はふる 拋る【動四自】『前條の語と同じく、はふる(放る)の轉義。ホウルと發音す』㊀投げやる。なげうつ。投ぐ。投ず。「石をはふる」㊁うちすつ。すておく。拋棄す。放擲す。

はふる 放る【動下二自】よりどころ無くなる。さすらふ。うろつく。おちぶる。流離す。〔古語〕蜻蛉「今ははふれ失せにけんとこそ見しか。かやうなるまで見ざりける事よ」源氏「かかる道の空にてはふれぬべきにやあらん。更にえ行き著くまじき心ちなんする」

はふる 溢る【動下二自】あふる(溢る)に同じ。〔古語〕紀「溢、ハフレタリ」

はふる 溢る【動四自】溢るるほどに滿ちひろがる。一説に、遠く離る。〔古語〕萬葉「あが面(オモ)の忘れむしだは國はふり嶺(ネ)に立つ雲を見つつしぬばせ」

は-ぶる 羽振る・翥る【動四自】㊀鳥、羽を振る。はぶく。はうつ。はたたく。萬葉「うち羽振り雞(カケ)は鳴けども斯くばかり降りしく雪に君いまさめやも」字鏡「翥擧也。翔也。波布利伊奴」㊁うごく。ゆらめく。一説に、羽觸るの義にて、鳥、羽にて、他の物に觸るるなりと。〔古語〕萬葉「か青なる玉藻沖つ藻朝羽振る風こそ寄せめ夕羽振る浪こそ來寄れ」

は-ぶれ 羽觸【名】鳥の羽の、物に觸るること。治承二年別雷社歌合「心ありて花には移れ鶯の羽ぶれに散るも惜しき匂を」

はふ-れい 法令【名】㊀『戰國策の秦國の條に「商君治秦、法令至行」とあり』のり。おきて。さだめ。㊁〔法〕明治二十九年三月以前に於ける律令。㊂〔法〕法律㊂と命令㊃と。立憲國にては、この二者、互にその制定の形式を異にす。各條を見よ。

はふ-れい 法例【名】㊀法律上のきまり。謠曲(正義世守)「もとより定る法例には、一人を討たば、一人を切り」㊁法律の全般又は或種の法律(刑法・民法等)に通じて適用すべき規則。法律の全般に關するものは、明治三十一年の公布に係り、時に關する法律の效力(公布の日より滿二十日を經て、全國一般に施行するを原則とする等)、慣習の效力(法令に規定なき慣習法は、公の秩序又は善良の風俗に反せざる限に於て、效力を認むること)、人及び所に關する法律の效力(人の國籍・住所・居所の所在、物の所在地又は法律行爲の行爲地の内國たると外國たるとにより、その準據法となるべき法律を規定し、よりて以て内外法律の適用すべき區域を定めんとするもの)の三種の事項を規定せり。

はふれい-きくわん 法令機關【名】〔法〕直接に憲法の條規に基づかず、單に法令の規定によりて設定せる統治機關。即ち行政官廳などの類。(憲法機關に對して)

はふれい-きようどうじかう 法令共同事項【名】〔法〕じいうりつぱふじかう(自由立法事項)に同じ。

はふれい-ぜんしよ 法令全書【名】印刷局にて現行の成文法を蒐集・印刷したる書籍。

はふれいぜんしよ-へんさんがかり 法令全書編纂掛【名】明治十八年三月、太政官の記錄課に置かれ、法令全書の編纂に從事せし職員。同年六月文書局に屬し、同年十二月文書局と共に廢せられたり。

はふれい-わた 法令綿【名】德川時代に、大和國奈良の法令といふ地、その他、伊勢國等より江戸に送り來りし綿。もとは奈良の法令のに限りたる名なりき。うちわた。芳禮綿。

はふれ-がまし 放がまし【形二】はふれんとするさまなり。はふるるやうなり。薫集類抄「荒くしたるは、みめわろくて、はふれがまし」

はふ-ろん 法論【名】㊀〔法〕はふりがく(法理學)に同じ。㊁ほふろん(法論)を見よ。

はふ-わう 法王【名】ろおまはふわう(羅馬法王)に同じ。

はふわう-けん 法王權【名】羅馬法王の權力。法權。

はふわう-ちやう 法王廳【名】ろおまはふわうちやう(羅馬法王廳)に同じ。

はふ-ゐき 法域【名】はふきやう(法境)に同じ。

はへ 蠅【名】〔動〕雙翅類に屬する昆蟲。頭は球狀にして自由に動き、頸部は甚だ細く、觸角は三節より成り、普通頭部より短く、その第一節は頗る小く、第三節は膨大し、これに一箇の長刺、又は角片と稱する附屬物あるを常とす。大なる複眼には、三箇の單眼あり。口は口吻狀にて、吸收と刺螫とに適し、腹部は五節乃至八節より成る。幼蟲には、卵生と胎生とあり。種類多く、その最も普通にして、室内

に來るものは、家蠅(ハイヘ)といふ。和名「蠅、波倍」枕「はへこそ、にくき物の內に入れつべけれ」

蠅が燈心を使ふやう【句】力量の無き形容。〔諺語〕

蠅が飛べば、虻(アブ)も飛ぶ【句】妄に他の動作に倣ふ譬。雁が立てば鳩も立つ。〔諺語〕

蠅同前【句】「蠅のやう」に同じ。

蠅の朝起【句】「蚤の夜詰(ヨツメ)、蠅の朝起」を見よ。

蠅の子【句】〔動〕うじ(蛆)に同じ。和名「蛆、波閉乃古、蠅子也。說文云、蠅乳肉中也」

蠅の力も無い【句】僅かなる力も無き譬。〔諺語〕

蠅の手を擦(ス)るやう【句】左右の掌を擦り合はせて、ひたすら賴み入るる形容。〔諺語〕

蠅のやう【句】取るに足らざる人物の譬。はへむし(蠅蟲)㊁・はへむしや(蠅武者)參照。曾我虎が磨「蠅のやうな奴等に蠅取らせ」

蠅若衆(ワカシユ)に蚊坊主【句】若衆の頭には、油など塗るがために、蠅がたかり、坊主の頭には、毛髮なきがために、螫すに都合よしとて、蚊がたかる。〔諺語〕

人の蠅を逐ふより、己の蠅を逐へ【句】他人の事にかまふよりは、自己の身を省みよ。〔諺語〕

我が頭(カシラ)の蠅を逐へ【句】前條に同じ。〔諺語〕

我が身の蠅を逐へ【句】前條に同じ。〔諺語〕

はへ 樬【名】木材を樬積(ハヘヅミ)にすること、又その積み方にせる木材。和漢三才圖會「樬(ハヘ)、凡材木及米俵積層、皆曰レ樬」

はへ【名】礒に差し出でたる石。〔淡路國の方言〕

ばべ【名】〔植〕『今芽(イマメ)の略轉』いまめがし(今芽樫)に同じ。

はへ-いら-ず 蠅不入【名】はへちやう(蠅帳)に同じ。

はへ-うち 蠅打【名】蠅を打ちて殺すに用ふる具。はへとり。はへたたき。續猿蓑(河瓢)「蠅打に馴るる雀の子飼かな」柳樽「蠅打で搔き寄せて取る關手形」

ばべ-がし ばべ樫【名】〔植〕『ばべを見よ』いまめがし(今芽樫)に同じ。

はへ-がしら 蠅頭【名】㊀蠅のあたま。㊁黑みを殘して羽どりたる矢羽。〔弓工の語〕㊂いぼゆひ(疣結)に同じ。㊃擬餌鉤(ギジコウ)の一種。蠅の形に摸造せるものを、釣針の先端に取り附けて、魚の目を欺くやうにせるもの。

は-へき 破壁【名】やぶれくづれたるかべ。太平記「破壁、風寒くして」

は-へき 頗僻【名】えこ。かたひいき。偏頗。

ば-へき 馬癖【名】『晉書の杜預傳に「濟有二馬癖、嶠有二錢癖一」とあり。濟は王濟、嶠は和嶠をいふ』馬を好む癖。根南志具佐後篇「無くて七癖といふ諺あり。王濟(ワウセイ)が馬癖、和嶠(クワケウ)が財癖」

はへ-ぎ 榱【名】『棟より傍へ延(ハ)へ出したる木の義』たるき(垂木)に同じ。〔古語〕和名「榱、太流岐。楊氏云、波閇岐。在二檼旁一下垂也。兼名苑云、一名橑、一名椽」

はへ-ぎらひ 蠅嫌【名】蠅を嫌ふこと、又その性質の人。俳諧古選(波光)「白梅やさればその事蠅嫌」

はへ-ころし 蠅殺【名】〔植〕㊀いしもちさう(石持草)に同じ。㊁次條に同じ。

はへころし-だけ 蠅殺茸【名】〔植〕はへとりだけ(蠅取茸)に同じ。

はへ-ざむらひ 蠅侍【名】はへむしや(蠅武者)に同じ。川中島合戰「刀汚(カタナヨゴシ)の蠅侍」

ばべ-しひ ばべ椎【名】〔植〕ばべがし(ばべ樫)に同じ。

はへ-すべり 蠅滑【名】『蠅がとまらんとすれど、すべりて、とまり得ずとていふ』はげ頭の形容。きんかんあたま。電氣燈。見聞集「頭に毛のなきをば、年寄のきんかつぶり・はへすべりなどと、あだ名をいうて、若き人たち笑ふ」

はへすべり-どまり 蠅滑止【名】『すべり落ちたる蠅が辛うじてとまり得るほどの毛髮はある義』頭の後面などに、少しの毛髮はあれど、他は、悉く禿げてあること、又その頭。

はへ-たけ 蠅茸【名】〔植〕はへとりだけ(蠅取茸)に同じ。

はへ-たたき 蠅敲【名】はへうち(蠅打)に同じ。

はへ-ぢごく 蠅地獄【名】〔植〕はへとりぐさ(蠅取草)に同じ。

はへ-ちやう 蠅帳【名】木にて、小き廚子のごとき形に造り、四面に、紗又は金網を張り、夏季、內に食品をれ入おきて、蠅を防ぎ、且つ食品の腐敗を防ぐ道具。ねずみいらず。はへいらず。八笑人「ちよいと、何ぞ飮める物をな。……、その內、蠅帳の物で、蟲を押へて居よう」

は-べつ 派別【名】㊀『左思の吳都賦に「百川派別、歸レ海而會」とあり』水の、幾筋にも分れ流るること。㊁『白居易の詩に「有レ似二骨肉親、派別從レ妓始」とあり』わかれて、別別になること。

はへ-つく【動下二他】隱しおく。ごまかし置く。膝栗毛「上菓子(ジヤウグワシ)を爰にはへ付けておいたを知らぬやつさ」

はへ-づみ 樬積【名】木材を積むに、ほぼ正方形に並列し、その上に、直角に並列して、かくのごとくに幾重にも互に積み上ぐること。

はへ-どく 蠅毒【名】〔植〕次條の略。

はへどく-さう 蠅毒草【名】〔植〕馬鞭草(ウマツヅラ)科に屬する一年生の草。高さ約二尺。葉は楕圓形にて對生し、質柔かにして、面に微毛密生す。夏季、梢上の葉腋に花莖出で、これに淡紫色の細毛對生して、三四寸乃至一尺ほどの穗狀をなし、蠅、これを嘗むる時は死す。我國、各地の林間・藪陰に自生す。はへどく。はへとりぐさ。

はへ-とまら-ず 蠅不止【名】〔植〕はへとりだけ(蠅取茸)に同じ。

はへ-とり 蠅取・蠅捕【名】㊀はへうち(蠅打)に同じ。㊁〔動〕はへとりぐも(蠅取蜘蛛)の略。和名「蠅虎、波倍止利。此蟲似二蜘蛛一、恆捕レ蠅、爲レ粮者也」㊂〔動〕はへとりむし(蠅取蟲)の略。

はへとり-き 蠅取器・蠅捕器【名】蠅を捕獲する裝置の器。形、種種あり。

はへとり-きのこ 蠅取菌・蠅捕菌【名】〔植〕㊀はへころしだけ(蠅殺茸)に同じ。㊁いしもちさう(石持草)に同じ。㊂はへどくさう(蠅毒草)に同じ。

はへとり-ぐさ 蠅取草・蠅捕草【名】〔植〕㊀茅膏菜(イシモチサウ)科に屬する多年生の草。葉は根生し、扁き葉柄と小形なる葉身とより成り、葉身の緣邊と上面とに毛ありて、小蟲觸るる時は、葉身の兩側は、急に閉合して、これを捕獲し、養料となす。花は白色・五瓣にして、不規則に裂開せる圓形の蒴果を結ぶ。食蟲植物中の著名なるもの。北米合衆國・南北カロライナ(Carolina)州の沼地に產す。はへぢごく。㊁はへどくさう(蠅毒草)に同じ。

(はへとりぐさ㊀)

はへとり-ぐすり 蠅取藥・蠅捕藥【名】蠅を捕ふるに用ふる藥。

はへとり-ぐも 蠅取蜘蛛・蠅捕藥・蠅虎・蠅豹子・蠅蝗【名】〔動〕蜘蛛類に屬する節足動物。體の大さ二分乃至四分、多くは灰色又は灰褐色を呈す。巢を張ることなく、擧動輕快にして、第四對の脚によりて、巧みに跳び、又、走り回りて、蠅などを捕食す。家屋の壁面・戶障子、又は樹上に居る。はへとり。一代男「今、江戶にはやるとて、蠅取蜘蛛を仕入れ」

蠅取蜘蛛も一生、袋蜘蛛も一生【句】「鱧(ハモ)も一期、蝦(エビ)も一期」に同じ。〔諺語〕

はへとり-ごんべゑ 蠅取權兵衞・蠅捕權兵衞【名】〔動〕はへとりむし(蠅取蟲)に同じ。

はへとり-さう 蠅取草・蠅捕草【名】〔植〕はへどくさう(蠅毒草)に同じ。

はへとり-だけ 蠅取茸・蠅捕茸【名】〔植〕擔子菌類に屬する有毒の菌類。高さ約三寸、初、白色の鳩卵狀をなし、後、破れて高く抽出す。外觀、占地(シメヂ)茸に類似すれど、傘の上面は、褐色にして、白色の小粒生じ、

柄の裏面に、線狀の褶を具へ、柄は白色にして、上部に鍔形の菌輪あり。秋季、樹下陰濕の地に發生し、蠅近寄る時は、痲醉す。はへころし。はへたけ。はへとまらず。はへころしだけ。はへとりきのこ。

はへとり-なでしこ 蠅取撫子・蠅捕撫子【名】〔植〕**むしとりなでしこ**（蟲取撫子）に同じ。

はへとり-のき 蠅取木・蠅捕木【名】〔植〕**にがき**（苦木）に同じ。

はへとり-ばな 蠅取花・蠅捕花【名】〔植〕**いしもちさう**（石持草）に同じ。

はへとり-むし 蠅取蟲・蠅捕蟲【名】〔動〕**かまきり**（蟷螂）に同じ。

はへ-なは 延繩【名】漁具の一。一條の絲繩に、適當なる間隔を置きて、多くの釣絲を取り附けて、注連繩（シメナハ）の如き形とし、その各釣絲の下端には、鉤を附けたるもの。その鉤に餌を附けて、水中に定置し、適當の時期を見はからひて引き上げ、鉤にかかりたる魚を捕ふ。**なはづり**（繩釣）參照。

はへ-ぬめり 蠅滑【名】〔植〕**ぬめりぐさ**（滑草）に同じ。

ばべ-のき【名】〔植〕**ばべがし**（ばべ樫）に同じ。

はへ-の-どく 蠅毒【名】〔植〕『俗間、その根の細末を、飯に雜へて、蠅を殺すに用ふるよりいふ』**ばいけいさう**（蒜藜蘆）に同じ。

はへ-の-とり 蠅取・蠅捕【名】〔動〕**はへとりぐも**（蠅取蜘蛛）に同じ。

はへ-のぼらず 蠅不登【名】〔植〕**へびのぼらず**（蛇不登）に同じ。

はへ-の-まちぎみ 陪の臣【句】**まちぎみ**（卿）の條下を見よ。

はへ-の-を 蠅尾【名】鏃（ヤジリ）の一種。

はへ-ばな はへ花【名】〔植〕**つゆくさ**（露草）に同じ。

はへ-はらひ 蠅拂【名】㊀『蠅を拂ふに用ふるよりいふ』**ほっす**（拂子）に同じ。延喜式「蠅拂二枚」和名「白拂、波閉波良飛」㊁**かぶろ**（禿）㊄に同じ。太平記「長野が蠅拂一揆、一陣に進みて懸け出でたり」

はへ-まゐり 蠅參【名】『蠅が馬の尾に附きて行くに譬へていふ』伊勢參が、道者の尻に附きて參宮すること、又その伊勢參。

はへ-むし 蠅蟲【名】㊀〔動〕**はへ**（蠅）に同じ。㊁人を卑しめていふ語。うじむし。聖德太子繪傳記「蠅蟲めらを、一疋や二疋捻（ネヂ）り殺しても、何にせん」一茶「ほととぎす蠅蟲めらもよっく聞け」

はへ-むしや 蠅武者【名】取るに足らざる武者。はむしや。こっぱむしや。こっぱざむらひ。はへざむらひ。諸家前太平記「追へば逃げ、引けばたかる蠅武者ども」

は-へん 破片【名】破れ碎けたる物のかけ。かけ。かけら。

は-べん 半片【名】**はんぺい**（半平）の訛。狂言（宗論）「醍醐の獨活芽（ウドメ）、鞍馬の木芽漬（キノメヅケ）、はべん・麩・椎茸、無量の菜（サイ）を滿ち滿ちて」

ば-べん 馬鞭【名】馬を打つに用ふるむち。

はへん-がん 破片岩【名】〔鑛〕『英 Clastick rock』碎片の集合して成れる岩石。その疎鬆にして、未だ固結せざるものは、砂・礫など、又これらの物が、他物にて膠結せられたるは、砂岩・礫岩なり。

ばべん-さう 馬鞭草【名】〔植〕**くまつづら**（馬鞭草）に同じ。運歩色葉集「馬鞭草、バベンサウ・コマツナギ」

ばべんさう-くわ 草鞭草科【名】〔植〕**くまつづらくわ**（馬鞭草科）に同じ。

はべ-めり 侍めり【句】**はべり**（侍り）の條下を見よ。

はへ-よけ 蠅除【名】蠅をよくること、又それに用ふる物。一茶「蠅除の草をつるしてさて何處へ」

はべ-ら 繁蔞・蘩蔞【名】〔植〕『**はこべら**（繁蔞）の略』**はこべ**（繁蔞）を云ふ。〔伊勢國の方言〕

はべり 侍り【動良變自】㊀貴人の傍に在り。附き從ひてあり。さぶらふ。はんべり。伺候す。侍坐す。侍す。紀「侍坐、オホトニハベリ」竹取「なげかせ奉らぬほどまで侍るべきを、侍らで過ぎ別れぬること」㊁**あり**（有り）又は**をり**（居り）の謙語。さぶらふ。ござる。枕「久しう立ちて侍りつれども」同「おのれがもとに、めでたき琴（キン）はべり。それに替へさせたまへ」

はべめり【句】『はべるめりの略』有るめり、又は居るめりの謙語。落窪「よき事にこそはべめれ」源氏「梵字とかいふやうなる跡にはべめれど」

はべり 侍り【接尾】動詞に添ひて、謙遜の意を示す語。候ふ。ます。竹取「なでふ、さる事かしはべらん」

はべり-たうぶ 侍給ぶ【動四自】動詞の**はべりたまふ**（侍給ふ）の音便。〔古語〕源氏「甚だ非常（ヒザウ）にはべりたうぶ」

はべり-たうぶ 侍給ぶ【接尾】**はべりたまふ**（侍給ふ）の音便。〔古語〕空穗「桂川わたりに、興ある所持てはべりたうぶ」源氏「嘆きはべりたうびし」

はべり-たぶ 侍給ぶ【動四自】動詞の**はべりたうぶ**（侍給ぶ）の略。〔古語〕

はべり-たぶ 侍給ぶ【接尾】接尾語の**はべりたうぶ**（侍給ふ）の略。〔古語〕源氏「嘆きはべりたぶ」

はべり-たまふ 侍給ふ【動四自】動詞の**はべり**（侍り）を、一層謙遜していふ語。〔古語〕

はべり-たまふ 侍給ふ【接尾】接尾語の**はべり**（侍り）を、一層謙遜していふ語。〔古語〕源氏「嘆きはべりたまふ」

はへる【動四自】**はひる**（這入る）の轉訛。和合人「この挾筥（ハサミバコ）へ、はへるだけ押し込んで、あとは、風呂敷へ包んで」

はべる 侍る【動四他】『**はべり**（侍り）の訛。平安朝の女流文學には、「侍り」といふ語多く用ひられたるよりいふ』歌を詠む。和合人「何か、いやらしく、はべるか、すべるかする積（ツモリ）だな」同「一しほの詠（ナガメ）だ。早速、一首はべらう」

はほ 這ほ【動自】**はふ**（這ふ）の轉訛。〔東國の古の方言〕萬葉「道のべの茨（ウマラ）が末（ウレ）にはほ豆のからまる君をはかれか行かむ」同「わが行（キ）のいきつくしかば足柄の峰はほ雲を見ととしぬばね」

ばぼう【名】**あに**（兄）を云ふ。〔九州の方言〕

ばぼう-ぢよ ばぼう女【名】**あね**（姉）を云ふ。〔九州の方言〕

は-ぼく 破墨【名】〔美〕繪畫にて、淡墨の上に、濃墨を塗抹すること。濃墨の上に淡墨を用ふるよりも、鮮かなる墨色を出し得。雪舟殊にこの法を用ひて、古今に冠絕し、狩野派歷代の畫家の重要視し來れる所なり。

は-ぼし 羽乾【名】鳥が、濡れたる羽を乾かすこと。新六「粟津野のかやが下露深からしおのが羽ぼしに鶉（ウヅラ）鳴くなり」

は-ぼそ 葉細【名】㊀『葉は端にて、端（ハシ）の細くて麗しき義、或は葉は映（ハエ）、細は美稱なるべしといふ』玉などの、光あること。〔古語〕紀「葉細珠、ハボソノタマ」㊁〔植〕**ほるとのき**（膽八樹）に同じ。

は-ぼたん 葉牡丹・甘藍【名】〔植〕㊀『葉の、密著して、相抱き合せるさま、牡丹の花に似たるよりいふ』十字花科に屬する二年生の草。葉は白色・平滑にして、冬春の交、帶紫色を呈し、相抱き集りて、球狀を呈し、後、莖出でて、高さ二尺餘に達し、葉は開展して、大根又は油菜のに似たるものとなり、色も帶白綠色に變じ、四月頃、莖の上部に、四瓣・淡黃色、油菜のに似たる花、無苞の總狀花叢をなして開く。變種甚だ多し。嫩き葉、殊に球狀をなせるものを、食用に供す。いんげんな。おらんだな。かんらん。きやべえじ。きやべつ。たまな。ぼたんな。ばいさう。㊁**つるはぼたん**（蔓葉牡丹）に同じ。

ば-ぼつ 馬勃【名】㊀馬のくそ。まぐそ。馬糞。㊁「牛溲（ギウシウ）・馬勃・敗鼓の皮」を見よ。㊂〔植〕**ほこりたけ**（馬勃）の漢名。

は-ほづき 葉酸漿【名】〔植〕**べんけいさう**（辨慶草）を云ふ。〔大和國の方言〕

は-ぼね 齒骨【名】齒ぐき。齒根。齒骨（シコツ）。本朝三國誌「さび浪人の齒骨、立つか、立たぬか、受けて見るか」

は-ほふ 破法【名】邪見を以て、佛の正法（シヤウボフ）を破斥すること。佛法をそしること。聖德太子繪傳記「佛法と聞くも耳汚れ、佛といふ口もけがらはし、けがらはしと、破法の唾」

は-ほほづき 葉醱漿【名】〔植〕**べんけいさう**（辨慶草）に同じ。

は-ほん 端本【名】冊數の不足して、全部

揃はぬ書籍。はしたの本。缺本。

はーぼろ【名】〔植〕やつで(八手)㊁に同じ。

はーぼろし【名】〔植〕せんにんさう(仙人草)に同じ。

はーぼろり【名】〔植〕ことりとまらず(小鳥不止)を云ふ。〔肥前國の方言〕

はま 濱【名】㊀海又は湖に沿ひたる陸地の、平に長く續きたる處。㊁しほはま(鹽濱)の略。㊂かし(河岸)を云ふ。〔大阪の語〕 織留「新地十間口(ジッケングチ)の家、然も濱にて、裏に、貸藏まで建ち續きしを」 重井筒「門に出でて、北を見つ、濱まで歩み」 ㊃あげいし(上石)に同じ。〔圍碁の語〕 拾遺「帶を賭けて、御碁遊ばしける、負け奉りて、御數多くなりはべりければ、帶を返したまふとて、 白浪の打ちやかへすと待つほどに濱のまさごの數ぞ積れる」 國姓爺「石上に、碁盤を据ゑ、……敵の濱を拾ひ上げ」 ㊄はま(破魔)㊁㊂㊃を見よ。 ㊅〔地〕よこはま(横濱)の略。〔東京の語〕 ㊆〔人〕はまむらや(濱村屋)の略。

濱に立つ【句】總嫁(ソウカ)となり、濱㊂に立ちて、客を待つ。辻君となりて稼ぐ。(客あれば、濱納屋(ハマナヤ)などに誘ひ入れて、淫を鬻ぐなり) はまぎみ(濱君)・はませせり(濱拵)㊁參照。〔大阪の語〕 冥途飛脚「大阪の濱に立っても、こなさん一人は養うて」

濱の石【句】はまいし(濱石)に同じ。 文治三年百首「越す浪の殘を拾ふ濱の石の十して後も三年すぐしつ」

濱の市【句】はまいち(濱市)㊀に同じ。 謠曲(岩船)「攝州住吉の浦に、始めて濱の市を立て、高麗(コマ)・唐土(モロコシ)の寶を買ひ取るべし」

濱の苞(ト)【句】はまづと(濱苞)に同じ。 空穗「都鳥千鳥をはねにすゑてこそ濱のつとて君に取らせめ」

濱の納屋(ナヤ)【句】はまなや(濱納屋)に同じ。 心中二枚繪草紙「姫君は見放され、はしばしのくら屋へ下(サガ)り、後には、濱の納屋の影、一本立にて候」

濱の眞砂(マサゴ)【句】㊀濱にある砂。㊁『濱にある砂は、數へ盡しがたきよりいふ。ごうがしや(恆河砂)參照』數多きことの譬。 萬葉「八百日(ヤホカ)行く濱の眞砂もわが戀に豈まさらじか沖つ島守」 油糟「思ふままには言はれざりけり(といふ句に)君の代の御數は濱の眞砂にて」

濱の眞砂(マサゴ)の數ほど【句】極めて多くの數。 鵜鷺合戰「濱の眞砂の數、讀み盡すこととなし」 落髮千句「濱の眞砂の數ほどもいや」

濱の屋(ヤ)【句】はまや(濱屋)に同じ。 俳諧新選(赤羽)「濱の家の寐心かはる汐干かな」

濱の床(ユカ)【句】すずみだい(涼臺)を云ふ。〔信濃國水內(ミノチ)郡の方言〕

濱も狹(セ)**に**【句】濱もせまく思はるる程に。〔古語〕 萬葉「呼び立ててみ船出でなば濱も狹に後れ並み居て」

はま 蛤【名】〔動〕はまぐり(蛤)の略。おはま。

はま【名】かひ。そば。山岨。〔甲斐國郡內(グンナイ)の方言〕

はーま 破魔【名】㊀〔佛〕惡魔を破滅すること。㊁古、藁繩にて、圓座(ワラフダ)のごとき形に造り、中に、徑二三寸の孔を設け、兒童たちの、破魔矢の的として遊びしもの。〔濱〕㊂昔、土佐國にては、これを、小高き所より投げてころがし落し、ころげてまはる所を、人人立ちて、左右より射、大和國などにては、これをころがし走らするを射て、中心の穴に射あつるを當(アタリ)としたり。はまころ。〔濱〕はまなげ(濱投)參照。㊃腰に著くる圓座。〔濱〕〔攝津國一谷(イチノタニ)邊の方言〕

はま 八【數】次條に同じ。〔拳(ケン)にいふ語〕 冥途飛脚「一拳(ケン)して、酒(ササ)一つ、……はま・三・九(キウ)・五(ゴウ)・六(リウ)」

ぱま 八【數】『八の字の唐音の訛』はち(八)を云ふ。〔拳(ケン)にいふ語〕

はまーあかざ 濱藜【名】〔植〕㊀藜科に屬する草。葉及び花の模様など、藜に似たれども、葉は厚くして、光澤あり、全體大きく高く、初夏、淡綠色の小花、ほぼ穗狀をなして、枝梢頭と梢葉腋とに開き、單性と兩性と雜生す。嫩葉は水に浸したる後、調食すれば、味佳なり。海邊に自生す。〔水落葵〕㊁つるな(蕃杏)に同じ。

はまーあかな 濱赤菜【名】〔植〕みしまさいこ(三島柴胡)に同じ。

はまーあきんど 濱商人【名】横濱に住み、又は東京より横濱に通ひて、外國人と取引する商人。〔明治初年頃の語〕

はまーあざみ 濱薊【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。高さ五六尺に達し、葉は薊のに似て、長く厚く、光澤あり、緣邊に銳き刺あり。夏・秋の交、白色又は淡紅紫の花、頭狀花序をなして開く。根は、形も、味も、牛蒡(ゴバウ)のに似、俗に小兒の咳嗽に効ありといふ。又、漬物として、味佳なり。海邊の砂地に自生す。いそあざみ。はまごばう。ちごくあざみ。

はまーあさり 濱漁【名】はませせり(濱拵)㊀に同じ。

はまーあらし 濱嵐【名】濱㊀に吹く嵐。はまかぜ。 俳諧古選(歲人)「麥藁の笛の音悲し濱嵐」

はまーあららぎ 濱蘭【名】〔植〕さはひよどり(澤鵯)に同じ。

はまーいくさ 濱軍【名】濱㊀にて戰ふこと、又その戰。 平家「濱いくさの事」

はまーいし 濱石【名】濱にある石。

はまーいち 濱市【名】㊀濱㊀に立つ市。濱邊の市場。 謠曲(蘆刈)「この浦に、濱市の候」 ㊁安藝國嚴島(イツクシマ)にて、毎年、春は、三月十三日より四月八日まで、夏は、六月十四日より七月七日まで、諸國の商人の多數集りて立つる市。

はまーいで 濱出【名】濱㊀に出づること。濱に出でて遊ぶこと。はまゆさん。 曾我「化粧坂(ケハヒザカ)の麓に遊君あり、……濱出して、歸りざまに、この女の許に打寄りて」

はまーいてふ 濱公孫樹【名】〔植〕はまにがな(濱苦菜)㊀に同じ。

はまーいと 濱絲【名】横濱港を經て、輸出する生絲(キイト)。

はまーうた 濱唄【名】芝居にて、海岸の場に、漁夫の唄にまねて、囃子(ハヤシ)に用ふる、一種の唄。

はまーうつぼ 列當【名】〔植〕列當(ハマウツボ)科に屬する一年生の草。他の植物の根に寄生す。高さ通常尺に滿たず、莖も、葉も、黃褐色にして、莖は肉質。葉は鱗片狀にして、莖の中部の邊まで、對生に近き狀態をなして互生し、五月頃、紫色を呈せる小形の花、穗狀をなして開く。海邊の砂地又は南向の山間に自生す。

はまうつぼーくわ 列當科【名】〔植〕顯花植物・被子類・雙子葉門・合瓣花區の一科。すべて寄生植物にして、有用のもの少し。

はまーうど 濱土當歸【名】〔植〕繖形科に屬する草。高さ二三尺に達し、葉は互生し、小葉は卵形にして尖り、鋸齒を有し、花その他、鹹草(アシタバ)に酷似す。味、土當歸(ウド)に似たり。おにうど。

はまーえ 濱江【名】濱㊀にある入江。 新六「ふなのぼる濱江のえりの淺からず人のしわざのなさけなの世や」

はまーえん 濱緣【名】〔建〕神社などの向拜(カウハイ)の階段の下にある床。他の緣側より低き位置にあり。はまゆか。

はまおにはーせわやく 濱御庭世話役【名】德川幕府の職制の一。江戸濱御殿の庭の事を世話せしもの。

はまーおほね 濱大根【名】〔植〕ばうふう(防風)に同じ。

はまおみ 濱臣【名】〔人〕しみづはまおみ(清水濱臣)を見よ。

はまーおもて 濱面【名】濱㊀に向きてある方。濱の方面。はまづら。 太平記「濱面の在家、並びに稻瀨河の東西に、火を懸けたれば」

はまーおもと 濱萬年青・文殊蘭【名】〔植〕石蒜(マンジュシャゲ)科に屬する常綠・多年生の草。大なるものは、高さ四五尺に達し、その上部に、やや萬年青(オモト)のに似て、闊大なる葉數枚を出し、夏、葉心より、花莖を抽き、その頂部に、白色・六瓣の數箇の花、繖形をなして開く。滿開の際は、恰も白木綿を敷きたるがごとくに見ゆ。暖國の海岸の砂地に自生し、又、栽培して、觀賞用に供す。はまもめん。はまゆふ。

はま-かいだう 濱街道 【名】一 海濱に沿へる街道。沿岸の公道。二〔地〕りくぜんはまかいだう(陸前濱街道)の略。

はま-がき 濱柹 【名】〔植〕つるな(蕃杏)に同じ。

はま-かぜ 濱風 【名】海濱を吹く風。うらかぜ。しほかぜ。はまつかぜ。萬葉「わぎもこをはやみ濱風大和なる吾(ア)を待つ椿吹かざるなゆめ」新古今「鶉鳴く眞野の入江の濱風に尾花浪よる秋の夕ぐれ」

濱　を引く 【句】濱風に吹かれて、風邪に罹る。源氏「松の響、波の音……、濱風を引きありく」

はま-かた 濱方 【名】一 海濱の方面。はまおもて。二 海濱に關係する人、即ち海產の事などに關係する人。

はま-かづら 濱葛 【名】一〔動〕じやがひ(蛇貝)に同じ。二〔植〕じやけついばら(雲實)に同じ。三〔植〕はまごう(蔓荊)に同じ。

はま-かは 濱川 【名】海濱にある川。謠曲(海士)「濱川の蘆海かけて流蘆(ナガレアシ)の」

はま-がは 濱側 【名】一 海濱に沿ひてある地。二『はま(濱)三を見よ』河岸の方に接したる地。〔大阪の語〕生玉心中「濱側を、用ありげに往っつ戻っつ」南水漫遊續稿「往古は、道頓堀側芝居の近邊とても、今の如く寸尺の地を爭ふ事もなく、……、濱側に於て、板がこひの内に、床几を構へ」

はまかは-あなご 濱川穴子 【名】東京府下品川・濱川・鮫洲(サメズ)邊にて漁獲せしあなご。この地の名物とす。

はまかは-なべ 濱川鍋 【名】濱川穴子を旨煮(ウマニ)にしたる鍋類。

はま-かんざし 濱簪 【名】〔植〕礒松科に屬する草。葉は松のに似て柔く、叢生し、葉間より一莖を抽き、春季、櫻のに似たる小花、毬狀をなして、莖上に簇生す。もと船載せるものにて、觀賞用に供す。

はま-がらし 濱芥 【名】〔植〕いぬがらし(犬芥)に同じ。

はま-がらす 濱烏 【名】〔動〕くろさぎ(黑鷺)に同じ。

は-まき 葉卷 【名】一 葉煙草の葉拵(ハゴシラヘ)作業の最後に、その葉を、尖端より折り曲げて卷くこと。伊賀越道中雙六「烟草の小口、葉卷手早く、きりきりと」二 はまきたばこ(葉卷煙草)の略。(紙卷に對して)

はまき-いれ 葉卷入 【名】葉卷煙草を入るるに用ふるもの。

はまき-が 葉卷蛾・葉捲蛾 【名】〔動〕鱗翅類に屬する昆蟲。大さ三分乃至三分五厘に過ぎず。前翅は長方形、後翅は三角形をなし、雌は頭・胸・腹部共に灰褐、六翅、何れも暗黃褐色、雄は頭・胸部紫褐、腹部暗灰黃色にして、前翅は紫褐色を呈す。はまきむし(葉卷蟲)參照。

はま-ぎく 濱菊 【名】〔植〕一 菊科に屬する多年生の草。高さ二尺餘、每春、その上端に芽出でて、長き葉簇生し、簇葉上に莖生じ、秋季、その頂に、頭狀花開く。周邊なる舌狀花は、白色にして、一列又は二列をなし、中央なる管狀花は、黃色を呈し、葉は花後、次第に落つ。海岸の水濕の地に自生し、又、觀賞用として培養す。二 うらぎく(裏菊)に同じ。三 きぶねぎく(貴船菊)を云ふ。〔常陸國の方言〕

はまき-たばこ 葉卷烟草・葉卷煙草 【名】烟草の葉を刻まずに卷きて製したる卷烟草。はまき。しがあ。(紙卷烟草に對して)

はま-ぎぬ 濱絹 【名】近江國長濱より繰り出だす絹。上品にて、羽二重に代用せらる。濱羽二重。

はま-ぎは 濱際 【名】海濱の方に片寄りたる地。濱のほとり。盛衰記「西の城戸口(キドグチ)、濱際に控へて」

はま-ぎみ 濱君 【名】『「濱に立つ」を見よ』つじぎみ。總嫁(ソウカ)。〔大阪の語〕

はまき-むし 葉卷蟲・葉捲蟲 【名】〔動〕體より絲を繰り出し、植物の葉を綴り卷きて、その中に棲み、葉を蝕害する昆蟲の總稱。殊に葉卷蛾の幼蟲なること多し。體形、蠶兒に似、老熟すれば、多くは、その巢の中にて蛹(サナギ)に化す。おとしぶみ(落文)三參照。

はま-くぐ 濱莎草 【名】〔植〕しほくぐ(潮莎草)に同じ。

はま-くさぎ 濱臭木・腐婢 【名】〔植〕馬鞭草(クマツヅラ)科に屬する落葉喬木。海岸に自生し、高さ一丈五六尺に達し、葉は對生し、卵形にして、往往、上部に、缺刻狀の大鋸齒を具へ、脣形の花、圓錐花序をなして開く。惡臭あるを以て著る。うさぎかくし。きくばくさぎ。

はま-ぐら 濱倉・濱藏 【名】河岸に建てたる土藏。〔京都・大阪の語〕

はま-くり 濱栗 【名】〔植〕ばいも(貝母)に同じ。類本字鏡「貝母、波萬久利」

はま-ぐり 蛤 【名】一〔動〕『濱に在りて、形、栗の實に似たるよりいふ』瓣鰓類に屬する軟體動物。殼は、ほぼ三角形をなし、表面は平滑、色彩及び斑紋は一樣ならず。內面は純白色を呈す。淺海の泥中に產し、肉は食用となり、殊に、左右の殼よく合ふにより、和合の意に取りて、婚儀の際、吸物の實とし、海產のは、殼厚きため、碁石に製す。その他、燒きて胡粉とし、又、膏藥・煉藥などの容器に用ふ。海蛤。蜃蛤。文蛤。二 はまぐりかひ(蛤貝)の略。五人女「はまぐりに、丁子が油を入れ」三 紋所の一。蛤一の貝に象(カタド)りたるもの。「一(ヒトツ)蛤」・「向(ムカヒ)蛤」・「三(ミツ)蛤」・「四(ヨツ)蛤」・「五(イツツ)蛤」・「蛤蝶(ハマグリテフ)」などの種類あり。四 はまぐりば(蛤刃)の略。五 女の陰部。〔俚語〕膝栗毛「お前のはまぐりなら、なほうまからうと、女の尻を、ちよいと當る」六〔動〕あまをぶね(蜑小舟)二を云ふ。〔加賀國の方言〕

蛤で海を替へる 【句】「蜆貝(シジミカヒ)で海を測る」に同じ。〔諺語〕釋迦如來誕生會「凡夫の身を以て、浮世の絆(キヅナ)を離れんとは、蛤にて海を替へ、燈心にて須彌山(シユミセン)を引き寄せんとする如く」

蛤、能く氣を吐いて、樓臺を爲す 【句】『彙苑に「蛤一名蜃、能吐ㇾ氣爲二樓臺一」とあり』蜃氣樓は、蜃(ハマグリ)の氣を吐くによりて成るといふ說。一說に、蜃は、蛤とは別にて、蛟の屬なりと。〔諺語〕國姓爺「實にや、蛤、能く氣を吐いて、樓臺を爲すといひしも斯くや」

はまぐり-いし 蛤石 【名】貝の化石、又これを含みたる岩石。

はまぐり-うり 蛤賣 【名】蛤を賣ること、又その人。一七一職人歌合「はまぐり賣」

はまぐり-がた 蛤形 【名】一 蛤の貝殼の形に似たる形。二〔建〕『形の蛤に似たるよりいふ』石板葺の屋根に用ふる石板の形。主に獨逸式葺方に行はる。

(はまぐりがた 二)

はまぐり-かひ 蛤貝 【名】蛤の貝殼。はまぐり。はまぐりっかひ。

はまぐり-こ 蛤子 【名】〔動〕はまぐり(蛤)一に同じ。戀八卦柱曆「大鯛・小鯛ぶりの大いを、鮑(アハビ)・さざえ・はまぐり子」

はまぐり-こ 蛤粉 【名】蛤の貝殼を碎きて、粉にしたるもの。

はまぐり-ごもん 蛤御門 【名】はまぐりもん(蛤門)の敬稱。

はまぐり-ずみ 蛤角 【名】角額(スミビタヒ)の角を、蛤の貝の形に造れるもの。色道大鑑「額……角は、蛤角に取るべし」

はまぐり-そで 蛤袖 【名】著物の袖先の圓みを帶びて、蛤の貝の形に似たるもの、正德年間頃より行はる。

はまぐりっ-かひ 蛤貝 【名】はまぐりかひ(蛤貝)の音便。諺「家(チウ)の前ではまぐりっ貝、外へ出れば蜆っ貝」

はまぐり-づま 蛤褄 【名】著物の褄の角の、蛤の貝の如く、丸みを帶びたるもの。

はまぐり-てふ 蛤蝶 【名】紋所の一。蛤貝の形二つを、蝶の飛べるがごとき樣に取り合はせたるもの。

はまぐり-とり 蛤取 【名】蛤を漁獲すること。曠野「何事か呼ばりあひては打笑ひ(といふ句に)蛤取は皆女中なり」

はまぐり-なべ 蛤鍋 【名】蛤のむき身に、味噌を交へて煮る鍋物。鍋にて煮ながら食ふ。はまなべ。

はまぐり-の-さうし 蛤草子 【名】〔書〕御伽草子の一。天竺摩揭陀(マカダ)國のしじらと呼ぶ孝子、その母を養はんがために、海に漁して、大蛤を得、中より美しき女現れて、その妻となりしが、機織る業に秀で、その織りし布を、しじら市に賣りて、富貴・長壽の身となりし事を記せるもの。

はまぐり-のみ 蛤鑿 【名】刀葉の、蛤形に

曲れる鑿。堅き石を細工するに用ふ。

はまぐり-ば 蛤刃【名】鎬（シノギ）と刃との間に、膨みを持たせたる刃物。まるば。太平記「七尺三寸の太刀、……蛤刃に搔合はせ」七一職人歌合「いつまでか蛤刃なる小刀のあふべき事の叶はざるらん」

はまぐり-びたひ 蛤額【名】蛤角（ハマグリヅノ）の額。

はまぐり-ぶね 蛤船【名】蛤などを捕ふるに用ふる小き漁船。

はまぐり-みづ 蛤水【名】井戸・池などの水の、白く濁を帶びたるもの。

はまぐり-むし 蛤蟲・濱栗蟲【名】〔動〕㊀鱗翅類に屬する昆蟲。年三四回發生し、形やや蛾に似て、長さ六七分、翅は體と同じく黑褐色を呈し、前翅は三角形に近く、その中央に、雄には七箇、雌には八箇の白色・半透明なる紋、環狀に併列し、後翅は圓形にして、中央に、四箇の白紋、一列に並ぶ。幼蟲は淡綠色にして、體面に無數の褐色なる小疣あり、これに黑色の短毛生ず。第一回の幼蟲は、笹の葉、第二回の幼蟲は、稻の葉を食害す。いちもじせせり。つとむし。㊁花挊蝶（ハナセセリテフ）の幼蟲。

はまぐり-めし 蛤飯【名】蛤のむき身を焚きこみ、又は煮たる蛤をかけたる飯。

はまぐり-もん 蛤門【名】京都の舊御所の外郭の門の一。西方（即ち烏丸通）に面する四門の内、南端なる下立賣（シモダチウリ）御門の次に位す。

蛤門の戰【句】元治元年七月十九日、長州藩の諸隊、藩主毛利慶親父子の寃罪を哀訴せんがために、禁門に迫り、會津・桑名・薩摩・越前等の諸藩兵と衝突せし事變。一名、元治の變・甲子（カッシ）の變・元治甲子の變・禁門の戰。

はま-ぐるま 濱車【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。莖は長く地上を匐ひ、葉は楕圓形にて、疎鋸齒を有し、對生す。夏季、葉腋に花軸を抽き、黃色の頭狀花を開く。海邊の砂上に自生す。くまのぎく。しほかぜ。しほがま。ねこのした。

はま-ごう 蔓荊【名】〔植〕馬鞭草（クマツヅラ）科に屬する落葉灌木。高さ五尺に達し、枝は地を匐ひ、その部分に鬚根を生ず。葉は楕圓形にして、對生し、表面は深綠色、裏面は白色を呈し、夏季、梢頭に、深紫色の花、穗狀花序をなして開く。葉及び樹皮は香料とし、仁は白色にして、蔓荊子（マンケイシ）と呼び、藥用とす。はまかづら。はましきみ。はまつばき。はまはぎ。はまはひ。はまぼう。

はま-ごてん 濱御殿【名】㊀海に面して建てたる貴人の別莊。㊁はまりきゆう（濱離宮）の舊稱。

はまごてん-あづかり 濱御殿預【名】はまごてんぶぎやう（濱御殿奉行）の舊稱。

はまごてん-そへぶぎやう 濱御殿添奉行【名】德川幕府の職制の一。若年寄支配の下に、濱御殿奉行を補助せしもの。燒火間（タキビノマ）詰にて、吹上添奉行の次席たり。

はまごてん-ぶぎやう 濱御殿奉行【名】德川幕府の職制の一。若年寄支配の下に、濱御殿の庭園を預りしもの。濱御殿預。濱奉行。

はま-ごばう 濱牛蒡【名】〔植〕**はまあざみ**（濱薊）に同じ。

はま-ころ 破魔轉・濱轉【名】『ころはころがす義』はま（破魔）㊁に同じ。

はま-さき 濱崎【名】濱にある崎。新六「鷗飛ぶ夕汐みちの濱崎に玉藻刈るてふ船きよすなり」

はま-ざくら 濱櫻【名】〔植〕**ふぢなでしこ**（藤撫子）に同じ。

はま-ささげ 濱豇豆【名】〔植〕**じやけついばら**（雲實）に同じ　和名「雲實、一名、天豆、波萬佐佐介。色黃黑似レ豆、故以名レ之」

はま-さじ 濱匙【名】〔植〕磯松（イソマツ）科に屬する多年生の草。葉は匙狀にして、長さ六七寸、葉柄・葉脈共に紅色なり。夏季、葉間に、花莖を抽きて、多く分枝し、白色の小花、枝梢ごとに、穗狀をなして開く。海邊の砂地に自生す。はまぢさ。

はま-ざしき 濱座敷【名】海に面して建てたる座敷。

はま-ざんせう 濱山椒【名】〔植〕**てんのうめ**（小石積）に同じ。

はま-ざらし 濱晒【名】天草（テングサ）又は布糊（フノリ）などの海藻を、海濱の砂上に散布して、日光に晒し、或は淡水を散布し、或は夜露にあてて、その色素を除く方法。

ばまし【接尾】『**ばむ**より派生せる語』その樣子のほのめき現れ、又その樣を帶びてあり。めかし。「氣色（ケシキ）ばまし」

はま-しきみ 濱樒【名】〔植〕**はまごう**（蔓荊）に同じ。

はま-しばゐ 濱芝居【名】『大阪の芝居は、寬永十年に、鹽屋九郎左衞門等が、官許を得て、濱側（ハマガハ）㊁に小芝居を興行せしを始とするよりいふ』小規模の芝居。〔大阪の語〕一代女「見るにをかしげなる顏つき、八橋（ヤツハシ）の吉と、濱芝居の千歲老（センザイラウ）」武家義理物語「濱芝居の小見物（コミセモノ）」

はましほ-こ 濱鹽子【名】鹽燒に從事する人夫。〔安藝國の方言〕

はましま-しやうべゑ 濱島庄兵衞【名】〔人〕**にっぽんざゑもん**（日本左衞門）を見よ。

はま-じやうゆ 濱醬油【名】春季に、一寸餘の小鰮を、瓶又は桶に入れ、一斗につき鹽一升、麴五六升、水三升の割合に加へて密閉し、秋季に至り、その分解せるものに、普通の醬油渣を煮り、少量の醬油を加へて混和し、濾し取りて製し、普通の醬油に代用するもの。いかなご醬油に類す。

はま-しをん 濱紫苑【名】〔植〕**うらぎく**（裏菊）㊂に同じ。

はま-す 濱洲【名】濱にある洲。うらす。藻鹽草「濱洲」

はます 食ます【動四他】食（ハ）むやうに仕向く。食はしむ。狂言（鼻取相撲）「澤山な水をはましておけ」

はま-すがな 濱菅菜【名】〔植〕**ばうふう**（防風）に同じ。本草和名「防風、波末須加奈」

はま-すげ 濱菅・莎草【名】〔植〕莎草（カヤツリグサ）科に屬する多年生の草。原野・海岸の砂地等に自生し、地下莖にて匍匐し、繁殖す。葉は細長く、夏季、莖を抽きて、莖頂に濃茶褐色なる穗を分つ。地下の塊根は、香附子（カウブシ）と稱し、止血藥とす。かうぶし。やがら。

はま-すさ 濱寸莎【名】**はまづた**（濱寸莎）に同じ。

はま-すすき 濱芒【名】〔植〕**わせをばな**（早稻尾花）に同じ。

はま-すぢ 濱筋【名】㊀濱邊の道すぢ。はまどほり。〔大阪の語〕㊁濱側（ハマガハ）㊁の道すぢ。かしすぢ。〔大阪の語〕心中刃は氷の朔日「濱筋の和泉屋」

はます-どり 濱洲鳥【名】『濱洲に居る鳥の義』**みづとり**（水鳥）に同じ。

はます-どり 濱洲鳥【枕】水鳥の陸を步むさまは、足をもぢりて見にくきより、**あなゆむ**（足惱む）にかけていふ。萬葉十四「人の子のかなしけしだは濱洲鳥足なやむ駒の惜しけくもなし」

はま-せせり 濱挵【名】㊀濱邊をせせりあるくこと。はまあさり。㊁濱側㊁に立ちて、客を待つ總嫁（ソウカ）を買ふこと。夕霧阿波鳴渡「日が暮れると濱せせり」

はま-ぜり 濱芹【名】〔植〕㊀繖形科に屬する二年生の草。海濱に自生し、初は地に臥し、後、高く延びて、尺餘に至る。葉は互生し、淡綠色にして、光澤あり、二回羽狀に分裂す。夏季、白色・五瓣の小花、複繖形花序をなして開く。果實は藥用に供す。あきたにんじん。はまにんじん。ひるむしろ。へびむしろ。「蛇牀子」本草和名「蛇床子、比留无之呂。一名、波末世利」㊁**いぬなづな**（犬薺）に同じ。和名「亭歷子、波末多加奈。一云、阿之奈豆那。又云、波末世利」

はま-だ 濱田【名】海邊にある田。夫木「住吉（スミノエ）の濱田の早苗おひぬとて今日ぞ五月（サツキ）と急ぎ取るなり」

はまだ 濱田【名】〔地〕㊀石見國那賀郡にある町。山陰街道の要衝に當り、松平氏の舊藩地。港は開港場にして、海魚・紙等の產物あり。㊁明治初年設置の縣の一。石見國を管轄せしもの。初、代官駐在の地邇摩（ニマ）郡大森の地に縣廳を置きて、石見國の一部を管せしめ、二年、隱岐縣を併せ、又、これを鳥取縣に屬せしめ、三年、治所を那賀郡濱田に移すと共に、濱田縣と改稱し、次いで、津和野廢止後、これをも管し、又、一旦鳥取縣に移しし隱岐國を、再び併せ、九年、その全部を島根縣に合併す。

はま-だいこん 濱大根・野蘿蔔【名】〔植〕大根の一品種。形、普通の大根に同じく、花は、はじめ、黃色にして、白又は淡紫に

變ず。のだいこん。ちくらんたう。

はまたかな 濱高菜【名】〔植〕㊀いぬなづな（犬薺）に同じ。和名「亭歴子、波末太加奈。一云、阿之奈豆奈。又云、波末世利」㊁ばうふう（防風）に同じ。藻鹽草「防風、ハマタカナ」㊂やぶたばこ（藪烟草）に同じ。和名「天名精。一名、麥句薑、波末太加奈。一云、波厤不久良」

はまだ-げんたつ 濱田玄達【名】〔人〕醫家。肥後國の人。細川侯の藩醫たり。明治十三年、大學南校卒業の後、熊本の醫學校・病院の要職に歴任し、獨逸に留學して、產科婦人科を專攻す。歸朝後、醫學博士を授けられ、醫科大學教授に任じ、醫科大學長となり、辭職後、東京產科婦人科病院（濱田病院）を經營し、又、宮內省御用掛を拜命し、東京帝國大學名譽敎授の稱號を授けられ、大正四年歿す。年六十二。

はまだ-じやう 濱田城【名】石見國那賀郡濱田町の北、龜山に在りし城。元和の初、古田重治此に築き、後に淺野氏の預となり、次いで松平・本多の二氏を經て、明和中復び松平氏に歸し、慶應二年廢城となる。一名、龜山城。

はまだ-やひやうゑ 濱田彌兵衞【名】〔人〕長崎の貿易商末次（スヱツグ）平藏に屬せし船長。寛永五年、幕府の許可を得て、弟小左衞門、子新藏等と臺灣島に航し、その和蘭總督ピイテル・ノイツ（Pieter Nuyts）を脅して、以前、わが國人の受けたる損害を償はしめ、大いに名聲をあげたり。大正四年從五位を贈らる。

はまだ-やへゑ 濱田彌兵衞【名】〔人〕前條に同じ。

はまち 飯【名】〔動〕『はりまち（飯）の略』いなだを云ふ。〔關西の方言〕下學集「飯、ハマチ」

はま-ち 刃關【名】刀劍の關（マチ）の、刃の方の部分。（棟關（ムネマチ）に對して）

はま-ぢ 濱路【名】濱邊の道。濱づたひの道。はまみち。うらぢ。壬二集「今日はまた山の端もなくなりにけり知らぬ濱路の夕ぐれの空」

はま-ぢさ 濱萵苣【名】〔植〕㊀きくぢさ（菊萵苣）に同じ。㊁つるな（蕃杏）に同じ。㊂つるかこさう（蔓夏枯草）に同じ。㊃はまさじ（濱匙）に同じ。

はま-ぢしや 濱萵苣【名】〔植〕前條に同じ。

はま-ちどり 濱千鳥【名】㊀濱に居る千鳥。はまつちどり。後撰「濱千鳥かひなかりけりつれもなき人のあたりは鳴き渡れども」㊁〔植〕かりがねさう（雁金草）に同じ。

濱千鳥の跡【句】「鳥の跡」㈡に同じ。古今「忘られん時忍べとぞ濱千鳥ゆくへも知らぬ跡をとどむる」

はま-ちばな 濱茅花【名】〔植〕はまひるがほ（濱晝顏）に同じ。

はま-ぢやや 濱茶屋【名】濱側（ハマガハ）㈡にある茶屋。俗つれづれ「濱茶屋に腰掛けて、足も休めず」

はま-ちゆうたらう 濱忠太郎【名】〔人〕まきやすおみ（眞木保臣）を見よ。

はま-ちらし 濱ちらし【名】〔植〕つるな（蕃杏）に同じ。

はま-ちり 濱縮緬【名】次條の略。

はま-ちりめん 濱縮緬【名】『ながはまちりめん（長濱縮緬）の略』近江國坂田郡長濱町地方より產出する、上品なる縮緬。普通、緯絲太く、地合厚し。ながはまちりめん。はまちり。

はま-つ-かぜ 濱津風【名】はまかぜ（濱風）に同じ。〔古語〕空穗「濱つ風の荒き音に、いとかしこく合はせて彈きたまへるを」

はま-づた 濱寸莎・濱苆【名】網曳（アビキ）又は船などの古綱を切り解きて作りたるつた。はますさ。

はま-づたひ 濱傳【名】濱㈠又は㈢を傳ひゆくこと、又その所。爲忠百首「玉くしげ二見の浦のあけ暮に濱づたひして千鳥鳴くなり」夕霧阿波鳴渡「大川筋の濱づたひ」

はま-つ-ちどり 濱津千鳥【名】はまちどり（濱千鳥）に同じ。〔古語〕記「濱つ千鳥濱よは行かず磯傳ふ」

はま-つづら 濱葛【名】濱邊に生ふる靑つづら。萬葉「駿河の海おしべに生ふる濱つづらいましをたのみ母にたがひぬ」

はま-づと 濱苞【名】濱邊よりのみやげもの。萬葉「潮ひなば玉藻刈らなむ家の妹が濱づとこはば何をしめさむ」

はま-つばき 濱椿【名】〔植〕はまごう（蔓荊）に同じ。續拾遺「君が代は限もあらじ濱つばきふたたび色は改まるとも」

はま-つめぐさ 濱爪草【名】〔植〕石竹科に屬する草。莖は分岐して叢生す、葉は線狀にして對生す。七八月頃、枝梢上に、多數の五瓣・白色の花を開く。海濱の乾燥地に自生す。しほつめぐさ。

はま-つ-や 破魔津矢【名】はまや（破魔矢）に同じ。

はま-づら 濱面【名】濱の所。濱の上。はまおもて。はまべ。濱地。〔古語〕後撰「人もろともに、濱づらをまかるに」太平記「奴原（ヤツバラ）を、濱面へ追ひ出して」

はま-て 濱手【名】濱の所。濱の方。はまべ。うみて。重帷子「濱手から栗毛馬の遠乘は」

はまでら 濱寺【名】〔地〕『大雄寺といふ寺ありて、濱寺とも呼ばれしに本づく』和泉國泉北郡にある町。堺市の南方、大阪灣の東南岸。紀州街道に沿ひ、鐵道南海線・阪堺電氣鐵道の停車場あり。その濱寺公園は、古の高師（タカシ）の濱の地なり。

はまでら-こうゑん 濱寺公園【名】〔地〕前條を見よ。

はま-どう 濱どう【名】〔植〕てんきに同じ。

はま-どくさ 濱土賊【名】〔植〕いぬどくさ（犬土賊）に同じ。

はま-どほり 濱通【名】はますぢ（濱筋）に同じ。

はま-とらのを 濱虎尾【名】〔植〕どうていらん（とうてい蘭）に同じ。

はま-な 濱菜【名】濱邊に生ひて、食用に供すべき草。いそな。萬葉「あごの海の荒磯（アリソ）の上に濱菜つむあま少女らが」

はま-な【名】〔植〕㊀つるな（蕃杏）に同じ。㊁やまがらし（山芥）に同じ。㊂をとこよもぎ（男艾）に同じ。

はまな 濱名【名】〔地〕はままつ（濱松）の古稱。

はま-なか 濱中【名】濱の中ほど。海濱。新六「濱中に潮風ばかり音づれて片だよりなきあまの宿かな」

はま-なげ 破魔投・濱投【名】江戸時代に、破魔弓の的とする破魔を、木にて作り、兒童の、これを投げて遊びしこと。兒童數人、雙方に分れ、對ひあひて並び、その間の地上に堺の線を引き、濱を相手のころがし來たる時、こなたの境へ入らぬ內に、竹・木など、細長き物にて打ち止め、もし打ち止め得ずして、堺を越えしめたる時は、負とす。はんままは。

はまな-こ 濱名湖【名】〔地〕遠江國濱名・引佐（イナサ）兩郡に跨れる半鹹湖。東西七里餘、南北十里に近し。もと淡水湖なりしが、明應七年、海嘯によりて、海水と相通じ、寶永四年の地震に、湖口更に崩壞して、一里半に達す。濱名橋かかり、風光明媚なり。別稱、遠湖・濱名海（ハマナノウミ）。いまぎれ（今切）・あらゐのせき（新居關）參照。

はま-なし 濱梨【名】〔植〕㊀いはなし（岩梨）に同じ。㊁こけもも（苔桃）に同じ。

はま-なす 濱茄子・玫瑰【名】〔植〕薔薇（バイラ）科に屬する落葉灌木。高さ二三尺に達し、刺密生し、葉は奇數羽狀複葉にして、楕圓形の小葉より成る。夏日、紅色又は白色にして、薔薇のに似て、香氣高き五瓣の花開き、茄子に似たる形の果實を結ぶ。根は單寧（タンニン）に富めるため、染料に供すべく、花は香水を得べく、果實は生食するに適し、又、煮てジャムを製す。秋田八丈絹は、この染料を用ひたるなり。

（はまなす）

はま-なすみ 濱なすみ【名】牡荊（ニンジンボク）の實（ミ）。はまはひ。字鏡「牡荊實、波厤波比。又云、波厤奈須彌」

はま-なたまめ 濱刀豆【名】〔植〕荳（マメ）科に屬する多年生の草。全形、刀豆（ナタマメ）に似、葉は三小葉より成る羽狀複葉をなす。夏季、花莖出でて、淡紅紫色なる小花開き、後、莢を結び、黑茶褐色の種子を藏す。種子には毒ありといふ。我國、暖國の海

邊に自生す。いそまめ。

はま-なっとう 濱納豆【名】はまなっとう（濱名納豆）の略。

はま-なつめ 濱棗【名】〔植〕鼠李（クロウメモドキ）科に屬する落葉灌木。高さ七八尺、葉は卵形又は倒卵形をなし、下面に三條の肋あり、基部に刺あり。夏季、葉腋に、五瓣・淡黃綠色の小花、密集して開く。果實は半球形の乾果にして、上部の周圍に翼狀の緣あり。我國、暖地の海邊に自生す。かやなつめ。さるかきいばら。

はま-なでしこ 濱撫子【名】〔植〕㊀はまぼっす（濱拂子）に同じ。㊁ふぢなでしこ（藤撫子）に同じ。

はまな-なっとう 濱名納豆【名】『遠江國濱名、即ち今の濱松市なる大福寺にて製し創めしものなるよりいふ』煮たる大豆を小麥粉にてまぶして、醱酵せしめ、食鹽水に浸し、生薑（シヤウガ）・山椒・紫蘇・芥子等の香料を加へて殖（ネカ）し、後、二日ほど日に乾したる納豆。古の鼓（クキ）の遺製なるべしといふ。濱納豆。濱松納豆。和合人「何（ナン）だ。からすみ・雲丹（ウニ）・濱名納豆か」

はまな-の-うみ 濱名海【名】〔地〕はまなこ（濱名湖）に同じ。名寄「早くこし濱名の海に立ちかへりむすばぬ浪も契ありけり」

はまな-の-はし 濱名橋【名】遠江國濱名湖の今切（イマギレ）とならぬ以前、湖と海との間にありし濱名川に架せる橋。貞觀四年、創めて架設す。長さ五十六丈。明應の海嘯以來、渡船によりて往來を通ぜしが、明治十四年、中央に三堤を築きて、再び架橋し、舊名を取りて、濱名橋（ハマナハシ）といふ。堤を合はせて、全長二千六百三十八間。更科「濱名の橋、下りし時は、黑木を渡したり」

はまな-ばし 濱名橋【名】〔地〕前條を見よ。「略。

はま-なべ 蛤鍋【名】はまぐりなべ（蛤鍋）の

はま-なみ 濱波【名】濱に寄する波。萬葉「家づとに貝ぞ拾（ヒリ）へる濱波はいやしくしくに高く寄すれど」

はま-なみ 濱並【名】『はま（濱）㊂を見よ』河岸（カシ）のならび。河岸のつづき。〔大阪の語〕一代男「跡つけの男を待ち合せ、あそこの辻、ここの濱なみに立ちつくし」

はま-なや 濱納屋【名】濱側（ハマガハ）㊁にある納屋。河岸藏（カシグラ）。〔大阪の語〕五十年忌歌念佛「濱納屋の下で組んづ轉んづして居た」

はまなり-しき 濱成式【名】〔書〕和歌七病・和歌三種體等、藤原濱成の定めたる歌の式を記せるもの。一卷。一名、歌經標式。

はま-にかい 濱二階【名】濱邊にある家の二階。海に面せる二階屋。若風俗「座敷は、菱屋六左衞門が濱二階」

はま-にがな 濱苦菜【名】〔植〕㊀菊科に屬する多年生の草。根は長く、莖は匍匐・分岐し、葉は互生し、腎臟形にして、三淺裂又は三分裂をなし、頂上の裂片は、更に三裂することあり。夏日、花莖數岐を出だして、黃色の頭狀花を開く。せんたうこ。はちぢやうな。はまいてふ。㊁はちぢやうな（八丈菜）㊀に同じ。㊂ばうふう（防風）に同じ。〔古語〕和名「防風。一名、屛風、波末須加奈。一云、波萬邇賀奈」

はま-にし 濱西【名】陰曆九月頃に、續きて吹く西風。〔畿內・中國の船人の語〕

はま-にんじん 濱人參【名】〔植〕はまぜり（濱芹）㊀に同じ。「同じ。

はま-にんにく 濱忍辱【名】〔植〕てんきに

はま-にれ 濱楡【名】〔植〕㊀きがんぴ（蕘花）に同じ。和名「蕘華、波末邇禮」㊁ばうふう（防風）に同じ。

はま-ねこ 濱猫【名】〔動〕かもめ（鷗）を云ふ。〔武藏國本牧（ホンモク）・下總國の方言〕

はまの-は 濱野派【名】濱野政隨（マサユキ）を祖とする、彫金工の一派。

はまの-まさご 濱眞砂【名】〔書〕四季・戀・雜の各題を設けて、歌詞を集め、作例を示したるもの。二卷。有賀長伯の著。

はま-ばうふう 濱防風【名】〔植〕㊀繖形科に屬する多年生の草。高さ一尺餘に達し、淡褐色の長軟毛密生し、葉は一回もしくは二回三出羽狀複葉にて、長葉柄を有し、互生す。六月頃、莖頂に、白色の小花、複繖形花序をなして開く。香氣と辛味とを具ふるを以て、新葉・新莖を、膾又は漬物に添へて食ふ。いせばうふう。きばうふう。やほやばうふう。「石防風」㊁ばうふう（防風）に同じ。「に同じ。

はま-はぎ 濱萩【名】〔植〕はまごう（蔓荊）

はま-はこべ 濱繁蔞【名】〔植〕石竹科に屬する多年生の草。高さ約一尺に達し、葉は長楕圓形にて、對生す。五六月の頃、白色の小花、聚繖花序をなして開く。我國、北部の海岸の砂地に自生す。

はま-ばせう 濱芭蕉【名】〔植〕はまおもと（濱萬年青）に同じ。

はま-ばた 濱端【名】はまべ（濱邊）に同じ。宇治「濱ばたに打立ちて」太平記「博多の濱端十三里に、石の堤を高く築きて」

はま-はたざを 濱旗竿【名】〔植〕十字花科に屬する多年生の草。高さ約一尺に達し、葉は卵形又は長楕圓形にして、やや莖を抱く。春・夏の候、白色の花、總狀花序をなして開く。我國、北部の海邊に自生す。

はま-ははき 濱箒【名】〔植〕次條に同じ。

はま-ははきぎ 濱箒木【名】〔植〕にはやなぎ（庭柳）に同じ。

はま-はひ 濱はひ【名】㊀〔植〕はまごう（蔓荊）に同じ。本草和名「蔓荊子、波末波比」㊁〔植〕いはだれさう（岩垂草）に同じ。㊂はまなすみ（濱なすみ）に同じ。字鏡「牡荊實、波麻波比。又、波麻奈須彌」「じ。

はま-はふ 濱はふ【名】〔植〕前條㊀に同

はま-ぶたへ 濱羽二重【名】はまぎぬ（濱絹）に同じ。

はま-び 濱邊【名】はまべ（濱邊）に同じ。〔古語〕萬葉「玉の浦に船をとどめて濱びよりうらいそを見つつ」

はま-ひえがへり 濱稗がへり【名】〔植〕禾本科に屬する草。海邊に自生し、莖の高さ一尺四五寸、夏日、梢上に、穗莖を抽き、拘尾草（エノコログサ）のに似たる穗を出だす。

はま-ひさかき 濱柃【名】〔植〕山茶（ツバキ）科に屬する灌木。形、やや柃に似、葉は革質・倒卵形にして、鈍鋸齒あり。春季、綠白色の花を開き、暖地の海岸に自生す。いそひさかき。

はま-ひさぎ 濱楸【名】濱邊にある楸なりとも、又、いつさきといふ木をいへるなるべしとも、久木にて、久しく世を經たる木、即ち老樹なるべしともいふ。〔古語〕萬葉「波間より見ゆる小島の濱ひさぎ久しくなりぬ君に逢はずして」

はま-びさし 濱庇【名】『伊勢物語に、前條に引ける萬葉集の歌を誤りたるに基づく語といふ』濱邊にある家。はまや。苫庇（トマビサシ）の類。〔古語〕伊勢「浪間より見ゆる小島の濱びさし久しくなりぬ君に逢ひ見で」

はま-びし 濱菱・蒺藜【名】〔植〕蒺藜（ハマビシ）科に屬する一二年生の草。海邊の砂地に自生し、蔓狀をなして、地上に偃臥す。葉は偶數羽狀複葉にして、互生し、夏季、葉腋に、小き黃色・五瓣花開き、後、菱のに似たる實を結ぶ。果實を藥用に供す。しろびし。和名「蒺莉、波末比之」

はまびし-くわ 蒺藜科【名】〔植〕顯花植物・被子類・雙子葉門・離瓣花區の一科。主として、熱帶又は亞熱帶の產。我國には、蒺藜の一種を產するのみ。

はま-びと 濱人【名】濱に住む人。濱邊の人。うらびと。續古今「四方の海昔にかへる波の上に濱人今やみかり待つらん」

はま-びは 濱枇杷【名】〔植〕樟（クス）科に屬する喬木。高さ二丈に餘り、葉は互生し、深綠色を呈し、網狀脈あり。花は雄花と雌花とに分れ、果實は卵狀楕圓形にして、色靑黑し。けいじゆ。

はま-ひばり 濱雲雀【名】〔動〕燕雀類に屬する鳥。わが、千島に產し、普通の雲雀よりやや小く、頭上には、左右に、耳狀をなせる羽毛の總あり。額と頰と胸部の上方とは、黑色を呈す。

はま-びめ 濱姬【名】濱邊に住める女。あま。〔古語〕夫木「秋風のふきでの濱の濱姬は夜寒になれや衣片敷く」

はま-ひるがほ 濱晝顏・濱旋花【名】〔植〕旋花（ヒルガホ）科に屬する多年生の草。海邊に多く、莖は地に臥し、葉は腎臟形に近く、四五月頃、淡紅色・漏斗狀の花を著く。あ

ふひかづら。あめふりばな。かっぱらばな。はまちばな。へびあさがほ。

はま-ぶぎやう 濱奉行【名】はまごてんぶぎやう（濱御殿奉行）の略。

はま-ふくら 濱ふくら【名】〔植〕㊀きがんぴ（蕘花）に同じ。㊁やぶたばこ（藪烟草）に同じ。〔古語〕和名「天名精。一名、麥句薑、波末太加奈。一名、波㾃不久良」

はま-ぶね 濱船【名】濱邊を往來する船。〔古語〕夫木「藻鹽汲むいほの濱船苫朽ちて波路はれせぬさみだれの空」

はま-べ 濱邊【名】濱のほとり。はまばた。はまび。うみばた。

はまべ-の-くろんど 濱邊黑人【名】〔人〕『やまべのあかひと（山邊赤人）をもぢりたる稱』狂歌師。俗稱は三河屋平兵衞。江戸本芝（ホンシバ）の書肆。入花と稱して、點料を取ることを創意す。文化頃の人。

はま-べんけいさう 濱辨慶草【名】〔植〕紫草（ムラサキ）科に屬する多年生の草。高さ一二尺に達し、傾臥の性あり。別に、匐枝に依りて延蔓す。葉は卵形又は倒卵形にして、全緣、下部の葉にのみ葉柄あり。紫碧色の花、聚繖花序をなして開く。北地の海濱に自生し、藥用に供す。えいばぶし。

はま-ぼ 濱棒【名】〔植〕次條の約。

はま-ぼう 濱棒【名】〔植〕㊀錦葵（ゼニアフヒ）科に屬する落葉灌木。高さ約一丈に達す。葉は圓くして、先端尖り、下面は軟毛密生す。初夏、形、木槿（モクゲ）のに似て、黄色にして、中心に紅紫色を帶びたる花開く。我國、暖地の海岸に自生す。きむくげ。〔黄槿〕㊁はまごう（蔓荊）に同じ。

はま-ぼだいじゆ 濱菩提樹【名】〔植〕もくげんじ（欒樹）に同じ。

はま-ぼっす 濱拂子【名】〔植〕櫻草科に屬する多年生の草。高さ六七寸に達し、枝を分岐す。莖・葉共に多肉にして、葉は全緣にして、篦形又は廣披針形をなし、帶紫黄綠色を呈し、六月頃、五深裂をなし白色にして紅斑ある花、繖房花序をなして開く。海岸の砂地に自生す。はまなでしこ。

はままし-け 濱益【名】〔地〕石狩國九郡の一。札幌支廳の所管。

はま-まち 濱町【名】海濱にある町。

はま-まつ 濱松【名】㊀濱に生ひたる松。萬葉「ぬばたまの夜あかしも船は漕ぎゆかな三津（ミツ）の濱松待ち戀ひぬらむ」㊁〔植〕をかひじき（陸鹿尾菜）に同じ。㊂黑色の珊瑚。くろさんご。

濱松の音（トオ）【句】㊀濱松に風の吹きあたる音。濱松風の音。㊁次條の略。天神記「ざざんざ唄へば、雇嚊（ヤトヒカカ）・出入の者が、皺袴伸（ノ）して張り上げ、濱松の音三國一とぞ謠ひける」

濱松の音（トオ）はざざんざ【句】昔時、祝の酒宴などの時に謠ひたる小謠の一節。狂言（茶壺）「ざざんざ、濱松の音はざざんざ。ああ、いから醉うた事かな」

はま-まつ 濱松【名】〔地〕㊀遠江國にある市。東海道の要衝に當り、鐵道東海道線の停車場あり。井上氏の舊藩地。古稱、濱名（ハマナ）。㊁明治の初年設置の縣の一。遠江全國を管せしもの。九年、靜岡縣に入る。

はままつ-かぜ 濱松風【名】濱松に吹き當る風。濱の松風。心中宵庚申「吹き傳へたる濱松風」

はままつ-じやう 濱松城【名】遠江國濱松市の北にありし城。新・古二址あり。古城は、引馬（ヒクマ）城と呼び、もと濱松の玄默に在りて、永正中、三善爲連、久野某に命じ築かしめしものと傳へ、永正十二年、大河內貞綱、據りて、今川氏に叛き、天文・永祿の頃、飯尾乘連・同乘龍居りしが、永祿三年、德川家康取りて居城とす。新城は、その西に在りて、天正五年、家康の、本多重次に築かしめしもの。家康江戸に移るに及び、堀尾吉晴居り、關ケ原の役後、德川氏の舊臣封ぜられ、寶曆八年以後、井上正經の子孫に傳へ、明治維新に及べり。

はままつちゆうなごん-ものがたり 濱松中納言物語【名】〔書〕平安朝時代末期の小說。中納言なる人、前世の父を見んと欲して渡唐するに端を發し、唐帝の皇后にして、往年、唐使の日本に來りし折、筑紫にて、某宮腹の女に設けしものとの間に、戀愛關係の生ぜし等の事を記せるもの。四卷・八册。今存するものは、前後に脫漏あるに似たり。作者は菅原孝標（タカスエ）の女と傳ふ。一名、御津（ミツ）の濱松。

はままつ-な 濱松菜【名】〔植〕をかひじき（陸鹿尾菜）に同じ。

はままつ-なっとう 濱松納豆【名】はまなっとう（濱名納豆）に同じ。

はま-みち 濱道【名】はまぢ（濱路）に同じ。夫木「思ひ出づる人の袖もやこほるらん馴れしなみゆきの志賀の濱みち」

はま-むぎ 濱麥【名】〔植〕こうぼふむぎ（弘法麥）に同じ。

はま-むし 濱蒸【名】はまやき（濱燒）に同じ。

はま-むらさき 濱紫【名】〔植〕㊀すなびきさう（砂引草）に同じ。㊁つるな（蕃杏）に同じ。

はまむら-や 濱村屋【名】〔人〕瀨川菊之丞の家號。柳樽「人の波打つは舞子の濱村屋」娼妓絹籭「掛硯に凭れかかってゐる女郎は、素人繪の濱村屋だ」

はま-も 濱藻【名】㊀濱にある藻。濱に打ち寄せられたる海藻。海藻。爲忠百首「西へ行く水に宿れる月影は山のはま藻のすみかなりけり」㊁〔植〕ほんだはら（馬尾藻）に同じ。紀「とこしへに君もあへやもいさなとり海の濱藻の寄る時時を。……時人號二濱藻一、謂二奈能利曾毛一也」

はま-もくこく 濱木斛【名】〔植〕しやりんばい（車輪梅）に同じ。

はま-もと 濱元【名】鹽濱にある鹽の製造もと。

はま-もんちりめん 濱紋縮緬【名】近江國長濱附近より產する紋縮緬。紋織の濱縮緬。

はま-もめん 濱木綿【名】〔植〕はまおもと（濱萬年青）に同じ。

はま-や 濱屋【名】濱邊にある家。はまびさし。はまやかた。狹衣「かきつめつつ恨みきこえたまふさま、あまの濱屋に餘りぬべし」

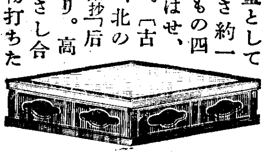
はま-や 破魔矢・濱矢【名】㊀破魔弓㊀に番ひて放つ矢。㊁棟上の式に、破魔弓㊁と共に用ふる、二本の、矢の形せる物。檜にて製し、長さ六尺五寸、奉書紙を、長さ一尺八寸、幅五寸八分に裁ちて羽とし、根は、一は鏑（カブラ）、一は雁股（カリマタ）の形とす。

はまや-かた 濱屋形【名】はまや（濱屋）に同じ。藻鹽草「はま屋形」

はま-やき 濱燒【名】『もと鹽濱にて燒きし故とも、濱邊の砂の上に、火を焚きて燒きし故ともいふ』鯛を、腹を割かずに、鰓孔より、鰓と內臟とを拔き取りて、水にて洗ひたる上、竹串を、鰓下より縱に貫き通し、鰭を伸ばしなどして、形を整へ、火爐の兩方に、一本づつ、火の方に傾けて立てて燒き、又、裏返して燒くこと、又その燒き方の魚。はまむし。一代男「濱燒の中程を、不束（フツカ）に挾みて」

はまやき-だひ 濱燒鯛【名】濱燒にせる鯛。

はま-ゆか 濱床【名】『四面に洲濱（スハマ）の形あるよりいふとぞ』㊀古、帳臺（チヤウダイ）を立つる時、その柱の臺として据ゑし、方形の床。高さ約一二尺、三尺四方ほどのもの四箇を、正方形に並べ合はせ、その上に疊を敷けり。〔古語〕空穗「御濱床立て、北の方するゑ奉り」雅亮裝束抄「后の宮などのに、濱床あり。高さ二尺ばかり、四つにさし合はせておく。黑塗金物打ちたり。その上にさしみてたる雲繝（ウゲン）二帖を、北南に敷く」㊁〔建〕はまえん（濱緣）に同じ。



（はまゆか㊀）

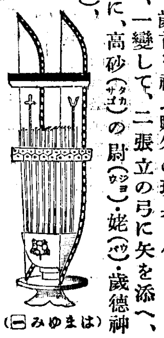
はま-ゆき 濱行【名】橫濱に送り出し、輸出物として、外國人に賣る目的の、安價なる美術工藝品。〔明治初年の東京の語〕

はま-ゆさん 濱遊山【名】濱邊にて、魚介などを採りて遊ぶこと。

はま-ゆふ 濱木綿【名】㊀〔植〕はまおもと（濱萬年青）に同じ。（莖の皮重なれるより、歌に、多く重なる意の言葉に續けて用ふること多し）〔文殊蘭〕萬葉「み熊野（クマノ）の浦の濱木綿百重（モモヘ）なす心は思（モ）へどただに逢はぬかも」太平記「浦の濱木

綿、幾重とも知らぬ浪路に鳴く千鳥」㊁『前記の萬葉集の歌に本づきていふ』多く重なり隔たることの譬。源氏「濱木綿ばかりの隔さし隱しつつ、何くれともてなし紛はしたまふ」

はま‐ゆみ　破魔弓・濱弓【名】㊀昔、正月、破魔㊁を射るに用ひし弓。江戸時代以後行はれしが如く、射禮（シヤライ）の遺風なるべしといふ。元祿の頃よりは、專ら男兒のために、歲首を祝ふ贈答の玩具と化し、その製も、一變して、二張立の弓に矢を添へ、中央に、高砂（タカサゴ）の尉（ジヨウ）・姥（バウ）・歲德神（トシトクジン）、その他、松竹梅などを飾り、金銀の箔を置きなどするに至る。**はまなげ**（破魔投）參照。織留「正月に破魔弓進じて」㊁棟上の式に、破魔矢と共に屋上に建つる、二張の弓の形のもの。勝軍木（ヌルデ）・檜又は竹にて、長さ一丈二尺八寸、太さ一寸八分に作り、弦には、左撚の苧を用ふ。


（はまゆみ㊀）

は‐まゆみ　葉衞矛【名】〔植〕**まさき**（柾）に同じ。

はま‐よもぎ　濱艾【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。高さ三四尺に達し、莖も、葉も、白色を帶び、葉は深く羽狀に缺刻し、各裂片は狹長、秋季、莖梢に枝を分ち、褐色の小花、頭狀花序をなして開く。わが暖地の海邊に自生す。ふくど。字鏡「蔛・蕘・菰、三形同。……波萬與毛木」

はまり　嵌・塡【名】㊀はまること。嵌入。㊁あてはまること、又その度合。㊂のみこむこと。會得。合點。㊃鷹の取らんとする鳥の、追はれて落つること、又その落ちたる場所。「鷹狩の語」藻鹽草「はまり、追ひおとしたる鳥なり」㊄色香などに迷ひ耽ること。惑溺。執心（シフシン）。**おはまり**（御嵌）㊀參照。五代女「おせんさまの情（ナサケ）次第に、何國（イヅクニ）までも參りて、……と、わが物にして行くは、久七がはまりなり」置土產「萬事をつとめけるは、これ、大分のおはまりなり」㊅謀に陷ること。だまさるること。**おはまり**（御嵌）㊁參照。

はまり‐かた　嵌肩・塡肩【名】二人以上にて物を舁く時、その肩の高さの、よく揃ふこと、又その人。

はまり‐きゆう　濱離宮【名】東京市京橋區築地（ツキヂ）四丁目の南、品川灣に面する所にありし離宮。面積四萬四千五百坪。德川氏の時代には、濱御殿と稱す。慶應二年、海軍奉行の管轄に移し、二年、軍務官及び外國官の所管となり、同三年、宮內省に移管す。大正十二年の大震火災後、東京府に下賜せらる。

はまり‐こむ　塡込む・嵌込む【動四自】**はまる**（塡る）㊄㊅に同じ。

はまり‐やく　嵌役・塡役【名】あてはまる役。適當なる役目。

はまる　嵌る・塡る【動四自】㊀嵌（ハ）むるに適す。しつくりと合ひて入る。嵌入す。㊁あてはまる。かなふ。適當す。㊂よくわかる。合點ゆく。㊃落つ。陷る。おぼる。「京都・大阪邊の語」狂言（飛越）「この川へはまらうとなされた」曠野（胡及）「行く人や堀にはまらん村すすき」㊄色香などに迷ひ耽る。おぼる。はまりこむ。惑溺す。五人女「文（フミ）にして嘆き、茂右衞門を引き躡けてはまらせんと、數數搔きくどき」㊅謀に陷る。思ふつぼに落つ。一杯くはさる。だまさる。かつがる。はまりこむ。雙生隅田川「どこぞ、よその御使らしう、私をはめて、お笑ひぐさか。はまらぬ、はまらぬ」

はま‐れんげ　濱蓮華【名】〔植〕**すずしろさう**（蘿蔔草）に同じ。㊁**べんけいさう**（辨慶草）に同じ。

はま‐わ　濱回【名】**うらわ**（浦回）に同じ。蜻蛉「瀨田の橋……。さて、ありし濱わに至りたれば、迎の車、出で來る」

はま‐ゑんどう　濱豌豆・野豌豆【名】〔植〕荳（マメ）科に屬する多年生の草。高さ約一二尺にして、地に臥し、上部は斜上し、全形、豌豆に似て小し。葉は偶數羽狀複葉をなし、先端に細鬚出で、莖も葉も、綠白色にして、五月頃、穗狀の花を開き、初は紫色、後、碧色となる。種子は、やや豌豆のに似たり。いぬのらまめ。ときはふぢ。のゑんどう。

はまを‐あらた　濱尾新【名】〔人〕樞密院議長。兵庫縣士族。明治五年大學南校を出でて渡米し、文部省大書記官より學務局長となり、同十八年歐洲に差遣せられ、後、貴族院議員・帝國大學總長・文部大臣を經て、四十年男爵を授けらる。なほ樞密院顧問官となりて、東宮太夫を兼ね、東宮御學問所副總裁となり、大正十年子爵を陞授せられ、樞密院副議長・同議長に歷任し、十四年、一時內大臣を兼ねしが、同年薨ず。年七十七。

はま‐をがに　濱小蟹【名】〔動〕**あしはらがに**（葦原蟹）に同じかるべし。〔古語〕名義抄「蟚蜞、濱小加二」

はま‐をぎ　濱荻【名】㊀濱邊に生ひてある荻。萬葉「神風の伊勢の濱荻折りふせて旅寢やすらむ荒き濱邊に」㊁〔植〕**あし**（葦）に同じ。嘉應二年住吉社歌合「伊勢島には濱荻と名づくれど、難波わたりには、あしとのみいひ、あづまの方には、よしといふなる」菟玖波集「物の名も所によりて變りけり（といふ句に）難波の葦も伊勢の濱荻」

はま‐をんな　濱女【名】㊀濱邊に住む女。㊁船つきなどに居りて、婬を鬻（ヒサ）ぐ女。一代男「坂田の濱女、總嫁（ソウカ）の身ぶり」

はみ　食【名】㊀食むこと。生活。扶持。㊁**ひさりばみ**（一人食）を見よ。

食（ハミ）が荒い【句】大食なり。

はみ　馬銜・鑣【名】『**はみ**（食）の轉義。**はみさき**（食先）參照』㊀轡の、馬の口に含む所。今川大雙紙「轡の名所の事、はみ・ほうみ・立聞」㊁悍馬を制せんため、口に繩を食ませて、頂に縛りおくこと、又その繩。

はみ　蝮・蝮蛇【名】〔動〕『這靈（ハヒ）の略なるべし。**へみ**（蛇）・**へび**（蛇）も、この語の轉なるべし。**うはばみ**（蟒）參照』**まむし**（蝮）に同じ。和名「蝮、波美」

はみ　續斷【名】〔植〕㊀**おにのやがら**（鬼矢幹）に同じ。和名「續斷、波美。一云、於邇乃夜加良」㊁**をどりこさう**（踊子草）に同じ。

は‐みがき　齒磨【名】齒磨楊枝につけ、齒を磨きて、清潔ならしむるに用ふるもの。沈降性炭酸マグネシヤ・同炭酸石灰を主成分とし、なほ、諸種の防腐劑・香料・無害染料を加ふ。粉狀なるを普通とすれど、煉（ネリ）齒磨・水齒磨もあり。往時には、輕石の粉末、牡蠣殼粉、烏賊（カイ）の甲、房州砂などに染料を加へて製したり。はみがきこ。和合人「鹽よ、楊枝よ、齒みがきよと、大騷となり」

はみがき‐うり　齒磨賣【名】齒磨を賣る人。江戸時代には、すべて行商にて、俳優の聲色（コワイロ）を、餘興として、聞かせなどせり。塵塚談「齒磨賣、一袋六文・八文なり」

はみがき‐こ　齒磨粉【名】粉狀に製したる齒みがき。

はみがき‐ぶらし　齒磨刷毛【名】次條を見よ。

はみがき‐やうじ　齒磨楊枝【名】齒磨をつけて、齒を磨くに用ふる楊枝。多くは小形のブラシを用ふ。齒磨ぶらし。刷毛楊枝（ハケヤウジ）。みがきやうじ。

はみ‐かへす　食返す・癁す【動四自】次條㊂に同じ。

はみ‐かへる　食返る【動四自】㊀はみて後戾（アトモドリ）す。食ひて歸る。賴政集「春過ぎていくかになればまこも草あさりし駒のはみかへるらん」㊁『**はむ**（食む）㊁を見よ』魚、あぎとひしつつ返る。平家「この海豚はみかへり候はば、源氏亡び候なんず、はみ通り候はば、みかたの御いくさ危くおぼえ候」㊂病氣再發す。復（ブク）びる。病みつく。はみかへす。ぶりかへす。〔癁る〕天の網島「跡からはみかへる、そも、いかなる病ぞや」

はみ‐こぼす　食零す【動四自】食ひて、その物を落しこぼす。蕪村「寺寒く樒はみこぼす鼠かな」

はみ‐さき　波見崎【名】〔地〕丹後國與謝（ヨサ）郡波見村に屬し、東方、黑岬と對して、宮津灣口を扼せる岬。

はみ‐さき　食先【名】轡の一部。馬の口中に入る、中央の所。**はみ**（馬銜）㊀參照。

はみず‐ごけ　葉不見蘚【名】〔植〕蘚類に屬する苔蘚類。樹陰などの陰地に自生し、

雌雄あり。雌本は通常叢生して、高さ約一寸、その地に接する部分に、鋭く尖れる綠葉數筒を有し、上部には毛茸ある蒴を有す。雄本は株を異にして生ずれども、微細にして見るを得ず。

はみ-だし 食出【名】㊀はみだすこと、又その物。㊁次條の略。長町女腹切「二口屋のはみだし、猪熊（キノクマ）の革柄（カハツカ）」

はみだし-つば 食出鍔【名】鞘及び柄の上へわづかに食み出したる鍔。短刀のに限る。はみだし。夕霧阿波鳴渡「食出鍔も神さびて」手習鑑「食出鍔の小脇差」

はみ-だす 食出す【動四自】㊀ふくれ餘りて、隙間より、外部へあらはれ出づ。はみでる。八笑人「口の端（ハタ）へ、泡がはみだすから、塗りにくくってならねえ」㊁食むことをしだす。食ひはじむ。

はみちっく-ご ハミチック語（英 Hamitic languages）【名】次條に同じ。

はみちっく-ごぞく ハミチック語族（英 Hamitic family of languge）【名】〔語〕語族の一。ハミチック人種の用ふるものにて、主に亞弗利加洲の北部に分布し、古代の埃及（エジプト）語、北部亞弗利加洲のリビヤ語、東部亞弗利加洲のエシオピヤ語、これに屬す。尙、セミチック語族をも、これに包含せしめて呼ぶ學者あり。はむ語。

はみちっく-じんしゅ ハミチック人種（英 Hamitic race）【名】人種の一。セミチック人種と共に、歐羅巴人種中、南方の部類に屬するもの。リビヤ人・埃及（エジプト）人・東方亞弗利加人、これなり。はむ人。

はみ-でる 食出る【動下一自】はみだす（食出す）㊀に同じ。

はみ-とほる 食通る【動四自】魚、あぎとひしつつ通過す。はみかへる（食返る）㊁參照。〔古語〕

は-みの 羽蓑【名】とりみの（鳥蓑）に同じ。

はみ-のこし 食殘【名】はみのこすこと、又、はみのこしたる物。くひのこし。空穂「誰か、その姪のはみのこしは欲しき」

はみ-のこす 食殘す【動四他】食ひ盡さずして、一部を殘す。くひのこす。

はみ-もの 食物【名】くひもの（食物）㊀に同じ。盛衰記「そのはみ物の料に、青田・青麥を刈らんに」「同じ。

はみ-をけ 食桶【名】かひばをけ（飼葉桶）に同じ。〔古語〕

はむ 鱧【名】〔動〕はも（鱧）に同じ。和名「鱧魚。本草云、鱶魚、波无。味甘寒無毒者也。陶隱居注云、鱶今作二鱧字一也」

鱧も一期（イチゴ）、蝦（エビ）も一期【句】「鱧（モ）も一期、蝦も一期」に同じ。〔諺語〕

はむ 火腿・燻腿（英 Ham）【名】獸肉、特に豚の腿肉を、鹽漬にし、且つ燻製にしたる食品。べえこん（燻肉）參照。

はむ 食む【動四他】㊀『は（齒）』に語尾の添ひたる語』食ひ又は飲む。口に入る。喫す。萬葉「瓜はめば子ども思ほゆ栗はめばましてしぬばゆ」同「婆羅門の作れる小田をはむ烏まなぶたはれてはたほこにをり」㊁あぎとふ。噞喁す。字鏡「喁、噞也。乃三豆。又、須不、又波無」盛衰記「海豚（イルカ）、鹽吹き立て、食みて來たる」㊂祿・知行などを受く。

身食（へ）をむ【句】自ら、その身を害ふ。平家「貪欲は必ず身をはむといへり」

はむ 食む【動下二他】はましむ。食はす。〔古語〕伊勢「夜も明けば狐（キツ）にはめなんくだかけのまだきに鳴きてせなを遣りつる」

はむ 嵌む・塡む【動下二他】㊀はまるやうにす。しっくりと合ひて入るやうにす。さしいる。さしこむ。はめこむ。㊁おとしいる。投げ入る。投げ込む。投ず。萬葉「鶯の鳴くくら谷に打ちはめて燒けは死ぬとも君をし待たむ」盛衰記「髻を切り、湖水にはめよ」㊂耽り溺れて、身をうちこむ。深入せしむ。沈ます。生玉心中「嘉平次故に、身をはめて、替るまいとの七枚起請」㊃欺き陷る。思ふつぼにおとす。一杯くはす。だます。かつぐ。たらす。膝栗毛「この野郎めと馴れやって、おれをはめたな」八笑人「諸人を一番はめて樂しまんと」

ばむ【接尾】その樣子のほのめき現れ、又その樣を帶ぶる意。めく。じみる。「汗ばむ」「黃ばむ」枕「あやしうかればみたる者の聲」源氏「うち紛ればみ、いかにぞや世づきたる人もおはすべかめるを」平家「怪しばうだる」増鏡「隱ろへばみて」

はむ-えきす【名】次條の訛。

はむ-えっぐ（英 Ham eggs）【名】薄切のハムに、半熟の雞卵を添へたる西洋料理。

はむ-かひ 齒向・刃向【名】はむかふこと。抵抗。敵對。

はむ-かふ 齒向ふ・刃向ふ【動四自】㊀嚙みつかんとて、齒をむき出して進み來る。㊁斬らんとて、刃物を以て進み來る。㊂たちむかふ。さからふ。抵抗す。敵對す。重帷子「刃向ひたる兵は」

はむ-き 齒向・刃向【名】齒向くこと。謠曲（熊坂）「さからずこむ長刀に、ひらりと乘れば、刃向になし」

はむ-き 羽向【名】㊀羽向くこと。㊁へつらふこと。おべっか。諂諛。根南志具佐「はむきの町人、新吾左と伴なひ來る」

はむ-き 葉向【名】葉の筋の向き方。「烟草の葉むき」

はむ-く 齒向く・刃向く【動四自】刃が、その方へ向く。はむかふ。謠曲（花櫓）「面面に、大手の木戸に刃向き寄る」

はむ-く 羽向く【動四自】權勢ある家に取り入る。勢家に親しむ。〔德川時代の語〕

はむ-け 葉向【名】草木の葉を向くること。〔古語〕新古今「いつしかと荻の葉むけの片よりにそそや秋とぞ風も聞ゆる」

はむ-け 羽向【名】鳥の、羽を、その方へ向くること。〔古語〕拾遺「秋風に山飛び越えて來る雁の羽むけに消ゆる峰の白雲」

はむ-ご ハム語【名】〔語〕はみちっくご（ハミチック語）に同じ。

はむ-さらだ（英 Ham salad の訛）【名】ハムに、鹽・酢・油及び辛味を加へ、生の菜を添へたる西洋料理。

はむ-し 羽蟲【名】〔動〕脈翅類に屬する昆蟲の一類。鳥獸類の皮膚に寄生し、羽・毛・垢などを食とし、長さ三厘餘、圓形・扁平にして、虱（シラミ）に似、家畜、殊に鷄には、有害なり。黃白色にて、翅なく、體面一般に毛多し。頭部も大に、口器よく發達し、觸角は絲狀をなす。鳥類のに一千四百餘種、獸類のに一百餘種を算す。はじらみ。定家卿鷹三百首「とやに入る八日藥師の日なればや鷹に羽蟲の藥かふらん」

はむ-じん ハム人【名】はみちっくじんしゅ（ハミチック人種）に同じ。

はむ-しや 葉武者・端武者【名】取るに足らざる武者。こっぱむしや。はしざむらひ。はざむらひ。はもの。雜兵（ザフヒヤウ）。平治「葉武者どもに、目な懸けそ」太平記「自餘の葉武者にはかからず」

は-むね 刃背【名】むね（刃背）に同じ。玉藻前曦袂「附け入るはむね蹴落され」

はむ-べり 侍り【動良變自】はんべり（侍り）に同じ。

はむら 羽村【名】〔地〕武藏國西多摩（ニシタマ）郡西多摩村の大字。青梅（アヲメ）・立川（タチカハ）兩村の中間に位し、東京市上水道の渠口あり。德川時代、玉川上水設置の時、この地にて、多摩川を分水せしに起る。

は-むれ 羽むれ【名】鳥の翼の一部。

はむろ 葉室【名】㊀〔地〕山城國葛野（カドノ）郡松尾（マツノヲ）村大字下山田の舊稱。衣笠（キヌガサ）山の東麓。太平記「葉室の前を、直違（スヂカヒ）に」㊁姓氏の一。本姓は藤原。勸修寺（クワジウジ）家の一門。參議・正三位・大藏卿爲房の第二子顯隆（葉室中納言）を祖とし、平家と婚を結びて榮え、明治維新後、伯爵を授けらる。

はむろ-あきたか 葉室顯隆【名】〔人〕ふぢはらあきたか（藤原顯隆）に同じ。

はむろ-ちゅうなごん 葉室中納言【名】〔人〕前條に同じ。

はむろ-ときなが 葉室時長【名】〔人〕朝臣。時光の子。大納言に進む。平家物語の作者と傳へらる。

はむろ-みつより 葉室光賴【名】〔人〕ふぢはらみつより（藤原光賴）に同じ。

はん 半【名】㊀なかば。半分。㊁二にて整除するを得ざる數。奇數。（丁（チャウ）に對して）㊂はんぶ（半步）に同じ。（大・小に對して）

半の數【句】〔數〕前條㊁に同じ。(「丁(ウチャ)の數」に對して)

半の日【句】はんび(半日)に同じ。(「丁(ウチャ)の日」に對して)

はん 判【名】㊀優劣・可否を分ち定むること。判定。批判。判斷。源氏「縮合(ハセア)……、この判仕うまつりたまふ」増鏡「法皇、御みづから判の詞を書かせたまへるに」㊁さばき。裁判。判決。㊂指令又は裁決の旨を記したる文書。東鑑「大和判官代邦道右筆、被ㇾ加二御筆幷御判一」㊃かきはん(書判)に同じ。㊄いんぎやう(印形)に同じ。重井筒「私(シワ)らが判では貸す人あるとの賴みやう」

判が据(スワ)る【句】證認の捺印濟む。

判が入(ヒ)る【句】證人となりて、捺印す。俗曲(恨葛露濡衣)「俺(レオ)が判の入(ヒハ)ってゐる小夜衣(サヨギヌ)、連れ出されてたまるものか」

判の占(ウラナヒ)【句】はんうらなひ(判占)に同じ。

判を押す【句】印形を捺す。

判を爲(ス)【句】前條に同じ。重井筒「判つく程は一門がひ、それで、判をしました」

判を突く【句】前條に同じ。重井筒「銀(ネカ)こそはなるまいし、判つく程は、一門がひ」

はん 反【名】㊀うらはら。あべこべ。反對。㊁そむくこと。むほん。ほんぎやく。〔叛〕㊂〔語〕はんせつ(反切)に同じ。㊃〔哲〕はんそてい(反措定)に同じ。

はん 版【名】㊀いた。㊁ふだ。㊂文書・圖畫を印刷するための物。木版・活版・石版・銅版・亞鉛版・ゼラチン版・コロタイプ版・オフセット版などあり。㊃印刷すること、又、印刷したる文字・圖畫の排列・鮮明の度など。

版で押したやう【句】同じ事を、形式的に繰り返したる形容。版行で押したやう。

はん 叛【名】はん(反)㊁に同じ。

はん 飯【名】めし。いひ。食事。義經記「はんをしたためたまはねども、痩せも衰へもしたまはず」

飯を吐きて、蜂を成す【句】『事類賦の蜂賦の自註に見ゆ』支那の葛仙公、口中の飯を吐けば、悉く飛びて、蜂となり、而も少しも螫さず、やや久しくして口を張れば、蜂また口中に入りて、飯となりきといふ故事。

はん 藩【名】㊀はんぺい(藩屛)に同じ。㊁大名の領地。諸侯の封土。〔德川時代の中期以後の語〕「仙臺藩」「薩摩藩」㊂明治二年六月諸侯の版籍奉還以後、同四年七月廢藩置縣の制を布かれし以前の行政區劃の一。藩知事の管轄區域。

はん 繁【名】しげきこと。多きこと。

はん 範【名】㊀てほん。のり。模範。規範。「範を歐米に取る」「範を後世に垂る」㊁かぎり。くぎり。範圍。「範に入らず」

はん 煩【名】㊀わづらはしきこと、又その職務。煩雜。「煩を憚らず」「煩に耐へず」㊁もだへ。煩悶。

はん 班【名】㊀ついて。順序。次序。順番。㊁くみ。れつ。ならび。仲間。㊂くらゐ。階級。㊃陸軍の編制上、小隊を小區分したるものの名稱。

はん 斑【名】まだら。ふ。ぶち。斑紋。

はん 反【接頭】『英Anti』反對なる意。非。「反キリスト教運動」

はん 汎【接頭】『英Pan』互に關係ある者を一團とする意。「汎スラブ主義」「汎太平洋會議」

はん 犯【接尾】罪名に添へて用ふる語。「放火犯」「强盜犯」「國事犯」

はん 般【接尾】事又は時の意。「今般」「先般」「百般」「全般」

はん 版【助數】書籍・雜誌などの、一回にまとめて印刷したる回數。「初版」「再版」

ばん 判【名】紙の廣さ。「判の大きさ」「四六判」「菊判」「大判」「小判」

ばん 晩【名】夕方又は夜。

ばん 番【名】㊀順順に、或事に當ること。順番。延喜式「凡諸司、毎日作ㇾ番宿直」濱松「番をもて、夜に三四人づつ、とのゐ」㊁當番。當直。宿直。空穗「宰相の中將御ばんの夜」謠曲(咸陽宮)「番の醫師は、藥の袋を」㊂見張ること、又その人。みはり。まもり。番人。竹取「母屋(ヤモ)の内には、女ども、番にすゑて守らす」伊賀越道中雙六「夜廻の番が見附ける小提灯」㊃物合(アハセ)などにて、勝負を爭ふために、人數を左右に分ちて組合はせたるもの。著聞「宮河歌合と名附けて、これも、同じく番につがひて」㊄ばんじやうゆ(番醬油)の略。㊅駐車場を設け、數人の車夫、これに屬して、乘客を、順番に乘せゆくやうにすること。

番に結ぶ【句】「番を結ぶ」に同じ。盛衰記「渡邊黨、番に結んで、これを守り」

番の太郎(タラウ)【句】藝人などの多人數の頭に立つ者。其角「踊召して番の太郎に酒たらうべん」

番を掛く【句】駐車場に居る人力車の車夫が、通行の人に聲を掛けて、乘車を勸む。

番を結ぶ【句】番組の順を追ひて事を爲す。けつばん(結番)參照。盛衰記「二十八部衆、番を結びて守護したまへば」

ばん 盤【名】㊀王朝時代に、食物を盛るに用ひし器。形圓く、皿の如きものといふ。だいばん(臺盤)㊀參照。枕「御湯(ユミ)など、北面(キタオモテ)に取次ぐ程、……、盤もひきさげながら急ぎてぞ見るや」大鏡「臺盤所におはしまして、御臺(ミダイ)や盤などまで、手づから拭はせたまふ」日中行事「藏人、殿上の撤(マカリ)の盤を持ちて」㊁すごろくばん(雙六盤)・ごばん(碁盤)又はしやうぎばん(將棋盤)の略。盤局。枕「雙六(スゴロク)……筒(ウド)を、盤の上に立てて」源氏「御碁打たせたまへといふ……打たんとおぼしたれば、盤取りにやりて」㊂大なる青石。〔佐渡國の方言〕北窻瑣談「佐渡の方言に、青石の大なるを、盤といふ」

中(チュウ)の盤【句】前條㊀の、中位の大さなるもの。徑七寸なりといふ。一説に、臺盤の、長臺盤と小臺盤との中間の大さのものの義にて、切(キリ)臺盤の異稱なるべしともいふ。延喜式「朱塗大盤一枚、同中盤一枚」枕「ひさげ・銚子・中の盤・圓座(ワラフダ)」延長御記「盛二中垸一置二中盤二」

ばん 旛【名】〔佛〕『梵Pitākā』佛世尊の威德を標幟せんがため、又は福を祈るに立つる旌旗。

ばん 蠻【名】㊀四夷の一。南方のえびす。㊁やばん(野蠻)に同じ。

ばん 鷭・方目【名】〔動〕涉禽類に屬する鳥。大さ鳩ほどにして、背部橄欖色、頭・頸・腹共に灰色、嘴は扁く、その根部は紅色、先端は黃色なり。前額に、裸出して、赤色を呈せる板狀體あり。尾短く、脚、比較的に大く、趾間に膜なし。步行速かにして、沼澤・河湖の近傍に棲息す。四月頃より九月頃にかけて、我國各地に多し。こばん。おほばん(大鷭)參照。

鷭の御成(オナリ)【句】ばんおなり(鷭御成)に同じ。

ばん 萬【數】千の十倍。まん。よろづ。

ばん 萬【副】いかなる點より考へても。ばんばん。「萬已(ヤ)むを得ざる場合」

ばん 番【接頭】商店などにて、數多く備へおき、番號を附して、雜用に供する品の意。「番茶」「番傘」

ばん 番【助數】㊀順序・等級の數。㊁同種の品の内の、大いさの等級の數。五人女「二番の木地長持一つ」㊂相撲(スマフ)・物合(アハセ)・舞樂などの取組・組合などの數。㊃能(ノウ)・謠曲・雙六(スゴロク)などの段落の數。

ぱん 麪包・麵包・麪麭・麵麭(葡Pão)【名】『漢字の包は、原語の音譯にて、支那音、パンに近し。麪・麵は小麥粉を材料としたる食品の總稱。麭は、包が、上の字と同一の偏を帶ぶるに至れるものにて、儌幸を僥倖とも書くと同樣の變化なり。めんるゐ(麵類)參照』㊀小麥又はライ麥の粉を捏ねて燒きたる食品。食(ショク)麪包と菓子麪包とあり、又、前者には、白麪包・黑麪包の別あり。蒸餅(ジョウベイ)。㊁『英Bread』生活を支ふる食物。かて。食糧。

麪包のために働く【句】『舊約全書の創世記第三章第十九節の語に本づく』生活のために働く。

麪包を求めんに、石を與へんや【句】〔基〕『新約全書の馬太(マタイ)傳第七章第

九節の語に本づく』「求めよ、然らば與へられん」に同じ。〔諺語〕

人は麪包のみにて生くるものにあらず【句】〔基〕『新約全書の馬太(マタイ)傳第四章第四節の語に本づく』人は、飲食以外、信仰に因りて生きざるべからず。〔諺語〕

ぱん（英 Pan）【名】希臘の神話にて、牧畜・狩獵及び漁獵の神とするもの。短き髭と耳と角と山羊(ヤギ)のに似たる足とを持てりといひ、なほ笛と杖とを、その附屬物とす。

・パンの笛（英 Pan's pipe）【句】『パンの發明に係るとていふ』牧人の使用する笛。牧笛。

ばん-あ 晩鴉【名】夕方に塒(ネグラ)に歸るからす。暮鴉。

はん-あい 汎愛【名】はくあい(博愛)に同じ。

ばん-あい 晩靄【名】夕方の靄(モヤ)。暮靄。

はんあい-は 汎愛派【名】〔哲〕ひゆうまにずむに同じ。

ばん-あう 晩鶯【名】晩春の頃に啼く鶯。「老鶯。

はん-あう 煩懊【名】もだへわづらふこと。心苦しきこと。

はん-あかりしやうじ 半明障子【名】高さ三四尺ほどの明障子。

ばんあ-じ 鑁阿寺【名】『鑁阿は鑁字と阿字との義。阿は鑁の字の韻に引かれて、ナと發音す』下野國足利市にある新義眞言宗の寺。金剛山・仁王院と號す。本尊は大日如來。建久七年、足利義兼の本願によりて創立すと傳ふ。足利氏の勃興に伴なひて、大伽藍となる。

はん-あしがため 半脚固【名】〔建〕幅、普通よりは割合に狹き脚固。省略したる脚固。（丸脚固に對して）

はん-あじや-しゆぎ 汎亞細亞主義（英 Pan Asianism）【名】亞細亞人種全部の團結によりて、他の人種に對抗・活躍せんとする主義。

はん-あん 飜案【名】ほんあん(飜案)に同じ。

はん-い 犯意【名】〔法〕初より、故意に罪を犯さんと思ひ立ちたる心がまへ。行爲を違法たらしむべき事實の認識。

はん-い 汎意【名】一般にわたりての意義。ひろき意味。

はん-い 叛意【名】謀叛の意思。叛心。

はん-い 瘢痍【名】きず。きずあと。創痍。

はん-い 斑衣【名】五色の模樣ある衣服。

ばん-い 蠻夷・蕃夷【名】えびす。えみし。夷狄。戎狄。蠻人。平家「宮門を守る蠻夷の、夜晝、警衞を勤むるも」

ばん-い 番醫【名】ばんいし(番醫師)に同じ。

はん-いう 汎友【名】尋常一般の交際をなす友。（親友に對して）

はん-いう 煩憂【名】もだへうれふること。甚だ心配すること。

はん-いう 盤遊【名】『書經の五子之歌篇に「盤遊無㆑度」とあり』諸方をめぐりあそぶこと。一說に、**はんらく**(般樂)に同じ。

ばん-いう 萬有【名】『子華子の陽城胥渠篇に「太初胚㆓胎萬有㆒」とあり』宇宙間に存在する、すべての物。萬物。萬象。

ばんいう-いんりよく 萬有引力【名】〔理〕『英 Universal gravitation』地球と地球上の諸物體と、又、地球上の諸物體相互の間、又、地球と他の諸天體とを始として、宇宙間に存するすべての物體の間に共通せる、互に牽引する力。獨逸の天文學者ケプレル(Kepler)の、地球と諸惑星と太陽との間には互に牽引する力あることを唱へ出ししに基づき、その大さは、距離の自乘に逆比例し、牽引する物體相互の質量の乘積に正比例すること、英國のニウトン(Newton)によりて發見せらる。引力。宇宙引力。宇宙重力。

ばんいう-ざいしんけう 萬有在神教【名】『獨 Panentheismus』萬有在神論に伴なふ宗教。

ばんいう-ざいしんろん 萬有在神論【名】〔哲〕『獨 Panentheismus. 原語は、希臘語より出で、pân(凡て)とen(中に)とtheos(神)との結合せるもの』超越神論と汎神論とを調和して、萬有は神の中に在りと說く學說。獨逸の哲學者クラウゼ(Krause)の唱道に係る。

ばんいう-しんけう 萬有神教【名】はんしんけう(汎神教)に同じ。

ばんいう-しんろん 萬有神論【名】〔哲〕はんしんろん(汎神論)に同じ。

ばんいう-せいしんろん 萬有精神論【名】〔哲〕はんしんろん(汎心論)に同じ。

はん-いき 半生【名】「半死(ハンシ)・半生(ハンシヤウ)」に同じ。

はんい-ご 汎意語【名】〔哲〕『英 Ambiguous term』論理學上にて、多くの意義を含める語。

ばん-いし 番醫師【名】德川幕府の職制の一。若年寄支配の下に、營中表方にありて、醫療の事を掌り、又、桔梗の間に交替・宿直して、不時の治療に備はりし醫師。慶安四年、本道十人、外科七人を置く。爾來、多き時は三十人に至り、西丸をも兼ねたり。番醫。

はん-いしき 半意識【名】〔哲〕『英 Subconscious』無意識より意識の境に入らんとする中途にある、不明瞭なる心の狀態、即ち識域下の、意識に近き部分、又は意識の周邊部。例へば寐入らんとする時、目ざめんとする時などの心狀の類。

ばん-いしやう 番衣裳【名】俳優の演伎の際に著用する衣裳の、劇場より支給するもの。即ち藏衣裳(クライシヤウ)の類。

はん-いた 半板【名】茶の湯の道具の一。臺子(ダイス)を半分に切り、茶巾・茶入の小蓋を載するに用ふるもの。

はん-いち 半一【名】一斤二百匁の茶を十分したるを、一袋とせるものの半分。

ばん-いち 萬一【副】**まんいち**(萬一)に同じ。

ばんいち-に 萬一に【副】㊀珍しげにことさらめきて。わざと。浮世風呂「珍しくも無(ネ)え喧嘩を、萬一に持ってくでも無(ネ)えから」㊁何につけても。何時にても。浮世風呂「おのしがやうな物あきをする者は、ばんいちに厭(アキ)っぽくて、何を一つ遂げた事が無(ネ)え」

はん-いつ 汎溢・氾溢【名】大水の、あふれること。氾濫。

ばん-いつ 萬一【數】**まんいち**(萬一)に同じ。

はんい-てき 反意的【貌】〔哲〕**むいてき**(無意的)に同じ。（故意的に對して）

はんいてき-かうどう 反意的行動【名】〔哲〕**むいてきかうどう**(無意的行動)に同じ。（故意的行動に對して）

はんいてき-どうさ 反意的動作【名】〔哲〕**むいてきどうさ**(無意的動作)に同じ。（故意的動作に對して）

ばん-いぬ 番犬【名】**ばんけん**(番犬)に同じ。

はん-いん 判印【名】**はん**(判)㊃㊄に同じ。東鑑「申㆓請御判印㆒」　織留「わが判印一つで、千貫目の事も埒が明く程に」

はん-いん 半陰【名】空の半ば曇りてあること。「半陰・半晴」

はん-いんえい 半陰影【名】〔理〕**はんえい**(半影)に同じ。（本陰影に對して）

はん-いんやう 半陰陽【名】『獨 Hermaphroditismus』同一箇體に、男女兩性の生殖器を具へたるもの。下等動物及び植物には、普通の現象にして、蛙及び龜のごときは、幼年期に於て、又、或魚類は、一定の時期の間、この狀態に在り。**はにわり**(半月)參照。

はんい-ろん 汎意論【名】〔哲〕『英 Panthelism』意志を、宇宙の原理又は本體とする哲學說。例へば獨逸の哲學者ショオペンハウエル(Schopenhauer)の唱道せしものの類。

ばん-う 盤紆【名】めぐりまはること。

ばん-う 盤盂【名】㊀盤と盂と。㊁〔書〕『故事雕龍に「孔叢子一名㆓盤盂㆒」とありて、註に「孔鮒所㆑集因㆓事襍㆒、故名㆓盤盂㆒」とあり』**こうそうし**(孔叢子)に同じ。

はん-う 槃盂【名】㊀木製の盤と、飲食を盛るに用ふる陶器と。次條參照。㊁『史記の魏其武安侯傳に「田蚡有㆓辯口㆒、學㆓槃盂諸書㆒」とあり。百家の書を槃と盂との中に記しおけるなり』古、支那にて、朝夕に見て戒とせし教訓。

ばん-うこん 三辣・山奈【名】〔植〕蘘荷(ミヤウガ)科に屬する草。根も葉も、鬱金(ウコン)の

に似、葉柄は短く、二柄相擁して、葉を開展す。六七月頃、披針狀なる數箇の小苞生じ、苞ごとに一花を著け、色白くして、毎日、一箇づつ開き、早朝より日没に至りて凋み、相次ぐこと十餘にして終る。原產地は熱帶地方。我國にても、稀に栽培す。ばんうっこん。山奈（サンナ）。

ばん-うたひ 番謠 【名】 一番の謠を、始より終まで全部うたふこと。（小謠（コウタヒ）に對して）

番謠の能（ノウ）【句】 一番の能樂を、始より終まで全部演ずること。

はん-うつ 煩鬱 【名】 氣のむすぼほるること。心のはれぬこと。ふさぐこと。

ばん-うっこん 三辣・山奈 【名】〔植〕 **ばんうこん**（三辣）に同じ。

はん-うん 翻雲 【名】 次條を見よ。

翻雲覆雨 【句】『杜甫の貧交行に「翻レ手作レ雲覆レ手雨、紛紛輕薄何須レ數」とあるに本づく』 人情の輕薄にして、反覆常なき譬。

はん-うらなひ 判占 【名】 花押・印判等の字畫によりて、その人の吉凶を占ふこと。

ばん-え 蠻衣 【名】 蠻人の衣服。日本武尊吾妻鑑「七尺有餘の夷男、蠻衣を著し」

はん-えい 帆影 【名】 遠く見ゆる船の帆のすがた。ほかげ。

はん-えい 反影・返影 【名】 反映してある夕日影。返照。

はん-えい 反映 【名】 ㊀色・光などの、互にてりかへしてうつりあふこと。反照。㊁相對して、配合の宜しきこと。うつり。

はん-えい 半影 【名】〔理〕『英 Partial shadow 又 Penumbra』 光源が若干の面積を有する時、本影の部分と、十分光を受くる處との間に、光源の一部分のみより光を受けて生ずる部分。例へば日蝕の部分蝕を見る人は、月が太陽の光を遮りて作れる半影の中に居るものなる類。半陰影。（本影に對して）

はん-えい 繁榮 【名】 さかゆること。繁昌。

ばん-えい 晩景 【名】 **ばんけい**（晩景）㊀を見よ。

はん-えいきう 半永久 【名】 建築・土木などの、殆ど永久に近きまでに保つやうにせること。（一時・永久などに對して）

はんえいきう-ちくじやう 半永久築城 【名】〔兵〕 半永久の目的にて、宣戰の前後に臨時に築く城寨。假備築城。（永久築城・臨時築城に對して）

はん-えつ 繙閱 【名】 **はんどく**（繙讀）に同じ。

はん-えん 藩垣 【名】 かき。まがき。

はん-えん 絆緣 【名】 きづなとなる因緣。

はん-えん 攀緣 【名】 ㊀攀ぢのぼること。攀援。㊁たよりすがりて立身すること。攀援。㊂對象にまつはりて、心の動くこと。俗緣に引かるること。榮花「萬に攀緣しつつせん念誦（ネンジユ）・讀經（ドキヤウ）は」 ㊃憤ること。憤怒。今昔「此く云はれて、少し攀緣發りければ」 玉葉「法皇與二博陸一同意、被レ亂二國政一之由、入道相國攀緣」

はん-えん 蕃衍・繁衍 【名】 しげりはびること。繁殖。茂殖。

はん-えん 煩厭 【名】 いとひきらふこと。いやがること。

ばん-えん 晩烟・晩煙 【名】 夕方に立ちのぼる烟又は水蒸氣。ゆふけむり。暮烟。

ばん-えん 蠻烟・蠻煙 【名】「瘴雨（シヤウウ）・蠻烟」を見よ。

はんえん-けい 攀緣莖 【名】〔植〕『英 Climbing stem』 地上莖の一。他物に倚りて伸長するもの。籐（トウ）・豌豆・常春藤（キヅタ）などの莖、これなり。纏繞（テンゼウ）莖をもこの名の下に包含せしむることあり。

はん-えり 半襟 【名】 襦袢・胴著、又は婦人の衣裳の襟を被ひて縫ひつくる布帛。長さは、下の襟よりは短く、襦袢及び胴著のは二尺五寸、婦人の衣裳のは三尺なるを普通とす。そぎえり。薩摩歌「天鵞絨（ビロオド）の半襟掛けた次の男は、町の風」

はん-おう 反應 【名】『應は、反の字の韻に引かれて、ノウと發音す』 ㊀**ないおう**（內應）に同じ。㊁或物事の、他の物事に刺戟せられて顯るる現象。㊂〔化〕『英 Reaction』 **くわがくてきはんおう**（化學的反應）の略。

はんおう-じかん 反應時間 【名】『應は、反の字の韻に引かれて、ノウと發音す』 刺戟とそれに對する反應との間の時間。

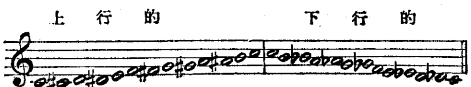
はんおう-ねつ 反應熱 【名】〔化〕『英 Heat of reaction 應は、反の字の韻に引かれて、ノウを發音す』 反應㊂によりて發し、もしくは吸收せらるる熱量。化合熱も、中和熱も、これに屬するものの特稱なり。（分解熱に對して）

ばん-おなり 鷭御成・方目御成 【名】 德川時代に、四月五日、將軍、隅田川筋に御成ありて、鷭（バン）の鷹狩を催ししこと。

はん-おん 反音 【名】 反切の音。國太曆「今度勘文內、寬應宜之由思食之處……反音事、先例或雖レ不レ及二沙汰一、指當有レ憚者、爭被レ用二其字一哉」

はん-おん 半音 【名】〔音〕『英 Semitone』 全音の約二分の一に等しき音程。

はんおん-かい 半音階 【名】〔音〕『英 Chromatic scale』 十二音より成り、順次各音階の音程、すべてに半音をなす音階。長音階に於て、互に全音の音程をなす二音の中間に、一つづつの音を挾みて作れるものと考へて差支なきものにて、基音を標準として、その挾みたる音を、下の音より半音上りて出來たるものと考ふる場合には下の音の音名に嬰（エイ）の字を冠して呼び、上の音より半音下りて出來たるものと考ふる場合には、上の音の音名に變（ヘン）の字を冠して呼ぶ。（全音階に對して）



（はんおんかい）

はん-おんぷ 半音符 【名】〔音〕『英 Half-note 又 Minim』 半音を示す音符。全音符の示す音に對し、その二分の一の長さの音を示す音符を用ふ。二分音符。

はん-か 反歌 【名】〔文〕『支那の賦の終に附する亂辭（荀子には反辭といへり）に倣へるものといふ』 長歌の終に附け加へて、その長歌中の意を反復又は補足し、或は、その大意を約言する短歌。

はん-か 半價 【名】 定價の半分。はんね。はんねだん。半額。

はん-か 半可 【名】 なま。未熟。

はん-か 煩苛 【名】 煩細にして、苛察なること。わづらはしくやかましきこと。

ばん-か 晩夏 【名】 ㊀夏の末。㊁陰曆六月の異稱。

ばん-か 晩霞 【名】 **ゆふやけ**（夕燒）に同じ。

ばん-か 挽歌・輓歌 【名】 ㊀支那にて、古、葬送の際、柩を載せたる車を挽く者のうたひし歌。挽詞。太平記「鳥啼きて、挽歌の響を添へ」 ㊁死者を悼む詩歌。哀悼の詩歌。悼歌。挽詞。

ばん-か 蕃茄 【名】〔植〕 **あかなす**（赤茄）の漢名。

ばん-が 晩駕 【名】『通鑑の周紀に「宮車晩駕」とありて、註に「晩、晏也。義與二晏駕一同」と見ゆ』 **あんが**（晏駕）に同じ。

はん-かい 斑蓋 【名】 山伏の頭に冠るもの。白綾にて包み、頂上に八角の錦を附けて、八葉の意を寓す。

はん-かい 半開 【名】 ㊀半ば開くこと。はんびらき。㊁半ば野蠻の風を脫すること。はんびらけ。

はん-かい 半解 【名】 **なまものじり**（生物識）に同じ。「一知半解の徒」

はん-かい 阪堺 【名】〔地〕 攝津國大阪市と、和泉國堺市と。

はん-がい 半蓋 【名】 長持の小形なるもの。道中雙六「卑怯者、返せと一聲、斬りつくる。得たりと受ける半蓋に」

ばん-かい 蕃界 【名】 蕃人の住める土地。蕃地。蕃境。

ばん-がい 幡蓋・旛蓋 【名】 幡と蓋と。幢幡と天蓋と。著聞「經論・幡蓋」

はん-かう 半頭・半髮 【名】『半髮（ハンカミ）の音便』 ㊀頭髮を、半ば剃りて、後の方を殘しおくこと、又その頭髮。奴頭（ヤツコアタマ）の中程の、障子と呼ぶ處まで剃り、後の方を殘しおくこと。はんかうぞり。㊁小兒の胎髮を剃りて、耳の脇の部分だけ殘しおくこと、又その剃り方。やっこ。半甲。

はん-かう 版行・板行・判行 【名】 ㊀文書・圖書などを印刷して、發賣又は頒布する

こと。印行。刊行。出版。一茶「板行にして賣られけり勝角力」 ㊁はんぎ(版木)に同じ。〔俚語〕 ㊂はん(判)㊄に同じ。〔俚語〕 **板行で捺(オ)したやう【句】**「版で捺したやう」に同じ。

はん-かう 板校【名】次條を見よ。

板校の字【句】『板校は、板行の誤なるべし』くわつじ(活字)に同じ。時慶卿記「六條と兩人に、板校の字、その類、その類に撰集め候」

はん-かう 藩校【名】はんがく(藩學)に同じ。

はん-かう 反抗【名】他の意思に逆ふこと。てむかひ。はむかひ。てきたい。抵抗。

はん-かう 頒行【名】頒布して、世に行はれしむること。「曆の頒行」

はん-かう 犯行【名】犯罪のおこなひ。法令に違反したる行爲。

はん-かう 汎交・泛交【名】㊀ひろく交ること。㊁一とほりの交際。

はん-かう 伴行【名】㊀ともなひゆくこと。つれゆくこと。同行。㊁他の物事にともなひて行はるること。

ばん-かう 蠻行【名】野蠻なる行爲。

ばん-かう 萬考【名】さまざまの考。

ばん-かう 盤香【名】香を焚く時、種種の作物をこしらへ、盤上に並べ立つること。

ばん-がう 番號【名】順番の符號。順序のしるし。

はんかう-かぶ 版行株・板行株・判行株【名】はんけん(版權)に同じ。〔江戶時代の語〕

ばん-かうけい 伴蒿蹊【名】〔人〕國學者。名は資芳(スケヨシ)。閑田子と號す。近江國八幡の人。有賀長伯・武者小路實岳(サネヲカ)に學び、後、專ら古學を研究し、遂に一家を成し、最も和歌・文章を善くす。文化三年歿す。年七十四。和歌四天王の一。

はんかう-した 版行下・板行下・判行下【名】はんした(版下)に同じ。柳樽「高德(カタリ)は判行下のやうに書き」

ばんがう-じゅん 番號順【名】番號によりて、順位を定むること。

はんかう-ぞり 半頭剃・半髮剃【名】はんかう(半頭)㊀に同じ。

はんかう-だい 版行代・判行代・板行代【名】版木に彫刻する費用。八笑人「紙代・板木價(ハンカウダイ)と呼ぶものあり」

はんかう-びたひ 半頭額・半髮額【名】半頭剃にせる額。川中島合戰「なぜ、船にねまられないと、北國訛の版行額」

ばんがう-ふだ 番號札【名】番號をしるせる札。

はんかう-ほり 版行雕・版行彫【名】版行㊁を彫ること、又それを職とする人。

はんかう-や 版行屋【名】版行㊁を彫ることを業とする家、又その人。

はん-かがみ 判鑑【名】いんかん(印鑑)㊀に同じ。

ばんがき-ごもん 蕃垣御門【名】伊勢兩宮の玉垣御門內の御門。垣も扉も無し。

はんがき-づくり 半垣造【名】小早㊁の一種。垣立(カキタツ)の寸法を、普通の半にし、屋形(ヤカタ)・帆・棚・日覆(ヒオ)などあるもの。

はん-がく 半額【名】㊀『後漢書に「城中好二廣眉一、四方且半額」とあり』額(ヒタヒ)の半分。㊁全額の半分。はんだか。半金。半價。

はん-がく 藩學【名】德川時代に、各藩にて、子弟教育のために設けたる學校。水戶の弘道館、岡山の閑谷(シヅタニ)學校、萩の明倫館、名古屋の明倫堂、熊本の時習館、米澤の興讓館など、最も名あり。藩校。

はんがく 板額【名】㊀〔人〕勇婦。越後國の人。城(ジヤウ)資國の女、驍勇・多力にして射を善くす。信濃國の人藤澤清親に捕へられて鎌倉に送らる。甲斐國の人淺利義遠、その勇を稱し、賴家に請ひて妻とす。㊁『東鑑に、前記板額の狀を記して「但於二顏色一殆可レ醜二陵薗妾一」とあり、陵薗妾は、後宮の美婦の君寵を失へるをいひ、卽ち色の衰へたる美人よりは、更に美なりとの義なるを誤解して、板額を醜婦とせるに基づく』體格逞しく、容貌醜き女を嘲りていふ語。

ばん-かく 蕃客・蠻客【名】來朝せる蕃人。渡來したる外國人。

ばん-かく 萬客【名】あまたの客。千客。

ばん-がく 晚學【名】晚年に學問を始むること。年長けてより學に就くこと。

ばん-がく 萬嶽・萬岳【名】多くの山岳。

はん-がくじ 判學事【名】明治初年に學事の糺判を掌りし官職。元年設置し、二年に廢止す。

ばんがく-しゃ 晚學者【名】晚學の人。

はんかく-せん 阪鶴線【名】〔地〕『大阪・舞鶴間の線の義』現今の國有鐵道中、福知山(フクチヤマ)線・舞鶴線と山陰本線の一部福知山・綾部(アヤベ)間とを合はせたる舊稱。

はん-かくめんぱう 半角面堡【名】〔兵〕一正面と二側面とより成り、正面より猛烈に射擊する便ある保壘。

はんかく-るゐ 板殼類【名】〔動〕いうはんるゐ(有板類)に同じ。

はん-かけ 半缺【名】なかば缺けてあること、又その物。きれはし。

はん-かげ 半影【名】〔理〕はんえい(半影)に同じ。

はん-がけ はん掛【名】『撥掛(ハネカケ)の音便』はねもとゆひ(撥元結)に同じ。

はん-かざ 半跏坐【名】〔佛〕はんかふざ(半跏趺坐)に同じ。

ばん-がさ 番傘【名】『ばん(番)は接頭語』常用に供する、粗製の傘。

はん-がしら 判頭【名】五人組の筆頭。

はん-がさね 半重【名】重(カサネ)の、袖・衿・腰下にのみ重(カサネ)を附けたるもの。

ばん-がしら 番頭【名】武家時代の職制の一。番衆の長。卽ち鎌倉幕府の廂(ヒサシ)番頭・朝夕雜色(テウジヤクザフシキ)番頭、室町幕府の五箇番の頭、江戶幕府の大番頭・書院番頭・小姓番頭・新番頭など。東鑑「不レ相二觸事由於六波羅並番頭城九郎泰盛等一」 丹波與作「この御家中にて番頭」

ばん-かず 番數【名】番㊀又は㊃のかず。

はん-かずやす 番一安【名】〔人〕吉田流道雪派射術の祖。左衞門と稱す。根矢を以て、初めて三十三間堂に射る。

はん-かせん 半歌仙【名】〔文〕連句にて、歌仙の初折(シヨヲリ)十八句のみを、一卷とするもの。

はん-かた 半肩【名】㊀一方の肩。㊁半肩かつぐこと。

半肩擔ぐ【句】㊀他人の相棒となりて、荷を擔ぐ。㊁他人に、力を添ふ。

はん-かた 判方【名】證人となりて捺印したる人。俗曲(根葛露濡衣)「大金を出して抱へた小夜衣(サヨギヌ)、死なれて見ろ。丸損だ。その祟は、判方の長庵と俺(オレ)が難儀」

はん-かた 半方【副】半分ほど。なかば。

ばん-かた 番方【名】ばんしゅう(番衆)㊀に同じ。

ばん-がた 晚方【名】くれがた。ゆふかた。ゆふぐれ。晚刻。夕刻(ユフコク)。若風俗「晚方まで遊びて」

はんかち 手巾【名】はんかちいふの略。

ばん-かぢ 番鍛冶【名】後鳥羽上皇の、諸國より京都に召して、交替して勤番せしめし刀鍛冶。

はんかちいふ 手巾（英 Handkerchief）【名】西洋風の方形なる手拭。はんかち。はんけち。

はんか-つう 半可通【名】なまなまに通人ぶること、又その人。なまものじり。なまいき。きいたふう。酢豆腐(スドウフ)。

はん-がっぱ 半合羽【名】丈の短き合羽。享保の頃より、主として、仲間(チユウゲン)などの間に行はれしもの。八笑人「半合羽の上へ坊主合羽・深編笠」

ばん-がっぱ 番合羽【名】『ばん(番)は接頭語』粗末なる合羽。

はん-かづら 半鬘【名】顱の一部分をも一緒に造りてある鬘。「四谷(ヨツヤ)怪談」のお岩などに用ふ。

はん-かね 半金【名】はんきん(半金)に同じ。天の網島「半金も、手附を打ち」

はん-がはら 半瓦【名】屋根の半面のみを、瓦にて葺き、他の半面は、茅葺などなること。慶長見聞集「海道おもて、棟より半分、瓦にて葺き、後(ウシロ)半分を、板にて葺きたり。皆人沙汰しけるは、本町二町の瀧山彌次兵衞は、家を半分瓦にて葺きたり……と、人、褒美して、異名を、半瓦彌次兵衞といふ」

ばん-がはり 番代・番替【名】かはりばん(代番)に同じ。親長卿記「廣橋猶不㆓出仕參內㆒、到㆓今日㆒、源黃番代祗候了」

はん-がひ 飯桶【名】飯櫃の一種。曾我會稽山「米櫃・飯櫃・かけはんがひ、片手に足らぬ中は空(カラ)との明(アキ)はんがひ」

はん-かふ 半甲【名】はんかう(半頭)㊁に同じ。

はん-かふ 半跏趺【名】〔佛〕はんかふざ(半跏趺坐)の略。

はん-がふ 飯盒【名】アルミニウムにて造り、外面に耐火漆を塗れる辨當箱。飯を炊ぐに用ふるを得。

はんかふ-ざ 半跏趺坐【名】〔佛〕結跏趺坐の略式なるもの、即ち片足だけを、他の足の股の上に載せて坐るもの。金剛結跏。菩薩坐。半跏坐。半跏趺。

はん-がみ 板紙【名】安藝・周防・美濃・肥後・出雲・石見等の諸國より產出する、一種の紙。

はん-がみしも 半上下【名】麻上下の一種。肩衣(カタギヌ)と同色なる小袴を著くるもの。德川時代に、目見(メミエ)以下及び庶人の通常禮服とす。(長上下に對して)

はん-かん 藩翰・蕃翰【名】『詩經の大雅板篇に「价人維藩、大師維垣、大邦維屛、大宗維翰」とありて、毛傳に「藩、屛也、垣、牆也、翰、幹也」と見ゆ』**はんぺい**(藩屛)に同じ。

はん-かん 反間【名】『孫子の用間篇に「用㆑間有㆑五、有㆓鄕間㆒、有㆓內間㆒、有㆓反間㆒、有㆓死間㆒、有㆓生間㆒。…反間者、因㆓其敵間㆒而用㆑之也」とあり』敵の間者を利用して、虛說を言ひふらし、敵同士の仲を割き、又は敵の計略に齟齬を來さしむるが如き報告をなさしむること。一說に、敵軍を裝ひて、敵中に入り、間隙を伺ひて、反り來りて、敵情を身方に報ずることなりと。

はん-かん 反感【名】反抗する感情。「反感を抱く」

はん-かん 繁閑【名】いそがしきことと、ひまなることと。繁忙と閑散と。

はん-かん 繁簡【名】事多きことと、事ずくななることと。繁多と簡略と。

はん-かん 犯姦【名】法律ををかすこと。

はん-かん 反汗【名】『漢書の劉向傳に「易(渙卦九五)曰、渙汗㆓其大汗㆒。言、號令如㆑汗、汗出而不㆑反者也。今出㆓善令㆒、未㆑能㆑踰㆑時而反、是反汗也」とあるに本づく。「綸言(リンゲン)汗の如し」參照』一旦發せし命令を、改め變ずること。

はん-かん 藩鑑【名】〔書〕『藩屛の龜鑑たる義』德川幕府の創業以來、寬保年間までの、君臣間の嘉言・善行を、諸書より抄錄し、出所を記し、小傳を揭げたるもの。寫本五百十四卷。林韑、幕命を受けて、編輯を監し、諏訪賴永・岡田淸愼等十人の執筆に成り、嘉永元年著手、同六年大成す。

はん-かん 半漢【貌】『張衡の東京賦に「龍雀蟠蜿、天馬半漢」とありて、註に「半漢、天馬貌」と見ゆ』駿馬のいさむさま。太平記「龍馬…、半漢・跳梁、甚だ世の常ならず」

はん-がん 半眼【名】眼を、なかば開きたること。

はん-がん 半顏【名】顏面の半分。半面。

はん-がん 反眼【名】『韓愈の柳子厚墓誌銘に「反眼若㆑不㆓相識㆒」とあり』**はんもく**(反目)に同じ。

はん-がん 斑岩【名】〔地〕『英 Porphyry』構造は斑狀にして、正長石が主合分の一をなす火山岩。多くは岩脈・岩株などをなす。

ばん-かん 晚寒【名】晚方のさむさ。

ばん-かん 萬感【名】いろいろの感想。種種の考。

ばん-がん 蠻岩【名】〔鑛〕**れきがん**(礫岩)に同じ。

はん-かんだう 半勘當【名】殆ど勘當と同樣なること。心中二枚繪草紙「親父の機嫌散散にて、半勘當の身となった」

はんかん-ぷ 藩翰譜【名】〔書〕『家宣の命名に係る。德川幕府の諸侯の、慶長五年より延寶八年までの、一萬石以上なる三百三十七家の來歷・系譜等を記せるもの。正篇十卷、附錄二卷、凡例及び目錄一卷、合はせて十三卷・二十册。新井白石の著。元祿十四年、德川家宣の命を奉じて、同年七月十一日起草、十月脫稿、翌十五年二月十九日上る。致仕の後、更に修正を加へたりといふ。

はんかんぷ-ぞくへん 藩翰譜續編【名】〔書〕藩翰譜の後を承けて、延寶八年より天明六年まで百七年間に於ける諸侯の來歷・系譜等を記したるもの。寬政元年九月、瀨名源五郎・岡田淸助等、幕命を奉じて、編纂に從事し、後、中神順次・大久保五左衞門・高野孝之助・屋代(ヤシロ)太郎等も加はり、文化三年脫稿す。

ばん-から 蠻襟・蠻殼【名】『**はいから**㊁に對して造り出でし語。舊思想を喜び、時代の流行に反する、粗野なる言行・風采あること、又その人。

はんがりい 匈牙利・洪牙利【名】〔地〕次條に同じ。

はんがりや 洪牙利・匈牙利【名】〔地〕**ほんがりや**(洪牙利)に同じ。

ばんがろお (英 Bungalow)【名】家屋建築の樣式の一。平屋建にて、屋宇の勾配ゆるきもの。英國式と米國式との別ありて、前者は主として煉瓦造、後者は多く木造なり。近來、我國にも、移入せり。

はん-かろ-けう 半下路橋【名】『英 Half through bridge』通路面又は鐵道基面を橋桁の中腹にて支持する橋。

はん-かわき 半乾【名】少し乾けること。十分に干かぬこと。なまかわき。はんび。

はん-き 半期【名】㊀一期限の半分。㊁一箇年の半分。半年。半季。

はん-き 半季【名】㊀一季の半分。四季の各季節の半分。薩摩歌「一季・半季の花鳥も、兎角は御緣次第なり」㊁一箇年の半分。半年。半期。**にき**(二季)・**はんきぼうこう**(半季奉公)參照。

はん-き 半規【名】『**きく**(規矩)㊀を見よ』半圓狀。「日、沒せんとして、正に半規」

はん-き 半旗【名】『英 Flag at half mast』㊀弔意を表はすために、國旗を旗竿の頭より下げて揭ぐること。㊁海軍の葬喪の禮の一。軍艦にて、軍艦旗・艦首旗を、普通の高さの半より下げて揭ぐるもの。官等によりて、その期間に差異あり、又、外國軍艦と同一の港に在泊して、その軍艦より、葬儀のために、半旗の禮を行ふ通知を受けたる時は、相當の期間、又、碇泊國に駐劄する我外交官の葬儀ある時、及び碇泊地方に駐在する我が領事官の葬儀ある時は、葬儀の當日中、これを行ふ。

はん-き 反旗・叛旗【名】謀叛人の樹つる旗。反逆の徒の用ふる軍旗。

反旗を飜(ヒルガヘ)す【句】謀叛を企つ。叛す。

はん-き 飯器【名】飯を盛るに用ふる器。

はん-き 範軌【名】**きはん**(軌範)に同じ。

はん-き 班姬【名】〔人〕**はんせふよ**(班婕妤)に同じ。

はん-ぎ 版木・板木・判木【名】文字・圖畫を彫刻して、その象を印刷するに用ふる板。主として、山櫻・黃楊(ツゲ)の材を用ひ、支那にては、梓(アヅサ)・梨・棗などを用ふ。はん。はんかう。かたぎ。すりかたぎ。ゑりいた。いた。印板。刻板。

はん-ぎ 判議【名】論議の可否の判定。最明寺殿百人上臈「法華堂の坐禪に籠らせたまひ、判議をいろはせたまはねば」

ばん-き 萬機【名】㊀『書經の臯陶謨篇に「競競業業、一日二日、萬機無㆑曠」とあり』政事上の種種の樞機。㊁帝王の政務。天下の政事。太平記「萬機・百司の政」

萬機、公論に決すべし【句】『「五箇條の御誓文」を見よ』天下の政事は、輿論の歸向する所に從ひて決定すべし。

萬機の旬(シユン)【句】昔、天皇の、即位後、始めて、萬機に臨みたまふ時行ひし儀式。江次第「萬機旬有㆓奏申㆒」

萬機の政【句】**ばんき**(萬機)㊁に同じ。太平記「萬機の政、併しながら幕府の上相より出でしかば」

ばん-き 蠻氣【名】蠻勇の氣風。

ばん-き 晚暉【名】ゆふひ。落暉。

ばん-き 晚歸【名】夕暮に歸ること。

ばん-ぎ 板木【名】㊀寺院にて、打ちて時刻を報ずるに用ふる板。はん。響板。**ぎよばん**(魚板)參照。㊁德川時代に、火災などの時、合圖に叩きて鳴らしし板。

はん-きう 斑鳩【名】〔動〕**しらこばと**(白子鳩)の漢名。

はん-きう 半球【名】㊀〔地〕『英 Hemisphere』地球を、その地心を過ぐる平面によりて二分せりと假定せるものの一方。「東半球」「西半球」「南半球」「北半球」㊁〔數〕球(キウ)を、その中心を過ぐる平面によりて二分せるものの一方。

マグデブルヒの半球（英 Magdeburghemispheres)【句】〔理〕中空なる金屬製の半球殼二箇を合し、一方の半球に栓を設け、その管を空氣ポンプに連結して、内部の空氣を排除する時は、容易にこれを引き離すこと能はざるに至るによりて、大氣の壓力が、液體のと同樣に、あらゆる方向に作用し、且ついかに强大なるかを示す實驗裝置。球内の空氣排除の結果、球に加はる空氣の壓力は、一平方寸ごとに、約二貫五百目となるがための現象。西曆一六五四年、獨逸人オットオ、フォン、ゲリッケ(Otto von Guericke)初めて、同帝國フェルヂナンド(Ferdinand)第二世の面前にて實驗したり。

はん-ぎう 飯牛【名】次條を見よ。

飯牛の歌【句】『蒙求に引ける、三齊略記に依る』支那春秋時代に、齊の甯戚(ネイセキ)の、明主に逢はずして、終身賤役に服するを嘆じ、桓公に用ひられんことを希ひし歌。桓公、爲に大夫に任用せりといふ。牛角の歌。

ばん-ぎう-かく 番牛角【名】すゐぎう(水牛)㊁に同じ。

はん-きう-けい 半球形【名】半球のかたち。

はん-きう-じ 斑鳩寺【名】㊀ほふりうじ(法隆寺)に同じ。㊁播磨國揖保(イボ)郡斑鳩(イカルガ)村大字鵤(イカルガ)にある天台宗の寺。本尊は釋迦・藥師・觀音。推古天皇の十四年、聖德太子の開創に係ると傳へ、もと大和國法隆寺の別院たりきといふ。

はん-ぎ-おし 版木押・板木押・半木押【名】版木にて印刷すること、又その印刷したる物。一代男「押繪を見れば、花をかたげて、吉野參の人形、板木押の弘法大師」

はん-きく-くわい 泛菊會【名】『風土記に「俗説以二重九一相會、登レ山飲二菊花酒一、謂二之登高會一、又謂二之泛菊會一」とあり』支那にて、古、重陽(チヨウヤウ)の節に、親朋相會して、杯酒に菊花を泛べて飲みしこと。

はん-き-くわん 半規管【名】〔醫〕さんはんきくわん(三半規管)を見よ。

はん-ぎ-し 版木師・板木師・判木師【名】版木を刻むを業とする人。はんほり。剞劂工。

はん-きせいみやく 半奇靜脈【名】〔醫〕胸部の靜脈管の一。奇靜脈と同樣にして、その左方に位するもの。

ばん-ぎせる 番烟管・番煙管【名】『ばん(番)は接頭語』常用の粗末なる長烟管。(烟草入に入れて携帶するものと區別していふ)

はん-きちがひ 半氣違【名】狂氣の如くなること。氣ちがひに近きこと。半狂。

はん-ぎっぷ 半切符【名】普通の賃錢の半額なる切符。

はん-き-ぼうこう 半季奉公【名】江戸時代の習慣として、三月三日より九月朔日まで、又は九月朔日より翌年の三月三日まで奉公せしこと。でがはり(出代)・はんきゐ(半季居)㊁參照。

はん-きん 半金【名】㊀半額の金錢。はんがね。㊁陰囊(キンタマ)の、犢鼻褌(フンドシ)の間より、半ば露出せること。〔俚語〕

はん-きん 犯禁【名】王朝時代の法律にて、私家に貯ふることを禁じたる鼓吹・幡幟の類を、禁を犯して貯へしこと。

はん-きん 繁勤【名】勤務の忙しきこと。公用の繁きこと。繁務。

はん-きん 反錦【名】『左傳の昭公十三年の條に「叔向受レ羹反レ錦」とあるに本づく』はんぺき(反璧)に同じ。

はん-きん 煩襟【名】世の中のうるさくて、氣のふさぐこと。ものおもひ。

はん-ぎん 伴吟【名】他の人につれて吟誦すること。

ばん-きん 判金・版金【名】㊀古の金貨、即ち大判金と小判金と。㊁おほばんきん(大判金)に同じ。五人女「判金二百枚入の書附の箱。……小判千兩入の箱」本朝櫻陰比事「判金千枚ばかりにして」

ばん-きん 板金【名】㊀切金(キリキン)の一。金銀を、板の如くに薄く打ち延ばしたるもの。㊁前條に同じ。

ばん-きん 板琴【名】すまごと(須磨琴)に同じ。

ばん-きん 蕃金【名】㊀外國產の黃金。㊁外國の貨幣。

ばん-きん 輓近【名】『輓は晚の義とも、又「ひく」と訓じ、古の道を以て、近世に輓く義なりともいふ』近頃。近年。近世。近代。最近。

ばん-ぎん 板銀【名】切金(キリキン)の一。銀を、板の如く薄く打ち延ばしたるもの。

ばん-ぎん 判銀・版銀【名】古の銀貨、即ち小判銀と大判銀と。

ばんきん-は 輓近派【名】〔文・美〕『獨 Die Moderne』第十九世紀以後の一般的傾向として、藝術の目的を自然に置き、自然の眞に逼るを以て極致とする流派。自然主義などいふも、この派の執る所の方針に過ぎずと稱せらる。

はんきん-ばらひ 半金拂【名】半金㊀だけの支拂。

はんきん-るゐ 攀禽類【名】〔動〕鳥類の一目。四趾の中、二趾は前方に、他の二趾は後方に向ひ、樹上を上下すること巧みなり。常に森林に棲息し、卵を樹洞の内に產む。啄木鳥(キツツキ)・時鳥(ホトトギス)・鸚鵡(アウム)など、これに屬す。攀木類。

ばんぎん-をさめ 判銀納【名】德川時代に、判銀を以て租米に代へしこと。

ばん-ぎもの 番著物【名】勤番の際に著る著物。落穗集追加「番著物と名づけて、絹・紬などを以て調へ」

はん-ぎ-や 版木屋・板木屋・判木屋【名】版木の彫刻を業とする人、又その家。はんぎし。

はんぎや 般若【名】はんにや(般若)㊁の訛。

はん-きやう 半狂【名】はんきちがひ(半氣違)に同じ。

はん-きやう 反響【名】㊀〔理〕音聲が遮蔽物に當りて、其處より反射し、再び吾人の耳に達する現象。こだま。やまびこ。㊁或事の影響によりて、それに關係ある事態の、他にも生ずること。

はん-ぎやう 判形【名】はん(判)㊃㊄に同じ。盛衰記「寄進狀を書き、判形を加へて」

はん-ぎやう 半行【名】〔佛〕次條を見よ。

半行・半坐の三昧【句】〔佛〕ししゆさんまい(四種三昧)を見よ。盛衰記「山門堂塔の事。半行・半坐の三昧、この道場に修(シユ)すとかや」

ばん-きやう 萬頃【名】ばんけい(萬頃)に同じ。太平記「一蓬の月、萬頃の天」

ばん-きやう 萬境【名】㊀あらゆる境域。すべての場所。㊁あらゆる境遇。すべての境涯。謠曲(氷室)「萬境をうつす鏡」

ばん-きやう 蕃境・蠻境【名】ばんかい(蕃界)に同じ。

はん-きやうせい-くみあひ 半强制組合【名】〔法〕公共組合の一。國家がその組合員たるべき者の標準を定め、これに該當する者の一部の請願により、公益上必要と認めたる時、他の一部の人民を强制して、組合を設立せしむるもの。例へば普通水利組合などの類。(强制組合・任意組合に對して)

はん-ぎやく 反逆・叛逆【名】君主にそむくこと。むほん。ほんぎやく。

はん-ぎやく 犯逆【名】をかしさからふこと。

はんぎやく-えんざ 反逆緣坐【名】大寶律の制度にて、謀反及び謀大逆を犯したる者に緣坐して、罪を得しこと。

はんぎやくえんざ-る 反逆緣坐流【名】大寶律の制度にて、謀反及び謀大逆の者の祖孫・兄弟などの、緣坐して、流罪に處せられしこと。

はん-きゆう 半弓【名】長さ大弓(ダイキウ)の半分程なる弓。揚弓の類。一代男「半弓に、鳥の舌の矢の根を番ひ」

はん-きゆう 泮宮・頖宮【名】『天子の辟雍に半ばするによる名とも、又その東・西・南の三門は水に圍まれ、北は水に面せざるによる名ともいふ』支那周の代に諸侯の設立せし學宮。射を以て、士を擇ぶに在りたり。

はん-きよ 班擧【名】**すゐこ**(出擧)に同じ。類聚三代格「班二擧正稅一」

はん-ぎよ 板魚【名】〔動〕**ひらめ**(比目魚)の漢名。

ばん-きよ 蟠踞・盤踞【名】わだかまること。

はん-きよく 反曲【名】そりまがること。そりかへること。

はん-ぎよく 半玉【名】藝妓の、未だ一人前に至らずして、玉代の半額を受くるもの。おしやく。あかえり。雛妓。

ばん-きよく 盤局【名】雙六(スゴロク)盤・將棊盤・碁盤など、又その面。ばん。ばんめん。

ばん-きよく 盤曲【名】わだかまり、うねりめぐること。盤回。「山、盤曲す」

はん-きり 半切【名】㊀**はんきりがみ**(半切紙)の略。㊁**つりごし**(釣輿)に同じ。

はん-ぎり 半切【名】㊀能(ノウ)の裝束なる、一種の袴。形、大口に似、金襴の模樣あり、多くは法被(ハツピ)著用の際、その下に用ふ。㊁芝居の衣裳の一種。地質に、錦又は箔を摺り込み、荒事の役に用ふ。㊂次條に同じ。〔半桶・盤切〕一代男「半ぎりの淺きを戴きつれて」世間胸算用「半切に移し並べたる唐辛は」

半切の桶【句】**はんぎりをけ**(半切桶)に同じ。爰園小說「琉球芋を多く蒸して、半切の桶に入れ」

はんきり-がみ 半切紙【名】㊀書簡用に供する、丈短く横に長き和紙。古くは、杉原紙を横に半分に切りて用ひしが、延寶・天和以後、特に横長に抄造し、繼ぎ合はせて、卷紙として用ふるに至れり。はんきれ。はんきれがみ。昔昔物語「六十年以前より、半切紙を用ふる事なり」

はんぎり-をけ 半切桶・盤切桶【名】形、盥のごとくにて、底の淺き桶。はんぎり。

はん-きれ 半切【名】**はんきり**(半切)㊀の轉訛。

はんきれ-がみ 半切紙【名】**はんきりがみ**(半切紙)の轉訛。

はん-きゐ 半季居【名】半季奉公をなし居ること。織留「お家久しき人に汲ませよ。半季居は御作法知らず」

はん-く 半句【名】一文句の半分。少しのことば。「一言・半句」

はん-く 半工【名】一人まへの半分の工手間(テマ)。

ばん-く 萬苦【名】さまざまの艱苦。多くのくるしみ。「千辛萬苦」

ばん-く【名】**ばんくるはせ**(番狂)の略。〔俚語〕膝栗毛「いやも、えらいばんくであったはいな」

ばんく(英Bank)㊀**ぎんかう**(銀行)に同じ。〔明治初年の語〕明治五年十一月十五日布告「內國に於て爲替兩替等を業とし、歐亞各國に通稱するばんくの業體に等しきもの」㊁『**いちろくぎんかう**(一六銀行)を見よ』**しちや**(質屋)に同じ。〔俚語〕

ぱんく(英Puncture の略)【名】㊀自動車・自轉車の護謨輪に小き孔あきて、運轉不能となること。㊁出產。分娩。〔俚語〕

はん-くう 半空【名】**ちゆうくう**(中空)に同じ。

はん-ぐそく 半具足【名】完備せる具足を著けぬこと。

ばん-ぐそく 番具足【名】『**ばん**(番)は接頭語』足輕などの著る、粗製の具足。紅梅千句「持つも著るも輕き番槍(バンヤリ)・番具足」

はん-くち 半口【名】一口(ヒトクチ)の半分。

はん-ぐつ 半靴【名】足くびだけ入れて穿つ、西洋風の淺き靴。(長靴に對して)

ばん-くつ 盤屈・蟠屈【名】わだかまりて伸びぬこと。うねうねと曲りをること。

ぱん-くづ 麪包屑・麵包屑・麪麭屑・麵麭屑【名】麪包を切りなどする時に生ずる屑。

はん-ぐま 半隈【名】芝居の隈取(クマドリ)を、顏の上下何れかの半分だけに施すもの。(本隈に對して)

ばん-ぐみ 番組【名】㊀番衆の組。新可笑記「番組勤むる人竝(ナミ)に」㊁演藝・勝負事などの順序、出場者の役割などを定めたるもの、又これを記せる紙。ぷろぐらむ。一代男「囃方(ハヤシカタ)・地謠(ヂウタヒ)、もとより、太夫・脇、番組して、定家・松風・三井寺」

ばんぐみ-やどや 番組宿屋【名】江戸の宿屋の內、豫め順番を定め、公儀より宿泊人の呼出しあれば、差紙(サシガミ)の受取、その他、公儀の用事を勤めしもの、即ち馬喰町(バクロチヤウ)組・小傳馬町(コデンマチヤウ)組の旅人宿、八十二軒組の百姓宿、三十軒組の百姓宿。

ばんぐみ-やま 番組山【名】**ばんやま**(番山)に同じ。

ばん-くるはせ 番狂【名】豫想外の結果のために、順序にくるひを來すこと。ばんく。續膝栗毛「川がとまったとかえ。そりやあ、とんだ番くるはせだ」

ばんくるはせ-もの 番狂物【名】番くるはせを生ずべき物事。膝栗毛「ありや、おへねえ番くるはせものだよ」

はん-くわ 繁華【名】㊀『史記の呂不韋傳に「不下以二繁華時一樹上本」とあり』しげくはなやかなること。はなやかにさかゆること。「繁華の子」「繁華の夢」㊁にぎはふこと。にぎやかなること。繁昌。

はん-くわ 飯顆【名】めしつぶ。飯粒。

はん-くわ 半靴【名】**はうくわ**(半靴)に同じ。伊呂波字類「半靴、ハンクワ。此間、云二履一、其頭短者謂二之半靴一、言下其深襲二深足一也如上字」

はん-くわ 礬化【名】〔鑛〕『英 Vitriolization』硫化鑛物の、酸化すること。膽礬・綠礬(ロウハ)などの生成、これなり。

はん-ぐわ 版畫【名】『英 Print』木版・石版などに付して、複製したる畫。

ばん-くわ 晚花【名】おくれざきの花。おそざきの花。

ばん-くわ 蠻瓜【名】〔植〕**へちま**(絲瓜)の漢名。

ばん-くわ 萬花【名】多くの花。さまざまの花。櫻陰比事「草木も心ありて、萬花の色をあらはし」

ばん-くわ 萬化【名】㊀萬物の化育。㊁さまざまに變化すること。「千變萬化」

ばん-ぐわ 蠻畫【名】**せいやうぐわ**(西洋畫)に同じ。〔江戸時代の語〕

はん-くわい 樊噲【名】〔人〕支那漢の高祖の臣。沛の人。高祖の、沛公たりし時、楚の項羽と鴻門に會するや、項羽の臣范增、沛公を殺さんと計りしに、楯を擁し、項羽を睨みて、沛公の急を救ひ、密かに逃れ去らしむ。後、屢ば軍功あり、惠帝の元年卒す。保元「樊噲も斯くやと覺えて、由由(ユユ)しかりき」

ばん-くわい 挽回【名】もとの如くにひき戻して、善くすること。恢復。

ばん-くわい 盤回・盤廻【名】うねりまはること。盤旋。盤曲。「流水盤回す」

ばん-ぐわい 番外【名】㊀番號又は番組のほか。㊁會議にて、議員に非ずして、その席に列する人。

はんくわい-あざみ 樊噲薊【名】〔植〕玄參(ゴマノハグサ)科に屬する多年生の草。高さ二三尺に達し、葉は羽狀複葉にして、小葉には、缺刻或は鋸齒あり。夏秋の交、梢上に、紫淡紅色の脣形花、穗狀花序をなして開く。深山・陰地に自生す。このふすま。はなぐるま。はんくわいしほがま。

はんくわい-さう 樊噲草・大吳風草【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。高さ五尺に達し、葉は廣闊なる掌狀葉にして、深く分裂し、各裂片には、缺刻又は鋸齒あり。夏季、莖頂に鮮黃色の花、頭狀花序をなして開く。山野・陰地に自生す。

はんくわい-しほがま 樊噲鹽釜【名】〔植〕はんくわいあざみ(樊噲薊)に同じ。

はんくわい-りう 樊噲流【名】兵法の一派。支那漢の樊噲の術を傳へたりといふもの。天の網島「樊噲流は珍しからず。門を破るは、日本の朝比奈流を見よや」

はん-くわう 斑光【名】〔天〕**はくもん**(白紋)に同じ。

ばんくわ-きやう 萬花鏡【名】**ひやくいろめがね**(百色眼鏡)に同じ。

はん-くわこ 半過去【名】〔語〕動詞の時の一。最も現在に近き過去の動作を表はす。現在完了。(大過去・小過去に對して)

ばんくわ-しふ 晩花集【名】〔書〕**ばんくわわかしふ**(晩花和歌集)の略。

ばんくわ-じゆ 蕃瓜樹【名】〔植〕**ぱぱや**(蕃瓜樹)に同じ。

ばんくわじゆ-くわ 蕃瓜樹科【名】〔植〕ぱぱやくわ(蕃瓜樹科)に同じ。

はん-くわん 半卷【名】書籍一卷の半分。はんまき。盛衰記「觀無量壽經遊ばしさしたりと覺しくて、半卷ばかり卷かれたり」

はんくわん 半官【名】㊀半分は宮權に依ること。（半民に對して）㊁はんくわんばう（半官報）の略。

はんくわん 盤桓【名】『易經の屯卦に「初九、盤桓、利レ居レ貞」、陶潛の歸去來辭に「撫二孤松一以盤桓」とあり』進みがたきこと。たちもとほること。徘徊。彷徨。

はんぐわん 判官【名】㊀裁判官。法官。㊁臺灣總督府法院又は關東都督府法院にて、審判の事務を掌る、勅任又は奏任の職。臺灣總督府法院のは、その權限、地位の保障及び任官の資格、共に內地の判事とほぼ同樣なれど、關東都督府のは、地位の保障及び任官の資格に關して、何等の規定なし。㊂はうぐわん（判官）の誤讀。

はんくわんじ 判官事【名】明治初年の神祇官・會計官・軍務官・外國官・刑法官・民部官の職員の一。公卿・諸侯・大夫・士庶人、これに任ぜられ、正（勅任）と權（奏任）との二等に分れ、官事の糺判を掌りたり。二年、各官と共に廢せられたり。

はんくわんしんぶん 半官新聞【名】政府の機關たる新聞紙。

はんぐわんだい 判官代【名】はうぐわんだい（判官代）を見よ。

はんくわんぱう 半官報【名】新聞紙が、政府の內意を受けて、政府に有利なる報道をなすこと。又その新聞。半官。

はんくわんぴ 半官費【名】その費用の半分が官費なること。

はんくわんぼく 半灌木【名】〔植〕あくわんぼく（亞灌木）に同じ。

ばんくわわかしふ 晚花和歌集【名】〔書〕下河邊（シモカウベ）長流の歌集。延寶九年長流自身の集めしものと、長流の歿後、その友契沖の輯めしものとあり。共に二卷。

はんけ 半家【名】德川時代の公家衆（クゲシユ）の內、高倉・富小路（トミノコウヂ）・五辻・竹內・高辻・東坊城（ヒガシバウジヤウ）・五條・唐橋・舟橋・土御門・吉田・藤波・西洞院（ニシノトウヰン）の十三家。

はんげ 半夏【名】㊀〔植〕からすびしやく（烏柄杓）に同じ。㊁はんげしやう（半夏生）㊀の略。㊂〔植〕はんげしやう（半夏生）㊁の略。薩摩歌「同じ處に、當歸（タウキ）まで、半夏・半夏と、季を重ね」㊃〔佛〕夏安居（ゲアンゴ）に於ける結夏（ゲツゲ）と解夏（ゲゲ）との中間。

はんげ 半偈【名】〔佛〕㊀偈（ゲ）を前半と後半とに分ちたるものの一方。㊁次條に同じ。鵜鷺合戰「雪山童子、半偈を聞きて、木石を割きて、長く傳ふといふ句」

雪山（セツセン）の半偈【句】『涅槃經の第十四卷に見ゆ』雪山偈（セツセンゲ）の後半の二句。佛陀、雪山に住せし時、帝釋（タイシヤク）、これを試みんとて、身を變じて、羅刹（ラセツ）となり、過去佛の所說に係る同偈の前半二句を說くを聞きて、歡喜し、回顧すれば、ただ羅刹あるのみなるより、餘の半偈をも聞かんことを請ひしに、身飢ゑて說くを得ずといふより、身を以て奉ぜんことを約して、始めて、これを聞くを得、卽ち石・壁・樹もしくは道に書寫し、卽時に高樹の上に昇りて、身を地に投ぜしに、羅刹、帝釋の形に復りて、佛陀を攝取せりと傳ふ。雪山の八字。

ばんげ 晚げ【名】ばんかた。ゆふぐれ。晚景。膝栗毛「先度の晚げにな」

はんけい 半徑【名】〔數〕『英 Radius』圓の中心より、その圓周の一點、又は球（キウ）の中心より、その球面の一點に引ける直線。直徑の半分。

はんけい 範型【名】てほん。模型。

ばんけい 晚景【名】㊀『景の字の音、この場合、正しくはエイ』夕日の影。夕陽。㊁晚方の景色。暮景。若風俗「濱の晚景を見捨て、南宗の唐門に入りて」㊂ばんがた。ゆふぐれ。太平記「十三日の晚景に」同「昨日の晚景に」

ばんけい 萬頃【名】地面又は水面の廣き形容。「碧波萬頃」「萬頃の美田」

ばんけい 盤溪【名】〔人〕おほつきばんけい（大槻盤溪）を見よ。

ばんけい 番徑【助數】獵銃の口徑の大小を示すに用ふる語。一ポンドの鉛を標準とし、その三十分の一を丸にしたるものの直徑に等しき口徑なるは、三十番徑といひ、同じく二十分の一のに相當する時は、二十番徑といふ類。

ばんけいとうだい 盤形燈臺【名】盤㊀の形をなせる燈臺。延喜式「盤形燈臺三基」

はんけう 板橋【名】いたばし（板橋）に同じ。太平記「馬蹄に、板橋の霜を蹈破す」

はんけう 判敎【名】〔佛〕「敎相（ケウサウ）判釋」に同じ。

はんげき 反擊【名】引き返して、追ひ來る敵を擊つこと。

はんげき 繁劇【名】いそがはしきこと。せはしきこと繁忙。多忙。多用。

はんげさう 半夏草【名】〔植〕はんげしやう（半夏生）㊁に同じ。

ばんげしま 晚げしま【名】『しまは、さかしま（倒）・よこしま（邪）などのしまと同じく、さま（樣）の義なるべし』日くれがた。夕ぐれ。〔駿河國の方言〕

はんげしやう 半夏生【名】㊀『禮記の月令篇に「仲夏之月、鹿角解、蟬始鳴、半夏生、木菫榮」とあるに本づく。卽ち半夏といふ草の生ゆる季節の義』七十二候の一。夏至（ゲシ）の第二候、卽ち夏至（ゲシ）より十一日目の日。陽曆の七月二日頃に當り、梅雨はこの時に明け、農家にては、この時を田植の終期とす。㊁〔植〕三白草（ハンゲシヤウ）科に屬する多年生の草。高さ二尺に達し、葉は長楕圓形、基脚は心臟形をなし、葉柄の基部は莖を包む。夏、梢上の葉腋に、淡黃色の花、穗狀花序をなして開く。水邊に自生す。かたしろぐさ。〔三白草・三葉白草〕

はんげしやうぐさ 半夏生草・三白草・三葉白草【名】〔植〕前條㊁に同じ。

はんげしやうくわ 三白草科【名】〔植〕顯花植物・雙子葉門・離瓣花區に屬する一科。亞細亞及北米に產す。この科は三屬・四種の植物を含む。內、我國に產するものは、二屬・二種なり。かたしろぐさ科。

ばんげた 番桁【名】番の位取（クラヰドリ）。

はんげたばし 版桁橋【名】工字形の桁又は鐵板（テツイタ）・角鐵（カクテツ）を綴合したる桁を架したる橋梁。主に鐵道橋に用ふ。

はんけち 手巾【名】はんかちいふ（手巾）の訛。

はんけつ 判決【名】㊀是非・曲直をわかち定むること。さいばん。さばき。㊁〔法〕『英 Judgment』裁判所が、法規を適用して、訴訟事件を決定すること。

はんげつ 半月【名】㊀一箇月の半分。半箇月。はんつき。㊁ゆみはりづき。かたわれづき。弦月。㊂弦月の形をなしたる半圓。㊃金屬にて、弦月の形を造りたる、兜の前立（マヘダテ）。㊄半月の形に排置する陣立。㊅はんぺんの、半月の形に造りたるもの。㊆琵琶の胴面の上部の左右に、共鳴を助くるために穿ちたる、やや半月形なる孔。㊇紋所の一。弦月の形を描きたるもの。「ち。みかづきなり。

はんげつけい 半月形【名】半月のかたち。

はんけつさいばんしよ 判決裁判所【名】〔法〕判決を與へたる裁判所。

はんけつしゆぶん 判決主文【名】〔法〕判決文の中にて、裁判所の判斷を表示せる部分、卽ち「法律の第何條によりて、何何に處す」など記載せる部分。主文。

はんけつしよ 判決書【名】〔法〕判決文を記載したる文書。

はんけつぶん 判決文【名】〔法〕判決を下したる事實・理由と判決主文とを記載せる文書。掛判事、これを作成す。

はんげつべん 半月瓣【名】〔醫〕『英 Semilunar valve』心臟の各心室とこれに連續せる動脈の根部との間にある、囊狀・半月形の三箇の瓣。動脈に向ひて開き、一旦動脈に入りたる血液をして、決して再び心室に歸り來ることなからしむ。

はんけつれい 判決例【名】〔法〕判決の先例。新なる事件の審判に當りて、法律に等しき効力ありとす。裁判例。判例。

はんけん 版權【名】〔法〕『英 Literary property』ちよさくけん（著作權）を見よ。

はんげん 半舷【名】軍艦の乘組員を、左右の兩舷に二分しての稱。

はんげん 半間【名】㊀長さの一間の半分。㊁次條を見よ。

半間の雲、一榻（イツタフ）の月【句】雲に家の一間の半ばを借し、月に榻卽ち腰掛

を分ち與ふる意。（太平記）「半間の雲、一榻の月、禪餘の御友となりにければ」

はん-げん 半減【名】半數に減（ヘ）り又は減（ヘラ）すこと。

はん-げん 反言【名】いひかへすことば。「反駁の言。

はん-げん 繁絃【名】絃樂器を、せはしげに奏すること、又その音。（太平記）「繁絃・急管、何れも金玉の聲玲瓏たり」

ばん-けん 番犬【名】番をする犬。**ばんいぬ**。

ばん-けん 萬犬【名】**一** 一萬匹の犬。**二** 多「くの犬。

萬犬、實を傳ふ【句】「一犬、虛を吠ゆれば、萬犬、實を傳ふ」を見よ。

はん-けんじ 判檢事【名】裁判所の判事と檢事と。「判檢事登用試驗」

はん-けんじ 判縣事【名】明治の初期に於ける縣の職員の一。一等（奏任）・二等・三等（共に判任）の三級に分れ、縣事の糺判を掌りしもの。元年閏四月設置。なほ、同年十二月、奥羽には、この下に、權（ゴン）判縣事（判任）設置せられ、掌る所は同じかりしが、共に、二年七月廢止せられたり。

はんけんじ-とうようしけん 判檢事登用試驗【名】**はんじけんじとうようしけん**（判事檢事登用試驗）の略。

はんけん-しや 版權者【名】版權を所有せる人。著作權者。

はんけん-しよいう 版權所有【名】〔法〕その版權を所有すること。

はんけん-でうれい 版權條例【名】次條「を見よ。

はんけん-はふ 版權法【名】版權の保護に關する法律。明治十三年の勅令にて定めたる版權條例に代れるものにて、同二十六年の公布に係る。但し版權法も、同三十二年著作權法の公布に依り廢せられたり。**しゆっぱんはふ**（出版法）參照。

はん-げんぷく 半元服【名】略式なる元服。武士は、小鬢を剃らず、町人は額の角（スミ）を剃り拔き、前髮を大きく分けて結び、同時に、振袖を脫ぎて、留袖（トメソデ）を著す、女子は、眉毛も剃り落さず、鐵漿（カネ）もつけず、髮のみを丸髷に結ぶ。（本元服に對して）「角（スミ）を入る」・**ひたひなほし**（額直）

參照。

はんけん-めんきよ 版權免許【名】版權「所有の免許。

はん-こ 判子【名】**はん**（判）**五**に同じ。

はん-こ 半髮【名】**はんかう**（半髮）の訛。

はん-こ 班固【名】〔人〕支那後漢の史家。字は孟堅。彪の子、超の兄。扶風の人。明帝の時、校書郎となり、父の志を嗣ぎて、漢書を撰す。章帝の時、玄武司馬に遷り、和帝の初、竇憲に從ひて、匈奴を征して功あり。永元四年、憲の罪に關聯して、獄中に死す。

はん-こ 藩庫【名】**ふせいし**（布政使）を見「よ。

はん-ご 反語【名】**一** 反切によりて生じたる語。かながへしの語。**二** **さかことば**（逆言葉）**一**に同じ。（和訓栞）「反語あり、葦をよしといひ、僧を髮ながといふの類、これなり」**三**〔文〕『英 Irony』言葉にては譽めて、實は譏り、又は、その反對なる言ひ方。「馬鹿」といふ代りに「お利口樣」といひ、枕草子に、頭中將（トウノチユウジヤウ）が、清少納言の才を稱して、「いみじき盜人かな」といへる類。**四**〔語〕打消の形を用ひずして、打消したると同樣の效果ある語。「いかでか、然らん」「雨降るべしやは」の類。**五**〔哲〕『英 Irony』相手に反問して、所說の自家撞著なることを覺らしむる辯證法。希臘のソクラテス（Socrates）、支那の孟子など好みて用ひたり。

はん-ご 煩語【名】煩瑣なることば。

はん-ご 汎語【名】〔文〕『英 General term 又 Generic term』修辭學上、包含する意義の範圍ひろき語。例へば、「商人」は「米屋」に對して、又、「實業家」は「商人」に對して汎語なる類。（殊語に對して）

はん-ご 範語【名】〔哲〕**はんごはふ**（範語法）を見よ。

はん-ご 飯後【名】飯を食ひ終へたる後。食後。（太平記）「飯後に、旨酒三獻過ぎて」

飯後の茶【句】次條に同じ。（槐記）「飯後の茶と申すも、菓子の茶と申すも、かはることなし」

飯後の茶會（チヤクワイ）【句】飯後に催す茶會。朝飯後に催す時は、午前八時に始め、晝の茶會を妨げぬやうに、又、晝飯後の場合には、午後三時頃より始めて、夜咄の茶會を妨げぬやうにす。菓子の茶の湯。菓子の茶。

ばん-こ 番子【名】**一** 散手破陣樂及び歸德などの舞樂に於ける、舞人の下役。（江次第）「左右各舞……散手・歸德王者舞裝束、番子如レ恒、但歸德番子著二面形一」**二** 請負辻番の夜番。番太郎よりも卑し。〔江戸の語〕**三** 江戸時代に、大阪・名古屋等にて、夜のみ時を報じ、晝は寢て籠り居り、殘飯などを與へられて生活し、良民とは、水火を共にせず、又、婚をも通ぜざりし者。江戸の番太郎の類。

ばん-こ 萬戸【名】よろづの家。多くの家。**ばんざう**（番藏）參照。

ばん-こ 萬古【名】**一** 永久。永遠。永世。千古。**二** **ばんこやき**（萬古燒）の略。

ばん-こ 盤古【名】**一**『宋元通鑑に「孛羅曰、且問、盤古至レ今、幾帝幾王」とあり』おほむかし。太古。**二**『太平御覽の卷一、及び述異記に見ゆ』支那の神話にて、天地未だ分れず、鷄卵のごとくなりし時、その中に生れ出でたりといふ神。その死するや、氣息は風雲となり、聲は雷霆となり、左右の眼は日月となり、四肢・五體は四極・五嶽となり、身內の寄生蟲は、風に化せられて、人民となれりといふ。（正統記）「震旦は……、世界建立をいへる事、慥かならず。……盤古といふ王あり、目は日月となり、髮は草木となれりといへる事もあり」

ばん-こ 番個・番箇【名】**一** その度ごとに行ひ又は發生すること。都度。**二** **かはりばんこ**（代番個）に同じ。

ばん-こ 番個・番箇【助數】花合（ハナアハセ）**一**にて、札を引く度數を十二回づつまとめて數ふる語。一番箇の內、六回目を半どんといひ、十一回目を、幕又はひけといひ、十二回を、どん又はひきどんといふ。

ばん-ご 蠻語・蕃語【名】**一** 蠻夷の言語。**二** 西洋諸國の語。〔江戸時代の語〕（羅山文集）「佗波古・希施斐、皆蕃語也」

ばん-ご 盤互【名】うねりくねりて入りまじること。

ぱん-こ 麪包粉・麵包粉・麪麭粉・麵麭粉【名】**一** 麪包の材料とすべき小麥粉。**二** 麪包を、極めて細に破碎せるもの。西洋料理にて、フライの衣（コロモ）などに用ふ。

ぱん-ご【名】**むかご**（零餘子）を云ふ。〔肥前國唐津の方言〕

はん-こう 藩侯【名】藩主。大名。諸侯。

ばん-こう 番公【名】錢湯にて、番臺に控へ居り、または湯加減などをする人。（浮世風呂）「番公の居ねむりはまだいいが、湯汲の居ねむるのがおそれるぜ」

ばん-こう 萬口【名】**一** 多くの人の口。衆口。**二** 多くの人の言ふ所。萬人の評判。

ばんこう-くわ 番紅花【名】〔植〕**さふらん**（泊夫藍）の漢名。

はん-こうばい 半勾配【名】角度は同じくして、長さの半分なる勾配。

はん-こおと 半コオト【名】丈（タケ）の短き吾妻コオト。

はん-こく 藩國【名】藩主の領國。

はん-こく 板刻【名】文書・圖書などを、版木に彫刻すること。

はん-こく 飜刻・翻刻【名】**ほんこく**（飜刻）に同じ。

はん-ごく 半石【名】一石の半分。五斗。「はんせき。

はん-ごく 反獄【名】寃罪にて處刑の定りたる者を、更に調べて、無罪とすること。

ばん-こく 蠻國【名】**一** 野蠻なる國。未開の國。えびす。夷狄。**二** 南蠻の國。西洋の國。（風來六六部集）「和漢・蠻國、昔が今に至るまで」

ばん-こく 蕃國【名】化外の國。外國。蕃「邦。

ばん-こく 萬國【名】**一**『易經の乾卦彖傳に「萬國咸寧」とあり』支那全土の諸侯の國國。**二** 地球上のすべての國。世界の國國。萬邦。

ばん-こく 晚刻【名】**ばんがた**（晚方）に同「じ。

ばんこく-いうびん 萬國郵便【名】**こくさいいうびん**（國際郵便）に同じ。

ばんこくいうびん-でうやく 萬國郵便條約【名】萬國郵便聯合の諸件を定めたる

條約。西暦一八七四年、獨逸國の提議に依りて、瑞西（スヰ）國の首府ベルン（Bern）に開催せし國際會議に依り、締結し、翌年七月一日より實施せり。我國は、條約成立後三年、即ち明治十年に加入せり。萬國郵便聯合條約。

ばんこくいうびん-れんがふ 萬國郵便聯合【名】『英 Universal postal union』萬國郵便條約の締盟國及び加入國が、相互の郵便局の間に郵便物を交換するために組織せる聯合。

ばんこくいうびんれんがふ-そうりきよく 萬國郵便聯合總理局【名】萬國郵便條約に基づきて設置せる中央事務局。瑞西（スヰ）國の首府ベルン（Bern）に在り。同國郵政廳の監督の下に、國際郵便業務に關する各種の報告を蒐集・整理・發行・配付し、聯合郵政廳の間に異議を生じたる時、當該郵政廳の請求に應じて、意見を吐露し、又、大會議にて締結せる條款を變更する建議ある時は、これを報告し、及び採用せる變更を通告し、且つ一般に、郵便聯合の利益に關する委任事項を調査・施行す。

ばんこくいうびんれんがふ-でうやく 萬國郵便聯合條約【名】ばんこくいうびんでうやく（萬國郵便條約）に同じ。

ばんこくいうびんれんがふ-はがき 萬國郵便聯合葉書【名】萬國郵便聯合の締盟國及び加入國の政府の發行して、その國國にて使用する郵便葉書。

ばんこくいうびんれんがふ-わうふくはがき 萬國郵便聯合往復葉書【名】萬國郵便聯合葉書の往復用のもの。

ばんこく-おんぺうもんじ 萬國音標文字【名】ばんこくはつおんぷ（萬國發音符）に同じ。

ばんこく-き 萬國旗【名】世界の諸國の國旗。

ばんこく-くわいぎ 萬國會議【名】こくさいくわいぎ（國際會議）に同じ。

ばんこく-こうげふしよいうけん-ほご-どうめい 萬國工業所有權保護同盟【名】各國に於ける工業所有權の國際的保護を確保するを目的とする同盟。佛蘭西國の首唱に依り、西暦一八八三年の巴里會議にて、以太利・瑞西（スヰ）・白耳義（ベルギイ）・和蘭（オランダ）・西班牙（イスパニヤ）・伯剌西爾（ブラジル）等の歐羅巴・亞米利加の十一箇國を以て組織し、後、英吉利・亞米利加合衆國・獨逸の諸國も加入し、我國も明治三十二年七月に加盟せり。

ばんこくこうげふしよいうけんほごどうめい-じむきよく 萬國工業所有權保護同盟事務局【名】瑞西（スヰ）國中央政府の監督の下に、萬國工業所有權保護同盟に關する事務を處理する國際事務局。

ばんこく-こうはふ 萬國公法【名】〔法〕こくさいこうはふ（國際公法）に同じ。

ばんこく-こくくわいぎゐん-くわいぎ 萬國國會議員會議【名】各國の國會議員中の代表者又は有志者會合して、國際の軋轢を緩和し、列國の平和的外交を發展せしめんとする會議。英國下院議員の主唱に依り、西暦一八八九年、佛國の下院議員と巴里に會して創設し、後、議院制度を有する諸國、悉く加入するに至り、中央事務所を、瑞西（スヰ）國の首府ベルン（Bern）に置き、隔年又は毎年に、場所を異にして召集す。

ばんこく-こくさいてきしよだんたい-れんがふくわいぎ 萬國國際的諸團體聯合會議【名】國際的諸團體を聯合・團結せんために催す國際會議。西暦一九一〇年、白耳義（ベルギイ）國の首府ブラッセル（Brussels）の博覽會を機とし、同地にて、始めて開催す。

ばんこく-し 萬國史【名】ばんこくれきし（萬國歴史）に同じ。

ばんこく-じむきよく 萬國事務局【名】こくさいじむきよく（國際事務局）に同じ。

ばんこく-しんがう 萬國信號【名】『英 International code signal』萬國の間に共通して用ふる信號。

ばんこく-しゆぎ 萬國主義【名】こくさいしゆぎ（國際主義）に同じ。

はんごく-しゆご 半國守護【名】室町幕府の制度にて、半國を領せし守護。半守護。

ばんこく-せきじふじ-そうくわい 萬國赤十字總會【名】各國の赤十字社が、互に意見の交換、問題の研究のために、各、代表者を派遣して開く會議。西暦一八六七年、巴里の博覽會を機とし、同地にて始めて開催す。

ばんこく-せんぱく-しんがう 萬國船舶信號【名】『英 International code of signals』各國間に共通なる船舶信號。

ばんこくせんぱくしんがう-き 萬國船舶信號旗【名】萬國船舶信號に用ふる旗。

ばんこくせんぱくしんがう-しよ 萬國船舶信號書【名】萬國船舶信號に於ける信號と、その標示する意義とを記載せる文書。諸海國、各その國語を用ひて調製す。

ばんこく-ちづ 萬國地圖【名】世界各國のを悉く集め載せたる地圖。世界地圖。

ばんこく-ちゆうさいさいばん 萬國仲裁裁判【名】ちゆうさいさいばん（仲裁裁判）に同じ。

ばんこく-ちり 萬國地理【名】世界各國の地理を說く學科、又その書。世界地理。

ばんこく-でんしん 萬國電信【名】こくさいでんしん（國際電信）に同じ。

ばんこくでんしん-くわいぎ 萬國電信會議【名】萬國電信に關する各種の事項を議定するため、その加盟諸國の委員を以て組織せる會議。萬國電信條約の規定に基づき、約五箇年ごとに、一回づつ開催す。

ばんこくでんしん-でうやく 萬國電信條約【名】西暦一八六五年、歐洲諸國の委員巴里に會同して、萬國電信に關する各種の事項を議定し、盟約國は、各その議定に遵ふべきことを定めたる條約。我國は、明治十二年に加盟せり。

ばんこく-どうめい 萬國同盟【名】各國が、共通又は交換の目的を果さんとするための同盟。

ばんこくどうめい-じむきよく 萬國同盟事務局【名】こくさいじむきよく（國際事務局）に同じ。

ばんこく-どりやうかう-きよく 萬國度量衡器局【名】萬國メエトル條約の規定に依りて、巴里に設立し、萬國メエトル及びキログラム原器の保管・調査、その他、萬國度量衡會議にて決議したる事項を研究・實行する所。

ばんこく-どりやうかう-くわいぎ 萬國度量衡會議【名】萬國メエトル條約の規定に依り、世界各國の度量衡を統一する目的を以て、六箇年以內ごとに、同盟國の委員の會同して催す會議。

ばんこく-はくらんくわい 萬國博覽會【名】世界各國が參同して、出品する博覽會。（內國博覽會に對して）

ばんこく-はつおんぷ 萬國發音符【名】〔語〕次條に同じ。

ばんこく-はつおんぷがう 萬國發音符號【名】〔語〕『英 International phonetic alphabet』西暦一八八六年、英國にて、聲音學者及び語學教員を會員として成立したる國際聲音學協會（International Phonetic Association）の制定したる發音符號。同國の聲音學大家スヰイト（H. Sweet）の制定に、多少の修正を加へたるもの。世界各國の言語に適用し得る精密なるものと、或一國の國語の上に用ふる便利上の簡略なるものとの二種あり。漸次、從前の他の發音符號を壓倒して、各國廣く採用するに至れり。

はんこく-はんえい 半石半永【名】德川時代に、田租の半分を石代にて納め、半分を米にて納めしこと。

ばんこく-ふくほんゐ 萬國複本位【名】〔經〕こくさいふくほんゐ（國際複本位）に同じ。

ばんこくふくほんゐ-せい 萬國複本位制【名】〔經〕こくさいふくほんゐせい（國際複本位制）に同じ。

ばんこく-ぶらく 萬國部落【名】〔地〕『我國第一の避暑地として、在留諸外國人の來り聚る處なるよりいふ』かるゐざは（輕井澤）の異稱。〔俚語〕

ばんこく-へいわくわいぎ 萬國平和會議【名】露西亞國皇帝ニコラス（Nicholas）第二世の主唱によりて成立し、各條約國

の派出せる委員參同して、世界の平和を目的とする國際共通の規約を協議する會議。第一回は西曆一八九九年に、第二回は一九〇七年に、共に和蘭國の首府ハアグ(Hague)に於て開かれたり。

ばんこく-へうじゅんじ 萬國標準時【名】『英 Universal time』萬國に共通なる標準時。通常、英國グリニチ(Greenwich)天文臺を通過する子午線を基本とす。

ばんこく-めえとるでうやく 萬國米突條約【名】西曆一八七五年、佛・獨・北米等の十三箇國の間に、メエトル法度量衡の制定・普及を目的として、締結したる條約。我國は、明治十九年加盟せり。

ばんこく-らうどうどうめい 萬國勞働同盟【名】世界各國の勞働者を組織して、一の社會團體となさんとする同盟。西曆一八六三年、英國ロンドンにて成立し、同一八六六年、瑞西（スヰス）國ジュネエブ(Genève)に、最初の總會を開けり。

ばんこく-れきし 萬國歷史【名】『英 Universal history』世界各國の歷史を說く學科、又その書。萬國史。世界歷史。世界史。

ばんこく-れんがふはがき 萬國聯合葉書【名】ばんこくいうびんれんがふはがき（萬國郵便聯合葉書）の略。

ばんこく-れんがふはくらんくわい 萬國聯合博覽會【名】數箇國の政府及び人民、又はその何れかが參同・出品する博覽會。萬國博覽會。

ばんこ-こう 萬戸侯【名】『史記の李廣傳に「如令三子當二高帝時一、萬戸侯豈足レ道哉」とあり。領內に萬戸もある程なる義。領地の廣大なる諸侯。太平記「千鍾の祿、萬戸の侯を得たる如く悅び」

ばんこ-し 盤古氏【名】ばんこ（盤古）㊁を見よ。

ばんこ-せいじ 萬古青磁【名】青磁に似て、一種の青色を含める萬古燒。元文頃、伊勢國桑名の人、沼浪弄山の造りしもの。

ばん-こつ 萬骨【名】多くの人の骨。萬骨枯る【句】「一將功成って、萬骨枯る」を見よ。

ばん-こつ 蠻骨【名】蠻勇なる骨柄（コツガラ）。蠻襟（バンカラ）なる風采。

ばん-ごと 晚每【副】まいばん（每晚）に同じ。

ばん-ごと 番每【副】事をする度ごとに。每回。八笑人「番ごと仕くじってゐても」

はん-ことば 判詞【名】判㊁の意見を記したることば。奧の細道「貞室…、功名の後、この一村、判詞の料を取らずといふ」

はんご-はふ 反語法【名】〔文・哲〕反語㊂又は㊃の方法。

はんご-はふ 範語法【名】〔哲〕『英 Normal words method』初等敎育に於ける國語敎授の一方法。實物又は圖畫によりて、觀察・談話せしめ、次ぎに、その實物・圖畫を寫さしめたる上、これに相當する單語を示し、その單語の音を分解して、讀方・書方を覺えしむるもの。現今の國語敎授法は、主として、これに依る。

はん-こん 斑痕【名】斑なるきずあと。

はん-こん 瘢痕【名】きずあと。創痍。

はん-こん 反魂【名】死にし人の魂を呼びかへすこと。死者を蘇生せしむること。撰集抄「反魂の祕術」

ばん-こん 盤根・蟠根【名】㊀わだかまりたる根（ネ）。㊁次條に同じ。

盤根・錯節【句】㊀わだかまれる根と、入り組める節（フシ）と。盤錯。㊁入り組みて、處理しにくき事件の譬。盤錯。

盤根・錯節に遇はずんば、何を以てか利器を別たん【句】『後漢書の虞詡傳に「詡爲二朝歌長一、笑曰、不レ遇二盤根錯節一、何以別二利器一乎」とあるに本づく』困難なる事件に出會はずば、すぐれたる器量を示すこと能はず。〔諺語〕

ばん-こん 晚婚【名】普通の年齡より晚（オソ）く結婚すること。年長けて、結婚すること。（早婚に對して）

はんごん-かう 返魂香・反魂香【名】『白居易に、李夫人と題する古詩あり、東坡詩集の註に「李夫人死、漢武帝念レ之不レ已、乃令三方士作二反魂香一、燒レ之、夫人乃降」と見ゆ』燒けば、その香、數百里に達し、死屍の地にあるもの蘇りて、死者、姿を烟の中に現すといふ香。はんごんじゅ（返魂樹）參照。太平記「武帝、悲に堪へ兼ねて、返魂香を燒きたまひしに」本朝二十四孝「魂返す反魂香」

はんごん-さう 返魂草・反魂草・劉寄奴【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。高さ六尺に達し、每年宿根より苗を出だす。葉は深く羽狀に裂けて、三片乃至七片となり、各裂片は披針形を呈し、鋸齒を具ふ。八九月頃、黃色の頭狀花相集り、繖房花序をなして開く。本州の山地及び北海道・千島・樺太に自生す。かつをぐさ。たつみあがり。ななつば。やまあさ。

はんごん-じゅ 反魂樹・返魂樹【名】『漢武帝內傳及び十州記に出づ』支那の西海の聚窟淵といふ處にあり。その汁を煉りて、反魂香に作るといふ樹。楓に似て、花も葉も香しといふ。

はんごん-たん 反魂丹【名】越中國富山（トヤマ）市の藥商の賣り出す藥。八笑人「水もよっぽど吞んだらう。反魂丹でも遣らうか」

ばん-ごや 番小屋【名】㊀番人の居る小屋。㊁ばんや（番屋）㊁に同じ。傍廂「橋の雙方に番小屋ありて、武士の外は、橋錢二文づつ取りしを」

ばんこ-やき 萬古燒【名】伊勢國四日市及びその附近より製出する陶器。專ら手づくねにて、茶碗・急須・菓子器など多し。質薄けれども堅くして、「萬古」の文字を印す。元文中、桑名の人の創始に係り、その白色なるを、溫古燒といふ。

はん-ごろし 半殺【名】殆ど死ぬる程の目に合はすること。

はん-ころび 半轉【名】〔建〕『ころび（轉）㊁を見よ』柱の傾斜の度の、その下部に於ける半徑だけなること。かたころび。

はん-さ 半簑・半蓑【名】身長の半ほどなる短き簑。太平記「太公望が半簑の烟雨、水冷しくして」

はん-さ 煩瑣【名】こまごまとわづらはしきこと。くだくだしきこと。

はん-ざ 半座【名】一座席の半分。

半座を分つ【句】㊀わが座席を、半ば他人に讓る。㊁〔佛〕多寶如來の、多寶塔中にて、釋尊に、一座席の半分を分ち、又、釋尊の、迦葉（カセフ）に、同じく一座席の半分を分ちたりとの傳說。後者は、二乘と佛と解脫（ゲダツ）の床を同じくする義といふ。㊂淨土にて、同じ蓮（ハチス）の臺（ウテナ）に、二人一緒に坐して、死後に至るまで親しくす。半蓮を分つ。

半座を分く【句】前條に同じ。太平記「淨土に生れば、同じ蓮（ハチス）の臺（ウテナ）に、半座を分けて待つべし」日吉丸稚櫻「未來永永（エイエイ）一つ蓮（ハチス）、半座を分けて相待つべし」

はん-ざ 反坐【名】〔法〕『へいはん（平反）を見よ』僞證又は誣告などをなして、他人を罪に陷れんとし、又は陷れたる者に、その罪と同一、若しくは同一程度の刑を科すること。〔舊刑法の語〕

はん-ざ 判者【名】はんじや（判者）の約。〔古語〕源氏「いと苦しきはんざにもあたりはべるかな」

はん-さい 飯菜【名】飯（メシ）と菜（サイ）と。著聞「麥飯に鱠あはせ煮て、……との飯菜をうとましき事に思し召し取り」

はん-さい 半歳【名】はんねん（半年）に同じ。

はん-さい 半齋【名】〔佛〕禪宗にて、早朝の粥と午時の齋食（トキ）との中間なる時。一說に、午時は一日の半ばなるより、午時の齋食（トキ）をいふと。

はん-さい 半濟【名】はんせい（半濟）を見よ。

はん-さい 半截【名】『截の字の音、正しくはセツ』半分にたちきること、又そのたちきりたる物。半切。「四六半截」

はん-さい 斑犀【名】次條を見よ。

斑犀の帶【句】「犀角（サイカク）の帶」に同じ。源氏「よきはんさいの帶」

はん-さい 搬載【名】はこびのすること。

はん-さい 煩碎【名】煩雜にして、零碎なること。くだくだしきこと。

はん-さい 繁碎【名】前條に同じ。

はん-さい 燔祭【名】〔基〕『英 Burnt-offering』猶太（ユダヤ）人が神を祭るに、犧牲の獸

の全身を、祭壇にて燒きしこと。その香、天に昇りて、神を喜ばしむとの考にてせしものといふ。　「だけの量。

はん-ざい 半劑【名】藥劑の、一服の半分

はん-ざい 犯罪【名】法令に列擧せる一切の違法行爲。とが。　「じ。

ばん-さい 晩歲【名】ばんねん(晩年)に同

ばん-さい 晩菜【名】晩食の總菜。

ばん-さい 坂西【名】〔地〕くわんさい(關西)に同じ。(坂東に對して)　平家「當國の住人、坂西の近藤六親家」

坂西の七雄【句】〔人〕元龜・天正の頃、關西に勢力ありし、七人の諸侯。卽ち三好長慶・大內義隆・尼子晴久・毛利元就・島津義久・大友宗麟・長曾我部元親。

ばん-ざい 萬歲【名】㊀よろづのとし。萬年。ばんぜい。㊁いつまでも生存し、又は榮ゆること。(支那にては、もと上下一般に用ひ、後、天子にのみいふに至れり)ばんぜい。㊂めでたきこと。祝ふべきこと。㊃『史記の高祖本紀に「吾雖レ都二關中一、萬歲後、吾魂魄猶樂二思沛一」、漢書の翟方進傳に「李尋以二星變一責二方進一云、萬歲之期近、愼二朝暮一」とあり。**ひやくさい**(百歲)㊂參照』貴人の死去。太平記「最期の一念によりて、三界に生(シヤウ)を引くと、經文に說かれて候へば、萬歲の御事、よろづ叡慮にかかり候はんことをば」　「同じ。

萬歲の幡(ハタ)【句】「萬歲(バンゼイ)の幡」に

ばん-ざい 萬歲【感】『明治二十二年憲法發布式の時、帝國大學の學生・職員の、觀兵式に行幸の聖駕を宮城外に奉迎するに當り、臨時編年史編纂掛の提案に從ひて、この語を用ふることとし、その發音は、文學博士外山(トヤマ)正一氏の說により、漢吳兩音を交ふるに一決してより、弘く行はる。個人もしくは團體のために祝福する意にて唱ふる語。

はんざい-かうゐ 犯罪行爲【名】〔法〕犯罪となるべき行爲。

はんざい-がく 犯罪學【名】犯罪の發生する原因を研究する學問。　「旗)に同じ。

ばんざい-き 萬歲旗【名】**ばんぜいき**(萬歲

はんざい-しんりがく 犯罪心理學【名】『英 Criminal psychology』犯罪人の精神狀態を研究する學問。

はんざい-しや 犯罪者【名】犯罪行爲のありたる人。犯罪人。犯人。

はんざい-しやくわいがく 犯罪社會學【名】〔法〕**けいじしやくわいがく**(刑事社會學)に同じ。　「りたる土地。

はんざい-ち 犯罪地【名】犯罪行爲のあ

はんざい-にん 犯罪人【名】**はんざいしや**(犯罪者)に同じ。

はんざいにん-ひきわたし 犯罪人引渡【名】〔法〕犯罪人の所在國が、その犯罪に關する被害國の請求に應じて、その犯罪人を引き渡すこと。

はんざいにんひきわたし-でうれい 犯罪人引渡條例【名】**たうばうはんざいにんひきわたしでうれい**(逃亡犯罪人引渡條例)の略。

ばんざい-ばん 萬歲幡・萬歲旛【名】**ばんぜいき**(萬歲旗)に同じ。

はんさい-るゐ 板鰓類【名】〔動〕**なんこつるゐ**(軟骨類)に同じ。

はん-さう 繁霜【名】繁くおく霜。嚴霜。

はん-さう 半雙【名】一雙の半分。

はん-さう 藩倉【名】**くらやしき**(藏屋敷)に同じ。　「てあるもの。

はん-さう 瘢瘡【名】きずのあとの、腫れ

はん-さう 反想【名】くりかへし思ふこと。思ひかへすこと。回想。　「す人相。

はん-さう 反相・判相【名】謀叛(ムホン)をな

ばん-ざう 番藏【名】『もと**ばんこ**(番子)㊂と同義より出でし語か』ものもらひ。こじき。〔肥前國長崎の方言〕

ばん-ざう 番匠【名】**ばんしやう**(番匠)の約。〔古語〕七一職人歌合「ばんざう、われらも、けさは、相國寺へ又召され候。暮れてぞ歸り候はんずらん」

はんさう-あん 半掃庵【名】〔人〕**よこゐやいう**(橫井也有)の別號。

ばんさう-かう 絆創膏【名】單鉛硬膏と黃蠟(ワウラフ)とを熔和し、これに松脂(マツヤニ)等を混和して製し、疵口の開かぬやうに貼る膏藥。かすがひ膏。松脂(マツヤニ)硬膏。護謨絆創膏。

はん-ざうさく 半造作【名】家の造作の、未だ出來あがらぬこと。建築工事のなかばなること。又その工事。　狂言(盜人連歌)「まだ半造作ぢや。塀の手があはぬ」　風俗文選(四海廬賦)「蚫(アハビ)の貝の半造作」

はんざう-すゐらい 反裝水雷【名】『英 Counter mine』多數の水雷罐を、一列に繫ぎて、一時に爆發せしめ、その爆發力によりて、敵の水雷に損害を與へ、その效力を失はしむる水雷。

はんざう-もん 半藏門【名】『寬永の頃、この門內、枡形(マスガタ)の側に、服部半藏の屋敷ありしに本づく名なりといふ』江戶城の內郭諸門の一。西方、麴町區に通ずる所にあり。もと門內は、代官町に通ぜしが、今は直に宮城の後庭に通じ、諸人の通行を許さず。舊稱、麴町口・麴町御門。

はん-ざき 鯢・鯢兒【名】〔動〕『身體を半分に裂きても、再生すといふ』有尾類に屬する兩棲類。我國及び支那の特產にして、大なるは五尺に達し、四肢あり。形醜惡にして、やや蜴蜥(トカゲ)に類す。伊賀・伊勢・大和及び中國地方の溪流に產し、岩石の下又は洞窟の內に棲み、魚類・蟹類・蛙類等を捕食す。さんせううを。

はん-さく 半作【名】㊀半ば作り上ぐること。つくりかけ。盛衰記「半作の佛像のうなづきたまひしも、憑もしく」㊁作物(サクモツ)の出來ばえ、平年に比して半ばなること。

ばん-さく 盤錯【名】㊀『總苑に「酒食珍味盤二錯於前一」とあり』入り組みまじはること。㊁『劉禹錫の文に「紛拏盤錯、一瞬而剖」とあり』「盤根(バンコン)・錯節」の略。

はんさく-どうぶつ 半索動物【名】〔動〕原索動物の一綱。體は左右相稱にして、細長き蠕蟲(ゼンチユウ)狀をなし、體壁は筋肉質、皮膚は軟くして、纖毛を有し、粘液を分泌し、體は吻・襟・幹の三部に分れ、吻部は一腔を有し、襟部は二腔を有して、各、外界に開き、幹部にも、一對の腔あれども、開口なく、その中に、各種の器官を藏し、海中の砂泥中に棲む。脊索を有するが故に、脊椎動物に近く、擬實珠蟲(ギボシムシ)は、その代表的なるものなり。

ばん-ざくろ 番石榴【名】〔植〕**ばんじらう**(番石榴)に同じ。　「倉下緒)に同じ。

はん-さげを 半下緒【名】**かまくらさげを**(鎌

はんさ-ざくら はんさ櫻【名】〔植〕**りんぼく**(りん木)に同じ。

はん-さし 半差【名】〔商〕取引所の呑(ノミ)の一種。仲買人が、註文額の二分の一を市場にかけ、殘餘に對して、自ら賣買の相手方となり、市場の出來値によりて、損益を計算すること。**さんぶさし**(三分差)參照。　「便。

はん-さし 筈刺【名】**はずさし**(筈刺)の音

ばん-さしもの 番指物【名】『**ばん**(番)は接頭語』步卒の指物。

はん-さつ 藩札【名】德川時代及び明治の初年に、各藩にて、幕府の許可を得て發行し、その領內に限りて通用せしめし紙幣。銀札・銀券・銀切手・錢札・錢切手・預札・預手形・產物手形など、種種の名目を用ひたり。多くは財政窮乏の結果、一時の救濟策に出で、旗本の知行所中にも、稀には發行せしものあり。明治四年の廢藩置縣の際、すべて新政府の負債に歸し、同年七月十四日の相場によりて、新紙幣と交換し、同十二年六月に交換を終了せり。藩紙幣。　「ること。

はん-ざつ 繁雜【名】繁多にして複雜な

はん-ざつ 煩雜【名】煩瑣にして複雜なること。ごたごたすること。

はんさ-てつがく 煩瑣哲學【名】〔哲〕宗敎上の信條と、哲學上の究理との一致するを示すを目的とし、第九世紀より第十五世紀に至る、約六百年間に互りて、中世哲學の中堅とも看做すべきもの。その哲學的基礎は、第一期(九世紀より十二世紀までの創立時代)はプラトオン學風の實在論。第二期(十三世紀の全盛時代)はアリストテレイス學風の實在論。第三期(十四・十五世紀の衰頽時代)は唯名論なり。

哲學思想上より見れば、實在論と唯名論との爭が、この哲學の骨子をなせりといふを得べし。すこら哲學。

はんざは 榛澤【名】〔地〕武藏國の舊郡の一。戰國の頃、その一部分は、上野國新田郡に屬し、後、舊に復せしが、明治二十九年、大里郡に合併せり。

はん-ざふ 半插・楾【名】㊀『楾は和字』次條に同じ。〔匜〕空穗「しろがねのはんざふ」枕「はんざふに、手水(テウヅ)など入れて」㊁齒黑(ハグロ)に用ふる角盥(ツノダラヒ)。みみだらひ。㊂たらひ(盥)㊀を云ふ。〔因幡國の方言〕

はんざふ-だらひ 半插盥・楾盥【名】木又は金屬にて造り、湯・水を注ぐに用ひ、柄に湯・水の通路ありて、これを器の內に插みたる具。はにざふ。はざふ。大鏡「はんざふ盥して、御手すますことなかりき」

はん-さん 半產【名】りうざん(流產)に同じ。

はん-さん 槃散・槃跚【貌】まんさん(蹣跚)に同じ。

ばん-さん 晚餐【名】ばんめし(晚飯)に同じ。

ばん-さん 晚蠶【名】なつご(夏蠶)に同じ。

ばん-さん 晚參【名】〔佛〕晚刻の參禪、又は念誦(ネンジユ)。(早參に對して)

ばん-ざん 萬山【名】多くの山。千山萬嶽。

ばん-ざん 蕃山【名】〔人〕くまざはばんざん(熊澤蕃山)を見よ。

ばんさん-くわい 晚餐會【名】衆人打ち寄りて、共に親しく晚餐を食すること。

はん-さよう 反作用【名】〔理〕『英 Reaction』甲物體が、乙物體に力を作用せしむる時、前者が、後者より、大さ等しく、方向反對なる抵抗を必ず受くること。即ち一の力を、一面より見て、作用といふ時、これを、又、他面より見たるもの。反動。

反作用の法則【句】〔理〕「ニウトンの運動の第三法則」に同じ。

ぱん-ざら 麪包皿・麵包皿・麪麭皿・麵麭皿【名】西洋料理にて、麪包を一人前づつ盛りて、各人に配付する皿。

はん-ざらし 半晒【名】日光に晒して、未だ十分に乾かぬこと。はんかわき。藤簍歌「涙に袖は半晒」仕懸文庫「半晒の藍さびのぶっさき羽織」

はん-し 藩士【名】藩㊁の武士。大名の家來。藩臣。

はん-し 藩司【名】ふせいし(布政使)を見よ。

はん-し 藩史【名】藩㊁の歷史。

はん-し 半紙【名】㊀日本紙の一。もとは延紙(ノベガミ)を半截し、用途廣く、今は特にその大さに製し、種類多し。二十枚を一帖、十帖を一束とす。あげやがみ。㊁はんきり(半切)を云ふ。〔飛驒國・豐後國の方言〕

はん-し 半子【名】『唐書の回鶻傳及び劉禹錫の祭㆓楊庶子㆒文に見ゆ。半分の子に當る意』むこ(聟)の異稱。

はん-し 半死【名】㊀殆ど死なんばかり、又は枯れんばかりなること。なからじに。瀕死。垂死。半生。鴉鷺合戰「打ちつ、破りつ、半死に至るほど打擲(チヤウチヤク)しけり」㊁生先(オヒサキ)の短きこと。餘生の幾ばくもなきこと。

半死・半生(ハンシヤウ)【句】前條㊀に同じ。平家「半死半生にぞ見えられける」和合人「まことに半死・半生、やうやう往來の駕屋(カゴヤ)に助けられまして」

はん-し 判士【名】㊀審判をなす人。㊁軍法會議にて、審判を掌る職。將校これに當り、官等は、被告人の身分によりて、差あり。陸・海軍共に、その上には、判士長あり、その下には、陸軍にては理事、海軍にては主事あり。

はん-し 判紙【名】白紙に判を捺したるもの。白紙印。

はん-し 判司【名】古、支那の官人の持來りしを、眞似て造れる陶器。

はん-し 反支【名】はんしげつ(反支月)の略。拾芥抄「反支、產時忌㆑之、令㆑敷㆓牛皮㆒」

はん-し 反始【名】「報本・反始」を見よ。

はん-し 板齒【名】まへば(前齒)に同じ。

はん-し 班資【名】官位と俸給と。

はん-し 班師【名】『師を班(カヘ)す義』軍隊をひきゐて歸ること。

はん-し 飯匙【名】飯を食ふためのさじ。めしじやくし。

はんじ 判【名】判ずること。判斷。

はん-じ 反辭【名】〔文〕はんか(反歌)を見よ。

はん-じ 半時【名】㊀一時(イツトキ)の半分、即ち今の約一時間。はんとき。㊁一時間の半分、即ち三十分間。

はん-じ 判事【名】㊀支那宋の初期に於ける吏部・戶部・禮部・兵部・刑部・工部の六部、太常寺・宗正寺・光祿寺・司農寺・鴻臚寺等の九寺、又、小府監・國子監等、及び殿中省の長官。六部のは判部事、九寺のは判寺事、監のは判監寺、殿中省のは判省事といひ、定員は、禮部と刑部との判部事、宗正寺と司農寺との判寺事、國子監の判監事は二名、その他は一名。㊁古、刑部(ギヤウブ)省にて、解部(トキベ)の鞫狀を案覆し、刑名を斷定し、爭訟を判ぜし職。大・中・少の三等に分れ、定員は、大判事二人、中判事・少判事各四人。ことわるつかさ。㊂古、太宰府にて、犯狀を案覆し、刑名を斷定し、爭訟を判ぜし職。大・少の二等に分れ、定員各一人。㊃明治の初年、鎭將府にて、府事の糺判を掌りし職。元年十月、鎭將府と共に廢せらる。㊄明治二年に設けし裁判官。大判事・中判事・少判事の三等に分れ、何れも奏任官。同四年、各等に權官を增置せり。㊅現時、內地又は朝鮮に於ける通常司法裁判所を構成し、裁判事務を掌る官。內地のは、親任・勅任・奏任にして、單に判事といひ、朝鮮のは、奏任・判任にして、朝鮮總督府判事と呼び、職としては、何れも、その補せらるる裁判所の名を冠らせて、大審院判事・京城地方法院判事など呼ぶ。

はん-じ 班次【名】ならび。列。席順。

はん-じ 蕃滋【名】しげりはびこること。繁殖。

はんじ 半二【名】〔人〕ちかまつはんじ(近松半二)を見よ。

ばん-し 番士【名】㊀番組を分ちたる各組の兵士。隊士。㊁番に當りたる兵士。㊂武家時代に、番頭(バンガシラ)に屬して、殿中の宿衞、各所の警衞に勤番せし士。

ばん-し 挽詩【名】ばんか(挽歌)に同じ。

ばん-し 萬死【名】萬萬生命の助る見込なきこと。九死。太平記「萬死を出でて、二度見參に入る」

萬死一生【句】「九死(キウシ)一生」に同じ。

萬死の中に一生を得【句】次條に同じ。太平記「萬死の中に一生をも得難しと覺えつるに」

萬死を出でて、一生に遇ふ【句】『貞觀政要に「太宗曰、玄齡從㆑我定㆓天下㆒、備嘗㆓艱苦㆒、出㆓萬死㆒而遇㆓一生㆒」とあり』極めて危かりし生命を、辛うじて助る。九死を出でて、一生を得。〔諺語〕太平記「萬死を出でて一生に遇ひ、白晝に京へ引返す」

ばん-し 蕃使【名】蕃國よりの使者。外蕃の使者。外國の使者。

ばん-じ 萬事【名】すべての事。あらゆる事。諸事。

萬事限(カギリ)【句】いかなる手段も、效を奏せざること。助かる見込なきに至れること。萬事休せること。義經記「虐病(ギヤクヘイ)をして、萬事限になりけり」心中宵庚申「萬事限の俄病、姉のお輕は側離れず」

萬事休(キウ)す【句】『宋史の荊南高氏世家に「荊人目爲㆓萬事休㆒」とあり』救ふべき手段なし。施すべき方法なし。

ばん-じ 鑁字【名】〔佛〕『鑁は梵 Vam』密敎にて、金剛界の大日如來の本體を現すとて、智慧の標示とする梵字。(阿字に對して)

鑁字の明(ミヤウ)【句】〔佛〕密敎にて、金剛界の大日如來に歸命(キミヤウ)し奉る義にて唱ふる眞言。謠曲(舞車)「洒水の印を結んで、鑁字の明を誦(ジユ)せしかば」

はんじ-あん 半時庵【名】〔人〕まつきたんたん(松木淡淡)を見よ。

はんじあん-りう 半時庵流【名】〔文〕俳諧の一派。松木淡淡の創めしもの。

ぱんじい (英 Pansy)【名】〔植〕さんしきすみれ(三色菫)に同じ。

ばんし-いっしやう-の-ひ 萬死一生日【名】陰陽家にて、大凶なりといふ日、即ち正月の亥の日、二月の戌の日、三月の酉の日、四月の申の日、五月の未の日、六月の

午の日、七月の巳の日、八月の辰の日、九月の卯の日、十月の寅の日、十一月の子の日、十二月の丑の日。

ばん-しう 晩秋 【名】㊀秋のすゑ。秋のくれ。暮秋。秋晩(シウバン)。㊁陰暦九月の異稱。

ばん-しう 蠻臭 【名】野蠻の臭味。野蠻なる風(フウ)。

ばん-しう 播州 【名】〔地〕『播の字の音、實はハなるを、古より誤り來れり』**はりま**(播磨)に同じ。

ばんしう-さらやしき 播州皿屋敷 【名】爲永太郎兵衛・淺田一鳥の合作に係る淨瑠璃。細川勝元の重寶なる唐繪の皿の紛失事件を中心として、善人榮え、惡人亡ぶる由に作りたるもの。もと江戸番町に屋敷ありし幕士青山主膳の召使お菊といふ者、主人祕藏の南京皿を破損せしために、主膳の怒に觸れ、遂に邸內の井戸に投身せし事件を脚色せるものといふ。

はんじう-しゆぎ 半獸主義 【名】〔文〕人間の獸性を、特に肉慾の方面に於て、僞らず發表する主義。この名稱は、小說家故岩野泡鳴の提唱に係れども人間を靈(神性)と肉(獸性)との混交せるものと見てのことなれば、新說に非ざるなり。

はんじ-うちは 判團扇 【名】**ならうちは**(奈良團扇)に同じ。 志道軒傳「夏の氣色を荷ひ出す判じうちは・澁團扇」

ばんしう-まい 播州米 【名】播磨國より產出する米。**はりまよね**。

ばんしう-もん 萬秋門 【名】大內裡豐樂(ブラ)院十九門の一。西方に面し、延明門と相對して、西面外の大門とも呼びたり。

ばんしう-もめんおり 播州木綿織 【名】播磨國、殊に、その多可郡地方より產出する木綿の縞織物。

ばんしう-らく 萬秋樂 【名】**まんしうらく**(萬秋樂)に同じ。

はんし-おん 半齒音 【名】〔語〕支那の音韻學に於ける七音の一。「日」の字の發音に於て、初頭に存する子音にして、通常jの字にて表せども、英・佛・獨の何れの發音法を以てしても、これとは、同一のものに非ず。今日の聲音學上よりいへば、寧ろ舌音に屬すべきなり。

はん-しき 範式 【名】㊀のり。かた。規範。軌範。㊁〔數〕**こうしき**(公式)㊁に同じ。

ばん-しき 盤涉 【名】〔音〕十二律の一。五音の羽(ウ)に該當し、一年十二箇月と十二支とを配すれば、八月と酉とに當る。

はんし-きがう 反始記號 【名】〔音〕『伊Da capo.始よりの義』樂譜記號の一。樂譜上、曲の終の所に記入して、その所より更に始に返りて、奏唱の繼續を示す。Da capo の名をそのまま、又はその略語なるD.C.を用ふ。**はんぷくきがう**(反覆記號)參照。

ばんしき-てう 盤涉調 【名】〔音〕盤涉を主調音としたる旋音。呂旋・律旋共に備はれども、雅樂にては、常に律旋を用ふ。 源氏「盤涉調を、いとをかしく吹きて」 拾芥抄「八月、盤涉調」

はんし-くわ 斑枝花 【名】〔植〕**ぱんや**(木綿)の漢名。

はんしげ-だるき 半繁棰 【名】〔建〕配列の間隔の、本繁(ホンシゲ)棰よりは少し疎、疎(ハマウ)棰よりは密にして、下端の幅の二倍なる棰。

はんし-げつ 反支月 【名】陰陽家にて、產婦に忌む月。正と七、二と八、三と九、四と十、五と十一、六と十二の如く、二箇月を一つにして、十三歲の姙婦は正月と七月とを、十四歲は二月と八月とを、この月とし、順次に數へ、十三歲より四十九歲までを數へゆけば、十八歲は六月と十二月とに當りて一周し、又、十九歲より正・七に始まり、二十四歲までにて、又、一周す。反支。

はんじ-けんじ-とうようしけん 判事檢事登用試驗 【名】一定の資格ある者に就きて、判事・檢事に登用する適否を檢定する試驗。二回に分ち、第一回試驗は、更に本試驗と豫備試驗とに分ち、豫備試驗は、論文及び外國語(英・佛・獨語の中を選擇せしむ)に就きて行ひ、本試驗は、又、更に筆記・口述の二に分ち、前者は憲法・民法・刑法・商法・民事訴訟法・刑事訴訟法・行政法・國際公法・國際私法、後者は民法・商法・刑法・民事訴訟法・刑事訴訟法の內、少くとも三科目に就きて行ひ、第二回試驗に於ては、第一回試驗に合格したる司法官試補に就きて、實務に習熟せりや否やを試驗し、これ亦筆記試驗と口述試驗との二に分つ。判檢事登用試驗。

はんじけんじとうようしけん-ゐゐん 判事檢事登用試驗委員 【名】㊀判事・檢事登用試驗の試驗委員。試驗擧行ごとに、司法省の高等官及び判事・檢事の中より、司法大臣、これを命ず。㊁前述の委員と判事檢事登用試驗委員長との併稱。

はんじけんじとうようしけんゐゐん-ちやう 判事檢事登用試驗委員長 【名】判事檢事登用試驗委員を監督し、判事檢事登用試驗に關する一切の事務を總理するもの。第一回試驗のは、試驗擧行ごとに、司法省の高等官及び判事檢事の中より、司法大臣これを命じ、第二回試驗のは、司法次官これに當る。

はん-しごと 半仕事 【名】片手間に出來上る仕事。 諺「袖は針妙(シンメウ)の半仕事」

はん-しじ 判司事 【名】明治初期に於ける七官と民部官の各司との職員の一。正と權とあり。司事を糺判することを掌りし判任官。二年廢せられたり。

はんじ-しほ 判事試補 【名】司法官試補の一。判事檢事登用試驗の第一回試驗に及第して、第二回試驗を受けぬ前、區裁判所又は地方裁判所にて、一名又は數名の判事に附屬して、實務を修習するもの。

はんし-しやう 半視症 【名】〔醫〕『獨Eemiopsie』**はんまうしやう**(半盲症)に同じ。

はんし-ずり 半紙摺 【名】半紙に印刷すること、又その印刷物。

はん-じせいたい 反磁性體 【名】〔理〕『英Diamagnetic body』**じせいたい**(磁性體)㊁を見よ。

ばんし-せんこう 萬紫千紅 【名】㊀いろいろの美しき花。㊁〔書〕**せんこうばんし**(千紅萬紫)㊁を見よ。

はん-した 版下・板下 【名】版木に彫(ホ)るべき書・畫などの下書。はんかうした。

はんした-あぶみ 半舌鐙 【名】舌の短き鐙。したみじかあぶみ。

はんした-かがみあぶみ 半舌鏡鐙 【名】半舌鐙にして、又、鏡鐙なるもの、卽ち鉸具頸(カコクビ)より鳩胸(ハトムネ)を、銅又は銀にて張り包める半舌鐙。

はんした-かき 版下書・板下書 【名】版下を書くこと、又これを業とする人。

はんした-ゑ 版下畫・板下畫 【名】版下とする畫。

はんし-ちやう 判士長 【名】軍法會議の裁判長。佐官以上の將校、これに當り、被告人の身分によりて、官等に差あり。**はんし**(判士)參照。

はんじ-ちようかい-はふ 判事懲戒法 【名】裁判官の懲戒に關する法律。七章・五十七條より成り、明治二十三年八月、法律第六十八號を以て制定せられ、同年十一月一日より實施せられたり。

はん-じつ 半日 【名】**はんにち**(半日)に同じ。

はんじつ-そん 半日村 【名】『寰宇記に「半日村、此山高蔽二虧陽影一、常照二其一半一」とあり』山陰になりて、一日の半分ほどは日の照さぬ村。

はん-しとみ 半蔀 【名】**はじとみ**(半蔀)に同じ。 運歩色葉集「半蔀、ハンシトミ」

はんし-ばん 半紙判 【名】半紙を竪に二つに折りたる大さ、又その大さなる書籍。

ばん-しふ 蕃習・蠻習 【名】㊀野蠻なる風習。㊁蠻人の慣習。蕃俗。

はん-しへい 藩紙幣 【名】**はんさつ**(藩札)に同じ。

はんじ-ほ 判事補 【名】一級より四級に分れ、訴訟の下調を掌り、又は便宜判事の缺に當りし判任官。明治八年設置、同十九年廢止せり。

はん-じまひ 半仕舞 【名】㊀**はやじまひ**(早仕舞)を見よ。㊁清酒の釀造にて、醪(モロ)を、隔日に製造すること。

はん-しん 反身 【名】**そりみ**(反身)に同じ。

はん-しん 反襯 【名】〔文〕反對の意を述べて、婉曲に思想の妙を感ぜしむる修辭法。(襯染に對して)

はん-しん 反脣・反唇 【名】『史記の平準書に「客語、初令下、有二不レ便者一、異不レ應、微

反レ唇」とあり。**はんもく**（反目）參照』唇(クチビル)を反(ソラ)して、言葉をかはさぬこと。嫉み嫌ひなどすること。

はん-しん 叛心・反心【名】そむかんとする心。謀叛の意思。ほんしん。叛意。

はん-しん 叛臣【名】叛逆を企つる臣。逆臣。

はん-しん 阪神【名】〔地〕攝津國大阪と神戸(カウベ)と。

はん-しん 半身【名】❶身體の半部。全身の半分。❷佛像などの坐れる姿。聖德太子繪傳記「半身丈六達摩の像」❸寫眞にて、身體の上半部のみを撮影すること、又、その寫眞。（全身に對して）

半身不隨(フズヰ)【句】腦及び脊髓の疾病・損傷の結果、右又は左の半身の感覺消滅して、活動力を失ふこと。

はん-しん 半信【名】次條に同じ。

半信・半疑(ハンギ)【句】半ば信じ、半ば疑ふこと。信疑何れとも決せざること。

はん-しん 藩臣【名】❶『史記の南越尉佗傳に「願長爲二藩臣一、奉二貢職一」とあり』藩屏の臣。❷藩主の臣下。諸侯の家來。藩士。

はん-じん 凡人【名】**ぼんにん**（凡人）に同じ。〔有職家の語〕

はん-じん 叛人【名】叛逆を企つる人。謀叛人。

ばん-しん 番新【名】**ばんとうしんざう**（番頭新造）の略。柳樽「番新が助太刀をして切つかける」梅暦「花魁(オイラン)……。折から、番新、障子をあけて」

ばん-しん 蕃神【名】蕃人の祭る神。外國人の信仰する神。水鏡「蕃神を拜せば、恐らくは、國神の怒をなしたまはんか」

ばん-じん 蕃人【名】化外の人。外國人。えびす。正統記「秦の末、漢の末、高麗・百濟の種、それならぬ蕃人の子孫も來りて」

ばん-じん 蠻人【名】野蠻人。未開人。

ばん-じん 萬人【名】よろづのひと。多くの人。ばんにん。諸人。大鏡「萬人しほたれぬ人侍らざりき」

萬人、萬人を敵とす【句】〔哲〕『羅 Bellum omnium contra omnes. 英國の

哲學者ホッブス（Hobbes）の言へる語』人類の本性は、全く利己的なるものにて、殊に、その原始時代に於ける生活狀態は、萬人は萬人を敵として、相爭鬭せり。〔諺語〕

ばん-じん 萬仭・萬尋【名】高さ一ひろの一萬倍なること。非常に高きこと。

はんしん-けう 汎神敎【名】『英 Pantheism』汎神論の哲學に伴なふ宗敎。例へば、佛敎・婆羅門(バラモン)敎など。萬有神敎。（超絶神敎に對して）

はんしん-ざう 半身像【名】身體の上半身をかたどりたる像。

はん-しんしやう 半身上【名】身上の半分。全財産の半分。八笑人「犀角と角兵獅子で、半身上ふるったといふ面(ツラ)で」

はんしん-ろん 汎神論【名】〔哲〕『英 Pantheism』神を宇宙以外に超在せしめずして、內在相卽せしむる學說。卽ち萬有は、神の實現なりと說くもの。佛蘭西の哲學者スピノザ（Spinoza）の、羅甸語にて言へる Deus sivenatura（「神卽ち自然」の義）は、この思想を表せる語として有名なり。萬有神論。（超絶神論に對して）**ばんいうざいしんろん**（萬有在神論）參照。

はんしん-ろん 汎心論【名】〔哲〕『英 Panpsychism』萬物を悉く有心なるものと見る學說。古代の精靈說及び物活說が、近世自然科學の援助に依りて復活したるもの。洽神論。萬有精神論。

はんじ-もの 判物【名】謎の一種。文字又は圖畫などに、或意義を寓し、人をして、その意義を判ぜしむるもの。聖德太子繪傳記「口上で返答せよ。この判じ物の樣な事、身にはおけ」

ばんじ-もん 鑁字門【名】〔佛〕鑁字の玄理を悟る法門。（阿字門に對して）十訓「同レ心契變二蓮華偈、匪レ石詞入二鑁字門一」

はん-しや 反射【名】❶光の照りかへすこと。返照。❷〔理〕『英 Reflection』音波・光波・熱線などが、一の媒質より他の媒質に進む時、兩媒質の境界面にて、急に方向を轉じて、再び元の媒質內に歸り來る

現象。例へば、反響は、音波の反射、鏡に物體の映ずるは、光波の反射に因る類。❸〔醫〕『英 Reflection』知覺神經に起れる刺戟の結果、意識の影響なくして、遠心性神經の分布せる臟器に、興奮の起ること。**はんしやうんどう**（反射運動）參照。

反射の定律【句】『英 Law of reflection』音波・光波・電波など、すべて、波動の反射する場合には、入射角と反射角とは、入射點に於ける法線と同一の平面內且つ法線の兩側にあり、又、入射角と反射角とは、相等しといふ定律。

はん-しや 飜車【名】みづぐるま（水車）の異稱。

はん-じや 判者【名】物合(モノアハセ)などにて、優劣・可否を判定する人。はんざ。

ばん-しや 挽車・輓車【名】死者の柩を載せて、墓地に挽(ヒ)きゆく車。**ばんか**（挽歌）參照。

ばん-しや 蕃社【名】蕃人の部落。

ばん-しや 萬謝【名】❶深く感謝すること。深謝。鳴謝。❷深く謝罪すること。

はん-しやう 半生【名】**はんし**（半死）に同じ。

はん-しやう 帆檣【名】**ほばしら**（帆柱）に同じ。

はん-しやう 反掌【名】『「掌(タナゴコロ)を反す」を見よ』事を爲すに、極めて容易なること。反手。反覆手。

はん-しやう 叛將【名】叛徒の大將。謀叛人のかしら。

はん-しやう 藩掌【名】明治八年、琉球藩に置かれし掌(シヤウ)。同十二年、琉球藩と共に廢せられたり。

はん-しやう 斑晶【名】〔鑛〕『英 Phenocryst』岩石の合分中、特に大なる箇體を形成し、斑狀をなして散在するもの。富士岩・斑岩など、火成岩に存する特色なり。

はん-しやう 範唱【名】『獨 Vorsingen』唱歌の敎授に、模範として、敎師の先づ歌曲を歌ふこと。（摸唱に對して）

はん-じやう 反情【名】反對する心情。

はん-じやう 阪上・坂上【名】阪のうへ。

阪上に丸(タマ)を走らす【句】『漢書の蒯通傳に「范陽令、先下而身富貴、必相

率而降、猶二阪上走一レ丸也」とあるに本づく』勢に乘じて、事に當る譬。

はん-じやう 犯情【名】犯罪の情狀。犯罪の事情。

はん-じやう 犯狀【名】犯罪の實狀。犯罪の情狀。

はん-じやう 叛狀【名】謀叛の狀態。謀叛の模樣。

はん-じやう 板狀【名】❶板のやうなる形狀。❷〔鑛〕滑かにして、薄く平らかなる形に割るる性質。

はん-じやう 斑狀【名】〔鑛〕『英 Porphyritic』岩石の合分中の一種が、他の種類よりは特に大なる箇體をなして、著しき斑點狀を呈せること。

はん-じやう 繁昌・蕃昌【名】榮ゆること。にぎはふこと。繁榮。盛衰記「つらつら兵衞佐殿の繁昌したまふを見るに」謠曲（海士）「佛法繁昌の靈地」

ばん-しやう 萬象【名】さまざまの形象。種種の物。「森羅萬象」

ばん-しやう 萬祥【名】多くのめでたき事。

ばん-しやう 萬障【名】多くの支障。あまたのさはり。鴉鷺合戰「諸國闕闕の面面、萬障をさしおいて、御合力あるべし」

ばん-じやう 番匠【名】❶昔、大和・飛驒などの諸國より、京都にのぼりて、勤番せし大工。❷だいく（大工）㊂に同じ。東鑑「番匠大工大夫長宗、依レ召、自二京都一參著」胸算用「棟上の祝儀とて、……、番匠は、烏帽子・裝束をあらためて、白幣をかざし」

ばん-じやう 萬狀【名】いろいろのさま。種種の狀態。萬態。「千態・萬狀」

ばん-じやう 盤上【名】❶盤㊁のうへ。❷碁・將棊・雙六(スゴロク)などの遊。碁盤太平記「盤上・亂舞の遊事」

ばん-じやう 番上【名】『上は上日の義』大寶令の制にて、日勤にあらずして、順番に交替する勤務。官位相當なき者は、これに依ることと定められたり。分番。（長上に對して）

ばんじやう-くわん 番上官【名】大寶令の制にて、番上の勤務をなしし官吏。（長上官に對して）

はんしやうじ 半障子【名】こししやうじ(腰障子)に同じ。

ばんじやう-せつり 板狀節理【名】〔地〕節理の一。板狀に割るるもの。

はんしやうぞく 半裝束【名】『しやうぞく(裝束)㊀を見よ』數珠(ズジュ)の、玉の半數を水晶、他の半數を琥珀にして、造りたるもの。(本裝束に對して) 曾我「半裝束の數珠爪繰りて」 庭訓往來「如意・香爐、水精(スヰシヤウ)半裝束念珠」

ばんしやうぞく 番裝束【名】番人の著る裝束。 曾我「木戸を……立てて、番裝束の警固の者數十人」

ばんじやう-づち 番匠槌【名】さいづち(木椎)を云ふ。〔畿內の方言〕

はんしやう-てんわう 反正天皇【名】〔人〕第十八代の天皇。仁德天皇第三の皇子。御名は瑞齒別(ミツハワケ)尊。御母は磐媛(イハノヒメ)命。御在位六年(紀元一〇六六年—一〇七二年)。卽位の六年崩ず。御壽六十。

ばんじやう-どり 番匠鳥【名】〔動〕きつつき(啄木)を云ふ。〔下總國の方言〕

ばんしやうにん 鑁上人【名】〔人〕かくばん(覺鑁)の敬稱。

はんじやう-の-やしろ 繁昌社【名】はりぢよのやしろ(婆利女社)を見よ。

ばんじやう-ばこ 番匠箱・番匠筥【名】大工の道具箱。 出世景淸「番匠箱をおし開き、大鑿・小鑿・手斧・鋸・遣鉋(ヤリガンナ)」

はんじやう-はんげ 半上半下【句】態度の、何れともつかず曖昧なること。

はんしや-うんどう 反射運動【名】〔醫〕『英 Reflex action』反射㊂の、筋(キン)の收縮を誘起するもの。睡眠中の人の身體に手を觸るれば、その人は、意識せざれども、その部分の動くが如き、これなり。

ばんじやう-や 番匠屋【名】ばんじやう(番匠)㊁に同じ。

ばん-じやうゆ 番醬油【名】醬油粕に食鹽水又は井水を加へて、可溶性成分を浸出せしめ、後、食鹽を加へて製せる、下等なる醬油。色赤黑く、鹹味強し。ばん。

はんしや-かく 反射角【名】〔理〕『英 Angle of reflection 又 Reflected angle』反射㊀の場合に於て、反射線と反射點に立てたる法線とのなす角。(入射角に對して)

はんしや-かくどけい 反射角度計【名】〔鑛〕はんしやそくかくき(反射測角器)に同じ。

はんしや-きやう 反射鏡【名】〔理〕光を反射せしめて、物體を強く照さしむるに用ふる鏡。多くは凹面鏡を用ふ。てりかへし。

はん-じやく 判釋【名】㊀判斷し、解釋すること。㊁〔佛〕敎論の旨趣を判斷し、その義理を解釋すること。「敎相(ケウサウ)判釋」參照。

ばん-しやく 晩酌【名】晩餐の際に酒を飲むこと。

ばん-じやく 磐石・盤石【名】㊀大なる石。いはほ。大石。㊁堅固にして動かざる物事の譬。

ばんじやく-ごふ 磐石劫【名】〔佛〕『智度論の卷五と菩薩瓔珞本業經の卷下とに見ゆ』盤石の面を、細軟の衣にて、稀に來て拂拭しつつ、遂にその盤石を盡すことを以て、劫(コフ)の長さを示したる語。劫石(コフジヤク)。佛石(ブツシヤク)劫。(芥子(ケシ)劫に對して)

ばんじやく-のり 磐石糊【名】ライ麥又は小麥の粉にて製したる糊。澱粉以外に、多量のグルテンを含有するが故に、粘著力強し。

はん-しやくわいせい 反社會性【名】〔法〕ひしやくわいせい(非社會性)に同じ。

はんしや-くわうせん 反射光線【名】〔理〕『英 Reflected ray of light』光の反射線。(入射光線に對して)

はんしや-さよう 反射作用【名】㊀〔理〕反射㊁をなす作用。㊁〔醫〕反射㊂をなす作用。㊂〔法〕「法律の反射作用」を見よ。

はんしや-すゐじゆんき 反射水準器【名】氣泡水準器の一。長さ約六吋、直徑一吋なる黃銅管の內邊の上部に、小反射鏡を取り附け、土地の略高低を測るに用ふ。

はんしや-せん 反射線【名】〔理〕『英 Reflected ray』反射㊂の方向を示す直線。(入射線に對して)

はんしや-そくかくき 反射測角器【名】〔鑛〕『英 Reflection goniometer』測角器の一。檢せんとする鑛物を、一の把手に取り附け、一定の方向より光を送り、別に、望鏡遠にて、鑛物の結晶面より反射する光を望み、更に結晶を廻轉して、次の面より反射する光を望み、その兩反射線のなす角度によりて、二面間の角度を知り得るやうにせるもの。鑛物が、光澤を有し、且つ反射面を有する場合に用ふ。反射角度計。

はんしや-とうき 反射燈器【名】照光器の一種。焦點に點じたる燈火を、一定の方向に反射せしむるもの。金屬又は玻璃にて製す。てりかへし。

はんしや-ばうゑんきやう 反射望遠鏡【名】〔理〕『英 Reflecting telescope』望遠鏡の一種。凹面鏡と接眼レンズとより成り、前者にて物體の像を作り、これを後者にて廓大するやうにせるもの。ハアシエル式(Herschelion telescope)最も多く用ひられ、ニウトン式(Newtonian t.)・グレゴリイ(Gregorian t.)式等もあり。(屈折望遠鏡に對して)

はんしやら 般遮羅・般沙羅(梵 Pañcāla)【名】〔人〕『五執と譯す』印度の古の國王。仁慈にして、死刑を廢し、その妃、五百子を卵生せしが、各、他國に生長して、還りて、父王に寇せんとせしより、王妃これを鎭せりと傳ふ。 今昔「般沙羅王五百卵初知父母語」

はんしや-ろ 反射爐【名】〔化〕『英 Reverberatory furnace』焙燒爐の一種。火床は、耐火粘土にて平坦に造り、低き天井にて、覆はるるが故に、前方なる火焚口にて、石炭又は薪炭を燃す時、火煙は、後方なる火床に入り、その火焔は天井の內面より反射して、絕えず爐上を加熱し、最後部なる煙突を經て逸出す。鑛石は必ず粉鑛を用ふ。いかなる鑛石の焙燒にも適し、且つ所要時間も短くして足る等の便あり。

はん-しゆ 半手【名】琵琶の棹の一部。轉手(テンジユ)の先端を插し込みたる部分の外面。はんす。 盛衰記「この琵琶の造り樣、……、花梨木(クワリンボク)の頭に、同じ天首、黃楊(ツゲ)のはん首に、同じ撥」

はん-しゆ 反手【名】『孟子の公孫丑上篇に「以レ齊王、由レ反レ手也」とあり』はんしやう(反掌)に同じ。

はん-しゆ 藩主【名】藩㊁の領主。大名。諸侯。

はん-しゆ 播種【名】はしゆ(播種)の誤讀。

はん-じゆ 藩儒【名】藩主に事ふる儒者。

はん-じゆ 判授【名】大寶令に定められたる敘位の方法の一。文官は式部省、武官は兵部省、女官は中務(ナカツカサ)省の詮擬により、奏聞を經ずして、太政官の直に授けしもの。外(ゲ)八位及び內・外・大・小初位は、これに依りたり。(勅授・奏授に對して)

ばん-しゆ 晚種【名】蔬菜などのおそまきの種子。

ばん-しゆ 番衆【名】ばんしゆう(番衆)に同じ。 醒睡笑「造庭を、餘り人の見たがるがいやさに、番衆置かれたれば」

ばん-しゆ 萬株【名】一萬本の樹木。多くの木。

ばん-しゆ 萬種【名】㊀一萬の種類。多くの種類。㊁多くの種子。**ばんしゆふしやうのひ**(萬種不生日)參照。

ばん-しゆ 萬殊【名】種種さまざまの別あること。千差萬別。

ばん-じゆ 萬壽【名】壽命の長きこと。まんじゆ。萬年(バンネン)。萬歲(バンゼイ)。

萬壽、疆(カギリ)無し【句】『詩經の豳風七月篇及び小雅天保篇・南山有臺篇・楚茨篇・信南山篇・甫田篇に見ゆ』人の長壽を祝する語。

ばん-しゆう 番衆【名】㊀番をする人人。番人。㊁武家時代に、番頭(バンガシラ)に屬して、殿中・營中に宿直・勤番して、雜務・警衞を掌りし者の總稱。ばんしゆ。ばんかた。**さんばんしゆう**(三番衆)參照。 東鑑「中御所番衆者、可レ著ニ到于廂御所一之旨」 ㊂**ばんたらう**(番太郎)を、やや敬ひていふ稱。 謠口禰德利「播州高砂……とて、大きなる聲にて謠ひけるを、……、番太郎、寢耳に、ばんしうといふを聞きつけ」 ㊃**ばんさう**(番頭)㊄を、やや敬ひていふ稱。

はんじゆ-きやう 般舟經【名】〔書〕はんじ

ゆさんまいきやう（般舟三昧經）の略。

はん-しゆく 范叔 【名】〔人〕 **はんすゐ**（范雎）に同じ。

はん-じゆく 蕃熟 【名】茂りてみのること。

はん-じゆく 半熟 【名】㊀火力、食物に十分にとほらぬこと。なまにえ。なまやけ。半生・半熟。和名「饗饋、半熟飯也」 ㊁果物の、十分に熟（ウ）まぬこと。半生・半熟。㊂技藝などの、十分に熟達せざること。未熟。

ばん-しゆく 晩粥 【名】〔佛〕禪林の晡時の粥食。戒律上、正午以後、翌朝まで、食事せざるを法とすれども、禪院にては、藥石（ヤツセキ・ヤシヤツ）又藥食（ヤクジキ）と稱して、これを用ふ。

はん-しゆけん-こく 半主權國 【名】〔法〕『英 Semi-sovereign state』 **いちぶしゆけんこく**（一部主權國）に同じ。

はん-しゆご 半守護 【名】 **はんごくしゆご**（半國守護）に同じ。

はんじゆ-さん 般舟讚 【名】〔書〕般舟三昧の樂を讃嘆せる偈頌（ゲジユ）。一卷。支那唐の善導の作。

はんじゆ-さんまい 般舟三昧（梵 Pratyutpannasamādhi）【名】〔佛〕『般舟は佛立と譯す。これを修すれば、佛現前すといふ』 **じやうぎやうざんまい**（常行三昧）に同じ。

はんじゆさんまい-きやう 般舟三昧經 【名】〔書〕身・口（ク）・意の三業（サンゴフ）に於て、間斷なき正行（シヤウギヤウ）を持續して、定（ヂヤウ）中に、佛の現前を見るべき行法（ギヤウボフ）及び功德等を說けるもの。一卷本と三卷本とあり、共に後漢の代の月支三藏支婁迦讖（シルカセン）の漢譯と稱せらる。

ばんじゆ-せつ 萬壽節 【名】支那にて、皇帝の誕辰。即ち我國の天長節。

ばん-しゆつけ 晩出家 【名】年老いてより、佛道に入ること、又その人。

ばんしゆ-ふしやう-の-ひ 萬種不生日 【名】陰陽家にて、種蒔に忌むべしといふ日、即ち丙寅・丁卯・庚辰・辛巳・戊子・己丑・甲午・乙巳・戊午・己未の日。

はん-じゆん 半旬 【名】旬日の半分、即ち五日間。

ばん-しゆん 晩春 【名】㊀春のすゑ。暮春。㊁陰暦三月の異稱。

ばん-しゆん 萬春 【名】永久に亙りての、毎年の春。增鏡「中殿にて、和歌の披講あり。……。題は、花契㆓萬春㆒とぞきこえし」太平記「花契㆓萬春㆒といふ題にて、中殿の宸御會をこれ行はる」

はんじゆん-き 版準器 【名】凸版印刷用の版面の高さを、一定の標準に均しからしむるに用ふる定規。

ばんしゆん-らく 萬春樂 【名】〔音〕 **ばんずんらく**（萬春樂）を見よ。

はんじゆ-ゐん 般舟院 【名】京都市上京區今出川（イマデガハ）通、千本（センボン）東へ入る所にある寺。指月（シゲツ）山・般舟三昧院といふ。山城國伏見にありし、伏見殿の內道場の遺址なりとも、藤原基賴の建立せし安樂行院を、文明三年、指月の地に移して、勅願所とし、內道場に擬せしものともいふ。豐臣秀吉の伏見城築造の時、今の地に移さる。もと天台・眞言・禪・律兼學なりしが、近年天台宗となれり。

はんじゆゐん-の-みささぎ 般舟院陵 【名】後柏原天皇の御母源朝子の御陵。京都市上京區般舟院に在り。

はん-しよ 犯所 【名】犯罪の行はれたる場所。

はん-しよ 繙書 【名】書物をひもときて讀むこと。

ばん-しよ 蕃書・蠻書 【名】外國、殊に歐米諸國の書籍又は文書。〔江戶時代の語〕

ばん-しよ 番所 【名】㊀番人の詰所。ばんどころ。みはりじよ。㊁德川時代に、江戶市民の南北、兩町奉行所を呼びし稱。㊂舊琉球藩及び明治三十年以前に於ける沖繩縣の地方廳の一。各間切（マギリ）に一箇所もしくは二箇所を設け、間切內の公務、幷びに驛遞の用を辨ぜしもの。明治三十年、役場と改稱せらる。

番所の三道具（ミツダウグ）【句】「番所（バンドコロ）の三道具」に同じ。

番所の六具（ロクグ）【句】「番所（バンドコロ）の六具」に同じ。

ばん-しよ 蕃薯・蕃藷 【名】〔植〕 **さつまいも**（薩摩芋）の漢名。

ばん-しよ 萬庶 【名】多くの人民。萬民。庶民。衆庶。萬姓。盛衰記「法皇の政德は、……、萬庶を哀んで」

ばん-じよ 番匠 【名】 **ばんじやう**（番匠）の訛。

ばん-じよ 【名】〔動〕 **さんま**（秋刀魚）に同じ。

はん-しよう 半鐘 【名】㊀小形の鐘。昔は、寺院・陣中にて、相圖に打鳴らし、今は、專ら火災の際に用ふ。㊁紋所の一。前記の半鐘に象（カタド）れるもの。

はん-しよう 反證 【名】或事實又は證據の眞實ならぬことを立證する證據。

はん-しよう 汎稱・泛稱 【名】汎（ヒロ）く通じてとなふること、又その名稱。總稱。

はん-じよう 煩冗 【名】煩雜にしてくだくだしきこと。

はん-じよう 繁冗 【名】繁多にしてくだくだしきこと。

ばん-しよう 晩鐘 【名】入相（イリアヒ）の鐘の音。くれのかね。暮鐘。夕鐘。

ばん-しよう 萬鍾 【名】鍾の一萬倍。穀物の量の多きこと。「萬鍾の祿」

ばん-じよう 萬乘 【名】㊀一萬輛の兵車。㊁『「萬乘の主」を見よ』天子の地位又は天子。盛衰記「萬乘の玉體」

萬乘の主（アルジ）【句】次條に同じ。增鏡「かくいつくしき萬乘のあるじに備はりたまへる御有樣を」

萬乘の君 【句】『孟子の公孫丑上篇に「視ㇾ刺㆓萬乘之君㆒、若ㇾ刺㆓褐夫㆒」とあり』「萬乘の主」に同じ。

萬乘の國 【句】『孟子の梁惠王上篇に「萬乘之國、弑㆓其君㆒者、必千乘之家」、同書の公孫丑下篇に「以㆓萬乘之國㆒、伐㆓萬乘之國㆒」とあり』支那にて、天子の領國を、諸侯の領地に對していひし語。一說に、春秋・戰國時代に於ける齊・楚等の六國なりと。

萬乘の位 【句】天子の位。寶位。寶祚。

萬乘の國主 【句】次條に同じ。盛衰記「況や、萬乘の國主として、聖衆（シヤウジユ）の來迎（ライガウ）を期（ゴ）したまはざらんや」

萬乘の主（シユ）【句】『漢書の刑法志に「天子畿方千里、提封百萬井、定出㆓賦六十四萬井、戎馬四萬疋、兵車萬乘㆒。故稱㆓萬乘之主㆒」とあり』天子。天皇。君主。萬姓の主。保元「十善の君、萬乘の主」

萬乘の聖主 【句】前條の美稱。平家「萬乘の聖主、なほ面諂の媚をなし」

萬乘の尊（ソン）【句】天子の位の尊嚴なること。

萬乘の寶位 【句】「萬乘の位」の美稱。平家「我、十善の功によって、萬乘の寶位を保つ」

はんしよう-ずみ 半鐘墨 【名】 **かんだひ**（乾打碑）を見よ。

はんしよう-づる 半鐘蔓 【名】〔植〕毛茛（キンポウゲ）科に屬する多年生の草。莖は多少攀緣性を有し、葉は複葉にして、對生し、三小葉より成り、各小葉は卵形又は卵狀披針形にして、粗鋸齒あり。五六月頃、長梗と、藍紫色の花被とを具ふる花を著け、下垂して、全開せざる特性を有す。山地に自生す。つりがねかづら。

はんしよう-でん 半昇殿 【名】㊀古、侍醫などの、主上の殿上の間出御の際、臨時に小板敷（コイタジキ）まで昇りて拜謁し、御座近くには進むこと能はざりしもの。半殿上。㊁じい（侍醫）の異稱。

はんしよう-どろばう 半鐘泥坊 【名】『火見櫓（ヒノミヤグラ）に吊せる半鐘を盜む義』身の丈の非常に高き人を嘲りていふ語。〔俚語〕續膝栗毛「半鐘泥坊見たやうな大男」

ばんしよう-ゐん 萬松院 【名】〔人〕 **あしかがよしはる**（足利義晴）の諡。

ばんじよお（英 Banjo）【名】形はギタアに類し、北米合衆國の土人より歐羅巴に傳はりたる、五絃の樂器。指頭にて彈奏す。

ばんしよ-かう 蕃藷考 【名】〔書〕蕃藷の栽培・貯藏の法を記したるもの。一卷。青木敦書の著。

はん-しよく 蕃殖・繁殖 【名】しげりふゆること。ふえはびこること。蕃息。「禽獸繁殖」「財用蕃殖」

はん-しよく 斑色 【名】入りまじれる色。ぶちいろ。まだらいろ。

はん-しよく 飯食 【名】 **ぼんじき**（飯食）を見よ。

はん-しよく 藩職【名】大名の下にありて執る役目。諸侯の下に隷屬する官職。

はん-じよく 繁縟【名】㊀種種雜多なる色どり。㊁**はんぶんじよくれい**(繁文縟禮)の略。

ばん-しよく 晩食【名】㊀定刻におくれて、食事をすること、又その食事。㊁ゆふめし。ゆふはん。晩餐。夜食。

晩食、以て肉に當る【句】『戰國策の齊國の條に「晩食以當レ肉、安歩以當レ車」とあり』定刻におくれて食事をすれば、その美味、肉食に等し。〔諺語〕

晩食、肉よりも甘(ウマ)し【句】前條を強めていふ語。笈之小文「寛歩、駕にかへ、晩食、肉よりも甘し」

ばん-しよく 伴食【名】**ばいしよく**(陪食)に同じ。㊁『胡詮の上二高宗一封事に「近伴二食中書一、漫不レ可二否事一」とあり。近は孫近をいふ』その職にありながら、徒に他の同僚の爲すに任するのみにて、實權・實力なきこと。

ばん-しよく 蠻觸【名】次條の略。

蠻觸の爭【句】「蝸牛(クワギウ)の角爭」に同じ。四方のあか「蝸牛(カタツブリ)の角折れては、蠻觸の爭止み」

ぱん-しよく 麪包食・麵包食・麪麭食・麵麭食【名】食事の時、食パンを、米に代へて食すること。

ばんしよく-さいしやう 伴食宰相【名】『唐書の盧懷愼傳に「開元三年、與二姚崇一對二掌樞密一、自以爲、吏道不レ及レ崇、每レ事推二謙之一。時人謂二之伴食宰相一」とあるに本づく』實權・實力なき大臣。

ばんしよく-だいじん 伴食大臣【名】實權・實力なき大臣。

はんしよく-はふ 蕃殖法【名】〔生〕生物の生殖する方法。**せいしよく**(生殖)㊁參照。

はんしよく-ほご 蕃殖保護【名】水産物などの生殖を、天然及び人工的に幇助すること。

ばんしよ-しやうぎ 番所將棊【名】『番所㊀に詰めをる者の、用務無き時、時間つぶしに行ふ將棊の義』下手なる將棊。

ばんしよ-しらべじよ 蕃書調所【名】徳川時代に、洋學を教授し、傍ら外交上の文書をも取り扱ひし公設の學校。初、洋所と稱して、麴町九段阪下に在り、安政二年、儒者古賀謹一の、將軍家定より洋書の取調を命ぜられ、諸生を集めて講授せしに起り、翌年蕃書調所と改稱し、若年寄遠藤但馬守・目付大久保右近將監・古賀謹一等を御用掛、箕作(ミツクリ)阮甫・杉田成卿等を教授方とし、次いで、大久保右近將監を總裁とし、勤番組頭・勤番衆等をも置く。生徒は、初、旗本諸士の子弟に限り、後、諸藩の子弟をも收容し、學科も、初は蘭學のみなりしが、萬延元年、神田小川(ヲガハ)町に移すと同時に、英・佛の二學を加へ、更に化學及び露・獨の二學をも增し、文久二年神田一橋(ヒトツバシ)門外護持院原(ゴチヰンガハラ)に移して、洋書調所と改稱し、翌年、又、改めて開成所と稱す。今の東京帝國大學の前身なり。

ばんじよ-や 番匠屋【名】**ばんじやうや**(番匠屋)の訛。狂言(櫟襖)「ばんじよ屋の娘の召したりや帷子(カタビラ)、肩に鉋箱」

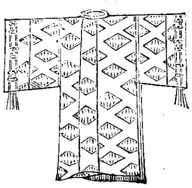
ばんしよ-わげ-かた 蕃書和解方【名】**ほんやくきよく**(飜譯局)を見よ。

はんしらう 半四郎【名】〔人〕**いはゐはんしらう**(岩井半四郎)を見よ。浮世風呂「高麗屋(カウライヤ)と三津五郎と半四郎のたてをしたあ」

はんしらう-がのこ 半四郎鹿子【名】『俳優岩井半四郎の、好みて、その衣裳に用ひし模樣なるよりいふ』**あさのはしぼり**(麻葉絞)の異稱。浮世風呂「麻の葉もよいねえ。あれは、半四郎鹿子と申すよ」

はんしらう-げた 半四郎下駄【名】俳優岩井半四郎の用ひし形に摸したる下駄。

はん-じり 半尻【名】裾の後の方が、前よりも、一尺ほど短き狩衣。貴族の童形(ドウギヤウ)の著用とす。こかりぎぬ。續世繼「半尻なる狩衣にて出でたまひて」東鑑「御服半尻狩御衣、浮泉綾御水干袴」



（りじんは）

はん-しる 飯汁【名】めしと、しると。建武年中行事「内辨、飯しるを催さしむ」

はんし-るゐ 半翅類【名】〔動〕**いうふんるゐ**(有吻類)に同じ。

ばん-じろ 番城【名】守備の兵を置ける城。

ばん-じろ 番石榴【名】〔植〕次條に同じ。

ばん-じろう 番石榴【名】〔植〕桃金孃(テンニンクワ)科に屬する灌木。葉は卵形又は長楕圓形にして對生し、果實は李のに似、平滑・淡黄色にして、堅き果皮を有し、内部は橙色の横壁に區別せられ、黄白色の種子多く、果肉は普通肉色又は赤色にして、生食し、又はジェリィを作るに用ふ。原産地は熱帶亞米利加。今は廣く印度に栽培す。ばんざくろ。ばんじろ。

はんじ-ゑ 判畫【名】判物(ハンジモノ)の縮。なぞゑ。さとりゑ。

はん-す 半手【名】**はんしゆ**(半手)の約。

はんす 反す【動佐變自】㊀うらはらになる。反對す。㊁たがふ。もとる。違反す。㊂謀叛す。そむく。〔叛す〕

はんず 叛ず【動佐變自】前條㊂に同じ。

はんず 判ず【動佐變他】㊀みわく。判斷す。㊁道理を推して考ふ。推考す。

ばんず 晩ず【動佐變自】晩になる。日暮る。狂言(磁石)「もはや、けふは、日も晩じた。これに泊って」同(宗論)「日も晩じてござる程に、宿を取りませう」

はん-すう 半數【名】全數の半分。半分のかず。

はん-すう 反數【名】〔數〕**ぎやくすう**(逆數)に同じ。

はん-すう 反芻【名】〔動〕『英 Rumination 芻(蒭又は枯草)を反(カヘ)す義』動物が、一度嚥下したる食物を、再び口中に戻し、咀嚼して、更に嚥下すること。にれかむこと。

はんすう-はうていしき 反數方程式【名】〔數〕**ぎやくすうはうていしき**(逆數方程式)に同じ。

はんすう-るゐ 反芻類【名】〔動〕偶蹄類の一亞目。反芻の特性を有し、多くは頭上に角あり、概ね上顎に門齒・犬齒を缺き、胃は多くは四室に分れ、腸の長大なること及ぶものなし。牛・羊・鹿・山羊・駱駝・ラマ・麒麟など、これに屬す。

はん-すきびたひ 半透額【名】**はんびたひ**(半額)に同じ。

はん-すけ 半助【名】『五十錢を半圓ともいふよりいふ』**ゑんすけ**(圓助)を見よ。〔明治半ば以前頃の東京の語〕

ばん-すべり 盤滑【名】〔地〕**だんそう**(斷層)に同じ。

ばんずん-らく 萬春樂【名】〔音〕踏歌の時、奏せし樂。八句の詩を、漢音にうたひて、「我皇延祚億仙齡、萬春樂、元正慶序年光麗、萬春樂」とやうに、句の終ごとに萬春樂と唱ふ。源氏「ばんずんらくを、御口ずさびにしたまひつつ」

ばんす-らく 萬春樂【名】〔音〕前條の略。源氏「ばんす樂、御口ずさびにのたまひて」

はん-すり 版摺・板摺【名】版木を摺りて、その型を紙にうつしとること、又それを業とする人。印刷。

はん-ずり 榛摺【名】**はりずり**(榛摺)の音便。

はん-すゐ 半睡【名】半ば睡れること。夢うつつのさかひ。

半睡・半醒【句】前條に同じ。

はん-すゐ 半醉【名】半ば醉へること。

半醉・半醒【句】前條に同じ。

はん-すゐ 范睢【名】〔人〕支那戰國時代の秦の宰相。魏の人。字は叔。須賈(スカ)の副となり、齊に使して、異心ありと疑はれ、歸國の後、相魏齊に笞たれ、逃れて秦の相となる。須賈の秦に使するや、睢、舊情を懷ひて、これを釋す。東周惠公の初年、相を罷めらる。「綈袍(テイハウ)戀戀」參照。

はん-ずゐ 伴隨【名】**ずゐばん**(隨伴)に同じ。

ばん-すゐ 萬水【名】㊀多量の水氣。謠曲(融)「三日月の影を、舟にも譬へたり。……一輪も下さず、萬水昇らず」㊁多くの河、又は海。「千山・萬水」

ばん-すゐ 晩翠【名】冬枯の期となりても、草木の綠色の變らざること。

ばん-すゐ 晩炊【名】晩方に飯をたくこと。ゆふげ。ゆふだき。

ばん-すゐ 輓推【名】すゐばん(推輓)に同じ。

ばんずゐ-ゐん 幡隨院【名】東京市淺草區神吉(カミヨシ)町にある淨土宗の寺。知恩院の末寺。本尊は阿彌陀如來。神田山・新知恩寺と號す。十八檀林の一。慶長七年、白道の神田臺に創建せしもの。元和二年、湯島(ユシマ)天神男坂の下に移り、明暦の大火後、又、今の地に移る。八笑人「この鉦(カネ)の音は、幡隨院勸化(クワンゲ)の爺(ヂヂ)・婆(ババ)の集りしなり」

ばんずゐゐん-ちやうべゑ 幡隨院長兵衞【名】〔人〕俠客。町奴の巨魁。姓は塚本。江戸下谷幡隨院の住職向導の弟なりとも、同院内に住居せりともいふ。淺草花川戸に住む。幕府旗下の士、大小神祇組の巨魁水野十郎左衞門に嫉まれ、その邸に誘殺せらる。年三十八。

はん-せい 半生【名】㊀『牟離の詩に「半生蹤跡任二浮沈一」とあり』一生の半分。㊁『庾信の詩に「交讓未二全死一、梧桐惟半生」とあり』はんし(半死)に同じ。

半生・半熟【句】はんじゆく(半熟)㊀㊁に同じ。

はん-せい 伴生【名】㊀他の物事に伴ひて生ずること。㊁〔哲〕れんさう(聯想)に同じ。

はん-せい 汎性【名】〔理〕つういうせい(通有性)に同じ。

はん-せい 藩制【名】㊀封建時代に於ける制度、即ち地方に藩㊀を置きて、天下を治めし制度。㊁藩㊁にて施行する制度。

はん-せい 藩政【名】諸侯がその領地の内に行ふ政治。藩治。

はん-せい 繁盛【名】はんじやう(繁昌)に同じ。

はん-せい 反正【名】正しき狀態にかへし、又はかへること。平定。「撥亂・反正の功」

はん-せい 反省【名】㊀自己の行爲に就き、その動機・主義などを、自らよく觀察すること。反求。㊁〔哲〕『英 Reflection』心理上、自己の精神生活に、統覺又は注意の作用を向くること。これによりて得たる結果は、内的知覺又は内的經驗なり。内省。㊂〔哲〕『英 Reflection』論理上、判斷の存立し得べき條件を考察すること。

はん-せい 半醒【名】半ば醒めてあること。「半睡・半醒」「半醉・半醒」

はん-せい 半晴【名】空の、半ば晴れてあること。

はん-せい 半濟【名】半分返濟すること。太平記「一國の寺社・本所領を半濟して、家人どもにぞ分け行ひける」下學集「半濟、ハンセイ」

はん-せい 攀躋【名】せいはん(躋攀)に同じ。

はん-ぜい 反噬【名】㊀動物の飼養の恩を忘れて、その人をかむこと。㊁恩義ある人に刃向ふこと。恩を仇。

ばん-せい 萬姓【名】多くのたみ。萬民。萬庶。庶民。兆民。百姓。正統記「佛も、衆生(シユジヤウ)を導き盡し、萬姓をすなほならしめんとこそしたまへど」

萬姓の主【句】天子。君主。萬乘の主。正統記「君は萬姓の主にてましませば」

ばん-せい 萬世【名】よろづよ。萬代。永世。永久。永遠。

萬世一系【句】萬世に互りて、同一の系統の續きて變らぬこと。

萬世の功【句】永久に朽ちざる功業。

ばん-せい 晩成【名】㊀晩(ヲソ)く成就すること。㊁年長けて後に成業すること。「大器は晩成す」

ばん-せい 晩生【名】普通の時季よりは晩(ヲソ)く生ずること。

ばん-せい 晩晴【名】夕方、空の晴れてあること。

ばん-せい 晩霽【名】夕方に至りて、雨・雪などの霽ること。

ばん-せい 坂西【名】〔地〕ばんさい(坂西)に同じ。

ばん-せい 蠻性【名】野蠻なる性格。

ばん-ぜい 萬歲【名】ばんざい(萬歲)に同じ。〔古語〕榮花「けふは、ばんぜい・せんしうといふべきなど、のたまふ」

萬歲の幡(ハタ)【句】ばんぜいき(萬歲旗)に同じ。

ばん-ぜい 萬歲【感】『史記の項羽本紀に「歸二漢王父母妻子一、軍皆呼二萬歲一」、漢書の武帝紀に「吏卒咸聞下呼二萬歲一三者上」とあり。ばんざい(萬歲)參照』帝王の御代の長久を祝して唱ふる聲。三代實錄「天皇御二紫宸殿一……中納言再拜稱二萬歲一、次群臣共稱二萬歲一」太平記「春日山の嵐の音も、今日よりは萬歲を呼ばふかと怪しまれ」

ばん-ぜい 番勢【名】守備の軍勢。甲陽軍鑑「西三河落城の御番勢に、千五百殘し置かれ」

ばんぜい-き 萬歲旗【名】中古以來、天皇御即位の儀又は朝賀の式などに、式場に建つる旗。表に「萬歲」の文字を表す。中古のは橫旗なりしが、近世は縱旗となり、明治に至り、登極令制定の際も、縱旗と定められ、神武天皇御東征の時、丹生(ニフ)川上に嚴瓮(イツベ)を沈め、魚の浮沈によりて、大業の成否を卜したまひし故事に基づき、嚴瓮と魚との繡を加ふることとなれり。ばんぜいのはた。ばんぜいばん。經信卿記「此間振二萬歲旗一」

はんせい-ざっし 反省雜誌【名】明治十九年一月發刊せし、言論の雜誌。附錄として、文藝上の作品をも揭げ、明治三十二年より、中央公論と改題せり。

はんせい-さよう 伴生作用【名】〔哲〕はんせい(伴生)㊁に同じ。

はん-せいだい 范成大【名】〔人〕支那南宋の詩人。字は致能。石湖と號す。尤袤・楊萬里・陸游と共に四家の一に數へらる。紀行に吳船錄あり。

ばんせい-とうふ 萬姓統譜【名】〔書〕支那古今の姓氏を、韻によりて分類・編次し、各姓の下に、時代順に、その略傳を記したるもの。百四十六卷、附錄として、氏族博攷十四卷あり。明の淩廸知の撰。

ばんぜい-ばん 萬歲幡・萬歲旛【名】ばんぜいき(萬歲旗)に同じ。

はんせい-ひん 半製品【名】〔經〕粗製品に少し加工したるのみにて、未だ精製するに至らざる品物。例へば、綿絲・茶・砂糖などの類。(粗製品・精製品に對して)

ばんぜい-らく 萬歲樂【名】〔音〕まんざいらく(萬歲樂)に同じ。

はん-せう 半宵【名】ちゆうせう(中宵)に同じ。

はん-せう 半霄【名】ちゆうせう(中霄)に同じ。

はん-せう 反照【名】㊀はんしや(反射)㊀に同じ。〔返照〕㊁はんえい(反映)に同じ。

はん-ぜう 攀繞【名】よぢのぼり、且つまとひつくこと。

はん-ぜう 煩擾【名】煩雜にして亂ること。

ばん-せう 晩咲【名】普通の季節よりも晩(ヲソ)く咲くこと。おそざき。おくれざき。

ばん-せう 晩照【名】ゆふひかげ。夕照。晩景。

ばん-せう 蕃椒【名】〔植〕たうがらし(唐辛)の漢名。

はんぜう-けい 攀繞莖【名】〔植〕『英 Liana』はんえんけい(攀緣莖)を見よ。

ばんせう-ちんき 蕃椒丁幾【名】蕃椒一分と酒精九分とにて製したる、帶赤黃色の味辛烈なる液。藥用として、塗擦・含嗽等に少量を用ふ。

はん-せうなごん 判少納言【名】少納言の事を攝行せし役。三代實錄「勅以二右中辨藤原朝臣良近一、行二少納言事一、爲二判少納言一」

はん-せき 半關【名】にたりぶね(荷足船)に同じ。

はん-せき 半石【名】『せき(石)を見よ』㊀はんごく(半石)に同じ。狂言(米市)「半石の又半石出たが、あるか」㊁容量五斗の枡。和名「半石、唐令私記云、大倉署函斛、函者受二五斗一、形如二此間酒槽一耳。今按、函稱二半石一者、又半宜レ作レ料」伊呂波字類「半石、ハンセキ。以二五斗一盛量之器也」

はん-せき 犯跡【名】犯罪の形跡。

はん-せき 叛跡【名】謀叛の形跡。

はん-せき 版籍【名】㊀版圖と戸籍と。㊁土地と人民と。

版籍奉還【句】明治二年、全國の各藩主が、その版籍を、朝廷に奉還せしこと。

はん-せき 藩籍【名】㊀一藩の領地と人民と。諸侯の領分。㊁その藩㊀の臣下として、名を列すること。

ばん-せき 板石【名】板のごとく平らかなる石。石板石。

ばん-せき 礬石【名】〔鑛〕みやうばん(明礬)に同じ。

ばん-せき 盤石【名】碁盤と碁石と。

ばん-せき 磐石・盤石【名】ばんじやく（磐石）に同じ。

はん-せつ 半切・半截【名】㊀半分に切ること。㊁唐紙・白紙・畫仙紙などの一枚を、竪に二つに切りたるもの。「半折」

はん-せつ 反切・翻切【名】『反は展轉して相協ふ義、切は兩字相摩して、聲韻を成す義』漢字の音註に、二字の音を融合して、新たなる一音を作る法。上なるを父字（フジ）又は字頭、下なるを母字（ボジ）といふ。例へば、氷は筆陵の反、繚は力小の切などいふ類。反切の結果得たる音の清濁は、父字に從ひ、四聲は母字に依るを定則とす。支那魏の孫炎の創めしもの。反（ハン）切（セツ）。かへし。

はん-せつ 汎說【名】汎（ヒロ）きに渉りて說くこと。ひきくるめて說くこと。總說。

はん-せつ 反接【名】『史記の陳丞相世家に「武士反㆓接之㆒」、漢書の陳平傳に「反接載㆓檻車㆒」とあり』兩手を、背後に縛ること。めんばく（面縛）參照。

はん-ぜつ 半舌【名】丸き物を半分にせるもの。

ばん-せつ 晩節【名】㊀『史記の外戚世家に「及㆓晩節㆒、色衰、愛弛」とあり』ばんねん（晩年）に同じ。㊁『史記の魏其武安傳に「及㆓孝景晩節㆒」、唐書の選擧志に「進士科當㆓唐之晩節㆒、尤爲㆓浮薄㆒」とあり』末の時。末の世。末期。

ばん-せつ 盤折【名】うねり曲ること。曲折。

はん-せふよ 班倢伃・班婕妤【名】［人］『倢伃は、漢の世の女官十四等の第二位の名稱』支那漢の成帝の宮女。性賢明、詩を能くせり。趙飛燕姊妹のために寵を妨げられ、退きて怨歌行を賦す。班姬。班女。

班婕妤が團雪（ダンセツ）の扇【句】「秋の扇」に同じ。和漢朗詠集「班婕妤團雪之扇、代㆓岸風㆒兮長忘」市隱紀行「班婕妤が團雪の扇、秋風に、斯くて、暫く忘れぬれば」

はん-せん 帆船【名】帆によりて航行する、西洋型の船。横帆に、縱帆を交へ用ふる横帆船と、全部縱帆のみなる縱帆船とに分る。ほぶね。ほまへせん。（汽船に對して）

はん-せん 半錢【名】㊀一錢の半分、即ち五厘。㊁はんせんどうくわ（半錢銅貨）の略。㊂僅かなる金錢。謠曲（安宅）「一紙・半錢」

はん-せん 搬船【名】荷物をはこぶための小船。はしけぶね。

はん-せん 盤旋【名】めぐること。まはること。周旋。

はん-ぜん 判然【貌】はっきり。たしか。さだか。明瞭。分明。

はん-ぜん 幡然・飜然・翻然【貌】『孟子の萬章上篇に「湯三使、往聘㆑之、既幡然改㆑之曰」とあり』ほんぜん（飜然）に同じ。

ばん-せん 萬千【名】數の多きこと。さまざまなること。百千。千萬。「氣象萬千」

ばん-せん 番錢【名】背に數字を記せる古錢。例へば、寛永通寶錢に、一より十六まで、元和通寶錢に、一より三十までの背文あるもの、支那南宋の淳熈元寶・嘉泰通寶などに、鑄造年數の背文あるものなど。

ばん-せん 番船【名】川口・關所などにて、警戒の番に當れる早船。つめぶね。

ばん-せん 蕃船【名】外國の船。蕃舶。異國船。〔德川時代の語〕

ばん-ぜん 萬全【名】計畫の、すべて完全なること。手おちの無きこと。百全。

はん-せんかふ-だん 半穿甲彈【名】［兵］半ばは穿孔、半ばは爆裂の性質を有し、穿甲彈の約四分の三の穿貫力を有する彈丸。例へば、鋼鐵榴彈・穿甲榴彈などの類。

はん-せんぎ 半仙戲【名】しうせん（鞦韆）に同じ。

はんせん-どうくわ 半錢銅貨【名】明治四年の新貨條例に依り、同六年より同三十年まで發行せし、半錢の補助銅貨。圓形にして、徑七分四厘。半錢。五厘錢。

はん-そ 藩祖【名】藩主の祖先。

はん-そ 反訴【名】［法］『獨 Widerklage』本訴の權利拘束中、その訴と併合して、訴訟手續を進行せしむるため、被告より、原告に對して、本訴の訴訟手續に屬する行爲として、本訴の繫屬する裁判所に提出する獨立の訴。兩者の訴訟手續を併合して、その辯論を共通にし、互に利用せしめて、時間・費用及び勞力の節約を圖るにあり。（本訴に對して）

はん-そう 半僧【名】次條を見よ。

半僧・半俗【句】半ばは僧屬の如く、半ばは俗人の如くなること。

はん-そう 帆走【名】風力を利用し、帆を張りて航走すること。

ばん-そう 番奏【名】古、毎月一日及び十六日に、當番の近衞の歷名を錄して奏進せしこと。

番奏の簡（フダ）【句】當番の近衞の歷名〃を錄して、毎月一日及び十六日に奏進せし簡。江次第「六府番奏、六府次將各一人、取㆓番奏札㆒」

ばん-そう 番僧【名】輪番に堂宇を守護する僧。十訓「番僧傳はりて」

ばん-そう 伴僧【名】法會などの時、導師に伴ない從ふ僧。紫式部日記「われわれもとうちあげたる伴僧の聲聲」

ばん-そう 伴奏【名】［音］『英 Accompaniment』他の主なる音部に從屬して、これを助くる音部。（獨奏に對して）

はんそう-ごんげん 半僧權現【名】次條㊀を見よ。

はんそう-ばう 半僧坊【名】㊀天狗の一。遠江國引佐（イナサ）郡奥山村なる方廣寺の開祖元選が、同郡伊谷（イイヤ）の奥山に入りし時、得度を受けたりといひ傳ふるもの。方廣寺の鎭守となる。㊁半僧權現と稱し、小兒の頭の、半分だけ月代（サカヤキ）を剃りたるままなるもの。

はん-そく 犯則・反則【名】規則ををかすこと。規則に違ふこと。

はん-そく 反側【名】㊀『書經の洪範篇に「無㆑反無㆑側、王道正直」とあり』叛服常なきこと。不正直。㊁『詩經の周南關雎篇に「輾轉反側」とあり』寢床にて、身體を、或は反轉し、或は側面を向けなどすること。ねがへり。

はん-そく 蕃息【名】『史記の孔子世家に「嘗爲㆓司樴吏㆒、而畜蕃息」とあり』はんしよく（蕃殖）に同じ。

はん-そく 半速【名】一定の速力の二分の一なる速力。

はん-ぞく 叛賊・反賊【名】むほんにん。逆賊。

はん-ぞく 半俗【名】俗體なる僧侶。「半僧・半俗」甲陽軍鑑「德權と云ふ半俗あり」

ばん-ぞく 蕃賊【名】蕃人にして、盜賊たるもの。

ばん-ぞく 蕃俗【名】蕃人の風俗。蕃習。

ばん-ぞく 蠻族【名】野蠻なる民族。

はんそく-し 反側子【名】叛服常なき人。ねがへりを打つ人。

はんそく-しや 犯則者【名】犯則せる人。

はんそく-たいし 斑足太子【名】斑足王の、未だ太子たりし時の稱號。

はんそく-わう 斑足王【名】『梵 Kalmāsa-pāda. 仁王經の護國品、賢愚經の卷十一、大智度論の卷四に出づ』印度の神話に、天羅國の王にして、父、牝獅と交りて生みし所といふもの。身に翼生じ、脚には斑ありて、飛行を自在にし、一切の血肉を食ふ。千小國王相謀りて、捕へて靈鷲山（リヤウジユセン）に放ちしに、鬼王となり、諸羅刹を率ゐて、千小國王を捕へ、これを殺さんとす。最後に須陀須摩（シユダシユマ）王のために得道して、小國王を放還せりといふ。鹿足王。太平記「紀・淸兩黨の者とても、斑足王の身をも借らざれば」

ばん-そつ 萬卒【名】多くの兵卒。太平記「萬卒、雲のごとく集ると雖も」

萬卒は得易く、一將は得難し【句】兵卒は多數に得らるれども、名將は、一人と雖も、得ることは難し。千軍は得易く、一將は求め難し。〔諺語〕川中島合戰「萬卒は求め易く、一將は求め難く」

ばん-そつ 番卒【名】番をなす兵卒。

はん-そてい 反措定【名】［哲］『英 Antithesis』措定に主張せる命題と反對なる命題を、その措定に對して呼ぶ稱。例へば、「甲は乙なり」を措定とせば、「甲は乙ならず」は、その反措定なる類。反定立。反。（定立に對して）

ばん-ぞなへ 番備【名】番を設けて、守備すること。

はん-た 繁多【名】㊀甚だ多きこと。おびただしきこと。平治「その例、漢家・本朝に繁多なり」㊁用事多く、忙しきこと。繁忙。多忙。和合人「何か御趣向の體(テイ)、毎度御繁多の事」

はん-た 煩多【名】煩しくして多きこと。煩雜。

はん-だ 半田【名】㊀はんだらふ(半田鑞)の略。〔盤陀・白鑞〕㊁〔地〕尾張國知多(チタ)郡にある町。名古屋市の南五里弱。知多灣に臨み、郡役所あり。㊂〔地〕はんだくわうざん(半田鑛山)を見よ。

半田の稻荷【句】はんだいなり(半田稻荷)に同じ。俗謠「葛西金町半田の稻荷疱瘡も輕いな痲疹も輕いな」

ばん-た 番太【名】㊀ばんたらう(番太郎)の略。五人女「番太が拍子木」淀鯉出世瀧德「犬の悴氣に威されて、辻の番太が夢食ふ」㊁ものもらひ(物貰)を云ふ。〔京都の方言〕

はん-たい 反對【名】㊀相反すること。うらうへ。うらはら。あべこべ。ありやこりや。表裏。㊁相反する側(ガハ)に立ちて張りあふこと。抵抗。敵對。㊂〔哲〕こんとらすとに同じ。㊃〔哲〕『英 Contrary』論理上、一の概念又は命題に對して、共に眞なるを得ざれども、共に妄なるを得べき關係、即ちその中間に存する場合を許し得べき對當關係。例へば、全稱肯定と全稱否定との關係、又、白と黑との類。

反對の一致【句】〔哲〕『羅 Coincidentia oppositorum』天地間に於けるあらゆる矛盾・反對は、それらの窮極の根柢をなす神又は絕對に於て、一に歸すといふ思想。この意を始めて明かに述べしは、ニコラウス、クザヌス(Nicolaus Cusanus)なり。反對の歸一。

反對の歸一(キイツ)【句】〔哲〕前條に同じ。

はん-たい 飯袋【名】「酒囊(シユナウ)・飯袋」を見よ。

はん-だい 反臺【名】和船の垣立(カキタツ)の臺の一部。

はん-だい 飯臺【名】食器を載せ、數人が周圍に並びて、食事する臺。食卓。槐記「御膳、ハンダイ」醒睡笑「三位が物相(モツサウ)と、兒(チゴ)の物相と、同じ飯臺に据ゑて」皇都午睡「飯臺を膳箱、齋とうを飯臺」

はん-だい 飯代【名】はんれう(飯料)に同じ。俗曲(かしく新屋敷の段)「飯代の金算用せいと、遣っつ返しつ、あんまり笑止さ」

はん-だい 盤臺・板臺【名】魚屋の用ふる、淺く大きく楕圓形なる盥(タラヒ)。

ばん-たい 萬態【名】さまざまの狀態。萬狀。

ばん-だい 番臺【名】湯屋にて、入口に設け、番人の坐りて見張る高座。

ばん-だい 番代【名】㊀ばんがはり(番代)に同じ。㊁代りて番をする人。番人の代人。

ばん-だい 萬代【名】ばんせい(萬世)に同じ。

はんたい-うんどう 反對運動【名】或者の言論・行動などに反對して、運動すること、又その運動。

はんたい-がいねん 反對概念【名】〔哲〕『英 Contrary concept』反對の關係を示す概念。はんたい(反對)㊃參照。

はんたい-きふふ 反對給付【名】〔法〕『獨 Gegenleistung』雙務契約成立して、當事者雙方に給付の義務生ぜし時、一方より他の一方の受くべき給付。例へば、賣主が買主より受くる代金の支拂、又、買主が賣主より受くる財産權の移轉など。

はんたい-ご 反對語【名】〔哲〕『英 Contrary terms』二名辭の屬性が、一方存すれば、他は必ず存するを得ざるもの。但し一方缺けたりとも、他は必ずしも存すとは限らず。例へば、大と小、黑と白の類。

ばんだい-さん 磐梯山【名】〔地〕岩代國耶麻郡猪苗代(ヰナハシロ)湖の北に聳ゆる活火山。高さ六〇〇一尺。大磐梯・赤埴(アカハニ)・櫛ケ峯・湯桁(ユゲタ)等の諸峯より成り、古稱、會津山。會津富士。

はんたい-じんもん 反對訊問【名】〔法〕原告より被告を、又、被告より原告を訊問すること。原被相互の訊問。

はんたい-しや 反對者【名】或言語・行動などに反對する人。

ばん-たいしやう 番大將【名】城番㊀なる大將。

はんたい-しよく 反對色【名】〔美〕互に補色をなす色。

ばんだい-すぎ 磐梯杉【名】〔植〕びろねずぎ(天鵞絨杉)に同じ。

はんたい-せつ 反對說【名】その說又は行動に反對する議論。反對論。

はんたい-せん 反對船【名】二三の船主が同一の航路に對して、競爭の態度を取り、運賃を低減して、乘客を吸收せんとする時の、その相手の船主の船。

はんたい-たいたう 反對對當【名】〔哲〕『英 Contrary opposition』全稱肯定命題と全稱否定命題と、即ち量に於ては等しく全稱にして、質に於ては異なる二命題の對當關係。例へば、「凡ての甲は乙なり」と「凡ての甲は乙ならず」との類。一方眞なれば、他方必ず僞なれども、一方僞なりとも、他方必ず眞なりとは言ふを得ず。

はんたい-たう 反對黨【名】反對の側(ガハ)に立つ黨派。

ばんだい-づら 盤臺面【名】ひらたくして圓き顏を嘲りていふ語。〔俚語〕

ばんだいなごん-ゑことば 伴大納言繪詞【名】ともだいなごんゑことば(伴大納言繪詞)を見よ。

はんだ-いなり 半田稻荷【名】武藏國南葛飾(ミナミカツシカ)郡金町(カナマチ)村にある神社。享保の頃より世に行はれ、痲疹(ハシカ)・疱瘡の治癒を祈りて效ありといふ。はんだぎやうにん(半田行人)參照。萬紫千紅「半田稻荷大明神、鎭座葛西金町濱、痲疹疱瘡共無レ恙、信心堅固息災身」

ばんだい-の-はま 萬代濱【名】〔地〕丹後國天橋立(アマノハシダテ)の別稱。

ばんだい-の-みづうみ 盤梯湖【名】〔地〕岩代國猪苗代(ヰナハシロ)湖の別稱。

ばんだい-ばし 萬代橋【名】信濃川の下流に架し、新潟市と、今はその一部となれる沼垂(ヌツタリ)の地とを連ぬる橋。長さ四百三十間、北陸第一といふ。

はん-だいふ 半太夫【名】㊀〔人〕えどはんだいふ(江戸半太夫)を見よ。㊁はんだいぶし(半太夫節)の略。

はんだいふ-ざ 半太夫座【名】江戸半太夫の、江戸堺町に設けし操(アヤツリ)芝居。享保の頃、江戸に下りし辰松八郎兵衞、これを買ひ占め、大阪なる豐竹・竹本の太夫を呼び下して、義太夫節を興行せり。

はんだいふ-ぶし 半太夫節【名】江戸節の一種。元祿の頃、江戸半太夫の語り出だしもの。曲節、他の淨瑠璃に比すれば上品にして、もとは、操芝居に用ひたれど、義太夫節流行の後は、專ら歌舞伎の合方(アヒカタ)とし、又は御座敷淨瑠璃として、通人の間に行はれ、詞章も歌謠に類す。えどぶし。はんだいふ。世間娘氣質「半太夫節に頭(ヅ)を振って語り寐入りにする」

はんたい-ぼうえきふう 反對貿易風【名】〔地〕『英 Antitrade winds 又 Anti-trades』赤道地方にて、熱せられて昇騰せる空氣の、分れて南北兩極に向ふによりて生ずる、上層の風。地球の自轉のため、北半球にては、南西風となり、南半球にては、北西風となり、下層なる貿易風と反對の方向を取り、緯度三四十度の地に於て下降す。

はんたい-ろん 反對論【名】言論又は行動に反對する議論。反對說。

はん-たう 半島・半嶋【名】〔地〕周圍の大部分は水に接し、一部は、狹き陸地によりて、大陸と連れる陸地。

はん-たう 板蕩【名】『詩經の大雅に板と蕩との二篇ありて、共に周の厲王の秕政を傷めるものなるに基づく』政治の亂ること。亂世。

はん-だう 半道【名】㊀半途。中途。中道。中路。㊁はんだうがた(半道方)の略。浮世風呂「濡事師よりは、敵役(カタキヤク)や半道をひく世の中」風來六部集(放屁論後篇)「當世の立者(タテモノ)は仲藏……半道の利者(キキモノ)は、時に大谷友右衞門」

ばん-たう 晚稻【名】晚(オソ)くみのる稻。

ばん-たう 蟠桃【名】桃の果實の大きなるもの。

ばん-たう 伴黨【名】ばんるゐ(伴類)に同じ。東鑑「長茂竝伴黨四人」

ばん-たう 晚唐【名】〔文〕支那唐代の詩を四期に區別せるその一。中唐以後唐末に至る凡そ八十餘年間。(初唐・盛唐・中唐

に對して）太平記「この韓昌黎と申すは、晩唐の季（スヱ）に出でて、文才優長の人なりけり」

はんだう-がた 半道方【名】敵役（カタキヤク）にして、道化（ダウケ）のしぐさを演ずる俳優。例へば、「戀娘昔八丈」に於ける丈八の類。はんだう。

はんだう-がたき 半道敵【名】前條に同じ。

はんだう-やつし 半道窶【名】半道の役者の、やつし方を兼ねたるもの。八笑人「いやみったらしいとぼけ面で、……、本役は、半道やつしといふのだらう」

はん-だか 半高【名】はんがく（半額）㊁に同じ。

はんだ-ぎんざん 半田銀山【名】〔地〕はんだくわうざん（半田鑛山）に同じ。

はんだ-ぎやうにん 半田行人【名】昔、紅色の服を著し、左手に、半田稻荷大明神と記したる紅色の幟を携へ、右手に鈴を振り、痲疹（ハシカ）・疱瘡の輕からんことを祈り、諧謔を言ひ、又は踊りなどして、錢を乞ひしもの。**はんだいなり**（半田稻荷）參照。

はん-たく 泛宅【名】**ふね**（船）㊀の異稱。下學集「泛宅、ハンタク。船之異名也」

はんだく-おん 半濁音【名】〔語〕「ぱ・ぴ・ぷ・ぺ・ぽ」の五音の通稱。又「かが（加賀）」・「みぎ（右）」・「つぐ（注ぐ）」・「まげ（髷）」・「あご（腭）」などの場合の「が・ぎ・ぐ・げ・ご」をもいふ。**か**と**は**との發音の條を見よ。

はんだく-てん 半濁點【名】〔語〕は行の半濁音を示す符號。即ち、その清音の假名の右肩に附する圈。

はんだ-くわうざん 半田鑛山【名】〔地〕岩代國伊達（ダテ）郡半田村にある金銀山。半田山の東麓にあり。半田銀山。

ばんた-ぐわし 番太菓子【名】**ばんたらうぐわし**（番太郎菓子）に同じ。

ばんた-ごや 番太小屋【名】**ばんや**（番屋）㊁に同じ。

はん-だたみ 半疊【名】大いさ、一疊を横に二つにしたるだけの疊。

はん-たち 半太刀【名】**ちゆうはんだち**（中半太刀）に同じ。

はんだ-づけ 半田附・盤陀附・白鑞附【名】半田鑞にて、金屬を接ぎ合はすること。

ばん-だて 番立【名】㊀**じゆんだて**（順立）に同じ。㊁芝居にて、開場後三日目に、稻荷町（イナリマチ）の役者の演ずる翁渡（オキナワタシ）。

はんだ-ぬり 半田塗【名】阿波國に行はるる、一種の漆の塗り方。

ぱん-だね 麪包種・麵包種・麪麴種・麵麴種・麪酵・麵酵【名】㊀麪包を燒く時、これをふくらして、空（ス）を生ぜしむるに用ふる酵母。㊁〔基〕『英 Leaven. 新約全書の馬太（マタイ）傳第十三章・第十六章、路加（ルカ）傳第十三章及び哥林多（コリント）前書第五章に見ゆ』神を信ぜんとする心。宗敎心。

はんだ-はうろく 半田焙烙【名】筑後國八女（ヤメ）郡水田（ミツタ）村より產する土鍋。はんだやき。

はん-だはら 半俵【名】穀物などの一俵の半分だけの量、又その量を容るる俵。

ばん-だまり 番溜【名】溜（タマリ）㊆の下等なるもの。溜粕（タマリカス）即ち味噌を、食鹽水にて煮沸し、壓搾器にて、液汁を分離せしめて製す。

はん-だん 判斷【名】㊀曲直・眞僞などを考へ定むること。判定。斷定。㊁豫め吉凶を見分くること。うらなひ。㊂〔哲〕『英 Judgment』表象又は概念を比較して、その類似及び相違を認知する作用。斷定。**めいだい**（命題）參照。

判斷の職【句】**しつじ**（執事）㊄に同じ。太平記「警衞・判斷の職を司る」

ばん-たん 萬端【名】㊀種種の事端。さまざまの物事。萬般。百端。㊁さまざまの方法。百方。萬方。

ばん-たん 播但【名】〔地〕『**ばんしう**（播州）を見よ』播磨國と但馬國と。

はん-たんぱくせき 半蛋白石【名】〔鑛〕『英 Semi-opal』半透明にして美しからざる蛋白石。

ばん-だんゑもん 塙團右衞門【名】〔人〕**はなはなほつぐ**（塙直次）を見よ。

はんだ-めっき 半田鍍金・盤陀鍍金・白鑞鍍金【名】半田鑞を用ひたる鍍金。

はんだ-やき 半田燒【名】**はんだはうろく**（半田焙烙）に同じ。

ばん-たらう 番太郎【名】㊀徳川時代に、自身番に附屬したりし小使、即ち自身番に詰むる家主の雜役に供せしもの。自身番の傍に、小屋を構へて住み、附近出火の際には、辨當を調じて奔走したり。番太。**ばんこ**（番子）㊁・**ばんや**（番屋）參照。天の網島「上（カミ）の町から、番太郎が、くる、くる、たぐる風の夜は、せきせき廻る火の用心」㊁**ばんや**（番屋）㊁に同じ。

番太郎の即功紙【句】『番太郎㊀が番屋にて賣りし即功紙は、品質粗惡なりしによりていふ』少しも利目（キキメ）なしとの隱語。〔徳川時代の語〕

番太郎の肉桂【句】㊀番太郎㊀が番屋に並べて賣りし肉桂。細根數本を、細き赤紙にて束ね、一つ一文づつに賣りたり。㊁小兒等の、緋色の帶せるものの形容。

ばんたらう-ぐわし 番太郎菓子【名】㊀**ばんや**（番屋）㊁を見よ。㊁**だぐわし**（駄菓子）に同じ。

はんだ-らふ 半田鑞・盤陀鑞・白鑞【名】『岩代國半田銀山の產なるによるとも、又、馬來諸島中のバンダ（Banda）島の產なるに由るともいふ』**はくらふ**（白鑞）を見よ。

はん-ち 判知【名】判斷して知り定むること。判別。判定。

はん-ち 半地【名】領國を半減せらるること。

はん-ち 判地【名】**しゆいんち**（朱印地）に同じ、建武式目追加「近年中給、神領御判地」

はん-ち 藩治【名】藩主の、その領內に行ふ政治。藩政。

はん-ち 阪地【名】〔地〕**おほさか**（大阪）に同じ。

ばん-ち 番地【名】町村にて、人人の住所を區別するために附けたる番號。

ばん-ち 蕃地・蠻地【名】蕃人の住む地。蕃土。蕃境。

ばん-ち 萬雉【名】『城の大いさ、方丈を堵といふ。雉は堵の三倍』王城。王宮。

ぱんち 鋏（英 Punch）【名】停車場の驛員又は電車の車掌が、乘客の切符に穴を穿つに用ふる、金屬製の一種の鋏。はさみ。

ばんち-いり 番地入【名】地圖の、番地の數までも、精細に記入せるもの。

はん-ちう 範疇【名】㊀『「洪範（コウハン）・九疇」を見よ』部類。部屬。分類。㊁〔哲〕『英 Category』抽象・總括の極、達すべき、至高の概念。アリストテレス（Aristoteles）は、實體・分量・性質・關係・場所・時間・位置・態度・能動・受動の十箇を擧げ、カント（Kant）は、單一性・雜多性・全體性（以上、分量）、實有性・絕無性・限定性（以上、性質）・本體性・因果性・交互性（以上、關係）・可能性・存在性・必然性（以上、樣式）の四綱・十二目に分類し、前の二綱を、直覺の對象に關係するものとして、數學的範疇と名づけ、後の二綱を、對象の存在に關係するものとして、力學的範疇と名づけたり。

はんぢ-きやっぷ（英 Handicap）【名】競馬・競走・競漕などの時、優劣を平均するために、優者に課する、餘分の負擔。優者を他の後方より出發せしめ、又は優者に重荷を負はする等の方法を取る。

はん-ちく 版築【名】『孟子の盡心上篇に「傅說擧二于版築之間一」とあり』板と板との間に土を入れ、杵にて突き固めて、土垣を造ること、又その板と杵と。

はん-ちく 斑竹【名】〔植〕稈の表皮に、異樣の斑ある竹類の總稱。例へば、雲紋竹・紫竹（シチク）などの類。

はんちく【名】**はした**（端）㊁㊂に同じ。〔俚語〕

はんちく-ふで 斑竹筆【名】軸を斑竹にて造れる筆。權記「斑竹筆卌管」

はん-ちじ 藩知事【名】明治二年、知藩事を改稱せしもの。同四年廢藩置縣と同時に廢止し、府知事・縣令、これに代れり。

はんち-せい 反地性【名】〔植〕**はいちせい**（背地性）㊁を見よ。

はんち-はふ 反致法【名】〔法〕國際私法の原則として、或事項に就き、外國法に依るべしと定めたる場合に、外國法が、又その國の法律に依るべき規定なる時は、その國の法律を以て、準據法とすること。

はん-ちん 半賃【名】半分の賃金。

はん-ちん 判賃【名】徳川時代に、奉公人の請人（ウケニン）となりて、判を捺したる者が受けし賃錢。御定書百箇條「奉公人と馴合ひ、判賃之外、給金之内をも配分取り」風來六六部集（菩提樹の辨）「判賃取らうばかりに、……宿なしを、奉公にありつかせ」

はん-ちん 版賃・板賃【名】版木の彫刻賃。諧藝太平記「黃楊（ツゲ）は、却って、板賃、櫻に五割增ぢや」

はん-ちん 藩鎭【名】㊀その地の安寧を保つために駐屯する兵隊。㊁せつどし（節度使）㊀の異稱。㊂皇室の藩屛となる諸侯。

はんちんぐ（英 Hunting cap の略）【名】とりうちばうし（鳥打帽子）に同じ。

ばん-ちや 番茶・晚茶【名】『ばん（番）は接頭語。伸び過ぎたるを摘むより、晚の字をも用ふ』摘み殘して、伸び過ぎたる茶の葉にて製したる、下等の茶。ざふちや。

番茶も出花（デバナ）【句】㊀來客に、茶を汲みて差出す時に言ふ語。㊁「鬼も十八、番茶も出花」を見よ。

はん-ちやう 藩廳【名】藩知事が、その事務を取り扱ひし所。

はん-ちやう 班長【名】一班の長。

ばん-ちやう 番長【名】中衞（ナカノヱ）府・近衞府の舍人（トネリ）、兵衞府の兵衞、衞門府の衞士、大舍人（オホドネリ）寮の大舍人の長。近衞府のは、隨身としては、上﨟の隨身と呼ばれたり。ばんどう（番頭）㊁參照。增鏡「左右の大將（忠家・實基）の番長」

ばん-ちやう 番帳【名】出仕・宿直の番組を、その度ごとに掲示するに用ひし帳簿。ばんぶみ。とのゐ番帳。東鑑「小侍所番帳更被レ改レ之」吉野拾遺「生年十三歲にして、大内の番帳を書きて」

ばんぢやう-ころがし 萬丈轉【名】まんぢやうころがし（萬丈轉）に同じ。

はん-ちゆう 藩中【名】藩㊀のうち。藩內。同藩。

はん-ぢゆう 飯頭【名】禪寺にて、粥頭・火頭・水頭等と共に、典座（テンゾ）に屬して、衆僧の齋食（キト）を司る役僧。

ぱん-ぢゆう パン頭【名】『麪包（パン）と饅頭（マンヂユウ）とに類する義』菓子の一種。小麥粉に鷄卵と砂糖とを加へ、餡を入れてふくらかに燒きたるもの。

はんちゆう-ぶし 半中節【名】京淨瑠璃の一派。都（ミヤコ）一中の門人、國太夫半中の創めしもの。

はんちゆう-もの 藩中者【名】㊀同じ藩㊀に屬する人。同藩の者。同藩士。㊁藩士。藩臣。

はん-ぢよ 班女【名】〔人〕はんによ（班女）に同じ。

はん-ちよく 板直【名】文章の、變化なくして、面白みの薄きこと。平板。

ぱんつ（英 Pants）【名】陸上運動用ズボン。婦人及び小兒用の、長く寬き股引。づろおす。

ばんつう（英 Bantu）【名】『もと、土人の語にて、人類の義』亞弗利加洲の赤道地方よりケエプ、オブ、グッド、ホオプ（Cape of Good Hope）州にかけて、ブシュマン・ホッテントットの兩族の領地以外に分布する大小諸種族の總稱。

ばんつう-ご バンツウ語（英 Bantu language）【名】バンツウ種族の用ふる言語。

はん-つき 半月【名】はんげつ（半月）㊀に同じ。

はん-つき 半搗【名】米を、十分に搗き精げず、半分前後の糠を帶びたるままにすること、又その搗方の米。

はんつき-まい 半搗米【名】半搗の米。

ばん-づけ 番附【名】邌物（ネリモノ）の行列、芝居の役割、相撲（スマフ）の取組・勝負などを、出場者の名と共に、順を追ひて記せるもの。其角「番附を賣るも祭のきほひかな」

ばんづけ-ふだ 番附札【名】邌物（ネリモノ）の行列順を記せる札。

ばんづけ-ゑほん 番附繪本【名】數枚の紙を綴ぢ、表紙に、芝居の狂言の題目を記し、中には、その場面を、順次に畫き表はしたる小册子。繪本。膝栗毛「芝居……、中賣（ナカウリ）のあきんど、聲聲に、……、番附繪本、番附繪本」

ばん-つづら 番葛籠【名】『ばん（番）は接頭語』粗製の葛籠。持統天皇歌軍法「番葛籠も掃除して、御寢道具入るるとも」

はん-つや 半通夜【名】通夜㊁の、略式として、半夜だけにて濟ますもの。（本（ホン）通夜に對して）

はん-て 半手【名】『半ば手下（テシタ）なる義』眞の家來に非ずして、或者の支配を受くること、又その者。〔永祿・天文頃の語〕北條五代記「私に和睦し、敵方へ貢米を運送して、半手と號し、夜を心易く居住す」

ばん-て 番手【名】㊀じやうばん（城番）㊀に同じ。甲陽軍鑑「大高の城を攻め落し、番手に元康を置き」㊁かはりばんこ（代番箇）に同じ。一代女「番手に板の間を勤める」

番手の城【句】番手㊀を置く城。籾井家日記「番手の城に、大勢を入れ置くべき工夫にて」

ばん-て 番手【助數】㊀陣立（ヂンダテ）にて、隊伍の前後の順序。一番手・二番手は、一陣・二陣といふに同じ。籾井日記「一番手は須知・渡邊、二番手は、谷田・岩成」㊁製絲又は紡績絲の長さと重量とを基礎として、各種の絲に附けたる番號。英國式にては、一ポンドに就き、八百四十ヤアドの長さを有するもの、佛蘭西式にては、五百グラムに就き、一千メエトルの長さを有するものを、一番手といふ。絲の太さ又は重量を知る時は、これに依りて、その長さを算出するを得、又その長さを知れる場合には、その重量を算出するに便なり。手。

はん-てい 判定【名】判別し決定すること。判斷。判決。

はん-てい 藩邸【名】藩主の邸宅。大名の屋敷。

はんでい-がん 板泥岩【名】〔鑛〕けつがん（頁岩）に同じ。

はん-ていけい 半梯形【名】〔數〕ていけい（梯形）を見よ。

はん-ていりつ 反定立【名】〔哲〕『立の字の音、正しくはリフ』はんそてい（反措定）に同じ。（定立に對して）

はん-てう 反跳【名】はね返ること。

はん-でう 斑條【名】まだらのすぢ。しま。

ばん-てう 晚潮【名】夕暮の海水。ゆふしほ。暮潮。

ばん-てう 晚釣【名】夕暮の釣魚。

はん-てうし 半調子【名】〔美〕はあふざおん（半調子）に同じ。

ばんてえじ（英 Vantage）【名】『英 Advantage の略』ロオンテニスの競技にて、ヂユウスとなりたる後、何れかの一方が、一點を得たること。

ぱんておん（英 Pantheon）【名】『もと、希臘語にて、至聖殿の義』㊀伊太利國羅馬の古建築物の一。同地の古建築物中、最も原形を存せるもの。アウグスツス（Augustus）帝の時の創建に係り、初は、アポロ（Apollo）・ヂアナ（Diana）等七星神を祀りしものの如く、一旦雷火に炎上し、再建後も、數次の修築を經、一時、基督敎會となりし事あり。現時、一部はイタリヤ王室の陵となれり。㊁佛蘭西國巴里市の古建築物の一。もと、ルイ（Louis）第十五世の時、巴里の守護者聖ジエヌビエエブ（Geneviève）のために作りし敎會。同國大革命の時、今の名稱に改め、名士の塋域に充てたり。

はん-でき 半出來【名】半分ほど出來あがること。

ばん-てき 蠻的【貌】言語・言行・風采などの、禮儀・作法にかなはぬさま。

ばんて-けい 番手計【名】絲の番手を計るに用ふる機械。

ばんて-しゆう 番手衆【名】ばんて（番手）㊀に同じ。

はん-でふ 半帖【名】㊀雅樂にて、樂の一帖の半（ナカバ）。㊁紙一帖の半分。二代男「鼻紙半帖思ひ切りて折り込み」㊂古、朝廷にて用ひし一種の敷物。長さ四尺五寸、廣さ四尺なりといふ。江次第抄「短帖、掃部寮供進、皆淺黃緣半帖」

はん-でふ 半疊【名】㊀昔、芝居にて、賃錢を取りて、見物人に貸したる、疊半疊ほどの廣さなる敷物。當時の芝居は、棧敷以外は、地面そのままなりし故、使用せしなり。半疊を取扱ひし座員。㊁俳優の藝を批難すること。

半疊を入る【句】次條に同じ。

半疊を打込む【句】次條に同じ。

半疊を打つ【句】㊀昔、俳優が、劣等なる藝又は慘忍なる仕打を演ぜし時に、見物人、半疊を舞臺に投げて、非難し、

妨害す。 二俳優の藝を批難す。

はんでふーうり 半疊賣【名】昔、芝居にて、半疊を取扱ひし座員。

はんーてま 半手間【名】半分の手間賃。薩摩歌「今日の働、半日拂にせうけれど、なまなか半手間取らうより」

はんーてん 半天【名】一『杜甫の詩に「季冬日已長、山晚半天赤」とあり』一天の半分。空(ソラ)一面のなかば。 二『王涯の詩に「遙指朱干在二半天一」とあり』はんくう(半空)に同じ。平家「靈に引かれて行く船は、半天の雲に遡る」 三次條に同じ。

はんーてん 半纏・袢纏・半天【名】羽織に似て、腋に、襠(マチ)も、襟の折返(ヲリカヘシ)もなく、胸紐をも附けずに著る、一種の表衣(ハウギ)。普通に半襟を掛く。しるしばんてん(印半纏)參照。

はんーてん 半點【名】一一點の半分。二すこし。いささか。わづか。

はんーてん 斑點【名】散在せる點。まだら。ぽつぽつ。ぶち。ふ。

はんーてん 反轉【名】一まろぶこと、又、まろばすこと。二ひっくりかへること、又、ひっくりかへすこと。

反轉の定理【句】〔數〕『英 Invertends』二つの比が相等しき時は、その反比も亦相等しといふ定理。

反轉の理【句】〔數〕前條に同じ。

はんーでん 班田【名】支那北魏・北齊・隋及び唐の代と、我國王朝時代とに、國民に田地を均分して班(カツ)ち與へしこと。我國のは、唐制に摸せしなり。あがちだ。くぶんでん(口分田)參照。

ばんーてん 萬天【名】天下中。四方。太功記「名を、萬天に輝かせ」

はんてんーぎ 半纏著・袢纏著・半天著【名】印半纏を著ること、又それを著る職業の人、即ち鳶人足・水揚人足などの類。

はんでんーし 班田使【名】王朝時代に、臨時に任命し、派遣して、五畿内に於ける班田の事を掌らしめし官吏。

はんーてんじやう 半殿上【名】はんしようでん(半昇殿)に同じ。禁祕抄「有二半殿上者一」

はんでんーじゆこうーちやう 班田授口帳【名】王朝時代に、口分田(クブンデン)を授くべき人數、及び田地の高などを校勘して、京官・國司の調製せし帳簿。

はんでんーねん 班田年【名】はんねん(班年)に同じ。

はんてんーばおり 半纏羽織・袢纏羽織・半天羽織【名】はんてん(半纏)に同じ。

はんてんーぼく はんてん木【名】〔植〕ゆりのきに同じ。

はんでんーぼちやう 班田簿帳【名】王朝時代に、班田すべき高、及び給すべき人數を校勘して、京官・國司の調製せし帳簿。

ばんてーもち 番手持【名】一番手一にて、守備すること。甲陽軍鑑「田中の城と名づけ、暫く番手持なり」 二部署を定め、各隊にて受け持つこと。ばんもち。

ばんーてをけ 番手桶【名】『ばん(番)は接頭語』雜巾掛などに用ふる、粗製の淺き手桶。

はんーと 【名】うゑきばち(植木鉢)に同じ。

はんーと 叛徒【名】叛逆を企つるやから。逆徒。

はんーと 版圖【名】一一國の戸籍と地圖と。 二一國の領域。

はんーと 半途・半塗【名】ちゆうと(中途)に同じ。

はんーど 半戸【名】普通の戸の半分ぐらゐなる高さの戸。

はんーど 礬土【名】〔鑛〕さんくわあるみにうむ(酸化安律密紐謨)に同じ。

ばんーど 蕃土【名】ばんち(蕃地)に同じ。

ばんーど 蠻奴【名】一召使の蠻人。 二ばんじん(蠻人)を卑しめていふ語。

ばんど (英 Band)【名】一革又は强き布の帶。洋裝に用ふ。 二合奏團。樂隊。

はんとう 【名】まるくち(丸口)に同じ。

はんーとう 攀登【名】とうはん(登攀)に同じ。

はんーどう 飯銅【名】一洗ひすすげる水をこぼし入るるに用ふる器。 二前記の飯銅の形せる茶壺。〔飯筒〕 三飯銅一の形をなせる火鉢。下學集「飯銅、ハンドウ」 四みづがめ(水甕)を云ふ。〔飯桶〕〔肥前國長崎の方言〕

はんーどう 反動【名】一或動作に對抗して生ずる動作。うちかへし。ゆりかへし。 二〔理〕はんさよう(反作用)に同じ。

反動の法則【句】〔理〕「ニウトンの運動の第三法則」に同じ。

ばんーとう 番頭【名】一宇多天皇出家後、院の廳の判官代(ハウグワンダイ)を、一時改めたる稱。西宮記「亭子院出家時、侍者判官代稱二番頭一」 二近衞より選拔せし、やや優秀なるもの。定員一定せず。番長の下に屬せしより、隨身としては、中﨟の隨身といへり。義政公御元服記「隨身番長一人、番頭八人、下﨟之御隨身五人」 三商店の雇人の頭(カシラ)。手代(テダイ)より位置やや高し。 四〔法〕商業使用人の一。支配人の次に位し、營業に關する或種類又は特定の事項を委任せらるるもの。 五さんすけ(三助)に同じ。 六ばんとうしんざう(番頭新造)の略。娼妓絹籭「番頭新造の梅春も、……、番頭梅春が働にて」

ばんーとう 晚頭【名】ばんがた(晚方)に同じ。盛衰記「晚頭に及んで……歸參す」

ばんーとう 晚冬【名】一冬の末。 二陰曆十二月の異稱。

ばんーどう 坂東・阪東【名】〔地〕『相模國足柄(アシガラ)の坂より東の義』くわんとう(關東)二に同じ。(坂西(バンサイ)に對して) 大寶令「東海道坂東、東山道山東」

坂東の八平氏【句】坂東にて、平氏の支族たる八家、即ち千葉・上總・三浦・土肥・秩父・大庭(オホバ)・梶原・長尾。太平記「坂東の八平氏、武藏の七黨を七手になし」平假名盛衰記「梶原は坂東の八平氏」

ばんーどう 蟠洞【名】せんどう(仙洞)に同じ。謠曲(隱岐院)「昔は、蟠洞・紫山の内にして、春秋を送り迎へて」

ばんどうーいち 坂東一【名】坂東八箇國の内にて最もすぐれたるもの。太平記「宇都宮は、坂東一の弓矢取なり」

ばんどうーうち 坂東打【名】坂東より產する一種の打紐。

ばんどうーがた 坂東方【名】とうごくがた(東國方)に同じ。狂言(文相撲)「坂東がたにはやる、目かくしと申す手ぢや」

ばんとうーがたき 番頭敵【名】『敵はかたきやく(敵役)の略』芝居にて、惡人なる番頭に扮裝するもの。例へば、「お駒才三」の丈八、「お染久松」の善六などの類。

ばんとうーかぶ 番頭株【名】番頭となるべき資格ある商店の雇人。

はんどうーがめ 飯銅瓶・飯桶瓶【名】はんどう(飯銅)四に同じ。〔肥前國長崎の方言〕嬉遊笑覽「長崎歲時記……、同書方言の中に、水甕をはんどうがめとあり」

はんーどうくわう 斑銅鑛【名】〔鑛〕『英 Bornite』銅の鑛石の一。成分は銅鐵の硫化物。塊狀又は六面體狀結晶をなす。質脆く、金屬光澤あり、赤褐又は銅赤色なれども、外部は、曇りて青・紫等の色を呈す。他の硫化金屬と共に產すれど、產出額、黃銅鑛より少し。我國、但馬國生野(イクノ)・越前國面谷(オモダニ)等に產す。

はんどうーごま 飯桶獨樂【名】『飯桶の形に似たるよりいふとぞ』緖を卷きてまはす、一種の貝(バイ)獨樂。

ばんどうーごゑ 坂東聲【名】坂東人らしき音聲。平家「聲は坂東聲にて候ひつる」

ばんどうーさんじふさんくわんおん 坂東三十三觀音【名】次條に同じ。

ばんどうーさんじふさんしよ 坂東三十三所【名】坂東にある三十三箇所の觀音の寺堂、即ち杉本(スギモト)觀音堂・岩殿(イハドノ)觀音堂・田代(タシロ)堂・長谷(ハセ)寺・飯泉(イヒヅミ)觀音堂・飯山(イヒヤマ)觀音堂・金目(カナメ)觀音堂・星谷(シヤウコク)觀音堂(以上、相模國)・慈光寺・正法寺・安樂寺・慈恩寺・淺草觀音堂・弘明(グミヤウ)寺(以上、武藏國)・長谷(ハセ)寺・水澤(スイタク)寺(以上、上野國)・出流(イツル)山・立木觀音堂・大谷(オホヤ)寺・西明(サイミヤウ)寺(以上、下野國)・八溝(ヤミゾ)觀音堂・佐竹寺・佐白(サシロ)山・雨引(アマヒキ)觀音堂・大御堂・清瀧寺(以上、常陸國)・飯沼山・滑河(ナメカハ)觀音堂・千葉寺(以上、下總國)・高倉觀音堂・笠森寺・清水(セイスイ)寺・那古寺(以上、安房國)。(西國(サイコク)三十三所に對して)

ばんとうーしんざう 番頭新造【名】江戸

吉原の新造の一種。上等なる遊女に附屬し、振袖新造及び禿（カブロ）のごとき使役は受けず、一切の取捌をなし、參謀の役を務め、傍ら色をも鬻ぎしもの。番頭女郎。番頭。番新。（振袖新造・留袖（トメソデ）新造に對して）**ひきふね**（引船）㊄參照。娼妓絹篩「梅川といふおいらん、ぶらぶらと煩ひければ、……、番頭新造の梅春も、看病のため」

ばんどう-しゆう 番頭衆 【名】 **ごかばん**（五箇番）に同じ。細川家書札抄「番頭衆」

ばんどう-じゆんれい 坂東順禮 【名】 坂東三十三所の靈場を巡禮しあるくこと、又その人。（西國（サイコク）順禮に對して） 生寫朝顏話「朝香（アサカ）殿は、坂東順禮となって」 白石噺「坂東順禮すると云ったら、お寺で笈摺（オヒズル）拵へてくれ」

ばんどう-しりがい 坂東鞦 【名】 **おりしりがい**（織鞦）に同じ。

はんどう-すゐしや 反動水車 【名】 水車中より、水を外方へ噴出せしめ、その反動によりて回轉する水力機關。落差百呎以下の水力に用ふるに適す。

ばんどう-そだち 坂東育 【名】 坂東にて生長せしこと。保元「義朝こそ坂東育の者にて」

はんどう-だか 反動高 【名】〔商〕相場の、下落せる反動として、騰貴すること。（反動安に對して）〔取引所の語〕

ばんどう-たらう 坂東太郎 【名】 ㊀夏の雲を云ふ。〔東京の語〕 ㊁〔地〕『坂東地方に在りて、舊日本第一の大河なりとていふ』下總國利根（トネ）川の別稱。（四國二郎・筑紫（ツクシ）三郎に對して）

ばんどう-ぢよらう 番頭女郎 【名】 **ばんどうしんざう**（番頭新造）に同じ。娼妓絹篩「番頭女郎梅春」

ばんどう-はっかこく 坂東八箇國 【名】〔地〕次條に同じ。

ばんどう-はっこく 坂東八國 【名】〔地〕次條に同じ。 續紀「坂東八國」

ばんどう-はっしう 坂東八州 【名】〔地〕 **くわんとうはっしう**（關東八州）に同じ。

ばんどう-ぶし 坂東武士 【名】 **ばんどうむしや**（坂東武者）に同じ。

はんどう-ふなばり 瀊洞船梁 【名】 和船にて、艫（トモ）の丸口（マルクチ）ある部分の船梁。

ばんどう-はちへいし 坂東八平氏 【名】「坂東の八平氏」に同じ。

ばんどう-むしや 坂東武者 【名】 坂東育の武士。古來、勇猛を以て名あり。坂東武士。關東武士。平家「坂東武者の習、敵を目にかけ、川を隔てたる軍に、淵瀨嫌ふ樣やある」

はん-とうめい 半透明 【名】〔理〕『英 Translucent』 幾分か光線を通ずれども、これを透して、他の物體を明かに視るには適せぬこと。（透明・不透明に對して）

はんとうめい-たい 半透明體 【名】〔理〕『英 Translucent body』 半透明なる物體。例へば、白色硝子・鼈甲・油紙などの類。（透明體・不透明體に對して）

ばんどう-もさ 坂東猛者 【名】 坂東人のだみごゑ。坂東聲。

はんどう-やす 反動安 【名】〔商〕相場の、騰貴したる反動として、下落すること。（反動高に對して）〔取引所の語〕

はんどう-りよく 反動力 【名】 反動を起す力。

はんど-おるがん （英 Hand organ）【名】 **てふうきん**（手風琴）に同じ。

はん-とき 半時 【名】 ㊀一時（イットキ）の半分。ときなか。狂言（花子）「まだ半時もせぬのに、夜あけの鳥が鳴きまする」 ㊁僅かの時間。

はんどく 槃特 （梵 Panthaka）【名】〔人〕『路邊生又は路と譯す。二人共に、父母の旅行中、路邊にて生れしよりいひ、兄は大路邊生又は大路、弟は小路邊生又は小路といふ』天竺の羅漢。羅漢果を證す。**しゆりはんどく**（周梨般特）參照。

槃特が愚痴も、文殊（モンジユ）の智慧 【句】「提婆（ダイバ）が惡も觀音の慈悲、槃特が愚痴も文殊の智慧」を見よ。

はん-どく 繙讀 【名】 書物を繙（ヒモト）きて讀むこと。繙閱。

はん-どく 判讀 【名】 判じて讀むこと。意味を推察して讀むこと。

ばん-どく 伴讀 【名】 子弟の相手となりて、共に讀書すること、又その人。

ぱんと-ぐらふ （英 Pantograph）【名】 **しゆくづき**（縮圖器）に同じ。

はん-どくりつ 半獨立 【名】 ㊀半は他の助力、半は自力によりて立つこと。 ㊁獨立權の一部の行使を、他國より制限又は停止せられてある狀態。

はんどくりつ-こく 半獨立國 【名】〔法〕『英 Imperfectly independent state』 **いちぶしゆけんこく**（一部主權國）に同じ。

ばん-どころ 番所 【名】 **ばんしよ**（番所）㊀に同じ。狂言（內沙汰）「これからが番どころ、はあ、歷歷の御番でござりまする」

番所の三道具（ミツダウグ）【句】 德川時代に、見付（ミツケ）・門番・自身番、その他、一般の番所に備へつけたる、三箇の道具、即ち突棒（ツクボウ）・刺股（サスマタ）・袖搦（ソデガラミ）。これに寄棒（ヨリボウ）・早繩（ハヤナハ）・松明（タイマツ）を加へたるを、番所の六具といふ。

番所の六具（ロクグ）【句】 前條を見よ。

はん-どし 半年 【名】 **はんねん**（半年）に同じ。

ぱんと-まいむ （英 Pantomime）【名】 **むくきげ**（默劇）に同じ。

はん-どん 半ドン 【名】『半日のドンタクの義。官公署・學校など、多くは午後業を休めばなり』 **どえうび**（土曜日）の異稱。

ぱんどら （英 Pandora）【名】 希臘の神話にて、ジユピタア大神が、バルカンに造らせたりといふ女。女性の最初のものなりといふ。次條參照。

・パンドラの箱 【句】 ジユピタア大神が、パンドラに、人生一切の罪惡・災禍を封じ込めて渡せりといふ箱。エピメテウス（Epimetheus）、これをパンドラより贈られて開封せしため、罪惡・災禍逸出して、人類の墮落・頹廢を來せりと傳ふ。

はん-どり 判取 【名】 同意の證たる捺印を求むるため、各關係者を訪ふこと。八笑人「駒形の內田から參じました。判取は、歸（ケヘ）りにお寄り申しますから」 ㊁**はんどりちやう**（判取帳）の略。

ばん-どり 番鳥 【名】 ㊀一群の雁の中の、見張をなすもの。〔畿內の方言〕 ㊁**むささび**（鼯鼠）を云ふ。

はんどり-ちやう 判取帳 【名】 商家にて、得意先又は取引先より、金錢又は物品を授受する度ごとに、その證印を受け置くための帳簿。はんどり。

ばんどりん （佛 Bandoline）【名】 髮油の一。毛髮を針の如くならしむるより、薄き頭髮を豎てて、數多く見えしむるに用ふ。

はんどる 把手 （英 Handle）【名】 動かして、機械の運轉を起さする把手（トッテ）。

ばんどる-き バンドル機 （英 Bundle machine）【名】 紡績機械の一。綛枠（カセワク）機又は艷掛（ツヤカケ）機より來る絲を、普通一貫二百目の玉に造る裝置。

はん-ない 藩內 【名】 **はんちゆう**（藩中）に同じ。

はんな-いろ 花色 【名】 **はないろ**（花色）の音便。本朝三國誌「玉の腰帶、はんな色」

はん-なが 半長 【名】 次條の略。

はん-ながぐつ 半長靴 【名】 長靴と、短靴との間の長さなる靴。はんなが。

はん-ながもち 半長持 【名】 普通のより長さの短き長持。雍州府志「肴棚・半長持」

はん-なげし 半長押 【名】 普通の長押よりも、上下の幅を狹くしたる長押。

ばんな-じ 鑁阿寺 【名】 **ばんあじ**（鑁阿寺）を見よ。

はん-なふ 半納 【名】 半額だけ納むること。

はん-なべ 半鍋 【名】〔動〕『**なべかぶり**（鍋被）を見よ』 星五位（ホシゴヰ）の、背に、幾分か黑色を交へたるもの。

はん-なま 半生 【名】 ㊀なまにえ。半熟。 ㊁『**なま**（生）は**なまいき**（生意氣）の義』 半可通。未熟。半熟。

はん-なん 繁難 【名】 繁雜にして困難なること。

ばん-なん 萬難 【名】 多くの艱難。種種の故障。

ばん-なんくわ 蕃南瓜 【名】〔植〕 **たうなす**（唐茄子）の漢名。

はんなり 埴破 【名】 **はにわり**（埴破）の音便。

はんなり 【貌】 **はなやか**（花やか）に同じ。今宮心中「跡へはんなり入花（イレバナ）の、茶びんご橋はこちこちと」 箱根靈驗躄仇討「諷ふ聲

さへはんなりと」

はん‐にく 燔肉【名】神前に燒きて捧ぐる肉。はんさい（燔祭）參照。

はん‐にくぼり 半肉雕・半肉彫【名】『英 Halfrelief. にくぼり（肉彫）參照』浮彫（ウキボリ）の内、表面のみを彫り出だしたるもの、即ち高浮彫と薄浮彫との中間に位するもの。ちゆうにくぼり。

はん‐にち 半日【名】一日の半分。はんじつ。

はんにち‐がくかう 半日學校【名】『獨 Halbtagsschule』全校の兒童を、二部に分ち、一部を午前、他の一部を午後敎授する小學校。にぶけうじゆ（二部敎授）參照。

はんにち‐ばらひ 半日拂【名】雇料の半日分を支拂ふこと。（薩摩歌）「今日の働、半日拂にせうけれど」

はん‐にん 犯人【名】はんざいしや（犯罪者）に同じ。

はん‐にん 半人【名】一人前の半分。

はん‐にん 判人【名】㊀印判を押して證人となる人。（娼妓絹籭）「女郎は、逃げそこなって、判人の所へ下（サガ）ったといふ面（ツラ）だ」㊁せげん（女衒）に同じ。

はん‐にん 判任【名】㊀大寶令の制度にて、式部省の詮擬に本づき、太政官の任補せし官。即ち主政・主帳・家令（ケリヤウ）・内舍人（ウドネリ）など。（勅任・奏任・判補に對して）㊁はんにんくわん（判任官）の略。（勅任・奏任に對して）

ばん‐にん 萬人【名】ばんじん（萬人）に同じ。（保元）「萬人歎きて」

ばん‐にん 番人【名】㊀番をなす人。見張る人。守衞。㊁らそつ（邏卒）㊁を見よ。

はんにん‐くわん 判任官【名】官吏の一。我國にて、官吏の最下級。奏任官の次位。本屬長官がその任免を專行し得るもの。一等より四等に至る。判任。普通文官。

はんにんくわん‐たいぐう 判任官待遇【名】眞の官吏にあらずして、判任官と同一の待遇を受くるもの。判任待遇。

はんにんくわん‐みならひ 判任官見習【名】判任文官たるべき資格を具へて、官廳の事務練習を命ぜられたるもの。

はんにん‐ざうとく‐ざい 犯人藏匿罪【名】〔法〕罰金以上の刑に該（アタ）る罪を犯せる者、又は拘禁中逃走せる者を、藏匿し又は隱避せしめたるために成立する罪。

はん‐にんそく 半人足【名】一人にて、半人前の役にしか立たぬこと。（諺）「あわて者の半人足」

はんにん‐たいぐう 判任待遇【名】はんにんくわんたいぐう（判任官待遇）に同じ。

ばんにん‐づか 萬人塚【名】多くの無緣の人を葬りたる塚。

はんにん‐ぶんくわん 判任文官【名】判任官たる文官。

はん‐にや 般若（梵 Prajñā. 巴利 Paññā）【名】㊀〔佛〕分別・妄想を離れて、實相・眞如を達觀する智慧。㊁〔書〕はんにやきやう（般若經）の略。（尤草子）「眞讀の般若六百卷」（蕪村）「般若讀む庄司が宿の若葉かな」㊂はんにやめん（般若面）の略。㊃怖しき面相の女。㊄香（カウ）の一。沈（チン）の一種。質は伽羅（キヤラ）、たき初より香（カヲリ）、花やかにしてよく、火末は似（ニタリ）に同じ。㊅紋所の一。般若の假面（メン）に象（カタド）れるもの。

般若の十六善神【句】〔佛〕大般若經守護の神として、その經を轉讀する時に掲ぐる神。

般若の智水【句】〔佛〕ちすゐ（智水）に同じ。（謠曲、善界）「般若の智水を得て、火生（クワシヤウ）三昧の焰を遁れ」

般若の船【句】〔佛〕佛が、その智慧にて、愚痴の凡夫を助くるを、船にて溺者を救ふに譬へていふ語。弘誓（グゼイ）の船。（榮花）「是生滅法（ゼシヤウメツポフ）は、愛慾の河を渡る般若の船なり」（謠曲、項羽）「般若の船の、おのづからその纜を解く法（ノリ）の」

般若の假面（メン）【句】はんにやめん（般若面）に同じ。（尤草子）「ひろき物。あはうの鼻、はんにやのめん」

般若の夕（ユフベ）【句】〔佛〕『五時敎の内、第一の華嚴時より第四の般若時までを、化儀（ケギ）の方便說とし、若般時は、その終なるよりいふ』はんにやじ（般若時）に同じ。（謠曲、現在七面）「華嚴（ケゴン）の朝（アシタ）より、般若の夕に至るまで」

ぱんにや 【名】〔植〕ぱんや（木綿）に同じ。

はんにや‐きやう 般若經【名】〔書〕般若波羅蜜の深義を說ける經典の總稱。新譯には、般若波羅蜜經といひ、舊譯（クヤク）には、般若波羅蜜多經といふ。數十部ある内、仁王般若經の外は、皆、玄弉三藏の譯に係り、大般若波羅蜜多經六百卷の重譯なり。

はんにや‐くつ 般若窟【名】ほうざんじ（寶山寺）を見よ。

はんにや‐ぐま 般若隈【名】役者の隈取の、般若の假面（メン）の如くなるもの。

はんにや‐ごゑ 般若聲【名】〔佛〕般若經を讀誦する聲。（謠曲、葵上）「あら、あら、怖ろしの般若聲や。これまでぞ、怨靈（ヲンリヤウ）」

はんにや‐ざか 般若坂【名】〔地〕大和國奈良市の北端、般若寺の邊の地。奈良坂の南方。治承四年、興福寺の大衆、平軍を禦ぎ、延元三年、桃井直常、北畠顯家の軍を支へし等の事蹟によりて名あり。

はんにや‐じ 般若時【名】〔佛〕ごじけう（五時敎）を見よ。

はんにや‐じ 般若寺【名】大和國奈良市の北端にある眞言律宗の寺。白雉五年、孝德天皇御不豫に當り、蘇我日向臣創立し、聖武天皇の時、官寺となる。延喜時代、醍醐寺の座主觀賢僧正再興せしに、治承四年、平重衡に燒かれ、文永中、西大寺の僧忍性（一說には、その師叡尊）復興して、律宗とし、延德中、また火災に罹る。今日のは、その後の建築にて、大に衰頹せり。本尊は丈六の文殊（モンジユ）。俗に、寺をも、文殊といふ。（太平記）「大塔の宮二品親王は、……南都の般若寺に忍びて御座ありけるが」

はんにやじ‐がた 般若寺形【名】石燈籠の形の一。前條の般若寺の内に古來存するものに象（カタド）り、形狀甚だ雅なり。

はんにやじ‐ぎれ 般若寺切【名】名物切（メイブツギレ）の一。天鵞絨（ビロウド）地・濃樺色にて、貝と祇園守のやうなるものとを、大さ一寸ほどに織り出だせる緞子。

はんにや‐しんぎやう 般若心經【名】〔書〕はんにやはらみったしんぎやう（般若波羅蜜多心經）の略。

はんにや‐たう 般若湯【名】『東坡志林に「僧謂レ酒爲二般若湯一、魚爲二水梭花一」とあり』さけ（酒）を云ふ。〔僧家の隱語〕（醒睡笑）「僧家號二般若湯一」

はんにや‐づら 般若面【名】㊀般若面（ハンニヤメン）に似たる顏。㊁嫉妬ぶかき女の顏を形容していふ語。

はんにや‐とく 般若德【名】〔佛〕さんとく（三德）を見よ。

はんにや‐の 般若野【名】〔地〕㊀大和國奈良市の北端、奈良坂の南に在る野。（保元）「般若野の五三昧に納め奉る」㊁せんだんの（栴檀野）を見よ。

はんにや‐の‐たき 般若瀑【名】〔地〕下野國日光男體（ナンタイ）山の東南麓にある瀑。高さ約十二丈、幅三尺許。方等瀑と並べり。

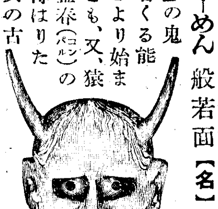
はんにや‐はらみた‐しんぎやう 般若波羅蜜多心經【名】〔書〕はんにやはらみったしんぎやう（般若波羅蜜多心經）に同じ。

はんにや‐はらみつ 般若波羅蜜（梵 Prajñā-pāramitā）【名】〔佛〕六波羅蜜の一。般若㊀の光によりて、涅槃（ネハン）の彼岸に達すること。智見波羅蜜。智慧波羅蜜。（榮花）「有作（ウサ）・無作の諸法の相を見ざる所、如（ニヨ）なり、寂（ジヤク）なり、解脫（ゲダツ）なり、乃至、般若波羅蜜なり」

はんにやはらみった‐しんぎやう 般若波羅蜜多心經【名】〔書〕『梵 Prajñā-pāramitā-hrdaya-sūtra』大般若經中の肝心なる部分のみを拔きたるもの。支那唐の玄弉及び罽賓（ケイヒン）の沙門般若の兩譯あり。僅かに二百六十二字より成り、淨土眞宗以外の諸宗、何れもこれを依用す。略稱、般若心經・心經。

はんにや‐めうでん 般若妙典【名】〔書〕**はんにやきやう**（般若經）の尊稱。（平治）「八十餘人、般若妙典を讀誦（ドクジユ）して」

はんにや‐めん 般若面【名】『謠曲「葵上（アフヒノウヘ）」の鬼女の著くる能面（ノウメン）より始まれりとも、又、猿樂師金春（コンパル）の家に傳はりたる鬼女の古



（はんにやめん ㊀）

面が、奈良の僧般若坊の製作に係るに因るともいふ』**一**能の假面(メン)の一。鬼女のさまに造れるもの。般若。**二**はんにやづら(般若面)に同じ。

はん-にょ 班女【名】**一**〔人〕はんせふよ(班婕妤)に同じ。**二**謠曲の一。吉田少將といふ者、美濃國野上(ノガ)の長者の女花子(金剛・喜多の二流にては、班女といふ)と契を結び、花子、少將の形見の扇を身より離さず戀ひわびて、狂女となりしが、終にめぐりあふ事を作れるもの。

班女が扇【句】「秋の扇」に同じ。盛衰記「九夏三伏の夏の天なれども、班女が扇も捨てられつつ」

班女が閨【句】男に捨てられたる女の閨。謠曲(班女)「ひとり居の班女が閨ぞ寂しき」太功記「班女が閨のお睦言(ムツゴト)」

班女閨中の秋の扇【句】「班女が扇」に同じ。和漢朗詠集「班女閨中秋扇色、楚王臺上夜琴聲」

班女の扇【句】「班女が扇」に同じ。謠曲(班女)「さて、例の班女の扇は候ふ」

班女の閨【句】「班女が閨」に同じ。兜軍記「班女の閨のかこちぐさ」

はん-ね 半直・半値【名】はんか(半價)に同じ。

はんねい-ばな【名】いしなご(石子)を云ふ。〔信濃國輕井澤邊の方言〕

はん-ねだん 半直段・半値段【名】はんか(半價)に同じ。和合人「半直段を以て、損料に貸し出したるに」

はん-ねつ 煩熱【名】**一**苦しき體熱。ほめき。きのふはけふの物語「俄かに煩熱して、迷惑なさるる」**二**世間のうるさき事にもだふること。

はん-ねん 半年【名】一年の半分。はんとし。六箇月。半期。半歲。

はん-ねん 班年【名】班田を行ふべき年。六年毎とし、その年に至らざれば、死者ありても、同戶內の人、佃食・輸租して、田地を返納せず、その年に至れば、正月三十日以內に、京職・國司より班田すべき狀を、太政官に申告し、十月一日より、田數と人數とを校勘して、田文(タブ)を造り、十一月一日、田地を受くべき人全部を集めて、これに給授せり。翌年二月末日までに班ち訖らしむる定なりしかども、班年の稱は、その前年のみを指していへり。班田年。

ばん-ねん 晚年【名】年老いたる時。老後。晚歲。暮年。晚節。晚暮。末節。(早年に對して)

ばん-ねん 萬年【名】**一**よろづの年。永き年の數。よろづよ。萬年(マンネン)。**二**ばんじゆ(萬壽)に同じ。

はんねん-がけ 半年掛【名】ねんがけ(年掛)を見よ。

ばんねん-し 萬年芝【名】『枹朴子に「萬年芝、令㆓人不㆒㆑老、延㆑年九千㆒」とあり』れいし(靈芝)に同じ。

ばんねん-せい 萬年青【名】〔植〕おもと(萬年青)の漢名。

はん-ねり 半練【名】生絲(キイト)を精練するに、そのセリシンを全く除去するに至らぬこと、又その生絲。(本練に對して)

はんねり-いと 半練絲【名】半練にしたる生絲。はんねり。

はんねり-ひら 半練平【名】せんだいひら(仙臺平)に同じ。

はん-のう 半能【名】一番の能樂の內、後半のみを演じて、全體を演ぜぬこと。まひばやし(舞囃子)參照。

はん-のう 半農【名】生活の半部は、農業なること。

はん-のう 繁農【名】のうはん(農繁)に同じ。

はん-のう 反應【名】はんおう(反應)を見よ。

はんのう 飯能【名】〔地〕武藏國入間(イルマ)郡にある町。秩父山彙に位す。郡內、川越に次ぐ都邑。

ばん-のう 萬能【名】**一**種種の物事に效能あること。**二**種種の物事に巧者なること。まんのう。

萬能一心【句】次條の略。〔諺語〕

萬能足りて、一心足らず【句】種種の藝能に達してあれども、精神の一貫したる處なし。〔諺語〕

萬能も、一心の善には如かず【句】才藝よりは、德行に秀でよ。〔諺語〕

はんのう-ちちぶ 飯能秩父【名】武藏國入間(イルマ)郡飯能町及びその附近より織り出す秩父銘仙。はんのうふとおり。

はんのう-ふとおり 飯能太織【名】前條に同じ。

はんのう-やき 飯能燒【名】武藏國飯能町邊より產する陶器。天保元年、飯能町の人雙木(フタキ)淸吉の創めしもの。

はん-の-き 榛木・赤楊【名】『はりのき(榛木)の音便』〔植〕樺木(シラカンバ)科に屬する落葉喬木。高さ五六丈に達す。葉は楢のに似て、楕圓形をなし、互生す。二月頃、葉に先だちて、暗紫褐色の單性花、穗狀花序をなして、雌雄同株に開く。雌花・雄花、共に葇荑(ジユウテイ)花なれども、前者は短小、果實は松毬に似て小く、鱗は密に重疊す。材は薪・建築及び器具用、或は火藥用の炭とし、樹皮及び果實は染料とす。やちはんのき。みやまはりのき。

はん-の-き【名】〔植〕やしやぶし(夜叉五倍子)に同じ。

ぱん-の-き 麪果樹【名】〔植〕桑科に屬する常綠喬木。高さ三丈。葉は大きく、羽狀に分裂して、無花果(イチジユク)のに似、雄花は圓柱狀の肉穗花序、雌花は球狀の花序をなし、果實は徑六七寸、白色・麪麴質の果肉を有し、焙れば、味やや麪麴の如し。熱帶地方にて栽培し、果實は、土人の常食となり、材は船材・建築材、樹皮の纖維は被服用、樹液は糊料に供す。

ばん-の-たらう 番の太郞【句】ばん(番)の條下を見よ。

ばん-の-ぶとも 伴信友【名】〔人〕國學者。若狹國小濱(ヲバマ)の藩士。山岸惟智の第四子、伴信當の養子。名は州五郞。立入、又、事負(コトオヒ)と號す。本居宣長歿後の門人。博聞強記、最も考證に精しく、著書多し。弘化三年歿す。年七十四。

ばん-の-ほし 番星【名】ほくきよくせい(北極星)を云ふ。〔上總國の方言〕

はん-のぼり 半幟【名】しはん(四半)**二**に同じ。

はんば【名】〔植〕はんばのり(羽葉海苔)の略。

はん-ば 班馬【名】**一**隊列より離れたる馬。**二**〔人〕ばはん(馬班)に同じ。

はん-ば 斑馬【名】**一**まだらなる馬。ぶち毛の馬。**二**〔動〕しまうま(縞馬)を見よ。

はん-ば 飯場・飯塲【名】鑛山などにて、鑛夫のための共同の炊事場。

はん-ぱ 半端【名】**一**數の揃はぬこと。足らぬこと。はした。**二**氣の利(キ)かぬこと、又その人。まぬけ。おろか。

ばん-ぱ 萬波【名】幾重にも寄せ來る波。「千波・萬波」

ばん-ぱ 萬派【名】**一**多くの支流。**二**多くの流派。

ばん-ば 馬場・馬塲【名】ばば(馬場)の音便。狂言(富士松)「このばんばを越えれば」

ばん-ば 輓馬【名】〔兵〕車輛に繫ぎて、これを輓かしむる馬。

ばんば 番場・番塲【名】〔地〕『昔、關所の設ありて、番衞の人人居りしよりいふとぞ』近江國阪田郡息鄕(オキサト)村の大字。磨針(スリハリ)峠の上にあり。舊中山道の一驛。

ぱんぱ (西 Pampa)【名】ぱんぱすに同じ。

ばんばあ 婆【名】ばば(婆)の音便。續膝栗毛「これ、ばんばあ樣、酒をちくと」

はんばあぐ (英 Hamburghs)【名】〔動〕雞の一品種。顏赤く、肉冠は薔薇色、耳は圓くして白く、脛は纖小・鉛靑色にして裸出し、羽毛滑澤にして、擧動輕快なり。產卵種として名高し。

はん-ばい 販賣【名】うりさばくこと。あきなふこと。賣ること。

はんばい-がかり 販賣掛【名】販賣の事務を取り扱ふ役。

はんばい-くみあひ 販賣組合【名】〔法〕『獨 Absatzgenossenschaft』組合員の生產せる物品を、加工し、又は加工せずして賣るを、目的とする產業組合。組合員は或貨物の生產者なるを要し、その取り扱ふ貨物は、組合員の生產せる物たるを要す。(購買組合・信用組合・生產組合に對して)

はんばいくみあひ-れんがふくわい 販賣組合聯合會【名】所屬組合の賣却する物に加工し、又は加工せずして、これを賣却するを目的とする產業組合聯合會。

はんばい-しや 販賣者【名】販賣する人。うりて。

はんばい-じよ 販賣所【名】販賣する場所。

はんばい-てん 販賣店【名】販賣する店。「ばいてん。

はんばい-にん 販賣人【名】はんばいしや(販賣者)に同じ。

はんばい-ひん 販賣品【名】販賣する品。「ばいひん。

はんばい-ぶ 販賣部【名】㊀會社・商店などにて、販賣の事務を取り扱ふ部局。㊁專賣局中、政府の專賣品、卽ち烟草・鹽・樟腦油の販賣に關する事務を掌る部局。

はん-ばう 繁忙・煩忙【名】用事多くして忙しきこと。多忙。繁多。

はん-ばう 半紡【名】みかははんばう(三河半紡)に同じ。

はん-ぱう 反報【名】㊀へんぱう(返報)に同じ。㊁〔法〕はんぱうしゆだん(反報手段)を見よ。

ばん-ばう 萬望【名】物事を、是非にと願ふこと。熱望。

ばん-ぱう 萬邦【名】ばんこく(萬國)に「同じ。

ばん-ぱう 蕃邦【名】ばんこく(蕃國)に同じ。

ばん-ぱう 萬寶【名】㊀種種のたから。多くの寶物。㊁あらゆる物事に重寶なること。種種の事に便利なること。

ばん-ぱう 萬方【名】㊀あらゆる方面。四方八方。方方。諸方。太平記「萬方を閙(サワ)きて、先づ熊山を攻めよ」㊁『書經の湯誥篇に「王歸ㇾ自ㇾ克ㇾ夏、至二于亳一、誕告二萬方一」とあり』方方の國國。萬國。萬邦。盛衰記「聖主より凡庶に至るまで、眞乘の結緣、萬方に普し」

ばん-ぱう 萬方【副】『史記の周本紀に「褒姒不ㇾ好ㇾ笑、幽王欲二其笑一萬方故不ㇾ笑」とあり』さまざまの方法を以て。手をかへ、品をかへて。萬端。百方。

はんぱう-しゆだん 反報手段【名】〔法〕外國より不當又は不法の取扱を受けたる國家が、これを中止せしめて、わが主張を貫徹する手段、卽ち報復と復仇との總稱。

はんぱう-ちりめん 半紡縮緬【名】經(タテ)絲に生絲(キイト)、緯(ヨコ)絲に、太き紡績絹絲と生絲とを引き揃へて撚りたるを用ひて織れる、一種の縮緬。丹後國より產す。

はんば-がしら 飯場頭・飯塲頭【名】飯場の長。

はん-ばかま 半袴【名】長袴よりも短くして、地に曳くに至らざる袴。小袴(コバカマ)㊁の括緒(ククリヲ)無きもの。平袴(ヒラバカマ)の制と大抵同じく、素襖(スアウ)の下、又、時には、肩衣の下に著用せり。きりばかま。

はん-ぱく 斑白・半白・頒白【名】㊀黑白入りまじれること。㊁『禮記の王制篇に「斑白之者、不二提挈一」、孟子の梁惠王上篇に「頒白者、不ㇾ負二戴於道路一矣」とあり』白髮まじり、又その人。ごましほ。

はん-ぱく 斑駁【名】まだら。ぶち。

はん-ぱく 反駁【名】駁論に反對して、論難しかへすこと。

はん-ぱく 槃礴【名】『莊子の田子方篇に「公使二人視一ㇾ之、則解ㇾ衣槃礴」とあり』きよ(箕踞)に同じ。

ばん-ぱく 蠻貊【名】『書經の武成篇に「華夏蠻貊」とあり』南蠻と北狄と。未開の國。えびす。野蠻國。

ばん-ぱく 蕃舶・蠻舶【名】ばんせん(蕃船)「に同じ。

ばん-ぱく 晩泊【名】夕暮どきの船がかり。

はん-はじめ 判始【名】㊀きつしよはじめ(吉書始)㊀に同じ。〔鎌倉時代の語〕㊁足利時代に、將軍就職の始、御敎書(ミゲウシヨ)に花押を署せし儀式。神社に所領を寄付し、又は神領の訴訟等を裁斷する御敎書に署する例にて、臨時に、判始總奉行・判始奉行等を任補して、儀を掌らしめたり。㊂德川時代に、每年正月三日、祐筆・組頭、奉書を認めて、老中の前に持參し、老中の、首席より順次に花押を自署せし儀式。

はんはじめ-そうぶぎやう 判始總奉行【名】前條㊁を見よ。

はんはじめ-ぶぎやう 判始奉行【名】はんはじめ(判始)㊁を見よ。

ぱんぱす (英 Pampas)【名】『もと西Pampa(野又は原の義)より出づ』南亞米利加の中央平原の一部に用ふる特稱。ぱんぱ。

はん-ばた 半幡【名】侍大將などの用ふる旗。布二幅にて、長さ約六尺。射手幟。

はん-はちまき 半鉢卷【名】長さ約六尺ばかりの布にてする鉢卷。(本(ホン)鉢卷に對して)

はん-ばつ 藩閥【名】勢力ある藩㊀の出身者が、團結して、政府の要路に立ち、他藩の人物を登庸せぬやうにすること。

はん-ぱつ 半髮【名】男子の髮の結ひ方の一。頂と額との髮を剃り去りて、周圍の髮を、頂に束ね、更に曲げて、髷と刷毛(ハケ)とを作るもの。明治維新前、廣く行はれたり。野郎頭(ヤラウアタマ)。(總髮に對して)

はん-ぱつ 斑髮【名】斑白の頭髮。

はん-ぱつ 反撥【名】はねかへすこと。うけつけざること。

はん-ぱつ 汎發【名】〔醫〕次條に同じ。

はんぱつ-さよう 汎發作用【名】〔醫〕身體一般に、藥の作用の影響すること。

はんばつ-せいぢ 藩閥政治【名】藩閥政府の行ふ政治。

はんばつ-せいふ 藩閥政府【名】藩閥の目的を達せんとする政府。

はんばつ-ないかく 藩閥內閣【名】藩閥の目的を達せんとする內閣。

はんぱつ-りよく 反撥力【名】反撥するいきほひ。はねかへす力。

はんば-のり はんば海苔【名】〔植〕はばのり(はば海苔)に同じ。

ばん-ぱふ 蠻法【名】蠻國に行はるる方法。外國の方法。

はん-はん 半半【名】兩方ともに半分づつにて、差異のなきこと。五分五分。

はん-はん 泛泛・汎汎【貌】㊀水面の廣きさま。㊁鳥・船の、水面に浮び漂ふさま。太平記「異國にて趙盾、わが朝には義朝、その外、泛泛たるたぐひ、勝げて計ふべからず」

はん-はん 皤皤【貌】はは(皤皤)に同じ。

はん-はん 斑斑【貌】まだらなるさま。さまざまなる色又は模樣の交れるさま。

はん-ぱん 盤坂・盤阪【名】うねうねとまがれる坂。つづらをりの阪路。

ばん-ぱん 萬般【名】さまざまの物事。いろいろ。よろづ。百般。諸般。

ばん-ばん 萬萬【名】『漢書の溝渠志に「今瀕ㇾ河十郡、治ㇾ堤歲費日萬萬」とあり』非常に、多きこと。たくさん。鴉鷺合戰「ひとり飛び入られ候ひて、ばんばんの鷺にせり立てられ候ひては」

ばん-ばん 萬萬【副】㊀『韓愈の與二孟尙書一書に「況萬萬無二此理一」とあり』いかなる點より考へても。かならず。決して。㊁非常に。甚だ。井筒業平河內通「京都よりとは、どなたの御使者、萬萬御大儀」

ばん-ばん 萬萬【貌】㊀『漢書の趙后傳に「孝成皇帝至思、所三以萬二萬於衆臣一」とあり』遙かにまされるさま。

ばん-ばん 盤盤【貌】めぐりめぐるさま。うねうね。卯月の潤色「ばんばんたる山路に薪を拾ひては」

ばん-ぱん 伴飯【名】ばんしよく(伴食)に同「じ。

ばんばん-いつ 萬萬一【名】まんまんいち(萬萬一)に同じ。

はん-ばら 半原【名】〔地〕㊀三河國八名(ヤナ)郡にありし地。明治維新の時、武藏國岡部の藩主安部氏を、一時移らしめし所。㊁明治の初年設置の縣の一。四年七月、三河國舊半原藩の地に立てしもの。その十一月、額田(ヌカタ)縣に入る。㊂相模國愛甲(アイカフ)郡愛川村の大字。城址あり。

ばん-ばやし 番囃子【名】能(ノウ)の一部を、樂器を伴奏して演ずるものの一。一番の謠曲全部を、樂器の伴奏にて謠ふもの。舞はざること、居囃子(ヰバヤシ)に同じ。(舞囃子・居囃子に對して)

はん-ぴ 半日【名】奇數の日。半の日。はび。(丁日(チヤウビ)に對して)

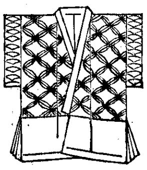
はん-び 半干【名】はんかわき(半乾)に同「じ。

はん-ぴ 藩費【名】藩㊀の費用。「藩費を以て出版す」

はん-ぴ 反比【名】〔數〕『英Inverse ratio』一つの比の後項を前項とし、又その前項

を後項とする比。例へば、b:aはa:bの反比なる類。逆比。（正比に對して）

はん-ぴ 半臂【名】『西三條裝束抄に「唐の高祖、その袖の長さを制して減ず。これを半臂と號す」とあり』古、束帶の時、袍と下襲（シタガサネ）との間に用ひし短き衣。長（ケタ）約二尺、袖の幅僅かに一寸五分、臂の半に達する程にし、下に、襴（ハカマ）とて、幅七寸ほどの絹を附け、左右の脇に十二づつ、背にも二所に六つづつの襞（ヒダ）を設く。下の方は、もと上に折り返し置きしが、後世は、襴を別にし、半臂の胸を合はせ、その上より、腰の邊に纏ふやうにし、又、袖を全く略して、襴を折り返さぬもあり。三位以上は、冬は小葵の綾、夏は三重襷（ミヘダスキ）の縠織（コメオリ）、四位以下は、冬は平絹、夏は無紋の縠織とし、襴は別に羅を用ひ、色は深紫を本制とすれど、中古以來は、五倍子金（フシガネ）にて染めたるため、黑半臂の稱あり、裏は水色を常とす。四位以下、夏は二藍（フタアヰ）に染むることあり、上達部は、黑半臂を常制としたり。



（はんぴ）

半臂の緒【句】半臂の忘緒（ワスレヲ）。襴と同じく、夏・冬共に羅を用ひ、幅二寸五分、長さ一丈二尺、左の腰の前通に垂る。枕「はるかなるもの、……、半臂の緒ひねりはじむる日」

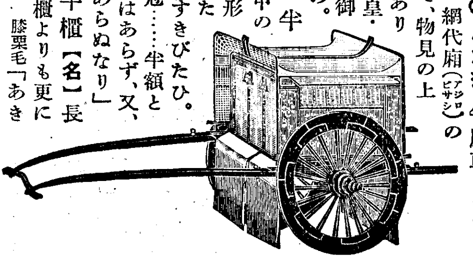
半臂の句【句】〔文〕『半臂が、裝束には、さほどの用は無けれど、これを著くれば、飾となるに似たるよりいふ』和歌にて、第三句卽ち腰の句に、全首を飾る休詞（ヤスメコトバ）をおきたるもの。例へば、後撰集の遍昭の歌「たらちめは斯かれとてしもうば玉のわが黑髮を撫でずやありけん」の「うばたまの」など。

はん-ぴ 犯否【名】罪を犯すことと、犯さざることと。庭訓往來「召二出犯人一……糺二明犯否一之時」

はん-ひきめ 半蟇目【名】小き蟇目。小笠懸（コガサカケ）に用ひたり。

はん-びさし 半庇【名】次條の略。

はんびさし-の-くるま 半庇車【名】牛車（ギッシャ）の一。網代庇（アジロビサシ）の車の類にて、物見の上のみに庇ありて、太上天皇・親王の乘御たりしもの。



（はんびさしのくるま）

はん-びひた 半額【名】甲の上を弦月形に透かしたる冠。はんすきびたひ。禁祕抄「御冠……半額とは、厚額にはあらず、又、透額にもあらぬなり」

はん-びつ 半櫃【名】長持の類。長櫃よりも更に小きもの。膝栗毛「あきのあるを幸、蓋を半櫃あけて」

ばん-ひばち 番火鉢【名】『ばん（番）は接頭語』商店にて、來客が暖を取るために、店頭に置く火鉢。

はん-びやうにん 半病人【名】疲勞などして、殆ど病人の如くに弱りてある人。

はん-ぴやく 凡百【名】かずかず。みな。ぼんぱく。諸種。萬般。總體。

はん-ぴやく 半百【數】百の半分、即ち五十。

はん-びらき 半開【名】はんかい（半開）㊀に同じ。

はん-びらけ 半開【名】はんかい（半開）㊁に同じ。

はん-ぴれい 反比例【名】〔數〕『英 Reciprocal proportion』一つの量が他の量の逆數と比例すること。x・yを二つの變數、kを常數とし、yがxと反比例をなす時は、$y=\frac{k}{x}$ なり。例へば或仕事をなす場合の人數と日數との類。逆比例。（正比例に對して）

はん-ぶ 半步【名】田地の面積の一段の半分。即ち天正の石直（コクナホシ）以前は百六十步、その以後は百五十步。半。

はん-ぶ 繁蕪【名】㊀雜草の生ひしげること。㊁文辭のくだくだしきこと。簡明ならぬこと。

はん-ぷ 販夫【名】うりこ（賣子）に同じ。

はん-ぷ 藩府【名】㊀諸侯の立つる役所。㊁藩鎭の治所。

はん-ぷ 販婦【名】女の賣子。ひさぎめ。

はん-ぷ 斑布【名】さらさ（更紗）に同じ。新猿樂記「甲斐斑布」

はん-ぷ 帆布【名】ほもめん（帆木綿）に同じ。

はん-ぷ 頒布【名】㊀あまねく頒（ワカ）ちくばること。㊁こうふ（公布）に同じ。

はん-ぷ 汎布【名】ひろく各地に分布すること。

ばん-ぶ 番舞【名】つがひまひ（番舞）を見よ。

ばん-ぷ 萬夫【名】多くのをとこ。多くの武夫。多くの人夫。

萬夫の長【句】萬人の頭目。多くの人のかしら。

萬夫の望【句】『易經の繫辭下傳に「君子知レ微知レ彰、知レ柔知レ剛、萬夫之望」とあるに本づく』萬人より仰がるる德望。

萬夫不當【句】萬が、力を合はせても、敵對し難きほどに剛勇なること。

ばん-ぷ 蕃布【名】臺灣の土人が、野生の苧麻又は支那產の麻を、手にて紡げる太絲を經（タテ）・緯（ヌキ）として織る粗布。

はん-ぷう 半風【名】〔動〕はんぷうし（半風子）の略。節用集「半風、蝨也」

はん-ぷう 瘢風【名】なまづ（鯰）㊂に同じ。

はん-ぷう 判封【名】封じ目に捺印して封ずること。緋縮緬卯月の紅葉「身が判封のまま、只今披く。これ聽け」

ばん-ぷう 晩風【名】夕ぐれに吹く風。ゆふかぜ。

ばん-ぷう 蠻風【名】野蠻なる風習。蠻人の風俗。蠻氣。

はんぷう-し 半風子【名】〔動〕『虱（シラミ）といふ字は、風の字の一半なるよりいふ』しらみ（蝨）の異稱。

はん-ぷかう-でう 反風香調【名】〔音〕琵琶の調子の一。（風香（フウカ）調に對して）

はん-ぷく 半腹【名】山の頂上と麓との中間。中腹。山腹。

はん-ぱく 半幅【名】全幅のなかば。半枚（ハンピラ）。

はん-ぷく 反復【名】㊀『易經の上經に「反二復其道一、七日來復」とあり』くりかへすこと。たびたびすること。㊁次條㊂に同じ。太平記「天下の反復遠からじと、謳歌の說、耳に滿ち候ふ」

はん-ぷく 反覆【名】㊀『史記の屈原傳に「欲レ反二覆之一、一篇之中、三致レ意」とあり』本へもどすこと、又、本へもどること。㊁『詩經の小雅に「豈不レ懷レ歸、畏二此反覆一」とあり』心變りやすくして、信用しがたき行をなすこと。うらぎること。反側。
㊂前條㊀に同じ。

はん-ぷく 叛服【名】背くことと、順ふことと。

ばん-ぷく 萬福【名】多くの幸福。多福。萬祥。庭訓往來「富貴萬福、猶以幸甚幸甚」

はんぷく-きがう 反覆記號【名】〔音〕『英 Signs of repetition』西洋音樂にて、樂曲中の一部分を反覆して奏唱すべき由を、示すに用ふる記號、卽ち 𝄆 𝄇 又は 𝄋。反始記號も、反覆記號の一種なれども、特に區別して呼ぶ。

はんぷく-さうしやう 反覆雙晶【名】〔鑛〕『英 Repeated twin』同じ雙晶の規則を何回か繰り返したる雙晶。

はんぷく-しんかう 反覆進行【名】〔音〕『英 Sequence』西洋音樂にて、同一のモチイフを、音階の度を追ひて、上方又は下方に移動せしむる法。

はんぷく-しゆ 反覆手【名】『漢書の陸賈傳に「殺レ王降レ漢、如レ反二覆手一耳」とあり』はんしやう（反掌）に同じ。

はんぷく-はふ 反覆法【名】〔文〕『英 Repetition 又 Epizeuxis』同一又は類似の語句を繰り返す修辭法。例へば、「實に實に然り」、「佳き眺かな、眺かな」などの類。

ばん-ぶくろ 番袋【名】㊀とのゐぶくろ（宿直袋）に同じ。㊁雜物を入るるに用ふる、大きなる袋。源氏物語忍草「今も、大きなる袋をば、番袋といふ」

はん-ぶじ 判府事【名】府㊃の舊職員の一。正（勅任）と權（奏任）とありて、府事の糺判を掌りしもの。明治元年閏四月設置、同二年七月廢せられたり。

はん‐ぶ‐ぢとう 半分地頭【名】その地の半分を領する地頭。

ばん‐ぶつ 萬物【名】天地間の一切の物。よろづの物。ばんもつ。

萬物一府【句】『莊子の天地篇に「萬物一㆑府、死生同㆑狀」とあるに本づく』萬物は、根本に於て共通し、彼我の區別あるに非ず。〔諺語〕

萬物の靈【句】『「人は萬物の靈」を見よ』**じんるゐ**(人類)の異稱。

萬物の靈長【句】前條に同じ。

萬物、皆、我に備はる【句】『孟子の盡心上篇に「孟子曰、萬物皆備㆓於我㆒矣。反㆑身而誠、樂莫㆑大㆑焉」とあるに本づく』天下の人心は、もと互に同じきが故に、我心を以て、世上の萬事に推及して、誤る所なし。〔諺語〕

ばん‐ぶね 番船【名】德川時代に、番綿を積みて、大阪より江戶に通ひし船。**はやわたぶね**(早綿船)參照。

ばん‐ぶみ 番文【名】**ばんちやう**(番帳)に同じ。

はん‐ぶん 半分【名】二分の一。なかば。半。一半。

はん‐ぶん 半分【接尾】一部は云云のためにする意。がてら。出世景清「慰半分に牢舍してあるものを」西染野中の隱井「その勢で遣っては、喧嘩半分」

はん‐ぶん 斑文【名】まだらの模樣。斑點。斑紋。

はん‐ぶん 繁文【名】㊀うるさき文飾。㊁『史記の樂書に「繁文簡節之音作、而民康樂」とあり』規則・法令などの、こまごましくして面倒なること。

繁文・縟禮(ジヨクレイ)【句】規則・禮式などの、こまかしく面倒なること。繁縟。

はん‐ぶん‐がた 半分方【名】**はんかた**(半方)に同じ。

はん‐ぶん‐こ 范文虎【名】〔人〕支那元の武將。もと宋の降將。わが弘安の役に、將として、江南の水軍を率ゐ來る。大敗の餘、逃れ歸りし者僅かに三人と稱せらるる內の一人なり。

はん‐ぶん‐すう 繁分數【名】〔數〕**ふくぶんすう**(複分數)に同じ。

はん‐ぶん‐すう‐しき 繁分數式【名】〔數〕前條に同じ。

はん‐ぶん‐すぎ 半分過【名】**なかばすぎ**(半過)に同じ。

はん‐ぶん‐ね 半分直・半分値【名】**はんか**(半價)に同じ。和合人「駕屋(カゴヤ)さん、……、半分直なら、乘せるだらう」

はん‐ぶん‐みち 半分道【名】**はんみち**(半道)に同じ。孕常盤「二百里に餘った奧州、半分道も往かずに」

はん‐ぶん‐わけ 半分分【名】半分に分くること。ふたつわり。二分(ニブン)。やまわけ。はんわけ。

はん‐ぶん‐わり 半分割【名】前條に同じ。狂言(泣尼)「お布施を半分わりぢや」

ぱんふれっと (英 Pamphlet)【名】假綴の小册子。

はん‐ぶろ 半風呂【名】平民にて、風呂㊁と緣を結びたる家。

はん‐ぺい 半平【名】**はんぺん**(半片)㊁に同じ。

はん‐ぺい 藩兵【名】藩㊀の兵士。

はん‐ぺい 蕃兵【名】支那宋の兵制の一。

はん‐ぺい 藩屏・蕃屏【名】㊀まがき。かき。塀。㊁『書經の顧命篇に「立㆓諸侯㆒、樹以爲㆓蕃屏㆒、傳㆓王業㆒」、左傳の僖公二十四年の條に「封㆓建親戚㆒、以藩㆓屏周㆒」とあり』一地方を鎭撫して、王室を擁護すること、又そのもの。藩翰。藩籬。藩垣。正統記「公家(クゲ)、既に一統しぬ。……。今より武を兼ねて、藩屏たるべし」㊂直轄せる領地の內。太平記「吾が藩屏の中にして」㊃伊勢の兩宮の御門の正面に、內部のあらはに見えぬやうに建てたる塀。かくれまがき。

はん‐ぺい 班幣【名】新年(トシゴヒ)・新嘗(ニヒナメ)等の祭祀に當り、一定の日を以て、豫め幣帛を諸神社に班(ワカ)つこと。現今は、宮內省の掌るところなり。

ばん‐ぺい 番兵【名】番をする兵。守衞の兵卒。番卒。衞兵。哨兵。步哨。

はん‐へい‐さ‐はう 半閉鎖堡【名】〔兵〕**へいさはう**(閉鎖堡)を見よ。

はん‐ぺき 反璧【名】『左傳の僖公二十三年の條に「晉公子重耳之及㆓於難㆒也、及㆑曹。僖負羈乃饋㆓盤飧㆒、置㆑璧焉、公子受㆑飧反㆑璧」とあるに本づく』他人よりの贈物を辭退して、返納すること。反鍋。

はん‐べつ 判別【名】㊀明かにわかつこと。わかち。㊁さばきわくること。みわけ。みさかひ。識別。

ばん‐べつ 蕃別【名】『姓氏錄(シヤウジロク)に、皇別・神別・諸蕃とある諸蕃を、後世言ひかへし稱呼』我國上古の三種の族制中、漢・高麗・百濟・新羅・任那(ミマナ)より歸化せる人人。秦(ハタ)氏・漢(アヤ)氏・百濟(クダラ)氏等、その主なるもの。(皇別・神別に對して)

ばん‐べつ 萬別【名】種種の差別。多樣。「千差萬別」

はんべつ‐しき 判別式【名】〔數〕「方程式の判別式」を見よ。

はん‐ぺん 半片【名】㊀一片の半分。一切(ヒトキレ)の半分。はんぺら。醒睡笑「瓜……半片を食す」㊁『駿河國の料理人半平の名に出でたりとも、又、海鰻餅(ハモヘイ)又は半餅の轉なるべしともいふ』魚の肉を擂りつぶし、食鹽・味醂・米粉・薯蕷(ヤマノイモ)などを擂り合はせて蒸したる食品。方形・半月形又は花形などに、薄く作り、蒲鉾より柔かなり。はんぺい。〔半平〕

ばん‐ぺん 萬篇【名】多くの篇章。

萬篇に富んで、一字に貧し【句】『文心雕龍に「善爲㆑文者、富㆓於萬篇㆒、貧㆓於一字㆒。一字非㆑少、相避爲㆑難也」とあるに本づく』文章に練達せる士も、妥當なる一字を得んがために辛苦する譬。「一字の師」參照。〔諺語〕

ばん‐ぺん 萬變【名】さまざまに變化すること。千變。

はん‐べり 侍り【動良變自】**はべり**(侍り)の音便。〔古語〕紀「唯玉田宿禰無㆑之也、タマダノスクネノミハンベラズ」

はん‐ぽ 半帆【名】**かたほ**(片帆)に同じ。狂言(祐善)「弘誓(グゼイ)の舟に、半帆をあげて」

はん‐ぽ 反哺【名】『哺は口中に在る食物』鴉の子の、成長後、親鳥に、食物をくはへ與へて、哺育の恩に報ゆること。慈烏(ジウ)。

反哺の孝【句】㊀「鴉(カラス)に反哺の孝あり」を見よ。㊁子が、成長後、親の恩に報いて養ふこと。

はん‐ぽ 判補【名】大寶令の制度にて、式部省にて補任せし官。即ち舍人(トネリ)・史生(シジヤウ)・使部・帳內・資人など。(勅任・奏任・判任に對して)

はん‐ぽ 泛蒲【名】次條を見よ。

泛蒲の酒【句】古、支那にて、端午の節に、菖蒲の葉を切りて泛(ウカ)べて飲みし酒。あやめざけ。

ばん‐ぽ【名】しまりのなきこと。〔羽後國莊內の方言〕

ばん‐ぼ 晩暮【名】㊀ゆふぐれ。ゆふがた。日ぐれ。㊁『嚴郢の不空三藏碑に「自㆓成童㆒至㆓于晩暮㆒」とあり』老いたること。老境。頽齡。晩年。暮年。㊂時機に後るること。おそまき。ときおくれ。

はん‐ぼいん 半母音【名】〔語〕『英 Semi-vowel』重母音の場合に於ける非音節的母音。即ち獨立の母音の、一音節中にて、隣接の音に對して、從屬的の位置に立つに至れるもの。例へば、ia・ua・ai・au 等を一音節に唱ふる場合の i・u・a の類。や・わの發音の條參照。

はん‐ぼう 半棒【名】**ぼうじゆつ**(棒術)を見よ。

はん‐ぼう 飯ぼう【名】**めしびつ**(飯櫃)を云ふ。〔甲斐國・出雲國・伊豫國の方言〕

はん‐ぼう‐しゆ 帆縫手【名】海軍卒の一。一等と二等とありて、帆を縫ふ等に從事せしもの。明治五年設置、同十五年帆縫夫と改め、十七年廢したり。

はん‐ぼう‐ふ 帆縫夫【名】前條を見よ。

はん‐ぼおん 半母音【名】〔語〕**はんぼいん**(半母音)に同じ。

はん‐ぼく 藩牧【名】『**ぼくみん**(牧民)を見よ』**はんしゆ**(藩主)に同じ。

ばん‐ぼく 萬木【名】多くの木。ばんもく。盛衰記「萬木の風に靡くに似たり」

ばん‐ぼく‐べつ 番木鼈【名】〔植〕**まちん**(馬錢)の漢名。

ばん‐ぼく‐べつ‐し 番木鼈子【名】印度より濠洲北部に分布せる一種の馬錢(マチン)科

の紹をもぬ　牛蠅の表に朱をさして」

はん-ぽん 版本・板本【名】版木にて印刷したる書物。印本。印書。(寫本に對して)「籍。

はん-ぽり 版雕・板彫【名】印形又は版木の彫刻、又その業の人。版木師。

はんぽり-こがたな 版雕小刀・板彫小刀【名】版彫に用ふる小刀。

はんま (英Hammer)【名】はんまあに同じ。

はん-ま 半間【名】『半ば間(マ)に合ふ義』(一)はんぱ(半端)に同じ。(二)つじつまの合はぬこと。まぬけ。とんま。

はんまあ (英Hammer)【名】(一)つち(槌)(二)を見よ。(二)ピヤノその他、それに類似せる樂器の鍵を打つ、小さき槌。(三)ハンマア投に、投ぐるに用ゐるもの。もと鐵塊に、木製の柄を取り附けたるを用ひしが、現時は、鐵塊に繩を附けたるを用ふ。

はんまあ-なげ ハンマア投【名】『英 Throwing the hammer』投擲(トウテキ)の一。ハンマア(三)を、地上前方に投げつけて、出來るだけ遠距離に達せしむる競技運動。

はん-まい 半枚【名】一枚の半分。

はん-まい 飯米【名】飯に炊ぐ米。めし。食料。（きのふはけふの物語）「われわれに、飯米をも御あてがひなく」

はん-まう 半盲【名】片目の視力なきこと。かため。めっかち。がんち。

はん-まう 斑毛【名】獸類のまだらなる毛。

はん-まう 反毛【名】毛織物・羊毛絲等を、反毛機又は割絲機にて、原體の羊毛狀に復せしめたる物。再製毛。複製毛。

はんまう-き 反毛機【名】反毛を製するに

はん-まがき 半籬【名】『規模の、籬(三)に次ぐ者の義』**ちゆうみせ**(中店)(三)に同じ。

はん-まき 半卷【名】(一)なかば卷くこと、又、なかば卷きたるもの。(二)一卷の書の半分。

はん-まく 半幕【名】(一)幕一つ(卽ち一帖)の半分。(二)**うちまく**(內幕)(一)に同じ。（今川大雙紙）「幕の名所……今は半幕なり」(三)能(ノウ)にて、後仕手(ノチジテ)の、早笛などにて登場せんとする際、本幕にて出づるに先だち、揚幕(アゲマク)を少し揭げて、その內に立てる仕手の、下半身を見ずること。この場合には、少し揭げたる幕を一旦下したる後、本幕とす。(片幕・本幕に對して)

はん-ます 半枡【名】橫に半分に割れたる煉瓦。

はんま-ちどり 濱千鳥【名】**はまちどり**(濱千鳥)の音便。（狂言(鷄座頭)）「はんま千鳥の友呼ぶ聲は」（淀鯉出世の瀧德）「はんま千鳥も、友を呼ぶ」

はん-まと 半的【名】『大的の半分なる義』徑二尺六寸の的。

はん-まはし 半廻【名】〔文〕運座にて、半紙一枚の前半面は句に滿ちたる時、別の詠草に、片面四句づつに淨書し、取り纏めて、判者の許に送り、點を乞ふに止むるもの。(本廻(ホンマハシ)に對して)

はんま-まはし 濱廻【名】**はまなげ**(濱投)に同じ。

はん-まん 斑幔【名】**まだらまく**(斑幕)に同じ。（東鑑）「斑幔六十帖」

はん-まんてる 半マンテル【名】**もおにんぐこおと**の俗稱。(長(ナガ)まんてるに對して)

はん-みち 半道【名】(一)一里の半分。半里。（雙生隅田川）「一里でも、半道でも、都の方へ遣って下され」(二)全行程の半分。はんぶんみち。半途。中途。

ばん-みん 蠻民【名】未開の民、化外の民

ばんみん-はふ 萬民法【名】〔法〕**こくさいはふ**(國際法)に同じ。〔明治初年の語〕

はん-む 繁務【名】繁忙なる事務。繁用。

はん-む 煩務【名】煩忙なる事務。

ばん-む 蕃務【名】蕃地の政務。

ばんむ-しよ 蕃務所【名】**ばんむほんしよ**(蕃務本署)の俗稱。

はん-むいしき 半無意識【名】〔哲〕**はんいしき**(半意識)に同じ。

ばんむ-そうちやう 蕃務總長【名】蕃務本署の長。臺灣總督及び民政長官の命を受けて、その主務を掌理し、廳長及び警察官を指揮す。勅任又は奏任。

ばんむ-ほんしよ 蕃務本署【名】臺灣總督府に屬し、生蕃に關する事務を司る所。

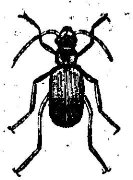
はん-めい 反命【名】**ふくめい**(復命)に同じ。

はん-めい 藩命【名】藩主又は藩廳の命令。

はん-めい 判明【名】明瞭にして、よく分ること。はっきりすること。

はん-めいじん 半名人【名】『名人、卽ち九段と上手(ジヤウズ)卽ち七段との中間に位するよりといふ。**だん**(段)(二)參照』碁又は將棊に於ける、八段の伎倆、又その人。准名人。

はん-めう 斑猫・斑蝥・芫菁【名】〔動〕鞘翅類に屬する昆蟲。體は細長くして、長さ四五分、翅は紫綠色にして、金屬光澤を放ち、黃色の斑紋あり。觸角は長くして、絲狀をなし、複眼大くして突出し、大顎は鉤狀をなして銳く、蟲類の捕食に適す。劇毒を含む。西班牙に多く產すといふ。我國にも、靑斑猫・土斑猫・豆斑猫など、約二十種あり。


(はんめう)

東鑑「嚴常詠劉之後、成二恐怖一半面邊土」(五)俳優の、顏の半ばを粧ひ、他の半ばに、假面(メン)をかぶること。

半面の識(シキ)【句】**はんめんしき**(半面識)に同じ。

ばん-めん 盤面【名】碁盤・將棋盤・雙六(スゴロク)盤・石盤などの表面。

はんめん-ざう 半面像【名】〔鑛〕結晶の對稱の性質上、もとの完全體の面の數の半分のみ現れたるもの。

はんめん-しき 半面識【名】『後漢書の應奉傳の註に「嘗詣二彭城相二袁賀一、賀時出行、閉レ門。造車匠於レ內開レ扇、出二半面一視レ奉。奉卽委去。後數十年、路見二車匠一、識而呼レ之」とあり。**いちめんしき**(一面識)參照』ちよっと面會せしことありて、顏を見覺えをること。半面の識(シキ)。

はんめん-しんけい 半面神經【名】〔醫〕左右何れかの顏面神經痛。半面痛。

はんめん-つう 半面痛【名】〔醫〕前條に同じ。

はんめん-びじん 半面美人【名】(一)美人の顏を、側面より描けるもの。(二)榎本其角が、俳諧の秀句に押捺せし印。磐城國平の城主にして、俳人たりし內藤露沾(ロテン)の、其角に與へしもの。點式といふこと、其角のこの印に始まるといふ。

はん-も 繁茂・蕃茂【名】草木などの生ひしげること。森茂。鬱茂。

はん-もく 反目【名】『**はんしん**(反脣)を見よ』目を反らして、親愛の意を示さぬこと。反眼。「反目・嫉視」

ばん-もく 萬木【名】**ばんぼく**(萬木)に同じ。

ばん-もく 萬目【名】多くの人の目。多くの人の見る所。衆目。

ばん-もち 番持【名】**ばんてもち**(番手持)に同じ。

ばん-もつ　萬物【名】ばんぶつ（萬物）に同じ。

はん-もっく　寢網（英 Hammock）【名】丈夫なる絲を、目の粗き網に造り、兩端を立木・柱などに括りつけて、身を横たへ、又は帆布などにて造り、船中に吊し互して、寢床とするもの。つりどこ。つりねだい。

はん-もと　版元・板元【名】❶出版者。出版元。發行所。浮世風呂「浮世風呂も、これで三編、板元の金儲」❷修理職（シユリシキ）奉行の下役。

はん-もと　判元【名】判を押したる人。

はんもと-みとどけ　判元見屆【名】判元を見屆くること。甲子夜話「判元見屆として、……往くべき旨を申し渡す」

はん-もの　判物【名】將軍の印形を捺して下付し、その社寺領なることを證する文書、又はこれによりて證する社寺領。

はん-ものぐさ　半物草【名】しりきれ（尻切）に同じ。盛衰記「半物草をぞはきたりける」

はん-もん　半文【名】❶一文の半分。半錢。きなか。❷極めて僅かの錢。

はん-もん　判文【名】はんけつぶん（判決文）に同じ。令義解「御判文之外」

はん-もん　斑文・斑紋【名】まだらの紋又は模樣。

はん-もん　反問【名】問ひかへすこと。

はん-もん　煩悶・煩懣【名】わづらひもだゆること。思ひ煩ふこと。苦慮。

はんもん-らい　斑紋癩【名】〔醫〕しんけいらい（神經癩）に同じ。

はん-ももひき　半股引【名】腰より膝の上までを被ふ程の長さなる股引。

はん-もやう　半模樣【名】こしもやう（腰模樣）に同じ。

はん-や　半夜【名】❶ちゆうや（中夜）❶に同じ。謠曲（三井寺）「半夜の鐘の響は、客船にや通ふらん」❷一夜を、前半と後半とに分ちたる、その何れかの一方。❸德川時代に、京都島原の遊女圍（カコヒ）の、晝夜に分ちて稼ぎしもの。はんやをんな。色道大鑑「半夜。圍（カコヒ）職の女を、晝夜に分けたるものなり。されども、圍職の傾城を分けて賣るにあらず、外に半夜女あり。兼約する時は、圍職の並（ミセ）なり。晝夜居續けても、圍職に等し。晝と夜と分けて逢ふ時は、半夜のかはりめあり」

はん-や　版屋・板屋【名】はんぎや（版木屋）に同じ。

ばん-や　番屋【名】❶番人の居る家。番人の詰所。一代女「番屋の行燈の影に連れ行き、假なる事にも吟味强く」❷德川時代に、番太郎❶が、自身番の傍に構へて住みし小屋。內職として、荒物・駄菓子、又、夏は金魚などを賣り、駄菓子は、一箇四文にて、番太郎菓子又は番太菓子と呼ばれたり。ばんたごや。ばんごや。ばんたらう。

ばん-や　蠻野【名】やばん（野蠻）に同じ。

ぱん-や　麪包屋・麪麭屋・麵包屋・麵麭屋【名】麪包を燒き、又は賣る家、又その人。

ぱん-や　木綿・斑枝花【名】〔植〕『原產地の土語なるべし』木綿科に屬する常綠喬木。高さ約十丈に達し、幹に刺あり。葉は胡桃（クルミ）のに似て、五小葉より成る掌狀複葉を成し、各小葉は廣き披針形を成す。花は、形、椿のに似て白く、長楕圓形の實を結び、種子に、白色の長軟毛あり、その軟毛を、蒲團の心（シン）に用ひ、材は丸木舟に造るに適す。原產地は熱帶。きわた。はんにや。もくめん。

ぱん-や　【名】『前條の語の誤用』蘿藦（ガガイモ）の絮。

はん-やう　潘楊【名】〔人〕次條を見よ。

潘楊の好（ヨシミ）【句】『晉書に「楊經、字仲武、潘岳云、藉㆓三葉世親之恩㆒、予之姑、予之伉儷、潘楊之睦、有㆓自來㆒矣」とあるに本づく』代代婚姻關係ある家の情誼。

はんや-がうたい　半夜交替【名】一夜を、前半と後半とに分けて、交替する勤務。

ばんや-かぶ　番屋株【名】德川時代の末に、番屋❷の、店番（タナバン）錢徵收の權利を設けて、賣買するに至りしもの。文政七年嚴禁せられたり。おほやかぶ。

はん-やき　半燒【名】半分燒くこと。なまやき。

はん-やく　半役【名】一人前の役の半分。親元日記「半役御免御禮」

ばん-やく　番役【名】順番を定めてする勤務。東鑑「日來依㆓番役㆒所㆓在京㆒也」

はん-やけ　半燒【名】火災にて、一軒の家の半分燒くること。（丸燒に對して）❷やけはんぶん（燒半分）に同じ。

ばんや-ざけ　番屋酒【名】番屋にて飮む酒。曾我扇八景「さいはひ、これに、虎少將、珍しう番屋酒」

ばん-やま　番山【名】德川時代に、諸侯がその所有の森林中、濫伐を防ぐため、輪伐の箇所を定めしもの。ばんぐみやま。

はんや-まひ　泛野舞【名】ちやうほうらく（長保樂）に同じ。教訓抄「長保樂……又泛野舞云」

ばん-やり　番槍【名】『ばん（番）は接頭語』當直の者のために備へ置く、麁末なる槍。紅梅千句「持つも著るも輕き番槍番具足」

はんや-をんな　半夜女【名】はんや（半夜）❸に同じ。

はん-ゆ　半輸【名】『輸の字の音、正しくはシユ』大寶令の制度にて、調（ウテ）を輸して、徭役を免ぜられしこと。

ばん-ゆう　蠻勇【名】野蠻なる勇氣。亂暴なる勇氣。

はん-よ　板輿【名】いたごし（板輿）に同じ。

はん-よう　繁用【名】用事の繁きこと。繁多。多用。多忙。繁務。

はん-よう　凡庸【名】ぼんよう（凡庸）に同じ。

ばん-らい　萬雷【名】多くの雷。

ばん-らい　萬籟【名】種種の物の、風によりて起る自然の聲。衆籟。「萬籟、寂たり」

ばん-らい　萬來【名】多くの人の來ること。

ばん-らい　晚來【副】日暮になりて。夕ぐれに。

はん-らう　藩老【名】❶大名の家老。國老。❷藩士中の耆宿。諸侯の老臣。

はん-らう　煩勞【名】思ひ煩ひて、身を疲らすること。うるささ。

はん-らう　潘浪【名】〔人〕支那周の穆王の臣。瞿星、地に落ちて、八匹の馬と化せし時、事を以て、穆王の怒に觸れ、崋山に放逐せられしが、寃釋けて歸る時、山に名殘を惜しみ、馬首を背にして乘れりと傳へられ、屢ば畫題として用ひらる。

はん-らく　般樂【名】『孟子の公孫丑上篇に「國家閒暇、及㆓是時㆒、般樂怠敖」とあり』遊び樂しむこと。逸樂。遊樂。般遊。

はん-らん　氾濫・汎濫【名】河の水の漲り廣がること。洪水の出づること。汎溢。

はん-らん　叛亂・反亂【名】謀叛して、騷亂をおこすこと。

叛亂の罪【句】〔法〕はんらんざい（叛亂罪）に同じ。

はん-らん　煩亂【名】煩悶して、心のみだるること。

はん-らん　斑爛【名】❶織物の、種種の色と模樣とのまじはりて、うるはしきこと。❷文章の語句のうるはしきこと。

はんらん-ざい　叛亂罪【名】〔法〕陸・海軍人の、黨を結び、兵器を執りての、暴行・脅迫、又は直接・間接に、敵國に軍事上の利益を與ふる行爲によりて成立する罪。

はんらん-しや　叛亂者・反亂者【名】叛亂をなしたる者。

はん-り　半里【名】一里の半分。はんみち。

はん-り　藩籬【名】❶まがき。かき。〔樊籬〕❷かこひ。しきり。❸はんぺい（藩屛）❷に同じ。太平記「吾山者爲、……、作㆓百王鎭護之藩籬㆒」❹『史通に「馮衍・劭術、不㆑足㆑窺㆓班范之藩籬㆒」とあり。班范は班固と范曄と』學問・藝術の入口。こぐち。

藩籬の鴳（アン）【句】『宋玉の答㆓楚王問㆒と題する文に「鳳上擊㆓九千里㆒、絕㆓雲霓㆒、負㆓靑天㆒、翺㆓翔乎杳冥之上㆒。夫藩籬之鴳、豈能與㆑之料㆓天地之高㆒哉」とあるに本づく。鴳は斑無鶉（フナシウヅラ）』見識の狹き小人の譬。

はん-り　藩吏【名】藩❶の役人。

ばん-り　萬里【名】❶一里の一萬倍。❷極めて遠き距離、又その場所。❸鷹の翼の一部。

萬里同風【句】『漢書の終軍傳に「天下爲㆑一、萬里同風」とあるに本づく』「千里（センリ）同風」に同じ。

萬里の任【句】『魏の文帝の文に「授㆑之以㆓萬里之任㆒、任㆑之以㆓一方之事㆒」とあり』地方官の職。

はんりうどう-たい 半流動體【名】〔理〕ねんたい(粘體)に同じ。

はん-りつ 半律【名】「半呂（ハンリヨ）・半律」を見よ。

はん-りつ 藩立【名】『立の字の音、正しくはリフ』學校などの、藩㊀にて設立したるもの。

ばんり-の-ちやうじやう 萬里長城【名】㊀支那秦の始皇帝が、匈奴の來寇を防ぐために築きたる大城壁。戰國の際、その一部は既に存せしを、始皇增築し、漢の武帝もこれを延長せりといふ。高さ二丈もしくは三丈、厚さ一丈五尺、全長七百餘里にして、山海關より、新疆省の嘉谷關に達し、今に存す。㊁『支那劉宋の檀道濟が、讒を以て捕へられたる時、「乃壞ニ汝之萬里長城ニ」といひし故事(南史に見ゆ)に本づく』すぐれたる勇將の譬。

はん-りふ 飯粒【名】めしつぶ(飯粒)に同じ。

はん-りん 半輪【名】㊀一輪の半分。半圓形。㊁次條の略。

半輪の月【句】半ば虧けたる月。半月。

はん-りやう 藩領【名】藩主の所領。

はん-りやう 半兩【名】㊀一兩の半分。㊁支那秦の代に鑄たる銅錢の一。孔の左右に「兩」の字あり、兩の半分即ち八錢に通用し、後漢の代にも鑄造せり。

はん-りやう 半梁【名】『英 Half beam』甲板に艙口・機關室口等の孔を設くる必要上、甲板を支持すべき横梁を廢止する場合に、舷側より甲板口まで達して、甲板口の兩側に於ける縱梁又は緣材に固著し、同部を鞏固ならしむる、短き梁。

ばん-りやう 晚涼【名】晚方の涼しさ。ゆふすず。

ばん-りやう 盤領【名】裝束の領（エリ）の、頸の周圍に、圓き輪のごときもののある制。袍・直衣（ナホシ）・半尻（ハンジリ）・水干・狩衣（カリギヌ）などの襟これなり。くびかみ。つつえり。まるえり。(方領に對して)

はんりゆう-す 汎龍舟・泛龍舟【名】〔音〕はんりようしゆ(汎龍舟)に同じ。龍鳴抄「汎龍舟、はんりゆうす」

はん-りよ 半呂【名】次條を見よ。

半呂・半律【句】調子の、呂と律と、相半ばせるもの、即ち盤涉（バンシキ）。建武年中行事「ことぢに三つの樣（ヤウ）あり。常は盤涉調、半呂・半律、秋の調なり」

はん-りよ 伴侶【名】なかま。つれ。とも。侶伴。

はん-りよ 煩慮【名】思ひわづらふこと。心配。

はん-りよう 斑龍【名】㊀まだら色の龍。謠曲(東方朔)「王母は、斑龍に、ゆらりと打乘り」㊁〔動〕しか(鹿)の異稱。

はん-りよう 蟠龍【名】地上にわだかまり、未だ昇天せざる龍。

はん-りよう 攀龍【名】『龍鱗に攀づる義』勢力ある者の援助を請ひて、出世すること。附鳳。太平記「附鳳の勢を貪って、攀龍の望を期する族」

はんりよう-しう 汎龍舟【名】〔音〕次條に同じ。

はんりよう-しゆ 汎龍舟・泛龍舟【名】〔音〕雅樂の一。唐樂の黃鐘（ワウシキ）調に屬す。支那隋の煬帝の白明達に作らしめしものといふ。はんりようしう。はんりゆうす。變暑州。變表州。

ばん-りよく 蠻力【名】野蠻人の如き勇力。

ばん-りよく 萬綠【名】見渡すかぎり綠色の物のみなること。

萬綠叢中紅（コウ）一點【句】㊀『王安石の柘榴の詩に「萬綠叢中紅一點、動ㇾ人春色不ㇾ須ㇾ多」とあるに本づく』見渡すかぎり綠色の物のみなる中に、ただ一點の紅花ありて、美しく目だつこと。㊁多くの物の中に、ただ一つ殊にすぐれて目だつ譬。㊂多くの男子の中に、ただ一人の女のまじりてある譬。

はんり-ろん 汎理論【名】〔哲〕『英 Panlogism』㊀唯心論中の一派。宇宙萬有を理・理性又は理念の顯現若しくはその實現過程と觀る、主知的なる、すべての哲學說。㊁普通には、獨逸のヘエゲル(Hegel)の主知的哲學の特稱。

はん-るゐ 煩累【名】うるさきこと、又その事物。

ばん-るゐ 萬類【名】いろいろの種類。萬物。

ばん-るゐ 伴類【名】事件に加擔したる黨類。一味の仲間。伴黨。盛衰記「彼等二人を始めて、數の伴類、皆、手に懸けて」

はん-れい 凡例【名】『左傳の序に「其發ㇾ凡以言ㇾ例、皆經國之常制」とあり』著書の初に、その書の體裁の概要を記すこと。

はん-れい 半嶺【名】嶺の半分。半腹。山腹。

はん-れい 煩禮【名】煩雜なる禮儀。縟禮。

はん-れい 判例【名】〔法〕はんけつれい(判決例)に同じ。

はん-れい 范蠡【名】〔人〕支那周の人。字は少伯。越王勾踐に仕へ、陰忍深謀二十年にして、吳を滅し、會稽の恥を報ず。後、相を辭して、大に產を致し、陶に行きて、陶朱公と稱し、同地に歿す。「陶朱・猗頓（イトン）の富」參照。

はんれい-がん 斑糲岩【名】〔鑛〕『英 Gabbro』深造岩の一種。主成分は、斜長石と輝石の一種なる異剝石、副成分は、角閃石・黑雲母・橄欖石・鐵鑛等にて、完晶質、粒狀構造をなし、多くは暗綠色又は黑色を呈す。我國には、分布狹し。かすりいは。

ばん-れいし 蕃荔枝【名】〔植〕蕃荔枝科に屬する常綠喬木。高さ約二丈に達す。葉は互生し、平滑にして披針形、多數の透明なる小點を具ふ。六瓣・綠黃色の花開き、果實は肉質をなし、食用に供す。原產地は南米なれども、廣く熱帶地に栽培せらる。

ばんれいし-くわ 蕃荔枝科【名】〔植〕顯花植物・被子類・雙子葉門・離瓣花區の一科。主として、熱帶地方に多く分布し、食用に供すべきものあり。

はんれい-ろん 汎靈論【名】〔哲〕『英 Panpneumatism』獨逸のハルトマン(Hartmann)が、汎意論と汎理論とを綜合し、絕對者は、意志にして、觀念なりと、主張せる自家の哲學說に命じたる名稱。無識意哲學。

はん-れう 飯料【名】食料。會費。飯代。

ばん-れう 番料【名】勤番の者に支給する料金。

はんれう-しう 泛龍舟・汎龍舟【名】〔音〕**はんりようしゆ**(汎龍舟)の誤。樂家錄「水調、泛龍舟、波牟禮宇志宇、一本泛作ㇾ汎」

はん-れき 頒曆【名】曆を、國内に頒布すること。

はんれき-しらべじよ 頒曆調所【名】德川幕府にて、天體の諸現象を觀測するために設けし所。測量所。天文臺。

はん-れつ 班列【名】㊀ならぶこと、又その位置。つら。れつ。順序。班位。㊁くみ。たぐひ。

はん-れん 半簾【名】半ばおろしたる簾。

はん-れん 半蓮【名】〔佛〕一蓮の半分。**いちれんたくしやう**(一蓮托生)參照。

半蓮を分く【句】〔佛〕「半座を分つ」㊁に同じ。夕霧阿波鳴渡「九品（クホン）の淨刹に往生し、半蓮を分けて待ってゐや」

はん-ろ 坂路・阪路【名】さかみち(坂路)に同じ。

はん-ろ 販路【名】うりくち。うれさき。うりみち。はけくち。

はん-ろう 飯籠【名】じきろう(食籠)に同じ。

はん-ろう 樊籠【名】㊀『樊は木造、籠は竹に造れるもの』とりかご(鳥籠)に同じ。㊁俗事に束縛せられてをる境涯の譬。「樊籠の累（ルイ）」㊂〔佛〕業（ゴフ）・煩惱（ボンナウ）の繫縛（ケバク）又は三界の苦域。海道記「貪（トン）は、今生の智識なり。愛欲心をゆるして、三界の樊籠を出す」

はん-ろう 絆籠【名】ほだすこと。つなぎて、自由を妨ぐること。束縛。

はん-ろん 汎論【名】一般に通じたる事項につきての論。通論。總論。

はん-ろん 藩論【名】藩内の人人の議論。藩中の輿論。

はん-ろん 煩論【名】うるさく論ずること、又その論。

ばん-ろんぎ 番論義【名】輪番に組を番（ツガ）ひて行ふ論義。台記「有ニ番論義ニ、一番前少納言俊通・山城前司實長」

はん-わかり 半分【名】半ば解せること。十分に了解せざること。半解。

はん-わけ 半分【名】**はんぶんわけ**(半分分)に同じ。

ばん-わた 番綿【名】『廻船に一番・二番の順序あり、江戸著岸の遲速を以て、損益を定めしよりいふ』德川時代に、大阪より、廻船にて、江戸に送りし綿。ばんぶね(番船)參照。

はん-わん 半椀【名】椀に半分ほどの量。

はん-わり 埴破【名】はにわり(埴破)の音便。龍鳴抄「埴破、はんわり」

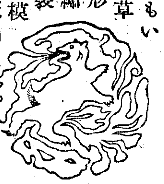
はん-ゐ 版位【名】へんゐ(版位)を見よ。

はん-ゐ 班位【名】㊀くらゐ。等位。等級。階級。班次。㊁ついで。順番。順位。順序。班次。

はん-ゐ 範圍【名】一定せる場處。さかひ。かこひ。かぎり。區域。

はん-ゑ 版繪・板繪【名】はんぐわ(版畫)に同じ。

ばん-ゑ 蠻繪【名】㊀『古、西域(一說に南蠻國)より唐に貢せし女樂の模樣の一なりしよりいふとも、又、盤繪にて、圓形に描くによるかともいふ』古、鳥獸又は草花の形などを、圓形に染め出し、又は繡して、袍・舞樂の裝束又は調度などの模樣とせしもの。［盤繪］西宮記「隨身二人、著二蠻繪袍等一」今昔「蠻繪に蒔きたる硯の箱の蓋」㊁『南蠻人の繪の摹』せいやうぐわ(西洋畫)に同じ。退閑雜記「畫と云ふも、近き頃は、蠻繪の意になしぬる」


(㊀ばんゑ)

蠻繪の隨身【句】蠻繪㊀の袍を著用する隨身。建武年中行事「春日祭の使立つ。近衞中將、これを勤む。……今は、ばん繪の隨身などばかりぞ見ゆめる」

ばんゑ-しやうぞく 蠻繪裝束【名】蠻繪㊀を附けたる裝束。

ばんゑつ-せん 磐越線【名】磐城國平より越後國新津に通ずる官線鐵道。これを岩代國郡山を起點として、東線・西線に分ち、西線を、初めは岩越線と稱せり。

はん-ゑん 藩垣【名】㊀かき。まがき。㊁はんぺい(藩屛)㊁に同じ。

はん-ゑん 半圓【名】㊀〔數〕『英 Semicircle』一つの圓形を、直徑にて、二等分したる一半。半徑を r とすれば、その面積は $\frac{1}{2}\pi r^2$。㊁一圓の半額、卽ち五十錢。

はん-ゑん 攀援【名】㊀つかまりのぼること。攀緣。㊁たよること。たのみにすること。攀緣。

はん-ゑん 畔援【名】『詩經の大雅皇矣篇に「帝謂二文王一、無二然畔援一、無二然歆羨一」とあり』これに背きて、かれに從ふこと。

ばん-ゑん 蟠蜿【名】わだかまりうねること。

はんゑん-き 半圓器【名】『英 Semicircumferentor』分度せる半圓形の環上に、羅針儀・水準器及び覘孔桿を具へたるを、三脚器上に安置したるもの。普通、直角器として使用すれども、その他、いかなる角度を測るにも用ふるを得。

はんゑん-きよう 半圓拱【名】『英 Semicircular arch』アアチ㊀を形成せる彎曲線の、半圓形をなすもの。

はんゑん-けい 半圓形【名】半圓㊀の形。半月形。

はんゑん-さつ 半圓札【名】明治通寶の一。一圓の半額に通用せしもの。

はんゑん-しう 半圓周【名】〔數〕『英 Semicircumference』半圓の周。長さは、全圓周の二分の一にて、半徑を r とすれば πr。

はん-をく 板屋【名】板葺(イタブキ)屋根の家。いたや。

はめ 塡・嵌【名】塡(ハ)むること、又、はめたること。「はめ・はづし」

はめ 羽目【名】㊀壁の上に、縱又は橫に、板を並べ張りたるもの。各板は、同一平面上にあり。布羽目・熨斗(シ)羽目・目板羽目・太鼓羽目・竪羽目等の種類あり。いたかべ。したみ(下見)㊂參照。㊁ばあひ。まひやうし。をり。境遇。〔破目〕和合人「へん、とんだ羽目へひつかかるもんだ」

羽目に掛(カ)る【句】勢に乘ず。興に乘ず。

羽目に附く【句】新たに入牢したる罪人、羽目板の方に押し寄せられて居る。〔德川時代の語〕

羽目を外(ハヅ)す【句】「馬銜(ハミ)を外す」の誤といふ。

はめ 馬銜・鑣【名】はみ(馬銜)の轉。

馬銜を外(ハヅ)す【句】『馬が馬銜を外す如く、拘束を受けぬ義』興に乘じて、程度を忘る。〔羽目を外す〕

馬銜を離す【句】前條に同じ。雙蝶蝶曲輪日記「はめを離すな。おれは構はねど、爰は町家」

ば-め【名】〔植〕『ばべを見よ』いまめがし(今芽樫)に同じ。

ば-めい 馬名【名】飼馬に附けたる名。

ば-めい 馬鳴【名】馬の鳴聲。いななき。

はめ-いた 羽目板【名】羽目に張りて用ふる板。

ばめい-へう 馬名表【名】競馬の時、出場する馬の名を、番組に分ち、その騎手の名などと共に列記したるもの。

はめ-いる 塡入る・嵌入る【動下二他】はめこむ(塡込む)に同じ。藻鹽草「かなはめは、はんの目に、金をはめ入れたるなり」

はめうが-てふ 葉蘘荷蝶【名】紋所の一。蘘荷の葉を左右より組み合はせ、蝶形に描けるもの。

はめ-うま 食馬【名】人に食ひつく癖ある馬。ひとくひうま。

ばめ-がし ばめ樫【名】〔植〕いまめがし(今芽樫)に同じ。

はめ-ぎ【名】〔植〕うつぎ(空木)に同じ。

はめ-く 塡句・嵌句【名】當推量(アテズイリヤウ)にて、文句をあてはめて用ふること。妹背山婦女庭訓「今流行る早學問といふ本を見て、唐(カラ)の嵌句をしてをるのぢや」

はめ-こみ 塡込・嵌込【名】はめこむこと、又その造り方。

はめ-こむ 塡込む・篏込む【動四他】㊀はめて入れこむ。はめいる。挿入す。㊁瞞著して賣り込む。いかさまものを與ふ。

はめ-ごろし 塡殺【名】障子などを、開閉し得ざるやうに、取り附くること。

は-めつ 破滅【名】㊀破りほろぼすこと、又、破れほろぶること。㊁ほろぶること。滅亡。滅却。堀河波の鼓「身代の破滅」

はめ-つく 塡附く・嵌附く【動下二他】塡め込みて、離れぬやうにす。

はめ-て 塡手・嵌手【名】㊀塡むることをする人。㊁塡むるに巧みなる人。㊂巧みに他を陷れ、又は欺く人。だまして。瞞著者。

はめ-ど 塡戶・嵌戶【名】開閉の際に塡(ハ)め外(ハヅ)しをするやうにしたる戶。

はめ-はづし 塡外・嵌外【名】塡むることと、はづすこと。

塡外のむづかしき人【句】機嫌の取り惡き人。あしらひにくき人。

は-めん 波面【名】㊀波の表面。波上。水面。㊁〔理〕『英 Wave front』波動をなせる媒質に就きて、同一の位相にある點を連ねて得る線又は面。はすゐせん(波垂線)參照。

は-めん 破面【名】德川時代に、風・水・旱等の大損害ありし土地に對し、檢見(ケミ)の上、定免(ヂヤウメン)の幾分を減除して、田租を徵集せしこと。

ば-めん 場面・塲面【名】㊀その場の表面。ば。場所。場席。㊁その場の光景。場所の樣子。場席のさま。㊂市場(シヂヤウ)㊀、又その狀況。㊃舞臺のありさま。舞臺面。

ば-めん 馬面【名】㊀馬のかほ。うまづら。㊁人の顏の長きこと、又その人。うまがほ。㊂馬具の一。馬鎧(ウマヨロヒ)と共に用ひ、馬の面に當つる具。ばめんよろひ。運步色葉集「馬面、バメン」

ばめん-し 場面師・塲面師【名】取引所にて、市場立會の場面の狀況を見て、卽座に賣建(ウリタテ)又は買建をなす者。

ばめん-よろひ 馬面鎧【名】ばめん(馬面)㊂に同じ。

はめ-もの 譯物【名】德川時代に、狂言作者が、他人の作品の趣向を借り來りて、自家の作品に取り入れしこと。

はめ-やう 塡樣・嵌樣【名】㊀塡むる仕方。㊁他を欺き陷るる手段。諸藝太平記「野暮てんに出合はせ、はかの行くはめやう」

はめり-ぐさ はめり草【名】〔植〕はくか(薄荷)㊀に同じ。

人を雜として、次同の勝負を始む。場役の種類と場役料とは、例へば、牡丹・菊・紅葉の短册牌を揃へたる場合には、青短(アヲタン)と呼びて七貫、松・櫻・芒・桐の二十點牌を揃へる時は、四光と呼びて、十二貫などの類。

はや-くさ 早瘡【名】たんどく(丹毒)に同じ。

はや-くさ はや草【名】〔植〕たかさうだい(高燈臺)㊁に同じ。〔古語〕字鏡「大戟、二月採」根陰干。念毗須、一云、波夜草」

はやく-しや 破約者【名】破約する人、又、破約したる人。

はや-ぐそ 早糞【名】大便をするに、長き時間を費さぬこと。〔俚語〕風俗文選「早ぐひ・早糞は、男子の一藝」

はや-くち 早口【名】㊀くちばや(口早)に同じ。二代男「隨分早口に、無い事二十七いふ間に」㊁次條の略。若風俗「中川金之丞がやつし事、南北三(サ)ぶが早口」

はやくち-そそり 早口そそり【名】同音の重なりて、發音しにくき俗謠又は臺詞(セリフ)などを、早口に、節おもしろく語る戲。くりことば。そそり。はやくち。はやこと。

はや-ぐひ 早喰【名】㊀食事をなすに、長き時間を費さぬこと。はやめし。二代男「見る人もなしとて、湯漬飯の早喰」㊁はやめし(早飯)㊁に同じ。

はや-ぐり 早栗【名】早く實のれる栗。類聚國史「停三伊勢國・美作國等獻二早栗一」

ばやく-れう 場役料・塲役料【名】ばやく(場役)を見よ。

はや-ご 早具【名】はやがふ(早合)に同じ。

はや-ごしらへ 早拵【名】きふごしらへ(急拵)に同じ。浮世風呂「前篇の餘材を輯めて二番仕込の女湯なれば、鳥の行水、早拵」

はや-こと 早事【名】次條を見よ。

に同じ。㊁はやくちそそり(早口そそり)に同じ。本朝文鑑「菊桐、菊桐、みきくきり：：(菊桐ハ當時ノ御紋ナルヲ、市ノ童部ノ早言ニ効ヒテ、爰ニモ疊(カサ)ネ云ヘルナリ)」

早言爲す【句】『こごなす(言爲す)』を見よ』「早事(ハヤコト)爲す」を見よ。

はや-ことば 早言葉【名】はやくち(早口)㊀に同じ。

はや-さ 早さ【名】㊀早き度合。㊁〔理〕そくりよく(速力)の俗稱。「速さ」

はや-ざいく 早細工【名】すばやく細工すること。諺「物言はずの早細工」

はや-ざき 早咲【名】季節より早く咲くこと、又その花。本朝二十不孝「水仙の早咲」

はやざき-うめ 早咲梅【名】早咲の梅。はやうめ。天神記「まっ先懸けて早咲梅」

はやさき-かいけふ 早崎海峽【名】〔地〕島原灣の天草洋に連なる水道。直徑一里。急潮を以て著る。別稱、瀨詰(セツメ)瀨戸。

はやさすらひめ-の-かみ 速佐須良姫神【名】伊弉諾(イザナギ)神の御子。罪穢を祓へ淸むることを司りたまふ神。

はや-ざとり 早悟【名】はやがってん(早合點)㊀に同じ。妹背山女庭訓「根色なる紫の緣(ユカリ)の女と早悟、なぶってやろと」

はや-さめ 早雨・暴雨【名】にはかあめ。ゆふだち。むらさめ。驟雨。急雨。〔古語〕記「暴雨(ハヤサメ)零(フ)り來て」

はや-さめ 早雨・暴雨【枕】早雨の降るといふ意のくだるの緣より、くたにかけていふ。出雲風土記「はやさめくたみの山とのりたまひき」

はや-ざめ 早覺【名】早く目ざむること。二代男「爰こそ假寢の夢ばかりよ、と早覺して」

はやし 林【名】㊀『はやす(生す)の假體言』樹木の群り生えたる所。㊁物事の多く

將軍への進講を命ぜられ、世世その後を承けて、明治維新に至る。りんけ。㊃姓氏の一。徳川幕府の碁職四家の一。利玄を初祖とし、明治維新の後、第十三世秀榮に至りて、藝統絶ゆ。

はやし 榮【名】榮(ハヤ)すこと。榮(ハエ)あらしむること。〔古語〕萬葉「わが角(ツノ)はみ笠のはやし……わが毛らはみ筆のはやし」

はやし 囃・囃子【名】㊀囃(ハヤ)すこと。㊁能樂・長唄・芝居その他の演藝、祭禮の花車(ダシ)などにて用ふる音樂。能樂にては、横笛・太鼓(タイコ)・大鼓(オホツヅミ)・小鼓(コツヅミ)を用ひ、長唄にては、なほ三味線を加へて行ふ。

はやし 細割子(英 Hash の訛)【名】西洋料理の一。牛・羊の肉などを、細かく刻み、葱を交へたるもの。

はやし 早し【形二】㊀すみやかなり。疾し。迅速なり。㊁勢强し。するどし。敏(ト)し。はげし。あらし。いちはやし(逸速し)參照。竹取「はやき風吹き」源氏「薫物合(タキモノアハセ)……、梅花は、花やかに今めかしう、すこしはやき心しらひを添へて」㊂年月短し。延慶本平家「この君の御位、餘りに早し」㊃さきなり。まへなり。初なり。記「うぢの渡(ワタリ)に棹取りにはやけむ人し吾がもこにこむ」㊄その時刻又は時期に達せず。その季節に先だちてあり。㊅目的を達する近道なり。早手廻(ハヤテマハシ)なり。手っとりばやし。浮世風呂「早い譬喩(タトヘ)を言って聽かせよう」八笑人「押合って見るが、一番早いよ」

早い事が【句】次條に同じ。八笑人「場所は、てんでんの好(コノミ)どほり、案じのついた事がいいぜ。早い事が、兩國の涼(スズミ)の題でも」

早い話が【句】理解しやすきやうに、簡單に言へば。早い事が。早く言へば。

早く言へば【句】「早い話が」に同じ。浮世風呂「早くいへば、馬鹿者だから、これは論の外さ」

はやし-かくりやう 林鶴梁【名】〔人〕幕府の吏、又、儒者。名は長孺、通稱は伊太郎。武藏國の人。初め甲府の教官に、後、遠江國・出羽國等の代官に任ぜられ、敏腕の譽あり。米船入港の時、首として、鎖港論を唱へ、忌まれて隱退し、專ら子弟を教授す。明治十一年歿す。年七十三。

はやし-がしら 囃頭・囃子頭【名】囃方の首領。

はやし-かた 林方【名】はやしぶぎやう(林奉行)に同じ。

はやし-かた 囃方・囃子方【名】能(ノウ)・芝居などにて、囃をする人。はやしもの。あひかた。狂言(鬮罪人)「立衆(タチシユウ)、笛の上より、囃子方の前へ並び」八笑人「踊がましい事を致すではなし、囃子方までには及びますまいかと存じますが」

はやし-がほう 林鵞峯【名】〔人〕はやししゆんさい(林春齋)に同じ。

はやし-ごし 林越【名】林を隔つること。二代男「何時となく消えて、杉村の林越に聲のみ」

はやし-ごと 囃事・囃子事【名】唄などうたひて、興を添ふるわざ。はやしもの。狂言(烏帽子折)「賴うだ人の國と名を申して、はやし事で尋ねようず」

はやし-ことば 囃詞・囃子詞【名】歌謠の中にて、意味には關係なく插入したる感動詞などの類。

はやし-ざ 囃座・囃子座【名】能舞臺の一部。囃子方の坐りて、樂を奏する場所。後座(アトザ)の舞臺に接する處を、これに充つ。のちざ。

はやしざき-しげのぶ 林崎重信【名】〔人〕劍道家。林崎夢想流の祖。通稱は甚助。陸奧國の人。

はやしざき-ぶんこ 林崎文庫【名】伊勢國宇治山田市今在家（イマザイケ）町林崎にある文庫。貞享四年、宇治會合衆・大年寄等の創立。もとは、舊丸山にありて、丸山文庫又は内宮文庫と稱せしを、元祿三年、今の地に移す。後、宮崎文庫と改稱し、明治六年以來、神宮司廳の所轄に歸し、同三十九年、神宮文庫の建設と同時に、藏書全部を移管し、林崎には、遺屋の存するのみ。柴野栗山、林崎文庫記「權禰宜荒木田神主蓬萊君尙賢、與二其僚友一謀、修二林崎文庫一將下募二天下異書一以守上レ之」

はやし-しへい 林子平【名】〔人〕寬政三奇士の一。名は友直。六無齋と號す。江戸の人。兄嘉膳の故を以て、仙臺侯に祿仕す。意を海防の事に注ぎ、北は蝦夷より、西は長崎に至るまで、自ら踏査し、又、蘭學を修む。海國兵談・三國通覽を著して、大いに士氣を鼓舞す。幕府、その說を悅ばず、版木を毀ちて、兄の家に禁錮す。寬政五年歿す。年五十六。

はやし-じゆっさい 林述齋【名】〔人〕德川幕府の儒官。名は衡、字は叔紞、一字は公鑑、蕉隱とも號す。岩村城主松平乘蘊（ノリモリ）の第三子。大學頭林信敬の後を承く。和漢の學に通じ、漢・唐・宋の說を取捨して、一家を成す。將軍家齊の寵遇を得、遂に政治に與る。白河樂翁・堀田正敦と親交あり。天保十二年沒す。年七十四。

はやし-しゆんさい 林春齋【名】〔人〕德川幕府の儒官。名は恕、又の名は春勝、字は子林、後、之道と改む。鵞峰とも號す。羅山の第三子。博學强記、最も本朝の歷史に精しく、本朝通鑑を始め、著書頗る多し。又、塾舍を開きて、子弟を敎授す。延寶八年歿す。年六十三。

はやし-じよ 林恕【名】〔人〕前條に同じ。

はやし-せん 林錢【名】德川時代に、民有の林に課せし稅。

はやしだ 林田【名】〔地〕㊀播磨國揖保（イボ）郡にある村。作州街道より鳥取街道に分るる地點に當る。建部（タケベ）氏の舊藩地。㊁明治の初年設置の縣の一。四年七月、播磨國舊林田藩の地に立てしもの。その十一月、國內の他の諸地と相合して、姬路縣となる。

はやし-だうしゆん 林道春【名】〔人〕はやしらざん（林羅山）に同じ。

はやし-ただす 林董【名】〔人〕政治家。舊幕臣。蘭醫佐藤泰然の第五子。義兄なる豐前國小倉の人林洞海に養はれて、その後を嗣ぐ。明治四年、神奈川縣に出仕し、諸官に歷任して、外務次官となる。二十八年、男爵を授けられ、特命全權公使に任じて、淸國・露國に轉じ、又、英國に駐劄し、日英同盟の功によりて、子爵に進む。三十九年、外務大臣となり、更に伯爵に進む。大正二年歿す。年六十四。

はやし-たつ 囃立つ・囃子立つ【動下二他】盛んにはやす。狂言（鬮罪人）「鼓・太鼓・鐘・笛はやし立てたらば」和合人「呼び込むのか、はやし立てて送り出すのか、わからねえ」

はやし-ちやう 林帳【名】德川時代に、林及び著名の大木に關する記錄の帳簿。

はやし-ともなほ 林友直【名】〔人〕はやししへい（林子平）に同じ。

はや-じに 早死【名】年若くして死ぬること。わかじに。夭死。早世。

はやし-の-かね 林鐘【名】『りんしよう（林鐘）の直譯』陰曆六月の異稱。〔古語〕謠曲（舞車）「水無月の旣に半ばも杉の村立、林の鐘の音」

はやし-のぶあつ 林信篤【名】〔人〕はやしほうかう（林鳳岡）に同じ。

はやし-のぶかつ 林信勝【名】〔人〕はやしらざん（林羅山）に同じ。

はやし-びいふ（英 Hashed beef の訛）【名】西洋料理の一。牛肉を細かく刻み、玉葱を交へたるもの。

はやし-ぶぎやう 林奉行【名】德川時代の職制の一。勘定奉行に屬して、官林の樹木の伐採、及び木材の運送、監護人の檢査を掌りしもの。貞享二年の設置。燒火間（タキビノマ）詰にて、定員、初は四人後には二人又は一人なりしこともあり。七八人の手代、附屬したり。はやしかた。

はやし-べや 囃部屋・囃子部屋【名】芝居の舞臺の背後なる、囃方の詰め居る所。

はやし-ほうかう 林鳳岡【名】〔人〕德川幕府の儒官。名は戇、字は直民。春常と稱す。後、整宇と改む。春齋の第二子。春齋の本朝通鑑を著すや、與りて力あり。儒者の、剃髮を不可とし、遂に命を受けて、元祿四年髮を蓄へ、名を信篤（ノブアツ）と改む。將軍家綱より吉宗に至る五代に歷仕し、享保十七年歿す。年八十九。

はや-しほ 早潮【名】さしひきの速かなる潮。急潮。爲尹千首「早しほの春の霞の流江になほ影とまる夜はの月かな」

はやし-まち 囃町・囃子町【名】昔の芝居にて、囃方の居りし部屋。樂屋に勸請（クワンジヤウ）せる稻荷社を挾みて、稻荷町（イナリマチ）と相對し、併稱して、兩側（リヤウガハ）といひ、因って、又、稻荷町を向側（ムカフガハ）ともいへり。柳樽「地名にあらず囃子町稻荷町」八笑人「おい、囃子町から、二三人、下座帳（ゲザチヤウ）を持って來さっし」

はや-じまひ 早仕舞【名】㊀業務を、定刻より早く仕舞ふこと。午後より休むを、半仕舞（ハンジマヒ）といふ。「松の內早仕舞」㊁早く終を告ぐること。早く沒落すること。浮世風呂「心に驕奢の風立たば、家私（シンダイ）は、何時にても早仕舞なり」

はやし-も 鞕【名】むち（鞕）に同じ。〔古語〕

はや-じも 早霜【名】季節より早くおく霜。はつしも。

はやし-もの 囃物・囃子物【名】㊀はやしごと（囃事）に同じ。謠曲（藤榮）「鳴尾（ナルヲ）殿の御坂迎（サカムカヘ）に、囃子物をして御出であると申し候ふ」看聞御記「盂蘭盆之儀如レ例。石井（新堂前）念佛、拍物如レ例」㊁囃事を職とする人。狂言（二千石）「然らば諸へ。……。囃子物を呼びに遣らうか」

はやし-もり 林守【名】林の番人。

はやしや-しやうざう 林屋正藏【名】〔人〕江戸の落語家。怪談咄の元祖。文化三年、初代三笑亭可樂の門に入りて、初、樂我と稱し、多藝にして、傍ら戲作をなす。天保十三年歿す。年六十二。

はやしや-は 林屋派【名】落語家の一派。林屋正藏を祖とするもの。

はやし-らいす（英 Hashed rice の訛）【名】カレ飯にハヤシビイフを加へたる食品。イライスの類。

はやし-らざん 林羅山【名】〔人〕德川幕府の儒官。名は忠、又の名は信勝、字は子信、通稱又三郞。晚に、道春と號す。その先は藤原氏、中世、加賀國林鄕に住し、遂に林氏を稱す。京都に生れ、博覽强記、最も六經を好み、專ら朱子學を唱ふ。藤原惺窩に師事し、將軍家康の親寵を得、四世に歷仕し、宗廟・祭祀の典禮、卽位・改元・行幸の儀式に至るまで、議に與らざるなし。明曆三年歿す。年七十五（一說に七十三）。

（はやしらざん）

はやす 生す【動四他】㊀生（ハ）ゆるやうにす。おひたたしむ。生長せしむ。のばす。㊁『切るといふを不吉として、反對にいふ』切る。きざむ。「七草（ナナクサ）をはやす」保元「御爪をもはやさず、御髮をも剃らせたまはで」夫木「刈りはやす麻の立枝にしるきかな夏の末葉になれるけしきは」

はやす 榮す・映す【動四他】榮（ハ）ゆるやうにす。はえあらしむ。面目あらしむ。光彩を添ふ。ほめそやす。源氏「いま一聲聞きはやすべき人のある時に」大鏡「この殿は、折節ごとに、必ずかやうの事を仰せられて、事をはやさせたまへるなり」

はやす 囃す【動四他】『前條の語の轉義』㊀音曲・歌謠によりて、又は衆人、聲を合はせて、賑かならしむ。空穗「よろづ樂（ガク）、笛の音をはやし」落窪「若うはやれる者に、落はやして言はせて笑ふに」平家「伊勢瓶子（イセヘイジ）は醯甕（スガメ）なりけりとぞはやされける」㊁聲を立てて嘲る。

はや-ず 早醋【名】粟・糯米（ウルチ）などにて

釀したる醋。こんず。

はやずし 早鮓・早鮨【名】いちやずし(一夜鮓)に同じ。二代男「焼卵・早鮨」

はやすひかいけふ 速吸海峽【名】〔地〕『峽の字の音、正しくはカフ』はやすひのせと(速吸瀨戸)に同じ。

はやすひなど 速吸之門【名】〔地〕『潮流の急なる水門の義』神武天皇の、東征の時、御船通過し、珍彦(ウヅヒコ)を得て、嚮導としたまひし所。古事記には、明石海峽に擬し、日本紀には、今の速吸瀨戸に擬す。

はやすひのせと 速吸瀨戸【名】〔地〕伊豫國佐田岬と、豐後國地藏岬との間に位する海峽。長さ七里。潮流速し。一名、佐賀關(サガノセキ)海峽。

はやせ 早瀨【名】流の早き瀨。せ。急湍。奔瀨。萬葉「初瀨川はやみ早湍(ハヤセ)をむすびあげてあかずや妹と問ひし君はも」

はやせがは 早瀨川【名】早瀨のある川。はやかは。新古今「老らくの月日はいとど早瀨川返らぬ浪に濡るる袖かな」

はやぜん 早禪【名】芝居の相方の禪の勤(ツトメ)の、早調子なるもの。鳴物を交ふると然らざるとあり。

はやせんぼふ 早懺法【名】〔佛〕怱怱に懺法を修(シユ)する法式。

はやそ 早麻【名】はやいさ(早絲)に同じ。

はやた 早太【名】〔人〕ゐのはやた(猪早太)に同じ。柳樽「お立(チク)だと長兵衞早太ゆりおこし」

はやだいこ 早太鼓・早太皷【名】早く烈しく太鼓を打鳴らすこと、又その音。

はやだすき 早襷【名】手早く襷を掛けて、身仕度すること。八笑人「下緒(サゲヲ)をはづし、早だすき、鯉口くつろげ」

はやたつ【名】かは(川)の異稱なりといふ。〔古語〕 堀太「淵瀨をもそことも知らぬはやたつの漲りわたる川の流は」

はやたま 速玉【名】次條を見よ。

はやたまのを 速玉を結ぶの宮【句】『露の玉に、祭神(次條の神)の名を言ひかけたるもの』**くまのはやたまじんじや**(熊野速玉神社)に同じ。夫木「なぎの葉に磨ける露のはや玉を結ぶの宮や光添ふらん」

はやたまのをのかみ 速玉男神【名】伊弉諾(イザナギ)神の御子。清淨の德を司り給ふ。

はやだより 早便【名】㊀至急の通報。急使。㊁定時より早く著せる書信。㊂德川時代に、飛脚屋が、京阪と江戸との間に於て、發送後七日目に、先方へ書狀を屆けしこと。(並便(ナミダヨリ)に對して)

はやち 疾風【名】『ちは、こち(東風)のちに同じく、風の意』はやて(早手)㊀に同じ。〔古語〕 紀「迅風、ハヤチ」

はやちのかぜ はやちの風(カゼ)【句】前條に同じ。津國女夫池「はやちの風に吹き立てられて」

はやちかぜ 疾風【名】前條に同じ。井筒業平河内通「花を吹き捲くはやち風」

はやぢやうちん 早提灯【名】急ぎゆく人の持てる提灯。丹波與作「あれへ見ゆる早提灯、走飛脚と覺えたり」

はやづかひ 早使【名】いそぎの使者。早飛脚。急使。狂言(伊文字)「かやうに候ふ者は、早使の者に候ふ。急ぎませう」

はやつぎ 早繼【名】瀨戸物、その他の器具の毀損を、糊・藥料などにて、容易に接合すること、又その糊・藥料など。

はやづくり 早作【名】㊀早く作ること、又その作りたるもの。㊁鯉の差身又は生作(イキヅクリ)をつくる切方にいふ語。

はやづけ 早漬【名】短時間に熟するやうに漬くること、又その漬物、又は鮓(スシ)。義經千本櫻「賣り弘めたる鈞瓶酢、……、拔目(ヌケメ)も內儀が早漬に」 江戸鹿子「交鮓(マゼズシ)・切漬・早漬」

はやつけぎ 早附木【名】すりつけぎ(摩附木)に同じ。

はやつづみ 早鼓・早皷【名】能樂にて、役者の忙しき進退に伴なひ、大鼓(オホツヅミ)と小鼓(コツヅミ)とのみにて、急調に奏する囃子。

はやつゆ 早梅雨【名】例年の時期よりも早く、梅雨の天候となること。

はやつり 鮠釣【名】鮠を釣ること。

はやて 早手【名】㊀『はやち(疾風)の轉』俄かに吹き起る烈風。あからしまかぜ。

はやち。はやちかぜ。暴風。疾風(シップウ)。〔疾風〕 竹取「はやても、龍の吹かするなり」㊁『發病後、迅速に死ぬるよりいふ』**えきり**(疫痢)に同じ。〔江戸時代の語、又、尾張國名古屋の方言〕 隨見「小兒暴瀉し、頻に死する者多し。府下の庸醫は、はやてといふにや」

早手に罹る【句】〔商〕相場の激變に遭ひて、損失す。

はやで 早出【名】㊀定刻より早く出勤すること。(早歸に對して) ㊁**はやがへり**(早歸)㊀に同じ。

家長日記「よべの月、具親早出したる事、口をしさ、思ひ鎭め難し」

はやてふね 疾風船【名】疾風に乘じて走る船。國姓爺「一心の疾風船、仁義の櫓櫂(ロカイ)、武勇の楫」

はやてまはし 早手廻【名】手廻を早くすること。てっとりばやきこと。八笑人「返歌の心持で、短冊を附けるなんぞといふ様な事が、まあ早手廻だなあ」

はやと 隼人【名】㊀『はやびと(隼人)の略。』上古、大隅・薩摩地方に住みし人種。その國人の、捷(ハヤ)く勇猛なるよりいふ。日本書紀に、火闌降(ホスセリ)命の裔とあれど、熊襲(クマソ)と同種族ならんともいふ。每年京に分番上下して、宮門を守り、行幸には先驅をなし、大禮の日には狗吠をなして守衞し、又、風俗の歌舞を奏して、朝儀に備へ、平日は、油絹及び竹器を造りしもの。文武天皇の時、隼人司の設置せらるるや、これに屬し、延曆二十四年、その男女四十人を半減して、定員二十人と定めたり。はやびと。はいと。はやとん。〔唱更〕 ㊁運歩色葉集「隼人、ハヤト。唐名、布護」隼人司(ハヤトノツカサ)の名を帶びたる人。〔德川時代の語〕 ㊂東百官(アヅマヒヤクグワン)の一。

はやと 早砥【名】あらく物を磨ぐに用ふる砥。あらと。字鏡「礪、砥也。波也止」

はやとじやう 隼人城【名】大隅國始良(アヒラ)郡國府(コクフ)村大字上小川にある古城址。養老四年に隼人の官軍に抗せし地とも、又、日本武(ヤマトタケル)尊が川上梟帥(カハカミノタケル)を誅したまひし地とも傳ふ。

はやとづかさ 隼人司【名】**はやとのつかさ**(隼人司)に同じ。

はやとのかみ 隼人正【名】隼人司(ハヤトノツカサ)の長官。

はやとのくに 隼人國【名】〔地〕さつま薩摩の古稱。續日本紀「唱更(ハヤト)國(今薩摩國也)」

はやとのつかさ 隼人司【名】古、隼人の撿挍、歌舞の教習、兼ねて竹笠を造ることを司りし所。職員は、正(カミ)・佑(ジョウ)・令(サクワン)各一人、その下に史生(シジヤウ)・使部・直丁(ヂキチヤウ)等あり。大寶令の制度にては、衞門府の被管たりしが、大同三年衞門府に併せられ、衞門府廢せらるるや、又、司を復し、兵部省の所管となれり。はやびとのつかさ。はいとのつかさ。はやとんのつかさ。

はやとのみやうじん 隼人明神【名】めかりじんじや(和布刈神社)を見よ。

はやとび 早飛【名】早く飛ぶこと、又、早く飛びつく技。

はやとまひ 隼人舞【名】古、大嘗會又は新嘗祭の時に、隼人のなしし、一種の舞。隼人の祖先なる火闌降(ホスセリ)命が、その弟、彥火火出見(ヒコホホデミ)尊の德に服し、その慍を解かんがために、犢鼻を著け、面に赭を塗り、水に溺れて、苦しむ狀をなして、服從の事を誓ひしより起りしものといふ。

はやどまり 早泊【名】旅にて、泊るべき時刻よりも早く泊ること。芭蕉「水鷄(クヒナ)鳴くと人の云へばや早どまり」

はやとん 隼人【名】はやと(隼人)の音便。〔古語〕 紀「隼人、ハヤトン」

はやとんのつかさ 隼人司【名】はやとのつかさ(隼人司)に同じ。

はやどめ 早留【名】㊀刃物が鞘走りせず、中庸の程度を得るやうにとめおくもの。㊁若き女の、振袖をやめて、留袖(トメソデ)とすること。

はやとものさき 早鞆崎・速鞆崎【名】〔地〕豐前國門司(モジ)崎の別稱。

はやとものせと 早鞆瀨戸・速鞆瀨戸【名】〔地〕下關(シモノセキ)海峽の東口、豐前國企救(キク)郡と長門國下關港との間に位するもの。古稱、穴門(アナト)。

はやとものみやうじん 早鞆明神【名】

はやとのみやうじん（隼人明神）に同じ。

はや-とり 早鳥【名】『播磨風土記に出づ』仁德天皇の朝に、明石の驛にありて、その陰、朝日には淡路島、夕日には大倭(ヤマト)島根に及びきといふ、大なる楠木を伐りて造りし船。船足の疾きこと、鳥の飛ぶが如く、一楫にして、七浪を越えきといふ。

はや-とり 早取【名】㊀手早く取ること。㊁次條の略。

はやとり-しやしん 早取寫眞【名】電氣を用ひて、短時間に十數枚を撮影し得る、一種の艷消(ツヤケシ)寫眞。電氣寫眞。はやとり。

はや-ながら 早乍ら【副】『はやく(早く)㊁を見よ』以前のままにて。元のままに。〔古語〕夫木「いかにせん瀧の岩瀨の瀧枕身ははやながらくだりゆく世を」

は-やなぎ 葉柳【名】葉の繁れる柳。俳諧新選(春來)「葉柳に振り出されけり蟬の聲」

ば-やなぎ 場柳・塲柳【名】花合(ハナアハセ)㊁にて、場の牌の、くっつきとなりたる時。

はや-なは 早繩【名】とりなは(取繩)に同じ。娥歌加留多「用意の早繩取出だし」八笑人「懷中より早繩を出だし、縛り上げ」

はや-なへ 早苗【名】さなへ(早苗)に同じ。林葉集「山陰に齋串(イグシ)まつりてとりそめんむろのはや苗ふし立たぬまに」

はや-なべ 早鍋【名】物を早く煮るに用ふる、薄き小鍋。

はや-なみ 早波【名】はげしく打つ波。あらなみ。おほなみ。急波。激浪。

はや-にへ 早贄・速贄【名】㊀初物の贄。走(ハシリ)の御食(ミケ)つ物。〔古語〕記「島の速贄(ハヤニヘ)獻る時」㊁「鵙(モズ)の早贄」を見よ。

はや-ぬの 早布【名】『はやをけ(早桶)を見よ』葬具に用ふる八講布。

はや-ね 早寢・早寐【名】夜、平常の時刻よりも早く寢ぬること。

はや-ねり 早練【名】少し速度を早めてする練歩(レンボ)。

はや-のみこみ 早呑込【名】はやがってん(早合點)に同じ。浮世床「何でも早呑込で、器用で」八笑人「早呑込の輕はずみ」

はや-のりもの 早乘物【名】はやかご(早駕籠)に同じ。若風俗「四五人、早乘物にて、所を尋ね行くに」曾我會稽山「えいさ聲して、早乘物、店先に、どうとおろし」

はや-のる 早奪る【動四他】他の物を、手早く奪ひ盗む。

はや-ばしり 早走【名】㊀疾く走ること、又その人。疾走。平治「八町次郎とて、大力の剛の者、早走の手利(テキ)あり」㊁きやうそう(競走)に同じ。異制庭訓往來「飛越・早走者、力弱身重、中中不二思寄一」

はや-ばせ 早馳【名】馬の早く馳すること。平治「聞ゆる早馳の名馬に、兩鐙(モロアブミ)を合はせて驅けられけるに」

はや-はや 早早【句】はや(早)の條下を見よ。

はや-ばや 早早【貌】早手廻(ハヤテマハシ)なるさま。一茶「はやばやと誰冬ごもる細烟」

ば-やひ 場合・塲合【名】ばあひ(場合)の訛。

はや-びき 早引【名】㊀求むる言語・文字を、簡單便利に探し出し得るやうに作れる字引。㊁〔佛〕本願寺にて、念佛を略して、和讚を、忽忽に續け誦すること。

はや-びきやく 早飛脚【名】特に差し立つる、いそぎの飛脚。はやうちの使。はや。急使。はやづかひ。はしりびきやく。川中島合戰「時附(トキツケ)の早飛脚、息を切って、輝虎の御前に馳せ著き」淀鯉出世の瀧德「御吉左右(キツサウ)の早飛脚」

はや-びけ 早退【名】はやがへり(早歸)㊀に同じ。

はやひと-ぐさ はやひと草【名】〔植〕㊀たかとうだい(高燈臺)㊁に同じ。〔古語〕㊁ひるがほ(晝顏)に同じ。〔旋花〕〔古語〕和名「旋花、波夜比止久佐」

はや-びと 隼人【名】㊀はやと(隼人)㊀に同じ。萬葉「早人の名に負ふ夜聲いちじろくわが名は告(ノ)りつ妻と賴ませ」

はやびと-の 隼人の【枕】㊀隼人は、多く薩摩國より召されしより、さつまのせと(薩摩瀨戶)にかけていふ。萬葉「隼人の薩摩の瀨戶を雲居なす遠くも我れはけふ見つるかも」㊁隼人の薩摩の瀨戶といふべきを省きて、直ちにせと(瀨戶)にかけていふ。萬葉「隼人の瀨戶のいはほも鮎走る吉野の瀧になほしかずけり」

はやびと-の-かみ 隼人正【名】はやとのかみ(隼人正)に同じ。「隼人正、ハヤビトノカミ」

はやびと-の-つかさ 隼人司【名】はやとのつかさ(隼人司)に同じ。和名「隼人司、波夜比止乃豆加佐」

はや-ひなは 早火繩【名】いそぎの用に備ふる火繩。

はや-ひやうしぎ 早柏子木【名】非常の事ある場合に、拍子木を、忙しげに連打すること。

はや-ひる 早晝【名】晝飯を、定刻よりも早く濟ますこと。

はや-ひるばん 早晝番【名】鎌倉幕府の番衆の內、朝早く勤むるもの。東鑑「今日於二御所中一被レ定二早晝番衆一」

はや-ぶえ 早笛【名】能(ノウ)にて、豪壯なる後仕手(ノチジテ)の、勢よく出づる時、笛を地とし、大鼓(オホツヅミ)と小鼓(コツヅミ)とを、これに合はせ、曲によりては、太鼓をも加へ、一聲(イッセイ)・出端(デハ)などに比して、遙かに急調に奏する囃子。

はや-ぶさ 隼・鶻【名】㊀〔動〕猛禽類に屬する鳥。形、普通の鷹より小けれど、飛翔力強く、背は蒼黑、胸腹は赤ばめる灰白色、脚短し。能く雁・鳧・鷺等を擊つ。つばさかまどり。和名「鶻、八夜布佐。鷹屬也。隼、訓上同。鷙鳥也」㊁擧動の甚だ敏捷なる人。

はや-ぶね 早船・早舟【名】㊀急ぎて漕ぎゆく船。小く輕くして、速力早き船。たかをぶね。後撰「大島に水を運びし早船の早くも人に逢ひ見てしがな」㊁艪二挺より八十挺立までの軍船。小早(コバヤ)・關船(セキブネ)の二種に分つ。各その條を見よ。和名「舸、波夜布禰。高尾舟、一云、戰士可レ乘輕舟也」

は-やま 端山【名】㊀麓の山。連なれる山の、端の方にあるもの。とやま。紀「麓山、此云二簸耶磨一」月淸「嵐吹く露のかごとに數添ひて端山の裾にやどりわびぬる」㊁(誤りて)山の端(ハ)。蕪村「一行の雁や端山に月を印す」

はや-ま 早馬【名】はやうま(早馬)の略。

はやま 葉山【名】〔地〕相模國三浦郡にある村。相模灣に面して、風光明媚、宮內省御用邸あり。

は-やまぎ 端山木【名】端山にある木。曾丹集「は山木はゆふべになれば村濃(ムラゴ)なり誰織りそむる錦なるらん」

はや-まく 早幕【名】かへしまく(返幕)に同じ。

はやまつみ-の-かみ 羽山津見神・麓山祇神【名】『羽山は端山の義』伊弉諾(イザナギ)神の、火產靈(ホムスビ)神を斬りたまひし時、火產靈神の右手に成りませりといふ神。端山を司りたまふといふ。

はやまど-の-かみ 羽山戶神【名】大歲(オホトシ)の神の御子。御母は天知迦流美豆比賣(アメシルカルミヅヒメ)命。大氣津比賣(オホゲツヒメ)命を娶り、若山咋(ワカヤマクヒ)神以下八神あり。

はや-まはり 早廻【名】時を多く費さずして、一まはりすること。

はや-まひ 早舞【名】㊀能(ノウ)にて、歌謠を伴なはず、笛・大鼓(オホツヅミ)・小鼓(コツヅミ)・太鼓を用ひて、調子早く演ずる舞。「融(トホル)」・「海士(アマ)」等の曲にありて、その趣、やや神舞(カミマヒ)に似たり。㊁芝居の囃子の一。能管(ノウクワン)と小太鼓とを用ひて、序の舞・中(チュウ)の舞以上に、極めて早く奏するもの。「忠臣藏」の三段目なる若狹助の出入などの場合、これなり。

はや-まる はや丸【名】〔動〕こほろぎ(蟋蟀)㊀に同じ。或は「はやまろ」と訓むべきものか。〔古語〕藻鹽草「はや丸、異名也」

はやまる 早まる【動四自】急ぎて、事を誤る。はやる。あせる。あわつ。

はや-まろ はや丸【名】〔動〕はやまる(早丸)を見よ。

はや-み 早見【名】事物を、一見して了解し得るやうに記したるもの。便覽。「九星(キウセイ)早見」「星座早見」

はやみ-はま 速見濱【名】〔地〕攝津國の地名なるべし。次條參照。

はやみはま-かぜ 速見濱風【名】速見濱

に吹く風。萬葉「わぎも子を速見濱風大和なる吾(ア)を松の木に吹かざるなゆめ」

はや-みち 早道【名】㊀他に比して早く行き得る路。ちかみち。捷徑。㊁急ぎて路を行くこと。いそぎあし。はやあし。㊂速かに行はるる手段。早く會得せらるる方法。ちかみち。捷徑。㊃飛脚。脚力。太閤記「一里・一里に、早道二人づつ置き候うて」㊄馬術にて、馬を足並早く歩ますること。大友興廢記「次第次第に、早道に移し、手綱の祕術を盡し」㊅大名に仕へし、賤しき役人。〔德川時代の語〕㊆貞享・元祿の頃より行はれし、一種のぜにいれ。前巾著に似たるものならんといふ。續五元集「出入(ダシイレ)やすき早道の錢（といふ句に）紛れずに返す芝居の烟草盆」

はや-みづ 早水【名】早く流るる水。曾丹集「筏おろすあとの早水せきとめて暮れゆく秋を見るよしもがな」

はや-みみ 早耳【名】物事を、早く聞きつくること。

はやみみ-すぢ 早耳筋【名】早耳の人人。

はやみ-みつたか 早水滿堯【名】〔人〕赤穗四十七士の一人。通稱は藤左衞門。淺野長矩に事へて、馬廻たり。弓の名手。元祿十六年死を賜る。年四十。

はやむ 早む【動下二他】早くす。急がす。

はやめ 早【名】㊀早むること。㊁芝居にて、「無間(ムゲン)の鐘」の狂言などに用ふる、三味線入りの鳴物。㊂死を早くせしむること。㊃はやめぐすり(早藥)の略。

はや-め 早目【名】定刻よりすこし早く、著手すること。八笑人「隨分手廻(テマハシ)をして、早目に廻らねえと、まごつくぜ」

はやめ-あし 早足【名】足の運(ハコビ)を早めて行くこと。いそぎあし。一代女「階子上(ハシゴノボリ)のはやめ足」

はやめ-ぐすり 早藥【名】㊀出產を促すために用ふる藥。はやめ。若風俗「產後・產前の名人、銀鍋に蚤藥(ハヤメグスリ)を仕掛けおきぬ」曾我會稽山「生れた跡の早藥」㊁早く死なしむるために飲ます藥。はやめ。

はや-めし 早飯【名】㊀はやぐひ(早喰)に同じ。㊁定刻より早く食事を爲すこと。

はや-もの 早者【名】氣早なる人。はやりを。曾我「武藏・相模のはや者ども」

はや-もの 早物【名】はやがく(早樂)に同じ。(延物(モノベ)に對して) 體源抄「早樂……、今は、早物といふ」

はや-ものがたり 早物語【名】早口にて物語る藝。胸算用「世間の色話、小唄・淨瑠璃・早物語」

はや-もり 早銛【名】鯨の、網より逸せんとする時、突き留むるに用ふる銛。穗は、全部鍛鐵にて、長さ二尺餘、先端菱花をなし、左右に尖りたる突起ありて、扁く、軸は圓く、一尺餘の木の柄を取り附く。

はや-ゆり 早百合【名】早咲の百合、又その花。二代男「森の早百合、三津寺(ミツデラ)の夏菊」

はや-らか 早らか【貌】早きさま。〔古語〕宇治「車……家へ、早らかにやりて」

はやらかす 流行らかす・時花らかす【動四他】次條に同じ。若風俗「四竹(ヨツダケ)といふ事を初めて、世に、これを時花らかし」

はやらす 流行らす・時花らす【動四他】はやるやうにす。はやらしむ。はやらかす。

はやり 流行・時花【名】㊀はやること。時めくこと。時樣。流行(リウカウ)。㊁その世の人の好尙。時世の風潮。流行(リウカウ)。

はやり 早・逸【名】心のはやること。あせること。氣ばや。せっかち。太平記「案内も知らぬ立河を、早りのままに渡しかかりて」同「早りのまま、楯をも銜かず、實具足をも支度せで」

は-やり 刃槍【名】拔身(ヌキミ)の槍。甲陽軍鑑「鞘もはめずして、はやりを持たせ」

はやり-あふぎ 流行扇・時花扇【名】世の中にはやる扇。當世風の扇。一代女「髮結(ユ)うたるさま、或ははやり扇、何にても、しほらしき所に、心を附け」若風俗「今世に美を盡す時、花扇さへ持たず」

はやり-いづ 流行出づ・時花出づ【動下二自】はやり初む。繁昌し初む。織留「いつとなく時花り出で」

はやり-うた 流行唄・時花唄【名】その地方又は時時にはやる俗謠。流行の小唄。

はやり-か 逸りか【貌】㊀輕くして、物深からぬさま。おちつかぬさま。輕率。〔古語〕源氏「聲もはやりかにて言ふやう」同「はやりかに走り書きて」㊁心の進み立つさま。鋭氣を發するさま。〔古語〕增鏡「弓引く道にも猛く、御本性はやりかにおはして」

はやり-かぜ 流行風【名】流行する風邪。流行性感冒。一代女「奧樣、流行風にて御果てなされ」風來六六部集(放屁論)「流行風の皆殺」

はやり-がみ 流行神【名】流行する神。一時信仰・參詣する人の多き神。小町踊「歲德(トシトク)や來る春ごとのはやり神」

はやり-ぎ 早氣・逸氣【名】はやりごころ(早心)に同じ。

はやり-こうた 流行小歌・流行小唄【名】流行する小唄。はやりうた。薩摩歌「流行小歌も、時につれ」

はやり-ごころ 早心・逸心【名】はやる心。勇む心。せきこむ心。〔古語〕源氏「あだめきたるはやり心」

はやり-ごつ 早事つ・逸事つ【動四自】『ひとりごつ(獨ごつ)・まつりごつ(政つ)などと同類の語』はやる(早る)に同じ。〔古語〕十訓「初はゆゆしくはやりごちたりけれども、つひに出だし拔かれけり」

はやり-ごと 流行事・時花事【名】流行する事柄。一代女「世のはやり事を習ひしに、すぐれて踊ることを得たれば」

はやり-ことば 流行言葉【名】流行する言葉。

はやり-ぞめ 流行染・時花染【名】流行する染色又は染模樣。織留「時花染の袷」

はやり-っこ 流行兒【名】㊀全盛なる藝娼妓。うれっこ。㊁世の中にもてはやさるる人。時めく人。うれっこ。寵兒。

はやり-で 流行出・時花出【名】はやりはじめ、又その物。一代男「男は、本奧島(ホンオクシマ)の時花出、女郞も、衣裳つき、しやれて」

はやり-ばなし 流行話・時花話【名】はやりてある話。置土產「はやり咄の受賣」

はやり-ぶし 流行節・時花節【名】はやり唄の節。一代女「流行節を謠ひ」

はやり-むしや 早武者・逸武者【名】心のはやりたる武者。勇み立てる武士。持統天皇歌軍法「若者の逸武者、無二無三に大内へ切り入らんは必定」

はやり-め 流行眼・時花眼【名】流行性の眼病。急性・傳染性の結膜炎の總稱。生玉心中「つい時花眼の顏すれば」

はやり-もの 流行物【名】㊀世の中にはやる物事。二代男「その時、流行物にして」㊁はやりっこ(流行兒)㊀に同じ。〔流行者〕一代男「今のはやり物、長崎屋の蜷川(ニナガハ)」㊂次條に同じ。

はやり-やまひ 流行病【名】世の中にはやる病。傳染性の病氣。はやりやみ。疫病。時疫。若風俗「その秋の初より、京都に、筋骨を痛めるはやり病」

はやり-やみ 流行病【名】前條に同じ。

はやり-を 早雄・早男・逸男【名】心のはやりたる男。血氣さかんなる男。はやもの。盛衰記「はやり男の若者二十五騎」鴉鷺合戰「早雄の若鷲」

はやる 早る・逸る【動四自】㊀心、おのづから進む。おちつかず。いらだつ。せきこむ。狹衣「あらあらしく心をやりて、うちはやりたる人がらなれば」平家「廣みへ出でて、軍をせんと、はやらるれども」㊁勇み立つ。血氣に驅らる。あらだつ。をどりあがる。字鏡「䮲、波也留馬」平治「鹿毛(カゲ)なる馬の、逸り切ったるに」

はやる 流行る【動四自】『前條の語の轉義。即ち世の中に早くひろまり傳はる義』一時、廣く世にもてはやさる。一時、さかんに行はる。時めく。流行(リウカウ)す。繁昌す。大鏡「堀川の攝政のはやりたまひし時に」著聞「天下に、疫病はやりたりけるに」

流行る稻荷は、鳥居でも知れる【句】「尊い寺は門から知れる」に同じ。〔諺語〕

流行る芝居は、外題(ゲダイ)から【句】前條に同じ。〔諺語〕

はや‐わかり 早分 【名】はやがってん(早合點)㊀に同じ。

はや‐わざ 早業・早技 【名】すばやく巧みなるわざ。續世繼「早業をさへ、ならびなくしたまひければ」太平記「早業は、江都が勁捷にも超えたれば」

はや‐わせ 早早稻 【名】わせ(早稻)に同じ。〔古語〕堀太「わぎも子が門田に植うるはやわせの苗代(ナハシロ)水をいかに引かまし」

はや‐わたぶね 早綿船 【名】徳川時代に、綿荷を積みて、大阪より諸方に送りし、速力早き打櫂(ウチガイ)船。ばんぶね(番船)參照。

はや‐わり 早割 【名】次條の略。

はや‐わり‐にしん 早割鰊 【名】ほしにしん(乾鰊)に同じ。

はや‐を 早緒 【名】㊀艪を用ひて、船を漕ぐ時の綱。苧にて造り、下端を、船腹の早緒留に結び附け、上端は、輪にして、艪突(ロツク)に引きかけて、艪の反轉を支ふ。ろづな。ろなは。枕「早緒附けて、のどかにすげたる物の弱げさよ」㊁橇(ソリ)又は車などに附けて引くに用ふる綱。夫木「たゆみつつ橇(ソリ)の早緒も附けなくにつもりにけりな越の白雪」㊂しらべいと(調絲)に同じ。

はや‐をけ 早桶 【名】『はやがけ(早驅)・はやぬの(早布)を見よ』下等なる棺桶。若風俗「わが最後の時、早桶の內へ、この一腰を……入れられしが」

はや‐をけ‐や 早桶屋 【名】早桶を製造・販賣する家、又その人。柳樽「直(ネ)が出來て念佛申す早桶屋」

はや‐をどめ 早緒留 【名】はやを(早緒)㊀を見よ。

はゆ 生ゆ 【動下二自】生(オ)ふ。おひ出づ。萌え出づ。生ず。そだつ。のぶ。萬葉「川藻ぞ枯るればはゆる」

はゆ 映ゆ 【動下二自】㊀照り輝く。光映(ウツ)る。映りあひて、鮮かに見ゆ。枕「紫の指貫(サシヌキ)も、雪にはえて、濃さまさりたる」同「月にはえて、をかしう見ゆる」㊁盛んになる。さゆ。〔榮ゆ〕後撰「怪しくも厭ふにはゆる心かないかにしてかは思ひやむべき」

はゆ 蝕ゆ 【動下二他】しよくす(蝕す)㊁に同じ。〔古語〕紀「蝕盡、ハエツキタルコト」

はゆ 【動下二他】水などをこぼし捨つ。〔豐後國の方言〕

はゆし 映し 【形二】『かゆし(痒し)と、語源相同じ』映(ハ)ゆるさまなり。面を向け難し。おもはゆし。氣はづかし。〔古語〕和泉式部集「おほん返(カヘシ)聞えんもはゆければ、……立ちぬ」

はゆ‐ばな はゆ花 【名】〔植〕たちあふひ(立葵)に同じ。

はゆま 驛・驛馬 【名】『早馬(ハヤウマ)の約』驛馬(エキバ)。はいま。傳馬。〔古語〕萬葉「さぶる子がいつきし殿に鈴掛けぬはゆま下(クダ)れり里もとどろに」

はゆま‐うまや 驛馬驛 【名】驛馬を繼ぎ立つる驛。〔古語〕萬葉「鈴が音のはゆまうまやの堤井(ツツミヰ)の水を賜へな妹がただ手ゆ」

はゆま‐ぢ 驛路 【名】驛馬の通る路。はいまぢ。うまやぢ。驛路(エキロ)。〔古語〕萬葉「驛路に引船渡しただのりに妹が心に乘りにけるかも」

はゆま‐づかひ 驛使 【名】驛馬に乘りて急ぐ使者。はやうち。驛使(エキシ)。〔古語〕記「驛使(ハユマヅカヒ)を、四方(ヨモ)に班(アカ)ちて」

は‐よ 羽餘 【名】矢羽の、末矧(ウラハズ)より上の方へ出でたる部分。

は‐よ 【助】はやに同じ。

ばよねっと (佛 Bayonnette) 【名】『佛蘭西のバヨンヌ (Bayonne) 市にて初めて製造し、又は使用せしに本づく名なるべしといふ』小銃の先端に附くる劍。銃劍。

はら 原 【名】㊀平にして廣き土地。㊁のはら(野原)に同じ。㊂〔地〕駿河國駿東郡にある町。沼津町の西方一里二十七町。舊東海道五十三驛の一。舊稱、浮島が原の宿(シユク)。

はら 腹 【名】『もと前條㊀㊁の語と同義。卽ち身體中、最もひらたく廣き所の義』㊀軀幹の一部。橫隔膜と骨盤との間にありて、胃・腸などを包藏する處。㊁母體の、子のやどる處。胎內。空穗「賤しき人の腹に生まれたまへる帝の御子」㊂その人を生みたる婦人、又その婦人より生れたる人。大鏡「女君は、……藤(トウ)三位の腹に出でおはしましたりしを」同「二郎君、……大藏卿の女の腹なり」㊃しぞく(氏族)に同じ。紀「吉備上道臣等聞ニ朝作ヒ亂、思救ニ其腹所ヒ生星川皇子ニ」㊄腹のくだること。はらくだり。下痢。丹波與作「腹や痲疹(ハシカ)の用心ぢや」㊅こころ。かんがへ。量見。〔肚〕伊勢「この歌は、あるが中におもしろければ、……腹にあぢはひて」八笑人「どうして、狐と見せる。それやあ、腹にあるのさ」㊆度量。膽力。柳樽「肌を脫ぐ人は大きな腹を見せ」㊇腹立つこと。うらみ。いかり。「腹が癒ゆ」㊈物の側面の主要部。祝詞「𤭖(ミカ)のへ高知り、𤭖の腹滿て雙(ナラ)べて」盛衰記「築地(ツイヂ)の腹などに造りたる、犬の家」雅筵醉狂集「いかばかり魚釣りえてか浦風にあきたり歸る船の帆の腹」㊉琴の胴の裏面なる、中空なる所。⑪〔理〕『英 Loop』定常波の、振幅最大なる部分。たに。(節(セツ)に對して)せっせん(節線)參照。

腹惡(ア)し 【句】心直からず。根性(コンジヨウ)よからず。はらぐろし。源氏「腹あしくて、物ねたみうちしたる」

腹一文字(イチモンジ) 【句】腹を一の字形に切るさまにいふ語。謠曲 朝長「腹一文字に搔切って」

腹一杯 【句】㊀飽き足るほど飲食するさまにいふ語。たらふく。醒睡笑「腹一っぱい飲み」㊁十分滿足するまでに事を爲すさま。存分。

腹がいる 【句】「腹が居(ヰ)る」の誤。曾根崎心中「爪先まで斬り刻んでも、これで腹がいるものか」

腹が北野の御神木(ゴシンボク) 【句】次條に同じ。膝栗毛「此所で一杯やらかしは、どうだ。ちと腹が北野の御神木だ」

腹が北野の天神 【句】次條に同じ。

腹が北山 【句】『きたやま(北山)㊂を見よ』空腹を感ずるに至れり。

腹が北山の金閣寺 【句】前條に同じ。箱根草「腹が北山の金閣寺だ」

腹が下(クダ)る 【句】下痢す。くだる。油糟「跡なる者よしばしとどまれ(といふ句に)俄かにし腹の下るに草臥(クタビ)れて」

腹が黑い 【句】はらぐろし(腹黑し)に同じ。

腹が透く 【句】空腹となる。飢う。腹が減(ヘ)る。

腹が据(スワ)る 【句】心おちつきて、恐れず。度胸すわる。膽がすわる。

腹が立つ 【句】はらだつ(腹立つ)に同じ。(「腹が居(ヰ)る」に對して)狂言(菊花)「私も、腹が立ちまして」

腹が立つなら、親を思ひ出せ 【句】腹の立ちたる時には、親を思ひ出せば、自然と、輕擧盲動を愼むに至るものなり。〔諺語〕雙蝶蝶曲輪日記「わしも、ほんの父(トト)樣があるげなれど、つひに逢ふ事もござんせぬ。腹の立つ時は、思ひ出すが、よい藥」

腹が出來る 【句】㊀「腹を拵(コシラ)ふ」を見よ。十分に食ひて滿腹す。㊁鍛鍊を積みて、膽力生ず。

腹が無い 【句】膽力すわらず。深き思慮なし。

腹が張る 【句】㊀飲食に飽く。腹が膨(フク)る。滿腹す。和合人「飯(メシ)なら、腹が張り、酒なら醉ひでもするが」㊁飲食物停滯して、快からず。

腹が膨(フク)る 【句】「腹、膨る」を見よ。

腹がぺこぺこ 【句】甚だ空腹なる形容。**はらぺこ**(腹ぺこ)參照。〔俚語〕

腹が減(ヘ)っては、軍が出來ず 【句】空腹にては、何事も爲しえず。〔諺語〕

腹が減(ヘ)る 【句】「腹が透(ス)く」に同じ。

腹がむづかしくなる 【句】姙娠す。はらむ。一代男「これにも馴染(ナジ)みて、腹むづかしくなると申せば」一代女「臨に男を拵へ、腹がむづかしうなりなば」

腹がゆるむ 【句】腹下(ハラクダリ)にかかる。

腹からの 【句】うまれつきの。生寫朝顏話「そちも、腹からの非人でもあるまい」繼娘昔八丈「もと、私(ワシ)も、腹からの町人でもない」

腹が分る【句】眞意を知る。

腹が居(ヰ)る【句】『はらいせ(腹いせ)・「腹がいる」を見よ』怒晴れて滿足す。いきどほり靜まる。(「腹が立つ」に對して)平家「梶原、この言葉に腹がゐて、……咄と笑うてぞ除(ノ)きにける」壽の門松「ぶちのめしても、腹癒(ヰ)ねど」

腹十文字【句】腹を十文字に切るさまにいふ語。謠曲(錦戸)「腹十文字にかき切り」

腹高し【句】「腹膨(フク)る」㊂に同じ。枕「老いたる者の、腹高くて喘ぎありき」

腹に一物(イチモツ)【句】次條の略。

腹に一物(イチモツ)あり【句】心中に、深きたくらみあり。

腹に据う【句】忍びこらへて、腹を立てず。我慢す。雪女五枚羽子板「二郎、腹に据ゑかね」

腹に足らず【句】㊀食慾を滿すを得ず。㊁滿足するまでの結果を得ず。八笑人「實は、酒屋の內ばかりをひっ擔いだ所が、どっと腹にも足りず」

腹に設く【句】或女に、子を孕ます。その女の腹より生れしむ。盛衰記「母は、建春門院の小大進(コダイジン)の局が腹に儲けたり」

腹に宿(ドヤ)す【句】胎內に子を持つ。「はらむ。」

腹に宿(ドヤ)る【句】胎內に子がでく。はらむ。著聞「御母の夢に、……、願はくば、暫く御腹に宿らん、……と云ひて」

腹念佛【句】「世帶(セタイ)佛法、腹念佛」に同じ。

腹の中(チウ)【句】「腹の中(カナ)」に同じ。蜻蛉「わが腹のうちなる蛇(クチナハ)ありきて、肝を食(ハ)む」

腹の皮【句】㊀腹の表皮。㊁『次條の略』はらすぢ(腹筋)㊁に同じ。傾城酒呑童子「やれ、腹筋や、腹の皮。鬼の腕を切ったるが、何程の高名ぞ」

腹の皮が痛い【句】次條の語を强めていふ語。八笑人「寔に腹の皮が痛い程をかしうござりました」

腹の皮が縒(ヨ)れる【句】次條に同じ。

復の皮を縒(ヨ)る【句】「腹筋(ハラスヂ)を縒る」に同じ。

腹の足(シタ)【句】空腹を免るるための食料。和合人「蕈(コタバ)呑んだって、腹の足になりもせず」

腹の中(ナカ)【句】㊀腹の內部。蕪村「腹の中へ歲は脫けけらし種ふくべ」㊁心の中。胸中。肚裏。心底。冥途飛脚「腹の中から馴染み、賴もしい男」

腹の中(カナ)より【句】「腹から」に同じ。織留「士農工商に限らず、腹の中より備はりし家業をおろかにせまじきなり」

腹の蟲【句】㊀〔動〕くわいちゆう(蛔蟲)に同じ。㊁『むし(蟲)㊅を見よ』腹立ちたる感情。和合人「腹の蟲へ一活入れるなぞ」

腹の蟲が承知せず【句】癪にさはりて、堪忍出來ず。業腹(ゴウハラ)なり。

腹の蟲の居所(ヰドコロ)が惡(ワル)い【句】癪にさはる。腹だたし。

腹の蟲が治(サヲ)まらず【句】「腹の蟲が承知せず」に同し。

腹の蟲を押へきれず【句】『むしおさへ(蟲押)を見よ』前條に同じ。

腹の病【句】疝・癪・癥瘕(カメバラ)等、胃・腸の病の總稱。消化器病。字鏡集「痢、ハラノヤマヒ・クソヒリノヤマヒ」

腹は海道【句】腹は、食物の、通路なること、人の往來する道の如し。〔諺語〕

腹は借物(カリモノ)【句】母親の腹は、一時借りたるものに過ぎずして、生れたる子の貴賤等は、父親の如何によるものなり。〔諺語〕夕霧阿波鳴渡「腹は假物、武士の胤と、寵愛に逢ふと聞くにつけ」

腹膨(フク)る【句】㊀腹、大きくなる。和名「瘨、波良不久流。腹滿也」宇治「腹ふくれて、脛は細くありけるが」㊁飮食に飽く。腹が張る。滿腹す。㊂孕む。姙娠す。腹高し。㊃『東坡の詩に「忍レ事腹如レ囊」とあり』言ふべき事を忍びて默するがために、心中欝積して、快からず。大鏡「おぼしき事言はぬは、げにぞ腹ふくるる心地しける」徒然「おぼしき事言はぬは、腹ふくるるわざなれば」

腹太(フト)し【句】㊀腹膨れてあり。滿腹なり。㊁「肝(キモ)太し」に同じ。

腹も身の內【句】『腹も身體の一部分なる義』貪り食へば、病の原因となる故に、飽食すべからず。〔諺語〕

腹を合はす【句】互に心を合はす。ぐるになる。同腹になる。

腹を痛む【句】わが腹より生む。

腹を入る【句】氣力を込む。一所懸命に行ふ。八笑人「さう氣拔(ケヌ)がしてゐていけるものか。腹を入れねえと、見とむねえもんだぜ」

腹を抱(カカ)ふ【句】吹き出して笑ふ。をかしさに堪へず。甲陽軍鑑「御腹をかかへたまふほど笑はせられ」

腹を貸す【句】胎內にやどす。はらむ。曾我會稽山「妾が腹貸した京の小四郎といふ種がはりの大惡人」薩摩歌「腹を借さぬ母ゆゑに」

腹を借る【句】母の胎內に宿る。薩摩歌「腹を借った母樣の十三年忌の墓參」俗曲(釜淵雙級巴)「繼子憎むは世界の大法、とかく息子が腹借らぬ誤」

腹を切る【句】㊀切腹(セップク)す。㊁「腸(ハラワタ)を切る」に同じ。續古事談「その座の人人、腹を切りて笑ひあひたりける」

腹を下(クダ)す【句】「腹が下だる」に同じ。油糟「合はする度にひちめきぞする(いふ句に)鷄があはれ腹をや下すらん」

腹を拵(コシラ)ふ【句】食事を濟ませて、腹の減らぬやうにす。

腹を肥す【句】十分に食を取る。續膝栗毛「さるにてもかくひもじさにあやまった稻荷山にて腹をこやせり」

腹を剖(サ)きて、珠を藏む【句】『唐書の太宗紀に「太宗曰、西域賈胡得二美珠一、剖レ腹而藏レ之、愛レ珠而不レ愛二其身一也」とあるに本づく』財を愛するがために、その身を害す。〔諺語〕

腹を探る【句】相手の意向を、それとなく知らんとす。

腹を据う【句】㊀怒を晴らす。立腹を中止する。量見す。著聞「安からずおぼえしかども、……只今こそは、日頃の腹をすゑはべらめ」膝栗毛「北八、面目なくしよげてゐるゆゑ、親父(オヤヂ)、これにて腹をすゑる」㊁覺悟を定む。決心す。「腹を据ゑてかかる」

腹を立つ【句】怒る。はらだつ。立腹(リップク)す。

腹を立て据(ス)う【句】腹だたしさを通り越して、怒るにも怒られず。盛衰記「よに咲(ワラ)ふべき事なれども、放免どもは、腹を立て据ゑて、咲はず」

腹を仕る【句】「腹を切る」㊀の謙語。切腹(セップク)仕る。甲陽軍鑑「御聞きなくば、御前にて、腹を仕るべく候ふ」

腹を減(ヘラ)す【句】腹のへるやうにす。炭俵(荆口)「芋喰の腹減しけり初しぐれ」

腹を乾(ホ)す【句】腹具合を癒すために、飮食を節減す。南瓜話「腹の下るにほしたるがは、腹をよき」

腹を召す【句】「腹を切る」㊀の敬語。切腹(セップク)したまふ。平治「叶はぬ所にて御腹召されんこと、何の義か候ふべき」太平記「御腹召され候はば」

腹を病(ヤ)む【句】胃・腸などの病に罹る。源氏「腹を病みて、いとわりなければ」

腹を割る【句】㊀腹を剖く。割腹す。㊁胸中をうち明く。眞意を告ぐ。

腹を抉(クエ)る【句】㊀刃物を、腹部に突き立てて、くりまはす。㊁相手の胸中を、手きびしく言ひあつ。

痛くない腹を探らる【句】嫌疑を受く。邪推せらる。

はら 大角【名】古、軍用に吹き鳴しし樂器。形、獸角に似たりと。**くだ**(小角)參照。紀「大角、ハラ」字鏡「萩、波良。又、久太」

はらの笛【句】前條に同じ。和名「大角、波良乃布江」

はーら 發剌【名】**ごろくのはら**(五六發剌)を見よ。

はーら 爬羅【名】㊀爪にて搔くことと、網を張ることと。㊁隱れたるものを廣く探し、あばき出だすこと。

ばら【名】㊀ばらばらにて、揃はぬこと。

二**ばらせん**（散錢）の略。

ばら 茨【名】一いばら（茨）一に同じ。二〔植〕のいばら（野薔薇）に同じ。〔薔薇〕一茶「茨の花此處を跨げと咲きにけり」

ばら【名】〔植〕ばらん（葉蘭）に同じ。

ばら 腹【接尾】その人の腹より生れたる意。源氏「典侍（ナイシノスケ）ばらの君を、切（セチ）に迎へて」

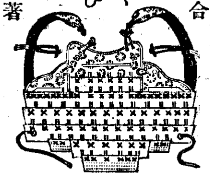
ばら 原【接尾】『原は假借の文字。ばらばらの義ならん』人に關する名詞に添へて、複數を表はす語。たち。ども。等（ラ）。「殿ばら」「奴（ヤツ）ばら」「雜人（ザフニン）ばら」

はらあか-あぶ 腹赤虻【名】〔動〕虻の一種。形小くして、腹部の兩側赤し。

はら-あしげ 腹葦毛【名】馬の毛色の一。全體白くして、腹部のみ葦毛なるをいふなるべし。今昔「腹葦毛なる馬」

はら-あぢ 腹味【名】はらぐあひ（腹具合）に同じ。鶉衣「盛親（シヤウシン）僧都の、芋の腹あぢ、あるは、麥めし・おなら茶の過食」

はら-あて 腹當【名】一鎧の一種。腹、總體板目革を綴ぢて作り、袖も草摺も無く、腹部を被ひ、背にて合ふやうに作れるもの。鎧の下に著用し、又、雜兵（ザフヒヤウ）の、身輕に裝ふ時に用ひたり。はらまき。盛衰記「弓よく射る者どもは、甲（カブト）を著ざれ、腹卷・腹當・胴丸など著て」二はらおび（腹帶）一に同じ。三はらがけ（腹掛）を云ふ。〔京都・大阪の語〕


（はらあて一）

はら-あはせ 腹合【名】一向ひ合ふこと。對坐。二次條の略。

腹合の帶【句】ちろやおび（晝夜帶）に同じ。

はらあはせ-おび 腹合帶【名】前條に同じ。

はら-あんばい 腹鹽梅【名】はらぐあひ（腹工合）に同じ。俳諧新選（李流）「斷食の腹鹽梅や夜の霜」

はらい-ざい 波羅夷罪（梵Pārājika）【名】〔佛〕戒律中の最も重き罪。沙石集「波羅夷罪の、佛子の數に入らぬが如し」

ばら-いず【名】〔植〕へびのぼらず（蛇不登）に同じ。

はら-いせ 腹いせ【名】『腹愈（シイ）の義とも、又、腹居せにて、ゐの假名なりともいふ。「腹が居（キ）る」參照』怒をはらすこと。川中島合戰「腹いせには、神主始め、禰宜（ネギ）めら、殘らず切って」

はらいそう 波羅葦增雲（西・葡 Paraiso）【名】〔基〕ぱらだいす二に同じ。〔室町時代の末及び江戸時代の語〕天竺德兵衞郷鏡「死後昇天、はらいそう、はらいそう」

はら-いた 腹痛【名】次條に同じ。浮世風呂「腹いたて、ずつないはいな」

はら-いたみ 腹痛【名】大小腸の痛むこと。はらいた。腹痛（フクツウ）。

ばら-いちご 薔薇懸鉤子【名】〔植〕薔薇科に屬する落葉灌木。幹は細く、葉は羽狀複葉にして、五箇乃至七箇の小葉より成り、各小葉は廣披針形をなし、枝・葉共に小刺を具ふ。夏、白色・五瓣の花、枝端に開く。高山に自生す。ふくべらいちご。

はらいどんどん-ゑまき 破來頓等繪卷（祓頓等繪卷）【名】〔美〕はらひどんどんゑまき（祓頓等繪卷）に同じ。

ばら-いんろう ばら印籠【名】せいべゑ（淸兵衞）一を見よ。

は-らう 波浪【名】なみ。波濤。

は-らう 耙撈【名】馬に牽かしめ、耕作地の表土を攪拌して、土塊を粉碎し、地面を平均にし、種子及び肥料を、土中に沒入せしめ、兼ねて、草を除くに用ふる農具。馬耙。耖耙（サウハ）。

は-らう 破牢【名】はごく（破獄）に同じ。

はら-おこし 腹起【名】土手などの土の崩るるを防ぐ柵の面に、杭の轉倒を防ぐために、横に、一列もしくは、一定の間隔を取りて、數列に取り附けたる木。

はらう-じん 波浪神【名】『英 Figure head』船首に刻みたる飾の像。航行の際、船を護るとて、多くは海もしくはその船に緣故ある人物の、全身又は半身の像、或は鳥獸の形狀などを刻む。

はら-おび 腹帶【名】一人の腹を卷き括る帶。はらまき。はらて。おびあ。和名「勒肚巾、波良萬岐。一云、腹帶」三いはたおび（岩田帶）に同じ。二馬の腹を括る帶。はるび。和名「腹帶、波良於比。馬腹帶也」

腹帶の地藏【句】孕める女の腹帶をなす時、安產を祈る地藏菩薩。子安地藏。若風俗「腹帶の地藏に代參（ダイサン）せし女もあり」

腹帶の明神【句】孕める女の、腹帶をなす時、安產を祈る明神。本朝二十不孝「子安の地藏に祈り、腹帶の明神に宿願懸けしも、效なく」

はら-か 腹赤・鯍・鰚【名】〔動〕『腹赤（ハラアカ）の略。鯍も鰚も和字』ます（鱒）に同じとも、にべ（鮸）に同じともいふ。〔古語〕和名「鯍魚、波良加」江次第抄「腹赤鱒、魚也。內膳司奏レ之」年中行事歌合「初春の千代のためしの長濱に釣れるはらかもわが君のため」

腹赤の奏【句】古、正月元日に、筑紫より奉れる腹赤を、內膳司より奏上せし公事（クジ）。景行天皇、筑紫國宇土郡長濱に行幸ありし時、海人、これを得て、天皇に獻り、後、天平十五年正月、太宰府またこれを獻じてより、每年の例となれり。建武年中行事「元日の節會、……七曜の御曆（ゴリヤク）、はらかの奏など」

腹赤の使【句】はらかの贄（ニヘ）を獻る使。盛衰記「筑紫より鯍（ハラカ）の使の上る」

腹赤の贄（ニヘ）【句】古、正月元日の節會（セチヱ）に、筑紫國宇土郡長濱より、供御（ゴゴ）の料に獻りし腹赤。〔古語〕新六「四つの海浪靜かなる御代なれば腹赤の贄も今日そなふなり」公事根源「はらかの贄とて、魚を筑紫より獻るなり」

腹赤を奏す【句】腹赤の奏を行ふ。盛衰記「年の始なりけれども、氷（ヒ）の様（タメシ）も參らず、鯍も奏せず」

ばら-がき ばら搔【名】一所きらはず、無暗に引き搔くこと、又その痕。八笑人「衣類・手足のわかちもなく、ばら搔になり、のたり廻って」同「手をばら搔にされた」二亂暴なる振舞。むやみ。無作法。

はら-がけ 腹掛【名】胸部より腹部までを被ひて、背にて約し、又は下部を、股引のやうにして、頸に掛けて結ぶ、短き衣。はらあて。俳諧古選（湖十）「腹掛は母の敎の寢卷かな」

はらか-の-そう 腹赤の奏【句】はらか（腹赤）の條下を見よ。

はら-かた【名】〔動〕このしろ（鰶）を云ふ。〔土佐國の方言〕

はら-がはり 腹變【名】はらちがひ（腹違）に同じ。（胤變（タネガハリ）に對して）長町女腹切「腹がはりの兄弟」

はらかん 叭喇唬【名】『蘭語ならん』德川時代に、外國より傳來せし、一種の小銃。石火矢の類ならん。大阪物語「城の內より、はらかんを二丁並べて放しければ」

はら-から 同胞【名】一同母の兄弟・姉妹。同腹。同胞（ドウハウ）。二兄弟・姉妹。同胞（ドウ）。伊勢「いとなまめいたる女はらから住みけり」

はらから-おもひ 同胞思【名】兄弟・姉妹の相親しむこと。落窪「子どもの心を見るに、はらからおもひせず」

はら-ぎたなし 腹穢し【形二】心中、潔からず。根性わろし。はらぐろし。源氏「まま母の腹ぎたなき昔物語」

はら-ぎば 腹ぎば【名】芝居の狂言にて、宙返をして、腹這になること。

はら-きり 腹切【名】自ら腹を切ること。切腹（セツプク）。割腹。屠腹。太平記「腹切の最後の盃にて候へば」曾我會稽山「時切（トキギレ）の御使仕損じ、腹切が見たいな」

はらきり-おび 腹切帶【名】緋の博多帶。衣食住記「天明頃、緋博多、世に腹切帶と稱す」

はらきり-がたな 腹切刀【名】腹を切るに用ふる短刀。手習鑑「子に死ねといふ腹切刀」

はらきり-ぐも 腹切蜘蛛【名】〔動〕あなぐも（穴蜘蛛）に同じ。

はら-く 腹下【名】はらくだり（腹下）の略。〔畿內の俚語〕

はら-ぐあひ 腹工合【名】胃・腸の狀態にもとづく感じ。おなかごころ。はらもち。はらあぢ。はらあんばい。

はら-くさ はら草【名】〔植〕たかとうだい（高燈臺）二に同じ。字鏡「大戟、波良草」

はら-くだし 腹下【名】㊀次條に同じ。㊁藥劑を用ひて、便通をよくすること、又その藥劑。

はら-くだり 腹下【名】腸を病みて、便通過度にくだること。はらっくだり。下痢。瀉痢（シャリ）。

はらく-こ 破落戸【名】**ならずもの**(不成者)に同じ。

はら-くじり 腹抉【名】敵の腹に頭をあてがひて倒す技。著聞「相撲（スマフ）、……敵の腹へ、頭を入れて、必ずくじりまろばしければ、……、腹くじりとぞいひける」

ぱら-ぐらふ（英Paragraph）【名】文章の中の一節・一句・一段又は一項、又、新聞中の、標題無き、極めて短き記事。

はら-ぐろ 腹黑【名】はらぐろきこと。へそぐろ。平家「昌俊においては、全く御腹黑は思ひ奉らぬ候ふ」

はら-ぐろし 腹黑し【形二】心だてよからず。心性善良ならず。著聞「あはれ安からぬものかな。腹黑きむしにくらはれぬ」

ばら-くわ 薔薇科【名】〔植〕**いばらくわ**(薔薇科)に同じ。

ぱらぐわい（英Paraguay）【名】〔地〕南亞米利加洲の一國。首府を、アスンシオン(Asuncion)といふ。

ぱらぐわい-ちや パラグワイ茶【名】〔植〕**まて**に同じ。

ばら-げ 散毛【名】㊀毛の立ちて、ばらばらとなること、又その毛。㊁紡織の、未だ工程を加へざる毛。わたげ。

はら-けい 原敬【名】〔人〕**はらさとし**(原敬)を見よ。

はら-げい 腹藝【名】㊀輕業などにて、仰臥せる人の腹の上にて、種種の藝を演ずること。㊁俳優などが、自己の扮する人の意中を、科（シグサ）・白（セリフ）を用ひず、思入（オモヒイレ）のみにて表はすこと。㊂女が、色仕掛にて、男をたぶらかすこと。〔俚語〕

はらけい-しゆぎ 原敬主義【名】**はくししゆぎ**(白紙主義)に同じ。

ばらけ-がみ 散毛髮【名】㊀毛を振り亂したる髮。みだれがみ。曾我虎が磨「女のならひ、ばら毛髮も恐がましく」㊁昔、俳優が、芝居に在る時に結びし、簡單なる髮。もと樂屋入を急ぐによりて起り、いつしか定例となりしなり。

はらけし 散けし【形二】はららきてあり。ばらばらに散るさまなり。〔古語〕字鏡「毳、細草毛也。波良介志。又、智留」

ばらげ-ぞめ 散毛染【名】ばら毛㊁を染むる工程。

はら-ける【動下一自】『腹蹴るの義か』陰莖、勃起す。〔薩摩國鹿兒島の方言〕

はら-こ 腹子【名】**はららご**(鮞)に同じ。

はら-こき【名】腹を立つること、又その人。大藏流狂言(不腹立)「おのれが名は、はらはらの腹こきか」

はら-ごしらへ 腹拵【名】腹のすかぬ用意として、食を取ること。

はら-ごなし 腹熟・腹消化【名】食後、運動などして、消化を助くること。はらっこなし。浮世風呂「腹こなしに、鞠を初めたでごっす」

ぱらごむ-の-き パラ護謨樹【名】〔植〕**ごむのき**(護謨樹)㊁に同じ。

はら-ごもり 腹籠【名】㊀胎兒の、胎内に在りて、未だ生れぬこと。胎中。胎內。字鏡集「胎、ハラゴモリ・ハラム」㊁父の死にし時、未だ母の胎內にありて、生れざりしこと。わすれがたみ。遺腹。㊂腹中に籠め置けるもの。「腹ごもりの觀音」

はら-ざいちゆう 原在中【名】〔人〕畫家。名は致遠、字は子重、臥遊とも號す。京都の人。明人の筆意を學び、後、一家を成し、有職の畫を善くす。天保八年歿す。年八十八。

はら-さいひん 原采蘋【名】〔人〕詩人。豐後國秋月藩の儒員原古處の女。容姿端麗、英敏にして、詩賦を善くす。山陽と贈答の詩を以て、世に知らる。

ばら-さがりふぢ 散下藤【名】紋所の一。下り藤の花の、まばらなるもの。

はら-さとし 原敬【名】〔地〕政治家。舊盛岡藩士。佛蘭西語を東京に修め、司法省の法學校に學ぶ。新聞記者より轉じて、官界に入り、外務次官・遞信・內務大臣となり、終に總理大臣に至る。その間、政友會總務委員より總裁となり、三十五年以來、郷里より衆議院議員に選出せらる。大正十年十一月四日、東京驛內に刺さる。六十六。

はら-さんざ 腹さんざ【副】**さんざっぱら**(さんざっ腹)に同じ。浮世風呂「てんてんは、腹さんざ朝寢をして」

はら-じやう 原城【名】肥前國南高來（ミナミタカキ）郡口之津（クチノツ）村の南崖、早崎の高地にありし城。もと有馬氏の居所にして、天草・島原の亂の時、切支丹一揆、これに據れり。一名、有馬城。

ばら-しやまら 筏羅遮摩羅・筏羅遮末羅【名】〔佛〕**しやまら**(遮摩羅)を見よ。

はら-じゆ はら樹【名】〔植〕**とちのき**(七葉樹)に同じ。

ぱら-しゆうと 落下傘（佛Parachute）【名】『Paraは防護の義、chuteは落下の義』飛行中の飛行機・飛行船の搭乘者などが安全に落下するに用ふる、蝙蝠傘の如き形の物。落下傘（ラクカサン）。

はら-じろ 腹白【名】㊀腹の白きこと、又その物。源順馬名合「わたつみの腹白」㊁指貫（サシヌキ）の括の組の一。白組・紫組二筋を、差入れて、長く餘し、引き出して、封結（フウスビ）の如く組みたるもの。東鑑「紫御奴袴被レ括二腹白一」

腹白になる【句】あふのけになりて、腹の白き所をあらはす。著聞「蛙、數千集りて、……或は食ひ殺され、或は片息（カタイキ）して、腹白になりてありけり」

はらじろ-かげ 腹白鹿毛【名】馬の毛色の一。鹿毛（カゲ）の、腹部の白きもの。

はら-す 晴す・霽す【動四他】㊀晴るるやうにす。狂言(祐善)「これなる宿（ヤド）に立ち寄り、時雨をはらさばや」㊁散し除きて、快くす。曇なきやうにす。はれやかならしむ。はるく。はるかす。はるす。謠曲(小袖曾我)「胸の烟を、富士おろしに晴して、月を淸見が關に」

はら-す 腫す【動四他】腫るるやうにす。腫れしむ。

ばら-す【動四他】㊀ばらばらにす。毀ち散す。㊁賣り拂ふ。うりしろなす。㊂斬り殺す。殺害す。㊃人の嫌ふ事を、わざと言ひ觸らす。祕密を、他に洩す。

はら-すぢ 腹筋【名】㊀腹部の筋。㊁『「腹筋を縒る」の略』をかしさに堪へぬこと。腹の皮。笑止。醒睡笑「きと手をつくね、言ひける事こそ、腹筋なれ」百日曾我「しやらくさし、腹筋千萬、三度や五度の高名を、珍しさうに」

腹筋を切る【句】「腹筋を縒る」に同じ。鷹筑波「暑き時分の能（ノウ）のをかし(といふ句に)早苗取る小田の腹筋切もぐさ」

腹筋を馳せ切る【句】全速力を出して馳する形容。義經記「宿の馬の腹筋馳せ切って、雜人（ザフニン）めらが追ひつかん」

腹筋を縒（ヨ）る【句】をかしさに堪へぬ形容。絕倒す。抱腹す。腹を切る。腸（ハラワタ）を切る。腹の皮を縒る。俳家奇人談(季吟)「腹筋をよりてや笑ふ絲ざくら」

ばらすと（英Ballast）【名】㊀**そこに**(底荷)に同じ。㊁輕氣球の砂囊。㊂鐵道の枕木を固定せしめ、汽車の動搖を防ぐために、軌道の下に敷き詰むる小石又は割石。㊃人格を鞏固ならしむるための經驗。

ばら-ずみ 散炭【名】俵に詰めず、ばらばらに賣る炭。

ばら-せん 散錢【名】錢緡（ゼニサシ）に貫してなき錢。

はら-そうゑもん 原總右衛門【名】〔人〕**はらもとき**(原元辰)に同じ。

はら-ぞんぶん 腹存分【副】**ぞんぶん**(存分)に同じ。持統天皇歌軍法「腹存分言ひ破るに、何事あらん」

ぱら-そる（英Parasol）【名】『Paraは防護の義、solは太陽の義』㊀婦人用の日除（ヒヨケ）の蝙蝠傘。普通の蝙蝠傘よりは小くして、輕し。㊁前記の蝙蝠傘を翳したる婦女子。

はら-だいこ 腹太鼓・腹太皷【名】馬の陰莖の勃起して、おのづから腹をたたくこと。**でんでん**參照。〔俚語〕謠曲「馬や、馬や、豆一升やるから、腹太鼓たたけ」

ぱらだいす（英Paradise）【名】㊀**えてん**の美稱。樂園。樂土。㊁〔基〕神に救はれ

たる人の靈魂が、復活を得るまで滯留すといふ國土。天國。樂園。樂土。はらいそう。㊁快樂・幸福に滿ちたる境界。樂園。樂土。

はら-たか【名】〔動〕さっぱに同じ。

はらだ-かひ 原田甲斐【名】〔人〕はらだむねすけ(原田宗輔)に同じ。

はら-だこ 腹蛸【名】〔動〕蟰蛸(スクモムシ)の、土中にて蛹(サナギ)となれるもの。にしむけ。

はら-だたし 腹立たし【形二】腹立つべくあり。いきどほろし。源氏「腹だたしくなりて、にくげなる事どもを言ひ」

はら-だち 腹立【名】はらだつこと。いかり。立腹。腹立(リップク)。丹波與作「思ひ込んだる腹だちの、をさな心の念力は」

はらだち-ごんべゑ 腹立權兵衞【名】〔動〕かまきり(螳螂)を云ふ。〔東國の方言〕

はらだち-ごゑ 腹立聲【名】腹立ちて發する聲。俳諧古選(李由)「鳩部屋に腹立聲や春の雨」

はらだち-さ 腹立さ【名】腹立つ程あひ。謠曲(熊坂)「あの冠者に切らるる事の腹立さよ」

はらだち-じやうご 腹立上戶【名】おこりじやうご(怒上戶)に同じ。

はらだち-なみだ 腹立淚【名】腹立たしさに出づる淚。くやしなみだ。重帷子「わっとばかりの腹立淚」玉藻前曦袂「謀られたが口惜しいと、身をふるはして腹立淚」

はらだち-まぎれ 腹立紛【名】腹だつに任せて、事をすること。淀鯉出世瀧德「駕籠持って來いと、打乘るも腹立まぎれ」

はら-だつ 腹立つ【動四自】怒る。いきどほる。ごたつく。腹が立つ。腹を立つ。立腹(リップク)す。

はら-だつ 腹立つ【動下二自】前條に同じ。

はら-たてず 不腹立【名】㊀腹を立つることなきこと、又その性質の人。㊁能(ウ)の狂言の一。或庄屋、月行事と相談の上、村の草堂に僧を迎へんとして、行脚の僧に邂逅し、その名を問ふに、僧、名無きに、當惑の餘、「腹立てずの正直坊」といふ由答へたれど、二人に、なほ幾回も、その名を問ひただされて、思はず腹を立て、庄屋の叱斥を蒙りし由を記せるもの。

ばら-だま 散玉【名】さんだん(霰彈)に同じ。〔俚語〕

はらだ-むねすけ 原田宗輔【名】〔人〕仙臺藩主伊達家の老臣。甲斐と稱す。執政兵部宗勝と謀りて、種種の奸計を運らし、遂に幼主龜千代を害せんとす。老臣伊達宗重に知られて、果さず。事、幕府に聞えしかば、宗輔免れざるを知り、寛文十一年三月二十七日、法廷に於て、宗重を刺し、己も亦殺さる。年五十三。

ぱらぢうむ (英 Palladium)【名】〔化〕南米ブラジル地方に、白金の鑛石又は金との合金をなして產する稀有金屬元素。銀白色にして、展延性を有す。比重一一・五乃至一一・九、融點凡そ一五〇〇度。多量の水素を吸收する性を有し、粉末狀のものは、濃厚なる鹽酸・硫酸・硝酸等に溶解す。

はら-ちがひ 腹違【名】兄弟・姉妹の、父は同じくして、母の異なること、又その兄弟・姉妹。ことはら。はらがはり。異腹。(胤違(タネチガヒ)に對して)

ぱら-ちふす パラ窒扶斯 (羅 Paratyphus)【名】九種傳染病の一。パラチフス菌によりて發し、症狀、腸チフスに似、通常、輕症なるもの多し。

ぱらちふす-きん パラ窒扶斯菌【名】〔植〕パラチフスの病原菌。西曆一八九六年、佛蘭西のアシャアル(Achard)・ベンワオド(Bensaude)の發見に係る。性狀ほぼ腸チフス菌に似、A・Bの二型あり。前者は比較的稀なれども、後者は蔓延して、各國、その發生を見ざるなし。

はら-つぎ 腹接【名】臺となるべき樹木の側面に施す接木(ツギキ)。

ばらっく (英 Barrack)【名】㊀〔兵〕軍隊の休養に充つる急築・粗造の屋舍。廠舍。㊁粗末なる假小屋。粗造の假ずまひ。

ばら-つく【動四自】㊀雨・霰など、ばらばらと降り來る。はらめく。芭蕉「秋もはやばらつく雨に月の形(ナリ)」㊁ばらばらに亂れ散る。はらめく。吉野都女楠「顏にばらつく亂髮」俗曲(八重霞浪花濱荻)「棚な櫛箱、ちよっと下(オロ)して下さりませ。この髮がばらついて、目の上が重うござんす」

ばらっく-しき バラック式【名】バラック㊀の形式。

ばらっく-せいくわつ バラック生活【名】バラックに生活すること。

はら-っ-くだし 腹下【名】はらくだし(腹下)㊀の音便。

ばらっく-だて バラック建【名】バラック式の建築。

はら-っ-くだり 腹下【名】はらくだり(腹下)の音便。

ばらっく-まち バラック町【名】バラック建の家のみ並び集れる土地。

ばらっく-むら バラック村【名】バラック建の家のみなる、淋しき土地。

はら-づけ 腹附【名】流水の、堤防の斜面に及ぼす侵害を防ぐ工事の總稱。

はら-っ-こなし 腹熟・腹消化【名】はらこなし(腹熟)の音便。

はら-つづみ 腹鼓・腹皷【名】㊀『こふく(鼓腹)を見よ』飽食したる腹を、擊ちて喜ぶこと(食足りて、民の樂しみ安んずる太平の世の形容)。土佐「船子どもは、腹つづみを打ちて、海をさへおどろかして」㊁狸が、腹をたたきて、鼓の音に擬すといふこと。雪女五枚羽子板「狸が打った腹鼓、打ったら鳴るべえ」

ばらっど (英 Ballad)【名】〔文〕西洋にて、昔、民間の舞踏に用ひし歌。野趣に富み、又、舞踏に合はするがために、語句を反復せる所多し。

ばら-づみ 散積【名】〔商〕ばら荷を積み込むこと。

はら-とく 波羅得【名】〔植〕しらき(白木)に同じ。

ぱらどくす (英 Paradox)【名】㊀非に似て、實は是なる奇言。〔逆說〕㊁奇拔なる語句。警句。

ぱらどっくす (英 Paradox)【名】前條に同じ。

はら-とり 腹取【名】あんぷく(按腹)に同じ。〔古語〕榮花「痛き所やある。腹とりの女に取らせよかし」

はらな 波羅奈 (英 Vārnasi)【名】〔地〕古、中印度の恒河の流域に在りし國。今のベナレス(Benares)市を中心とせる一帶の地。鹿野園(ロクヤエン)、その中に在りき。

はら-なか 原中【名】野原のなか。芭蕉「原中や物にもつかず啼く雲雀」梅暦「これさ、お娘(スム)や。……、どうで叶はぬこの原中、自由になって」

はらなが-ばち 腹長蜂【名】〔動〕つちばち(土蜂)に同じ。

はらな-こく 波羅奈國【名】〔地〕はらな(波羅奈)に同じ。平家「波羅奈國の馬鳴比丘(メミャウビク)、南天竺の龍樹菩薩」

ばら-なっとう 散納豆【名】煮たる大豆を、笊に入れ、藁を少し加へ、室(ムロ)に入れて製したる納豆。

はら-なほし 腹直【名】他の物を食ひ又は飲みて、腹工合の惡くなりたるを直すこと。八笑人「二三日飯を食はねえやうな心持だが、腹なほしに、今朝は雜炊としようではねえか」同「腹直の酒にて、皆皆、氣色を直し」

ばら-に 散荷【名】〔商〕包裝せざる貨物。「ばらづみ(散積)參照。

はら-ぬち 腹中【名】『腹の中(チウ)の約』腹のなか。〔古語〕紀「たまきはるうちのあそが腹ぬちはいさごあれや」

はら-ねんさい 原念齋【名】〔人〕儒者。名は善、字は公道、通稱は三右衞門。山本北山に學び、最も史傳に精し。先哲叢談を著し、幕府に獻じて、厚く賞せらる。文化三年歿す。年四十七。

はら-ねんぶつ 腹念佛【句】はら(腹)の條下を見よ。

はら-の 原野【名】廣き野。のはら。原野(ゲンヤ)。〔古語〕新六「霜枯の原野にまじる節くぬぎ世にかじけゆくわが身なりけり」

はら-の-しろ 原城【名】はらじやう(原城)に同じ。

はら-の-ふえ 大角の笛【句】はら(大角)の條下を見よ。

はら-の-まち 原町【名】〔地〕㊀『雲雀野(ヒバリ)の北に在るより名づく』磐城國相馬(サウマ)郡にある町。陸前濱街道の一驛。鐵道磐城線の停車場あり。本郡中第一の要地。㊁陸前國宮城郡にあり、仙臺市の東に接續せる町。郡役所を置く。

はら-の-むし 腹の蟲【句】はら(腹)の條下を見よ。

はら-は 原派【名】繪畫の一派。原在中を祖とするもの。

はら-ばひ 腹這【名】はらばふこと。はらばひ。匍匐。運步色葉集「腹行・匍匐、ハラバヒ」

はら-はひで 腹這出【名】『母胎より這ひ出でたるままなる義』年少にて、物事に習はぬこと、又その人。乳臭兒。

はら-ばふ 腹這ふ【動四自】㊀腹を地又は疊などにつけて、手足にて少しづつ進む。這ふ。匍匐す。紀「匍匐、ハラバヒ」㊁這ひ行くが如き狀態にて、辛うじて進む。萬葉「大君は神にしませば赤駒の腹ばふ田ゐを都となしつ」

はら-はら【貌】㊀こぼれ落ち、又は亂れ散るさま、又その音。ばらばら。ぱらぱら。ほろほろ。ぼろぼろ。ぽろぽろ。はらり。ばらんばらん。狹衣「はらはらと吹き拂ふ木の下風の音なひ」經信母集「俄かに、雨、はらはらと降りて」㊁物の摩れ合ひなどする音。ばさばさ。はららか。ばらばら。ぱらぱら。源氏「衣(キヌ)の音なひ、はらはらとして」十訓「扇を、はらはらと使ひならして」㊂まばらなるさま。ばらばら。ぱらぱら。春の日(呑霞)「星はらはら霞まぬ先の四方の色」㊃物のはなればなれなるさま。ばらばら。ぱらぱら。はらら。源氏「御髮(ミグシ)の、亂れたる筋もなく、はらはらとかかれる枕の程」㊄物の燒けて跳(ハ)ぬる音。ぱちぱち。ばりばり。徒然「燒かるる豆がらの、はらはらと鳴る音は」㊅危み氣遣ひて、心おちつかぬさま。ひやひや。浮世風呂「手をあてて、はらはらする體(テイ)。お危(アブ)うございますよ。お靜かに遊ばしまし」

はら-ばら 腹腹【名】父親は同じくして、母はそれぞれ相異なる多くの子の、その母たち。〔古語〕源氏「御子ども、あまた、腹腹にものしたまふ」大鏡「腹腹には、男子・女子、あまたおはしましき」

ばら-ばら 散散【貌】はらはら㊀㊁㊂㊃に同じ。著聞「土器(カハラケ)のわれを……、ばらばらと投げかけ」曾我虎が磨「連れ立てば目に立つと、三人ばらばら」

ぱら-ぱら 散散【貌】はらはら㊀㊁㊂㊃に同じ。

ばらばら-がみ 散散髮【名】亂れたる髮。みだれがみ。重帷子「髮はばらばら髮」

ばらばら-ずん【貌】ばらばらにちぎるるさま。出世景淸「身ぶるひすれば、大釘・大繩、ばらばらずんと斷れてのいた」

はらはら-なみだ 散散淚【名】はらはらと亂れ落つる淚。丹波與作「小萬は、はらはら淚にて」

はらはら-ぱっ【貌】光の搖れ動きて、遂に消え失するさま。狂言(こんくわい)「四十二のともし火、一度に、はらはらぱっと吹き消しければ」

ばらばら-まつ 散散松【名】まばらに生ひたる松。潮來婦誌「潮來(イタコ)のばらばら松とて、沖乘船の目あての森とぞ」

はら-はれ 腹腫【名】『「腹膨(フク)る」を見よ』かねもち。富豪。御所櫻「京中の腹はれどもに、これが有れば、いっかど禮銀してやるもの」

はらひ 拂【名】㊀拂ふこと。㊁打拂(ウチハラヒ)の布。東鑑「御拂」㊂賃錢又は代金を渡すこと。しはらひ。㊃品物を賣り拂ふこと。㊄つゐはう(追放)に同じ。㊅〔文〕あげく(擧句)㊀に同じ。

拂が穢(キタナ)い【句】はらひぎたなし(拂穢し)に同じ。

拂が綺麗【句】いさぎよく支拂ふ。拂穢(ハラヒギタナ)くなし。

拂の紙【句】婦人の、髮を梳る時、櫛につきて拔けたる毛を入れ置く疊紙(タタウガミ)。はらひばこ。

はらひ 祓【名】㊀はらへ(祓)に同じ。㊁はらへぐし(祓串)又はらへばこ(祓箱)の略。丹波與作「太神宮の守(マモリ)・お祓」

はらひ【名】〔植〕おほかぐま(狗脊)に同じ。

はらひ-うち 拂打【名】拂ひのくるために打ち切ること。百日曾我「己等とても、ただ置かうかと、拂打にたたきつけ」

はらひ-おとし 拂落【名】㊀はらひおとすこと。㊁棒㊁の遣ひ方の一種。

はらひ-おとす 拂落す【動四他】拂ひて落す。はらひおろす。

はらひ-おろす 拂下す【動四他】拂ひておろす。切り落す。狂言(鱸庖丁)「みさごの鰭を拂ひおろし」

はらひ-かた 拂方【名】㊀拂ふ方法。㊁金錢を支拂ふ人。會計方。

はらひかた-かねぶぎやう 拂方金奉行【名】德川幕府の職制の一。支拂の方面を掌りし金奉行。(元方金奉行に對して) **もとはらひかねぶぎやう**(元拂金奉行)參照。

はらひかた-どうしん 拂方同心【名】德川幕府の職制の一。拂方金奉行の下役たりし同心。(元方同心に對して)

はらひかた-なんどがしら 拂方納戶頭【名】德川幕府の職制の一。寬政四年以前、購入品の代價支拂を掌りし納戶頭。(元方納戶頭に對して) **もとはらひかたなんどがしら**(元拂方納戶頭)參照。

はらひかた-なんどくみがしら 拂方納戶組頭【名】德川幕府の職制の一。拂方納戶の下役たりし納戶組頭。(元方納戶組頭に對して)

はらひかた-なんどしゆう 拂方納戶衆【名】德川幕府の職制の一。拂方納戶頭の下役たりし納戶衆。(元方納戶衆に對して)

はらひ-ぎたなし 拂穢し【形一】常に金錢の支拂を完全になさず。

はらひ-きよむ 拂淨む・拂淸む【動下二他】拂ひて淸くす。掃除して、淸潔ならしむ。宇治「房中を掃ひきよめて」

はらひ-きよむ 祓淸む・祓淨む【動下二他】**はらへきよむ**(祓淸む)に同じ。

はらひ-きり 拂切【名】拂ひ切ること。

はらひ-ぎり 拂切【名】太刀を橫に振りて、切り附くること。太平記「片手打の拂切に切って上りけるに」

はらひ-きる 拂切る【動四他】殘らず拂ふ。拂ひ盡す。

はらひ-ぐさ はらひ草【名】〔動〕**しか**(鹿)の異名なりといふ。〔古語〕藻鹽草「はらひ草、六月鹿の異名なりと、ふるき物に侍り、いかが」

はらひ-ごし 拂腰【名】柔術の腰業の一。相手の近く進み來る時、その右・左股の右・左の前側に、己の右・左股の外側を當てて、拂ひながら掛くるもの。

はらひ-こみ 拂込【名】㊀拂ひ込むこと、又、拂ひ込みたること。㊁〔商〕次條の略。

はらひこみ-かぶきん 拂込株金【名】〔商〕次條に同じ。

はらひこみ-しほん 拂込資本【名】〔商〕『英 Paid up capital』名義上の資本にあらずして、實際株主より會社に拂ひ込みたる資本金。拂込株金。

はらひ-こむ 拂込む【動四他】金錢を拂ひて、納め入る。

はらひ-さぐ 拂下ぐ【動下二他】官公署より、不用の物品を、人民に賣り渡す。

はらひ-さげ 拂下【名】拂ひさぐること。

はらひ-ずみ 拂濟【名】完全に拂ひ終ふること。拂ひ盡すこと。償却濟。

はらひずみ-ほけんしようけん 拂濟保險證券【名】〔商〕『英 Paid up policy』生命保險にて、每期に支拂ふべき保險料を拂濟とし、爾後その支拂を要せざる場合の保險證券。

はら-ひたい 合剌乞塔・黑契丹【名】〔地〕西曆第十三世紀の始に、遼の王族耶律大石(エリクアシ)が、中央亞細亞サマルカンド地方に建てし國。こくけいたん。西遼。

はらひ-だし 拂出【名】拂ひだすこと、又、拂ひだしたること。

はらひ-だす 拂出す【動四他】㊀追ひ出す。拂ひ除く。㊁金錢を支拂ひ出だす。

はらひ-たて 祓立【名】後世の兜の正面に、前立物を插すために打ち附けたる管。

はらひ-だんご 拂團子【名】**おはらひだんご**(御拂團子)を見よ。

はらひ-てがた 拂手形【名】〔商〕**しはらひてがた**(支拂手形)に同じ。

はらひ-ど 祓戶・祓所【名】**はらへど**(祓戶)を見よ。

はらひ‐どの 祓殿【名】**はらへどの**（祓殿）を見よ。

はらひどんどん‐ゑまき 祓頓等繪卷【名】［美］不留房といふ僧の、一切の執著を放棄して、遂に佛の國土に入るを得たりといふ說話の繪卷物。原本一卷は、舊尾州の德川侯爵家に藏す。繪は飛驒守惟久の筆、詞書は世尊寺行尹の作と傳ふ。一名、不留房繪詞。又、破來頓等繪卷。

はらひ‐の‐かみ 拂の紙【句】**はらひ**（拂）の條下を見よ。

はらひ‐のく 拂除く【動下二他】拂ひて除き去る。はらひさる。

はらひ‐ばこ 拂箱・拂匣【名】「拂（ハラヒ）」の「紙」に同じ。

はらひ‐ばこ 祓箱・祓匣【名】㊀**はらへばこ**（祓箱）に同じ。㊁**おはらひばこ**（御祓箱）を見よ。

はらひ‐び 拂日【名】支拂をする日。決算日。傾城反魂香「正月しまへば、節句・朔日（ツイタチ）、今日は二日の拂日なり」

はらひ‐ぶそく 拂不足【名】全額中、支拂の一部分濟まぬこと。支拂未濟の分。

ぱらぴん 石蠟【名】**ぱらふいん**の訛。

ぱらぴん‐がみ 石蠟紙【名】**ぱらふいんがみ**（石蠟紙）の訛。

ぱらぴん‐ゆ 石蠟油【名】**ぱらふいんゆ**（石蠟油）の訛。

ぱらぴん‐らふ パラピン蠟【名】**ぱらふいんらふ**（パラフイン蠟）の訛。

はらひ‐もどし 拂戾【名】拂ひ戾すこと。

はらひもどし‐ぜい 拂戾稅【名】［法］內國にて、製造稅を課稅せられたる貨物を、外國に輸出する際、その製造稅の拂戾を受くること。

はらひ‐もどす 拂戾す【動四他】㊀計算の後、餘りたる分を戾す。㊁貯金を、その預け主に拂ひ渡す。

はらひ‐もの 拂物【名】㊀賣り拂ふ品物。吉野都女楠「大將の拂物、大抵では賣るまじきが」㊁關係を絕ちて、追ひ拂ふ人。［拂者］源氏十二段長生島臺「姬はお拂もの、暫時も家には叶はぬぞ」㊂芝居にて、報酬を支拂ふに、全部を一時に渡さず、興行中、一日每に支拂ふこと、又その報酬。

はらひ‐わたし 拂渡【名】拂ひ渡すこと。

はらひわたし‐いうびんきよくしよ 拂渡郵便局所【名】その郵便爲替金を拂ひ渡すべき郵便局所。

はらひわたし‐きげん 拂渡期限【名】拂ひ渡すべき期限。

はらひ‐わたす 拂渡す【動四他】㊀金錢を支拂ひて渡す。㊁賣り渡す。

はら‐ふ 拂ふ【動四他】『はらはらと除き去る義』㊀除き去る。㊁塵芥などを除き淸む。はく。はたく。掃除す。［掃ふ］㊂亂れたる土地を、武力を用ひて、平定す。萬葉「まつろはぬ國をはらへと」㊃かすりて、輕く擊つ。かすめ撫づ。後拾遺「池水の水草（ミグサ）も取らで靑柳の拂ふ下枝（シヅエ）にまかせてぞ見る」㊄橫ざまに切る。切り拂ふ。薙ぐ。八笑人「それ拔き合はせた。……それ、裾を拂った」㊅追ひしりぞく。追ひ去らしむ。［攘ふ］落窪「帶刀（タチハキ）、先に立ちて、道なる人人拂ふ」太平記「若し黑地（クロチ）の陣を拂はん事難儀ならば」㊆追放の刑に處す。櫻陰比事「命は助けて、都の內を、即ちこれより拂へ」㊇買物の代金を渡す。支拂ふ。㊈不用の品を賣る。うりはらふ。

はら‐ふ 祓ふ【動下二他】『前條の語より出でたる語』祓（ハラヘ）㊀㊁を行ふ。萬葉「中臣（ナカトミ）のふとのりとごと言ひはらへ贖（アガ）ふ命も誰がために汝（ナレ）」六帖「つらき人忘れなんとてはらふればみそぎかひなく戀ひこそまされ」

祓へ給へ、淸め給へ【句】『大祓の詞に本づきていふ』神道にて、人の罪・穢（ケガレ）・災禍などを除き去らんことを、神に祈請する時にいふ語。

はら‐ふ 祓ふ【動四他】**はらふ**（祓ふ）に同じ。

祓ひ給へ、淸め給へ【句】「祓へ給へ、淸め給へ」に同じ。

はら‐ふ 拂ふ【接尾】動作を强めて言ふに用ふる語。「落著きはらふ」「醉っぱらふ」

ばら‐ふ 散斑【名】鼈甲の、黑き斑のあるもの。

ぱらふいん 石蠟（英 Paraffines）【名】㊀［化］メタン・エタン、その他、それ等に類似せる性狀を具へ、一種共通の分子式にて表示し得る炭化水素の總稱。いづれも、天然に產出し、水よりも輕く、且つ水には殆ど溶解せず、又、何れもよく燃燒す。炭素原子の多少によりて、氣狀・液狀又は固狀をなす。或種の石油（液）・ガソリン（揮發油）・ワセリン（半固狀）・パラフイン蠟（固狀）など、皆これに屬す。ぱらぴん。㊁［化］**ぱらふいんらふ**（パラフイン蠟）の略。［石蠟］㊂次條の略。

ぱらふいん‐がみ 石蠟紙（英 Paraffin paper）【名】パラフイン蠟を、機械的に片面若くは兩面に塗布せる半透明なる洋紙。外科手術その他の醫療用とし、又、濕氣を防ぐ包紙として用ふ。ぱらぴんがみ。ぱらぴん。

ぱらふいん‐ゆ 石蠟油（英 Paraffin oil）【名】［化］石油の原油を蒸餾して得る重油を再餾し、更に器械油を餾取したる殘油。パラフイン採取の用に供し、又は機械油としてそのまま使用す。ぱらぴんゆ。

ぱらふいん‐らふ パラフイン蠟（英 Paraffin wax）【名】［化］炭素原子を多く含める、固形のパラフイン。石油の原油を分餾して得る重油を、更に分餾精製して得る、白色・蠟狀なるもの。蠟燭の製造、化學用などに供す。ぱらふいん。ぱらぴんらふ。ぱらぴん。石蠟（セキラフ）。

はら‐ぶくれ 腹腫・腹脹【名】腹のふくるること、又、腹のふくれてある人。

はら‐ぶくろ 腹袋【名】腹のなか。平假名盛衰記「蕎麥を、したたかしてやったりや、腹袋に、足（シヲ）が入って、明日（アス）まで、煮焚も何もいらぬ」

はら‐ぶし 腹節【名】**めぶし**（雌節）に同じ。

はら‐ぶと 腹太【名】㊀『「腹太し」を見よ』膽力・度量の大なること、又その人。㊁次條の略。

はらぶと‐もち 腹太餠【名】**うづらやき**（鶉燒）㊀に同じ。

ぱら‐ふれえず （英 Paraphrase）【名】原文を、同國の語にて、異なる形式に書き變へて解釋すること。

はらへ 祓【名】㊀はらふること。神に祈りて、惡穢を去り、災厄を除く行事。祭祀・祈禱・奉幣・參詣等の事あるに臨みては、豫め行ひ、除服のため、燒亡・雷霆・疾病・死穢等の場合には、事後に行ひ、又、罪過に對しては、料物を徵して贖はしめ、場處は、海・瀧・河原などを選びて行ふを常とす。延曆二十年、神事の罪過に對し、その輕重によりて、大祓・上祓・中祓・下祓の四等を區別せり。はらひ。**みそぎ**（御禊）參照。源氏「御祈、かたがたに隙なくののしる。祭・祓・修法（ズホフ）など」榮花「御はらへの音などのかしがましささへ、いみじうて」㊁「祓の詞」の略。「中臣（ナカトミ）の祓」

祓の馬【句】祓の時に用ふる馬。延喜式「凡年中諸祭祓馬者、二月祈年祭十一匹」

祓の具【句】祓に用ふる具。即ち人形（ヒトカタ）・菅・麻・稻米・茅輪（チノワ）・祓串（ハラヘグシ）及び解繩（トキナハ）など。伊勢「陰陽師（オンヤウジ）巫（カンナギ）呼びて、戀せじといふ祓の具してなん行（イ）きける」

祓の詞【句】㊀祓の時に、中臣（ナカトミ）又は神官の讀む詞。はらへ。㊁王朝時代に、宮中の大祓の時、東西文部（フヒトベ）の、祓の刀を奉りて讀みし詞。大寶令「凡六月十二月祓日大祓者……東西文部上二祓刀一、讀二祓詞一」

祓の刀（タチ）【句】王朝時代に、宮中の大祓の時、東西文部（フヒトベ）の奉りし太刀。

祓の使【句】祓のために遣さるる使。兼澄集「藏人（クランド）にて、祓の使にて、難波にまかりしに」

祓の胙（ヒモロギ）【句】祓の時に供ふるひもろぎ。謠曲（金札）「荒ぶる神も祓のひもろぎ」

はらへ‐がは 祓川【名】神佛を拜する時、「祓㊀」を行ふ川。

はらへ‐きよむ 祓淸む・祓淨む【動下二他】祓をして、けがれを淸む。

はらへ‐ぐさ 祓種【名】**はらへつもの**（祓物）に同じ。［古語］奧儀抄「人形（ヒトガタ）、はらへぐさ」

はらへ-ぐし 祓串【名】大神宮にて、神符として、祓㊀に用ひたる玉串。細き木に、細く切りたる紙を附けたるもの。織留「御祓串や蹈みけん、仁王の御札や蹈みけん」

はら-ぺこ 腹ぺこ【名】『「腹がぺこぺこ」を見よ』すきばら。腹空。〔俚語〕

はらへ-たまぐし 祓玉串【名】祓㊀を行ふに用ふる玉串。榊の小枝に紙垂をつけたるもの。

はらへ-づき 祓月・禊月【名】陰曆三月の異稱。

はらへ-づくゑ 祓机【名】祓㊀の時、太麻(オホヌサ)を安置する机。

はらへ-つもの 祓物【名】祓㊀の時、罪過を贖ふ料として出だす物。即ち中古の贖銅・贖錢・贖布・贖稻、今日の罰金に相當す。はらへぐさ。〔古語〕 紀「祓具、此云二波羅閉都母能一」

はらへ-ど 祓戸・祓所【名】神社にて、祭事の時、祓㊀を行ふに當り、それに充つる境内の一定の場所。春日祭次第「上卿・辨・近衞使等、著二祓戸一」

祓戸の神【句】祓戸を守りたまふとて、大祓の時に祭る神、即ち瀨織津姫(セオリツヒメ)神・速秋津姫(ハヤアキツヒメ)神・氣吹戸主(イブキドヌシ)神・速佐須良姫(ハヤサスラヒメ)神の四神。伊弉諾(イザナギ)神の、黃泉國(ヨモツクニ)より歸りて、日向の橘の小門(ヲド)の檍原(アハギハラ)に禊したまひし時、生れたりといふ八十禍津日(ヤソマガツヒ)神・大禍津日(オホマガツヒ)神は瀨織津姫、又その時の伊豆賣(イヅメ)神は速秋津姫、神直日(カムナホビ)神・大直日神は氣吹戸主神にて、速佐須良姫のみは、祝詞(ノリト)にのみ出でて、紀に所見なきは、脫漏せるなるべしといふ。紫式部集「祓戸の神の飾のみてぐらにうたてもまがふ耳はさみかな」宇治「祓戸の神たちは、法師をば忌みたまへば、祓する程、暫くして侍るなり」

祓戸の四柱(ヨハシラ)の神【句】前條に同じ。

はらへ-どの 祓殿【名】神社にて、祭事の時、祓㊀を行ふ殿舍。特に設けたる神社もあれど、神饌所又は拜殿をこれに充つるを例とす。蜻蛉「祓殿に至りたまひければ」

はらへ-ばこ 祓箱・祓匣【名】祓串(ハラヘグシ)を入れたる箱。はらひばこ。

ぱらぼら（英 Parabola）【名】〔數〕はうぶつせん(拋物線)に同じ。

ぱらぼら-きやう パラボラ鏡【名】〔理〕はうぶつめんきやう(拋物面鏡)に同じ。

ぱらぼろいど（英 Paroboloid）【名】〔數〕はうぶつせんたい(拋物線體)に同じ。

はら-まき 腹卷【名】㊀はらおび(腹帶)㊀に同じ。和名「勒肚巾、波良萬岐。一云、腹帶」㊁鎧の一種。形、胴丸(ドウマル)に似、腹に卷きて、背にて引き合はせ、その背の空隙を、背板(セイタ)にて塞ぐやうに作れるもの。もと狩衣(カリギヌ)・直垂(ヒタタレ)・鎧などの下に著用せしものなりしが、輕裝の時、鎧に代へて、裝束の上にも用ふるに及びて、背板・袖・杏葉(ギヤウエフ)なども取り附くるに至れり。裝束の下に著たると上に著たるとによりて、下腹卷(シタハラマキ)・上腹卷(ウハハラマキ)の名あり。胴腹卷。背割具足(セワリグソク)。保元「木蘭地の直垂(ヒタタレ)に、紫革の腹卷著」舞の本(高館)「唐錦緘・黃金札の腹卷を脫いで」

ばら-まき 散蒔・散播【名】〔農〕さんぱ(撒播)に同じ。

はら-まき【名】人を謗り罵る時にいふ語。〔古語〕 著聞「供なる力者(リキシヤ)法師聞きとがめて、親まきの聖覺(シヤウカク)や、はらまきの聖覺やなど睨(ネ)ねめつつ」

はらまき-がけ-に 腹卷掛に【副】腹卷㊁をも一緒に。盛衰記「長刀(ナギナタ)の柄を取り直して、腹卷がけに、胸より背(ウシロ)へ差貫(サシヌ)き」

はらまき-よろひ 腹卷鎧【名】鎧に代用する腹卷。

ばら-まく 散蒔く【動四他】㊀ばらばらと蒔く。まばらにふりまく。㊁人氣を得んため、金錢を、多くの人に分ち與ふ。

はらみ-いし 孕石【名】こもちいし(子持石)㊀に同じ。

はらみ-く 孕句【名】㊀連歌・俳諧などにて、豫め考へ置ける句。宿構の句。腹案の句。新續犬筑波「孕句も今ぞひもとく花の下」㊁以前よりの考。狂言(箕潛)「常に氣に入らぬ女ぢやと、孕句に思うてゐたに」

はらみ-ご 孕兒・孕子【名】腹ごもりの兒。胎兒。

はらみ-すすき 孕薄【名】内部に含まれゐて、未だ表に伸び出でざる薄の穗。

はらみた 波羅蜜多【名】〔佛〕次條㊀に同じ。

はらみつ 波羅蜜（梵 Pāramitā）【名】〔佛〕『度・到彼岸又は事究竟と譯す。ひがん(彼岸)參照』㊀生死(シヤウジ)の迷を離れて、涅槃(ネハン)の境地に到達すること。ろくはらみつ(六波羅蜜)參照。㊁〔植〕『本草に「波羅蜜梵語也。因二此果味甘一故、借用レ之」とあり』桑科に屬する常綠喬木。高さ三丈に達し、葉は倒卵形にして、花は極めて小く、雄花は多數集りて棍棒狀の葇荑(ジウテイ)花序をなし、雌花も、攢簇して、金米糖狀の頭狀花をなし、果實は長橢圓形にて、人頭より大に味甘し。又、黃色の心を、染料とし、材は細工に用ふ。原產地は東印度。〔波羅蜜樹・囊伽結樹〕

波羅蜜の船【句】〔佛〕『華嚴經に「以二波羅蜜船一、於二生死流中一、不レ依二此岸一、不レ著二彼岸一、不レ住二中流一、而度二衆生一、无レ有二休息一」とあり』「弘誓(グゼイ)の船」に同じ。

はらみった 波羅蜜多【名】〔佛〕はらみつ(波羅蜜)㊀に同じ。大織冠「心に深く波羅蜜多、般若坂にぞ著きにける」

はらみ-ばし 孕箸【名】内部に小楊枝を插みてある割箸。料理屋などにて用ふ。

はらみ-をんな 孕女・孕女【名】子を孕みてある女。みもちの女。うぶめ。こるめ。妊婦。俳家奇人談(宗祇)「摩訶般若孕女の奇特かな」

はらむ 孕む【動四自】『「はら(腹)」に、語尾の添ひたる語』㊀胎内に、兒をやどす。みもちになる。みごもる。姙娠す。紀「有身、ハラミヌ」源氏「七月より孕みたまひにけり」㊁穗出でんとして、ふくらむ。蜻蛉「若苗、……いとをかしうはらみて」夫木「秋風にはらむ薄のある野べはうつしの花や色にまどへる」

はらむ 孕む【動四他】㊀胎内にやどす。㊁中に含みもつ。「帆、風をはらむ」

孕まる【句】㊀母の胎内にやどる。源氏「わが君はらまれおはしましたりし時より」㊁生れ出づ。保育せらる。はぐくまる。產出す。宇治「いかに大宮司ならんからに、國にはらまれては、見參にも參らぬぞといふに」正統記「王土に孕まれて、忠を致し」

はら-むき 腹向【名】あふのけに倒れんとして、腹の前方へ突き出づること。異本曾我「外足(ソトアシ)を取って、ちやうと突きければ、腹むきになる所を」

はら-むし 腹蟲【名】「腹の蟲」に同じ。

は-らん 波瀾【名】『瀾は大波の義』㊀大小のなみ。なみ。和合人「波瀾渺渺として、水や空、空や水とも見えわかず」㊁文章の、起伏・變化あり、一段生動する所。太平記「詩は捲二盛唐波瀾一、先二七步才一」㊂もめ。さわぎ。紛擾。騷動。風波。

波瀾の袖【句】搖れ動くさまの、波瀾の如くなる袖。謠曲(春日龍神)「龍女が立ち舞ふ波瀾の袖」

は-らん 破亂【名】はらん(波瀾)㊂の誤なるべし。曾我「源氏、……、四海のはらんを治め」

は-らん 葉蘭・蜘蛛抱蛋・一葉・紫蘭【名】〔植〕百合(ユリ)科に屬する多年生の草。葉は根生葉にして、長柄を有し、葉身は長大にして披針形、常に濃綠なり。四月頃、根莖に接して、内面暗紫色なる花一箇を開き、球形・綠色なる果實を結ぶ。庭園に栽培す。おほばらん。

ば-らん 葉蘭・蜘蛛抱蛋・紫蘭・一葉【名】〔植〕前條に同じ。

ば-らん 馬蘭【名】〔植〕ばりん(馬藺)に同じ。

ばらんす（英 Balance）【名】㊀つりあひ。均衡。㊁〔美〕圖案・繪畫又は建築・彫刻などに於ける、濃淡・形式などのつりあひ。㊂あまり。殘高。

はら-んばひ 腹這【名】はらばひ(腹這)の音便。

ばらん-ばらん【貌】ばらばらに同じ。日本振袖始「嵐・山颪・松風が、ばらんばらんと吹き音づるれば」

はら-め 孕女・孕婦【名】はらみをんな(孕女)に同じ。名義抄「孕、ハラメ」

はら-めく【動四自】㊀ばらつくに同じ。〔古語〕源氏「雨、……、はらめき落つ」十訓「蜂、……、車のうらうへの物見にはらめきけるを」㊁ばらばらに裂け破る。ぼろぼろになる。〔古語〕發心集「布のつづり・紙ぎぬなどの、……破(ヤ)れはらめきたるを」

ばら-も【名】〔植〕はりもみ(針樅)に同じ。

ばら-もく【名】〔植〕やつまたもく(八股もく)に同じ。

はら-もち 腹持【名】㊀はらぐあひ(腹工合)に同じ。㊁消化遲くして、腹の中に久しく保つこと。

はら-もとき 原元辰【名】〔人〕赤穗四十七士の一人。通稱は總右衞門。淺野長矩に仕へて、足輕頭たり。良雄を輔けて復仇の議に預り、功勞最も多し。元祿十六年死を賜る。年五十六。

ばら-もみ ばら樅【名】〔植〕㊀つが(栂)に同じ。㊁はりもみ(針樅)に同じ。

ばら-もん 婆羅門(梵 Brāhmaṇa)【名】㊀〔佛〕『淨行・淨裔など譯す』印度の四姓(シシヤウ)の中にて、最も高貴なる種族。梵天王の裔にて、その口より生れしものと稱し、王者の上にありて、神に仕へ、政治上の審判をなし、無上の權力を有したり。萬葉「婆羅門の作れる小田をはむ烏まなぶた腫れて旗ほこに居り」㊁ばらもんけうの略。㊂ばらもんそう(婆羅門僧)の略。宇治拾「この婆羅門のやうなる者の心に、さは、佛經はめでたく尊くおはしますものなりけり」㊃〔人〕ばらもんそうじやう(婆羅門僧正)を見よ。

ばらもん-けう 婆羅門敎(英 Brahmanism)【名】『婆羅門㊀の手に維持せられて發展せしよりいふ』吠陀(ベダ)の信仰を中心として發達せし、印度の宗敎。梵天王より受け傳へしものと稱し、流派多けれども、何れも、この世界を、罪惡・苦惱に滿ちたるものとし、智見を研きて、その眞相を體認せんがためには、操行の潔白を必要とすとなし、信徒は、山中に入り、或は、家居して、禁慾・忍苦の業を修む。釋迦の佛敎唱道は、この敎に對する改革運動なりしが、今日の印度には、佛敎は痕を絕ち、却って、この敎の系統を引きて、複雜の度を增せる印度敎、盛んなり。婆羅門。みつけう(密敎)參照。

ばらもん-さう 婆羅門草【名】〔植〕てうせんあさがほ(朝鮮朝顏)に同じ。

ばらもん-じん【名】〔植〕菊科に屬する二年生の草。葉は披針形にして、葉柄なく、根は白色・多肉、夏、梢上に青紫色の頭狀花を開き、甚だ美し。原產地は歐羅巴。觀賞用とし、根は食用に供す。じやがたらずゐせん。むぎなでしこ。

ばらもん-しゆ 婆羅門種【名】ばらもん(婆羅門)㊀に同じ。

ばらもん-しゆぞく 婆羅門種族【名】前條に同じ。

ばらもん-そう 婆羅門僧【名】波羅門種の僧。婆羅門。

ばらもん-そうじやう 婆羅門僧正【名】〔人〕印度の歸化僧。名は菩提僊那(ボダイセンナ)。南天竺迦毘羅衞(カビラヱ)の婆羅門種。文殊(モンジユ)菩薩を拜せんとて、小舟に乘じて、支那に航し、五臺山に詣り、更に、天平八年、我國に來る。僧行基、聖武天皇に奏して、難波津に迎へ、伴なひて奈良に入り、大安寺の東坊を旅館とし居らしむ。東大寺の大佛成るや、開眼導師となり、尋いで僧正に任ぜられ、天平寶字四年遷化す。

ばらもん-てん 婆羅門天【名】〔佛〕ぼんてん(梵天)に同じ。門出八島「天晴(アツパレ)韋駄天・波羅門天・鐘馗大臣」

ばらもん-わう 婆羅門王【名】〔佛〕ぼんてんわう(梵天王)に同じ。持統天皇歌軍法「婆羅門王の暴れたる如く、鐵の棒振廻し」

はらや 水銀粉・輕粉・汞粉【名】水銀に明礬鹽を和して擂り、灰鹽水を加へ、鐵器に盛り、炭火にて燒きたる藥品。白粉(オシロイ)の料、又、藥料とす。いせおしろい。はおしろい。はだおしろい。胸算用「はらや一箱」俗曲(八重霞浪花濱荻)「鏡臺引き寄せて、向ふ鏡も丸顏に、はらやを延べて」

はら-やぐら 腹矢倉・腹櫓【名】相撲(スマフ)の手の一。吊出(ツリダシ)とほぼ同じく、相手を引き寄せ、腹に乘せて吊り出すもの。傾城酒呑童子「貝投・懸投・腹櫓」

はらや-ばこ 水銀粉箱・輕粉匣【名】はらやを入るる箱。二代男「はらや箱に玉蟲」

はら-やま 原山【名】〔地〕攝津國にありといふ山。丹波國多紀(タキ)郡より同國船井(フナヰ)郡に出づる道に、同名の山あり、或はそれか。名寄「原山のささやの床の假臥に鳥の音聞え明けぬとの夜は」

はらやまつみ-の-かみ 原山津見神【名】伊弉諾(イザナギ)神の、火產靈(ホムスビ)神を斬りたまひし時、その死屍の左足に成りましし神。原と山とを主宰したまふといふ。

ばら-ゆ 薔薇油【名】しやうびゆ(薔薇油)に同じ。

はら-ら【名】鮭の鮞(ハララゴ)を云ふ。〔東北の方言〕

はら-ら【貌】はらはら㊂に同じ。〔古語〕萬葉「白波の八重をるが上に蜑小舟はららに浮きて」

ばららいか(英 Balalaika)【名】露西亞人の用ふる一種の樂器。形、ギタアに似、木製の三角形なる胴と、長き棹とより成り、三絃を張り、右脇に抱へ、左手にて、絃を按じ、右手に、羽莖にて造れる義甲を持ちて彈奏す。

はら-らか【貌】はらはら。ほろほろ。ばらんばらん。胡琴敎錄「撥を強く取りてやはら彈けば、くくもり聲にて……はららかに、ささめきて彈くべし」

はららかす 散かす【動四他】はらはらと散らす。はららくやうにす。〔古語〕記「沫雪なす蹶(ク)ゑ散(ハラ)かして」紀「散、ハララカス」

はららく 散く【動四自】ばらばらになる。ぼろぼろと崩る。〔古語〕名義抄「墣、ハララク・ウグロモチ」

はらら-ご 鮞【名】〔動〕『はららなる子の義』魚類の卵の、胞(エナ)を割きて、塊狀のまま、鹽漬などにしたる食品。鮭の子・鰊(カズ)の子・からすみ・カビヤ等の類。

はらら-じる 擂豆腐汁【名】『はららなる狀(サマ)の汁の義』豆腐を擂りつぶしてまぜたる味噌汁。

はらり【貌】㊀こぼれ落つるさま、又その音。ぱらり。ばらり。はらはら。運歩色葉集「波羅利、ハラリ」天の網島「むごや、惜しげもなげ島田、はらりと切って」㊁人の、三三五五に聚散するさま。ばらばら。出世景淸「中間(チユウゲン)ども承り、一度にはらりと取廻し」㊂物の磨れあひなどする音。ばらり。はらはら。曾我「右のをり骨二つ三つ、はらりと射ければ」㊃からり㊂に同じ。醒睡笑「主人たる人の心と、下男の心と、物事、はらりとちがひて」若風俗「胸算用、はらりと違ひ」

ばらり【貌】㊀はらり㊀に同じ。狂言(路蓮坊主)「朝顏の花と申すは、……夕べには、ばらりと落つ」㊁はらり㊁に同じ。㊂はらり㊂に同じ。謠曲(絃上)「撥音(バチオト)・爪音、ばらりからり、からりばらり」曾根崎心中「笠を、ばらりと脫ぐ」

ぱらり【貌】前條㊀に同じ。浮世風呂「ちっとばかり來た分にやあ、おいそれの間にばらりだ」

はらり-しやん【貌】殘るところなく、極(キマ)りを附くるさま。綺麗さっぱり。しやんしやん。長町女腹切「かたりめが挨拶、はらりしやんと切ってしまひ、年切(ネンキリ)增して」

ばらり-ずん【貌】一刀の下に斬り捨つるさま。くわらりずん。津國女夫池「拔打に、初雪が右の肩先、ばらりずんと切り下げたり」

はらりっ【貌】はらり㊃に同じ。天神記「わが胸の中、はらりっと夜の明けた心地する」

ばらり-づん【貌】ばらりずんを見よ。

はらり-はらり【貌】はらりを重ねていふ語。はらはら。一茶「露はらりはらり浮世の大事かな」

ばらり-ばらり【貌】ばらりを重ねていふ語。ばらばら。義經記「馬の太腹・前膝、ばらりばらりと斬りつけ」

はら-わた 腸・膓【名】㊀『腹の中にある、綿の如き物の義』だいちやう(大腸)に同じ。(ほそわたに對して)〔古語〕和名「大腸、波良和太。爲㆓傳送之府㆒」㊁大腸と小腸と

の總稱。腸。（名義抄）「腹、ハラワタ・クソブクロ・ココロ・オモフ」（增鏡）「自害するとて、はらわたを、皆くり出して」㊂こころ。性根(シヤウネ)。量見。「腸が見えすく」「腸が腐る」㊃瓜の果皮の内部に、種子と共に存する、綿の如く柔きもの。

腸が煮え返る【句】憤怒又は悲痛に堪へぬ形容。（曾根崎心中）「腸が煮え返り、二三度も驅け出でしを」

腸が燃え返る【句】前條に同じ。（曾我）「何れもの我儘、腸が燃え返り、胸の蟲が、むかむかと」

腸を搔き挘(ムシ)る【句】怒又は悲哀を極むる形容。

腸を切る【句】「腹を切る」㊂に同じ。（竹取）「上(ウヘ)は、腸を切りて笑ひたまふ」

腸を斷つ【句】㊀悲しさに堪へぬ形容。㊁前條に同じ。（盛衰記）「裸にて、野中に、卒都婆のやうにて立ちたまへり。……、人人、皆腸を斷つ」

はら-ゐせ 腹居【名】はらいせ(腹いせ)を見よ。

ばら-を 散緒【名】細き緒を幾筋も縒(ヨ)り合はせたる鼻緒。（一代男）「ばら緒の雪踏(セッタ)」

はり 針・鍼【名】㊀布帛その他の物を縫ふに用ふる具。鋼鐵にて、細く圓く長く造り、先端を尖らせ、他の端には、絲を通すための小孔をあけたるもの。ぬひばり。㊁形は、前記のに似て、金又銀にて造り、鍼醫(ハリイ)の、患部に刺し込み、痙攣・緊張・炎症などを止め和ぐるに用ふる具。往古は、石・鐵などにて造れるをも用ひたり。㊂前記の鍼を用ひて、病を治すること。はりれうぢ。鍼治。鍼術。（玉葉）「召二權侍醫憲康一、令レ針二齒下一」㊃極めて細く長くして、先端の鋭く尖りたるもの。とげ。いら。［刺］㊄極めて細く長き形。（狂言、俄道心）「はりに刻むか。いやいや、これは、鱠に作ると申す」㊅極めて、細小なる物事の譬。㊆蜂の尾端にある、敵の迫害を受くる時、敵の體に刺して、毒液を注ぐ、細小なる管狀の物。［螫］㊇つりばり(釣針)の略。（草根集）「うき世をば離小島に身はあ

れど針なき釣にかけし玉の緒」㊈陰險なる害心。（擧白集）「心には針持ちながら逢ふ時は口に蜜ある君ぞわびしき」

針の穴【句】針㊀の一端にある、絲を通すための穴。みみ。みづ。めど。

針の穴から天上(テンジヤウ)覗(ノゾ)く【句】次條に同じ。［諺語］

針の穴から天を覗(ノゾ)く【句】「管(クダ)の穴から天を覗く」に同じ。［諺語］

鍼の響【句】人體に、鍼を巧に刺し込む時、知覺神經の刺戟せらるるがために、恰も電氣を導きたるがごとき一種の快感を覺ゆること。

針の溝【句】針の穴のそばにつけたる、細き溝。

針の筵(ムシロ)【句】『晉書の杜錫傳に「愍懷太子署、針著下錫所二常坐一氈中上」とあり』安らかならぬ座席の譬。

針の筵(ムシロ)に坐る【句】『七修類稿に「世皆以二人性不レ堪處一、如レ坐二針毡一」とあり』少しも安心してをられぬ譬。

針は小さくても、呑まれぬ【句】小さくても、侮るべからざる譬。山椒は小粒でも辛(カラ)い。［諺語］

針ほどの穴から、棒ほどの風が來る【句】壁・障子の隙間より漏り來る風の、刺すが如く身にしむ形容。［諺語］

針ほどの事を、柱ほどに言ふ【句】次條に同じ。［諺語］（甲陽軍鑑）「不賢は、必ず針ほどの事をば、柱ほどに申すものなれば」

針ほどの事を棒【句】次條の略。［諺語］

針ほどの事を、棒ほどに言ふ【句】物事を、大袈裟に言ひふらす。針小棒大。［諺語］（甲陽軍鑑）「步(フ)の頸を一つ取りては、侍の頭を十も取りたるやうに、針ほどの事を、棒ほどに、過言を申す」

針を立つ【句】鍼を、人體に刺し込む。（看聞日記）「僧參立レ針、脚氣爲二養生一」

針を立つる土地無し【句】「立錐(リッスヰ)の地無し」に同じ。（盛衰記）「云二國衙一、云二庄園一、無二立レ針之土地一、虜二掠之一」

針を棒【句】次條の略。［諺語］

針を棒に言ひなす【句】次條に同じ。［諺語］

針を棒に取りなす【句】「針ほどの事を、棒ほどに言ふ」に同じ。［諺語］

針を持つ【句】㊀針㊀を、手に持つ。布帛を縫ふ。㊁陰險なる心を抱く。（艶姿女舞衣）「何のためにござったと、針持つ言葉に、妻は氣の毒」

針を以て、地を刺す【句】『說苑に「以レ管窺レ天、以レ針刺レ地、所レ窺者甚大、所レ見者甚小」とあり』小智を以て、大智を測り、力に似合はぬ大事を企つる譬。

はり 張【名】㊀張ること。開き延ばすこと、又その程度。（五人女）「目のはり、りんとして」㊁構へ設くること。（太平記）「手分の一揆、互に勇み爭って、陣の張密(ビキ)しければ」㊂引き張る力。突き張る力。「凧の絲の張強し」㊃いきはり。はりあひ。意氣地。意地。（空穗）「我をはりなしと覺して、はかりたまはん」（一代男）「京の女郎に、江戸のはりを持たせ」㊄［商］はりさうば(張相場)の略。

はり 梁【名】『橫に張り亙したる材の義』屋の棟の下方に於て、それと打違(ウチチガヒ)に、柱の上に亙し、棟を承け、屋根を支ふる材。うつばり。

はり 榛【名】［植］はんのき(榛木)に同じ。［古語］（記）「わが逃げのぼりしありをのはりの木の枝」

はり 玻璃・玻瓈（梵 Sphatika（塞頗胝迦・颯破徵迦）の訛）【名】㊀水精の類。紫・白・黃・碧の四色あり。佛經中に、七寶の一に數へらる。［頗梨・頗黎］㊁がらす(硝子)に同じ。㊂［鑛］玻璃狀の岩石、又は岩石中の玻璃質の部分。

玻璃の鏡【句】「淨玻璃(ジヤウハリ)の鏡」に同じ。（夫木）「照すなるはりの鏡に罪深くしのぶる戀や隱れたるらん」

玻璃の都【句】立派なる都。（曾我）「秦の始皇の玻璃の都もおのづから荆棘の野邊となり」

は-り 羽蟻【名】［動］はあり(羽蟻)の略。

は-り 婆理【名】［音］雅樂の一。唐樂にて沙陀調に屬す。

はり 針【助數】針にて、細かに割き、又は傷口を縫ひ合はする回數。「五針(イツハリ)縫ふ」（祝詞）「天(アマ)つ菅曾(スガソ)を、本(モト)刈り斷ち、末刈り斷ちて、八針に取辟(トリサ)きて」

はり 張【助數】弓・提燈又は幕などの數を數ふるに用ふる語。

ばり 尿【名】いばり(尿)の略。（膝栗毛）「ばりをこいてゐた」

ば-り 罵詈【名】ののしること。めり。惡口。嘲罵。

ばり 張【接尾】㊀弓の弦を張るに要する力の强弱。（盛衰記）「弓は三人張・五人張」㊁他の形式に倣ひて製作し、又は行動しなどする意。「菊五郎張の藝」

はりあげ-あみ 張揚網【名】揚繰(アグリ)網の一種。長方形をなし、中央は縻網にて、長さ四十尋・幅三十尋あり。その左右に各長さ七十尋・幅十六尋の藁製網を著け、上部には浮子(アバ)、下部には沈子(イハ)を著く。なほ、その兩端には、三十餘尋の引綱を附す。大分(オホイタ)地方にて鰯を捕ふるに用ふ。

はり-あこめ 張衵【名】糊を附けて、こはく張りたるあこめ。（兵範記）「御車副八人（蘇芳狩襖袴、出二黃張衵一）」

はり-あさがほ 針朝顏・天茄兒・丁香茄兒【名】［植］旋花(ヒルガホ)科に屬する一年生の草。莖は蔓をなし、柔刺あり。葉は心臟形にて、夏、葉腋より、長き花梗抽き出で、頂に一乃至三輪の花を著け、萼は下部管狀にして多肉、上部は五裂し、花冠は漏斗狀・淡紅紫にして、底部に深紫色の暈あり。果實は蒴果にして、嫩實は食するを得。たうあさがほ。

はり-あひ 張合【名】㊀張りあふこと。せりあひ。競爭。（東海道名所記）「威勢あらそひの張合に、いさかひどよめき」㊁事を爲して効果ありたるに滿足すること。かひ。しるし。「張合あり」「張合なし」

張合が拔ける【句】効果あらはれずして、落膽す。

はりあひ-にんぎやう 張合人形【名】つりあひにんぎやう(釣合人形)を云ふ。［伊賀國

の方言」

はり-あふ 張合ふ【動四自】㊀競(キソ)ふ。せりあふ。向(ムカフ)を張る。競爭す。對抗す。嫗山姥「驕者の右大將に張り合ひ」㊁想を懸けたる一人の女又は男を、互に手に入れんとして爭ふ。つりあふ。俗曲(妹背山綠苧環)「とても及ばぬ戀あらそひ、お姫樣と張りあふとは」

はり-あふぎ 張扇【名】㊀たたみて、地紙の部分を紙にて張り包みたる扇子。講談師が、調子を取るために、机を敲く等に用ふ。〔貼扇・糊扇〕㊁たたみあふぎ(摺扇)に同じ。

張扇から敲き出す【句】講談師が、實說ならぬ事を作りて、誠らしく話す。

はりあみるゐ-ぎよげふ 張網類漁業【名】定置漁業の一。囊網又は立回網(タチマハシアミ)を、支柱もしくは碇などにて、一定の水面に建設もしくは敷設するもの。

はり-あんま 鍼按摩・針按摩【名】鍼醫を兼業とする按摩。島原蛙合戰「鍼按摩久庵」

はりあゐずり-の-こし 張藍摺輿【名】はりこし(張輿)を見よ。山槐記「乘二張藍摺之輿一、令レ持レ幣」

はり-い 針醫・鍼醫【名】はり(針)㊁を用ひて治療する醫者。はりいしや。はりくすし。はりたて。針醫(シンイ)。

ぱりい 巴里・巴黎(佛 Paris)【名】〔地〕佛蘭西國の首府。ぱりす。

はり-いか 針烏賊【名】〔動〕烏賊の一種。胴は、長さに比して幅廣く、頭部の幅も廣く、脚は、長さの不同甚だ僅かなり。

はり-いしや 針醫者・鍼醫者【名】はりい(針醫)に同じ。

ぱりい-せんげん 巴里宣言【名】かいじやうほふえうぎ(海上法要義)に同じ。

はり-いた 張板【名】洗ひたる布帛、漉(ス)きたる紙などを張り延べて、乾すに用ふる厚板。布帛のは、縱六七尺、橫約一尺。

ばり-いた 尿板【名】〔建〕廐の敷板(シキイタ)。

はり-いは 張岩【名】張物の一。岩石の形を造りたるもの。

はり-いれ 針入・鍼入【名】針㊀㊁を入れおく物。八笑人「早速針入を出し、二三本打てば、忽ちうんと蘇る」

はり-うち 針打【名】㊀針に絲をつけ、絲の端を指にてつまみ、針を前齒にてくはへながら、重ね置きたる紙に突き立て、針先に附著して上るだけの紙を所得とする戲。かみうち。㊁摘み細工にて、種種の花形などに製して、足に針を付け、唐人髷・天神髷の根掛に用ふるもの。㊂『髷先の形に本づきていふ』芝居の鬘の一。大天職の傾城に附き添ふ禿(カブロ)の用ふるもの。

針打の島田【句】『もと、元結を針にて留めたるよりいふ』ぶんきんしまだ(文金島田)に同じ。

はり-うど 針獨活【名】獨活を、針の如く細く切りて、料理のつまに用ふるもの。

はり-うなぎ 針鰻【名】〔動〕鰻の稚兒。めそ。しらうをのうば。

ばりうむ 拔僂謨(英 Barium)【名】〔化〕硫酸鹽なる重晶石及び炭酸鹽なる毒重石等となりて、天然に產出し、又、鹽化バリウムの電解によりて得る、淡黃色の金屬。用途は未だ發見せられず、されども赤熱に於て溶融し、水を分解すること、同族の元素カルシウム及びストロンチウムよりも劇烈に、空氣中にありては、容易に酸化す。

はり-うら 張裏【名】衣服の、裏に、張帛(ハリギヌ)を附けたるもの。著聞「張裏の狩衣」

はり-うり 針賣【名】針を賣ること、又その人。醒睡笑「西よりは、針賣の來り、東よりは、烏帽子賣の行き」

はり-えひ 針　【名】〔動〕あかえひ(赤鱏)「に同じ。

はり-おこなふ 張行ふ【動四自】おしはりて爲す。おしきって行ふ。張行(チヤウギヤウ)す。平家「平家は西國に、兵衞佐は東國に、木曾は都に張り行ふ」

はり-かいめん 玻璃海綿・玻瓈海綿【名】〔動〕海綿動物の一類。無色又は黃色を呈し、骨骼を形成せる針骨は、硅石質にして、互に直角に交れる三軸を有する六放體及びその變化せる形を示す。拂子貝・偕老同穴など、これに屬す。六放海綿。

はり-がうり 張行李【名】竹行李の粗末なるものの上に紙を張り、表には漆を塗り、裏は形附紙などを張れるもの。

はり-かご 張籠【名】布帛・紙などにて貼りたる籠。二代男「忍魚賣(シノビウヲウリ)、張籠の底より、風を入れ」

はり-かた 張型・張形【名】陰莖又は女陰の形に造り、不自然的に情慾を洩すに用ふる具。あづまがた。すがた。陰相。犬筑波「あづまぢの誰(タ)が娘とか契るらん(こいふ句に)あふ坂山を越ゆるはりかた」八笑人「市に張形を賣りあしめえし」

はり-かづら【名】〔植〕しわう(藤黃)㊀に同じ。

はり-がね 針金・線金【名】金屬を、細長く、絲の如くに引き延ばしたるもの。用途廣し。線金(センキン)。奴師勞之「はりがね、はりがね、二尺一文、はりがねと呼びて、江戶中を賣り步く老父あり」

はりがね-いり 針金入【名】針金を心(シン)に入れたる物。織留「針金入の刎(ネ)元結」

はりがね-うり 針金賣【名】江戶にて、明和の頃まで、針金を賣りあるきしもの。

はりがね-ざみせん 針金三味線【名】特種の音色を發せしむるために、針金を絃としたる三味線。

はりがね-だより 針金便【名】でんしん(電信)に同じ。〔明治初年の語〕

はりがね-ひき 針金引【名】針金を造る人。線金工。

はりがね-びき 針金引【名】金屬にて造り、方圓・大小種種の孔ありて、粗製の針金を、その孔をくぐらせ、太さを均一ならしむる具。

はりがね-むし 針金蟲・線蟲【名】〔動〕㊀圓蟲類に屬する蠕形(ゼンケイ)動物。絲の如く纖長にして、長さ一二尺。淡黑色を呈す。種類多く、幼蟲は蟷螂(カマキリ)その他の昆蟲の腹內に寄生し、終に水中に出でて、老成す。雄は尾端叉狀をなし、雌は、然らず。あしまつひ。線蟲(センチユウ)。㊁米突蟲(コメツキムシ)の幼蟲。

はりがね-わらび 針金蕨【名】〔植〕水龍骨(ノキシノブ)科に屬する多年生の草。陰濕の地に生じ、根莖より、長柄を具ふる大葉を生ず。葉面は羽片を左右に分ち、羽片は更に上下に小羽片を密生し、小羽片の基脚の兩側に、子囊群附著せり。

はり-かは 張皮【名】はりがほ(張顏)に同じ。

はりかは-ぐら 張革鞍【名】毛皮を張りて作れる鞍。武家の所用とす。はりぐら。東鑑「黑塗のはりかはぐら」

はり-かはご 張革籠・張皮籠【名】かはご(革籠)に同じ。義經千本櫻「これは張皮籠、こちは衣類の藤行李」

はり-かふ 張替ふ【動下二他】舊きを除き、代りに、新しきを張る。相模集「秋來ぬとふるき扇を忘れなばまた張りかへよよこめならぬに」

はり-かへ 張替【名】㊀張り替ふること、又、張り替へたる物。織留「提燈(チヤウチン)の張替」㊁衣類を解きて、洗張をすること、又その方法によりて仕立てたる衣類。

はり-かべ 張壁【名】下地を板張とし、その上に紙又は葛布・芭蕉布、その他の布帛を張りたる壁。

はり-がへ 張替【名】㊀弓の、豫備の料として、弦を掛けずにあるもの。太平記「張替の弓の寸引(スビキ)して」㊁かけがへ(掛替)に同じ。平家女護島「我等が兄は提燈屋、張替もない、たった二人の兄弟」

はりがへ-もち 張替持【名】張替(ハリガヘ)㊀を持つ從者。東鑑「張替持一騎」

はり-がほ 張顏【名】弓に弦を張りたるありさま。はりかは。〔射藝の語〕

はり-がみ 貼紙・張紙【名】㊀糊にて、物に貼り附けたる紙。㊁注意又は意見などを記して、糊にて貼り附けおく紙。おしがき。附箋。㊂禁止・命令・注意等の事項を記して、多くの人に示すために貼り揭ぐる紙。はりふだ。はりぶみ。揭示。壁書。二代男「生垣の中に、張紙、萬葉書にして、屋彌樣於路志藥あり」㊃次條の略。

はりがみ-ねだん 貼紙値段・張紙値段【名】德川時代に、春・夏・冬の三季に分ち

て給與する切米（キリマイ）の內、幾分を金にて渡す場合に、米の直段を記して、幕府の中の口に張り出したるもの。はりがみ。

ばりかん【名】『もと專ら佛蘭西のバリカンマアル（Bariquand & Marre）製作所の製品を用ひしに本づくといふ』人又は獸類の毛髮を刈るに用ふる、金屬製の器具。上下相接觸せる二枚の櫛形の刃と、叉狀の把手とより成り、把手を動かして、交互に廣く又狹くすれば、櫛形の刃は、往復運動して、毛髮を剪斷す。

（ばりかん）

は-りき 齒力【名】德川時代に、重き物を齒にて啣へ持つを藝とせし物貰。

はり-き 玻璃器・玻瓈器【名】硝子にて製したる器物。

はり-ぎ 張木【名】〔建〕**こうばり**（勾張）㊁に同じ。

はり-ぎ はり木【名】〔植〕**このてがしは**（側柏）を云ふ。〔土佐國の方言〕

ば-りき 馬力【名】㊀**にばしや**（荷馬車）に同じ。（車力に對して）㊁動力の多少。

馬力を掛く【句】精出して、仕事を進行せしむ。

馬力を出す【句】前條に同じ。

ば-りき 馬力【助數】〔理〕『英 Horse-power』もと英人ワット（Watt）が、蒸氣機關を考案し、その發生する動力の額を示すため、馬が機械を挽き動かす時に出し得べき力を標準として規定せしもの』工業上一般に用ふる動力の單位。英國の一馬力は、一分間に三萬三千呎封度（フウトポンド）又は一秒間に五百五十呎封度の仕事をなす工率をいひ、佛國のは、毎秒七十五瓩米（キログラムメエトル）の仕事をなすをいふ。又、蒸氣機關には、公稱馬力・指示馬力・正味馬力の三種あり。**めえとるばりき**（米突馬力）參照。

ば-りき-じ 馬力時【助數】『英 Horse-power-hour』仕事の單位の一。一馬力時は、一馬力の工率を以て、一時間になせる仕事。

はり-ぎぬ 張帛【名】板引にしたる布帛。

はり-ぎぬ 張衣【名】張帛（ハリギヌ）にて仕立てたる衣。著聞「張衣のあざやかなるに、長絹の五帖の袈裟……掛けたる老僧」

はり-きやう 玻璃鏡・玻瓈鏡【名】硝子の裏面に、水銀をひきて造りたる鏡。

はり-ぎり 針桐・刺桐・刺楸【名】〔植〕五加（ウコギ）科に屬する落葉喬木。桐に似て、高さ七八丈、周圍一丈餘に達す。樹皮、濃褐色にして粗糙、枝肥大、鋭刺多し。葉は長葉柄ありて互生し、掌狀にして、七片乃至九片に裂く。七月頃、梢上に二三十の花梗を抽き、淡綠色の細花、圓錐狀の繖形花序をなす。材は枕木・建築材又は器具用に供す。嫩葉は食ふを得。あくだら。さはぐり。しほぢ。せん。せんのき。ぼう。ぼうだら。ほほだら。はりもみぢ。

はり-きる 張切る【動四他】㊀引き張りて切る。和泉式部集「うへのきぬを張り切りて、いとをしき事」㊁強く張り延ばして切り、又は裂く。日本武尊吾妻鑑「すはと言はば、縛繩（シバリナハ）張り切ってくれんもの」

はり-きる 張切る【動四自】㊀どこまでも押し通す。㊁馬など勇みはやる。勢力橫溢す。

はり-きる 張切る【動下二自】**はりさく**（張裂）に同じ。

はり-くすし 針醫・鍼醫【名】**はりい**（鍼醫）に同じ。

はり-くだく 撲碎く・批碎く・拊碎く・張碎く【動四他】なぐりて碎く。孕常盤「握拳にて、しや頭、微塵にはり碎かん」

はり-くぢく 撲挫く・批挫く・拊挫く・張挫く【動四他】なぐりて挫く。浮世風呂「生醉だから不承（フシヨウ）すらあえ。さもなけれやあ、とっくに張りくぢくんだあ」

はり-くやう 針供養【名】『淡島（アハシマ）神社の祭神は、俗に婆利才女（ハリサイニヨ）なりと稱せらるるより、波利を針に通はせて行はれ初めしものならんか』德川時代に、二月八日の事始の日に、婦女子の、針の折れたるを集めて、淡島（アハシマ）の社に納め、當日裁縫の業を休みしこと。

はり-ぐら 張鞍【名】**はりかはぐら**（張革鞍）に同じ。鎌倉年中行事「公方樣御張鞍、虎豹皮・葛切付」

ばりけん 麝香鴨（蘭 Bergeende の訛）【名】〔動〕『原語は山鵞の義』游禽類に屬する鳥。形、鶩（アヒル）に似て、それよりもすこし大きく、毛は背部綠色を呈し、光澤あり、顏面裸出し、頭部に冠毛あり。南亞米利加に產し、體色美なるがために、飼養せらる。おらんだあひる。麝香あひる。

はり-こ 張子・張兒・張紙【名】『張紙（ハリカミ）の音便なる「はりから」の訛。一說に、張籠（ハリコ）の義なりと』**はりぬき**（張拔）に同じ。禁祕抄「高倉院御時、張兒爲二主上一不吉事」和合人「張紙の臺か何かを背負（シヨ）ってゐるのが」

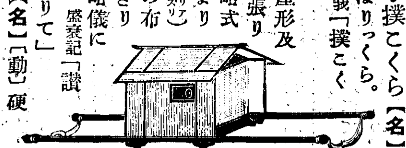
”張子の虎【句】「張拔（ハリヌキ）の虎」に同じ。

はり-こかす 撲轉す・批轉す・拊轉す・張轉す【動四他】**はりたふす**（撲倒す）に同じ。傾城酒呑童子「ええ、因果めと撲りこかす」

はりこ-がひ 張子貝【名】香などを納るるために、張子にて、貝の形に造れるもの。

はり-こくら 張こくら・撲こくら【名】互になぐり合ふこと。はりっくら。なぐりっくら。百日曾我「撲こくら・蹈（フ）こくら」

はり-ごし 張輿【名】屋形及び左右兩側に疊表を張りて、押緣を打ちたる、略式の輿。平安朝の末頃より行はれ、初、張藍摺（ハリアヰズリ）の輿とて、藍摺などの布を張り、貴人は用ひざりしが、室町時代には、略儀には、將軍も乘用せり。盛衰記「讃岐院を、張輿に載せ奉りて」



（はりごし）

はり-ごち 針牛尾魚【名】〔動〕硬骨類に屬する魚。形、牛尾魚（コチ）に似たれども、吻部突出して、その端圓く、又その上面は骨質にして、數多の刺あり。又、體側に沿ひて、數多の骨板列あり。各板に棘あり。近海に棲息す。たねど。ねずっぽ。

はり-ごと 張言【名】互に負けじと言ひ張ること。意地を張りていふ言葉。〔古語〕新六「徒らにまだ手も觸れぬそりまゆみ人ばおしてるはりごとなせそ」

はりこ-にんぎやう 張子人形【名】張子にて作りたる人形。

はり-こみ 張込【名】㊀はりこむこと。奮發して散財すること。千兩幟「何ぢや。羽織・脇差、米もある。えらい張込ぢやの」㊁張番をなすこと。みはり。㊂頭ごなしに叱りつくること。

張込を附ける【句】㊀見張を置く。張番をなさしむ。㊁罪人逮捕の手配をなす。

はりこみ-ちやう 貼込帳【名】新聞紙の切拔などを貼り込み得るやう作りたる帳簿。すくらっぷぶっく。

はり-こむ 張込む【動四他】㊀**はる**（張る）㊆を強めていふ語。「水を張り込む」㊁精を込む。力を入る。いきごむ。奮發す。㊂奮發して散財す。おごる。㊃**はる**（張る）㊉を強めていふ語。㊄罪人逮捕の手配をなす。㊅博徒、一時に、多くの金錢を賭く。

はり-こむ 撲込む・張込む【動四他】つきこみて言ふ。言ひ負かす。やりこむ。浮世床「一杯にはりこまれて、……ぐっと癪に障ったから」四方のあか「歸去來の辭を評して、淵明、元來金持なるべし、僅かの荒地をもちて、口をきくこそ憎けれと、一口にはり込みし痴者（シレモノ）なり」

はり-こむ 張籠む【動下二他】擴げて、中に取り籠む。寬平后宮歌合「春霞網にはりこめ花散らばうつろひぬべし鶯とめよ」

はり-ころす 撲殺す・批殺す・拊殺す・張殺す【動四他】なぐりて殺す。たたきころす。曾我會稽山「梶原め。八幡（ヤハタ）め。毆（ハ）り殺してのけん」

はりさい-によ 婆利才女【名】『**はりぢよ**（婆利女）に附會せるものか』俗に、淡島（アハシマ）大明神の祭神にて、天照大神の第三女、住吉明神の妃神なりといふもの。但し淡島神社の祭神は、普通は少彥名（スクナヒコナ）神なりといふ。**はりくやう**（針供養）參照。俗曲（傾城音羽の瀧）「紀州名草の郡加太（カダ）淡島大明神の由來を詳（クハ）しく尋ね奉るに、天照大神より第三番目の姫宮、はりさい女と申し奉る神の御身なり」

はりさう はり草【名】〔植〕㊀虎耳草（ユキノシタ）科に屬する多年生の草。高さ五七寸に達し、葉は質厚く、心臟形をなし、鋸齒を有す。秋、莖頂に、白色の花を開く。せんだいさう。きだちのゆきもやう。㊁くろくもさう（黑雲草）に同じ。

はりさうば 張相場・張相塲【名】〔商〕取引所設置の必要なき小都會の取引所にて、中央市場なる大取引所の日日の相場を基とし、大阪張・東京張など稱して、初より解合（トケアヒ）の約束によりてなす賣買。その實は、相場に對する一の賭博なり。はり。

はりさき 針先【名】針の先端。犬筑波「一口にくふべき蛸を盜まれて（といふ句に）針先の餌を粗相にやさす」

はりさく 張裂く【動下二自】㊀張りふくれて、遂に裂く。はりきる。㊁悲・怒・苦などの情に堪へぬ形容。

はりさし 針刺【名】布帛にて、綿を包みて作り、針を刺し置くに用ふる具。はりたて。はりやま。一代女「針刺の數を改めおきて、仕舞ふ時、また針を讀みて」

はりし 針師・鍼師【名】『師は假借の文字にて、實は爲（シ）の義』㊀鍼治に從事する者。**てんやくれう**（典藥寮）參照。大寶令「針師五人、掌下療二諸瘡病一補寫上」㊁はりすり（針磨）に同じ。

はりしごと 針仕事【名】衣服を縫ひ絎けなどするわざ。しごと。裁縫。

はりしたがさね 張下襲・張下重【名】板引にしてこはく張りたる下襲。

はりしたじゆ 波利質多樹（梵 Paricitra（波利質多羅・璆利質羅））【名】〔佛〕『香遍樹又は天樹王と譯す』忉利（トウリ）天上にありて、諸色具はり、根・莖・枝・葉・果實、すべて香しく、遍く忉利天宮に薰ずといひ、又、菩薩の出家して、具足戒を受け、諸行（シヨギヤウ）を具足して、大涅槃（ダイネハン）を得る功德に譬へらる。波利樹。

はりしたら 波利質多羅【名】〔佛〕前條に同じ。

はりしつ 玻璃質・玻瓈質【名】〔鑛〕『英 Glassy 又 Vitreous』諸鑛物の、岩漿をなして噴出したるものの、速かに固結したるため、結晶する暇なくして、一見玻璃に酷似せること。十勝（トカチ）石などは、全部、この質を呈す。

はりしつくわざんがん 玻璃質火山岩・玻瓈質火山岩【名】〔鑛〕玻璃質なる火山岩。前條參照。

はりしづむ 張靜む【動下二他】張りて落ちつかしむ。たしかに張る。源氏「箏（サウ）の琴は、……、琴柱（コトヂ）の立處（タチド）亂るるものなり。……、女は、元張りしづめじを」

はりしば 張芝【名】盛土（モリツチ）又は切取の法に於て、土芝を置き、竹串にて、これを保持し、斜面保護の用をなすもの。

ぱりじやん（佛 Parisien）【名】㊀佛蘭西國巴里の市民。（聰慧なると清楚なる風貌を具へたる點とにつきて、特にいふ）㊁佛蘭西國巴里に遊びたる人、又その氣分を理解せる人。

はりじゆ 玻璃樹・波利樹【名】〔佛〕はりしたじゆ（波利質多樹）の略。榮花「玻璃樹のたをやかなる枝は、池の底に見えたり」

はりじゆてん 波利樹天【名】〔佛〕三十三天の一。

はりしよう 玻璃鐘・玻瓈鐘・頗梨鐘【名】「玻璃珠（ハリス）の鐘」に同じ。

はりす 玻璃珠・玻瓈珠・頗梨珠【名】『智度論に見ゆ』はり（玻璃）㊀に同じ。

玻璃珠の鐘（カネ）【句】祇園精舍（ギヲンシヤウジヤ）の無常院の中にありし無常堂の四隅に、一箇づつありて、形、腰鼓のごとくなりきといふ、玻璃製の鐘。無常院の四隅にも、一箇づつの銀製の鐘ありきといふ。榮花「天竺の祇園精舍のはりすの鐘の音に、諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂と聞ゆれば」

ぱりす 巴里・巴黎（英 Paris）【名】〔地〕ぱりい（巴里）に同じ。

はりすが 刺鮍【名】〔動〕つのじを云ふ。〔常陸國水戶の方言〕

はりすげ 針菅【名】〔植〕莎草（カヤツリグサ）科に屬する多年生の草。高さ四五寸乃至約一尺に達し、短小なる葉叢生し、初夏、花莖を抽き、梢上に、一箇の穗狀花を生じ、下部に、やや綠色なる雌花、上部に、褐色なる雄花を著く。原野に自生す。ものみぐさ。

はりすぢ 針筋【名】㊀針にて縫ふ筋目。はりめ。ぬひすぢ。織留「針筋を揃へて、薄絹の蚊屋を縫ひけるに」㊁磁石の針の指す方向。針路（シンロ）。〔船子の語〕

はりすひいし 針吸石【名】じしやく（磁石）に同じ。

はりずまふ 撲相撲・批相撲・拊相撲・張相撲【名】撲手を用ひてする相撲。狂言（文相撲）「只今の手は、都方にはやる、はってはり廻すはりずまふ」

はりすり 榛摺【名】古、榛の樹皮にて、布を染めしこと、又その布。はりのきぞめ。はぎはら（萩原）參照。紀「蓁摺、ハリスリ」

はりすり 針磨【名】金屬を磨りみがきて、針に製するを業とする人。針師。七一職人歌合「はりすり。情なき人に心をつくしばりみづからなどか思ひそめけん」

はりせい 針生【名】古、典藥寮に在りて、鍼術を習ひし學生。大寶令「針生二十人、掌レ學レ針」

はりせんぼう 針千本・魚虎【名】〔動〕次條に同じ。

はりせんぼん 針千本・魚虎【名】〔動〕固顎類に屬する魚。體形、河豚に似て、長さ三四寸、大なるは一尺に及び、背部黑く、腹部は白し。體面には、長刺多く、常には平臥すれども、空氣を含みて、體を膨らす時は、悉く直立して、栗毬（ガイ）狀となり、以て體を保護す。我國、北海道・佐渡に產す。

はりそ 張訴・貼訴【名】德川時代に、評定所その他の官衙、又は老中以下の家の門などに、訴狀を密かに貼り置きしこと。捨訴（ステソ）と同樣のものにて、幕府は箱訴（ハコソ）の道を開き、捨訴・箱訴に對しては、禁令を發したり。**もんそ**（門訴）參照。

はりそへ 張添【名】女の髮の結ひ方の一。德川時代に行はれしもの。張出㊂を用ひたるなるべし。

はりだ 治田・墾田【名】新に開墾せし田。墾田（コンデン）。新田。〔古語〕紀「墾田、ハリタ」

はりだくみ 張工【名】**きやうじや**（經師屋）に同じ。

はりだこ 張鮹・張蛸【名】『ひっぱりだこ（引張凧）を見よ』㊀張りひろげて乾したる鮹。狂言（鮹）「四方へはりだこの、照る日に照され」㊁能（ノウ）の狂言の一。或大名、一門の饗應のために、冠者をして、都に出でて、張鮹を買ひ來らしめしに、冠者は、張鮹の形を知らず、ただ疣あるものとのみ心得て、古太鼓を、疣のある「はりだいこ」と欺かれて、買ひ來る事を作れるもの。

はりだし 張出【名】㊀張りだすこと、又その物。㊁**はりがみ**（張紙）㊂に同じ。㊂德川時代に、女の結髮の時、兩鬢を張り出すために、鯨鬚などにて製して、鬢の下に入れし具。㊃番附の欄外に記すこと、又その物。

はりだしおほぜき 張出大關【名】番附の欄外に記す、別格の大關。

はりだしまど 張出窓・張出窻【名】突き出したるやうに作れる窓。

はりだす 張出す【動四他】㊀張りひろげて、外部へ出す。狹き場所を擴げ出す。突き出す。おしだす。「緣側を張出す」㊁紙又は札に記して揭示す。〔貼出す〕

はりたつ 張立つ【動下二他】張りひろげて立つ。〔古語〕記「初瀨（ハツセ）の山の大峽（オホヲ）には幡（ハタ）はりたて、狹小峽（サヲヲ）には幡はりたて」

はりたて 針立【名】㊀はりさし（針刺）に同じ。㊁『鍼（ハリ）を立つ』を見よ』針㊁を用ひて、療治すること、又それを業とする醫者。鍼醫。〔鍼立〕きのふはけふの物語「腹を再再痛がりければ、つねづね、針立を呼びて、立てさせける」醒士産「しやくしの德人といふ針立」

はりたてかみなり 針立雷【名】能（ノウ）の狂言の一。京都の藪醫者、東國へ稼ぎにゆき、武藏野にて、雷雨に會ひしが、雷、雲を踏みはづして落ち、腰骨を打って、大いに惱めるに、療治を加へし事を作れるもの。

はりたふす 撲倒す・批倒す・拊倒す・張倒す【動四他】撲りて、倒れしむ。なぐり倒す。はりとばす。はりこかす。

はり-だましひ 張魂 【名】 意地を張りとほさんとする氣質。一徹なる氣前。かちき。まけじ魂。盛衰記「木曾は、張魂の男にて、言ひたちぬる事を飜さぬ者なり」

はり-ぢよ 婆利女 【名】 娑竭羅（シャカツラ）龍王の第三女にて、牛頭（ゴヅ）天王の娶れりといふ者。**はりさいによ**（婆利才女）參照。

はりぢよ-の-やしろ 婆利女社 【名】 京都市高辻の北、室町の西にある社。婆利女を祀る。婆利女と繁昌と、國音相近きを以て、俗に繁昌の社といふ。

はりぢよ-まつり 婆利女祭 【名】 婆利女の社の祭禮。もと七月二十日なりしを、後、九月二十日になれりといふ。

は-りつ 跛立 【名】『立の字の音、正しくはリフ』片足にて立つこと。

は-りつ 破笠 【名】 破れたる笠。やぶれがさ。醒睡笑「破笠・鶉衣」

はりつ 破笠 【名】〔人〕 **をがはりつ**（小川破笠）を見よ。

はり-つく 貼附く 【動四自】 ねばりつく。粘著す。

はり-つく 張附く 【動下二他】 ❶糊にて、紙などを物に貼る。［貼附く］ ❷磔（ハリツケ）にして殺す。［磔く］ 今昔「法師をば……其所にはりつけて、射殺してけり」

はり-つく 撲付く・批付く・拊付く 【動下二他】 **はる**（撲る）を強めていふ語。

ばり-つく 【動四自】 ばりばりとす。極めて幅が利く。浮世風呂「ばりついた本書（ホンカキ）に、龜喜といふが有ったげな」

はり-つけ 磔 【名】『張附の義』刑罰の一。もとは、手足を、地上又は板に張りひろげ、釘にて打ち附けおきて殺し、土磔（ツチハツケ）・機物（ハタモノ）などともいひしが、後には、十字架上に大の字形に縛りつけ、槍にて、左右の兩腋より突き上げて殺したり。はっつけ。はつけ。平治「搦め捕り、磔にこそせられけれ」

はり-つけ 貼附・張附 【名】 ❶襖又は壁などに、紙を貼りつくること、又は、その貼りつけたる所。❷紙に繪を書きて、壁又は小壁に張り附けるたるもの。寺院又は大なる建物の內部に多し。

はりつけ-がみ 貼附紙・張附紙 【名】 張附に用ふる料の紙。

はりつけ-ぎ 磔木 【名】 **はりつけばしら**（磔柱）に同じ。

はりつけ-ど 貼附戶・張附戶 【名】 片面を貼紙にせる戶。

はりつけ-ば 磔場・磔塲 【名】 磔の刑を執行する場所。東海道名所記「左の方に磔場あり」

はりつけ-ばしら 磔柱 【名】 磔の刑に處する罪人を縛りつくるための柱。十字形を爲す柱。はりつけぎ。十字架。

はりつ-ける 張附ける 【動下一他】 **はる**（張る）〔十〕を強めていふ語。和合人「盗人猫（ドロバウネコ）が土龍（モグラモチ）を狙ふやうに、氣を長長とはりつけるが」

はりつ-ざいく 破笠細工 【名】 元祿の頃、小川破笠の製作せし漆器。陶器・角・牙・木片・錫などにて、物の形を作り、漆器の要所に嵌入せるもの。笠翁細工。

はり-づつ 針筒・鍼筒・針管 【名】 鍼醫が療治に用ふる針を入るる筒。和名「針管、波利都都」 名義抄「針筒、ハリヅツ」

はり-つづみ 張鼓・張皷 【名】 玩具の一種なる鼓。調（シラベ）の緒なくして、革を強く張りたるものなるべしとも、又、**ふりつづみ**（振鼓）の轉ならんともいふ。俳諧饗子「けふといへば鶯笛や張鼓」

はり-づな 張綱 【名】 ❶馬の口に取り附け、左右へ引き張るもろさし綱。〔古語〕 增鏡「張綱にて、移（ウツシ）の馬を引かせけるとぞ」 ❷張りわたせる綱。太平記「浮橋を一間、張綱を切ってぞ捨てたりける」

ばり-つぼ 尿壺 【名】 厠の內に設け、上に簀蓋を設けたる尿溜（バリダメ）。

はり-つむ 張詰む 【動下二自】 ❶十分に張る。一杯に滿つ。❷心、十分に張り滿つ。精神緊張す。最明寺殿百人上臈「取傳へたる梓弓、矢竹心は張り詰めて」

はり-て 針手 【名】 裁縫の仕事、又それに巧みなる人。曾我五人兄弟「彼方・此方の針手を賴み、心心に仕立てし故」

はり-て 撲手・批手・拊手・張手 【名】 ❶抵抗心の盛んなる人。彈力性のある人。❷相撲（スマフ）の手の一。手にて、相手の橫面を打つもの。はり。はりずまふ。

はりて-きき 針手利 【名】 裁縫に巧みなること、又その人。平家女護島「木の葉を集め、縫ひ綴る針手きき」

はり-どの 張殿 【名】 古、衣服を打ち、板引などせし建物。はりや。三二職人歌合「はり殿。きぬどもを春の日しめしおきもあへず花見の出立（デタチ）急がる頃」

はり-とばす 撲飛ばす・批飛ばす・拊飛ばす・張飛ばす 【動四他】 撲りて、相手の跳ね飛ぶやうにす。はりたふす。なぐりとばす。膝栗毛「死損（シニゾコナヒ）めだ。張りとばしてやらう」 八笑人「拳を固めてはりとばせば」

ばり-とん 上低音（英Barytone）【名】〔音〕 男性の聲の、中音と低音との中間なるもの、又その唱奏者。

はり-なす 針茄・針茄子 【名】〔植〕 **はりなすび**（針茄）に同じ。

はり-なす 墾成す 【動四他】 新たに土を掘りて、田畑又は池溝などに作りなす。

はり-なすび 針茄・針茄子 【名】〔植〕 **てうせんあさがほ**（朝鮮朝顏）に同じ。

はり-にし 針螺 【名】〔動〕 **ほねがひ**（骨貝）に同じ。

はり-ぬき 張拔・張貫 【名】 木製の型に紙を重ね貼り、糊の乾きたる後、截りて、型を拔き去り、再び接合して作ること、又その物。はりこ。東大寺私記「四天王……立像張貫」 若風俗「若衆千體、張貫に拵へ」

張拔の虎 【句】 ❶張子にて、虎の形を作り、首は、別に、絲にて吊り附け、搖れ動くやうにせる玩具。張子（ハリコ）の虎。❷首をふり動かす癖ある人を嘲りていふ語。張子の虎。風來六部集（放屁論後編）「脫活（ハリヌキ）の虎見るやうに、……、風次第で首を振って」

はりぬき-づつ 張拔筒・張貫筒 【名】 ❶昔、張拔にて造りし鐵砲。❷張拔にて圓く長く造りたる筒。

はり-ぬく 張拔く・張貫く 【動四他】 張拔に造る。張子を造る。萬紫千紅「かの夕霧が文もて、富士の山を張りぬきし如く」

はり-ねずみ 針鼠・蝟・猬 【名】〔動〕 食蟲類に屬する獸。體長五六寸、全身灰褐色にして、形、鼹鼠（モグラ）に似、腹部の外は、銳くして黑白相交れる中空の棘毛密生す。口吻尖銳、犬齒なし。眼と耳殼とは小く、指趾には鉤爪あり。晝は樹洞・石下に隱れ、夜間、出でて、小獸・小蟲又は果實を食ひ、敵に遭へば、體を球狀にし、棘毛を立てて、身を護る。くさぶ。けはりねずみ。箭猪（センチヨ）。**ゐしふ**（蝟集）參照。

（はりねずみ）

はり-の-き 榛樹・赤楊 【名】〔植〕 **はんのき**（榛樹）に同じ。〔古語〕 記「わが逃げのぼりし、ありをのはりの木の枝」

はりのき-ぞめ 榛木染 【名】 **はりすり**（榛摺）に同じ。狂言（吃）「かちんや、淺黃や、はりの木ぞめに柿染」

はりのき-たうげ 針木峠 【名】〔地〕 飛驒山脈中にありて、同山脈中最も高き峠。高瀨・黑部兩川の分水嶺に當り、高さ八三八五尺。信濃・越中兩國の界をなす。

はり-のく 撲退く・批退く・拊退く・張退く 【動下二他】 撲りて退かしむ。なぐりてのかす。曾我扇八景「はり退け、突き退け、割って乘る」

はり-のこす 貼殘す・張殘す 【動四他】 一部分を貼らずに殘す。惟然「張り殘す窻に鳴き入る竈馬（イトド）かな」

はり-のし 張熨斗 【名】 贈物に、熨斗を張りつけたるもの。和合人「この熨斗の先を、ちよいとかすって、張熨斗、張熨斗」

はりの-りう 針野流 【名】 射術の一派。吉田流の祖なる吉田上野介重賢の門人針野某の創めしもの。

はり-はかせ 針博士 【名】 古、典藥寮に在りて、針生を敎ふることを掌りし役。大寶令「針博士一人、掌㆑敎㆓針生等㆒」

はり-ばかま 張袴 【名】 板に展して、こはく張りたる平絹の袴。增鏡「御引直衣・打御衣・張袴」 禁秘抄「張袴、略儀生袴」

はりばこ 針箱・針筥【名】㊀裁縫の用具一切を入れおく匣。上面には、蝶番にて取り附けたる半開の蓋あり、その下の空處には、針山を置き、側面には、抽斗(ヒキダシ)等を設く。散木「針箱のふたつの袖にさしつれど一つも見えず落ちにけるかな」 一代女「しばし針筥に靠(ヨリカカ)りて」 ㊁いんばいふ(姪賣婦)を云ふ。〔信濃國の方言〕

はりばこ 張箱・張筥【名】外側を布・革などにて張りたる箱。

はりばこや 張箱屋・張筥屋【名】張箱を商ふ家、又その人。一代男「そなたは、張箱屋又は組帶屋どのであるべし」

はりばん 張番【名】見張りて、番をすること、又その人。みはりばん。番人。小町踊「川口の張番となる氷かな」

はりはんがん 玻璃斑岩・玻瓈斑岩【名】〔鑛〕『英 Vitrophyre』玻璃狀の石基を有する斑岩。

はりばんだち 張番立【名】張番の役を勤むる人の如くに、直立すること。女殺油地獄「先に、輿兵衞帆柱立、後(アト)に、仁王の張番立」

はりはら 榛原【名】榛木(ハンノキ)の一面に生ひたる平地。はぎはら(萩原)參照。〔東國の古の方言〕 萬葉「伊香保ろのそひのはり原ねもころに奥をな兼ねそまさかしよかば」

はりはり【名】はりはりだいこん(はりはり大根)の略。

はりはり【貌】固き物を噛む音。

ばりばり【貌】㊀物を引き搔き、引き剝し、引き裂き、又は堅き物を噛み碎く等の音。㊁極めて新しく丈夫なる物、又は糊などの附きて、こはばりたる物に觸るる音。曾我五人兄弟「未だばりばりと新しく、手も通さぬ小袖の襟數」

ぱりぱり【貌】㊀前條に同じ。狂言(鱸庖丁)「庖丁人……刀早に、すっぱりすっぱり、ぱりぱりすっぱりと作りすまいて」 ㊁羽振(ハブリ)のよきさま。權勢の盛んなるさま。

はりはりぐさ はりはり草【名】〔植〕いはがねさう(岩根草)に同じ。

ばりばりさう ばりばり草【名】〔植〕こあかそに同じ。

はりはりだいこん はりはり大根【名】『噛む音の、はりはりとするよりいふ』蓑干(ミボシ)大根を、細く切りて、酢と醬油と味醂とに漬けたる食品。はりはり。

はりひぢ 張臂・張肘・張肱【名】いきばる時、臂を、左右へ張り出すこと。東海道名所記「中にも、名取(ナトリ)衆は、高雄・唐崎・千歳とかや、はり臂の者なり」 雪女五枚羽子板「袂張肱、のしのしと歩むとすれど」

はりひとへ 張單【名】引板にして、こはく張りたる單衣。

はりひらく 墾開く【動四他】開墾(カイコン)す。はる。〔古語〕 名義抄「墾開、ハリヒラク」 字鏡集「墾、ハリヒラク」

はりふあ (英 Khalifa)【名】ムハメッド敎國にて、ムハメッドの後繼として、その國の君主兼敎主たる者。

はりぶき 針蕗【名】〔植〕㊀五加(ウコギ)科に屬する落葉灌木。高さ四五尺。幹・葉共に刺を密生し、葉は掌狀にして、十二三片に淺裂し、缺刻多く、緣邊に鋸齒あり。夏、帶紅白色の小花、球形をなして開く。深山に自生す。くまだら。ほとこ。 ㊁くろくもさう(黑雲草)に同じ。

はりふぐ 針河豚・綳魚・箴疵【名】〔動〕河豚の一種。長さ六寸餘、全身に細き棘ありて、針の簇生せるがごとく、齒は上下とも、各連なりて一箇となれり。我國、近海に產す。かへるふぐ。ひしふぐ。

はりぶくろ 針袋【名】針を入れおく袋。萬葉「針袋とりあげ前におきかへさへばおのともおのや裏も繼ぎたり」

はりぶくろ 鍼囊【名】〔書〕『歌文を布帛に、手爾乎波を鍼に譬へて名づく』手爾乎波(テニハ)の性用を詳說したるもの。二卷。鹿持(カモチ)雅澄(マサズミ)の著。

はりふだ 貼札・張札【名】はりがみ(貼紙)㊂に同じ。一代男「京世之介樣御床と、張札して置くこそ可愛けれ」

はりぶみ 貼文・張文【名】はりがみ(貼紙)㊂に同じ。東鑑「被レ置二一紙張文於府廳一」

はりぶんこ 張文庫【名】紙張の文庫。

はりぼう 張ぼう【名】はりぬき(張拔)を云ふ。〔豐後國の方言〕

はりま 張間・梁間【名】〔建〕『英 Span』迫持(セリモチ)又は梁などの支承間の距離。はりゆき。(桁行(ケタユキ)に對して)

はりま 播磨【名】㊀〔地〕山陽道八國の一。姬路市及び明石(アカシ)・美囊(ミナギ)・加東・加西(カサイ)・加古・多可・印南(インナン)・飾磨(シカマ)・揖保(イボ)・神崎(カンザキ)・赤穗・佐用(サヨ)・宍粟(シサハ)の十三郡あり。全國、兵庫縣の管轄に屬す。播州。 ㊁〔人〕ゐのうへはりま(井上播磨)を見よ。

はりまあさぎ 播磨淺葱・播磨淺黃【名】古、播磨國より染め出だしし、淺葱色の布帛。かちいろ(褐色)參照。〔古語〕 義經記「白き小袖一重に、唐綾を著重ね、播磨淺黃の帷子(カタビラ)を、上に召し」

はりまうはに 播磨上荷【名】しかまぶね(飾磨船)に同じ。

はりまかがみ 播磨鑑【名】〔書〕播磨國の地誌。十六卷。同國印南(インナン)郡平津の人平野庸脩の著。

はりまがみ 播磨紙【名】播磨國より產する、一種の紙。狂言(かくすい)「播磨紙いかなる人がかくすいて筆は走れど文字はとどまる」

はりまぐ 撲曲ぐ・批曲ぐ・拆曲ぐ・張曲ぐ【動下二他】曲る程に、強く撲る。娼妓絹籭「白い面(ツラ)をはり曲げてやるべえ」

はりまくら 張枕【名】紙張の枕。兵範記「寢殿中央母屋立二障子帳一、其中敷二繧繝緣疊三枚一、安二張枕二一」

はりますぎはら 播磨杉原【名】播磨國より產出する杉原紙。醒睡笑「紙は、日本一の播磨杉原」

はりまぜ 張交・貼雜【名】種種の書畫を雜ぜて張り附くること、又その張り附けたる物。

はりまぜゑ 張交繪・貼雜繪【名】張交にしたる繪。浮世風呂「屛風の張交畫」

はりまち 飯【名】〔動〕はまち(飯)に同じ。〔古語〕 和名「飯、波利末知」

はりまぢ 播磨地【名】はりまぶし(播磨節)を見よ。

はりまぢ 播磨路【名】播磨國の海道。金葉「はりまぢや須磨の關屋の板びさし月洩れとてやまばらなるらん」 盛衰記「播磨路に懸りて、今宿(イマジュク)に著く」

はりまなだ 播磨洋【名】〔地〕瀨戸內海の一部。播磨國の南方、東、淡路島と、西、小豆(セウド)島との間にありて、水淺し。

はりまなめし 播磨韋【名】播磨國より產するなめし革。

はりまのこふじ 播磨小富士【名】〔地〕播磨國麻生(アサフ)山の別稱。

はりまはす 撲廻す・批廻す・拆廻す・張廻す【動四他】相手を、所きらはず撲る。なぐり廻す。狂言(文相撲)「はってはり廻すはり相撲」

はりまはる 撲廻る・批廻る・拆廻る・張廻る【動四他】前條に同じ。狂言(文相撲)「握拳を以て、はり廻らせらるるは、何と申す御手で御座る」

はりまふう 播磨風【名】次條に同じ。

はりまぶし 播磨節【名】寬文の頃、井上播磨掾の語り出だしし、淨瑠璃節。義太夫節はこの流より出で、その一部に、播磨地と呼ぶ節まはしあり。

はりまふどき 播磨風土記【名】〔書〕播磨國の古風土記。和銅六年、風土記の撰進の勅命ありし時代を距ること遠からざるものならんといふ。一卷。赤石(アカシ)・赤穗の二郡と賀古(カコ)郡の首部との記事闕けたり。

はりままくら 播磨枕【名】古、播磨國より產せし枕。坂東太郎(調鶴)「播磨枕夢路の尾上櫻もがな」

はりまみ 播磨身【名】播磨物なる刀。一日玉鉾「姬路、大阪より二十五里あり、此所より、刀の新身打出すなり。これ、播磨身なり」

はりまもの 播磨物【名】播磨國の刀工、安賴一門の鍛へし業物(ワザモノ)。

はりまよね 播磨米【名】ばんしうまい(播州米)に同じ。平家「播磨米は、木賊(トクサ)か、椋(ムク)の葉か、人の綺羅を研くは」

はりみず【名】〔動〕『はりめだか(張目高)を見よ』めだか(眼高)を云ふ。〔陸奧國の方言〕

はり-みせ 店針【名】針を賣る店。

はり-みせ 張店・張見世【名】『はる（張る）⑬を見よ』遊廓にて、娼妓が、客を招くために、盛裝して、店の內に居並ぶこと。

はり-みち 墾道【名】しんみち（新道）に同じ。〔古語〕萬葉「信濃路（シナヌヂ）は今の墾道かりばねに足踏ましむな沓はけわが夫（セ）」

はり-みち 針道【名】❶縫物をする時の、針の運び方。運針の法。薩摩歌「誰を相手に裾合はせ、針道ちがひ著憎しと」❷狹き路。細路。太平記「行末細き針道を經て、御登山あり」

はりみづ-みなと 針水港【名】〔地〕琉球國宮古（ミヤコ）島の西部にある港。

はり-むしろ 張筵・張席【名】❶古、雨を凌ぐために、車を覆ひ包みし筵。枕「雨降らぬ日、張筵したる車。降る日、張筵せぬも」❷古、相撲節會（スマフノセチヱ）の時、塵など避くるために張り設けし筵。西宮記「侍從座、張席無二先例一、給二出居座一」

は-りん 破倫【名】人倫の道に背くこと。

ば-りん 馬藺・蠡實【名】〔植〕『馬藺の字、和名抄に「かきつばた」と訓めるは誤なりといふ。ばれん（馬楝）❶參照』鳶尾（イチハツ）科に屬する多年生の草。高さ約二尺に達し、葉は長き劍狀をなし、二三回撚れたるもの多し。春、溪蓀（アヤメ）のに似て、帶白色にして、淡紫色の線條ある花開く。もと支那より輸入し、我國、各地に園養す。ねぢがね。ねぢあやめ。ばりん。ばれん。

ばりん-の-み 蠡實【名】〔植〕前條の果實。藥用とす。ばれん。

はり-め 針目【名】針にて縫ひ合はせたる處。いとめ。ぬひめ。萬葉「わがせこが著（ケ）せる衣の針目おちず入りにけらしなわが心さへ」

はり-め 貼目・張目【名】紙又は布などの、貼り合はせたる處。

はり-め 針女【名】裁縫に從事する女。おはり。しんめう。

はりめ-あや 貼目綾【名】緘（シジ）なき熨斗目（ノシ）の綾。（緘綾に對して）

はりめ-ぎぬ 針目衣【名】次條に同じ。〔古語〕

はりめ-ごろも 針目衣【名】針目の多き衣。つぎはぎの衣服。つづれ。〔古語〕秘藏抄「山がつの短き針目衣著て寒き夕はいかでかは寢（ヌ）らん」これも、同じくつづりなり。針もてしげく縫ひたれば、針目衣と云ふなり」

はり-めだか 張目高【名】〔動〕目高の一種。目の張り出でたるもの。大さ約一寸、水田又は池・溝などに多し。

はり-もぐら 針鼴鼠【名】〔動〕單孔類に屬する獸。外觀、蝟（ハリネズミ）に似て、やや大く、細長く、尾短し。背部に短棘密生し、敵に逢へば、體軀を捲縮して、自ら保護す。口吻尖りて、嘴の如く、齒を缺き、舌長くして、粘液に濕ふ。乾燥せる山地に穴居し、強大なる五趾の鉤爪にて、地中を潛行し、蟻などの昆蟲、又はその卵子を、舌に粘著せしめて食す。卵生にて、產卵期には、腹部に皮囊生じ、その內にて孵化す。

はり-もの 張物【名】❶解きたる布帛を洗ひ、糊を附け、張板に貼りて乾すこと、又その張りたる布帛。いたびき。宇治「張物、多く取散らしてあるに」❷芝居の道具の一。木を骨とし、紙を張りて、岩石・樹木などの實物に擬したるもの。

はりもの-し 張物師【名】『師は假借の文字、實は爲（シ）の義』前條①を業とする人。

はり-もみ 針樅【名】〔植〕松杉科に屬する常綠喬木。高さ六丈に達し、樹皮は帶黃黑褐色にして、小鱗をなし、葉は、針狀・方形にして、太く硬し。高山の山麓に產し、材は曲物・器具・建築・製紙等の料とす。くろまつ。たうつが。つがもみ。とらのをもみ。ばらもみ。

はり-もみぢ 針槭・刺槭【名】〔植〕はりぎり（針桐）に同じ。

はり-もん 貼紋・張紋【名】きりつけもん（切附紋）に同じ。

はり-や 針屋・鉤屋【名】縫針・鈎針など、すべての針類を造り、又、賣る店、又その人。櫻陰比事「姉小路（アネガコウヂ）の針屋の一人子」本朝二十不孝「櫛屋・鈎屋・筆屋」

はり-や 張屋【名】はりどの（張殿）に同じ。

はり-やう 張樣【名】張る方法。張り方。太平記「陣の張樣、しどろにて」

ば-りやう 馬糧【名】馬匹の糧食。

はり-やま 針山【名】はりさし（針刺）に同じ。

はり-やる 張破る【動四他】強く張りのばして破る。〔古語〕伊勢「上のきぬの肩を張りやりてけり」

はり-ゆき 梁行【名】〔建〕はりま（梁間）に同じ。

はり-ゆみ 張弓【名】❶弦を掛けて張りたる弓。❷弦を掛けたる弓のごとき形、又その形の物。枕「天にはり弓といひ出したり」❸心に弛みなき形容。緊張。

は-りよう 霸陵【名】『霸は、川の名。漢の文帝を、その邊に葬りてよりいふ』長安城の東七十里に在り。天子の墳墓。みささぎ。太平記「圓丘を高く築きて、北向に葬り奉る。……舊臣・后妃、泣く泣く、……霸陵の風に夙夜して、別を夢裡の花に慕ふ」

は-りよく 波力【名】波浪の壓力。

はりよく-けい 波力計【名】波力を計るに用ふる器械。波壓計。

はり-れうぢ 針療治・鍼療治【名】針②を用ひて療治すること。鍼治。鍼術。

はり-わく 張枠【名】〔美〕『英 Stretcher. 佛 Châssis』畫布をその上に張り、小き釘にて堅く留むるに用ふる、方形又は矩形の木の枠。

はり-わた 張綿【名】『眞綿は、張り伸ばして入るるものなればならんといふ』わたいれ（綿入）に同じからんといふ。〔古語〕落窪「かいねりのはり綿なるべし」

はり-わたす 張亙す【動四他】彼處より此處へ亙して張る。紀「かた淵に綱張りわたし」

ばり-わく 尿枠【名】尿壺（バリツボ）の蓋を受くる枠。

はり-ゐ 針藺【名】〔植〕莎草（カヤツリグサ）科に屬する多年生の草。通常叢生し、莖は細く圓くして、夏、莖頂に、楕圓形又は卵形にして、淡綠褐色なる穗を生ず。各地の水田、その他水濕の地に自生す。

はり-ゑ 貼繪・張繪【名】幼稚園などにて、兒童の趣味・手工の練習のために、色紙を物の形に切り拔き、白色の臺紙に張り付けしむること。

はり-ゑんじゆ 針槐【名】〔植〕荳（マメ）科に屬する落葉喬木。高さ四五丈に達し、枝幹に刺多く、葉は一回羽狀複葉。初夏、白色の花、總狀花序をなして開く。原產地は北米。明治維新後舶來し、觀賞用として栽培す。木材は建築及び器具の料に供す。いぬあかしや。

はり-を 針尾【名】❶鳥などの尾の尖りてあるもの。❷さより（水針魚）に同じ。〔古語〕本草和名「針魚、波利乎。一云與呂豆。口長四寸如レ針、故以名也」

はりを-あまつばめ 針尾雨燕【名】〔動〕鳴禽類に屬する鳥。冬は濠洲に居り、夏來りて、深山の懸崖に巣を營む。體長約八寸、雌はやや小く、眼先と鼻との間に、大なる白點あり。冠毛と頭の頂部及び側部とは、黑褐色にして、光澤あり。背部・肩羽及び臀部は蒼褐色、翼も、尾も、黑くして、雨覆と上尾筒とは、濃き銅青色を呈し、尾の末端に針あり。かざきりつばめ。

はりを-しぎ 針尾鴫【名】〔動〕涉禽類に屬する鳥。大さ・羽色、共に普通の田鴫（タシギ）に酷似し、尾端尖る。シベリヤ東部に產し、南方マライ諸島まで至りて越年し、我國にても稀に來る。

はりを-しま 針尾島・針尾嶋【名】〔地〕肥前國大村灣口にある大島。周圍十六里餘。崎針尾・江上（エガミ）の二村に分たる。

はりを-の-せと 針尾瀨戶【名】〔地〕肥前國彼杵（ソノギ）郡と針尾島との間に位せる海峽。大村灣の佐世保灣に通ずる二水道の一。別稱、早岐（ハイキ）瀨戶。

はりを-みなと 針尾港【名】〔地〕肥前國針尾島にある港。

はる 春【名】四季の內、溫暖にて、萬物の發生する時。冬の後、夏の前にて、天文學にては、春分より夏至（ゲシ）まで、氣象學にては、三月より五月まで、陰曆にては、正月より三月まで。春季。

春鶯の囀る【句】「春の鶯囀る」に同じ。爲忠百首「吳竹に春鶯の囀るや改まりぬる調なるらん」

春かく【句】冬より春に亙る。新古今「春かけて鳴けども未だ降る雪に松の葉白し逢坂の關」

春片設(カタマ)く【句】春の來るを待つ。春設(マ)く。〔古語〕萬葉「梅の花散りまがひたる岡邊(ヲカヒ)には鶯鳴くも春かたまけて」

春加はれる年【句】春の內に閏月のある年。古今「櫻花春加はれる年だにも人の心にあかれやはせぬ」

春さる【句】春になる。春來る。〔古語〕萬葉「春されば先づ咲く宿の梅の花ひとり見つつや春日暮さむ」

春立つ【句】春の季節に入る。立春の節來る。古今「袖ひぢて掬(ム)すびし水の氷れるを春立つ今日の風や解くらん」

春の縣召(アガタメシ)【句】「春の除目(ヂモク)」に同じ。榮花「春の縣召にも洩されず」

春の扇【句】源氏物語「花の宴」の卷に、源氏の君の、朧月夜の內侍と慇懃を通ぜし時、後日の記念に、互に扇を取り替へたりとある故事。夫木「深き夜のあはれ知りけん古の春の扇の月は變らじ」

春の主(アルジ)【句】春の季節を占有する者。拾玉「山里の春のあるじを人問はば己が尋ぬる花と答へよ」

春の一時は千金にも換へじ【句】『蘇東坡の春夜の句「春宵一刻値千金」に本づく』春夜の樂しさを賞せし語。〔諺語〕狂言(花盜人)「春の一時は千金にも換へじとは、花ゆゑにこそなれ」

春の營(イトナミ)【句】**はるいとなみ**(春營)に同じ。

春の色【句】**しゆんしよく**(春色)の直譯。古今「春の色の到り到らぬ里はあらじ咲ける咲かざる花の見ゆらん」

春の鶯囀る【句】**しゆんあうでん**(春鶯囀)の直譯。源氏「春の鶯囀るといふ舞、いと面白く見ゆるに」

春の鶯を囀らす【句】春鶯囀の舞樂を奏す。堀次「青竹を雲の上人吹きたてて春の鶯囀らすなり」

春の奧【句】春の末。夫木「東路は梅を初にうつり來て春の奧なる山吹の花」

春の面影【句】春の景色。春色。新續古今「雪降ればかねてぞ見ゆる鏡山散りかふ花の春の面影」

春の限【句】春の終。春のはて。伊勢「惜しめども春のかぎりの今日の日の夕ぐれにさへなりにけるかな」

春の影【句】「春の姿」に同じ。拾遺「霞とも花ともいはじ春のかげいづこはあれど鹽竈の浦」

春の神【句】春の事物を主宰すといふ神。我國の佐保姬、支那の靑帝など。

春の氣【句】春立ちのぼる氣。春の陽氣。夫木「咲く花の光にもゆる春のきは烟をこめて晴れずぞありける」

春の暮【句】春の末。晚春。

春の心【句】㊀春の頃の、人人の長閑なる心。古今「世の中にたえて櫻の無かりせば春の心はのどけからまし」㊁春を、人と同樣に心あるものと見なしたる、その心。風雅「飛鳥井(アスカヰ)の春の心は知らねどもやどりしぬべき花の蔭かな」

春の衣(コロモ)【句】㊀**はるぎ**(春著)に同じ。玉葉「諸人の春の衣にまづぞ見ゆる梢に遲き花の色色」㊁霞を衣に譬へていふ語。〔古語〕壬生集「まきもくの檜原(ヒバラ)の山の杣人の春の衣と立つ霞かな」

春の盃【句】春の頃の酒宴。又、三月上巳の曲水の宴に、水に浮ぶる盃。隣女集「いとどなほ待たるるものは花の瀨の石間によどむ春の盃」

春の境【句】春の季節になりそめたる時。新勅撰「降る雪を空に幣(ヌサ)とぞたむけつる春のさかひに年の越ゆれば」

春の調【句】音樂の、春の季節にかなへる調子、卽ち呂(リヨ)。古今「波の音の今朝からことに聞ゆるは春のしらべや改まるらん」

春の姿【句】春の樣子。春の景色。春のかげ。夫木「さざ波や志賀の花園なかりせば何かは春の姿ならまし」

春の關【句】春の去らんとするを塞(セ)きとむる物。卽ち春の末。堀太「春はよしなぞかひもなきかきつばた春の關ともなると聞かねば」

春の便(タヨリ)【句】春の來れる知らせ。春信。千載「たが里の春のたよりに鶯の霞にとづる宿を訪ふらん」

春の司(ツカサ)【句】春を主宰するもの。傾城反魂香「春の司の佐保姬君」

春の使【句】『春の使をもたらす使の義』**うぐひす**(鶯)㊀の異稱。夫木「關越ゆる春の使や行きやらぬ音羽の山の鶯の聲」

春の戶【句】春をとざし込めたる戶。夫木「しめかけて立てたる宿の松に來て春の戶明くる鶯の聲」

春の隣【句】春に接近せる季節、卽ち歲の暮。古今「冬ながら春の隣の近ければ中垣よりぞ花は散りける」

春の止(トマリ)【句】『春を人に擬へて、その行きとまる處との義』春のをはり。千載「花は根に鳥は古巢に歸るなり春のとまりを知る人ぞなき」

春の鳥【句】㊀春の季節の鳥。㊁〔動〕『萬葉集の卷二に「春鳥」の字を「うぐひす」の意に用ひ、又、和名抄にも「楊氏漢語抄云、春鳥子、宇久比須」と見ゆ』**うぐひす**(鶯)㊀に同じ。源氏「いかなれば花に木づたふ鶯の櫻を分けてねぐらとはせぬ　春の鳥の、櫻一つにとまらぬ心よ、あやしとおぼゆる事ぞかし」

春の情(ナサケ)【句】春のおもむき。春の風情。風雅「花の後も春のなさけは殘りけり有明かすむ東雲(シノノメ)の空」

春の七草(ナナクサ)【句】**ななくさ**(七草)を見よ。

春の錦【句】春、百花の咲ける美しさを、錦に譬へていふ語。古今「見わたせば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」

春の殘【句】殘の春。なごりの春。殘春。暮春。玉葉「暮れてゆく春の殘をながむれば霞の底に有明の月」

春の光【句】㊀**しゆんくわう**(春光)の直譯。後撰「いづことも春の光は分かなくにまだみ吉野の山は雪降る」㊁溫和なるさまの譬。源氏「いつも春の光をこめたまへる大殿なれど」

春の外(ホカ)【句】春にてあらぬ處。新千載「ひと時の花の咲きしは夢なれや春の外なる谷の埋木(ウモレギ)」

春の絆(ホダシ)【句】霞の、春を籠め繫ぐ意にて、霞に譬へていふ語。後撰「山里は春のほだしに閉ぢられて住家まどへる鶯ぞ鳴く」

春の湊【句】『船の行きはつる湊に譬へていふ』「春の止(トマリ)」に同じ。新古今「暮れて行く春の湊は知らねども霞におつる宇治の柴舟」

春の深山(ミヤマ)【句】春の頃のみ山。古今「筑波ねのこのもとごとに立ちぞ寄る春のみやまの蔭を戀ひつつ」

春の昔【句】春にてありし過去の時。續千載「霞む夜の月にぞ更に忍ばるる忘るばかりの春の昔は」

春の目覺(メザメ)【句】『獨逸國近代の戲曲家ベデキント(F. Wedekind)の作に係る戲曲の標題 Frühlings Erwachen(「春の目覺」)に本づく。同戲曲は、ベンドラ(Wendla)といふ十四歲の少女に、モオリッツ(Moritz)・メルヒオオル(Melchior)と呼ぶ二人の少年を配して、春機發動期に在る少年・少女の、性的無智より生ずる經緯を記せる悲劇』春機發動の自覺。

春の行方(ユクヘ)【句】春の季節の次第に過ぎゆくを、人の動作に擬していふ語。古今「垂れこめて春の行方も知らぬまに待ちし櫻もうつろひにけり」

春の餘所(ヨソ)【句】春と關係なきこと。新六「鶯を聞くだに春のよそなればわが身かひなき音をのみぞなく」

春の夜の夢【句】㊀春の夜に見る夢。春夢。後撰「寢られぬをしひて我ぬる春の夜の夢をうつつになすよしもがな」㊁樂しけれど短くはかなき物事の譬。

春夢。千載「春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たん名こそ惜しけれ」

春の別【句】春と別るること。春の過ぎ行くこと。千載「身のうさも花見し程は忘られき春の別を嘆くのみかは」

春は蛙(カハヅ)の目を借る【句】春の頃ねむたきは、蛙が人の目を借るに因るといふ俗說。「蛙の目借時(メカリドキ)」參照。醒睡笑「何の仔細に、それほど眠るとあれば、春は蛙が目を借りると申し傳へていふ」

春設(マ)く【句】「春方設(カタマ)く」に同じ。〔古語〕萬葉「春まけてものがなしらにさ夜ふけてはぶき鳴く鴫(シギ)誰が田に食(ハ)む」

春や昔【句】『伊勢物語の歌「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一つは元の身にして」に本づく』過去の榮華を思ひしのぶ形容。

春を營む【句】春の支度をなす。月清集「千代ふべき松さへ山を出でにけり春を營む賤(シヅ)に引かれて」

春を浮ぶ【句】春の景色を浮ぶ。玉葉「朝なぎに行きかふ舟の景色まで春をうかぶる波の上かな」

春を賣る【句】淫を鬻(ヒサ)ぐ。賣春行爲をなす。

春を重ぬ【句】年を重ぬ。曾根崎心中「焦るる胸の平野屋に、年を重ねし雛男」

春を買ふ【句】淫賣婦をもてあそぶ。

春を殘す【句】春の景色を殘す。風雅「櫻色の衣にもまた別るるに春を殘せる宿の藤浪」

春を隔つ【句】春の末、夏の初に咲く。謠曲(雲雀山)「いつしかに春を隔つるかきつばた」

春を燒く【句】春花の紅を、火の燃ゆるに譬へていふ語。夫木「春を燒く光は同じ梢にてわきて名に立つ緋櫻の花」

千代の春【句】はつはる(初春)に同じ。

はる 原【名】はら(原)㊀を云ふ。〔九州の方言〕

はる 張る【動四他】㊀ひろげ延ぶ。のばし開く。引きわたす。撓まぬやうにす。㊁ひろげて打ち附く。ひらたく打ち附く。「天井を張る」「羽目を張る」㊂ひろげ延べて、糊などにて附著せしむ。〔貼る〕㊃張拔(ハリヌキ)に作る。「烟管(キセル)を張る」㊄中の空なる器を作る。㊅ふくらます。ふくれ上らしむ。「腹を張る」「帆を張る」㊆一面に滿し盛る。「盥に水をはる」㊇盛んに設く。構ふ。「賀筵を張る」醒睡笑「座を張り、布施を得たき望ある故」㊈盛んにす。ふやす。增長す。奮ひおこす。負けぬやうにす。「慾を張る」「人の向(ムカ)ふを張る」㊉張番(ハリバン)す。つけねらふ。見まもる。源氏「いとさがなげに睨みてはりゐたれば、煩しくて」⑪想を懸けたる女、又は男を手に入れんとて、つけねらふ。浮世風呂「娘を張りに往って、他家の帳合(チヤウアヒ)までしてやったり」⑫勝負事に、金品を賭(カ)く。大織冠「年季のこの玉を、たった三百のかたに張って」⑬娼妓、客を引くために、店先に並ぶ。

はる 張る【動四自】㊀ひろがり延ぶ。のび開く。はだかる。開張す。源氏「こは何(ナ)ぞと引き入るれど、…睨みてはりゐたれば」㊁ふくる。ふとる。字鏡「肛、波良加太久波留」徒然「落ちぬべきまで、簾張り出でて」㊂芽出づ。めぐむ。萬葉「春の日にはれる柳を取り持ちて見れば都の大路思ほゆ」㊃一面に滿ちふさがる。一杯になる。「氷が張る」「氣が張る」㊄こはばりたる感じす。「肩が張る」㊅增す。殖ゆ。餘る。分に過ぐ。度を超ゆ。「直(ネ)が張る」八笑人「ちと荷が張りました故、車を一輛雇って參じました」

はる 腫る・脹る【動下二自】『前條の語の轉義』皮膚ふくれ上がる。腫脹(シユチヤウ)す。和名「腫、野王案、字亦作腫、波留。身體皺起虛滿也」源氏「はれたるまみも、人に見えんがはづかしさに」

はる 撲る・批る・拊る【動四他】掌又は拳にて打つ。なぐる。こっぱる。今物語「憎き法師のいひごとかなとて、かまちをはりてけり」義經記「拳を握ってはりければ、……、烏帽子を打落され」

はる 墾る【動四他】開墾す。開拓す。〔古語〕萬葉「住吉(スミノエ)の岸を田にはり蒔きし稻ひでて刈るまで逢はぬ君かも」

はる 晴る・霽る【動下二自】㊀天氣よくなる。晴天となる。雨・雪など止む。㊁疑心の障(サハ)り去りて、さわやかになる。解けて、明白になる。はるく。古今「秋霧のともに立ち出でて別れなばはれぬ思に戀ひやわたらん」

はる 晴る・霽る【動下二他】はらす(晴す)に同じ。五人女「いつぞの時節には、この思を晴るべきと樂しみける甲斐なく」

はる 遙【貌】はるか(遙か)㊀に同じ。(但し時間の意に用ひたる例なし)〔古語〕伊勢「紫の色濃き時は目もはるに野なる草木ぞわかれざりける」

はる【感】はるさの略。

ばる【動四自】小便す。いばりをす。〔關西・四國邊の方言〕

はる-あき 春秋【名】㊀春と秋と。春秋(シユンジウ)。㊁年月。歲月。年齡。春秋(シユンジウ)。夫木「春秋の富める御代には昔より氷室(ムロ)に今もとまるなりけり」

春秋の宮【句】春の宮と、秋の宮と。爲忠百首「春秋の宮の使もろともに花めきつきん加茂の御祭」

春秋の行幸(ミユキ)【句】「朝覲(テウキン)の行幸」に同じ。源氏「春秋の行幸になん、昔思ひ出でたまふ事もまじりける」

はる-いとなみ 春營【名】春の支度。春を迎ふる準備。〔古語〕夫木「賤(シヅ)の男は雪を小松に引きそへて春營に山出づなり」

はる-うこん 春鬱金【名】〔植〕きやうわう(薑黃)に同じ。

はる-うへ 春上【名】春の宮、即ち皇太子を申す。〔古語〕

はる-か 遙か【貌】㊀距離又は時間の、遠く離れ隔たれるさま。はる。〔遐か・夐か〕伊勢「京にもあらず、はるかなる山里に住みけり」㊁差違の甚しきさま。「はるかに劣る」㊂疎みて近づけぬさま。遠ざくるさま。源氏「そそのかし聞えたまへど、いとはるかにのみ思したれば」

はるか-げ 遙氣【貌】遙かにてありげなるさま。榮花「この殿こそ、今・行末はるかげなる御ありさまに、たのもしう見えさせたまふめれ」

はるかす 晴かす・霽かす【動四他】はらす(晴す)に同じ。〔古語〕伊勢「おぼつかなく思ひつめたること、少しはるかさん」千載「胸に滿つ思をだにもはるかさで烟とならん事ぞ悲しき」

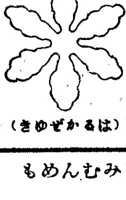
はる-がすみ 春霞【名】春の季節に立つ霞。(秋霧に對して)萬葉「心ぐく思ほゆるかも春霞たなびく時に言(コト)し通へば」

はる-がすみ 春霞【枕】㊀春霞はかすかなるより、大和國なる同音の地名かすが(春日)にかけていふ。萬葉「春霞春日の里の植小水葱(ウヱコナギ)苗なりといひし枝(エ)はさしにけむ」㊁春霞は立ち居るより、たつ(立つ)又はゐ(居)にかけていふ。萬葉「春霞井の上よただに道はあれど君に逢はむとたもとほり來(ク)も」古今「花の散ることやわびしき春霞立田の山の鶯の聲」㊂春霞はおぼほしく立ち隱すより、おほ(鬱)又はよそ(餘所)にかけていふ。萬葉「纏向(マキムク)の檜原(ヒバラ)に立てる春霞おほにし思はばなづみ來(コ)めやも」古今「春霞よそにも人をあはれと思へば」

はる-かぜ 春風【名】春吹く風。條風。東風。萬葉「青柳の絲の細さを春風に亂れぬ今に見せむ子もがも」

はるかぜ-の 春風の【枕】風の吹く音といふ意より、おと(音)にかけていふ。萬葉「春風の音にし出なばありさりて今ならずとも君がまにまに」

はるかぜ-ゆき 春風雪【名】紋所の一。下の圖を見よ。



（はるかぜゆき）

はる-かは 春川【名】春の季節の川。新六「くだる瀨のみかさをすまふ春川のゐぜきを人の心ともがな」

ばるかん (英 Vulcan)【名】羅馬の神話にて、ジュピタアとユノとの間に生れ、火及び鍛冶を司り、又、火は金屬を熔す力あるより、種種の家具製造の事を司るともいふ神。ぶるかぬす。

ばるかん 巴爾幹 (英 Balkan)【名】〔地〕歐洲の東南部アドリヤチック海と黑海と

の間の大半島。ルウマニヤ・セルビヤ・土耳古・希臘その他多數の小國を含む。

ばるかん-もんだい 巴爾幹問題（英 Balkan Question）**【名】** 歐洲諸國間の、バルカン半島諸國に對する、各自の利害關係の外交問題。近東問題。

はる-がや 春萱 **【名】**〔植〕禾本科に屬する草。莖は叢生して、高さ一尺餘に達し、葉は小く、莖・葉共に平滑、五月頃、梢上に、一二寸の穗を抽く。原野に自生す。

はる-からまつ 春唐松 **【名】**〔植〕毛茛(キンポウゲ)科に屬する草。唐松草に酷似すれども、實は殆ど柄なくして、數箇の稜あり。下野國日光に産す。にっくわうからまつ。

はる-ぎ 春著 **【名】** 春著る衣服(多くは、年の始に著る、新調の衣類にいふ)。春服。春衣。

はる-きやうげん 春狂言 **【名】** 新年になりて、初めて演ずる芝居の狂言。千紅萬紫「今を日の出のわざをぎ人、春狂言の花をも待たで」

はる-きりまい 春切米 **【名】** 德川幕府にて、切米(キリマイ)を春・夏・冬の三季に分ちて給せし中の、春季二月に給せしもの。

はるく 晴く **【動四自】** **はる**(晴る)㊁に同じ。〔古語〕蜻蛉「物思はるけるやうにぞおぼゆる」

はるく 晴く **【動下二他】** **はらす**(晴す)㊁に同じ。〔古語〕源氏「思へりしけしきなどのいとほしさもはるけん方なく、思しわたる」同「闇(ヤミ)を、えはるけで」㊁拂ひ除く。〔古語〕源氏「ここ・かしこかき拂ひ……紅葉の朽葉、少しはるけ」

はる-くさ 春草 **【名】** ㊀春になりて萌え出づる草。わかくさ。春草(シユンソウ)。萬葉「春草のしげく生ひたる」㊁〔書〕武家の故實を記せるもの。二卷。伊勢貞丈の著。四季草の一。

はるくさ-を 春草を **【枕】** 春の若草を馬の食ふといふ意より、**うまくひやま**(馬咋山)にかけていふ。萬葉「春草を馬咋山ゆ越え來(ク)なる雁(カリ)の使は宿過ぎぬなり」

はる-ぐみ 春胡頽子 **【名】**〔植〕**なはしろぐみ**(苗代胡頽子)に同じ。

はる-ぐわっから 春ぐわっから **【名】**〔植〕**はくせん**(白鮮)に同じ。

はるけし 遙けし **【形二】** はるかなり。遠し。源氏「はるけき野邊を分け入り」

はる-げしき 春景色 **【名】** 春の景色。はるもやう。春色。春光。

はるけ-どころ 晴所 **【名】** はるくる所。晴す所。〔古語〕源氏「少し物思のはるけ所ある心ちしたまふ」

はる-けんち 春檢地 **【名】** 德川時代に、春、殊に、多くは麥を刈り取りたる後に行ひて、その年より高入(タカイレ)にせし檢地。(秋檢地に對して)

はる-ご 春子 **【名】** 動・植物の、春生れ、又は發生せるもの。五人女「落葉かきのけ、松露の春子を取る」曾我五人兄弟「未だ乳放(チバナ)れぬ春兒の白鹿生け捕って」

はる-ご 春蠶 **【名】** 春に孵化・飼育するかひこ。(夏蠶・秋蠶に對して)

はる-ごころ 春心地 **【名】** 春の頃の長閑かなる心地。公任集「白雪はとふ言の葉にかかりてぞ降りくる宿も春心地する」

ばるこにい (英 Balcony) **【名】**〔建〕㊀西洋式の建物の室外に突き出でし、屋根なき臺。欄干を廻らし、多くは支柱にて承く。露臺。㊁劇場に於ける階上の見物席。

はる-ごま 春駒 **【名】** ㊀春の野に居る駒。後拾遺「立ち放れ澤邊に荒るる春駒はおのが影をや友と見るらん」㊁昔、年の始の祝に、木などにて、馬の頭の形を作り、頭に戴きなどして、歌ひ又舞ひし門附(カドツケ)。禁中の白馬(アヲウマ)の節會(セチエ)を學びしものといふ。㊂馬の頭の形に造れる木に、二三尺の竹桿をさし、末端に車を附けたる、玩具。竹馬(タケウマ)㊀より轉ぜしものにて、初春用ひたり。㊃勇み逸ることの形容。

はるごま-さう 春駒草 **【名】**〔植〕**なんばんぎせる**(南蠻烟草)に同じ。

はる-ごり 春樵・春伐 **【名】** 春、柴木を伐採すること、又その柴木。實方集「春樵の柴積車牛弱み誰が故郷の垣根しめにぞ」

はる-さき 春先 **【名】** 春のはじめ。爲忠百首「萌えわたる野邊の綠を待つ程や澤邊にあさる春先の駒」

ばるさむ 拔爾撒謨(英 Balsams) **【名】** 或種の樹木の幹より、自然に流出し、又は、その幹又は根に、故らに附したる刀痕より流出するもの。主として、樹脂・護謨・揮發性油・芳香屬酸類等より成る。

はる-さめ 春雨 **【名】** ㊀春降る雨。春雨(シユンウ)。古今「春雨に匂へる色もあかなくに香さへなつかし山吹の花」㊁俗曲の一。清元節に屬す。

はるさめ-ものがたり 春雨物語 **【名】**〔書〕血かたびら・天つ少女・海賊・目一つの神などの短き話數章を、國文にて、小說體に記したるもの。十卷の內、五卷を存するのみ。上田秋成の著。

はる-さる 春さる **【句】** **はる**(春)の條下を「見よ。

はるしや 波斯(英 Parthia) **【名】** ㊀〔地〕ぺるしや(波斯)の古稱。㊁**はるしやがは**(波斯革)の略。

はるしや-いと 波斯絲 **【名】** 昔、和蘭人の、波斯國より舶齎せし絲。

はるしや-がは 波斯革・百爾齊亞革 **【名】** 昔、和蘭人の、波斯國より舶齎せし染革。棧留(サントメ)革よりやや薄く、色は黑・紅・黃・綠・赭等の五種ありたり。五色革。

はるしや-ぎく 波斯菊 **【名】**〔植〕菊科に屬する一二年生の草。高さ五尺に達し、多數分岐し、葉は對生し、二回羽狀複葉にして、細く分裂す。花は六月頃、頭狀花序をなして開き、周緣なる舌狀花は、通常八箇にして黃褐色、その下半は、暗褐色を帶び、中部なる筒狀花は、紫褐色を呈す。原産地は北米。觀賞用とす。

はるしや-じほ 波斯鹽 **【名】** 昔、和蘭人の、波斯國より舶齎せし鹽。

はる-しらせ-どり 春知鳥 **【名】**〔動〕**はるつげどり**(春告鳥)㊀に同じ。若風俗「春知らせ鳥の囀に、南枝、始めて障子を開き」

はるしり-がほ 春知顏 **【名】** 春の趣を心得たる顏つき。胸算用「十二月二十九日の下船(クダリブネ)、……、船頭も春知顏にて」

はるす 晴す **【動四他】** **はらす**(晴す)㊁に同じ。〔古語〕祝詞「まそびの大御鏡の面(オモ)を意(オボ)しはるして見そなはす事の」

はるすかし-ゆり 春透百合 **【名】**〔植〕百合科に屬する多年生の草。透百合の類。晚春、六片の花蓋、鐘狀に並びて、卷かず、紅・黃等の、濃淡を異にせる花、數箇づつ莖頂に攢まり開く。あめがしたゆり。てんもくゆり。なつすかしゆり。ひらとゆり。

はる-すすき 春薄 **【名】**〔植〕**やなぎ**(柳)㊀に同じ。〔古語〕莫傳抄「ふるさめの露に亂るる春ずすき梢に秋の風を見るかな」

はる-ぜみ 春蟬・蟳母 **【名】**〔動〕有吻類に屬する昆蟲。體長約八分、全身と翅とは黑し。松林に多く、春の末に鳴くこと喧し。まつぜみ。まつむし。

はる-た 春田 **【名】** 春の時節に耕作する田。曠野(大夢)「萬歲を仕舞うて打てる春田かな」

はるだいふ-ぶし 春太夫節 **【名】** 淨瑠璃節の一派。寶曆の頃、宮古路(ミヤコヂ)薗八(ソノハチ)の弟なる宮薗(ミヤゾノ)春太夫の、江戶にて語り出だししもの。

はるだいふ-ぶし 治太夫節 **【名】** 淨瑠璃節の一派。貞享・元祿の頃、山本土佐掾の門人松本治太夫の語り出だししもの。

はる-たで 春蓼 **【名】**〔植〕蓼科に屬する草。高さ約一尺、五月頃、白色の花、梢上に、穗狀をなして開く。各地の水田、その他、水濕の地に自生す。

はるたて-あみ 春立網 **【名】** 枡立(マスタテ)網に類する網。讃岐地方にて使用す。

はる-たま 春玉 **【名】**〔植〕三七草の一品種。すゐぜんじさう。すゐぜんじな。

ぱるちざん (露 Partizan) **【名】** ㊀『別働隊の義』ナポレオン第一世の、露國莫斯科(モスクワ)に侵入し、失敗して退却せし時、所在に蜂起して、これを苦しめし、百姓一揆的の別働隊。㊁露國の過激派に屬して、各地に散在せる、無節制なる者ども。㊂殘忍・兇暴なる者どもの團隊。

ばるちすたん (英 Baluchistan) **【名】**〔地〕亞細亞洲の南部に位する國。西曆一八七六年以前は獨立國なりしが、後、一部は英

領印度に併合せられ、尋いで、殘部も、英國の保護領となれり。首府をケラット(Kelat)といふ。一名、べるちすたん。

ばるちっく-かんたい 婆羅的艦隊【名】㊀露國の艦隊の、バルチック(Baltic)海の防備に任ずるもの。㊁日露戰爭の時、バルチック海より、浦鹽港に入る目的にて、遠路廻航し來り、日本海の戰にて、殆ど全滅の大敗を招きし艦隊。

はる-ちゃ 春茶【名】大服(オホブク)に次ぎて、舊正月十五日以後に催す茶湯(チャノユ)。

はる-つ-かた 春方【名】春の頃。〔古語〕宇治「春つかた、日うららかなりけるに」

はる-つげぐさ 春告草【名】〔植〕うめ(梅)㊀に同じ。藻鹽草「み吉野の春告草の花の色あらぬ梢にかかる白雲」

はる-つげ-どり 春告鳥【名】㊀〔動〕うぐひす(鶯)㊀の異稱。ときつげどり(時告鳥)參照。㊁〔書〕爲永春水の著せる人情本。五編・十五册。春色梅暦(シユンシヨクウメゴヨミ)の別傳として記せるもの。

はる-つばき 春椿【名】〔植〕はまごう(蔓荊)」に同じ。

はる-づり 春釣【名】陰暦五月頃に、鱚(キス)を釣ること。

ぱるてのん (英 Parthenon)【名】希臘國雅典(アゼンス)のアクロポリス(Acropolis)に在りて、雅典の守護神アテナ・パルテノス(Athena Parthenos)を祀れる殿堂。西紀前第六世紀頃の創建に係り、後、數次の改築を經て、壯麗なる大理石造となり、希臘建築中のドリヤ(Dorian)式建築の標本たり。崩壞したる現今にても、なほ建築家・美術家・史家・考古家等に尊重せらる。

はると (獨 Halt)【感】行進せる隊伍に停止を命ずる號令。はる。

はる-とらのを 春虎尾・紫參【名】〔植〕蓼科に屬する多年生の草。念珠狀に肥厚せる根莖ありて、これより地上莖を出し、高さ四五寸に達す。葉は卵形又は楕圓形。花は淡紅色にして、四五月頃、穗狀花序をなして開く。觀賞用とし、根莖を收斂劑とす。いぶきとらのを。いろはさう。たうたで。ちちのはぐさ。

はる-どり 春鳥【名】春の鳥。春鳴く鳥。

はるどり-の 春鳥の【枕】春は、百鳥のここかしこに囀る時なるより、**さまよふ**(さ迷ふ)にかけていふ。萬葉「春鳥のさまよひぬれば嘆(ナゲキ)もいまだ過ぎぬに」

はる-な 春菜【名】春萌え出づる菜。若菜。萬葉「少女らが春菜摘ますと」

はる-なが 春永【名】のどかなる春の季節。永日(エイジツ)。遲日(チジツ)。〔年の始などにいふ語〕小町踊「今朝やなほ春永に見る蝦の髭」 雪女五枚羽子板「春永・末長・月永・日永、年も壽命も永永と傳はる御代」

はる-なぐさみ 春慰【名】春の季節のなぐさみとなる物事。五人女「この沙汰募りて、春慰に言ひやむ事なくて」

はるな-こ 榛名湖【名】〔地〕上野國榛名山の中央、榛名富士の西にある火口原湖。周回一里餘。不規則なる楕圓形をなす。古稱、伊香保(イカホ)の沼。

はるな-さん 榛名山【名】〔地〕上野國群馬・吾妻二郡に跨れる山。高さ二八〇〇尺餘。妙義・赤城(アカギ)と併せて、上野國三名山の名あり。標式的三重式消火山。中央なる火口丘は、榛名富士の名あり。

はるな-じんじや 榛名神社【名】上野國榛名山に鎭座せる縣社。祭神は火產靈(ホムスビ)神及び埴山姬(ハニヤマビメ)命。

ぱるなっしやん (英 Parnassian)【名】〔美〕かうたうは(高蹈派)に同じ。

はるな-の-みづうみ 榛名湖【名】〔地〕**はるなこ**(榛名湖)に同じ。

はるな-ふじ 榛名富士【名】〔地〕**はるなさん**(榛名山)を見よ。

はるなめ【名】昔、和蘭より舶齎せし油藥。

はるには 春庭【名】〔人〕**もとをりはるには**(本居春庭)を見よ。

はる-にれ 春楡・楡【名】〔植〕楡科に屬する落葉喬木。高さ十丈に達し、樹皮は暗灰褐色にして、鱗狀に剝脫す。葉は楕圓形もしくは倒卵形をなし、重鋸齒あり。五六月頃、葉に先だち、鐘狀、帶紫・淡綠色の細花簇り開く。道路樹に適し、材は各種の用に供すべく、又、加里の採取に用ひ、樹皮よりは、楡麪(ニレメン)及び麻の代用品を得。嫩葉は、煮て食ひ、根よりは製紙用の粘汁を得べし。寒地に自生す。あかだも。いへにれ。おほにれ。にれ。やにれ。

はる-ぬ 春野【名】次條に同じ。〔古語〕萬葉「巨勢山(コセヤマ)のつらつら椿つらつらに見つつ思はな巨勢の春野を」

はる-の 春野【名】春の季節の野。

はる-のげし 春野罌粟【名】〔植〕**のげし**(野罌粟)に同じ。

はる-の-た-を 春の田を【枕】春の田は耕すものなるより、**かへすがへす**(返す返す)にかけていふ。拾遺「忘らるる時しなければ春の田をかへすがへすぞ人は戀しき」

はる-の-のげし 春野罌粟【名】〔植〕**はるのげし**(春野罌粟)に同じ。

はる-の-ひ 春日【名】〔書〕松尾芭蕉の、貞享二年の春、伊勢國より再び尾張國に出でし時、門人との連俳を集めたるもの。一卷。俳諧七部集の一。

はるのひ-の 春の日の【名】春の日は、長きものなるより、**ながく**(長く)にかけていふ。古今「逢はずしてこよひ明けなば春の日の長くや人をつらしと思はん」

はる-の-みや 春宮【名】『とうぐう(春宮)の漢字の直譯』皇太子。(「秋の宮」に對して) 大鏡「春の宮の御息所(ミヤスドコロ)」 夫木「吳竹の園より移る春の宮かねても千代の色は見えにき」

はるのみや-びと 春宮人【名】皇太子附の役人。春宮坊(トウグウバウ)に仕ふる人。續世繼「思ひきや春の宮人名のみして花より先に散らんものとは」

はる-ば 春葉【名】春生ずる葉。春葉(シユンエフ)。道濟集「そともなる菊の春葉もしげりあひてさもなつかしき月の影かな」

はる-ばしよ 春場所【名】正月に興行する大相撲。(夏場所に對して)

はる-ばな 春花【名】春咲く花。春花(シユンクワ)。萬葉「玉くしげ二上(フタガミ)山は春花の咲けるさかりに」

はるばな-の 春花の【枕】春の花は美しく珍しく貴むべきものなるより、**めづらし**(珍し)・**たふとし**(貴し)にかけていふ。萬葉「住吉(スミノエ)の里行きしかば春花のいやめづらしき君にあへるかも」 同「春花の貴からむと望月のたたはしけむと」

はる-ばる 春春【名】多くの春。每年の春。〔古語〕大和「春春の花は散るとも咲きぬべし又あひがたき人の世ぞうき」 醒睡笑「めぐりくる春春ごとに櫻花いくたび散りき人に問はばや」

はる-ばる 遙遙【貌】いかにも遙かなるさま。はろばろ。源氏「人目もなく、はるばると見わたされて」 廢帝記「はるばるの海路」

はるび 腹帶【名】『はろび(腹帶)の轉』㊀馬の腹を括る帶。布又は苧繩を用ふ。はらおび。はろび。平家「馬の鞍置き、腹帶締め」 ㊁長持の鐶(クワン)に附くる、白布の緒。

はる-び 春日【名】㊀春の太陽。萬葉「霞立つ春日かきれる」 ㊁春の日。遲日。萬葉「越(コシ)の海の信濃(シナヌ)の濱を行きくらし長き春日も忘れてもへや」

はるび-がくれ 春日隱【名】春の日かげ。現六「今こそは妻戀すらし霞立つ春日がくれに鶯の鳴く」

はる-ひかげ 春日影【名】春の日かげ。春の日の光。玉葉「鳥の聲囀りつくす春日かげ暮しがたみに物をこそ思へ」

はるびき-いと 春引絲【名】前年の繭を、春に至りて、生絲(キイト)に引きたるもの。

ぱるぴっと (英 Pulpit)【名】〔建〕教會の教壇の、非常に高く、座席を設けたるもの。

はるび-とほし 腹帶通【名】下腹(シタバラ)㊀の下方にありて、腹帶を通すために、孔をあけたる處。

はるび-の 春日の【枕】春日は霞むによりて、大和國の地名なる**かすが**(春日)にかけていふ。**はるがすみ**(春霞)㊀參照。紀「はるびのかすがを過ぎ」

はる-ひめゆり 春姬百合【名】〔植〕**あまな**(山慈姑)に同じ。

はるび-を 春日を【枕】『**を**は、**の**に通はしていふ語なりとも、又、**よ**に通ひて、呼び

かけていへるなりともいふ』**はるびの**（春日の）に同じ。萬葉「春日をかすがの山の高座（タカクラ）の三笠の山に」

ばるぶ（英 Valve）【名】すべりべん（滑瓣）に同じ。

ぱるぷ（英 Pulp）【名】㊀植物の纖維の、製紙の原料となるもの。㊁もくざいぱるぷ（木材パルプ）の略。（我國にては、普通、この意味に用ふ）

はるぶくろ 春袋【名】『春を、張るの意に寄せて祝ふ語』昔、江戸の風俗として、初春に、女兒の縫ひたる、財布など。

はるべ 春方・春邊【名】春の頃。はるさき。〔古語〕萬葉「春べは花かざしもち」古今「梅の花にほふ春べはくらぶ山闇に越ゆれどしるくぞありける」

ばるま 緬甸【名】〔地〕ばあま（緬甸）に同じ。

はるまち 春町【名】〔人〕こひかははるまち（戀川春町）を見よ。

はるまちづき 春待月【名】陰曆十二月の異稱。〔古語〕藏玉集「十二月異名……十二。春待月。暮れてゆく年は身にそふ老なれど春待月のいそがしきかな」

はるまわげ 波爾麻和解【名】〔書〕和蘭語と日本語との對譯辭書の最初のもの。十三卷。寬政八年、鳥取藩の醫師稻村三伯の、フランソア・ハルマ（François Halma）の蘭佛及び佛蘭對譯辭書に基づきて、その佛語を除き、和語をこれに代へたるもの。後、長崎出島（デジマ）の和蘭商館長ヘンドレク・ドオフ（Hendrik Doeff）が、亦ハルマの對譯書に基づきて集成せるを、文化十三年幕府に獻るに及び、これを道富波爾麻（ドオフハルマ）といひ、三伯のは、江戸波爾麻と言ふに至れり。

はるみ 春海【名】〔人〕むらたはるみ（村田春海）を見よ。

ぱるみちん（英 Palmitin）【名】〔化〕パルミチン酸とグリセリンとのエステル。脂肪及び油の中に存し、鯨蠟・蜜蠟の主成分をなす。石鹼・蠟燭などの製造、又は食用に供す。

ぱるみちんさん パルミチン酸【名】（英 Palmitic acid）【名】〔化〕脂肪酸の一種。蠟狀をなし、融點六二度、水には溶けざれども、熱したるアルコオル・エエテル若しくは醋酸等に溶解す。脂肪を水蒸氣にて鹼化すれば、他の酸との混合物を得べし。軟脂酸。

ぱるみちんさんなとりうむ パルミチン酸ナトリウム（英 Natrium palmitate）【名】〔化〕脂肪酸鹽の一。脂油を苛性曹達にて鹼化すれば得。容易に水に溶け、弱きアルカリ性反應を呈す。曹達石鹼の一成分たり。

はるむき 春向【名】春の季節に適する物。

はるむぎ 春麥【名】〔植〕みのごめ（菵草）に同じ。

ぱるむゆ パルム油（英 Palm oil）【名】棕櫚の成熟したる果實の肉部より採取する油。石鹼及び蠟燭製造の料に供す。

はるめく 春めく【動四自】春の氣候になる。春らしくなる。拾玉「野邊に出でてゑぐ摘む澤の淺綠春めきにけり賤（シヅ）がけしきも」

はるもやう 春模樣【名】はるげしき（春景色）に同じ。

はるやすみ 春休【名】學校の、春の休業、即ち學年の變り目の休業。

はるやなぎ 春柳【名】春、芽の萌え出でたる柳。萬葉「春柳梅との花を折りかざし飮みての後は散りぬともよし」

はるやま 春山【名】春の山。春山（シユンザン）。萬葉「春山は散りすぎゆけど三輪山は未だふふめり君待ちがてに」

はるやまの 春山の【枕】春山は木木の若枝のしなひ榮ゆるものなるより、**しなひ**にかけていふ。萬葉「春山のしなひ榮えと秋山の色なつかしき」

はるゆり 春百合【名】〔植〕㊀かたくり（片栗）に同じ。㊁ばいも（貝母）に同じ。

はるりんだう 春龍膽【名】〔植〕㊀こけりんだう（苔龍膽）に同じ。㊁ふでりんだう（筆龍膽）に同じ。

はるをみなべし 春女郎花・甘松【名】〔植〕かのこさう（鹿子草）に同じ。

はるをしみづき 春惜月【名】陰曆三月の異稱。〔古語〕藏玉集「十二月異名……三。春惜月。數ならぬ身をも思はず日を重ね暮れゆく頃の春をしみ月」

はれ 晴・霽【名】㊀晴るること。天氣のよきこと。晴天。堀太「晴くもり定なければ初時雨いもが袖笠かりて來にけり」㊁日光のあたりてある處。ひなた。宇治「はれに出で、離れんと走る時、影離るる事なし」㊂ひろびろと晴やかなる處。源氏「居たまへるさま、さるはれに出でて、いふよしなく見えたまふ」㊃はれがましきこと。表だちてあること。おもてむき。おほやけ。二水記「晴御會」著聞「草の字の額を、はれの門に打たれ候なり」

晴の御膳（オゼン）【句】古、正月元日に、內膳司より奉りて、天子の召されし御膳。正面南階より供し、唐菓子なる餛飩・索餅・餲餬・桂心の四種を、銀盤に盛り、又、酢・酒・鹽・醬を、同じく銀製の四盤に盛り、合はせて、八盤なりきといふ。威儀の御膳。（「脇（ワキ）の御膳」に對して）建武年中行事「はれの御膳、四種以下八盤供しぬれば、やがて脇の御膳を供す」

はれ 腫【名】㊀腫るること、又、腫れてあること、又、腫れてある部分。犬子集「膏藥を頭（アタマ）のはれに附けおきて」㊁すゐき（水氣）㊂に同じ。

はれ【感】やれ。やあ。まあ。あはれ。長町女腹切「はれ、よい男の、江戸元結に繻子鬢」

はれ、さて【句】「やれ、さて」に同じ。狂言薩摩守「はれさて、茶屋の茶に錢のいらぬと云ふ事がおぢやるか」

はれ、やれ【句】前條に同じ。丹波與作「はれやれ、やれ、やれやれ、しちくどい」

ばれ【名】ばれること。露見。

はれあがる 腫上る【動四他】腫れて、高くなる。ふくれあがる。

はれあがる 霽上る【動四自】全く霽る。隣女集「はれあがる霧の名殘に露おちて折る袖濡るる秋萩の花」

はれい 晴【名】はれ（晴）の訛。出世景淸「かかるはれいの場（ハニ）なるに、頰被（ホホカブリ）は綏意なり」

ばれい 馬齡【名】自己の年齡の謙稱。犬馬の齡（ヨハヒ）。

ばれい 馬鈴【名】馬に附くるすず。

はれいくさ 晴軍【名】晴晴しき戰爭。堂堂と勝負を決する戰。百合若大臣野守鏡「この度の合戰は、異國までの晴軍」

はれいしやう 晴衣裳【名】はれぎ（晴著）に同じ。

ばれいしよ 馬鈴薯【名】〔植〕じやがたらいも（馬鈴薯）の漢名。

ばれう 馬料【名】馬の飼料。

はれうて 晴打【名】はれやかさに、氣おくれのすること。芭蕉「花の顏にはれらてしてや朧月」

ばれえ【名】㊀ばれえぼおるの略。㊁『佛 Ballet』西洋の演劇に於ける所作事。

はれえすゐせい ハレエ彗星（英 Halley's comet）【名】〔天〕『英國の天文學者ハレエの研究を經たるによりていふ』約七十五年の周期を以て、楕圓形の軌道を描きて、太陽をめぐる彗星。

はれえせいくわつ ハレエ生活【名】㊀ハレエ彗星の出現に際し、地球と衝突して、世界は滅盡すべしとの訛傳ありし時、或者は、前途の希望を失へりとて、自棄自暴の生活を營みしこと。㊁前途を慮らぬ、放縱なる生活。

ばれえぼおる（英 Valley-ball）【名】運動競技の一。長さ、幅の二倍ほどなるコオトの中央に、テニスのと同樣なるネットを張り、その兩方に、二十人前後の二組を相對せしめ、大形のボオルを、手にて、ネットを越して、相手の地域に投げ入れあひ、投げ入れられたる組の者は、そのボオルを地に落ちしめぬやうに、直ちに片手或は兩手にて打ち返しつつ、種種の制規の下に、得點を爭ふもの。ばれえ。排球。

はれかかり 晴掛【名】晴れかかること。

ばれかかり【名】露見しかかること。

はれかかる 晴掛る【動四自】晴れはじむ。晴れんとす。

ばれかかる【動四自】ばれはじむ。露顯せんとす。

はれ-がまし 晴がまし【形二】**はればれし**(晴晴し)❸に同じ。狂言(料理聟)「聟入……垣からも、窓からも、目ばかりぢやと云ふ。晴がましい事であらう」

はれ-ぎ 晴著【名】晴の時の衣服。餘所行(ヨソユキ)の著物。はれいしやう。公服。

はれ-ぎぬ 晴衣【名】前條に同じ。百合若大臣野守鏡「今父の殿御の晴衣」

ばれ-く ばれ句【名】川柳(センリウ)の、淫猥なる句。

ばれ-くち ばれ口【名】ばれるいとぐち。露顯する端緒。

はれ-こそで 晴小袖【名】晴著の小袖。百日曾我「兄弟最期の晴小袖、母の、手づから縫ひ仕立て」

はれ-さて【句】**はれ**の條下を見よ。

はれ-しようぶ 晴勝負【名】晴の勝負。多くの人の前にての勝負。井筒業平河内通「御位定の晴勝負、心をただして土俵入」

はれずむ 花刺子模 (英 Kharezm)【名】〔地〕**ほらずむ**(花刺子模)に同じ。

はれ-だうぐ 晴道具【名】**おもてだうぐ**(表道具)に同じ。御所櫻「身どもは、御所の道具もち。御覽の如く、奴めが髭と尻とは、晴道具」

はれ-つ 破裂【名】にはかに割れ裂くること。爆裂。

はれつ-おん 破裂音【名】〔語〕『英 Plosives 又 Explosives』斷音の一。口腔内の或箇處を閉塞し、氣息にて、これを破るによりて起るもの。無聲音なると有聲音(卽ち濁音)なるとあり。ぱ行・た行・か行の父音、卽ちp(兩脣にて破裂す)・t(舌端にて破裂す)・k(舌の本にて破裂す)は前者に屬し、ば行・だ行・が行の父音、卽ちb・d・gは後者に屬す。破音。破障音。閉鎖音。密閉音。(摩擦音に對して)

はれつ-かう 破裂高【名】〔兵〕『英 Height of burst』曳火榴霰彈の破裂點と目標との垂直距離。

はれつ-きより 破裂距離【名】〔兵〕『英 Length of burst』曳火榴霰彈の破裂點と目標との水平距離。

はれ-つく 晴つく【動四自】十分に晴る。全く晴る。玉葉「晴かりし空はさながら晴れつきてまた上もなく澄める月かな」

はれつ-ぐわん 破裂丸【名】次條に同じ。

はれつ-だま 破裂丸【名】**ばくれつだん**(爆裂彈)に同じ。

はれつ-てん 破裂點【名】〔兵〕『英 Point of burst』曳火彈の、空中にて破裂する點。

ぱれっと 調色板・交色板 (英 Palette)【名】**てうしよくばん**(調色板)に同じ。

ぱれっと-ないふ (英 Palette knife)【名】パレットの上にて繪具を混和するに用ふる、細長き、角製又は金屬製の篦。

はれ-て 晴れて【副】表だちて、憚る所なく。おほやけに。公然と。をっけはれて。嵐雪「元日や晴れて雀の物がたり」

はれ-てん 晴天【名】**せいてん**(晴天)に同じ。狂言(牛馬)「風吹二枯木一晴天(ハレテン)雨」小町踊「夕立や氣もはれてんの風の雲」

はれ-どころ 晴所【名】晴の場所。表むきの場所。曾我扇八景「大磯の晴所、大名まじりに、祐成樣、おめもせず引けもせず」

はれ-のく 霽退く・晴退く【動四自】雲・霧など霽れて、無くなる。爲忠百首「名殘なく更けゆくままに晴れのきて雲なき空に有明の月」

はれ-ばれ 晴晴【貌】**はれやか**(晴やか)に同じ。曾我會稽山「はればれと、この紙帳取ってたべ、早う、早う」

はれ-ばれし 晴晴し【形二】❶よく晴れたり。殘なく晴れたり。枕「けさまで、はればれしかりつる空とも覺えにくくて」❷心、曇なくなりたり。快闊なり。源氏「うき身と思ひ屈(ク)したる命も、延べまほしう、はればれしきに」❸表だちてあり。憚る所なし。はれやかなり。はれがまし。源氏「月日の影は、御心もて、はればれしくも出でさせたまはばこそ」

ば-れふ 馬鬣【名】❶馬のたてがみ。❷『禮記の檀弓篇に「吾見二封レ之若レ堂者一矣。……見二若レ斧者一矣。從二若レ斧者一焉。馬鬣封之謂也」とあり。馬の鬣の如く横に長く土を盛るよりいふ』支那に於ける墳墓。馬鬣封。

ば-れふしん 馬鬣針【名】〔美〕南畫に於ける松の葉の描き方の一。松針の馬鬣に似たるよりいふ。

(ばれふしん)

ば-れふほう 馬鬣封【名】**ばれふ**(馬鬣)❷に同じ。

はれ-ぶるまひ 晴振舞【名】晴の場所にての振舞。はなやかなる擧動。盛衰記「弓矢取る身の晴振舞、軍場(イクサバ)に過ぎたる事候ふまじ」

はれ-ぼったし 腫ぼったし【形一】腫れたるやうに感じ、又は見ゆ。浮世風呂「目が腫ぼってえよ」

はれ-ま 晴間・霽間【名】❶雨・雪・霧などの止みたる間。新六「しづのをは茂る稻葉の五月雨に霽間を見てや田草ひくらん」❷心のはれやかなる時。增鏡「常はあつしうおはしますを、院は、いとどはれまなくおぼし歎く」

はれ-まどふ 腫惑ふ【動四自】見當も附かぬ程に腫れあがる。徒然「目・眉・額なども腫れまどひてうちおほひければ」

ば-れん 馬簾・馬帘・幡連・馬楝【名】厚紙又は革などを、細長く裁ち、纒(マトヒ)の周圍に著けて、長く垂るるもの。馬標(ウマジルシ)の遺製なるべし。

ば-れん 馬楝【名】❶〔植〕『**ばりん**(馬藺)を見よ』**ねぢあやめ**(蠡實)の漢名。❷木版摺をなす時、版木に當てたる紙の上を摺るに用ふる具。後世のは、圓平なる板を、竹の籜(カハ)にて卷き包みて作れども、もとは、前記の馬楝の根を、刷毛(ハケ)に作りて使用したり。

ばれん-ぐし 馬簾串【名】馬簾の指物(サシモノ)。清正記「清正の馬簾串」

ばれん-しば 馬楝芝【名】〔植〕**ごだしば**(花芝)に同じ。

は-れんち 破廉恥【名】❶恥を恥とも思はぬこと。はぢしらず。❷不正・不德の行爲をなすこと。

はれんち-ざい 破廉恥罪【名】〔法〕法律に違反せるのみならず、道義上よりしても、指彈すべき行爲に屬する犯罪。例へば、竊盜罪・收賄罪・強姦罪など。(國事犯などの如き政事上の犯罪と區別していふ)

はれ-もの 腫物【名】瘡生じて、皮膚の腫れたるもの。できもの。しゆもつ。

腫物に觸(サハ)るやう【句】氣むづかしき人に對する場合など、すべて恐る取り扱ふ形容。

はれ-やか 晴やか【貌】❶晴れわたりたるさま。はれらか。はればれ。其佐集「闇の夜やはれやかなれや垣ほなる卯の花月の照るにまかせて」❷心の曇なくさわやかなるさま。はればれしきさま。はればれ。❸表だちてあるさま。はなやか。はでやか。

はれ-やまひ 腫病【名】水氣(スキ)催して、身體の腫るる病。すゐき。みづぶくれ。

はれ-やれ【句】**はれ**の條下を見よ。

はれ-ゆく 晴行く【動四自】次第に晴る。千載「秋の月高嶺の雲のあなたにて晴れゆく空の暮るる待ちけり」

はれ-らか 晴らか【貌】**はれやか**(晴やか)に同じ。徒然「女は、額髮はれらかにかきやり、まばゆからず顔うちささげて」

ばれる【動下一自】❶破れて、まとまらず。ばらばらになる。❷惡事露顯す。

はれるや (英 Hallelujah 又 Halleluiah 又 Alleluia)【感】〔基〕『もと、希伯來(ヘブライ)語にて、エホバ(上帝)を稱(タタ)へよの義』敎會の音樂にて、詩篇の始・終又は中間に插む、神德讚美の呼聲。ヘブライの寺院の唱歌より、基督敎會に傳はれるなり。

はれ-わざ 晴業【名】晴の場所にてのしわざ。盛衰記「ゆゆしき晴態(ハレワザ)なり」曾我會稽山「鎌倉殿の膝元にて、晴業の敵討」

はれ-わたる 晴渡る【動四自】❶一面に晴る。風雅「晴れわたる日影に見れば山もとの梢むらむら紅葉しにけり」❷はればれしき姿にて通行す。續古事談「雜色(ザフシキ)の、こはき裝束して晴れわたるを見よ、羨しき事にいふを」

はろ 暈（英 Halo）【名】〔天〕『もと希臘語』かさ（暈）に同じ。

はーろう 把弄 【名】手にとりて弄ぶこと。

はろげん（英 Halogen）【名】〔化〕『原語は鹽を生成する物の義』鹽素・臭素・沃素及び弗素の四元素を總括せる名稱。この四元素並びにその化合物は、性狀互に極めて類似し、殊に鹽・臭・沃の三元素は、海水中にありて、ナトリウムと共に、皆、食鹽に類する鹽（エン）を造る。造鹽素。

ハロゲン族の元素（英 Elements of Halogen family）【句】〔化〕前條に同じ。

はろげんーえん ハロゲン鹽（英 Halogen salt）【名】〔化〕ハロゲン元素と金屬との化合物、例へば、鹽化ナトリウム・臭化カリウム・弗化カリウムなどの總稱。

はろげんーくわがふぶつ ハロゲン化合物（英 Halogen compounds）【名】〔化〕次條に同じ。

はろげんくわーぶつ ハロゲン化物（英 Halides）【名】〔化〕ハロゲン族の元素と他元素との化合物、例へば、鹽化ナトリウム・沃化加里などの總稱。

はろげんーげんそ ハロゲン元素【名】〔化〕はろげんに同じ。

はろーばろ 遙遙 【貌】**はるばる**（遙遙）に同じ。〔古語〕 紀「はろばろに琴ぞ聞ゆる」 萬葉「はろばろに別れし來（ク）れば」

はろび 腹帶 【名】**はらおび**（腹帶）の約。〔古語〕 字鏡「鞦・靯、波呂比」

ばろーめえたあ（英 Barometer）【名】㊀**せいうけい**（晴雨計）に同じ。㊁物事の盛衰、人氣の程度などを測定し得る標準。

はわい 布哇（英 Hawaii）【名】〔地〕太平洋の東部にある列島。大洋洲の一部なるポリネシヤ諸島の最東北部。もと、獨立の王國なりしが、西暦一八九三年、共和國となり、一八九九年、亞米利加合衆國に合併せらる。最大島をハワイといひ、首府をホノルル（Honolulu）といふ。本邦人の在留者多し。一名、さんどゐっち諸島。

はーわう 霸王・覇王 【名】㊀『禮記の經解篇に「義與ㇾ信、和與ㇾ仁、霸王之器也」とあり』諸侯を統御して、天下を治むる者。霸者の長。㊁霸者と王者と。霸道と王道と。王霸。

はわうーじゅ 霸王樹・覇王樹 【名】〔植〕**さぼてん**（仙人掌）の漢名。

はわかーのーき 葉若木 【名】**さかき**（榊）に同じ。

はーわがふそう 破和合僧 【名】〔佛〕『**わがふそう**（和合僧）を見よ』五逆罪の中にて、最も重きもの。邪なる方便を以て、一味の聞法（モンボフ）衆及び一味の作法衆を乖離せしめ、以て佛の轉法輪（テンボフリン）を息止し、僧中の法事を阻害すること。破僧。 盛衰記「破和合僧は、五逆罪の隨一に非ずや」

はーわかれ 齒分・歷齒 【名】齒と齒との間の分れ透きてあること。すきば。〔古語〕 和名「歷齒、波和加禮」 「わかれ。

はーわけ 派分 【名】流派また黨派の區別。

はーわけ 葉分 【名】葉の一つ一つ。毎葉。 源氏「朝日さす光を見ても玉笹の葉分の霜を消（ケ）たずもあらなん」

はーわざ 刃業 【名】**はあぢ**（刃味）に同じ。

はーわさび 葉山葵 【名】葉の附きたるままのわさび。

はーわたり 刃渡 【名】㊀刃物の刃の長さ。㊁多くの刃の刃を上に向けて、梯子の棧とし、その上を、跣足にて歩み渡る輕業。

はーゐる 齗る・齚る 【動上一自】齒浮くが如く感ず。〔古語〕 和名「齗、波井留。齒傷ㇾ酢也」

はーゑ 破壞 【名】**はくわい**（破壞）に同じ。 盛衰記「破壞の堂舍を修補（シユ）し」

はーゑつ 播越 【名】『左傳の昭公二十六年の條に「震蕩播越、竄在㆓荊蠻㆒」とあり』**はたう**（播蕩）に同じ。

はゑーつく 蝕盡く 【動上二自】日月、全く蝕す。皆既蝕となる。〔古語〕 紀「蝕盡、ハエツク」

はーゑん 巴猿 【名】㊀支那の蜀の巴峽の猿。**さんけふ**（三峽）參照。 太平記「巴猿一叫、停㆓舟於明月峽之邊㆒」 ㊁山の峽（カヒ）にある猿。 保元「峰の巴猿、一たび叫び」

はーをく 破屋 【名】やぶれたる家。敗屋。

ひ

【發音】㊀は行第二の音。羅馬字にてはhiと書けども、同じく**は**行の**は**（ha）・**へ**（he）・**ほ**（ho）の子音hが喉頭音なるに對し、**ひ**の子音は、口蓋音に屬し、發音の場所著しく前方に位し、舌の中部を高めて發す。これ、子音hが、口蓋的母音**い**（i）の感化を受くるがためにして、類例は、**さ**行の**し**・**じ**、**た**行の**ち**・**ぢ**、及び**な**行の**に**に求むるを得べし。故に、**ひ**は、hiに非ずして、實はhyiの音なりといふべく、これに母音a・u・oが結び附けば、拗音**ひや**（hya）・**ひゆ**（hyu）・**ひよ**（hyo）となる。濁音**び**は、子音bと母音iと、又、半濁音（實は淸音）**ぴ**は、子音pと母音iとの結び附きたるものにて、**ひ**・**び**・**ぴ**三音の關係及び半濁音の名稱につきては、**は**の條下に記せり。なほ、**や**の部㊀をも參照せよ。㊁長音は、**ひい**・**びい**・**ぴい**と書くと、**ひー**・**びー**・**ぴー**と書くとの兩法あり。本書は前者に依れり。㊂一語中の第二音以下に在る**ひ**は、普通イと發音す。例へば、**こひ**（鯉）・**たたかひ**（戰）をコイ・タタカイと發音する類。これ、一語中の第二音以下なる**は**を、ワと發音すると同一の理由によりて、一旦ヰ（wi）に變じ、更にイとなれるものなり。㊃拗音**ひや**・**ひゆ**・**ひよ**の成立は、前項㊀に說きたる所、又、拗音**ぴや**・**びゆ**・**びよ**及び**ぴや**・**ぴゆ**・**ぴよ**も、舌の前部を、子音b・pの場合以上に高め、母音iの場合の位置に置きて發する子音に、母音a・e・oの結び附けるものにて、長音は、**ひやあ**・**ひゆう**・**ひよお**・**びやあ**・**びゆう**・**びよお**・**ぴやあ**・**ぴゆう**・**ぴよお**なり。㊄四段活用の動詞の語尾なる場合に、**ひ**は、「戰ひて」を「戰うて」・「戰って」、「云ひし」を「云っし」といふ類、**び**は、「呼びて」を「呼うで」・「呼んで」といふ類、又、動詞の語尾以外にても、**あきびと**（商人）の、**あきうど**・**あきんど**となり、地名**にひた**（新田）の、**にった**・**にうた**となる類の語尾なる場合のは、口語に在りては常に現れ、又、文語の上にも屢現るるものにして、**う**音に變化するは、主として關西方面に、促音又は撥音に變化するは、主として關東方面に行はる。㊅一語の中にて、**ひ**・**び**・**ぴ**の直後に**う**又は**ふ**の續く場合には、普通、相合して、拗長音ヒュウ・ビュウ・ピュウとなる。例へば、**ひうが**（日向）・**ごびう**（誤謬）をヒュウガ・ゴビュウと發音する類。㊆**ひやう**・**びやう**・**ぴやう**は、すべて拗長音ヒョオ・ビョオ・ピョオの發音をなす。㊇**ひ**をfiと發音する地方あり。**は**㊁を參照せよ。㊈東京地方にては、**ひ**を誤りて、**し**と發音する傾あり。これ、**ひ**の子音と**し**の子音shとの間に、著しき類似の點あるに因る。㊉西洋語のviの音（獨逸語に於けるが如く、これをfiと發音する場合を除く）は、本書にては、**び**として揭げたり。

【字源】平假名**ひ**は「比」（漢・吳音共にヒ）の草體、變體平假名𛂱・𛂲は「飛」（漢・吳音共にヒ）の草體、𛂯は「非」（漢・吳音共にヒ）の草體、𛂰は「悲」（漢・吳音共にヒ）の草體、𛂳は「日」（訓ヒ）の草體より出で、片假名**ヒ**は「比」の略體、又、萬葉假名としては、淸音には、前記「比」・「飛」・「非」・「日」の外、「妣」・「斐」・「卑」・「悲」・「彼」・「被」・「祕」・「辟」・「臂」・「譬」・「肥」・「皮」・「避」・「婢」・「秤」・「備」・「毗」・「毘」・「鼻」・「必」・「賓」・「嬪」等、字音に據れるも